日本戲曲全集第三十五卷

岡本綺堂

現代篇第三輯

東京
春陽堂版

「修禪寺物語」 夜叉王 市川左團次・娘かへで 市川松蔦

「修禪寺物語」舞臺面

「小栗栖の長兵衛」舞臺面

「箕輪心中」 藤枝外記 澤田正二郎・綾衣 久松喜世子

「新 宿 夜 話」舞 臺 面

「鳥邊山心中」 松蔦•左團次

「相馬の金さん」石澤寅之助中村吉右衛門・相馬金次郎左團次

「虚無僧」 半彌 市川猿之助・空月 左團次

「尾上伊太八」 おさよ 松蔦・伊太八 左團次

岡本綺堂

日本戯曲全集　第三十五巻　目次

岡本綺堂篇

箱文字執筆（恩地孝四郎）

岡本綺堂篇

に相成るのぢや。

武士甲　無禮のなきやうに愼んで控へてをれ。

お夏　かしこまりました。

（二人の女は下の方にうづくまる。足利十三代の將軍義輝、三十歳。馬にまたがりて家來に長柄の傘をさゝせ、大館岩千代、高木左近、畠山次郎等の若侍を前後にしたがへ、ほかにも家來大勢を率ゐて、橋をわたりて出づ。義輝は馬上より見かへる。）

義輝　川を隔てゝ遠く望めば、今日この頃のさみだれに綠を増したる東山、畫を見るやうな眺めぢやなう。

岩千代　仰せの通り、青葉わか葉の山々は、遠く隔てゝ見まするが、また一入の風情でござりまする。

左近　今更ならねどこの三條の大橋より、川をへだてゝ東山を見ましたる風景は、都にたぐひござりませぬ。

次郎　たゞ惜むらくは此頃の雨つゞきで、加茂の川水が常よりも濁つてをりまする。

義輝　なにさまこの頃の雨に水まして、加茂川の清き流れもおびたゞしく濁つた。見よ。廣き河原もあとなく隱されて、あか土を溶したやうに濁つた水が、岸を浸さんばかりに漲つてをるわ。都は山紫水明の地と謳はるゝに、山はむかしながらに青けれど、水のかばかりに濁つたは忌々しい。しかも心なき徒の仕業とみえて、川上より捨てたる破れ笠、さては古き草鞋のたぐひ、浮いつ沈みつ流れてくるわ。都名所の加茂川も、かくては路ばたの溝川も同然ぢや。

岩千代　なにを申すも此頃のなが雨にござりますれば、清き名をうたはるゝ京の水も、濁るばかりでござりまする。

義輝　京の水をきよむる工夫はないか。

左近　むかしの帝が申されましたる通り、双六の賽と加茂川の水とは、人の自由には相成りますまい。

義輝　さうかなう。

（云ひつゝ彼の花賣女に眼をつけ、更に左右を見かへれば、家來どもは馬の口を取る。義輝は鞍より降り立ちて、更に床几にかゝる。）

義輝　あれに居るは花賣の女どもであらう。花を殘らずこれへ持て。

次郎　はつ。その花をこれへ……。

二人　はつ。

（おそよとお夏は次郎のまへに花籠をさゝぐ。）

次郎　して、この花をいかゞ遊ばしまするな。

義輝　一つの籠をこれへ……。

次郎　はつ。

（次郎は進んで一つの籠を獻ずれば、義輝は籠をみて笑ましげにうなづく。）

義輝　百合、なでしこ、菖蒲、かきつばた、皆とり〴〵に美しいものぢや。よい、よい。
（義輝は起つて橋のほとりに行き、籠の花を取つて一一に川へ投げ入れる。）
左近　や、その花を川のなかへ……。
義輝　加茂の川水が濁りに濁つて、汚れたる物の漂ふはあまりに目障りぢや。せめては美しい花をなげ入れて、濁れる水を彩つてくれうわ。白、紅、黄、青、むらさきの花や葉が、水をくゞつて流るゝ風情は、吉野の春か、龍田の秋か。はゝ、面白いなう。
岩千代　なにさまこれは風流の思召、水の神にも心あらば定めて嬉しう存じて居りませう。
義輝　そち達も投げてみい。
岩千代　はつ。
（岩千代、左近、次郎はほかの籠を取りて、思ひ〳〵に花を投げ入れる。）
義輝　濁れる水に色を添へ、濁れる水に香をたゞよはして、思ひもよらぬ興を催したわ。かの花賣に褒美を取らせい。
次郎　はつ。（懐中より金を取出す）　褒美を取らすぞ。ありがたく頂戴いたせ。
おそよ　恐れ入りましてござりまする。
（おそよは進んで金をうけ取り、二人は土に手をついて拜禮す。）
左近　もはや用事は無い。行け、ゆけ。
お夏　ありがたうござりまする。
（二人の女は籠を持ちて下の方へ立去る。）
岩千代　（空を仰ぐ）　又もや空の色も怪しうなつてまゐりましたれば、降らぬうちに御歸館遊ばしては如何でござりまする。
義輝　もはや歸館いたさうか。さみだれの晴間は短いなう。
（義輝も空を仰ぎつゝ起ちあがる時、下の方より松永の家臣伊賀七郎は家來數人を引連れ、おびたゞしき笹の枝をつみたる車を人夫にひかせて出づ。かくと見るより岩千代はその行手に立塞がる。）
岩千代　待て、待て。公方家の御成先であるぞ。
左近／次郎　退れ。さがれ。
七郎　（進み出づ）　岩千代どの、拙者は伊賀七郎ぢや。お見おぼえもござらう。して、公方家にはいづかたへお忍びでござるな。
岩千代　淸水寺へ御參詣の下向でござる。
七郎　さらば我々とは路が違ふ。邪魔せずと通してくだされい。拙者はいそぎの用事をかゝへてゐるのぢや。
岩千代　そのやうにおびたゞしい笹を積んで何とするのぢ

や。

七郎　え。（すこしく口籠る）宇治の螢狩にまゐるのぢや。

岩千代　螢狩にそれほどの笹が入用か。さりとは仰山なことぢやなう。（少しく怪む）して、お身の主人松永は、何百人をつれて螢狩にゆくのぢや。

七郎（むつとして）いらざる詮議をする男ぢや。當時都にならびなき松永彈正どのぢや。螢狩にも何百人何千人の供をつれて行かうわ。

岩千代　それにしても松永の屋敷は立賣町ぢや。これへまゐつては方角が違ふぞ。

七郎　えゝ、それをお身に習はうか。拙者は一先づ三好殿の屋敷へまゐるのぢや。

岩千代　三好も誘うてゆくのか。

七郎　くどいなう。（顔を背ける）なんでもよいから通して下されい。それ……。

（見かへれば、人夫は車を挽き出さんとす。）

岩千代　えゝ、ならぬと申すに……。公方家の御成先を押して通らば、この岩千代が手は見せぬぞ。

七郎　なに……。

（七郎も太刀に手をかくれば、七郎の家來どもは駈寄りて七郎を遮る。）

岩千代　さあ、早う路を變へて行け。この車をあとへ戻せ。

（岩千代進んで車のはなを押戻せば、人夫は餘儀なく車を引つ返す。七郎は無念に堪へず、車に積んだる笹の一枝をとりて、矢庭に岩千代の面を打つ。岩千代怒つて太刀をぬかんとするを、左近と次郎は走り寄つて支へる。七郎は猶も打たんとするを、これも家來に支へらる。）

岩千代　おのれ。武士の面を打つたるな。左近も次郎も止むるな、放せ。

（岩千代は身をもがくを二人は猶支へる。）

七郎（冷笑ふ）おゝ、打つたがなんとした。當時威勢をふるふ松永殿に對して、とかくに楯を突くが面憎さに、七郎が折檻いたしたのぢや。はゝ、公方家がなんぢや、將軍家がなんぢや。おのれ等も位倒れの主人に奉公せうより、この笹をかついで螢狩の供して來い。

（七郎は笹の枝を岩千代に投げつけて去る。家來等も車を圍みて元來し方へ引返してゆく。）

岩千代　おのれ……。

（岩千代はいよ／＼怒つて追はんとするを、左近と次郎は抱きすくめる。）

左近　急くな。岩千代……。

次郎　まあ、待ちやれ。

岩千代　でも、このまゝには……。

義輝　岩千代、待て。
岩千代　はつ。
義輝　かの七郎とか申す奴、主人松永の威勢を肩にきて、強ひて供先を押通るならば、たゞ一刀に切つて捨てんと、最前より疳癖を抑へて觀て居つたが、かれも道理は爭はれず、おめ〳〵と車を返して行つたわ。それでそちの役目は立つた。そのくらゐのことは堪忍せい。
岩千代　はつ。
（岩千代は落ちたる笹を手に取りて、無念の涙をぬぐふ。）
義輝　そちの無念は察してをるぞ。わが面前にて家來を打擲されて、義輝とても口惜いは山々ぢやが、かねて申聞かす通り、三好松永は威勢をたのんで、將軍の予に對してすらも、目にあまる振舞の多いこの頃のありさまぢや。しばらく辛抱して時節を待て。
岩千代　はつ。上樣が御勘辨に相成りますれば、わたくしもぢつと無念を堪へて、しばらく時節を相待ちまする。
義輝　男の癖に涙をこぼすな。
岩千代　はつ。
義輝　なにや彼やで時を移した。いざ歸館いたさうか。供揃ひいたせ。
一同　はつ。

（義輝は馬にのる。左近と次郎その他の家來も附添ひて行かんとする時、上の方より松永の家臣岩槻主水助出で、かくと見るより土にひざまづきて禮す。）
義輝　かれは何者ぢやな。
左近　おなじく松永の家來岩槻主水助と申しまする。
義輝　おゝ、左樣か。（打笑む）松永の家來も七郎のやうな無禮者ばかりでないと見ゆるな。
（義輝をはじめ、家來は向ふへ去る。岩千代はあとに殘りて、彼の笹の枝をぢつと打ちながめ、無念の體なりしが、やがて主水助と顏を見あはせ、おのが素振を覺られまじと彼の枝を腰にはさみ足早に向ふへ去る。主水助はあとを見送る。橋の上より松永の娘多門、十八歳、美しく粧ひて、侍女ひとりを連れて出づ。）
侍女　あれ、あすこに主永殿が……。
多門　おゝ、ほんに……。
（多門は橋を渡りて進みよる。主水助も見かへりて打笑む。）
主水助　おゝ、姫にはいづかたへお越しでござりました。
多門　清水寺へ參詣して來ました。
主水助　では、將軍家と同じところへ……。
多門　一足ちがひで、もう下向の濟んだところであつた。こゝでお身に逢うたは丁度幸ひぢや。さあ、打連れて屋

敷へ戻らう。但しは嫌か。
主水助　なんで嫌でござりませう。
多門　さあ、一所におぢや。
（多門は主水助の手を取らうとするを、主水助はしづかに振拂ふ。）
主水助　都大路には人目がござりまする。
多門　ほんにうるさい世の中ぢやなう。
侍女　わたくしはおあとへ引退つてまゐりますれば、ゆるゆるとお話をなされませ。
多門　おゝ、邪魔せぬやうに、あとから離れて來や。よいか。
侍女　はつ。
多門　さあ、主水助。
主水助　お供いたすでござりませう。
多門　みち／＼何を話さうか。
主水助　なんなりとも承はりまする。（打笑む）
多門　（おなじく打笑む）では、兎も角もあゆみながら……。
主水助　面白いお話をお聞かせくださりませ。
（多門と主水助は肩をならべて歩みゆく。侍女はすこし引退りて從ひゆく。池田丹後將武、廿七八歳。頭巾をかぶり、笠を持ちて走り出で、橋の上にて三人のうしろ姿を屹と見送る。）

（二）

洛中立賣町、松永彈正の屋敷内。
數寄をこらせし茶室、床には書軸をかけ、花を活け、茶棚、臺子などあり。庭には樹木敷石あり。左右には風雅なる土塀あり。おなじ日の夕刻。
（茶室の内には松永彈正少弼久秀、五十餘歳。平蜘蛛といへる秘藏の釜に對して、しづかに茶を立てゝゐる。庭には蛙の聲きこゆ。）
久秀　釜には松の聲、庭には蛙の聲、さみだれの晴間に庭の青葉をながめながら、心しづかに一服の茶を啜るも、風流の極意であらうよ。（空を仰ぐ）いや、さういふうちに空は再び陰つて來た。今宵はおそらく雨であらうな。よい、よい、ふらば降れ。夜討には雨が結句ましかも知れぬ。
（久秀は再び釜にむかふ。蛙の聲しきりにきこゆ。下の方より伊賀七郎出づ。）
七郎　殿、たゞいま戻りましてござりまする。
久秀　おゝ。七郎、戻つたか。用意の笹は取りあつめたか。
七郎　およそ三千本ばかり取集めましたが、いかゞでござりませうな。
久秀　それほど集めたら不足はあるまい。夜いくさには合

印が無うてはならぬ。めい〲の腰に挿して、同士撃せぬやうに氣をつけよ。よいか。

七郎　一同にも屹と觸れ渡すでござりませう。右の笹を車につませて、これへ曳かせてまゐる途すがら、恰も公方家の御成にゆき逢ひました。

久秀　いづかたへお忍びぢやな。

七郎　淸水寺御參詣でござりました。

久秀　今宵かぎりで亡ぶる御運とも知らいで、佛をたのまれたとて何とならうぞ。はゝゝゝゝ。

七郎　大方後生を願はれたのでござりませう。

久秀　そんなことかも知れぬなう。

（娘多門出づ。）

多門　父上これにおいでなされましたか。

久秀　おゝ、よいところぢや。これへ來て相伴いたせ。

多門　はい。

（多門も父にむかひて坐す。）

久秀　七郎もどうぢやな。

七郎　はつ。お茶も結構ではござりまするが、もはや人數も到着の時刻でござりますれば……。

久秀　時刻はまだ早い。さのみ慌つるにも及ぶまい。しかし人數が揃うたれば、久秀よりあらためて申渡す儀がある。一同打連れてまゐれと云へ。

七郎　かしこまりました。

（七郎去る。）

久秀　はて、せはしない奴ぢや。娘、あらためてそちの手前を一服所望いたさうかの。

多門　では、御免くださりませ。

（多門は茶を立てる。）

久秀　久秀が人に羨まるゝ寶は二つある。その一つは先づそちぢや。年四十に近きまで子なきを憂ひ、志貴の多門天に祈誓を籠めて、はじめて儲けし娘なれば、名をそのまゝに多門と呼ばせ、けふまで恙なく成長させたが、わが子ながらも萬人にすぐれし容貌、松永の娘多門といへば、雲の上までもきこえし美人となつたわ。

多門　又してもそのやうなことを……。親の口から我子をおなぶりなされまするな。

久秀　いや、弄るでない、ほんのことぢや。今一つの寶はその平蜘蛛の釜、大明より傳へて東山殿の手に入りしを、更に傳へてわが物となつたが、これも日本には二つなき名器ぢや。その釜でそちの手前、茶の味は甘露であらうよ。

多門　とは云へ、まだそれだけでは御滿足がなりますまい。

久秀　さあ、人間の慾には限りがないもので、おなじくは天下の權を兩手に握つて、その上でそちとその釜とを併

せ有つたら、久秀の望みも初めて叶ふといふものぢや。

多門　その御望みの叶ふのももう二晌三晌の後でござりませう。わたくしも今日は祇園と清水に參詣して、御本意成就を祈つてまゐりました。

久秀　ほかならぬそちの願ひぢや、神も佛もさだめて納受されたであらう。陪臣の松永久秀も翌は公方家同樣の出世もなると云ふものぢや。そちも一心を凝して、父の果報を祈つてくりやれ。

（多門は茶を立てゝ出す。久秀は茶碗を取りて飲む。）

多門　服加減いかゞでござりまするな。

久秀　よい、よい。加減は上々ぢや。

多門　今宵の御首尾も上々でござりませう。

久秀　崩れかゝつた足利の家ぢや。久秀の力で一押し押したら、棟も柱もめり／＼と折れてしまふわ。

多門　とは云へ、上樣は武勇人に越えさせたまひ、打物取つてはその面に立つ者もないとか申しまする。

久秀　さあ、それがいさゝか懸念ぢやが……。さりとて多勢に無勢ぢや。擊ち洩すやうなこともあるまい。

（下の方より伊賀七郎再び出づ。）

七郎　人數はのこらず打揃うてござりまする。

久秀　左樣か。組頭以上の者どもをこれへ呼べ。

七郎　はつ。（下の方にむかひて）いづれもこれへ……。

（池田丹後、岩槻主水助、森傳助、和田右京、津川源八郎、生駒甚作、落合彌市、中村五郎兵衛、魚住虎松、犬塚新吾の十人出づ。主水助をはじめ、傳助、右京、源八郎、甚作は右に、七郎、彌市、五郎兵衛、虎松、新吾等は左に、わかれ／＼に控ふれば、丹後一人はすこし引下りて唯ある木の下に坐す。）

久秀　今あらためて申すまでもなけれど、公方家近ごろの御政道よろしからず、萬民ほと／＼難儀に及びて、足利十三代の御運も將にかたむかんとす。しかも公方家は我等を殊のほかに憎ませたまひて、隙もあらば三好松永の兩家をほろぼさんと、內々の御企てもありとか聞く。おくるゝ時は人に制せらるゝと云へり。われより先に手を下して、當公方家を失ひたてまつり、阿波の御所義綱公を迎へ取りて、更に十四代の將軍に据ゑまゐらせ、われは天下の後見となりて、家榮昌の基を開かんと思ふぞ。いづれも異存あるまいな。

主水助　仰せまでもござりませぬ。當公方家の御政道正しからざるは萬人の知るところ、しかも當家に敵意を含ませらるゝからは、一刻も早う謀叛のおん企て然るべく存じまする。

傳助　されば我々も密々に用意をとゝのへ、今宵戌の刻を合圖に、室町御所の四方よりみだれ入り、たゞ一戰に將

軍家を攻めほろぼさんと、手ぐすね引いて相待ち居りまする。

久秀　して、人數の配り樣は……。

右京　先づ東の手は三好どの自身に馬をすゝめられ、人數はおよそ四百五十餘騎、三本木東の洞院に陣を立てられまする。

源八郎　みなみは烏丸春日表より岩成主稅助殿、六百餘騎にて寄せられまする。

甚作　北は櫻の馬場、西は腹帶地藏のあたりより、味方の人數をすゝめねば相成りますまい。

久秀　よい、よい。それで四方の隙はあるまい。久秀は室町の大門、大手口に陣を取らうぞ。

彈正　われ〳〵は殿の左右に控へて、駈引萬端の御指圖うけたまはるでござりませう。

五郎兵衛　御所方にも一色淡路、大館岩千代をはじめとして、宿直の武士も四五十人は屯してをりますれば、かれらも必死の働きを致すでござりませう。

虎松　いや、いや、彼等いかばかり狂ふとも、多寡の知れたる小人數でござる。

新吾　入替へ入れかへ攻め付けて、一人も殘さず討取るは、半晌か一晌のひまでござらう。

久秀　待て、待て。其方どもは一人も殘さずといふ。そのうちには公方家も含まれて居らうな。

七郎　それは勿論の儀でござりまする。

久秀　して、その公方家は誰が擊つな。

（一同は顏を見あはせて少しく躊躇する。）

久秀　たゞいま申す通り、宿直の面々いかほどに働くとも、それは多寡の知れたるものぢや。が、たゞ恐るべきは公方家一人ぢや。かの御仁は力量逞しく、打物取つては御所內にもならぶものなき達人と、人も云ひ、我も誇つてをらるゝほどなれば、容易に討取ることも覺束ない。さりとて狹い御所內ぢや。遠矢にかくることもなるまい。所詮は一騎討の勝負であらうが、この役目を引受くるものはないか。

七郎　なにさまこれは大事の役目、首尾よく仕遂すれば天晴れの功名ぢやが、方々、いかゞでござるな。

傳助　いかにもなう。

（一同は再び顏を見あはせる。）

久秀　今宵の企ては公方家一人を討取るが趣意ぢやに、當の相手をうち洩しては、折角の苦心も水の泡ぢやぞ。

右京　仰せ御もつともでござりまする。

久秀　進んで引受くる勇士はないか。

（一同は又もや顏をみあはせる。）

久秀　公方家の武勇がそれほどに怖ろしいか。

（一同答へず。）

久秀　將軍の威勢がそれほどにおそろしいか。

（一同なほ答へず。）

久秀　（すこし急いて）一旦謀叛に與しながら、公方家の武勇におそれ、威勢に恐れ、指一つ差し得ぬとは、そろひも揃うた卑怯者ぢやな。さあ、おのれ等。卑怯者と云はるゝが口惜くば、誰にもあれ、みづから進んでこの役目を引受けい。えゝ、引受くるものはないか。

（一同は又もや顏を見あはせて、たがひに讓り合ふのみ。）

久秀　（いよ／＼激して）返事のないは卑怯者ばかりと極まつたか。いや、いや、これほどの大事の役目を、無理強ひにすゝめたは私の不覺ぢや。重賞の下には死士ありといふ諺もある。されば久秀が賞を懸くるぞ。こよひ室町御所に討入つて、まつさきに公方家の御首級をあげたる者には一千貫の褒美を取らせうが、どうぢや。

（一同は「一千貫、一千貫」と呟くのみにて、われと進んで應ずるもの無し。）

久秀　さらば二千貫……。二千貫ぢや。

（一同なほ答へず。）

久秀　（いよ／＼焦れる）さらば三千貫……。えゝ、五千貫ぢや……。えゝ、まだ不足さうな面附ぢやな。よい、よい。さらばこれを遣はす……。この平蜘蛛の釜を遣はす。これは久秀に取つて二つとない寶ぢや。それでもまだまだ不足と申すか。えゝ、しかと返事をいたせ。

（一同は又もや顏を見あはせて「平蜘蛛、平蜘蛛」とさゝやき合ふのみ。）

久秀　平蜘蛛でもまだ不足とあれば、久秀の寶はもう盡きた。むゝ。

（久秀は衝と起つて娘の手をとり、多門を前にひき出す。）

久秀　今宵公方家をうち取つたるものには、この多門をくれる。いとしい娘の婿にする。

（かくと聞くより主水助は俄にすゝみ出づ。）

主水助　さらば拙者が……。

（云ひかくる時、今まで默してゐたりし池田丹後は、これを打消すやうに大音あげて叫ぶ。）

丹後　いや、それがしがお請けつかまつる。池田丹後將武がたしかにお請けいたした。

（一同おどろきて丹後の顏をみる。丹後は前にすゝみ出づ。）

主水助　いや、その儀は相成るまい。お請けの口上は拙者が先ぢやぞ。

丹後　えゝ、口上の前後は扨措いて、人には身の程といふ

ものがある。お身等のやうな生ぬるい京侍に、この役目が勤められうか。控へておゐやれ。なう、殿。武士に二言はない。今宵室町御所に討入つて、公方家の首級をあげたるものには、たしかに息女を下さるゝか。

久秀　久秀も武士ぢや。嘘はいふまい。

多門　あゝ、もし、それは……。

久秀　はて、よい、父に任しておけ。

丹後　約束に違變はござらぬな。

久秀　諸人のみる前で、久秀たしかに誓うた。

主水助　お詞ではござれども、お請けの御返事申上げたるは、丹後一人ではござりませぬ。拙者の聲はお耳に入りませぬか。

多門　ほんに丹後よりも先に、主水助がお請け申上げたのでござりまする。

久秀　さらば兩人に申付けう。丹後にもあれ、主水助にもあれ、まづ第一に公方家を討つたるものを、娘の婿と定むるほどに、いづれも懸命の働きいたせ。

七郎　まことに依怙なき御捌きでござりまする。御兩所にも其心して、たがひに功名を競はれい。

丹後　功名を競ふといふは、宇治川の佐々木梶原のやうな勇士が二人ならんだ場合に申すことぢや。

主水助　主水助では相手に足らぬと云ふか。

丹後　はゝゝゝゝ。

（主水助むつとして詰め寄らんとするを、傳助等は支へる。入相の鐘きこゆ。）

多門　おゝ、あの鐘は酉の刻か。

久秀　討入までにはもう一晌ぢや。いづれも物具の用意いたすがよからう。

一同　はつ。

（鐘の聲つゞけてきこゆ。）

久秀　つねに聞くあはれに換へて嬉しきは、人待つけふの入相の鐘。（と口吟む）古歌の心も思ひ當つて、日の暮るゝのが待たれたわ。

丹後　いま一晌が猶待たれまする。

（丹後は希望の眼をかゞやかして、打笑みながら暮れてゆく空を仰ぐ。多門と主水助は顏を見あはせる。一同たち上る。うすく雨の音きこゆ。）

――幕――

第二幕

一

室町の足利將軍館。白木造りにて高足の二重家體。上の方の床には鎧櫃、長刀などあり。正面は襖、左右に

廊下ありて、軒には翠簾をまき上げ、ふきところに燈臺を置きたり。庭の上の方には池ありて、かきつばたの花さけり。下の方は網代塀にて、所々に青葉の立木あり。前幕とおなじ夜。

（將軍義輝は高に坐して曲彔により、寵妾小侍從、廿一二歳、その傍に侍りて酒宴の體なり。侍女桐、夕顏、卯の花、皐月の四人と小姓二人控へたり、雨の音薄くきこゆ。）

義輝　皐月の癖とは申しながら、又もや雨を催してまゐつたな。

小侍從　この五月雨を題にして、歌などおよみ遊ばしませぬか。

義輝　枕詞や掛詞の三十一文字にももう倦いた。何かほかに面白いことはないかなう。

小侍從　では、いつもながら拙い舞でも御覽に入れませうか。

義輝　舞も古うて珍らしうない。大方の遊びはもう倦いた。この上はたゞ醉うて眠るのぢや。

小侍從　御寢なるにはまだ時刻がお早うござりまする。先づお杯をお重ねなされませ。

義輝　云ふまでもないことぢや。この頃の義輝は酒が無うては一日も過されぬ。いつそ死ぬほどに醉ひたいと思うてゐるが、扨さうもならぬものぢやなう。

小侍從　この頃はあまり御癇癖が募らせまするゆゑ、少しは御酒をおすゝめ申して、お心を和げるもよからうと、淡路殿も仰せられました。

義輝　淡路が左樣に申したか。つもる不平に一時は癇癖も募つたが、今ではわしも大いに悟つた。いつの代いかなる人にも不平はあるものぢや。足利家十三代のあるじと生れて、官は征夷大將軍、位は從一位、この上の果報は又とあるまい。この上は要なき修羅を燃さすと、たゞ面白く世を送るが優ぢや。先づそんなものでは無いか。

（義輝は小姓に酌をさせて飲む。）

小侍從　唯この御果報のいつまでも盡きぬやうに、お祈り申してをりまする。

（下の方の廊下づたひに、一色淡路、四十餘歳、笹の枝を持ちて出づ。）

義輝　おゝ、淡路か。丁度よいところぢや。先づ飲め。（杯を献す）

淡路　ありがたうござりまするが、御酒頂戴いたしまする前に少しく言上つかまつりたき儀がござりまする。

義輝　なんぢや。また例の諫言か。

淡路　御諫言ではござりませぬ。先刻清水寺御參詣のみぎりに、おん供申したる大館岩千代が、かやうなものを持

歸りまして、しきりに無念の涙にくれて居りまする。

義輝　おゝ、それは私も知つてゐる。岩千代はその笹の枝で、松永の家來に撲たれたのぢや。

淡路　當時威勢を振ふとは申せども、松永は三好の家來筋で、所謂陪臣でござりまする。その陪臣の又家來が將軍家御側のものを、みだりて打擲して相濟みませうか。ただこのまゝに捨置かれましては、恐れながら上の御威光にもかゝはりませうかと存じまするが……。

義輝　（突然に）おゝ、その松永で思ひ出した。彼には多門といふ美しい娘があると申すことぢやな。

淡路　そのやうな噂も聽いてをりまする。

義輝　この小侍從に比べてはどうあらうな。

淡路　さあ、何うでござりませうか。一色淡路、女子の目利きは不得手でござりまする。（膠なく云ふ）

小侍從　妾もまだ見たことはござりませぬが、松永の娘といへば洛中にも隱れのない美人、それに比べましたら、妾風情は月の前の星よりも、果敢ないものでござりませう。（少し氣色を損じたる體にていふ）

義輝　はゝ、そのやうに恨みがましう申すな　どうぢや、淡路、松永の娘をわが手許へ召出す工夫はないかな。

淡路　陪臣の分際で、やゝもすれば上を凌がんとする松永めの娘を、御寵愛遊ばす御所存でござりまするか。

小侍從　松永めは憎い奴ぢやと、日頃から仰せらるるではござりませぬか。

義輝　憎いやつなればこそ、その娘を召出さうと云ふのぢや。日ごろから申す通り、あの松永めは憎うてならぬ。折もあらば打亡ぼしてもくれうと存ずれども、今の義輝には彼を仆すほどの力がない。されど彼は筋目もない賤しいものぢや。われには征夷大將軍源氏の棟梁といふ世にならびなき名譽がある。この名譽を餌にして、かれの娘を所望と申さば、松永もおそらく喜んで承引するであらう。かくして娘を差出したら、思ふがまゝに弄り物にして、息の絶ゆるほどに追ひ遣うてくれるわ。親の因果が子に報ふとか申すはこの事で、それが松永めに對する切めてもの意趣晴しぢや。

淡路　親を憎ませたまふがために、罪なき娘に祟らせらるるは、あまりに御卑怯かとも存じまするが……。

義輝　卑怯ぢやとて是非がないわ。かれは力があつて名がない。我は名があつて力がない。彼は力をたのんで、常にわれを苦むるほどに、われは名を以てかれを誘ふよりほかはあるまい。弓を善くするものは弓を以て鬪ひ、槍を善くするものは槍を以て防ぐが自然の習ぢや。

淡路　でもござりませうが、この儀ばかりは……。

義輝　ならぬと申すか。

小侍從　松永めの娘などと一所に御奉公はなりかねます
る。萬一いよ〳〵御召出しと相成りますれば、妾はお暇
たまはりまするほどに、左樣思召してくださりませ。
義輝　まだ判らぬか。頑固な奴等ぢやなう。
（雨の音強くきこゆ。侍女は空を見る。）
楓　おゝ、又ひとしきり強く降つてまゐりました。
夕顏　今夜も降通すのでござりませうか。
卯の花　この頃の雨にも飽々しましたなう。
皐月　あまりに飛沫が強うござりますれば、しばらく翠簾
をおろしませうか。
義輝　いや、ひとしきりで又やむであらう。垂れ籠めては
鬱陶しいものぢや。そのまゝに致しておけ。
皐月　はあ。
（蛙の聲高くきこゆ。）
義輝　池の蛙がしきりに鳴くなう。
淡路　雨の強く降るときには、鳴きやむが習でござります
るに……。
小侍從　却つて高く鳴き立つるは……。不思議なことでご
ざりまするな。
（蛙はしきりに鳴く。）
義輝　えゝ。さわがしい奴ぢや。雨夜の蛙もかやうに鳴き
立てゝは無風流の極みぢや。やあ、女共。あまたの松明
を池のほとりに照らして、蛙の鳴く音を一時にとゞめよ。
楓　心得ました。
（侍女四人は奥に入る。）
小侍從　蛙の鳴く音が左までにお耳に障りましたか。
義輝　おゝ、耳障りぢやよ。館のそとへ一足踏み出せば、
三好や松永の奴原がさま〴〵の邪魔をしをつて、何事も
義輝の自由にはさせぬ。せめて館にあるあひだは、思ふ
がまゝに振舞はねば、世に生きてゐる甲斐がないぞ。え
え、蛙めがまた鳴くわ。燈火を早う持て。
（高聲によび立つれば、はつと答へて下の方より楓等
四人の侍女は、片手に竹笠を持ち、片手に松明を持ち
て出づ。）
淡路　この雨のなかを御役目大儀ぢやが、上の御意とて是
非もござらぬ。手に〳〵松明をふり照して、池のあたり
を一巡りせられい。
四人　かしこまりました。
（侍女どもは松明を振りながら池のほとりに進みゆ
く。）
楓　幸ひに雨も小降りになりました。
義輝　火を消さぬやうに氣をつけてゆけ。
四人　はあ。
（侍女どもは松明の火を水にうつす。蛙の聲は次第に

止む。)

小侍従　松明の火におどろかされて、蛙は次第に鳴きやみました。

義輝　かれらも火におどろいて一旦は音を止めたが、暗とならばやがてまた鳴くであらう。やかましく鳴き立てられては眠りの邪魔になる。女どもは火を持つて、夜もすがら池のめぐりを張番いたせ。

四人　はあ。

淡路　これはいよ／＼難儀のお役ぢや。御小姓衆と一晌交代で、御用を勤めたがようござらう。

小姓　心得ました。

(雨の音又もや強くきこゆ。)

小侍従　おゝ、また強く降つてまゐりました。

(侍女どもはあわてゝ竹笠にて松明の火を掩ふ。)

義輝　よく降ることぢや。淡路、雨をやむる工夫はないか。

淡路　これは思ひも寄らぬこと　人間の力では及びませぬ。

義輝　人間の力に及ばぬことが多いなう。

(義輝は忌々しげに嘆息す。雨の音にまじりて貝鐘の音遠くきこゆ。)

小侍従　や、あの聲は……。

(淡路は衝と起ちて縁先に出で、貝鐘の音に耳をかたむく。)

義輝　夜陰に及んで俄にきこゆる貝鐘のひゞきは……。淡路、其方はなんと思ふぞ。

淡路　東の洞院、烏丸、櫻の馬場、四方にきこゆる貝鐘が次第にこなたへ近づくは……。殿、一大事でござりまするぞ。

義輝　むゝ、謀叛人がこゝへ寄するといふか。

小侍従　敵は何者でござりませうな。

淡路　察するところ、三好か松永……。いよ／＼謀叛を企てたか。

(貝鐘の音いよ／＼烈しく、大舘岩千代、簑笠にて走り出づ。)

岩千代　常はさびしき雨の夜に、大路小路の物さわがしきは、合點ゆかずと物見にまゐれば、幾千の人馬は四方に屯して、御所を目がけて押寄せまする。

義輝　して、旗の紋所は……。

岩千代　大手は正しく松永彈正、からめ手は三好の一黨と見申した。

義輝　扨はいよ／＼案に違はず。(首肯く)やあ、淡路。其方は宿直の者どもを呼びあつめて、防ぎ矢射よと申傳へい。

淡路　はつ。

(淡路は緣づたひにて、下の方へ走り入る。)

小侍從　日頃より威勢をたのんで、上をないがしろにするのみか、果は謀叛をたくむとは、云はうやうない人非人どもでござりまするな。

義輝　それは今更いふも詮ない。三好松永が合體して、謀叛を企てしとあるからは、足利の家も十三代の今日で亡ぶるわ。

岩千代　殘念な儀でござりまする。

義輝　義輝も征夷大將軍の名をたのんで、僅にみづから慰めて居つたが、今となつては名もいらぬ、位もいらぬ。たゞおのれの力を恃むのみぢや。いでや最後の力を揮つて、謀叛人どもを蹈みにじつてくれうぞ。

岩千代　われ／＼も力のかぎり鬪うて、冥途のお供仕つりませう。それ、侍女衆。最後の御酒宴の御用意あれ。

四人　はあ。

（侍女どもは內に入りて座につく。）

義輝　岩千代、近う。

岩千代　はつ。

（岩千代は椽先近くすゝみ出でてひざまづけば、義輝は小姓を見かへる。）

義輝　その笹の枝をこれへ……。

小姓　はつ。

（小姓の一人は淡路がすて置きたる笹の枝を持ち來る。義輝は手に取る。）

義輝　岩千代、これは今日の夕刻、淸水寺參詣のみぎりに、松永の家來めが其方を打つたる枝ぢや。無念はさだめて覺えがあらう。

岩千代　はつ。

義輝　今にして思へば彼の笹は、螢狩などに用ゆるものではない。今宵夜討の合印と推量したぞ。ついては其方物具に身をかためて、この枝を腰にはさみ、敵の陣中へまぎれ入つて、謀叛の頭領松永めを唯一刀に打つて捨て、主の讐、その身の仇、一度に報ゆる所存はないか。

岩千代　よくぞお心が付かれました。夜中と申し、亂軍の折柄、その合印を身につけましたら、敵もうたがふ氣遣ひはござりませぬ、首尾よく松永めに近寄つて、君に代つて謀叛人の成敗、屹と仕つるでござりませう。

義輝　しかと頼んだぞよ。

岩千代　はつ。

（義輝は椽先にすゝみ出る。岩千代は伸び上りて笹の枝をうけ取り、たがひに顏を見あはせる。貝鐘の音又もやきこゆ。）

小侍從　おゝ、敵はいよ／＼寄するとみえて、夜をさわがす人馬の物音が、手に取るやうに聞えまする。

義輝　岩千代、早うゆけ。

岩千代　首尾よく御用を勤めてからが、とても逃れぬ我が命……。あすは再び冥途で見參……。

義輝　いや、そちはなるべく身を全うして、二度が三度でも執念く仇をねらへ。

岩千代　はつ。

（下の方の緣づたひに一色淡路、武裝して弓矢をたづさへ出づ。）

淡路　殿、敵はもはや御門前まで押寄せ申した。宿直の面面は、上野兵部、結城主膳、高木左近、畠山次郎、引詰め引きつめ射るほどに、矢面に立つたる敵二十餘人は、見る見るうちに倒れましたわ。

小侍從　とは云へ、敵は大勢なれば、とても最後の御勝利は……。

義輝　それは云ふまでもないことぢや。義輝も最期の用意をせうぞ。岩千代もゆけ、ゆけ。

岩千代　然らば御免くださりませう。

（岩千代は筵の枝を持ちて、下の方へ走り入る。貝鐘の聲絕えずきこゆ。義輝は杯を取る。）

義輝　わかれの酒ぢや。酌いたせ。

小侍從　はあ。

（小侍從進んで酌をする。義輝はかたむけ盡して、小侍從に獻す。）

小侍從　ありがたうござりまする。

（小姓に酌をさせて、小侍從は飮む。）

義輝　その杯は淡路にまはせ。

淡路　はつ。ありがたく頂戴いたしまする。

（淡路も杯をうけ、小姓の酌にて飮む。）

淡路　おそれながら御返杯……。

（義輝は小姓に酌をさせて飮み、その杯を緣にうち付けて割る。）

義輝　われも碎けて土となるのぢや。長刀持て。

小姓　はあ。

（小姓は床より長刀を持ち來る。）

義輝　義輝が最後の働きをみよ。すくなくも二十人三十人は薙ぎ伏せてくれうわ。

（義輝は長刀をかい込んで起つ。小侍從は起つて鎧櫃より緋縅の鎧を把出す。）

小侍從　上樣には先づおん着長を……。

義輝　（打笑む）お身は足利の家風を知らぬか。主が家來を征伐するときには、鎧をつけぬが源氏の習ぢや。

小侍從　とは云へ、不意の夜討にござりますれば……。

義輝　いや、堀河の義經は眞似たうないわ。

小侍從　はあ。

（小侍從は鎧をかたよせる。空にほとゝぎすの聲きこ

ゆ。義輝は聲する方を打仰ぐ。）

義輝　死出の田長が五月の闇を鳴いて通るわ。義輝が最期に一首残さう。料紙を持て。

小姓　はあ。

（小姓起たんとすれば、貝鐘の音はげしく聞ゆ。）

淡路　敵はいよ〳〵迫つてまゐつた。さ、早う、早う。

小侍従　では、いつそ料紙の代りに……。

（小侍従は懐剣をぬきて、わが白き袖を切る。）

義輝　おゝ、よい、よい。さらば硯も紙も要らぬぞ。

（義輝はわが指を咬み、その血汐を袖に染めて辭世の歌をかく。）

義輝　辭世の一首、見てくりやれ。

（小侍従は袖を受取り、淡路ものぞきて見る。）

小侍従　さみだれは露か涙か時鳥……。

義輝　わが名をあげよ雲の上まで。

（高らかに吟じて空を仰ぐ。ほとゝぎすの聲きこゆ。高木左近、畠山次郎、大童にて太刀をぬき持ち、下の方より走り出づ。）

左近　上様、これに御座ありしか。宿直の面々必死となつて防げども、矢種のこらず射盡して、敵は御門前まで犇犇と寄せ申した。

次郎　双方手詰のたゝかひと相成つては、なにを申すも敵は目にあまる大勢、おそれながら御運も最早これまでかと存じまする。

義輝　よい、よい。ついては寶藏に秘め置きたる金銀はいふに及ばず、鎧、太刀、兜、さては綾錦のたぐひまで、こと〴〵くこれへ運び出して、むらがる敵のなかへ投げ入れよ。慾に眼がくれたる敵の奴原、われ先にと爭つて拾はんとするところを、片端より薙ぎ伏せ斬倒してくれうぞ。これも最後の一興であらうよ。

淡路　なにさまこれは面白き御思案。とても敵の手に渡すものならば、かうして弄るも一興でござらう。それ、方方……。

（小姓と侍女等を見かへれば、一同心得て奥に入る。）

義輝　さらばいよ〳〵最後のいくさぢや。いづれも支度いたせ。

一同　はあ。

義輝　先づ庭さきに篝を焚け。夜を晝にして闘はうぞ。

（貝鐘の音はげしくきこゆ。）

二

おなじく館の門前、築地の外には幾株の柳をうゑたり。

（松永彈正久秀、陣羽織を着て床几にかゝり、兜を持ちたる家來一人これに從ふ。ほかにも松明または槍た

持たる家來十數人控へたり。いづれも腰に笹の枝をはさむ。）

久秀　敵の矢種も大方は盡きたであらう。いよ〳〵これからが手づめの勝負ぢや。小勢ながらも敵は必死に闘うて、容易に埒があかぬと見ゆる。誰かある、門内の様子を見てまゐれ。

家來一　はあ。

（家來の一人は門内に走り入る。貝鐘の音はげしくきこゆ。森傳助、和田右京、大童に鉢巻して鎧をつけ、挿物を背負ひて腰に笹の枝をはさみ、槍を持ちて走り出で、久秀のまへに一禮す。）

傳助　森傳助。

右京　和田右京。

傳助　これより討つて入りまする。

（云ひ捨てゝ門内へ走り入らんとするを、久秀は呼び止める。）

久秀　えゝ、おのれ等は武士にも似合はぬ。夜討の作法を知らぬ奴な。面も確とはみえぬ夜いくさに名を名乘ればとて何とならうぞ。鎧の縅の色、旗さし物、一々に名乘つて通れ。

二人　はつ。（引返してくる）

傳助　森傳助は萌黄縅、挿物は不動明王……。

右京　和田右京は緋縅、さし物は墨にて和田右京照正と記してござる。

久秀　一々見知つた。ゆけ、ゆけ。

二人　御免。

（二人は門内に走り入る。）

久秀　池田丹後、岩槻主水はまだみえぬか。

家來　はあ。

久秀　彼のふたりは如何いたしたのかなう。矢軍のすんだる頃を見計うて駈付くる所存であらうな。

（伊賀七郎、門内より走り出づ。）

七郎　殿。敵は思ひのほかに手剛うござりまするぞ。

久秀　窮鼠猫を食むの例ぢや、さもあらうよ。

七郎　中門口までは寄せましたれど、容易に奥へは踏み込まれませぬ。

久秀　敵とても鬼神ではない、いま一喊の後には自然に潰るゝわ。

（門内より大傷岩千代、鎧をきて腰に笹の枝をはさみ、みだれたる髪を額にふりかけて出づ。）

岩千代　大將はいづれにござるな。

七郎　誰ぢや。

岩千代　味方の者、合印を御覽くだされ。

久秀　むゝ、久秀はこれにあるぞ。

岩千代　おゝ、これにござりましたか。密々にて申上げたき儀が……。

久秀　なにか知らぬが近う寄れ。

岩千代　はつ。

（岩千代つか〳〵と寄らんとするを、七郎はあわてゝ遮る。）

七郎　待て、待て。聞きおぼえのある聲音と思ひしに、おのれは正しく大館岩千代……。

岩千代　や。

七郎　殿、御油斷あるな。

（家來どもは松明をさしつけて取圍む。岩千代は早やこれまでと覺悟して叫ぶ。）

岩千代　謀叛人の松永め。

（跳りかゝつて斬付けんとすれど、家來どもに隔てられて果さず。岩千代は皆がみをなして奮鬪。遂に敵と鬪ひながら下の方へ去る。久秀とその兜を持ちたる家來一人、ほかに七郎のみが後に殘る。）

七郎　敵は死物狂ひでござりますれば、岩千代のごとき不敵者が又もやあらはれ出でぬとも限りませぬ。こゝに御座あつては、大事のおん身にいかなる過失があらうも知れますまい。一旦はあれまで引退つて、ゆる〳〵御見物なされては如何。

久秀　さらば一先づ引揚げるといたさうか。七郎、まゐれ。

七郎　はあ。

（七郎は先に立ち、久秀は家來を引連れて、上の方へあゆみ去る。門内より高木左近、畠山次郎は敵の軍兵數人とたゝかひながら出づ。兩人奮鬪。左近は敵とたゝかひつゝ門内に退き、次郎は敵を追うて上の方へ走り去る。雨の音又きこゆ。池田丹後、よろひの腰に笹の枝をはさみ、片手に松明、かた手に槍を持ちて出づ。）

丹後　これほど手詰のいくさになつても、公方家の武勇に恐れ、二つには公方家といふ名に怖ぢて、誰一人進んで將軍に手ざしをする者もあるまい。……もしやあの主水めが……。なんの、小二才が……。われ等の先を越さうなどとは及ばぬことぢや。

（丹後は松明を地に投げすてゝ踏み消し、槍を取直して門内へ大股にすゝみ入る。下の方より大館岩千代は岩槻主水助と鬪ひながら出づ。）

主水助　えゝ、おのれらの首に望みはない。邪魔せずと通せ、通せ。

岩千代　謀叛人の片われ、一人たりとも通さうか。

主水助　なにを……。

（兩人はげしく鬪ふうちに、下の方より松永の家來數

人出づ。）

主水助　われ等はほかに目ざす敵がある。こゝ頼んだぞ。

（云ひすてゝ主水助は門内に走り入る。岩千代追はんとするを、家來どもは遮りて闘ふ。雨の音いよ／＼烈し。）

三

もとの館に戻る。庭前には所々にかゞりを焚きて、鎧、金銀珠玉の細工物、諸道具、女の衣類など内にも外にも散亂せり。

（小侍從は引立烏帽子に紅梅の襷まきして、長刀を持ち、おなじく白鉢卷の侍女四人、いづれも長刀を持ちて居ならべり。）

小侍從　館の八方を取切られし上は女わらべとて逃るゝ途はあるまい。まさかの時には奧殿に火をかけて、一同いさぎよく相果つる覺悟ぢや。先づそれまではこゝを守護して、敵一人も奧へは通すまいぞ。

楓　仰せまでもござりませぬ。わたくし共も武家に御奉公いたすからは、まさかの時には覺悟がござりまする。

夕顔　謀叛人共これへ亂入いたさば、片端より薙ぎ倒して、最後の働きつかまつるでござりませう。

小侍從　女とあなどつて無禮を働かば、何奴なりとも容赦すな。して、御門口の樣子はどうぢや。

卯の花　宿直の面々こゝを先途と闘うてをりますれば、敵も容易にはふみ込まれますまい。

皐月　せめて夜の明くるまで支へられましたら、思ひもよらぬ加勢のまゐらぬとも限りませぬ。

小侍從　いや、いや、亡ぶるものに加勢はあるまい。あてもないことは頼まぬがよいぞ。

四人　はあ。

（義輝は長刀を搔い込みて奧より出づ。）

義輝　どうぢや、岩千代よりなんのたよりもないか。

小侍從　一向にうけたまはりませぬ。

義輝　松永めも用心ぶかい奴、迂闊に近づくこともなるまい。大方は仕損じて討たれたかなう。

（貝鐘の聲烈しくきこゆ。）

義輝　宿直の者共いかばかりに猛くとも、味方の人數には限りがある。今は義輝のほろぶる時節となつた。そち達は奧へまゐつて、最期の支度いたせ。

小侍從　今にも謀叛人が寄せてまゐらば、及ばずながら我我も……。

義輝　いや、いや、義輝が最後のいくさに女子どもの加勢は頼まぬ。賊のやうな奴ばらの眼に觸れて、由なき恥辱を受けぬうちに、そち達は奧へゆけ。早う行け。

一同　はあ。

（小侍從をはじめ侍女四人は奥に入る。蛙の聲きこゆ。）

義輝　蛙めが又鳴くわ。この上は鳴きたいだけ勝手になけ。思へばそちたちは仕合者ぢや。この館にすむ人間は、今宵の中にほろび盡して、夏草しげる空屋敷のうちは、そち達が自由な住家となるのぢや。

（義輝さびしく笑ふ。下の方の木かげより池田丹後、槍を構へてうかゞひ出づ。義輝屹と見かへる。）

義輝　誰ぢや。

丹後　名乘ればとて御存じのないものでござる。

義輝　扨はおのれも謀叛人な。

丹後　お身様の御首級を頂戴にまゐつた。

義輝　下郎め、推參……。退れ。すされ。

丹後　はゝ、下郎も上臈も、こゝまでせり迫めたら一人とひとりぢや。おのれの力を恃むよりほかはござらぬ。いざ尋常に御覺悟あれ。

義輝　えゝ、義輝に鬪ふほどの力がないと思ふか。おのれ等の五人三人、瞬くひまに斬つて捨てるわ。

丹後　御手並拜見――。

義輝　まゐれ。

丹後　御免。

（丹後は槍を把つて突いてかゝる。義輝は太刀をぬきて鬪ふ。双方飛鳥のごとく飛びちがへて働けども、勝負は容易に決せず。二人は鬪ひつゝ縁にあがり、打物をすてゝ組討となり、丹後は押されてうしろの襖を倒しつゝ、折かさなつて轉びしが、更に跳ねかへして今度は義輝をくみ伏せる。そのはずみに次の襖を押破り、ふすまの骨にて丹後は兩眼を傷つく。しかも押へたる手をゆるめず、義輝を膝下に敷きたるまゝ、短刀をぬいてその胸を刺す。義輝斃る。丹後はほッと息をつき、鎧の引合せより紙を取出して、兩眼より溢るゝ血をぬぐへども、血は流れやまず、這ひ起きんとしてつまづき倒る。）

丹後　おゝ、この眼が……。あたりが俄に闇となつた。見えぬ……見えぬ……右も左もみえぬ……。おゝ、おゝ。（探りながら起たんとして又倒る。）それにしても大事の證據ぢや。將軍の首を……。

（這ひまはりて義輝の死骸をさぐり求む。雨の音きこゆ。若槻主水助、下の方より走り出でこの體を見ておどろく。）

主水助　丹後でないか。

丹後　（耳をかたむけて）主水助か。

主水助　して、將軍は……。

丹後　丹後がみごとに仕留めたわ。

（主水助いよ〳〵おどろきて緣に駈けあがる。）

主水助　えゝ、無念ぢや。お身に先を越されたか。（云ひつゝ丹後の顏を透しみる）お身の顏にはおびたゞしい血が……。向疵でも負うたのか。

丹後　相手と引組んで倒るゝはずみに、襖の骨で左右の眼を突き破つたのぢや。

主水助　むゝ、では、俄に盲目となつたか。

丹後　おゝ、俄盲目ぢや。聲は聞けどもお身のすがたは見えぬ。

主水助　それは難儀であらうなう。

（主水助少しく思案す。丹後も思案する。）

丹後　主水、お身に頼みがある。

主水助　なんぢや。

丹後　上帶を解いて、わしの眼をくゝつて吳りやれ。

主水助　むゝ。

（何心なく進みよるを、丹後は矢庭に取つて捻ぢ伏せ、短刀にてその脇腹を突く。主水助は悲鳴をあげて死す。丹後はさびしく打笑ふ。）

丹後　眼を失うたは我が不運。あはせて彼の不運であつた。

（丹後はやがて再び義輝の死骸を探りてその首を擊ち、義輝の衣を裂きて押包み、小脇にかゝへて四邊を探りまはれば、落ちたる槍が手さきに觸る。丹後はこれを杖にして探りながら歩み出でんとし、よろめきながら緣を降りゆく。雨の音烈し。）

――幕――

第三幕

淀川堤の中腹。舞臺の正面は少しくあとへ下げて小高き堤をつくり、花道の方よりのぼるべき通路あり。堤には柳の立木つらなりて、そのうしろには淀川の流れを見る。堤の中腹には約三人を容るゝに足るべき小屋ありて三方に荒むしろを垂れたり。小屋のまへは堤下の通路にて、あたりには芒などの秋草おひ茂れり。前の幕とおなじ年の九月の末。

（笛を吹く男、乞食のすがたにて小屋のまへの切株に腰をかけ、餘念もなく笛を吹いてゐる。小屋の莚をあげて、蛇つかひの女が聲をかける。）

女　おい。お前さんもさつきから根好くぴい〳〵吹いてゐるね。子供ぢやあるまいし、好加減にしたらどうだえ。

（男は平氣で吹いてゐる。女はじれつたさうに舌打しながら小屋を出て來る。若き女にて手首には蛇をまいてゐる。）

女　おい、好加減におよしと云ふのに……。さう／＼しいよ。

（男はやう／＼振向く。）

男　でも、これがおいらの商賣だからな。

女　商賣ならば往來のあるところへ行つてお吹きな。こんな堤の下で幾ら吹いてゐたつて、上から誰も錢を投つてくれる人はありやしないよ。

男　それもさうだな。けれども、畢竟は道樂からこんな身の上になつたのだから、かうして吹いてゐるうちは、なんだか氣が淸々するよ。

女　つまらない道樂があつたものさねえ。笛が好きならば伶人にでもなればいゝのに、乞食になるとはあんまり道樂が強すぎるねえ。

男　いや、窮屈なことは俺あ嫌ひだ。乞食をして好きな笛をふいてゐる方が氣樂で可い。

女　ところが、この頃はあんまり氣樂でもないよ。先月からあんな變な奴が仲間に這入つて來たので、毎日喧嘩が絕えやあしない。與兵衞のおぢいさんも何だつてあんな奴を引摺り込んで來たんだらうねえ。

男　なんでも元は立派な武士だと云ふぢやあないか。

女　いくら立派な武士でも大名でも、一旦こつちの小屋へ落ちてしまへば、やつぱり同じ仲間ぢやないか。むかしの身分を嵩に被て、武士風を吹かされて堪るものか。あんな奴はどうかして追つ攘つてしまひたいね。

男　追つ攘はうと思つても、あいつはなか／＼出て行きさうもないさ。目は潰れてゐても強情らしい男だからな。

女　育の癖に威張つてゐるから、猶更のこと憎らしいよ。

男　まあ、そんなに懼ることもない。むかうで出て行かなければ、こつちで立去る分のことさ。

女　お前さん、どつちの方へ行くつもりだえ。

男　どつちといふ的もない。この笛を吹きながら、西へでも東へでも勝手にぶら／＼と行くのさ。

女　もしさうなつたら、あたしも一所に連れて行つておくれな。

男　おいらと一所に行く……。

女　さうさ。いくら乞食をしてゐたつて、あたしも若い女だもの。若い男と一緖に暮してゐる方がいゝやね。

男　いや、御免だ。おいらにはこの笛といふ友達がある。お前にはその蛇といふ友達がある。おたがひに分れ／＼になつても寂しいことはないよ。

女　でも、話相手がないぢやないか。

男　話相手なんぞは寧そない方が可い。話相手があればこそ喧嘩相手も出來るのだ。ひとり法師の方が氣樂でいゝね。

女　おまへさんも随分變り者だねえ。

（堤の上より大舘岩千代は忍び姿にて笠をかぶりて出づ。男は又もや笛を吹く。女は蛇の頭をなでてゐる。岩千代は堤を降りて花道へゆきかゝりしが、こなたを見かへりて立戻る。）

岩千代　ちと物がたづねたい。

女　はい、はい。なんの御用でございます。

（男は笛を吹きやめる。）

岩千代　そち達はこの小屋に住む者か。

男　左様でございます。

岩千代　近頃このあたりに盲目の乞食が徘徊いたすとか聞き及んだが、左様かな。

女　盲の乞食ならばこの小屋にも住んでをりますが……。

岩千代　年のころは廿七八、以前は武士で筋骨たくましき男ぢや。

男　（女を見かへる）どうも彼奴らしいぜ。

女　さうだねえ。そのおたづねの盲によく似た男が、こゝの小屋に住んでをります

男　どこの者だか存じませんが、なんでも先月のはじめ頃から、この仲間で古顔の與兵衛といふ老爺さんが引張つて來たのでございます

岩千代　して、今はいづこに居るな。

女　與兵衛老爺さんと一緒に、どこへか物を貰ひに出ましたが、やがて戻つて來るでございませう。

岩千代　夕暮までには戻るであらうな。

女　きつと戻つてまゐりませう。

（岩千代うなづきて懐中より錢を出す。）

岩千代　その男が戻つて來ても、わしの來たことを必ず云ふなよ。よいか。

女　はい、はい。かしこまりました。

（岩千代は錢をなげて遣る。）

女　おありがたうございます。

（岩千代は笠をかたむけて去る。女は落ちたる錢を數へてゐる。）

男　おい、それはお前ひとりで取るのぢやあるまいな。

女　だつて、お禮はあたし一人で云つたんだよ。

男　でも、おいらだつて口を利いたぜ。いくらか分けて呉れてもよからう。

女　うるさいねえ。お前さんに笛さへ吹いてゐりやあ可いと云つたぢやないか。

男　腹が空つちやあ笛も吹けないぜ。

女　ぢやあ、あたしと一緒に行つてくれるかえ。

男　それは些と考へものだ。

女　それ御覧よ。あたしだつて嫌なこつた。

（女は錢をかぞへて懷中に收める。鳥の聲きこゆ。男はぼんやりと空を仰ぐ。）

男　あゝ、渡鳥の聲がきこえる。もうそろ〳〵と寒くなるなあ。

女　だん〳〵冬が來るんだねえ。

男　その蛇がおまへの肌にあたゝめて貰ふ時節が來るんだ。

女　秋も末になると、なんだか心細いねえ。

（水の音さびしくきこゆ。盲目の池田丹後、零落して乞食となりたる體、太刀を背負ひて竹杖をつき、乞食の頭與兵衞に手をひかれつゝ堤の上をあゆみ來る。與兵衞は五十前後の老人なり。）

與兵衞　これ、氣をつけてあるくがいゝぞ。俄盲といふものは兎かくに感が悪いものだ。

丹後　この頃は大分あゆみ馴れたれば、さのみ不自由とも思はぬのぢや。

與兵衞　さういふ口の下から、すぐに躓くではないか。强情ももう好加減にしたがよい。

（云ひつゝ堤を降りて小屋のまへに來る。）

男　喧嘩相手が歸つて來たぜ。

女　ほんたうに見るから癪に障るねえ。

與兵衞　どうだ、けふは貰ひがあつたか。

男　相變らず不景氣でしたよ。

與兵衞　わしはこの男を引張つて、遠い町まで出あるいたお庇で、錢と米とをこれほど貰つて來たぞ。（麻の袋に入れたる錢と米とをみせる。）

女　なるほどおぢいさんは能く稼ぐねえ。お盲さんは仕合者だ。

丹後　わしは眼がみえないでも、稼ぐから收入もある。お前たちは滿足な身體をもちながら、遊んでゐるから錢が取れぬのぢや。

男　もうそろ〳〵と初めたぜ。

女　もし、お盲さん、けふは少し御相談があるんですがね。

丹後　なんぢや。

女　それを第一にあらためて貰ひたいんです。むかしは何であらうとも、今は御同樣の身分ですよ。あたまから人を嚇かすやうな、そんな大風な物言ひは止して貰ひませう。

丹後　わしは武士ぢや。袖乞ひ詞などは些とも知らぬわ。

男　郷に入つては郷にしたがへといふ譬もある。一旦小屋に落ちたからは、これから五分五分のお附合に願ひたいものだ。こゝにゐる者はお前さんの家來ぢやないんだからね。

丹後　武士が乞食を家來にするか。云はずとも知れたこと

ぢや。

女　それからおねがひ申したいのは、おまへさんが背中に背負つてゐる長い物ですがね。この小屋に三人でさへも狹いところへ、このごろお前さんが一人殖えて、おまけに寢るにも起きるにも、その長い物を背負つてゐられちやあ何分邪魔になつて、手も足もゆつくりと伸ばせませんからね。そんなものは捨てるとも賣るとも型を付けてしまつて下さいな。

丹後　なに、この太刀を手放せと申すか。

女　邪魔だから止せと云ふんですよ。

丹後　だまれ。いかに零落いたせばとて、家重代の銘刀を手放してならうか。かさねて申さば免さぬぞ。

女　ぢやあ、その刀で斬る氣かえ。盲のくせに氣の強いことを云ひなさんな。いくら威張つたつてひとり歩きもできない癖に……。ほんたうに憎らしいねえ。もし、お盲さん。おまへさんは自分一人、あたしには斯ういふ味方が附いてゐるんだよ。

（持つたる蛇を丹後の鼻のさきへ突き付ける。丹後はその手を捉へて捻伏せる。）

丹後　おのれ、盲目と侮つて無禮するな。つかみ殺すから覺悟いたせ。

與兵衛　（支へる）あ、これ、手暴なことをしてはならぬ。まあ、待たつしやれ、待たつしやれ（ふたりを引分ける）みち／＼も云うた通り、袖乞仲間にもまたそれ／＼の作法がある。いくら以前が武士だと云つて、こなたのやうに大風にかまへてゐては、仲間の者と折合がつくまい。もう少し素直にしてはどうだな。

丹後　素直にせよとは、あの乞食め等に追從輕薄をいへと申すのか。

男　ちよいと云ふことがあの通りだ。

女　あれだから憎らしいんだよ。自分も乞食の仲間入りをしてゐながら、乞食め等もよく出來た。（男にむかひ）もし、お前さん。もういよ／＼見切るかね。

男　見切つた方がよささうだよ。こんな男と一つ小屋にゐることは眞平だ。

女　おまへさんが行くなら、あたしもお別れだ。

與兵衛　なんだか可怪いな、お前たちは何うすると云ふのだ。

女　おぢいさんには永らく御世話になつたが、こんな變な奴と一緒にゐるのは面白くないから、今日かぎりで立退きますよ。

與兵衛　まあ、まあ、そんなに腹を立つものではない。

男　おいらももう何處かへ行くよ。

與兵衛　みんなが一度に行つてしまつては後がさびしい。

今まで仲よくしてゐたのだ。まあ、大抵のことは我慢しろよ。

女　折角ですが御免を蒙りますよ。あたしはこの蛇さへ持つてゐりやあ、どこへ行つても商賣はできるんですからね。立派に蛇つかひで世が渡れるんですからね。

男　おいらもこの笛が一本あれば、どこの門に立つても、一文や二文の錢は貰へるのだ。

與兵衛　それはさうでもあらうが、そこが我慢といふものだ。

女　堪忍も我慢ももう倦きましたよ。全體、おぢいさんが悪いよ。こんな奴さへ引摺り込まなければ、二人がいつまでも仲好くしてゐられたものを……

男　そんなことを云つたつて仕様がない。おぢいさん、達者でゐなさいよ。

（男はそのまゝ行きかゝる。）

女　さうして。お前さんはどこへ行くの。

男　さつきも云ふ通り、好きな笛をふいて、勝手な所をさまよつて歩くのだ。

（男は笛をふきながら上の方へあゆみ去る。女は小屋の内に入りて、鏡と小さき包を持ちて出づ。）

女　おぢいさん、あたしもお暇申しますよ。

與兵衛　おまへ達は何うしても行つてしまふのか。

女　御縁があつたら又お目にかゝりませうよ。

（女は丹後を憎さげに見かへりつゝ、堤を上りて下の方へあゆみ去る。與兵衛は茫然とあとを見送る。）

與兵衛　ひとりは西へ……一人は東へ……。今朝まで一つ小屋に仲よく住んでゐたものが、夕方にはこの通り分れ分れだ。あいつ等はなにを目的にどこへ行くのだらう。いや、かういふ境涯に馴れた奴は、それからそれへと飛びまはつて、風に吹かれた落葉のやうに、どこまで行つて止まるか、自分にも判らないのだらう。

（與兵衛は獨語。丹後はあたりに耳をかたむける。）

丹後　ふたりの奴共はもう行つたのか。

與兵衛　どこを的とも無しにふら／＼と行つてしまつた。かうなると、あとに殘るのはこなたと私と二人ぎりだ。今夜から些と寂しからうぞ。

丹後　あれらのやうな下賤な徒は、一緒に居らぬ方が結句ましぢや。

與兵衛　二日目にはそのやうなことを云ふから、とかくに人と折合はぬのだ。が、まあそれも仕方が無い。なにしろ日が暮れかゝつて薄ら寒くなつて來たから、ちつと焚火でもしようかな。

丹後　それがよからう。

與兵衛　二人が居なくなると、やれ、やれ、いそがしいぞ。

（與兵衛は小屋のかげより枯枝を持ち來りて、焚火をする。ふたりは火を圍む。）

與兵衛　今まではほかに人も居たので、委しいことも聞かなんだが、かうして差向ひになれば遠慮はない。忘れもせぬ先月のはじめに、こなたがその體裝をして、淀川端にさまようてゐたのを、わしが氣の毒に思つて連れて來て、けふまで一緒に暮してゐるが、立派な太刀を身につけてゐる樣子といひ、物の云樣から起居振舞、以前はさだめて由緒あるお人と見たがあやまりか。差障りが無くばこなたの素性來歷を、話して聞かしてはくださらぬか。

丹後　いま立去つた二人とは違うて、こなたは賴もしい親切な男ぢや。わしの身の上をつゝまず話して聞かさう。わしは松永彈正の家來で、池田丹後といふもの。五月十九日、室町御所夜討のみぎり、主人松永にたのまれて公方家を擇み擊にせうと企てたが、相手はきこえし早業の達人、打物をすてゝ組討と相成つた。

與兵衛　おゝ。

丹後　しばしは上になり下になり、やう／＼組み伏せて首を取つたが、襖の骨で眼を傷つけ、その場よりこのやうな盲目となつてしまうた。扨さうなると賴まれぬは人心ぢや。もし公方家を討取らば、わが娘の婿にせうと誓ひし詞を反古にして、主人は我をかへりみず、朋輩も家來もわれを扶けてはくれぬ。無念とは思へども盲目の悲しさ、われに十分の道理あれども訴ふるに由なく、世にも人にも捨てられて、遂にいまの身の上と相成つた。これも公方家を討つたる天罰などと、愚な奴等はいふであらう。（苦笑ひする。）

與兵衛　では、この五月に公方樣を討つたのは、こなたの仕業でござつたか。

丹後　あのみぎりに第一の功名をあげたは、この池田丹後ぢや。

與兵衛　なるほど功名には相違あるまいが、人もあらうに公方樣を手にかくるとは、こなたも大それた事をさつしやれたなう。その罰で眼が潰れたとは、こりや然うなうてはならぬ事だ。天罰のおそろしいと云ふことを、こなたも思ひ當つたでござらうな。

丹後　はゝ、なにが天罰……。世間では公方家を尊い者のやうに云ひなすが、足利の先祖尊氏もおなじく謀叛人ではないか。わしは不運で眼が潰れたればこそ、謀叛人の天罰のと人に爪彈きせらるゝが、もし滿足なからだであつたら、今ごろは松永の姫を妻として、あつぱれ果報者よと人に羨まるゝであらう。丹後が斯樣におちぶれたは天罰でもない、謀叛のためでもない。主人がわれを詐つたからぢや、朋輩や家來がわれを見捨てたからぢや。不

正、不義、不實の徒が多いからぢや。（空を睨んで罵るごとくに云ふ）

與兵衛　さう云へばそれも一理窟ぢやが……。まあ、今更それを云うても返らぬ。何事も運だとあきらめて、人を恨まず世を呪はず、心を平に持たれたがよいぞ。して、こなたが婿になるといふ相手の姫とやらは、その後どうさつしやれたな。

丹後　その女は……。どうして居るのやら一向に知らぬ。名は多門といひ、容貌は萬人にすぐれ、洛中にもならびなき美人であつたが……。（嘆息して）あゝ、この眼が見ゆればなう。

與兵衛　その女子には、こなたもよく／＼心殘りとみえるな。

丹後　諸人の嫌ふ役目を引受け、公方家を討取つて、命がけの働きしたも……この眼を失うたも……かの女子を得たいがためばかりぢや。心が殘るも無理ではあるまい。あの美しい姫の顏は、見えぬ眼にもあり／＼と映つてゐるわ。秋風のさむい小屋のうちで、夜露にぬれつゝ眠る間も、姫のすがたを夢に見るのぢや。

與兵衛　それはよく／＼の執心と見ゆる。その多門とかいふ姫がなかつたら、こなたも武士を捨てまいものを……いや、こなたばかりで無い。戀のために身をすてた男はむかしから數々ある。まあ、聽かつしやれ。なんでも遠い昔のことださうだが、この淀川べりに若い男と女が住んでゐた。男は女に懸想して、いろ／＼に心を碎いて云ひよると、女もしまひに根負がして、そんなら今夜この堤の下で逢はうと約束したので、男は日のくれるのを待兼ねて、約束の場所へ行つて待つてゐたが、女は更に姿をみせぬ。それは霜の寒い晩であつた。男は凍えるばかりの寒さを堪へて、今か／＼と待ち暮してゐるうちに、たうとう夜が明けてしまつたが、女のあし音もきこえなかつた。そこで男は女の薄情を恨むのあまりに、川へ身をなげて死んでしまつたといふ。その片思ひが今も殘つてゐるとみえて、そこの岸に年々生える芦は、決して兩方に葉が出ないのも不思議ではないか。

丹後　片葉の芦とか歌によむのはそれでござるか。

與兵衛　それからその芦を片葉の芦といひ、その岸に近いところを片葉の芦の淵とも云ふのだ。こなたもその女子のことばかり思ひつめて、片葉の芦になつては詰らぬ。もう／＼緣のないものと諦めたがよからうぞ。

丹後　あきらめらるゝ戀であらうか。

與兵衛　と云つて諦めるよりほかはあるまい。こなたは氣の強いくせに諦めの悪い男だなう。

（焚火やうやく消ゆ。水の音きこゆ。）

與兵衛　おゝ、話に夢中になつてゐるうちに、焚火もいつか消えかゝつた。秋も末になつたので、日が暮れかゝるとだん／＼寒くなつてくる。こりや焚火ぐらゐでは追付くまい。酒でも飲んで腹のなかから温めねば、とても今夜は凌がれぬぞ。かういふ時に蛇つかひの女がゐると使にやるには重寶だが……。まあ、可いわ。わしが一走り行つて買つて來ようか。

（與兵衛は小屋の內に入りて、瓢を持ち來る。）

與兵衛　わしは隣村まで酒をかひに行くほどに、焚火を斷やさぬやうにして待つてゐさつしやれ。

丹後　御苦勞でござるな。

（與兵衛は瓢を持ちて上の方へいそぎ去る。丹後は探りながら枯枝を焚火にくべる。水の音さびしく、入相の鐘きこゆ。）

丹後　おゝ、鐘が鳴る。秋の日もやがて傾くとみゆるな。五月十九日、松永の屋敷で勢揃ひをした時にも、おなじく入相の鐘を聞いた。あの時には……おゝ、あの時には……。首尾よく公方家をうち取つたら、日頃の望みも叶ふことゝ、胸は躍つて血は湧いて、手のとゞかぬ大空の月を掴んだやうに、よろこび勇んで日の暮れるのを待つたが……。その折に聞いた鐘の音は、天上の音樂のやうにもきこえたが……。つかんだと思うたのは矢はり水の月で、手にも止らず砕けてしまうた。この兩の眼が潰れると共に、夜も晝も一切暗、おなじ鐘の音でも、聞く人の心によつて響きが違ふとはよく云うたものぢや、丹後がいま聞く入相の鐘は、地獄の迎ひのやうにも聞ゆる。（嘆息して）いや、地獄と云へば、ゆうべは我手にかけた公方家が、地獄の鬼となつて枕もとにあらはれた夢をみた。生きてゐるうちさへも恐れぬ將軍が、死んだ後に何怖からう。（あざ笑ふ）おのれ、睨み返して呉れうとよく視ると鬼の顏は忽ち多門の美しい女の顏とかはつた。夢は不思議なものぢやなう。

（丹後はさびしく笑ひつゝ、焚火に枝をくべてゐる。船唄の聲遠くきこゆ。）

唄〽淀の川舟逢うては別れ、上り下りでまゝならぬ。

丹後　淀を下る船唄が風に送られて遠くきこゆるわ。淀の川舟逢うては別れ、のぼり下りでまゝならぬ。哀れを知らぬ船頭共も、優しい戀を唄うてゐるわ。

（船唄の聲又きこゆ。）

唄〽ぬしとわたしは片葉の芦よ、ふたり連れ添ふ時はない。

（堤の上より松永の娘多門を白木の舁輿にのせて、家來二人がこれを舁き、伊賀七郎が先に立ち、侍女二人と家來數人が附添ひて出づ。）

多門　七郎、日脚もいかう詰つたなう。

七郎　あきの日は釣瓶落しと昔から申すに嘘はございませぬ。急ぐとすれど、もはや暮近く相成りました。

多門　淀の渡を越えるときに、入相の鐘を聞いたやうであつたが、京ももう眼の前ぢや、さのみ急ぐにも及ぶまい。蟲の音を聞きながら野路をゆくも風流であらうぞ。

七郎　人家のある所までまゐりましたら、松明の用意をいたさせませう。

（主從は語りながら堤をおりかゝる。丹後はその聲に耳を傾けゐたりしが、今や主從が堤を降りたる時、俄に聲をかける。）

丹後　あいや、率爾ながらおたづね申す。唯今そこを通るのは、松永の娘多門でないか。

七郎　いかにもさうぢや。

丹後　おゝ、多門か。

（丹後は焚火のそばを離れて少しく這ひ寄る。）

七郎　えゝ、袖乞どもの分際で、松永殿の御息女を呼び捨てにするとは無禮な奴め。物がほしくば土に頭をさげて御慈悲をねがへ。

丹後　呼び捨てにしても苦しからぬ筋あればこそ、多門と呼んだがなんとした。夫が妻の名を呼ぶに不思議があらうか。

七郎　なんと申す。（不審ながらに透しみる）御息女に對して、夫の妻のと……。おのれは氣でも狂うたのか。かされて無禮を申さば捨置かぬぞ。

丹後　さう云ふ聲は伊賀七郎か。主の威勢を嵩にきて、相も變らず強いことぢやな。

七郎　や、われを七郎と知つたるは……。おのれは何者ぢや。

丹後　半年逢はぬ間にもう忘れたか。池田丹後の面をみい。

七郎　なに、池田……丹後ぢやと……。

（七郎はおどろきて立寄り、焚火の火かげに丹後の顏をうかゞひ視る。）

七郎　なにさまお身は池田丹後ぢや。さりとは思ひも寄らぬこの姿は……。

丹後　この姿には誰がした。池田丹後ともあるべき武士を、袖乞には誰がした。松永彈正といふ日本一のいつはり者と、お身達のやうな不人情者とが寄合うて、われを奈落の底へ突き落したのぢや。

（丹後は怒つて罵る。多門は左右を見かへる。）

多門　輿を卸しや。
家來　はつ、
(家來は輿を舁きおろす。多門は徐かに輿を出でて、丹後のそばへ進み寄る。)
多門　丹後、久しう逢はぬ。妾は多門ぢや。
丹後　おゝ、多門……。
(丹後は俄に笑をふくみて、這ひ寄りつゝその袂を捉る。七郎おどろきて遮らんとするを、多門は眼で制す。)
多門　(詞しづかに) 人家に遠き淀川堤、ほかに聞く耳がなければとて、故主や朋輩の惡口は些と嗜んだがよからうぞ。恨みがあらば妾にいへ。父上や七郎を恨むは筋ちがひぢや。
丹後　勿論、お身にも恨はある。とは云へ、娘の多門を丹後の妻にくれうと、約束したは父の彈正ぢや。又その約束を破つたも父の彈正ぢや。
多門　親といひ、子と云うても、人の心はみな別々ぢや。父上のおぼしめしは妾の知らぬこと。妾にはまた妾の心がある。
丹後　お身もその場に居合はせながら、その約束を知らぬと云ふか。知つても不承知と云はるゝか。
多門　いや、知らぬとは云はぬ。不承知とも云はぬ。日ごろは一廉の勇士顏する者共も、素破といふ時には公方家の威光に恐れて、みな逡巡をするなかに、われから名乘つて出た岩槻主水と池田丹後のふたりは、男のなかの男ぞと、わらはも頼もしう思うてゐました。
丹後　その丹後は約束を違へず、みごとに將軍の首を取つたぞ。
多門　將軍を討つたは手柄ぢやが、味方の主水助をなぜ殺した。
丹後　主水助は味方でない。われに取つてはおなじく敵ぢや。お身と彼とが戀してゐることは、丹後はかねて存じてをる。その主水めを生けて置いては邪魔になる。
多門　その心根が惜いので、妾はそちを見限つたのぢや。盲目になつた心の僻みから、味方を不意撃にした卑怯者……。
丹後　なに、丹後が卑怯者ぢやと……。
多門　(聲するどく) おゝ、卑怯ぢや、卑怯ぢや。公方家をうち取つて見事に功を立てたなら、はじめの約束を楯にして、なぜ男らしう妾をうけ取らぬ。さうなつたら逃れぬ義理で、妾も戀を捨てまいものでもないが、罪もない味方を先に殺しておく卑怯者。それが武士のすることか。そのやうな卑しい根性で、多門を妻に持たれうか。約束を破つたはそちの

罪ぢや。自業自得といふものぢや。

（丹後は黙して聴きゐる。）

多門　これほど云うて聞かしたら、そちにも得心がまゐつたであらう。おのれの罪をかへりみて、人を恨むな、世を恨むな。けふは男山の八幡宮へ参詣して、日くれて京へ帰る途中、こゝで逢うたは勿怪の幸ひぢや。これだけ云うたらほかに用はない。（袂を拂ひて）乗物これへ……。

家来　はつ。

（家来は輿を持ち来る。多門は乗らうとするを、丹後はあわてゝ遮る。）

丹後　いや、それは理を非にまげて、鷺を烏と云ひくろむる逃口上ぢや。丹後には丹後の云ひ分がある。たとひ味方を殺さうとも、約束は約束で反古にはならぬぞ。お身は飽までも丹後の妻ぢや。この小屋がお身の住家で、ほかに帰るべき家はないぞ。

七郎　えゝ、邪魔するな。退け、のけ。

（丹後をつき退けて多門を輿にのせる。）

丹後　（叫ぶ）多門。待て。夫を捨てゝいづこへゆく。多門……多門……。

（丹後は行かんとするを、家来等は支へる。多門は輿に乗つて下の方へゆく。丹後は探りながら又追はんとするを、七郎等はおさへ付ける。）

七郎　なにか引縛るものはないか。

（多門はくれなゐの細紐を解き、無言にて投げあたへる。七郎は細紐を取り、暴れ狂ふ丹後を大勢にて引つくゝる。）

七郎　人の目に觸れぬやうに、その小屋のなかへ投げ込んで置け。

家来　はつ。

（家来等は丹後をとらへて無理に小屋のなかへ押込み、外より筵をおろす。）

七郎　思ひもよらぬ奴に行き逢うて、大きに時刻を移しました。

（多門は七郎を招きてさゝやく。七郎うなづく。）

七郎　然らば途中より取つて返して……。

（多門うなづく。）

七郎　はつ。

（七郎は矢はり先に立ち、多門をはじめ、侍女家来共も附添ひて去る。上の方の奥にて笛の聲遠くきこゆ。）

（東の花道より大館岩千代出づ。）

岩千代　室町御所にて死ぬべき命を、今日までおめ／＼ながらへしは、亡き上様が修羅の御無念を晴さうためぢや。近頃こゝらに徘徊する盲目の乞食は池田丹後に相違ある

まい。まづ彼奴を討取つて……。むゝ。

（岩千代はあたりを見かへりつゝ、小屋の上の方に忍びよる。）

岩千代　盲目の乞食は戻つたか。

（内には返答なし。岩千代はかさねて呼ぶ。）

岩千代　池田丹後は居らぬか。

丹後（小屋のうちにて叫ぶ）丹後はこれに居る。多門を渡せ、妻をかへせ。

（岩千代うなづきて太刀を抜き、更に左右をうかゞふ。舞臺やうやく暗し。向ふより以前の七郎は一散に駈け来り、これも太刀をぬきて矢庭に小屋のなかへ突き込まんとし、思はず岩千代と顔を見あはせ、たがひに愕然として透しみる。）

七郎　誰ぢや。

岩千代　たれぢや。

（消え殘る焚火の光に、ふたりは再び透しみる。）

岩千代　おゝ。七郎か。

七郎　岩千代か。

（岩千代は物をも云はずに切つてかゝる。七郎も引受けてしばし闘ひしが、遂に敵せずして元來し方へ逃げゆくを、岩千代もつゞいて追うて去る。堤下の上の方より與兵衛はふくべを持ちて出づ。）

與兵衛　左のみ遠い路でもないに、往還りするうちに日がばつたりと暮れてしまつた。年を取ると意氣地がない。（小屋の中をうかゞひて）盲殿や、もう寢てしまつたのか。さあ、酒を買つて來たぞ。一杯飲んでから寢たがよからう。秋の夜はなか〳〵長いわ。（筵をあげておどろく）これ、こなたは何を唸つてゐるのだ。俄に病氣でもおこつたのか。これ、どうさつしやれた。

（與兵衛は細紐にくゝられたる丹後を引き出して、透しながめる。）

與兵衛　や、こなたはくゝられてゐるのか。おゝ、あかい細紐のやうなもので嚴重に縛られてゐるわ。こりや一體どうしたのだ。（云ひつゝ縛られたる細紐を解く）

丹後（呻くやうに）多門はいづれへまゐつた。

與兵衛　多門とは誰ぢや。

丹後　松永の娘、わが妻ぢや。

與兵衛　そんな人はこゝにはゐぬぞ。いや、こんな細紐があるからは、もしや女が來たのかな。

（與兵衛は不審さうに細紐をながめる。丹後は探り寄つてその細紐を奪ひ取る。與兵衛はいよ〳〵呆れる。）

與兵衛　留守のあひだに何があつたのやら、わしには些とも判らぬが、こなたはどうやら様子が可怪いぞ。まあ、落ちついて譯を話さつしやれ。

丹後　松永の娘がこゝへ來た。
與兵衛　松永の息女ともお姫樣ともあらう者が、今頃こんなところへ來るとは合點が行かぬ。こゝらには悪い狐が澤山ゐるから、こなたは化かされたのではないか。
（夜はいよ〳〵暗くなりて、遠き堤のうへに無數の狐火みだれて飛ぶ。）
與兵衛　狐だ、きつねだ。きつと狐の仕業に相違ない。あれ、あの通り、狐火が燃えてゐるわ。
丹後　なに、火が燃ゆる……。
與兵衛　狐火が行列して通るのだ。
丹後　行列は誰の行列か。
與兵衛　いや、きつねの行列だ。
丹後　おゝ、公方家の行列か。公方が行列を揃へてどこへゆく。この丹後を征伐にまゐつたか。
（背負ひし太刀をぬきて起ち上る。）
與兵衛　あ、これ、どうさつしやれた。
丹後　なんの、將軍……。なんの、羅刹……。阿修羅の眷族一度に押寄せて來るとも、これを恐るゝ丹後と思ふか。
（丹後は太刀を振りかざして空を切る。狐火しきりに燃ゆ。）
丹後　おゝ、主水か。なんの、おのれが……。（又もや太刀を振つてあたりを切る）

與兵衛　これ、これ、あぶない。待たつしやれと云ふに……。
（丹後は更に上の方にむかつて、叫ぶ。）
丹後　や、多門か。おゝ、多門……。わしも一緒にゆくぞ多門……。待て、待て。
（丹後は片手に鋼縄を持ち、かた手に太刀を持ちて、迷ふが如くにふら〳〵と行く。與兵衛いよ〳〵驚きて支へんとするを、丹後は太刀の柄にて突退くれば與兵衛は倒れる。）
丹後　多門……おゝ、多門……。
（丹後は上の方へよろめきながら迷ひゆく。向ふより岩千代は再び引返して走り出で、小屋のまへに來りて與兵衛につまづく與兵衛はその足に縋る。）
與兵衛　まあ、待たつしやれ。
岩千代　えゝ、邪魔するな。（與兵衛を蹴放す）
與兵衛　（心づく）や、丹後どのでは無かつたか。
岩千代　その丹後はいづれへまゐつた。
與兵衛　さあ、今までこゝに居りましたが、なにか判らぬことを云ひながら、狐に化かされたやうにうろ〳〵と……。
岩千代　むゝ。して、如何いたした。
（この時、上の方の奥にて水の音きこゆ。）

岩千代　や、あの水音は……。
與兵衛　盲の癖に駈けあるいて、もしや川へでも陷つたか。
岩千代　兎にかく實否を見とゞけねばならぬ。案内いたせ。
與兵衛　はつ。
　（二人は行かんとする時、上の方より以前の笛をふく男出づ。）
男　これ、盲の乞食が川へおちたぞ。
與兵衛　なに、盲が川へ落ちた……。
男　おいらがあすこの岸で笛を吹いてゐると、あの盲がうろうろと迷つて來て……。
岩千代　して、自殺か過失か。
男　そこはなんとも判りませんが、あすこは片葉の芦の淵と云つて、昔からよく人の死ぬところだと聞いてをります。
與兵衛　むゝ、あれもやつぱり片葉の芦だなあ。（歎息する）
　（岩千代は殘念さうに川の方を見かへる。月出づ。男は月を仰ぎて笛を吹く。水の音さびしくきこゆ。）

――幕――

相馬の金さん（三幕六場）

登場人物

徳川の御家人　相馬金次郎
金次郎の弟　半三郎
おなじく御家人石澤寅之助
伊勢屋千右衛門
伊勢屋の番頭　長兵衛
おなじく若い者　富八
久七
常磐津文字若
文字若の母　おとく
稽古の娘　およし
ほかに職人。長屋の女房。子供。料理茶屋の女中。料理番、青山の僧。上野の僧。農家の娘。子供。質屋の小僧。燈籠賣。町家の女房。娘。女中。若い者。小僧。車力。荷持の男。中間。官軍の兵士など。

第一幕

一

江戸の末期。慶應三年、七月初旬の午後。
神田明神下の質屋、伊勢屋の店先。正面の上のかたは戸棚。まん中は奥への出入り口。下のかたの壁には質帳を澤山にかけてあり。店の上の方には土藏の白壁。下のかたには格子戸。店の外は忍び返しの附きたる板塀にて、木戸あり、用水桶あり。表は往來の體にて、町家つゞきと知るべし。
（店の帳場格子の中には番頭長兵衛が帳面を繰つてゐる。若い者富八は帳面を前にして十露盤を彈いてゐる。職人岩吉は店の上のかたに腰をかけて煙草をのんでゐる。下のかたには長屋の女房おくまが赤兒を背負ひ、小さい女の兒を連れて腰をかけ、若い者久七を口說いてゐる。塀の外には小僧が水をまいてゐる。角兵衞獅子の太鼓の音きこゆ。）
おくま　ねえ、お前さん。後生だから、もう一度よく見て、百五十ばかり附けてお與んなさいよ。（女の帶を突き付ける）
久七　（帶をひろげて見る）幾度見ても同じことで、四百

と云つたら關の山で、その上は文久一つも附けられませんよ。

おくま　文久一つも附けられない。（呆れたやうに）　お前さんも若いくせに隨分邪慳な人だねえ。まあ、おとなしく云ふことを肯いてくださいよ。不斷の月とは違ふんですからさ。

久七　盆でも暮でも、こんなに耳の切れた帶で五百も六百も貸せるものですか。そりやおかみさんが無理ですよ。

おくま　なに、あたしが無理をいふものか。お前さんの方がよつぽど無理だよ。

久七　いゝえ、おかみさんが無理ですよ。

おくま　いゝえ、おまへの方が無理だ、無理だ。（泣聲になる）女だと思つて馬鹿にするんだよ。

女の兒　おつかあ、もう歸らうよ。

おくま　どうして歸れるものか。今こゝに大事の用があるんだよ。

女の兒　歸らうよう。（泣く）

おくま　えゝ、強情な餓鬼だねえ。（女の兒のあたまをびしやりと撲つ）

（女の兒はわつと泣き出す。背中の赤兒も火の付くやうに泣き出す。）

おくま　どいつもうるさいねえ。

（おくまは起つて赤兒をいぶり付ける。赤兒はいよいよ泣く。女の兒も泣く。よき頃に水をまき終りて、小僧は木戸に入る。）

岩吉　いや、どうも大變だな。この暑いのにぎやあ〳〵泣き立てられちやあ、そばにゐる者までが逆上せあがつてしまふぜ。おい、久さん。なんとかして遣らねえか。

久七　だつて、お前さん。こんな帶で五百も六百も貸せるわけが無いぢやありませんか。

おくま　こんな帶といふけれども、このお正月に一分二朱で買つたんだよ。

久七　冗談云つちやあいけません、こんな帶が一分二朱で……。

おくま　二日目にはこんな帶、こんな帶と、あんまり馬鹿におしでないよ。

女の兒　（又泣く）　おつかあ、歸らうよう。

おくま　又泣きやあがる。（再び撲つ）

長兵衛　（見かねて）　どうも困るな。（帳場から出る）　まあ、おかみさん。靜にしてください。これ、久七。おかみさんが折角あゝ云つて口說きなさるのだ。もう百も附けてあげるがよからう。

久七　ぢやあ、おかみさん。きつちり五百といふところで我慢してください。

おくま　（舌打ちして）仕様がないねえ。ぢやあ、まあ、それで我慢して歸りませうよ。
長兵衛　（帳場から緡の錢を持つて來る）さあ、これが一本、ほかに百ありますよ。
（長兵衛は四百文の緡のほかに、廿文十五文などの錢を取りまぜて渡せば、おくまは數へて受取る。）
女の兒　歸らうよう。（泣く）
おくま　あゝ、歸るよ、歸るよ。なんといふ泣蟲だらう。皆さんどうもおやかましうございました。
（背中の赤兒は又泣く。おくまはそれないぶりながら、女の兒をつれて下の方へ立去る。）
岩吉　やれ、やれ、これで世の中がおだやかになつた。
長兵衛　子供や赤ん坊や、色々の責め道具で嚇かされちやあ全くこつちが降參してしまひますよ。
岩吉　それぢやあ、おれもこれから責め道具を用意して來るかな。そこで、富さん。おいらの方はどうだね。
富八　岩さんの利分は二朱と六十四文になります。
岩吉　二朱と六十四文……。めつぽう高いぜ。間違つてゐやあしねえかえ。
富八　二度も彈いてみたのですから大丈夫です。
岩吉　六十四文なんていふ端下は面倒だ。それ、二朱置いて行くぜ。
富八　あとは此次に頂きます。
岩吉　それはまあ其時のことだ。なにしろ利上げをしたのだから流しちやあいけねえよ。
長兵衛　わたしも承知してゐますから、決して流すやうなことは致しません。
久七　岩さん景氣がいゝとみえますね。
岩吉　景氣が好ければ受けに來るが、泣きの涙で利上げをして、やう〳〵流れを扼ひ止める始末だ。
長兵衛　横濱へ仕事に行つて、大層儲けなすつたといふぢやありませんか。
岩吉　横濱へ行きやあ金でも轉がつてゐるやうに云ふが、さて蹈み出してみると噂の半分にも行かねえ。往きと復りの路用を差引くと、江戸で稼ぐのも大した違ひはねえのさ。ぢやあ、番頭さん、頼んだぜ。
長兵衛　はい、はい。
（岩吉は下のかたへ去る。）
富八　あんなことを云つてゐるが、岩さんも横濱へ行つて隨分かせいで來たさうだ。
長兵衛　稼ぐには稼いだらうが、あの人のことだから神奈川あたりでみんな吐き出して來たらうよ。それでも利あげに來ただけが見つけものだ。
（長兵衛は笑ひながら帳場に戻る。下の方より盆の燈

籠の荷をかつぎたる商人出づ。）
燈籠屋　燈籠や、燈籠……（呼びながら向ふへ立去る）
久七（表をみる）あゝ、燈籠を賣りに來た。お盆ももう目の前だな。
富八　盆前にしちやあ不思議なくらゐに商賣が暇だぜ。
久七　それもやつぱり不景氣のせゐだ。なにしろ世間がさうざうしいからね。
長兵衛　世間のさう〳〵しいのが何より困る。かういふ物騷な時節には、こゝらの家なぞは猶さら氣をつけなければならない。日が暮れたら大戸をしつかり卸して、商賣を休んでしまへ。
富八　このごろは斬取りや押込みが無暗に流行るといふから、まつたく險呑でならない。
久七　番頭さんのいふ通り、かういふときには質屋なんぞが一番先に眼をつけられるから氣味が惡い。
長兵衛　商賣がひまな上に、押込みや押借りにお見舞ひ申されては泣つ面に蜂だ。くれ〴〵も用心しなければならないぜ。
二人　あい、あい。
（向ふより相馬金次郎、廿七八歲、道樂肌の御家人にて、風呂敷につゝみたる刀箱をかゝへて出づ。）
金次郎（格子をあける）どうだ、番公。べらぼうに暑いな。
（長兵衛等三人は金次郎の顏を見てうんざりする。金次郎はずつと這入りて店さきに腰をかける。）
富八（よんどころなく）これは相馬の旦那樣、いらつしやいまし。
金次郎（笑ふ）こゝの家で正直に相馬の旦那樣と云つてくれるのはお前ばかりだ。あとの奴等はみんな相馬の金さんと云つて、人を友達扱ひにしてゐやあがる。おい、番公。忌に他人らしく顏を背けるなよ。お友達の金さんが來たぢやあねえか。
長兵衛（帳場を出る）これは金さん。どうも嚴しい殘暑でございます。
金次郎　世のなかに連れて、陽氣もなんだか番狂はせになつて來やあがつた。六月は馬鹿に冷々して袷を着るやうな始末だつたが、七月になつてから殘暑が滅法界にひどくなつて、この二三日はまるで釜うでだ。おまへ達はよく無事に生きてゐるな。石川五右衛門よりよつぽど强いぞ。あゝ、暑い、あつい。（扇を使つてゐる）
長兵衛（奥にむかつて）小僧や、お茶を持つて來な。
小僧（奥にて）あい、あい。
長兵衛　この暑いのにどこへお出かけでございました。
金次郎　おまへ達も知つてゐる通り、おれの先祖は相馬小

次郎將門だから、月に一度はかならず神田明神へ參詣に來る。けふも明神へ參詣して、型のごとくに武運長久をお祈り申した上で、それからこつちへ出かけて來たのだ。

長兵衞　あなたの御先祖が將門樣といふことは豫てうけたまはつて居りますが、よく毎月かゝさずに御參詣をなさいますね。

金次郎　先祖の將門は神に祭られてゐるが、その子孫の相馬の金さんは百俵取りの貧乏御家人だ。あんまり格式が違ひ過ぎるので、先祖に對しても申譯のない次第だが、なんと云つても先祖は先祖だ。月に一度ぐらゐはお參りをして置かなければ、人間の義理が濟むめえぢやねえか。(富八と久七を見かへる)やい、やい。おれが將門を云ふと、いつでも笑やあがる。うそだと思ふならおれの家へ來て、系圖の一卷をしらべてみろ。

(奧より小僧は茶を汲んで出づ。)

小僧　お茶をおあがりなさいまし。

金次郎　(小僧に)どうだ、此頃は少しは白雲が癒つたか。用がなければ表へ出て、もつと水でもまけ。幾らか涼しくなるだらう。

小僧　水はもう撒きました。

金次郎　骨惜みをするなよ。もう一度、撒け、撒け。

小僧　あい、あい。(奧に入る)

金次郎　ことしは本祭の筈だが、神田は景氣よく出來さうかえ。

富八　ことしは御神輿が渡るだけで、なんにも催しはないと云ふことでございます。

金次郎　本祭に山車も踊家臺も出さねえのか。神田つ子も意氣地がねえな。

久七　御時節柄で御遠慮申すのださうでございます。

長兵衞　御承知の通り、一昨年の本祭に山車や踊家臺をひき出してお叱りを受けましたので、ことしは一切遠慮といふことになりました。

金次郎　ちげえねえ。公方樣上洛のお留守中にどんちやん騷ぎ立てたといふので、一昨年はひどく叱られたつけな。今年も叱られる積りで威勢よく遣ればいゝのに……。それだから意氣地がねえといふのだ。いや、神田つ子ばかりぢやあねえ、一體に江戸つ子と云ふものゝ意氣地が無くなつた。なあ、番公。さうぢやあねえか。

長兵衞　へえ。

金次郎　だが、おれはおめへは大好きだよ。

長兵衞　(烟にまかれて)へえ。

金次郎　おめへの名は長兵衞といふぢやあねえか。長兵衞はいゝな。いかにも江戸つ子らしい名前だぜ。おれは實に嬉しくつてならねえ。

長兵衛　まことに有難うございますと申したいのですが、金さんにあんまり油をかけられると、いつでもあとが怖ろしうございますからね。

金次郎　なにも怖がることはねえ。長兵衛は長兵衛らしくすればいいのだ

長兵衛　いや、その長兵衛といふ名は親が附けましたので……。

金次郎　親が附けても公方様が附けても、長兵衛は長兵衛だ。そこで、長兵衛さん。この權八が些つと折入つて頼みがあるから、一番大親分の氣前をみせて吳れねえか。

長兵衛　大方そんなことだらうと思ひました。

（長兵衛は他の二人と顏をみあはせて、いよ〳〵うんざりする。）

金次郎　（笑ひながら）と云つて、別にむづかしいことを頼むわけでもねえ。貧乏の方ぢやあ金箔附きの金さんも、この盆前はどうにも斯うにも凌ぎが付かねえ。なにぶん義理のわるい借金があるので、うか〳〵してゐると御身分にかゝはると云ふ一大事だ。くどいことは云はねえから、ぐつと一番吞み込んで、長兵衛をおたのみ申すよ。

長兵衛　（迷惑さうに）申すまでもなく、あなたのお屋敷は青山でございますから、御近所にお顏なじみの同商賣も澤山ございませうに、兎角わたくし共の店へ來て、なにか御無理をおつしやるのは……。

金次郎　はゝ、野暮をいふなよ。近所で用が足りるくらゐなら、この暑いのに重い物をかゝへてわざ〳〵こゝまで繰出して來やあしねえ。近所の麻布や赤坂ではあんまり顏が賣れ過ぎて、金さんの睨みも利かなくなつたから、そこでおめへを口說きに來たのだ。いつもながら無理ばかり云つて濟まねえが、けふばかりは眞劍におれの話をきいて貰ひたいな。

長兵衛　では、まあ、折角でございますから、どんなお話か伺ふだけは伺つてみようぢやございませんか。

金次郎　さう來なければ長兵衛ぢやあねえ。（風呂敷をあけて箱を出す）けふ持つて來たのはこの一品だ。

長兵衛　（のぞく）お腰の物でございますか。

金次郎　むゝ。刀には相違ねえが。おれたちが腰にさしてゐるやうなガタ光ぢやあねえ。由來を話せば長くなるが、おれの家に先祖の將門から傳はつてゐる北辰丸といふ名刀は卽ちこれだ。これは相馬の家の當主が家督を相續したときに、家例として中身を一度あらためてみる。併しわが物とは云ひながら、一代に二度とは見ないことに決まつてゐるので、おれも十年前に一度見たきりだ。さういふ因緣つきの寶物だから、今までどんなに困つたことがあつても、身に替へ、家にかへて大切にしまつて置い

て、お前のところは勿論、どこの質屋の暖簾もまだ潜らせたことはなかつたが、今もいふ通り、今度といふ今度ばかりはどうにも仕様のない瀬戸際にせりつめたので、思ひ切つて抱へ出して來たといふわけだ。そこを察して、たんとの無心ぢやあねえ。十兩ばかり用立てゝ呉れゝばいゝのだ。

長兵衛　あの、十兩でございますか。

金次郎　十兩でいゝのだ。ほかの品とは違つて、家重代の寶物だから、なんぼおれのやうな人間でも、こればかりは決して流すやうなことはしねえ。そんなことをしたら相馬の家にも瑕が付くことだ。遲くも一月ばかりのうちには屹と受出しに來るから、どうかそれまでの所を融通してくれ。それも大金ぢやあねえ、指一本でいゝのだ。これだ、これだ。（指をみせる

長兵衛　どう致しまして、指一本とおつしやるが、十兩と申せば大金でございます。どんなお品か兎も角も拜見をいたした上で……。

（長兵衛は刀箱に手をかけようとするを、金次郎はあわてゝ遮る。）

金次郎　いや、いけねえ、いけねえ。むやみに箱を明けられちやあ大變だ。

長兵衛　なにが大變でございます。

金次郎　それには少し譯があるのだ。おれがこれほどに頼むのだから、中身を見ねえで此のまゝに受取つて貰ひたいな。

長兵衛　それはいよ／＼御無理といふもので……。手前共も商賣のことでございますから、お品を拜見いたした上ならば相當の御相談も致しますが、いくら大切な御寶物でも、中身をなんにも拜見いたしませずに、たとひ一分でも御用立て申しますのは、質屋の法に缺けたことで、わたくし共が主人に叱られます。

金次郎　それはいかにも尤もだが、そこを偏にお願ひ申すのだ。まあ、なんにも云はずに受取つてくれ。

長兵衛　たとひ何とおつしやつても、品物をあらためずにお貸し申すことは……。

金次郎　どうしても出來ねえと云ふのか。

長兵衛　いくら金さんのお頼みでも、それは堅くお斷り申します。

金次郎　どうも困つたな。それだからおれが手を下げないばかりに頼むのだよ。

富八　もし、相馬の旦那様。番頭が申すのに決して無理はございません。お品を拜見しないで御用立て申すなどと云ふのは、商賣の法に無いことでございます。

久七　さう云ふことは何から何までよく御承知でありなが

ら、けふに限つてなぜそんな御無理をおつしやるのでございます。

金次郎　みんなにさう云はれると、まつたく困る。おれもまんざらの木然人でもねえから、無理は萬々知つてゐるのだが……。こいつはどうも困つたな。

（金次郎はかんがへてゐる。）

長兵衛　たゞ困る困るとおつしやつてゐないで、鳥渡あけて見せて下さるわけには參らないのでせうか。

金次郎　勿論見せればいゝのだが……。どうも困つたな。

長兵衛　わたくし共も商賣柄で、これまでにも方々のお屋敷樣から御大切のお品をおあづかりし申したこともございますが、どちら樣でもみんな其のお品を一度は見せて下さるのに、あなたに限つてどうしても見せないと仰しやると、わたくしの方にも何だか疑ひが起ります。よもやそんな事もございますまいが、萬一その箱のなかに大切のお品が無いと致しますと……。

金次郎　馬鹿をいへ。なんぼおれでもそんな騙りのやうなことをするものか。かうなつたら見せて遣りたいのは山山だが、當主のおれでさへ一代に二度は見ないことになつてゐるのだからな。（又かんがへる）併しさう云つてゐたら果しがねえ。いつそ思ひ切つて明けて見せるかな。（箱に手をかけようとして又躊躇する）いや、いけねえ。どうも惡さうだ。

長兵衛　（笑ふ）金さん。いつまでも焦らしてゐちやあいけません。あなたはいつでも駈引がうまいので、こつちが困つてしまひますよ。

金次郎　けふばかりは駈引も糸瓜もねえ、おれは本氣で云つてゐるのだが、おめへ達には吞み込めねえのかな。ぢやあ仕方がねえ。ほかへ行つて頼んでみるとしようか。

（金次郎は箱を手早く風呂敷につゝんで引抱へ、二足ばかり行きかけて立ちどまる。）

金次郎　これから汗をふきながら、又方々をかけ摺りまはるのも難儀だ。やつぱりこゝの家へ荷をおろすより外はねえ。（引返して再び腰をかける）おい、番公。一生に一度のお願ひだ。なんとか達引いてくれねえか。どうしても肯かれねえのかよ。

長兵衛　どうしても肯かないと云ふわけぢやあございませんが、幾度云つても同じことで、何分にも中身を拜見しませんでは……。

金次郎　それを素直に見せられるくらゐなら、こんなに口を酸つぱくして頼みやあしねえと云ふのに……。

長兵衛　でも、拜見しませんでは……。

金次郎　どうもお前も因業だな。

長兵衛　わたくしよりもあなたが無理でございますよ。

（ふたりは同じことを押合つてゐる内に、下のかたより石澤寅之助、廿五六歳、これも道樂肌の御家人にて出で、内を鳥渡のぞいて用水桶のかげに隱れる。奥より伊勢屋の亭主千右衛門出づる）

千右衛　これは金さん、お若いことでございます。あらましのお話は奥で伺ひましたが、これは番頭が申します通り、お品を拜見いたしませんでは、とても金子を御用立てるといふわけには參りません。併し折角お出でになりましたものを、唯お歸し申すといふのも失禮でございますから、なんとか別に御相談の致し方はございますまいか。

金次郎　これ、御亭主。なんだか忌なことを云ふぢやあねえか。別に御相談の致し方といふのはどういふことだ。痩せても枯れても御家人の相馬金次郎だ。出來ない相談の無理を云つて、一分や二分の煙草錢をいたぶりに來たのぢやあねえぜ。この通り、歴然とした質物を持參して金を借りようといふのだ。

千右衛　では、その歴然とした質物を一應拜見させて頂きたいもので……。

金次郎　又か。（舌打ちして）さつきから諄く云ふ通りのわけで、おれでさへも一代に二度とは見ない大事の寶物だ。まして相馬の家の血筋でない者がむやみに箱をあけてみると、刀は蛇になつてしまふといふ云ひ傳へになつてゐる。

長兵衛　刀が蛇になる……。本當でございますか。

金次郎　それは昔からの云ひ傳へで、ほんたうに蛇になるか、ならないか、おれも確かには知らねえ。併し他人には決して見せるな、他人が見れば蛇になるといふ堅い戒めがある以上は、めつたな事も出來ねえので、おれも實はさつきから澁つてゐたのだ。さあ、これだけの仔細を正直に打ち明けたら、おめへの方でも疑ひを晴らして、この箱のまゝで預かつて呉れてもよからうぢやあねえか。

（金次郎は再び風呂敷をあけて、刀箱を亭主の前に出す。）

千右衛　（笑ふ）人が見たら蛙になれとか云ふことは聞いて居りますが、人が見たら蛇になる……とは少々恐れ入りますね。わたくし共も多年この商賣をいたして居りますが、箱のそとから中身の見透しは出來ません。質物としておあづかり申す以上は、どうしても中身を拜見いたさなければなりません。後日に何かの間違ひがございますと、わたくし共ばかりでなく、あなたの御迷惑にも相成ります。兎もかくも念のために鳥渡覗かせて頂きませんでは……。（箱をひき寄せる）

金次郎　いけねえな。おめえどうしても見たいのかえ。
千右衛　拜見いたしませんでは、何分御相談が出來ません。
（千右衛門は箱に手をかけるを、金次郎はだまつて見てゐる。刀箱はけんどん蓋になつてゐるを、千右衛門は引きあけると、箱の中からは眞黑な蛇が出る。千右衛門もおどろいて箱を落せば、長兵衛、富八、久七もびつくりして騷ぐ。そのうちに蛇は這ひ出して緣の下に入る。）
富八　ほんたうに蛇が出た。
久七　蛇が出た。
（金次郎は店へ飛びあがりて、いきなりに千右衛門を蹴倒す。）
金次郎　それだから云はねえことぢやあねえ。こんなことになりやしねえかと思ふから、あれだけに譯を話したのだ。かうなつちやあ金を借りる、借りねえの論ぢやあねえ。おれの家の寶物は云ひつたへの通りに蛇になつてしまつたぞ。
千右衛　どうも飛んだことで……。
金次郎　えゝ、貴樣たちが好んで飛んだことを仕出來したのぢやねえか。たとひ質に置いたところで、無事に受け出せば濟むことだが、蛇になつてしまつてはもう取返しが付かねえ。さあ、亭主。家重代の刀を元の通りにして返してくれ。
千右衛　まことに恐れ入りましてございます。
金次郎　たゞ恐れ入つて濟むと思ふか。おれの刀をどうして呉れるのだよ。
（この時、表に窺ひゐたる石澤寅之助はわざと忙がはしく格子をあけて入る。）
寅之助　おゝ、相馬。こゝにゐたか。
金次郎　石澤か。なにしに來た。
寅之助　さつきお前の家へたづねて行くと、弟が頻りに心配してゐる。どうしたのだと聞いてみると、兄きが盆前の遣り繰りに困つて、家重代の北辰丸をかゝへ出して、明神下の質屋へ持ち込んだと云ふのだ。
金次郎　弟め、飛んだことをしやべりやあがつたな。
寅之助　それを聞いておれも驚いた。いかに融通に困るからと云つて、重代の寶を質入れするなどとは以ての外のことで、そんなことが世間へきこえると、おまへばかりか組中の外聞にもかゝはると思つたので、早速に金の都合をしてお前のあとを追つて來たのだ。弟の話では、十兩あればいゝといふことだが、本當にさうか。
金次郎　まあ、さうだ。
寅之助　（ふところから金包みを出す）その金はこの通り都合して來たから、質入れはまあ止めにしろ。

（金次郎はだまつてゐる。）
寅之助　おまへだつて好んで質に置くわけでもあるまい。十両の金の都合さへ出來れば、それでいゝのだらう。さあ、これを受取つてくれ。（金を渡さうとする）
金次郎　（力なげに拂ひのける）　折角だが、その金はもう要らねえ。
寅之助　なぜ要らない。
金次郎　なぜと云つて……。おれも途方に暮れてしまつた。（溜息をつく）
寅之助　（不思議さうに）　それは一體どうしたのだ。
（金次郎は再び默つてゐる。）
寅之助　どうも可笑いな。（人々をみまはして）　こゝで何事か起つたのか。
（長兵衛も默つてゐる。）
寅之助　そこに刀箱がほうり出してあるやうだ。なんだか變だな　おい、番頭。どうしたのだと云ふのに……。はつきり云へ。
長兵衛　實はその、お刀が紛失いたしましたので……。
寅之助　刀が紛失した……。
長兵衛　箱の蓋をあけますと、お刀が蛇になりまして……。
寅之助　刀が蛇になつた。（かんがへて）　誰が箱をあけたのだ。

千右衛　中身を一應拜見いたさうと存じて、わたくしが明けましたのでございます。
寅之助　相馬の家の北辰丸は、當主でも一代に一度しか見ることは出來ない。その血筋でない者がめつたに箱をあけると、刀は蛇になるといふ云ひ傳へがある。おれもよもやと思つてゐたが、やつぱりそれが本當であつたのか。これ、金次郎。おまへは飛んでもないことをしたな。
金次郎　（再び嘆息をする）　まつたく飛んでもないことをしてしまつた。先祖に對しても重々相濟まない。みんなおれが悪いからだ。
寅之助　そこで、お前はどうする。
金次郎　今さら誰を怨んでも仕方がない。家重代の寶物をうか〳〵持ち出して來たのが、おれの不覺だ。不斷からおれの身持が悪いので、先祖の罰が中つたのだらう。かうなつては、もう世間に顔向けも出來ない。相馬金次郎百俵取りの小身でも武士の端くれだ。これからもう一度神田明神へ參詣して、身のあやまりを詫びた上で、鳥居の前で潔よく切腹する覺悟だ。
（長兵衛等は顔をみあはせる。）
寅之助　むゝ、これはさうなくては成らないところだ。家重代の寶をうしなつて、お前もおめ〳〵と生きてはゐられまい。先祖への申譯、世間への申譯に、尋常に切腹し

ろ。朋輩のよしみにおれが介錯してやるぞ。

金次郎　友達のよしみに介錯してくれるか。

寅之助　併し金次郎。おまへは今、百俵取りの小身でも武士の端くれだと云つたな。武士ならば武士らしく、當のかたきを仕留めた上で、お前も切腹するがいゝではないか。

（人々は又おどろく。）

金次郎　成程さういふのも尤もだが、それも無益の殺生だ。元の起りはみんなおれが悪いのだから、何事も不運とあきらめて、おれ一人が自滅すればいゝのだ。

寅之助　いや、お前がおとなしくあきらめても、おれが勘辨出來ない。先づ第一にこの亭主の首を取つて、それを明神の前に供へて、それから切腹するのが武士の法ではないか。

金次郎　その武士ももう廢つたのだ。

寅之助　えゝ、意氣地のない奴だ。さあ、おれが證人になつてやるから、立派に相手を成敗しろ。亭主は勿論だが、何奴も這奴もみんな係り合ひだ。（長兵衛等を睨みまはして）そこらに轉がつてゐる唐茄子野郎も、片つ端からばた／＼斬つてしまへ。

（人々はいよ／＼驚く。）

金次郎　まあ、さう云ふなよ。こゝで五人や三人斬つてみた所で、おれの面目が立つといふわけでもない。却つて恥の上塗りだ。

寅之助　なにが恥の上塗りだ。町人のために身をほろぼし家を亡ぼされて、たゞ默つてゐられると思ふか。さあ、金次郎。刀をぬけ。えゝ、何をぐづ／＼してゐるのだ。そんな腑甲斐ない根性だから、こんな大事も出來するのだ。さあ、早く拔け。早く斬れ。

千右衛　あ、もし、もし、暫くお待ち下さいまし。大切のお刀を紛失させましたのは、わたくし共が重々の不調法、なんともお詫の申上げ様もございません。併しこゝで相馬の旦那様が御切腹なされましては、却つてお上に對して申譯のないことになりは致しますまいかと存じられますが……。

寅之助　えゝ、餘計なことをいふな。貴様たちに武士のこころが判るか。第一、これが世間へきこえたら何うするのだ。

千右衛　世間へきこえると仰しやつても、これを知つてゐるのはあなた様ばかり。なんとか御内分にして置いて頂く工夫はございますまいか。

寅之助　だまれ、默れ。さあ、金次郎。早く斬れ、斬つてしまへ。（じれる）えゝ、齒がゆい奴だ。貴様が斬らなければ、おれが斬つてやるぞ。さあ、亭主、そこへ直れ。

（寅之助は刀に手をかけて店へあがらうとするのを、金次郎は支へる。）

金次郎　まあ、はやまるな。待つてくれ、待つてくれ。

（寅之助は背かずに店へ押上らうとするを、長兵衛、富八、久七等も怖々ながらに支へる。）

二

青山、長者が丸。上のかたに寄せて、小さい古寺の門。左右は頽れかゝりたる練塀。門前に松の大樹。路ばたには秋草など茂りて、下のかたには田畑がつゞいて見ゆ。すべて今日の青山邊とは全く違ひて、江戸の場末の蕭條たる景色。寺内にて木魚の音。そこらにて蟬の聲もきこゆ。

（下のかたより農家の子供ふたり、一人は竿に附けたる袋を持ち、ひとりは黐竿を持ちて出で、蟬の聲をたづねながら松の下にあつまる。上のかたより若い僧ひとり出づ。）

子供一　坊さん、蟬が高いところに止まつてゐて、竿がとどかないんだ。

子供二　後生だから捕つておくれよ。

僧　（迷惑さうに）ほかの事と違つて、蟬捕りの手傳ひはどうも困る。誰かほかの人に頼むがよからう。（云ひ捨てゝ下のかたへ去る）

子供一　意地の悪い坊主だなあ。

子供二　そんなことを云つてゐるうちに、蟬は逃げてしまつた。

子供一　仕方がない。ほかへ行かう。

（二人は竿をかついで上のかたへ去る。入れちがひに農家の娘ひとりが手拭をかぶり、大きい風呂敷包みを背負ひ出で、下の方へゆき過ぎる。向ふより相馬金次郎と石澤寅之助が話しながら出づ。）

金次郎　質屋の奴等も驚きやあがつたな。

寅之助　なにしろ民谷伊右衛門が二人づれで、辨天小僧を極めたのだから、奴等のおどろくのも無理はねえのさ。

金次郎　こつちの手妻は向ふでも大抵察してゐたらうが、あゝなつちやあ何うにも動きが取れねえ。おれに十兩、おめえに口どめの五兩、〆めて十五兩で目出たく納まりやあ、向ふも仕合せといふものだ。相手が悪けりやあどんなことになるか判るものか。

寅之助　（笑ふ）おれ達よりも悪い相手があるかな。

金次郎　廣い世間だもの、どんな奴がねえとも限らねえ。おれ達なんぞはまだ／＼善人の部だよ。

寅之助　その積りで、もう少し修業を積むかな。それにしても刀箱から蛇を出すとは考へたものだぜ。

金次郎　刀箱から蛇が出るのも不思議はねえ。灰吹からは大蛇が出るといふぢやあねえか。

寅之助　ちげえねえ。あはゝゝゝゝ。

金次郎　はゝゝゝゝ。

（ふたりは笑ひながら舞臺に來かゝると、寺の門内より常磐津の師匠文字若、廿歳ぐらゐ、寺まゐりに來りし姿にて、日傘を持ちて出づ。）

文字若　おや、お二人さん。お揃ひですね。

金次郎　やあ、赤坂の師匠。なんだつてこんな所をうろ付いてゐるのだ。晝日中、狐に化かされたわけでもあるめえ。

文字若　このお寺へ來たんですよ。

寅之助　この寺へ來た……。こゝにやあ吉三さんといふ小姓でもゐるのかえ。

文字若　冗談ぢやあない、こゝはあたしの家のお寺なんですよ。お盆が來るから、ちよいとお參りに……。

寅之助　やれ、やれ、お若いのに御奇特のことだな。

（このあひだに金次郎は傍を向いて、小判一枚を出す。）

金次郎　そりやあ全く御奇特のことだ。常磐津の師匠の文字若さんが親の寺參りをしようとは思ひも付かなかつた。御褒美をやるから手を出しねえ。

文字若　なにをお呉んなさるの。

（不安心らしく手を出せば、金次郎は小判をそつと握らせる。）

文字若　（びつくりして）あら、小判ぢやありませんか。なんだか氣味が悪いねえ。

金次郎　氣味が悪いは御挨拶だ。それはおれと石澤の二人がお盆のおしるしだよ。

文字若　まあ。（再び小判をながめる）これこそほんたうに狐に化かされてゐるんぢやないかしら。

寅之助　狐でも狸でも金をくれゝば有難えぢやあねえか。うつかりしてゐないで、禮をいへ。禮を云へ。

文字若　ほんたうに頂いてもいゝんですか。どうも有難うございます。金さん、この頃は忙がしいんですかえ。

金次郎　忙がしくもねえが、閑でもねえ。まあ、中ぶらの所だ。近いうちに遊びに行くから、おつかあにも宜しく云つてくれ。

文字若　きつと來て下さいよ。おまへさんはこの頃、品川へ凝つて行くといふぢやありませんか。

金次郎　うそをつけ。おれはそんな道樂者ぢやあねえ。

文字若　道樂を看板にかけてゐる癖に、隨分勝手なことを云ふねえ。

金次郎　さういふお前こそ浮氣を看板にかけてゐるぢやあ

ねえか。
文字若　あたしがいつ浮氣をしたえ。
寅之助　おい、おい。往來なかで好加減にしろ。金さんひとりぢやねえ。傍には寅さんといふ立派なお武家樣が附いてゐるのを知らねえか。失禮のないうちに早く行け、行け。
文字若　まつぴら御免なさい。どうも子供でございますから。（笑ふ）それぢやあ寅さんもお近いうちに……。
金次郎　（笑ひながら）なんでもいゝから早くお歸りよ。
寅之助　知らねえ、知らねえ。（わきを向く）
文字若　（おなじく笑ひながら）はい、はい。
（文字若は金次郎に眼で挨拶して、向ふへ去る。）
寅之助　（笑ひながら）おい、こゝらは晝間でもさびしい所だ。町家のあるところまで送つて遣つちやあどうだね。
金次郎　へん、それほど鈍くもねえ積りだ。
寅之助　自分は鈍くねえ積りでも……。
金次郎　えゝ、よしてくれ。男にかゝはらあ。
（ふたりは笑ひながら上のかたへ行きかゝれば、荷持の男ひとり、長い紺かんばんに木綿の帶をしめて出づ。）
男　（叮嚀に）皆さん、お暑うございます。
金次郎　やあ、御苦勞。（かんがへて）あしたはおれの當番だな。
男　左樣でございます。
金次郎　さうすると、いつもの通り、本多さんへ行つてな。毎々御無心ながら、明日もまた社杯を拜借いたしますと頼んで置いてくれ。
男　かしこまりました。どなたも御免ください。（會釋して下のかたへ去る）
寅之助　いつも／＼人の物を借りるのも幅が利かねえ。社杯なんぞは一つ拵へて置けばいゝぢやあねえか。
金次郎　おまへは感心に持つてゐるな。
寅之助　持つてゐるとも……。社杯はおれたちの商賣道具だ。これがなけりやあ勤めが出來ねえ。
金次郎　なに、誰かのを借りて置けば濟むことだ。かうして懷ろに金を持つてゐても、どうも社杯なんぞをこしらへる氣にやあなれねえ。
寅之助　いゝ心がけのお侍だ。拙者ほと／＼感心いたしてござるか。あはゝゝゝ。
（下のかたより金次郎の弟半三郎、廿一二歳、講武所風の裝、竹刀と劍術道具をかついで出づ。）
半三郎　兄さん。今お歸りでございますか。石澤さんも御一緒でどこへお出でになりました。
金次郎　なに、ちよいと其處まで行つて來たのよ。

寅之助　けふも講武所か。なか／＼勉強だな。どうだ、此頃はよつぽど上達したか。

半三郎　まあ、どうにか人並みには働けさうでございます。

寅之助　人なみの働きが出來れば結構だ。（金次郎に）若い者が汗水を垂らしてヤットウの稽古をしてゐるのだ。お前の社杯は兎も角も、弟には麻の羽織の一枚もこしらへて遣れよ。可哀さうぢやあねえか。

金次郎　まあ、そんなことは家へ歸つてからのことだ。さあ、早く歸つて、凉みながら一杯遣らうぜ。

寅之助　家で飲むのは詰まらねえぢやあねえか。

金次郎　いや、それは又あとの相談だ。どうでこゝまで引揚げて來たのだから、兎もかくも一度は家へ來いよ。

半三郎　（苦々しさうに）又御酒でございますか。

金次郎　いくら飲んでも、けふはおまへの袴を剝ぐやうなことはしねえ。この通り懐ろは大丈夫だ。

（金次郎は懐ろを叩いて、寅之助と共に笑ひながら行きかゝる。半三郎は困つた顔をしながら附いてゆく。）

――幕――

第二幕

一

第一幕の翌年、慶應四年四月なかばの夕刻。赤坂、田町、若松といふ小料理屋の前。まん中には短い暖簾をかけたる入口、そのなかは杏脱ぎのこゝろ。上のかたは板塀、その中に小庭のあるこゝろにて、見越しの松など見ゆ。入口にも柳の立木あり。下のかたは出窓にて、内には簾（すだれ）がおろしてあり。家の下（しも）のかたには、溜池を隔てゝ山王の山が若葉がくれに見ゆ。

（上のかたには色々の荷物を積みたる荷車を卸して、車力ひとりが休んでゐる。町家の若い者と小僧も一緒に休んでゐる。小僧は風呂敷を脊負ひて、灯（ひ）の無い弓張提灯を持つてゐる。）

車力　これから中野まで行つた日にやあ、夜になつてしまひますぜ。

若い者　勿論、夜になるのは覺悟の前だ。

車力　この頃は日が暮れると物騒ですからね。

若い者　江戸のまん中にゐると猶物騒だ。ちつとも早く逃げる方が無事だよ。（下のかたを見かへる）それにしても、おかみさん達は遲いことだな。（小僧に）お前、引返して見て來い。

小僧　あい、あい。

（小僧は引返して行かうとする時、下のかたより町家の女房と娘は荷物をかゝへ、女中は風呂敷づつみを脊

負ひ、ぶら提灯を持ちて出づ。）

女房　お前さん達はよつぽど待つたかえ。

若い者　あんまり遅いので案じてゐました。

娘　なにしろこんな荷物をかゝへてゐるので、なか〳〵渉取らないのよ。

女中　中野まではまだ隨分遠いのでせうね。

女房　ちつとぐらゐ遠くても、まあ我慢して行つておくれよ。辻斬や押込みは毎晩のやうに流行るし、なん時どこで軍が始まるか判らないんだもの。江戸にうか〳〵してゐられるものかね。

車力　まつたく困つたものですよ。さあ、日の暮れないうちに早く出かけませう。

若い者　行きませう、行きませう。

（車力は車をひき出せば、若い者と小僧はあと押しをして上のかたへ去る。）

娘　暗くなると怖いねえ。

女房　それだから早くおいでよ。

（女房、娘、女中も急いで車のあとを追つてゆく。それと入れ違ひに、上のかたより錦切れを附けたる隊長一人が先きに立ちて兵士七八人を引連れ、市中を見廻りの體にて出で來る。兵士は銃を荷つてゐる。隊長は下のかたに來りて、どつちへ行かうと思案したるが、兵士をみかへりて向ふへ行けと指圖し、そのまゝ向ふへ立去る。料理屋の暖簾をくゞりて、相馬金次郎が酒に醉つて出づ。金次郎は當時躄居の身の上なれば、武士ともみえぬ風俗、額に月代を生やして、唐棧の袷に半纏をかされ、何か文句を云つてゐるのを、女中がなだめながら送つて出づ。）

金次郎　えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。まともに勘定を拂へば大切なお客様だ。なんで無暗に追ひ出しやあがるのだ。

女中　追ひ出すといふわけぢやございませんが、何分このごろは物騒でございますから、夜は商賣を休むことに致して居りますので……。

金次郎　だからよ。まだ本當に日が暮れねえぢやあねえか。

女中　それでも今頃から火を落すことに致して居りますので……。

金次郎　何をつべこべ云やあがるのだ。

（金次郎は女中の横つらを殴り倒す。暖簾のうちより文字若が折詰をさげて出づ。）

文字若　あれ、金さん。そんな亂暴なことをしちやあいけないぢやないか。

金次郎　えゝ、引込んでゐろ。此頃はむしやくしやしてならねえから、せめて白薬酒でも鱈腹のんで遣らうと思へ

ば、もう日が暮れますの何のと云つて、無暗に人を追ひ出しやあがる。料理茶屋は夜が商賣だのに、何だつて日が暮れると休みやあがるのだ。

文字若　そんな理窟を云つたつて、かういふ御時節だから仕方がないぢやありませんか。

金次郎　その御時節が積に障つてならねえ。こんな御時節に誰がしたのだ。田舍侍が泥草鞋を穿いてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、錦切れを嵩にきて野方圖もなく威張り散らしやあがるから、こんな不景氣な世の中にもなつて來るのだ。

文字若（左右をみかへりながら）往來でそんな大きい聲をして、人にきこえるといけないからさ。

金次郎　だれに聞えたつて構ふものか。おれは本當のことを云つてゐるのだ。

文字若　まあ、いゝと云ふのに……。（女中に）姐さん、まことに濟みませんでしたね。どうぞ堪忍して遣つてくださいよ。

（文字若は女中にむかひて、こゝはわたしが引受けたと知らせれば、女中は會釋して内に入る。金次郎はだんだんに醉がまはりて、柳の木に倚りかゝる。）

文字若　さあ、おまへさん。早く行きませうよ。（空をみる）日が暮れるの、暮れないのと押問答をしてゐるうちに、ほんたうに薄暗くなつて來たぢやありませんか。

金次郎　暗くなりやどうするのだ。化物でも出るといふのか。化物は江戸中一杯で、百鬼夜行どころか、このごろは夜も晝も見境ひはありやあしねえ。化物が怖くつて、一日でも生きてゐられるものか。ばか／＼しい。

文字若　なんでもいゝからさ。まあ兎もかくも家まで歸つてくださいよ。おつかさんが寂しがつて待つてゐるからさ。（折詰をみせる）

金次郎　そんな物はどうでもいゝ。犬にでも遣つてしまへ。

文字若　だつて、勿體ないぢやありませんか。

金次郎　なに、勿體ねえことがあるものか。（内をみかへる）こゝの家もこの頃は急に惡くしやあがつた。一つだつて碌に食へる物はありやしねえ。そんな物をおつかあに遣るのは口よごしだ。犬にやれ、犬に遣れ。（折詰を取らうとする）

文字若　あれ、いけないと云ふのに……。

金次郎（無理に折詰を取る）吝なことを云ふな。犬に遣らなけりやあ、そこらの溝へでも捨てゝしまへ。（折詰を持つて、よろ／＼しながら下のかたを見る）おゝ、來た、來た。はゝ、こりやあ捨てるより優しだ。

（下のかたより錦切を附けたる兵士二人出づ。金次郎は進み出て、その前に突つ立つ。）

金次郎　もし、もし、錦切れの旦那。失禮ながらこれを獻上しませう。（折詰を二人の鼻の先へぶら付かせる）

兵士甲　えゝ、無禮なことをするな。

金次郎　失禮は初めから斷つてゐるぢやあねえか。お前さん方に江戸の料理といふのは何ういふ物だか、一つ喰べさせて上げたいから、獻上しようといふのだ。

兵士乙　貴樣はよほど醉つてゐるな。

兵士甲　醉つてゐるから免して置くのだ。重ねて無禮を働くと助けて置かんぞ。

金次郎　なんで助けて置かねえのだ。物を遣つた上に殺されてたまるものか。かうなりやあ意地づくだ。さあ、邪が非でもこの料理を貰つてくれ。

文字若　（はら〳〵しながら）もし、おまへさん。好加減におしなさいよ。（兵士に）旦那樣、この通り醉つて居りますから、幾重にも御勘辨をねがひます。

（暖簾のうちより以前の女中と料理番らしい男ふたりが覗いてゐる。）

兵士乙　醉つてゐる者は介抱して、早く連れて歸れ。

文字若　はい、はい。

兵士甲　この時節に他愛なく醉つてゐるとは、町人とは云ひながら不心得な奴だな。

金次郎　（呶鳴る）おらあ町人ぢやあねえ。

文字若　（一生懸命に）まあ、默つておいでなさいよ。

兵士乙　なに、町人でない。（金次郎を見て笑ふ）丸腰で半纏をきて、いくら江戸でもそんな侍はあるまい。

金次郎　ところが、あるから不思議だ。貴樣達のやうな田舍者にはわかるめえ。

文字若　（泣聲になつて）あれさ、およしと云ふのに……。

兵士甲　なにが田舍者だ。もう一度云つてみろ。

金次郎　田舍者だから田舍者だといふのよ。鎭守樣のお祭ぢやあこんな旨いものは食へねえ。話の種に江戸のお料理を食つてみろと、おれが親切に云つて遣るのだ。さあ、遣るよ。貰つて行け。

（金次郎は折詰を突き付くれば、兵士は堪へかねて叩き落す。）

金次郎　えゝ、なにをするのだ。

（金次郎は詰め寄らうとするを、兵士は突き倒し、鐵扇にてその額を打つ。金次郎は飛び起きるを文字若は獅嚙み付いて押へる。暖簾のうちよりも男二人と女中が駈け出して、これも金次郎を抱きすくめる。）

兵士甲　はゝ、馬鹿な奴め。

兵士乙　江戸にはこんな奴が多いので困るな。

（兵士二人は笑ひながら上のかたへ立去る。金次郎は跳ね起きてそのあとを追はうとするを、人々はおさへ

付けてゐる。）

男一　この節がら錦切れなんぞに係り合ふと、飛んだ目に逢ひます。

男二　およしなさい、およしなさい。

文字若　それだから、云はないことぢやあない。あら、額から……。

（文字若は紙を出して、金次郎の額の血をふいてやる。金次郎もやうやく鎮まりて、紙にしみたる血の色をぢつと見る。）

女中　なにか血どめのお藥を持つてまゐりませうか。

金次郎　いゝよ。いゝよ。大したことはねえ、もうおとなしくするから、みんなあつちへ行つて呉んねえ。

文字若　たび／＼お騷がせ申して、お氣の毒ですね。

女中　ぢやあ、お靜かに……。

（女中と男共は內に入る。）

文字若　おまへさん。痛くはないかえ。

金次郎　なに、それほどに痛くもねえが……。（かんがへて）おい、師匠。後生だから幾らか都合してくれねえか。

文字若　どのくらゐさ。

金次郎　さあ、一兩でも、二兩でも、三兩でも……。まあ、幾らでもいゝや。

文字若　此頃はどこの質屋も休み同樣だから、あんまり無理を背いてもくれまいが、頭の物や他所行きを持ち込んだら、ちつとは融通してくれるかも知れない。さうして、そのお金をどうするの。

金次郎　どうするか、それはあとで云つて聞かせるから、その金の都合が出來たら、すぐにおれの家へとゞけてくれ。

文字若　あたしの家へ一緒に來るんぢやあないの。

金次郎　むゝ、これから眞直に歸ることにするから、屹と賴むぜ。

文字若　なんだか可笑しいわね。なぜ眞直に家へ歸るの。

金次郎　まあ、兎も角もおれの云ふ通りにしてくれ。金の一件はなるたけ早いがいゝな。

文字若　（不審ながら）あゝ、承知しました。お金の出來次第、すぐに屆けに行きますよ。

金次郎　早く行け、早く行け。

文字若　あいよ。

（文字若は足早に下のかたへ去る。それを見送りて、金次郎は上のかたへ行かうとする時、上のかたより中間一人が酒に醉ひて出で、金次郎と摺れちがひてゆく。）

中間　また降りさうになつて來たか。空までが公方樣のやうに泣きつ面をしてゐやがる。あゝ、忌だ、忌だ。（唄ふ）槍は錆びても名はさびぬ、昔ながらの落し指、ヨイ／＼

ヨイ〳〵、よいやさ。はゝゝゝ。

（中間はよろけながら向ふへ去る。金次郎は立ちどまりて耳をかたむけ、やがて足早に上のかたへ去る。）

二

青山、長者が丸。相馬金次郎の家。武士の屋敷とは名ばかりにて、殆ど空家かと思はれるほどに住み荒らしたる體。正面の床の間には掛物もなく、壁の破れたのが見えるばかりといふ有様。奥へ出入りの襖も無論に破れてゐる。他は推して知るべし。それでも下のかたには式臺附きの玄關あり。門は二本の丸太を立てたるばかりにて、左右には疎らなる竹垣が頽れかゝり、そこには卯の花が咲いてゐる。庭も荒れ果てゝ、上のかたには竹藪、ほかに樹木や雑草も繁つてゐる。家の外には田畑がつゞいて見ゆ。

（第一場と同じ日の宵。内には薄暗い行燈をとぼし、相馬牛三郎は縁先で蚊いぶしを焔いでゐる。遠く題目太鼓の音、蛙の聲きこゆ。下の方より石澤寅之助は小倉の袴をはきて大小をさし、覆面用の黒い巾を持ちて出づ。）

寅之助　（案内も無しに庭口へ通る）やあ、蚊いぶしか。毎年のことだが、藪蚊には泣かされるな。

牛三郎　今年は閏があつたので、取分けて早いやうです。

寅之助　（縁に腰をかける）なにしろこゝらは寺と畑と竹藪に取りまかれてゐるのだから、蚊の棲家だか人間の棲家だか判つたものぢやあねえ。よくも先祖以來こんなところに住んでゐられたものだ。

牛三郎　それでも先祖代々住み馴れた組屋敷だと思ふと、やつぱり離れる氣にはなれないものですね。

寅之助　離れたくないと云つても、どうで長くはゐられめえ。今度はちつと場所を擇んで、藪つ蚊や蛇の出ねえ村に住むことだ。

牛三郎　長くはこゝにゐられますまいか。

寅之助　朝臣にでもなつたら格別だが、さうでなけりや遲かれ早かれ追つ拂ひを食ふだらう。安政の地震よりもどえらい大地震がゆり出して、徳川の大家臺が一堪りも無しにぶつ潰されてしまつたのだから、その庇の下に住んでゐたおれ達が路頭に迷ふのは當り前さ。

牛三郎　殘念なことですね。

寅之助　今さら愚痴を云つても始まらねえ。おたがひに今までは、たとひ小身でも百俵といふ先祖代々の祿が附いてゐたから、貧乏ながらも顎の干上る苦勞はなかつたが、もうこれからは俄浪人でうか〳〵しちやあゐられねえ。

牛三郎　こつちの組には朝臣になつた人もあるさうです

ね。

寅之助　あるさうだどころぢやあねえ。半分ぐらゐは朝臣になつたやうだ。朝臣になれば家屋敷は勿論、家祿も今まで通りに呉れるさうだから、おとなしく降參して朝臣になるのが悧口かも知れねえが、それもあんまり意氣地がねえ。(上の方を指さす)現に隣の山口も朝臣になつたと云ふぢやあねえか。

半三郎　(苦々しげに)　さうですか。隣にゐながら些とも知りませんでした。

寅之助　流石に世間の手前もあるから、なるべく内所にしてゐるのだらう。と云つて、われ〳〵のやうに、脱走も出來ず、朝臣にもならず、唯いつまでも恭順で小さくなつてゐるのでは、差當り食ふことが出來ねえぢやあねえか。そこで少し相談に來たのだが、今夜も兄きは留守かえ。

半三郎　ゆうべから出たぎりで歸つて來ないので、わたしも内々案じてゐるのですが……。

寅之助　兄きには赤坂の師匠が附いてゐるから、この御時節に悠々と、長火鉢の前にでも脂下つてゐるのだらう。まことに天下泰平のことだ。かうなると情婦のひとりも拵へて置かねえ奴は慘めだな。(少しかんがへる)それぢやあ今夜も歸るかどうだか判らねえ。おい、半さん。兄きの名代に、おめえ少し手傳つてくれねえか。

半三郎　どんなお手傳ひを致すのです。

寅之助　さう眞面目に聞かれると返事に困るが……。實はこれだ、これだ。

(寅之助は覆面を見せ、刀の柄を叩いて見せる。)

半三郎　(首をかしげる)　それがどうしたと云ふのです。

寅之助　兄きとは大違ひで、ふだんから野暮堅え男だから、かういふ時には早わかりがしねえで困るな。先づかういふ風にして……。(覆面をして、腕捲りをしてみせる)金のありさうな町人の家へ押込むのだ。

半三郎　え、町人の家へ押込む……。强盜に這入るのですか。

寅之助　人の家へ押込むにやあ限らねえ。途中でも金のありさうな奴をみつけたら、取つ捉まへて嚇しつけるのよ。

半三郎　(驚きと怒りを取りまぜて)　飛んでもないことを……。

寅之助　なにが飛んでもねえ。斬取り强盜は武士の習と云ふぢやあねえか。

半三郎　いゝえ、いゝえ、斬取り强盜などは武士にあるまじきことです。まして此の御時節に左樣な不埒を働きましては、恭順の御趣意に背くではありませんか。

寅之助　いや、この御時節だから斬取り强盜もしなけりや

あならねえ。今もいふ通り、家代々の祿に離れては、おたがひに食ふことが出來ねえぢやあねえか。さあ、惡いことは云はねえから、おれと一緒に來てくれ。さすがに面をむき出しぢやあ拙いから、手拭か風呂敷でおれのやうに覆面をするのだ。

半三郎　（腹立たしげに）そんなことは出來ません。

寅之助　出來ねえことがあるものか。軍用金を出せとか何とか、凄味の臺詞はおれが好いやうに列べ立てるから、おめえは唖默つてだんびらを引つこ拔いて、おどしに振りまはして見せればいゝのだ。

（半三郎はだまつてゐる。）

寅之助　うまく行けば一と晩に五十兩や百兩はなんでもねえ。これで當分は寢て暮すのよ。こんな洒落れたことはねえぢやあねえか。

半三郎　なんでもお前さん一人で勝手にお遣りなさい。そんな仲間入りは眞平御免です。

寅之助　どうしても忌かえ。

半三郎　知れ切つたことです。

寅之助　（舌打ちして）どうも話せねえ男だな。ぢやあ、又出直して來るとしようか。

（寅之助は下の方へ立去る。半三郎は返事もせずに顔をそむけてゐたが、やがて起つてあとを見送る。）

半三郎　ほんたうに呆れた男だな。いくら兄さんだつて、まさかにそんな仲間入りはしないだらう。

（半三郎は再び蚊いぶしを煽ぐ。蛙の聲、題目太鼓の音、さびしく聞ゆ。向ふより相馬金次郎は貧乏德利をさげて足早に出づ。）

金次郎　（空を見る）なんだかぽろついて來やあがつた。今年はどうも雨が多いなあ。（云ひながら内に入る）

半三郎　お歸りなさいまし。

金次郎　また蚊いぶしか。日が暮れると、毎晩それが一と仕事だつたが、もうこれで年明きだらう。

半三郎　そこらで石澤さんに逢ひませんでしたか。

金次郎　いや、逢はなかつた。あいつにも四五日逢はねえが、どうしてゐるかな。

半三郎　（兄の顔を見て）おや、兄さんは顔をどうなすつた。

金次郎　（額をおさへる）錦切れの奴等がなぐりやあがつた。

半三郎　喧嘩でもなすつたのですか。

金次郎　喧嘩といふほどでもねえ、ちよいと戯つて遣つたのよ。おい、茶碗を持つて來てくれ。

半三郎　はい、はい。

（半三郎は奥に入りて、茶碗を盆に乘せて來る。）

金次郎　（手酌で一杯のむ）そこで、半三郎。今夜のうちに仕度をして、おれと一緒に行け。
半三郎　え。では、あなたも石澤さんと同じやうに……。
金次郎　石澤がどうした。
半三郎　兄さん。そればかりはわたくしが堅く御意見申します。家代々の祿に離れて、たとひ浪々いたしましても……。
金次郎　なんだ、なんだ。なにを判らねえことを云ふのだ。
半三郎　いゝえ、判らないことはありません。斬取り强盗は武士の習などとは飛んでもないことです。
金次郎　えゝ、おれの云ふことをよくも聞かねえで、何を云つてゐやあがるのだ。おれがいつ斬取り强盗をすると云つた。おれの云ふのはそんなことぢやあねえ。おまへと一緒に上野へ行くのだ。
半三郎　上野へ……。（意外らしく兄の顔をみつめる）あの彰義隊へ這入るのでございますか。
金次郎　さうだ。さうだ。
半三郎　兄さんはほんたうに上野へお出でになりますか。
金次郎　本當よ。なぜ不思議さうにおれの面をながめてゐるのだ。おれは醉つて云ふのぢやあねえ。本氣で云つてゐるのだ。
（金次郎は重ねて飲む。半三郎はかんがへてゐる。）

金次郎　上野へ行くのは忌かよ。
半三郎　いえ、行きたいのは山々ですが……。
金次郎　それだから一緒に行けといふのだ。
半三郎　さあ。（まだ考へてゐる）
金次郎　（あざ笑ふ）命が惜しいか。
半三郎　（屹となつて）いえ、命が惜いなどとは思ひません。併し公方樣は飽までも恭順の思召で、家來一統にも恭順を守るやうにと堅く申渡されて居ります。この場合みだりに立騒ぐものは、主人のからだに刃をあてるも同樣だとも仰せられました。
金次郎　（又飲む）それがどうした。
半三郎　われ／＼家來の分として、善惡ともに御主君の仰せを守らなければなりません。御主君が戰へとおつしやれば、何時でも戰ひます。上野に楯籠れとおつしやれば、何時でも參ります。しかし御主君が恭順せよと仰せ出されてゐる場合に、われ／＼が勝手に徒黨を組んで、上野のお山に楯籠るなどとは、甚だおだやかならぬ事と存じられます。兄さんは誰に誘はれて、俄に彰義隊へ這入ることになさいました。
金次郎　だれに誘はれたわけでもねえ、自分ひとりで思ひ立つたのだ。おまへは二日目には御主君といふが、その御主君はどこにゐるのだよ。

半三郎　あらためて申すまでもなく、一旦は上野の大慈院に御逼塞あそばされましたが、當月十一日、更に水戸へ御立退きに相成りました。

金次郎　それ見ろ。おれたちの主人といふ公方様は家來どもを置去りにして、自分ひとりで逃げて行つてしまつたぢやあねえか。そんな主人にいつまでも忠義立てをするのは馬鹿の骨頂だ。天下茶屋の芝居ぢやあねえが、もう斯うなりやあ主でねえ、家來でねえ、一本立の安達元右衛門様だ　恭順を守らうが守るめえが俺達の勝手次第で、だれの指圖を受けることもねえ筈だ。

半三郎　でも、兄さん……。

金次郎　えゝ、だまつて聞け。おれがこれから上野へ駈け込まうといふのは、主人の爲でもねえ、忠義のためでもねえ、この金さんの腹の蟲が納まらねえからだ。田舍侍が錦切れを嵩にきて、大手をふつてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、わが物顔にのさばり返つてゐる。それぢやあ江戸つ子が納まらねえ、第一にこの金さんが納まらねえ。べらぼうめ、錦切れが何だ。錦切れが怖くつて、五月人形をひやかしに行かれるか。おれは去年神田の質屋へ行つて、蛇を種にして十兩まき上げて來た一件から、役向きの方もたうとう不首尾になつて、まだ若えくせに隱居を申付けられ、弟のおまへが家督を相續することになつた。隱居といへば隱れた身分だから、引込んで小さくなつてゐればいゝやうなものだが、江戸つ子の面を泥草鞋で踏みにじられちやあ、隱居のおれでも我慢は出來ねえ。相馬の金さんはチヤキ／＼の江戸つ子だぞ。

半三郎　では、御主君の仰せに背いても、あなたは上野へ行くと仰しやるのですか。

金次郎　まだわからねえか。おれ達にはもう御主君なんて云ふものはねえといふのに……。江戸つ子のおれたちが田舍者を相手に喧嘩をする、唯それだけのことよ。

半三郎　それでは却つて御主君に不忠となりはしますまいか。

金次郎　いつまでも同じことを云つてゐやあがるのだ。（じれて呶鳴る）忌なら止せ、勝手にしやがれ。江戸つ子の面汚しめ。

（金次郎は手酌でぐい／＼飲んでゐる。半三郎は叉かんがへてゐる。薄く雨の音。向ふより常磐津文字若は雨傘を半開きにして足早やに出づ。）

文字若　（内に入る）たうとう降り出しましたね。

（金次郎はだまつて飲んでゐる。）

文字若　あら、みんなだんまりでどうかしたんですかえ。

金次郎　だれだ、誰だ。（透し視る）おゝ、師匠か。大層

早かつたな。

文字若　だつて、なるたけ早く届けてくれと云ふから、大急ぎで馳け付けて來ましたのさ。貞女といふのはまあこんなものさね。（笑ひながら緣に上る）　半さん、今晩は……。

金次郎　そんな奴に口をきくなよ。まあ、息つぎに一杯のめ。（茶碗をさす）

文字若　これで飮むのかえ。

金次郎　亭主のいふことを背くのが貞女だ。飮め、飮め。

文字若　いくら貞女でも茶碗ぢやあ遣切れない。小さいお猪口はないのかえ。

金次郎　いくぢのねえ女だな。おい、半三郎、猪口を持つて來い。

（半三郎は無言で奥へ入る。）

文字若　おまへさん。兄弟喧嘩でもしたんぢやあないかえ。あんなおとなしい人をいぢめるのはお止しなさいよ。

金次郎　あんな馬鹿野郎を相手に、喧嘩をする張合もねえや。（奥に向ひて）やい、やい、早く持つて來い。何をぐづ〳〵してゐやあがるのだ。

文字若　およしなさいよ。可哀さうぢやありませんか。（金次郎の額をみて）おまへさん、額の傷はもう好いんですかえ。

金次郎　なに、もう何でもねえ。（額をなでる）　飛んだ仁木彈正だ。

（奥より半三郎は猪口を持つて出で、文字若の前に置く。）

文字若　どうも憚りさま。

金次郎　そこで早速だが、金の工面は出來たか。

文字若　御時節柄だから、どこでもなか〳〵無理をきいてくれないのさ。やう〳〵のことで二兩と一分、それでまあ我慢しておくんなさいよ。

金次郎　いや、大出來、大出來。これだけありやあ大願成就だ。

文字若　それにしても、そのお金を一體どうするのさ。その入り道を聞かないうちは、うつかり渡すことは出來ませんよ。

金次郎　そりやあ聞かねえでも話さなけりやあならねえ。さあ、注いでやるよ。

（文字若は猪口を取れば、金次郎は酌をしてやる。鐘の聲。）

金次郎　それが別れの杯だ。ぐつと飮んでくれ。

文字若　別れのさかづき……。（笑ひ出す）　あたしは手切れのお金を持つて來たんぢやありませんよ。

金次郎　いや、冗談ぢやあねえ。本當におめえの杯だと思

つてくれ。おれは今夜のうちに仕度をして、上野の彰義隊へ這入るのだ。

文字若　（びつくりして）　お前さん、本氣で云ふのかえ。

金次郎　むゝ、本氣だ、本氣だ。こんな自墮落な人間でも、相馬の金さんは江戸つ子だ。いつまでも小さくなつて恭順してゐられるわけのものぢやあねえ。

文字若　彰義隊なんぞへ這入つて勝てるかしら。

金次郎　勝つか負けるか判らねえが、先づ十に九つはむづかしいな。

文字若　そんな危ないところへ飛び込むことは無いぢやありませんか。誰から御褒美をくれるわけでも無し、負ければ死に損、こんな詰らないことはないと思つてゐるのに、お前さんもその仲間入りをする氣かえ。

金次郎　そりやあお前のいふ通り、いくら働いたところで誰から褒美をくれると云ふ譯でも無し、負ければ死に損、こんな割に合はねえ話はねえ。それは萬々わかつてゐるが、おれの性分でもう我慢が出來ねえから、今さら未練らしく止めてくれるな。おまへに都合して貰つた二兩一分の金で、質でも受け出して身拵へをして、上野の山へ楯籠るのだ。

文字若　半さんも一緒ですかえ。

（金次郎はだまつてゐる。）

文字若　（向き直る）　もし、半さん。おまへさんも一緒に行くんでせうね。

（半三郎もだまつて考へてゐる。）

文字若　ぢやあ、おまへさんは行かないんですかえ。ねえ、半さん。はつきり返事をして下さいよ。兄さんと違つて、お前さんは不斷から講武所で勉强して、劍術が大變によく出來ると云ふのに、そのお前さんが小さくなつてゐて、兄さんが彰義隊へ行くんぢやあ、まるであべこべぢやありませんか。

半三郎　（顔を上げる）　まつたくあべこべかも知れません。ふだんは武士の道を説いて、兄の放蕩を意見してゐたわたしが、この場合に引込んでゐて、兄が彰義隊の仲間入りをする……。どつちが好いのか、悪いのか、わたしにも判らなくなつて來ました。

金次郎　おい、師匠。そんな奴にはかまはねえで、早く金を渡してくれ。このなりぢやあ軍は出來ねえ。第一に幅が利かねえから、すぐに質屋へかけ付けて、色々の物をうけ出して來るのだ。昔ならば忍びの緒を切つて、兜に名香を焚かうといふ所だ。

文字若　どうしてもお前さんは行くのかえ。

金次郎　だれが何と云つても、もういけねえ。さあ、早く金をくれと云ふのに……。

文字若　（仕方なしに金を出す）かうと知つたら、金の工面なんぞして來るんぢやあなかつたねえ。
金次郎　（紙につゝみし金をあけて見る）むゝ、二兩と一分……。ありがてえ、ありがてえ。これで金さんの死花が咲くといふものだ。
文字若　あゝ、こんな貞女にやあなりたくないねえ。（ほろりとする）
金次郎　お前、泣くのか。
文字若　涙も出るぢやありませんか。（眼をふいて）ぢやあ、もう、あたしも覺悟しましたから、一生のお別れに、思ひ切つて大きいもので飲ませて下さいよ。
金次郎　ぢやあ、これを遣らう。（茶碗を出す）
文字若　ちよいと待つて……。
（文字若は起つて、行燈をそばへ持ち來り、かんざしで燈心をかき立てる。）
文字若　おまへさん、よく顏をみせて下さいよ。
金次郎　えゝ、芝居のやうなことを云ふなよ。飛んだ三の切だ。
（金次郎は茶碗を文字若にわたして、酌をしてやる。薄く雨の音、蛙の聲。文字若は飲み終りて金次郎に茶碗を戻し、酌をしてやる。）
金次郎　（酒をのみながら）おつかあを大事にしろよ。
文字若　おまへさんが彰義隊へ這入るなんて、まるで夢のやうな話だから、阿母さんもさぞびつくりするだらうねえ。
金次郎　（茶碗を下に置いて）さあ、夜の更けねえうちに、早く質屋を叩き起して來なけりやあならねえ。（起ちあがる）
半三郎　（俄に進み出る）兄さん。わたしも一緒にお連れ下さい。
金次郎　おれは質屋へ行くのだよ。
半三郎　その質屋へ一緒にまゐつて、わたしの物も少し受け出して頂きたいのです。
金次郎　この野郎、蟲の好いことをいふな。貴樣の物なんぞ受けて遣るやうな金ぢやあねえ。
半三郎　いえ、質屋ばかりではありません。上野へも一緒にまゐります。
文字若　おまへさんも彰義隊へ這入るのかえ。
半三郎　もう斯うなつたら理窟を云つてはゐられません。わたしも兄さんに附いて行つて、死ぬときには一緒に死にます。
金次郎　むゝ。判つた、わかつた。（文字若をかへりみて笑ふ）おい、師匠。這奴もやつぱり江戸つ子だ。
文字若　ほんたうに頼もしいねえ。（半三郎のそばに摺り

よる）おまへさん、なるたけ兄さんのそばに附いてゐて
世話をして遣つてくださいよ。
半三郎　それは確に引受けました。
金次郎　ぢやあ、行かう。（縁を降りかゝる）
文字若　（縁に出て空をみる）まだ少し降つてゐるやうだ。
そこにあたしの傘がありますよ。
金次郎　それほどのことはあるめえ。
文字若　まあ、持つておいでなさいよ。（傘を把つて渡す）
（金次郎は傘をうけ取り、半三郎もそのあとに附いて
出ようとする時、下のかたより石澤寅之助再び出づ。）
寅之助　（出逢ひがしらに）おい。兄弟揃つてどこへ行く。
金次郎　やあ、いゝ所へ來た。（寅之助の腕をつかむ）　おい、おれ達と一緒に行かねえか。
寅之助　どこへ行くのだ。
金次郎　これから仕度をして上野へ駈け込むのよ。
寅之助　上野へ駈け込む……。
金次郎　彰義隊よ。
寅之助　（意外らしく）むゝ、彰義隊か。そいつは少し考へなけりやならねえ。
金次郎　おれの歸るまでに考へて置いてくれ。
（金次郎はつかみし手を放し、傘をさして向ふへ行きかゝる。半三郎も續いてゆく。寅之助は不思議さうにあとを見送る。文字若も縁に立つて、見送る。雨の音、蛙の聲。）

――幕――

第三幕

一

おなじく五月十五日の朝。
赤坂、新町、常磐津文字若の家。正面の上のかたに縁喜棚。その下は地袋。まん中には奥へ出入りの葭戸二枚。つゞいて茶壁。それに三味線がかけてあり。上のかたは竹窓、下の方は格子戸にて、御神燈がかけてあり。表は町家つゞきにて、隣の家の横手が見える。雨の音きこゆ。
（内には文字若の妹おとくが稽古の娘およしと、稽古用の本箱を挾んで向ひ合つてゐる。おとくは三味線を前に置き、およしは彈き語りにて小夜衣千太郎の道行を唄つてゐる。）
およし　（唄ふ）――ぬるゝ裳の露ならで、こゝろ置く身には雨空に、みだれて渡る雁さへも、もし追手かと驚かれ、ふるふ足もと音を忍ぶ、秋の蛙の聲かれて、田川の水のあさき縁、死ぬる覺悟も瀬ゆゑに、あゆみ兼ねてぞ立ち

やすらひ――

（この淨瑠璃のうちに、下のかたより文字若は湯歸りの體にて、手拭や糠袋などを持ち、傘をさして足早に出づ。）

文字若 （あわたゞしく內に入る） 阿母(おつか)さん、大變だよ。

おとく なんだねえ、さう〳〵しい。おまへの留守におよつちやんが來たから、小夜衣千太郞を浚はせてゐるんだよ。

文字若 小夜衣千太郞どころぢやない。阿母さん、お聽きよ。上野でいよ〳〵軍(いくさ)が始まるとさ。

おとく 上野で……。いよ〳〵軍が始まるのかえ。

文字若 官軍の方ぢやあ夜の明けないうちから繰り出して、下谷と本鄕から攻めるんだとさ。酒屋の松さんが見て來たといふので、そこらでもみんな騷いでゐるのよ。

おとく 成程そりやあ大變だ。これぢやあお稽古どころぢやない。およつちやん早くお歸りなさいよ。

およし ぢやあ、御めんなさい。左樣なら。

（およしは三味線を片附けて、早々に歸つてゆく。）

おとく （表をみる） 上野あたりの軍なら、まさかにこゝらが何うなると云ふこともあるまいけれども、さあと云つちやあ間に合はないから、今のうちに些つと荷ごしらへでもして置かうかねえ。

（文字若はだまつて考へてゐる。おとくは引返して文字若のそばに來る。）

おとく （小聲で） ねえ、お前。金さんが彰義隊に這入つてゐるなんて云ふことを、誰にも話しやあしまいね。

文字若 そんなことを誰にいふものかね

おとく 若しもそれが官軍の耳にでも這入ると、あたし達もどんな係り合ひになるかも知れないから、內所にして置かないといけないよ。

文字若 おつかさん。濟まないけれど、淸婦湯(せいふたう)を煎じて頂戴な。（額をおさへる）

おとく また頭痛がするのかえ。そんなときに朝湯に這入らなければいゝのにさ。今すぐに煎じてあげるよ。

（おとくは奥に入る。文字若は額をおさへて俯向いてゐる。雨の音。小銃の音遠く聞ゆ。）

文字若 （額をあげる） あ、始まつたよ。

（文字若は俄に起つて門口に出る。小銃の音。向ふより近所の若い者三人、あるひは菅笠をかぶり、或は頭から桐油(とうゆ)をかぶり、跣足又は草鞋ばきにて走り出て、下のかたへ行きかゝる。）

文字若 （呼ぶ） ちよいと、鐵砲の音がきこえるやうですねえ

若者甲 おゝ、戰爭だ、戰爭だ。

若者乙　どうせ上野までは行かれまいが、行かれるところまで行つてみる積りさ。

文字若　一緒に連れて行つてくれないかねえ。

若者丙　冗談云つちやあいけねえ。女なんぞにうつかり行かれるものか。

若者甲　おまけにこんなに雨が降るぢやあねえか。歸つて來て話して聞かせるよ。

若者乙　さあ、行かう、行かう。

（三人は下のかたへ走り去る。雨の音いよ／＼強くなる。）

文字若　（空をみる）あゝ、あいにくに雨が強くなつて來たねえ。

（向ふより石澤寅之助に町人の妻、頬かむり、尻端折り、はだしにて、番傘をさして急ぎ出で、あとを見かへりながら格子の前に來る。）

寅之助　師匠。よく降るな。

文字若　おゝ、石澤さんですか。

（寅之助は頬かむりを取り、からだや足を拭きながら内に入る。文字若も引返して入る。）

文字若　いくさが始まつたさうですね。

寅之助　到頭ぱん／＼、鋒を出したやうだ。（表をみかへる）おい、師匠、ちよいと奥を貸してくれ。誰が來ても、おれはゐないと云ふのだぜ。いゝかえ。

（云ひすてゝ寅之助は早々に奥に入る。文字若は不安らしく見送る。雨の音。小銃の音。向ふより市中見廻りの兵士二人出で、あたりを見まはしながら格子をあける。）

兵士甲　これ、これ。

文字若　はい、はい。（出る）

兵士甲　今この家へ町人風の男が入り込みはしなかつたか。

文字若　いゝえ。

兵士乙　本當に來なかつたか。

文字若　だれも參りません。

兵士甲　（御神燈をみて）おまへは遊藝の師匠だな。

文字若　はい。常磐津の師匠をいたして居ります。

兵士乙　（甲と顏をみあはせる）それではほかを探してみようか。

（兵士二人はそのまゝ下のかたへ立去る。文字若は門口から見送る。奥より寅之助は文字若の着物を羽織りて窺ひ出づ。）

寅之助　師匠、これだ。（片手で拜む眞似をする）助かつた。助かつた。

文字若　あなた、どうしたんですよ。

寅之助　此頃のどさくさ紛れに、ちつと荒つぽい仕事を遣つたので、市中見まはりの奴等に眼を附けられて、油斷をしちやあゐられなくなつた。

文字若　ぢやあ、何か惡いことでもしたんですかえ。

寅之助　むゝ。あんまり好い事もしなかつたのよ。町人の店を四五軒あらして、往來の奴を五六人おどかしたが、一昨日の晩は新町の酒屋へ押込んで、亭主と番頭を斬つたので、それから詮議が急にきびしくなつて來たらしい。もう斯うなつちやあ仕方がねえ。いつそ上野へでも駈込まうかと思つてゐると、到頭いくさが始まつてしまつた。

文字若　ねえ、石澤さん。金さんの兄弟は今頃どうしてゐるでせうねえ。

寅之助　まさか逃げも隱れもしめえ。今ごろは一生懸命に働いてゐるだらうよ。

文字若　さうでせうねえ。（又起つて表をみる）金さんは劍術は出來ないんでせう。

寅之助　そりやあ侍のことだから、刀の持ち樣ぐらゐは知つてゐるが、あの通りの人間だから勿論上手の方ぢやあねえ。

文字若　劍術なんぞは下手でも構はない。おれは江戸つ子の魂で鬪ふのだと云つてゐましたが、いくら江戸つ子でも劍術が下手ぢやあ駄目でせうね。

寅之助　この節の戰ひは鐵砲といふものもあるから、劍術の出來るばかりが能でもあるめえが……。その鐵砲の撃ち方もよくは知るめえな。

文字若　あなたは劍術が出來るんでせう。

寅之助　おれも出來る方ぢやあねえ。まあ金公に些と優しぐらゐのところだ。

文字若　ちつとぐらゐ優しでも、かういふ時には大變に力になるでせう。（考へながら寅之助のそばに戻る）ねえ、石澤さん。あなた、後生ですからあたしも連れて行つてくださいな。

寅之助　連れて行つてくれ。（文字若の顏をちつと見る）よもや上野へ行く積りぢやあるめえな。

文字若　いゝえ、上野へ行くんですよ。さつきから見物に行く人があるぢやありませんか。

寅之助　物ずきの奴は出かけるやうだが、男は格別、女の行かれる場所ぢやあねえ。芝居の立廻りとは譯が違つて、眞劍勝負の斬合ひだ。おまけに鐵砲は飛んで來る。どんな傍杖を食はねえとも限らねえ。

文字若　そりやあ、あたしだつて知つてゐますけれど、なんだか行つて見たくつてならないんですよ。

寅之助　そんなにも行つて見てえか。情があるな。

文字若　情の有る無しは別として、どうもがつとしてゐられないやうな氣がするんですよ。
寅之助　行つたところで逢へやあしめえぜ。
文字若　大かた逢へないだらうとは思つてゐますけれど、なんだか其近所まで行つてみたいんですよ。
寅之助　おれも體の置き場に困つちやあゐるが……。（かんがへる）軍をみかけて飛び込むのは、ちつと氣がねえな。
文字若　あなたは男のくせに弱いのねえ。
（奥よりおとくは藥茶碗を盆にのせて出づ。）
おとく　さあ、お藥が出來たよ。
文字若　どうも有難う。（茶碗をうけ取りて飲む）
おとく　（寅之助に）どうもおさう〴〵しいことでございますね。
（寅之助はだまつて考へてゐる。小銃の音又きこゆ。）
おとく　（門口に出る）鐵砲の音がだん〳〵烈しくなるやうですね。こゝらは大丈夫でせうか。
寅之助　こゝらは大丈夫だらうが……。（これも起つて表をのぞく）おゝ降る、降る。雨のふる方が彰義隊には都合がよからう。この軍が夜まで續くと、面白いことになるかも知れねえ。
おとく　どうして面白くなるのでございます。
寅之助　暗くなればどんな彌次馬が飛び出さねえとも限らねえ。さうなると、寄手もちつと難儀だらう。
おとく　さうでせうかねえ。
寅之助　（破に下のかたを見る）あ、又來やあがつた。おい、おつかあ。おれのゐる事をしやべつちやあいけねえぜ。
（寅之助は再び奥に隱れる。おとくはきよと〳〵してゐる。下のかたより以前の兵士二人が先に立ち、あとより更に二人附添ひて出づ。）
兵士甲　どうもこゝらへ逃げ込んだらしいが……。
兵士乙　もう一度、こゝの家を詮議してみようか。
兵士甲　遊藝の師匠のうちに隱れてゐることもあるまい。はて、どこへ行つたかな。
（四人はあたりを見まはしながら向ふへ立去る。おとくと文字若は内より窺つてゐる。）
おとく　ねえ、あの人たちは石澤さんを探してゐるんぢやあないかね。
文字若　あれ、靜かにおしたさいよ。
（奥より寅之助は障戸をほそ目にあけて窺ふ。）
文字若　（小聲で）もう大丈夫ですよ。（あつちへ行つてしまつたと手眞似で知らせる）
寅之助　（出る）これぢやあいよ〳〵油斷は出來ねえ。おれも逃げ道を考へなければならねえ。

（寅之助は不安らしく表をのぞく。雨の音にまじりて小銃の音いよ／＼烈しく聞ゆ。これにて幕をおろし、すぐに再び幕をあける。）

二

おなじ日の午後。雨降りしきる。

根岸、御行の松のほとり。上のかたに不動堂。それにつゞいて御行の松の大樹、その幹には注連を張る。上のかたには上野の森近く、青葉がくれに火の手あがりて見ゆ。

（上野の僧二人と小坊主一人、あるひは荷物を抱へ、或は經卷をかゝへて、素足に草鞋をはき、笠をかぶりて出づ。）

僧一　どう辛抱しようにも、あの火の粉ではとても堪らぬ。

僧二　吉祥閣が燒かれたので、それからそれへと火になつてしまつた。

小坊主　これからどこへ行くのでございます。

僧一　どこへ行くといふ的もないが、兎もかくも北の方角へ立退くとしよう。

僧二　われ／＼は出家ぢや。誰に逢つても咎められることはあるまい。

僧一　（空を見る）あいにく強く降ることぢやな。

（三人は急いで下のかたへ立去る。雨の音。小銃の音。上のかたより相馬半三郎はうしろ鉢卷、筒袖に撃劍の胴をつけて陣羽織をかさね、小袴、脚絆、草鞋にて、錦切れの兵士二人と拔刀にて闘ひながら出づ。半三郎は奮闘し、兵士等は下のかたへ引いてゆくを、半三郎は追つてゆく。上のかたより相馬金次郎は手負の體にて散らし髮、鎖のかたびらに小袴、脚絆、草鞋にて大小をさし、櫻の枝を杖にして出づ。小銃の音つゞけて聞ゆ。金次郎は杖に縋りてあゆみ來り、半三郎のあとを見送りながら、不動堂の前に來てたゝずむ。下のかたより半三郎は引返して出づ。）

半三郎　兄さん、歩かれませんか。

金次郎　どうも意氣地がねえ。

（半三郎は金次郎を介抱して、堂の縁に腰をかけさせる。）

金次郎　半三郎。おれはもういけねえよ。

半三郎　氣の弱いことを云つてはいけません。大丈夫です、大丈夫です。

金次郎　氣休めをいふな。なにしろ肩と股とへ二發も彈を食らつたのだから遣り切れねえ。

半三郎　なに、二發や三發の彈に撃たれても、急所さへ除けてゐれば大丈夫です。氣を落してはいけません。わた

しが手を引いても負(おぶ)つてもお連れ申します。
金次郎　今の奴等はどうした。
半三郎　ひとりは斬り倒しましたが、一人は逃がしてしまひました。
金次郎　相手は二人、お前はひとり、加勢をして遣らうにも、おれはこの通りだ。どうなることかと案じてゐたら、ひとりを斬り倒して、ひとりを追拂つてしまつたか。おまへはやつぱり強いな。彰義隊もおまへのやうな人間ばかりだつたら、もう少し持ち堪へたかも知れねえ。
金次郎　なにしろ敵は大勢ですから、殘念ながら何うにもなりません。せめて夜まで持ち堪へられたら、加勢が出て來るかも知れなかつたのですが……。（上のかたを見る）兄さん、あの通り燃えてゐます。
金次郎　敵の奴め、むやみに大砲なんぞを撃ちやあがつて、卑怯な奴等だ。
半三郎　火の粉と烟をかぶらなければ、もう少し防げたのですが……。まつたく殘念です。
金次郎　ほんたうだ。手前たちの方が大勢の上に、燒撃のやうな目に逢はせやあがる。（上のかたを見返りて罵る）それで勝つたつて何の手柄になるものか。馬鹿野郎め。
半三郎　併しこんな所にぐづぐづしてはゐられません。早く行きませう。

金次郎　こゝはどこだ。
半三郎　こゝは根岸……。御行の松です。
金次郎　なるほど御行の松か。（松をみる）眼が眩んでゐるとみえて、どこだか見當が付かなかつた。（考へる）それぢやあ丁度いゝ。おれはこゝで腹を切るから、おまへは早く逃げてしまへ。
半三郎　腹を切る……。それは飛んでもないことです。逃げられるだけ一緒に逃げませう。上野が負けても、力を落すことはありません。越後から出羽奥州はみんな德川方ですから、そこらまで落ちて行つてもう一度戰ひませう。
金次郎　それだからお前は早く落ちろといふのだ。（苦しい息をつく）おれはもういけねえ。この松の下で腹を切るから介錯してくれ。
半三郎　そんな弱いことではいけません。さあ、行きませう。おいでなさい。
（半三郎は介抱して連れて行かうとするを、金次郎は拂ひ退ける。）
金次郎　いや、いけねえ。權現樣は逃げるが勝だと敎へたさうだが、逃げられねえものを逃げたつて仕樣がねえ。江戸つ子は思切りが肝腎だ。おれはもう歩かれねえ、逃げられねえ。さあ、こゝですつぱりと遣つてくれ。

（金次郎は大小を取りて縁に置き、肌をくつろげると、胸から腹へかけて經文をまいてゐる。）

半三郎　（困つて）もし、兄さん、死ぬのはいつでも死なれますから、もう少し我慢して行つてください。

金次郎　いやだ、いやだ。ぐづ〳〵してゐて敵にでも生捕られてみろ。どんな目に逢ふか判るものか。

半三郎　いえ、わたしが附いてゐるから大丈夫です。

金次郎　いくらお前が强がつても、敵が大勢なら仕樣があるめえ。それ、見ろ。今さら未練らしいことを云はねえで、素直におれのいふことを肯け（脇指に手をかける）

半三郎　まあ、兄さん……。（脇指に取付く）

金次郎　この野郎。强情に邪魔をすると承知しねえぞ。（無理に半三郎を突き放し、濕い淚をふりあげて無暗に打つ）もう遣切れねえといふのに、判らねえか。いつまでおれを苦しませて置くのだ。

半三郎　（決心して枝にすがる）では、もう仕方がありません。こゝで立派に切腹をなさいまし。わたしが御介錯をいたします。

金次郎　さうか。（うなづきながら縁にぐつたりとなるを、半三郎は介抱する）なあ、半三郎。おれも御行の松の下で腹を切りやあ立派なものだ。

半三郎　（淚ぐんで）左樣でございます。

金次郎　（肌をくつろげる）みんなの眞似をして、そこらにあるお經をまき付けて來たが、かういふ時の役に立つた。これを取つてくれ。

（半三郎に手傳つて、金次郎の腹にまき付けたる經文をほどく。雨の音、小銃の音。向ふより石澤貫之助は米俵をかぶり、文字若は素合羽をきて手拭をかぶり、竹の子笠をかざして走り出づ。）

貫之助　もうこゝらより先へは行かれさうもねえ。山はあの通り燃えてゐるせ。

文字若　もう行かれませんかねえ。

（二人はうろ〳〵しながら上のかたへ行きかゝりて、文字若は不圖みかへる。）

文字若　あら、金さんが……。金さん、金さん。

貫之助　やあ、居た、居た。

（二人はよろこんで駈けよる。）

金次郎　おゝ、師匠と石澤……。どうして來たのだ。

文字若　あんまり心配だから、いくさの樣子を見に來たんですよ。

半三郎　よくこゝらまで來られましたね

貫之助　半分は夢中で、どこをどう廻つて來たか自分にもわからねえが、なにしろこゝでめぐり合つたのは有難てえ。師匠、折角出て來た甲斐があつたせ。

文字若　ほんたうに無事でようござんしたねえ。
金次郎　なに、無事なものか。おれはもう定九郎だ。
文字若　定九郎……。
金次郎　二つ玉を食つて半死半生だよ。
半三郎　兄はもう歩かれないから、どうしてもこゝで腹を切るといふのです。
文字若　腹を切る……。まあ、どうしたらよからうねえ。
寅之助　むゝ。（顏をしかめながら訊く）もういけねえか。
金次郎　いけねえ、いけねえ。神田の質屋を嚇かした時とは譯が違つて、今度こそは本當に切腹だ。
寅之助　どうしても切腹か。（半三郎に）おめえは死ぬのぢやあるめえな。
半三郎　わたしは兄の死骸を片附けて、これから會津か越後へ脱走する積りです。
寅之助　おれも江戸にやあゐられねえ體になつてしまつたから、これぢやあお前と一緒に行かうか。
金次郎　みんな行け、行け。會津でも越後でも構はねえ。どこへでも行つて、おれの代りに威勢よく遣つてくれ。
文字若　おまへさんも一緒に行けばいゝぢやありませんか。
金次郎　それが行かれねえのだから、仕方がねえ。蹴合に負けた軍鷄ぢやあるめえし、いつまでじたばたしてゐられるものか。相馬の金さんはもうこれでおさらばだ。（脇指をぬいて經文をまきつける）おい、師匠。今までのよしみだ。今年の新盆には迎ひ火を焚いてくれ。
文字若　情ないことになつたねえ。（泣く）
半三郎　石澤さん。兄はわたしに介錯しろといふのですが、丁度あなたがお出でになりましたから……。
寅之助　おれに介錯をしろといふのか。（少し躊躇して）まあ、仕方がねえ。これも友達の役だ。（金次郎の刀を取る）
金次郎　おめえが介錯してくれるか。おれは腹の切り樣が下手だらうから、そつちで手際好くぽんと遣つてくれ。
寅之助　手際好くは些つとむづかしいが、まあ一世一代の積りで遣つてみようよ。
金次郎　おれも一世一代だ。しつかり頼むぜ。
（金次郎は脇指を腹に突立てる。寅之助は刀をぬいてうしろへ廻る。半三郎と文字若は手をあはせる。雨の音、小銃の音。）

――幕――

修禪寺物語

登場人物

面作師　夜叉王
夜叉王の娘　かつら
　　　　　かへで
かへでの婿　春彦
源左金吾頼家
下田五郎景安
金窪兵衛尉行親
修禪寺の僧。行親の家來など。

一

伊豆の國狩野の庄、修禪寺村（今の修善寺）桂川のほとり、夜叉王の住家。

藁葺の古びたる二重家體、破れたる壁に舞樂の面などかけ、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に竈を切りて、素焼の土瓶などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、そのうしろは畑を隔てゝ、塔の峰つゞきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

（二重の上手につゞける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣に沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂、廿歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙砧を擣つてゐる。）

かつら　（擣て砧の手をやめる）一晌餘りも擣ちつゞけたので、肩も腕も痺るゝやうな。もうよいほどにして止めうでないか。

かへで　とは云ふものゝ、きのふまでは盆休みであつたほどに、けふからは精出して働かうではござんせぬか。

かつら　働きたくばお前ひとりで働くがよい。父樣にも春彦どのにも褒められようぞ。わたしは嫌ぢや、嫌になつた。（投げ出すやうに砧を捨つ）

かへで　姉の手業に姉妹が、年ごろ擣ちなれた紙砧を、俄かに飽きた、嫌になつたと、むかしに變るお前がこの頃の素振は、どうしたことでござるか喃。

かつら　（あざ笑ふ）いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。わたしは昔からこのやうな事を好きではなかつた。父さまが鎌倉においでなされたら、わたし等も斯うはあるまいものを、名聞を好まれぬ職人氣質とて、この伊豆の山家に隠れ棲、親につれて子供までも鄙にそだち、詮

事無しに今の身の上ぢや。さりとてこのまゝに朽ち果てようとは夢にも思はぬ。近いためしは今わたし等が擣つてゐる修禪寺紙、はじめは賤しい人の手につくられても、色好紙とよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも觸るゝ。女子とてもその通りぢや。たとひ賤しう育つても、色好紙の色よくば、關白大臣將軍家のおそばへも、召出されぬとも限るまいに、賤の女がなりはひの紙砧、いつまで擣ちおぼえたとて何とならうぞ。嫌になつたと云ふたが無理か。

かへで　それはおまへが口癖に云ふことぢやが、人には人それ／＼の分があるもの。將軍家のお側近う召さるゝなどと、夢のやうな事をたのしみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなんとならうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら　お前とわたしとは心が違ふ。妹のおまへは今年十八で、春彦といふ郞を有つた。それに引きかへて姉のわたしは、二十歳といふ今日の今まで、夫もさだめず過したは、あたら一生を草の家に、住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、滿足して暮すおまへ等に、わたしの心はわかるまい喃。（空嘯く）

（楓の婿春彦、廿餘歲、奥より出づ）

春彦　桂どの。職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、職人あまたあるなかにも、面作師といへば、世に恥しからぬ職でもあらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開闢以來、はじめて舞樂のおもてを彫まれたは、勿體なくも聖德太子、つゞいて藤原淡海公、弘法大師、倉部の春日、この人々より傳へて今に至る、由緒正しき職人とは知られぬか。

かつら　それは職が尊いのでない。聖德太子や淡海公といふ、その人々が尊いのぢや。彼の人々も生業に、面作りはなされまいが……。

春彦　生業にしては卑しいか。さりとは異なことを聞くものぢやの。この春彦が明日にもあれ、稀代の面をつくり出して、天下一の名を取つても、お身は職人風情と侮るか。

かつら　云んでもないこと、天下一でも職人は職人ぢや。殿上人や弓取とは一つになるまい。

春彦　殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら　はて、くどい。知れたことぢやに……。

（桂は顔をそむけて取合はず、春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてゝ押隔てる。）

かへで　あゝ、これ、一旦かうと云ひ出したら、飽までも云ひ募るが姉さまの氣質、逆らうては惡い。いさかひは

もう止してくだされ。
春彦　その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍してゐれど、あまりと云へば詞が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは云はさぬ。
かつら　おゝ、姉と云はれずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に有つたとて、姉の見得にもなるまい。
春彦　まだ云ふか。
（春彦は又つめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の聲。）
夜叉王　えゝ、騒がしい。鎭まらぬか。
（これを聽きて春彦は控へる。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十餘歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の假面を打つてゐる。膝のあたりには木の屑など取散したり。）
春彦　由なきことを云ひ募つて、細工の御さまたげを省みぬ不調法、なにとぞ御料簡くださりませ。
かへで　これもわたしが姉様に、意見がましいことなど云うたが基。姉様も春彦どのも必ず叱つて下さりまするな。
夜叉王　おゝ、なんで叱らう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はまゝある事ぢや。珍らしうもあるまい。時に今日ももう暮るゝぞ。秋のゆふ風が身にしみるわ。そち達は奥へ行つて夕飯の支度、燈火の用意でもせい。
二人　あい。
（桂と楓は起つて奥に入る。）
夜叉王　なう、春彦。妹とは違つて氣がさの姉ぢや。おなじ屋根の下に起き臥すれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多からうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆に奉公したもの、縁あつてこの夜叉王と女夫になり、あづまへ流れ下つたが、そだちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果るを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいひながら、姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがへば親の愛も違うて、母は姉贔屓、父は妹贔屓。思ひ／＼に子どもの贔屓爭ひから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。はゝゝゝゝ。
春彦　さう承はれば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌ひ、世にきこえたる殿上人か弓取ならでは、夫に有たぬと誇らるゝも、母御の血筋をつたへし爲、血は爭はれぬものでござりますな。
夜叉王　ぢやによつて、あれが何を云はうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思はず、氣位高う生れたは、母の子なれば是非がないのぢや。

（暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈臺を持ちて出づ。）

春彦　おゝ、取紛れて忘れてゐた。これから大仁の町まで行つて、このあひだ誂へて置いた鑿と小刀をうけ取つて來ねばなるまいか。

かへで　けふはもう暮れました。いつそ明日にしなされては……。

春彦　いや、いや、職人には大事の道具ぢや。一刻も早う取寄せて置かうぞ。

夜叉王　おゝ、職人はその心掛けがなうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦　夜とは申せど通ひなれた路、一時ほどに戻つて來まする。

（春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、つゞいて源の頼家卿、廿三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をさゝげて出づ。）

僧　これ、これ、將軍家の御しのびぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

（楓ははッと平伏す。頼家主從すゝみ入れば、夜叉王も出で迎へる。）

夜叉王　思ひもよらぬお成とて、なんの設けもござりませぬが、先づあれへお通りくださりませ。

（頼家は椽に腰を掛ける。）

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。わが面體を後のかたみに殘さんと、さきに其方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず。幾たびか延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎　多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝すとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其後已に半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとは餘りの懈怠。もはや猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌さんざんぢやぞ。

頼家　予は生れついての性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒あかず。あまりに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉王　御立腹おそれ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を彫めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用うけたまはりて已に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意にかなふほどのもの一つも無く、さらに打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延

引きのばされましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家　えゝ、催促の都度におなじことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は唯だ延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までにはかならず出來するか、あらかじめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王　その期日は申上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るものと思召すか。家をつくり、塔を組む、番匠なんどとは事變りて、これは生なき材木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師。五體にみなぎる精力が兩の腕におのづから湊まる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて、はじめて面も作られまする。但しその時は半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年の後か。われながら確とはわかりませぬ。

僧　これ、これ、夜叉王どの。上樣は御自身も仰せらるゝごとく、至つて御性急でおはします。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申上げてゐたら、御癇癖がいよ〱募らうほどに、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王　ぢやと云うて、出來ぬものはなう。

僧　なんの、こなたの腕で出來ぬことがあらう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王　さあ、それゆゑに出來ぬと云ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と云へば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に貽すのはいかにも無念ぢや。

頼家　なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟りを受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉王　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

（癇癖募りし頼家は、五郎のさゝげたる太刀を引つ取つて、あはや拔かんとす。奥より桂、走り出づ。）

かつら　まあ、まあ、お待ちくださりませ。

頼家　えゝ、退け、のけ。

かつら　先づお鎭まりくださりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう、父樣。

（夜叉王は默して答へず。）

五郎　なに、面は已に出來してをるか。

頼家　えゝ、おのれ。前後不揃ひのことを申立てゝ、予をあざむかうでな。

かつら　いえ、いえ、嘘いつはりではござりませぬ。面は

たしかに出來して居りまする。これ、父樣。もうこの上は是非がござんすまい。

かへで　ほんにさうぢや。ゆうべ漸く出來したと云ふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜からうが、命も惜からう。出來した面があるならば、早う上樣にさしあげて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉王　命が惜いか、名が惜いか、こなた衆の知つたことでない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御。その面を持つて來て、兎もかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

かへで　あい、あい。

（かへでは細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて賴家の前にさゝぐ。賴家は無言にて桂の顏をうちまもり、心少しく解けたる體なり。）

かつら　いつはりならぬ證據、これ御覽くださりませ。

（賴家は假面を取りて打ながめ、思はず感歎の聲をあげる。）

賴家　おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。（飽かず打戍る）

僧　さればこそいはぬことか。それほどの物が出來してゐながら、兎かう澁つて居られたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

夜叉王　（形をあらためる）何分にもわが心にかなはぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面をなんと御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、あつぱれの者ぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉王　あつぱれとの御賞美は憚りながらおめがね違ひ、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んでをりまする。

五郎　面が死んでをるとは……

夜叉王　年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も云ひ、われも許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、たましひもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちは左樣に申しても、われらの眼には矢はり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉王　いや、いや、どう見直しても生ある人ではござり

ませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふがごとき、
怨靈怪異なんどのたぐひ……。

僧　あゝ、これ、これ、そのやうな不吉のことは申さぬもの
ぢや。御意にかなへばそれで重疊。ありがたくお禮を申
されい。

頼家　むゝ。更にも角にもこの面は頼家の意にかなうた。
持歸るぞ。

夜叉王　強て御所望とござりますれば……。

頼家　おゝ、所望ぢや。それ。

（頼家は頤にて示せば、かつら心得て假面を箱に納め、
すこしく媚を含みて頼家にさゝぐ。頼家は更にその顏
をぢつと視る。）

頼家　いや、猶かさねて主人に所望がある。この娘を予が
手許に召仕ひたう存ずるが、奉公さする心はないか。

夜叉王　ありがたい御意にござりまするが、これは本人の
心まかせ、親の口から御返事は申上げられませぬ。

（桂は臆せず、すゝみ出づ。）

かつら　父樣。どうぞわたしに御奉公を……。

頼家　うひ奴ぢや。奉公をのぞむと申すか。

かつら　はい。

頼家　さらばこれよりその面をさゝげて、頼家の供してま
ゐれ。

かつら　かしこまりました。

（頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつゞいて起つ。楓は
姉の袂をひかへて、心許なげに導く。）

かへで　姉さま。おまへは御奉公に……。

かつら　おまへは先程、夢のやうな望みと笑うたが、夢の
やうな望みが今叶うた。

（かつらは誇りがに見かへりて、庭に降り立つ。）

僧　やれ、やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王
どの、あすまた逢ひませうぞ。

（頼家は行きかゝりて物につまづく。桂は走り寄りて
その手を取る。）

頼家　おゝ、いつの間にか暗うなつた。

（僧はすゝみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱
を僧にわたし、我は片手に燈籠を持ち、片手に頼家を
ひきて出づ。夜叉王はぢつと思案の體なり。）

かへで　父さま、お見送りを……。

（夜叉王は初めて心づきたる如く、娘と共に門口に送
り出づ。）

五郎　そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

（頼家等は相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、
しばらく默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と縁
にあがり、細工場より槌を持ち來りて、壁にかけたる

種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓はおどろきて取縋る。）

かへで　あゝ、これ、なんとなさる。おまへは物に狂はれたか。

夜叉王　せつぱ詰りて是非におよばず、拙き細工を獻上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのやうな面が將軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふ限り、再び槌は持つまいぞ。

かへで　さりとは短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出來不出來は時の運。一生のうちに一度でも天晴れ名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉王　むゝ。

かへで　拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思召さば、これからいよ〳〵精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

（かへでは縋りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。）

二

おなじく桂川のほとり、虎溪橋の袂。川邊には柳幾本たちて、芒と蘆とみだれ生ひたり。橋を隔てゝ修禪寺の山門みゆ。同日の宵。

（下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は假面の箱をかゝへて出づ。）

五郎　上樣は桂どのと、川邊づたひにそゞろ歩き遊ばされ、お供の我々は一足先へまゐれとの御意であつたが、修禪寺の御座所ももはや眼のまへぢや。この橋の袂にたたずみて、お歸りを暫時相待たうか。

僧　いや、いや、それは宜しうござるまい。桂殿といふ婦女をお見出しあつて、浮れあるきに餘念もおはさぬところへ、我々のごとき邪魔外道が附き纏うては、却つて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎　なにさまなう。

（とは云ひながら、五郎は猶不安の體にてたゝずむ。）

僧　殊に愚僧はお風呂の役、早う戻つて支度をせねばなるまい。

五郎　お風呂とて自づと湧いて出づる湯ぢや。支度を急ぐこともあるまいに……。先づお待ちやれ。

僧　はて、お身にも似合はぬ不粹をいふぞ。若き男女がむつまじう語らうてゐるところに、法師や武士は禁物ぢやよ。はゝゝゝ。さあ、ござれ、ござれ。

（無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるゝまゝに、打連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。）

頼家　おゝ、月が出た。川原づたひに夜ゆけば、芒にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家の秋はまた一入の風情ぢやなう。

かつら　馴れては左程にもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事變りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しうござりませう。

（頼家はありあふ石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまゝ、橋の欄に凭りて立つ。月明かにして蟲の聲きこゆ。）

頼家　鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、甍をならべて綺羅を競へど、それはうはべの榮えにて、うらはおそろしき罪の巷、惡魔の巣ぞ。人間の住むべきところで無い。鎌倉などへは夢も通はぬ。（月を仰ぎて云ふ）

かつら　鎌倉山に時めいておはしなば、日本一の將軍家、山家そだちの我々は下司にもお使ひなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣での下向路、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家　おゝ、その時そちの名を問へば、川の名とおなじ桂と云うたな。

かつら　まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかみには、二本の桂の立木ありて、その根よりおのづから清水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫の桂と昔よりよび傳へてをりまするを、お答へ申上げましたれば、おまへ樣はなんと仰せられました。

頼家　非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな……と、つい戯れに申したなう。

かつら　お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならず叶ふやうと、百日のあひだ人にも知らさず、窟へ日參いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくへも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にながれ合ひ、今月今宵おん側近う、召出されたる身の冥加……。

頼家　武運つたなき頼家の身近うまゐるがそれほどに嬉しいか。そちも大方は存じて居らう。予には比企の判官能員の娘、若狹といへる側女ありしが、能員はほろびし其砌に、不憫や若狹も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのまゝに若狹と云へ。

かつら　あの、わたくしが若狹の局と……。えゝ、ありがたうござりまする。

頼家　あたゝかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。

戀をうしなひし頼家は、こゝに新しき戀を得て、心の痛みもやうやく癒えた。今はもろ〳〵の煩惱を斷つて、安らけくこの地に生涯を送りたいものぢや。さりながら、月には雲の障りあり、その望みも果敢なく破れて、予に萬一のことあらば、そちの父に打たせたる彼のおもてを形見と思へ。叔父の蒲殿は罪無うして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遲かれ速かれ、おなじ路を辿らうも知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手、臑當、腹卷したる軍兵二人、上下よりうかゞひ出で、、芒むらに潜む。蟲の聲俄にやむ。)

かつら　あたりにすだく蟲の聲、吹き消すやうに止みましたは……。

頼家　人やまゐりし。心をつけよ。

(金窪兵衞尉行親三十餘歳。烏帽子、直垂、籠手、臑當にて出づ。)

行親　上、これに御座遊ばされましたか。

頼家　誰ぢや。

(桂は燈籠をかざす。頼家透しみる。)

行親　金窪行親でござります。

頼家　おゝ、兵衞か。鎌倉表より何としてまゐつた。

行親　北條殿のおん使に……。

頼家　なに、北條殿の使……。扨はこの頼家を討たうが爲な。

行親　これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺ひとして行親參上、ほかに仔細もござりませぬ。

頼家　云ふな、兵衞。物の具に身をかためて夜中の參入は、察するところ、北條の密意をうけて予を不意撃にする巧みであらうが……。

行親　天下やうやく定まりしとは申せども、平家の殘黨にゐひ殲さず。且は函根より西の山路に、盜賊ども徘徊する由きこえましたれば、路次の用心として斯樣にいかめしう扮裝ち申した。上に對したてまつりて、不意撃の巣藷なんど、いかで、いかで……。

頼家　たとひ如何やうに陳ずるとも、憎き北條の使なんどに對面無用ぢや。使の口上聞くにおよばぬ。歸れ、かへれ。

(行親は騷がず。しづかに桂をみかへる。)

行親　これにある女性は……。

頼家　予が召使ひの女子ぢやよ。

行親　おん謹しみの身を以て、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

(桂は堪へず、すゝみ出づ。)

かつら　兵衞どのとやら、お身は卜者か人相見か。初見參

のわらはに對して、素性賤しき女子などと、迂濶に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕へし者ぞ。まして今は將軍家のおそばに召されて、若狹の局とも名乘る身に、一應の會釋もせで無禮の雜言は、鎌倉武士といふにも似ぬ、さりとは作法をわきまへぬ者なう。

（冷笑はれて、行親は眉をひそめる。）

行親　なに。若狹の局……。して、それは誰が許された。

賴家　おゝ、予が許した。

行親　北條どのにも諜らせたまはず……。

賴家　北條がなんぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。北條がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家來ぢやぞ。

行親　さりとて、尼御臺もおはしますに……。

賴家　えゝ、くどい奴。おのれ等の云ふこと、聽くべき耳は持たぬぞ。退れ、すされ。

行親　さほどにおむづかり遊ばされては、行親申上ぐべきやうもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまゝ退散、委細は明朝あらためて見參の上……。

賴家　いや、重ねて來ること相成らぬぞ。若狹、まゐれ。

（賴家は起ち上りて桂の手を取り、打連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。其のあひだに潜みし軍兵出づ。）

兵一　先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合圖もござりませねば……。

兵二　手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親　北條殿の密旨を蒙り、近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、流石は上樣、早くもそれと覺られて、われに油斷を見せたまはねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ寄かけ、多人數一度にこみ入つて本意を遂げうぞ。上樣は早業の達人、近習の者どもにも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狹し、夜いくさぢや。うろたへて同士撃すな。

兵　はつ。

行親　一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控へたる者どもに、即刻かゝれと下知を傳へい。

兵一　心得申した。

（一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彥、うかゞひ出づ。）

春彥　大仁の町から戾る路々に、物の具したる軍兵が、こゝに五人、かしこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合點がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によつて、上樣を失ひたてまつる結構な。さりとは大事ぢや。

（遠近にて寢鳥のおどろき起つ聲。下田五郎は橋を渡

りて出づ。）

五郎　常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覺ゆるぞ。念のために川の上下(かみしも)を、一わたり見廻らうか。

春彦　五郎どのではおはさぬか。

五郎　おゝ、春彦か。

（春彦は近きてさゝやく。）

五郎　や、なんと云ふ。金窪の參入は……。上樣を……。確(しか)と左樣か。むゝ。

（五郎はあわたゞしく引返してゆかんとする時、橋の上より軍兵一人、長卷をたづさへて出で、無言にて撃つてかゝる。五郎は拔きあはせて、忽ち斬つて捨つ。軍兵(つはもの)數人、上下より走り出で、五郎を押つ取りまく。）

五郎　やあ、春彦。こゝはそれがしが受け取つた。そちは御座所へ走せ參じて、この趣を注進せい。

春彦　はつ。

（春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮鬪す。）

三

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

（向ふより楓は走り出づ。）

かへで　父樣(とゝさま)。夜討ぢや。

夜叉王　おゝ、むすめ。見て戻つたか。

かへで　敵は誰やらわからぬが、人數はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討をかけましたぞ。

夜叉王　俄にきこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪寺へ夜討とは……。平家の殘黨か。鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大變ぢやなう。

かへで　生憎に春彦どのはありあはさず、なんとしたことでござりませうな。

夜叉王　我々がうろ／＼立騒いだとて、なんの役にも立つまい。たゞその成行を觀てゐるばかりぢや。まさかの時には父子(おやこ)が手をひいて立退くまでのこと、平家が勝たうが、源氏が勝たうが、北條が勝たうが、われ／＼にはかかりあひのないことぢや。

かへで　それぢやと云うて不意のいくさに、姉樣はなんとなされうか、もし逃惑うて過失(あやまち)でも……。

夜叉王　いや、それも時の運ぢや、是非もない。姉にはまた姉の覺悟があらうよ。

（寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出でゝ心痛の體、向ふより春彦走り出づ。）

かへで　おゝ、春彦どの。待ちかねました。

春彦　寄手は鎌倉の北條方、しかも夜討の相談を、測らず木かげで立聽きして、其由を御注進申上げうと、修禪寺までは駈け付けたが、前後の門はみな圍まれ、翼なければ入ることかなはず。殘念ながらおめ〳〵戻つた。

かへで　では、姉樣の安否も知れませぬか。

春彦　姉はさて措いて、上樣の御安否さへもまだ判らぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花を散らして追つ返しつ、今が合戰最中ぢや。

夜叉王　なにを云ふにも多勢に無勢、御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末ぢや。蒲殿といひ、上樣と云ひ、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁みるなう。

（寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかゞひ見る。）

かへで　おゝ、おびたゞしい人の足音……。鎬を削る太刀の音……。

春彦　こゝへも次第に近いてくるわ。

（桂は賴家の假面を持ちて顏には髮をふりかけ、直垂を着て長巻を持ち、手負の體にて走り出で、門口に來りて倒る。）

春彦　や、誰やら表に……。

（夫婦は走り寄りて扶け起し、庭さきに伴ひ入るれば、桂は又倒れる。）

春彦　これ、傷は淺うござりまするぞ。心を確に持たせられい。

かつら（息もたゆげに）おゝ妹……。春彦どの……。父樣はどこぢや。

夜叉王　や、なんと……。

（夜叉王は怪みて立ちよる。桂は顏をあげる。みな〳〵驚く。）

春彦　や、侍衆とおもひの外……。

夜叉王　おゝ、娘か。

かへで　姉さまか。

春彦　して、この體は……。

かつら　上樣お風呂を召さるゝ折から、鎌倉勢が不意の夜討……。味方は小人數、必死にたゝかふ。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面をつけてお身がはりと、早速の分別……。月の暗きを幸ひに打物とつて庭におり立ち、左金吾賴家これにありと、呼はり呼はり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上樣ぞと心得て、うち洩さじと追つかくる。

夜叉王　さては上樣お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、こゝまで斬拔けてまゐつたか。（血に染みたる假面を取りてぢつと視る）

春彦　我々すらも侍衆と見あやまつた程なれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かへで　とは云ふものゝ、淺ましいこのお姿……。姉樣死んで下さりまするな。（取縋りて泣く）

かつら　いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたづらに、百年千年生きたとて何とならう。たとひ半晌一晌でも、將軍家のおそばに召出され、若狹の局といふ名をも給はるからは、これで出世の望みもかなうた。死んでもわたしは本望ぢや。

（云ひかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は假面をみつめて物云はず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ來る。）

僧　大變ぢや、大變ぢや。かくまうて下され、隱まうてくだされ。（内に駈入りて、桂を見て又おどろく）やあ、ここにも手負が……。おゝ、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上樣は……。

僧　お傷はしや、御最期ぢや。

かつら　えゝ。（這ひ起きて屹と視る）

僧　上樣ばかりか、御家來衆も大方は斬死……。わし等も傍杖の怪我せぬうちと、命から〳〵逃げて來たのぢや。

春彦　では、お身がはりの効もなく……。

かへで　遂にやみ〳〵御最期か。

（桂は失望してまた倒る。楓は取付きて叫ぶ。）

かへで　これ、姉さま。心を確に……。なう、父樣。姉さまが死にまするぞ。

（今まで一心に假面をみつめたる夜叉王、はじめて見かへる。）

夜叉王　おゝ、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もまた本望ぢや。

かへで　えゝ。

夜叉王　幾たび打ち直してもこの面に、死相のあり〳〵と見えたるは、われ拙きにあらず。鈍きにあらず、源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめて覺つた。神ならでは知しめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ。伊豆の夜叉王、われながら天晴天下一ぢやなう。（快げに笑ふ）

かつら　（おなじく笑ふ）わたしも天晴れお局樣ぢや。死んでも思ひ置くことはない。些とも早う上樣のおあとを慕うて、冥土のおん供……。

夜叉王　やれ、娘。わかき女子が斷末魔の面、後の手本に寫しておきたい。苦痛を堪へてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春彦　はつ。

（泰彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち來る。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王　娘、顔をみせい。

かつら　あい。

（桂は泰彦夫婦に扶けられて這ひよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模寫せんとす。僧は口のうちにて念佛す。）

——幕——

伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず、由來もしれず、木彫の假面にて、年を經たるまゝ面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懷してこの稿成る。

おさだの仇討（二幕四場）

登場人物

同　　心　貝塚藤五郎
和 泉 屋　伊 兵 衞
和泉屋の悴　伊 之 助
糸屋の番頭　文　　吉
御 旅 の　寅　　藏
寅藏の女房　お さ だ
花　　賣　與右衞門
和泉屋の抱へ女　お 駒
和泉屋の若い者　庄 八
お駒の弟　德　　松
手　　先　長 次 郎
ほかに寺男、湯灌場買ひ。町役人。番太郎の男。
自身番の男。和泉屋の若い者、和泉屋の抱へ女。
手先。乞食。會式まゐりの男、女。町の男、女、
子供など。

第一幕

一

江戸の末期。十月十二日の曉。
品川宿の往來。正面は旅籠屋——その時代の遊女屋——にて、出入り口には和泉屋と染めたる柿色の暖簾を垂れ、左右は千本格子、格子の外には用水桶を積んであり。ほかに床几一脚あり。家は二階作りにて、二階の闌干は往來に向ひ、内には障子が閉めてあり。薄く浪の音、題目太鼓の音きこゆ。

（店の前には和泉屋の若い者二人、ひとりは水を打ち、ひとりは箒を持つてゐる。）

若者甲　けふのお會式はどうか降らしたくねえものだな。

若者乙　夜の明けねえうちから太鼓の音が威勢よくきこえるやうだ。こゝらぢやあお會式は一年中の書き入れだから、降られちやあ型無しだ。

若者甲　まつたく降られちやあ型無しだ。（空をみる）好い鹽梅に天氣は持直しさうだよ。

（池上の會式詣の男四五人、首に法華の珠數をかけ、團扇太鼓を持ちて、向ふより走り出づ。）

男一　お捕物だ、お捕物だ。

男二　そば杖を食はねえうちに通りぬけてしまへ。

（一同はあとを見かへりて、わや／＼云ひながら上の方へ急ぎ去る。）

若者甲　（向ふをみる）なるほどお捕物がこつちへ追ひ込んで來るらしいぞ。

若者乙　かゝり合にならねえやうに引込んでゐようぜ。

若者甲　さうだ、さうだ。

（若い者ふたりは暖簾の内に入る。向ふより御旅の寅藏、三十一二歲、やじり切りのお尋ね者、旅すがたにて逃げて來るを、手先二人が追つて出づ。）

寅藏　人ちがひでございます。人違ひでございます。

手先甲　えゝ、そんな事はあとで云へ。

二人　御用だ、御用だ。

（手先に寅藏をおさへようとする。向ふより八町堀同心、貝塚藤五郎、三十五六歲、十手を持ちて追つて出づ。）

藤五郎　逃すな。逃すな。（寅藏に）神妙にしろ。

（藤五郎に聲をかけながら見戍つてゐる。寅藏は隙をみて逃げようとするを、手先は追ひまはす。和泉屋の若い者は暖簾のあひだより首を出して窺ふ。二階の障子をあけて、抱へ女郎お駒、ほか三四人の女が欄干[てすり]に縋りながら見おろしてゐる。そのうちに、寅藏は懐中より匕首をぬき出して手先乙の胸を突けば、乙は倒れる。手先甲もつゞいて小鬢を斬られる。）

藤五郎　えゝ。手向ひするか。

（藤五郎は十手を把り直して立向へば、寅藏は必死になつて斬つてかゝる。このとき二階に見物してゐたるお駒は自分の穿いてゐる草履の片足をぬいで、上より寅藏の顔に打ちつける。それが恰ど寅藏の眼に中りて、思はず立ち竦むところへ、藤五郎は踏み込んでその眉間を打てば寅藏は倒れる。）

藤五郎　さあ、じたばたするな。馬鹿野郎め。

（藤五郎は寅藏をおさへ付ければ、手先甲も手傳ひて繩をかける。）

藤五郎　（甲に）どうだ。ひどく遣られやあしねえか。

手先甲　（ふところ紙で小鬢を押へながら）なに、大したことでもありません。（乙をみかへる）こいつが胸を遣られたやうです。

藤五郎　早く手當をしてやれ。

手先甲　（若い者に聲をかける）おい、誰かゐねえか。

（若い者甲乙出づ。）

手先甲　この怪我人を連れ込んでくれ。

（奥より若い者兩出で、甲乙と共に手先乙を介抱しながら奥へ連れ込む。二階の女等も障子をしめ内に入る。）

藤五郎　（店さきの床几に腰をかける）どすたんぞ振り廻しやあがつて飛んでもねえ奴だ。貴樣もまんざらの素人でもねえくせに、野暮な眞似をするな。一體どこの何者だ。

（寅藏は俯向いて默つてゐる。）

手先甲　さあ、素直に申上げてしまへ。

（寅藏はやはり默つてゐる。）

藤五郎　（笑ふ）はゝ、こりやあうつかり云へねえかも知れねえ。それぢやあおれの方から敎へてやる。貴樣は御殿の寅藏だな。

（寅藏はぎつくりする。）

藤五郎　けふは池上のお會式だから、お詣りながらぶらぶら出て來ると、蒲田の茶店に休んで草履を草鞋に穿きかへてゐる奴が、どうもお尋ね者の寅藏らしいと思つたから、聲をかければすぐに逃げる。追つて來れば得物をふりまはす。それで人違ひでもねえものだ。さあ、痛い目をしねえうちに早く云つてしまへ。

寅藏　（覺悟して）恐れ入りました。

藤五郎　むゝ。たしかに家尻切りの寅藏だな。草鞋を穿いてどこへ羽を伸さうとしたのだ。

寅藏　江戸は御詮議がきびしいので、當分は草鞋をはいて、東海道から大阪の方を廻つて來る積りでございました。

藤五郎　それを品川の出口で妨げられちやあ、ちつと氣の毒だつたな。貴樣は今までどこに巣を食つてゐた。

寅藏　友だちの家なぞをごろ付いて居りまして、別にきまつた宿といふのもございません。

藤五郎　むゝ。それはまあ追つての詮議として……。（左右をみかへる）内の奴等は誰もゐねえか。

手先甲　（奥に向つて呼ぶ）おい、おい。みんな隱れてゐねえで出て來い。

（暖簾の内より若い者甲乙出づ。）

藤五郎　これ。（落ちてゐる草履を指さす）あの草履の主はなんといふ女だ。

若者　はい、はい。（草履を拾つてながめる）間ちがひの無いやうに、よく調べてまゐりませう。しばらくお待ち下さいまし。

（若い者甲は草履を持ちて奥に入る。）

手先甲　なるほど二階からあの草履を抛り付けた女がありましたね。

藤五郎　いづれこゝの家の女だらうが、氣のきいた奴だ。

寅藏　旦那方の前でこんなことを云つちやあ濟みませんが、あんな加勢が出て來なけりやあ何とか斬り抜けることも出來たんですが……。（殘念さうに二階をみあげる）なにしろ、二階からだしぬけに眼つぶしを食つたので、

流石のわつしもおこ付いてしまひました。

藤五郎　それがいはゆる運の盡きだ。未練らしく人を恨むな。

寅藏　まつたく運の盡きで誰を恨むこともございません。お捕物の加勢をした女に、たんと御褒美を遣つてお與んなさいまし。

手先甲　（若い者をみかへる）なにをしてゐるのだ。まだ判らねえのか。

若者乙　はい、はい。

（若い者乙は奥へ行かうとする時、暖簾の内より若い若甲はお駒を連れて出づ。）

若者甲　どうもお待たせ申しました。

藤五郎　むゝ。その女か。前へ出ろ。

お駒　はい。（躊躇してゐる）

手先甲　旦那があゝ仰しやるのだ。遠慮なしに出ろ、出ろ。

（お駒は進み出づ。）

藤五郎　おまへの名は……。

お駒　駒と申します。

藤五郎　むゝ、お駒か。年は幾つだ。

お駒　十八でございます。

藤五郎　なんと思つて、二階から草履を投げた。

お駒　（口籠りながら）なんと云ふこともございませんが……。朋輩衆と一緒に二階からお捕物をみて居りますうちに……。（寅藏をみかへる）その人が刃物をぬいて、お捕方をみんな斬つたやうでございますから、思はず知らず草履を把りまして……。飛んだ出過ぎたことを致しまして、なんとも恐れ入りましてございます。

藤五郎　いや、恐れ入ることはねえ。氣の利いた女だと褒めてゐたのだ。捕方に加勢して首尾よく罪人を取押へたものにはお褒めがある。その働き方に因ては御褒美を下さることになつてゐる。ましてお前は男でない。勤め奉公の身で、御用の加勢をしたといふのは奇特のことだ。

若者乙　では、お駒さんにお叱りはございませんか。

藤五郎　叱るどころか、この事を上へ申立てたら、奉行所へお呼び出しの上で御褒美を下さるかも知れねえ。なにしろ奇特の女だ。よく働いてやれと主人にも云ひ聞かせろ。

若者　はい、はい。（二人は頭を下げる）

寅藏　（お駒に）おい、姐さん。お駒さん。おれは決しておめえを恨んぢやあゐねえ。おめえは全く感心な女だ。お上に對して忠義者だ。たんと御褒美を遣つて下さいと、今も旦那にお願ひ申して置いたぜ。（お駒を睨む）

藤五郎　なぜ忌な眼をして睨むのだ。それがやつぱり未練といふものだぞ。貴樣も江戸つ子ぢやあねえか。さあ、

男らしく立て、立て。
寅藏　わつしも御旗の寅藏でございます。決して未練は申しません。
手先甲　未練がなければ早く行け。
寅藏　え〻、まゐります、まゐります。(起ちあがる)
藤五郎　(若い者に)朝つぱらから店さきの騒動をしたな。如才もあるめえが、淨めてくれ。
手先甲　すぐに又出直して來るから、怪我人をもう少し頼むよ。
(藤五郎は先に立ち、手先甲は寅藏の繩を取つて向ふへ引立て〻ゆく。暖簾の内より和泉屋の亭主伊兵衛出づ。あとより若い者丙は盆に藥をのせて出づ。)
伊兵衛　まだ御挨拶に出ないうちに、旦那方はもうお引揚げになつたのか。
若者甲　たつた今お引揚げになりました。
伊兵衛　怪我人をあ〻して置いてはいけない。早く醫者を呼んで來い。
若者乙　はい、はい。(上の方へかけてゆく)
お駒　(す〻み寄る)旦那。
伊兵衛　なんだ。
お駒　わたしは悪いことをしたのぢやありませんかねえ。
伊兵衛　なに、悪いことがあるものか。お上に對して立派に御奉公を勤めたのだ。あんな奴等はお召捕りにさせるのが天下の爲だ。
お駒　わたしが草履をぶつけなければ、あの人は無事に逃げられたのかも知れませんね。
伊兵衛　それだからお前の手柄だといふのだ。おまへのお蔭で、おれも世間に鼻が高い。又それが評判になつて、おまへも屹と賣れつ子になるだらう。まあ、なんにしても目出度いことだ。
若者甲　まつたくお駒さんは大手柄でございました。
伊兵衛　しかし、繩附きの出たあとだ。よく淨めて置け。
若者丙　はい、はい。
(若い者は店さきに鹽花をまく。向ふより會式詣の一群、大萬燈を先に押立て、男女打ちまじりて團扇太鼓を賑やかに叩き立てながら、上のかたへ行き過ぎる。)
伊兵衛　は〻、威勢よく繰出して來る。けふのお會式は大當りだな。
(伊兵衛は笑ひながら内に入る。お駒はまだ氣の濟まないやうな顔をして續いて入る。)

——舞臺暗轉——

二

本所、中の郷、法常寺門前の花屋。上のかたに黑塗り

の寺の門あり。それにつゞいて竹緣附の小さき家。正面の上のかた(かみ)に古びたる佛壇、その下は押入れにて、佛壇には新しき白木の位牌をかざり、燈明や線香などを供へてあり。奥へ出入りの古障子、破れたる貝壁。よきところに爐を切つてあり。緣さきには樒を入れし桶や線香をならべてあり。下のかたは古き卒塔婆をゆひ込みし玉椿の生垣にて、垣のうちは墓場と知るべく、生垣(いけがき)を隔てゝ石塔卒塔婆などみゆ。垣の前には井戸、こゝにも樒を入れたる手桶をならべ、井戸のそばには芽出し柳の立木あり。寺の内にて木魚の音さびしくきこゆ。

(第一場の翌年、三月はじめの夕暮。湯灌場買ひ市助は秤と鐵砲笊を持ち、緣に腰をかけて烟草をのんでゐる。やがて寺の門内より花屋與右衞門が先に立ち、あとよりおさだは廿五六歳のむすび髮、ほかに乞食のやうな男二人出づ。男のひとりは蓙背おひ棒を持つ。)

與右衞門　やれ、やれ、これで安心した。

おさだ　(男どもに)どうも色々ありがたうございました。

(紙につゝみし銀(かね)を出す)　ほんの少しですけれど、これでまあ一杯飲んでください。

男一　これは有難うございます。(男二に)　おめえもお禮をいへよ。

男二　姐さん、どうも有難うございました。

與右衞門　皆さん、御苦勞でした。(聲をひくめる)　云ふまでもないが、この事はどうぞ内分にな。

男一　そりや如才なく呑み込んでゐますよ。

(男二人は挨拶して下のかたへ去る。)

市助　お弔ひはもう濟みましたかえ。

與右衞門　おゝ、市助さん。さつきから來てゐなすつたのか。

市助　なんだか差荷ひの投げ込み。(云ひかけておさだに遠慮する)　いや、日が暮れかゝつてお弔ひがあるらしいのを遠目に見たから、何か商賣はないかと思つて、すぐにあとを追つかけて來ましたのさ。

おさだ　おまへさんは……。

與右衞門　これは湯灌場買ひの市助さんと云つて、わたしとは久しいおなじみだ。(市助に)　あの早桶には新しい浴衣がかけてあるから、早く行つて重さんに相談するがいいよ。

市助　ところが、あの穴ほりめ。欲張つてばかりゐるので、なかなか相談がむづかしい。まあ、なにしろ行つてみませう。

(市助は門内に入る。)

おさだ　あの人も抜け目がないね。

與右衞門　人間は好い人だが、商賣にかけちやあ抜け目がな

い。（云ひかけて）時におまへさんは寒くないかえ。
おさだ　今までは暑いか寒いか知らなかつたが、落付いてみると急に薄ら寒くなつて來たやうですよ。もう三月で、土手の櫻もそろ／＼咲き出すといふのに、今年はどうも陽氣が惡いやうですね。
與右衛　取分け今日は曇つてゐるので、日が暮れかゝると猶さら薄ら寒い。ちつと圍爐裏の火でも焚くとしようか。いや、それよりも燈火をつけなければならない。
（與右衛門は障子をあけて奥に入る。おさだも續いてあがり、佛壇に線香をそなへて拜んでゐる。やがて奥より與右衛門は燈けたる行燈をともして出で、おさだが一心に拜んでゐるのを見て、ほろりとしながら無言で其の前にゆき、紙衣を折り換へてゐる。鐘の聲きこゆ。おさだは拜み終りて、爐のそばに來る。）
おさだ　あゝ、もう日が暮れてしまつたねえ。をぢさん。
（摺寄る）
與右衛　なんだね。
おさだ　今夜はさびしうござんすねえ。
與右衛　どうでこゝらの寺門前だから、夜はいつも寂しいにきまつてゐるが、わたしも今夜は一倍さびしいやうだ。併しおさださん、おまへさんのおかげで寅藏めのお仕置（しおき）骸を引き取つて來て、このお寺の隅に埋めて貰ふことが出來たので、わたしはどんなに嬉しいか知れませんよ。
おさだ　どうで寅さんの命はないものと、疾うから諦めてゐたものゝ、先月いよ／＼お仕置がきまつて、引きまはしの上獄門と聞いたときには、あたしも今更のやうに悲しくなりましたよ。（眼をふく）
與右衛　（聲をうるませる）あんな厄雜者（やくざもの）はさうなるのが當り前だと、あきらめて見てもやつぱり涙の出るのが叔父甥の人情だ。ましてお前さんの身になつたら悲しいのも無理はない。それにしても、お前さんがしつかりしてゐるので、仕置場の番人に渡りをつけて、小塚ッ原からこつそりと死骸を引き取つてくれたので、あいつの死骸は野良犬の餌食にもならず、たとひ投げ込み同樣でも人間並の弔ひが出來たといふものだ。
おさだ　なにが仕合せになるか判らないもので、おまへさんがこゝの花屋をしてゐるので、お寺の和尚さんにおねがひ申して、墓場のあき地へ内證で埋めて貰つたのですが、叔父さんが傍に附いてゐてお呉んなされば、お線香や花の絶える心配も無し、寅さんもどんなに喜んでゐるか知れません。これもやつぱり叔父甥の縁が深いんでせうね、生きてゐるうちに散々御苦勞をかけて、死んだあとまで御面倒をかけちやあ、あんまり義理が惡いやうで

すけれど……　ねえ、叔父さん。寅さんに代つてあたしが幾重にもお願ひ申しますから、お墓のまはりに草の生えないやうにどうぞ氣をつけて下さいよ。（しみ〴〵云ふ）

與右衞　生きてゐるうちは世間に迷惑をかけ、親身の叔父にも苦勞をかける、憎い奴だと思つてゐたが、お仕置をうけて死んでしまへば、あいつの罪は消えたも同然だ。おまへさんに頼まれないでも、わたしに取つては唯つた一人の甥だから、朝に晩に香花をそなへて、乾と後生を祈つてやります。それは心配しなさらないがいゝ。

おさだ　何分おねがひ申します。

（おさだは眼をふいてゐる。門内より市助が鐵砲笊に浴衣を入れて出づ。あとより穴ほりの寺男重太が鍬を持つて追つて出づ。）

重太　やい、やい。この泥坊め、生けつ太てえ奴だ。

市助　なにが泥坊だ。人聞きの惡いことをいふな。

（重太は笊のなかより新しい浴衣をひき出して、市助に突きつける。）

重太　これ、見ろ。この新らしい浴衣を唯つた六十四文とは何のことだ。いくら湯灌場買ひでも、賣りもの買物には相場があるものだ。唯同樣に人の物をかつ攫つて行く奴は泥坊に違げえねえぞ。

市助　世間の相場で物を買ふくらゐなら、誰が湯灌場なんぞへ商賣に來るものか。貴樣こそ死人の上前を取りやあがつて、泥坊よりも猶惡いぞ。

重太　えゝ、貴樣こそ泥坊だ。それが口惜しけりやあ、もう三百出せ。

市助　べらぼうめ、だれが三百出す奴があるものか。さあ、おれの買ひ物をこつちへよこせ。（浴衣をひつたくる）

重太　まだ賣りやあしねえぞ。

（市助は浴衣を持つて行かうとするを、重太は渡すまいと爭ひ、たがひに引き合ふうちに浴衣の袖は千切れて、ふたりはそれを摑みしまゝにて倒れる。）

おさだ　仕樣がないねえ。（縁を降りる）もし、お前さん達も隨分慾張つてゐるぢやあないか。もう好い加減におしなさいよ。

重太　姐さんはまだこゝにゐたすつたか。お施主の見てゐる前でこんな喧嘩をしちやあ些つと極まりが惡いが、この野郎があんまり人を踏み付けにしやあがるから、つい腹も立つのさ。

市助　今までは斯うでもなかつたが、こいつ此頃は死に慾がかはいて來やあがつた。

重太　そりやあこつちで云ふことだ。

（ふたりは又詰めよるを、おさだは隔てる。）

おさだ　まあ、い〻と云ふのに……。こんなところを見せられると、あたしはこの着物を人に渡すのが何だか氣の毒になつて來た。

二人　え。

おさだ　と云つて、おまへさん達に損をさせちやあ氣の毒だから、これはあたしが買ひ戻しますよ。

（おさだは一朱銀を二つ出して、重太と市助に分けて遣る。）

重太　お前さんにはさつきも貰つて又貰つちやあ、あんまり氣の毒だな。

市助　わたしも一朱といふ金を、唯貰つちやあ何だか氣が濟まないやうだ。

おさだ　なんでもい〻から、それで穏かに別れて下さい。その代りに、これはあたしが受取りますよ。（着衣をか〻へる）

重太　これぢやあお辭儀なしに貰つて置くかな。どうもたびたび有難うございました。

（重太はさも嬉しさうに、門内へ早々に立去る。）

市助　（與右衛門をみかへりながら）これぢやあわたしも貰ひませうか。おかげさまで一日の立ち前になりました。與右衛門さん、おまへさんからもよくお禮を云つてください。

與右衛門　はい、はい。なんだかお天氣模様がをかしくなつたやうだ。降らないうちに早く歸りなさい。

市助　皆さん、御免なさい。

（市助は下のかたへ立去る。時の鐘きこゆ。暮の鐘。おさだは袖のちぎれた着衣をか〻へて床に腰をかける。與右衛門も筵の前を離れて出る。）

與右衛門　あの人たちに一朱づつは多過ぎる。ふたりのあたまへ一朱で澤山だつた。

おさだ　これもみんな佛への御供養だと思へばい〻んですよ。

與右衛門　小塚ッ原の番人へ渡りを付け、それから弔ひや何や彼やで、隨分の金を使つたやうだが、お前さんはどうしてそれを工面したのだ。

おさだ　貫さんの一件が落着するまでは、どうすることも出來ませんから、今日まで賣り喰ひ、ちつとばかり殘つてゐた頭の物や着るものを一纏めにして拂つてしまつて、どうにかかうにか無事にお弔ひも出來ましたのさ。

與右衛門　（ため息をつく）それぢやあもう何んにもないのか。

おさだ　お恥かしいお着たきり雀で……。（さびしく笑ふ）かうなると、女はいくぢがありませんねえ。

與右衛門　（眼をしばたゝいて）これほどまでに貫の奴めを思つてくれたのか。

おさだ　叔父さんの前ですけれど、これが悪縁とでも云ふのでせうよ。

與右衛　押借り騙りから家尻切りと、悪事をかされた人間に、不憫を加へるのはこの叔父ひとりかと思つてゐたら、おまへさんのやうな立派な姐さんがそれほどまでに……。あいつもよく／＼の仕合せ者だ。

おさだ　なにが仕合せなもんですか。おたがひに因果同士が寄合つたのでせうよ。

與右衛　さうして、お前さんはこれからどうする積りだね。身の振方の付くまでは、こんな穢い家でよければ、いつまでも泊つてゐなさいよ。

おさだ　御親切はありがたうございますが、寅さんの型が付いてしまつたら、これから又、次の仕事に取りかゝらなければなりませんから、もうすぐにお暇にしませう。(云ひながら浴衣をみる) 早桶の上へ着せて來たものは穴掘りの儲け物で、どうで湯灌場買ひの手に渡ろとは知つてゐながら、眼のまへで賣り買ひをされると、あんまり心持がよくないから、一朱づつ遣つて引取つたが、こんなものを抱へてゐても仕様がない。いつそ思ひの残らないやうに、こゝで燒いてしまひませうかねえ。

與右衛　燒いてしまふのも無駄なやうだが、お前さんがさう思ふなら、それも好からう。(爐をみかへる) こゝで燒くかね。

おさだ　家のなかぢやあ何だから、表で燒くことにしようぢやありませんか。

(おさだは緣にあがり、與右衛門に手傳つて、粗朶の火を庭さきに持ち出して積む。蛙の聲。)

與右衛　陽氣が悪いの、寒いのと云つても、やつぱり時節は爭はれない。どこかで蛙が鳴いてゐるやうだ。

おさだ　去年向島へお花見に行つた歸りに、寅さんと一緒にこゝの家へ寄つたことがありましたが、その時にも蛙がさう／″＼しく鳴いてゐましたねえ。

與右衛　むゝ、あんまり騒々しくつて話が出來ねえと云つて、寅の奴め、むやみに怒りやあがつたつけ。あいつも我儘な奴だつたな。お前さんにもさぞ我儘を云ひましたらうね。

おさだ　あたしの方でも隨分我儘を云ひましたよ。(ほろりとして) さあ、叔父さん (ちぎれたる片袖を出す)

與右衛　わたしがこれを燒くのか。あい、あい。

(與右衛門は浴衣の片袖を焚火に入れる。その燃える煙を二人はぢつと眺めてゐる。薄く雨の音。蛙の聲。)

おさだ　この浴衣は去年の夏あの人にこしらへて遣つて、どうしてか一度も手を通さなかつたんですよ。やつぱりこんな事になる知らせだつたのかも知れませんね。

與右衛　さうかも知れないな。

（おさだは抱へてゐる浴衣を火に入れる。浴衣は燃えあがる。）

おさだ　なんだかお迎ひ火でも焚いてゐるやうですね。

與右衛　まつたくお盆でも來たやうだ。（口のうちで）なむ阿彌陀佛。

（ふたりは思はず手をあはせて、その烟を拜む。）

おさだ　あゝ。どう考へてもさびしいねえ。（再び椽に腰をかける。）

（與右衛門は井戸端より手桶を持ち來りて、柄杓の水を迎火にかける。）

與右衛　これぢやあいよ／＼お迎ひ火だ。

おさだ　（たちよる）叔父さん。あたしはもう歸りますよ。

與右衛　もう歸るかえ。（空をみる）たうとうぽつ／＼降つて來たやうだ。番傘でも貸してあげよう。（椽にあがる）

おさだ　なに、ようござんすよ。こんな着物を着てゐるんだから、ちつとぐらゐ濡れたつて構ふもんですか。

（おさだは身仕度をし、頬かむりをする心にて手拭を出す。）

與右衛　わたしはさつきから考へてゐたのだが……。お前さんはこれから次の仕事に取りかゝると云つたが、一體これから何をする積りだね。

おさだ　亭主を見送つてしまつたら、これから尼にでもなる筈でせうが、あたしのやうな者にはそんな悟りも開けませんからねえ。（笑ふ）

與右衛　さうだ。さうだ。今の若さに尼なんぞになるのは止めた方がいゝよ。

おさだ　（思案して）なんにも云ふまいと思つてゐたんですけれど……。叔父さんがそんなに心配して下さるなら……。いつそお前さんだけには……。

與右衛　云つて差支へのないことなら、どうぞ聞かせて貰ひたいな。

おさだ　みだらず他言は御無用ですよ。

（おさだは摺寄つて與右衛門の耳にさゝやけば、與右衛門はびつくりする。それを突き退けるやうに、おさだは衝と起ちあがる。）

おさだ　さよなら。

（云ひ捨てゝ下の方へ足早に立去らうとするを、與右衛門はあわてゝ追ひかけて引き戻す。）

與右衛　まあ、待つてくれ、待つてくれ。

おさだ　話はもうそれぎりですよ。

與右衛　いや、その話がいけないのだ。まあ、ちよいと戻つてくれ。（無理におさだを引き戻して來る）お前そんな心得違ひをしてはならない。寅があゝなつたのは自業自

得だ。決して人を恨んではならない。第一おまへの爲にもならない。そればかりはわたしが頼むから、どうぞ止めてくれ、やめて呉れ。

おさだ　大方そんなことだらうと思ひながら、ついおしやべりをしてしまつて、悪いことをしたねえ。叔父さん、まあなんにも聞かない積りで歸してくださいよ。

與右衛　ほかの事とは譯が違つて、一旦聞いた以上はどうして聞き流しになるものか。これ、今もいふ通り、寅があゝなつたのは自分の心柄で、人を恨むのは間違つてゐる。まして其の仕返しをしようなぞと云ふのは、世のことわざにもいふ外道の逆恨みだ。

おさだ　逆恨みでも何でもかまはない。あたしはもう鬼になつたんですよ。

（おさだは突き退けて行かうとするを、與右衛門は又ひき戻す。おさだはじれて與右衛門を突き倒し、手拭をかぶりて向ふへ走り去る。與右衛門は倒れながらにあとを見送る。薄く雨の音。蛙の聲。）

――幕――

第二幕

一

第一幕とおなじ年、十月の夜。

品川、和泉屋の二階、お駒の部屋。平舞臺にて、正面の上の方に床の間。それにつゞいて夜具戸棚、その下にはきめ込みの簞笥、茶簞笥などあるべし。よきところに長火鉢を据ゑ、衣桁にはぬぎ捨ての部屋着がかけてあり。屏風の外に行燈あり。屏風をたて廻して、そのなかには寝床あり。上のかたは壁にて仕切り、隣には他の部屋のあるこゝろにて、前づらの障子には灯の影が映つてゐる。下のかたはお駒の部屋の入口にて塗骨の障子を閉め、障子の外は廊下にて、火の用心と記せる掛行燈あり。下の方に梯子のあがり口あり。かすめて騒ぎ唄きこゆ。

（お駒の客文吉、芝の糸屋の番頭、四十歳ぐらゐ。寝まき姿にて長火鉢の前に坐り、長煙管で煙草をのんでゐる。廊下づたひにわかい者庄八は油さしを持ちて出づ。）

庄八　御免ください。（障子をあける）お油をさしに參りました。（行燈に油をさしてゐる）

文吉　庄どん。今夜はあんまり賑かでないやうだね。

庄八　どういふものか、今夜はさびしうございます。なにしろ賣れつ子のお駒さんに名代がないくらゐですからね。

文吉　わたしも隨分足を近く通つて來るが、お駒に廻しの無いといふのはめづらしいことだ。

庄八　かういふ晩はまつたく珍らしうございますよ。(屏風の方をみて）そこで、お駒さんは……。

文吉　よく寢てゐるやうだ。

庄八　おまへさんがあんまり飮ませたんぢやありませんか。

文吉　お駒は酒が弱いね。

庄八　おとなしい人をつかまへて、無理に醉はせちやあいけませんよ。(笑ひながら）まあ、おやすみなさい。

文吉　いや、もうそろ／＼歸り仕度だ。(笑ふ）お店者は辛いよ。

庄八　お察し申します。

文吉　酒がさめたら何だか薄ら寒くなつて來た。やがてもう九つだらうな。(起つて廊下へ出る）

庄八　お手水でございますか。

文吉　むゝ。

(文吉は便所へゆく心にて階子を降りてゆく。庄八も廊下づたひに去る。時の鐘。ほかの座敷の歌澤の聲きこゆ。)

唄「よるの雨、もしや來るかと臺算、紙でかへるの呪ひも、蟲が知らせて、ともしびの、丁子も飛んだ今時分、氣まぐれさんすか、ぬしの聲。

(この唄のあひだに、おさだが忍び出づ。おさだはこの店の内藝者の風俗。お駒の部屋をうかゞひて忍び入り、行燈をかた寄せて屏風のうちを覗き、衣桁にかけたるお駒のしごきを取りて屏風のうちに入る。やがて文吉は階子をあがりて部屋の入口に來る。おさだは屏風より出で、文吉と顏を見合せて、はッとする。)

文吉　おゝ、おさだか。

(おさだは顏をそむけて默つてゐる。)

文吉　わたしはもう歸るから、下へ行つて駕籠を呼ぶやうに頼んで呉れないか。

おさだ　はい、はい。

文吉　もうすぐに仕度をするから、お駒を起してくれ。

(おさだは度胸を据ゑて進みよる。)

おさだ　歸るにしても、まあ上り花の一杯も飮んでおいでなさいよ。お駒さんは今起しますから。

(おさだは文吉を長火鉢の前に坐らせ、茶をいれる仕度をする。)

おさだ　今夜は大層急ぐんですね。

文吉　今夜はいつもより少し遲くなつたのだ。もう九つだ

らう。

おさだ　九つでも八つでもいゝぢやありませんか。お前さんに少し話したいことがあるんですよ。（茶をついで出す）ちつと温(ぬる)いかも知れませんよ。

（文吉は茶をのむ。おさだは立つて部屋の外をうかゞひ、又引返して来る。）

おさだ　ねえ、お前さんはあたしのやうな者をつかまへて、ふだんから何の彼のと冗談をお云ひなさるが、ありやあ本気ですかえ。

文吉　（笑ひながら）本気だよ。

おさだ　からかふのぢやありませんか。

文吉　なんでお前にからかふものか。

おさだ　だつて、お前さんはそこにお駒さんといふ可愛い人があるぢやありませんか。

文吉　お駒はこんな稼業をしてゐる女のやうでもない、野暮臭いので面白くないよ。

おさだ　うまくお云ひなさるよ。（そこにある長煙管をふりあげる）それだからお前さんは憎らしい。

文吉　いや、本当だ。おまへも知つてゐる通り、あのお駒は去年の十月、御旗の寅蔵といふ家尻切りがこゝの店の前でお捕物になつたときに、二階から草履を叩きつけて、その寅蔵に眼つぶしを食はせたといふので、お奉行所へお呼び出しになつて、青緡(あをざし)二貫文とかの御褒美を頂戴したことがある。

おさだ　（うなづく）お奉行所から御褒美を頂いたのが大層な評判になつて、宿場の女にはめづらしいといふので、よるも昼もお客の絶え間がなく、年は若くつてもこゝの店では、二枚目より下にはさがらない売れつ子になつてしまつたんですよ。お前さんもそれで斯うして通つて来るんでせう。

文吉　わたしもお駒の評判を聞いて、話の種にと一度遊びに来たのが病みつきで、この春頃から随分通つて来たのだが、なんだか野暮臭いところがあつて、長く附き合つてゐるとだん／＼に面白味が薄くなる。そこへお前のやうな粋な年増が……。まつたくお前のやうな女をこんな宿場の飯盛者なんぞにして置くのは、掃き溜めに鶴といふものだ。

おさだ　およしなさいよ。又からかふのは……。

文吉　おまへも疑ひ深い。からかふのでは無いといふのに……。

おさだ　乾度ですか。

文吉　あゝ、乾度だよ。

おさだ　ぢやあ、おまへさん。

（おさだは文吉の手を把つて、屏風の外へ連れて来

る。）

おさだ　あたしのやうな者にどんな見どころがあるのか知りませんが、お前さんは乾とこのお駒さんを振捨てゝ、あたしを可愛がつてくれるんですね。

文吉　かうなればお駒なんぞはどうでもいゝ。きつとお前を可愛がるよ。併しそんなにわたしの方ばかりに念を押して、おまへの方は大丈夫かえ。

おさだ　大丈夫か大丈夫でないか。さあ。確な證據をみせますよ。

（おさだは文吉の手を引いて、屏風のなかを覗かせると、文吉はあつと驚いて逃げかゝるを、おさだは押へる。）

おさだ　おまへさん。逃げちやあいけませんよ。

文吉　（ふるへながら）こ、これはどうしたのだ。

おさだ　見れば判るぢやありませんか。

文吉　おまへが殺したのか。

おさだ　（落ちついて）はい。あたしがお駒さんを殺しましたよ。

文吉　（いよ／＼顫へる）な、なんでそんな怖ろしいことをしたのだ。

おさだ　お前さんのせゐですよ。

文吉　え。

おさだ　お駒さんはこの店でも評判の賣れつ子。あたしはしがない内藝者の身分で、どう張合つたところで勝てる筈は無し、そんなことが御内所に知れゝば、あたしは逐ひ出されるに決まつてゐますから、いつそ一と思ひにお駒さんを殺して、おまへさんをあたしの物にしようと思ひつめたんです。（泣く）定めて怖ろしい奴だとびつくりしたでせうが、もう斯うなつたら仕方がない。飛んだ者にみこまれたと諦めて、おまへさんもあたしの味方になつて下さい。

（文吉は顫へながら黙つてゐる。）

おさだ　いやですか。（屹と睨む）そんならあたしを引摺つて行つて、和泉屋のおさだは人殺しをしましたと、代官所へでも何でも訴へてください。さあ、どこへでも連れて行つて下さいよ。

（おさだは身を摺りつける。文吉はやはり黙つてゐる。）

おさだ　その代り、覺悟しておいでなさい。お前さんが何と云はうとも、あたしの口一つで乾とおまへさんを道連れにして行きますよ。

文吉　途方もない。な、なんでわたしが……。

おさだ　いゝえ、いゝえ、あたしの云ひ取り次第で、乾とおまへさんを同類にしてみせます。それを覺悟なら、さ

あ、お訴へなさい。どこへでも連れておいでなさい。

（おさだは文吉の手を取りて引立てようとすれば、文吉は途方に暮れる。）

文吉　まあ、待つてくれ、待つてくれ。

おさだ　それぢやああたしの味方になつて、今夜のことを隠してくれますか。

文吉（ため息をついて）隠し負せるだらうか。

おさだ　別にむづかしい事はない。おまへさんが手水場へ行つてゐる留守に、だれかゞ忍んで來て絞め殺したと云へばいゝぢやありませんか。あたしが前から趣向して、二階の障子窓を毀して置きましたから、そこから誰かゞ忍び込んで來たと思ふに違ひありませんよ。

文吉（不安らしく）それで濟むだらうか。

おさだ　濟むも濟まないもお前さんの口次第でさあね。あたしが出て行つたあとで、おまへさんが大きな聲で人を呼ぶんですよ。さうして、自分の留守のあひだに、お駒さんが絞め殺されてゐたと本當らしく云ふんですよ。誰だつて正直にお前さんが殺したと思ふ者はありますまい。ましてあたしが殺したと氣のつく者はありませんよ。

文吉　さうだらうか。

おさだ　あたしは不斷から人一倍にお駒さんと仲好くしてゐたんですから、猶さら疑ふ者はない筈です。細工は流流、まあ度胸を据ゑて遣つて御覧なさい。ようござんすか。

文吉（絶體絶命で）むゝ。

おさだ　しつかり頼みますよ。そこで少し待つてください。

（おさだは部屋の箪笥のひきだしを明けて、袱紗につつみし草履を出す。）

おさだ　御覧なさい。これは去年の十月、お駒さんが二階から抛り付けた草履で、それがためにお奉行所から御褒美を頂戴したといふので、かうして大切に袱紗につゝんで、お寶物のやうに仕舞つてあるのを、あたしも一度見せて貰つたことがあります。女のくせに、よせばいゝのに、これを泥坊の顔へ叩きつけて……。（行燈の火で草履をぢつと見る）その泥坊も定めてお駒さんを恨んでゐたでせうねえ。

文吉（氣のないやうに）さうかも知れないな。

（おさだは草履を持ちて屏風のうちに入る。文吉は唯ぼんやりとしてゐたるが、やがて少しく驚いたやうに屏風のうちに耳をかたむけて、そつと覗かうとする時おさだ出づ。）

文吉　おまへは屏風のなかで何をしてゐたのだ。

おさだ　なんにもしてゐやあしませんよ。

文吉　その草履でお駒をぶつてゐたやうだぜ。

おさだ　これであたしがお駒さんをぶつて……。（笑ふ）とんだ今回のお茶番ですね。なんであたしがそんな馬鹿な事をするもんですか。お駒さんにまだ息があるか何うだか、もう一度たしかに見とゞけて來ただけですよ。

文吉　もうどうしても生きないかね。

おさだ　おまへさんは生かしたいのかえ。それだから不人情だと云ふんですよ。（拗ねる）

文吉　いや、さういふわけでも無いが……。

おさだ　さうでなければ默つておいでなさいよ。

（おさだは草履を袱紗につゝみて、もとの通りに簞笥にいれる。）

おさだ　おやあ、あたしはもう行きますからね。後生だから巧く遣つてくださいよ。

文吉　（よんどころなく）むゝ。

おさだ　下手なことをすると、暗いところへ一緒に連れて行きますよ。

（おさだは嘲すやうに念を押して縁側の外へ出ようとする時、廊下の方にて時まはりの拍子木の音きこゆ。）

男の聲　時ですよう。

（おさだはそれに驚いて内へ引返し、入口の障子をぴつしやりと閉める。これにて幕を下ろし、すぐに再び幕をあける。）

二

高輪の自身番。上のかたには格戸の出入り口あり。下のかたは壁にて、その前に爐を切り、大いなる茶釜がかけてあり。屋臺の前は一段低き板の間になつてゐる。下のかたは臺所のこゝろにて、腰高の障子二枚をしめてあり。上のかたには半鐘をかけたる火の見梯子あり。

（前の場の翌朝。八丁堀同心貝塚藤五郎は黒の羽織、着流し、下のかたに町役人が羽織袴にて坐り、爐のそばには自身番の定番と下番の男が控へてゐる。板の間の上のかたには糸屋の番頭文吉、下のかたには和泉屋の亭主伊兵衛が控へてゐる。そのそばには番太郎の男が控へてゐる。浪の音薄くきこゆ。）

藤五郎　おい、番太。店先にはこりが立つてならねえ、少し水でも撒け。

番太　はい、はい。

（番太郎は手桶にて水をまく。）

藤五郎　和泉屋の亭主伊兵衛は其方だな。

伊兵衛　左様でございます。

藤五郎　あらためて云ひ聞かせるまでもないが、品川は郡代の支配で、町方の係りぢやあねえ。しかし事件が事件だから、町方も立會つて詮議をする。殊に和泉屋のお駒

にはおれも緣があるから、取りあへず詮議に出て來たのだ。

伊兵衛　お役目御苦勞に存じます。

藤五郎　芝源助町の糸屋の番頭文吉は其方か。

文吉　（恐る〳〵答へる）左樣でございます。

藤五郎　年は幾つだ。

文吉　四十一歳でございます。

藤五郎　こゝでこれから吟味をする。上役人の前で些とでも嘘いつはりを申立てちやあならねえぞ。（懷中より十手を取出す）これ、文吉。和泉屋のお駒がゆうべ何者にか絞め殺された。その晩の客はお前だな。

文吉　はい。

藤五郎　（伊兵衛に）ゆうべの客は文吉ひとりで、ほかに名代は無かつたのだな。

伊兵衛　お駒は手前の店の賣れつ子で、毎晩大抵二三人のお客があるのでございますが、ゆうべは珍らしくこのお方おひとりでございました。

藤五郎　文吉の申立てでは、用足しに下へ降りて歸つてみると、その留守のあひだにお駒は死んでゐたといふことだが、それに相違ないな。

文吉　（一生懸命に）それに相違ございません。

藤五郎　屹とさうか。

文吉　はい。

藤五郎　（十手を膝に突き立てゝ嚇すやうに）屹とさうかよ。

文吉　（どもりながら）は、はい。

藤五郎　よく考へ直してみろ。嘘をつくと承知しねえぞ。分別盛りの年をしながら、女郎買ひをするやうな奴だから、なにを仕出來すか判つたものぢやあねえ。貴樣はお駒にふられたか、それとも何かのやきもち喧嘩で、腹立ちまぎれに女を絞めたのだらう。さあ、隱さずに申立てろ。

文吉　恐れながらそれはお見込み違ひで、わたくしは決してそんな覺えはございません。

藤五郎　亭主、どうだ。お駒はこいつが殺したとは思はれえか。

伊兵衛　（迷惑さうに）さあ、それはどうでございませうか。わたくしにも一向わかり兼ねます。

藤五郎　長次郎はどうした。まだ何か調べてゐるのか。和泉屋へ行つて呼んで來てくれ。

町役人　はい、はい。（番太郎をみかへる）それ、早く行つて來い。

番太郎　はい、はい。

（番太郎は下のかたへ行かうとする時、下のかたより

手先長次郎はおさだと庄八を引立てゝ出づ。あとより男、女、子供など七八人附いて來る。）

長次郎　えゝ、見るものぢやねえ。行け、行け。（男女等を退ひ拂ひて）どうも遲くなりました。（二人をみかへる）さあ、下にゐろ

（おさだと庄八板の間に坐る。）

藤五郎　今おまへを呼びに遣らうと思つてゐたところだ。何か手がかりは付いたか。

長次郎　この女は和泉屋の內藝者で、おさだといふ者でございます。男は油さしの庄八といふ者で……。

藤五郎　その二人に迂亂なことでもあるのか。

長次郎　おさだはふだんからお駒と仲よくしてゐたさうですから、ちつと取調べてみたいと思ひます。庄八はお駒の殺される少し前に、その部屋へ油さしに行つたさうですから、これも調べて頂かなければなりません。

藤五郎　さうか。これ、おさだ。顏をあげろ。

おさだ　はい。

藤五郎　おまへはいつ頃から和泉屋に奉公してゐる。

おさだ　この六月、天王樣のお祭の時からでございます。

藤五郎　それまではどこにゐた。

おさだ　神奈川の方に居りました。

藤五郎　何歲だ。

おさだ　廿六でございます。

藤五郎　亭主はあるか。

おさだ　ひとり身でございます。

長次郎　年增ざかりで女は好し、まして商賣が商賣だ。どうで無事に暮してゐる筈はあるめえ、表向きの亭主はなくつても、何か係り合の男はあるだらうな。

おさだ　いえ、こんな稼業は致して居りますが、わたくしに限つてそんな浮いたことの無いのは、御主人もよく御存じでございます。

藤五郎　（笑ひながら）まあ、いゝや。おれたちの前で、わたくしには可愛いゝ色男がございますとも云はれめえから、それはまあそれとして、おさだ、お前はお駒と仲好しだつたといふが、今度の一件について何か思ひ當ることはねえか。

おさだ　それがなんにもないのでございます。わたくしはまるで夢のやうで……。（泣く）あんなおとなしいお駒さんが人の恨みを受ける筈は無し、なにが何やらさつぱり判りません。

藤五郎　庄八。お前がお駒の部屋へ油さしに行つたときには、お駒は無事でゐたのか。

庄八　さあ、それはわかりません。わたくしは唯そこにゐる文吉さんと一言二言お話をして出ました。

ばかりでございます。

藤五郎　文吉は起きてゐたのか。

庄八　火鉢のまへで煙草を呑んでゐまして、お駒さんは酔つて寝てゐるといふやうなお話でございました。

長次郎　文吉だけが起きてゐて、お駒は屏風のなかに寝てゐたといふのだな。

庄八　左様でございます。

（藤五郎と長次郎は顔をみあはせる。）

藤五郎　（文吉を頤にて指す）よく調べてみろ。

長次郎　おい、文吉。庄八の云ふ通りか。

文吉　お駒は少し酒をのみ過ぎまして、正體もなく寝入つて居りました。わたくしはもうそろ〳〵歸り仕度をしなければなりませんので、火鉢の前で煙草をのんで居りますところへ、庄八さんが油をさしに參つたのでございます。

（藤五郎は眼で知らせれば、長次郎はうなづく。）

長次郎　この野郎。うそをつくな。お駒は酔つて寝てゐるなんて云やあがつて、貴様はもう其時にお駒を絞めてしまつたのだらう。どんなに酔つてゐたか知らねえが、馴染の客が起きて歸るといふのに、相方の女が平氣で寝そべつてゐる筈がねえ。なあ、庄八。さうぢやあねえか。

庄八　（返事に困つて）さあ、併し二階のれんじ窓が毀れてゐましたのを見ますと、下手人は外から忍び込んだやうにも思はれますが……。

長次郎　櫺子窓をこはして置いて、外から這入つたやうに見せ掛けるなどは、よくある手で珍らしくねえ。それも文吉が遣つた仕事だらう。横着者め。

文吉　（あわてゝ）先刻も申上げました通り、それは皆さま方のお見込みちがひで、わたくしは決してそんな覺えはございません。

藤五郎　いつまで同じことを云つてゐやあがるのだ。（長次郎に）そいつに繩をかけろ。

長次郎　さあ、神妙にしろ。

（長次郎は文吉に繩をかける。）

文吉　（いよ〳〵慌てる）たとひ何と仰しやいましても、わたくしは全く覺えのないことで……。お繩は幾重にも御勘辨をねがひます。

長次郎　えゝ、やかましい。ぐづ〳〵云やあがると、引つぱたくぞ。

藤五郎　さあ、痛い目を見ないうちに、素直に云つてしまへ。

長次郎　さあ、野郎。引つぱたくぞ。（十手をふりあげる）

文吉　それでも覺えのないことは申上げ様がございません。これ、おさだ。お前、なんとか申譯をして呉れない

か。

おさだ　（冷かに）　あたしは何んにも知らないんですもの、どうにも申譯をして上げやうが無いぢやありませんか。

文吉　でも、わたしは無實のぬれ衣をきて、かうしてお繩にかゝつてしまつたのだ。

おさだ　あたしもお氣の毒には思つてゐるんですけれど、お役人樣の前で自分の知らないことを何とも云ひやうがありませんからね。

文吉　（恨めしさうに）　おまへは知らないといふのか。

おさだ　（平氣で）　知りません。全くなんにも知りませんよ。

（藤五郎はおさだと文吉の樣子に眼をつけてゐる。）

文吉　わたしが縛られて牢屋へ送られて、どんな拷問を受けるやうになつても、お前はどうしても知らないといふのか。

おさだ　いくら何と云つても、知らないものは仕方がないぢやありませんか。

藤五郎　えゝ、埒が明かねえな。長次郎、かまはずに引つぱたけ。

長次郎　ほんたうに往生際の惡い奴で、餘計な手數をかけやあがる。さあ、云へ。云はねえか。

（長次郎は十手にて文吉を二つ三つ打つ。）

文吉　（叫ぶ）　申上げます、申上げます。

長次郎　早くいへ。（又打つ）

文吉　云ひます、云ひます。申上げます。（息をついて）お駒を殺しましたのはわたくしではございません。そこにゐるおさだでございます。

伊兵衛　（おどろいて進み出づ）　え、おさだが……。（おさだに）　これおさだ。お前はほんたうにそんな怖ろしいことをしたのか。

おさだ　飛んでもない。なんであたしがそんなことをするもんですか。あの人が切端つまつて、自分の罪を人になすり付けようとするんですよ。もし、お役人樣へ申上げます。わたくしは女の身で怖ろしい人殺しなどを致す筈がございません。まして不斷から仲よしのお駒さんを殺すなぞとは、思ひも付かないことでございます。この儀は幾重にもお察しをねがひます。

文吉　いえ、その女が殺したに相違ございません。わたくしが手水にまゐりまして、それからお駒の部屋へ戻つて來ると、おさだは屏風のなかから出てまゐりまして、お駒はあたしが殺したのだと、自分の口から申しました。

おさだ　（屹となつて）　まあ、呆れた。おまへさんは途方もない云ひがかりをする人だねえ。あたしに何の恨みがあつて、そんな濡れ衣を着せようとするんですえ。

文吉　えゝ、おれこそ飛んだ濡れ衣をきて、こんな情ない目に逢つてゐるのだ。これ、頼むから正直に白狀してくれ。

おさだ　いくら頼まれたつて、覺えもないことを白狀が出來るもんですかね。今まではよもやと思つてゐたが、そんな云ひがかりをする以上は、やつぱりお前さんがお駒さんを殺したに相違ない。（泣聲をふるはせる）お前さんはまあ見掛けによらない怖ろしい人だ。あんなおとなしいお駒さんをむごたらしく絞め殺して、まあ何といふ鬼のやうな人だらう。もう一度お役人樣に申上げます。唯今までは默つて居りましたが、この文吉さんはお駒さんとは年も違ひますし、お店者のくせに酒の上は惡いし、おまけにお金遣も惡いので、ふだんからお駒さんに嫌はれ拔いてゐたのです。それはわたくしがよく知つて居ります。ゆうべも屹とお駒さんに手ひどく振りつけられて、その口惜しまぎれに手暴いことを致したものと思ひます。お駒さんのかたきはわたくしの仇も同樣でございます。どうぞお上のお力を持ちまして、わたくし共のかたきが討てますやうに、何分おねがひ申します。

（藤五郎はおさだにぢつと眼をつけて、なか〱しつかり者だといふ思入。）

文吉　いいえ、その女の申すことは皆いつはりでございます。お駒はたしかにおさだが殺したに相違ございません。

おさだ　いゝえ、おまへさんが殺したに相違ない。お役人樣の前でよくもそんな白々しいことが云はれたものだ。

文吉　おまへこそ白々しい。そんな女とは今まで些とも知らなかつた。

おさだ　あたしもお前さんがそんな怖ろしい人とは、今まで夢にも知らなかつた。

文吉　えゝ、なんであらうともお前が殺したのだ。

おさだ　いゝえ、おまへさんが殺したのだ。

藤五郎　さう〲しい。控へろ、控へろ。

長次郎　おたがひになすり合つてゐちやあ仕樣がねえ。とんだ對決だ。どつちが仁木彈正だか、おれたちが今捌いてやるから、靜にしろ、靜にしろ。

（おさだと文吉は控へる。藤五郎と長次郎は顏をみあはせて、おさだも怪しい奴だといふ思入。）

藤五郎　これ、庄八。おまへが油さしに行つたあとで、おさだがお駒の部屋へ出這入りしたのを見なかつたか。

庄八　先刻も申上げました通り、お駒さんの部屋で文吉さんとお話をして、それからだん〱にほかの部屋をまはつて居りましたので、それからあとの事はなんにも存じません。

長次郎　おめえは文吉かおさだから何か鼻藥でも貰つてゐる

やあしねえか。

庄八　どう致しまして……。決してそんなことはございません。

長次郎　隠してゐると、貴様も係んだことになるぞ。

庄八　まことに困りましたな。（伊兵衛に）もし、旦那。何とか云つて下さいませんか。

伊兵衛　いや、わたしにも何とも云ひやうがないのだ。

（下のかたより和泉屋のせがれ伊之助、廿二三歳。お駒の弟徳松を連れて出づ。徳松は前髪にて、農家の子。）

伊之助　申上げます。

藤五郎　お前はなんだ。

伊兵衛　これはわたくし方のせがれでございます。

長次郎　（藤五郎に）和泉屋のせがれの伊之助といふのでございますよ。

藤五郎　その忰がなんの用だ。

伊之助　お駒の宿許は目黒でございますので、取りあへず知らせて遣りますと、母はあひにく病中で、弟の徳松といふのが駈け付けてまゐりましたので、兎もかくも一緒に連れて出ましてございます。

長次郎　そこで、その弟に何か心當りでもあるといふのかえ。

伊之助　いえ、さういふわけでもございませんが、わたくしに少々心當りがございますので……。

長次郎　それはどういふことだ。

（伊之助は云はうとして躊躇し、長次郎にこつちへ來てくれといふ。長次郎進みよれば、伊之助は紙につゝみたる銀のかんざしを出して、長次郎にそつと見せ、それはおさだの物だと囁く。）

長次郎　むゝ、さうか。

（長次郎はかんざしを取つて眺めながら藤五郎の前に置く。）

藤五郎　このかんざしがどうしたのだ。

（おさだはそれを横目に見て、ぎつくりしながら黙つてゐる。）

長次郎　それがお駒の寢床のなかに落ちてゐたさうでございます。

藤五郎　伊之助が見つけたのか。

長次郎　旦那の前ではつきりと云はなけりやあいけねえぜ。

伊之助　（思ひ切つて）實はお駒が死んでゐると聞きまして、わたくしが眞先に駈け付けてみますと、死骸の倒れてゐる夜具のなかに、其のかんざしが落ちてゐたのでございます。

伊兵衛　そんなものが落ちてゐたのか。それならなぜ早く

に云はなかつたのだ。

伊之助　自分の店から繩つきを出したくないと、一旦は隱して置きましたが、どうもそれでは濟まない事だと存じまして、改めてお屆けに出ましたのでございます。

藤五郎　では、この主は判つてゐるのだな。

伊之助　わたくしには見おぼえがございます。

藤五郎　女の物だから外の奴が落したのぢやあるめえ。內の者か。

伊之助　はい。（躊躇してゐる）

藤五郎　見覺えがあると云つたぢやあねえか。

伊之助　はい。

藤五郎　小じれつてえ奴だな。（十手で疊を叩く）早く云へ。

長次郎　（引つ取つて）　それはおさだの品ださうでございます。

藤五郎　さうか。（おさだを屹と見る）

おさだ　いゝえ、違ひます。それはわたくしの物ぢやあございません。

藤五郎　伊之助。これは確におさだの品だな。

伊之助　今から半月ほど前のことでございます。わたくしが下の廊下でそのかんざしを拾ひまして、これは誰のだと申しますと、おさだが駈けて參りまして、それはわたしのだと申して受取つて行きました。おゝ、さうだ。庄八もそのときに見てゐたな。

庄八　（かんざしを覗いて）　さうでございます。それはおださんの品に相違ございません。

おさだ　（向き直る）　おまへさん達は寄つて集つて、あたしを罪に落さうとするんですかえ。そのかんざしはあたしの物ぢやありませんよ。

庄八　若旦那のいふ通り、そのかんざしはお前の物だよ。

おさだ　おまへさんは何んにも知らないくせに、若旦那と口をあはせて餘計なことをお云ひでないよ。そんなかんざしは世間に幾らもあらあね。

庄八　それぢやあお前のかんざしを見せて貰はう。お前のはどこにある。

おさだ　あたしは初めからそんな物をさしてゐたことはありませんよ。若旦那がそんな物を何處からか持ち出して來て、好い加減な噓をこしらへて、お役人達をだまさうとしても、皆さんにはちやんと眼があるから、噓か本當かはすぐに判りますよ。

伊之助　これおさだ。わたしが好い加減な拵へ事をして、お役人達をだまさうとするとは何の事だ。現在自分のものを眼の前に見せられながら、まだづう／＼しくシラを切つてゐるとは、呆れ返つた大膽者、なるほどこれでは人殺しも仕兼ねまい。ふだんは正直さうな顔をしてゐなが

ら……もし、お父さん。この女ばかりは案外でした。

伊兵衛　おれも實におどろいた。これ、おさだ。もう斯うなつたら仕方がないから、身に覺えのあることならば、素直に白狀してお慈悲を願つたらどうだ。

おさだ　旦那までがそんな事を……。どの人も、どの人も、みんなあたしを惡者にして……。口惜しい、口惜しい。どうしたらよからうねえ。(泣き伏す)

藤五郎　(笑ふ)そんな芝居をしても始まらねえ。この頃は御見物が悧口になつてゐるぞ。(長次郎に)それ、繩をかけろ。

長次郎　手前はなか／＼しつかり者だな。

(長次郎は立寄つて繩をかけようとすれば、おさだは慌てゝ叫ぶ。)

おさだ　まあ、待つて下さい。待つて下さい。まだ申上げることがございます。

長次郎　なんだ。なんだ。

おさだ　たとひ三日でも奉公すれば、自分の主人でございますから、その人の恥になるやうな事は云ふまいと思つてゐましたが、もう斯うなつては云はずにはゐられません。若旦那にはお春さんといふお嫁さんがありながら、大勢の人の眼を忍んで、わたくしに無理なことをいふのでございます。

伊之助　(おどろく)わたしがお前にいつそんな事を云つた。

おさだ　いつと云つて、それはもうたび／＼のことでございます。おれの云ふことを肯けば、一軒の家を持たせて圍ひ者にしてやるの、一生面倒をみて遣るのと、色々親切らしく云つてくれましたけれど、わたくしはこんな性分でございますから、いつも好い加減に受け流して居りますと、このあひだの晩なぞは無理にわたくしを土藏の中へ連れ込んで、手籠めにしようと致すのでございます。

伊之助　(いよ／＼驚いて怒る)こいつ實に途方もない奴だ。お役人様、こんな氣ちがひの申すことは決してお取上げにならぬやうに願ひます。

おさだ　お取上げにならうが、なるまいが、云ふだけのことは皆んな云ひます。なんぼ主人の威光でも、孱弱い女を手籠めにしようとは、あんまりな致し方でございますから、わたくしも一生懸命になつて大きい聲をあげますと、その庄どんが駈けてまゐりました。

庄八　嘘をつけ。おれがそんなことを知るものか。

おさだ　いゝえ、おまへさんは確に知つてゐる筈です。それでも人が來たもんですから、若旦那も流石に極まりが惡いとみえて、そのまゝこそ／＼と行つてしまひました。わたくしもその時にいつそ暇を取つてしまへば好かつたの

ですが、こんな商賣をして方々を渡りあるくのも忌だと思ひまして、まあ辛抱してゐたのでございます。すると、今度のお駒さんの一件が降つて湧いたので、若旦那はふだんの意趣晴らしに、ありもしない事をこしらへて、わたくしを科人に落さうと巧んだものに相違ございません。もし、若旦那。（泣く）なんぼあたしがお前さんの云ふことを肯かないからと云つて、人ごろしの罪を塗り付けるとはあんまりぢやありませんか。こんな事であたしが萬一お仕置にでもなつたら、屹とおまへさんを執り殺すから、さう思つておいでなさいよ。

伊之助　馬鹿をいへ。貴様は空涙をこぼして、口から出任せによくもそんなことが云へたものだ。お役人の前だと思つて、さつきから胸をさすつて我慢してゐたが、もう料簡がならないぞ。うぬ、どうするか。見てゐろ。

（伊之助は羽織をぬいで、おさだに掴みかゝらうとするを、伊兵衛と庄八は支へる。）

伊兵衛　これ、これ、ほかの場所とは違ふぞ。こゝで無暗なことをしたら、理を以て非に落ちるやうなことになるではないか。

伊之助　でも、あんまり憎い奴で……。

庄八　お腹も立ちませうが、まあ、まあ、御料簡なさいまし。あんな病犬には構はないが宜しうございます。

おさだ　なにが病犬だよ。お役人様、お覧ください。自分にうしろ暗いことがあるので、とても口ではかなはないと思つて、あの通り手出しをいたします。それが論より證據ぢやありませんか。

伊之助　えゝ、なにを云やあがるのだ。

（伊之助は急いで又立ちかゝらうとするを、庄八は抱きとめる。）

おさだ　こしらへ事をして人を訴へたものは、重いお咎めを受けると聞いて居ります。（長次郎に）どうぞあの人にお繩をおかけ下さい。

長次郎　よし、よし、繩をかけてやるから覺悟をしろ。

（長次郎はおさだの腕を捉へて、うしろへ捻ぢ廻さうとする。）

おさだ　（ふり拂つて）あれ、あたしぢやありませんよ。あの人ですよ。

長次郎　まあ、だれでもいゝからおとなしくしろ。

おさだ　いけません、いけません。あたしはお繩をうける覺えはないんですよ。

（おさだは突きのけて逃げかゝるを、長次郎は追ひかけて無理に繩をかける。）

長次郎　どうもしぶとい女だな。

藤五郎　そんな奴は行儀の惡いことをして困らせるかも知

れねえ　前をはだけねえやうに縛つてしまへ。

長次郎　（番太郎に）縄はねえか。

番太郎　はい、はい。

（番太郎、臺所より縄を持ち来れば、長次郎はおさだの首の周かゝやうに、着物の上から両膝をくゝる。）

おさだ　おまへさん、一體あたしをどうするんですよ。

藤五郎　どうするものか。これから貴様を吟味するのだ。

（長次郎に）もう判つたから、そつちの縄を解いてやれ。

（長次郎は文吉の縄を解く。）

文吉　はい、はい。ありがたうございます。これ、おさだ。女の強情者でどう云ひぬけようとしても、お役人さまの眼は晦らぬ筈だ。恐れ入つて何も彼も白狀してしまへ。

おさだ　幾度云つても同じことで、覺えのないことが白狀出來るもんですか。（泣く）あたしは何の因果でこんな目に逢ふのか。大勢の男が女ひとりを云ひ縮めて、無理無體に縄をかけて……。弱い者いぢめにも程があります。

長次郎　なにが無理無體だ。どつちが無理か、今にわかることだから待つてゐろ。もし、旦那。

（長次郎は藤五郎の顔をみて、引つぱたかうかと問へば、藤五郎はうなづく。）

藤五郎　女だと思つて甘くしてゐるた方圖がねえ。小ツぴどく毆れ、なぐれ。

長次郎　さあ、おれたちは冗談にこんな事をしてゐるんぢやねえから、さう思へ。

（長次郎は十手にておさだの脊を打つ。おさだはあつと叫んで倒れる。）

長次郎　大方そんなことだらうと思つた。（番太郎に）こいつを引摺り起せ。

（番太郎はおさだを引き起せば、長次郎はつゞけて打つ。）

長次郎　さあ、白狀しろ。

藤五郎　和泉屋のお駒は貴様が殺したに相違あるめえ。痛い思ひをするだけ損だぞ。早く云へ。

長次郎　云つてしまへ。

（長次郎は又打つ。おさだは悼げながら叫ぶ。）

おさだ　お慈悲でございます。お慈悲でございます。

長次郎　お慈悲をねがひたければ、素直に云へ。

おさだ　なんにも存じません。知りません。

長次郎　知られえことがあるものか。早く申上げろ。（又打つ）

おさだ　申しません、申しません。まつたく無實の罪でございます。

長次郎　强情な奴だな。こん畜生、水を喰らはせるぞ（番太郎に）手桶を持つて來い。

（番太郎は臺所より手桶に柄杓を添へて持つて來る。）

藤五郎　まあ、待て、待て、往來の店先でそんな騷ぎをするのも見つともねえ。いくら強情を張つても、そいつの仕業にきまつてゐるのだ。大番屋へ引揚つて行つて、改めて調べることにしよう。伊之助。庄八。

二人　はい。

藤五郎　文吉。

文吉　はい。

藤五郎　みんな引合ひだから、八町堀まで一緒に來い。

三人　はあ。

長次郎　さあ、立て。（おさだを引起す）

（徳松は先刻より默つて窺ひゐたるが、このとき少しく進み出づ。）

徳松　（伊之助に）では、いよ〳〵こいつが姉さんを殺したのでございますか。

伊之助　むゝ。かたきの顏を一度見せてやらうと思つて、お前をこゝへ連れて來たのだ。よく見ておけ。

徳松　こいつ、よくもおれの姉さんを殺しやあがつたな。

（徳松は穿いてゐる藁草履をぬいで、おさだに打つてかゝらうとするを、長次郎は十手にて支へる。）

長次郎　とんだ犬坊丸だ。いくら仇でも、むやみに手出しをしちやあならねえ。

おさだ　（見かへる）まつたく飛んだ犬坊丸だね。おまへはその草履であたしをぶつ氣かえ。眼に一杯のなみだを溜めて、お前はそんなに口惜しいのかえ。

徳松　口惜しいのは當りまへだ。お前はなんで姉さんを殺したのだ。譯をいへ、譯を云へ。（詰めよる）

おさだ　勿論殺すだけの譯があつて殺したのだが……。おまへとしては恨むのも無理はない。あたしも實に恨んだからねえ。（徳松の顏を見る）今までは根限りに強情を張り通してみたが、さすがにお役人の眼は高い。どうしてもあたしの仕業と見きはめられてしまつたらしいから、所詮諦めるより外はあるまい。いつそお前の見てゐる前で、さつぱりと白狀しませうよ。

伊兵衛　白狀する……。では、やつぱりお前の仕業に相違ないのだな。

おさだ　はい、相違ありませんよ。（長次郎に）この通り白狀いたしましたから、どうぞ膝だけはお弛めください。

（長次郎はおさだの兩膝の繩を解く。）

藤五郎　（笑ふ）たうとうお前もあきらめたか。隨分世話を燒かせたな。

おさだ　恐れ入りましてございます。

藤五郎　そこで、お駒をなぜ殺した。

おさだ　昨年の十月、和泉屋の店さきで御法の寶藏といふ

者がお召捕りに相成りましたを御存じでございますか。
藤五郎　御旅の寅藏……。むゝ、知つてゐる。それはおれが召捕つたのだ。
おさだ　え、あなたが……。(今更のやうにみる)これも何かの因縁とでもいふものでせうねえ。
藤五郎　では、おまへは其の寅藏の身よりの者か。
おさだ　わたくしは寅藏の女房でございます。
藤五郎　むゝ。(うなづく)それでお駒を殺したのか。
おさだ　おわかりになりましたか。
藤五郎　判つた、わかつた。
おさだ　筋違ひかは存じませんが、わたくしと致しましては亭主のかたき討でございます。鬼の女房に鬼神とやらで、女だてらに人殺しをするとは、定めて怖ろしい奴だとの思召しもございませうが、いよ／＼本意を遂げるまでには、なみ／＼の苦勞ではございませんでした。(涙をうかべる)どなたもお察しくださいまし。かたきを討つて、すぐに名乘つて出れば宜しいのでございましたが、やつぱり女の未練から色々のお手數をかけまして、重々恐れ入りました。
藤五郎　よく白狀した。亭主のかたき討と申しても、おまへは罪人の女房で、人を恨むは逆恨みだぞ。殊に上に對して御奉公を相勤めた和泉屋のお駒を殺害した以上は、おまへにも覺悟はあるだらうな。
おさだ　それは覺悟いたして居ります。なにとぞ御法通りのお仕置をお願ひ申します。
伊之助　今まで些つとも知らなかつたが、お前は亭主のかたき討であつたのか。
伊兵衛　さう聞くと、又なんだか可哀さうにもなるな。
(伊兵衛親子は顏をみあはせて、ため息をつく。)
德松　(伊之助に)では、わたしの姉さんの方が惡かつたのでございますか。
伊之助　いや、姉さんが惡いといふわけでもなし……。わたしにも何と云つていゝか判らなくなつて來た。
おさだ　やつぱりあたしが惡いんです。(德松に)たとひ姉さんを殺されても、お前のかたきはお上で立派に討つて下さるから仕合せといふもの。あたしのかたきは誰も討つてくれる人がないので、惡いと知りつゝこんなことに……。(ほろりとして)いや、そんな愚痴はよしませう。さあ、お連れ下さいまし。
藤五郎　重罪人とはいひながら、夫婦の情愛はおれにもまんざら判らねえことはねえ。せい／＼劬つてやるからさう思へ。
おさだ　ありがたうございます。
伊兵衛　いよ／＼傳馬町へ送りとなつたら、わたしも出來

るだけの世話をしてやりますよ。
おさだ　何分おねがひ申します。
藤五郎　(長次郎に)、さあ。
(長次郎は繩を取つておさだを引立てる。伊兵衛等はみな頭を下げる。時の鐘。浪の音うすくきこゆ。)

――幕――

雨夜の曲（三幕五場）

登場人物

金井長門守景家
金井小太郎景正
その妹お園
景家の弟子又七
十藏
景安
島原の鞆繪太夫
逢坂太夫
丹波大納言の子息時國
桐屋伊兵衛
僧西念
堺の大藏
幇間佐五右衛門
臼の傳七
梵天長右衛門
犬の七兵衛

ほかに盲法師、傀儡師、田樂茶屋の女、あみ笠茶屋の女、たなばたの笹賣、黑木賣、辻占賣、夜泣うどん屋、祇園まゐりの男、女、娘、旅人、十夜まゐりの娘、老女、仲居、禿、小坊主、小兒、往來の男女など。

第一幕

一

洛中祇園の二軒茶屋。二重家體の店にて、外にも床几二三脚をならべたり。店につゞける下のかたは料理場のこゝろにて、赤前垂の女二人がしきりに豆腐を切る音、トント、、トン〳〵と調子付きてきこゆ。上のかたの奥には祇園の社の樓門みゆ。

（明暦年間の秋のはじめ、時は午下り。三十前後の女房が七八歳の娘をつれ、店に腰をかけてゐる。娘は色紙をつけたる笹の枝を持つ。上のかたよりは祇園參詣の旅人二人出づ。つゞいて京のむすめ三人打連れて出づ。下の方より僧一人出づ。つゞいて黑木賣の女二人出づ。これ等の人々はゆき違ひて過ぐ。赤前垂の女二人は店口にたちて人を呼んでゐる。）

女　お休みなされ、お休みなされ。お這入りなさらんか。

お支度なさらんか。

（下の方より笹をうる商人(あきんど)出づ）

商人　笹は要らんか。たなばたの笹はいらんかな。

女　お休みなされ、お這入りなさらんか。

商人　笹は要らんか。

（商人はよびながら過ぐ。上のかたより男と女の二人連れまた出づ。下の方より頭に箱をかけたる傀儡師出づ。そのあとより小兒二三人ついて來る。傀儡師は店さきに立つ。）

傀儡師　さあ、さあ。これからは義經辨慶五條の橋ぢや。

女　通らんせ。通らんせ。

（傀儡師は去る。小兒もそのあとを追うて去る。男と女の二人づれも去る。）

女　お休みなさらんか。お休みなさらんか。

（豆腐を切る音トン／＼きこゆ。最前より休みゐたる女房は娘と共にたち上る。）

女房　もし、もし、勘定しますぞ。

女甲　あい、あい、ありがたうござります。

（女房は盆の上に錢をおく。）

女乙　おゝ、たなばたの笹をお求めでござりましたか。

女房　子供のくせになんでも人眞似をしたがつて困りまする。（娘を見かへりて）さあ來や。

娘　あい、あい。

女　お靜かにおいでなされませ。

（女房と娘は去る。茶屋女二人は顏を見あはせる。）

女甲　けふはお天氣がよいせゐか、朝から御參詣の絕え間がないので、ほんに／＼ほつとしてしまうた。

女乙　七夕(たなばた)にこのやうな天氣も珍らしいことぢや。これでは今夜は銀河(あまのがは)が拜めるであらうな。

（ふたりは店に腰をかけてゐる。豆腐を切りゐたる女二人も、赤前垂(あかまへだれ)で手をふきながら出で來る。）

女丙　まゐり下向(げかう)もひとしきり絕えたので、先づ息が休まるといふものぢや。

女丁　七月になつても、日のなかはまだ／＼暑いことぢやなう。

（袂にて額の汗などふいてゐる。上のかたの奥にて觀世物(みせもの)の鳴物きこゆ。）

女丙　おゝ、丁度幸ひぢや。お客のゐない間(ひま)をみて、あの觀世物をちよつと覗いて來ようではないか。

女甲　丹波の山奥で生捕つたといふ鬼の子であらう。

女乙　わたしも昨日みて來たが、評判ほどでもないものぢや。

女丁　と云うても、一度は見ておきたい。（丙の女にむかひて）お前　行かうではないか。

（丙と丁のふたりは行きかゝる。甲と乙とは遮る。）

女甲　見にゆきたくば夜にしなされ。日のうちに店をあけては叱らるゝぞ。

女乙　お前方が出たあとに、お客が見えたらどうしなさる。

女丙　はて、意地のわるい。すぐに戻つて來るといふに……。

女甲　では、親方に斷つて行きなされ。

女丁　えゝ、面倒な。ちよつとの間ぢや。

（丙と丁は止める甲乙をつきのけて、上のたかへ走りゆく。觀世物の鳴物つゞけてきこゆ。乙は二人のあとを見送る。）

女乙　評判ほどでないと云うたものゝ、あの人たちが行くならば、わたしももう一度行つてみたいやうな氣もするが……

女甲　えゝ、阿房らしい。揃ひもそろうて店を留守にしてどうする氣ぢや。これ、さういふうちにも人が通る。（上の方を指さして）早う呼びなされ。

女乙　お寄りなされませ。お這入りなさらんか。

女甲　おやすみなさらんか。

（二人は聲をそろへて呼ぶ。上の方より堺の大盡、その當時の交易商、寛濶なるいでたちにて編笠をかぶり、幇間佐五右衛門をつれて出づ。）

大盡　祇園の祭は先月濟んだが、こゝらは相變らず賑はふことぢやなう。

佐五右衛門　京の名所のうちでも指折りの祇園のお社、一年中この通りの繁昌でござりまする。

女　お這入りなさらんか。およりなさらんか。

大盡　どこへ行つても赤前垂の女子どもが燕のやうに囀つて、さう〴〵しいことぢや。

佐五右衛門　こゝは京でも評判の高い、祇園豆腐の二軒茶屋。ちよつとこゝでお休みなされませ。

大盡　京へのぼつてから田樂豆腐も食ひ倦いた。鴨川べりの涼しいところへ行つて飲むとしようではないか。

佐五右衛門　仰せ御もつともではござりまするが、こゝで側の者共にちよつとお目見得させたう存じますから、御窮屈でも先づ先づ……。

（大盡はうなづきて店に腰をかける。）

佐五右衛門　それ、お大盡樣のお立寄りぢや。氣をつけて御給仕をせねばならぬぞ。

女　さあ、ずつと奧へお通りくださりませ。

佐五右衛門　いや、こゝでよい。ちつとの間、こゝを借りるだけのことぢや。

（女どもは茶を汲んで出す。佐五右衛門は紙入より銀を出してやる。）

佐五右衛門　これは大藏様から下さるのぢや。お禮をいへ。お禮を云へ。

女　どうもありがたうござりました。

（二人は禮をいふ。大藏は鷹揚にうなづきて、更に佐五右衛門をまねけば、佐五右衛門は恐る〳〵進み寄る。大藏は扇をひらきて耳に口を寄すれば、佐五右衛門うなづく。）

佐五右衛門　はい、はい、心得てをります。（女どもに對ひ）これ、これ、今少しこつちに密談があるほどに、お前達はしばらく奥へ遠慮してくれまいか。店はわしが乾と張番してゐるから、大丈夫ぢや。

女甲　あい、あい。御用があつたらお手を鳴らしてくださりませ。

（女ふたりは會釋して奥に入る。大藏は始めて笠をぬぐ。）

大藏　どうぢや、佐五右衛門。例の奴等は遲いことぢやな。たしかにこゝで落合ふ手筈になつてゐるのか。

佐五右衛門　手筈は萬々整うてをりまする。

大藏　久しぶりの京見物、ちつとは金も遣つて見たさに、貴様たちを供につれて、先月のはじめから島原に通ひつめ、逢坂太夫に魂を打込んでゐれど、さりとは情の強い太夫め。流れにうかぶ水草のやうに、寄るかとみえて寄りもせず、人を悶らすにも程があるわ。

佐五右衛門　はて、そこが御辛抱……。右のものを左へ遣るやうに安々と埒があいては、張も意氣地もござりませぬ。張のない太夫を買ふのは骨のない奴凧を買ふやうなもので、子供衆のおなぐさみにもなりませぬ。諺に申して張がなければ、味方にしても頼もしからずと、それ、河原の太平記讀みも申しまするわ。はゝゝゝ。

大藏　その太平記の講釋も聞き飽いた。千劒攻めの鎌倉勢で、負軍はかり續くわ、つゞくわ。それも畢竟、あの丹波の侍とかいふ若公達めがあればこそぢや。なんぼ粋ぢやと云うて廓は格別、位倒れの公家衆ばらに侮られては、どうでも男の一分が立たぬ。この上は力づくでも彼の侍とかいふ奴を押退けて、太夫をわが物にせねばならぬぞ。

佐五右衛門　その駈引はわたくしが……。（胸をたゝく）一切呑み込んでをりまする。

大藏　よいか。

佐五右衛門　よろしうござりまする。

大藏　受合ふたか。

佐五右衛門　受合ひました。

大藏　それにしても奴等は遲いな。

佐五右衛門　はて　氣長な奴等……。まさかに親子兄弟を

水さかづきして來るほどのことでもあるまいに……。では、しばらくお待ちなされませ。わたくしが鳥渡そこまで行つて見てまゐりまする。

（佐五右衛門は手ぬぐひを取つて鉢まきし、片肌ぬいで駈け出さんとしたるが、たちまち向ふを見て叫ぶ。）

佐五右衛門　おゝ、來た、來た。お大盡のお待兼ぢや。早う來い、來いやい。（扇をあげて差招きしが、又こなたにむかひて口早に云ふ）もし、まゐりました。（また向ふを見て）おうい、おうい、來いやい。

（上州のあぶれ者、梵天長右衛門。月代ののびたる頭、縞の布子に天鵞絨の半襟をかけ、釘ぬきの紋を金糸にて附け、大小を貫の木ざしにして跣足なり。つゞいて臼の傳七。坊主あたまにて頰髭をつけ、鐵帷子のうへに中形の浴衣を着し、大小をおびて高下駄をはく。そのあとより犬の七兵衛は奴頭、生際へ墨にて放れ駒をかきたる帷子をきて、熊の皮の草鞋をはき、大小に小手拭をむすび付けて肩にかける。この三人が大手を振つてあゆみ來れば、佐五右衛門は待ちかねて呼ぶ。）

佐五右衛門　えゝ、揃ひも揃うて氣の長いことぢや。よくもそれで人並におふくろの腹から十月目に生れたなう。さあ、お大盡がさつきから首をのばして待つてござるのぢや。一人一人にこれへ出てお目通りをしたがよい。

長右衛門　あい、あい。ようござります。

（長右衛門は眞先にすゝみ出づ。）

長右衛門　これは梵天の長右衛門と申して、年は積つて三十一。これまで喧嘩に逢ふこと五十九度、一度も不覺の名を取つたことはござり申さぬ。

大盡　では、今度で丁度六十度目ぢやな。なにさま見るから逞しい、强さうな男ぢや。

（傳七はつゞいて進み出づ。）

傳七　これは大佛餅の大臼を輕々と手玉にとつて、雲の上までその名の響いたる、臼の傳七と申す男。額に三寸六分の刀疵、これにて手並はお察しくだされ。

（七兵衛もつゞいて進み出づ。）

七兵衛　これは東山の麓にて、やま犬十四匹毆殺して、二匹までも生で食つたる名代の荒者、犬の七兵衛とは身共がことでござります。

大盡　いや、面白い、面白い。

佐五右衛門　もし、どうでござりまする。この三人を味方にたのめば、奴公家などと張合ふのは、朝茶の子でござりませうが……。

大盡　よい、よい。何奴もみんな氣に入つた。では、味方に頼むしるしに、いつもの茶屋へ行つて、めいめいに杯取らさう。

佐五右衛門　それはありがたい事でござりまする。では、みんなも一緒に來やれ。
三人　あい、あい。
大盡　このやうな頼もしい味方が殖えたので、わしも肩身が廣うなつた。（云ひつゝ懐中より小判幾枚などゝ出して渡せば、佐五右衛門は扇にのせて三人の前に出す。）
大盡　それはほんの近づきの印ぢや。あとは又かさねて……。さ、判つたか。
佐五右衛門　判つたか。
三人　ありがたうござります。
大盡　さあ、來やれ、來やれ。
（大盡は先に立ち、佐五右衛門、長右衛門、傳七、七兵衛等もつゞいて下の方へあゆみ去る。上のかたより仲居お春出で、人々のあとを見送りしが、やがて又、上の方にむかひて小手招ぎすれば、丹波大納言の子息次郎時國、廿一二歳のわかき公家。島原の逢坂太夫、十八九歳の遊女。禿千彌と三人にて出づ。）
時國　堺の客とかいふ男は、もう行んだか。
お春　あれ、もう彼地へ行つてしまひました。
時國　なんぢや知らぬが、辨慶や熊坂のやうな強さうな男どもが、大勢附いてゐるなう。

逢坂　はて、誰がゐようとも、わたしが斯うしてお傍についてゐれば、お前に怯を取らすやうなことは爲させますまい。まあ、安心してゐなさんせ。
時國　とは云ふものゝ、力づくばかりでなく、金づくでも私はかなはぬ。もしも和女をあつちへ取らるゝやうなことがあつたら、どうしたものであらう喃。それを思ふとこの頃は夜の目も寢られぬ。太夫、察してたもれ。
逢坂　はて、氣の弱い。その時には又どうなと工夫がありさうなもの。轉ばぬ先の杖とはいへど、取越苦勞を爲過して、からだを痛めて下さんすな。
お春　ほんに太夫さんの仰しやる通り、とかくに苦勞はお身の毒でござります。
時國　太夫。どのやうな風が吹いて來ても、あの堺の客に靡いてはならぬぞよ。
逢坂　大丈夫でござんす。
時國　よいかや。
逢坂　あい。
（下のかたより桐屋伊兵衛出づ。店さきを通り過ぎんとして見かへる。）
伊兵衛　おゝ、若殿樣でござりましたか。
時國　伊兵衛か。（少しく慌てる）これ、こゝでは何にも云ふまいぞ。

（目で知らすれば、伊兵衛は首肯く。）

伊兵衛　はい、はい。それは心得てをりますが、もし、ここでお目にかゝつたのは丁度幸ひ、少々お話し申上げたい儀がござりまするが……。

（太夫のまへを憚りながら云へば、お添は逢坂太夫の顔をみる。）

お添　時様はこなたを何か御用談のある御様子……。わたしたちは一足お先へ……。

逢坂　ほんにさうぢや。では、時様。わたしは先へ戻りますぞえ。

時國　さうぢや。こゝらに何時までもうろ付いてゐて、今の者に見つけられると又面倒ぢや。わしはあとから行くほどに、廓へ戻つて待つてゐや。

千彌　では、時様。すぐにあとからお出でなされませ。

時國　おゝ、乾をゆく。

お添　では、御免くださりませ。

（逢坂太夫、千彌、お添は下のかたへ去る。）

時國　これ、伊兵衛。苦しうない。こゝへ掛けたらどうぢやな。

伊兵衛　はい。（會釋して床几に腰をかける。）ほかのことでもござりませぬが、いつぞやわたくしが御媒介して、大津の町人から御用達ました金百両。あれは後の月でもう期限が切れてをりまするが……。

時國　それは決して忘れはせぬ。わしもどうせうか斯うせうかと胸を痛めてゐるのぢやが、知つての通り、わしの家もあまり裕では無し、殊にわしはまだ部屋すみの身の上ぢや。金の工面と云うたらなか〳〵思ふに任せぬのでなう。察しておくりやれ。

伊兵衛　今日は太夫を連れてどこへお出でなされました。

時國　この祇園へ參詣に來たのぢや。

伊兵衛　太夫を連れて遊ぶお金はありながら、借りたお金はそのまゝでござりまするか。

時國　え。

伊兵衛　さあ、そんな御無理を申したところで貴方もござりませぬ。就きましてはその貸方の申しまするには、もしどうでも御都合が惡いならば、證文は唯でお返し申してもよい。

時國　え。

伊兵衛　併しそれには些と折入つてお願ひがござりまする。その貸方の男は金井長門守の作つた琴を、日頃から望んでをりまする。

時國　おゝ、金井長門守基安は禁裏のお琴師で、天下一を許された名譽の者ぢや。

伊兵衛　仰せの通り、官位も格式もある天下一のお琴師で

ござりますれば、町人風情がいかやうに頼みましても、とても承知は致しませぬ。わたくしも料屋渡世で、たびたび出入をして居りまするが、名人の上に氣位のたかい景家殿、どのやうに金を積んでみせたとて、所詮無駄とは最初から知れてをりまする。

時國　おゝ、判つた、わかつた。もう諄ういふには及ばぬ。町人のたのみは肯かぬによつて、公家の私から手をまはして、景家に頼んでくれと云ふのか。大方さうであらう。それで百兩の證を消してくるゝなら易いことぢや。よい、よい。わしが引受けて頼んで遣らう。

伊兵衛　では、御引受け下さりまするか。しかしお公家衆の御口添へでも、町人の道具と知れましたら……。

時國　ぢやによつて、町人から頼まれたことなどふッつりとも云はいで、どこまでも私のものぢやと云うて頼めばよい。なんとさうではないか。

伊兵衛　さうでござりますとも……。では、きつと御引受け下さりまするな。

時國　大丈夫ぢや。（胸をたゝく）その代りに景家の琴が出來次第に、百兩の證文は戻してくるゝであらうな。

伊兵衛　承知して居りまする。

時國　やれ、やれ。それでおちついた。では、あしたにも早々たのんで遣はすぞ。（起ち上る）用事といふのはそれぎりであらう。伊兵衛、さらばぢや。

伊兵衛　はて、忙しない。どこへお出でなされまする。

時國　そちにも似合はぬ不粹を申すな。わしは待たるゝ身でないか。

伊兵衛　なるほど。（膝を打つて）では、すぐに島原へ。

時國　おゝ、心は疾うから飛んでゐるのぢや。

（時國は早々に下のかたへ去る。伊兵衛は呆れてあとを見送る。）

伊兵衛　あまり安受合でなんだか不安心のやうでもあるが……根が正直なお人ぢや。まさかに一時逃れの嘘でもあるまい。（思案して）なにしろ、茶でも一杯のんで行かうか。

（伊兵衛は手をたゝく。奥より甲乙の女出づ。）

女甲　おゝ、先のお客はいつの間にかお歸りなされた。

伊兵衛　店をあけて何をしてゐるのぢや。早く茶でも湯でも一杯くれぬか。

女乙　田樂は如何でござります。

伊兵衛　おゝ、ついでに豆腐も食つて行かうか。

女甲　あい、あい。

（甲は茶を汲んで來る。乙は田樂を燒きにかゝる。上のかたより金井小太郎景正、廿二三歳、色紙をつけた

る筵の披を持ちて出で、店のさきを通り過ぎんとす。
伊兵衛よび止める。）

伊兵衛　あ、もし、もし。

景正　おゝ、伊兵衛どのか。こなたも祇園參詣かな。

伊兵衛　なんと強い信心者でござりませうが……はゝゝゝ。時に昨日はわたくしの宅へおたづね下されたさうでござりますが、生憎に留守で失禮をいたしました。

景正　實は商賣用のことで鳥渡おたづね申したが……。（床几に腰をかける）どうぢや、伊兵衛殿。よい木地はないか。

伊兵衛　左様でござりますなう。並大抵の品ではおまへ様のお氣には入りますまい。（かんがへる）兎もかくも問屋へ參りまして、早速開きあはせて見ませうから、一兩日お待ちくださりませぬか。

景正　さる方より頼まれて念入りの細工にかゝる筈であれば、値はなにほどでも厭はぬ。木地のよいのを選んでくりやれ。して、その細工は一日も早く取りかゝりたいと思うて居れば、なるべく急いでたのみますぞ。

伊兵衛　かしこまりました。では、明日にも早速御覧に入れるといたしませう。（景正うなづく）時に親御様はこのごろお忙しいやうでござりまするか。

景正　いや、別に急ぐやうな御細工もない筈ぢやが……。父上になんぞ用かな。

伊兵衛　いえ。さういふ譯でもござりませぬが、唯今こゝで丹波の大納言様御子息にお目にかゝりましたら、なにかお琴のお道へおこゝろとか承はりました。

景正　時國殿お妹のおあつらへとは珍らしいことぢやなう。（打笑む）彼の御人もこのごろは廓へ足近く通はるるといふ噂ぢやが……。

伊兵衛　時様といふ隠し名で、廓の者にも大分知られて居るやうでございます。いや、さういふおまへ様も此頃はなか〱御全盛のやうに聞いてをりますぞ。お羨ましいことでござりますなあ。はゝゝゝ。

景正　羨まるゝ程のことでもないが……。（打笑む）伊兵衛どの、遊びは面白いものでござる喃。

伊兵衛　面白ければこそ誰も彼も有頂天になるのでございます。今日はもう暮れかゝる。大方これから……。（下のかたを指す）御參詣でござりませうな。
（景正はうなづきて、笑ひながら縫な見せる。）

伊兵衛　ほんに今夜はたなばたでござりますな。

景正　星も一年に一度は逢ふのぢやや。

伊兵衛　一年に一度どころか、毎晩のやうにしげ〱お逢ひなされては、お身の毒でござりませうぞ。（笑ふ）

景正　（笑ふ）はゝ、お身にも似合はぬ野暮をいふな。で

は、木地をたのみましたぞ。

伊兵衛　はい、はい。

（景正行きかゝる。）

伊兵衛　もし、もし、あまり急いで轉ばぬやうに氣をおつけなされませ。

（景正は笑ひながら下のかたへ去る。伊兵衛はあとを見送る。）

伊兵衛　いや、若い人達といふものは、どれもこれもみんな面白さうぢやな。おゝ、話に浮かれて忘れてゐた。おい、姐さん、まだ田樂は出來ぬかな。

女甲　あい、あい。唯今すぐに出來まする。

（女は田樂を皿に入れて持つて出づ。）

女甲　どうも御待遠さまでござりました。

伊兵衛　よし、よし。ついでに茶を替へて來てくだされ。

女甲　あい、あい。

（女は土瓶を持つてゆく。伊兵衛は田樂の串を把りて食はんとする。）

伊兵衛　熱ッ……。思ひ切つて焦したなう。

（伊兵衛はふところより紙を出して、口のほとりを拭く。女共も笑ふ。觀世物の鳴物又きこゆ。）

二

島原の出口。正面少しく上のかたに寄せて屋根附の門あり。左右は黑き塀にて、上のかたには青竹の埒を結ひたる出口の柳あり。門のうちには廓の灯見ゆ。下のかたには屋根つきの小さき茶屋ありて、軒にも壁にも編笠をかけたり。

（茶屋の店には若き女ひとり、襷をかけてゐる。廓通ひの男二人來りて店に立てば、女は笠を取つて渡す。二人は笠をかぶりて門内に入る。これとゆき違ひに、門内よりは三味線を脊負ひたる盲法師出で、茶屋のまへに來かゝる。）

女　今夜は大層早うござんすな。

法師　おゝ、おはる殿か。今夜は七夕で廓も大分賑はふやうぢやの。

女　では、澤山稼いで早く歸るのでござんすな。

法師　まあ、まあ。そんなものぢや。はゝゝゝ。實は今までの角屋に呼ばれてゐたが、太夫と客との仲のよさ……。なんぼ眼のみえぬ私ぢやとて、兎もかくも人を前に置いて、あんまり遠慮がなさ過ぎるわ。

女　して、その太夫さんは……。

法師　薄繪太夫どのぢや。

女　おゝ、そんならお客はいつもの景樣であらう。

法師　さうぢや、さうぢや。なんでも景……淸……で無し、

景……正とか云ふ、琴を彈ける人ぢや。
女　はて、お前のやうでもない。お琴師の景家殿といへば天下一の名人、その息子殿の景正といふ若いお人ぢや。
法師　なるほど、景家殿の息子殿か。とにかく太夫とはよほど睦まじいやうにあつたぞ。
女　これは嘘でも評判で、誰知らぬ者もござんせぬ。
法師　してみると、眼の見えぬものは耳までも疎いかなう。はゝゝゝ。では、またあすの晩逢ひませう。
女　氣をつけて行きなさんせ。
（法師は杖をついて去る。向ふより景家の弟子又七、十藏のふたりは少しく酒に醉ひたる體にて、おなじく弟子の景安を無理に引張つて來る。）
又七　さあ、こゝまで來て歸るといふことがあるものか。まあ、兎も角もあすこまで歩んだ。あゆんだ。
景安　いや、わしはもう歸りたい。どうぞ堪忍してくだされ。
十藏　さて、情の剛い男ぢや。まあ、だまされたと思うて一度行つて見なされ。
景安　でも、あまり遲うなつてはお師匠樣に叱られる。わしは先へ戻ります。
又七　今時の若いものが附合を知らぬと云ふことがあるものか。わし等とても遊ぶのではない。たゞ素見いて歸るばかりぢや。
景安　それでも私は……。
十藏　えゝ。そんなことを云はずに、まあ一緒にあゆんで來なされ。
（ふたりは嫌がる景安を無理に引張つて來る。）
又七　それ、こゝが出口の編笠茶屋といふのぢや。
十藏　笠を三つ賴みます。
女　あい、あい。
（女は壁にかけたる編笠を取りにゆく。門のうちには小唄の聲きこゆ。二人は景安を押へてゐる。）
唄〽起請誓紙をなぜ書かしやんす、戀はふたりの胸にかく。
又七　あれ、どうぢや。あゝいふ唄を聽いては歸れまいが……
（女はあみ笠を持つて出づ。）
十藏　さあ、門を這入るにはこれをかぶつて行くものぢや。
景安　いや、いや、そんなものはいりませぬ。
唄〽立つる錦木甲斐なく朽ちて、あはで年ふる身の辛さ。

(景安は逃げてゆかんとするを、二人は無理におさへて網笠をかぶらせる。この爭ひのうちに上のかたより梵天長右衛門、白の傳七、犬の七兵衛の三人出で來り、つか〳〵と寄つて景安の笠をのぞく。景安等は薄氣味わるき體にてあとへ退る。長右衛門は人違ひだといふ心にてうなづき合ひ、更に門の內をうかゞふ。夜泣饂飩を賣る男、行燈のつきたる荷をかつぎて門內より出でゆく)

唄〽廓の出口に朝顏うゑて、からみ止めたやさらば垣。

(門內より小太郎景正はあみ笠をかぶりて出づ。長右衛門は衝と寄つて笠を覗く。景正は顏をそむける。傳七も七兵衛もかはる〴〵寄つて笠をのぞき、これも人違ひだとさゝやき合ふ。門內より綱絡太夫、廿黃。禿生野を連れて出づ。生野は走りゆきて景正の袂にすがる。景正は笠をとる。綱絡太夫は摺寄つて無言にて男の笠に手をかけ、茶屋の行燈の火かげに顏をみあはせて別れを惜む。大きな提灯をつけたる辻占賣い男、そめきの客三四人、門內より出でゆく。門內より次郎時圓は逢坂太夫と千鳥に送られて出づ、長右衛門は進んでその笠をのぞき、傳七と七兵衛を見かへりてこれだと知らすれば、傳七は先づ進んで時圓の胸ぐらを取らんとし、時圓よろめく。逢坂太夫あわてゝ遮る)

唄〽連れて退いてと頼まれながら、西へ行こやら東やら。

(長右衛門等は進んで時圓を打たんとするを、逢坂太夫と千鳥は遮るに、流石に手あらくも突き退けかねて、三人は持てあましてゐる。景正は綱絡太夫に笠をひかれながら、下のかたへ行かんとしてこの間へ割つて入る。傳七は邪魔だといふ體にて、景正をつき退くれば、笠は太夫の手をはなれて景正は下の方へよろめき行く。この時、景安は笠をかなぐりしまゝ進み出でて景正の顏をすかし覗る。景正は顏をそむけて行かんとすれば、茶屋の女出づ。)

女　もし、お笠を……。

景正　おゝ。

(あみ笠を女にわたす。これと同時に、時圓は笠をかたむけしまゝ摺りぬけて行かんとす。又七と十藏は門內へ入らんとして長右衛門等に突きあたる。長右衛門

又七　錦ヶ原の辨天へ參詣にゆきました。

お園　さのみ遠くもない辨天様へ、ひる前から家を出て、いつまで何をしてゐることやら、若やほかへ寄り道でもしてゐるのではあるまいかなう。

又七　弟子とは云へど兼安といふ名をも許されて、來年はおまへと夫婦になる筈の男ぢや。案じらるゝのも無理ではないが、年こそ若けれ、あの男にかぎつては決して浮いた浮氣などあらう筈はござりませぬ。

十藏　さうぢやとも、あの男に間違ひがあつてはたまらぬ。まあ、まあ、心配をせずとおとなしう待つてゐなされ。

お園　又そのやうなことを云うて嘲るのか。ほかに寄道をしたのではあるまいか、と云うたまでぢや。なんでわたしが悋氣をしようぞ。

又七　はて、心配すればこそ一々出入りを見張つてゐらるるのであらうに……。したが、まあ安心さつしやれ。あの兼安は廿歳といふ今年まで、島原通ひはいふに及ばず、祇園や宮川町の茶屋も知らぬ男ぢや。現にいつぞやの夜も……。

十藏　えへん、えへん（咳拂ひす）凡そこゝらで固いものといつたら、日本随一の兼安かと、世間でも專ら噂してゐるくらゐぢや。おまへの兄御の兼正どのと一つ臼で搗きまぜたら、丁度よい加減の若い男がふたり出來ようものを……。さて、自由には行かぬものぢや。

又七　ほんに兼安とは打つて變つて、兼正殿の島原通ひは、随分久しいものであつたが……。

お園　あ、これ、又しても兄様の蔭口云やるか。父さまのお耳に這入るとむづかしい。殊にこの頃はあの通り、廓通ひもふッつりと止んで、一心にお細工に凝つてゐらるるものを……。過ぎ去つたことは今更云はぬがよい。

十藏　それにご隠居様に養はれてゐた兼正殿が、この七月から生れ代つたやうに、廓がよひの足を絶つて、わき目も振らずに細工を勵んでゐるとは、不思議なこともあるものぢや喃。

お園　なんのそれが不思議であらう。兄さまとても性根はある。たとひ一旦は迷うても、夢がさめたら元の兄様ぢや。烏丸殿のおあつらへを受けてからは、一足も外へは出ず、廓のことなどは打忘れて、念入りの御細工にかゝつてゐらるゝ。おまへ達もそと見習うたがよからうぞ。

又七　その烏丸殿といふのお頼みを取次ぢや。たのんだ人はほかにあるらしいぞ。

お園　頼んだ人がほかにあるとは……。

又七　お前さま達は若人氣質で物事に疎し、おまへも兼安も正直者、人の云ふことは何でも一圖に眞に受けてゐらるるが、兄御がこの頃作つてゐる琴といふのは……。

十藏　これ……。又しやべるか。（袖をひく）

又七　（うなづく）ぢやによつて、わしは……なんにも云はぬのぢや。

（二人は顔を見あはせて黙る。お園は不審の眉をひそめる。）

お園　なにやら様子のありさうな今の口ぶり……。これ、隠さずと云うて聞かしや。

（十藏は再び又七の袖をひく。）

又七　いえ、なんにも知りませぬ。

（呆果てゐる。お園はかんがへてゐる。島原の仲居お清出で、門口にて内をうかゞふ。）

お清　もし、御免くださりませ。

（又七、門口に出で来る。）

又七　なんぢや。（表を見る）おゝ、おまへは島原の……。

お清　はい、景正どのはお宿でござりますか。

又七　おゝ、その景正殿は宿にござるが……。（お園の前を憚りながら）なんの用ぢや。

お清　（そつと文を出す）どうぞこれをお届けなされて下さりませ。

又七　あい、あい。たしかに受取つた。

（又七は文をうけ取り、早く帰れと眼で知らせる。）

お清　では、どうぞよろしくお願ひ申します、

（お清は早々に立帰る。又七は内へ戻つて来る。）

お園　これ、又七。それは島原の太夫から兄様のところへ来たのではないかえ。

又七　え。

お園　父様に見られぬやうに隠して置いたがよいぞ。

又七　さあ。さう何もかも知つてござるなら、いつそこれはお前に頼みます。そつと細工場へ行つて兄御に渡してくださらぬか。

お園　そのやうなものを取次いで、又どのやうな係り合にならうも知れぬ。わたしは嫌ぢや。

又七　でも、まあ、頼まれてくだされ。

お園　いや、おまへ達が頼まれたのではないか。

又七　そこを又、わしから改めてお前にたのむのぢや。

（又七はお園に文をつき付ける。お園は断る。この押合のうちに、表より景安は足早に帰り来る。）

景安　遅うなりました。

（又七はお園の袂に文をおし込む。）

又七　おゝ、今戻られたか。

（お園も忙はしく出迎る。）

お園　景安[illegible]。ほんに遅いことであつたなう。

景安　弁天様へまゐつた帰途、あすこの辻の角の、二軒目のまへまで来ると、内では碁の[illegible]講があるとみえて、

大勢の人があつまつて、冴えた音色がきこえました。

お園　おゝ。

景安　彈く人は誰か知らぬが、そのしらべの面白さに、我を忘れて聞き惚れて、半刻ほども立つてゐました。はゝはゝ。

お園　さうであつたか。(打笑みて)いつもながら商賣の道には費心なことぢや。

十藏　これで先づ御機嫌も直つたか。

お園　え。

十藏　いや、お天氣が直りさうで結構ぢやと云ふのでござります。

又七と顏なみあはせて打笑む。)

お園　なう、景安、お前はまだ午の飯も濟まぬであらう。早う奧へ行つて喫べたがよい。わたしがお給仕をして遣りませうぞ。

景安　はい、はい。

又七　今からこれでは、來年は思ひ遣らるゝなう。

お園　えゝ、うるさい。默つてゐや。

(お園と景安に睦じさうに連れ立ちて奧に入る。又七と十藏はあとを見送りて笑ふ。次郎時國と襧屋伊兵衛出づ。)

伊兵衛　もし、次郎様。あれほど念を押して置きましたにまだ出來ぬでは困ります。

時國　ぢやと云うて、わしが手で作るものでは無し、相手が相手ぢや。なんぼ催促してもらちがあかぬので。わしもほと〳〵困じ果てゝゐるのぢや。

伊兵衛　先方からは毎日の催促で、仲に立つわたくしも實に迷惑してをります。おうたがひ申すではござりませぬが、よもや噓ではござりますまいな。

時國　なんでわしが詐り云はう。わしがほんたうに頼んであるか無いか、論より證據ぢや。景家の家まで一緒に來やれ。

伊兵衛　はい、はい、まゐりまする。

時國　しかし表向にはどこまでも私が頼んだ體にしてあるのぢやぞ。そちが濱多に口を出してはならぬ。よいか。

伊兵衛　そこに如才はござりませぬ。

(二人は門に來る。)

時國　頼む。

十藏　はい、はい。

(十藏は門に出づ。)

十藏　おゝ、これは、これは……。先づお通りくださりませ。

時國　そんなら免してたもれ。

(時國は内に入る。又七も出で來る。)

又七　おゝ、伊兵衛どのも御一緒かえ。
伊兵衛　途中でお目にかゝつたので、ちよつとお門まで御一緒にまゐりました。
又七　まあ、こつちへ上りなさるがよい。
伊兵衛　では、御免くださりませ。（内に入る）
時國　早速ぢやが、景家は在宅かな。
十藏　はい、御細工場に居りまする。
時國　このあひだから誂へて置いた一面の琴は、まだ出來いたさぬか。
又七　御細工に暇がいりまして、まだ出來いたさぬ樣でござりまする。
時國　それは困つたなう。
（伊兵衛の顏をみる。伊兵衛は「もつと手嚴しく催促せよ」と眼で知らすれば、時國はうなづく。）
時國　何故いつまでも出來ぬのぢや。
十藏　お急きなさるは御もつともでござりまするが、何分ほかの御道具とも違ひまするので……。
時國　えゝ、そのやうな言譯は聞かぬぞ。やれ、明日の明後日のと、今までわしを阿房あつかひにして、憎い奴ぢや。
（伊兵衛は「さうだ、さうだ、もつと烈しくやれ」と眼で煽てる。）

時國　おゝ、さうぢや。おのれ等のやうな者共を相手にいつまで云うても埒はあくまい。わしが細工場へ押掛けて直々に景家に催促してくれう。さあ、案内しやれ。（起ちあがる）
又七　まあ、しばらくお待ち下さりませ。
時國　嫌ぢや、嫌ぢや。さあ、通るぞ。案内せい。
（支へる又七と十藏を突き退けて、時國は奥へゆかんとす。奥より景安出づ。）
景安　あ、もし、どうぞお鎭まりくださりませ。御立腹は重々御もつともでござりまするが、御細工も最うあらかたは出來上つて居りまする。今しばらくの御勘辨を……。
時國　いや、ならぬ、ならぬ。兎もかくも一應は景家に逢うて、きびしく云うて置かねばならぬ。さあ、退け。ええ、邪魔するな。
景安　たとひ何と仰せられましても、御細工場へ直々にお越しの儀はなりませぬ。
時國　なに、通すことはならぬと申すか。
景安　御用はわたくしが御取次ぎをいたしますれば、先づお待ち下さりませ。
（景安は無理に時國をそこに坐らせる。又七と十藏も共に宥める。）

二

（奥の細工場。平舞台にて正面は襖。鴨居のうへには大いなる神棚ありて、室の四隅には注連を張れり。上のかたには板戸の出入口あり。下のかたは板羽目。細工場の中央には小さき爐を切りて、膠鍋をかけたり。

上のかたには金井長門守景家、五十餘歳、烏帽子、直垂。下のかたに伜の小太郎景正、烏帽子、袖のやゝ狭き着付、小袴。いづれも刀を執りて、一心に琴の細工にかゝりゐる。あたりには琴の裏板、鑿、鉋、鑢のたぐひ、木の屑など散亂せり。）

景家　（琴の内部を捜りながら云ふ）龍腔の厚さはおよそ七分……。龍甲の削り方が些と薄かつたかな。いや、さうでもあるまい。このくらゐの厚味があればよい筈ぢや。むゝ、むゝ。

（景家はひとり首肯きて微笑みながら、猶も餘念なく刀を下してゐる。景正は無言にて細工をつゞけてゐる。

板戸をあけてお園出づ。）

お園　父様……。

（景家は見かへらず。お園に摺寄る。）

お園　もし、父様……。

景家　（初めて見かへる）おゝ、娘……。なんぞ用か。

お園　丹波の大納言様の若殿がお越しでござります。

景家　大納言殿の御子息が見えられたと……。大方また例の御催促であらう。お琴はまだ出來つかまつりませぬと申すがよい。

お園　左様に申上げましたが、なか／＼御承知なく、是非とも細工場へ通つて其方に直談すると、以ての外のおむづかりでござります。

景家　いや、藤原景家の御細工場へは、相傳の一子か門人のほかには餘人の妄りに通ることはならぬと申せ。

お園　でも、ほかならぬお方でござりますれば……。

景家　はて、面倒な。（顔をしかめる）よい、よい。そんなら私が出て逢はう程に、しばらくあれにお控へくだされと申して置け。

お園　あい、あい。

（お園は起つて行かんとする時、袂より彼の文をおとす。景家は拾ひ取る。）

景家　これはなんぢや。

（お園ははつと驚く。）

お園　いえ、あの……それは……。

景家　なにか知らぬが上下に紅をさいて、美しいものぢや。歌でも書いてあるのか。

お園　はい。あの……。（返答に困つてゐる）

景家　見てもよいか。
お園　いえ、それは……。
景家　はゝ、わしが見るに仔細はあるまい。表書(うはがき)は女文字で、様まゐる……なか〳〵見事な手蹟ぢや。はて、なにが書いてあるか。
(景家は天地紅の文をあけて讀む。お園は氣を揉めども今更どうもならず、唯はら〳〵してゐる。景家、最初のうちは無言にて讀みゐたりしが、なかごろに至りて眉を顰む。)
景家　おゝ、其御にたのみまゐらせ候ふ琴の御細工は……もはや三月にも相成り候へども……今になんの御たよりも無之……
(今まで一心に刀を執りゐたりし景正は、この文句を耳にして思はず頭(かしら)をあげ、妹と顔を見あはせる。お園は文を指さして、とんだことが出來したと眼で知らせる。景正もおどろきて、猶も耳をかたむける。)
景家　この頃は如何御暮し遊ばされ候ふやらんと、あまり思ひに堪へかね候ふまゝ……」むゝ。
(景家はかんがへながら又もや無言にあとを讀みつゞくる時、景清より板戸を細目にあけて窺ひゐたりし景安は、獰と進み入りてその文をうばひ取らんとし、末の半分をひき裂きて爐のなかに投げ込めば、文は潑(ぱつ)と燃える。皆々おどろく。)
景家　やい、景安。なにをするのぢや。むゝ、扨はこの文は其方(そち)のところへ届いたのか。
景安　左様でござります。
景家　この文體は……遊女などから送り越したものゝ様にもみえるが……確にさうか。
景安　お目にとまつて何とも申譯がござりませぬ。
お園　あ、もし……お前は……。
(お園はおそろしさで袖をひくを、景安は眼で制す。景家はわが手に殘りし文殻をながめる。)
景家　文はなかばより引裂かれて、末の宛名は讀まれなんだが、自身の自状に相違はあるまい。汝も見どころある若者と、わが名の一字をあたへて景安と名乗らせ、ゆく〳〵は娘の婿にとも思うてゐたに、若氣のあやまりとは云ひながら、いつの間に色里の味をおぼえたぞ。文言(もんごん)によつて察すれば、きのふや今日のことではあるまい。
景安　恐れ入つてござりまする。
景家　たはけた奴めが……。
(父の聲少しく嶮くなれば、お園はいよ〳〵氣を揉む。)
お園　いえ、それは違ひまする。景安に限つてそのやうな

ことは……。
(景安は無言にて頭を掉り、なんにも云ふなと眼で知らせる。)
お国　でも、罪もないおまへを叱らせては……。
景家　罪の證據はこゝにある。(破れし文殼を示して)やい、景安。おのれは遊女にたのまれて、琴の細工を受合うたか。
景安　え。
景家　さあ、まつすぐに云へ。たしかに申せ。
景安　はつ。
景家　その琴はどこにある。
景安　はつ。あの……よそにあづけてござりまする。
(今まで默してゐたりし景正は、この時すこしく進み出づ。)
景正　いや、その琴は……これでござりまする。
景家　なに、その琴が……。烏丸殿より頼まれたと云うたは詐りか。
景正　父上、御免くださりませ。
景家　むゝ。
(景家も流石におどろきて、わが子の顏を屹とみる。)
景正　これ、景安、島原の遊女より私のところへ送り越した文を、父上がなかに讀まぬうちに引裂いて火に燒きすて、宛名のしれぬを幸ひに、ひとの罪を身にひき受け、わしを庇はうとする志は、かへす〴〵も忝けない。が、景正も男一匹、おのれが罪を他人に塗りつけておめ〳〵と見物してゐられうか。父上、この景安は正直一図の若者、決してお叱りくださるな。お目を掠めた不埒者は即ちわたくしでござりまする。
景家　景国から景安とお国の素振、合点がゆかぬと思うたが、扨はまことの文の主は景正おのれであつたよな。烏丸殿よりたのまれたと詐つて、毎日細工を励んでゐたは、島原の遊女につかはす品か。(屹とむき直る) さりとはおのれ、憎い奴……。今あらためて云はずとも、一家内の者はみな存じてゐる筈。この景家は長門守を受領して、勿體なくも禁裏の御用をうけたまはる天下一の琴師であるぞ。公家殿上人は是非もなし、その餘の人のあつらへは、たとひ百萬石の大名が膝を折つて頼んで來ても、きかぬと云ふが家の掟じや。その家訓も格式も打忘れて、人もあらうに傾城遊女が、色里であそぶ三味線を、こゝで手づから作らうとは、家の恥とは氣がつかぬか。御細工場の汚れとは思はぬか。日本中の神々を勸請して、朝々には注連をはりまはし、一切の汚れを嫌ふこの御細工場で、よくも現在の親を盲にして、不淨の道具を作つたな。さあ、その琴をこゝへ出せ。

景正　琴をなんとなされまする。
景家　なんとするとは知れたことぢや。(有合ふ鉈を執る。)
景安　では、あの琴を……。
お園　お毀しになさるのでござりますか。
景家　くどいことを……。打つて砕いて薪とするのぢや。
景正　いや、その儀は御免くだりませ。父上のお目を掠めて、大切の御細工場を汚しましたるは、わたくしが重々の不心得、どのやうな御折檻を受けませうとも、さらさら厭ひは致しませぬが……。これ、御覧じませ。未熟ながらも景正が三月このかた一心を籠めて……。(琴をうち眺める)もはや七分通り出來して居りまする。これをむざ／＼と打毀しまするは……。
景家　ならぬと云ふか。遊女なんどに頼まれて作つた琴を、おのれはそれほど大事に思ふか。
景正　たとひ頼んだ者は誰でござりませうとも……。遊女であらうと、ぬす人でござりませうとも……。これはわたくしの手から生れ出たものでござりまする。
景家　ぢやによつて、毀せといふのぢや。
景正　いや、その儀ばかりは……。
景家　ええ、兎かう申すな。
(景家は鉈をふり上げて進まんとするを、景安とお園はなだめながら支へる。板戸をあけて時國と伊兵衛出づ。)
伊兵衛　あ、これ、どうなされた。まあ、まあ、お待ちなされぬか。
(伊兵衛も中へ割つて入る。)
時國　これ、さつきから私等を待たせて置いて、親子喧嘩をしてゐやるのか。そんなことは後にして、これ、景家。わしがいつぞや誂へた彼の琴はもう幾日になると思ふぞ。出來るものか、出來ぬものか、しかと返事をしてくりやれ。
景家　(形をあらためる)失禮の段は眞平御免くださりませ。いつぞやお誂へを受けましたる御道具は……(わが琴を指して)もうこれほどに出來して居りまするが、裏板の取り付や何や彼やで、まだ／＼一月あまりは手間取りませうかと存じまするが……。
時國　さうかなう。
(伊兵衛の顔をみる。伊兵衛は頭をふる。)
時國　さうぢや。二三日のうちには出來ぬか。
景家　それはなりませぬ。たとひ出來ましたとて其のやうな急細工では、おまへ様方の御道具にはなりますまい。
時國　いや、もうかうなれば急細工でもよい。一日も早う出來ればよいのぢや。
景安　なぜ又そのやうにお急きなさるのでござりまする。

時國　それはお身たちの知らぬことぢや。これ、景家。わしが折入つて頼むほどに、どうかこゝ二三日のうちに……。
景家　金井長門守藤原景家作と銘を打つ品に、さやうな疎略なことは相成りませぬ。
時國　どうでもならぬか。
伊兵衞　（思案して囁く）もし、次郎樣。これはもう何も彼も打明けて、お頼みなされては如何でござりませう。
時國　さあ。
景家　では、なにか仔細があるのでござりまするか。ことの仔細によりましては、わたくしも夜の目も寢ずに精限(せいかぎ)り、根かぎり働いても見ませうが……。
時國　では、仔細を云うたら肯いてくるゝか。
景家　さあ、かならず出來るといふ御請合はなりませぬが、先づ出來るだけは急いでも見まする。
時國　おゝ、それで少しは安堵したが、わしの口からその仔細を云ふのはなう。
伊兵衞　おまへ樣から云ひにくければ、わたくしが代りに申しませうか。
（時國うなづく。伊兵衞は少しく進み出づ。）
伊兵衞　かやうなことを申したら、さだめて御立腹かも知れませぬが、實はそのお琴は……彼(か)のお人の御道具ではござりませぬ。

景家　なに……。（時國を見て）あなたの御道具ではないと……。
（時國は面目なげにうつむく。景安とお園はあきれて顏を見あはせる。）
景家　さりとは不思議なことを續けて聞くものぢや。景家親子が三月越し、この御細工場に引き籠つて、一心に作つてゐた琴と琴は、二面ながら揃ひも揃うて詐りの品か。（景正の琴を見て）せがれの細工は烏丸殿おたのみと申すは詐りで、まことは島原の遊女のために作ると云ふことを、今の今はじめて知つたが……。わが手づから作りし琴も……（わが琴を見て）これも丹波の若殿のものではなく……。（驚きながらやゝ怒を帶びて）して、これは、誰にたのまれた。
伊兵衞　大津の町にすむ物持の商人(あきうど)から……。と申したら相手は町人、すぐに斷ると云はるゝかも知れぬが、今となつては斷るにも斷られぬ、切ないわけがござるのぢや。
（景家はいよ／＼怒をふくんで答へず。伊兵衞は更に景家にむかつて云ふ。）
伊兵衞　まあ、聞いてくだされ。右の商人(あきうど)が景家殿の作つた琴を達(たつ)ての所望ぢや。さりとて正面から云ひこめば斷らるゝのは知れてゐるので……。（時國を見て）あなたに内々おねがひ申し、表向きはあなたの御道具のやうに云

ひこしらへて……。

景安　では、あなたの御道具と仰せられたは……。

伊兵衛　實のところは詐りぢや。それには又云ふにいはれぬ譯もあつて、その琴がいつまでも出來せぬときには、一旦請合うたあなたも御迷惑、仲に立つたわたくしも迷惑、諸方に色々の難儀が起らうと云ふものぢや。そこを察して一日も早く出來するやう、こなたからもお師匠様によく〳〵頼んでくださらぬか。

景安　それならば實をはじめから打明けられたら、又取りなしの仕様もあつたものを……。困つたことになりましたなう。（景家にむかひて）もし、お師匠様。お聞きの通りの次第でござりまするが……。

時圀　これ、景家。いつはりを云うたは、わしが一生のあやまちぢや。この通り、手をついて詫びるほどに、どうぞ料簡してその細工を急いでくりやれ。たのむ、頼む。

お園　わたくし共が差出たことではござりまするが、あなたもあの様に仰しやるものを……。今度だけは機嫌を直して……。

伊兵衛　さうぢや、さうぢや。今度だけはこゝろよく承知してくだされば、三方四方が圓く治ると申すものぢや。

時圀　否か應か、早う返事を聞かしてたもれ。

景家　その御返事は易いこと。これ、御覽なされい。

（景家は再び彼の鉈をとりて、わが作りかけたる琴を眞二つに打ち碎く。）

お園　あ、お琴は眞二つぢや。

伊兵衛　折角七分通りは仕上つたものを……。惜氣もなくむざ〳〵と……。

（みな顔を見合せておどろく。）

景家　なにを驚く、何をさわぐ。金井長門守景家は日本にふたりとない禁裏のお琴師、たとひ山ほどの黄金を積まうとも、町人風情の道具を作らうか。積つて見ても知れたことぢや。

時圀　では、どうあつても……。これ伊兵衛、ひよんなことになつてしまうた。

伊兵衛　いくら名人氣質でも、片意地にも程がある。と云うたところで、もう斯うなつては……。あゝ、折角見事に出來たものを……（惜さうに碎けたる琴をながめる）今更仕様がござりませぬ。

景正　いつもの御氣性とは云ひながら、ほんに思ひ切つたことをなされました。

（皆々再び顔をみあはせて嘆息す。）

景家　やい、景正。おのれも職を重んずる心があらば、父を見習へ。

（持つたる鉈をなげて退る。景正はしづかに見送る。）

景正　おまへ樣とわたくしとは、親子でも心が違ひまする。
景家　おのれの作つたものがそれほどに惜いか。
景正　先刻も申した通り、一心を籠めて產み出したもの
　を、どうしてむざ〳〵と毀されませう。この儀ばかりは
　何うあつても……。
景家　むゝ、どうでもそれを毀し得ぬか。
（景正ぢつとなりて、父の顏を見あげる。）
景正　わが手で作つた細工物を、わが手で打碎きまするの
　は、おのが手足を切りきざむよりも、情なうござります
　る。お察しくださりませ。
（思ひ入つて云へば、景家少しくかんがへて、詞を和
　らげる。）
景家　よい、よい。それもきこえた。では、その葬を大事
　にかゝへて何處へなりとも勝手にゆけ。
お園　え、あの、兄樣を御勘當……。
景安　生れと色々のことが落合うて、御機嫌はさん〴〵で
　もござりませうが、大事の御世繼を御勘當とは、餘りに
　むごい御成敗……　そのやうなことの無いやうにと心を
　砕いた甲斐もなく……。（嘆息して）もし、お師匠樣。わ
　たくしが代つてお詫をいたしますれば、どうぞ今度だけ
　は兄樣にも御勘辨をおねがひ申しまする。
お園　文を取り落したはわたくしの粗相、それからこのや
　うなことが起りましては……。
景家　いや、いや、そち達はなんにも云ふな。これ、倅……。
景正　はあ。
景家　世間の親と一つに思ふな。詐つて親の眼をくらまし、大切
　の御細工場で遊女どもが葬を作る。それだけでも勘
　當の罪はある。憎い奴、不所存者め。……とは叱るもの
　の、今の世の若い者、むかし氣質の親とは心の入れ方が
　違うて、たとひどのやうな羽目になつても、おのれが細
　工物を飽までも大事にするとは……。（景正をぢつと視
　て）おもへば可愛いところもある。それほど大事の細工
　ならば親の口から毀せとも云ふまい。
景正　では、御勘辨くださりまするか。
景家　さりとて、御細工場を汚すことはゆるさぬぞ。一旦
　は勘當ぢや。どこへでも立去つて、作りたいものを勝手
　に作れ。
景正　はあ。
（景家はお園と景安を見かへる。）
景家　どうぢや、判つたか。
景安　恐れ入つてござりまする。
伊兵衛　（嘆息する）そつちの話は判つても、こつちは一
　向つまらぬことになつてしまうた。

時園　もう斯うなつては我身の破滅ぢや。伊兵衛、どうしたらよからうか。（おろ〳〵聲になりて涙ぐむ）

景安　わづか半晌か一晌の間に、思ひも寄らぬことが色々と降つて湧いて、右を見ても左を見ても、お氣の毒なことばかりぢや。

お園　若殿さまのお琴は毀され、兄さまは御勘當……。

景家　えゝ、いつまでもくど〳〵云ふな。若殿にもお歸りあれ。景正も早くゆけ。

景正　はつ。

景家　もろ〳〵の不淨で御細工場が汚れた。景安、切火を打て。

景安　はつ。

（景安は切火を打つ。景家は形をあらためて神棚のまへに拜す。景正はあたりに散りたる鑿や槌などを取片附ける。）

お園　兄様……。お前はどうでも行かれますか。

（お園は兄にとり縋る。景正は無言にてその顔を見る。時園は起たんとして思はずよろめく。伊兵衛は介抱する。入相の鐘きこゆ。）

――幕――

第三幕

下嵯峨の庵室。茅葺屋根の二重屋體にて、正面の上のかたには大いなる佛壇あり。つゞいて壁のまへには柱をかけたる新しき琴を立てたり。壁につゞいて佛畫を描きたる古き襖あり。その前には爐を設けて湯釜をかけ、爐のほとりには粗朶籠などあり。下のかたの横手には竹窓あり。竹縁は正面より上の方まで折りまはして、縁さきには竹の筧あり。切株の沓ぬぎあり。庭の上のかたには熟せる柿の大樹ありて、下のかたの門口は丸太の柱に竹の扉を閉ぢたり。扉の外にも紅葉せる大樹あり。上下ともにうしろは田畑を隔てゝ、二三の人家、岡、森など遠くみゆ。

（十月中旬のゆふぐれ。僧西念は箒を把つて、庭に散る紅葉をはいてゐる。十夜念佛の鉦の音遠くきこゆ。下手の奥より珠數をもちたる老婆は孫娘の手をひきて出で、扉の外を過ぎて向ふに去る。西念はやはり落葉を掃いてゐる。すこしく間を置きて、里の娘ふたりは珠數を持ちて出づ。西念は表を掃除せんとて扉をあける。）

西念　おゝ、お光どの、お照どの……。この日暮に揃うてどこへ行かるゝのぢや。

（娘等は微笑みながら珠數をみせる。）

西念　はゝあ、十夜のお念佛にまゐらるゝのか。若いに似合はず御信心なことぢや。

お光　ことに今夜は方々のお寺から和尚樣がお出でなされて、ありがたい御說法があると聞きました。

お照　こちらの御庵主樣も、定めてお越しなさるであらうな。

西念　もう半晌ほどもまへからお出でなされた。わしもこちらを片附けたら、後からそろ〳〵とまゐらねばなるまい。

お光　おまへもお說法をなさるのかえ。

西念　はゝ、わし等のやうな青道心が、勿體らしく說法したとて誰が眞面目に聞かうぞ。わしは庫裡に詰めてゐて、湯でも汲むお手傳ひをするばかりぢや。

お照　なんの、なんの、お前がお說法をしなされたら、わたし等は喜んで聽かうものを……。

西念　いや、ありがたいことを云うてくるゝ喃。お前方のやうな若い女子達ばかりが揃うてゐれば、わしも一心不亂になつて、說法でも談議でもして見ようが、兎かく十夜の念佛講にまゐるやうな信心者は齒のぬけた老爺殿や、腰の曲つた老婆殿が多いのでなう。はゝゝゝ。まあ、よいわ、早う行つて拜んで來なされ。

お光
お照｝あい、あい。

西念　あ、これ、これ……。御本堂は定めて人で一杯であらうが、御說法を聽くにかこつけて、若い男のそばへ摺寄つてはならぬぞよ。そんな悪いことをすると、これ、未來は地獄へ墮ちまするぞ。

お光　そんなことを云ふお前こそ、地獄へ墮ちぬやうに用心しなされ。

お照　お前が內證で宮川町へ行くことも、わたし等はみんな知つてゐるぞえ。

西念　いや、滅多なことは云はぬものぢや。このごろの娘達は口が悪うてどうもならぬ。さあ、さあ、暮れぬうちに早う行かつしやれ。

（娘等は笑ひながら去る。）

西念　わしが醫師に化けて折々は宮川町へ通ふことを、あの女子どもが何うして知つてゐるのか。隱すとすれど顯はるゝ……。はゝ、悪いことは出來ぬものぢや。

（入相の鐘きこゆ。）

西念　おゝ、寺々の鐘が唸り出したわ。いつの間にか日がくれた。どれ、燈火でも點さうか。（梢を仰ぎて）いくら掃いても、あとからあとからと落葉の雨……。もうよいほどに止めぢや、止めぢや。

（西念は咳きながら内に入る。奥の襖をあけて、小太郎景正は燈火（ともしび）を持ちて出づ。）

西念　おゝ、景正どの。あかりを點けてくだされたか。

景正　日がめつきりと短くなりましたなう。

（西念は籠を措きて縁にあがる。）

西念　なんと云うてももう十月ぢや。十夜（じふや）のはじまる頃になると急に日がつまつて來るのが習でござるよ（云ひつつ景正の顔を見て）けふは大分血色がよいやうでござるの。

（景正は微笑みながら、壁に立てたる琴を指さす。西念うなづく。）

西念　なるほど、あの琴が出來（しゆつたい）したので、急に元氣が附いたとみえまするの　親御の景家殿から勘當をうけて、この庵へぼんやりと尋ねてござつてから、毎日碌々に物も云はず、あの物置小屋のなかに閉籠つて、傍目（わき）もふらずに作つてゐられたが、人の一心はおそろしいものぢや。たうとう立派なものを仕上げられました喃。わし等にはなんだか一向判らぬが、景家殿の御子息ともあるべき人が一心を籠めて作つたものぢや。定めてあつぱれの名器でござらうなう。

景正　これほどのものは先づ日本に二つとはござるまい。

西念　え。

景正　はゝゝゝゝ。

（景正は快げに打笑ひて、ありあふ絹布にかゝりて、西念もなげに琴を眺める。）

西念　なんぼ私が素人ぢやと云うて、そのやうに嘲してくださるな。これだからうつかりとお世辭も云はれぬものぢや。はゝゝゝゝ。

（西念も笑ひながら爐に粗朶をくべてゐる。）

景正　頼んだ人も定めて待兼して居らう。あすは早々に屆けてまゐらうか。

西念　あの島原の太夫の許へか。

（景正は笑ひながら首肯く。）

西念　はゝ、羨ましいことでござる。して、その太夫の名はなんと云うて、年は幾つぐらゐぢやな。

景正　太夫の名は輛絡……。

西念　輛絡……。木曾義仲のおもひものを見るやうな偉い名前ぢやな。はゝゝゝ。

景正　年は廿歳（はたち）ぢや。

西念　年は廿歳……。これからが到盛り色ざかりと云ふのであらうな。美しいか。

（景正は笑ひながら首肯く。）

西念　なさけも深いか。

（景正はうなづく。）

西念　手管もあるか。

（景正にうなづく。西念も思はず乗出す。）

西念　いや、こりや堪らぬ。容貌はよし、なさけはあり、手管もあろ。その[illegible]太夫とは深い馴染か。

景正　三年越しの深い仲ぢや。

西念　おゝ、深い仲か。

景正　末は女夫と誓を立てた。

西念　誓紙をかいたか。

景正　熊野牛王も見そなはせと、ふたりが生血を紙に染めた。

西念　（いよ〳〵乗出す）　こりやさうなうては叶ふまい。あすは久振りでその太夫に逢うて、先づなんと云はつしやるな。

景正　なんと云はうか。（笑つてゐる）

西念　わしがその太夫ならば、なんにも云はずに先づ胸づくしを取つて……。はゝゝ。定めてさま〴〵の口説があるであらうな。こりやいよ〳〵堪らぬ。ひとのことでも何だか體がぞく〳〵するやうぢや。えゝ、もう、喉が渇いて来た。

（西念は竈のほとりに行きて、釜の湯をくんで飲む。景正は再び琴を[illegible]てゐる。向ふより小坊主一人出る。）

小坊主　これ、西念どの。西念殿。

西念　なんぢや。なんぢや。

小坊主　もうお説教がそろ〳〵始まるほどに、西念にも用がある。早う呼んで来いとお師匠様が御しやつたぞ。

西念　あゝ、よし、よし。こつちでも面白い説教を聞いてゐるところぢやが……。まあ[illegible]ならば是非もないわ。今すぐに参りますと申してくれ。

小坊主　いや、いや、あの西念はずるい奴ぢや。そなたが一緒に引張つて来いと仰せられた。

西念　あゝ、正直一図の西念を、ずるい奴とは情ないことぢや。では、一緒にゆくから、待て、待て。

（西念は内に入りて、頭巾と数珠など持ち来る。小坊主は縁にあがりて、佛壇に燈明などをあげる）

小坊主　さあ、さあ、早う来さつしやれ。

西念　たゝ、忙しない。今行く、といふに……。（景正にむかつて）では、景正どの、[illegible]

景正　今夜もさだめて遅いでござらう。お勤めとは云へ、御苦労でござるな。

西念　かうなると諸何凡夫が羨ましうござるて。（[illegible]く）さあ、行け、ゆけ。

小坊主　ちよつと待つてくだされ。

（小坊主は柿の木の下へ走りゆきて、熟したる實を二

つ三つ取りて袂に入れる。)

西念　えゝ、貴樣は猿か鴉の生れ代りか。あけても暮れても柿ばかり狙つてゐる。さあ、遲くなると御師匠樣に叱られるぞ。

小坊主　あい、あい。

(西念は先に立ちて出でゆく。小坊主は袂より柿をだして眺めながら後よりゆく。向ふより桐屋伊兵衞出で來り、雙方ゆき逢ふ。)

伊兵衞　おゝ、西念坊か。

西念　伊兵衞どのか。こなたも十夜へおまゐりかの。

伊兵衞　いや、後生をねがふよりも此世のことが先づ大事ぢや。して、景正殿は內でござるかの。

西念　おゝ、居る、ゐる。このあひだから丹精の琴が出來上つたと云うて、ひとりでにこ〳〵してゐますわ。

伊兵衞　琴が出來たとあれば丁度幸ひぢや。では、鳥渡たづねて來ませうか。

西念　ほかには誰もゐぬから、ゆつくりと遊んで行かつしやれ。

(雙方挨拶して、西念と小坊主は去る。伊兵衞は門口に來る。)

伊兵衞　もし、御免くだされ。

(景正初めて見かへる。)

景正　どなたでござるな。

伊兵衞　伊兵衞でござります。

景正　おゝ、伊兵衞どの……遠慮なしにこれへ、これへ……。わしが此處にゐることがよう知れましたな。

伊兵衞　(緣に上る)　先月の一件から親御の御機嫌を損じて、どこへか御立退きになつたとやら……。それからだん〳〵に心當りを探つてみますと、この庵室にお假住居といふことが此頃やう〳〵判りました。

景正　譯はこなたも知つてゐよう。父上の御勘氣をうけて、差當り身の措所もなきまゝに、こゝの庵主とは舊い馴染でもあれば。先づかゝりうどと相成つて、しばらく庇を借りてゐるのぢや。ようぞたづねて下されたな。

伊兵衞　あんまり好くもまゐりませぬ。さういふ御逼塞の折柄に、かやうな事を申上げますのも、まことに心苦しうはござりますが、先頃お渡し申しました桐の一件……。なにぶん五十兩といふ高價の品でござりますれば、問屋の方でもさう何日までも待つてはくれませぬので、中に這入つたわたくしも甚だ迷惑してをりますが……。

景正　それは如何にもお氣の毒なことぢや。併し伊兵衞どの。あの桐の木地はよいものであつた。

伊兵衞　御意に入りましたか。どうしても二百年以上の品でござりませうが……。

景正　たしかに二百年以上、しかも禪寺などの庭に栽ゑられたものであらうな。

伊兵衛　左樣でござりませうか。

景正　琴に用ゆる桐材は、雷火に撃たれたものか。但しは寺内にうゑられて、あさゆふに鐘の音が沁み込んでゐるものか。二つに一つを最も好しとするが、この道の秘傳ぢや。先刻槌をかけて試して見たところ、その音色は寺に栽ゑられたものと察せらるゝが……。

伊兵衛　いくら私が商賣人でも、そのやうな深いところまでは迚も鑑定は付きませぬ。して、そのお琴はどこにござりますな。

景正　あれぢや。まあ、見てくれ。

伊兵衛　はい。

（伊兵衛は起つて、彼の琴をともしびの前に持來り、つく〲眺めて感心したる體なりしが、再びこれを舊のところに立て置く。）

伊兵衛　いや、恐れ入りました。お見事のものでござります。（少しく思案して）くどくも申すやうでござりますが、あの桐の價につきまして、問屋からもたび〲催促を受けてゐるのでござりますが……。如何でござりませうか。それを手前にお讓り下さるわけには……。

景正　それはならぬよ。迷惑ぢや。

伊兵衛　でもござりませうが、あの琴はどうしても金百兩以上の價はあらうかと存じます。あれを懇望する人に賣拂ひまして、そのうち五十兩を問屋にわたし、殘りの五十兩をおまへ樣が當座のお小遣ひになされましたら、わたくしの顏も立ち、お前さまのお手許も樂になり、つまり双方のためかとも存じますが……。

景正　折角ぢやが、それは斷る。懇望の人はほかにあるのぢや。

伊兵衛　では、桐の料金五十兩はどうして下さりますな。

景正　おまへの迷惑は察してゐるが、わしの迷惑も察してくれ。景正が世に出るときがあらば、桐の價は二倍三倍にしても戻してつかはすから、どうぞそれまで待つてくれ。

伊兵衛　わたくしの事ならば又どうとも御相談も致しませうが、なにぶん問屋の方からむづかしく云つてまゐりますので……。

景正　そこを折入つて頼むと云ふのぢや。わからぬかなう。

伊兵衛　いや、判つては居りますが……。どうも、まことに困りました。今年はわたくしの厄年でござりませうか。爲ること爲すことが皆くひ違うて……。お前さまも御存じの通り、丹波殿の若殿から手をまはして親御樣におねがひ申したお琴も……。あのやうな始末になつてしまひ

景正　三月あまりも廓へ足踏せなんだが、思ひもよらぬ噂を聞いたゝ廓の花とうたはれた逢坂太夫が、あれほど云ひかはした時国どのを袖にして、堺の大盡とやらに心を移すとは、さすがは廓の女子ぢやなう。可哀や時国殿は氣が狂うて……。女を尋ねてさまよふか。いや、わしとても狂うであらう。今も伊兵衛が云うた通り、これが男のよい手本で、[illegible]太夫もどうしてゐるやら……。

（壁に立てたる琴はおのづから鳴る。）

景正　や、琴が……。

（怪みて見かへれば、琴は再び鳴る。）

景正　合點のゆかぬ琴の空鳴……。心の迷ひか、そら耳か。（かんがへる）いやたしかに鳴つた……。鳴つたのぢや。しかも人間の爪先では迚もひき出されぬほどの……冴えてはゐれど　弱い……弱い音色であつた。はてなう。（又もやかんがへる）もしや調子に狂ひでも出たのか。

（景正はあわてゝ琴を持ち出し、燈火のまへにて凝と視る。絃の音は絶えずきこゆ。景正の妹お園は提灯を點して出で、門に來いて提灯をかくしながら内をうかがふ。景正は琴をながめる。）

景正　龍頭……龍角……龍甲……龍尾……刀の拵り方には一分の狂ひもなく、木地といひ、細工と云ひ、あつぱれ揃うた名器とは、あながちに我が自讃ではあるまい。天下一の名を取つた父上でも、おそらくこれほどのものは作り得まいと思はるゝが……。

（景正はわが作りし琴を惚々とながめてゐる。お園は門をあけて衝と進み入る。）

お園　兄様、お琴は出來ましたか。

景正　おゝ、妹……。出來た、出來た。これを見ろ。

（お園は提灯を吹き消して、縁にあがる。）

お園　先づ其後はお變りもござりませぬか。

景正　えゝ、そのやうな挨拶はあとで云へ。これ、これを見ろ。兄が根かぎりに作つたものぢや。なんと見事な出來であらうが……。

お園　おゝ。（琴を凝とみる）

景正　そちも景家のむすめ、景正の妹ぢや。よく目きゝをいたしてくれ。さあ、兄が用ゐた刀の冴えに、毛筋ほどの難もあらば、遠慮なく申してみろ。

お園　兄様、よう出來ましたなう。

景正　褒めてくるゝか。

お園　わたくしばかりではござりますまい。父様もこれを御覧なされたら、あつぱれ二代の景家ぢやとお褒めなさるでござりませう。

景正　それほどの名作を、父上は鉈で打碎かうとせられたぞ。

お園　それは一時のお腹立ちからでござりまする。このやうな名作をお目にかけましたら、父樣のお心もやはらいで、御勘氣が赦りまいものでもござりませぬ。及ばずながらわたくし共もお傍に附いて居りますれば、かならずよい樣にお取りなしを……。
景正　して、今宵はなにしに來た。
お園　こゝへ忍んでおいでのことを人の噂にきゝましたれば、お十夜へまゐると云ひこしらへて、窃とおたづね申しました。
景正　いつもながら優しい志ぢや。あらためて禮をいふぞ。父上にもお變りはないか。
お園　はい。相變らず御達者でござりまする。
景正　景安も無事かな。
お園　無事に暮してをりまする。
景正　太夫の文を火にやいて、わしを庇はうとしてくれた親切は、景正決して忘れぬと申してくれ。
お園　はい。
景正　年があらたまらば、そちと景安とは女夫のさかづきもする筈ぢや。ふたりが仲好うして、父上に孝養をたのむぞ。
お園　はい。
景正　いや、恥かしがるには及ばぬ。兄も戀を知らぬ男ではないわ。
（景正は微笑む。お園は恥かしげに俯向く。）
景正　時にお園。丁度よいところへ來てくれた。この琴は我ながら好う仕上げたと思ふものゝ、まことの音を出して見ねばまことの良否はわからぬものぢや。琴を作ることは景正決して人に劣らうとは思はぬが、琴を彈くことは迚もそちには及ばぬ。どうぢや、こゝで一段聞かしてくれぬか。
お園　いつもながら拙い調べではござりまするが、折角のお詞でござりますれば……。
景正　おゝ、所望ぢや。しばらく待て。
（景正は起つて奥に入る。お園は琴をとりよせて我が前に直し、形をあらたむ。景正は琴爪を持ちて出て來る。）
景正　ありあはせの爪ぢや。指の加減はどうであらうか。
（云ひつゝ琴爪をわたせば、お園は會釋してうけ取り、爪を指に嵌める。）
お園　なにを致しませうか。
景正　唄を聽くのではない、音色を聽くのぢや。なんなりとも好いものを彈け。雨夜の曲などはどうぢやな。
お園　宜しうござりませう。
（景正はともしびの位置を直す。お園は琴にむかつて

靜かに彈きはじめる。景正は耳をかたむけて聽く。庭に月の影あかるし。琴はやうやく進みて、爪音いよ〳〵冴えたる時、燈火はふつと消えて、折りまはしたる竹縁の上のかたの奥より島原の鞆繪太夫あらはる。）

景正　あかりは消えても幸ひに月が出た。つゞけて彈け。

（鞆繪太夫は立つたるまゝ、柱に身をよせて琴を聽く。景正はやがて心づきて透しみる。）

景正　や、そこにゐるのは太夫でないか。おゝ、鞆繪……太夫……。どうしてこゝへ……。

鞆繪　琴の音色にひかされて來たわたしぢや。爪音が消ゆればわたしも消ゆる。どうぞ止めさせて下さんすな。

景正　琴がやめば消ゆるとは……。

（お園はなんの氣も附かず、一心に琴を彈いてゐる。この琴が相方になるやうに工夫すべし。）

鞆繪　景正どの。久しう逢ひませぬな。

（景正もなつかしさに我を忘れて語る。）

景正　おゝ、わしとてもおなじ思ひぢや。數ふればもう四月になる。そなたにたのまれた琴の細工が思ふやうに出來ぬ間は、飛附きたいほど戀しうても必ず逢ふまいと約束してふたりが別れたは……おゝ、七夕祭の夜であつた。

鞆繪　年に一度は逢ふといふ、星の契りを羨みながら、逢ふ出口の途々でお前はなんと云はんした。

景正　遲くもこの秋の末までには、琴は見事に仕上げてみせう。多寡が二月か三月のわかれと、口では立派にいふものゝ、心はあとにひかされて、編笠茶屋からすご〳〵戻つた。

鞆繪　その二月か三月のために、わたしは命を縮められ、戀し〳〵に煩うて、秋のなかばから枕もあがらず。

景正　おゝ、煩うてゐやつたか。

鞆繪　あまりのことに堪へかねて、文は遣れどもたよりは無く。

景正　その文から露顯して、わしは勘當の身となつたが。……（お園の琴を指さして）これを見やれ。たとひ何のやうなことがあつても、かならず約束は違へまいと、わしは一心不亂になつて、琴はこの通り立派に仕上げた。

鞆繪　その眞實が嬉しさに、島原よりも遠い世界からうろうろと、絲の音色に迷うて來ました。

景正　遠い世界から迷うて來たとは……。

鞆繪　なんぼ戀しいと思うても、もうおまへとは逢はれませぬ。

（鞆繪太夫は泣く。景正怪みて摺寄る。）

景正　なんの逢はれぬことがあらう。あすにも琴を持參して、積る物語をせうものと、今朝から樂んでゐたものを……。そつちから好うたづねて來てくれた。さあ、これ

へ来や……。はて、何をすねてゐるのぢや。さあ、これへ来て、よう顔をみせてくれ。

綃綺　そばへ行きたいは山々なれど……。

景正　まだ其のやうなことを云つて私をじらすか。いつもの意地はやめにして、今宵はうち解けて仲好う語らう。（綃綺の顔をみて）見れば顔の色がようない様ぢやが、病はまだすつかりと本復せぬか。

綃綺　あい。

景正　おゝ、髪もふけたて、顔もいたう痩せたやうぢや。

綃綺　おまへの顔にも痩がみえた。わたしといふものがある爲に、いとしや色々の苦勞をしなさんしたか。

景正　苦勞は互ひぢや。恩にも着せまい恩にも着まい。それがまことの戀といふものぢや。

綃綺　それほどに思うて下さんすか。

景正　いつはりならぬ證據には、家をすてゝも約束を果した。

綃綺　その末は野に死んだ女のかたみ……。わたしの魂が戻つてゐるを思うて、一生大事にしてくださりませ。

景正　えゝ、なにを云ふのぢや。

綃綺　景正どの……。

（綃綺太夫はなつかしげに寄寄る時、お園の彈きゐる琴の絃切れる）

お園　あ、絃が切れました。

景正　絃が切れたか。

（綃綺太夫のすがたは消ゆ。）

景正　や、太夫はどこへ……。太夫は……。

（景正はあわてゝ追はんとするを、お園は駈け寄つて支へる。）

お園　もし、旦那様、どうなされたのでござりまする。

景正　（夢の醒めたるごとくに四邊を見まはし）おゝ、太夫は見えぬ……。太夫はどこへ行つたであらう。

お園　え。（不審さうに見まはして）誰もほかには居りませぬ。

景正　今までこゝに立つてゐたのが……琴の音がやむと一緒に、ありし姿は煙のやうに……。

お園　そんならこゝへ島原の太夫が……。

景正　おゝ、綃綺太夫がたづねて來たのぢや。そちの目にはなんにも見えなんだか。

お園　さつきからお前が低い聲で、なにか獨り言を云うてゐられましたが……。

景正　おゝ、わしが獨り言を……。では、今こゝへ見えたのは……。

お園　かりの姿か。

景正　まぼろしか。（考へる）もしや太夫はこの世を去つ

て……。

（お園はいよ／＼氣味惡げにあたりを見廻はす。景正は嘆息する。）

景正　さうぢや。島原の太夫がこゝへ來る筈がない。最前から合點のゆかぬ詞の節々と思うたが……。別れてしばらく逢はぬうちに……太夫は死んだか。

お園　そのたましひが絲にひかれて……。

景正　假に姿をあらはしたのであらう。

お園　あはれなことでござりましたな。

（お園は泣く。景正は琴を見かへる。）

景正　絲は切れても琴は殘つた。緣はきれても魂はのこらう。わが作とは云へ、今は太夫のものぢや。妹、その琴を……。

（立てよと命ずれば、お園は涙ながらに起ちあがりて、絲の切れたる琴を壁に立てる。景正は佛壇より香と香爐をもち來りてその前にそなへ、先づ燒香の回向すれば、お園もつゞいて燒香す。念佛の鉦の音きこゆ。）

お園　あれ、折も折とてお十夜のお念佛が……。

景正　今までは夜每夜每に、上の空で聞きながしてゐたあの鉦も、今宵は胸に沁みるやうな。

（景正は緣に立ちて、鉦の音を聽く。お園は琴にむかつて合掌す。次郎時國はしどけなき姿、物に狂ひし體にてうか／＼と迷ひ來る。）

時國　おゝ、琴の音がきこえたのは……いづこぢや……どこぢや　おゝ、太夫が呼んでゐる。太夫……太夫……わしはこゝにゐるぞ。

（現ともなくあゆみ來て、扉をおしあけて庭に迷ひ入る。お園は透しみる。）

お園　おゝ、丹波殿の若殿ではござりませぬか。

時國　おゝ、太夫はこゝにゐたか。

（緣へ駈けあがりてお園を庭へひき下す。）

お園　あれ、どうなさるのでござりまする。

（景正も緣さきに出でゝ聲をかける。）

景正　もし、おせきなさるな。それは景正の妹……。逢坂太夫ではござりませぬぞ。

（時國はお園の顏をつく／＼ながめて失望す。）

時國　おゝ、太夫ではない。違ふ……違ふ。

（お園をつき放して上のかたへ行かんとするを、お園は抱きとめる。）

景正　時國どのも……景正も……そろひも揃うて……。

（嘆息して頽るゝごとく緣に坐す。時國はお園をつき倒して、夢みるごとくに月を仰ぐ。念佛の鉦の音きこゆ。）

――幕――

總崩れとは、まつたく夢のやうでございますね。

彦松　なんと云つても明智は謀叛人。一方の羽柴どのは主君の弔ひ合戰といふのだから、一日が二日、二日が三日に延びたところで、所詮は明智の負軍になるのは順當らしいよ。

重助　成程そんなことかも知れませんね。わたくしどもの商賣では、どつちが勝つても負けてもいゝから、ちつとも早く世の中が靜まつてくれるのが何よりでございます。きのふも筒井方の侍衆が五六人もどや／＼と押込んで來て、一荷の[illegible]をみんな[illegible]され、[illegible]煮染も手づかみの摑み食ひに、商賣も中休みになつてしまひました。

おくろ　おまけにこの娘をつかまへて、惡巫山戯をする者もあるので、ほんたうに困つてしまひました。

おかん　わたしはほんたうに怖くつて、どうなることかと顫へてゐました。

丑五郎　それは飛んだ災難だ。一人前の侍ならば滅多にそんな[illegible]もしまいが、[illegible]どもまでは行きとゞかない世の中に、どんないたづらをするか判らないから。そんな時には早く隱れてしまふことだ。

彦松　だが、もう大丈夫。明智方は大抵どこへか散り／＼に引揚げてしまつたらしいから、當分はこゝらも靜だらう。

重助　どうかさうしたいものでございますよ。

（上のかたより百姓長九郎、五十前後。娘おいね、十七八歳。おいねの許嫁七之助、廿一二歳。三人連れ立ちて出づ。）

丑五郎　おゝ、長九郎どの。家中揃つてどこへ行きなすつた。

長九郎　（珠數を出して見せる）これでございます。

彦松　はゝあ、お墓まゐりかね。

長九郎　きのふは六月の十三日、死んだ女房の三周忌にあたるので、墓まゐりに行つて遣りたいと思つてゐると、つい眼と鼻の山崎ではあの通りの大戰ひで、流れ丸がとんで來るやら、落武者が逃げ込むやら。うか／＼と外へ出て飛んだ災難をうけてはならぬと、家のなかにみんな小さくなつてゐましたので、一日おくれて今日の墓まゐり、土の下にゐる女房にもよくその斷りを云つて來ました。

重助　それはおかみさんもさぞ喜びなすつたらう。かんがへて見ると早いもので、亡つたおかみさんももう三年になりますかね。

（この中、おくろとおかんは床几をまへに持出して、長九郎等に掛けるといふ。三人は會釋して床几に腰を

かける。）
丑五郎　だが、まあ、おいね坊にも七之助さんといふ立派な婿どのが出來て、かうして三人が仲よく揃つて御參詣に行つてやれば、死んだおかみさんもどんなに喜ぶか知れやあしない。
彦松　ほんたうに長九郎さんの家でも良い婿を取りあてゝ仕合せだと、近所でもみんな羨んでゐますよ。
長九郎　（嬉しげに）はい、はい。人樣のまへで自分の家の婿を譽めるのも異なものでございますが、まつたくこの七之助はみなさんも御存じの正直者で、朝から晩まで畑仕事には精をだし、年を取つたわたくしには孝行を盡してくれます。
おくろ　それにおいねさんと夫婦仲のむつまじいのが第一の親孝行といふものでございますよ。
（七之助とおいねは顏を見あはせて恥しさうに俯向く。）
重助　それにつけても、あの長兵衛さんがもう少しどうにかなつてくれたら。
おくろ　これ。（眼で制する）
（重助も氣がついて口をつぐむ。丑五郎と彦松も眼を見あはせて氣の毒さうに默つてゐる。）
長九郎　（嘆息する）まつたくこゝの御亭主のいふ通り、あの長兵衛めは自分の生みの悴ながらも、愛想の盡きた役雜もので、博奕は打つ。酒はのむ。おまけに子供の時からの喧嘩好きで、なにかと云へばすぐに腕づくで暴れ散らすといふ。それは、それは、箸にも棒にもかゝらぬ奴、幾たびか勘當しようとは思ひながらも、やつぱり肉親の恩愛で、けふまで堪忍してゐますが、あいつの噂が出るたびに、つながる緣の妹や婿どのにも、肩身のせまい思ひをさせますのが、ほんに氣の毒でございます。
丑五郎　どこの息子もそれが多いが、長兵衛さんは少し念が入り過ぎてゐるやうだ。さうして今日のお墓まゐりにも、長兵衛さんは一緒に出ては來なさらないのだね。
長九郎　なんの、なんの、きのふの朝から家を出たぎりで、どこをうろ附いてゐることやら、今まで姿を見せませぬ。あんな奴のことなれば、自分の母親の祥月も命日も大方忘れてゐませうよ。
彦松　そんなことかも知れないな。（丑五郎と顏を見あはせる）なんにしても困つた男だ。
七之助　今度の軍がはじまると、おれもこのどさくさまぎれに金儲けをするのだと云つて、竹槍を持つて出たまゝで、今に戻つて來ませぬので、もしやなにかの間違ひでもありはしまいかと、わたくし共も案じてをります。
重助　なに、竹槍を持つて出た……。それはなるほど不安

心だ。

おいね　大方野武士の仲間入りをして、落武者の鎧や刀でも剝ぎ取るつもりでござりませうが、相手は侍、こつちは百姓、もし仕損じたら大變と、七之助さんもわたくしも昨日から胸を痛めてをります。

長九郎　いや、いや、あんな不孝者は、いつそ流れ丸にでも中つて死んでしまふ方が、世間の若い人達のよい見せしめでござります。

おくろ　なるほど、惡い子には泣かないといふが、あんな息子を持つた長九郎さんは、ほんたうにお察し申しますよ。

（下の方より馬士彌太八出づ。）

彌太八　おゝ、長九郎さん、こゝにゐなすつたか。丁度いい所で逢ひましたよ。

長九郎　おゝ、彌太八さん。わたしに何ぞ用でもありますかえ。

彌太八　用といふのは外でもねえ。おまへさんには些と氣の毒だが、あの蝮野郎がね。

長九郎　え、伜がどうかしましたか。

彌太八　蝮野郎の長兵衛がおれの家の馬を盗んだのだ。（大きな聲で云ふ）

おいね　そんなら兄さんがお前の馬を……。

七之助　して、それはいつの事でござります。

彌太八　今から五日まへの晩に、おれの馬小屋へ忍び込んで、大切の栗毛をぬすみ出した奴がある。あれを盗まれては其日の商賣も出來ねえので、毎日方々をさがしてゐると、今日になつてやう／＼その手がかりが付いた。二三日前におれの栗毛を引張つて、隣村の源右衛門のところへ賣りに行つた男、それがあの蝮の長兵衛に相違ねえのだ。

七之助　はて、二口目には蝮々と、大きい聲で云つてくださるな。そんなら長兵衛どのが、お前の馬をひき出して隣村へ賣りに行きましたか。

彌太八　さうだ、さうだ。ひとの飼馬を斷りなしに牽き出して、よそへ賣つてしまつたからは、云はずと知れた馬どろばうだ。その掛合にゆく途中で、こゝでお前方に逢つたのが丁度幸ひだ。さあ、おやぢさんも娘さんも、この始末をどうしてくれる。（詰めよる）

七之助　（起ち上りて遮る）まあ、待つてくだされ。なるほどお前の方には確かな證據もあらうけれど、なにをいふにも相手の長兵衛どのは、きのふの朝からゆくへが知れぬので、わたし達も心配してゐる所。ともかくも當人の戻つて來た上で、その實否をよく聞きたゞして……。

彌太八　では、おれが根もないことをこしらへて、云ひが

何だかぶる〳〵と手がふるへて、たうとう撃ち損じてしまひました。

丑五郎　むゝ。撃ち損じて、それからどうした。

傳藏　どうも斯うもない。なにをいふにも相手は立派な侍、見つけられたら命が無けと、あとをも見ないで一日散に逃げて來た。

彥松　いや、弱い男だ。

與茂作　いや、弱くつて仕合はせだ。もしその落武者を首尾よくずどんと撃ち留めて、その鎧でもはぎ取つたが最後、おまへはすぐに繩にかゝつて、京の町々を引廻しの上に磔だ。いや、考へてもおそろしい。（身を顫はせる）

法善　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（珠數を爪繰る）

傳藏　まつたく怖ろしいことでございます。（泣く）就きましては庄屋樣にも和尚樣にもわたくしが一生のお願ひ、どうか此事は御内分になすつてくださいまし。御承知の通りわたくしには、女のくせに毎晩燒酒を一升づつ飲む女房もございます。泣くと食はうのほかには何の能もない子供も六人ございます。萬一わたくしがそんなお仕置にでもなりますと、その女房や子供がみんな路頭に迷はねばなりません。もし庄屋樣……和尚樣……。お察しなすつて下さいまし。お助けなすつてくださいまし。もし、この通りでございます。

（傳藏は泣きながら手をあはせる。）

重助　正直者の傳藏さんがどうしてそんな氣になつたか。これも不斷から猪や猿を殺した、殺生の報かもしれない。

おくろ　それにしても鐵砲一つ撃つたために、引廻しのうへに磔とは……。

おかん　あんまり悲しい酷たらしい。

（重助、おくろ、おかんの三人は聲をあげて泣く。）

與茂作　まあ、待つた、待つた。そんなに泣いて騒ぐことはない。これ、傳藏。

傳藏　はい、はい。お助けなすつて下さいまし。

與茂作　それだから助けてやる。なるほど落武者を狙つたといふのは、貴樣が重々悪い。しかし相手を殺したといふわけでもなし、物を取つたといふ譯でも無し、貴樣は狩夫で鐵砲をうつのが商賣、人間を猪と間違へて、ついうつかりと引金を外しただけのことだ。

法善　左樣でござる。さうして見れば傳藏どのに罪はござらぬ。

傳藏　では、お助けくださいますか。

與茂作　おゝ、助けてやります。皆の衆も聞く通りの次第だから、どうぞ内分にたのみますぞ。

傳藏　（一同に）　どうぞ御内分に願ひます。これでわたくしも生き返りました。ありがたうございます。有難うご

ございます。
（[illegible]に頭をすりつけて、庄屋と僧とに幾たびか禮をいふ。この時、向ふにて女の叫ぶ聲。）
小鈴　あれ、あれ。なにをしなさるのぢや。あれ、あれ……。
（向ふより小栗栖村の長兵衛、二十七八歳、村一番のあばれ者、少し酔つてゐる體にて、片手に穂さきを切られたる竹槍をかつぎ、片手に小鈴の手をとりて出づ。小鈴は十七八歳の美しき巫女、狩衣（かりぎぬ）に緋の切袴をはきて、手には榊の枝を持つ。長九郎はこれを見て、惡い奴が來たといふこゝろにて、七之助にさゝやき、自分だけは店の暖簾口に入る。）
長兵衛　はて、いゝから一緒に來いといふのに……。遠くまで行くのぢやあねえ。あの立場茶屋まで來て酌を一杯してくれゝば可いのだ。別に面倒なことを頼むのぢやあねえ。さあ、早く來てくれ。
（忌がる小鈴の手をひきて、無理無體に茶屋の前に引摺つてくる。これを見て、一同はたち上る。）
おいね　おゝ、兄（あに）さん。
七之助　どうなすつたのでございます。
長兵衛　どうするものか。このお巫女（みこ）に酌して貰はうと思つて連れて來たのだ。
おいね　おゝ、おまへは八幡様のお巫女さん。どうして兄（あに）さんに連れられて……。
小鈴　今そこで長兵衛どのに行き逢ひましたら、わたしに酌をしてくれと云つて、忌がるものを手籠めにして……。
おいね　又いつもの惡い癖が始まりましたか。人もあらうにお巫子さんを手籠めにして連れて來るとは……。
七之助　あまりと云へばあまりの無體、もうそんなことはおやめなされませ。
長兵衛　なにを云やあがる、默つてゐろ。おい、亭主。べらぼうに暑いな。その床几を風通しの好いところへ出してくれ。
重助　はい、はい。
（重助はよんどころなしに床几を直せば、長兵衛は小鈴の手を取りしまゝ床几に腰をかける。）
長兵衛　なんでも好いから酒と肴を持つて來てくれ。明智の落武者とは違ふから、おれは食倒しや飲倒しはしねえ。まあ、安心してどし〳〵持出してくれ。
おくろ　長兵衛さん。大層御機嫌のやうですが、なにか好いことでもありましたかえ。
長兵衛　好い事どころか、あんまり馬鹿々々しいので自棄酒だ。やけになるのも無理はあるめえ、まあ聽いてくれ。明智日向守光秀、羽柴筑前守秀吉、この二人が山崎で天

者を剝ぐの、金儲けをするのと、大きな口で喋つては
ならないぞ。

長兵衛　子供のときから野良へ出て、大きな声で猪を逐ふ癖が附いてゐるので、それが地声になつてしまつたのだから仕方がねえ。大きな声で喋つては悪うございますか。

與茂作　その大きな声も時によれ、今も云つて聞かせた通り、落武者の鎧をはぐの、太刀を奪ふのを、そんなことを無闇に喋つてゐると、おまへの身にかゝはるのだ。

法善　長兵衛どのはまだ知るまいが、羽柴筑前守どのから御触れが出て、野武士の真似などをする百姓は一々召捕つて磔にかけるといふ、厳しい御沙汰ぢや。

長兵衛　それはほんたうかえ。馬鹿なこともあるものだ。自分たちは勝手に人殺しや分捕功名(ぶんどりこうみやう)を遣つてゐながら、おれ達がうつかりしたことをすれば、すぐに磔……。あんまり手前勝手にも程があるぁ。おれはそんな御触は背かねえ。忌だ、忌だ。

七之助　たとひ背かうと背くまいと、それが世にいふ泣く子と地頭で、上の御沙汰ならば是非がござりますまい。

おいね　そんなことがお侍衆の耳へでもきこえたらば猶々罪の重(おも)る道理、なんでもおとなしくしてゐるに限りまする。

長兵衛　やかましい。なんぞと云ふと利口振つてつべこべとうるさく口を出す奴等だ。（奥にむかつて呼ぶ）おいおい、なにをしてゐるのだ。早く酒を持つて来い。

おいね　それにしても、このお巫女さんを……。帰してあげてくださりませ。

（おいねは二人のあひだに入りて、小鈴を引放さうとすれば、長兵衛はおいねを突き倒す。七之助とおかんはあわてゝおいねを介抱する。）

長兵衛　えゝ、幾度云つてもわからねえ奴等だ。阿兄さんにむかつて意見がましいことをなんぞ云やあがると、ひきがへるのやうに踏み殺すぞ。

（奥より重助とおくろは、酒と肴とを運び出で、床几の端におく。）

おくろ　お待遠でございました。

長兵衛　こゝの家の酒はあんまりよくねえが、おなじ村の好(よし)みに飲みに来てやるのだ。ありがたく思ふが可い。（茶碗を取る）さあ、酌をしてくれ。

おくろ　はい、はい。

長兵衛　えゝ、お前のやうな南瓜(かぼちや)ではいけねえ。おれは唐(たう)瓜(がん)のやうに色の白いお巫女さんに頼んでゐるのだ。（小鈴に）おい、笑ひ顔をして機嫌よく酌をしてくれ。

小鈴　わたしにそんなことは出来ませぬ。どうぞ免してく

だされませ。（榊を把り直して顔をそむけてゐる）

長兵衛　なに、酌は出來ねえ。別にむづかしいことではねえ、手のある人間なら誰にでも出來ることだ。一體そんなものを大事さうにさゝげてゐるから、肝腎の手が塞がつてしまふのだ。

（長兵衛は小鈴の手より榊を引つたくりて地に投げ付ける。）

與茂作　や、淸淨の御榊を……。

（人々も呆れる。長九郎は奥よりうかゞひ出で、堪へ兼ねて前に出ようとするを、七之助とおいねが制して、無理に奥へ押込む。）

長兵衛　（冷笑ふ）なにが御榊だ。こんなものはどうでも構はねえ。（足にて榊を踏みにじる）さあ、手が明いたら酌をしてくれ。（酒壺を小鈴に突きつける）

法善　これ、これ。長兵衛殿。これはあんまりの亂暴狼藉といふものぢや。庄屋様も云はれた通り、酌をして貰ひたければこゝの娘にたのむがよい。神に仕へる者や、佛につかへるものを、唯の人とおなじやうに思うてはならぬ。もうよい加減にさつしやれ。

長兵衛　なに、神に仕へる者や佛につかへるものを、唯の人と思ふなと……。へん、乙う我田へ水を引くな。佛につかへる乞食坊主なんぞには初めから用はねえ。西瓜頭をかゝへて引込んでゐろ。

法善　さりとは餘りに度しがたい人物ぢや。現にきのふはこなたが母御の三回忌といふに、朝から家を飛び出したまゝで、けふの墓參りにもこなた一人が缺けてゐるではないか。

長兵衛　きのふは阿袋の三回忌……。成程そんなことかも知れねえが、おれの代りに此奴等が……（七之助とおいねを指さす）殊勝らしく拜みに行けば、それで可いのだ。おかげで和尚も幾らかの御布施にありついたらう。はゝ、うまく遣つたな。

法善　これは怪しからぬ。わしは御布施のことなどを云うてゐるのではござらぬ。おまへの不幸を叱つてゐるのぢや。

長兵衛　そんな御說教はそこらにゐるおめでたい人間どもに聽かしてくれ、それよりも酒のさかなに、その坊主頭に鉢卷でもして、景氣よく一番踊つてくれ。おれのやうな亡者には、その方がよつぽど功德になる。さあ、さあ、猫ぢや猫ぢやでも、茶碗踊でもなんでも構はねえ。亡者に魔が憑したやうなところを一つ見せてくれ。おい、和尚。やい、坊主。早くやれ。

法善　はて、歎かはしい。こなたこそまことの惡魔外道ぢや。

長兵衞　惡魔でも外道でもひよつとこでも構はねえ。お巫女に酌をさせて、坊主に踊らせれば、神佛かけあひで、こんな洒落れたことはねえ。さあ、さあ、遣つてくれ。おゝ、お前も手が塞がつてゐるのか。そんなものを持つてゐるから不可ねえ。邪魔なものは思ひ切りよく打捨つてしまへ。

（長兵衞は法善の珠數を奪ひ取りて、これも地に投付ける。）

七之助　もし、お前、とんでもない。

（七之助は見かねて支へんとすれば、長兵衞はよろよろしながら見かへる。）

長兵衞　なんだ、なんだ。又出しやばるのか。

七之助　でも、お前。佛樣の罰があたりまする。

長兵衞　へん、罰はこつちで中てゝやるわ。

（長兵衞は七之助をなぐり倒す。おいねは介抱する。上のかたより彌太八は栗毛の馬をひいて出づ。）

彌太八　おゝ、長兵衞。いゝところで貴樣を見つけた。さつきもおやぢに掛合つたが、おれの馬小屋からこの栗毛を引張り出したのは貴樣に相違あるめえ。

長兵衞　なんだ。その栗毛をどうしたと云ふのだ。

彌太八　盜人猛々しいとは貴樣のことだ。貴樣がこれを盜み出して、となり村の源右衞門に賣つたといふ噂を聞いたから、すぐに行つてみれば案の通りだ。この馬がなくては一日も商賣が出來ねえから、買主の源右衞門にわけを云つて、兎もかくも馬を返して貰つて來たのだ。

長兵衞　返して貰へばそれでよからう。ほかに云分はねえ筈だ。

彌太八　馬鹿をいへ。買主が唯で返してくれるか。馬の代の三兩はあとで拂ふ約束にして來たのだ。その代金は貴樣が拂へ。

長兵衞　生馬の眼をぬくとさへ云ふ世のなかに、貴樣が間ぬけだから誰かに盜まれたのだ。おれがその尻拭ひをする謂れはねえ。

彌太八　這奴いよいよ太い奴だ。もうかうなれば慈悲も容赦もねえ、おやぢには氣の毒だが、貴樣を馬泥坊として村役人のところへ引摺つて行くからさう思へ。おゝ、丁度こゝに庄屋殿がゐる。うぬ、逃げようとしても逃がしはしねえぞ。

長兵衞　なにが怖くつて逃げるものか。おれが盜んだか盜まねえか、その馬に聞いてみろ。それが確な證人だ。（馬の前にゆく）やい、こん畜生。おれが今、貴樣のあたまを一つ撲るから、若しほんたうにおれが盜んだのならば、もうと啼け、もうと啼け、おれがさつたく盜んだのでなければ、ひんと啼け、ひんと啼け。さあ、可いか。みん

なもよく聞いてゐろ。（拳をふりあげる）

彌太八　（長兵衛の腕をとらへる）　えゝ、好加減に人を馬鹿にするな。馬がもうと嘶いてたまるものか。もし、庄屋どの。この通りの強情者、どうぞ御裁判をねがひます。

與茂作　では、この長兵衛がその馬を盗んだに相違ないな。

彌太八　正銘まがひ無しの馬どろばうでごせえます。（無理に長兵衛を前に引き据ゑる）もし嘘だと思召すなら、隣村の藤右衛門を證人によんで來ても宜しうごせえます。

（この間においねは小鈴にさゝやき。おくろとおかんも頷いて、小鈴を店のなかへ連れ込む。）

傳兵衛　（すゝみ出づ）　おい、長兵衛さん。さつきから默つて聞いてゐたが、どうもお前がよくないやうだ。なんでも人間は正直が肝心、たとひ一旦は心得ちがひをしても、すぐに白状してあやまれば、皆さんも又堪忍してくださるといふものだ。

（甚五郎と吉藏も進み出づ。）

甚五郎　さうだ、さうだ。わし等もさつきから後の方に退いて聞いてゐたが、みんなお前が惡いやうだ。

吉藏　第一に百姓や子供どもに亂暴を働いて、賽錢を投げ付ける。榊を踏みにじる。あまりに神佛を恐れぬ仕方だ。

七之助　ほんにさうでござります。わたくしも先刻から、何うなることかとはらはらいたして居りました。もし、兄さん。みなさんもあゝして御親切に云つてくだされば……。

おいね　おまへも強情を張らないで、おとなしくあやまつて下さりませ。

七之助　馬の代金はわたくしの方から屹と買主に償ひますれば、もしお庄屋様、どうぞこれも御内分になされてくださりませ。

おいね　わたくしには唯つた一人の兄さんでござりますれば、馬どろばうの科人にならぬやうに、どうぞお慈悲を願ひまする。

（二人は土に手をつく。）

與茂作　（うなづく）　はい、はい、ようござる。かならず心配さつしやるな。亂暴者の兄貴に引きかへて、弟どのと云ひ、妹といひ、揃ひも揃つて正直な人達だ。どうだ、彌太八。このおとなしい二人に免じて、馬どろばうの長兵衛を今度だけは勘辨して遣らうではないか。

彌太八　なるほど、長兵衛めは憎い奴、弟どのや妹には氣の毒だ。買主の方へこの馬の代金さへ素直に償ふなら、わしは勘辨してやります。

村中でたつた一人のあばれ者、役雑者、不孝者。親のつけた長兵衛といふ名のうへに、竈といふ結構な綽名をつけられて、自慢さうにのさばりあるく大馬鹿者。けふといふ今日は、もう堪忍も料簡もならぬ。庄屋殿のみる前で、おのれは唯つた今勘當した。

七之助　もし、おやぢ樣。

長九郎　えゝ、なんにも云ふな。うみの親が勘當したからは、この村に一時でもゐる事はならぬ。早く行け、どこへでも勝手に出て行け。

長兵衛　出て行かうと、行くまいと、こつちの勝手だ。おやぢの指圖をうけるものか。

七之助　（割つて入る）もし、おやぢ樣に向つてそのやうなことを云うてはなりませぬ。

おいね　わたくし共がお詫びをしますから、まあ、默つてゐてくださりませ。

長兵衛　また鮎のやあがつた、うるせえ奴等だ。貴樣達のやうな、毛の三本足りねえ獸物なら知らねえこと、かうして滿足に生きてゐる人間が、耄碌親父の云ふことなんぞを、おとなしくはい／＼と肯いてゐられるか。積つてみても知れたことだ。

七之助　またお前、そんな無法なことを……。

長兵衛　なにが無法だ。そんな親父はこつちが勘當するから、貴樣達が負うとも抱くともして、姨捨山へでも連れていけ。おれは總領の跡取樣だから、めつたにあの家を動くことはできねえ。釜の下の灰までおれの物だ。

長九郎　總領でも跡取でも、親が勘當した以上、わが家の門ばたも踏ませぬのが世間一統の習はしだ。さあ行け。立去らぬか。（長兵衛の腕をつかんで引立てる）

長兵衛　（振拂ふ）そんな指圖はおれは受けねえ。出ていくなら其方で出て行け。

長九郎　またそんなことを……。おのれ、どうしてくれう。

（長兵衛の衿髪をつかんで珠數にて打つ）

長兵衛　（長九郎をつき放す）いくら親父でもおふくろでも、人の見てゐる前で撲られては、この長兵衛の面が立たねえ。こつちよりも此方がもう勘辨が出來ねえぞ。

（長兵衛は鐵砲をふり上げる。七之助とおいねはあわてゝ支へる。）

長九郎　おのれ、飽までも根性骨の曲つた奴。さあ、打てるものなら打つてみろ。

七之助　はて、おやぢ樣もあぶなうござります。

傳藏　長兵衛もその鐵砲をこつちへ戻せ。

（傳藏は鐵砲を取りにかゝるを、長兵衛に一つ撲つ。七之助とおいねはそれを遮らうとする。長九郎に捨臺詞にて長兵衛に詰めよる。長兵衛は支へるおいねを突

き倒して、長九郎が鐵砲にて撲つ。長九郎は額に傷きて倒れるに、一同おどろきて駈けよる。おいねと七之助は長九郎が介抱して肩のなかに連れ込み、小鈴とおくろとおかんも手傳ひて介抱する。傳藏は長兵衛にむしり付きてその鐵砲を奪はんとす。)

彌太八　親に傷をつけた奴、引縛れ、ひつくゝれ。

（彌太八、丑五郎、彦松、重助も傳藏に加勢して、長兵衛をとりおさへんとすれば、長兵衛は鐵砲をふり廻してさんざんにあばれる。與茂作と法善はあとに退りて見物してゐる。五人が相手にあばれ疲れて、長兵衛は殊に得物を奪はれ、がつかりして倒れるところを大勢に押伏せらる。重助は肩より荒繩を持ち來り、大勢にて長兵衛を縛りあげる。)

與茂作　よい、よい。流石のあばれ者も多勢に無勢で、丹波の荒熊のやうに生捕られてしまつた。餘事は扨措いて、現在の親の額に傷をつけるとは、呆れた奴だ。

法善　いよいよこれは惡魔の所行ぢや。

傳藏　いくらお慈悲ぶかい庄屋殿でも、親に傷をつけた不孝者を、もう助けては置かれますまい。

重助　御領主にそむいて、野武士や強盜の眞似をする。それが第一。

彌太八　その次は馬どろばう。

丑五郎　その次は兄妹をなぐり、人をなぐり。

彦松　あまつさへ現在の親に傷をつける。

與茂作　こりやどう考へても磔者だ。

重助　命が二つあつても足りないくらゐだ。

彌太八　こりやもういつそ簀卷にして、川へ投げ込んでしまふがよからう。

長兵衛　さあ、どうとも勝手にしろ。

丑五郎　役人に引渡すまでもなく、所の法にしたがつて簀卷にするからさう思へ。

（彌太八と傳藏は長兵衛の繩をとり、丑五郎と彦松と重助の三人は奥より簀を持來る。)

長兵衛　えゝ、なにをしやあがるのだ。

彦松　なにをするものか。貴樣を川へなげ込んで水葬禮にしてやるのだ。

法善　もう是非がない。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

彌太八　さあ、早くしろ、早くしろ。

（一同は長兵衛をひき倒して簀卷にする。長九郎は額の傷に鉢卷して、七之助とおいねに扶けられて出づ。)

七之助　おゝ、兄さんは簀卷にされて……。

おいね　こりや情ないことになりましたな。

長九郎　それもみんな不孝の報だ。貴樣のやうな奴は簀卷にされて、鮒や鯰の餌食になつても親や兄妹は泣かない

ぞ。おれには七之助といふよい婿どのもある。おいねといふ良い娘もある。貴様のやうな生れぞこなひは、早く死んでしまふ方が世間の爲だ。

與茂作　長兵衛どのには氣の毒だが、所の法に行ふよりほかはない。さあ、早くその簀卷を川端へ運んで行かつしやれ。

一同　あい、あい。

（人々は簀卷にしたる長兵衛を運んでゆかうとする時、上のかたより堀尾茂助吉晴、鉢卷、襷、草鞋穿にて、家來二人をつれて出づ。家來の一人は血に染みたる竹槍の穂先を持つ。）

吉晴　こりや、こりや、その方どもに少したづねたいことがある。

一同　はい、はい。

（簀卷を下に轉がして、一同はうづくまる。）

吉晴　先づ第一にたづねたいのは、この小栗栖村の土民のなかに、竹槍のたぐひを持出して落武者の跡を追ひし者はないか。

與六　はい、それは……。

與茂作　これ（與六を叱る）庄屋のわしを差措いて、迂濶に物を申してはならぬ。（吉晴に）いえ、この小栗栖の村中にそんな者は一人もござりませぬ。

吉晴　たしかに無いか。

一同　（口をそろへて）一人もござりませぬ。

吉晴　さりとは不審。いつはらずに申せ。まつたく竹槍を持出した者はないか。

一同　一人もござりませぬ。

吉晴　はて喃。（首をかしげる）こりや、その竹槍の穂を……。

家來　はつ。

（家來の一人は竹槍の穂をわたせば、吉晴は他の家來に床几を立てさせ、槍の穂を手に取りて一同にみせる。）

吉晴　その方共も大方は存じて居やうが、きのふの山崎の合戦に謀叛人の明智方は脆くも崩れて、大將の日向守光秀は夜にまぎれて勝龍寺の城を立退き、主從二三騎にて落行く途中、この小栗栖の村はづれの藪際にて不意に槍をつけたる者あり。

一同　おゝ。

吉晴　槍は脇腹に通りしかど、流石は光秀、すぐに太刀をぬいてその槍の穂先を切つて捨て、そのまゝに馬を急がせたれど、急所の痛手にたまり得ず、二三町も駈けぬけて、遂にその場で落馬いたした。

與茂作　では、光秀はその竹槍で……。

吉晴　むゝ。とても助からぬと覺悟して、光秀は遂に切腹、その亡骸のほとりに落ちてありしは、血に染みたるこの穂先おや、竹槍にて突きたるは正しく武士の仕業でない。こゝらの村の百姓どもの竹槍と見て取つて、扨こそわざ〳〵詮議にきたつたが、どうでも心當りはないか。

貝波作　いえ、そのやうな者は。

一同　一人もござりませぬ。

吉晴　どうでも知らぬか。然らば、隣村を穿鑿いたさう（床几を起つ）皆もまゐれ。

家來　はつ。

（吉晴は家來を連れて上の方へ引返さうとする時、簀巻にされたる長兵衛は微に呼ぶ。）

長兵衛　もし、もし、お待ち下さりませ。

吉晴　（見かへる）誰ぢや。

一同　え。（顔を見あはせる）

吉晴　呼び止めたは何者ぢや。

長兵衛　（身をひねりながら呼ぶ）もし、もし、こゝでござります。

吉晴　はて、判らぬ。どこで呼ぶのぢや。

長兵衛　簀巻にされてゐるのでござります。

吉晴　なに、簀巻にされてゐる……。（初めて長兵衛に眼をつける）

長兵衛　ゆうべ明智光秀を竹槍で突いたのはわたくしでござります。

吉晴　しかと左様か。

長兵衛　たしかにわたくしでござります。その證據にはそこらに竹槍の柄が抛り出してある筈でござります。どうぞその穂先に御ざあはせて、切口をおあらため下さりませ。

吉晴　むゝ。

（眼にて指圖をなせば、家來どもは四方を見まはす。）

長兵衛　さあ、大勢寄つてゐる者たち、みんなも手傳つて探してくれ。

（これにて一同も起ち上り、草叢の蔭におちたる竹槍を拾ひて家來に渡せば、吉晴は持つたる穂先をその切口にあはせて見る。）

吉晴　なるほど寸分も違はぬ。切口がしつくり合ふからは確にこれぢや。それ、彼のいましめを解け。

一同　はつ。

（人々は長兵衛の簀巻を解く。長兵衛は這ひ起きる。）

吉晴　その方の方の名はなんと申す。

長兵衛　蝮の長兵衛と申します。

吉晴　こりやよく云はれ。百姓どもが野武士の眞似をして、竹槍などをたづさへ出づるは、きびしい御禁制と相成り

なれど、これはまた格別ぢや。謀叛の大將明智光秀を突き留めたるは、天晴れの功名手柄、おそらく莫大の御褒美を下さるゝであらうぞ。

一同　やあ。（顏を見あはせる）

長兵衛　ありがたうござります。

吉晴　詮議相済んだれば、それがしはすぐに立歸る。その方もあとより陣へまゐれ。かく申すそれがしは羽柴筑前守殿の家來、堀尾茂助吉晴と申すものぢや。わが名をたづねて御陣へまゐれ。

長兵衛　かしこまりました。では、堀尾様。

吉晴　蝮の長兵衛、かさねて逢はうぞ。

（吉晴は槍の柄と穂とを家來に持たせて行きかゝる。）

長兵衛　もし、もし、その槍を両方持つて行かれては何にも證據がなくなります。柄の方だけを置いて行つてくださりませ。

吉晴　それも道理。では、戻すぞ。

（槍の柄を長兵衛に戻せば、長兵衛はうけ取る。）

吉晴　大將もお待兼ねであらう。早くまゐれよ。

長兵衛　すぐにあとから參ります。

（吉晴は家來を連れて向ふに去る。長兵衛は槍を杖にして見送る。）

與茂作　これ、長兵衛どの。お前はえらい手柄をしなすつたな。

長兵衛　ちよいとしても先づこんなものだ。實はゆうべこの竹槍を持つて、村はづれの藪際に忍んでゐると、なんでも騎馬武者が三四人、勝龍寺の方から急いで來た。

一同　むゝ。（思はず長兵衛のまはりに寄つて來る）

長兵衛　眞暗やみでなんにも見當は付かねえが、乾と明智方の落武者に相違ねえと睨んだから、その通るのを待受けて藪の中から突き出すと、一の槍はつき損じて、初めの武士は通りぬけてしまつた。つゞいて二の槍を繰り出すと、今度はたしかに手堪へがあつたが、相手も心得のある侍だ。すぐに刀をぬいたと見えて、槍はこの通り、穂先からすつぱりと切られてしまつた。

一同　むゝ。

長兵衛　忌々しいとは思つたが、相手は三四人、こつちは一人、とても追つかけて行く元氣はねえから、切られた槍の柄を引つかついで、そのまゝすごすご歸つて來たのだ。ところが、人間の運はわからねえ。今のあの侍の話を聞けば、おれが突いたのは明智光秀だと云ふことだ。

彌太八　なるほどそれは大變な手柄だ。

重助　羽柴筑前守殿からお召出しになつて、莫大の御褒美を下さるのも無理はない。

傳藏　まつたく人間の運は判らない。人もあらうに明智光

秀を打ち留めたとあつては、今度のいくさで一番の大手柄だ。

與茂作　これが侍ならば大名にも取立てられるかも知れないが、百姓のこなたでは然うもなるまい。先づ家屋敷を賜はるか。

丑五郎　それとも小判か。

彦松　田畑か。

法善　なんにしても偉い出世ぢや。長兵衛殿。おめでたうござる。(頭を下げる)

與茂作　これ、長九郎どの。こなたの息子どのは偉いことになりましたぞ。

長九郎　はい、はい。まつたく偉いことになりましに。(進みよる) これ、長兵衛。おまへは偉い手柄者だ。その竹槍で明智光秀をつき留めた功によつて、莫大の御褒美を下さるとは、おまへの仕合はせ、わしの仕合はせと云ふものだ。こんな嬉しいことはない。はゝゝゝゝ。

小鈴　(すゝみ出づ) 八幡様の氏子からお前のやうな偉いお人が出るといふ、こんなおめでたいことはございませぬ。

法善　(小鈴を支へる) はて、長兵衛どのは私の檀家ぢや。わしの檀家からこのやうなお人が出たといふのは、愚僧も鼻が高いやうでござるわ。いや、愚僧ばかりでなく、本尊の阿彌陀如来もさだめて御滿足でござらうぞ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

重助　そのお祝ひに、こゝであらためて一口召上つてはどうでござりませうな。

長兵衛　むゝ、前祝ひに一杯のまうか。(床几の上にあぐらを掻く)

重助　はい、はい。唯今すぐに支度をいたします。おくみも娘も、さあ早く手傳つてくれ。

二人　あい、あい。

(重助等は忙しさうに店に入る。)

與茂作　くどくも云ふやうだが、御褒美は家屋敷か、小判か、土地田畑か。なんにしてもめでたいことだ。これ、皆の衆もよろこぶが可い。この小栗栖村に[illegible]の長兵衛殿といふ偉い長者がひとり出來ましたぞ。いや、長九郎どの。こなたも良い息子殿を持たれて羨ましいなう。

丑五郎　長九郎どのはよい娘や婿を持つて仕合はせだと思つてゐたが、かうしてみると、やつぱり總領は總領だけのことがある。

彦松　まつたく兄貴は兄貴だけに、妹や婿どのよりもずつと偉いものだ。

(七之助とおいねは悄々すゝみ出づ。)

七之助　兄様。このたびの御手柄、お祝ひ申上げまする。

おいね　おまへ様が御用掛あそばして、こんなおめでたいことはござりませぬ。

長九郎　えゝ、うるさい、汝はだまつて引込んでゐろ。後にも立たぬ奴に出しては済まぬ。これ、これ、御亭主。酒の支度はまだ出来ませぬかな。長兵衛はなか／＼口が奢つてゐるから、酒はなるたけ良いのを吟味して持出してくだされ。

重助　はい、はい。

（重助はやがてふとおかんの酒徳利を運び出づる）

長九郎　さあ、長兵衛、めでたく祝つて一杯飲んでくれ。はゝ、めでたい、めでたい。

（茶碗を出す。小鈴は長九郎を押退けて進み出づる）

小鈴　もし、そのお酒を八幡様の御神酒になぞらへて、わたしがお酌をいたしませう。

長兵衛　むゝ。やつと素直に酌をしてくれるな。はゝ、ありがてえぞ。

小鈴　これからはお前の御運長久を毎日神さまに祈ります。（酌をする）

長兵衛　お前のやうな女をお巫女にして、鈴ばかり振らして置くのは惜しいものだ。これからは時々にかうして酌をたのむぜ。

小鈴　（恥しさうに）はい。

（長兵衛は飲み干して茶碗をさせば、小鈴は再び酌をする。）

法善　（羨ましさうに）やつぱり女子は仕合せだのう。

長兵衛　（茶碗を置く）いや、ゆつくり飲んではゐられねえ。これからすぐに出かけようか。

長九郎　善は急げといふこともある。日が長いやうでも京の町までは餘ほどの路程だ。暮れないうちに早く行つて来るがよからう。なにか用があるなら、この七之助を供に連れて行つて遠慮なくこき使ふがよい。

長兵衛　なに、[illegible]可い。（起ちかゝる）だが、これから京の町まであるくのは些と大儀だ。おい、彌太八。その馬を俺に貸してくれ。

彌太八　あい、あい。（繋いである馬を曳き出す）こんな駄馬がお役に立てば仕合せだ。

（長兵衛は青竹を持ちて馬にのる。）

長九郎　これ、御褒美を貰つたら、かならず家へ戻つて来てくれよ。

法善　長兵衛殿の息災延命。

小鈴　もろ／＼の禍を攘ひたまへ。

（法善と小鈴は祈る。）

長兵衛　さあ、日の暮れねえうちに一走りだ。

（長兵衛は馬を早めて向ふへ走り去る。皆々あとを見送る

牡丹燈記（三幕五場）

登場人物

喬生（けうせい）、
その友人門生、
美女　麗卿、
その小婢金蓮、
隣　の　翁、
酒屋の亭主、
湖心寺の僧、
簫を吹く商人、
花を賣る娘、
燈籠を觀る人々、
踏青の娘二人、
湖畔に遊ぶ人々など

第一幕

一

支那の元代の末、至正二十年庚子（かうし）の上元（正月十五日）の夜。
場所は浙東（せつとう）、明州の城外。上のかたに喬生といふ書生の家。窓には戸をおろしてある。それにつゞいて出入口の扉がある。下のかたは補鍋匠（ほかしやう）（鍋釜などの鑄かけをする職人）の翁の家で、これも同じやうな構へ、二軒のあひだの境には低い疎らの竹籬を結つて、一本の枯柳が立つてゐる。家の前は往來である。夜は更けて、月は明るい。

（喬生、門前に立つて、さびしさうに往來をながめてゐる。元宵の燈を觀て歸る男ふたりと小兒ひとり、下のかたより連れ立つて出で、上のかたへ行き過ぎる。やがて又、若い男と女の二人連れが睦まじさうに肩をならべて通る。喬生は羨ましさうに其のあとを見送つてゐる。隣の家より補鍋匠の翁が出る。）

翁　（喬生に聲をかける）おまへさんはまだお寢（ね）なさらないのかね。

（喬生は矢はり二人のゆくへを眺めてゐる。）

翁　（進みよる）これ、喬さん。お前さんはまだ寢ないのかよ。（少し考へて）いや、それも無理はないかなあ。

（喬生は心づいて、初めて振向く。）

喬生　おゝ、隣のお爺さん。おまへもまだ寢ないのか。

翁　夜は早く寢つかれないで、朝は早く眼がさめる。それが年寄の因果で、どうも困つたものですよ。おまけに今夜は上元の晩で、表がさう〴〵しいのでね。

喬生　燈籠見物に出かけた人達が大分あるやうだね。

翁　宵からぞろ〴〵人通りがある。城内はさぞ賑はつたことでせう。おまへさんは見物に出かけなかつたのだね。

喬生　わたしも見物に行かうかと思つたが、なんだか此頃は出不精になつてしまつて……。

翁　（うなづく）いや、それも無理はない。わたしもよく察してゐますよ。あれほど仲の好かつた奧さんを疫病神に攫つて行かれたのだからなあ。（同情するやうに）年は若し、容貌は好し、第一に氣立がよかつた。連れ添ふおまへさんには勿論のこと、近所の者にも親切で、優しくつて……。あんな好い奧さんがどうして早死をしたか。もつとも去年の疫病では、こゝらでも隨分大勢の人間が死んだからなあ。

喬生　（物憂げに）あゝ、もうこんな話は止して貰ひたい。

翁　（又うなづく）むゝ、止さう。よしませう。今更云つても何うにもならないことだ。併しそれからもう小半年にもなるのに、お前さんがいつまでもぼんやりしてゐるので、わたしはなんだか心配でならない。幾度もいふやうだが、お前さんのこゝろは私もよく察してゐます。死んだ奧さんの戀しいのも無理はない。忘れられないのも有理だ。と云つて、あんまりくよ〳〵してゐると、今度はお前さんが病氣になる。

喬生　（ひとり言のやうに）あゝ、病氣になつていつそ死にたい。

翁　それだから私も云ふのだ。若い身空でさう考へつめてばかりゐてはいけない。若い人は若い人のやうにもつと心を浮々させて、今夜のやうな晩には燈籠見物にでも出かけることですよ。

（下のかたより若い男と女の二人連れが出て、睦まじさうに列んで通り過ぎる。喬生は又見送る。）

翁　（笑ひながら）はゝ。若い同士で大分むつまじさうだな。

喬生　（ひとり言のやうに）さつきもあんなのが通つた。

翁　はゝ、今夜のやうな晩には、あんなのが幾組も通りますよ、上元の燈籠見物は若い人たちの書入れ時ですからね。

喬生　さうかも知れない（ため息をつく）わたしも一度はそんなことがあつた。

翁　年寄りじみた事を云つてはいけない。おまへさんもまだ若い人ではないか。死んだ女のことばかり考へてゐないで、ちつと氣をかへて新しいのを探したらどうです。

（喬生はだまつて顔をそむけてゐる。）

翁（また笑ふ）はゝ、わたしがそれを云ふと、お前さんはいつでも機嫌を惡くするが、わたしとても決して惡氣で云ふのではないから、まあ腹を立てゝお呉んなさるなよ。（空をみる）あゝ、好い月だ。かういふ月を見てゐると、わたしも若い時が思ひ出されるな。

喬生（おなじく空を見る）月の廻り工合では、今夜ももう餘ほど更けたやうだ。

翁 宵のうちは隨分さう〴〵しかつたが、夜が更けたので人通りも少くなつた。春と云つても更けると寒い。わたしもそろ〳〵戸をしめて寢るとしませうか。

喬生 もう寢なさるか。

翁 お前さんももう内へ這入つたらどうです。では、お休みなさい。

喬生（氣のないやうに）おやすみなさい。

（翁は自分の家に入る。遠く簫の聲がきこえる。喬生はやはり門口に立つて、見るともなしに空を仰いでゐる。下のかたより美女麗卿、十七八歳、小婢金蓮を連れて出る。金蓮はまだ少女で、美な回髻に結び、雙頭(さうとう)の牡丹燈を持つて先に立つ。ふたりの女は物いはず、しづかに上のかたへ行き過ぎる。喬生は麗卿の艶色にひき附けられたやうに、思はず二足三足追ひかけて又躊躇し、遂に思ひ切つてそのあとを追つてゆく。）

二

夜の田舍路。

（上のかたより麗卿と金蓮が出る。月は少しく陰(くも)つて、牡丹燈の光が前よりも明かに見える。やがてあとより喬生が糸に引かれるやうに、ふら〳〵と出る。かれは牡丹燈のひかりで麗卿の顔をすかして見て、いよ〳〵その美に魂を奪はれる。）

金蓮（喬生の方を見かへる）もし、お前さんは何でさつきからわたし達のあとに附いて來るのです。

喬生（すこし躊躇する）いえ、實は其、わたくしもそつちの方角へ歸るものでございます。

金蓮 なんだかわたし達のあとを附いて來るやうで、氣味が惡くてなりませんから、早くお先へ行つてください。

麗卿（しづかに）はて、そんな失禮なことを云ふものではありません。

金蓮 でも、上元の晩には若い男の人たちが、女をみると色々のいたづらを仕掛けると云ひますから、なほ〳〵氣味が惡うございます。

喬生（あわてゝ）いえ、飛んでもない。わたくしは決してそんな惡戲者(いたづらもの)ではございません。上元の晩と申しても、

この通り夜もだん／＼に更けて來て、めつたに人通りもございませんから、若い御婦人ばかりでは不用心だと存じまして、それでお送り申したのでございます。

麗卿　それは御親切にありがたうございます。

（金蓮は牡丹燈をかざし、喬生と麗卿に顔をみあはせる。）

喬生　（いよ／＼丁寧に）失禮ながらあなた方はこれからどちらまでお歸りでございます。

麗卿　（やゝためらふやうに）あの、わたくし共は月湖のほとりに住んでゐるのでございます。

喬生　はゝあ、月湖のほとり……。

麗卿　あの湖水を御存じでございませう。

喬生　こゝらであの湖水を知らないものはありません。湖水のほとりには湖心寺といふお寺がある。その御近所でございますか。

麗卿　（金蓮と顔をみあはせる）左樣でございます。

喬生　今晩はやはり燈籠を御見物でございましたか。

麗卿　はい。あなたも御出でになりましたか。

喬生　いえ、わたくしは無精者でございますので、たうとう參りませんでしたが、城内は定めて賑やかでございましたらうな。

麗卿　大層な賑はひでございました。あなたのやうなお若い御方がどうしてお出でにならなかつたのでせう。

喬生　どうも男ひとりで行くのも面白くないので……。（わらふ）

麗卿　（微笑む）あなたとならば御一緒に行きたいといふ人も澤山ございましたらうに……。

喬生　御冗談を……。わたくしのやうな貧しい書生は、唯ひとりで机に向つて、昔の賢い人たちを相手にして、書物の中に明け暮れしてゐるばかりでございます。

麗卿　（すゝみ寄る）では、あなたはお獨りでゐらつしやいますか。

喬生　昨年妻をうしなひまして、それからは唯ひとり寂しく暮して居ります。

麗卿　（同情するやうに）それはまつたくお寂しいことでございませう。そんなお話をうかゞひますと、わたくしも身につまされて悲しくなります。（袖を眼にあてる）

喬生　では、あなたもお連合ひにお別れなさいましたか。

麗卿　いえ、連合ひなどを持つたことはございませんが……。父にも母にも早くわかれまして、ほかには兄弟もなく、差したる身寄りもございませんので、この金蓮と二人きりで、唯今のところに侘住居をいたしてゐるのでございます。

喬生　（これも同情するやうに）成程それではお寂しいこ

たでございませうな。

麗卿　月の方でさへも寂しいと仰しやるのに、わたくし共はただ獨りで……。なにを樂みに、なにを頼りに生きてゐるのか判らないくらゐでございます。お察し下さいまし。

喬生　（獨、心に）　これは幾重にもお察し申します。

麗卿　その寂しさを慰めるために、今夜も二人連れで出てまゐりましたが、思ひのほかに夜が更けまして……。殊にこのごろは途中が物騒と聞いて居りますので、なんだか怖いやうでございました。

喬生　御もつともでございます。あひにく月も暗くなつて來ました。（空を見てかんがへる）如何でございませう。これから月湖の邊までお歸りになるには、よほどの道程がございます。いつそ引返してわたくしの宅へお出でになりましては……。

麗卿　あなたのお宅へ……。（金蓮と顔をみあはせて躊躇してゐる）

喬生　唯今も申す通りの次第で、やもめ暮しの穢いところではございますが、春の夜寒を凌ぐだけの用意はありま す。夜もおひ〳〵に更けてまゐりまして、今も仰つしやる通り、途中も物騒でございますから、御不自由でも今夜はわたくしの宅へお泊りなさいまして、あしたの朝早くお歸りになつた方が宜しからうかと思ひますが……。

麗卿　でも、初めてのあなたのお宅へ出まして、馴々しく御厄介になりますのは、あんまり厚かましいやうでございますから……。

喬生　（遮つて）　いえ、構ひません、かまひません。あなたの方さへ御差支へがなければ、御遠慮なくお出でください。

麗卿　（金蓮をみかへる）　これ、どうしたものであらう。

金蓮　折角あのやうに仰しやるのでございますから……。

麗卿　御厄介になるとしませうか。

金蓮　これから先にはまだ寂しい道がありますので、わたくしも實は怖くてならないのでございます。

喬生　それですから是非ともわたくしの宅へお戻りください。どう考へても心配で、このまゝあなた方をお歸し申すことは出來ません。さあ、どうぞお戻りください。

麗卿　ほんたうにお邪魔ではございますまいか。（喬生の顔をみる）あなたのやうなお方がお獨りでゐらつしやると云ふことは、どうしても嘘のやうに思はれてなりませんが……。

喬生　嘘かほんたうかは來て御覽になれば判ります。妻のない後はまつたくの鰥暮しでございます。

麗卿　それがどうもまだ疑はれて……。（こゝろありげに

再び喬生の顔をみる）あなたはよもやお欺しなさるのではございますまいね。

喬生　なんであなたを欺すものですか。なぜそんなにわたくしをお疑ひなさるのです。

麗卿　あなたに限らず、若い男の方は女をだますのが上手だと聞いてゐますので、どうも油斷がなりません。

喬生　世間の男はどうだか知りませんが、わたくしが噓をつくやうな男でないことは、今夜の月の前で誓ひます。

麗卿　乾とお誓ひなさいますか。

喬生　誓ひます、誓ひます。（ひざまづかうとする）

麗卿　いえ。それには及びません。

喬生　では、すぐにおいでください。さあ、御案内申します。

（喬生は先に立つて引返してゆく。麗卿は金蓮をみかへり、そのあとより續いてゆく。）

三

もとの喬生の家の前。月は暗く、夜鳥がしきりに啼く。

（となりの翁は扉をあけて出づ。）

翁　（空をみる）おゝ、月はすつかり暗くなつた。どこかで頻りに夜鳥が啼くぞ。なんだか忌な晩だな。今夜はどうも寢られさうもない。

（翁は扉をしめて內に入る。やがて金蓮は牡丹燈を持つて先に立ち、そのあとより喬生と麗卿は手をひき合つて出る。喬生はわが家を指さしてそこだと敎へれば、麗卿はうなづく。喬生は進んで扉をあけ、麗卿をまねき入れる。金蓮は燈をかざしてあたりを窺ひ、これも續いて內に入りて扉をしめる。夜はいよ〳〵暗くなる。隣の翁は蠟燭を持つて出て、外から喬生の家をうかゞふ。）

翁　はゝ、連れて來た、連れて來た。喬さんもやつぱり若い人だな。

（翁は笑ひながら內に入る。あたりは眞暗になる。）

――幕――

第二幕

一

喬生の家の內部。正面に出入口の扉がある。上のかたには寢室のあるこゝろで帷をおろしてある。まん中に卓を据ゑ、卓の上には花瓶を置いて梨の花を生けてある。下のかたは壁で、壁には美人を描いた一幅がかけてある。

（第一幕より半月あまりの後、二月のはじめの午過る頃。喬生は前よりも蒼ざめて窶れた顏色、榻に眞をか

けて、眼のまへに書物を置いたまゝで卓にうつ伏し、うと／＼と眠つてゐる。やがて入口の扉をたゝく音がきこえる。喬生は一旦頭をあげたが、懶いやうに又うつ伏してゐる。叩く音は續けてきこえたが、喬生はやはり默つてゐるので、外では待ちかねたやうに扉を推して、隣の翁が覗き込む。）

翁　やつぱり内にゐなすつたのか。此頃はめつたに外へ出る筈はないと思つてゐたら、案の通りだ。もし、喬さん、喬さん。なんぼ疲れてゐると云つて、ひる寢も好加減にするがいゝでせう。喬さん、喬さん。はゝ、どうしたものだ。

（呼ばれて、喬生はやはり懶げに顔をあげる。）

喬生　（力のない聲で）まだ日は暮れないかね。

翁　寢ぼけてはいけない。日が暮れるどころか、わたしは今やう／＼午飯を食ひに歸つて來て、これから又かせぎに出ようとするところだ。まあ、表へ出て御覽なさい。明るい日が丁度わたし達のあたまの天邊にあるのだ。

喬生　やれ、やれ。（嘆息して）春の日は長いな。

翁　おまへさんのやうに毎日ぶら／＼してゐて、殊に此頃のやうに、碌々に本も讀まずに寢てばかり暮してゐたら、定めて日が長いことだらう。ちつと表へ出てみたら何うですね。今もいふ通り、明るい日が一面に光りかゞやいて、そこらはめつきりと春らしくなりましたぜ。（云ひながら花瓶に眼をつけると）梨の花はすこし早いな。どこから折つて來なすつた。

（喬生はだまつて笑つてゐる。）

翁　（ふりかへる）ちつとも表へ出ないお前さんがどうしてこんな花を……。これは貰つたのかな。え、さうですかえ。

喬生　（笑ひながら）まあ、どうでもいゝではないか。

翁　いや、これがよくないのだ。この花は誰が持つて來たのですよ。

喬生　（やはり笑ひながら）どうもうるさいな。おまへの知つたことではないといふのに……。（起つて歩きはじめる）

翁　（鸚鵡がへしに）おまへの知つたことでは無い……。はゝ、ところが知つてゐますぜ。みんな知つてゐますぜ。

（他の榻に腰をかける）

喬生　（やゝ眞面目になる）知つてゐるとは……。なにを知つてゐるのだ。

翁　（しづかに）この花を呉れた女が侍婢とふたり連れで來る事をちやんと知つてゐるのですよ。

（喬生はだまつて翁の顔を見つめてゐる。）

翁　おまへさんが隱してゐても、わたしの方ではちやんと

知つてゐますよ。十七八の美しい女が牡丹の燈籠を小女に持たせて、毎晩こゝへ尋ねて來る。はゝ、どうです。それに間違ひがありますかな。

（喬生は矢はり默つて立つてゐる。）

翁　それに就て少しおまへさんに話したいことがある。まあ、こゝへお掛けなさい。

喬生　（俯かに）なにを話して聞かせようといふのだ。

翁　これだからまあこゝへお掛けなさいと云ふのに……。どうも強情な人だな。（起つて喬生の手を把り、無理に榻にかけさせる）一體あの女は何者ですね。

喬生　（うるさゝうに）お前がそれを詮議してどうするのだ。

翁　おまへさんの命を助けてあげたいからだ。

喬生　なに、命を助ける……。

翁　おゝ、うつちやつて置けば、おまへさんの命は遲かれ早かれ無い物だと思はなければならない。

喬生　（笑ひ出す）まあ、からかふのは止して貰はう。はゝゝゝ。

（喬生は笑ひながら又起ちあがるを、翁は再びひき戻して來る。）

翁　先月の十五の晩からお前さんの家へ若い女がたづねて來る。これでまあ死んだ奥さんのことも忘れて、まことに好鹽梅だと、わたしも内々は喜んでゐたのだが、それ以來どうもお前さんの樣子が可怪い。顏の色もだんだんに蒼ざめて、なんとなく影が薄くなつたやうにも思はれる。どうも少し變だと氣がついたので、實はゆうべ……。かう云つたらお前さんが怒るかも知れないが、隣の壁に穴をあけて……。

喬生　え。（隣のかたを見かへる）

翁　（隣のかたの壁を指さし）それ、そこの壁が少し毀れてゐるので、それを隱すために掛物がかけてあるでせう。その毀れたところへ穴をあけて、掛物の下から隣を覗いてみたのです。

喬生　（翁の顏をつかんで、小突く）怪しからんことをする男だ。いくら隣同士でもそんなことをして好いと思ふのか。二度とそんなことをしたら、老人、ただは勘辨しないぞ。恥知らずめ。

翁　それは勿論惡いに決つてゐるが、まあ落付いてそのあとの話を聞いてください。

喬生　だれが聞くものか（翁を突き放して上の方へゆく）呆れた奴だ。

翁　聞かないと云つても、聞かせなければならない。わたしがその壁の穴から覗いてみると、いや、思ひ出してもぞつとする。（氣味惡さうにそこらを見まはして聲を低

ゐる）おまへさんはこゝで骸骨と向ひ合つて、何か嬉しさうにひそ〳〵と話してゐる。

喬生　なに、骸骨……。（あざ笑ふ）おまへは飛んだ夢をみたものだ。

翁　わたしも一旦は夢ではないかと疑つたが、夢でない、夢でない。（頭をふる）たしかにそれを見とゞけたのですよ。

喬生　いや、夢だ、夢だ。わたしも子供のときには、骸骨が墓場で踊つてゐる夢なぞを見たことがあつたよ。子供や老人は色々の變つた夢をみるものだ。

翁　いや、まあ、聞いてください。それを一目見たときには、わたしも總身の血が一度に氷のやうになつてしまつたが、それでも若や夢ではないか、若や又なにかの見違ひではないかと、氣をおちつけてよく覗いてみると、やつぱり骸骨……。たしかに骸骨に相違ないのです。それが又おどろくではないか。お前さんと向ひ合つてゐるのは骸骨で、そのそばに附いてゐるのは小さい人形のやうなものだ。

喬生（やはり笑つてゐる）おまへは念の入つた夢を見たものだな。

翁　骸骨や人形に魂が這入つて、毎晩お前さんのところへ通つて來るなどといふのは、どう考へても唯事ではありませんぜ。

喬生　それが本當ならば唯事ではあるまいよ。

翁　いや、本當だといふのに……。なぜお前さんはわたしの云ふことを眞面目に聞いてくれないのかな。

喬生　まじめに聞かないのが當りまへだ。（笑ふ）ばかばかしいにも程がある。いくら春の日が長くつても、わたしが退屈してゐても、おまへの相手になつてゐるのは御免だ。もう歸つてくれ。

翁　おまへさんは何かの魔物の邪氣に觸れて、心をすつかり奪はれてしまつたのだ。どうも困つたものだな。長年のなじみだから、わたしが親切に教へてあげるのだ。どうぞ正氣に立復つてください。本心に戻つて下さい。毎晩お前さんのところへ來る女は、決して眞人間ではないのですよ。鬼や幽靈が美しい女に化けて來て、男を惑はしたといふ話は昔から澤山ある。おまへさんは學者だから、そんなことは私よりもよく知つてゐる筈だ。

喬生　えゝ、判つた、わかつた。もう澤山だ。

翁　ほんたうに判りましたか。

喬生（じれる）なんでもいゝから歸つてくれ、歸つてくれ。

（喬生は翁を押出さうとする。）

翁　歸れといふなら歸りもするが、お前さんはほんたうに

判りましたかな。

喬生　うるさいな。判つた、判つた。

（喬生は無理に翁を引つ立てゝ突き出さうとする機（はずみ）に、卓の上の花瓶は床にころげ落ちて微塵に碎け、梨の花は散亂する。）

翁　おまへさんは不斷にも似合はず、急に氣が暴くなつたな。

喬生　えゝ、やかましい。だまつて出て行け。出てゆけ。ぐづ／＼してゐると、ひどい目に逢はせるぞ。

翁　どうも亂暴だな。

（翁は喬生に手あらく突き出されて、よろけながら表へ出てゆく。喬生は戸をぴつしやり閉める。）

喬生　（罵る）好い年をして馬鹿なことを……途方もない耄碌ぢゞいだ。（壁の際へ行つて、掛物をかゝげて見る）一體が少し毀れかゝつてゐるところへ、こんな悪いたづらをして……。（舌打ちする）まつたく仕様のない奴だな。日の暮れないうちに何とか繕（つくろ）つて置かなければなるまい。（云ひながら卓の方へ戻つて來て、碎けた花瓶に眼をつけて又もや舌打ちする）あいつのお蔭で、大事の花瓶をこの通りだ。花瓶は兎もかくも、あの女がゆうべ折角持つて來てくれたばかりの花を、すぐに滅茶滅茶にしてしまつて怨まれるだらう。なにか都合のいゝ申譯をかんがへて置かなければならない。どうも困つたことをしたな。

（喬生は落ちたる梨の花を拾ひあげ、榻に腰をおろして眺めてゐる。）

喬生　隣のぢゝいの云ふ通り、梨の花はちつと早いな。自分の家の庭に咲いたのだと云ふことだが……。あの女の住居は月湖のほとりだと聞いてゐるが、まだ一度もたづねて行つてみたことがないので、どの邊だか判らないこれはおれも少し迂濶であつたかな。

（喬生は花をながめながら少し考へてゐると、入口の扉をたゝく音が又きこえる。）

翁　明けてください、明けて下さい。

（喬生はだまつて考へてゐると、翁は戸を推して入り來る。）

翁　どうも氣になるので又來たが……。これ、喬さん。後生だからもう一度よく考へてください。おまへさんは一體あの女がどこから來るのか。確にその居所を知つてゐなさるのかな。

喬生　（ふり向く）お前がゆうべ見たといふのは屹と本當だね。

翁　ほんたうです、本當です。あの女は骸骨に相違ないのですよ。

喬生　むゝ。

（喬生は衝と起ちあがり、梨の花を持つたまゝで足早に表へ出てゆく。翁は呆れたやうに立つてゐる。これにて幕を一度おろして、すぐに再び幕をあける。）

二

第一幕の喬生の家の前。

（隣の家の前では、吹革その他の鑄かけ道具を持ち出して、翁は鍋の繕ひをしてゐる。下のかたより喬生は梨の枝を腰のうしろに挾み、急いで出る。）

翁　おゝ、喬さんか。息を切つて、顔色を變へて、どうした、どうした。

喬生　お爺さん、堪忍してください。わたしが惡かつた、惡かつた。

翁　まあ、待ちなさい。ひどく息を切らしてゐるやうだ。

（翁は内へ入りて茶碗に水を汲んで來る。そのあひだも喬生はおど／＼して左右を見廻してゐる。）

翁　さあ、さあ、水でも飲んで氣を落付けなさい。おまへさんは日の暮れるまでどこへ行つてゐたのだ。

喬生　（水を飲んで、ほつと息）月湖のほとりまで行つて……

（喬生はひどく疲れてゐるらしいので、翁は自分の腰かけを讓つて掛けさせる。）

翁　あの湖水の邊へ何しに行きなすつたのだ。

喬生　（腰なる花の枝を把つてみせる）この花の咲いてゐる家があるか無いかを探しに行つたのだ。

翁　あゝ、さうか。（うなづく）さうして、その家はありましたかえ。

喬生　あの女は小女と二人きりで、湖水の岸に住んでゐるといふので、念のために探しに行つてみたが、そんな家は西にも東にも……。堤の上にも橋の際にも、どこにも見當らなかつた。

翁　さうでしたか。（ため息をつきながら又うなづく）いくら探してもそんな家のあらう筈がない。それは無いに極つてゐる。骸骨の住んでゐるところは、寺か墓場の外はありませんからね。

喬生　今まではお前を疑つてゐたが、まつたくお前のいふ通り、あの女は二人ながら唯の人間ではないらしいので、わたしはだん／＼不安心になつて來て、すぐに其足で玄妙觀へ駈け込んだのだ。

翁　それは好いところへ氣がつきなすつた。玄妙觀の魏法師は王眞人のお弟子で、御祈禱やおまじなひをすることに於ては當時第一といふ噂だ。

喬生　わたしもそれに氣がついたので、すぐに魏法師をお

たづね申して、その膝の前にひざまづいてお救ひを求めると、法師はわたしの顔をひと目見て……。（聲をふるはせる）おまへの顔には邪氣が滿ちてゐる。

翁（そつとしたやうに）む〻。おまへの顔には邪氣が滿ちてゐる……。魏法師樣がさう仰しやいましたか。

喬生　うか〳〵してゐると、命が無い。

翁　うか〳〵してゐると、命がない……。やつぱりわたしの云つた通りだ。それで、なにか有難い御祈禱でもして下さいましたか。

喬生（懷中から朱符二枚を出す）その禍を攘ふために此の二枚のお符を下すつて、一枚は門口に貼付けて置け。一枚は寢床に貼付けておけ。さうすれば、怪しい女どもは決して近寄ることは出來ないと仰しやつた。

翁（朱符をうけ取つて押頂く）やれ、やれ、それは有難いことだ。これを門口と寢床へ貼つておけば、あの骸骨も近寄ることは出來ないのか。（朱符を再び頂いて、喬生に戻す）もうそのほかには何も仰しやつたことはありませんでしたか。

喬生　この後決して月湖のほとりへは足踏みをするな。

翁　む〻。

喬生　あの湖水の岸には湖心寺といふ古い寺がある。そこへも決して立寄つてはならないと、堅く戒められた。

翁　湖水の邊へは足踏みするな……。湖心寺へは決して立寄るな……。それは別にむづかしい事でもない。それで災を防げるなら、お前さんもその戒めをよく守るがよからう。

喬生　それは勿論のことだ。なにしろお前のお蔭で、わたしは危い命を救はれたのだ。さつきの失禮を詫びた上に、あらためてお禮を云ひます。

翁　いや、それもやつぱりお前さんの運が強いのだ。わたしもそれで安心した。まあ、まあ、めでたい、目出たい。

喬生（まだ不安らしく）併しこのお符を貼付けただけで、確にあの女どもは姿を見せないでせうか。

翁　魏法師樣がさう云つて受合つて下すつた以上は大丈夫ですよ。

喬生　大丈夫でせうか。

翁　決して心配することはありませんよ。（あたりを見て）おゝ、いつの間にかすつかり暗くなつた。

喬生　暗くなりました。（これも左右をみかへる）あゝ、なんだか急に怖ろしくなつて、どうしていゝか判らなくなつた。お前さんも加勢して、どうぞわたしを助けてください。お願ひです、お願ひです。

翁　わたしにどうなる事でもない。この上はそのお符が何よりの頼みだ。ちつとも早く貼付けたらよからう。

喬生　さうです、さうです。

（喬生はあわてゝ我家の内に入る。翁も道具を片附けて我家に入る。やがて喬生は内より出で、一枚の朱符を門の扉に貼りつけてゐると、翁は蠟燭を持つて再び出る。）

翁　おゝ、おゝ、それでよからう。

喬生　いゝでせうか。

翁　それで安心だ。安心だ。

喬生　なか／＼安心してはゐられません。いつそ今夜はおまへの家へ泊めて貰へますまいか。

翁　さうしたら、髑髏はわたしの家へ押掛けて來るだらう。

喬生　え。

翁　おまへさんはそのお符を貼つてある家のなかに、おとなしく閉ぢ籠つてゐなければならないのだ。左もなければ折角のお符がなんの役にも立つまいではないか。

喬生　成程それもさうですね。（ため息をつく）あゝ、こんなことにならうとは夢にも思はなかつた。

翁　（勵ますやうに）かういふ時に氣を弱くしてはいけない。さあ、さあ、早く家へ這入りなさい。もうやがて燈籠の灯のみえる時分だ。

喬生　（ぎよつとして）もう灯が見えましたか。

翁　いや、まだ見えはしないが、もうそろ／＼と見える時刻だらう。初めのうちは夜ふけであつたが、此頃は宵から來るやうだね。

喬生　暗くなるとすぐに來ます。

翁　どうもあの燈籠の灯が忌に陰氣で、なんだか鬼火か人魂のやうだと思つてゐたら、やつぱりさうであつたのだ。いや、いや、もうこんな話はしない方がよからう。わたしは内へ這入りますよ。

喬生　もし……。（翁の袖に縋る）おぢいさん。

翁　はて、氣を弱くしてはいけないと云ふのに……。

（翁は振切つて内に入る。喬生はぼんやりと突つ立つてゐたが、やがて逃げるやうに我家へ駈け込んで、内からしつかりと扉をしめる音。夜はいよ／＼暗くなつて、牡丹燈を持つたる金蓮と麗卿の姿があらはれる。ふたりは喬生の門に立ち寄つて進み得ず、金蓮は燈をかざして柱の朱符を照して見せると、麗卿は怨めしさうにぢつと眺めてゐたが、やがて思ひ切つて戸口に寄らうとするを、金蓮は袖をとらへて控へる。そのうちに、金蓮は隣の家のまへに落ちてゐる梨の花をみつけて指させば、麗卿は拾つて來いといふ。金蓮はこゝろ得て持つて來れば、麗卿はその花を懷しさうに眺め、再び喬生の家を怨めしさうにみかへりて、花を兩袖にしつかと抱きしめるかと思ふと、その姿は消える。金

蓮も消える。唯、牡丹燈のみが役に殘つて、迷ふがごとくに闇の中を流れてゆく。）

——幕——

第　三　幕

一

おなじ年の三月、清明の節。晴れて暖かく、春色天地にあまねき時である。

正面は月湖、湖畔に綠の柳が栽ゑてある。岸には青い草が生えてゐて、一艘の畫舫が繋いである。上のかたには朱欄の橋がある。所々に紅い桃や白い李の花も咲いてゐる。下のかたには酒を賣る家の入口がみえて、青帘が春風になびいてゐる。

（遊樂の人々、男、女、子供が打ちまじつて、衣香扇影、いづれも長閑な氣分で三々伍々徘徊してゐる。橋の袂には踏青の娘たちも見える。玩具を賣る商人が簫を吹いてゐる。花を賣る娘も立つてゐる。ときどきに小鳥の囀る聲もきこえる。）

商人　さあ、さあ、お買ひください。お慰みには簫を吹きます。

（子供等は玩具屋の前にあつまる。）

娘　さあ、さあ、花をお召しください。

男一　（少し醉つてゐる）花なぞは金を出して買はずとも、そこらの枝を折つてゆけば澤山だ。

娘　そんな惡いことをなされずに、わたくしの花をお召しください。

男二　（これも醉つてゐる）あの玩具屋は簫を吹くといふが、おまへは何をして見せるのだ。

娘　（笑ふ）わたくしはなんにも出來ません。唯この花をお買ひ下さればよいのでございます。

男三　賣れ殘りを唯買ふといふことがあるものか。おまへも何か歌つて聞かせてはどうだ。

娘　わたくしには歌へません。

男一　どうも愛嬌のない女だな。買つて遣るから何か遣つてみせろよ。

（鶯の聲がきこえる。）

娘　あれ、あれ。わたくしの代りに鶯が歌つて居ります

男二　成程うぐひすが鳴いてゐる。

（鶯の聲つゞけてきこえる。）

男三　では、あれをお前の名代にして、一枝買ふとしようか。その桃の枝をくれ。

娘　ありがたうございます。

男一　たうとう賣れ殘りを買はされたのか。はゝゝゝゝ。

（男三は錢を出して桃の枝をかひ、肩にかついでゆく。男一と男二も笑ひながら橋を渡つてゆく。そのあひだに、他の遊人も思ひ〳〵に往來する。）

商人　姐さん。なか〳〵繁昌だね。

娘　お天氣が好いので、おたがひに仕合せですね。

商人　まつたく好い天氣だ。さあ、日の暮れないうちに場所を變へてもう少し稼がうかな。

娘　わたしもほかを廻つて來ませうか。

（商人は簫を吹いて去る。子供等も附いてゆく。娘は下のかたに去る。酒家から亭主がぶら〳〵出て來る。）

亭主　あゝ、けふは長閑な好い天氣であつたな。おかげでおれの店も大繁昌だ。（云ひながら踏青の娘たちに眼をつける）おゝ、姐さん達はまだ摘んでゐるのか。なかなか慾が深いな。はゝゝゝゝゝ。

（踏青のむすめ二人は見かへる。）

娘甲　けふは隨分摘みましたよ。

娘乙　御覽なさい。こんなですわ。

（ふたりは近寄つて籠をみせる。）

亭主　なるほど籠は一杯だ。そのくらゐ摘んだらもう好ささうなものだ。今に日が暮れるぜ。

娘甲　もうそろ〳〵歸らうと思つてゐるところですよ。

亭主　この湖水の底には大きい龜が棲んでゐて、若い娘を攫むといふからな。日の暮れないうちに歸るがいゝぜ。

娘乙　又そんなことを云つて嚇かすのね。

亭主　（笑ひながら）　いや、嚇かすのではない。ほんたうのことだ。

（下のかたより湖心寺の僧、油壺と幾本の蠟燭を持つて出る。）

亭主　やあ、今お歸りですかえ。

僧　燈明の油と蠟燭を買うて來ました。

亭主　毎日買ひに出なさるのだね。

僧　一遍に買ひ込んで置けばよいのぢやが、これが寺の規則とあつて、毎晩使ふだけの分をその日その日に買つて來ることになつてゐますのぢや。

亭主　雨が降つても風が吹いても、毎日買ひに出るのは面倒なお役ですね。

僧　それも修業の一つぢやと思うてゐますが、この正月中のやうなことがあると、使に出るものが迷惑しますぢや。

亭主　この正月中に何かあつたのですかえ。

僧　上元の晩から二月の初めにかけて、半月餘りのあひだ、この蠟燭が不思議に毎晩一本づゝ紛失するので……。

亭主　蠟燭が一本づゝなくなる……。（考へて）　誰かゞ盜むのかね。

僧　盜むならばみんな持つて行きさうなものぢやが、乾と

一本づゝ消えてなくなるのが不思議でござつた。なんだか私たちがその蠟燭代を胡麻かしてゞもゐるやうに思はれて、ひどく迷惑しましたよ。

（娘ふたりと他の人々も立寄つて聽いてゐる。）

亭主　それは不思議だな。さうして、今でも毎晩なくなりますかえ。

僧　いや、それが二月の初めからぱつたりと止んでしまうて、此頃では決してそんなことはありませぬ。

亭主　ふむう。（首をかしげる）併しまあ早くやんで結構でした。わたしも覺えのあることだが、たとひ蠟燭一本でも行き方が知れないといふのは心持のよくないものだ。

僧　まつたく心持のよくないものでござる。ましてそれが毎晩つゞきますとな。

亭主　さうですよ、さうですよ。

（風の音。僧は空をみる。）

僧　おゝ、風が吹き出して來ました。

亭主　花時の癖で、ゆふ方から急に天氣が變るかも知れませんね。いや、さう云つてゐるうちにもう夕方だ。ぢやあ、御免なさい。

僧　御免なされ。

（亭主は店に入り、僧は橋を渡つて去る。）

娘甲　さあ、わたし達も歸りませう。

娘乙　急に日が暮れかゝつて來たやうです。

（娘ふたりは籠をかゝへて下のかたに去る。薄く風の音。花ちる。他の人々も思ひ／＼に立去る。酒家の内より喬生とその友達劉生とが醉つて出る。）

喬生　もう澤山だ、澤山だ。この上に飲んだら歩けなくなるぞ。

劉生　まあ、いゝではないか。久振りで一緒に飲むのだ。もう少し附合つてくれ。

喬生　その久振りの酒だけに、ひどく腸に浸みてしまつたのだ。もういけない、もう御免だ。

劉生　どうも話せない男だな。一年三月清明の節に、醉つて樂まないと云ふことがあるものか。まあ、來い、來い。

（劉生は相手を引つ張つて、再び酒家へ連れ込まうとするを、喬生はよろけながら振拂ふ。）

喬生　いけない、いけない。堪忍してくれ。（よろけながら柳の下に倒れる）あゝ、好心持に醉つた、醉つた。

劉生　そんなところに寢ころんで何うするのだ。しつかりしろ、しつかりしろ。（抱へ起さうとする）

喬生　（倒れながら）もうこの通りで仕方がない。後生だから少し斯うして置いてくれ。

劉生　寢るなら家へ這入つて寢ろよ。（空をみる）なんだか急に暗くなつて、今にも雨が降つて來さうだぞ。さあ、

起きろ、起きろ。

（喬生は他愛なく倒れてゐる。酒家の内より亭主が出る。）

亭主　そつちのお客様はどうかなさいましたか。

劉生　醉つてこゝへ寢てしまつたのだ。（喬生に）これ、起きろ。雨が降つて來るといふのに……判らない奴だな。

喬生　なにが判らない。一體おれをこんなところへ連れて來たのは、どこの何奴だよ。

劉生　それはおれが誘つて來たのだ。此頃あんまりぼんやりしてゐるから、些と元氣を附けるやうに、おれが親切に連れて來て遣つたのだ。

喬生　それ見ろ、おれが神妙に閉ぢ籠つて、精進潔齋をしてゐるところへ、お前のやうな惡魔が乘込んで來て、この時節に引込んでゐる奴があるものかと、無理におれを引つ張り出して、途中の酒家で先づ一杯飲んで、それから又こゝへ連れて來て、さつきからさん〳〵飲ませて、醉はせて、それでもまだ足らないで、もつと飲め飲めといふのだから、幾らおれだつて堪るものか。もう澤山だと斷つて、やう〳〵表へ逃げ出して來て、湖水の風に吹かれながら、好心持にすこし寢ようといふのだ。このくらゐ譯の判つたことがあるものか。邪魔をしないで打つちやつて置いてくれ。打つちやつて置いてくれ。（劉生を押退けながら再び寢轉ぶ）

亭主　隨分醉つておいでのやうですね。

劉生　久振りで飲んだので、すつかり醉が廻つたとみえる。（舌打ちして）まあ、仕方がない。かうして置け。

亭主　（空をみる）雨が強くなつて來ましたら、わたくし共が内へ連れ込みます。先づそれまでは斯うしてお置きなさるが好うございませう。

喬生　長安市上酒家眠、あゝ好心持だ。

劉生　飲んだ李白を氣取つてるやあがる。

（劉生は笑ひながら再び酒家に入る。亭主もつゞいて入る。日は暮れかゝりて、湖水のほとりも次第にうす暗くなる。湖心寺で撞き出す夕暮の鐘が水を渡つてきこえる。つゞいて薄く雨の音。橋の上に金蓮が出る。やがてあとより麗卿が出る。金蓮は寢てゐる喬生を指さして教へれば、麗卿はうなづいて進み寄らうとするを、金蓮は控へる。）

金蓮　お孃さま。あんな薄情な男にはもうお構ひなさいますな。

（麗卿は頭を掉る。）

金蓮　やつぱり御未練があるのでございますか。

（麗卿は立寄つて喬生の枕もとにひざまづく。）

麗卿　もし、もし……おゝ、よく眠つてゐる。（喬生の寢

顔をのぞく）

金蓮　寢てゐるのが丁度幸ひでございます。さあ、打つちやつて置いて參りませう。

（麗卿はだまつて男の寢顔をのぞいてゐる。）

金蓮　あなたはまあ、そんなにもこの男を……。いつそ思ひ切つておしまひなさいまし。

麗卿　はて、靜に……。（喬生を抱き起す）夢のなかにもわたしの云ふことは聞える筈。あなたとわたしとは前の世から因縁があるでもなく、この世で逢つたのもこの正月の上元の夜が初めてゞございます。牡丹燈のうす暗い灯のひかりで、初めてあなたのお顔を見て、お笑をみて、あなたのお優しい心も知つて……。それから後はわたしの身も心もみんなあなたに捧げてしまつて、毎夜かゝさずに逢ひにゆく。それが何で惡いのでございます。わたしに何の罪、なんの科があつて、あなたはわたしにお背きなされた。

喬生（うは言のやうに）隣のおやぢが惡いのだ。隣のおやぢが惡いのだ。

麗卿　その云ひわけは聞きません。たとひ誰がなんと云はうとも、わたしの住家を探しあるいて、その上に玄妙觀まで尋ねて行つたのは、みんなあなた一人の仕業ではございませんか。（聲は次第に怒りを帶びて來る）道士とか道人とかいふ奴の大嘘つきの出鱈目を眞に受けて、罪科もないわたしを振捨てようとは、あまりの不實、あまりの不人情ではございませんか。その恨みを云ひたいにも、あなたの家へ近寄ることが出來ないので、けふまで我慢に我慢して、時節の來るのを待つてゐたのです。

喬生（やはり夢のやうに）おれをこんなところへ連れて來て、劉生の奴が惡いのだ。

麗卿　だれが惡いのでもありません。みんなあなたが惡いのです。わたしがどんなにあなたを怨んでゐるか。恐らくあなたには判りますまい。なんといふ憎い人か。

（麗卿は喬生を小突きまはして突き放せば、喬生は夢のやうに又倒れる。麗卿はすつくと起つて、恨めしげに喬生を見おろす。）

金蓮　男はこの通りで、なにを云つても無駄なことでございます。もうあきらめてお歸りなさいまし。

（金蓮に袖をひかれて、麗卿は二足三足行きかけながら、又立ちどまる。）

麗卿　憎い憎いとは思ひながらも、逢へば未練が増すばかり……。今別れたらもう逢へまい。

金蓮　それほどに思召すならば、いつそのこと……。

（金蓮は喬生を連れてゆけといふ。麗卿はうなづく。）

麗卿　わたしもさう思ひます。

蓮　連れておいでなさいますか。

（麗卿は金蓮にさゝやき、二人は喬生をみかへりながら、橋をわたつて去る。薄く雨の音。喬生は起きかへりて空を仰ぐ。）

喬生　おゝ、雨が降つて來た。どこへか行つて雨やどりをしなければならないぞ。さうだ。湖心寺へ行かう。むゝ、あの古寺が近くていゝ。

（やはり雨の音。喬生は急ぐやうに橋を渡つて去る。酒家より劉生と亭主が出る。）

劉生　さあ、たうとう降り出したぞ。倒れてゐる奴を起して來なければならない。手をかしてくれ。

亭主　はい、はい。

（云ひながら二人は柳の下に來る。）

劉生　おや、あいつが見えないぞ。

亭主　どうなすつたのでせうね。

劉生　いつの間にか起きて歸つたかな。

（ふたりは見まはしてゐる。下のかたより隣の翁は大きい笠をかぶつて出る。）

翁　用心の笠が役に立つて、いよ〳〵降り出した。それにしても喬さんはどうしたかな。

劉生　おゝ、隣のお爺さんではないか。

翁　おゝ、劉さん。あなたは喬さんと一緒にお出かけなすつたのですね。

劉生　むゝ、久振りで喬を誘ひ出して、こつちの方へ遊びに來たのだ。おまへは何かあいつに用でもあるのかえ。

翁　あんまり歸りが遲いので、なんだか不安心になつて來て、こつちの方角へ探しに出たのですよ。

劉生　なにが不安心だ。さうして、わたし達がこつちの方角へ來たといふことがよく知れたね。

翁　え。（すこし躊躇して）それには、少し譯があるので……。なにしろ喬さんはどうしました。

劉生　醉つてこゝに寢ころんでゐたのだが……。途中で逢はなかつたかね。

翁　逢ひませんでしたよ。

劉生　はてな。（亭主をみかへる）どうしたのだらう。

翁　（かんがへる）あなた方は湖心寺の方をお探しになりましたか。

劉生　湖心寺……。あんな寺へ行つてゐる筈はないよ。

翁　まあ、兎もかくも行つてみませう。あなたも一緒に行つてください。

劉生　なにしに行くのだね。

翁　なんでもいゝから來てください。早く、早く……。

（翁はしきりに劉生を促して橋を渡つてゆく。劉生はなんだか判らず、翁にまかれたやうに續いてゆく。雨

の音。）

亭主　（呆れたやうに）なんだつて今時分あんな古寺へ行くのだ。あのぢいさん、蠟燭をぬすみに行くのでもあるまいな。

（亭主は笑ひながら内に入る。）

二

月湖につゞいてゐる湖心寺といふ古寺。本堂を横に見たところで、正面は窓に簾をおろし、左右は壁。その前は正面から上のかたへ折りまはして薄暗い廻廊。廊には上り下りの階段が附いてゐる。廻廊の壁際には旅櫬――客死して假にその柩を寺に預けてあるもの――があつて、正面には「故奉化符州判女麗卿之柩」と記してあり。柩の前には雙頭の牡丹燈をかけ、その下には人形の婢子が立つてゐて、婢子の脊には金蓮と記してある。庭には一本の梨の大樹があつて、その白い花は散りかゝつてゐる。薄く雨の音。奥には木魚の音が寂しくきこえる。

（庭の下のかたより翁が先に立つて出る。つゞいて劉生も出る。）

劉生　こんなところへ連れて來てどうするのだ。

翁　おまへさんは初めてゞすかえ。

劉生　門前はたび〳〵通つたが、這入るのは初めてだ。夕方のせゐかも知れないが、なんだか薄つ暗いやうな寂しい寺だね。

翁　なにしろ古い寺ですから、晝間でも暗いところですよ。

劉生　喬の奴がこゝに來てゐるといふのかね。

翁　（聲をひくめる）もしやと思つて來たのですが……。わたしの鑑定が外れてくれゝば仕合せだが……。

劉生　なにが仕合せなのだ。

翁　まあ、待つてください。

（翁は小聲で制しながら、あたりを見まはしてゐる中に、彼の牡丹燈に眼をつけて、ぞつとしたやうに小聲で叫ぶ。）

翁　あつ。あれだ、あれだ。（指さす）

劉生　え、あの燈籠がどうしたといふのだ。

（翁は庭から伸び上つてその柩を覗き、又もや小聲であつと叫んで劉生の手をとらへる。）

劉生　なんだ、なんだ。

翁　（小聲で）まあ、來て御覽なさい。

（翁は劉生の手をひいて徐と階段をあがり、柩の前に立つ。）

翁　（指さして）もし、これが判りますか。

（柩の蓋のあひだから喬生の着物の裾が少し露はれて

ゐる。劉生もそれを見ておどろく。)

劉生　やあ、これは喬の着物の裾らしいぞ。どうして此の棺のなかに這入つてゐるのだらう。

翁　(制して)まあ、靜に、靜に……。あなたは何にも知らないのですか。

劉生　まつたく何にも知らないのだが、喬の奴はこの棺の主になにか因緣でもあるのかしら。

翁　深い因緣があるのですよ。あゝ、人の執念はおそろしいものだな。

劉生　早くそのわけを聞かしてくれ、聞かしてくれ。一體これはどうしたと云ふのだ。

(上のかたより廻廊をめぐつて、以前の僧が油壺を持つて出る。)

僧　これ、これ、おまへ方はそこで何をしてゐるのぢや。

翁　(僧に形を正して)はい。わたくし共は人を探しに參りましたのでございます。

僧　なんといふ人をさがしに來られた。

翁　わたくしの隣の喬といふ男で、その着物の裾がこの棺のあひだから見えてゐるのでございます。

(僧も立寄つて見ておどろく。)

僧　ついぞ此の棺の蓋を明けたこともないに……。正しく男の裾らしい物が見える。はてな。

劉生　この棺の主はなんといふ人でございませう。

僧　(指さす)その正面に書いてある通り、それは奉化で州判の役を勤めてゐられた符といふ人の娘御でござる。

翁　その娘さんは幾つで死んだのでございますね。

僧　むすめの名は麗卿と云つて、たしか十七の年になくなられたと覺えてゐる。勤め先のことであるので、死骸はこの寺にあづけて置いて、親御さん達は北の方へ歸られたが、それから一向に音信不通で、幾年もそのまゝになつてゐるのぢや。

翁　死骸は娘さんだけで、ほかに女中とか腰元とか云ふやうなものが一緒ではございませんか。

僧　ほかには誰も……。附いてゐるのは唯これだけぢや。

(人形を把つてみせる)背中には金蓮と書いてある。

翁　金蓮……。おゝ、それだ、それだ。それにも魂が這入つたのか。いよ／＼これは不思議なことだ。

劉生　そんなことよりも早くこの棺をあけて貰はうではないか。喬の身の上が何分氣がかりだ。

僧　わたしも不思議でなりませぬ。兎もかくも明けてみませう。

劉生　どうぞお早く願ひます。

(僧は柩の蓋をあける。劉生と翁も覗く。)

翁　おゝ、喬さんは骸骨にしつかり抱かれて……。やつぱ

りわたしの鑑定通りだ。

劉生　もう死んでゐるやうだな。

僧　いつ此の棺に這入つたのか知らぬが、人は疾うに死んでゐます。

劉生　よつぽど執念ぶかい女とみえて、骸骨は男のからだにしつかりと絡み付いてゐる。

翁　これも因縁とはいひながら、あゝ怖ろしいことだ。なんといふ怖ろしいことだらう。

（翁は棺のそばを離れて、踏段から庭に降りる。僧は柩の蓋を閉ぢる。）

僧　（嘆息して）まことに前代未聞の不思議、わたしの一存ではどうにもならぬ。お住持に委細を申上げて、なんとか然るべく取計らひませう。

（僧は柩に向つて黙禱する。劉生も庭に降りる。薄く雨の音。牡丹燈は灯の入りしやうにぼんやりと明るくなる。）

翁　（小聲で）あ、あの燈籠が……。（指さす）燈籠が……

（劉生もぎよつとして燈籠の灯をみつめる。僧はやはり黙禱をつゞけてゐる。）

――幕――

明の瞿宗吉の「剪燈新話」が淺井了意の「お伽ばうこ」に飜案され、山東京傳の「浮牡丹全傳」に飜案され、更に三遊亭圓朝の「怪談牡丹燈籠」に飜案され、更に又それが劇化されて屢々上演されてゐるのは、周知の事實である。そのほかにも、それを題材として新しく書きおろされた戯曲が二三種ある。而もそれらは皆わが國の世界に飜案されたものばかりであるので、わたしは別に新しい趣向を立てず、新しい解釋を加へず「剪燈新話」中の「牡丹燈記」を唯そのまゝに劇化して、原作に描かれてゐる幽怪凄艶の情趣を日本の舞臺に移してみたいと試みたのである。その成功と不成功とは、讀者の批判に任せるのほかは無い。（作者）

鬼坊主清吉（三幕六場）

登場人物

鬼坊主清吉
司馬江漢
神樂師萬右衞門
深川藝妓　小初
萬右衞門の弟子千吉
江漢の門人　江水
下男　源助
清吉の子分鬼熊・鬼鐵
村の若い者　善八
手先　金平
ほかに若い者。茶店のむすめ。茶屋の女中。船頭。參詣人。手先など。

第一幕

一

江戸時代。文化初年の頃。

向島小梅のあたり。神樂師萬右衞門の家。茅葺屋根の二重屋臺にて、正面上のかたは壁、それにつゞいて障子の出入口。下のかたは折りまはして、竹の肱かけ窓。家の上のかたは竹藪にて、庭には百日紅の大樹。そこらには秋草の花など咲けり。庭の下のかたにはあらき竹垣、低き木戸あり。垣の外には葉ばかりの櫻の大樹を隔てゝ、田畑などもみゆ。

（七月はじめの午後。けふは蟲干をしてゐる體にて、家のうちには綱などを張りまはし、それに神樂の衣裳類が懸けてあり。面箱も四つ五つありて、緣先その他に十二三の假面がならべてあり。その取りちらしたるなかにて、近所の若いもの善八は外道の假面をかぶりて頬かむりをし、浴衣のまゝにて踊つてゐる。萬右衞門の弟子千吉は兩手の人さし指にて太鼓をたゝく眞似をして、口拍子を取つてゐる。蟬の聲ときれ〲にきこゆ。）

善八　（踊り終りて一息つく）やれ、あつい、あつい。（假面をぬぐ）

千吉　（笑ふ）蟲干の最中に、馬鹿や外道を踊つてゐるのだ。ちつとぐらゐ暑いのも不思議はあるめえ。

善八　まつたく汗びつしよりになつてしまつた。あつい、

あつい。地獄だ、地獄だ。（汗をふく）

千吉　どうで外道だ。極樂へは行かれめえよ。一體蟲ぼしの手つだひに來てゐながら、まつ晝間から踊り出すといふのが間違つてゐるのだ。

善八　さういふおめえが太鼓をたゝく眞似なんぞするもんだから、おれもつい浮かれて、ちよいと踊つてみるやうにもなつたのだ。このごろの稽古はやつぱり夜だな。

千吉　馬鹿ばやしや、お神樂の稽古は、いつでも夜なべ仕事ときまつてゐるのだ。早くうらの井戸端へ行つて汗でも拭いて來て、そろ〳〵片附ける手傳ひをしてくれ。うかうかしてゐると日が暮れるぞ。

善八　おめえは今まつ晝間だと云つたぢやあねえか。

千吉　つまらねえ揚足を取るな。（上のかたの空をみる）あれ、みろ。お天たう樣ももうお歸りだ。

善八　お天たう樣のお歸りはいゝが、親方が歸つてくるといけねえ。もう好加減にして片附けようか。

千吉　早くしろ、早くしろ。

善八　どうで汗ついでに、もうひと軍だ。

（ふたりは肌ぬぎになつて、そこらに干したる衣裳などを片附けはじめる。下のかたより鬼坊主清吉、三十二三歳、遊び人のこしらへ、一つ竈のざんぎり頭に手拭をかぶりて出で來り、花道の方へ行かうとして不圖見かへり、木戸の外より内をのぞいてゐる。）

善八　（鬼の假面を手に取りてみる）むゝ。いゝ面だな。

千吉　（のぞき込む）そりやあまつたく好い面だよ。親方も大事にしてゐて、ふだんは決して持ちだしたことがねえが。なんでもよつぽど名人の作らしいな。

善八　さうだらう。見てゐると、なんだか凄くなるやうだ。

千吉　おれ達にやあ判らねえが、蛇と出目とか龍右衞門とか云ふのだらう。隨分氣味の悪い面をしてゐるぜ。

善八　どうで鬼の面に可愛らしいのもあるめえが、こいつは些と怖過ぎるな。くらやみでこんなのに出つくはしたら、大抵の者は眼をまはすかも知れねえ。忌だ、忌だ。

（思はず假面を取り落す）

千吉　これ、氣をつけろ。疵でも付けたらどんなに叱られるか判らねえ。

清吉　（外よりずつと這入る）ちよいとその面をみせておくんなせえ。

千吉　誰だ、誰だ。だしぬけにびつくりさせるぜ。

清吉　（手ぬぐひを取る）へゝ、どうも濟みません。實は其、ちよいとそのお面を拜見したいのでございます。

善八　この面かえ。（鬼の假面をみせる）

清吉　へえ、どうもありがたうございます。（縁に腰をかける）なるほど結構なお面でございますね。ちよいと拜

借。（假面を手にとり眺める）あゝ、好い。よつぽど古い物のやうですが、定めて名のある面師の作でございませうね。

千吉　今も云つてゐたところだが、なんでも出目とか龍右衛門とかいふのだらうと思ひますよ。

清吉　なるほど、なるほど。（假面をぢつと見つめてゐる）

善八　おまへさんはやつぱりその方の御商賣かね。

清吉　いえ、さうでもございませんが……。（いつまでも假面に見惚れてゐる）

（千吉と善八は少し不審らしく顔を見合せる。清吉はいよ／＼見惚れたやうに、息もつかずに假面を見つめてゐたるが、やがて假面を持つたるまゝにて、黙つて出て行かうとする。千吉と善八はおどろいて緣より飛び降り、前後より清吉を支へる。）

千吉　いけねえ、いけねえ。なにをするのだ。

善八　この面をどこへ持つていく積りだよ。

清吉　（氣が付いたやうに）いや、どうも申譯がございません。あんまりこのお面がよく出來てゐますので……。

千吉　冗談云つちやあいけねえ。返してくれ、返してくれ。

（無理に清吉の手より假面を取りあげる）

（清吉はまだ未練らしくたゝずみて、その假面の方を見かへつてゐる。千吉と善八はなんだか變な奴だとさゝやき合ひ、再び緣にあがりて早々にそこらを片附けはじめる。下のかたより神樂師萬右衛門、三十四五歳、出で來りて内に入り、そこに立つてゐる清吉に眼をつけると、清吉も氣が付きて萬右衛門と顔を見合せ、無言で會釋してそのまゝ出てゆく。萬右衛門は不審さうに見送る。清吉は向うへ立去る。）

萬右衛　今來てゐたのはどこの人だ。

千吉　親方、お歸んなさい。今來た奴はなんだか變な野郎でね。

善八　油斷をしてゐると、面を一つ攫つて行かれるところでしたよ。

千吉　どうも堅氣の人間らしくないと思つたが、あんな奴は空巣狙ひか藁とんびで、こつちの[illegible]に附込んで、なにか仕事をしようと思つたのかも知れねえな。

萬右衛　さうして、どの面を攫つて行かうとしたのだ。

千吉　おまへさんが大事にしてゐる鬼の面ですよ。

萬右衛　なに、鬼の面……。（あわてゝ緣にあがる）よもや取られやしめえな。

善八　なに、大丈夫です。（箱をあけて鬼の假面をみせる）

萬右衛　（やうやく落着いて）よし、よし。それで先づ安心した。だが、澤山ある面のなかで、よりに擇つてその面を取つて行かうとは……。（向うをみる）よつぽど眼

の肥えてゐる奴だな。まあ、まあ、無事でよかつた。もう日がくれる。早く片附けてしまへ。

千吉　あい、あい。

善八　そこで、牛島の方はどんなことでした。

萬右衛　秋祭の相談よ。氏子總代からすぐに來てくれと呼びに來たから、蟲干の最中にあわてゝ出て行つてみると、今年は本祭だから二十五座をたのむと云ふのだ。

千吉　九月の祭を今から騒いでゐるとは、馬鹿に氣が早えね。

萬右衛　なんでも早手廻しが當世だ。今年は大層込みで、立派な揃衣が出來るとかいふことだ。善八さん、おまへにも腕を揮つて貰はなけりやあなるめえぜ。

善八　（嬉しさうに）あい、あい。ふだんから手ぐすね引いて待つてゐます。

千吉　蟲干そつち退けで踊つてゐる位だからね。

善八　これ。つまらねえことを云ふな。

萬右衛　それぢやあ今も踊つてゐたのかえ。そんなことをしてゐるから畫とんびが飛び込むのだ。（又考へて）おい、ちよいとそれを……。（假面をみせろといふ）

善八　別にどうもなつてゐやあしませんよ。（鬼の假面を渡す）

萬右衛　（假面を手に取りてちつとみる）どうしてこれに眼を付けやあがつたかな。油斷のならねえ奴だ。（一種の不安を感じてくる）あんなのが通り惡魔といふのかも知れねえ。こんな物をうつかりこゝへ出して置いたのが惡かつた。（假面を持つたまゝで庭に降り、木戸口より表をうかゞひ、更に假面をながめながら縁にあがる）おい、だん／＼に暮れかゝつて來る。早く片附けろ、片附けろ。

（萬右衛門はその假面を箱に入れる。千吉と善八もそこらを片附ける。下のかたより以前の鬼坊主清吉、忍び足にて再び出で、櫻の木かげより内をうかゞつてゐる。淺草寺のゆふぐれの鐘きこゆ。）

二

向島三圍(みめぐり)あたりの堤。おなじ日の宵。

正面はだら／＼降りになりたる草土手にて、まへは隅田川、堤の裾にはところ／＼に杭を打つてあり。堤のうへには葉櫻の立木あり。上のかたには店をしめたる葭簀張りの茶店あり。うしろは黒幕。うすく水の音、狸囃子のやうな鳴物遠くきこゆ。

（上の方より土地の若い者二人、少し酒に酔ひて出づ。）

若者甲　なんだか足許があぶねえな。しつかり頼むぜ。

若者乙　べらぼうめ。あのくれえの酒で醉つてたまるものか。

若者甲　別に格子色があると云ふわけでは無し、吸ひ付け煙草がのみてえばつかりに、毎晩ひやかしに出かけるといふのも、考へてみると御苦勞なこつたな。

若者乙　つい染め易き廓の水よ。これも因果で、吉原を一廻まはつて來なけりやあ寢られねえんだから仕方がねえ。だが、今夜はちつと遲いから、渡しがあつてくれゝばいゝが……。

若者甲　さあ、少しあぶねえかも知れねえ。暮六つからは渡船はならねえと代官所からの嚴しい御沙汰だ。

若者乙　とんだ日高川でゐやあがる。まあ、念晴しに行つてみよう。

若者甲　船頭のおもいに幾らか煙草錢でも遣りやあ、清姫にならずと濟むだらう。まあ、あんちんして來るがいゝや。

若者乙　わるく洒落れるぜ。

二人　はゝゝゝゝ。

（甲乙二人は笑ひながら下のかたへ立去る。うすく水の音。そこらの料理茶屋の端唄の聲きこゆ。）

唄へ桔梗、なかに玉章しのばせて、月は葉末に草のつゆ。

（下のかたより鬼坊主清吉は鬼の假面をふところに入れ、頰かむりにて出づ。）

清吉（ひとり言）どこかの茶屋で唄つてゐやあがる。世間はやつぱり不景氣でもねえと見えるな。

（云ひかけてあとを見かへり、舌打しながら上のかたの茶店にかくれる。）

唄へ君をまつ蟲、夜ごとにすだく。

（下のかたより神樂師萬右衞門は足早に出づ。）

萬右衞　なんでもこの堤へあがつたやうだが、はて、どこへ行つたかしら。なにしろ薄暗いのでよく判らねえ。

唄へふけゆく鐘に雁のこゑ、戀はかうしたものかいな。

（萬右衞門はそこらを見まはしながら上のかたへゆく。月はだん〳〵に薄明るくなる。茶店のうしろを廻りて清吉忍び出で、下のかたへ引返してゆかうとするを、萬右衞門は透し視て、これもつか〳〵と引返して

清吉のまへに立塞がる。）

萬右衛　ちよいと待つてください。

（清吉は無言で上のかたへ又引返さうとするを、萬右衛門は追ひかけて其腕を取る。）

萬右衛　（すかし視る）むゝ、手前だ、手前だ。やつぱり手前だ。さあ、出せ。早く返せ。

清吉　だしぬけに返せとは何を返すのだ。

萬右衛　（せいて）とぼけるな、この野郎。鬼の面を素直に返せ。どこへ隱した。早く出してみせろ。

清吉　そんなものは俺あ知らねえ。（振り拂ふ）鬼の面が見たけりやあ節分の龜戸へいけ。

萬右衛　おれが大切にしてゐる鬼の面を、手前が狙つてゐるのは知つてゐるのだ。あれほど用心してゐたのに、ちよいとの隙に持ち出されたのが口惜くつてならねえ。さあ、素直に返せばゆるして遣る。出せ、出せ。

清吉　なんと云つてもおらあ知らねえ。

萬右衛　屹と知らねえか。

清吉　えゝ、知らねえ、知らねえ。

萬右衛　知らねえことがあるものか。（清吉のふところに手をかける）

清吉　人のふところへ手を入れて、手前は追剝ぎか巾着切りか。この頃は向島も物騷になつたな。

萬右衛　それはこつちで云ふことだ。えゝ、出せ。出しやあがれ。

（萬右衛門は捻ぢあひながら、清吉のふところから鬼の假面を引き出して、その眼さきへ突きつける。）

萬右衛　それ、みろ。これは何だ。

清吉　（手早く假面を引つたくる）なんでもねえ、おれの物だ。

萬右衛　この野郎。また取りやあがつたな。

（ふたりは假面を爭ひながら堤下の水際にころげ落ち、清吉は遂に萬右衛門を組み伏せる。）

清吉　さあ、野郎。素直にこの面をおれに渡すか。左もなけりやあ生かしちやあ置かねえぞ。（ふところより匕首を出す）いくら大切な面でも命には換へられめえ。好加減に往生して渡してしまへ。

萬右衛　（組み敷かれながら）それほどに欲しいのか。

清吉　欲しいから取るのだ。さあ、どうだ。（匕首を突きつける）

萬右衛　待つてくれ、待つてくれ。それほど執心なら遣つてもいゝが、どうも遣られねえわけがあるのだ。まあ、聽いてくれ。いや、嘘ぢやあねえ。今そのわけを話すから起してくれ。

清吉　おたがひに男同士だ。よもやだますのぢやあるめえ

な。

萬右衞　そんな卑怯なおれぢやあねえ。

淸吉　むゝ。そんなら何でも早くいへ。

（淸吉は片手に匕首、片手に假面を持ちて、草の上にあぐらをかく。萬右衞門は起きあがりて草に坐る。）

萬右衞　その面を遣られねえと云ふわけは……。實はおれの物ぢやあねえのだ。

淸吉　嘘をつけ。

萬右衞　いや、まつたくだ。實をいへばおれもそれを盜んで來たのだ。

淸吉　え、おめえもこれを盜んだのか。ほんたうか。

萬右衞　（ため息をつく）かうなれば何も彼も正直に白狀するが、今から足かけ七年前、おれが二十八の秋に、からだを少し惡くして、伊豆へ二まはりばかり湯治に行つたことがある。その歸り路に、なんといふところか知らねえが、さびしい田舍路を通りかゝると、八月の日ざかりで殘暑がひどい。草いきれのなかを汗を拭き〳〵あるいて行くと、路ばたに小さい森があつて、なにかの神樣を祭つてあるらしい。その社のまへに立ちどまつて、しばらく休んでゐるうちに、ふと見ると、社の軒に鬼の面を取り付けた古い額がかゝつてゐる。おれもお神樂が商賣で、これまでに色々の面をみたこともあるが、こんな結構な面といふものは滅多にみたことがねえ。あゝ、よく出來てゐる。と、感心してぢつと見てゐるうちに、おれに魔がさしたのかも知れねえ。ふいと惡い料簡が起つて來て、丁度あたりに人は無し……。あとは云ふまでもねえ、察してくれ。

淸吉　むゝ。ぢやあ、その時に盜んで來たのがこの面か。（今更のやうに假面をみる）まつたくよく出來てゐるからな。欲しくなるのも無理はねえ。して、その社には何が祭つてあつたのだ。

萬右衞　それは判らねえ。なにしろよつぽど古い社のやうだつたから、その面も遠い昔に奉納したものに相違ねえ。ところが、惡いことは出來ねえもので、その面をぬすんで江戸へ歸ると、それから後はおれの家に惡いことだらけで、先づおふくろが死ぬ。つゞいて女房が死ぬ、二人の子どもが死ぬ。足かけ七年のあひだに四つも弔ひを出したので、おれもがつかりしてしまつた。なんと怖しいことぢやあねえか。

淸吉　（かんがへる）そんなことがあるかなあ。

萬右衞　その面の祟りで、おれの家中（うちぢう）がだん〳〵に死に絶えてしまつて、殘つてゐるのはおれと妹ばかりだ。それを思ふと、おれもその鬼の眼に始終睨まれてゐるやうな心持がして、一日も安心が出來ねえ。罪ほろぼしに元の

ところへ返して來ようと、絶えず氣にかゝつてゐたからも、何をいふにも路が遠いのと、貧乏暇無しとで、ついそのまゝになつてゐるのだが、どう考へても怖しくつてならねえから、この秋祭に些と稼ぎためたら、それを路用にして今年こそは、屹と伊豆へ行つて來ようと思つてゐるのだ。さういふわけだから、その面ばかりはおめえに遣られねえ、どこの誰にも遣られねえ。おれが頼むから諦めてくれ。

清吉　いや、さういふわけを聽いてみると、いよ〳〵この面が欲くなつた。やつぱりおれが貰つて置かう。（假面をふところに押込む）

萬右衛　（すり寄る）いけねえ、いけねえ。あれほど云つて聽かせた因業話がおめえには判らねえのか。そんなものを持つてゐると、屹とその鬼に祟られるぞ。

清吉　なんでおれに祟るものか。鬼はみんなおれの子分や友達だ。

萬右衛　さうでねえ。誰にでも屹と祟るよ。

清吉　屹と祟るなら猶更のことだ。早くよその人に譲つてしまつて、おめえは厄拔けをするがいゝぢやあねえか。

萬右衛　人に渡したのぢやあ祟は消えねえ。どうしても元へ返して來なければ、おれの心が濟まねえのだ。

清吉　よし。それぢやあおめえの代りにおれが返して來てやるよ。（起ちあがる）それで云分はあるめえ。

萬右衛　子供だましのやうなことを云ふな。人のものを盗むやうな奴がなんで正直に返しに行くものか。

清吉　（笑ふ）おめえだつて盗んだのぢやあねえか。あんまり正直でもあるめえ。

萬右衛　それだから、今ぢやあ後悔して、夜も晝も苦んでゐるのだ。おめえも屹と後悔する時が來る。（清吉の腕をつかむ）これ、おれがこれほどに頼むのだ。おれを助けると思つて返してくれ。これ、じらさずに返してくれ。

清吉　これは天からおれに授かつたのだ。（萬右衛門を突き放す）なんと云つてもおれの物にするから、さう思へ。

（清吉は堤をあがつて行かうとするを、萬右衛門はひき戻す。）

萬右衛　野郎、どうしても肯かねえのか。

清吉　知れたことよ。

萬右衛　（睨めつめて）返せ。返さねえか。

清吉　返さねえと云つたらどうするのだ。さつきにも懲りねえで、また腕づくか。お神樂に馬鹿は附物だが、あんまり馬鹿を貢物にしねえがよからうぜ。（笑ひながら行きかゝる）

萬右衛　うぬ。

（萬右衛門は急いで、又もや清吉に武者ぶりつく。ふ

たりは又もや掴みあひになりて、淸吉は遂に萬右衛門を川のなかへ蹴込む。）

淸吉　幾度も汗をかゝしやあがつた。ざまあ見やがれ、罰あたりめ。

（淸吉は堤の上にあがりかけて、ふところより鬼の假面を出し、月のひかりに照してみる。）

淸吉　むゝ。骨を折つただけのことはある。これほどの鬼は今までに見たことがねえ。どうしてもこれは授かり物だ。（いつまでも假面をながめてゐる）

（月いよ〳〵明るく、うしろの黑幕落ちて、灯入りの人家や田畑など遠くみゆ。上のかたより深川の藝妓小初と尾花屋の女中とを乘せたる屋根船を、船頭が漕いで出づ。）

女中　いゝ鹽梅に月が出ましたね。

小初　今の水の音はなんだらうねえ。

船頭　なに、大きい魚が跳ねたのでせうよ。

（この聲を聞きて、淸吉は川の方をみる。下のかたより千吉は尻端折りにて足早に出づ。）

千吉　（淸吉をみて）や、手前はさつきの野郎だな。（淸吉の胸ぐらを取る）　さあ來い。

淸吉　また來やあがつたか。向島は藪つ蚊がうるせえな。

千吉　なんだ。

（千吉は淸吉を引き倒さうとするを、淸吉はふり放して突き飛ばせば、千吉は堤よりころ〳〵ところげ落ちて、足がとまらずに水の中へざぶんと落ち込む。）

女中　あれ、又誰かゞ……。

小初　なんだか氣味のわるい晩だねえ。

（小初は堤を見あげる。淸吉は假面をふところに入れる。うすく水の音、茶屋の騷ぎ唄きこゆ。淸吉は足早に上のかたへ立去る。）

――幕――

第二幕

一

淺草觀音の境内。

舞臺のまん中に銀杏の大樹あり。それにつゞいて上のかたに屋根附の茶店、軒には宮戸川と記せる行燈をかけ、ほかにも紋ちらしの提灯をかけ列べてあり。店の奥には茶釜その他の茶道具を置き、店さきには緣臺のやうなる幅廣の床几二脚ほどを置く。下のかたは境内の遠見。觀世物の鳴物きこゆ。

（九月はじめの午後。茶店の女お秋は下のかたにて銀杏の落葉を掃いてゐる。藝妓小初は小女をつれて下の

かたより出づ。）
小初　おや、おや、大變に散りましたね。
お秋　この頃になりますと、毎日この通りでかなひません。
小初　ほんたうに大抵ぢやありませんね。
（小初は床几にかける。店の内よりお花出づ。）
お花　いらつしやいまし。いつも御信心でございます。
小初　毎度お邪魔をします。
（小女も腰をかけ、小初は煙草をのむ。お秋は掃除をしまひて、あらためて會釋する。）
お秋　いらつしやいまし。この二三日は急に冷えてまゐりました。
小初　九月に這入つたらこれがほんたうでせうけれど、もう目の先へ冬が來てゐるやうな氣がして、なんだか急に氣ぜはしくなりますね。
お秋　それはわたくし共の云ふことで、姐さん方にそんなことはございますまい。
小初　いゝえ、どこでも同じことですよ。
お花　（茶を汲んで出づ）　どうぞ召上つてください。
（小初は會釋して茶碗をうけ取り、小女も一緒に飲む。）
小初　あの、觀音樣のお堂へ錦帶橋のめづらしい額があがつたといふことでしたが、もう卸してしまつたのですかえ。
お花　錦帶橋の額が大評判で、急に御參詣が殖えたのですが、どういふわけか四五日まへに、卸してしまふことになりましたので、皆さんが殘念がつておいでゝございます。
小女　それぢやあ、もう錦帶橋は見られないのですかえ。
（小初に）　姐さん。惜いことをしましたねえ。
小初　大變にめづらしい額だと云ふことだつたが、早く見ないで惜いことをしてしまつた。それほど評判のよかつたものを、なぜ卸してしまつたのだらうねえ。
お秋　なぜでございますかねえ。
（下のかたより神樂師萬右衛門、すこしく窶れたる顔にて出で來り、店のまへを通りかゝる。）
お秋　お休みなさいまし。
お花　寄つていらつしやいまし。
小初　（起ちあがる）　あら、兄さん。
萬右衛門　おゝ、お初か。久振りだな。
お秋　どうぞおかけ下さい。
萬右衛門　（床几にかける）　して、けふは御參詣か。
小初　商賣にかまけて何うも御無沙汰ばかりしてゐます。觀音樣へは毎月かゝさずにお詣りに來てゐながら、いつも氣がせくので其儘に歸つてしまつて、ほんたうに申譯

のない御無沙汰になりました。

萬右衛　いや、商賣の忙しいのは何より結構だ。（お秋の持つて來た茶碗をうけ取る）いつもの年ならば、おれも此頃は稼業で忙しいのだが、とんだ災難で一月あまりも寢込んでしまつて、此頃やう〳〵斯うして出あるかれるやうになつたばかりだ。

小初　さういへば何うも顏の色がわるいと思つてゐましたが、それぢやあ煩らつてゐなすつたのかえ。ちつとも知らないで御見舞にも出ませんでしたが、一體その病氣はなんでしたえ。

萬右衛　その病氣は……。實は七月のはじめに、三めぐりの堤から川へ落ちたのだ。

小初　まあ、あぶない。お酒にでも醉つたのかえ。

萬右衛　酒の上ぢやあねえ。すこし譯があつて、惡い奴と喧嘩をして、おれが意氣地もなく川のなかへ蹴込まれたのよ。水心があるから下の方へ浮きあがつて、無事に家へは歸つて來たが、落ちるはずみに杭で脾腹を打つたのが四五日も立つてからひどく痛み出して、當分は自由に寢起きもできねえ始末さ。千吉の奴も一緒に落ちたが、あいつは若いだけに何事もなしに濟んでよかつた。

小初　それで一月の餘も寢付いちやあ嘸ぞ困つたでせうねえ。なんにも知らないで、まつたく濟みませんでした。堪忍してくださいよ。それにしても、ふだんはおとなしいお前さんがどうして喧嘩なんぞしたのかねえ。その惡い奴といふ相手は誰ですえ。

萬右衛　その相手がわからねえ。まつたく飛んだ災難よ。これもつまりはおれが蒔いた種だから仕方がねえ。（ため息をつく）さうはあきらめてゐるものゝ、まだ何うも諦められねえことがあるので、病氣の足をひき摺つて、からして觀音樣へ御參詣に出て來たのだ。（云ひかけて氣がつく）いや、いゝところでお前に逢つた。いつぞや何かの話のときに、おまへの知つてゐる客のなかで、大變に鬼の面をあつめてゐる人があるとか云つたな。

小初　えゝ。（うなづく）その人がどうかしましたかえ。

萬右衛　いや、その人が何うといふわけぢやあねえが……その人は何といふ人だえ。

小初　（すこし躊躇して）兄さん。おまへ何でそんなことを詮議するの。

萬右衛　すこし聽きたいから教へてくれ。

小初　それはね。（又躊躇して）あの、淸さんといふ人ですよ。

萬右衛　淸さん……。淸七か、淸吉か、淸藏か。

小初　淸吉といふんですよ。

萬右衛　むゝ。淸吉。その人は何商賣で、どこにゐるのだ。

小初　なぜそんなに詮議立てをするの。をかしいわねえ。

（小初は厭な顔をする。萬右衛門もしばらく默つて小初の顏色をみてゐる。上のかたより手先金平、町人のすがたにて出で來り、店のまへを通りながら小初にちよつと眼をつけて、下のかたへゆき過ぎる。）

お花　（出づ）お出花をお換へ申しませうか。

萬右衛　わたしにもう一杯たのみます。

お花　はい、はい。（小初に）そちらは如何でございます。

小初　わたしはもう澤山。

小女　こゝへもう一杯、あついのを頼みます。

お花　はい、はい。（店に入る）

萬右衛　そこでお初、執拗いやうだがその淸吉といふ人は、おまへとよつぽどの馴染かえ。

小初　あら、又それを云ひ出したの。

萬右衛　どうしても訊きたいから訊くのだ。兄妹のよしみに敎へてくれ。

小初　そんなこと知りませんよ。

萬右衛　知らないことがあるものか。（うなづく）むゝ。それぢやあお前はその男とよつぽどの深い馴染だな。

小初　こんな商賣をしてゐれば、色々の人にも馴染がありますのさ。

萬右衛　それだから訊くのだ。その淸吉といふのは鬼の面を澤山にあつめてゐるのか。

小初　（冷かに）そんな話ですよ。

萬右衛　年のころは幾つぐらゐだ。

小初　三十二三かも知れませんね。

萬右衛　どんな風體の男だ。頭はいが栗坊主にしてゐるだらうが……。

（小初は默つてゐる。下のかたより金平は引返して出で、銀杏のかげにて聽いてゐる。）

萬右衛　これ、なぜ默つてゐるのだ。なんとか返事をしてくれねえか。

小初　だつて根掘り葉ほり、あんまりうるさいぢやありませんか。もう好加減にしてくださいよ。（顏を背ける）

萬右衛　（むつとしたるが、また取鎭めて）そつちがさういふ料簡なら、なにを云つても無駄だらう。所詮いくら苦に病んでも及ばねえ。いつか一度は兄妹ふたりも祟られるのだ。

小初　（聞き咎める）兄さん。なにが祟られるんですえ。

萬右衛　おまへはまだなんにも知らねえが、おふくろが死ぬ、女房が死ぬ、子ども二人がつゞいて死ぬ、足かけ七年のあひだに四つも弔ひを出したのには譯がある。今度はどうしてもお前とおれの番だ。それを逃れたいと思つて苦勞してゐるのに、おまへが意地をわるく敎へねえと

いふのだから仕方がねえよ。
小初　なんだか變なことをいふぢやありませんか。どうして今度はわたし達の番なんですよ。
（萬右衞門は默つてうつむいてゐる。小初はなんだか不安になりて、兄のそばへ摺りよる。）
小初　ねえ、兄さん。もつとはつきり云つて下さいよ。今度はわたし達の番だなんて、冗談でも厭ぢやありませんか。何かほんたうにそんな心當りがあるんですかえ。
萬右衞門　（嘆息して）あるから云ふのだ。
小初　（一種の恐怖に襲はれたやうに）ほんたうですかねえ。兄さんのことだから、まさか嘘ぢやあるまいけれど……。（少し聲をふるはせる）一體それはどういふわけなんですよ。
萬右衞門　（左右を見かへる）こんなところでうつかりは云はれねえことだ。
小初　（いよ〳〵不安になる）兄さん。嘘ぢやあないでせうね。
萬右衞門　なんで嘘をつくものか。それだからおまへに詮議してゐるのだ。その鬼の面をあつめる清吉といふ男は、どこにゐるのだよ。
小初　（躊躇して）でも、よく知らないんですもの。
萬右衞門　乾と知らないか。（詰めよる）

（小初は矢はり返事に躊躇してゐる。上のかたより町人の夫婦が娘をつれて出づ。）
お秋　お休みなさいまし。
町人男　やれ、やれ、草臥れた。
町人妻　樂みにして來た錦帶橋の額がないので、猶々がつかりました。
お秋　どうもお氣の毒でございます。
（夫婦と娘は床几に腰をかける。これにて小初は兄のそばを離れる。萬右衞門はぢつと考へてゐる。金平は銀杏のかげより顏を出してうかゞふ。觀世物の鳴物きこゆ。）

――幕――

二

下谷二長町のあたり、司馬江漢の家。
平ぶたいの廣き座敷。こゝは幾分か西洋風を加味したる畫室にて、正面には泰波樓と題せる額をかけてあり。室内は隨分亂雜にて、上のかたには床の間、つゞいて違ひ棚あれど、その床の間にも違ひ棚にも繪の具や西洋の書籍などを一杯に積み込み、西洋風の置物もあり。ところどころに西洋風の畫架、椅子、テーブルなどもあり。油繪具や畫筆もあり。疊の上には絨氈のやうなも

のを敷きて、上のかたにはところ〴〵破れたる襖あり。室内には春波樓の額のほかに古き油繪の額を幾つも懸け、畫架には西洋風の惡魔をかきたる新しき畫布あり。畫布はすこぶる大きく、惡魔の上半身は已に描き終りたれど、なほ未成品と知るべし。下のかたは次の間にて、正面に襖あり。畫室との境にも破れたる襖あり。下のかたは壁にて、こゝにも大いなる書棚などあり。

(おなじ日の夜。舞臺は眞暗にて何物もみえず。時の鐘きこゆ。やがて次の間の正面の襖が少しく開かれて、小さき蠟燭の光あらはる。鬼坊主清吉は頰かむり、股引、尻端折り、身輕にいでたちて、蠟燭の火を袖にて掩ひながら忍び出づ。)

(清吉は境の襖を窃とあけて、ぬき足して畫室に入り込み、蠟燭の火にてあたりを照し視る。舞臺やゝ薄明るくなる。清吉はそこらを見まはし、畫架にかけたる惡魔の繪のまへにゆくと、その火に照されて惡魔の姿は浮び出したるやうにあらはる。清吉は思はず感嘆の聲を洩らして、しばらくは棒立になりて一心にその繪をながめてゐたるが、やがて又、蠟燭を持つたるまゝ其處にあぐらをかきて、いつまでも飽かずに見あげてゐる。)

(江漢の門生江水は次の間より入り來り、これもぬき足をして畫室をうかゞひ、そつと引返して去る。清吉はそれに氣がつかず、やはりその繪のまへに吸ひ付けられたやうに坐り込んでゐる。夜廻りの拍子木の音きこゆ。江水は下男源助をつれて再び出づ。いづれも賊を捕ふる身がまへにて、江水は棒と麻繩を持ち、源助は老人にて手拭の鉢卷、片肌ぬぎにて薪ざつぽうを持つ。)

源助　どろばうめは何處にゐますね。

江水　叱つ。靜に、靜かに……。

(ふたりは畫室をうかゞひ、江水は先づぬき足して清吉のうしろに立つ。)

江水　(しづかに)これ、貴樣は何者だ。

(清吉はやはり繪をながめてゐる。)

江水　(足にて床をふむ)これ、貴樣はこゝへ何しに來たのだ。

(これにて清吉は初めて氣がつき、すぐ蠟燭を吹き消して逃げようとするところへ、源助が駈け込む。)

江水　逃がすな、逃がすな。

源助　這奴、逃がして堪るものか。

(二人は暗がりにて清吉を追ひまはし、そこらの畫架や椅子テーブルを倒し、繪の具や繪筆などを蹴ちらして騷ぐ。下のかたより主人の司馬江漢、五十六七歲なれど元氣よき人物、坊主頭にて耳の邊にやゝ長き毛あ

り。西洋風の燭臺に蠟燭をともして出づ。）

江漢　どうした、どうした。ひどく騷々しいな。

江水　先生。賊が這入りました。

源助　加勢してくださいまし。

（清吉は二人を突きのけて出ようとして江漢のまへにゆく。江漢は蠟燭を突きつける。清吉は少しく躊躇して江漢の顏をみる。）

江漢　おまへはなんだ。をかしな人物だな。

清吉　へえ。

江漢　夜分に人の家へなんで斷りなしに這入つて來た。（睨むやうに視て）おまへは何者だ。はつきり云へ。

清吉　へえ。

江漢　それとも唯のどろばうか。

清吉　恐れ入りましてございます。

江漢　（顏色を直して）では、やつぱり泥坊か。はゝ、とんでもない男だ。途惑ひをしておれの家へ這入り込むとは……。はゝゝゝゝ。

（江水は倒れたる椅子を起してすゝむれば、江漢は腰をかける。江水は更に源助に手傳はせて、畫布や畫架を直す。）

清吉　（不安らしく覗く）もし、繪は大丈夫でしたかえ。

江水　大丈夫だ、大丈夫だ。

清吉　（安心して）さうでございましたか。

江漢　おい、泥坊。おまへはまだ素人だな。

清吉　（少し意外らしく）なぜでございます。

江漢　なぜと云つて……。まあ、坐れよ。おまへも泥坊を商賣にする以上は、こゝの家に金があるか無いか、外から覗いても大抵は判りさうなものではないか。それとも何か見込みがあつたかな。

清吉　この節、江戸の繪かきの先生方はみんな内福だと聞いてゐましたが……。（あたりを見まはす）どうも些と勝手が違つたやうでございます。

江漢　はゝゝゝゝ。それは氣の毒だつた、なるほどおまへの云ふ通り、このごろの江戸の繪かきはみんな内福で、現にこの近所の谷文晁先生などは、今が全盛で大層な勢ひだ。併しその繪かきにも色々あつて、おれはいけない、おれは駄目だよ。おまへには判るまいが、おれは日本中で一番賣れない西洋の油繪をかいてゐるのだからな。そこにゐる若い書生と、そのおぢいやと、一家内三人がかつ〳〵に食つてゐる男世帶で、金は勿論、着物だつて碌なものはありやあしない。繪かきと名がつけば、みんな金持だらうと思つたのは、おまへの間違ひだ。氣の毒だが、このまゝ歸つてくれ。

清吉　（かんがへて）先生はそんなに貧乏なのでございま

すかえ。
江漢　この座敷の體たらくを見ても判るだらう。自慢ぢやあないが、おれは江戸の繪かきのうちでも先づ指折りの貧乏だらうよ。
清吉　(畫布を指す) あの繪は先生がおかきなすつたのぢやあないのですかえ。
江漢　(見かへる) むゝ、あれか。あれはおれが書いたのだ。
清吉　(又もや感嘆の吐息を洩す) 實に見事なものでございますねえ。わたくしは生れてから初めてこんな繪をみました。まるでほんたうに生きてゐて、今にも拔け出して來さうでございます。あれはやつぱり鬼でございませうね。
江漢　鬼といへば鬼だが、あれは惡魔だ。
清吉　惡魔ですか。ふむう。(繪をながめてゐる) なるほど、惡魔ですか。やつぱり鬼の親類だな。むゝ、よく出來てゐる。
源助　おまへは頻に感心してゐるやうだが、あの繪がほんたうに判るのか。
清吉　判つても判らねえでも、唯もう驚いてしまつたのだ。(唸るやうに) こゝの先生は實に偉いね。
江漢　(笑ふ) そんなに偉いかな。
清吉　偉いにも何にも……。まつたく恐れ入りました。ところで、先生。まことに失禮な御無心でございますが、いかゞでございませう。あの繪をわたくしにお讓り下さるわけには參りますまいか。
江漢　あの繪が欲しいのか。
江水　馬鹿をいへ。先生が折角丹精されたものを、貴様のやうな奴にむざ／＼遣れると思ふか。轉んでも唯は起きないとは貴樣のことだ。づう／＼しいにも程があるぞ。
清吉　だから、唯貰はうとは云ひません。お禮はお望み通りに差上げますよ。先生は貧乏だといふぢやありませんか。
江水　いくら貧乏でも、どろばうから禮などが貰へるものか。積つて見ても知れたことだ。
源助　第一、先生にかいて頂きたければ、なぜお玄關から案内して來ないのだ。よる夜なかにこつそりと這入つて來て、今更そんな慾のいゝことを云つたところで、なんで取合つて下さるものか。さあ、泥坊め。ぐづ／＼云つてゐないで自身番へ來い。
江漢　二口目には泥坊々々と、さう口穢く云ふなよ。まあ、まあ、騷ぐな。(清吉に) おまへは又どうしてあの繪がそんなに欲しいのだ。妙な男だな。
清吉　どうもあの繪が堪らなく欲しいのでございます。

江漢　むゝ。（清吉の顔をつく〴〵視る）いよ〳〵妙だな。

清吉　先生。失禮でございますが、先づこれを御覽ください。

（清吉は肌をぬげば、背中に朱入りの鬼の假面が一ぱいに彫つてある。江漢は江水を見かへりて蠟燭をみせろといふ。江水は燭臺を持つて出れば、江漢は椅子を起つてその刺靑をみる。）

江漢　むゝ。なか〳〵よく彫つてある。

清吉　どういふ前の世からの因縁か知りませんが、わたくしはこの鬼といふ奴が大好きなのでございます。まあ、お聽きください。

（清吉は肌を入れる。江漢はもとの椅子にかける。）

清吉　わたくしは京橋八丁堀の錺屋のせがれで、清吉といふ者でございますが、子供のときに兎かく夜啼きをする癖があるので、おふくろが鬼の念佛の繪を買つて來て、夜啼きを止める呪ひだと云つて、枕屛風や壁なんぞへ幾枚も貼りつけてくれました。それはどこの家でもすることですが、それが不思議にわたくしの氣に入りまして、鬼の念佛の繪さへ見てゐれば、いつも機嫌よく遊んでゐるので、親たちも鬼の繪を買つてくれる。近所の人も買つてくれる。それがいよ〳〵嵩じて來て、鬼の繪ばかりでなく、鬼の面がおもちや箱一杯になるといふやうなわけで、誰が云ひ出したともなく、鬼小僧とか鬼坊主とかいふ渾名を附けられてしまひました。だん〳〵大きくなるに連れて、それが一つの病のやうになりまして、鬼のついてゐるものならば、繪でも面でも置物でも、なんでも欲くなりまして、からだにまでも鬼の面の彫物をするやうになりました。

江漢　そんなことがあるかも知れないな。さうしてゐるうちに、おまへの魂にまで自然に鬼が蝕ひ込んで來たのだな。

清吉　それでたうとうこんな人間になつてしまつたのかも知れません。初めは强請や押借がだん〳〵に峠をのぼりまして、斬取り强盗から屋尻切り、大名屋敷ばかりでも十五六ヶ所も荒らしました。

源助　ぢやあ、このごろ噂の高い鬼坊主清吉といふのはおまへのことか。

清吉　あんまり詮議がきびしいので、場末の寺に半年ばかり隱れてゐまして、こんな頭になりましたので、いよいよほんたうの鬼坊主にされてしまひました。唯今も申す通り、一つの病でもございませうか、鬼のついてゐるものが何でも大好きで、煙草入れの根付にまで鬼の面をつけてゐるくらゐでございますから、名作の鬼の面や、名畫の鬼を見たが最後、欲くつて欲くつて、どうにも我慢

が出來ないのでございます。先生。（眼をかゞやかして一膝すり寄せる）どうぞあの繪をわたしに讓つてください。お願ひでございます。

（江漢は默つて彼の顏をながめてゐる。）

清吉（熱心に）先生。どうしてもいけませんか。

江漢　よし。おまへに遣らう。

清吉　下さいますか。

江水（おどろいて）先生。

江漢　いや、構はない。おれはあの繪をこの男にやるよ。どうで今の世のなかに通用しない繪だ。それほど欲がる者があれば、おれは喜んで遣るつもりだ。（清吉に）だが、おまへはこの繪を知つてゐるか。

清吉　惡魔だといふぢやあございませんか。鬼でも惡魔でも、わたくしはその繪にすつかり惚れ込んでしまつたのでございます。

江漢　いや、その圖柄のことを云ふのではない。これは西洋の繪で、日本の繪ではない。油繪の具で書いた油繪といふものだぞ。

清吉　へえ、西洋の繪でございますか。（のび上る）道理で、あたりまへの繪とは違つてゐると思ひました。

江漢　おれは長崎で習つて來たのだ。この日本でかういふ西洋の繪をかくのは、おそらく俺が始めだらう。それだから幾ら書いても滅多に買手がない。そこでこの通り貧乏してゐるのだ。貧乏は別におどろかないが、おれの書いた油繪といふものを世間の奴等に見せてやりたいと思つて、このあひだから丹精して、二つの額をかいた。一つは周防の錦帶橋の圖で、ひとつは鎌倉の七里ヶ濱だ。錦帶橋の方は淺草の觀音堂に納め、七里ヶ濱の方は芝の愛宕に納めると、つひぞ見馴れない油繪だから、誰も彼もみんな不思議がつて、江戸中の評判になつたらしい。ところが、十日ほど前に愛宕の額がおろされた。つゞいて四五日まへに觀音堂の額も外されてしまつた。

清吉　どうも判らねえな。それは又なぜでございます。

江漢　誰が云ひ出したか知らないが、清淨なる神社佛閣に南蠻風の繪などをかけて置くのは怪しからぬといふので、片つ端からみんな取外されてしまつたのだ。（やゝ興奮して起ちあがる）いや、ばか〳〵しくてお話にはならない。（そこらを歩きながら）と云つて、おれはかゝずにもゐられない。誰がなんと云つても、誰がどんな迫害を加へても、どうしてもかゝずにはゐられないのだ。

清吉（同感するやうに）御もつともで御座います。わたくしだつて然うなれば、意地になつて猶かきます。

江漢　いや、意地になるといふわけでもないが、おれはどうしてもかゝずにはゐられないの

だ。（だん／＼興奮してくる）そこで、おれは此頃こんな繪をかきはじめた。今もいふ通り、これは西洋の鬼だ、惡魔だ。

（江漢に畫布を指せば、清吉は又のびあがつてみる。）

清吉　わかりました、わかりました。先生のお心持はよく判りました。

江漢　どうだ。今のおれがかくには丁度相當の畫題ではないか。（神經的に笑ふ）はゝゝゝゝゝ。おれがこれを書いて、おまへがこれを欲がる。どつちもどつちで、無理もないところだな。

清吉　（これもやゝ興奮して）まつたくさうでございますな。

江漢　それだから此繪はおまへにやる。金なんぞは一文もいらない。おれは快くおまへに遣るよ。

清吉　（喜んで）ありがたうございます。ありがたうございます。

江漢　だが、これはまだすつかり仕上つてゐない。おまへの家はどこだな。

清吉　家といふほどのものもございませんが、場末の寺々をころげ歩いて、今では本所一つ目の萬徳寺といふ古寺のなかに住んでをります。

江漢　その歳で寺にゐるのか。

清吉　いえ、その寺内のあばら家に住んでゐるのでございます。

江漢　そんならこの繪が出來あがり次第に、おれの方からとゞけて遣る。

清吉　なにぶんお願ひ申します。わたくし一人の男世帶で、とてもお話にならないほどの狹い穢い家ですが、もしお暇がございましたら、一度たづねて下さいませんか。その狹い家のなかに色々の鬼が棲んでをります。

江漢　鬼が棲んでゐる……。

清吉　さつきも申上げた通り、わたくしは鬼が大好きで、鬼の面や鬼の繪や、鬼の置物や、見あたり次第に手に入れまして、狹い家中いつぱいに列べてありますので、まるで鬼の棲家でございます。ひとりで寂しいときには、大勢の鬼どもを相手にしてゐますと、なか／＼面白うございます。このあひだの晩はその鬼と博奕をいたしましたよ。負けた奴は一つづつ頭をなぐるといふ約束で……。

（江漢と源助は顔を見あはせる。）

清吉　（やゝ狂的に）ところが、先生。どの鬼めも皆んなわたしに負けましたので、片つ端からぽか／＼なぐり付けてやりましたよ。はゝゝゝゝゝ。

江漢　（同じく笑ふ）それは面白かつたらうな。さういふことなら、おれも一度遊びに行くかな。

清吉　是非おいで下さいまし。まるで大江山でございますから。

（江水と源助は再び顔をみあせる。）

江水　先生。もう大分夜が更けたやうでございますが……。

源助　（清吉に）おまへもさういふ身の上で、いつまでもこゝにゐるのは良くあるまい。もう好加減に歸つたらどうだね。

清吉　わたくしは夜の商賣ですから、夜のふけるのは何とも思ひませんが、まつたく皆さんが御迷惑でせう。ぢやあ、先生。もうお暇(いとま)をいたします。

江漢　もう歸るか。この繪は出來次第に屹と屆けてやるよ。

清吉　お待ち申してをります。どうも御邪魔をいたしました。皆さん、御めんください。

（清吉は丁寧に挨拶して起つ。江水と源助もつゞいて起つ。清吉はゆきかけて彼の繪に心を惹かされる風にて、再び立ち戻りて畫布をのぞく。江漢は椅子に腰をかけて笑つてゐる。夜まはりの拍子木の音きこゆ。）

――幕――

第三幕

一

本所の古寺のなかにて、清吉の隱れ家。朽ちかゝりたるぬれ緣のつきたる二重家體にて、正面は壁、つゞいて奥へ出入りの襖あり。それにつゞいて下のかたには三疊ぐらゐの一間、その正面は入口の破れ障子にて、障子の外は沓ぬぎ、格子は無くて雨戸を半分しめてあり。家のそとは荒れたる墓場にて、古い卒塔婆などを結び込みたる玉椿の生垣あり。垣のなかには石塔、卒塔婆、立木などみゆ。

（九月の雨ふるゆふぐれ。古びた長火鉢のまへに鬼坊主清吉はひとりで酒をのんでゐる。部屋の正面の兩隅に、一方は高く、一方は低き屛風を立てまはして、その屛風には色々の鬼の繪が貼りつけてあり。壁にも色々の鬼の假面がかけてあり。鬼の形をしたる置物もあり。そこらにある諸道具から座蒲團まで、すべて鬼に因みあるものばかりと知るべし。清吉の飮んでゐる膳も朱塗りのやうな大きい卓にて、そのうへには獸の股や、足附きの鳥などをならべ、酒顚童子が飮みさうな朱塗りの大杯をかたむけてゐる。薄く雨の音、木魚の音さびしくきこゆ。）

清吉　（ひとり言）あゝ、降るな。（壁にかけたる假面や屛風などを見まはす）だが、おれにはかういふ友達が大勢ゐる。（愉快さうに）はゝ、些とも寂しくねえや。

（淸吉は笑ひながら飮んでゐる。下のかたより子分の鬼熊と鬼鐵が番傘を相合にして出づ。鬼熊は小さい風呂敷づつみを持つ。）

熊　忌（いや）にじめ〳〵降るな。

鐵　始終來馴れてゐるところでも、こんな晚に寺のなかは好い心持ぢやあねえな。

熊　安心しろ。手前なんぞは幽靈の方で怖いと云つてゐらあ。はゝゝゝゝゝ。

（ふたりは傘をつぼめて沓ぬぎに這入る。）

熊　あい、今晚は……　內ですかえ。

淸吉　誰だ、鬼熊か。まあ、這入れ。

（ふたりは奥へ通る。）

鐵　よく降りますね。

淸吉　やあ、鬼鐵も揃つて來たのか。丁度いゝところだ、すぐに一杯やれ。（大さかづきを出す）

熊　折角だが、おれ達はどうもこれぢやあ恐れる。茶碗がそこらにあるだらう。

鐵　おつと、承知だ。

（鬼鐵はそこらにある茶盆の上より茶碗を二つ持つてくる。）

淸吉　（笑ふ）　相變らず意氣地がねえな。

（德利を渡してやれば、二人はたがひに酌をして飮む。）

熊　こつちも相變らず意氣地がねえが、親分の膳の上にも相變らず怖しいものが列んでゐやすね。

鐵　けだものゝ骨やら肉やら、まるで安達が原だね。

熊　なんのことはねえ、もゝんじい屋の惣仕舞といふ形だ。

淸吉　これだから本所の土地は離れられねえ。獸物が無氣味なら、この鳥の足でもしやぶつてみろ。

鐵　あい。遠慮なく頂きやす。さあ、一つつぎやせう。（淸吉に酌をする）

熊　親分がかういふ肴をまへに列べて、その大さかづきで飮んでゐるところは、どうしても酒顚童子を世話にやつしたといふ圖柄だね。

淸吉　おれもその積りでゐるのよ。花のお江戸に大江山のあるのも面白いぢやあねえか。

鐵　どう考へても親分は變つてゐるね。道樂に事をかいて、鬼が大好きだといふのはめづらしい。ところで、今夜は熊の野郎が大自慢でお土産を持つて來たさうですよ。

淸吉　なにを持つて來た。

熊　また叱られるかも知れねえが、こんなものですよ。まあ、見ておくんなせえ。

（風呂敷をあけて木彫の鬼の假面を出せば、淸吉は取つてみる。）

清吉　こんな下らねえものを何處から拾つて來た。

熊　え。下谷の古道具屋の店から擧げて來たのだが、いけませんかえ。

清吉　こんなものがどうなるものか。（疊へたゝき付ける）子供のおもちや箱を引つくり返せば、いくらでも轉がり出さあ。何がおみやげだ。馬鹿野郎め。ちつと眼をあいて仕事をしろ。

熊　（あたまを押へる）こいつは大しくじりだ。

鐵　それでも熊の野郎は惡氣ぢやあねえ。おまへさんを喜ばせる積りでわざ〳〵持つて來たのだから、まあ料簡してお遣んなせえ。

清吉　やい。手前たちも始終こゝの家へ出這入りをしてゐながら、そこらにある代物が眼にみえねえのか。（屛風の繪や、壁の假面を指さす）屛風に貼つてある繪でも、壁にかけてある面でも、どれもこれも粒揃りだ。こんな玩具のやうな鬼は一匹もゐやあしねえ。みんな凄い面をして睨んでゐるのだ。（やゝ狂的に）見ろ、よく見ろ。どの鬼にも生きた魂が這入つてゐるのだ。

熊
鐵　（顏をみあはせて）へえ。

清吉　へえぢやあねえ。よく身にしみて聽いておけ。おれは夜啼きをする餓鬼の時から、鬼といふものと親類になつて、今ぢやあ江戸のお膝許で大江山の住居をしてゐるのだ。手前達だつて一旦おれの子分になつた以上は、熊藏だの鐵五郎だのと人間らしい名は云はせねえ。鬼熊とか鬼鐵とか云つて、どいつも這奴も鬼の仲間にしてしまふのだ。判つたか。手前達はみんな鬼だぞ。

熊
鐵　（仕方が無しに）あい、あい。

清吉　たまに土産を持つてくるなら、ちつとは土產らしい物を持つて來い。鬼坊主清吉がなるほどと感心するやうなものを持つて來てみせろ。おれなぞは商賣の合間合間にも、絶えず掘出しものを心がけてゐるのだ。一口に鬼と云つたつて、五月人形の鍾馗に嚇かされてゐるやうな鬼ぢやあ始まらねえ。ほんたうの鬼らしい鬼をさがすのだ。（壁にかけたる假面の一つを指す）どうだ、あの面をみたか。

鐵　どれですえ。

清吉　（烟管で指す）あれよ。

熊　いくつもあるので、松王丸も首實檢がむづかしい。どれだね。

清吉　（じれる）わからねえ明盲共だな。（起つて第一幕の假面を持つてくる）どうだ、これは……。

熊　（うけ取つてながめる）むゝ。こいつは凄いな。

鐵 （のぞき込む） なか／＼古さうなものだね。どこで見つけて來なすつた。

清吉 まだ話さなかつたが、それはこの七月のはじめに、向島の堤下から見つけて來たのだ。それほどの上作は滅多にあるわけのものぢやあねえが、掘出しものをするにやあ眼利きが肝腎だ。よく見ておけ。

熊 鐵 むゝ。なるほどなあ （判らぬながらも親分の手前、ひどく感心したやうな顔をして眺めてゐる）

清吉 まだそれどころぢやあねえ。もつと素晴らしい、手前達がびつくりして眼をまはすやうなのが來るのだが……。先生は何をしてゐるのかなあ。

熊 もつと素晴らしいものが來るのですかえ。

清吉 それこそ大變なものだ。おれもすつかり氣に入つてしまつた。あの先生はまつたく偉いな。

鐵 どこの先生ですえ。

清吉 手前達に話したつて判らねえ。その代物がこゝへ來て、びつくりするまで待つてゐろ。（得意らしく） 今度來るのは惡魔だ、惡魔だ。

熊 鐵 惡魔かえ。

清吉 催促に行くのも悪いと思つて我慢してゐるのだが、あの先生も好加減に人をじらすなあ。（酒をのむ） 思ひ切つて、あしたは催促に行つてみようかしら。（又もや少しく狂的に） やい、やい、鬼熊。その面をちよいと被つてみろ。

熊 （やゝ迷惑さうに） わつしが被るのかえ。

清吉 まあ、かぶつてみろと云ふのに……。

熊 あい、あい。（よんどころ無しに假面をかぶる）

鐵 はゝ、好い、好い。似合つた、似合つた。

清吉 （さかづきを取りながら見る） むゝ。かうしてみると又一段の凄味が出るな。まるでほんたうの鬼がかしこまつてゐるやうだ。

熊 （假面をぬぐ） 冗談ぢやあねえ。なんぼおれでも鬼つ面を褒められたのぢや嬉しくねえ。やい、鐵。手前もかぶつてみろ。

鐵 おれは御免だ。助けてくれ。

熊 ずるい奴だ。かぶれ、かぶれ。（假面を突きつける）

清吉 （又もや狂的に） やい、鬼鐵。手前どうしても被らねえのか。（火箸を持つて起ちかゝる） どうしても鬼にならねえのか。

鐵 （あわてゝ） なに、かぶるよ。被りますよ。はい、この通りだ。（假面をかぶる）

熊 はゝ、おれよりは手前の方が撰び無しだ。ねえ、親分。

清吉　むゝ。好い、好い。はゝゝゝ。（狂的に笑ふ）さすがにおれの子分だけあらあ。はゝゝゝゝ。

鐵　（假面をぬぐ）御機嫌が直りましたかえ。

清吉　さあ、飲め。飲め。

（清吉も飲む。子分二人も飲む。時の鐘きこゆ。）

熊　あゝ、暗くなつた。あかりを點けようぢやあねえか。

鐵　むゝ。（奥に入りて行燈を持ち來る）

熊　おや、おや、火鉢の火も消えてしまつたやうだ。いくら酒を飲んでゐても、家のなかに火の氣がねえと、やつぱり薄ら寂しいな。

（鬼熊は炭取を持ち出して、長火鉢に炭をつぐ。清吉は卓に倚りかゝりて眠る。）

鐵　おや、親分はいつの間にか寐てしまつたぜ。

熊　さつきから大きい杯で酒顚童子をきめたのだからな。（少し聲を低めて）おい、鐵。

鐵　なんだ。（そばへ來る）

熊　（頤で清吉を指す）大將はこの頃よつぽど變ぢやあねえか。

鐵　（うなづく）おめえにも然うみえるか。おれにも何うも可怪く思はれてならねえ。今夜だつて酒に醉つてゐるばかりぢやあねえやうだ。

熊　むゝ。この春頃からだん／＼に調子が狂つて來て、この頃は一倍ひどくなつたやうだ。困つたものだぜ。

鐵　まつたく困つたものだ。親分もあんまり鬼に凝り固まるからいけねえ。惡い病だ。（清吉のそばへゆく）もし、親分。うたゝ寐をすると、かぜを引きやすぜ。もし、親分。

熊　よく寐てゐるやうだ。起さねえ方がいゝぜ。（奥に入りて夜具納のどてらを持つて來て清吉に着せる）これでよからう。もうそろ／＼引揚げようかな。

鐵　親分がこれぢやあ今夜も又あぶれか。あゝ、つまらねえ。歸らう、歸らう。

（ふたりはそこらを片附けて、相合傘にて表へ出る。雨の音。）

熊　おい、鐵、今おめえは詰らねえと云つたが、考へてみると全く詰らねえ。親分は仕舞に氣違ひにでもなるのぢやあるめえか。

鐵　なんとも云へねえ。さうなつたら俺たちは慘めだぜ。

熊　だからよ。（鬼鐵の耳に口をよせて、いつそ訴人しようかと囁く）

鐵　（かんがへる）それもさうだな。

熊　そこらでもう一遍飲み直しながら、よく相談をしようぢやあねえか。

（稻妻ひらめく。）

鐵　おや、光つたせ。
熊　妙な陽氣だな。なにしろ行かう。
鐵　むゝ。
（ふたりはあとを見かへりながら、下のかたへ立去る。雨の音、遠く雷の音。家內の行燈はうす暗くなる。）
清吉　（眼をあく）なんだ。このあかりは忌に薄つくれえな。鬼熊や鬼鐵はどこへ行きやあがつた。おれを寐こかしにして、いつの間にか歸つたかな。
（行燈はいよ／＼暗くなりて、屛風や壁から種々な鬼の影あらはる。）
清吉　あゝ、手前達はまだそこにゐたのか。いや、さうぢやあねえ。（狂的に笑ふ）むゝ、貴樣達か。はゝゝゝゝゝ。おい、今夜は何をしておれの御機嫌を取るつもりだ。賽を振ればおれに負けるし、札をめくつても敵(かな)はねえし、おれに勝てるのは腕相撲ぐれえのものだ。はゝ、まつたく意氣地のねえ奴等だな。なにしろ一杯のまして遣らうか。（杯を出す）え、なに、飲まねえ。酒顛童子の子分の癖に酒をのまねえと云ふことがあるものか。やい、飲め。飲まねえか。鬼め、惡魔め、畜生め。はゝゝゝゝ。まあ、そんなにむづかしい面(つら)をするなよ。おれも今に大名のやうな大きい屋敷を押つ建てゝ、そこへ化物の間といふのをこしらへて、貴樣達をみんな祭り込んで遣るから、まあそれまでは狹いところへ割床で我慢してくれ。はゝ假宅(かりたく)だ、假宅だ。
（清吉はひとりで冷酒をのみ、やがて彼の大杯を額にかぶつたまゝで、轉がつて寐てしまふ。鬼どもの影はだん／＼に消えて、行燈は明るくなる。下のかたより藝妓小初は蛇の目の傘をさして出づ。あとより神樂師萬右衞門と弟子の千吉は番傘をさし、提灯を持ちて出づ。）
萬右衞　ひどく暗いところだな。
小初　（立ちどまりて）わたしが內の樣子をみて來ますから、ちよいとそつちで待つてゐてください。
（萬右衞門はうなづきて、千吉と共に下のかたにかくれる。稲妻ひらめく。）
小初　（空をみて）又光つた。忌だねえ。（門にくる）御めんなさい。今晩は……。おや、誰もゐないのかしら。家のなかにあかりがついてゐるやうだが……。もし、御めんなさいよ。（內に入る）あゝ、やつぱりお前さんは內にゐたの。あら、よく寐てゐるやうだねえ。（清吉の枕もとへ來る）もし、おまへさん。お起きなさいよ。
清吉　（とてらを着たまゝで起き直る）誰だ、誰だ。おれの枕もとへ來て、おや／＼云ふのは……。むゝ、小初か。今時分なにしに來た。今夜はお茶挽か。可哀さうだな。

小初　おまへに少し用があつて來たんですよ。
清吉　なんの用だか知らねえが、おれの方にも用がある。いゝところへ來てくれた。まあ、待つてくれ。（奥に入つて、白地の浴衣に袷をかされたるを持ち出してくる）おい、こいつを洗つてくれ。
小初　今時分これを洗ふのかえ。
清吉　そこらへ打つかけて夜ぼしにして置くから構はねえ。どうで獨り者だ、人並のことは出來ねえ。早く臺所へ持つて行つて洗つてくれ。
小初　（着物を手にとつてみる）あら、大變に血が附いてゐる。
清吉　それだから洗つてくれと云ふのだ。そんなしみが附いてゐちあ湯灌場買だつて引取りやあしねえ。なんとか綺麗にして置いてくれ。
（小初は默つて着物をながめてゐる）
清吉　なにをぼんやりしてゐるのだ。おれが唯の遊び人でねえことは、おめえも大抵察してゐる筈だ。
小初　そりやあ薄々は知つてゐるけれど……。
清吉　知つてゐるなら今更おどろくこともあるめえぢやあねえか。鬼の女房に鬼神の譬だ。びく／＼してゐねえで、早く遣つてくれ。
（小初は默つてゐる。）
清吉　（又もや狂的になる）おい、厭かよ。厭なら頼まねえ。女が酒顚童子の棲家に來れば、血のついた着物の洗濯をさせられるのは當り前だ。厭なら止しやあがれ。家鴨の生れ損ひめ。
小初　清さん、おまへは此頃どうしてそんなに邪險になつたんだらうねえ。わたしもうぶの素人ぢやあなし、おまへが唯一通りの遊び人でないことは、前から大抵察してもゐるし、ほかの人たちからも意見されてゐるけれど、どういふ因果か思ひ切れないで……。
清吉　なんだ、なんだ。今更そんな因果口說きをするがものはねえ。おめえの心意氣はおれにもちやんと判つてゐる。判り過ぎるくらゐ判り切つてゐるのだ。それだから滅多な人にはたのまれねえやうな、厭な仕事も頼むのぢやあねえか。それをなんで澁つてゐるのだ。
小初　だつて、お前。こんなに血まぶれになるやうなことまでして……。何ぼ何でもあんまり怖しいぢやあありませんか。いくら鬼の女房だつて、わたしはやつぱり女だからねえ。
清吉　それでおれに愛想が盡きたといふのか。さう思つたら、係り合にならねえうちに早く歸れ、歸りやあがれ。
小初　歸らうと歸るまいと、わたしの勝手さ。
清吉　乙う澄したことをいふな。こゝはおれの家だぞ。早

く出ていけ。
小初　清さん。
清吉　おらあ鬼だよ。
小初　清さん。
清吉　うるせえな。
小初　わたしはもう覺悟をきめました。
清吉　（せゝら笑ふ）どんな覺悟だ。南無阿彌陀佛か。
小初　もう斯うなつたら、火のなかでも水のなかでも、地獄の底までもおまへと一緒に行くつもりさ。ほかに仕樣がないぢやあないか。
清吉　よし、よし。さう來なけりやあほんたうの江戸つ子ぢやあねえ。賴もしいな。
小初　わたしはさう覺悟をきめたけれど、後生だから清さん、兄さんだけは助けてやつて下さいよ。
清吉　助けてやつてくれ……。おめえの兄きがどうした。
小初　（壁を指す）あすこに澤山かゝつてゐる面のなかで、おまへは人殺しをしてまでも取つたのがありやあしないかえ。
清吉　人殺しをして……。むゝ、これか。（起つて以前の假面を取つてくる）大方これだらう。
小初　（假面を取つてみる）わたしには判らないけれど、この七月に三めぐり堤で……。

清吉　さうだ、さうだ。神樂師の野郎を隅田川へ叩込んで……。（云ひかけてかんがへる）むゝ、違えねえ。おめえの兄きも神樂師だと云つたつけな。それぢやあ彼奴が……。いや、不思議な御緣だな。（と云つたばかりで案外に平氣でゐる）
小初　その兄さんは運よく助かつたんですよ。
清吉　それぢやあ死なずに濟んだのか。まつたく運がよかつたな。（矢はり平氣でゐる）そこで、どうしてくれと云ふのだ。
小初　この面にはおそろしい祟があつて、家中の者がみんな死絶えて、今度は兄さんとあたしが死ぬ番ですとさ。どうでわたしは遲かれ速かれ、おまへに繋がつて暗いところへ行くからだだから、どうなつても構はないけれど、兄さんだけは何うかして助けて遣りたいんですよ。
（下のかたより萬右衞門、再び出で來りて、門口にて聽く。）
清吉　（うるさゝうに）それだから何うしろと云ふのだよ。
小初　この面を兄さんに返して遣つてくださいよ。
清吉　いけねえ、いけねえ。（手をのばして假面を取返さうとする）
小初　（假面を隱すやうにして）いゝえ、わたしが貰ひま

したよ。

清吉　誰が手前にやると云つた。巫山戲ると承知しねえぞ。出せ、出せ。鬼の女房だつて、亭主のものを取る奴があるものか。

小初　おまへだつて兄さんの物を唯取つたんぢやあないか。

清吉　手前の兄きだつて唯取つたのだから、五分々々だ。さあ、出せ、出せ。（又もや狂的に）このふんばり阿魔め。出さねえと打ち殺すぞ。

（清吉は廣袖をぬいで起ちかゝると、萬右衞門は走り入る。）

萬右衞　（妹をかばひながら）これ、なにをするのだ。

清吉　むゝ、手前が小初の兄きか。兄妹（きやうだい）がぐるになつて、その面を取返しに來やあがつたか。（いよ／＼狂的になる）いや、その面ばかりぢやあねえ。家中の面を取りに來やあがつたに相違ねえ。さあ、取れるものなら取つてみろ。

萬右衞　（鎭めるやうに）清吉さん。まあ、靜にしてください。腕づくで面を取返さうと思ふなら、又その仕樣もあらうけれど、今夜たづねて來たのはそんなわけぢやあねえ。妹の縁につながつて、おとなしくお前さんに頼むつもりで來たのだ。くどくは云はねえ、このあひだも云つた通りの因縁だから、どうぞ素直にこの面を返しておくんなせえ。わたしのからだも何うにか癒つたやうだから、無理にも路用の工面をして、近いうちに伊豆へ行つて、元のお社へ納めてくる積りだ。それでなければ何うしても氣が濟まねえ。

清吉　やかましい。

萬右衞　さうすれば、わたしの罪も滅して、妹も無事、わたしも祟りを逃れようといふものだ　今までは些とも知らなかつたが、お前さんは妹につながる人、わたしとも義理ある兄弟の仲だ。見れば、ほかにも澤山の面がある。いくらお前の道樂でも、この面一つにそれほどの執心をかけるにも及ぶまい。

清吉　うるせえ、うるせえ。厭だ、厭だ。

萬右衞　これほどに譯を云つて頼んでも……。

清吉　その面にどんな因縁があらうが無からうが、おれの知つたことぢやあねえ。一つ講釋を幾度もするな。鬼坊主清吉が見込んだ以上は、誰が何と云つてもその鬼はおれの物だ。鬼が清吉か、清吉が鬼か、手前たちには判るめえ。（小初に）さあ、出さねえか。

小初　兄さんがあれほどに云つてゐるのが判らないのかねえ。もしこの面が祟つて、わたしが死んでも構はないのかえ。

清吉　構はねえ、かまはねえ。どいつも這奴もみんなくたばつてしまへ。

（清吉は亂暴に小初をひき摺り倒して、その假面を取らうとするを萬右衛門は押へる。）

萬右衛門　なんぼ鬼といふ綽名を取つた男でも、可愛い女をむごたらしく手籠めにして……。

清吉　このあひだにも懲りねえで、いつまでも邪魔をすると、手前も一緒にぶち殺すぞ。（小初に）さあ、出せ。強情を張ると手前から先へ鬼の餌食にしてしまふ。

小初　（興奮して）なぜさう判らないんだらうねえ。えゝ、もういつそ殺してみるがいゝ。

清吉　云はねえでも殺してやる。（ふところより匕首を出す）

萬右衛門　これ、あぶない。又しても刃物三昧か。（小初の手より假面をうけ取りて）お初。早く逃げろ。

清吉　うぬ、逃がすものか。

（清吉はいよ／＼哮り狂ひて、滅多矢鱈に刃物をふりまはして小初を斬らうとする。萬右衛門は遮らうとして爭ふうちに、清吉の刃物をうけ止めて假面は二つに割れる。）

清吉　（唸るやうに）面が割れた。

萬右衛門　（おなじく叫ぶ）面が割れた。

（ふたりはあわてゝ缺けたる半面を拾つてみる。）

清吉　大事の面を割りやあがつたな。

萬右衛門　えゝ、どうしても斯うなるのか。もうこれまでだ。

（割れたる假面を清吉に叩きつける）

清吉　なにをしやあがる。

（清吉も萬右衛門に假面をたゝきつける、萬右衛門は隱し持つたる匕首をぬいて、猛然として清吉に斬つてかゝる。）

小初　あれ、兄さん。

萬右衛門　退け、退け。

清吉　邪魔をしやあがるな。

（ふたりは小初を突き退けて鬪ふうちに、萬右衛門は一太刀斬られて倒れる。小初はおどろいて駈け寄るところを、清吉は斬る。小初も倒れる。）

萬右衛門　うぬ、妹まで斬りやあがつたな。

（萬右衛門は這ひ起きて斬つてかゝるを、清吉は再び斬る。小初が取り付くを、清吉は又斬る。下のかたより千吉はうかゞひ出で、この體をみて番傘を投げすて、内にかけ込み清吉に組み付く。）

清吉　えゝ、放せ。放しやあがれ。

千吉　人殺しだ、人殺しだ。

（千吉は一生懸命に獅嚙みつきながら叫ぶ。萬右衛門

はよろめきながら立寄つて、清吉を一太刀突く。清吉は千吉を突き放して、又もや萬右衞門に斬つてかゝる。雨の音はげしくきこゆ。下のかたより鬼熊と鬼鐵は手先數人を案內して出で、この騷ぎにおどろきながら手先にそこだと敎ふれば、手先は猶豫せずにばら〳〵と踏み込む。)

手先一　鬼坊主淸吉、御用だ。

一同　神妙にしろ、神妙にしろ。御用だ、御用だ。

(手先は十手を振りかざして淸吉を押つ取りまく。鬼熊と鬼鐵は外にてうかゞふ。)

二

第二幕の司馬江漢の畫室。おなじ夜。惡魔の圖は已に出來して、上のかたの壁にかけてあり。江漢は椅子に腰をかけ、テーブルの上に燭臺をおきて、西洋の書物をよんでゐる。雨の音强く、なり〳〵に雷鳴もまじりてきこゆ。

江漢　どうも强い雨になつた。おまけに雷もきこえるやうだ。九月になつて雷の鳴るのはめづらしいな。

(下のかたより門生の江水あわたゞしく出づ。)

江水　先生。先生。

江漢　なんだ。

江水　このあひだの鬼坊主といふ奴がまゐりました。

江漢　あゝ、待ちかねて催促に來たか。この大雨のなかを……。よほどの執心とみえるな。

江水　それが泥だらけ血だらけになつて參りまして、是非先生に逢はせてくれと申します。

江漢　なにしろこゝへ通すがいゝ。

江水　でも、先生。それが血だらけになつてゐまして……。

江漢　まあ、なんでもいゝから通してみろ。

(江水は早々に引返してゆく。江漢は讀みかけたる書物を伏せて起ちあがり、燭臺を把りて惡魔の圖を照してみる。雷の音。雨の音。下のかたより江水が先に立ち、淸吉は下男源助に扶けられて出づ。淸吉は髮も着物も雨にぬれ、血に染みて、片息になつてゐる。)

源助　こりやまあ何うしたのだ。しつかりしなさい。しつかりしなさい。

江漢　(燭臺を持つて立寄る)　えゝ、淸吉。大變な姿で來たな。捕方にでも追はれたか。

淸吉　先生。おねがひ申した油繪は……。で、できましたか。

江漢　むゝ、出來た、出來た。實はけふの午過ぎにやうやく出來あがつたので、あしたは屆けて遣らうと思つてゐたのだ。おまへに賴まれてから、おれも不思議に氣乘り

かして、今度の繪は自慢してもいゝくらゐに出來た。まあ、見ろ。

（江水にそれと指圖すれば、江水は壁にかけたる惡魔の額をはづして來て、清吉にみせる。江漢は燭臺を差付ける。雷の音。）

江漢　どうだ、清吉。

清吉　（その繪をぢつと見つめる）先生、實によく出來ましたな。（愉快さうに笑ふ）この惡魔はまつたく生きてゐるやうでございます。

江漢　氣に入つたかな。

清吉　わたくしの魂が籠つてゐるやうでございます。

江漢　おまへの魂か。おれの魂か。（これも繪をぢつと視る）なにしろ惡魔のたましひが籠つてゐるな。

清吉　はゝ、惡魔の魂……。（繪を指して）惡魔はいつまでも生きてゐる。

（清吉はその繪を見つめてゐる。下のかたより手先金平は十手を持ちて出づ。）

源助　（金平を遮る）これ、おまへは誰だ。

金平　いくら案内をたのんでも、返事がないので這入つて來ました。（十手を見せる）

源助　今來ても、遲い、おそい。（清吉を指してもういけないと云ふ）

（金平は殘念さうに舌打する。清吉は繪を見入りながら、がつくりとなる。）

江漢　清吉、清吉。

（源助は清吉を抱き起す。）

清吉　（繪をうつとりと見つめながら）はゝ、はゝ、はゝはゝゝ。

（雷雨の音すさまじくきこゆ。）

――幕――

無禮講

登場人物

土岐藏人 頼員

頼員の妻 早咲

伊吹又兵衛

侍女 ちか

ほかに齋藤の家來など

後醍醐天皇の御宇、元德元年九月なかばの夜。

京家の侍、土岐藏人頼員の屋敷。座敷には短檠をおく。庭のあき草に露ふかく、月のひかり冴えたり。

（頼員の妻早咲、廿歳前後、緣にたちて月を仰ぐ。蟲の聲さびしくきこゆ。）

早咲（ひとり言）おゝ、よい月ぢや。

（下のかたの襖戸をあけ、緣づたひにて侍女ちか薄絹をもちて出づ。）

ちか 夜がふけました。お冷えなさるでござりませう。これをおかけなされませ。

早咲 よう氣がついてくれました。ほんに夜がふけると、秋の寒さが水の様に肌にしみて來る。

（ちかは早咲のうしろにまはりて、薄絹を被せかける。）

ちか 九月も十三夜を過ぎますと、朝夕はめつきりと冷えてまゐります。

早咲 まして夜ふけぢや。今夜ももう亥の刻を過ぎたであらう。（再び空を見る）

ちか 亥の刻は疾うに過ぎました。やがて清水の子の刻の鐘がきこえませう。殿はまだお歸りにはなりますまいか。

早咲 さあ。（さびしげに考へる）ゆうべは子の刻をすぎると、間もなく戻られたが……。今夜はどうであらうか。

ちか 一昨日の晩は夜のあける頃にやう〳〵お歸りでござりました。

早咲 ほんに一昨日の晩は今か今かと待ちわびて、たうとう一夜を眠らずに明かしてしまうた。（ため息をつく）今夜もそのやうなことが無ければよいが……。それも武士の務とあれば格別ぢやが、此頃のはさうでない。無禮講とかいふお催しに加はつて、夜毎夜ごとの酒宴遊興……。留守居する女房が夜露に袂をぬらしながら、かうして待ち暮してゐるとは御存じないか。

ちか ほんにこゝは端近で餘計に冷えませう。奥へお這入りなされませ。

（早咲はだまつて月をながめてゐる。ちかはその袂をひく。）

ちか　奥さま。（無理に内へ連れ込む）一體あの無禮講とか申すのはいつまで續くことでござりませう。

早咲（さびしく笑ふ）それはわからぬ。興のさめるまでは續くのであらう。公家衆でも侍でも、そうじて男といふものは、家をわすれ、妻子をわすれて、酒宴遊興にうつゝを拔かしてゐるものぢや。

ちか　殊にその無禮講とか申しますのは、普通の御酒宴などとは違ひまして、隨分みだりがはしいものぢやとか云ふ噂でござります。

早咲（あざけるやうに）さうぢや。男は烏帽子をぬいで頭髻を放ち、法師は法衣をはいで白衣ひとつの姿となり、身分の高下もなく、禮儀も作法もなく、僧も俗も公家も侍も打ちまじつて、遊び戲れ舞ひ歌ふ。すべてが一通りの遊興を通り越して、ほと／＼狂亂に近いとか聞いてゐる。それも卑い地下の者どもならば知らず、公家では尹大納言どの、四條中納言どの、日野中納言どの、それらの方々をはじめとして、名ある殿上人が我先きにと寄りあつまつて斯くの始末。不行儀と云はうか、不しだらと申さうか。やがては上のお聞きにも達して、どのやうなお咎めを受けようとも知れまいと、それもまた案じられてならぬ。（また起ちかける）あゝ、殿はまだお戻りにならぬか。ちか。

ちか　はい。

早咲　やがて子の刻であらうと云うたな。

ちか　左樣でござります。

早咲　かたぶくまでの月を見しかなといふ古歌のこゝろも思ひ當つた。（再び起つて縁に出る）今夜の無禮講もまた曉方まで續くのではあるまいか。ちか、お前はもう休みや。

ちか　いえ、わたくしは……。

早咲　このやうに毎晩遲くなつては、誰も彼もみな疲れる。ほかの女子共にもみな休めと云や。

ちか　して、おまへ樣は……。

早咲　わたしは妻の役、夜のあけるまでも起きてゐて、夫の歸るを待たねばなりませぬ。

ちか　では、わたくしも御一緒に……。

早咲（じれる）はて、くどい。早う行きやと云ふに……。

ちか　はい。

（ちかは丁寧に會釋して下のかたに立去る。）

早咲　肌が冷えて、つむりが痛む。夜露にうたれて風でも引いたのではあるまいか。

（早咲はひとり言をいひながら、惱ましげに元の座に

戻る。鐘の聲。）

早咲　おゝ、あれが子の刻……。このごろの秋の夜は長い。夜のあけるまでには……（ため息をつく）

（ちか再び出づ。）

ちか　奥さま。

早咲　（顔をあげる）　お歸りか。

ちか　はい。

（早咲はいそ／＼起つて、出で迎へようとするところへ、土岐藏人頼員、廿七八歳、酒に醉ひたる體、烏帽子を少しゆがめて被りしまゝ、奥の襖をあけて出づ。頼員はよき男にて、よき衣を着たり。）

早咲　（嬉しげに）　お早うござりましたな。

頼員　あまり早くもあるまい。子の刻の鐘を今聽いた。（膝をくづして坐る）

早咲　丁度ゆうべと同じことでござります。

頼員　それぢや。ゆうべは早く外して歸つたので、今夜はどうでも逃さぬ。ひがしの白むまでは座を起たさぬと、大勢が無理にひき留むる。それを摺りぬけてやう／＼に逃げ歸つて來た。あゝ、喉が渇く。（ちかに）白湯でも水でも一杯くれ。

（ちかは心得て立去る。）

早咲　では、餘の人々はまだ御酒宴でござりますか。

頼員　長夜の宴ぢやとか云うて、夜もすがら飲み明かすのであらうよ。（ゆがみし烏帽子を押直しながら）それに今夜は新しい趣向があつたので、人々は猶さら興に乘つてゐらるゝやうぢや。はゝゝゝゝ。

早咲　今夜はどのやうな面白いことがござりました。

頼員　それはな。（笑ひながら少し躊躇してゐる）

早咲　新しい御趣向とは、どのやうなことでござりました。

頼員　それは……。まあ、聽きやれ。年のころは十七八の美しい女が廿人あまり、生絹の單衣ばかりを身につけて、一座のなかに入りまじり、酌をするやら、歌ふやら、舞ふやら、よれつ縺れつ、狂ひまはる……。

早咲　（あきれたやうに）　若い女子……美しい女子が、肌着も無しに……生絹の單衣ばかりで……肌寒いは扨措いて、それでは肌も乳房も透つて、恥かしいことではござりませぬか。

頼員　（笑ふ）　女には恥かしいことであらうが、男には興あることゝみえて、聖護院の玄基法眼ほどの聖すらも、太液の芙蓉新に水を出づるに異らずと、手をうつて笑ひ囃された。

早咲　（いよ／＼呆れる）　して、おまへ様はそれをなんと御覧なされた。

頼員　なんと見たとは……。

早咲　（やゝ激して）　若い女子にあられもない、あか裸も同様の姿をさせて、それと一緒に狂ひまはる。おまへ様も他の人々とおなじやうに、そのやうな猥な淺ましい戯れに、うつゝを抜かしてゐられましたか。

賴員　（やはり笑つてゐる）　おれを責むるな。おれが目論んだことではない。

早咲　たとひ誰の目論見でも、おなじ筵につらなつて、おなじく狂ひ興じてゐれば、おまへ様も一つ穴の貉とやらではござりませぬか。

賴員　ひとつ穴の貉……。（少しぎよつとして妻の顏をみる）

早咲　（きつとなつて）　わたくし改めておねがひがござります。

賴員　あらためて願ひとは……。

早咲　おいとまを下さりませ。

賴員　（おどろいて坐り直す）　なに、暇をくれ……。では、この賴員を見かぎつて、里方へ戻るといふのか。

早咲　わたくしには六波羅の奉行齋藤太郎左衛門尉利行といふ立派な親がござります。

賴員　それは云はずとも知れてゐる。その親の齋藤がわが子に暇取つて來いと教へたか。（やゝ不安らしく）　これ、確かに云へ。

早咲　いえ、父からはなんにも申しませぬが、あまりといへば淺ましい。（泣く）　この夏の頃からはじまつた無禮講のお催し、最初のあひだは五日に一度、三日に一度であつたものを、このごろは毎日毎晩、おほかた明日も午過ぎから又出直しておいでなさるのでござりませう。しかも遊興のたはむれが次第に高じて、わかい女子をうす物ひとつにして狂ひまはるとは、聞くさへも淺ましい、汚らはしい。もう／＼わたくしには我慢も辛抱もなりませぬ。今夜かぎりにこの屋敷を立退いて、六波羅の里方へ戻りたいと存じます。どうぞお聽きとゞけ下さりませ。

賴員　夫の方から暇をくれるとも云はぬのに、女房の方から勝手に縁切つて戻るといふ。侍氣質の強い齋藤殿が我子にそのやうな我儘をゆるすと思ふか。

早咲　おつしやる通り、侍氣質の強い父でござりますれば、これほどの話を聽きましたら、屹と自分からも娘をとり戻すと云ひ出すでござりませう。わたくしの我儘を叱らうとは思はれませぬ。

賴員　むゝ。（かんがへてゐる）

（ちかは湯を汲んで出づ。）

ちか　どうも遲くなりました。

賴員　（叱るやうに）　なぜ遲かつた。

ちか　お湯がさめて居りましたので、沸してをりました。

（賴員はちかのさゝげたる湯をひと口のみて顏をしかめる。）

賴員　えゝ、醉醒めにこのやうな熱い湯が飲めると思ふか。水を持て、水を持て。

ちか　はい、はい。（早々に引返して去る）

早咲　（わざ笑ふやうに）罪もないちかに八つあたりでござりますか。

（賴員はだまつて考へてゐる。）

早咲　して、わたくしへの御返事はいかゞでござります。

賴員　（怒る）それほどに望みならば、暇をくれる。すぐに立去れ。

早咲　では、おいとまを下さりますか。

賴員　齋藤へは此方からも改めて挨拶する。ちかは里方から附添うて來た女ぢや。一緒に連れてゆけ。今度のことも大方はちかめが傍から何やかやと焚きつけたのであらう。憎い奴ぢや

早咲　これはわたくしの一存から起つたこと。ちかをお憎みなされますな。

賴員　勿論かれめが何のやうに唆かさうとも、おのれの心さへ動かずば斯うはなるまい。憎めばとて怨めばとて、これは枝葉ぢや。（妻を睨む）緣あつて夫婦となり、あしかけ三年むつまじく語らうて、二世の末までもと云ひかはしたを忘れたか。

早咲　それはこちらから申すことでござります。おまへこそ家を忘れ、妻をわすれて、武士にもあるまじき猥な遊興に耽つてゐるのではござりませぬか。

賴員　（じれる）えゝ、くど／＼云ふな。早く立去れ。ええ、出てゆけ。

早咲　はい。（すこし躊躇してゐる）

賴員　望み通りに暇をくれるといふに、おのれはなぜゆかぬ。さあ、ゆけ、ゆけ。

（賴員は起つて早咲を庭口へ突き出さうとすれば、早咲は緣よりかた足ふみ落しながら夫の手にすがる。夫婦は月のひかりに顏をみあはせて、しばらく無言。ちかは水を汲んで出づ。それに氣がついて、賴員は妻のそばを少し離れて立つ。早咲はそのまゝ緣に腰をおろしてゐる。）

賴員　（ちかを睨みて）おゝ、水か。これへ持て。

ちか　はい。

（とは云ひながら、賴員の顏色の唯ならぬのを見て、ちかは猶豫してゐる。）

賴員　なにを猶豫。早く持つてまゐれ。

（ちかは猶油斷せず、主人の顏色をうかゞつてゐる。）

賴員　えゝ、なぜこれへ參らぬ。

(頼員はじれて近寄らうとする時、早咲は縁へかけ上りて遮る。)

早咲　もし、おまへはなんとなさる。ちかを斬らうとなされますか。

(ちかはいよ〱おどろいて身がまへする。頼員はだまつて睨んでゐる。)

早咲　今もいふ通り、ちかを憎むはおまへの僻みぢや。無體の御成敗なされますな。

頼員　里方から付いて來た女と思うて、何事も大目に見ておけばつけ上り、夫婦のなかに水をさす奴。もう堪忍が相成らぬぞ。おのれ覺悟せい。

(頼員は哮つて、ちかに近寄らうとするを、早咲はまた遮る。)

早咲　それほどまでにちかをお憎みなさるも、所詮はわたくしゆゑでござりませう。ちかを御成敗なさるまでもなく、寧そわたくしを斬つてくださりませ。

(頼員はだまつて突つ立つてゐる。)

早咲　さあ、わたくしを殺してくださりませ。死骸になつてこゝの屋敷を出れば、わたくしは本望でござります。

(泣きくづれる)

頼員　(うたがふやうに)　この屋敷を死んで出たいと…。父に顔をあはすが面目ないか。

早咲　(頭をふる)　いえ、いえ、そんなことではござりませぬ。(また泣く)

頼員　去られた夫へ面當てに、いつそこゝで死にたいと云ふのか。

(早咲は泣きながら再び頭を振る。)

ちか　(思はず摺り寄る)　では、奥さまはこゝを去られて……。

頼員　はて、おのれらの知らぬことぢや。あつちへ行け。

(眼で知らされて、ちかは水を入れたる椀をそこに置き、不安らしく立去る。早咲はまだ泣いてゐる。)

頼員　(しづかに坐る)　これ、泣いてばかりゐては判らぬ。(やゝ打解けて)　なんでおまへは死にたいのぢや。

早咲　おまへに去られて……。いつそ死んだが優しでござります。(はげしく泣く)

頼員　その恨みは筋違ひぢや。おれの口からは唯の一度でも、おまへを去らうと申した覺えはない。今の今まで、最愛の妻ぢやと思うてゐたに、おまへの方から不意擊に、去つてくれいと云ひ出したのではないか。

早咲　去つてくれいと云ふやうに仕向けたのは、やつぱりお前でござります。おまへ樣が惡いのでござります。

頼員　(かんがへる)　全くおれが惡いのかも知れぬ。今もいふ通り、おれも不意擊を食つて一旦はむやみに腹を立

てたが、最愛の妻に巣守をさせて、夜晝となく遊び狂ふは、おれにも罪がないとは云へまい。（いよ／＼打解けて）今夜のいさかひもほかに知つた者はない。おたがひに勘辨すれば濟むことぢや。もうよいほどに和睦しようではないか。

早咲　（嬉しさうに）　はい。

賴員　ちかが水を持つて來た筈ぢや。これへくれ。

早咲　はい、はい。

（早咲は起つて、ちかの置いてゆきたる椀を持ち來れば、賴員は旨さうに飲む。）

早咲　まだ欲うござりますか。

賴員　むゝ。ちかを呼べ。

早咲　いえ、わたくしが取つてまゐります。

（早咲は椀を持ちて、下の方の棲戸をあけて去る。賴員は笑ましげにあとを見送りしが、やがて起つて縁さきに出で、冴えたる月のひかりを仰ぐ。）

賴員　（ひとり言）　よい月ぢやな。

（蟲の聲きこゆ。賴員は月をながめてゐるうちに、次第に顏の色が曇つてくる。かれは思案に惱めるやうに幾たびか溜息をついて、我にもあらで縁に腰を落す。早咲は水を持ちて出づ。）

早咲　お待たせ申しました。

（賴員は無言にて椀をうけ取り、思案しながら飲む。）

早咲　なにを考へておいでなされます。

賴員　あらたまつて云ふも異なものぢやが、賴員も武士ぢや、なん時どこで討死しようも知れぬ。そのときにはお前はどうするな。

早咲　はて、忌はしいことを……。今夜に限つてなぜそのやうなことを仰せられます。

賴員　けふあつて明日無いが人の命、まして弓矢取る者はそれだけの覺悟が無くてはならぬ。世は太平のやうに見えても、なん時どのやうな軍が起らぬとも限らぬではないか。いや、近いうちに屹と起る。

早咲　え。それはどうした譯でござります。

賴員　それをこれから云はうとするのぢや。そこらには誰も居るまいな。

（賴員は庭に降りて、左右を見まはす。早咲も起ちて、座敷の左右をうかゞふ。やがて夫婦は顏をみあはせて、早咲は誰もゐないと眼で知らすれば、賴員はうなづいて縁にあがる。）

賴員　（念をおすやうに）　ちかは居らぬな。

（早咲はうなづく。）

賴員　誰も居らぬな。

（早咲は又うなづく。）

頼員　近う寄れ〳〵今夜は思ひ切つておまへに大事をあかす。これは大事の上の大事ぢやぞ。かならず他言するなよ。よいか。

（早咲は息をのんで、無言にて首肯く。）

頼員　おまへ達は夢にも知るまい。京都には北條征伐のおぼし立あつて、公家には花山の大納言、四條中納言、日野中納言、洞院左衛門督……。いや、ひとり一人にその名を數へてはゐられぬ。それらの人々のほかに、名ある上人僧都等も加はつて、このあひだから密々にその御評議ぢや。武士には一族の十郎頼貞をはじめとして、多治見國長、足助重成……。（すこし聲をひそめて）この頼員も御味方の一人ぢやと思へ。

早咲　（おどろく）では、あの、無禮講といふのは……。その御評議でござりましたか。

頼員　かの鹿が谷のむかしを學んで、無禮講の遊興にことよせ、鎌倉退治のはかりごと最早おほかたは整うたれば、おそくも當年内にはおん旗あげと決定いたした。就てはこの頼員、一族の頼貞と共に一旦は一味加擔したれど……。（云ひかけて吐息をつく）よく〳〵思案すればこの企て十に八九は成就すまい。鎌倉の高時入道、放埒驕奢のきこえ高けれど、北條九代の威勢はまだ〳〵衰へたとは思はれぬ。それに敵對する我々は……。いかに器量才學すぐれたりとも、いざ合戰といふ時の用には立たぬ。まことの手足となつて働くのはわれ〳〵武士の役目ぢやが、さてその武士も前にいふ頼貞や多治見や足助の徒ばかりで、三百騎五百騎の人數を持つてゐるほどの大名はひとりもない。勿論、ひそかに廻文を送つて、諸國の武士を召しあつむる手筈にはなつてゐるものゝ、日和見の多い世の中、果してどれだけの味方がまゐらうか。

早咲　それほど覺束ないことゝ知りながら、何故いつまでもその徒黨に加はつてゐるのでござります。石をいだいて淵に臨むとやら云ふは、そのことではござりませぬか。いつそ今のうちに拔けられてしまはれては……。

頼員　拔けらるゝものなら拔けてもしまはうが、頼員も武士の端くれ、まして左近の藏人をうけたまはる京家の武士が、退引きならぬ羽目になつて一旦加擔した以上、今更どうにもならぬことぢや。諺にも云ふ乘りかゝつた船で、もうこの上はどんなおそろしい颶風や荒浪に出逢はうとも、行くところまでは行かねばならぬ。

早咲　して、そのゆく末は……。

頼員　それはわからぬ。おほかたは船がくつがへつて……。いや、そんなことは云ふまい、思ふまい。思うたら一刻も斯うして落ちついてはゐられぬ。その不安のあひだに

も一つの慰めは彼の無禮講ぢや。おまへの前では些と云ひにくいことぢやが、われ〳〵の身分では迚もならぬやうな山海の珍味をとゝのへ、たぐひなきまでに美しい女わらべをあつめ、上下の隔てなく打ちまじつて、夜も晝も醉ひたはむれ、舞ひ歌ふ、まことに前代未聞の盛宴、その面白さについ惹かされて……。

早咲　では、その無禮講の面白さに、身のゆく末もうち忘れて……。

賴員　いや、忘るゝと云ふではないが……。唯その面白さに惹きつけられて、半分は上の空で月日を送つてゐた。と云うたら、性根の据らぬ奴と思ふかも知れぬが、今のおれとしてはそれより外に仕様がなかつたので、よのつねの遊女狂ひや身持放埓とは譯が違ふ。察してくれ。

早咲　（思案して）それにしても、このまゝにうか〳〵と月日を送つてゐたら、やがて大事の時節が近づきませうに、そのときお前はどうなさるのでござります。

賴員　それは考へないことにしてゐる。おれはもうどうなつても構はぬと決めてゐるから、おまへは命を全うして、尼法師にも姿をかへ、土岐藏人賴員が菩提を弔うてくれ。かうして大事をうち明けたのも唯そのことを賴まう爲ぢや。きつと肯いてくるゝかな。

早咲　御念にはおよびませぬ。

賴員　おそかれ早かれ、土岐の家は滅亡、賴員は世にないものと思うてくれ。

早咲　はい。（眼をふく）

（ちか出づ。）

ちか　まだお休みにはなりませぬか。

賴員　おゝ、もう夜もふけた。

（早咲はうつむいて考へてゐる。）

賴員　（注意するやうに）これ、ちかが參つたぞ。

早咲　はい。（顏をあげて、ちかを見かへる）これ、酒の用意をしや。

ちか　これから御酒宴でござりますか。

賴員　（氣がついたやうに）むゝ、さうぢや。奥で飲まう。酒の支度をいたせ。

（賴員は起ちあがる。早咲はまた考へてゐる。）

これにて幕をおろし、更に再び幕をあけると、やはり元の賴員の屋敷。秋の夜も已に明け放れたる景色。

（賴員は烏帽子をうち落されて大童となり、太き繩に兩手を縛められて、座敷のまん中にあぐらをかいてゐる。緣の下のかたに齋藤の家來伊吹又兵衞は太刀をつけ、直垂の袖をくゝり、長卷を傍にひき附けて張番し

てゐる。庭さきにも家來五六人が棒または刺叉のやうなものを持ちて警護してゐる。）

賴貞　（狂へるやうに叫ぶ）繩を解け、繩をとけ。

又兵衞　（なだめるやうに）それはなりませぬ。今しばらく御辛抱なされませ。

賴貞　繩を解け。太刀をわたせ。

（又兵衞は取合はずに默つてゐる。）

賴貞　やい、又兵衞。おのれは舅の齋藤が家來ではないか。主人の婿の賴貞に繩をかけて、座敷牢も同樣のこの體たらくは、抑もなんたる事ぢや。仔細をいへ、仔細を申せ。いや、その仔細をいふ前に、先づこの繩を解け。

又兵衞　たとひ何と仰せられましても、これは主君の御指圖、手前が自由の取計らひはなりませぬ。

賴貞　女房に酒を強られて、前後不覺に寢入つてゐるところへ、おのれらが不意に押込んで來て、無理無體にかくの始末。無禮と云はうか、狼藉と云はうか、言語に斷えたる振舞ぢや。おのれら何の仔細あつて、この賴貞を生捕りにした。それをいへ。

又兵衞　（冷かに）くどくも申す通り、これは主君の御指圖でござる。

賴貞　賴貞をかやうに縛めて、さてこの上にどうするのぢや。

又兵衞　油斷なく警固せよとの御指圖でござる。そのほかには何にも存じ申さぬ。

賴貞　えゝ、おのれらでは判らぬ。齋藤をよべ、太郎左衞門を呼べ。

（又兵衞はやはり取合はず、賴貞は焦れて起ちあがらうとするを、又兵衞は支へる。下のかたより緣づたひにて早咲出づ。）

早咲　殿。おしづまりなされませ。

賴貞　おゝ、早咲……。又兵衞等がこの始末ぢや。早く繩を解いてくれ。

早咲　（進みよる）それはなりませぬ。父の指圖でござります。

賴貞　おのれまでが同じやうに……。あゝ、扨はおのれ、大事を父に洩したか。

早咲　おまへさまは京方、父の太郎左衞門は鎌倉方でござります。今度のいくさに京方が勝てば父はほろび、鎌倉方が勝てば夫がほろぶる。まして京方に勝目がないと聞くかなしさに、淺薄ながらも女子の思案、おまへ樣を醉ひ潰して置いて、夜のあけぬ間に父の屋敷へ駈け付けました、

賴貞　大事露顯とは大かた察してゐたれど、よもや女房の口からとは……おのれ、生みの父に功名手柄をさせたさ

に、夫を敵に賣り渡したか。

（賴員は憤然として蹶起し、早咲を蹴倒し、踏みにじる。又兵衞はおどろいて遮る。庭に控へたる家來共も一度に起つ。）

早咲　（踏まれながらに制す）　これ、これ、かならず立つまい、騷ぐまいぞ。又兵衞も退きやれ。なう、殿……藏人どの。夫を敵に賣り渡したは、夫の命が助けたさ、夫がいとしいばつかりに……。

賴員　（歯がみをして）　えゝ、いつはり者め。畜生め。夫の大事を敵方に內通して、それで夫の命が助かると思ふか、夫が無事であらうと思ふか。敵方の間者も同様、ふところに刄をいだく女とも知らずに、心をゆるしたは賴員が一生の不覺ぢや。おのれ、蹴殺し、踏み殺してくるるぞ。

（また踏みにじらうとすれば、早咲はその足にとりつく。）

早咲　いえ、いえ、おまへを助ける工夫はある。今朝も父と相談の上、おまへを返り忠の者にして、無事に命が助かるばかりか、恩賞までも賜はる約束、決して相違はござりませぬ。

賴員　おゝ、この賴員を返り忠の裏切り者にしようと申すか。

又兵衞　かうなれば何も彼も申上ぐる。御主君と早咲様が色々に御相談の上で、表向きはお前様が返り忠のことにして六波羅どのへ訴へ出で、夜のあくるを待つて先づその徒黨の侍ども土岐賴貞、多治見國長の屋敷へ討手を差向け、ひとりも餘さずに生捕り又は撃ち取る手筈でござる。

賴員　（大息をついて）　むゝ。

又兵衞　それを聽いて藏人殿が、われも一緒に斬死と狂ひ出づるか、あるひは躁急つて切腹でも召さるゝか、それらのあやまち無きやうに、不意に取りおさへて警固つかまつれと、失禮をもかへりみず斯くの仕儀、なにとぞ御立腹をおしづめ下されい。

（賴員は無言にて大息をついてゐる。）

早咲　もし、これでもまだ御得心がまゐりませぬか。

（賴員はまだ無言のまゝで突つ立つてゐる。貝の音きこゆ。家來共もみな色めく。）

又兵衞　（向うをみる）　おゝ、いよ〳〵討手が向うたか。

賴員　むゝ。賴貞の屋敷へも……國長の屋敷へも……。（思はず縁先へ出る）彼等いかばかり猛くとも、不意の討手にかこまれては……。（身悶えして）　その返り忠の……裏切り者が……こゝにゐるとはよも知るまい。（貝の音又きこゆ）おゝ、貝の音が……。（じれる）　えゝ、繩を

解け。太刀を持て……。

（頼員は縄にかゝりしまゝにて縁より駈け降りるを、家來どもは棒や刺叉にて支へる。）

頼員　えゝ、止めるな、邪魔するな。

（頼員は押退け蹴放して行かうとすれば、早咲も又兵衛も庭にかけ降り、又兵衛は縄尻を取つて無理に頼員をひき据ゑる。頼員は倒れて地に坐す。）

早咲　（夫にとりつく）おまへは狂うてどこへ行かるゝ。今となつて騒つたとて狂うたとて何となりませうぞ。無益の犬死をするよりも、此儘おとなしくしてゐれば、命も助かり、恩賞も賜はる。ゆうべお前はわたしを最愛の妻ぢやと云はれた。その妻をいつまでも無事に榮えて暮す心はないか。どうでもわたしを尼にしたいか。

又兵衛　早咲樣のおつしやる通り、舅御さまも萬事呑み込んでござりますれば、決して御如才はござりませぬ。唯おつとさへしてござればお身は安泰、三方四方無事と申すものでござる。先づその儘、その儘。（賺すやうに云ふ）

早咲　さあ、こゝにゐては悪うござります。内へおあがりなされませ。（夫を優しく抱へ起す）

頼員　（しづかに）おれはもう騒がぬ。この縄を解いてくれ。

早咲　えゝ。（又兵衛と顔をみあはせる）

又兵衛　勿論お解き申しまするが、今しばらく御辛抱くださりませ。

頼員　返り忠をすればお前等の味方ではないか。味方をいつまで生捕りにして置くのぢや。おれはもう騒がぬと云ふのに……。

（早咲と又兵衛は再び顔をみあはせて、まだ躊躇してゐる。縁づたひに侍女ちかが出で來りて窺ふ。）

頼員　（見かへる）おゝ、ちか。酒肴の用意いたせ。

ちか　はい。

頼員　ゆうべのやうな事では足らぬ。肴も澤山の品々を買ひあつめ、酒も十分に用意いたせ。早咲。けふは久しぶりでお前が舞へ。ちかも歌へ。

二人　はい。

頼員　又兵衛も飲め。

又兵衛　はあ。

頼員　餘の家來共もみな飲め。羽目をはづして飲め。

家來　はあ。

頼員　けふからはおれの屋敷で無禮講ぢや。

（頼員は笑ひながら起ちあがる。早咲と又兵衛は先づほつとする。貝の音きこゆ。）

――幕――

正雪の二代目（二幕四場）

登場人物

大泉伴左衛門
千島雄之助
深堀平九郎
津村彌平次
本庄新吾
犬塚段八
三上郡藏
山杉甚作
備前屋長七
下總屋義平
義平の母おかめ
大泉の妹お千代
大泉の女中およし
同じく　おみつ
下總屋の若い者時助
同じく　勘八
下總屋の小僧仙吉
下總屋の女中おとよ
番太郎　權兵衞
與力井口金太夫
同心野澤喜十郎
町の娘　おもと
同じく　おきん
ほかに同心。捕手。町の男。女、子供など

第一幕

一

江戸の末期、文久二年十一月下旬の午後。

芝の田町、軍學劍術の指南大泉伴左衞門の道場。正面の上のかたに寄せて、一段高いところに疊を敷き、手あぶりの火鉢を置き、うしろは大形の襖。平舞臺の正面は板羽目にて、面、籠手、木太刀、竹刀、薙刀などの稽古道具をかけ、下のかたには杉戸の出入り口がある。大きい角火鉢には大藥罐をかけ、そのそばには炭取りと茶碗などもある。

（深堀平九郎、廿七八歳、先生の代稽古をしてゐる體、稽古着に胴と籠手を着けただけにて袴をはき、うしろ

鉢巻きをして竹刀を持ち、高いところに腰をかけて見物してゐる。大火鉢のまはりには門弟の津村彌平次、犬塚段八、三上郡藏の三人が稽古を待つ姿にて、烟草をのんでゐる。そのなかで彌平次だけは面と胴をつけてゐる。道場のまん中には本庄新吾と刀屋のせがれ長七とが道具をつけて稽古をしてゐる。慕あくと、二人は激しく撃ち合ひ、新吾はだん／＼に危くなる。)

彌平次　(のび上る)　これはいけない。本庄の方があぶないぞ。

段八　町人に撃ち込まれるとは意氣地のない奴だな。

郡藏　まつたくあぶない。これ、本庄。しつかりしろ、しつかりしろ。

(そのうちに新吾は籠手を打たれて竹刀を落せば、長七は附入つて更に胴を撃つ。)

新吾　まゐつた。

平九郎　や、見事だ、見事だ。長七、貴公は此頃めつきりと上達したぞ。

長七　ありがたうございます。

(新吾と長七は面を取る。)

新吾　籠手を撃つたらもう好いではないか。つゞいて胴へ撃ち込むとは何のことだ。

平九郎　はゝ、負け惜みをいふなよ。眞劍勝負と相成つたら、そんな理窟を云つてゐられるものか。なんにしても貴公の負けだ。

長七　稽古にかゝると何うも夢中になつていけません。どうかまあ堪忍してください。

平九郎　なに、本庄にあやまることがあるものか。劍術の極意は相手をずば／＼と斬りさへすればいゝのだ。まして唯今の時世では、なん時どこで眞劍の勝負が始まらないとも限らないから、平生からその積りで稽古をして、道具はづれでも何でも構はぬ、手あたり次第に引つぱたくがいゝぞ。内の先生はその流儀だ。

長七　よく判りましてございます。

(新吾と長七は會釋して火鉢の前に來る。板戸をあけて、女中およし、おみつ出づ。およしは大薬罐を持つ。)

およし　お湯はございますか。

段八　(火鉢の薬罐を取つてみる)　いや、空だ。空だ。水をさしてくれ。

おみつ　炭がございますか。

郡藏　(炭取りを取る)　これも空だ。吝々しないで炭を一杯に持つて來てくれ。いくら我々でも寒いからな。

およし　でも、今は寒稽古の筈ぢやありませんか。

(およしは笑ひながら薬罐に水をさし、おみつは炭取りを持ちて去る。)

平九郎　さあ、今度はだれの番だな。

彌平次　手前です。

平九郎　むゝ、津村か。貴公は面をつけながら烟草を呑んでゐるのか。ひどく都合がいゝな。

彌平次（進み出る）これは講武所から流行り出した鶺鴒張りといふ烟管です。

平九郎（烟管を取つてみる）なるほどこれが鶺鴒張りといふのか。講武所の奴等は巧いものを考へ出したな。これならば面を着けてゐても、烟草が自由に喫へるから調寶だ。おれも早速買ふことにしよう。そこらの袋物屋に賣つてゐるか。

彌平次　えゝ、此頃はどこにでも賣つてゐますよ。

平九郎　はゝあ、色々の物が流行るな。（感心したやうに烟管をながめてゐる）

彌平次　すぐにお稽古が願へますか。

平九郎　まあ、この烟管でおれに一服喫はせてみろよ。

（平九郎は大火鉢の前にゆきて烟草をのむ。下のかたの板戸をあけて、女中おみつは炭取りに炭を入れて出づ。）

おみつ　このぐらゐあれば宜しいでせう。

段八　よし、よし。これだけあれば凍え死ぬ氣づかひはあるまい。

おみつ　皆さんは隨分寒がりなんですね。

（おみつは笑ひながら去る。）

新吾　こゝの家の女どもは兎角われ／＼を馬鹿にする奴が多いな。

平九郎　貴公達がいつでも手ひどく引つぱたかれるのを見てゐるからだ。はゝゝゝゝ。

（下のかたより伴左衛門の妹お千代、十八九歳、襷と手拭を持ちて出づ。）

お千代　どなたもお精の出ることでございますね。

平九郎　御覽の通り、この寒いのに汗をながして、みんな一生懸命に稽古を勵んで居ります。

お千代　それはお羨ましいことでございます。わたくしもどなたにかお稽古を願はれますまいか。

段八　お嬢さん。わたしがお相手をいたしませう。（起ち上る）

郡藏　いや、お手前はあと廻しだ。けふは拙者がお嬢さんのお相手をすることに、昨日から決まつてゐるのだ。（これも起ちあがる）

彌平次　これ、これ、手前はさつきから支度をして、こゝに出てゐるではないか。貴公達が道具をつけてゐるあひだに、手前が先づ一本お願ひ申すのだ。

平九郎　これは道具を早く着けてゐる者の勝だ。さあ、津

討。貴公がお稽古を願ひなさい。
彌平次　（よろこんで）承知いたしました。
（彌平次はあわてゝ籠手をつけ、まん中に出て待つてゐる。お千代は身繕ひして襷をかけ、手拭にて後ろ鉢巻きをして、羽目にかけたる稽古用の薙刀を持つて出づ。）
お千代　では、おねがひ申します。
彌平次　手前もお願ひ申す。
（二人は會釋して立向ひ、お千代は薙刀、彌平次は竹刀にて撃ち合ふ。平九郎は烟草をのみながら見物してゐる。他の門弟等も一心にながめてゐる。このうちに、正面の襖をあけて、大泉伴左衛門、三十五六歳、髪は合總、羽織袴にて出、下のかたの板戸をあけて、門弟の一人千島重之助、廿二三歳、羽織をぬいだる袴姿にて出で、いづれも立つたまゝにて勝負を見てゐる。やがて彌平次はお千代に撃たれる。）
彌平次　まゐつた。
段八　又負けたか。どうも弱い奴だな
彌平次　お嬢さんは手前にはどうも苦手だとみえて、殘念ながら今日も撃ち込まれた。
猪藏　貴公はお嬢さんの顏ばかり見てゐるから、身體中が隙だらけで、たちまち撃ち込まれてしまふのだ。

平九郎　いや、そればかりではない。（笑ふ）貴公がお千代さんに勝たうといふには、まだ一年以上の修業が要るな。
彌平次　なに、もう二月か三月も勉強すれば、互角の勝負までには屹と漕ぎ付けてみせますよ。（面をはづして汗をふく）
平九郎　はゝ、どうもみんな負け惜みの強い連中ばかりだ。併しまあ其積りで、せい／＼勉強してくれ。
伴左衛　（同じく笑ふ）いや、武道を磨くものには、その負けじ魂が大切だ。女に負けて恐れ入つてゐるやうではいけない。二月三月の後といはずに、明日にもお千代に撃ち勝つ工夫をしなければならんぞ。
彌平次　かしこまりました。
（伴左衛門は坐る。彌平次は火鉢の前に戻る。お千代も鉢巻や襷を取る。）
長七　（進み出づ）先生、お寒いことでございます。
伴左衛　おゝ、長七か。忙がしい中でよく精が出るな。
長七　仰しやる通り、このごろは商賣の方が夜も晝も忙がしうございますので、思ふやうにお稽古にも出られません。
伴左衛　この時節ではおまへの商賣の忙がしいのは當りまへだ。わたしが頼んで置いた刀の磨ぎもなるたけ早く仕

上げて貰ひたいな。

長七　職人に申付けまして、せい〴〵念を入れて磨がせて居りますから、どうぞ明日までお待ちをねがひます。

伴左衛　あの刀は先祖傳來の郷義弘だ。あれでなければ、まさかの時に思ふやうに腕を揮ふことが出來ないからな。念を入れて磨がせてくれ。

長七　はい、はい。もう少しお稽古を拜見いたしてゐたいのでございますが、何分にも店が忙がしうございますので、これで御免を蒙ります。

伴左衛　むゝ。おまへは町人であるから、武藝も大事だが、商賣も大事だ。忙がしい時には遠慮なく歸るがいゝぞ。（左右を憚るやうに）こゝではくはしい事は云はぬが、ゆうべは色々の心配をかけたな。

長七　その御挨拶では恐れ入ります。では、どなたも御免ください。

（長七は伴左衛門とお千代に會釋し、更に一同にも會釋して、下のかたへ行きかゝる。）

平九郎　これ、これ、おれも二三日うちに磨ぎに遣るから、宜しく賴むぞ。

長七　いつでもお持ち下さい。

（長七は板戸をあけて去る。）

雄之助　（長七のあとを見送る）　町人にしては毎日よく精が出る。實に感心な男だな。

伴左衛　まつたく町人にしては、賴もしい男だ。それでも長七は商賣が刀屋だから、武藝に緣の無いことはないが、あの義平などは薪屋の悴でありながら、劍道執心とは面白いな。

新吾　ふだんから薪を割り馴れてゐるので、あいつの腕つ節はなか〳〵强うございます。

伴左衛　むかしから下手な劍術を薪割り劍術といふが、義平の腕前はなか〳〵薪割りではないやうだ。貴公たちも油斷してゐると、町人どもに叩きまくられるぞ。

お千代　長七さんや義平さんのほかにも、この道場へ通つて來る町人衆はまだ六七人ございますが、どの人もみな精が出るには感心して居ります。

雄之助　町人や職人までが自然に武藝を勵むといふのも、やはり時世ですな。

平九郎　たしかに時世だよ。かういふ穩かならぬ時世になつては、武士は勿論、町人でも職人でも唯安閑としてはゐられない筈だ。

伴左衛　（うなづく）　さうだ、さうだ。躄か腰拔けならば知らず、五體滿足の人間がたゞ安閑としてはゐられない時節だ。ふだんから云つて聞かせる通り、夷狄の黑船がそれからそれへと押掛けて來て、港を開けの、交易をし

ろのと、得手勝手のことをいふ。それを唯一戰に擊ち攘つてしまへばよいものを、意氣地のない幕府の役人どもは、揃ひも揃つた腰ぬけばかりで、相手の云ひなり次第に、先づ神奈川の港を開く。つゞいて江戶に公使館や領事館を置いて、わが神國を夷狄に蹈みにじらせるとは何の事だ。苟くも大和魂のある者が、それを默つて見てゐられると思ふか。

雄之助　それがために櫻田門の一件も起つたのでございますが、それでも幕府はまだ眼が醒めないのでございませうか。

伴左衛　（鐵扇を握つて罵るやうに）往來なかで天下の大老の首を取られても、まだ眼のさめないやうな奴等を相手にして、議論は無益だ。もう斯うなつたら、腰ぬけの、骨無しの、弱蟲の、意氣地無しの、德川幕府などを賴まずに、めい〳〵の腕の力で攘夷を實行するより外はない。口の先でばかり呶鳴つてゐてはいけない。（自分の腕をたゝく）この腕を働かさなければ駄目だ。この腕に物を云はせなければ何の役にも立たないのだ。その蓬勃たる慷慨悲憤の精神が諸人の腹の底からうづ卷きあがつて、武士は勿論、町人職人までが自然に武藝を勵むやうになつたのは、日月いまだ地に墜ちず、神州男兒の意氣衰へざる證據だと思へば、實に賴もしい、實に愉快だ。はゝはゝゝ。（鐵扇をひらいて胸を煽ぐ）

お千代　さういふお話をうかゞひますと、女のわたくし共でも何だか此の胸が躍るやうでございます。

雄之助　いつもながら先生の悲壯激越の御議論をうけたまはつて居りますと、わたくしも總身の血が沸きあがるやうに思はれます。

平九郎　貴公達でさへ其通りだ。まして拙者のやうに多年先生の御指南をうけてゐる者は、血が沸くの、胸が躍るのといふのを通り越して、腹のなかには絕えず大嵐が起つてゐて、腸が引つくり返りさうだ。（いよ〳〵激昂した樣子で）先生、是非とも攘夷を實行してください。

伴左衛　それは云ふまでもないことだ。身不肖ながら大泉伴左衛門橘の正連、楠家相傳の軍學を敎へ、あはせて劍術を指南して、世間からは由井正雪の二代目であるなどとも噂されてゐるが、拙者は決して正雪のやうな謀叛を企てるのではない。わが日本國の危急存亡を救ふがために、まごころを盡して攘夷の議論を唱へ、更にそれを實行しようと考へてゐるのだ。おまへ達もかならず思ひ違ひをしてはならんぞ。いゝか。

一同　（聲をそろへて）わかりました、判りました。

伴左衛　判つてゐるなら諄くは云ふまいが、みんなもよく覺えて置け。（更に聲を勵まして）うか〳〵してゐる

と、わが日本國はほろびるぞ。それを救ふには攘夷のほかは無いのだ。

一同　はあ。

（下のかたの板戸をあけて、下總屋義平、廿二三歳、薪屋のせがれの拵へ、風呂敷づつみを抱へて出づ。）

義平　皆さん、今日は……。（一同に會釋して進み出る）先生、お寒うございます。

伴左衛　義平、まゐつたか。町人のおまへ達はよく寒い寒いといふが、この道場では寒いの暑いのと云ふのを禁じてある筈だ。かりにも武藝を學ぶもの、殊にこの天下多事の際にあたつて、寒いの暑いのと弱いことを云つてゐられるか。なん時でも火水のなかへ飛び込むほどの覺悟がなければならない。たとひ町人でもこの道場へ足踏みをする以上、武士のたましひを持たなければならんぞ。

義平　恐れ入りましてございます。つい口癖になつて居りますので、詰まらないことを申上げて御機嫌を損じました。なに、わたくしは些とも寒いことはございません。今まで空つ風の吹く店先へ出て、襦袢一枚で松薪を二十把ほども打ち割つてまゐつたのでございます。薪割り劍術だなどと皆さんにひやかされますが、どうして、どうして、わたくしの腕つ節はなか〳〵しつかりしたものでございます。

平九郎　今も噂をしてゐたところで、おまへの腕の強いことは、おれ達もよく知つてゐる。お前や刀屋の長七は町人ながらも頼もしい奴だと、先生も褒めてゐられるくらゐで、それだけに又餘計の小言もおつしやるのだ。有難いと思はなければならないぞ。

義平　さう仰しやられるといよ〳〵痛み入ります。町人ながらも何かのお役に立ちますやうにと、せい〴〵勉強いたす積りでございますから、何分よろしく願ひます。

伴左衛　そこで、けふは誰と立合はせるかな。

平九郎　（雄之助に）千島、貴公は今朝から誰とも立合はないやうだな。

雄之助　午まへは他出して居りましたので、唯今はじめて道場へ這入つたのでございます。

平九郎　では、丁度いゝ。貴公、この義平と立合はつしやい。

雄之助　承知しました。では、支度をしてまゐります。（下のかたに去る）

（義平は風呂敷づつみより稽古着や袴を出して着かへる。）

伴左衛　おれはこれから急ぎの手紙を二三通書かなければならないから、しばらく奥へ行つてゐるぞ。

お千代　お手紙をお書きになりますか。

伴左衛　むゝ。神奈川の同志の者から密書が來た。京都からも來てゐる。すぐにその返事をかいて、江戸表の形勢をくはしく知らせて遣らなければならないのだ。

お千代　（不審さうに）　そんなお手紙がいつ參りました。

伴左衛　（すこし口籠って）　え、午まへに來たのだ。

お千代　わたくしは一向存じませんでしたが……。

平九郎　いや、それは早飛脚が持つてまゐつたので、拙者がうけ取つて、すぐに先生におとゞけ申した。

お千代　（まだ不審らしく）　あの、神奈川と京都から早飛脚が……。

伴左衛　（叱るやうに）　なにも珍しがることはない。そんな密書はたび／＼來るのだ。（起ちながら平九郎をみかへる）　平九郎、あとで鳥渡來てくれ。

平九郎　はあ。

（伴左衛門は奥に入る。）

お千代　わたくしはこの通りの生まれ付きで、よく／＼うつかりしてゐると見えまして、そんな密書がたび／＼參ることを今まで些とも知らずにゐました。

平九郎　勿論密書の儀でござれば、それを存じてゐるのは拙者一人、先生が口外せらるゝのも今日がおそらく初めてゞござらう。（門弟等に）　貴公たちも決して他言してはならんぞ。

彌平次　（小聲で）　やはり攘夷の一件ですか。

平九郎　（意味ありげに）　時節が來れば自然にわかることだ。まあ、まあ、默つて先生にお任せ申して置け。先生には深いお考へがあるに相違ないのだ。

（義平をはじめ、門弟等は顔をみあはせて、なんとなく緊張した氣分になる。下のかたより雄之助は稽古着をつけて出づ。）

雄之助　（義平に）　お待たせ申した。

（雄之助は面籠手の道具をつける。義平も面をつける。奥にて手をたゝく音がきこえる。）

平九郎　先生が手を鳴らしてゐられる。拙者を呼ばれたのかな。

お千代　兎も角もわたくしが行つてみませう。

平九郎　いや、拙者に相違ない。すぐにまゐりませう。

（平九郎は急いで正面の奥に入る。雄之助は道具をつけ、竹刀を持つてまん中に出る。義平も竹刀を持つて出る。）

雄之助　貴公はこのごろ大分上達したさうだから、遠慮なしに思ひ切つて撃ち込むぞ。

義平　お手柔かにねがひます。

（二人は竹刀にて撃ち合ふ。お千代と門弟等は見物してゐる。）

二

大泉家の奥の間。上のかたに床の間、これに「天地有正氣」と大きく書いたる掛地をかけ、時節の花を生け、軍書のやうなものも積んである。それにつゞいて菊水の紋を付けたる出入りの襖。庭には松などの立木がある。左右は建仁寺垣。

（大泉伴左衛門は軍書の卷物をのせたる机を横にし、大きい手あぶり火鉢を前にして、敷皮の上に坐つてゐる。下のかたの緣づたひに深堀平九郎出づ。）

平九郎　御用でございますか。

伴左衛門　む〻。（頤で招く）薪屋のせがれは稽古をしてゐるか。

平九郎　千島と立合つて居ります。

伴左衛門　（苦々しげに）おれは默つて聽いてゐたが、なぜ千島などと立合はせるのだ。千島のやうな正直者は遠慮會釋なしに擊ち込むではないか。

平九郎　はあ。（頭をかく）ついうつかりして飛んだことを致しました。刀屋のせがれには本庄を立合はせましたが……。

伴左衛門　本庄が負けたか。

平九郎　はあ。

伴左衛門　それでなければいけない。いつも云ふ通り、相手は町人の素人だ。なんでも弱さうな奴を出して、向うに勝たせて置けばい〻のだ。（舌打ちして）千島の奴め、本氣になつて無暗に相手をなぐるだらうな。

平九郎　あの男のことですから遠慮なしに打んなぐるかも知れません。まつたく氣のつかない事をして恐れ入りました。（少しく聲をひくめ）そこで、あの刀屋のせがれは例の軍用金を持つてまゐりましたか。

伴左衛門　ゆうべ窃と持つて來た。

平九郎　（笑ひながら）幾ら持つてまゐりました。

伴左衛門　五十兩持つて來た。刀屋はなか〳〵大身代だが、長七はまだ部屋住みだから、百兩二百兩などとまとまつた金は自分の自由にはならないらしい。

平九郎　それでも五十兩ならば上出來の方でございませう。今度は薪屋の番でございますな。

伴左衛門　一と口に薪屋といつても、下總屋はこ〻らでも古い店で、商賣も手廣くしてゐる。地所や家作も澤山に持つてゐる。殊におやぢは先頃死んでしまつて、今ではあの義平が跡取りだから、刀屋のせがれとは違つて錢金が自由になる。どうしても彼奴からは二三百兩ぐらゐは引き出さなければならない。その矢さきに千島のやうな奴を立合はせて、色氣も無しにぽん〳〵打んなぐらせては、

どうも工合が悪いではないか。

平九郎　（いよ〳〵恐縮して）　はあ。ではこれからすぐに參つて、ふたりの立合ひを止めさせませう。（起ちかゝる）

伴左衛　むゝ。本庄を又出すわけにも行くまいから、三上を出せ。あいつは口ばかりで、腕は弱いからな。

平九郎　はい、はい。

（平九郎はあわてゝ引返さうとするを、伴左衛門は呼びとめる。）

伴左衛　待て、待て。その勝負が片附いたら、義平をこゝへよこしてくれ。

平九郎　軍用金のことはまだお話しにならないのですか。

伴左衛　このあひだも鳥渡ほのめかして置いたが、まだ本當の掛合ひには及んでゐないので、これから改めて富婁那の辯舌を揮はなければならないのだ。

平九郎　正雪の二代目といふ先生の舌三寸で、百兩が二百兩になるか。

伴左衛　おれが得意の楠流で說得して、二百兩がまた三百兩になるか。

平九郎　三百兩がまた五百兩になるか。

伴左衛　えゝ、貴樣も隨分慾張つた奴だな。

平九郎　そこが楠流のお仕込みでございます。

伴左衛　無駄を云はずに早く行け、行け。

（平九郎は早々に下のかたへ去る。）

伴左衛　（あとを見送る）　あいつ小悧口のやうで、ときどきに仕損じを遣るので困る。おれの道場にゐる奴等にはどうして馬鹿が多いかな。

（奥の襖をあけてお千代出づ。）

お千代　あの、深堀さんは……。

伴左衛　平九郎は今そつちへ行つたが……。千島と義平はもう濟んだか。

お千代　はい。

伴左衛　義平が負けたらうな。

お千代　（笑ふ）　それは知れたことでございます。初めから段が違ふのですから、まるで勝負にはなりません。眞向からお面をしたゝかに撃たれて、義平さんは泣きさうな顔をしてゐました。

伴左衛　（舌打ちして）　大方そんなことだらうと思つた。千島の奴め、馬鹿正直だからな。

お千代　なにが馬鹿正直でございます。たがひに立合つた以上は眞劍勝負も同樣で、撃つか撃たるゝかの二つより外はないではございませんか。

伴左衛　理窟を云へばそんなものだが、そこには又、楠流の駈引もあるものだ。

お千代　では、わざと勝を讓つてやれとでも仰しやるのでございますか。楠流はそんな卑怯なものでございますか。
伴左衞　いや、さう云ふわけでもないが……。
お千代　では、どうして千島さんが馬鹿なのでございます。そのわけを屹と伺ひませう。
伴左衞　おれもあいつを馬鹿とは云はない、たゞ馬鹿正直な奴だと云つたのだ。
お千代　馬鹿も馬鹿正直も同じことではございませんか。
伴左衞　うるさいな。お前はなぜそんなに千島の肩を持つて、おれに食つてかゝるのだ。
お千代　さういふあなたは、なぜ千島さんを馬鹿だと仰つしやるのでございます。わたくしには其譯が判りません。
伴左衞　（じれる）判らなければ默つてゐろ。あんな奴は馬鹿にきまつてゐる。馬鹿だ、馬鹿だ。この道場で一番の大馬鹿野郎だ。
お千代　もし、お兄いさま。
（お千代は屹となつて詰めよれば、伴左衞門はその顔をみて、急に氣がついて笑ひ出す。）
伴左衞　はゝゝゝゝ。まあ、さう勃氣になるなよ。今のは冗談だ、冗談だ。はゝゝゝゝ。そこで、今こゝへ薪屋のせがれが來る。

お千代　義平さんが參るのでございますか。では、わたくしは御遠慮申しませう。（つんとして起ちかゝる）
伴左衞　いや、おまへはこゝにゐて呉れた方がいゝのだ。おれは薪屋のせがれに頼むことがあるから、お前もそばから口を添へて一緒に頼んでくれ。おまへが頼めば、あいつは屹と承知するよ。
お千代　わたくしが頼めば、どうしてあの人が承知するのでございます。
伴左衞　（意味ありげに笑ふ）まあ、いゝから俺の云ふ通りになつてくれ。
お千代　さうして、なにを頼まうとなさるのでございます。
伴左衞　（小聲で）實は軍用金の一件だ。
お千代　軍用金……。
伴左衞　黑船燒撃、異人館燒撃、それらの軍用金が要るではないか。
お千代　（うなづく）あゝ、そのことでございますか。
伴左衞　何事も御國のためだ。そのつもりでお前も加勢してくれ。
お千代　（凜然として又うなづく）はい、判りましてございます。
（お千代は俄に緊張した氣色で形をあらためる。下のかたの緣づたひに下總屋義平出づ。）

義平　先生。お呼びになりましたか。

伴左衛　おゝ、義平。もつと近く來てくれ。けふは折入つてお前に内談がある。

義平　はい。

お千代　どうぞ御遠慮なくお進みください。

義平　はい、はい。

（義平はお千代の顔を横目に見て、伴左衛門の前にゐざり寄る。）

伴左衛　（形をあらためて）扨、ほかでもないが、彼の黒船の一件だ。それはわたしからも毎々云ひ聞かせてあるから、おまへ方も萬々承知の筈だが、このごろの世のありさまを見るに、どうしてももう此儘では濟まされない。一度は大風雨を起さなければ駄目だ。近いうちに時機をみて、攘夷の手はじめに先づ異人館の燒撃を行る。

義平　（これも緊張して）異人館の燒撃……。

伴左衛　今だから云ふが、去年の六月、高輪の東禪寺へ斬込んだのも、みんなわたしが同志の者だ。併しあんなことではいけない。今度はもつと大がかりに遣る。

義平　もつと大がかりに……。

伴左衛　叱つ、大きな聲をしてはならない。そこで先づ江戸にある異人館を一度に燒き拂つて、それから水陸二手に分かれ、陸をゆく者は神奈川横濱へ押寄せて地雷火を仕掛ける。海をゆく者は横濱の沖へ乘り出して、そこにかゝつてゐる黒船に大筒小筒を撃ちかける。水陸挾み撃の手筈は已に整つてゐるのだ。

義平　して、それはいつの事でございます。

伴左衛　なにを云ふにも大事の企てゞあるから、その時機をみるのが大切だ。はやまつて仕損じては、折角の苦心も水の泡となるからな。

義平　御もつともでございます。

伴左衛　したがつて、その時機はいつとも決まつてゐないが、遠からず實行する筈になつてゐる。勿論わたし達ばかりではない、ほかにも同志の攘夷家が大勢あつて、先頃から内々でその打合せをしてゐるのだ。

義平　先刻の密書といふのもそれでございますか。

伴左衛　さうだ。就ては何をいふにも先立つものは金で、その軍用金に困つてゐる。（ため息をつく）勿論それぞれに手をまはして調達してはゐるものゝ、何分にも大仕事で莫大の金が要るからな。（相手の顔をぢつと視る）なか〳〵思ふ半分も出來ないのだ。

義平　（同情するやうに）さうでございませうなあ。その御苦心は幾重にもお察し申します。

伴左衛　察してくれるか。そこで、どうだらう。甚だ申しにくい儀ではあるが、何事も御國の爲だと思つて、おま

へから三百兩ばかり都合してはくれまいか。

義平　三百兩……。（少しかんがへてゐる）

（伴左衛門はお千代に眼くばせして、何か云へと指圖する。）

お千代　もし、下總屋さん。

義平　はい、はい。

お千代　今もお聞きの通りの次第で、兄も一生懸命の場合でございます。わが日の本は神の御末、その神國が夷狄に汚されるのを、唯おめ／＼と眺めては居られません。女でこそあれ、わたくしも兄とこゝろを一つにして、御國のために何かの御奉公をいたしたいと考へて居ります。それにつけても先に立つのは軍用金のことで、わたくし共も明け暮れに心を痛めて居るのでございますから、そこをよくお察し下さいまして……。

伴左衛　われ／＼の企ては、彼の由井正雪の謀叛や大鹽平八郎の一揆などと同じやうに考へられては困る。くどくも云ふやうだが、わが日本國のために夷狄を撃ち攘ふのであるから……。

義平　判つて居ります。わかつて居ります。先生のお企てが由井正雪や大鹽平八郎と違つてゐることは、わたくしにもよく判つて居ります。そこで、唯今わたくしが考へて居りましたのは、先生の仰しやつた三百兩、そのくらゐの金では何程のお役にも立つまいかと存じますので……

お千代　でも、三百兩といへば大金ではございませんか。

義平　勿論大金には相違ございませんが、非常の場合に三百兩ぐらゐでは……。せめて五百兩ぐらゐは差出しませんでは……。

伴左衛　え、五百兩……。（お千代と顔をみあせる）おまへが五百兩の金を都合してくれるか。

義平　微力ではございますが、そのくらゐのお役を勤めませんでは、わたくしの氣が濟まないやうに存じられます。先生が三百兩と仰しやるものを、こちらから五百兩に糶り上げましては、甚だ失禮のやうでもございますが、どうぞわたくしの心のうちも御推察下さいまして、枉げて五百兩の金子をお納め下さるやうに……。もし、お孃さま。あなたからも先生にお取りなしを願ひます。

伴左衛　（膝を打つて）いや、あつぱれ見あげたこゝろざしで、伴左衛門も感服いたした。三百兩と申し出しても、あるひは百兩か二百兩に値切らるゝことかと窃かに危んで居つたところ、却つてそちらから五百兩に糶りあげるとは……。あゝ、これぞまことの大和魂、日本人は皆かうなくてはならぬことだ。拙者もおぼえず感涙に咽び申した。同志の人々も定めて滿足であらう。一同に代つて拙者からお禮申すぞ。（一禮してお千代をみかへる）ど

うだ、お千代。町人のなかにも下總屋のやうな天晴れの男もある。わたしも好い弟子を持つて、同志の人々にも肩身が廣いぞ。

お千代　ほんたうに嬉しいことでございます。わたくしからもこの通り、お禮を申上げます。（手をつく）

義平　いえ、いえ。さう仰しやられては痛み入ります。（誇るがごとく）一寸の蟲にも五分の魂とやらで、わたくしのやうな者でも大和魂の半分ぐらゐは持ち合せて居りますよ。はゝゝゝゝ。

伴左衛　して、その金はいつ届けてくれるな。

義平　どうぞ明日のゆふ刻までお待ちを願ひたうございます。

伴左衛　おまへを疑ふわけではないが、餘りに呑み込みが早いので……。（念を押すやうに）これ、義平。よもや間違ひはあるまいな。

義平　（笑ふ）忠臣藏の口眞似ではございませんが、下總屋義平も男でございます。

伴左衛　いや、それで拙者も安心いたした。

お千代　かへす〴〵も有難うございます。

義平　（お千代の顔をみる）先生をはじめ、お孃さまにまで、そんなに御叮嚀の御挨拶をうけたまはりますと、五百兩はおろか、身上をみんな振つても差出したくなります。

伴左衛　それは又おひ〳〵に頼むかも知れないが、差當りは約束だけの金をな。

義平　はい、はい。その御念には及びません。

（下のかたより緣づたひに平九郎が一枚の名札を持ちて出づ。）

平九郎　先生。こんな人物がまゐりました。

伴左衛　（名札をうけ取る）山杉甚作……。はて、聞いたやうな名前だな。

平九郎　なにか内密の用件で暫時御意得たいと申すことでございます。

伴左衛　内密の用件……。（かんがへる）まさかに留守も使へまい。兎もかくも通してみろ。

平九郎　はい、はい。（引返して去る）

義平　お客來とございましては、わたくしはもうこれでお暇申します。

伴左衛　もう歸るか。用がなければ道場で遊んで行つたがよからう。（お千代に）おまへは茶の支度をしろ。

（お千代は起つて奥に入る。義平はそのうしろ姿を見送つてゐる。伴左衛門は笑ひながらそれを見てゐる。義平は不圖みかへりて伴左衛門と顔をみあはせ、極りが惡さうに會釋して早々に立去る。伴左衛門はやはり

笑つてゐる。やがて緣づたひに、平九郎は山杉甚作を案内して出づ。甚作は廿四五歲、ぶつ裂き羽織に小倉の袴をはき、朱鞘の大刀を持ち、少しく酒に醉つてゐる。）

平九郎　御案內申しました。

甚作　先日品川でお目にかゝつた中國の藩士、山杉甚作源の賴經でござる。（云ひながら座に着く）

伴左衞　おゝ、先日御意得申した山杉甚作どのでござつたか。好うこそお尋ねくだされた。その節は場所柄とて碌碌と御挨拶も致さなんだが、拙者は大泉伴左衞門橘の正運、あらためてお見識りくだされ。平九郎、おまへも此のお方を存じてゐる筈だな。

平九郎　實はよく存じて居ります。（甚作に）その節は飛んだ失禮をいたしました。

甚作　（笑ふ）いや、拙者こそ散々の亂暴、重々の失禮、なんとも申譯がござらぬ。しかし場所が場所でござれば、おたがひに無禮咎めも相成るまい。はゝゝゝゝゝ。

平九郎　（笑ふ）今日も大分御機嫌がよいやうでございますな。やはり南の方でございますか。

甚作　南といはず、北と云はず、いはゆる南船北馬といふわけで、ゆく先々を飲みあるく。これでなければ豪傑の英氣を養ふことは出來ませんぞ。いや、拙者ばかりでない。御貴殿たちが先日品川で豪遊をきはめて居られたのも、おなじく英氣を養ふ爲でござらう。違ひますかな。

（伴左衞門と平九郎は顏をみあはせて苦笑ひする。）

伴左衞　その節は武士にもあるまじき放埒惰弱の體を御覽に入れて、面目次第もござらぬ。

甚作　いや、いや、今日のやうな世の中には、放埒も結構、亂暴も苦しうござらぬ。つまりは大石內藏助の廓通ひも同じことで、いざといふ時に天下の眼をおどろかすやうな大仕事をいたせば、それで立派に武士の務は果たしたといふものでござる。

平九郎　まつたく左樣かも知れませぬな。

（奥よりお千代は茶を運びて出づ。）

お千代　（甚作に會釋して）疎茶でございます。

甚作　いや、おかまひ下さるな。（お千代をみて）これはなか／＼の美人。御主人の御愛妾でござるか。

伴左衞　いや、それは拙者の妹で千代と申す不束者、お見識り置きをねがひます。

甚作　おゝ、妹御でござつたか。これは失禮。拙者は山杉甚作と申す田舍侍、今後はよろしくお賴み申す。

（甚作とお千代は挨拶する。）

甚作　就ては早速ながら御無心がござる。拙者は醉ざめで喉が渴いてなりませぬ。何か大きいものに冷い水を一杯頂戴いたしたうござるが……。

お千代　はい、はい。かしこまりました。

（お千代は奥に入る。平九郎は伴左衛門の顏をみて、自分もあちらへ行かうかといふ。伴左衛門うなづく。）

平九郎　では、わたくしも暫時あちらへ參つて居りますから、御用があらばお呼びください。

（平九郎は二人に會釋して、下のかたへ去る。）

甚作　道場はなか〳〵御盛んのやうでござるな。世間の噂を聞きますれば、御貴殿は劍道のほかに軍學をも指南せられ、由井正雪の二代目と謂はれてゐると申すこと。拙者も今後は何かにつけて御教授にあづかりたいと存じてをります。

伴左衛　（得意らしく）正雪の二代目などとは及びも付かぬこと。由ない噂を立てられて、拙者も却つて迷惑して居ります。御覽の通りの町道場で、あまりに盛んと申すほどでもござらんが、天下の形勢不穩になるに連れて、このごろは武術の稽古に通ふ者が俄に殖えてまゐりました。

甚作　失禮ながらどのくらゐ御門人を御指南でござるな。

伴左衛　（傲然として）以前は二三百人でござつたが、唯今では五百人を少々越えて居ります。

甚作　なに、五百人以上……。（すこしく驚く）それは本當でござるか。

伴左衛　武士にいつはりはござらぬ。夜も晝も拙者の道場に竹刀の音の絶え間はなく、なにぶんにも手狹でござるに因つて、近いうちに町内の角屋敷を買ひ取り、道場を唯今の三倍ぐらゐに取擴げようと存じて居ります。

甚作　ふむう。（いよ〳〵驚いた體）それはまつたく御盛んのことでござるな。して、その五百人あまりの門弟衆のうちで、素破と云ふとき先生と生死を倶にすると云ふやうな者が、およそ幾人ぐらゐござるかな。

伴左衛　いづれも義氣金鐵のごとき者共ばかりでござれば、拙者が一たび采をふれば、誰も彼も皆よろこび勇んで、火水のなかへも飛び込みます。

甚作　では、五百餘人の門弟がいづれも先生と生死を倶にして、喜び勇んで火水のなかへも……ふむう。（又もや感嘆する）さりとはお羨ましい。御貴殿が日頃のお仕付け方も思ひやられて山杉甚作源の頼經、まことに感服仕つた。いや、恐れ入つてござる。（手をつく）

伴左　はゝ、左樣に御賞美くだされては、拙者こそ却つて恐れ入る。どうぞお手をお上げくだされ。

（奥よりお千代は大きい湯呑みを盆に乘せて出づ。）

お千代　お冷を汲んでまゐりました。

（甚作はだまつて手をついてゐる。お千代は不審さうに兄の顏をみる。）

お千代　（小聲で）　泣いてゐらつしやるやうでございますね。

（伴左衞門は微笑みながら、そのまゝ置いてゆけと眼で知らせる。お千代はうなづいて窃と奥に入る。）

伴左衞　山杉氏、水がまゐつた。お飲みなされぬか。

甚作　はあ。ありがたうござる。有難うござる。

（甚作は感激の涙をぬぐひながら顔をあげて、湯呑みの水を飲む。）

伴左衞　もう一杯さし上げませうか。

甚作　いや、十分でござる。唯今のお話で醉も一時に醒めました。（形をあらためる）　さて先生。先日品川の妓樓で初めてお目にかゝつた時には、拙者も大醉、御貴殿もよほど御酩酊のやうに見受けましたが、その砌り御貴殿には盛んに攘夷の說を唱へられ、夷狄にわが國土を蹂躪せらるゝは、神州男兒の恥辱であると仰せられたことは、醉中ながら拙者はよく記憶してをります。

伴左衞　なるほど其節は、隣座敷のお手前と測らずもお心安く相成つて、醉に乘じていさゝか平生のこゝろざしを述べましたる次第、かならずお笑ひくださるな。

甚作　いや、笑ふどころではござらぬ。德川の膝元といふこの江戸にも、御貴殿のごとき忠勇義烈の御仁が隱れてござるかと思へば、拙者は涙がこぼれるほどに嬉しうござつた。まつたく嬉しうござつた。（又もや感涙をぬぐふ）就てはよそながら其の御樣子を拜見いたしたさに、今日突然に推參いたした處、床には文天祥の正氣の歌がかけてある。五百人の門弟は先生と生死を俱にするといふ。これにて疑ふところもなく、御貴殿の人物も確に見とゞけましたれば、あらためて拙者が胸中の秘密を打ちあけ申す。（左右をみまはす）　そこらに聽く人はござるまいな。

（伴左衞門は無言にてうなづけば、甚作は一膝すゝみ寄る。）

甚作　拙者は中國の藩中なれど、唯今は浪人の身の上、攘夷の手はじめとして品川御殿山にある異人館を燒撃いたす覺悟でござる。

伴左衞　え。お手前が……。

甚作　同志の者はわづかに五人、今宵の四つを合圖に討ち入つて、異人どもを片端より斬り倒し、その宿所をも燒き拂ふことに評議一決いたしました。

伴左衞　（いよ〳〵驚く）　あの、御殿山の異人館へ夜討を企てらるゝと……。（わざと落付いて）　それはお勇ましいことでござるな。

甚作　もとより命を捨てゝかゝるからは、味方の多きを望むではござらぬが、五ケ國の異人館へ五人か向ふのでは、

一ヶ國一人の割合で、人數が少々不足でござる。就ては御貴殿の人物を見込んで……。

（云ひかけて相手の顔色をうかゞへば、伴左衞門はおどろいて默つてゐる。）

甚作　先生と生死を倶にするといふ五百人の門弟衆のうちから、武藝もすぐれ、心も逞しい者廿人ばかりを引連れて、なにとぞ我々に御加勢下さるまいか。

（伴左衞門は返事に困つてゐる。）

甚作　（たゝみ掛けて）御貴殿が日ごろ唱へてゐらるゝ攘夷の御議論を、われ〳〵がこれから實行しようといふのでござる。よもや御異存はござるまいな。

伴左衞　勿論それに異存はござらんが……。

甚作　では、お聞きとゞけ下さるか。

伴左衞　先づお待ちなされ。唯今も申す通り、拙者に於ても勿論異存はござらんが、異人館燒撃の企ては……。少しく時節が早いかと思はれます。

甚作　時節が早いと申さるゝか。

伴左衞　（あわてゝ）早い、早い。たしかに早うござる。時機到來すれば拙者も遣ります。併し今は早うござる。まして今夜などとは餘りに躁まつて居ります。

甚作　しかし形勢は次第に切迫して……。

伴左衞　いや、早い、早い。

甚作　もはや一日も猶豫はなりません。

伴左衞　（いよ〳〵慌てゝ）いや、いや、何と云はれても、早い、早い。早うござる。お手前たちは年が若いので、たゞ一圖に躁り立たるゝが、天下の大事は左樣に輕卒に取扱ふべきものではござらん。大局を見るの明あるものは、今しばらく隱忍して、おもむろに形勢の變化を窺はなければなるまい。なにしろ、まだ早い、早い。お手前たちも無謀の企てはお止めなされ。

甚作　無謀の企て……。（むつとする）では、貴殿はどうでも不承知か。われ〳〵の味方になつては下さらぬか。日ごろの攘夷論は皆いつはりか。

伴左衞　いつはりではござらんが、時節がまだ早いといふに……。お手前はどうも理窟の判らぬ御仁だな。

甚作　二口目には早い早いと、それにかこつけて逃れようとするは……。さては貴殿、口と心とは違つてゐるな。

伴左衞　（ぎよつとして）なんでも宜しい。お手前達のやうな亂暴者と論は無益だ。お歸りください。歸らつしやい。

甚作　いや、歸るまい。これほどの機密を打ちあけて、世間に洩れたら萬事の破滅だ。どうでも不同意であるならば、拙者にも覺悟があるぞ。（朱鞘の大刀をひき寄せる）

伴左衞　（おどろいて身がまへする）これはいよ〳〵亂暴

狼藉、言語道斷。お手前は氣でも違つたか。

甚作　馬鹿をいへ。われ〳〵攘夷の血祭に、先づ貴様の素つ首をぶつ放すのだ。さあ、おのれ、覺悟しろ。（詰めよる）

伴左衛　いや、どうも呆れた奴だ。

（伴左衛門も床の間の刀を取らうとする。この時、うしろの襖をあけて、お千代はうかゞひ出で、懐劍をぬいて甚作に斬つてかゝる。甚作も不意におどろいて身をかはしながら、鐵扇を把つてあしらひ、遂に懐劍を打ち落してお千代を引き据ゑる。そのあひだに、伴左衛門は刀を取つて起ちあがり、大きい聲で呼ぶ。）

伴左衛　狼藉者だ、狼藉者だ。早くまゐれ。

（甚作は舌打ちしてお千代を突き放し、縁より庭に飛び降りる。）

甚作　おのれ、卑怯者め。おぼえてゐろ。

（甚作は下のかたへ逃げかゝると、恰も庭口より千島雄之助が駈け來り、出逢ひがしらに甚作に突きあたる。）

雄之助　おのれ、曲者……。

（雄之助は組みつくを、甚作は振り放して逃げ去る。雄之助はつゞいて追つてゆく。お千代も落ちたる懐劍を拾ひて、これも庭へ駈け降りるを、伴左衛門は呼びとめる。）

伴左衛　これ、これ、どこへゆくのだ。

お千代　日ごろの修業も仇となつて、おめ〳〵とおくれを取つたのが殘念でございます。あとを追つかけて二度の勝負を致さなければなりません。

伴左衛　いや、怪我でもすると詰まらない。あんな奴は千島にまかせて置けばいゝのだ。

お千代　その千島さんに怪我でもあつては猶大變でございます。

（お千代は下のかたへ駈けてゆく。）

伴左衛　これ、待て、待て。どうも氣違ひじみた奴が多いな。

（下のかたの縁づたひに平九郎が先に立ち、津村彌平次、本庄新吾、犬塚段八、三上郡藏出づ。彌平次等四人はいづれも竹刀又は木太刀を持ち、段八と郡藏は胴と籠手を附けてゐる。）

九郎　先生。何事が出來いたしたのでございます。

伴左衛　今の浪士の奴めが不意におれに斬付けようとしたのだ。

彌平次　なにか口論でもなさいましたか。

伴左衛　別に喧嘩口論をしたと云ふわけでもない。あれは亂心してゐるのだ。

四人　氣ちがひでございますか。
伴左衞　むゝ、氣ちがひだ、氣ちがひだ。
平九郎　して、あいつはどこへ參りました。
伴左衞　おれが鐵扇で眉間を一つ撃つて遣つたら、椽から轉げ落ちて這々の體で逃げて行つた。
新吾　眉間を撃たれて……。椽から轉げ落ちましたか。
伴左衞　それが卽ち東軍流の極意で、微塵の一手といふのだ。おまへ達に見せなかつたのは殘念であつたな。
段八　まつたく殘念でございました。
郡藏　して、相手はよほどの手利きでございましたか。
伴左衞　この道場のうちでは恐く彼の相手に立つ者はあるまい。あれほどの腕前を持ちながら亂心するとは氣の毒なことだ。それに付けても千島とお千代はどうしたか、行つて見て來い。ふたりは彼を追つて行つたのだ。
平九郎　左樣でございますか。それ。
（平九郎はみかへりて指圖すれば、彌平次等四人はあわたゞしく引返して去る。それを見送つて、平九郎は摺寄る。）
平九郎　先生。實のところは一體どうしたのでございます。
伴左衞　あいつ等は徒黨を組んで、攘夷の手始めに御殿山の異人館を燒撃するから、おれにも加勢しろといふのだ。
平九郎　ふむう。（顏をしかめる）して、御承知なさいましたか。
伴左衞　途方もない、誰がそんな氣ちがひの仲間入をするものか。それを忌だと斷つたら、今度は貴樣を血祭にするといふので、おれも少し驚いたよ。
平九郎　併しお怪我が無くつて結構でした。（笑ひながら）先生。これからは些と川岸をかへて、よし原の方へ乘り出さうではございませんか。品川へは兎角にさういふ亂暴ものが入り込んで、とんだ係り合ひになりますからな。
伴左衞　そればかりでなく、品川は眼と鼻のあひだで、どうも近所の噂になり易いからな。
平九郎　さうでございますよ。軍用金の使ひ途が萬一露顯した日には大しくじりですから……。
伴左衞　（下のかたを見て）叱つ、叱つ。
（平九郎はあわてゝ口を噤む。庭口よりお千代と雄之助が引返して出づ。）
平九郎　おゝ、亂暴者はどうした。
雄之助　殘念ながら取逃がしました。
伴左衞　取逃がしたか。
お千代　わたくしは殘念でなりません。（泣く）あんな男に不覺を取りまして……。お兄い樣に合はす顏がございません。
伴左衞　（打消すやうに）まあ、いゝ、いゝ。あんな者を

相手にするな。あんな奴は逃がして遣る方がいゝのだ。
雄之助　あれは氣ちがひだ、亂心者だ。
伴左衞　お千代さんのお話では、攘夷の血祭に先生の首を取るとか申したさうで……。
お千代　それが氣ちがひの證據だ。攘夷家が攘夷家の首を取る……。そんな馬鹿なことがあるものか。
伴左衞　でも、ほんたうの氣ちがひのやうにも見えませんでしたが……。
義平　いや、氣ちがひだ、氣ちがひに相違ない。おれにはちやんと判つてゐるのだ。
（庭口より下總屋義平、鉢卷き片肌ぬぎにて木太刀を持ちて出づ。）
伴左衞　先生、亂暴者が押込んださうでございますな。
義平　はゝ。騷ぐことはない。相手はもう逃げてしまつた。
伴左衞　浪士が斬込んだと聞きまして、わたくしはびつくり致しました。
義平　そんなことに一々びつくりしてゐて、今の世の中が渡れるものか。浪士などが十人や二十人斬込んで來ても。東軍流の一手で……。（鐵扇で擊つ眞似をする）みんな此の通りだ。はゝゝゝゝ。
（伴左衞門は反り返つて笑ふ。義平は鉢卷をはづして肌を入れる。）
雄之助　併しあんな奴は又出直して來ないとも限りませんから、めつたに油斷はなりますまい。
平九郎　今の先生は千金のおん身だ。用心に用心しなければなるまい。いろは歌留多にも油斷大敵と敎へてあるからな。
お千代　（空をみる）冬の日はみじかいので、もう暮れかかりました。今夜は庭にかゞりを焚いて、夜陣を張らなければなりますまい。
義平　では、わたくしの內から松薪を運ばせませう。お玄關先から庭先まで一面にかゞりを焚いて、味方の威勢をみせて遣るがよろしうございます。
伴左衞　いや、世間の手前もあるから、むやみに騷ぎ立ててはならない。今夜は宵から門をしめて、おとなしく謹愼してゐろ。たとひ何處で何事が起つても、決して駈け出してはならないぞ。
一同　（わからぬながらに）はあ。
伴左衞　ほかの門弟にも申聞かせて、今夜は一人も表へ出るなと云へ。出ると飛んだ迹坐を受けるぞ。
一同　はあ。
伴左衞　義平も早く家へ歸れ。
義平　（よんどろなく）はい。

伴左衛　表の門を早くしめろ。

平九郎　今からすぐに閉めますか。

伴左衛　えゝ、知れたことだ。閉めろ、閉めろ。

（伴左衛門は無暗に急き立てる。一同は煙にまかれてゐる。）

――幕――

第二幕

一

芝の田町、薪屋の店さき。正面は店にて、軒には下總屋と漆で書いたる看板の額をかけ、上のかたの壁には帳面が澤山にかけてある。よき所に帳場格子、店火鉢などもある。店の上のかたは出格子の窓、その下には用水桶がある。下のかたには大きい物置小屋、それに薪や炭俵が積み込んである。

（十二月初旬の午に近い頃。下總屋の若い者時助、勘八の二人は小屋の前に出て、時助は薪を割つてゐる。勘八は炭を切つてゐる。小僧仙吉は炭團を干してゐる。近所の娘おもと、おきんの二人は遊藝の稽古の歸りのこゝろにて、燕口や撥などを持つて立つてゐる。煤掃きのやうな音きこゆ。）

時助　どこだ、どこだ。さつきからトンパタ遣つてゐるのは……。さう〴〵しい奴だな。

仙吉　横町の伊勢屋だよ。

勘八　横町の伊勢屋か。あいつも變り者だな。今から煤掃きをする奴もねえものだ。

時助　ちげえねえ。江戸の煤はきは權現樣以來、十三日にきまつてゐますと云つて教へてやれ。

おもと　煤はきぢやあない、引越しよ。

勘八　引越しならあんなに叩き立てることはねえ。おらあ煤はきかと思つた。

時助　それにしても伊勢屋はどこへ引越すのだ。

おきん　こゝらは品川の海に近いから、山の手の遠いところへ引越すと云つてゐてよ。

勘八　そんなに黒船を怖がることもあるめえ。そのためのお臺場が出來てゐるぢやあねえか。

おもと　それでも安心は出來ないと云つて、隣町の三河屋さんでも、女や子供たちを川越の親類にあづけたと云ふわ。

おきん　あたし達もどこかへ逃げて行きたいわねえ。

時助　なにしろ世間がさう〴〵しくなるのは困つたものだ。黒船は押寄せて來ねえにしても、御殿山のやうな一件があるからな。

仙吉　あの時はまつたく怖かつたな。

おもと　異人館が燃えあがつた時には、あたしは顫へてしまつてよ。

勘八　異人館へ斬込むのは、今度で三度目ださうだが、どうも悪いことが流行るものだ。

（店の奥より亭主義平出づ。それを見て、若い者等はあわてゝ仕事にかゝる。義平は表へ出て下のかたを見る。）

義平　伊勢屋ではいよ／＼引越しか。

時助　もう御存じですか。

義平　きのふそんな話をちよいと聞いたが……。（笑ふ）品川の近所が怖いさうだ。こゝらは海に近いので、ふだんから黒船を恐れてゐるところへ、御殿山の焼撃騒ぎが始まつたので、いよ／＼怯氣が付いて、急に引越すことになつたらしい。

勘八　今聞けば、三河屋でもおかみさんや子供を立退かせたさうですよ。

義平　氣の弱い者はずん／＼立退くことだ。今に何事がはじまるか判らないからな。

（若い者も娘も義平の前にあつまる。）

時助　旦那。まだ何事か始まりますか。

義平　始まらないとは限らない。いや、屹と始まるに相違ない。このあひだの御殿山の焼撃どころぢやあない。（得意らしく笑ふ）もつと度偉い騒ぎが出來するかも知れないぞ。

一同　（顔をみあはせる）　さうでせうか。

義平　浪士の五人や十人が異人館へ斬込んだところで何うなるものか。

勘八　それでも異人は驚くでせうな。

義平　おどろくかも知れないが、そのくらゐのことでは日本人のほんたうの腕前をみせるわけには行かない。江戸の異人館なんぞを焼いたところで、多寡が知れてゐる。横濱にある異人館を片つ端からみんな焼き拂つてしまつて、それから沖にかゝつてゐる黒船を焼撃ちするのだ。それでなければ、本當の攘夷が出來るものか。

時助　さうなると軍ですね。

義平　（だん／＼亢奮して來る）今もいふ通り、五人や十人が斬込むのとは譯が違つて、何百人が水陸二手にわかれて押寄せるのだからな。地雷火を仕掛ける、鐵砲をうち掛ける、火をつける。その火のなかを潜つて、槍や刀で攻め込んで行く。その勇ましいこと、考へても身體がぞく／＼するやうだ。

勘八　萬一そんなことが出來したら大變ですね。

義平　なにが大變だ。さうなるのが本當だとは思はないか。

下總屋義平が男をみせる時節が來るのだ。（笑ふ）それを思ふと、赤穗義士の討入りなどは仕事が小さい。まるで子供だましのやうなものだな。はゝゝゝゝ。

（時助と勘八は顏をみあはせてゐる。仙吉進み出づ。）

仙吉　旦那。向ふ横町の烟草屋で炭團を持つて來てくれと云つてゐました。

時助　さうだ。わたしも忘れてゐた。横町の鐵物屋でも堅炭を五俵持つて來いと云ふことでした。

義平　よし、よし。堅炭でも佐倉でも、炭團でも消炭でも、なんでも勝手に脊負つてけ、持つてけ。かういふ時節になつたら、商賣の損德なんぞを考へてゐる暇はないのだ。（娘等に）おまへ達も幾ら町家の娘つ子だからと云つて、この時節に燕口なんぞをかゝへて、遊藝のお稽古に通つてゐると云ふことがあるものか。わたしの先生の道場へ行つて、ちつと薙刀の稽古でもしたらどうだね。

おもと　あら、いやだ。ねえ、おきんちやん。

おきん　あたし達に劍術のお稽古なんぞ出來やあしないわ。

義平　なに、出來ないことがあるものか。先生の妹さんなんぞは年は若し、容貌は好し、それで薙刀でも竹刀でも免許皆傳で、大抵の男はかなはないのだからな。

おもと　そりやあ劍術の先生の妹ですもの、强いのは當り前だわ。

おきん　あの人は內弟子の若い人とよく一緒にあるいてゐるわ。

義平　（聞きとがめる）先生の妹さんが內弟子の若い男と一緒にあるいてゐる。その相手はなんといふ男だね。

おもと　なんといふ人だか知らないけれど、あたしも見たことがあるわ。色の白い、好い男の人よ。

おきん　ゆうべも横町の暗いところで、寒い風に吹かれながら二人で內所話をしてゐたわ。

義平　むゝ。（かんがへる）その相手は千島だらうな。さうだ、さうだ。きつと千島に相違ない。どうも二人の樣子がちつと可怪いと思つてゐたら、やつぱりさうであつたのか。（舌打ちして）いま〳〵しい畜生だ。

おもと　あら、そんなに怒ることはないぢやありませんか。

おきん　おまへさん、やきもちを燒いてゐるの。をかしいわねえ。

二人　はゝゝゝゝ。

義平　（氣がついて、苦笑ひする）なに、やきもちを燒くといふわけぢやあないが、行儀のきびしい大泉先生の道場で、そんな不埒を働くとは怪しからぬことだ。

おきん　不埒だか何だか判らないが、たゞ立話しをしてゐ

ただけのことよ。
義平　その立話しが不埒だといふのだ、男と女が暗いところで立話しをしてゐるなどといふのは確かに不埒だ、不埒千萬だ。
（義平の樣子が惡いので、娘等は顏をみあはせる。）
おもと　あんまりおしやべりをしてゐるといけないから、あたしもう歸るわ、左樣なら。
おきん　さよなら。
（娘ふたりは早々に下のかたへ立去る。）
仙吉　先生のところの千島さんといふ人が、お孃さんと一緒にあるいてゐるのを、わたしも見たことがありますよ。
義平　おまへも見たか。相手はいよ〳〵千島だな。
仙吉　たしかに千島さんでした。
時助　いくら先生の妹でも、もう年ごろの娘だからな。
勘八　それに、あの千島といふ人は、先生の道場では一番好い男だから、さうなるのが當りまへかも知れないよ。
義平　（ひとり言のやうに）當りまへかも知れない。併し先生はおそらく御存じあるまい。（また思ひ直して）ええ、勝手にしろ、勝手にしろ。そんなことは大事のまへの小事だ。女のことなどに屈托して、天下の大事を忘れてはならない。下總屋義平は男をみがけば好いのだ。
（義平はひとり言のやうに云ひながら奧に入る。）
時助　（笑ふ）旦那の忠臣藏が又始まつたぜ。
仙吉　（臺詞のやうに）下總屋義平は男でごんす。
勘八　大きな聲をすると、奧へきこえるぞ。馬鹿な奴だ。
時助　しかし旦那の劍術氣ちがひにも困つたものだな。
勘八　それが此頃はだん〳〵に嵩じて來て、異人館燒撃がどうだとか斯うだとか、途方もねえことを云ひ出すぢやあねえか。
時助　冗談にもそんなことを云つて、世間へきこえたら飛んだ目に逢ふぜ。どう考へても困つたものだ。
（上の方より刀屋のせがれ長七、風呂敷につゝみたる二三本の刀を持つて出づ。）
長七　お寒うございます。
時助　毎日空つ風が吹いて困ります。
長七　旦那は……。道場ですか。
勘八　いゝえ、内にゐます。まあ、おかけなさい。（店口から呼ぶ）おい、おとよどん、おとよどん。
（女中おとよ、奧より出づ。）
勘八　刀屋の若旦那が入らしつたと、旦那にさう云つてくれ。
おとよ　はい、はい。（奧に入る）
時助　ぢやあ、おれも鐵物屋へ堅炭をとゞけて來るかな。
勘八　おれも手傳つて遣らう。（仙吉に）おまへも早く烟

草屋へ炭團を持つて行け。

仙吉　あい、あい。

（仙吉は炭團を笊に入れて、下のかたへ去る。時助と勘八は小屋に入りて炭俵を持ち出す。奥より義平出づ。）

義平　今日は……。この頃はお忙がしいでせうね。

長七　むやみに忙がしくつて困ります。けふもこれからお出入り先を二三軒廻らなければなりません。だん／＼に寒くなつて、こちらの御商賣もお忙がしいでせう。

義平　なに、商賣なんぞ忙がしくつても閑でも構ひません。天下の大事が胸一杯につかへてゐるので、十露盤なんぞを彈いてゐる氣にはなれませんよ。

（時助と勘八は炭俵をかつぐ。）

二人　おやあ、ちよいと行つて來ます。

長七　御苦勞ですね。

（時助と勘八は炭俵をかついで、下のかたへ去る。奥よりおとよは茶を持つて出づ。）

おとよ　いらつしやい。

（おとよは茶をすゝめる。長七は默禮する。おとよはそのまゝ奥に入る。）

義平　これから道場へお出でなさるのかえ。

長七　實はその事で少し御相談に來たのですが……。（左右を見まはす）おまへさんは先生のところへ軍用金をお納めになりましたか。

義平　納めました。おまへさんもお納めになつたさうですね。

長七　わたしは五十兩おとゞけ申しました。

義平　五十兩……。（少いといふやうな顔をする）　わたしは五百兩納めましたよ。

長七　五百兩……。（おどろく）　そんなにお納めになりましたか。

義平　先生は三百兩といふお話でしたが、こつちから糶り上げて五百兩にしました。なにしろ大がかりの仕事ですからね、莫大の軍用金も要りませうよ。わたしも何とか都合して、そのうちにもう少し納めたいと思つてゐます。

長七　（かんがへる）　併し先生は深堀さんやお弟子たちを連れて、品川や吉原で毎晩のやうに全盛遊びをしてゐると云ふぢやありませんか。

義平　（うなづく）　それはわたしも知つてゐますが、世の中が引つくり返るやうな大仕事を目論んでゐるんだから、些とぐらゐの氣晴しは仕方がありますまい。お弟子達だつて、みんな命がけで懸つてゐるんですからね。

長七　さう云へばさうですが……。（又かんがへる）　わたし達ばかりでなく、攘夷の軍用金と名をつけて、ほかの

お弟子達からも取立てゝゐるさうですね。

義平　(又うなづく)　ほかのお弟子達だつて、都合の出來る人はみんな出すがようござんすよ。それが本當ですよ。(云ひかけて少し考へる)　お前さんは何か先生を疑つてゐるんですかえ。

長七　疑ふと云ふわけでもありませんが……。この頃は先生の遊び方が少し激しいので……。

義平　(笑ふ)　まあ、まあ、長い眼で見ておいでなさい。大石内藏助を疑つた人達は、あとで恥をかきましたよ。はゝゝゝゝ。お前さんも用を片附けて早く道場へおいでなさい。わたしも午飯を食ふと、すぐに行きますから。(奥にむかつて呼ぶ)　おい、おい。

おとよ　はい、はい。

義平　もう午飯の支度は出來たかね。

おとよ　もう出來て居ります。

長七　(起ちあがる)　ぢやあ、わたしも行きませう。

義平　追ひ立てるやうでお氣の毒ですが、どうも此頃はおちついてゐられないので……。(おとよに)　さあ、早く膳を出してくれ。

おとよ　はい、はい。(奥に入る)

長七　どうもお邪魔をしました。

義平　御めんなさい。

(義平は早々に挨拶して奥に入る。長七はかんがへながら下のかたへ行きかゝり、ふと向ふを見て思案し、引返して小屋のなかに隱れる。向ふより大泉伴左衛門が先に立ち、深堀平九郎、津村彌平次、本庄新吾、いづれも醉ひて出づ。)

平九郎　天氣は好いが、風がなか〳〵寒うございますな。

伴左衛　取分けこの冬は空つ風が吹くやうだな。こゝまで來るうちに酒の醉も大抵醒めてしまつた。

彌平次　(笑ふ)　それで丁度いゝかも知れません。道場の近所へ來て、あんまり赤い顏をしてゐるのは、些と極まりが悪いやうですからな。

新吾　近所ばかりでなく、留守番の奴等にも猜まれますよ。はゝゝゝゝ。

(四人は店さきを通りかゝる。)

伴左衛　亭主は店にゐないやうだな。

平九郎　朝から道場へ詰めかけてゐるのかも知れません。

伴左衛　さういふ氣ちがひも無くては困る。あいつが軍用金を奉納してくれたので、先づ當分は遊べるといふものだ。

平九郎　(店の方をみかへりながら)　先生……。(伴左衛門の袂をひく)

伴左衛　（頓着せず）　併しゆうべは何うも面白くなかつたな。

新吾　やつぱり遊び馴れたせゐか、吉原よりは品川の方が居心がいゝやうでございます。

彌平次　そんなことを云ふとお里が知れるぞ。はゝゝゝゝ。

伴左衛　本庄のいふ通り、やつぱり品川の方が居心がいゝやうだ。吉原で寒さうな冬がれの田圃をながめてゐるよりも、品川の廣い海を見晴らした方が、どうも清々して氣分がはつきりするではないか。深堀はどうだな。

平九郎　遊びと名が付けば、どつちでも惡くはありませんが、このあひだのやうな事もありますから、先づ當分は南の方角を避けた方が無事らしうございます。

（店の奥より義平の母おかめ、四十餘歲、出づ。）

おかめ　おゝ、先生ではございませんか。

伴左衛　おふくろか。せがれはどうしたな。

おかめ　義平は奥で御飯を頂いてをります。呼んでまゐりませうか。

平九郎　いや、別に用もないのだ。（促すやうに）　先生、まゐりませう。

伴左衛　こゝで水を一杯貰つて行かうかな。

おかめ　お冷でございますか。

平九郎　いや、いや、道場はすぐそこだ。先生。家へ歸つてからゆつくりと召上るが好うございます。

伴左衛　ひどく氣ぜはしない男だな。

（平九郎は彌平次と新吾に眼くばせして、早く先生を連れてゆけといふ。ふたりも心得て進みよる。）

彌平次　さあ、まゐりませう。

新吾　まゐりませう。

伴左衛　えゝ、うるさい奴等だ。

（三人にせき立てられて、伴左衛門は上のかたへ行きかゝる時、下のかたより山杉甚作出づ。）

甚作　先生……。大泉先生……。

伴左衛　誰だ、誰だ。（みかへる）　おゝ、お手前は……。

（伴左衛門はおどろく。平九郎も甚作をみて驚きながら身がまへする。）

甚作　（笑ひながら）　いや、先日は飛んだ失禮をいたして、何とも申譯がござらぬ。實はそのお詫ながら參上いたす途中、こゝでお目にかゝつたのは仕合せでござつた。

伴左衛　（油斷せず）　なに、詫に來る……。あれほどの狼藉をはたらいて、唯一通りの詫や挨拶で濟むと思はつしやるか。第一、お手前のやうな人物に屢々出入りをされては、拙者甚だ迷惑だ。足ぶみは屹とお斷り申すぞ。

甚作　（やはり笑つてゐる）　御迷惑は萬々察して居ります

が、先づ先日のおわびを篤と申述べた上で、更に少々御無心申上げたい儀がござるので……。

伴左衞　無心がある……。(相手を屹と睨む) 扨はお手前、又もや拙者の首を取りに來たのか。

(伴左衞門は刀の柄に手をかける。平九郎は彌平次等に眼くばせして、いづれも鯉口をくつろげる。)

甚作　いや、いや、その御用心は御無用。今日拙者が御無心申すのは、大泉先生の首ではござらぬ。

伴左衞　では、なんの無心だ。

甚作　往來中では些と申しにくい儀でござるが……。(左右をみまはして、少しく聲を低める) 實は軍用金の御分配にあづかりたいのでござる。

平九郎　なに、軍用金を分配しろ。

甚作　(笑ふ) これだけ申せば、先生にはよくお判りの筈だ。この上にくどいことは申すに及ばぬ。先生も拙者も一つ穴の貉だと御承知くだされればよいのでござる。あははゝゝゝ。

(伴左衞門は相手の顏をながめて考へてゐる。甚作は笑ひながら進みよる。)

甚作　まだ御疑念が晴れぬとあれば、もう少し詳しく申しませうか。

伴左衞　いや、判つた、判つた。

甚作　おわかりになりましたか。

伴左衞　むゝ。(笑ふ) お手前の正體も大抵は判つたやうだ。

甚作　御安心なされたか。はゝゝゝゝ。

伴左衞　はゝゝゝゝ。

平九郎　(不安らしく) 先生……。

伴左衞　まあ、いゝ。(甚作に) さあ。兎も角もお越しなされ。

(伴左衞門は先に立つてゆく。彌平次と新吾はまだ不安らしく甚作を取圍んでゆく。)

平九郎　(あとに殘りて考へる) して見ると、あいつもやつぱり食はせ者かな。どうも油斷のならないことだ。

(平九郎は人々のあとを追つて上のかたへ去る。おかめは始終無言で見送つてゐる。小屋の內より長七も伸びあがりて見送る。下のかたより八町堀同心野澤喜十郎、手先ふたりを連れて出づ。手先の一人は長七に眼をつけて喜十郎にさゝやく。喜十郎うなづいて指圖すれば、手先は長七に聲をかける。)

手先甲　もし、おまへさんは刀屋の備前屋さんだね。

長七　左樣でございます。

手先乙　旦那が御用と仰しやるのだ。

長七　はい。

喜十郎　おまへは備前屋のせがれ長七だな。丁度好いところで逢つた。すこし調べることがあるから番屋まで來てくれ。

長七　どんなお調べでございませうか。

喜十郎　べらばうめ。御用の調べ事が往來で出來るものか。貴樣は躄ぢやあるめえ。二本の足でずん／＼歩いて來い。ぐづ／＼してゐると繩を打つぞ。

手先　さあ、來い、來い。

（喜十郎は先に立ち、手先ふたりは長七を圍みて、下のかたへ引返して去る。おかめは驚いてあとを見送つてゐる。奥より義平出づ。）

おかめ　お前、刀屋の長さんが自身番へ連れて行かれたよ。

義平　長さんが番屋へ……。誰が連れて行きました。

おかめ　八町堀のお役人のやうだつたよ。

義平　なんだらうな。（考へる）どんな樣子か、ちよいと行つて覗いて來ませう。

（義平は出て行かうとするを、おかめは引きとめる。）

おかめ　うつかり行つて係り合になるといけないよ。

義平　なに、大丈夫です。

（義平は振切つて出てゆく。）

二

第一幕の道場。

（お千代は鉢卷、襷がけにて薙刀を持ち、千島雄之助は稽古着に道具をつけて竹刀を持ち、稽古をしてゐる。やがて二人はうなづき合ひて稽古をやめ、左右をみまはして進みよる。）

雄之助　（小聲で）誰もゐないやうです。稽古はこのくらゐにしませう。

（お千代はうなづいて鉢卷を取る。雄之助も面を取りて額の汗をふく。）

お千代　そんなに汗が出ましたか。

雄之助　あなたと立合ふのですもの、どんな寒い日でも汗が出ますよ。油斷をしてゐたら、向ふ脛を手ひどく掻つ拂はれますからね。

お千代　なんであなたにそんな事をするものですか。大丈夫ですよ。あなたこそわたしを憎がつて、隨分ひどくお撲ちなさる事がありますよ。

雄之助　それは先生や深堀さんの見てゐる時だけのことですよ。ほかに誰もゐないときに何でそんな暴つぽいことをするものですか。

お千代　どうだか當てになりませんわ。

（二人は仲よく寄添つて、上のかたの高いところに腰をかける。）

お千代　この二三日は急に寒くなりましたね。

雄之助　なにしろもう十二月の暦を開いたのですから、このくらゐの寒さが本當でせうよ。この空模様では近いうちに雪かも知れません。歳の暮に積られると、出這入りが不便で困ります。いくら世の中がさう／＼しいからと云つて、道普請ぐらゐしたら好さゝうなものだが、どこの町内でも此頃はちつとも構ひませんからね。

お千代　まあ、そんなことは何うでもいゝぢやありませんか。それよりも千島さん。大變なことがありますの。

雄之助　大變な事……。なんですか。（云ひかけて氣がつく）あ、誰か來たやうです。

お千代　あら、誰か來ましたか。

（二人はあわてゝ道場のまん中に出て、薙刀と竹刀を取り、掛け聲をしながら二三度撃ち合つて又やめる。）

お千代　誰も來やしませんわ。

雄之助　來ないやうですね。はゝ、なんのことだ。

（二人は左右をうかゞひて、笑ひながら再び腰をかける。）

雄之助　そこで今のお話の大變とは、どんなことです。浪士でもまた斬込みましたか。

お千代　いゝえ、そんなことぢやありません。千島さん。（摺寄る）あなたとわたしとの秘密を、兄が薄々感付いたらしいのです。

雄之助　先生が感付いた……。（案外おちついてゐる）さうかも知れませんよ。先生だつて盲でも聾でもないのですからな。

お千代　おまへが何かにつけて千島を庇ふのはどうも可怪い。正直に白狀しろと云つて、兄がわたしを責めるのです。

雄之助　そこで、あなたは白狀しましたか。

お千代　どうして白狀出來るものですか。わたしは飽までも知らないと云ひ切つてゐるのです。

雄之助　（笑ふ）いつそ思ひ切つて白狀したらどうです。先生も却つて安心なさるかも知れない。

お千代　なんで安心するものですか。物堅い兄のことですから、どんなに立腹するか判りません。

雄之助　立腹なされば丁度幸ひです。

お千代　あなたは破門、わたしは勘當されるかも知れません。

雄之助　（いよ／＼平氣で笑ふ）あなたは勘當、わたしは破門、さうなればいよ／＼結構で、願つたり叶つたりですよ。

お千代　（呆れたやうに男の顔をみる）あなた、どうかしたのですか。

雄之助　なぜです。
お千代　（用心するやうに起ち上る）　あなた、なんだか變ですわ。氣でも違つたのぢやありませんか。
雄之助　冗談云つてはいけません。かう見えても、あなたよりは氣は確です。あなた達の方が化かされてゐるのですよ。
お千代　何に化かされてゐるのです。
雄之助　（又笑ふ）　この道場に巣を作つてゐる古狸と古狐……。まあ、そんなものでせうな。
お千代　古狸と古狐……。
雄之助　あなたはどうも正直だからいけない。この道場は化物屋敷と心得てゐれば好いのですよ。はゝゝゝゝゝ。
お千代　（俄に下のかたを見る）　あら、又だれか來たやうですよ。（薙刀を把り直して出る）
雄之助　まあ、よろしい。先生に感付かれた以上は、もうびく／＼することはありません。そんな芝居は止しにして、まあこゝへお掛けなさい。少し御相談することがありますから。
（お千代はまだ不安らしく下のかたを窺ひながら、再び腰をかける。）
雄之助　御承知の通り、世の中がだん／＼騷がしくなつて來たので、幕府では別手組といふものをこしらへて、旗本や御家人の次三男を新規にお召抱へといふことになりました。
（お千代はうなづく。）
雄之助　おかげで冷飯食ひの次三男が食ひ扶持にありつけると云ふわけで、わたしも近いうちに別手組お召抱へを願ひ出ようと思つてゐるところでした。さうなれば、先生に破門されても、こゝの道場を放逐されても、驚くことはありません。あなたも勘當されゝば幸ひです。二人が手を引かれてこゝを出て行かうではありませんか。
お千代　（かんがへる）　そりやもう、一緒になりたいのは山々ですけれども……。御國のために苦勞してゐる兄を見捨てゝ、このまゝこゝを出て行くのは、どうも濟まないやうな氣もしますので……。
雄之助　それだから化かされてゐると云ふのですよ。眉毛に唾でも附けて、まあ、お聽きなさい。
（雄之助はお千代にさゝやく。お千代は一々おどろいて聽いてゐる。このあひだに、奥の襖をあけて大泉伴左衞門出で、ふたりの樣子をうかゞつてゐたるが、やがてだしぬけに呶鳴りつける。）
伴左衞　これ、なにをしてゐるのだ。
（ふたりはびつくりして飛び退く。）
雄之助　おゝ、先生でございましたか。

伴左衛　なにが先生だ。貴様のやうな奴に先生と呼ばれては迷惑千萬だ。けふかぎり破門するぞ。

雄之助　（おどろきもせず）わたくしを破門すると仰しやいますか。

伴左衛　勿論のことだ。仔細は一々云ふにも及ぶまい。貴様は早々にこの道場を出て行け。お千代は一間に押籠めて窮命するから、さう思へ。

雄之助　わたくしの破門は致し方ございませんが、不義の御成敗ならばお千代さんも一緒に御勘當をねがひませう。わたくしだけ逐ひ出されるのは片手落ちでございます。

伴左衛　えゝ、やかましい。貴様にそんな指圖をうける覺えはない。お千代はおれの妹だから、おれが勝手に仕置をするのだ。貴様はだまつて早く立去れ。

雄之助　いや、片手落ちのお捌きではわたくし飽までも不承知でございます。わたくしを逐ひ出すならば、お千代さんも御勘當をねがひます。（お千代に）さあ、あなたも支度して一緒にお出でなさい。

伴左衛　お千代。おまへは一足も動くことはならんぞ。兄が大勢の弟子を取立てゝ、まさかの時には御國のために竭さうとしてゐるのを、おまへは豫て知つてゐる筈ではないか。その兄の手助けをしようともしないで、内弟子の一人と不義密通をはたらくとは、なんたる心得違ひだ。

雄之助　（笑ふ）さう仰しやる先生が深堀さんを始めとして、大勢の弟子たちを代る〴〵に引き連れて、三日にあげず品川や吉原へお乘り出しになるのは、どう云ふお心得でございます。わたくしは馬鹿正直と札附きにされて、みんなから仲間はづれにされてゐるので、一度もお供をしたことはありませんが、なんでも金錢を湯水のやうに撒き散らして、大盡遊びをなさると云ふことでございますが……。

伴左衛　おれの遊蕩は別に仔細のあることだ。大石内藏助が祇園島原撞木町に遊興したのは、一方には世間の眼をくらまし、一方にはおのれが英氣を養ふためだ。燕雀焉んぞ大鵬のこゝろざしを知らんとはこの事で、貴様たちのやうな小人ばらに英雄豪傑のこゝろざしが判ると思ふか。馬鹿な奴め。

雄之助　正雪の二代目といふ先生の道場にまゐつて、あしかけ二年苦んだお蔭で、その英雄豪傑のこゝろざしと云ふものが、わたくしにもよく判つて來ました。英雄豪傑といふのは、心にもない議論を吐いて、世間を瞞着して軍用金を澤山にかき集めて、自分の道樂に使ひ捨てることを云ふのです。

伴左衛　（すこし慌てゝ）なんだ、なんだ。怪しからぬこ

とを申す奴だ。もう一度云つてみろ。
雄之助 （又笑ふ） 幾度云つても同じことです。破門になつた以上、わたくしはもうお暇申します。（起ちあがる）先生。歸り際にたゞ一言申上げて置きます。軍用金ももう隨分お取立てになりましたらうから、先生がお得意の攘夷論もこゝらで大抵打止めになすつた方が宜しからうかと存じます。どうも長々御厄介になりました。では、お千代さん。
（雄之助はお千代に眼で知らせて、下のかたへ立去る。お千代は薙刀を羽目にかける。）
伴左衛 （あとを見送つて罵る） あいつ途方もないことを云ふ奴だ。これ、これ、お千代。おまへよもやあんな奴と一緒に出て行きはしまいな。
お千代 お兄いさま。千島さんの云つたことは本當でございますか。
伴左衛 な、なんで本當なものか。一から十までみんな嘘だ、あいつめ、だしぬけに破門を申渡されたので、氣が顚倒して、眼が眩んで、口から出まかせの囈語をいふのだ。熱に浮かされた病人もおなじことで、相手にならない。あんな奴の云ふことを眞面目に聽いてはならないぞ。
お千代 英雄豪傑といふのは、心にもない議論を吐いて、世間の人を瞞着して、軍用金を澤山に取りあつめて、自分の道樂に使ひ捨てるのを云ふのださうでございます。
伴左衛 （呶鳴る） うそだ。嘘だ。あいつの云ふことは皆んな嘘だ。それがおまへには判らないか。あんな狐や狸のいふことを眞面目に聽いてはならないと云ふのに……。
お千代 どつちが本當の狐か狸か。わたくしには正體が判らなくなりました。まあ、奥へまゐつてゆつくりと考へてみませう。
（お千代は兄に會釋して、下のかたへ立去る。）
伴左衛 （かんがへる） 腹立ちまぎれに破門を云ひ渡したが、かうなると千島の奴めを無暗に逐ひ出すのも考へものだぞ、むゝ、さうだ、さうだ。
（伴左衛門は俄に起つて下のかたへ行かうとすれば、出合ひがしらに深堀平九郎出づ。）
平九郎 おゝ、先生。千島を破門なすつたのでございますか。
伴左衛 お千代と不義を働いたので、一旦は破門を申渡したのだが……。まだ立去りはしまいな。
平九郎 内々で支度をしてあつたものと見えまして、手早く荷物を取りまとめて居ります。
伴左衛 では、いよ／＼油斷がならない。あいつに少し云つて聞かせることがあるから、もう一度こゝへ連れて來い。

平九郎　こゝへ連れてまゐりますか。當人はすぐに立去るやうに云つて居りますが……。
伴左衛　（せいて）それだから早く連れて來いといふのだ。あいつ何うも見拔いたらしいからな。
平九郎　なにを見ぬきました。
伴左衛　英雄豪傑とは、こゝろにもない議論を吐いて、世間の人を瞞着して、軍用金をかき集めるのだなどと平氣で云ふのだ。
平九郎　（おどろく）あいつがそんな事を云ひましたか。ふだんから馬鹿正直だと思つて油斷してゐたら……。それは怪しからん。實に案外でございました。
伴左衛　それだから迂濶にあいつを放逐するのも少し不安心になつて來た。無暗なことを世間へ吹聽されては困るからな。
平九郎　困ります、困ります。大困りでございます。では、破門の一件は無論にお取消しでございませうな。
伴左衛　むゝ、取消しだ、取消しだ。早く行け。
平九郎　はい、はい。（早々に引返して去る）
伴左衛　どうもおれが些と拙かつたな。千島の奴め。おれの前でも平氣であんなことを云ふやうでは、お千代にも何を云つて聞かせたか判らないぞ。念のためによく詮議して置かなければならない。これ、お千代……お千代。

（伴左衛門は奥へ行かうとすれば、出合ひがしらに襖をあけて、山杉甚作出づ。）

甚作　先生。いつまで拙者を待たせて置くのでござる。
伴左衛　おゝ、山杉氏……。實は少々こちらに取込みがござつて、まことに失禮をいたした。さあ奥へお越しなされ。
甚作　いや、こゝで結構でござる。（坐る）うけたまはれば何かお取込みがあるといふ、その最中に長居はお邪魔、早速用談に取りかゝりますが、彼の軍用金のわけ前の一條、お聞き入れ下さるか。
伴左衛　では、貴公。異人館燒撃などと云つたのは嘘か。
甚作　お察しの通り。（笑ふ）御貴殿は堂々たる門戸を張つて、軍學劍術指南の看板をかけてゐる先生、殊に軍學は正雪の二代目とも云はれてゐるので、おなじ嘘をついても人がすぐに信用する、軍用金も忽ちあつまる。それに引きかへて我々のやうな瘦浪人は、なにを云つても取合ふ者もなく、旨い酒も容易には飮まれぬといふ始末。あまりお羨ましいので、つい一と狂言かきました。
伴左衛　この間はあんなことを云つて、拙者を試しに來たのだな。
甚作　失禮は幾重にも御免ください。併し迂濶に冗談も云へないもので、あれから四五日過ぎると、ほんたうに御

殿山の異人館に火をつけた奴があつたには少し驚きました。

伴左衛　實は貴公等の仕業であらうと推量してゐたのだが……。さうすると、貴公はあの一件にかゝり合ひ無しか。

甚作　どうして、どうして、あんなことに係り合ふほどの度胸はありませんよ。はゝゝゝゝ。

伴左衛　そこで、貴公は幾ら呉れといふのだ。

甚作　さあ、百兩ばかり……。如何でせう。

伴左衛　（首をふる）いけないいな。

甚作　では、七八十兩……。

伴左衛　いけないいな。

甚作　では、ぎり〳〵のところで五十兩……。それでも御不承知か。

（伴左衛門はだまつてゐる。）

甚作　それでも御不承知とあれば致し方がない。尾羽うち枯らしても山杉甚作源の頼經。御貴殿から二十兩や三十兩は貰ひたくい。

伴左衛　（見縊つたやうに）貰ひたくなければ、この相談は止めたらどうだな。

甚作　その代りに、大泉先生の攘夷論は口ばかりで、あれは僞者でござる、食はせ者でござると、大きい聲で世間を呶鳴つてあるきますぞ。（笑ふ）まあ、喧嘩は止めにして、おとなしく五十兩お貸し下さい。

伴左衛　五十兩は高いな。

甚作　では、幾らと云はれるな。

伴左衛　先づ、三十……五兩ぐらゐかな。

甚作　三十五兩……。どうも勘定が惡いな。ではせめて四十兩に願ひたい。それで拙者も往生します。

伴左衛　その往生際がよくないな。

（伴左衛門は焦らすやうにまだ澁つてゐる。下のかたより下總屋義平出づ。）

義平　先生。（云ひかけて、甚作を見て躊躇する）

伴左衛　なんだ。

（義平はやはり躊躇してゐる。）

伴左衛　なにか急用か。

義平　はい。

甚作　それでは拙者は暫時御遠慮いたさうか。

伴左衛　氣の毒だが、もう一度奥でお待ちください。

（甚作は澁々しながら奥に入る。）

義平　（聲を低めて）先生。一大事でございます。備前屋のせがれが番屋へ連れて行かれました。

伴左衛　長七が自身番へ連れて行かれた。それはどうしたのだ。

義平　なんだか不安心でございますから、わたくしもあと

を追つて行つて、番屋のかげで窃と様子を窺つてをりますと、町人の身分で何で大泉の道場へ出這入りをするのだといふ詮議でございます。

伴左衞　町人でも武藝を習ふものは此頃幾らもある。それをなんで詮議するのだ。

義平　先づその詮議から始まつて、それからだん／＼に先生の詮議に取りかゝると、長七も意氣地のない奴で、色色のことを饒舌つてしまひまして、攘夷の軍用金として下總屋義平は五百兩を納めたの、自分は五十兩を納めたの、誰々は幾ら出したのと、みんなべら／＼と申立てたのでございます。

伴左衞　仕樣のない奴だな。

義平　このあひだの晩、御殿山の異人館へ火をつけたのは先生達の仕業と睨んでゐるとみえまして、役人は頻りにそれを詮議してゐました。

伴左衞　（罵るやうに）そんな事をおれが知るものか。ばか／＼しい。

義平　それは御存じないとしても、一方の企てが露顯いたしましては一大事でございます。先生はどうなさいます。

伴左衞　一方の企て……。（義平の顏を見て、やゝ曖昧に）むゝ、それは少し困るな。

義平　かうなつたらよもや無事では濟みますまい。（いよいよ亢奮して）わたくしはもう覺悟して居ります。しかし長七のやうな意氣地無しとは違ひますから、萬一召捕りになりまして、たとひ火水の拷問をうけましても、むやみに白狀するやうな卑怯な眞似はいたしません。下總屋義平は男でございます。町人でこそあれ、わたくしも天下の志士の一人でございます。

（伴左衞門は默つて考へてゐる。）

義平　あなたはどうなさいます。正雪の二代目で尋常に切腹をなさいますか。それとも捕手をひき受けて、花々しく斬死をなさいますか。

伴左衞　さう／＼しい。まあ、靜にしてくれ。

（下のかたより津村彌平次出づ。）

彌平次　おい、下總屋。おふくろが呼びに來てゐるぞ。

義平　おふくろが來ましたか。

彌平次　なんだか知らないが、顏の色を變へて、駈け込んで來て、すぐに伜を呼んでくれと云ふのだ。

義平　その用は大抵わかつてゐます。先生、もうお別れでございます。

（義平は覺悟して下のかたへ去る。）

彌平次　をかしな奴だな。先生、義平はどうかしたのでございますか。

（伴左衞門はだまつてゐるので、彌平次は不思議さう

に立去る。それと入れちがひに下のかたより平九郎出づ。)

平九郎　千島の奴はどうしても肯かないで、强情に立去つてしまひました。

伴左衛　(みかへる)　千島はたうとう立去つたか。

平九郎　それからお千代さんもこんな書置をのこして、出て行かれたさうでございます。

伴左衛　お千代も出て行つたか。(忙がはしく書置をひらいて讀む)

平九郎　やはり千島にそゝのかされたのでございませうな。

伴左衛　狐狸の化物屋敷を立去るに就て、お兄いさまの手箱のうちから金百兩を拜借してゆくと書いてある。

平九郎　行きがけの駄賃に金百兩とは……。お千代さんにも似合はない大膽不敵なことでございますな。これはいよ〳〵驚きました。

伴左衛　まだ驚くことがある。刀屋の長七が召捕られて、なにも彼も白狀したさうだ。

平九郎　(驚く)　え、ほんたうでございますか。

伴左衛　鍔屋のせがれが今こゝへ知らせに來たのだ。

平九郎　なんだか樣子が可怪いと思つたら、義平はそれを云ひに來たのですな。

伴左衛　このあひだの晩、御殿山へ火をつけたのは、おれ達の仕業と睨まれてゐるらしいのだ。

平九郎　(すこし安心して)　いや、それならば全く覺えのないことで、別に心配することもございますまい。何とでも申開きは立ちます。

伴左衛　御殿山の一件は勿論おぼえの無いことで、その申開きは立つ筈だが、困つたことには不斷からおれが心にもない攘夷論を唱へてゐる。おまけに異人館を攻めるの、黑船を燒擊するのと云つて、大勢から軍用金を取立てゝゐる。それらの機密が長七の口から洩れたらしいから、所詮無事には濟むまいではないか。今さら嘘でございますとも云へず、云つたところで、上役人が素直に承知する筈があるまい。

平九郎　(ため息をつく)　さうでございませうな。そこで、先生はどうなさいます。

伴左衛　それをおれも考へてゐるのだ。最初は一時の强がりに攘夷論を唱へたが、だん〳〵調子に乘り過ぎて、たうとう本物にされてしまひさうだ。(同じく嘆息する)おれも正雪の二代目かな。

平九郎　さうして、長七はどうなりました。

伴左衛　長七はどうなつたか知らないが、義平もつゞいて引擧げられるらしい。おふくろが呼びに來たといふのは

大方それだらう。

平九郎　（悸えたやうに）さうすると、今度はこつちの番でございますな。

伴左衛　さう思はなければなるまい。平九郎、おまへも覺悟しろ。

平九郎　え、覺悟とは……。

伴左衛　世のことわざにも嘘から出た誠といふことがある。今さら役人どもに召捕られて、我々は僞者でございます。食はせ者でございます。日ごろの攘夷論はみんな嘘でございますと、本音を吹いて白狀するのも、あまりと云へば恥さらしだ。もう斯うなつたら、乘りかゝつた船で仕方がない。いつそ思ひ切つてほんたうの攘夷家で押通してしまはうではないか。人は一代、名は末代、どうも其の方が立派なやうだぞ。

平九郎　（よんどころなく）はあ。

伴左衛　おれは書置をかいて切腹する。おまへ達も一緒に腹を切れ。

平九郎　はあ。

伴左衛　さうすれば世間でもあつぱれ攘夷家の最期だと褒めてくれるだらう。

平九郎　（迷惑さうに）承知いたしました。では、これから一同にその趣を觸れてまゐりませう。

伴左衛　併しおれが書置をかく間、邪魔をしないやうにしてくれ。

（伴左衛門は奧に入る。）

平九郎　どうも大變なことになつたな。

（平九郎はぼんやりと考へてゐる。下のかたより津村彌平次、本庄新吾、犬塚段八、三上郡藏があわたゞしく出で來り、いづれも武裝する心にて、羽目にかけたる胴を着けようとする。）

平九郎　これ、これ、みんなどうするのだ。

彌平次　刀屋のせがれも薪屋のせがれも召捕られました。

平九郎　それはおれも知つてゐる。

新吾　つゞいてこゝへも捕手が向ふといふ噂ですから、その防ぎをしなければなりません。

段八　先生はどうしておいでです。

平九郎　先生は奧にゐる。

郡藏　表口と裏口をどう防ぐか。先生のお指圖をねがひます。

平九郎　まあ、待つてくれ。少し靜かにしろよ。

（彌平次等は構はずに武裝する。下のかたより女中およしとおみつが手をひき合つて出づ。）

およし　もし、皆さん。何事が起つたのです。

彌平次　えゝ、おまへ達に話しても判らないことだ。

おみつ　でも、なんだか怖いぢやありませんか。どうしたんです。
段八　なんでもいゝから、早く行け、行け。
郡藏　うか〳〵してゐると、飛んだ目に逢ふぞ。
およし　まあ、どうしたらいゝだらうねえ。
（およしとおみつは怖々ながらに立去る。）
平九郎　先生は書置きをかいてゐるのだから、邪魔をしてはいけない。（考へて）おれも少し用がある。貴公達はこゝに待つてゐてくれ。（早々に下のかたへ立去る）
彌平次　併しこゝに待つてゐても仕方があるまい。
新吾　兎もかくも表口を見張つてゐようではないか。
一同　さうだ、さうだ。
（彌平次等四人も下のかたへ去る。やがて奥の襖を蹴放して、山杉甚作が逃げて出るを、手先三人が追つて出づ。）
手先　神妙にしろ、神妙にしろ。
甚作　人ちがひ……人違ひでござる。拙者は來客で……この道場の者ではござらぬ。人ちがひ……人違ひ……。
（甚作は叫びながら逃げかゝるを、手先等は追ひまはして組み伏せる。）
甚作　これは怪しからぬ。人違ひだといふのに……人違ひ……人ちがひ……。
（甚作は叫びつゞけながら繩にかゝる。）

三

もとの薪屋の店さき。
（下のかたよりおかめは番太郎の權兵衛に送られて出づ。）
權兵衛　どうも飛んだことになりました。
おかめ　（泣く）せがれが眞先に召捕られ、つゞいて奉公人がみんなお呼び出しになつて、一體どうなることでせうかねえ。
權兵衛　ほんたうにお氣の毒なことでございますよ。併しまあお前さんだけ返して下すつたのはお上のお慈悲でございますから、お調べの片附くまでは謹愼しておいでなさるより外はありますまい。番屋の方に何か變つたことがあれば、わたしがすぐに知らせに來ます。
おかめ　何分おねがひ申します。
（おかめは巾着より小錢を出し、紙につゝんで遣る。）
權兵衛　ありがたうございます。
（權兵衛は下のかたへ行きかけて、小屋に眼をつけ、少しく思案しながら立去る。）
おかめ　（ため息をつく）まつたくこれから何うなるのかねえ。

（おかめは眼をふきながら四邊(あたり)をみまはし、これも小屋に眼をつける。）

おかめ　何かごそ／＼云ふやうだが、犬でも這入つたかしら。

（おかめは小屋を覗きにゆくと、炭俵のかげには深堀平九郎が着流し、頰冠りにて忍んでゐる。）

おかめ　おゝ、深堀さん……。

平九郎　叱つ、叱つ。

おかめ　（小聲で）あなた……。いつの間にこんなところへ。

平九郎　兎もかくも日の暮れるまでこゝに隱して置いてくれ。誰が來てもこゝへ入れてはならないぞ。

おかめ　はい。

（平九郎は再び隱れる。おかめは不安らしく左右をみまはしてゐると、奥より女中おとよ出づ。）

おとよ　お歸りなさい。

おかめ　留守に何事もなかつたかえ。

おとよ　はい。

（下のかたより野澤喜十郎は手先五六人を連れて出づ。あとより權兵衛も出づ。）

喜十郎　番太郎、これか。（十手にて小屋を指す）

權兵衛　左樣でございます。

喜十郎　炭部屋に隱れてゐるとは、師直のやうな奴だな。それ、引出せ。

（喜十郎の指圖にしたがひて、手先は小屋へ踏み込まうとすれば、内より炭俵や薪を投げ出す。）

手先　御用だ、御用だ。

（手先は飛び込んで、平九郎をひき出せば、平九郎は一生懸命にふり放して下のかたへ逃げてゆくを、喜十郎と手先は追つてゆく。）

おかめ　（權兵衛に）おまへさんが訴へたのかえ。

權兵衛　隱して置くと、こちらの御迷惑になりますよ。

おとよ　（上のかたを見る）あれ、あれ、道場の先生が……。

おかめ　おゝ、先生が繩附きになつておいでなさる。

權兵衛　先生もたうとうお召捕りになつたのか。

（下のかたより近所の男、女、子供、往來の人などがわや／＼云ひながら出づ　上のかたより與力井口金太夫が先に立ち、同心一人と手先五六人が大泉伴左衛門に繩をかけて出づ。そのあとからも男女大勢が附いて出づ。）

金太夫　さあ、往來の邪魔だ　邪魔だ。退け、退け。

手先　（口をそろへて）退け、退け。

（伴左衛門は舞臺のまん中に立ちどまつて左右をみか

へる。）

作左衞　（大きい聲で）大勢のうちには拙者の名を聞き知り、顏を見識つてゐる者もあらうが、大泉伴左衞門橋の正運は擾夷のはかりごと顯れて、今や召捕りの身と相成つたのだ。大鹽平八郎や由井正雪の二代目と思ふな。拙者は楠や新田にも劣らぬ、日本國の忠臣義士だぞ。死んだ後には神に祀れ。

金太夫　さあ行け、ゆけ。

（金太夫等に追ひ立てられて、作左衞門は悠々として向ふへ牽かれてゆく。人々は感激の眼を以て見送る）

——幕——

番町皿屋敷（二場）

登場人物

青山播磨
用人柴田十太夫
奴　權次
權　六
青山の腰元お菊
お　仙
澁川の後室眞弓
放駒四郎兵衞
並木の長吉
橋場の仁助
聖天の萬藏
田町の彌作
ほかに若黨、陸尺、茶屋の娘など

一

麴町、山王下。正面にはたかき石段にて、上には左右に石の駒寄せ、石燈籠などあり。櫻の立木の奥に社殿遠くみゆ。石段の下には櫻の大樹、これに沿うて上のかたに葭簀張の茶店あり。店さきに床几二脚をおく。明暦の初年、三月なかばの午後。

（幡隨院長兵衞の子分並木の長吉、橋場の仁助は床几に腰をかけてゐる。茶店の娘は茶を汲んでゐる。宮神樂の音きこゆ。）

娘　お茶一つおあがりなされませ。

長吉　櫻も今が丁度盛りだね。

娘　こゝ四五日のところが見頃でございます。それに當年はいつもよりも取分けて見事に咲きました。

長吉　山王の櫻といへば、おれたちが生れねえ先からの名物だ。山の手で櫻と云やあ先づこゝが一番だらうな。

仁助　それだから俺達もわざ〳〵下町から登つて來たのだ。それで無けりやあんまり用のねえところだ。

長吉　これ、神樣の前で勿體ねえことを云ふな。山王樣の罰があたるぞ。

仁助　山王樣だつて怖えものか。おれには觀音樣が附いてゐるのだ。

娘　お背中にぢやあございませんか。（笑ふ）

仁助　やい、やい、こん畜生。ふざけたことを云やあがるな。

長吉　まあ、靜かにしろ。どうせ姐さんに褒められる柄ぢやあねえや。はゝゝゝゝ。

娘　ほゝ、とんだ粗相を申しました。

（ふたりは茶をのんでゐる。石段の上より青山播磨、廿五歳、七百石の旗本。あみ笠、羽織、袴。あとより權次、權六の二人、いづれも奴にて附添ひ出づ。）

播磨　櫻はよく咲いたな。

權次　まるで作り物のやうでござりまする。

權六　たなばたの赤い色紙を引裂いて、そこらへ一度に吹き付けたら、斯うもあらうかと思はれまする。

權次　はて、むづかしいことを云ふ奴ぢや。それより一口に、祭禮の軒飾りのやうぢやと云へ。はゝゝゝゝ。

（三人は笑ひながら石段を降りる。）

娘　お休みなされませ。

（三人は上の方の床几にかゝる。長吉と仁助は見てさゝやき合ふ。娘は茶を汲んで三人に出す。）

長吉　おい、ねえさん　こつちへもう一杯汲んねえ。

娘　はい、はい。（茶を汲んで來る）

長吉　（飮まうとしてわざと顏をしかめる）　こりや熱くつて飮めねえや。

（長吉はわざとその茶を播磨の前にぶちまける。）

權次　やあ、こいつ無禮な奴。なんで我等のまへに茶をぶちまけた。

權六　かう見たところが粗相でない。おのれ等、喧嘩を賣らうとするのか。

長吉　賣らうが賣るめえがこつちの勝手だ。買ひたくなけりやあ買はねえまでだ。

仁助　一文奴の出る幕ぢやあねえ、引込んでゐろ。こつちは手前達を相手にするんぢやあねえや。

播磨　然らば身どもが相手と申すか。（笠を取る）　仔細もなしに喧嘩を賣る、おのれ等のやうなならずものが八百八町にはびこればこそ、公方樣お膝元が騷がしいのぢや。

（この以前より放駒の四郎兵衞、町奴のこしらへにて子分二人をつれ、石段を降り來り、中途に立ちて窺ひゐたりしが、この時ずつと前に出る。）

四郎兵衞　仔細もなしに咬み付くやうな、そんな病犬は江戶にやあゐねえや。白柄組とか名を付けて、町人どもを嚇してあるく、水野十郎左衞門が仲間のお侍、青山播磨樣と仰しやるのはたしかにあなたでございましたね。

萬藏　さうだ、さうだ。この正月に山村座のまへで、水野と喧嘩をしたときに、たしかに見かけた侍だ。

彌作　違えねえ。坂田の何とかといふ奴と一緒になつて、その白柄をひねくり廻したのを、俺あちやんと覺えてるんだ。

（長吉と仁助は床几をゆづり、四郎兵衛はまん中に腰をかける。）

播磨　むゝ。白柄組の一人と知つて喧嘩を賣るからは、さてはおのれは花川戸の幡隨院長兵衛が手下の者か。

四郎兵衛　お察しの通り、幡隨院長兵衛の身内でも、ちつとは知られた放駒の四郎兵衛。

長吉　並木の長吉。

仁助　橋場の仁助。

萬藏　聖天の萬藏。

彌作　田町の彌作だ。

權次　やい、やい。こいつら素町人の分際で、歴々の御旗本衆に楯突かうとは、身のほど知らぬ蚊とんぼめ等。それほど喧嘩が賣りたくば、殿様におたづね申すまでもなく、云値でおれ達が買つてやるわ。

權六　幸ひ今日は主親の命日といふでも無し、殺生するにはあつらへ向きだや。下町から蜿くつて來た上り鰻、山の手奴が引つ摑んで、片つぱしから溜池の泥に埋めるからさう思へ。

四郎兵衛　そんな嚇しを怖がつて、尻尾をまいて逃げるほどなら、白柄組が巣を組んでゐる此の山の手へのぼつて來て、わざ／＼喧嘩を賣りやあしねえ。こつちを溜池へぶち込む前に、そつちが山王の括り猿、御子供衆のお土産にならねえやうに覺悟をしなせえ。

播磨　われ／＼が頭をたのむ水野殿に敵意を挾んで、とかくに無禮をはたらく幡隨院長兵衛、いつかは懲してくれんと存じて居つたに、その子分といふおのれ等が、わざと喧嘩を挑むからは、もはや容赦は相成らぬ。望みの通り青山播磨が直々に相手になつてくるゝわ。

四郎兵衛　いゝ覺悟だ。お逃げなさるな。

播磨　なにを馬鹿な。

子分四人　えゝ、休めちまへ、休めちまへ。

（播磨も權次權六も身がへする。四郎兵衛、その他四人も身構ひして詰めよる。娘はうろ／＼してゐる。この時、陸尺に女の乗物をかゝせ、若黨二人附添ひて走らせ來り、喧嘩のまんなかへ乗物をおろす。）

長吉　おい、おい。お前達も目さきが利かねえ。

仁助　こゝへそんなものを卸してどうするんだ。

二人　退いてくれ、退いてくれ。

（權次權六は若黨の顔を見ておどろく。）

權次　おゝ、こなたは小石川の。

權六　澁川様の御乗物か。

（乗物の戸をあけて澁川の後室眞弓、五十餘歳、裲襠すがたにて出づ。）

播磨　おゝ、小石川の伯母上、どうしてこゝへ……。

眞弓　赤坂の菩提所へ佛參のかへり路、よいところへ來合せました。天下の御旗本ともあらう者が、町人どもを相手にして、達引とか達人とか、毎日々々の喧嘩沙汰、さりとは見あげた心掛ぢや。不斷からあれほど云うて聞かしてゐる伯母の意見も、そなたといふ暴れ馬の耳には念佛さうな。主が主なら家來までが見習うて、權次、權六、そち達も惡あがきが過ぎまするぞ。

權次｝
權六｝はい、はい。（頭を押へてうづくまる）

四郎兵衛　見れば御大家の後室樣、喧嘩のまん中へお越しなされて、このお捌きをお付けなさる思召でござりますか。御見物ならもう少しおあとへお退り下さりませ。

眞弓　差出た申分かは知りませぬが、この喧嘩はわたしに預けてはくださりませぬか。播磨はあとで嚴しう叱ります。まあ堪忍して引いてくだされ。

四郎兵衛　さあ。（思案する）

長吉　でも、このまゝ手を引いては。

仁助　親分に云譯があるめえぜ。

萬藏　今更あとへ引かれるものか。

彌作　かうなるからは命の取遣りだ。

四人　かまはずに遣つちまへ、遣つちまへ。

眞弓　不承知とあればわたしがお相手。

四郎兵衛　え。

眞弓　それとも素直に引いてくださるか。

四郎兵衛　こりやあ困りましたね。いくら御武家にしたところが、女を相手に町奴がまさかに喧嘩もなりますまい。喧嘩は元より出たとこ勝負、けふに限つたことでもござりませぬ。おまへ樣のおあつかひに免じて、こゝは素直に歸りませう。長吉も仁助も蟲をこらへろ。

眞弓　よう聞分けて下された。そんならこゝはおとなしう。

四郎兵衛　どうも失禮をいたしました。もし、白柄組のお侍、いづれ又どこかで逢ひませうぜ。（長吉仁助等に）今聞く通りだ。さあ、みんな早く來い、來い。

長吉｝
仁助｝あい、あい。

（四郎兵衛は先にたちて、長吉と仁助と子分二人は去る。）

眞弓　これ、播磨。こゝは往來ぢや。詳しいことは屋敷へ來た折に云ひませうが、武士たるものが町奴とかの眞似をして、白柄組の神祇組のと、名を聞くさへも苦々しい。喧嘩がなんで面白からう。喧嘩商賣は今日かぎり思ひ切らねばなりませぬぞ。

播磨　はあ。

眞弓　きかねば伯母は勘當ぢや。わかりましたか。

播磨　はあ。

眞弓　それ。

（眞弓は眼で知らすれば、陸尺は乗物を舁きよせる。眞弓は乗物に乗りしが、再び首を出す。）

眞弓　これ、播磨。そちが惡あがきをすると云ふも、一つにはいつまでも獨身であるからのことぢや。この間もちよつと話した飯田町の大久保の娘、どうぢや、あれを嫁に貰うては。

播磨　さあ。（迷惑さうな顔）喧嘩のことは兎もかくも、その縁談の儀は……。

眞弓　忌ぢやと云ふのか。（かんがへる）ほかの事とも違うて、これは無理強にもなるまいか。そんならそれはそれとして、かへすがへすも白柄組とやらの附合は、きつと止めねばなりませぬぞ。

播磨　はあ。

（眞弓は乗物の戸をしめる。若黨等は播磨に一禮して向ふへ乗物を舁いてゆく。）

權次　殿樣、惡いところへ伯母御樣がお見えになりまして。

權六　わたくし共までが飛んだ灸を据ゑられました。

播磨　（笑ふ）伯母樣は苦手ぢや。所詮あたまは上らぬわ。今伯母樣に叱られた、その白柄組の水野どのは、仲間のものを誘ひ合せて、今夜わが屋敷へまゐらるゝ筈ぢや。醉うたら又面白い話があらう。

（風の音して櫻の花ちりかゝる。）

播磨　おゝ、散る花にも風情があるなう。どれ、そろそろ歸らうか。

權次
權六　はあ。

（權次は茶代を置く。娘は禮をいふ。播磨は行きかゝる。）

二

番町青山家の座敷。二重屋體にて、上のかたに床の間。つゞいて襖。庭には飛び石、上の方に井戸ありて、井戸のほとりに大いなる椿を見せたり。おなじ日の夕刻。

（上の方より庭づたひに、用人柴田十太夫が先に立ち、腰元お菊、お仙の二人出づ。ふたりは高麗燒の皿五枚を入れたる箱を持つ。）

十太夫　これ、大切の御品ぢや。氣をつけて持つてゆけ。よいか。

二人　かしこまりました。

十太夫　唯今お藏から取出したばかりで、別に仔細もあるまいが、念には念を入れよと云ふこともある。お勝手へ持つて退るまでに兎もかくも一度吟味をいたさう。その

箱をそれへ運べ。

二人　はい、はい。

（三人は縁にあがる。お菊は先づ箱をあけて五枚の皿を出す。十太夫は眼鏡をかけて一々にあらためる。つづいてお仙も五枚の皿を出す。十太夫はおなじく檢めてうなづく。）

十太夫　よし、よし、十枚ともに別條ない。くどくも申すやうなれど、これは大切のお品ぢや。かならず粗相があつてはならぬぞ。

お仙　御用人樣。この十枚のお皿が何うしてそのやうに大切なのでござります。

十太夫　そちは新參、詳しいわけをよく知るまいが、このお皿は高麗燒で、御先祖樣から代々傳はるお家の寶ぢや。萬一あやまつてその一枚でも打碎いたら嚴しいお仕置、先づ命はないものと覺悟せい。

お仙　え。（顫へる）

十太夫　ぢやによつて滅多に取出したことはないのぢやが、今宵は白柄組のお頭水野十郎左衛門樣がお越しに相成るについて、殿樣格別のお心入れで、御料理の器にそのお皿をおつかひなさる。又しても諄く申すやうぢやが、一枚一枚鄭重に取りあつかへ。割るは勿論、疵をつけても一大事ぢやぞ。よいか。

二人　はい、はい。

十太夫　殿樣がお歸りになるまでに、あちらのお客間を取片附けて置かねばならぬ。では、そのお皿を元のやうに箱に入れて、お勝手の方へ運んでおけ。やれ、忙しいことぢや。

（十太夫はそゝくさと庭に降りて上の方に去る。お仙はあとを見送る。）

お仙　ほんにいつも／＼氣せはしないお人ぢや。併しそれほど大切なお皿ならよく氣をつけて取扱はねばなるまい。なう、お菊どの。はて、お前は何をうつとりとしてゐるのぢや。

お菊　（突然に）お仙どの。

お仙　なんぢやえ。

お菊　このごろ殿樣は御縁談があるとかいふ噂ぢやが、お前それをほんたうと思ふかえ。

お仙　さあそれは、新參のわたしには判らぬが、なにやらそんなお噂がないでも無いやうな。

お菊　無いでもないやうな。（口のうちで繰返す）若しあつたとしたら。

お仙　おめでたいことぢや。

お菊　さうかも知れぬ。（腹立たしげに云ひしが又思ひ直して）いや、それは嘘であらう。嘘ぢや、嘘ぢや。うそ

に違ひない。

お仙　でも、殿様ももうお年頃ぢや。奥様をお貰ひなさるに不思議はあるまい。

お菊　奥様……。（又腹立たしげに）内の殿様は奥様などお貰ひなさる筈がないのぢや。

お仙　はて、そんなに怖い顔をして、なぜわたしを睨むのぢや。お前はこのごろ様子が變つて、ぢつと考へてゐるかと思へば、急にじれたり怒つたり、なにか氣合でも悪いのかえ。

（お菊はだまつて俯向いてゐる。琴唄のやうな獨吟になる。）

〽世の中の、花はみじかき命にて、春は胡蝶の夢うつゝ、なにが戀やら情やら。

（お仙は五枚の皿を片附けて箱に入れる。お菊はやはり考へてゐる。）

お仙　おとなりのお屋敷では又いつものお琴のお淩ひが始まつたやうな。（箱をかゝへて起つ）さあ、おまへも早うお勝手へ……。わたしは一足さきへ行きますぞえ。

（お仙は庭に降りて下の方に去る。）

お菊　（苛々して）えゝ、なんとしたものであらう。わたしといふ者を打捨てゝ、ほかの奥様をお貰ひ遊ばすやうな、そんな嘘つきの殿様でないことは、不斷からよく知つてゐるものゝ、小石川の伯母御様の御媒介で、飯田町の大久保様とやらから奥様をお迎へなさる、内相談があるとやら。（また考へる）いや、それはほんの人の噂ぢや。おゝ、さうぢや。現にこのあひだも殿様にこれを云うて念を押したら、えゝ、馬鹿め、おれを疑ふにも程がある。まあ、默つて長い目で見てをれと、たゞ一口にお叱りなされた。叱られて嬉しかつたも束の間、又なんとやら疑ひの芽が噴いてくる……。えゝ、もうどうともなれ。

〽物に狂ふか青柳も、風のまに〳〵もつれて解けて、絲のみだれの果しなき。

（お菊は少しく悶れたる氣味にて皿を片づけてゐたりしが、また手をやめて考へる。）

お菊　よもやとは思ふものゝ、萬一ほんたうに奥様が來るやうであつたら……。えゝ、氣の揉めることぢや。たとひ口ではなんと仰せられても、男はいつはりの多いものとやら。なんとかして殿様の、心の奥の奥を確かに見きはめる工夫はないものか。（思案しながら我手に持つた

る皿にふと眼をつける）お家に取つては大切な寶といふこの皿を、もしも我が打碎いたら……。（又かんがへる）とは云ふものゝ、大切なお道具を、むざ／＼毀すは勿體ない。

〽寒さへ暗き雨催ひ、故郷の空はいづこぞと、ゆくてに迷ふ雁の聲。

（お菊は皿をながめて、毀さうか毀すまいかと迷つてゐる。）

お菊　えゝ、もう寧そのこと。

〽しづ心なく散りそめて、土に歸るか花の行末。

（この以前よりお仙は下手より出で來りてうかゞひゐる。お菊は思ひ切つて一枚の皿を取り、緣の柱に打ち付けて割る。この途端に、下の方にて「お歸り」と大きく呼ぶ聲。お仙は早々に下の方へ立去る。上の方より庭づたひにて十太夫足早に出づ。）

十太夫　おゝ、もうお歸りぢや。（下の方へ行かんとしてお菊をみる）お菊、まだそこに居つたのか。や、お皿をどうぞ致したか。これ、お菊。（あわてゝ緣に上る）こ、大切のお皿を眞二つに……こ、こりや何ういたしたのぢや。仔細をいへ、仔細を申せ。

（十太夫はおどろき怒つて詰めよる。お菊は默つて手をついてゐる。）

十太夫　えゝ、默つてゐては判らぬ。こ、こりや一體どうしたのぢや。さつきもあれほど申聞かせて置いたに……。かやうな粗相を仕出來しては、そればかりでない、この十太夫などのやうなお咎めを受けうも知れぬ。こりや飛んでもないことに相成つたぞ。

（十太夫も途方に暮れてゐるところへ、奥の襖をあけて青山播磨つか／＼出づ。）

十太夫　お歸り遊ばしませ。御出迎へと存じましたる處、おもひも寄らぬ椿事が出來いたしまして、失禮御免くださりませ。

播磨　思ひもよらぬ椿事……。（打笑む）十太夫が又なにか狼狽へて居るな。あわて者め、はゝゝゝゝ。

十太夫　いや、あわてずには居られませぬ。殿樣、これ御覽くださりませ。（皿を指さす）

播磨（割れたる皿を見ておどろく）高麗の皿を眞二つに……。誰が割つた。（怒る）

お菊　わたくしが割りました。

播磨　菊、そちが割つたか。（かんがへて）定めて粗相で

あらうな。
お菊　はい、恐れ入りましてござります。大切なお皿を損じましたは、わたくしが重々の不調法、どのやうなお仕置を受けませうとも決してお恨みとは存じませぬ。
播磨　おゝ、先づ以て神妙の覺悟ぢや。青山の家に取つては先祖傳來の大切の寶ではあるが、粗相とあれば深く咎めるわけにもまゐるまい。以後はきつと愼めよ。
お菊　はい。ありがたうござります。（安心して喜ぶ）
播磨　幸ひ今夕の來客は水野殿を上客として、ほかに七人、主人をあはせて丁度九人ぢや。皿が一枚かけても事は濟む。なう、十太夫。
十太夫　左樣でござりまする。しかし御客人の御都合は兎もあれ、折角十枚揃ひましたる大切の御道具を、一枚缺きましたる不調法は、手前も共におわび申上げまする。
播磨　（打笑む）いや、いや、心配いたすな。たとひ先祖傳來とは申せ、鎧兜槍刀のたぐひとは違うて、所詮は皿小鉢ぢや。わしは左のみ惜いとも思はぬ。しかし昔氣質の親類どもにきこえると面倒、表向きは矢はり十枚揃うてあることに致しておけ。
十太夫　はあ。
播磨　御客人もやがて見えるであらう。座敷の用意萬端とどこほりなく致して置け。そちは名代の粗忽者ぢや、手落のないやうに氣をつけい。
十太夫　委細心得てをりまする。萬事手ぬかりのない筈とは存じて居りまするが、ではもう一度念のために、御座敷を見廻つてまゐりまする。御免くだされ。
（十太夫はそゝくさと再び庭傳ひに上のかたへ去る。お菊は殘る四枚の皿を箱に入れる。）
お菊　とんだ粗相をいたしまして、なんとも申譯がござりませぬ。（手をつく）
播磨　はて、くどう申すな。一度詫びたらそれでよい。まことを云へば家重代の高麗皿、家來があやまつて碎く時は手討にするが家の掟ぢやが、餘人は知らず、そちを手討になると思ふか。はゝゝゝゝ。碎けた皿は人の目に立たぬやうに、その井戸のなかへ沈めてしまへ。
お菊　はい、はい。
（お菊は嬉しげに起つて先づ皿の箱を縁さきに持ち出し、更に缺けたる皿を取りて庭に降り、上の方の井戸になげ込む。）
お菊　では、わたくしもお勝手へ退りまする。（皿の箱をかゝへる）御免くださりませ。（下の方へ行きかゝる）
播磨　待て、待て。左樣に逃げてまゐるな。勝手の用はほかの女どもに任して置いて、まあこゝで少し話してゆけ。
お菊　はい。（嬉しげに縁に腰をかける。播磨も縁さきに

進み出る）

播磨　母から此頃にたよりはないか。

お菊　この一月ほどなんのたよりも聞きませぬが、大方無事であらうと存じてをりまする。

播磨　親ひとり子一人ぢや。いつそ此の屋敷内へ引取つてはどうぢやな。母は屋敷住居は嫌ひかな。

お菊　いえ、嫌ひではござりませぬが、母を御屋敷へ連れてまゐりまするには、なにも彼も打明けねばなりませぬ。

播磨　なにもかも……。（打笑む）隠すことはない。母にも打明けたらよいではないか。

お菊　でも……。それは……。（恥しげにうつむく）

播磨　恥かしいか。もう斯うなつたら誰に憚ることもない。天下の旗本青山播磨を婿にきめましたと、母のまへで立派に云へ。

お菊　云うても大事ござりませぬか。

播磨　そちの口から云はれずば、母を兎もかくも屋敷へ連れてきやれ。わしから直々に打明けて申すわ。若しその時に、母が播磨を婿にするは不承知ぢやと申しても、そちは矢はりこゝに居るであらうな。

お菊　たとひ母がなんと申しませうとも……。

播磨　いつまでもこゝに居るか。

お菊　はい。

播磨　それを屹と忘るゝなよ。

（二人は顔を見あはせて打笑む。上の方より十太夫足早に出づ。）

十太夫　殿様。その菊と申す女は重々不埒な者でござりまする。（敦圉いて云ふ）

播磨　なにが不埒ぢや。皿を割つたのは粗相と申すではないか。それともまだほかに何か曲事を働いたか。

十太夫　いや、その皿を割つたのは粗相ではござりませぬ。緣の柱にうち付けて、自分で割つたと申すこと。

播磨　自分でわざと割つたと申すか。

十太夫　朋輩のお仙がたしかに見届けたと申しまする。粗相とあれば致方もござりませぬが、大切のお品をわざと打割つたとは、あまりに法外の致し方。殿様が御勘弁なされても、手前が不承知でござります。きつと吟味をいたさねば相成りませぬ。

播磨　さりとは不思議のことを聞くものぢや。こりや、菊。さだめて粗相であらうな。

十太夫　いや、粗相とは云はせませぬ。

播磨　はて、騒ぐな。どうぢや、菊。十太夫はあのやうに申して居るが、よもやさうではあるまいな。はつきりと申開きをいたせ。

お菊　（胸を据ゑて）實は御用人様のおつしやる通り……

播磨　わざと自分の手で打割つたか。
お菊　はい。
播磨　むゝ。（十太夫と顏を見あはせる）さりとて氣が狂うたとも思はれぬ。それにはなにか仔細があらう。わしが直々に吟味する。十太夫はしばらく遠慮いたせ。
十太夫　いや、はや、呆れた女でござる。こりや、菊……
播磨（じれる）よい、よい。早くゆけ。
（十太夫は上のかたに引返して去る。）
播磨　こりや、菊。そちはなんと心得て、わざと大切の皿を割つた。仔細を申せ。（物柔かに云ふ）
お菊　おそれ入りましてござりまする。
播磨　最前も申す通り、その皿を割れば手討に逢うても是非ないのぢや。それを知りつゝ自分の手で、わざと打割りしとあるからは、よく／＼の仔細がなくてはなるまい。つゝまず云へ。どうぢや。
お菊　もう此上はなにをお隱し申しませう。由ないわたくしの疑ひから。
播磨　疑ひとはなんの疑ひぢや。
お菊　殿樣のお心をうたがひまして……。
（播磨はだまつてお菊の顏を睨む。）
お菊　このあひだも烏渡お耳に入れました通り、小石川の伯母御樣が御媒介で、どこやらの御屋敷から奥樣がお輿入れになるかも知れぬといふお噂。あけても暮れてもそればつかりが胸に支へて……。恐れながら殿樣のお心を試さうとて……。
播磨　むゝ。それで大方仔細は讀めた。それに就いてこの播磨が、そちを唯一時の花とながめて居るか、但しはいつまでも見捨てぬ心か。その本心を探らうために、わざと大切の皿を打破つて、皿が大事か、そちが大事か、播磨が性根をたしかに見屆けようと致したのであらう。菊、たしかにさうか。
お菊　はい。
播磨　それに相違ないか。
お菊　はい。
（播磨は矢庭にお菊の襟髮を取つて縁にねぢ伏せる。）
播磨　えゝ、おのれ、それ程までにして我が心を試さうとは、あまりと云へば憎い奴。こりやよく聞け。天下の旗本青山播磨が、戀には主家來の隔てなく、召仕へのそちと云ひかはして、日本中の花と見るはわが宿の菊一輪と、弓矢八幡、律儀一方の三河武士がたゞ一筋に思ひつめて、白柄組のつきあひにも吉原へは一度も足ぶみせず、丹前風呂でも女子のさかつきは手に取らず。かたき同志の町奴と三日喧嘩せぬ法もあれ、一夜でもそちの傍を離れまいと、かたい義理を守つてゐるのが、嘘や僞りでなるこ

とか、積つてみても知るゝ筈。なにが不足でこの播磨を疑うたぞ。

（お菊の襟髮をつかんで小突きまはす。お菊は倒れながらに泣く。）

お菊　その疑ひももう晴れました。お免しなされてくださりませ。

播磨　いゝや、そちの疑ひは晴れようとも、うたがはれた播磨の無念は晴れぬ。小石川の伯母はおろか、親類一門がなんと云はうとも、決してほかの妻は迎へぬと、あれほど誓うたをなんと聞いた。さあ、確と申せ。なにが不足でこの播磨を疑うた。なにを證據にこの播磨を疑うた。

お菊　おまへ樣のお心に曇りのないは、不斷からよく知つてゐながらも、女の淺い心からつい疑うたはわたしが重重のあやまり、眞平御免くださりませ。

播磨　今となつて詫びようとも、罪のないものを一旦疑うた、おのれの罪は生涯消えぬぞ。さあ、覺悟してそれへ直れ。

（播磨はお菊を突き放して刀をひき寄せる。下の方より庭づたひに奴權次走り出づ。）

權次　もし、殿樣。しばらくお控へ下さりませ。さつきから物蔭で窃と立聞きをして居りましたら、お菊どのが大切のお皿を割つたとやら、砕いたとやら。そりやもうお菊殿の落度は重々、そのかぼそい素つ首をころりと打落されても、是非もない羽目ではござるものゝ、多寡が女子ぢや。骨のない海月や豆腐を料理なされても、なんの御手柄へもござるまい。さつきの喧嘩とは譯が違ひまする。こゝは何分この奴に免じて、そのお刀は納めなされて下さりませ。

播磨　そちが折角の取りなしぢやが、この女の罪は赦されぬ。なんにも云はずに見物いたせ。

權次　一旦かうと云ひ出したら、あとへは引かぬ御氣性は、奴もかねて呑み込んで居りまするが、なんぼ大切の御道具ぢやと云うても、ひとりの命を一枚の皿と取替へるとは、このごろ流行る取替への節よりも餘り無雜作の話ではござりませぬか。どうでもお胸が晴れぬとあれば、殿さまの御名代にこの奴が、女の頬桁ふたつ三つ殴倒して、それで御仕置はお止めになされ。

播磨　えゝ、播磨が今日の無念さは、おのれ等の奴が知るところでない。いかに大切の寶なりとも、人ひとりの命を一枚の皿に替へようとは思はぬ。皿が惜さにこの菊を成敗すると思うなら、それは大きな料簡ちがひぢや。菊、その皿をこれへ出せ。

お菊　はい。

（時の鐘きこゆ。お菊は箱より恐る／＼一枚の皿を出

す。播磨はその皿を刀の鍔に打ちあてゝ割るに、お菊も權次もおどろく。）

播磨　それ、一枚……。菊、あとを數へい。

お菊　二枚……。

（お菊は皿を出す。播磨は又もや打割る。）

播磨　それ、二枚……。次を出せ。

お菊　三枚……。

（播磨はまた打割る。權次も思はずのび上る。）

權次　おゝ、三枚……。

播磨　次を出せ。

お菊　四枚……。（播磨は又もや打割る）

播磨　四枚。……もう無いか。

お菊　あとの五枚はお仙殿が別のお箱へ入れて持つてまゐりました。

播磨　むゝ。播磨が皿を惜むのでないのは、菊にも權次にも判つたであらうな。青山播磨は五枚十枚の皿を惜んで、人の命を取るほどの無慈悲な男でない。

權次　それほど無慈悲でないならば、なんでむざ／＼御成敗を……。

播磨　そちには判らぬ。默つてをれ。しかし菊には合點がまゐつた筈。潔白な男のまことを疑うた、女の罪は重いと知れ。

お菊　はい、よう合點がまゐりました。このうへは何のやうな御仕置を受けませうとも、思ひ殘すことはござりませぬ。女が一生に一度の男。（播磨の顏を見る）戀にいつはりの無かつたことを、確かにそれと見きはめましたら、死んでも本望でござりまする。

播磨　もし僞りの戀であつたら、播磨もこちを殺しはせぬ。いつはりならぬ戀を疑はれ、重代の寶を打割つてまで試されては、どうでも赦すことは相成らぬ。それ、覺悟して庭へ出い。

（お菊の襟髮を取つて庭へつき落す。權次はあわてゝお菊を圍ふ。播磨は庭下駄をはきて降立つ。）

播磨　權次。邪魔するな。退け、退け。

權次　殿樣、女を斬るとお刀が汚れまする。一旦鞘へかけた手の遣り場がないといふならば、おゝ、さうぢや。あれ、あの井戸端の柳の幹でも、すつぱりとお遣りなされませ。

播磨　馬鹿を申すな。退かぬとおのれ蹴殺すぞ。

（權次が遮るを播磨は拂ひ退けて、お菊を前へひき出す。）

權次　えゝ、殺生な殿樣ぢや。お止しなされ、お止しなされ。

（權次また取付くを播磨は蹴倒す。お菊は尋常に手を

合はせてゐる。播磨は一刀にその肩先より切り倒す。）

權次　おゝ、たうとう遣つておしまひなされましたか。（起き上る）可哀相になう。

播磨　女の死骸は井戸へなげ捨てい。

權次　はあ。

（權次はお菊の死骸をだき起す。上の方より十太夫は燈籠をさげて出づ。）

十太夫　おゝ、菊は御手討に相成りましたか。不調法のやうでござりまするが、心柄いたし方もござりませぬ。

權次　殿樣お指圖ぢや。（井戸を指す）手傳うてくだされ。

十太夫　これは難儀な役ぢやな。待て、待て。

（十太夫は袴の股立を取り、權次と一緒にお菊の死骸を上手の井戸に沈める。播磨は立ち寄つて井戸をのぞく、鐘の聲。）

播磨　家重代の寶も碎けた。播磨が一生の戀もほろびた。

（下の方より權六走り出づ。）

權六　申上げます。水野十郎左衞門樣これへお越しの途中で町奴どもに道を遮られ、相手は大勢、なにか彼やと云ひがかり、喧嘩の花が咲きさうでござりまする。

權次　むゝ。そんならまだ先刻の奴等が、そこらにうろついてゐたと見えるな。

播磨　よし、播磨がすぐに駈け付けて、町奴どもを追ひ散らしてくれるわ。

（播磨は股立を取りて縁にあがり、承塵にかけたる槍の鞘を拂つて庭にかけ降りる。）

十太夫　殿樣。又しても喧嘩沙汰は……。

播磨　やめいと申すか。一生の戀をうしなうて……。（井戸を見かへる）あたら男一匹が、これから何をして生くる身ぞ。伯母御の御勘當受けうとまゝよ。八百八町を暴れあるいて、毎日毎晩喧嘩商賣。その手はじめに……。（槍を取直して）奴。まゐれ。

二人　はあ。

（播磨は足袋はだしのまゝに走りゆく。權次權六も身づくろひして後につゞく。十太夫はあとを見送る。）

――幕――

尾上伊太八（三幕五場）

登場人物

原田伊太八
遊女堺屋の尾上、後に門附おさよ
原田五七郎
幇間堀の喜作
茶店の娘おくめ
おきく
おくめの叔母おとく
橋場の丑藏
吃の勘次
坊主の九助
長次
虎松
傳八
源吉
丑藏の女房おくま
長屋の女房おたつ
おとら
風車賣萬助
ほかに引手茶屋の女、參詣の女、子守の娘。中間、捕手の武士、ならず者など。

第一幕

一

徳川時代。延享三年十二月十三日、雪のふる夕暮。

よし原仲の町、茶屋の二階、平舞臺の上のかたは折りまはして襖にて立て切り、正面は床の間、つゞいて上に地袋のある違ひ棚、これにつゞいて障子。障子の外は欄干附きの縁側にて、向うには仲の町の雪げしき見ゆ。下のかたには階子のあがり口あり。よきところに火鉢、酒肴などもあり。

（原田伊太八、廿五六歳の優しき武士。尾上、廿一二歳の美しき遊女。差向ひにて酒を酌みかはしてゐる。鐘の聲。下座の獨吟になる。）

唄へ冬の日の、詰り〳〵し年の瀬に、しのび逢瀬も浮む瀬も、遣瀬も泣いて突きつめて、われから沈む戀の淵。

伊太八　音もきこえずに降つてゐるが、雪も大分積るだらうな。

尾上　もう日が暮れかゝつたので、禿の雪ぶつけも止んだとみえて、仲の町も靜でござんす。

唄〽鐘の音くもる夕暮の、風にみだれてはら／＼と、
　袖にかゝれば白雪も、解けて涙のうす氷。

（鐘の聲。尾上は起つて障子をあけ、仲の町の雪景色をみる。伊太八も起つて見る。雪はら／＼とふり込むを、ふたりは袖にて拂ふ。）

尾上　これでは明日もひき止められて、歸れぬ人がたんとござんせうな。

伊太八　それとは違つてこの二人は、歸りたうても歸られぬ、遠いあの世へ行かうとしてゐる。

（二人はもとの座に戻る。）

尾上　ほんに一度行つたら二度とは歸られぬ、十萬億土とやらの遠い旅も、お前と手をひいて行くならば、なんの心細いことがござんせう。

伊太八　わしとても同じこと。奥州津輕の藩中で、侍の子と生まれた伊太八が、場所もあらうに吉原で見ぐるしい死恥を晒したと、笑はるゝのも覺悟の上、今更なんの未練があらうぞ。

尾上　わたしは七つで廓へ賣られ、ほかには親類も兄弟もあるやら無いやら音信不通で、あとに心殘りはなけれども、お前はお國に弟御があるとやら。こんな噂がきこえたら、さぞやお嘆きなさるであらうに……。

伊太八　國許にゐる弟も、おどろくであらう嘆くであらうが、三年越しの放蕩に、屋敷は不首尾に不首尾をかさね、どうで無事では濟まぬ身の上ぢや。

尾上　ましてお前は二階をせかれ、表て向きでは逢はれぬ仲。

伊太八　そんなら二人は今宵を限りに……。

尾上　嬉しうござんす。

伊太八　嬉しいか。

唄〽神や佛を願はずに、ふたりが賴みたのまれて、たどる闇路や死出の山。

（二人は顏をみあはせて名殘を惜む。階子の上り口より茶屋の女中おみのは燭臺をとぼして出づ。伊太八はあわてゝ顏を隱す。）

おみの　いつの間にか日が暮れました。もうそろ／＼とお店の方へ……。

尾上　あい。

おみの　お客樣も御一しよに……。（云ひつゝ伊太八の顏をのぞく）おゝ、お前は八樣。

伊太八　あゝ、これ。二階をせかれて逢はれぬ伊太八が頭巾で顏を押しかくし、忍んでこゝへ逢ひに來た。情にどうぞ見逃してくれ。

尾上　一生のお願ひでござんす。誰にも沙汰してくださるな。

伊太八　これ、この通りおや

尾上　賴みます。

（二人は手をあはせて賴む。）

おみの　思へばほんにおいとしい。萬事はわたしが呑み込んで居りますほどに、こゝでゆつくりおしげりなさんせ。

尾上　そんならもう少しこゝに置いて下さんすか。

おみの　店の方はわたしが好いやうに云つて置きませう。

尾上　賴みましたぞえ。

おみの　あい、あい。

（おみのは階子を降りてゆく。）

尾上　死なうと覺悟をきはめたからは、又もや邪魔のないうちに……。

伊太八　死なねばならぬ入譯を、せめて一筆書き殘さうか。

尾上　書置ならばあの一間で……。（上のかたの襖を指さす）

伊太八　こゝろは急けどこの世の名殘に……。（違ひ棚より硯箱と紙を持ち來る）

尾上　もし、この燈火を……。（燭臺を取る）

伊太八　いや、それには及ばぬ。雪明りでまだ明るい。そんなら少し待つてゐやれ。

唄〽隔ての襖おしあけて、心はいだき合ひながら、しばし離るゝ影と影。

（伊太八は上のかたの襖をあけて入る。尾上にあとを見送りて泣く。）

尾上　わたしと云ふもの無いならば、かうした身にもならんすまい。逢ひ初めてより一日も……。

唄〽鷄の鳴かぬ日はあれど、お顏みぬ日はないわいな。しげしげ逢へばお宿の首尾、あしきは胸に知りながら、好いたお因果東の闇も……。

（尾上は起つてあたりを窺ひ、更に上のかたの襖を細目にあけて窺ふ。）

尾上　傍離るゝがいやまして、慕る思ひの嵩じた果が、ゆ

き詰つた今夜の仕儀、どうぞ堪忍してくださんせ。

唄〈鳴く音ほどかる鶯も、けふの寒さに閉ぢられて、
　春をも待たぬ命ぞと、廻しをるゝ籠の鳥。

（尾上はまた泣伏す。階子の口より帮間（たいこもち）、堀の喜作出づ。）

喜作　おゝ、その様。これにお出でなされましたか。

尾上　おゝ、喜作さん。悪いところへ……。

喜作　え。なんぞ御差合でも……。

尾上　差合があらうが無からうが、なんぼお前が稼業ぢやと云うて、人の座敷へ断りなしに押掛けて来ると云ふことがあるものか。ふだんはお前を贔屓にしてゐたが、今夜はなにやら嫌ひになつた。さあ、早う帰つてくださんせ。（顔をそむけてゐる）

喜作　いや、これはきつい御挨拶。それでは御機嫌の直るやうに、八様のお噂でも致しませうかな。

尾上　いえ、いえ、もうそんな話は聴きたうござんせぬ。

喜作　はて、困つたものだ。（あたまを掻く）いや、花魁（おいらん）。まあお聴きなさいまし。けふは日本橋で面白いものを見てまゐりました。わたくしが少し野暮用があつて、この雪の降るのに重い傘をかたげて日本橋の袂を通つたと思召せ。すると例の晒し物。さては心中の仕そこなひかと……。

尾上　え。（思はず向きなほる）

喜作　人を掻きわけて覗いてみると、頭の円い男が一人。さては坊主の道楽が過ぎて、たうとうこゝへ恥を晒すことになつたのか、やれ可哀さうにと見てゐると、それでも坊主は殊勝らしく、口のうちで南無阿弥陀仏、なむ阿弥陀仏……。なんぼ阿弥陀様でも、もう斯うなつてはお救ひもとゞきますまい。

尾上　（かんがへる）大勢の人の見る前で、そんな生恥を晒さうよりも、いつそ一思ひに死んだらよさゝうなものぢやに……。（呟く）

喜作　さて、死なうとして死なれぬが人間の因果と云ふもの。このよし原にも一年に三度や四度はきつとある心中も、そのなかで見ごとに死ぬのは半分ぐらゐで、あとは皆な仕損じて、御定法の通りに男も女も日本橋に晒しもの。

尾上　おゝ、忌なこと。（身をふるはせる）そんな話はもう止してくださんせ。

喜作　これはあやまり。また御機嫌を損じましたか。

（尾上は黙つて顔をそむけてゐる。）

喜作　もし、その様、これ此の通り、師直め謝まつて居ります。お詫、お詫。（手をつく）

尾上　えゝ、もう煩さい。早う歸つてくださんせ。
喜作　これは強いお腹立。(鼻唄) 腹は立てども聞かねばならぬ、君を待つ夜のほとゝぎす……。と云ふことを花魁もかねて御存じの筈。
尾上　はて、もう止してくださんせと云ふに……。(耳をおさへる)
(この時、上のかたの襖の内より輕く叩く音。尾上はうなづいて起ち上る)
尾上　さあ、喜作さん。歸つてくださんせ。
喜作　では、どうでも御勘氣は赦りませんかな。
尾上　さあ、さあ、早う。
喜作　とは云へ、今の物音は……。
(上の方を覗かうとするを、尾上はあわてゝ遮る。)
尾上　えゝ、強情な。
喜作　でも、どうやら襖の内が……。
尾上　えゝ、もう諄い。
(喜作はお客でゐたら取卷かうといふ料簡で、幾たびか上のかたへ行かうとするを、尾上は無理に押遣る。喜作は遂に澁々ながら階子を降りてゆく。)
尾上　(ほつとして) ふだんは賑かい面白い人ぢやが、かういふ時には強い邪魔、やう／＼のことで追ひ返した。

唄へみじかき縁なが文を、かき納めたる筆の命毛。
(尾上はあたりを窺ひながら上のかたの襖をあけると、伊太八はうしろ向きになりて書置を書いてゐる。尾上は傍へよりてさゝやく。伊太八はうなづく。尾上は伊太八の脇差を持ちて出る。)
尾上　そんなら早う。
(外にて「火の用心」と大きくいふ。尾上は思はず脇差を隱してうしろを見る。舞臺はたちまち暗くなりて暗中に道具變る。)

二

舞臺再び明るくなると、淺草奥山の茶店。舞臺の中央に銀杏の大樹あり。これにつゞいて下のかたに大きな茶店、軒には花暖簾をかけ、入口の柱に宮戸川と記せる角行燈をかけ、店のまへには掛床几二脚ほどを置く。上のかたにも銀杏の大樹あり。うしろには觀音堂が横向きに遠くみゆ。
(前の場よりは五年の後、三月下旬の午前。伊太八は半纏、着流しにて頰被りをなし、銀杏の根に倚りかゝりしまゝ後向きに寢てゐる。町家の女房は床几に腰をかけて茶を飲んでゐる。子守は赤兒を負ひ、手に風車

を持つてゐる。下のかたの床几には風車賣萬助が風車の荷を持ちて腰をかけてゐる。茶店の娘おきくは立つてゐる。みせ物の鳴物賑かにきこゆ。）

女房　（空を見る）どうかお天氣にしたいものですね。

萬助　どうかさうしたいものでございます。取分け手前どもの商賣は、お天氣でなければ仕方がございません。

おきく　お前さん達ばかりぢやありません。こゝの家なんぞも降られた日にやあ型無しですからね。毎朝觀音樣におねがひ申してゐますよ。

萬助　それでもこゝの店なんぞは、おくめさんに、おきくさんと云ふ錦繪仕立の別嬪揃ひだから一年中照り降り無しだ。

女房　ほんたうにいつ來てもこゝの店は繁昌のやうですね。

おきく　觀音樣の御利益と御贔屓樣のおかげとで、どうにかまあ店を張つて居ります。

萬助　うまく云ふぜ。これで家へ歸ると、みんな簞笥の七棹も持つてゐるのだから怖ろしい。はゝゝゝ。時におくめさんは……。

おきく　觀音樣へちよいと朝參りに行きました。

女房　どれ、わたしも歸りに淡島樣へ御參詣をして行きませう。

おきく　毎度ありがたうございます。

萬助　わたくしも有難うございました。もし、子守のねえさん。そんなに風車を拈くつてゐると、家へ歸るまでに毀してしまふぜ。

子守　あい、あい。

女房　どうもお邪魔をしました。

おきく　御ゆつくりといらつしやいまし。

（女房と子守は上のかたへ行きかけて、寐てゐる伊太八を見かへる。）

子守　おや、こんな處に誰か寐てゐますよ。

女房　なるほど樹の根を枕にして、いゝ心持さうに寐てゐるやうだ。こんな賑やかなところで、能くゆつくりと寐てゐられるものだねえ。

萬助　なに、こゝらにはそんなのが幾らもありますよ。

子守　晝間寐てゐるやうぢやあ泥坊かも知れない。

女房　馬鹿なことを云ふもんぢやないよ。さあ、早くお出で、お出で。

（女房は先に立ちて、子守も共に上のかたの奥に入る。これと行き違ひに奥よりおくめ、十七八歲の美しき茶屋娘にて出で、寐てゐる伊太八を鳥渡みて、店先に來る。）

おくめ　どうも遲くなりました。萬助さん、今朝はあきな

ひがありましたかえ。
萬助　こゝに休んでゐたおかみさんに一つ賣つたのが口明けさ。
おくめ　まあ、うんとお稼ぎなさいよ。時におきくさん。まだあの人は寢てゐるのね。
おきく（うなづく）わたし達が店をあける前から寢てゐるんだが、どうしたんだらうねえ。
（ふたりは伊太八の方を覗く。）
萬助　まあ、うつちやつて置くが可い。そのうちには自然に眼をさますだらうよ。
おきく　だつて、ありやあお仕置場へ出る人よ。（顔をしかめる）あんな人が店の鼻つ先に寢てゐられちやあ商賣の邪魔になるわ。
萬助　むゝ、お仕置場へ出る奴か。（覗く）
おくめ　このごろは毎日こゝらをうろ／＼してゐて、人の顔ばかりじろ／＼見て、なんだか薄氣味の悪い人なんですよ。
萬助　よし、よし、それぢやあ私が起してやらうよ。（伊太八の傍にゆく）もしお前さん、もう起きたらどうだね。夢でもみてゐると見えて魘されてゐるやうだ。おい、おい。
（萬助はゆり起す。伊太八は起きようとして蹌踉き、樹のうしろに倒れる。）
萬助　おい、寢惚けちやいけねえ。どうした、どうした。
（萬助は樹のうしろへ廻りて、伊太八を引摺り出す。月代の伸びたる頭、前とはかはりて憔悴なる人相、喉には傷の痕あり。）
伊太八　あゝ、夢をみてゐたのか。（眼をこする）折角よく寢込んでゐるところを、無理に引摺り起すこともねえ。お前も邪險な男だな。
萬助　ぢやあ、なにか面白い夢でも見てゐたのか。
伊太八　面白くもねえが、むかしの夢を見てゐたのさ。昔のことなんぞすつかり忘れてしまつた積りでも、時々は夢にみるから不思議だ。（さびしく笑ふ）
萬助　むかしの夢とはどんな夢だね。
伊太八　お前達に話したつて判るめえ、俺が女に惚れられた時のことよ。
萬助　へえ、お前にも女が惚れたかね。
伊太八　馬鹿にするな。これでもむかしは色男だ。（起ちあがる）手前達のやうなピイ／＼風車賣とは譯が違はあ。生れかはつて出直して來い。
萬助　いくら生れ替つても、お仕置場のお手傳ひはまつぴら御免だ。

伊太八　なにを云やあがるんだ、引込んでゐろ。(萬助の横面をなぐる)おい、櫻湯を一杯くんねえ。(床几に腰をかける)いや、こりやあ悪かつた。不淨役人の手下に使はれてゐる俺達が、客商賣のお店を拜借しちやあ相濟まねえわけだ。まあ堪忍してお呉んなせえ。

(伊太八は尻をまくりて、土にあぐらを搔く。おくめとおきくは氣味悪さうに跡にさりをして、萬助に何うかしてくれと眼で頼む。)

萬助　これ、これ、大將、お前にかうして居られちやあ、こゝの店でも迷惑だ。(宥めるやうに)些とくらゐのことは私がなんとか計らつてあげるから……。

伊太八　俺あ強請や押借りに來たんぢやあねえ。湯を一杯貰えに來たんだ。おい、おくめさん　後生だから櫻湯を一杯くんねえ。お茶代はこゝへ置くよ。(ふところより金を出して床几に置く)

萬助　(驚く)や、こりや二分だ。

伊太八　櫻湯一杯で二分のお茶代なら、まんざら悪いお客ぢやあるめえ。ゆうべはよそで飲み過ぎて、家へ歸る方角も忘れてしまひ、この銀杏の樹の下でごろ寐をきめて、夜のあけるのも知らずにゐたが、眼がさめたら喉が渇いてならねえ。おい、おくめさん。どうぞ一杯お願ひだ。お茶代が不足なら、もう少しこゝへ積むよ。

(懐中より又もや金を三つ四つ摑みだして置く。萬助はいよ〳〵驚く。)

萬助　どうしてこんなに持つてゐるのか。なるほど、人は見掛けに因らないものだ。

伊太八　金なんぞ幾らでもあらあ。おい、おくめさん。なんとか返事をして呉れねえのか。

おくめ　はい。(困つてゐる)

萬助　ぢやあ、櫻湯を一杯貰つたら歸るのか。

伊太八　先刻から然う云つてゐるぢやあねえか。

おきく　(おくめに囁く)ぢやあ仕方がないから一杯汲んでお遣りよ。

おくめ　だつて、お前……。

おきく　それで無いと、いつまでも動かないよ。

おくめ　忌だねえ。

伊太八　おくめさん。どうしても忌かえ。茶店の行燈をかけてゐる以上は、湯の一杯ぐらゐは汲んでくれても可いぢやあねえか。さあ、茶代はこゝへ置くよ。

(又もや金をつかみ出して床几に置く。人々は呆れてゐる。)

萬助　ほんたうに不思議だなあ。さつきの子守の云つた通り、もしや泥坊……。

伊太八　なんだと……。

萬助　いや、どうして、どうして、偉いもんだよ。

（萬助は面倒だから早く汲んでやれと眼で知らせる。おきくも勸める。おくめは忌々ながら奧に入る。上のかたの奧より原田五七郎、人品のよき若侍にて笠をかぶり、中間一人を連れて出で來りしが、伊太八に眼をつけて立ちどまり、銀杏のかげに立ちて窺ふ。そのうちにおくめは櫻湯の茶碗を盆に乘せて出づ。）

伊太八　そんなに遠くから怖さうに手を出さねえで、もつとこつちへ寄つて與んねえ。病犬ぢやあねえから、食ひ付きやあしねえよ。

（おくめは氣味惡さうに進み寄り、無言にて盆を出すと、伊太八は容易に手を出さず、おくめの顏をぢつと眺めてゐる。おくめは顏をそむけて困つてゐる。伊太八はやがて茶碗をうけ取り、うまさうに飮む。おくめは早々に内に入る。）

伊太八　後生だ、もう一杯。

おくめ　え。

萬助　そんなことを云つてゐては果てしがない。さあ、一杯飮んだら素直に歸るがよからう。（伊太八の手を取つて引立てようとする）

伊太八　えゝ、大きにお世話だ。

（突き放されて、萬助は倒れる。おくめとおきくはうろ〳〵してゐる。五七郎は進み出づ。）

五七郎　これ、茶を一杯くりやれ。

おきく　いらつしやいまし。

おくめ　どうぞお掛け下さいまし。

（五七郎は下のかたの床几に腰をかける。）

おくめ　唯今お茶を差上げます。

伊太八　おい、おれの方はどうして與れるんだ。

五七郎　御所望ならば何杯でも差上げませう。

伊太八　え。

（五七郎は笠を取る。）

伊太八　むゝ、お前は。（おどろく）

五七郎　しばらくお目にもかゝりませぬが、御別條はござりませぬか。

伊太八　この通り、いつも達者だ。

五七郎　（左右をみかへる）これ、そこにゐる町人。

萬助　へい、へい。

五七郎　氣の毒だが、この男に些と用談がある。すこし遠慮してくれまいか。

萬助　よろしうございます。わたくしも飛んだところへ引懸つて、實は困つてゐたところでございます。では、旦那樣。御ゆつくりとお休みなさいまし。（おくめ等に）これ、お武家樣が見えたから、もう大丈夫だ。

（萬助は早々に上のかたに去る。）

おくめ　どうも色々ありがたうございました。

五七郎　六藏、其方も暫くそこらを遊んでまゐれ。

仲間　へい、へい、かしこまりました。

（仲間は會釋して、これも上のかたに去る。おくめは茶を汲んで出づ。）

おくめ　お茶を一つおあがりなさいまし。

（五七郎は茶碗を取りて思案してゐる。おくめはおきくと顔をみあはせて首肯き合ふ。）

おくめ　あの、わたくし共はちよいと奥へ行つて居ります。

おきく　御用があつたらお呼び下さいまし。

（二人はそこを外すこゝろにて、店の奥に入る。五七郎は一膝すゝめて、伊太八にも床几にかけよと云ふ。伊太八は着物の泥を掃き、上のかたの床几に置きたる傘をうしろへ掻き遣りながら腰をかける。）

五七郎　兄上、きついお變り樣でござりますな。

伊太八　變つた筈だ。武士を止めてからもう五年になる。して、お前はいつ江戸へ出て來たのだ。

五七郎　昨年の秋に出府いたしました。委細のことは國許にてうけたまはり、唯々殘念に存じて居りましたが、お姿を見るにつけて、また今更に悲しさが……。（落涙する）

伊太八　もうそんなことは云つてくれるな。定めて何も彼も聞いたらうが、吉原の尾上といふ女に熱くなつて、屋敷はしくじる、女も借金で首がまはらず、詰り詰つた擧句の果が、紋切形の心中よ。（自分の喉を指さす）この傷のあとを見りやあ大抵判るだらう。それが見ごとに仕損じて、三日のあひだも日本橋で晒され、いやはや飛んだお笑ひ草よ。

五七郎　それは江戸屋敷の役人から委しい書面で承知いたしました。あまりの面目なさにその當座は謹愼して引籠つて居りまするると、上には格別の御沙汰を以て、兄に代つてわたくしに家督相續を仰せつけられ、引きつゞいて御奉公いたして居ります。

伊太八　むゝ、さうか。それぢやあ去年から江戸屋敷に詰めてゐたんだな。

五七郎　左樣でござります。

伊太八　そりやあ些とも知らなかつた。（少しく思案してゐる）

五七郎　然るにこのたび大事の御用をうけたまはり、日々ひそかに江戸市中を徘徊して、心當りを詮議いたして居ります。

伊太八　なんの詮議をしてゐるのだ。

五七郎　盗賊の詮議でござります。

伊太八　むゝ、泥坊……。屋敷で何か取られたのか。
五七郎　先月八日の夜に、盗賊がお藏を切破つて、御用金一千兩をぬすみ出しました。夜番の者が遠目に見ましたところでは、賊は二人であつたと申すこと。
伊太八　なにしろ太い奴等だな。
五七郎　兄上にも若しお心當りがござりましたら、なにとぞ御助力をねがひます。
伊太八　おれも泥坊に近附きはねえが、世間は廣いやうで狭いもんだから、どこでどんなことを聞き出さねえとも限らねえ。若し心當りがあつたらば飛脚で知らして遣らうよ。
五七郎　何分おたのみ申します。
伊太八　むゝ、判つた、判つた。おれは少し用があるから、もうこれで別れるとしよう。まあ、達者でゐてくれ。（起ちあがる）
五七郎　お前樣にもお身を御大切に……。
伊太八　お前なぞは出世前だ。せい〴〵大事に勤めるが可いや。おれも昔は覺えがあるが、野暮堅え屋敷奉公も窮屈だらうな。
五七郎　これが武士の勤めと心得て居りますれば、別に窮屈とも存じませぬ。
伊太八　それでなけりやあ大小は差せねえ。おれなんぞは今は氣樂なものさ。はゝゝゝ。
（伊太八は笑ひながら行かうとするところへ、向ふより吃の勘次走り出づ。）
勘次　（吃る）おゝ。小、小、小頭。ど、ど、どこにゐたんだ。さ、さ、先刻から、ほ、ほ、方々を、さ、さ、探してゐたんだぜ。
伊太八　ゆうべから飲み過ぎて、こゝに打つ倒れてゐたんだ。
勘次　は、は、早く來なくつちやあ、間、間、間に合はねえ。もう、ひ、ひ、引廻しが、出、出、出る時刻だぜ。
伊太八　手前は吃るから何を云ふんだか判らねえ。もう引廻しが出ると云ふのか。むゝ、すぐに行くよ。
勘次　は、は、早く、早く……。
（勘次は吃りながら伊太八を急き立てゝゆく。五七郎はぢつとあとを見送る。）
五七郎　むかしの兄上とは、まるで人が變つたやうな。朱にまじはれば赤くなる。情ないことだなう。（嘆息する）
（上のかたより仲間出づ。）
仲間　もう御用は濟みましたか。
五七郎　こゝであの男に逢うたことは他言いたすなよ。其方も茶でも飲んでゆけ。
仲間　へい、へい。（奥にむかひて）おい、姐さん。お茶

せくんねえ。

（おくめとおきくは奥より出づ。）

おくめ　はい、はい。お熱いのをすぐに持つてまゐります。

おきく　一向おかまひ申しませんでした。

（ふたりは茶を汲んで來る。五七郎と六藏は茶を飲んでゐる。上のかたより風車賣萬助、再び出づ。）

萬助　あいつめは、もう歸つたかね。（床几の上をみる）おゝ、やつぱり金はこゝへ置いて行つた。

おきく　あんな人の癖に、どうしてお金を持つてゐるんだらうねえ。

五七郎　あれが澤山に金を所持して居つたか。

（上のかたの奥よりおさよ、門附けの姿にて笠をかぶり、三味線をかゝへて出で、木かげにてこの話を聴く。）

おくめ　どう考へても不思議でございますよ。

萬助　屹とあいつは泥坊だ。（大きく云ふ）

五七郎　え。

（おさよも思はず前に出る。）

萬助　へえ、なか／＼油斷はなりませんよ。

五七郎　まつたく油斷のならぬことだ。

（五七郎は起ちあがりて、向うを見ながら思案する。おさよも同じく向うを見る。萬助は床几の上の金を指さしながら勘定してゐる。おくめとおきくは盥を持ち來りて、伊太八のかけたる床几のあたりにふり撒く。淺草寺の鐘きこゆ。）

――幕――

第二幕

淺草田圃の小屋。板屋根の粗末なる屋體にて、竹緣あり。正面の上のかたに破れたる押入戸棚、つゞいて破れ障子二枚、下のかたは破れたる鼠壁、上のかたには少しく下りて、一間の臺所あり。臺所には一つ竈を据ゑて入口に破れ戸一枚を閉てたり。家の下のかたには屋體に沿うて、低き四つ目垣あれど、木戸なければ往來は自由なり。垣の外に柳の立木あり。前の幕とおなじ日の午後。

（吃の勘次は擂鉢の火鉢にて五合德利の火燗を付け、茶碗酒をのんでゐる。坊主の丸助は一つ竈のいが栗頭、臺所にて竈の下を吹いてゐる。蛙の聲きこゆ。）

勘次　（吃る）あゝ、好い心持になつて來たが、て、て、天氣の方は、な、な、なんだか惡くなつて來たな。（空をみる）

（下のかたより稲場の丑藏、蛸の足をさげて出づ。）

丑藏　勘次。小頭はまだ歸らねえのか。

勘次　むゝ、もう、け、け、歸つて來る時分だが……。おや、お前は、た、た、鮨をさげて來たのか。

丑藏　（緣にあがる）けふは小頭の誕生日だといふから、心ばかりの祝えに鮨肴よ。へん、主人の逮夜でなくつて仕合せだ。この洒落は手前にはわかるめえ。

勘次　な、な、なんでも可いから一杯遣んねえ。丁度、か、か、燗も好い頃だ。（茶碗を出す）

丑藏　（茶碗で飲む）おや、ひどく熅いぜ。臺所に誰かゐるのか。

勘次　ぼ、坊、坊主の野郎が、め、めしを炊いてゐるんだ。

丑藏　やい、やい、いぶすのも好加減にしろ。こゝの家に狸はゐねえや。

九助　（臺所より首を出す）へん、貉と狸が二匹ゐりやあ澤山だ。

丑藏　手前の狸和尚を棚にあげて、おれ達を貉狸あつかひにするとは何のこつた。

勘次　ぐ、ぐ、ぐづ〳〵云ふと向脛を、た、た、たゝき折つて、か、か、蚊いぶしにするから、そ、そ、さう思へ。

九助　蚊いぶしをする暇があるなら、おほくろ溝へ行つてぼうふらでも掬つて來るが可いや。

勘次　こ、こ、この坊主。そ、そ、そんな大きな口を利くなら、こ、こ、このあひだ、か、か、貸して遣つた二百の錢を、み、み、耳を揃へて、すぐに返せ。

九助　手前の死んだときのお經料と差引きにして遣らあ。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

勘次　い、い、いくら坊主でも緣起でもねえことを云やあがる。う、う、うぬ。も、も、もう料簡がならねえぞ。（德利を持ちて起ちあがる）

九助　なに、喧嘩か。喧嘩ならいつでも相手になつて遣るぞ。（火吹竹を持ちて庭に出る）

丑藏　やい、やい、めづらしくもねえ。止せ、止せ。

（丑藏が止めるも肯かずに、勘次は庭に降りて九助と打合ふを、丑藏は遮る。三人入りみだれて爭ふうちに、丑藏は向うを見て。）

丑藏　や、小頭が歸つて來た。

九助　なるほど、喧嘩なんぞしちやあゐられねえ。おや、飯の焦げつく匂がするぞ。こりやあ大變だ。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。（あわてゝ臺所に入る）

勘次　ざ、ざ、ざまあ見やがれ。

丑藏　手前も早くそこらを片附けて置け。

勘次　お、お、違えねえ。

（勘次もあわてゝ内に入り、上の障子をあけて、德利や茶碗などを臺所に運ぶ。丑藏も鮨をさげて臺所に入る。伊太八は白の着附に縮袢をかけ、白の股引脚絆に

て草鞋をはき、ぬき身の槍をかつぎて出づ。あとより
手下の長太、虎松、傳八、源吉の四人つゞいて出づ。）
伊太八　おい、御苦勞だつた。さあ、上つて一杯のめ。
四人　どうもありがたうごぜえます。
長太　小頭があゝ云ふものだから、遠慮なしに御馳走にな
らうぜ。
四人　おやあ御免なせえ。
（伊太八は緣に腰をかける。四人もぞろ〳〵とつゞい
て入る。臺所より丑藏と勘次出づ。）
丑藏　おゝ、小頭。歸んなすつたか。
伊太八　今歸つたよ。やい、勘次。出る時にも云ひ付けて
置いた通り、酒の支度は出來てゐるだらうな。
勘次　な、な、何から何まで、出、出、出來過ぎてゐるく
らゐだ。
伊太八　手前、もう飲んだな。
勘次　な、な、何。ちよ、ちよ、ちよいとお燗の工合を見
たばかりだ。
伊太八　嘘をつけ。口は半人前だが、飲むと食ふ方は二人
前といふ野郎だ。はゝゝゝゝ。
丑藏　時にけふのお仕置はどうだつたね。
伊太八　女にしちやあ中々しつかりした奴だつたよ。
勘次　わ、わ、わつしも引廻しの、と、と、通るところを、
馬道の、か、か、角で、ちよ、ちよ、ちよいと見たが、
と、と、年の頃は廿五六の、小、小、小粹な女でしたね。
（臺所より九助も手拭で手をふきながら出づ。）
九助　小頭、御苦勞でごぜえました。（伊太八に挨拶して、
勘次にむかひ）女の引廻しならおれも見たが、色こそ淺
黑いが、愛嬌のある好い女だ。
勘次　ど、ど、どんな事をしたか、知、知、知らねえが、
あ、あ、あの、と、と、年增盛りを槍玉にあげるのは惜
いもんだ。
九助　おれが御奉行なら、せめて遠島にでもして遣らうも
のを、引廻しの上に磔刑とはあんまり罪が重過ぎらあ。
伊太八　女の名がつけば引廻しの贔屓までしやあがるか。
はゝゝゝゝ。なんでも兩國邊の商人の女房で、店の者
と悪いことをして、亭主を殺さうと巧んだのだから磔刑
は御定法だ。今日いよ〳〵小塚つ原へ送られて、七兵衛
とおれとが突手の役、罪人は式の通りに高い柱へあげら
れて、おれと二人が先づ槍見せをしごいて見せると……。
（槍を把る）白い歯をみせて少し笑つたよ。
勘次　（九助と顔をみあはせる）ふむう。度、度、度胸の
好い女だね。
九助　聞いてもなんだか凄いやうだ。
伊太八　いや、凄くねえ。面白くなつて來た。その笑ひ顔

をぢつと視ながら、おれが一の槍で右の脇腹から突き上げた。つゞいて七兵衛も左から一つ突いたが、女はやつぱり笑つてゐた。

丑藏　なるほどしつかりしたもんだね。

伊太八　それから二人が代る〴〵に突いた。大抵の女は十七八本で參つてしまふのだが、おれが廿五本目の槍を引いたときにも、女はまだびく〴〵動いてゐたよ。强情な奴さ。

勘次
九助　ふむう。

伊太八　氣味の惡さうな面をするな。手前達もだん〴〵に出世すれば、忌でも此役を勤めにやあならねえのだ。

九助　それぱつかりは御免蒙りてえものだ。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

伊太八　又いつもの癖を始めやあがつたな。止せ、止せ。血のついたこの槍はあとで研いで置かにやあならねえから、そこらへ掛けて置いてくれ。（勘次に槍を渡す）おれは着物を着かへて來るから、そのあひだに酒やなにかを持出して置け。

九助　あい、あい。

（伊太八は草鞋をぬいで奥に入る。勘次は槍を鴨居にかける。）

丑藏　さあ皆も手傳つてこゝへ酒や肴を運んでくれ。

一同　承知だ、承知だ。

（一同は臺所より酒肴などを運び出す。伊太八の分だけは足の附いたる膳にのせて上の方に据ゑる。）

勘次　さあ、よし、こ、こ、これですつかりお膳立ても出、出、出來た。こ、こ、この刺身を見てくれ。おれが、庖、庖、庖丁の腕を見せたんだ。

長太　なるほど、色々の肴がならんだ。

丑藏　けふは小頭の御馳走だ。思ひ切つて飲むが可いや。

四人　有難え。ありがてえ。

（奥より伊太八は着物を着かへて出づ。）

伊太八　さあ。みんなどし〳〵飲んでくれ。おれの膳なんぞは別にするにやあ及ばねえ。みんな丸くなつて一緒に飲まうぜ。

（一同はあぐらを搔いて飲みはじめる。）

長太　わたしは昨今でよく知らねえが、けふは小頭、お前さんの誕生日かえ。

伊太八　まあ、誕生日と云つたやうなもので、つまりおれが生れ變つた日だ。おれが心中を仕損じて、こゝへ轉げ込んで來たのは、今から丁度五年前だ。

丑藏　もう五年になるかえ。考へてみると早えものだ。（伊太八に猪口を差す）この時お前さんは色の白い人品の好

いお侍で、こんな立派な人がこゝらへ轉げ込んで來るとは、心得とは云ひながら、あゝお氣の毒なことだと、蔭ながら噂をしてゐたが、それでも元は武家出だから讀み書きも出來る。武藝も出來る。自然と人々に立てられて、今ぢやあ立派な小頭だ。

九助　わつしはお前さんよりも一足先にこゝへ來たんだが、根が坊主あがりだから、相變らず意氣地はねえや。（あたまを撫でる）

伊太八　違えねえ。手前も日本橋、西瓜頭を瞞されたお仲間だつたな。おたげえに好い業晒しだつたよ。

九助　本尊までも質に置いて、品川通ひの報は覿面。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

伊太八　（酒を飮む）えゝ、それが手前の悪い癖だ。おれも世間を狹くして、よんどころなくこゝへ落ちたが、乞食を三日すりやあ忘られねえと、世間で云ふのはこゝのことで、田圃の溝泥の匂がだん／＼身にしみると、この世界が又面白くなつて來た。第一が氣樂で可いや。今更おもへば人間を箱詰めにしたやうな馬鹿に窮屈な武家奉公を、よく辛抱して來たものよ。武士と聞いちやあ鰹節でも慄然とするらあ。（笑ふ）

丑藏　なるほど、野暮堅え屋敷奉公よりも、こつちとらの方が氣樂だらうな。

伊太八　こゝへ來た日が一生の區切り目で、早え話が、侍の伊太八はその日かぎりに消えてなくなつて、淺草田圃の伊太八といふ人間が新規にこの世界に生れて來たのだから、その日を新しい誕生日ときめて、毎年かう遣つて心ばかりの祝ひをするのよ。お釋迦の誕生なら四月だが、おれは三月だから梅若かも知れねえ。とんだ御命日だ。はゝゝゝゝ。

長太　それですつかり判りやした。ぢやあ、時々に品川からたづねて來る門附の美女といふのがその吉原の一件だね。

勘次　そ、そ、さうよ。今こそ、か、か、門附になつてゐるが、昔はよ、よ、よし原の花魁だ。小、小、小頭の前だが、いつ見ても綺、綺麗だね。

伊太八　けふの引越しとどつちが好い。

九助　そりやあ比べ物になるものか。品川のレコの方が十段も優れてゐらあ。第一、垢拔けがしてゐるし、氣立が良いからね。

伊太八　乙う胡麻を摺るな。今にもつと好いのを見せて遣らあ。（笑ふ）

丑藏　（四人をみかへる）おい、どうだい、猪口を流行らせようぢやねえか。

虎松　そこに如才があるものか、腹の痛まねえ酒と來た日

にやあ何奴もみんな酒顛童子だ。

傳八　さつきから默つて飲むと食ふ一方だから、皿はみんなこの通りだ。

丑藏　なるほど肴が大分閑靜になつて來たな。

源吉　なにか肴がありさうなものだが……。（上の方をみる）おゝ好いものが來た。來た。

長太（おなじく見る）違えねえ、好い物が遣つて來た。

（緣端に出る）赤、來い、赤、來い。（呼ぶ）

（上のかたより赤犬一匹出づ。）

虎松　這奴はどこかのまぐれ犬だな。

伊太八　構ふものか。ぶち殺して食つてしまへ。

（傳八と源吉は飛び降りて犬を追ひまはす。犬は遂に逃げてゆく。）

傳八　いま／＼しい畜生め、逃げてしまやあがつた。ほかに食ふ物はねえかなあ。

伊太八　まあ、仕方がねえ。なには無くとも酒だけで我慢して置くが可いや。

二人　あい。

（傳八と源吉は内にあがる。）

伊太八　時にその肴で思ひ出したが、おい、丑。例の肴は大丈夫だらうな。

丑藏　そりやあ心配しなさんな。肴は戸棚のなかへ押込んで鼻がしつかり見張つてゐるから、わつしが留守でも確かなもんだ。一足だつて外へ出すこつちやあねえ。

伊太八　うまく遣つてくれたか。

丑藏　そこに如才があるものか。

勘次　な、な、なんだか、な、な、謎のやうな話だが、一體、そ、そ、その肴とか云ふのは、な、な、なんだね。

丑藏　まあ、今にわかることだ。默つてゐろ。

九助　どうも女の話らしいぜ。

伊太八　さすがに手前は感が好いや。實は今夜嫁を貰ふんだ。

一同　へえー。（顏をみあはせる）

長太　ぢやあ、その品川のが來るのかえ。

伊太八　馬鹿を云へ。あんな婆は疾うの昔にお拂ひ箱だ。もつと若え可愛らしいのが來るんだ。

勘次　きよ、きよ、今日は、た、た、誕生日で、おまけにこ、こ、今夜は嫁が來る。ま、まるで、ぼ、ぼ、盆と正月が一緒に來たやうなもんだね。

九助　なにしろ、おめでた續きで結構なことだが、一體その嫁さんと云ふのは、どこから來るんだね。

丑藏　まあ、まあ、默つてゐると云ふのに……。（伊太八に）ぢやあ、もうそろ／＼お積りにしようかね。

伊太八　みんなも飲足りねえか知られえが、けふはまあこ

の位で切り上げて貰はうか。

長太　なに、もうこれで澤山だ。さつきから默つてがぶがぶ飲んでばかりゐたんで、すつかり好い心持になつて來た。

虎松　たまに好い酒を食つたんで、腹の蟲がびつくりして、五臓六腑を堂々巡りをしてゐらあ。はゝゝゝゝ。

傳八　ぢやあ小頭。

四人　どうも御馳走さまでござえました。

勘次　こ、こ、憚はねえやうに、け、け、歸れよ。

四人　馬鹿を云へ。はゝゝゝんゝ。

（四人は下のかたに去る。）

九助　（勘次と顏をみあはせる）　ぢやあ、おれ達もうお開きにしようか。

勘次　な、な、なるほど、お開きか。手、手、手前、乙な文句を知つてゐるな。

伊太八　だが、みんな一度に立つてしまつちやあ仕樣がねえ。坊主は此處とこゝを片附けて行つてくれ。それから勘次はそこらへ行つて、きはだの脂つこい奴でも買つて來てくれ。

（伊太八は錢を出して遣る。）

勘次　あい。よ、よ、ようござえます。

丑藏　わつしはすぐに連れて來るぜ。それともまだ些と時刻が早えかね。

伊太八　やい、やい、忌に氣を持たせるな。大事の肴を手前なんぞに預けておくのは不安心だ。早くこつちへ引渡してくれ。

丑藏　はゝ、どつちが不安心だか判るものか。

勘次　ぢや、ぢやあ、行つて來ますぜ。

丑藏　そこまで一緒に行かうぜ。

（丑藏と勘次は出る。蛙の聲きこゆ。）

丑藏　いよ／＼天氣が可怪くなつて來たな。

勘次　こ、こ、今夜は、ふ、ふ、降りだせ。

丑藏　花時分にやあ兎角降りたがるものだ。

（二人は去る。九助も空をみる。）

九助　なるほど今夜はあぶねえや。

伊太八　田圃の蛙がしきりに鳴くから、雨をよび出すかも知れねえ。かういふ曇つた暖かい日に、遠い蛙の聲を聽いてゐると、なんだか薄ら眠くなるもんだ。（肱枕で寢ころぶ）

九助　だが、お前さんはまだ飲むだらう。

伊太八　むゝ、おれの分だけはまあさうして置いてくれ。

（九助は取りちらしたる皿小鉢などを臺所に運ぶ。おさよは笠をかぶり、三味線をかゝへて足早に出で、すぐに庭口に入る。）

九助　おゝ、おさよさんか。

おさよ　たうとうぽつ／＼降つて來ましたよ。
九助　まあこつちへお上んなせえ。おい、小頭。品川のおさよさんが來やしたぜ。
（伊太八は少しく身を起しておさよを見たが、惡いところへ來たといふ體にて、又もやごろりと倒れる。）
九助　おい、小頭。起きねえか。品川のが來たといふのに……（おさよに）今少し飮んだから横になつてしまつたんだ。
おさよ　相變らず飮むんですかねえ。（笠をぬぎて緣に上る）
九助　この頃はしばらく見えなさらなかつたね。
おさよ　毎年寒さが烈しいと、このふる疵の痕が痛むので……。（疵をなでる）今年の春も二月ばかりは、どこへも出ずに休んでゐましたが、もうおひ／＼に暖かになつたので、二三日前からやう／＼稼ぎに出るやうになりました。（あたりを見て）けふはお客でもあつたのですかえ。
九助　小頭の誕生日だといふので、大勢あつまつて今まで飮んでゐましたよ。
おさよ　ほんにもう五年になる。（ほろりとする）月日は早いもんですねえ。
九助　なにしろ、小頭が起きなくつちやあ仕樣がねえ。おい、おい。こりやすつかり寢込んでしまつたやうだ。
おさよ　わたしが起すから、かまはずに用をしてください。もし、八さん、伊太八さん。
（ゆり起せども、伊太八は矢はり寢た振りをしてゐる。）
おさよ　ほんによく寢てゐる。もし伊太八さん。（抱き起せども、伊太八はまた倒れる）
九助　折角いゝ心持に寢かゝつてゐるところを、無理に起すとよくねえから、もう少し待つてゐなさるが可い。今わつしがお茶でも淹れるから、まあ、ゆつくりしてゐなせえ。
（九助は臺所へゆく。）
おさよ　それぢやあ少し待つてゐませうかねえ。
（おさよは伊太八をそつと寢かして少し下手の方へゆく。遠く蛙の聲、薄く雨の音。）
おさよ　品川よりもこつちの方が些とは陽氣かと思つたが、よし原の廓を眼の前に控へてゐながら、こゝらはやつぱり寂しいねえ。（所在なげに考へてゐる）おゝ、雨がだん／＼に降つて來た。春の雨だから強い降りにもなるまいと思ふがあしたも降られると商賣はまた一日休みか。（空を見る）このごろは久しく休んでゐたせゐか、毎日唄ひなれた長唄もなんだか忘れてしまつたやうだ。

こんなことおやあ仕様がないねえ。
（おさよは柱に凭りかゝりて三味線をひきよせ、爪彈きにて中音に唄ふ。）
唄　へもみぢ葉の青葉にしげる夏木立、春は昔となりけらし。
（このうちに、伊太八は細く眼をひらき、すこし身を起して唄を聽く。）
九助　（臺所にて）もし、おさよさん。相變らず美い聲だね。その唄はなんだね。
おさよ　長唄の高尾ですよ。
九助　あゝ仙臺樣に殺された高尾か。
（おさよはつゞけて唄ふ。）
唄　へ煙草のんでも煙管より、喉が通らぬ薄烟、泣いて
　あかさぬ夜半とても無し。
（このうちに九助は臺所より土瓶をさげ、茶盆に茶碗二つをのせて持つて出で、伊太八の樣子をうかゞふ。）
九助　おや、小頭、起きてゐるんだね。俺あほんたうに寢てしまつたんだと思つた。

おさよ　（唄をやめる）あら、起きてゐるの。
（伊太八は再び眼をとぢる。）
九助　（傍による）おい、さつきからおさよさんが來てゐるんだぜ。焦らさねえで早く起きねえよ。
（九助は寄つてゆり起す。）
伊太八　さう／＼しい野郎だな。
（又寢ようとするを、おさよは寄つて抱き起す。）
おさよ　もし、伊太八さん。
伊太八　（仕方なしに）なんだ。
おさよ　お前、相變らず醉つてゐるのかえ。
九助　毎日この通りだ。
伊太八　やかましいやい。引込んでゐろ。
九助　あい。（早々に臺所へゆく。）
おさよ　お前も少しはお酒を愼んだらどうでござんすえ。
伊太八　酒を愼んだら大名にもなれるのか。はゝゝゝ。ギヤマンの鉢で美しく飼はれた金魚でも、一旦溝のなかに落ちたが最後、ぼうふらや蛆蟲と同じやうな料簡にならなけりやあ、とても生きちやあゐられねえ。昔は昔、今は今で、このごろの俺は酒でも飮んで寢るのが樂しみだ。はゝ、後生樂のものよ。
おさよ　まだそれぼかりではござんすまい。聽けばこのごろは博奕も打つ、喧嘩もする、押借强請かどはかし、惡

いといふ悪いことは何でもおぼえたと云ふ噂。そんなことがお役人衆の耳にでも這入つたら、お前は唯では濟みますまい。なんぼ斯うした身になつたとて、昔と今とを比べると、あんまりひどい變りやうで、わたしは涙がこぼれますよ。

伊太八　それもみんな手前のおかげだ。原田伊太八といふ歴々のお侍様がこんな姿になつたのも、手前といふものが有つたからだ。今更おれに意見をされた義理でもあるめえ。

おさよ　お前を斯ういふ姿にしたのも、元はと云へばわたしから……。(涙をぬぐふ) それはふだんから詫びてゐますが、たとひ何のやうに落ちぶれても、人間は正直が身の守、こゝろさへ誠の道にかなつてゐれば、きつと神様や佛様が……。

伊太八　その神佛はこつちから疾うの昔に見限つてゐるんだ。今更つまらねえ講釋は止しにしろ。

(傍にある德利を把つて猪口につぐ。おさよはその手をおさへる。)

おさよ　もし、そんなに飲んでは……。

伊太八　えゝ、うるせえ。なにをしやあがるんだ。やい、坊主。もつと熱いのを持つて來い。

九助　(臺所より顏を出す) でも、おさよさんがあんなに心配してゐるんだから……。

伊太八　手前は乙うこの女におべつかりやあがるな。ぐづぐづ云はねえで早く持つて來い。

九助　あい。(引込む)

おさよ　よし原へ來た時分は、こんなに强いお酒ではなかつたに……、かうも人間が變るものか。(泣く)

伊太八　いつまで一つことを云つてゐるのだ。手前のやうな奴が傍にゐると、酒が陰氣になつていけねえ。それだから體よく品川の方へ追つ拂つてしまつたのに、なぜこゝへ尋ねて來るのだ。用はねえから早く歸れ。

おさよ　それでもあんまり心配で……。

伊太八　餘計なお世話だ。早く歸れ。えゝ、歸らねえか。

(おさよを小突く)

おさよ　歸れといふなら歸りもしますが、どうぞ身持を改めて……。

伊太八　まだそんなことを云つてゐやあがるのか。うぬ、ずん〳〵出て行かねえと料簡しねえぞ。(德利をふりあげて起つ) さあ、出て行け。

(臺所より九助出づ。)

九助　おい、おい、そんな手暴えことをして、怪我でもさせると大變だ。まあ、待ちねえ。(おさよに) おまへさんも氣の毒だが、大將はちつと醉つてゐるんだから、け

ふはさあ逆(さから)はねえで素直に歸つた方がいゝせ。
伊太八　さあ、歸れ、歸れ。
おさよ　ぢやあ、歸りますよ。
伊太八　あたりめえよ。こゝは手前の家ぢやあねえ。
おさよ　でも、あんまり……。
(歸らうとするを、九助は止める。)
九助　まあ、なんにも云はねえで歸んなせえよ。小頭は氣が暴えから、なぐられでもしちやあ詰らねえ。
伊太八　坊主。その阿魔をひきずり出してしまへ。
九助　あい。判つた、わかつたよ。
(九助は一方に伊太八を宥めながら、一方にはおさよを宥めて外へ連れて出る。)
九助　いゝ鹽梅に雨も止んだやうだ。品川までは隨分あるから、この間に早く歸んなせえ。
おさよ　あい。色々御厄介になりました。
(おさよは涙をふきながら、笠をかぶりて向うへ行きかゝると、下のかたより丑藏は尻を端折り、おくめに番傘をさし掛けて出づ。)
九助　おゝ、丑大哥(あに)か。(おくめを見ておどろく) や、素的な姐さんだ。これがお嫁さんかえ。
丑藏　これ。(眼で叱る)
(おくめは無言で逃げようとするを、丑藏は止める。)
丑藏　まあ、あとで判ることだ。兎も角もおとなしく來るが可い。(無理におくめを連れて這入る)
(おさよは立止まりて窺ひゐたりしが、合點のゆかぬ體にて忍び足にて引返し、下のかたにかくれる。)
丑藏　さあ、人見しりをしねえで、早く上んねえ。これからはこゝがお前の家だ。
おくめ　えゝ。
丑藏　なにをぐづ／＼してゐるんだ。(無理におくめを緣にあげる)
伊太八　や、御苦勞、御苦勞。おい、おくめさん。よく來て與んなすつたね。(九助に) やい、ぼんやりしてゐねえで、酒の支度でもしろ。
九助　あい、あい。
(九助は呆れた顏をして臺所へゆく。おくめはおろおろしてゐる。)
伊太八　何もそんなにそは／＼することはねえや。奥山の茶店で、おとなしいのと容貌(きりやう)が好いので評判娘のおくめさんが、おれ達の女房になるとは、よく／＼深い御緣だらうよ。まあ、さう思つて落ちついてゐるが可いや。こんな家でも酒ぐれえに不自由はしねえ。とりあへずお酌でもして貰はうぢやあねえか。(臺所に向ひ) おい、酒はどうした。

九助　あい、あい。馬鹿に急ぐんだな。（德利を持ち來りて伊太八の前に置く）姐さん、お酌をたのむぜ。
丑藏　そんなことは可いから、手前はこつちへ行つて燗番でもしてゐてくれ。
九助　へん、ありがてえ役廻りだ。
伊太八　なんだと……。
九助　なに、なんでもねえのさ。（再び臺所へゆく）
丑藏　さあ、酒が來た。小頭、始めねえか。
伊太八　むゝ。（猪口を取る）おい、おくめさん。一つ注いでくんねえ。御祝儀はさつき澤山遣つてあるぜ。
おくめ　はい。（もじ〳〵してゐる）
伊太八　さつきの櫻湯は强氣に旨かつたよ。
（おくめは默つてゐる。）
伊太八　（聲あらく）おい。注がねえのか。酌は出來ねえのか。
おくめ　はい。（忌々ながら酌をする）
丑藏　この子の酌なら旨からうね。（笑ふ）
伊太八　これもみんな手前（てめえ）の働きだ。
おくめ　もし、丑藏さん。さつきからも云ふ通り、どうぞ家へ歸して下さい。
丑藏　（空とぼけて）それぢやあお前、話が違ふぜ。
おくめ　話が違ふとはこつちで云ふこと。さつきお前さんが店に來て、橋場の叔母さんが急病だから、すぐに歸つて見舞に行く途中にお前さんが待つてゐて、無理にこの出闇へ連れ込んで……。
丑藏　おい、おい、常談を云つちやあいけねえ。夜なかでもあることか、この眞晝間にお前も子供ぢやあなし、忌がるものを無理にこゝへ連れて來られるものか。積つて見ても知れたことだ。お前も得心づくで來たんぢやあねえか。
おくめ　いえ、いえ、聲を立てれば殺すぞと嚇してこゝへ連れ込んだので……。
伊太八　まあ、まあ、今更そんなことを云ひ合つても仕樣がねえ。おい。（丑藏に猪口をさす）勘次がなにか肴を見つけて來る筈だ。
丑藏　（猪口を取る）おい、おくめさん。おれにやあ酌をして與れねえのか。お前も現金な女だな。
（おくめは矢はり默つてゐる。）
おくめ　日の暮れないうちに早く歸して下さいまし。もうそろ〳〵店を仕舞ふ時分で、家（うち）でも定めて案じてゐませうから。
丑藏　歸りたけりやあ歸しても遣らうが、なにしろ今夜は泊つて行きねえ。

おくめ　いゝえ、どうしても歸してください。

丑藏　お前も強情な女だな。

（丑藏は伊太八の顔を見る。伊太八うなづきて起ちあがり、鴨居にかけたる槍を把る。）

伊太八　どれ、今のうちに槍でも研いで置かうか。

おくめ　え。

伊太八　けふは小塚つ原で磔刑の女を突いて來たので……（笑ふ）この通り血だらけになつてしまつた。（槍をみせる）

おくめ　え。（顫へる）

丑藏　これで突かれちやあ堪らねえな。

伊太八　これで脇つ腹をずぶりと抉られりやあ、どんな人間でも堪らねえや。はゝゝゝゝ。

（おくめは逃げようとして椽を降りかゝるを、伊太八は槍の柄にておさへる。）

伊太八　えゝ、じたばたするな。ふだんから奧山で眼をつけてゐた女だが、所詮素直に相談はつくめえと、この丑藏の智慧を借りて、うまくこゝまで連れ込んだからにやあ、なんと云つても、もうこつちのものだ。當分はおれの嬲にして、飽きた頃には川崎か、もつと遠くならば神奈川、藤澤、三島女郎衆か岡崎か、五十三次宿々の好きなところへ賣つて遣らあ。おい、丑。如才なく山女衒へかけ合つて置け。その時にやあ手前にも山分けだ。

丑藏　ありがてえな。おい、おくめさん。（傍に寄りておくめの手を取り、再び椽より引き上げる。）もうかうなつちやあ仕方がねえ。お前もまんざら堅氣のお孃さんと云ふわけでもねえ。寺內の生臭坊主や寺侍を迷はした報いとあきらめて、素直に往生するがいゝせ。お前はあれが……。（槍を指さす）怖くねえのか。大哥はあれで人を突き殺すのが商賣だよ。

おくめ　さあ。（顫へてゐる）

伊太八　やい、はつきりと返事をしねえか。

（おくめは泣き伏す。おさよはたまり兼ねて小蔭より出ようとする時、下のかたより勘次は手拭をかぶり、竹の皮包をさげて出づ。そのあとよりおくめの叔母おとくが追つて出づ。）

おとく　もし、お前さん。

勘次　う、う、うるせえ。知、知、知らねえと云ふのに……。

（おさよはこれを見て再びかくれる。）

おとく　それでもおくめは此處へ連れ込まれたと云ふことを、たしかに人から聞いて來ました。

勘次　だ、だ、誰が、そ、そ、そんなことを云つたか。知、知、知らねえが、お、お、俺あ、まつたく知らねえんだ。

（云ひながら二人は入來り、おとくはおくめを見付ける。）

おとく　おゝ、おくめ。やつぱりこゝにゐたのか。

おくめ　おゝ、叔母さん。

（おくめは駈け寄らうとするを、丑藏はおさへる。）

おとく　今買物にそこまで出たら、奥山のおくめさんが丑藏さんと二人づれで、こつちの小屋へ這入つたといふ噂。不思議に思つて探しに來ました。（丑藏に）もし、お前さん。なんで姪をこんなところへ……。

丑藏　頼まれたから連れて來たのさ。

おくめ　いえ、いえ、頼んだ覺えはありません。無理無體にわたしを手込めにして……、

伊太八　えゝ、やかましい。（おとくに）もし、おまへさんが叔母さんなら、あらためて御相談してえのは外ぢやあねえ。このおくめ坊を嫁に貰ひてえ。

おくめ　え。

勘次　な、な、なるほど。こ、こ、こりやあ恰好の花嫁だ。叔母さんも定めて、ふ、ふ、二つ返事だらうね。

おとく　飛んでもないことを……。家の都合で茶店奉公はさせて居りますが、これでも大切の婿取りでございます。

伊太八　そんならおれの方から婿に行かう。持參金はうんと持つて行くぜ。

丑藏　女の方でも惚れてゐるんだから仕方がねえ。いつそ諦めて素直にくれてしまふが可いぢやあねえか。

おとく　いえ、いえ、さうはなりませぬ。

伊太八　どうしても不承知かえ。

おとく　忌がるものをかどはかして來て、婿に行かうの、嫁にくれのと無理難題、どうしてそれが肯かれませう。

伊太八　なに、かどはかしだ。うぬ、飛んでもねえことを云やあがる。やい、勘次。その婆を小つ酷くなぐり付けろ。

おくめ　あれ、もし……。

丑藏　えゝ、默つて見てゐろ。（おくめをおさへる）

伊太八　やい、坊主。そこから薪ざつぽうを持つて來い。

九助　なんだ、なんだ。

（九助は薪を持ちて臺所より庭に出る。）

勘次　こ、こ、この、ば、ば、婆をなぐるんだ。

おとく　それはあんまり……。（逃げようとするを、勘次は襟髪を取つて引き据ゐる）

九助　なんぼ何でも相手は年寄りだ。薪ざつぽうで打んなぐるのは些と可哀さうだな。

勘次　氣、氣、氣の弱えことを云ふな。さ、さあ、おれに貸、貸、貸せ。（薪を受取つて振上げる）おれは、こ、こんな事が、だ、だ、大好きだ。

おくめ　まあ、待つてくださいまし。
丑藏　それぢやあ素直にうんと云ふのか。
おくめ　さあ。
伊太八　えゝ、構はずになぐれ、毆れ。
勘次　さ、さあ、ば、ば、婆。手、手、手前も早く承知をしろ。（箒にて打つ）さ、さあ、こ、こ、これでもか。
（つゞけて打つ）
おくめ　あゝ、もし、どうぞ堪忍して……。
（おくめは氣を揉むを、丑藏はおさへてゐる。伊太八は笑つて酒をのんでゐる。小蔭よりおさよは走り出で、勘次を支へる。）
おさよ　まあ、そんな手暴いことを……。
勘次　だ、だ、誰だ、誰だ。むゝ、おさよさんか。邪、邪魔をしちやあいけねえぜ。
おさよ　これが邪魔をしずにゐられませうか。これ、伊太八さん、先刻もあれほど意見したに、ひとの娘をかどはかして、女房にするの、宿場へ賣るのと、呆れ果てたお前の料簡。
伊太八　まだそこらにうろ〳〵してゐたのか。手前の出る幕ぢやあねえ、引込んでゐろ。
おさよ　いえ、いえ、引込んではゐられません。今から心をあらためて……。
伊太八　えゝ、うるせえ奴だ。勘次、そいつも一緒になぐり付けろ。
勘次　え。（すこしく猶豫ふ）
伊太八　坊主。手前も手傳へ。
九助　いや、こりやあいけねえ。（頭をおさへて後へ退る）わつしは御免だ。南無阿彌陀佛。なむ阿彌陀佛。
伊太八　どいつも意氣地のねえ奴だ。
おさよ　（おとくに）もし、わたしが來ましたからは、決して御心配には及びません。
おとく　どうぞ助けてくださいまし。
おさよ　わたしに任してお置きなさい。
おとく　なにぶんお賴み申します。（手をあはせて拜む）どうぞ二人が無事に歸れますやうに……。
伊太八　無事に歸してたまるものか。やい、おさよ。邪魔をするともう料簡しねえぞ。
（伊太八は起ちかゝらうとする時、下のかたより以前の長太走り出づ。）
長太　おい、なんだか知らねえが、頭から急用だ。
伊太八　おれに來いと云ふのか。
長太　すぐに呼んで來いと云ふことだ。
丑藏　お頭から急に呼びに來るとは……。なんだらうね。
（顏をしかめる）

伊太八　悪いところへ呼びに來たが、なにしろ顔を出して來ずばなるめえ。うるせえな。

（九助に臺所より番傘と下駄を持つて來る。伊太八はその下駄を穿きて出る。）

伊太八　みんなも能く氣をつけて、どいつも逃しちやあならねえぞ。

おさよ　もし、お前はまだ……。

（おさよは詰め寄らうとするを、伊太八は蹴倒して傘を開く。）

伊太八　さあ、長太。一緒に來い。

（伊太八と長太は下のかたへゆく。おさよは情なさゝうにあとを見送る。薄く雨の音。蛙の聲。）

――幕――

第三幕

一

伊太八の家の裏手。正面はおぼろ家の板羽目。下のかたに流しの毀れかゝりたる井戸あり。井戸のほとりに柳の立木あり。この柳より物干竿の竹をわたして、古き襦袢、小兒(こども)の着物などかけてあり。前幕と同じ日の夜、薄く雨の音、題目太鼓の音きこゆ。

（上のかたより女房おたつ、手拭をかぶりて出づ。）

おたつ　おや、おや、たうとう本降りになつて來さうだ。日が暮れたのに、干物を片附けるのを忘れてゐた。

（竿にかけたる着物や襦袢などを外してゐる。下のかたより同じく女房おとらは柄杓を入れたる手桶をさげて出づ。）

おとら　仕様のない天氣だねえ。（云ひつゝおたつの方を透しみる）おや、おや、おたつさん。ちよいとお待ちよ。

おたつ　おとらさん、なにか用かえ。

おとら　まあ、お待ちよ。（進み寄る）お前さんのかゝへてゐる襦袢は誰のだえ。

おたつ　家の子供のさ。

おとら　おとぼけでないよ。そりやあたしの家で夜干しにして置いたんだよ。ほんたうに油斷も隙もなりやあしない。常談しないで返しておくれよ。

おたつ　おや、お前さん、可怪(をかし)なことを云ふね。それぢやあ妾がお前さんのを取つたとでも云ふのかえ。

おとら　その麻の葉の襦袢は家の子供のだよ。ぐづ／＼云はないで返しておしまひよ。

おたつ　おなじ麻の葉だつて世間に幾らもあらあね。妾あから見えても人の物なんぞ塵一本だつて取つたことはないんだよ。常談も好加減にするが可いや。（干物をかゝ

へて行きかゝる)

おとら　(追つてゆく) お前さんも隨分づう／＼しいねえ。あやまつて返しておいでよ。

おたつ　ぢやあお前さんは何うしてもあたしを泥坊にするのかえ。

おとら　盜んだから盜んだと云ふのさ。それに不思議があるものか。

おたつ　さういふお前こそ勘次さんの臺所から下駄を持ち出さうとして、箒でさん／＼毆られたぢやあないか。

おとら　お前こそ傳八さん所のたはしをちよろまかして行つたのを忘れたか。

おたつ　なにを云やあがるんだ。泥坊め。

おとら　うぬが泥坊だ。

おたつ　畜生……。

おとら　獸物……。

(ふたりは掴み合の大喧嘩になる。上のかたより坊主の九助うかゞひ出で、二人のなかへ割つて入る。)

九助　まあ、待つてくれ。こゝで喧嘩は止してくれ。折角醉つ拂ひを寢かし付けたところだ。

おたつ　伊太八さんは寢てゐるのかえ。

九助　小頭は今留守だが、丑藏と勘次をやう／＼寢かしてしまつたところだ。眼をさますと又面倒だから、靜かにしてくれ。

おとら　だつてお前さん。あたしの家の襦袢をこの泥坊が……。

おたつ　まだそんなことを云ふのかえ。

おとら　あたりまへさ。

(二人はまた詰寄るを、九助は隔てる。)

九助　まあ、まあ、止してくれと云ふのに……。それほど喧嘩がしたけりやあ、あつちの空地の廣い所へ行つて、喰合ふとも死合ふとも勝手に遣つてくれ。さあ、さあ、たのむから早くあつちへ行つてくれ。(無理にふたりを下のかたへ押遣る)

おたつ　それでもお前さん、こん畜生が……。

九助　可いよ、可いよ。まあ、あつちへ行つて何でも遣つてくれ。さあ、早く、早く……。

(おたつとおとらは下のかたへ突き遣られて、なにか口小言を云ひながら立去る。)

九助　いや、さう／＼しい奴共だ。折角寢かしつけた二人に、眼を醒まされちやあ何にもならねえ。

(云ひつゝ左右を窺ふ。うすく雨の音。上の方よりおさよは先に立ち、おくめは手拭を吹き流しに被り、おとくと共に忍び出づ。)

おさよ　九助さん。大丈夫ですかえ。

九助　大丈夫。日は暮れる、雨は降つて來る。ぬけて出るにやあ丁度幸ひだ。

おさよ　丑藏さんも勘次さんも、すつかり醉つて寢込んでしまつたから、めつたに氣が付く氣遣ひはあるまい。

おくめ　叔母さんの病氣とだまされて、初めは丑藏さんの家へ連れ込まれ、それから又こゝの家へ送られて、おそろしい無理難題、どうなることかと案じて居りましたに、無事でかうして歸れますのも、みんなお前さん達のお庇でございます。なんとお禮を申してよからうやら……。

おとく　叔母ひとり、姪一人、この子に若ものことでもあつたら、死んだ姉にも申譯がないと、どんなにか心配いたしましたが、先つ何事もなくて濟みましたは、日ごろ信心する觀音樣のお庇……。（手をあはせる）二つにはお前樣方のおなさけ、この御恩は一生忘れませぬ。

おくめ　今夜は心が急きますれば、いづれ改めてお禮にあがります。

おさよ　わたくしの家は遠い品川ですから、決してわざわざお禮には及びません。そんなことを云つてゐるうちに、もしや人に見付かつては……。

九助　ちげえねえ。ぐづ〳〵してゐるうちに、小頭が歸つて來ちやあ大變だ。

おさよ　さあ、些とも早くお出でなさいまし。九助さん。お前はそこまで送つて御一緒に……。

九助　そこまで送つて行つて上げませうよ。

おとく　なにから何までありがたうございます。

おさよ　氣をつけてお出でなさいまし。

（おくめとおとくはおさよに禮を云ひて嬉しさうに立去る。九助は案内してゆく。）

おさよ　伊太八さんの留守を幸ひに、みんなを巧く盛潰して、あの二人を逃がして遣り。これでやう〳〵安心したが、さて此のあとを何うしたものか。

（おさよは考へてゐる。題目太鼓の音。上のかたより勘次は酒に醉ひたる體にて、役の槍を杖にして出づ。）

勘次　さあ。た、た、大變だ、大變だ。女がみんな居なくなつてしまつた。

おさよ　勘次さん。わたしはこゝにゐるよ。

（よろけながら四邊をきよろ〳〵見まはしてゐる。）

勘次　やあ。お、お、おさよさんか。

おさよ　お前さんは大變醉つてゐるやうだよ。あぶないから内へ這入つておいでよ。

勘次　だつて、た、た、大變が起つたんだ。な、な、何、おらあ醉、醉つちやあゐねえよ。（よろ〳〵してゐる）おい、おい、おさよさん。女は、ど、ど、どこへ行つたんだ。

おさよ　わたしは知らないよ。
勘次　お前も、知、知、知らねえか。はてな。
（傘を杖にして考へてゐる。向ふより伊太八は傘をすぼめて出づ。）
伊太八　又ぽつ／＼降つて來やあがつた。仕樣がねえな。（透してみる）おい、その薄つ暗えとこに突つたつてゐるのは誰だ。
勘次　お、お丶、小、小、小頭。女はふたりとも逃、逃、逃げてしまつたよ。（よろ／＼してゐる）
伊太八　なに、女が逃げた……。あれほど云付けて置いたのに、どぢな奴等だ。（考へる）して、おさよはどうした。
勘次　おかみさんは其、其處にゐらあ。
伊太八　え、（透してみる）む丶、そこにゐるのはおさよか。
おさよ　あい。
伊太八　よし、大抵判つた。（つか／＼寄つておさよの腕をつかむ）おくめと妾は手前が逃がしたのだらう。さあ、隱さずに云へ。
おさよ　あい。あの二人はわたしが逃がしました。
勘次　え、お前が逃、逃、逃がしたのか。こ、こ、こりやあ驚いた。

伊太八　（怒る）大方そんなことだらうと思つた。ぢやあ何だな。おれがあの女を女房にすると聞いて、手前やきもちを燒いて邪魔をしたんだな。
おさよ　さつきからも云ふ通り、どうすれば斯うも人間が變るものか。淺草と品川と分れ／＼になつてゐても、心は決して離れまいと、體よくわたしを遠ざけて、ほかの女をかどはかし、たとひ三日でも夫婦にならうとは、あんまり妾を踏付けにした仕方、それで義理が濟みますかえ。
伊太八　もう手前なんぞに義理はねえ。
おさよ　え。
伊太八　なるほど俺も五年前にやあ、手前のやうな女に熱くなつて、大事の命までも棒に振らうとしたが、そりやあ若え時のあとさき見ずで、今更おもへば馬鹿の骨頂だ。手前のやうに昔の癖が拔けねえで、いつまでも馬鹿堅えことばかり云つてゐる女は、第一おれと宗旨が違はあ。
おさよ　一度は倶に死なうとしたほどの、義理も人情も忘れてしまつて、お前は今更そんなことを……。（泣く）もし、この傷を覺えてゐますかえ。（わが喉を指さす）
伊太八　え。（これも思はずわが喉を押さへて又あざ笑ふ）むかしは昔、今は今だ。手前はそれほど義理を知つてゐるなら、おれの女をなぜ逃がした。

おさよ　蛇にみこまれた蛙のやうで、あのおくめさんがあんまり可哀さうだから、わたしが逃して遣りました。
伊太八　俺がふだんから眼をつけて、折角あげて來た大事の玉をよくも逃してしまやあがつたな。唯は置かねえからさう思へ。（おさよを突き倒す）
おさよ　お前はあんまり……。
伊太八　なにがあんまりだ。あんまり針イが開いて呆れらあ。
（傘にておさよを打つ）
おさよ　それほど腹が立つならば、ぶつとも蹴るとも勝手にして……。さあ、たんと打つてください。
伊太八　そのくれえぢやあ腹が癒えねえ。ぶち殺してやるから覺悟しろ。勘次、手前の持つてゐる棒をかせ。
勘次　え。こ、こ、こりやあ、や、や、槍だよ。
伊太八　槍でも何でも構はねえ、こつちへ出せ。
（伊太八は槍を引つたくる。勘次はよろ／＼しながら止める。）
勘次　な、な、なんぼ何でも、そ、そりやあ危ねえ。お、おい、おさよさん。は、は、はやく、逃、逃、逃げねえよ。
伊太八　うぬ、逃げると承知しねえぞ。
おさよ　お前はどうでもわたしを殺す氣か。
勘次　ま、ま、まあ、あぶねえ。

伊太八　え丶、邪魔するな。
（勘次はよろけながらおさよを圍ふを、伊太八は追ひまはす。おさよは井戸側をめぐりて逃げるを、伊太八は追ひかけて、支ふる勘次を槍の石突きにて突く。勘次は脾腹をかゝへて倒れる。おさよは逃げんとしてつまづき、井戸端の柳に倒れかゝるところを、伊太八は槍にて脇の下を突き透す。おさよは立ちたるまゝ苦む。）
伊太八　ざまあ見やがれ。まるで磔刑だ。（槍を引けば、おさよ倒る）五年前におれと一緒に死なうとした女が、おれに殺されるのも何かの緣だらう。けふはこれで二人殺した。
（よし原の騒ぎ唄きこゆ。）
伊太八　風の吹き廻しか、よし原の騒ぎ唄が田圃を越して、今夜は手に取るやうに聞えるな。おれもよし原へ通つた頃には、こんな下らねえ奴に惚れてゐたのだ。（さびしく笑ふ）
（上のかたより丑藏窺ひ出づ。）
丑藏　おい、小頭。どうなることかと先刻から窺つてゐたら、たうとうおさよさんを殺つちまつたね。可哀相なことをしたつけなあ。
伊太八　それも心柄だ。仕方がねえ。時に丑、もうか

うかしちやあゐられねえぜ。

丑藏　え。

伊太八　このあひだの大名屋敷の一件よ。

丑藏　むゝ。お前の舊の主人の屋敷で、勝手はすつかり知つてゐると云ふから、おれも手傳つて千兩箱をかつぎ出したが、それがたうとう露れたのか。

伊太八　ぬすんだ奴はなんでも屋敷の勝手を知つてゐる者に相違ねえと、だん／＼に詮議がきびしくなり、今もお頭のとこへ呼び付けられて、色々に訊かれたが、どこまでもシラを切つて歸つて來た。だが、お頭も薄々感づいてゐる樣子だから、行掛けの駄賃にあのおくめを引つ擔いで、どこへか高飛びしようと思つて、歸つてみれば女は玉無しよ。あんまり癪に障つたから、こいつはたうとう此のざまだ。（おさよの死骸を指さす）馬鹿な奴よ。

丑藏　なるほど、そりやあ俺もかゝり合ひだ。うつかり油斷は出來ねえな。

伊太八　おれは今夜の中にもこゝを立退いて、一旦上州の方に身をかくさうと思ふのだが、手前もなんとか這奴の始末をして、早々に草鞋を穿く支度をしろ。勘次がそこらに轉げてゐるから、起して手傳はせるが可いや。

丑藏　むゝ。勘次も倒れてゐるんだね。

伊太八　そいつは眼を眩してゐるんだ。すぐに生きらあ。おやあ頼むよ。

（云ひすてゝ伊太八は上の方に行かうとする。倒れしおさよは再び眼をみひらく。）

おさよ　伊太八さん。

伊太八　え。（立ちどまる）

おさよ　お前は心を入れかへて……。どうぞ昔のやうになつて……。（云ひかけて弱る）もし、水を……水を……。

丑藏　水をくれろと云ふんだね。

伊太八　末期の水だ。飲ましてやれ。

（時の鐘きこゆ。）

伊太八　ありやあ淺草の四つか。夜は短くなつたな。

（鐘の聲つゞけて聞ゆ。丑藏は竹釣瓶にて井戸の水を汲み、おとらが置いて行きし手桶にあけ、その水を柄杓に汲んで來る。）

丑藏　さあ、水だよ。

（おさよを抱き起して飲ませる。）

丑藏　小頭。

伊太八　なんだ。

丑藏　これも昔は、お前と死ぬほどに惚れ合つた仲なんだな。人間はわからねえもんだなあ。

伊太八　不思議なものよ。

丑藏　不思議だなあ。

（丑藏は思はず手を放せば、おさよはがつくり倒れて息絶ゆ。よし原の騒ぎ唄また聞ゆ。）

丑藏　今夜は馬鹿に陽氣に騒いでゐやあがるな。（おさよを見て）こつちの佛樣はもういけねえや。お前も馴染甲斐に拜んで遣んねえ。

伊太八　俺あそんなことは大嫌えだ。（云ひすてゝ上の方に去る）

丑藏　なるほど、思ひ切つて薄情に出來てゐるなあ。なにしろ、おれ一人ぢやあ手が付けられねえ。（勘次を呼び活ける）やい、勘次。しつかりしろ。おい、おい、おい、どうした。しつかりしろ。（柄杓で水を飲ませる）

勘次　（眼をひらく）むゝう。あ、あ、あぶねえ。あぶねえ。（夢中で云ふ）

丑藏　あぶねえどころか、おさよさんはもう疾うに死んでゐらあ。

勘次　え。

丑藏　さあ、手前も手傳つて始末をしろ。

勘次　と、と、飛んでもねえことになつたな。

（丑藏は指圖して、勘次と共におさよの死骸を引き起すところへ、九助は歸り來る。）

九助　や、こりやあ何うしたんだ。（驚く）

丑藏　靜にしろ。おさよさんが小頭に殺られたのだ。

九助　ひどい事をするなあ。やれ、やれ、可哀さうに……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（拜む）

丑藏　手前の南無阿彌陀佛も今夜初めてお役に立つた。（笑ふ）

勘次　さすがの俺も、こ、こ、これにやあ驚いたよ。南、南、南無阿彌陀佛。

丑藏　手前までが釣込まれて、ぐづ／＼云つてゐても仕樣がねえ。どうで浮ばれねえ佛だ。早く片附けてしまはうよ。

（丑藏は勘次と共におさよの死骸を下のかたへ運びゆく。題目太鼓の音。）

九助　おれも一緒にゐりやあ殺されたかも知れねえ。あゝ、なむ阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（向うより原田五七郎は仲間に提灯を持たせ、あとより身輕に出で立ちたる侍數人したがひて出づ。）

五七郎　これ、伊太八といふ者の住居はいづこだ。

九助　（びつくりして）へえ、へえ、あれでございます。

五七郎　（侍を見かへる）兎もかくも拙者が踏み込んで一應詮議いたせば、各々は家の前後をかためて取逃さぬやうに用心めされ。

侍　心得ました。

九助　わたくしはもう御用はございませんか。

五七郎　おゝ。行け、ゆけ。

九助　はい、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（九助は早々に下のかたへ逃げてゆく。）

五七郎　六藏、其方もこゝに控へてをれ。

仲間　はい。

（中間は提灯を持ちしまゝ控へてゐる。五七郎一人は上のかたへ行きかゝる。薄く雨の音。）

二

もとの伊太八の住家。内には薄暗き行燈を點してあり。

（伊太八は鉢巻、片肌ぬぎにて竹杖に仕込みたる刀を腰にさし、床板をめくりて床下に埋めたる小判を掘り出してゐる。床の上にも小判が澤山に積んであり。）

伊太八　丑の野郎はなにをしてゐやあがるんだらう。とてもおれ一人ぢやあ持ち出し切れねえ。（汗を拭いてゐる）

（下のかたより五七郎窺ひ出づ。）

五七郎　頼む。

伊太八　え。（ぎよッとする）

五七郎　伊太八どのは在宅めさるか。

伊太八　な、なんだ。

（伊太八はあわてゝ傍にありし槍を把り、積んだる小判の上に展をかける。）

五七郎　お騒ぎなさるな。五七郎でござります。（すこしく安堵して槍を捨てる）今

伊太八　むゝ、弟か。頃こんなところへ何しに來た。

五七郎　ちと御意得たい儀がござりまして……。

伊太八　なんだか知らねえが、まあこつちへはひれ。

五七郎　御免くだされ。（縁にあがる）先刻は失禮仕つりました。

伊太八　（まだ不安らしく）そんな事はどうでも可い。早く用を云へ。早く云へ。

五七郎　兄上。

伊太八　なんだ。

五七郎　その小判は如何なされたのでござります。

伊太八　え、これか。これは……。

五七郎　先刻も申上げましたる通り、江戸屋敷に盜賊忍び入り、御用金一千兩をぬすみ出しました。

伊太八　それは先刻も聞いたことだが、それがどうしたと云ふのだ。

五七郎　もはや何にも申上げませぬ。わたくしの役目はこれでござります。（懐中より十手と捕繩を出す）

伊太八　おやあ何か、おれがその泥坊だと云ふのか。（少しく慌てる）證據があるか、證據があるか、それを云へ。今は身分違ひでも、貴様はおれが現在の弟だぞ。兄に向

つて無暗なことを云ふな。
五七郎　覺えがないとおつしやりますか。
伊太八　あたりめえよ。知らねえ、知らねえ。
五七郎　では、大枚のその小判を、なんで床下に埋めてお
置きなされました。
伊太八　え。
五七郎　その刻印を檢(あらた)めませうか。
伊太八　え。
五七郎　かやうなお姿に相成つても、兄上も元は武士の種(たね)、
尋常に御切腹なされませ。
伊太八　腹を切れ……。飛んでもねえことを云やあがる。
おらあ腹を切るやうな覺えはねえ。
五七郎　切腹は御不承知でございますか。
伊太八　いやだ。いやだ。
五七郎　たとひ忌と申されましても最早逃るゝ道はござり
ませぬ。（詰めよる）　この家の前後は大勢が取卷いて居
りまするぞ。
伊太八　なに、大勢が取卷いてゐる……。こりやあいけね
え。（起ちあがる）
五七郎　兄上、御卑怯な。（袖をつかむ）
伊太八　えゝ。なにをしやあがる。
（伊太八は振り放して行燈を蹴倒せば、家のなかは暗
くなる。五七郎は探りながらに追はんとするを、伊太
八は摺り拔けて行かうとするうちに、五七郎は積んだ
る小判につまづきて倒れる。伊太八は緣より飛び降り
て下のかたへ行きかゝると、小蔭より侍一人うかゞひ
出で、それとすかし視て組みつくを、伊太八は突き倒
して一散に走りゆく。五七郎は起き上りて屹と向うを
見込む。雨の音。）

三

吉原の裏田圃。平舞臺にて所々に柳の立木あり。正面
は田川や低き土手を隔てゝ吉原の廓(くるわ)。灯入りの遠見。
騷ぎ唄きこゆ。
（ひやかしの若い者は頰冠り、相々傘にて立つ。）
若者甲　なんだか降つたり止んだり、をかしな天氣だな。
若者乙　このごろの天氣癖だ。ふられる覺悟してゐりや間
違ひはあるめえ。
若者甲　手前が女郎買にいつたやうだ。はゝゝゝゝ。な
にしろ一廻り廻つて來ようぜ。
若者乙　毎晩御苦勞樣なことだな。あんまり强く降つて來
ねえ中に、行かう、行かう。
（二人は上のかたに去る。下のかたより丑藏は頰包り
尻端折にて、破れし番傘をさし、女房お熊は竹の子笠を

かぶり、風呂敷包みをかゝへて出づ。)
丑藏　おい、もつと早く歩かねえか。不斷は口ばかり達者な癖に、かういふ時にやあ意氣地がねえぜ。
お熊　そりやあ當りまへさ、女だものを……。こんな時に面倒を見てくれるのが亭主の役だよ。
丑藏　ふだんは鼻らしくもねえ癖に、いざと云ふ時にやあ人に凭れかゝりやあがる。ぐづ〳〵してゐると置去りだぞ。(先へ行きかゝる)
お熊　(提へる)　おやあ姿を捨てゝ行くつもりかえ。伊太八さんはおかみさんを殺したといふが、お前も負けず劣らずの薄情だねえ。死んで執着いて遣るから覺えてゐるが可い。
丑藏　うるせえな。おやあ、ずん〳〵歩け。
(二人は上のかたへ行きかゝると、あとより長太、虎松、ほかに二人は棒を持ちて出づ。)
長太　おい、丑藏。ちよいと待つてくれ。
丑藏　え、なんぞ用か。
虎松　お頭が用があると云ふから、氣の毒だが、あと戻りをしてくんねえ。
丑藏　用は大抵判つてゐるが、ふだんの好しみだ、まあ見ねえ顔をして通して呉れ。
長太　いくら不斷の好しみでも、お頭の指圖だから仕方がねえ。
お熊　そこをあたしが賴むから……。
虎松　いけねえ、いけねえ。なんでも一度は歸つてくんねえ。
長太　そつちは二人、こつちは四人、素直に歸つた方がよからうぜ。
丑藏　(舌打して)　足弱連でなけりやあなあ。忌々しい目に逢つたものだ。
長太　さあ、さあ、早く來ねえと云ふのに……。
丑藏　誰も行かねえとは云やあしねえ。さう〳〵しい奴等だ。
(丑藏夫婦は長太等四人に圍まれて下のかたに行かうとする時、下のかたより傳八、源吉を先にその仲間の者、大勢出づ。)
傳八　おゝ、長太。丑藏はどうした。
長太　夫婦ながらこの通りだ。
源吉　伊太八もこつちへ逃げて來たと云ふが、とても素直に歸る氣づけえはあるめえ。
虎松　あいつは元が侍だから用心しろ。
傳八　合點だ。合點だ。
お熊　小頭もやられるのかねえ。
丑藏　これも運の盡きだ、仕方がねえ。

（丑藏夫婦と長太等四人は下のかたに去る。）

傳八　さあ、今度はこつちの番だ。今までは小頭だが、お頭の指圖だから仕方がねえ。

源吉　遠慮なしにふん縛れ。

一同　承知だ、承知だ。

（一同は左右の柳のかげに隱れる。雨の音。向うより伊太八は竹杖に仕込みし刀を腰にさし、酒菰をかぶりて走り出づ。）

伊太八　又おそろしく降つて來やがつた。なにしろこゝらにうか／＼しちやあゐられねえ。夜のあけねえうちに板橋まで伸さにやあなるめえ。

（伊太八は上のかたへ行かうとする時、木かげより傳八と源吉出づ。）

傳八　おい、小頭。ちよいと待つて呉んねえ。

（伊太八は知らぬ振をして行き過ぎようとする。）

源吉　知らねえ顏をするもんぢやあねえ。まあ、待つて呉んねえ。（菰を掴む）もし、お頭の御指圖だ。

伊太八　だれの指圖でも俺あ知らねえ。（振拂つて行かうとする）

傳八　もう仕方がねえ。それ。

（合圖に連れて木かげに隱れし大勢出で、伊太八を押取りまく。雨の音。騷ぎ唄。伊太八は大勢を相手にたたかひ、大勢はかなはずして逃げ去る。傳八と源吉は棒を持つて打つてかゝるを、伊太八は竹杖の刀をぬいて切拂ひ、遂に二人を切倒す。）

伊太八　どいつも這奴も馬鹿な奴だ。しかし人間も落目になつちやあ慘めなもんだ。先刻まではヤレ小頭の大哥のと、おれを敬ひ奉つて、振舞酒をありがたさうに掻つ食つた奴等が、みんな向うに廻りやあがる。この鹽梅ぢやあ丑も勘次もやられたらうな。

（伊太八は刀を鞘に收め、落ちたる酒菰をかぶつて行かうとする。下のかたより原田五七郎は羽織をぬぎ、下緒を襷にかけて出づ。）

五七郎　兄上。それにおいでなされたか。

伊太八　えゝ、又來やあがつたか。執念深え奴だ。もう好加減にしろ。

五七郎　これがわたくしの役目でござります。

伊太八　うぬ、もう料簡しねえぞ。

（伊太八は刀をぬいて切つてかゝるを、五七郎は十手にて防ぎ鬪ひ、遂に伊太八の刀をうち落して組み伏せる。）

五七郎　さあ尋常に切腹なさるか。

伊太八　疲れてゐなけりやあ手前なんぞに負ける俺ぢやあねえんだ。さあ、放せ、放しやあがれ。

五七郎　但しは繩をかけませうか。
伊太八　手前に縛られて堪るものか。
五七郎　これほど申してもお聞入れないとは……。
伊太八　なにを云やあがるんだ。
（不意に刎れかへして又逃げかゝるところへ、左右より侍数人出づ。仲間も提灯を持ちて出づ。）
侍　それ。
（伊太八を取りまきて再び組み伏せる。伊太八は暴れる。）
五七郎　もうこの上は是非に及ばぬ。それ、繩を打たれい。
（侍は伊太八を捻ぢつけて無理に繩をかける。）
伊太八　やい、五七郎。手前は兄をふん縛つて手柄にするのか。
五七郎　（嘆息して）それも御心柄で致方もござらぬ。（侍にむかひて）それ、引立てめされ。
侍　はあ。
伊太八　さあ、どうともしやあがれ。馬鹿野郎め。
（侍は伊太八を引立てる。）

——幕——

蟹滿寺緣起（一　場）

登場するもの

漆間の翁
嫗
娘
里の青年
蟹
蛇
蛙
里の童など

一

時代は昔、時候は夏、場所は山城國。久世郡のさびしき村里。舞臺の總方はすべて蓮池にて、花もひらき、葉も重れり。池のほとりには柳の立木あり。

（男女の童三人は唄ひ連れて出づ。）

唄へ蛙釣らうか、蟹釣ろか、蓮をかぶつた蛙を釣ろか、はさみを持つた蟹釣ろか。

（三人は池にむかひて手をたゝきながら、一調子はりあげて又唄ふ。）

唄へ蛙釣らうか、蟹釣ろか。水にとび込む蛙を釣ろか、
　穴にかくれた蟹釣ろか。

（わらべ等は唄ひ終りて、更にはじめの唄をくり返しつゝあゆみ去る。水の音しづかにきこゆ。蓮の葉をかき分けて、小さき蛙は頭に大いなる蓮の葉をかぶりて跳り出づ。）

蛙　えゝ、さう〳〵しい餓鬼共だ。子供といふものは何故あゝ騷ぎたいのだらう。いや、さう云へば俺だつて子供だ。陰つてあたゝかい靜な晩などには、なにか一つ唄つてみたいやうな氣がして、精一ぱいの大きな聲を出して、あたり構はずにぎやあ〳〵呶鳴ることもあるから、あんまり人間の惡口も云へまいよ。惡戯つ兒ももう行つてしまつたやうだ。おれも一番陽氣に唄つてやらうか。

（蛙はあたりを見まはして、唄ひながら踊る。）

蛙　人を釣らうか、こどもを釣ろか。死んだ振して子供を釣ろか。……あゝ、面白い、面白い。

（蛙は蓮の葉を地にしきて坐す。柳のかげより大いなる赤き蟹出づ。蟹は武裝して、鋏のごとき刃をつけたる長刀を携へたり。）

蛙　やあ、蟹の叔父さんだね。

蟹　人間の子供もさう／＼しいが、おまへも隨分騷々しいな。あけても暮れても騷いでゐる。蛙の子は蛙とはよく云つたものだ。おれ達を見習つて些つと默つてゐろ。

蛙　蟹の叔父さんのやうに默つてゐると、俺あ病氣になつてしまふよ。かうして時々に陸へあがつて來て、唄つたり踊つたりするのが何よりの樂みなんだ。

蟹　陸には怖いものがゐるのを知らないか。

蛙　人間の子供なんか、怖いものか。あいつ等がつかまへに來れば、俺あすぐに水に飛び込んでしまふから大丈夫だ。

蟹　おまへ達には人間よりももつと怖いものがゐるぞ。

蛙　なんだらう。（考へる）むゝ。蛇か。

蟹　その蛇だ。蛇は人間よりも足が疾い。木のかげや草のあひだに隱れてゐて、お前たちの姿を見付けると、不意にする／＼と駈けて來て、あたまから一呑みに呑んでしまふぞ。蛇はおまへ達に取つては何よりもおそろしい敵だ。蛇にみこまれたが最後、とても逃れることは出來ないのだから、そのつもりで用心しろ。

蛙　蛇はそんなに強いかねえ。

蟹　おまへ達よりも確に強い。

蛙　ぢやあ、叔父さんだつて敵はないだらう。

蟹　いや、おれはこの通り頑丈な甲で身をかためてゐる。おまけに斯ういふ鋭い武器を有つてゐるから、蛇の方で却つて怖がるくらゐだ。

蛙　なるほど叔父さんは強さうだね。俺あこの通り小さいから弱いのだ。

蟹　それだから早く大きくなれ。大きくなつて強いものになれ。お前だつて強くなれば、小さな蛇ぐらゐは反對に呑んでしまふことができるのだ。おれも昔は弱いものであつた。敵を見るとすぐ逃げて隱れたものだけれども、今はこんなに大きい強い者になつたから、大抵の敵が來たつて驚きはしない。こつちから向つて行つて、鋏でチヨン切つてしまふのだ。俺ばかりではない。どこの世界でも強いものが勝つのだ。

蛙　ぢやあ、叔父さん、強い叔父さん。もしもこゝへ蛇が來たら、おまへ後生だから助けてくれないか。

蟹　よし、よし。俺がきつと救つてやるから、安心して遊んでゐろ。おれはあの木のかげへ行つて、甲羅を乾しながら午睡をしてゐるから、なにか怖い者が來たら、すぐに俺をよべ。いゝか。

蛙　おまへが加勢してくれゝば安心だ。ぢやあ、頼むよ。

蟹　よし、よし。

（蟹は再び柳のかげに入る。）

蛙　さあ、蟹の叔父さんが味方をしてくれるから大丈夫だ。もう少しこゝらで遊んでゐようか。や、向ふから誰か來るやうだぞ。蛇や惡戲つ兒とは違つて美しい娘だ。俺をひどい目に逢はすやうなこともあるまい。平氣で唄でも唄つてゐろ。いや、さうでない。人は見かけに寄らぬものだ。まあ、一旦は隱れた方が無事かも知れない。

（蛙は池にとび込みて、蓮の葉のかげに隱れる。漆間の翁の娘、衣を洗はんとて出づ。）

娘　けふも何うやら陰つて來た。降らないうちにこの着物を洗つて置かうか。（池をのぞく）おゝ、池の水も澄んでゐる。

（娘は池のほとりに立寄りて衣を洗ふ。蛙の聲きこゆ。）

娘　おゝ、蛙が面白さうに唄つてゐる。わたしも負けない氣になつて唄はうか。いや、いや、どこにどんな人がゐまいものでも無い。人に聞かれたら恥かしい。まあ、まあ、默つて洗ひませう。

（蛙はしきりに鳴く。娘は衣を洗ひをはる。）

娘　まあ、これでよし。そこらの枝にかけて乾して置きませう。

（娘は柳の樹に衣をかけて去る。蓮の葉をかき分けて、蛙は再び出づ。）

蛙　あの娘も遠慮せずに何か唄へばいゝのに……。おれ達のは唄ふと云つても、唯むやみに呶鳴るのだが、あゝいふ美しい娘の喉からは、さだめて鈴のやうな可愛らしい聲が出るだらう。どうかして一遍聞きたいものだ。時に蟹の叔父さんはどうしたらうな。相變らず口から泡をふいて高鼾で寢てゐるのだらう。（柳の蔭をのぞく）なるほど、強いものは違つたものだ。こんなところで好心持さうに寢てゐるな。一體、けふは風も吹かず、日も照らず、なんだか薄ら眠いやうな日和だ。おれもさつきから唄ひくたびれたから、こゝらで一寢入り遣らかすかな。これを頭から被つてゐれば、誰もちよいと氣がつくまいよ。

（蛙は蓮の葉をかぶりて寢る。蛇出づ。頭には蛇をいたゞきて、身には鱗の模樣ある衣を被たり。）

蛇　このごろは蛙めもなか／＼利口になつて、遠くからおれの姿を見ると、すぐに水へ飛び込んでしまふから、容易にこつちの口へ入るやうなことがない。なんでも油斷してゐるところを不意に飛び付いて、一息に呑んでしまはなければいけないのだ。（云ひつゝ彼の蓮の葉に眼を

つけろ）や、あの蓮の葉がをかしいぞ。どれ、どれ。

（蛇は進んで蓮の葉のそばへ行き、足にて輕く搖かせば、蛙は葉のあひだより顔を出し、蛇を見るよりはつと縮まる。）

蛇　案の定、こんなところに隱れてゐた。さあ、もう逃がしはしないぞ。おとなしくしてゐろ。

（蛙は葉を被りしまゝ逃げんとす。）

蛇　えゝ、逃げても駄目だぞ。おれに魅まれたらもう一足でも動けるものか。はゝゝゝゝ。

（蛙は小さくなりてうづくまる。蛇はしづかに狙ひ寄る。蛙は這ひながら逃げまはる。以前の娘又もや衣をかゝへて出づ。）

娘　どうしても明日は雨らしい。降らない中にもう一枚洗つて置かう。（云ひつゝ歩み來りしが、此體を見るより走り寄る）まあ、待つてください。可哀さうにこんな小さな蛙をどうするのです。

蛇　どうすると云つて、強いものに出逢つた弱い者の運命は大抵きまつてゐるのだ。

娘　でも、あんまり可哀さうで……。まあ、御覽なさい。あんなに小さくなつて顫へてゐますよ。

蛇　今に顫へることも出來なくなるのだらう。

娘　後生ですからその蛙を堪忍して遣つてくださいな。今わたしがあの着物を洗つてゐたときに、面白さうに唄つてゐたのは屹とあの蛙でしたよ。

蛇　さうかも知れない。誰でも運命の手に掴まれるまでは、なんにも知らずにゐるものだ。

娘　なんにも知らずにゐる者を殺すのはあんまり可哀相でせう。無慈悲でせう。

蛇　可哀相でも仕方がない。今もいふ通り、弱いものは強い者に呑まれるのだ。おれが決めたのではない、神樣がさう決めたのだ。

娘　でも、あんまり酷いことを……。

（蛙は救ひを求むるがごとくに、娘の袖のかげに隱れる。）

娘　後生だからこの蛙を助けてやつて下さいな。わたしが頼みますから……。

蛇　おまへが頼むか。

娘　この通り、拜みますから。

蛇　よし、免してやらう。

娘　ほんたうですか。まあ、嬉しい。（蛙にむかひて）さあ、お前、早くお逃げよ。これに懲りて、もううつかりと陸へ上るんぢやないよ。

（蛙は喜びて早々に池へ逃げ去る。）

娘　御覽なさい。あの通り喜んで逃げて行きましたよ。あ

あゝ、妾はほんたうによい功徳をしました。

蛇　お前はほんたうに善いことをした。

娘　こんな嬉しいことはありません。

蛇　そこでおれはお前のたのみを肯いた。その代りにお前もおれの頼みを肯くだらうな。

娘　お前の頼みといふのは……。

蛇　おまへの婿になりたい。

娘　え。

蛇　おまへのやうな美しい女の婿になりたいのだ。

娘　でも、親達が承知しないでは……。

蛇　親達などはどうでも可い。おれはお前と約束したのだ。

（娘は恐れて默す。）

蛇　おまへの家はちやんと知つてゐる。今夜、酉の刻の鐘が鳴るのを合圖に、おれはお前のところへ婿入りするのだ。いゝか、忘れるなよ。

（云ひ捨てゝ蛇はしづかに歩み去る。娘はしばらく茫然としてゐる。）

娘　さあ、大變なことになつてしまつた。あの蛇が妾のところへ婿に來る……。まあ、どうしたらよからう。蛇は執念が深いといふから、一旦みこまれたが最後、どこまでも妾に附纏つて來るに相違ない。あの蛇が……。あのおそろしい忌らしい蛇が妾のところへ婿に來る……。えゝ、かんがへても悚然とする。わたしがもつと強ければ、蛇なんか幾匹押掛けて來たつて、門口から追ひ拂つてしまふのだけれども、わたしは女だ……弱い女だ。お父さんや阿母さんも年をとつてゐる。わたしの家には強いものは一人もないのだ。かうと知つたらあの蛙を救つてやるのではなかつものを……。あゝ、わたしは飛んだことをして、飛んだものに魅まれてしまつた。

（雨少しくふり出づ。娘は空を仰ぐ。）

娘　いつの間にか雨が降つて來た。（柳にかけたる衣を外す）今夜はきつと雨が降つて、暗い物凄い晩に相違ない。おそろしい蛇が……執念ぶかい蛇が……どんな姿をして來るだらう。（身をふるはせる）あゝどうしたらよからう。こゝで泣いてゐても仕様がない。兎も角も早く家へ歸つて、お父さんや阿母さんと相談するよりほかはあるまい。早くさうしませう。

（娘は二つの衣をかゝへて、悄々とあゆみ去る。柳のかげより蟹出づ。）

蟹　いゝ心持で午睡をしてゐる最中とで、泣いたり笑つたりがやがや騒ぐので、すつかり眼が醒めてしまつた。あの蛙め、早くおれを呼起せば可いのに、蛇にみこまれて顫へ上つて、もう聲も出なくなつたのだらう。ほんたうに弱い奴だ。（冷笑ふ）しかし又、あの娘さんもあんま

り無考へだな。いくら蛙が可哀さうだと云つて、自分も弱い女の癖に、うつかり差出るから斯んなことになるのだ。

（蛙の聲きこゆ。）

蟹　蛙の奴め。自分の代りにあの美しい娘を人身御供にして置きながら、平氣で面白さうに唄つてゐるが、娘の家では今ごろ大騷ぎをしてゐるだらう。可哀さうなものだな。

二

おなじ里、漆間の翁の宿。舞臺にあらはれたる家の中はすべて土間にて、奥の間には古き簾を垂れたり。上のかたに大いなる土竈ありて、消えかゝりたる藁の火とろ〳〵と燃ゆ。土間には坐るべき荒莚と、腰をかくべき切株などあり。ほかに鋤鍬の農具あり。打ちかけたる藁屑など散亂す。下のかたには丸太を柱としたる竹門あり。門の外には大樹あり。樹の間がくれに彼の蓮池遠くみゆ。

（白髮の翁と嫗は竈のまへに語る。）

嫗　どうも困つたことが出來したが、お前さんはまあ何うするつもりだね。

翁　どうすると云つて、これも因果と諦めるよりほかはあるまいよ。

嫗　諦められるお前さんは幸福だ。わたしにはどうしても諦められない、十七の歳まで大事に育てた、かけがへの無いひとり娘を、おそろしい蛇の人身御供にするのを默つて諦めてゐられるお前さんは、ほんたうに羨ましい。

翁　えゝ、もう泣いてくれるな。おれだつて人間だものを……。可愛い娘が蛇にみこまれたと思へば、おそろしいやら悲しいやらで、涙が胸一杯にせき上げて來るのを、齒を食縛つてぢつと我慢してゐるのだ。そばでお前に泣かれると、俺ももう我慢ができなくなる。まあ、仕方がない。あきらめろよ。

嫗　どう考へ直しても、わたしには我慢もあきらめも付かない。まあ、なんたる情ないことだらう。あんな美しい可愛い娘を……。

翁　もう、もう、止してくれ。後生だから……。無い昔とあきらめてくれ。

嫗　いつそ無い昔なら苦勞もなかつたらうが、夫婦が四十を越すまで子といふものが無いのをかなしんで、辨天樣に三七日の願をかけたら、その奇特であんな美しい娘が生れた。やれ、嬉しやと手鹽にかけて生長させ、近いうちに相當の婿を取つて、わたし達も先づ安心しようと樂しんでゐると……。

翁　とんでもない婿が出來た。（呟く）

嫗　ほんたうに、飛んでもない災難が降つて湧いて、大事の娘を蛇に取られる。かんがへても悚然として身の毛が悚立つやうな。もし、なんとかして娘を助ける工夫は……。あゝ、わたしはもう狂人になりさうになつて來た。

（夫のそばに摺寄る。翁はぢつと頭を垂れてゐる。）

翁　まあ、騷いでくれるな。狂人になるなら、おれの方が先になる筈だ。辨天樣にお願ひ申して出來た子だから、蛇にとり返されるも自然の約束だらうよ。蛇は辨天樣の使はしめだ。

嫗　さう云ひながら、お前さんだつて泣いてゐるぢやあないか。

翁　さつきから泣くまいと一生懸命に堪へてゐるのに、おまへが傍から色々な愚痴をいふので、おれも我慢が出來なくなつて來たのだ。

嫗　痩我慢をしないで、泣きたいだけ泣いた方が可い。子を取られて泣く親のなみだが、神樣のお目にとまつて、思ひもよらぬ御救ひがないとも限らないから……。

翁　なんの、神樣も佛樣もあつたものぢやあない。的にもならないことを的にしてゐるうちに、時は猶豫なく經つてゆく。酉の刻にはもう半晌もあるまいよ。

（翁はうつむきて嘆息す。嫗も泣く。奥の簾をかゝげて娘出づ。）

娘　おふたりともに既う泣いてくださるな。わたしは覺悟をきめてゐます。

嫗　おゝ、娘……。（走り寄つて娘を抱く）おまへの覺悟は決つても、わたし達の覺悟は容易にきまるものぢやあない。どうしても怖ろしい婿は來るかねえ。

娘　酉の刻の鐘を合圖に、きつと來ると云ひました。

翁　その鐘もやがて鳴るであらう。

嫗　お前は一體なぜそんな約束をしたのだ。蛇が蛙を呑むのはあたりまへのことだから、構はずに打つ捨つておけば可いのに……。

娘　あんまり可哀相でしたから、つい助けてやる氣になつたのですが、今更思へばそれが惡かつたのです。妾もやつぱり蛙と同じやうに、弱い者であつたのでした。

翁　おれも蛇よりは弱いのだ。

嫗　この家には蛇より強いものは一人も居ないのだ。

娘　弱いものを救ふには自分が強い者でなければならないと云ふことを、今初めて覺りました。自分を衞つてゆくほどの力も無い者が、ひとを救はうとしたのは過失でした。もう仕方がありません。わたしは覺悟して時刻の來るのを待つてゐませう。

嫗　待つてゐてそれから何うなるだらう。かんがへても怖

ろしいことだ。

翁　むかしの稲田姫は八股の大蛇に取られるところを、素戔嗚尊に救はれたが、こゝにはそんな強い男もあるまいよ。

嫗　それでもこのまゝに娘は渡されまい。約束の時刻にたつたなら、蛇がどこからも這入つて來られないやうに、四方の戸をしつかりと閉め切つて、夜の明けるまで張番をして居ようかと思ふが……。

翁　でも、あしたの晩もまた來るだらう。

嫗　あしたも明後日も、三日も五日も十日も、一月も二月も、毎晩強情に防いでゐたら、いくら執念深い蛇でもあきらめて、しまひには來なくなるかも知れない。

翁　おまへが諦められぬと同じことで、むかうも容易には諦めまい。根くらべならやつぱり強い者の方が勝つわ。

（三人は顔を見あはせて嘆息す。里の青年一人、太刀をはき、弓矢をたづさへて出づ。）

青年　もし、もし。

翁　や、もう來たのか。

（嫗はあわてゝ娘を我がうしろに隱す。翁はうろ〳〵する中に、青年は進み入りて顔を見合せる。）

翁　おゝ、お前さんか。まあ、よかつた。

青年　どうも飛んだことが出來したさうですね。

嫗　では、もう知つてゐなさるのか。

青年　さつき娘御から聞きました。しかし御安心なさるがよろしい。その蛇が來たら私が退治してみせます。

翁　お前さんが退治してくれるか。

嫗　ほんたうに蛇を退治してくださるか。

青年　わたしが素戔嗚尊になりませう。私にはこの弓と矢があります。

翁　おまへさんは弓が上手かね。

青年　空を飛ぶ鳥でもかならず射落します。蛇が今夜こゝへ襲つて來たら、先づ一の矢でその光つた眼を射透してみせます。二の矢でその咽喉を射ぬいて見せます。大丈夫だから御安心なさい。

嫗　ありがたうございます。お前さんがその弓と矢で、おそろしい蛇を退治してくだされば、娘も助かります、わたし達夫婦も助かります。娘、もう大丈夫だよ。おまへは屹と助かるから……。

娘　助かるでせうか。

嫗　この人は強いのだよ。

娘　強いでせうか。

青年　わたしは自分でも強いものだと信じてゐます。

翁　お前さんはほんたうに強さうだ。やれ、やれ、これでやう〳〵安心した。

嫗　わたしもやう／＼落付いた。

娘　安心ができませうか。

翁　そんな心細いことを云ふものではない。なんでも氣を強く有つてゐろよ。

（雨の音薄くきこゆ。人々は表を窺ふ。）

青年　おゝ、雨がまた降つて來た。

翁　もう日が暮れるなあ。

青年　今のうちに弓の弦でも張つて置かうか。

（青年は弓の弦を張る。翁は立寄つて見る。）

翁　なるほど、太い弦だ。これを強く張つて矢を放したら、鐵の鎧でも射透すだらう。

嫗　いくら大きな蛇でも急所を射られては堪るまい。

（青年は微笑みながら弦打二三度して、弓をかたへの壁に立て、更に太刀をぬきて透し視る。）

青年　この劍で蛇の頭を切るのです。

翁　おゝ、なるほど。これもよく切れさうな刀だ。

青年　この通りに磨ぎ澄ましてあります。

嫗　憎い蛇めをずた／＼に切つてやりたいものだ。

（青年は太刀を鞘に收める。雨の音いよ／＼烈し。）

翁　雨がだん／＼に強くなつて來たぞ。

嫗　内も外も暗くなつて來た。

娘　風も少し吹き出したとみえて、草や木がざわ／＼鳴つてゐます。

青年　怪しい物の出さうな晩ですな。

（人々は顏を見あはせて、やうやく不安の念に襲はる。）

娘　もう軈て鐘がきこえるでせう。

翁　むゝ。

（人々は息をのんで待つ。やがて酉の刻の鐘きこゆ。）

嫗　おゝ、鐘が鳴つた。

青年　鐘が鳴りました。

（鐘の音つゞいてきこゆ。娘は思はず母に縋る。嫗は娘を抱きよせて、あたりに眼を配る。翁は入口の門を緊としめて錠をおろす。）

翁　かうして置けば大丈夫だ。いや、まだ裏口が不安心だ。

（翁はあわてゝ奥へ走り入る。）

嫗　（聲を低める）蛇はいよ／＼來るでせうか。

青年　來るでせう。しかし御安心なさい。

嫗　大丈夫でせうか。

青年　大丈夫です。

（翁は再び奥より出づ。）

翁　もう何處もかしこもすつかり閉めて來たから、大丈夫だ。家には鼠が潜り込むほどの隙間もないぞ。

（雨風の音きこゆ。娘は物に魘はれたるやうに叫ぶ。）

娘　あれ、あれ、門に……。

嫗　（怖る／＼門をのぞく）いや、外は眞闇で、雨が降つてゐるばかりだ。誰も來やあしない。

娘　でも、なんだか跫音が……。

嫗　しつかりおしよ。怖くはないよ。

青年　わたしがこゝにゐます。

（しばしの沈默。やがて一種の音して、青年の張りたる弓の弦は自然に切れる。人々おどろく。）

青年　や、弓の弦が切れた。

翁　あんなに太い弦が自然に切れた。

（人々は顏をみあはせて少時默す。）

青年　どうも不思議なことがあるものだ。（考へる）いや、弓が役に立たなければ、これで防ぎます。

娘　（又もや叫ぶ）あれ、あれ、あれ。

嫗　なんにも來やあしないよ。

青年　わたしはこの劍を持つてゐます。どんな魔物でも名劍の威德にはかなひません。これをおつと見ておいでなさい。自然に氣が鎭まります。

（太刀を娘の前に差付けると、太刀は鍔際より自然に折れる。今度は誰も聲を出すものなく、人々は唯默して眼を見あはせ、いよ／＼恐怖の念に襲はる。）

翁　あゝ、駄目だ、駄目だ。おまへさんもやつぱり駄目だ。

（青年は殘念さうに折れたる太刀をながめて立つ。しばしの沈默。蛇は衣冠を着け、優美なる姿にて奥よりあらはる。）

翁　あゝ、婿が來た。

嫗　え。（いよ／＼娘を抱きしめる）

蛇　約束の通り、婿に來たぞ。祝言の用意は出來てゐるか。

（人々答へず。）

蛇　酒の用意はあるだらうな。

翁　酒は澤山にたくはへてあるから、飲みたいだけ飲んでください。ほかにも欲いものがあるならば、なんでも上げます。

蛇　それだから娘を貰ひに來たのだ。

翁　その娘だけは……。どうぞ堪忍してくださるまいか。

嫗　ほかのことなら何でも肯きますから、どうぞこればかりは……。この通り、拜みます。

蛇　お前達はなんにも云はぬが可い。娘は疾うに承知してゐるのだ。

青年　いや、その娘も不承知です。

蛇　お前もだまつてゐろ。今更故障を云ふと、お前たちの爲になるまい。これ、よく見ろ。おれの大きい眼は研いだ鏡のやうにかゞやいてゐる。この眼で一度睨めば大抵のものは縮んでしまふぞ。おれの口には赤い舌が火のやう

に燃えてゐる、この口を一度あけば大抵のものは一息に呑んでしまふぞ。もう一度よく見ろ。おれのからだには鐵のやうな鱗が一面に生えてゐる。この鱗を逆立てると大抵の矢も刀も透すことはできないぞ。おれはこれほどの武器を有つてゐるのだ。それを知らずに防がうとするのは馬鹿な奴だ。

（青年を見てあざ笑ふ。青年は太刀の柄をすてゝ、更に弦の切れたる弓を取りしが、容易にかゝり得ず、いたづらに睨みゐるのみ。）

蛇　さあ、娘。こつちへ來い。

（蛇は袖をあげて差招けば、娘は母の手を放れてふらふらと歩みゆく。蛇は娘の手を取りて奥に入る。翁と嫗とは茫然としてそのあとを見送る。）

青年　殘念だが仕方がない。私にはひとを救ふほどの力がないのか。

（青年は持つたる弓をなげ捨つ。やがて奥にて凄じき物音きこゆ。）

翁　や、あの物音は……

嫗　娘が長い蛇に卷かれて苦んでゐるのではあるまいか。

翁　どうかして助ける工夫は無いかなあ。

（翁と嫗とはうろうろして奥を窺ふうちに、奥より蛇は髪をふり亂して走り出づ。蟹は赤き甲をつけ、彼の長刀を持ちて追ひ出づ。）

蟹　卑怯者め。逃げるな。

（蟹は長刀を揮つてかゝる。蛇は口より火をふきて奮鬪。遂に蟹のために切倒さる。）

翁　さすがの蛇も蟹にはかなはないと見えて、長い鋏でずたずたに切られてしまつた。やれ、やれ、ありがたい。これで先づ安心した。

嫗　それにしても娘はどうしたらう。

（娘は奥より出づ。）

嫗　おゝ、娘。無事でゐてくれたか。

翁　おゝ、娘……。（走り寄つて娘を抱く）

娘　阿母さん。

嫗　助かつたか。

娘　助かりました。おそろしい蛇にまき付かれて、どうなることかと思つてゐましたら、この強い蟹がどこからか這入つて來て、長い鋏で蛇を追ひ攘つてくれました。

蟹　追ひ攘つたばかりでない。二度と禍をなさないやうに、この通り亡ぼしてしまつた。

青年　なるほど、お前は強いな。

蟹　おれは強い。強ければこそ弱いものを救つたのだ。弱い者が弱いものを救はうとするのは、泳ぎを知らぬ者が水に溺れたものを救はうとするやうなもので、兩方とも

に沈んでしまふばかりだ。弱いものを救ひたければ、自分が先づ強いものになれ。おれのやうな強い者になつて、弱いものを救ふのが自然の順序だ。弱い奴等ばかりが蛆蟲のやうにあつまつて、口のさきで慈悲の情のと騒いでゐるばかりでは、いつまで經つても際限(はてし)があるまい。所詮は強い者の世の中だ。みんなも精出して強くなれ。世間に強いものが多くなれば、弱いものは自然に救はれるのだ。

青年　判つた、わかつた。わたしもこれから強くならう。年寄や女子供を救ふのは若い者の務めだ。

蟹　弱い奴の千人よりも、強い奴の方が頼もしいのだ。しつかり頼むぞ。

青年　よし。私はおまへの見る前で、神に誓はう。

（青年(わかもの)は投げ捨てたる弓を取り、ひざまづきて額にいたゞく。）

娘　わたしは命を助けられた恩がへしに、蟹のすがたを繪にかゝせて、末代までも殘るやうに、近所のお寺へ納めませう。

翁　おゝ、好いところへ氣が注いた。蟹に救はれた人間があると云ふことを、世間の人に知らせるために、蟹の姿を繪にかゝせて、お寺に納めて置くがよからう。

嫗　やがてそれがお寺の名になつて、山城國(やましろのくに)に古蹟が一つ殖えるかも知れない。

蟹　そんなことはどうでも可い。用が濟んだらおれは歸るぞ。

（蟹は長刀(なぎなた)をたづさへて悠々と奥に入る。翁と嫗と娘はそのうしろ姿を拜む。青年(わかもの)は腕をくみて考へる。）

――幕――

權三と助十（三幕）

登場人物

駕籠かき　權三
權三女房　おかん
駕籠かき　助十
助十の弟　助八
家主　六郎兵衞
小間物屋　彥兵衞
彥兵衞のせがれ　彥三郎
左官屋　勘太郎
猿まはし　與助
願人坊主　雲哲
おなじく　願哲
石子　伴作
ほかに長屋の男、女、娘、子供。捕方。駕籠舁など。

第一幕

享保時代。大岡越前守が江戶の町奉行たりし頃。七月初旬の午後。

神田橋本町の裏長屋。壁一重を境にして、上のかたには駕籠かき權三、下の方は駕籠かき助十が住んでゐる。いづれも破れ障子のあばら屋にて、權三の家の臺所は奧にあり、助十の家の臺所は下のかたにある。權三の家の土間には一挺の辻駕籠が置いてある。二軒の下のかたに柳が一本立つてゐて、その奧に路地の入口があると知るべし。

（けふは長屋の井戶がへにて、相長屋の願人坊主、雲哲、願哲の二人も手傳ひに出てゐる體にて、いづれも權三の家の緣に腰をかけて汗をふいてゐる。助十の弟助八は廿歲前後のわか者、刺靑のある男にて片肌をぬぎ、鉢卷、尻からげの跣足にて澁團扇を持つて立つてゐる。權三の女房おかん、河岸の女郎あがりにて廿六七歲、これも手拭にて頭をつゝみ、襷がけにて浴衣の褄をからげ、三人に茶を出してゐる。少し離れて、猿まはし與助は手拭を頭にまき、浴衣の上に猿を背負ひ、おなじく尻からげの跣足にてぼんやりと立つてゐる。表には角兵衞獅子の太鼓の音きこゆ。）

雲哲　やれ、やれ、暑いことだぞ。

願哲　まさか笠をかぶつて井戸がへにも出られず、この素頭をじり／＼と照りつけられては、眼がくらみさうになる。

雲哲　まつたく今日の井戸がへは焦熱地獄だ。

おかん　お前さん達もあたしのやうに手拭でつゝんでゐれば好いぢやありませんか。

願哲　かういふ時には女は格別、男は鉢巻でないと何うも威勢がよくないからな。

助八　はゝ、笑はせるぜ。鉢巻をしたつて、すつとこ被りをしたつて、願人坊主の相場がどう上るものか。

おかん　與助さん。おまへさんもお飲みでないかえ。（茶碗を出す）

與助　（進みよりて丁寧に會釋する）はい、はい。いや、これはありがたい。實はさつきから喉が渇いてひり／＼してゐました。

助八　いくらおめえの商賣でも、長屋の井戸がへにえて公を背負つて出ることもあるめえぢやあねえか。

與助　それですね。（猿をみかへる）なにしろ這奴がよく馴染んでゐるのでね、ちつとの間でもわたしの傍を離れないのですよ。

おかん　畜生でも可愛いもんだねえ。

與助　可愛いもんですよ。

助八　ぢやあ、おれも可愛がつて遣らうか。（猿のあたまを撫でる）やい、えて公。手前も一緒に出て來たからは、親方の背中で高見の見物をきめてゐる奴があるものか。人並はづれて長え手を持つてゐるんぢやあねえか。みんなと一緒に綱をひいて、威勢よくエンヤラサアと遣つてくれ。おい、判つたか、判つたか。（猿の耳を引張れば猿は、引つかく）えゝ、痛てえ、痛てえ。こん畜生だしぬけに引つ掻きやあがつたな。

おかん　おまへさんが惡戯するから惡いんだよ。

與助　こいつは何うも氣が暴くつていけません。八さん。まあ堪忍して遣つてください。

助八　痛てえ、痛てえ。（手の甲を撫でながら）氣が暴れえにも何にも、まつたく其奴は旅の山猿だ。江戸前の猿ぢやあねえ。

おかん　猿に江戸前も旅もあるものかね。うなぎと間違へてゐるんだよ。（笑ふ）

雲哲　山の芋が鰻になつても、山猿がうなぎになつたと云ふ話は聞かないな。

願哲　はゝ、こいつは大笑ひだ。

助八　おい、與助。その山猿をおれに貸してくれ。

與助　え、どうするのだね。

助八　おれ一人が引つかゝれた上に、みんなのお笑ひ草になつちやあ割に合はねえ。そいつをこゝへ追つ放して、片つ端から引つ掻かして遣るのだ。

おかん　（おどろく）あれ、馬鹿なことをお云ひでないよ。呆れた人だねえ。

雲哲　惡巫山戯はいけない、いけない。（起ちあがる）

（助八は猿を取らうとする。與助は遣るまいとする。この爭ひのあひだに助八は又引つかゝれる。）

助八　あ、こん畜生め。又遣りやあがつたな。もういよいよ料簡がならねえ。うぬ、生膽を取つた上で、南國のもゝんじい屋へ賣飛ばすからさう思へ。

與助　えゝ、人の商賣物をどうするのだ。

（助八と與助は爭つてゐるところへ、上のかたより助八の兄助十、三十歳前後、これも鉢卷、刺青のある肌ぬぎ、尻端折りの跣足にて出づ。）

助十　やい、やい。なにを騷いでゐるのだ。煙草休みも好い加減にしろ。いつまでもこんな泥仕事をしちやあゐられねえ。日の暮れねえうちに早く濟して仕舞はなけりやあならねえのだ。みんなも精出して遣つてくれ。大屋さんに叱られるぞ。

與助　大屋さんに叱られては大變だ。さあ、行きませう。

雲哲　さうだ、さうだ。

願哲　やれ、やれ、又一と汗かくかな。

（與助と雲哲、願哲は上のかたに去る。）

助十　（おかんに）おい、かみさん。おめえの宿六はどうしたね。

おかん　奧に寢てゐますよ。

助十　冗談ぢやあねえ。一年に一度の井戸がへだから、長屋中の者がみんな商賣を休んで、かうして泥だらけになつて働いてゐるんぢやねえか。その最中に自分ひとり悠悠緩々と寢そべつてゐる奴があるものか。あんまりお長屋の義理を知らねえ狸野郎の横着野郎だ。ぬす人のひる寐も好加減にしろと云つて、早く引摺り起して來い。

おかん　（むつとして）何もそんなに怒鳴り散らさなくつてもいゝぢやありませんか。亭主の代りにあたしが出てゐりやあお長屋の義理は濟んでゐますよ。

助十　えゝ、おめえのやうな曳摺り嚊がによろ／＼してゐたつて何の役に立つものか。よし原の煤掃きとは譯が違はあ。早く亭主をひき摺り出せといふのに……。

助八　今までおれも氣が注かなかつたが、こゝの權三はまだ出て來ねえのか。なるほど盜人のひる寐にも程があらあ。（おかんに）さあ、早く連れて來ねえよ。

おかん　おまへさん達は人聞きが惡い。二ロ目にはぬす人のひる寐なんぞと、大きな聲で云つてお呉んなさるなよ。

内の人は夜の商賣が主だから、晝間寐てゐるのさ。それに不思議があるものかね。

助十　それを云へば、おれだつて同じ商賣で、片棒をかついでゐるのぢやあねえか。そのおれが斯うして働いてゐるのに、相棒の權三が寐てゐるといふ法があるものか。

おかん　相棒と云つても、内の人は先棒だよ。ちつとは遠慮をするものさ。

助十　先棒でも後棒でも、斯ういふときに遠慮が出來るものか。

助八　先棒を擔にきて、乙う大哥風を吹かすなら、おめえの亭主なんぞは頼まねえ。これからは兄貴とおれとが相棒で稼ぎに出るばかりだ。

おかん　兄弟が相棒で御神輿でもかつぎに出るのかえ。（土間を見返りてあざ笑ふ）肝心のかつぐ物があるかよ。

助十　（すこし詰まつて）なに。駕籠なんぞは何處からでも拾つて來る。なあ、八。

助八　むゝ。大川へ行つてみろ。そんな駕籠なんぞは上げ汐で幾らも流れて來らあ。

おかん　下駄の古いのと一緒になるものかね。ばか〳〵しい。詰らない無駄口をおきゝでないよ。

助十　手前の方がよつぽど無駄口を利いてゐやあがる。河岸の切見世でべちやくちや轉つてゐた癖がぬけねえので、近所となりは大迷惑だ。おなじ年明きを引摺り込むにしても、もう少し眞人間らしいのを連れて來ればいいのに、權三の奴めも見かけによらねえ洟つ垂らし野郎だ。

（奥の障子をあけて權三、これも三十歳前後の刺青のある男、浴衣の片褄を取りながら出づ。）

權三　やい、やい。さつきから奥で聞いてゐりやあ、手前たちは兄弟揃つて、よくも口から出放題の悪體もくたいを列べ立てやあがつたな。なるほど俺のかゝあは吉原の河岸見世にゐた女で、飛んだ惚けをいふやうだが、おたがひに好き合つて夫婦になつたのだ。それがなんで洟つ垂らしだ。惚れた女とは夫婦になるなといふ奉行所のお觸れでも出たのか。ざまあ見やがれ。

おかん　ほんたうに近所迷惑とはこつちで云ふことさ。よるも晝も兄弟喧嘩を商賣のやうにしてゐて、その仲裁に行くのはいつでもあたしの役ぢやあないか。

助八　えゝ、手前たちこそ毎日毎晩、犬も食はねえ夫婦喧嘩ばかりしてゐやあがつて、その留男の役はいつでも誰が勸めると思つてゐるのだ。

助十　まあ、まあ、だまつてゐろ。こんなすべた女郎を相手にしたつて始まらねえ。やい、權三。（縁に腰をかける）手前も海驢の生れ變りぢやあるめえ。なんで一日

寐そべつてゐるのだ。長屋中が惣出の井戸がへを知らねえか。寐ぼけた面を早く洗つて、みんなと一緒に綱を引きに出て來い。ふだんから相棒のよしみに、長屋の義理や附合ひといふものを教へてやるのだ。ありがたいと思つて禮をいへ。

權三　それだからおれの名代に、嬶をこの通り出してあるぢやあねえか。一軒の家から一人づつ出りやあ澤山だ。

助十　女なんぞは頭數ばかりで役にやあ立たねえ。おれの家ぢやあ斯うして大の男が兄弟揃つて出てゐるのだ。

權三　そりやあ手前たちの物ずきで勝手に騷いでゐるのよ。だれも頼んだわけぢやあねえ　折角よく寐てゐるところを、無暗にがあ／＼怒鳴りやあがつて、たうとう起してしまやあがつた。（眼をこする）　おい、おかん。茶を一杯くれ。

おかん　あい、あい。

（おかんは茶を汲んでやれば、權三は飮む。この時、上のかたにて大勢の聲きこゆ。）

大勢　さあ、さあ、引いた、引いた。

助八　あにい、又始まつたぜ。早く行かう。

助十　むゝ。こんな奴等にかゝり合つてゐると、日が暮れらあ。

大勢　引いた、引いた。

助十　おうい。待つてくれ。

助八　待つてくれ。

（助十と助八は鉢卷をしめ直して、急いで上のかたへ行く。）

おかん　ほんたうに憎らしい奴だねえ。あたしももう行くまいかしら。

權三　かまふものか。打つちやつて置け。（團扇を取る）このごろは晝間でも藪つ蚊が出て來やあがる。

おかん　暑い暑いと云つても、もう秋だとみえて、縞のお袴をはいた蚊がだん／＼大きくなつて來たねえ。

（おかんも澁團扇をとつて權三を煽いでやる。）

權三　おや、おや、手前けふは忌に亭主孝行だな。今の話でむかしの事を思ひ出したか。

おかん　なに、あいつ等へ面當てさ。

權三　面當てゞなけりやあ大事にしてくれねえのか。心ぼそいことだな。

（上のかたにて又もや大勢の聲きこゆ。）

大勢　引いた、引いた。エンヤラサア。

（上のかたより以前の雲哲と願哲が先に立ちて井戸換の綱を引き、つゞいて長屋の男二人と子供一人、その次に助十、いづれも綱をひいて出づ、又そのあとから長屋の女房と娘、つゞいて猿まはし與助は猿を背負ひ、

その次に助八、長屋の男、子供など、同じ綱をひいて出づ。井戸端にては水をあける音。一同は又引返して上のかたに入る。）

助十　（行きながら權三を見かへる）やい、この野郎。早く出て來ねえか。

權三　勝手にしやがれ。

助十　なんだ。（寄らうとして、綱にひかれてよろ〳〵となる）えゝ、さう無暗に引いちやあいけねえ。やい、權三、手前はどうしても出て來ねえのか。えゝ、さう引いちやあいけねえと云ふのに……。

（助十は綱に引かれて、よろけながら上のかたへ引返して入る。與助と助八はあとに殘る。）

助八　（これも行きながら權三夫婦を見て）やい、やい、夫婦ながら唯見てゐることがあるものか。お祭が通るのぢやあねえ。早く出て來い。こいつ等、出て來ねえと唯は置かねえぞ。

（助八は寄らうとすると、與助の猿はその頭髪をつかんで引く。）

助八　えゝ、だれだ、誰だ、惡ふざけをしちやあいけねえ。止せ、止せ。

（助八は猿に引かれながら、上のかたに入る。）

權三　（笑ふ）はゝ、好い觀せ物だぜ。

おかん　あいつはさつきも猿に引つかゝれたんだよ。

權三　あんな奴等は猿を相手に、きやつ〳〵と云つてゐるのが丁度相當だ。

おかん　ほんたうに猿芝居の役者だねえ。

（夫婦は笑つてゐる。やがておかんは氣がついたやうに上のかたを見かへる。）

おかん　お長屋の人達がみんな出てゐるのに、中途から拔けてしまふのも何だから、せめてあたしだけでも行つて來ようかねえ。

權三　なに、打つちやつて置けといふのに……。ぐづ〳〵云ふのは胸の兄弟ぐらゐのものだ。ほかにも文句をいふ奴があつたら、どいつでもおれが相手になつて遣らあ。長屋中が束になつて來ても、びくともするんぢやあねえ。矢でも鐵砲でも持つて來いだ。

おかん　でも、大屋さんに叱られると困るぢやあないか。

權三　むゝ。（少し考へる）去年もさん〴〵脊を取られたつけな。

おかん　それ、御覽な。ほかの奴はどうでも構はないけれど、大屋さんの心持を惡くするといけないからねえ。

權三　だが、大屋さんは善い人だ。まさかに店立てを食はせるともいふめえ。

おかん　善い人だけに、こつちでも其のつもりで附合はな

くつちやあ悪いよ。

權三　さうかなあ。（又かんがへる）おやあ、いつそおれが行つて來ようか。（起ちかけて又かんがへる）だが、これからのそ〳〵出て行くと、なんだか助の野郎におどかされたやうで、ちつと癪だな。おれはまあ止さう。おめえも止せよ。

おかん　止してもいゝかねえ。

權三　大屋さんに叱られたら、あやまる分のことだ。なに、むづかしいことはねえ。あやまれば屹と堪忍してくれるよ。

おかん　あの大屋さんにあやまるのは、幾らあやまつても口惜しくはないけれど……。

權三　これだからあやまると決めて置けばいゝよ。

（上のかたより助八は猿を引つかゝへて出づ。あとより與助が追つて出づ。）

與助　これ、これ、わたしの猿をどこへ持つて行くのだ。

助八　こん畜生、二度も三度もおれにからかやあがつて、……。もう生かして置かれるものか。あの井戸へ叩つ込んでしまふのだ。（上のかたへ引返して行きかゝる）

與助　えゝ、飛んでもないことだ。

（與助は猿を取返さうとして爭ふところへ、上のかたより助十出づ。）

助十　これ、八。馬鹿なことをするなよ。

助八　なにが馬鹿だ。

助十　この最中に猿なんぞを相手にして騒いでゐる奴は馬鹿に相違ねえ。そんなものは打つちやつて置いて、早く行け、行け。

助八　いやだ、いやだ。こん畜生を井戸へ叩つ込まなけりやこの料簡出來ねえ。

助十　折角井戸がへをしたところへ、そんなものを叩つ込まれて堪るものか。馬鹿野郎、よせと云ふのに……。

助八　止さねえ、止さねえ。

助十　そんなら猿の身代りに手前をぶち込むからさう思へ。

助八　なにを云やあがる。

（兄弟がむしり合ひ、なぐり合ひの喧嘩になる。その隙をみて與助は猿を取返し、逆さまに背負ひて上のかたへ逃げ去る。）

權三　仕様のねえ奴等だな。（おかんに）留めてやれ、留めてやれ。

（夫婦は縁から降りて、無理に兄弟を引き分ける。）

權三　毎日めづらしくもねえ、兄弟喧嘩はよせ、よせ。

おかん　八さんも兄さんに楯を突くのはよくないよ。

助八　べらぼうめ。猿の味方をして弟をなぐるやうな奴は

兄貴ぢやあねえ。
助十　手前のやうな判らずやは猿にも劣つてゐるのだ。
權三　まあ、いゝと云ふことよ。兄弟喧嘩ぢやあ、どつちから膏藥代を取るわけにも行かねえ。つまり毆られ損だ。止せ、止せ。
（上のかたより家主六郎兵衛出づ。）
六郎　これ、これ、みんな何をしてゐるゐだ。もう些とだから怠けてはいけない。（上のかたに向つて團扇をあげる。）さあ、さあ、早く引いた、引いた。
（上のかたより雲哲、願哲をはじめ長屋の人々は綱を持ちて出で來り、再び上のかたへ引返してゆく。）
六郎　助八。おまへはこの忙がしい最中に猿にからかつて騒いでゐたさうだな。
助八　なに、こつちが猿にからかはれたので……。
六郎　まあ、なんでもいゝから早く行つて、手傳へ、手傳へ。貴樣は長屋で一枚看板の馬鹿野郎だ。
助八　あい、あい。大屋さんに逢つちやあかなはねえ。
（助八は叱られて、これも早々に上のかたへゆく。）
おかん　大屋さん。今日はお暑いのに御苦勞樣でございます。
權三　まあ、まあ、こゝへお掛けなせえ。
六郎　（權三を見て）おゝ、お前はさつきから井戸端へ些とも顔を見せなかつたやうだな。
權三　（ぎよつとして）え。實は其、すこし用がありまして……。
おかん　早くあやまつておしまひよ。（眼で知らせる）
權三　まつたく據ない用がありまして……。
六郎　よんどころない用があつた……。
權三　へえ、急病人が出來まして……。
助十　いや、こいつ呆れた奴だ。もし、大屋さん。だまされちやあいけねえ。そんなことは皆んな嘘ですよ。
（夫婦はあわてゝ手をふる。）
助十　（いよ〳〵怒鳴る）えゝ、嘘だ、嘘だ。大うその川獺だ。奥に樂々と晝寐をしてゐやあがつて、おれが幾度催促に來ても出て來なかつたぢやあねえか。
權三　だから、急病人が出來たと云つてゐるのが判らねえかよ。
助十　その急病人はどこにゐる。
權三　その急病人は……。おれだ、おれだ。
助十　這奴いよ〳〵呆れた奴だ。朝つぱらから酒を飲んでゐやあがつた癖に、急病人もよく出來た。あんまり人を馬鹿にするな。
おかん　そのお酒に中つたんですよ。
助十　えゝ、なにも彼も嘘だ、嘘だ。

六郎　成程これは噓らしいぞ。これ、權三。おまへは去年のことを忘れたか。一年に唯つた一度の井戸がへで、家主のおれまでが汗みづくになつて世話を焼いてゐる。そのなかで假病の書寐なぞをしてゐて、長屋の義理が濟むと思ふか。去年もあれほど叱つて置いたのに、今年も相變らず横着をきめるとは太い奴だ。又、女房も女房だ。さつきちよいと其の生つ白い顔を出したかと思ふと、もうそれぎりで隱れてしまふとは、揃ひも揃つた横着者め。さあ、さあ、早く出て働け、働け。

夫婦　はい、はい。

（上のかたにて大勢の呼び聲きこゆ。）

大勢　それ、引いた。引いた。エンヤラサア。

六郎　（上のかたを見て）それ、引いて來る。早くしろ、早くしろ。

（助十は上のかたへ駈けてゆく。權三とおかんもかけ出してゆく。やがて上のかたより以前の如く、雲哲、願哲が先に立ち、長屋の男二人と子供ひとりが綱をひいて出づ。助十と權三とおかんも綱をひいてゐる。この時、下のかたの路地口より小間物屋彥三郎、廿歲ぐらゐの若者、旅すがたにて出づ。）

助十　さあ、さあ、引け、引け。

權三　引いたり、引いたり。

一同　エンヤラサア。

（彥三郎は綱をひく人々を避けながら來るうちに、助十に突きあたる。）

助十　えゝ、なにをしやあがる。

（助十に突き退けられて、彥三郎はよろめきながら更に權三に突きあたる。）

權三　この野郎、邪魔な奴だ。

（權三に蹴られて、彥三郎はつまづき倒れる。水の音。一同は見返りもせずに、綱をひいて上のかたへ引返して去る。）

六郎　これ、これ、手暴いことをするな。（彥三郎を介抱する）もし、飛んだ失禮をいたしました。

彥三郎　お江戸馴れませぬ者がお取込みのなかへ出まして、わたくしこそ飛んだお邪魔をいたして相濟みません。

六郎　いや、お若いにも似合はず御丁寧の御挨拶で、重々痛み入りました。御覽の通り、けふはこの長屋の井戸換で混雜してゐるところへ、丁度におまへさんがお出でなすつたので、どうもお氣の毒なことを致しました。店子に代つて家主のわたしがお詫をしますから、どうぞ料簡して遣つてください。おゝ、おゝ、泥だらけになつた。

（手拭で彥三郎の膝のあたりを拭いてやる）

彥三郎　いえ、おかまひ下さりますな。では、おまへ様が

こゝのお家主様でござりますか。
六郎　はい、はい。こゝは神田の橋本町、その長屋をあづかつてゐる家主の六郎兵衛でございますよ。
彦三郎　おゝ、左様でござりましたか。
（この時、以前の長屋の女房と娘、その次に助八と長屋の男三人、與助と子供ふたりが綱をひいて出づ。）
助八（彦三郎に）えゝ、なにをぼんやり突つ立つてゐやあがるのだ。この案山子野郎め。邪魔だ、邪魔だ。
六郎　よそのお方に失禮をするな。おまへの方でよけて行け、馬鹿野郎め。
助八　叱られたか。
（水の音。人々はわや〳〵云ひながら上の方へ引返して去る。）
六郎　こゝらの長屋にゐる者は殺伐な奴等ばかり揃つてゐるので、他國のお方にはお恥かしうございます。して、おまへさんは誰をたづねてお出でなすつた。
彦三郎　お家主様をおたづね申してまゐりました。
六郎　なに、わたしを尋ねて來た……。いや、それは、それは……。では、まあこゝへおかけなさい。
（六郎兵衛は先に立ちて、權三の家の縁に腰をかける。）
六郎　して、おまへさんはどこのお人だね。
彦三郎　大阪からわたしを尋ねてまゐりました。
六郎　大阪からわたしを尋ねて……。では、もしや彦兵衛さんの……。
彦三郎　はい。わたくしはこのお長屋で長年お世話様になりました小間物屋彦兵衛のせがれ彦三郎と申す者でござります。
六郎　あゝ、彦兵衛さんの息子かえ。（急に顏色を曇らせる）遠いところをよく出て來なすつた。
彦三郎　（これも聲を曇らせる）もし、お家主様。父の彦兵衛はまつたく牢死いたしたのでござりますか。
六郎　いや、どうもお氣の毒なことで、今更なんとも云ひやうがない、手紙にも書いてあげた通り、彦兵衛さんは去年の暮にお召捕になつて、その御吟味中に病氣が出て、この三月に……。（鼻を詰まらせる）たうとう御牢內で歿りましたよ。
彦三郎　その節は色々御厄介になりまして、お禮の申上げやうもござりません。まことに有難うござりました。（涙ながらに手をつく）御手紙によりますと、父は馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隱居所へ忍び込み、六十三歳になる女隱居を殺害して、金百兩をうばひ取つたと申すことでござりますが、それは本當でござりますか。
六郎　（氣の毒さうに）さあ、彦兵衛さんに限つてそんな

事のあらう筈はないと思つてゐたが、御奉行所の嚴しいお調べで本人はたうとう白狀したと云ひますよ。

（上のかたより權三はぶら〳〵出で來り、この體をみて少し躊躇し、やがて拔足をして家のうしろを廻り、下のかたの柳の下に立つて聽いてゐる。）

彥三郞　それがどうしても本當とは思はれません。わたくしの父は盜みを働くやうな、まして人を殺して金をぬすむやうな、そんな不義非道の人間ではございません。あまりに御吟味がきびしいので、身におぼえのないことを申立てたのかも知れません。（だん〳〵激して來る）もし、おまへ樣。いづれにしてもこれは何かの間違ひに相違ございません。屹と何かの間違ひでございます。

六郞　息子のおまへさんがさう思ひつめるのも無理はないが、この一件は南の町奉行所のお係りで、お役人は名奉行ときこえてゐる大岡越前守樣だ。そのお捌きで落着したことだから、決して間違ひのあらう筈はないのだ。

彥三郞　さきほどは御吟味中と仰しやりましたが、それではもう落着いたしたのでございますか。

六郞　實は本人の白狀で事件は落着、そのお仕置は獄門ときまつた時に、彥兵衞さんは牢死したのだ。もう何と云つても仕方がない。せめてその死骸を引取つてやりたいと思つて、色々お歎き申してみたが、重罪人であるから死骸を下げ渡すことは相成らぬといふので、殘念ながらどうすることも出來なかつたのだ。必ず惡く思はないで下さい。

彥三郞　情ないことでございますな。（泣く）

（このあひだに、上のかたよりおかん出づ。權三は眼で招けば、おかんも竊と家のうしろをまはつてゆく。權三は何かさゝやけば、おかんは首肯いて、再び下のかたより自分の家のうしろへ廻つてゆく。權三は助十の家の緣に腰をかける。）

彥三郞　（眼をふいて）いくら名奉行でも、大岡樣でも、このお捌きは屹と間違つて居ります。わたしの父にかぎりまして、決してそんなことはない筈でございます。どう考へても、それはお奉行樣のお眼違ひでございます。

六郞　（なだめるやうに）まあ、まあ、落着いて物を云ひなさい。今更おまへが何と云つたところで、お捌きも濟み、本人も死んでしまつたものを、何うにも仕樣があるまいではないか。

彥三郞　勿論唯今となりましては、たとひ何と申したところで死んだ父が生き返るわけではございません。それはよんどころない不運と諦めも致しませうが、せめては無實の罪といふことをお上へ申立てまして、父彥兵衞の恥名を清めたうございます。お家主樣。わたくしが一生の

おねがひでございますから、どうぞお力添へをねがひます。御承知の通り、父は大阪生れ、わたくしも御當地は初めてゞ、右を見ても左を見ても、誰ひとり頼みになる人はございません。もし、お家主樣。(手をあはせる)お願ひでございます。お願ひでございます。

六郞　あゝ、そんなことを云つて泣かせてくれるな。(眼をふく)折角のおまへの頼みだ。わたしも何うかして遣りたいのは山々だが、これぱかりはどうも困つたな。(かんがへてゐる)

(このあひだに、家の奧よりおかんがそつと出で、そこにある團扇を把つて、氣のつかぬやうに六郞兵衞と彥三郞を煽いでゐる。上のかたより助十は汗をふきながら出づ。)

助十　あゝ、あつい、暑い。

權三　(小聲で)おい、おい。

助十　なんだ。

(權三は彥三郞を指さして眼で知らせれば、助十もうなづいて、竊と家のうしろを廻つてゆく。)

彥三郞　もし、心ばかりは逸つても、わたくしは若年者、殊に御當地の勝手は知れず、なんとも致方がございません。おまへ樣によい御分別はございますまいか。

六郞　まあ、待つてくれ。わたしも頻りに考へてゐるのだが、これはなか〳〵むづかしい。

彥三郞　むづかしいと申しても、どうしても此儘では濟されません。大阪を立ちます時にも、お父さんに限つてそんなことのあらう筈がないから、わたしがどんな難儀をしても、屹とお父さんの無實を訴へて來ると、母や弟にも立派に約束して參つたのでございます。

六郞　さうやかましく云はれると、氣が散つてならない。まあ靜にして考へさせてくれなければいけない。

彥三郞　(せいて)このまゝのめ〳〵と戾りましては、母にも弟にも會はす顏がございません。わたくしを生かすも殺すも、おまへ樣のお心一つでございます。

六郞　むゝ、判つた、判つた。よく判つてゐます。それだからわたしも色々に工夫を凝してゐるのだ。(上の方に向つて)おい、おい。そつちの井戶がへも少し待つてくれ。さう〳〵しいと、どうも好い智慧が出ない。

(六郞兵衞は又かんがへてゐるを、彥三郞は待ち兼ねるやうに眺めてゐる。おかんは貰ひ泣の眼をふいてゐる。)

權三　(小聲で)どうだい。いつそ思ひ切つて云つてみようか。

助十　だが、あぶねえ。うつかりした事を云つて、飛んだ係り合ひになると詰らねえぜ。

權三　それもさうだが……。（考へる）　大屋さんも困つてゐるやうだ。第一あの若けえのが可哀さうぢやあねえか。

助十　おれも可哀さうだとは思ふのだが、なにしろほかの事と違ふからな。一つ間違つた日にやあ、おれ達がどんな目に逢ふか判るめえぢやあねえか。よく考へてみろよ。

權三　むゝ。（少し躊躇する）

彦三郎　もし、お家主樣。まだお考へは付きませんか。

六郎（ため息をつく）どうも困つたな。わたしも橋本町の六郎兵衞といへば、名主の玄關でも御奉行所の腰掛けでも、相當に幅のきく人間だが、これぱかりは全く困つた。一旦お捌きの付いてしまつたものを、今更こつちからこぢ返すといふのは、つまり大岡樣を相手取つて喧嘩をするやうなものだから、こいつは並大抵のことで行く筈がない。小間物屋彦兵衞は確に無實の罪だといふ立派な證據でもあるか、それとも罪人はほかにあると云ふ確かな證人でもない限りはなあ。（腕をくむ）

（權三は何か云はうとして起ちかゝるを、助十はあわてゝその袖をつかみ、まあ待てと制すれば、權三はまた躊躇する。）

彦三郎（堪へかねて）では、どうしても出來ぬことだと仰しやるのでござりますか。

六郎　さあ、出來ないとも限らないが、なにしろこいつは大仕事だ。わたしもこの年になるまで家主を勤めてゐるが、こんなことに出逢つたのは初めてだからな。

彦三郎（決心して）では、もうお賴み申しますまい。わたくしは自分の思ひ通りにいたします。（起ちかゝる）

六郎（彦三郎の袖を捉へる）まあ、待ちなさい。お前さんは眼の色を變へてどうする積りだ。

彦三郎　これから御奉行所へ駈込みます。

六郎　御奉行所へかけ込む……。それはいけない。駈込み訴へは御法度だ。

彦三郎　それはわたくしも存じて居りますが、もうかうなつたら致方がござりません。どんなお咎めを受けるのも覺悟の上で、駈込み訴へをいたします。どうぞ留めずに遣つて下さい。（振切つて行かうとする）

六郎　どうして無暗に遣られるものか。飛んでもないことだ。いくら年が若いと云つて急いてはいけない。まあ、待ちなさい。待ちなさい。

彦三郎　いや、放して下さい、放してください。

六郎　いけない、いけない。

（彦三郎は無理に振切つて行かうとするを、六郎兵衞は留める。おかんはうろ／＼しながら權三を手招ぎし、なんとかしろと云ふ。權三ももう堪らなくなつて進み出で、彦三郎の前に立塞がる。）

権三　まあ、おまへさん。待ちなせえ。

彦三郎　えゝ、どなたも邪魔をして下さるな。

（彦三郎は突きのけて行かうとするを、権三は抱きとめる。）

権三　邪魔をするわけぢやあねえ。おれが好い智慧を貸してやるのだ。やい、やい、助十。見てゐることはねえ。一緒に留めてくれ。留めてくれ。

おかん　（縁に出る）助さんも早く何とかおしなねえ。

（助十も決心して起つ。）

助十　（彦三郎に）まあ、待ちなせえ。待ちなせえ。まつたくおれ達が好い智慧を貸してやるのだ。まあ、まあ、落ち着いて云ふことを聞くがいゝ。

権三　まあ、おとなしくしろ、おとなしくしろ。

（権三と助十は無理に彦三郎を元の縁さきに押戻す。）

六郎　井戸がへで汗になつたところへ、また汗をかゝされた。やれ、やれ。（汗を拭く）そこでお前達はほんたうに好い智慧があるのか。

権三　さう改まつて聞かれると少し困るが……。おい、助十。おめえから云へ。

助十　いや、おれはいけねえ。おれは不断から口不調法だからな。

権三　うそをつけ。人一倍大きな聲で怒鳴りやあがる癖に……。

助十　えゝ、手前こそ矢鱈に無駄口をきくぢやあねえか。

六郎　これ、これ、そんなことを云つてゐては果てしがない。おい、権三。先づおまへから口をきけ。

権三　どうしてもわつしが口切りかえ。やれ、やれ。

六郎　何がやれやれだ。おれが名指しでお前に聞くのだから、さあ、はつきりと云へ。

権三　仕様がねえな。（頭をおさへる）ぢやあ、まあ聴いておくんなせえ。實はね、去年の十一月の末のことでござえました。（助十に）おい、あれは幾日だつけな。

助十　さあ、おれもよくは覺えてゐねえが、なんでも二の酉の前の晩あたりぢやなかつたかな。

権三　違えねえ、二の酉の前の晩だ。その晩の九つ過ぎでもありましたらうか、この助十とわつしとが遅い仕事から歸つて來まして、馬喰町の横町へ差しかゝると、頬かむりをした一人の野郎が天水桶で何か洗つてゐるやうでしたから、何をしてゐるのかと提灯の火で透かしてみると、そいつは着物の袖を洗つてゐるらしいのです。

六郎　むゝ。それから何うした。

権三　（助十をみかへる）おい、おれにばかり云はせてゐねえで、手前も些としやべれよ。かうなりやあ何うでお互えに係り合だ。

六郎　では、助十。そのあとを早く云へ。
助十　もし、大屋さん。うつかりした事をしやべつて、若しそれが間違ひだつた時には、どういふことになりませうね。
六郎　それは事にもよるな。その事によつて重い罪にもなれば、輕い罪にもなる。
助十　人殺しなんぞは重い方でせうね。
六郎　それは勿論のことだ。
助十　いけねえ、いけねえ。それだからおれは忌だといふのだ。權三、手前は勝手に何でもしやべれ。おらあ知らねえ、知らねえ。
權三　知らねえことがあるものか。おれと相棒をかついでゐたんぢやあねえか。
おかん　（權三に）もし、お前さん。そんな人にかまはないで、知つてゐることがあるなら早く云つておしまひなさいよ。あたしも何だか聽きたくなつて來たからさ。
彥三郎　（すり寄る）どうぞ早く話して下さい。
權三　たうとうおれが人身御供にあげられてしまつたか。ぢやあ、まあ話しませう。今もいふ通り、天水桶で袖を洗つてゐるだけならば、別に不思議と云ふほどのことでもねえが、そいつが光るものを持つてゐる。
六郎　光るものを持つてゐた……。それから何うした。

（人々はすり寄つて聽く。）
權三　その光るものを水で洗つてゐたんですよ。
六郎　天水桶で袖を洗ひ、何か光るものを洗つてゐたのだな。その光る物といふのは刃物らしかつたか。
權三　どうもさうらしいやうでした。それでもその時はただ變な奴だと思つたばかりで通り過ぎてしまつたのですが、明る朝になつて聞いてみると、その晩馬喰町の米屋といふ旅籠屋の隱居所で、六十幾つになる隱居婆さんが殺されて、門跡樣へ納めるとかいふ百兩の金を取られたさうで、わつしもびつくりしましたよ。
六郎　むゝ。（かんがへる）して、その男はどんな風體で、年頃や人相は判らなかつたか。
權三　さあ、そこだ。（助十に）おい、いゝかえ。思ひ切つて云つてしまふぜ。
助十　まあ、待つてくれ。もし、大屋さん。これから權の野郎が何を云ひ出すか知りませんが、わつしに係り合を付けねえで下さいよ。わつしはなんにも知らねえんだから……。
權三　いや、さうは行かねえ。おれと相棒でゐる以上は、どうしたつて手前もかゝり合ひだぞ。
助十　だつて、おれはなんにも云はねえ。
權三　云つても云はねえでも同じことだ。

おかん　まあ、そんなことは何うでもいゝから、肝心のところを早くお云ひなさいよ。じれつたい人だねえ。
六郎　まつたくおれも焦つたい。さあ、早く云へ、早く云へ。
彦三郎　さあ、早く聞かしてください。（詰めよる）
權三　寄つて集つておればかり虐めちやあ困るな。助の野郎め、狡い奴だ。おぼえてゐろ。
彦三郎　もし、早く云つてください。早く……早く。
權三　云ふよ、云ふよ。かうなつたら何でも云つて聞かせるよ。その男は……年頃は三十四五で職人のやうな風體で……。
彦三郎　職人のやうな風體でござりましたか。
助十　（權三に）おい、おい。もうその位にして置くがいゝぜ。
六郎　やかましい、默つてゐろ。（權三に）まだそのほかに何か目じるしは無かつたか。
權三　さあ。（躊躇する）
六郎　（嚇すやうに）これ、權三。なぜおれの前で隱し立てをする。正直に云はないとお前の爲にならないぞ。
おかん　お前さん、なぜ隱してゐるんだねえ。をかしいぢやあないか。
權三　えゝ、もう自棄だ。みんな云つてしまへ。（少し聲をひくめて）夜目ではあり、そいつは頰被りをしてゐたので、確なことは云へねえが、どうもそれが近所の奴らしいので……。
六郎　むゝ、近所の奴……。誰だ、誰だ。
權三　（思ひ切つて）豐島町の裏にゐる左官屋の勘太郎によく似てゐたんですよ。
おかん　まあ。あの人が……。
六郎　左官屋の勘太郎……。あいつによく似てゐたのか。これ、助十。どうでお前もかゝり合だから、正直に云はなければならないぞ。まつたく其奴は勘太郎に似てゐたのか。
助十　かうなりやあ俺ももう自棄だ。（大きな聲で）そいつは豐島町の勘太郎、左官屋の勘太郎、たしかにあの勘太郎に相違ねえのだ。
六郎　これ、大きな聲をするなよ。
彦三郎　あゝ、ありがたい、有難い。お二人さんはわたくしに取つて神様と云はうか、佛樣と申さうか。もし、もし、この通りでござります。（手をあはせて權三と助十を拜む）
おかん　それにしても、お前さん達の氣が知れないぢやあないか。それほど判つてゐるならば、なぜ早くにそのことを云ひ出して、彦兵衛さんの無實の災難を救つて上げ

なかつたんだらうねえ。

權三　そのときに氣がつけば格別だが、あとになつちやあ無證據だ。うつかりしたことが云はれるものか。どんな係り合になるかも知れねえ。

六郎　それで二人ともに默つてゐたのか。横着者にも似合はない、氣の小さい奴等だな。

おかん　彥兵衞さんに疑ひのかゝつたのは、どういふわけだかよくは知らないけれど、不斷から正直者のあの人がお繩にかゝつて連れて行かれるのを、一つ長屋內で見てゐながら、今まで默つてゐるといふことがあるものかね。お前さん達は隨分不人情だよ。

六郎　まつたく女房のいふ通りだ。せめておれだけにも內內で話して置いてくれゝば、なんとか仕樣のあつたものを……。(叱るやうに)それほどの事を知つてゐながら、今まで口をふいて默つてゐるとは何のことだ。つまり貴樣達が彥兵衞さんを見殺しにしたやうなものだ。これ、彥三郎さん。お前さんのお父さんのかたきはこの權三と助十だ。なんの、禮をいふことがあるものか。わたしが證人になつてやるから、こゝで立派にかたき討をしなさい。

(權三と助十びつくりする。)

權三　と、とんでもねえ。なんでおれ達が仇なものか。

助十　かたきと云ふのは勘太郎だ。

權三　あの勘太郎だ。

(云ひながら二人は逃げかゝる。)

六郎　待て、待て。貴樣たちが逃げたからと云つて濟むわけのものではない。かたき討は免してやる代りに、その罪ほろぼしに彥三郎さんの味方をするか。

權三　(助十と顏を見あはせる)あい、あい。屹と味方を致します。

六郎　よし、よし。それならば仕樣がある。(上のかたに向ひて)おい、おい。誰か來てくれ。早く來てくれ。

(上のかたより助八を先に、雲哲と願哲出づ。)

六郎　むゝ、助八。おまへの家に麻繩のやうなものは三本ほどないか。

助八　さあ、三本はどうだかな。

おかん　內にも一本ぐらゐはありましたよ。

助八　なにしろ探して來ませう。

(助八は我家に入る。おかんも奥に入る。)

雲哲　用はもうそれだけかね。

六郎　いや、おまへ達もそこにゐてくれ。まだ外にも用があるのだ。

(おかんは奥より麻繩一本を持ちて出づ。)

おかん　これで間に合ひますかえ。

六郎　よし、よし。（繩をうけ取る）

（助八も奥より麻繩二本を持ちて出づ。）

助八　大屋さん。これでいゝかね。

六郎　むゝ、これで丁度三本揃つた。

助八　そこで、これをどうしなさるのだ。

六郎　人間三人を縛るのだ。

一同　え。

權三　三人といふのは、誰と誰とを縛るんですね。

六郎　先づ貴樣を縛る。

權三　え。

六郎　それから助十を縛る。

助十　え。

六郎　それから彥三郎さんを縛る。

彥三郎　わたくしもお繩にかゝるのでございますか。

六郎　この三人を珠數つなぎにして、南の御奉行所へ牽いて行くのだ。

助八　いけねえ、いけねえ。あとの二人はどんな惡いことをしたか知らねえが、おれの兄貴に限つちやあ繩をかけられるやうな覺えはねえ筈だ。ふだんから兄弟喧嘩こそしてゐるが、おれに取つちやあ唯つた一人の兄貴だ。いはれも無しに繩附きにされて堪るものか。なんでおれの兄貴を縛るのだ。その譯をいへ。譯をいへ。

六郎　さうむきになつて怒るなよ。これには譯のあることだ。こゝにゐる若い人は小間物屋の彥兵衞さんの息子で、これからおまへの兄貴と權三を證人として、お父さんの無實の罪を訴へて出ようといふのだ。

助八　證人なら家主が附添ひで、おとなしく連れて行くがいゝぢやあねえか。なんで繩をかけるのだ。

六郎　そのわけは今云つて聞かせる。みんなもよく聞け。今度の一件は並一通りのことではいけない。本來ならばこの彥三郎さんがどこにか宿を取つて、その町名主の手から御奉行所へ訴へて出るのが順當だが、そんなことでは容易に埒が明かないばかりか、一旦落着したお捌きの再吟味を願ふなどと云つては、御奉行樣のお手許まで達かないうちに、下役人の手で握り潰されてしまふのは知れてゐる。そこでおれが考へたには、この三人に繩をかけて御奉行所へ牽いて行つて、小間物屋彥兵衞のせがれ彥三郎と申す者がわたくし方へ押掛けてまゐり、父彥兵衞は決して盜みなど致すものでない。それを罪人と定められたは恐れながらお上のお眼がね違ひ、二つには家主の不穿鑿と、さんざんの惡口を云ひ募るのみか、長屋の駕籠かき權三助十の兩人もその腰押しをいたして、理不盡の亂暴狼藉をはたらき……。

權三　（おどろいて）嘘だよ、うそだよ。おれ達が何をす

るものか。

助十　御奉行所へ行つて、そんな出鱈目を云はれちやあ大變だ。

六郎　まあ、騷ぐなよ。そのくらゐに云はなければ中々お取上げにはならないのだ。そこで、よんどころなく長屋中の者うち寄つて右三人を取押へ、かやうに引立てゝまゐりましたれば、何とぞ上の御威光を以て彼等に理解を加へ、穩便に引取りますやうに御取計らひを願ひ上げますると、おれの口から斯う訴へ出るのだ。どうだ、判つたか。かうすれば屹とお取上げになるに違ひない。

助八　なるほどさうかも知れねえな。こいつは巧えことを考へ出したね。

おかん　大屋さんは正直な人だと思つてゐたら、うそをつくのは中々上手だわねえ。

助八　まつたく隅へは置かれねえや。

六郎　つまらないことを褒めるな。こつちは一生懸命だ。そこで、お白洲へ呼び込まれたら、それからはめい／＼の腕次第で、彦三郎さんは自分の思ふことを存分に云ふが好し、權三と助十は自分の見た通りを逐一申立てゝ、馬喰町の隱居殺しはどうしても勘太郎の仕業であらうと存じますと、はつきり云ふのだ。（考へて）彦三郎さんは大丈夫だらうが、おまへ達にそれが出來るか。

權三　出來ても出來ねえでも仕樣がねえ。今も嚊に云はれた通り、一つ長屋の彦兵衞さんが繩附きになつて出て行くのを知つてゐながら、今まで默つてゐたのはどうも良くねえ。實はわつしも内々は氣が咎めて、なんだか寐ざめが好くなかつたのだから、その罪ほろぼしに出來るだけ遣つてみませうよ。

彦三郎　なにぶんお願ひ申します。（助十に）おまへさんにも宜しくお頼み申します。

助十　まあ、心配しなさんな。かう見えても江戸つ子の神田つ子だ。自棄のやん八で度胸を据ゑた日にやあ、相手が大岡樣でもなんでも構はねえ、云ふだけのことは皆んなべら／＼云つて遣らあ。細工は流々、仕上げを御覽じろだ。

權三　おや、おや、手前は急に強くなつたぜ。變な野郎だな。

六郎　だが、まあ、強くなつた方は結構だ。その勢ひで皆んな縛られてくれ。

おかん　（かんがへる）縛られて行つて、すぐに歸して下さるでせうかねえ。

六郎　それは受合へない。町内あづけとでも來れば占めたものだが、吟味中は一先づ入牢といふことになるかも知れないな。

おかん　あら、牢に入れられるの……。（泣き出す）お家主さん。それぢやああんまりぢやありませんか。罪もない内の人を牢へ入れて……。若しいつまでも歸されなかつたら、お前さんどうしてくれるんですよ。

助八　吟味中は入牢なんていふことになると、兄貴もちつと可哀さうだな。もし、大屋さん。兄貴の身代りにわつしを縛つて行つてくれませんかね。わつしの亂暴は世間でも皆んな知つてゐるんだから、わつしが暴れたといふ方が却つて本當らしいかも知れませんぜ。

六郎　だが、その晩のことを詳しくお調べになつたときに、本人でないと申口が曖昧になつていけない。やつぱり兄貴を縛るより外はないな。

助八　（助十の顏をのぞく）兄い、おめえも好いかえ。

助十　いゝよ、いゝよ。大丈夫だ。

助八　だが、どうもおれを遣つた方がよさゝうだな。大屋さん、どうしてもいけませんかえ。

六郎　まあ、まあ、さう案じることはない。（おかんに）おまへも泣くなよ。自慢ぢやあないが、大岡樣とこの家主が附いてゐるのだ。決して惡いやうにはならないよ。

おかん　（不安らしく）それもやつぱり大屋さんの嘘ぢやあありませんかえ。

六郎　おれだつて無暗に嘘をつくものか。安心しろよ。

おかん　若しもこれぎりで内の人が歸つて來なかつたら、屹とおまへさんを恨むからさう思つておいでなさいよ。（泣く）

彥三郎　（氣の毒さうに）どうも皆さんに御迷惑をかけまして、なんとも申譯もないことでござります。（六郎兵衞に）では、お繩をおかけ下さりませ。（兩手をうしろへ廻す）

六郎　おまへさんはわたしが縛る。（雲哲等に）おまへ達は權三と助十を縛つてやれ。

雲哲　あい、あい。長屋中の持て餘し者がどつちもたうとう繩附きか。

願哲　これだから惡いことは出來ないな。

權三　なにを云やあがる。手前たちの知つたことぢやあねえ。

助十　あとでびつくりしやあがるな。さあ、どうとも勝手にしやあがれ。

（權三も助十も覺悟して縛られようとする。）

六郎　これ、ちつとぐらゐ痛くつても構はない。遠慮なしにぐる〳〵巻きにふん縛れよ。

雲哲　大屋さんからのお許しが出たのだ。せい〴〵嚴重に縛つてやれ。

願哲　はゝ、面白い、面白い。
おかん　なにが面白いものか。ほんたうに好い面の皮だ。
助八　こいつ等、面白半分に騷ぎ立てやあがると、おれが料簡しねえぞ。
六郎　はて、喧嘩をしてはならない。靜にしろ、靜にしろ。
（雲哲と願哲は笑ひながら二人を縛りあげる。六郎兵衞も彥三郎を縛る。）
六郎　ところで、そつちの二人は兎も角も、この人を數寄屋橋內まで引摺つて行くのは可哀さうだ。（土間をみかへる）おゝ、丁度そこに駕籠がある。と云つて、權三と助十は繩附きで擔がせるわけにも行かず、これ、助八。だれか相棒をさがして擔いで行け。
助八　え、おれにかつがせるのかえ。
六郎　あたりまへよ。貴樣の商賣ではないか。
助八　商賣は商賣だが、こいつは氣のねえ仕事だな。どうで酒手は出やあしめえ。
六郎　ぐづ〳〵云はずに、早く相棒を見つけて來いよ。おお、誰彼といふよりも、雲哲、おまへが片棒かついでやれ。
雲哲　大屋さんのお指圖だが、これは難儀だ。おれも弔ひの差荷ひはかついだが、生きた人間を乘せたのはまだ一度も擔いだことがないので……。

助八　まあ、仕方がねえ、おれが先棒になつて遣るから、あとからそろ〳〵附いて來い。さあ、手をかせ。
雲哲　やれ、やれ。兎かく長屋に事なかれだ。
（助八と雲哲は土間から駕籠を持ち出してくる。）
彥三郎　いえ、それではあんまり恐れ入ります。
六郎　なに、遠慮はないから乘つておいでなさい。
（六郎兵衞は彥三郎の手を取りて駕籠にのせる。助八と雲哲は身支度をする。おかんは奧に入る。上のかたより猿まはし與助がうろ〳〵出づ。）
與助　大屋さん、井戸がへは何うしますね。
六郎　急に大事の用が出來て、おれは御番所へ出なければならないから、井戸がへの方はまあ宜しく遣つてくれ。おゝ、さうだ。おまへにも用がある。願哲は權三の繩取りをして、おまへは助十の繩を取つて行け。
與助　（おどろいて）え、どこへまゐります。
六郎　南の御奉行所へ行くのだ。
與助　え。（ふるへる）
六郎　なにも怖がることはない。おれが一緒に附いて行くのだから安心しろ。
與助　はい、はい。
六郎　併し猿を背負つてゐては少し困るな。だれかに預けて行け。

與助　いえ、この猿めは迚もわたくしの傍を離れませんから、一緒に連れて行かして下さい。

六郎　では、まあ勝手にするがいゝや。（一同に）さあ、めい〳〵の役割がきまつたら、日の暮れないうちに出かけようぜ。

（願哲は權三の繩を取り、與助は助十の繩を取りて引立てる。助八と雲哲は駕籠を舁き上げようとして、雲哲はよろける。）

助八　おい、おい、しつかりしろよ。

雲哲　おれは素人だ。仕方がない。

（奥よりおかんは新しい手拭と半紙を持ちて出づ。）

おかん　まあ、待つてください。（權三のふところに手拭と紙を入れる）おまへさん、達者で歸つて來て下さいよ。

權三　えゝ、縁喜でもねえ。泣くな、泣くな。すぐに歸つて來るよ。

助八　（それを見て）あ、おれも忘れた。待つてくれ、待つてくれ。（わが家の奥へかけ込む）

六郎　（氣がついて）あ、おれも忘れた。これ、雲哲。このまゝで御番所へは出られない。宅へ行つておれの羽織を取つて來てくれ。

雲哲　大屋さんは相變らず人使ひが暴いな。

六郎　生意氣なことをいふな。この願人坊主め。早く行つて來い。

雲哲　あい、あい。（上のかたに去る）

おかん　（權三に）おまへさんも着物を着かへて行つちやあどうだえ。

權三　繩をほどいて又縛られるのは面倒だ。これでいゝ、これでいゝ。どうでお花見に行くんぢやねえ。

（家の奥より助八は緡の錢を持ちて出づ。）

助八　地獄の沙汰も金次第といふが、身上ふるつても二百の錢しかねえ。これでも何かの役に立つかも知れねえから、持つて行くがいゝぜ。（助十のふところに押込む）

助十　唯つた二百ばかりがどうなるものか。見つともねえから止せ、止せ。第一それをおれに呉れてしまふと、あしたの米を買ふ錢があるめえ。

助八　なに、おれは一日ぐらゐ食はずと生きてゐられらあ。まあ、まあ、持つて行く方がいゝよ。

おかん　ほんたうに心細くつてならないねえ。（權三に）おまへさんに幾らか持たして上げたいんだけれど……。ちよいとお待ちよ。表の質屋へ行つて來るからさ。

權三　そんなことをしてゐると遲くなる。すぐに歸つて來るんだから、錢なんぞは要らねえ、要らねえ。

（上のかたより雲哲は夏羽織を持ちて出づ。）

六郎　御苦勞、御苦勞。（羽織をきる）さつきも云ふ通り、

おれもこの年になるが、かういふ事は初めてだ。當年六十歳の初陣で、なんだか武者震ひがして來たやうだ。

權三　大將の大屋さんが顏へ出しちやあ困るぜ。

助十　どうぞしつかりお頼み申しますよ。

六郎　なに、大丈夫。さあ、威勢よく出陣だ。

彦三郎　皆さん、おねがひ申します。

權三　さあ、繰出せ。

助十　くり出せ。

（六郎兵衛は先に立ち、助八と雲哲は彦三郎をのせたる駕籠をかきあげると、雲哲は又よろける。助八も一緒によろける。權三と助十は願哲と與助に綱を取られてゆく。おかんは不安らしく見送る。石町の夕七つの鐘きこゆ。）

――幕――

第二幕

前の場とおなじ道具。權三と助十の家。第一幕より一月ほど後の朝。

（權三の家では、權三とおかんが酒の膳を前にして、夫婦喧嘩をしてゐる。）

權三　（片肌ぬいで）やい、やい、この阿魔。叩つ殺すからさう思へ。

おかん　さあ、殺せるなら殺して御覽。いくら自分の女房でも、横町の黑や斑を殺したのとは譯が違ふからね　おまへさんも勘太郎の二代目になりたいのかえ。

權三　なに、勘太郎の二代目だ。おれがいつ人殺しをした。

おかん　現在あたしをぶち殺さうとしてゐるぢやあないか。勘太郎は赤の他人を殺したんだが、おまへは自分の連れ添ふ女房を殺さうといふのだから、なほ／＼罪が深いよ。

權三　べらぼうめ。手前なんぞは横町の黑や斑と大した違えがあるものか。黑や斑はおれの顏をみると、尻つ尾をふつて來るだけも可愛らしいや。

おかん　尻つ尾をふつて來るどころか、あたしなんぞはこんな家へ來て、女房の役からお爨どんの役まで勤めてゐるんぢやあないか。それでも可愛くないのかよ。一體おまへだの、隣の助十だのといふ奴を唯置くといふ法があるものか。このあひだの時に牢屋へでも投り込んでしまへばいゝものを、町内預けにして無事に歸してよこしたお奉行樣の氣がしれないねえ。

權三　あのときに手前は一粒十六文といひさうな涙をこぼして、おい／＼泣きやあがつたのを忘れたか。おれが町内あづけになつて、無事に歸つて來た顏をみると、手前

は又むやみに喜んで、子供のやうに手放しで泣きやあがつた。さうして、大岡様はありがたいと手をあはせて拜んだぢやあねえか。今になつてお奉行様の氣が知れねえもねえものだ。手前勝手も好加減にしろ。

おかん　そのときは其時さ。けふのやうに亭主風を吹かせて勝手氣儘のことを云はれちやあ、あたしだつて蟲が承知しないだらうぢやないか。

權三　亭主が酒を買つて來いといふのが、なんで勝手氣儘だ。どんな裏店でも一軒のあるじが、酒ぐらゐ飲むのは當りめえだぞ。

おかん　一軒のあるじなら主人らしく、酒を買ふ錢を五十でも百でも、耳を揃へてならべてお見せよ。

權三　その錢がねえから手前に賴むのぢやあねえか。判らねえ外道だな。

おかん　外道でも般若でも、質草はもう何にもないよ。

權三　それだから大屋さんへ行つて賴めといふのだ。

おかん　家賃を小半年も溜めてゐる上に、そんな蟲のいゝことが云つて行かれるものかね。まして此の矢先ぢやあないか。

權三　この矢先だから賴みに行けといふのだ。ふだんの時とは譯が違はあ。

おかん　そんならお前が自分で行つておいでな。

權三　おれが行かれねえから、手前に賴むのだ。さういふことは女の役だ。

おかん　金を借りに行くのは女の役だ……。（あざ笑ふ）權現樣がそんなことをお決めなすつたのかえ。

權三　あゝ云へば斯ういふと、手前のやうに亭主を見くびつてゐる女も世界に少ねえものだ。

おかん　おまへのやうに女房をいぢめる亭主も世界にたんとあるまいよ。

權三　うぬ、もうどうしても助けちやあ置かねえぞ。念佛でも題目でも勝手に唱へてゐろ。

（權三は土間に飛び降りて、駕籠の息杖を持ち來れば、おかんは掻いくゞりて駕籠のかげに隱れるを、權三は杖をふりあげて追ひまはす。上のかたより猿まはし與助は商賣に出る姿にて、猿を背負ひて出で、この體をみて割つて入る。）

與助　又いつもの夫婦喧嘩か。まあ、まあ、靜にしなさい。

權三　こん畜生があんまり不貞腐るから、ぶち殺してしまはうと思ふのさ。

おかん　まあ、聽いて下さいよ。毎日商賣にも出られないで、米櫃ががた付いてゐる最中に、朝から酒を買への何のと勝手な熱ばかり吹くから、あたしが少し口答へをすると、すぐに生かすの殺すのといふ騷ぎさ。愛想が盡き

るぢやありませんか。
與助　どつちの贔屓をするでもないが、どうもそれは御亭主の方がよくないやうだな。
權三　なぜ惡いんだよ。
與助　なぜと云つて、おまへは町内あづけの身の上ではないか。それが朝から酒を飲んで、女房を生かすの殺すのと騷ぎ立てゝ、そんなことがお上の耳に這入つたらどうするのだ。今度の一件が落着するまでは、せい／＼謹愼してゐなければなるまいではないか。
おかん　それをあたしが云つて聞かせても、馬の耳に念佛なんですよ。
權三　うるせえ。引込んでゐろ。（すこし眞面目になつて）なるほど、おめえの云ふ通り、こんなことが聞えたら好くねえだらうね。
與助　それはよくないに決まつてゐる。それだから、まあおとなしくしてゐなさいと云ふのだ。
權三　むゝ。（いよ／＼悄げて）どうも詰らねえことになつてしまつたな。
（この時、隣の助十の家でも怒鳴る聲がきこえる。）
助十　この野郎、どうしても唯は置かねえぞ。
助八　喧嘩なら廣いところへ出て來い。
（臺所の破れ障子を蹴放して、助八は擂粉木を持ちて跳り出づ。つゞいて助十は出刃庖丁を持ちて出づ。）
おかん　あら、隣でも大變だよ。
與助　あつちは刄物を持つてゐる。これはあぶない。
（與助は猿を緣におろして、怖々ながら留めようとしてゐると、上のかたより願人坊主の雲哲と願哲は商賣に出る姿にて、住吉踊の傘をかつぎて出で、これを見て騷ぐ。）
雲哲　やあ、やあ、又はじめたのか。
願哲　刄物をふりまはしては劍難だ。
（助十と助八は捨臺詞にて鬪つてゐる。雲哲と願哲は思案して、權三の家の土間から駕籠を持ち出し、與助も手傳ひて、よき隙を見て助十と助八のあひだに突き出し、その駕籠を楯にして二人を隔てる。）
助十　えゝ、邪魔なものを持出しやあがるな。
助八　早く退けろ。退けてくれ。
雲哲　まあ、待つた、待つた。
願哲　あぶない、あぶない。
與助　兄弟喧嘩もいゝ加減にしなさい。
權三　さう／＼しい奴等だな。（緣先に出る）おい、助十。もう止せよ。おれたちは町内あづけの身の上だから、むやみに騷ぎ立てるとお咎めを受けるのを知らねえか。
助十　そりやあおれも知つてゐるが、あの野郎があんまり

癪に障るからよ。

おかん　(表に出る)　朝つぱらから喧嘩なんぞをして見つともないぢやないか。一體どうしたの。

助十　町内あづけの身の上で、うつかりと出あるくわけにも行かず、よんどころなしに小さくなつてゐると、あの野郎め、その思ひやりも無しに毎晩遊び歩いてゐやあがつて、ゆうべもたうとう歸らねえ。仕方がねえから、今朝もおれが水を汲む、飯を炊くといふ始末だ。そこへぼんやり歸つて來やあがつて、碌に挨拶もしねえでおれの炊いた飯を平氣で搔つ食つてゐやあがる。あんまり人を馬鹿にしてゐやあがるから、おれが一番きめ付けてやると、逆ねぢに食つてかゝつて來やあがる。野郎め、ゆうべは何處かで振られて來やあがつて、その八つ中りを兄貴に持つて來るなんて、途方も途徹もねえ奴だ。おれが腹を立つのも無理はあるめえ。

助八　一年に一度や二度ぐらゐ兄貴に飯を炊かせたつて罰のあたるほどのこともあるめえ、第一その米はだれが買つたんだよ。

助十　おれはお預けの身の上だ。

助八　おあづけを好い幸ひにして、弟にばかり働かせることがあるものか。せめて小遣ひ取りに草鞋でも綯へといふのに、それもしねえで毎日毎晩ごろ〳〵してゐやあがる。一體、家の兄貴だの、隣の權三だのといふ野郎どもを、無事に歸してよこすといふ、お奉行樣の氣が知れねえ。このあひだから牢屋へぶち込んで置けばいゝのだ。

權三　こいつも噂と同じやうなことを云やあがる。手前の兄貴はどうだか知らねえが、この權三は牢に入れられるやうな惡いことはしねえのだ。うそだと思ふなら、大岡樣のところへ行つて聽いてみろ。

助八　えゝ、わざ〳〵聽きに行くまでもねえ。どうで所拂ひか追放にでもなる奴等だから、お慈悲で當分歸してくれたのだ。手前達は知らねえのか、左官屋の勘太郎はきのふの夕方、無事に歸されて來たぞ。

助十　(おどろく)　え、ほんたうか。

(權三もびつくりして出て來る。)

權三　おい、おい。ほんたうか、本當か。

おかん　本當に勘太郎は歸されたのかえ。

助十　そりやあ些とも知らなかつた。(又かんがへて)　やい、手前。おれ達をかつぐのぢやあねえか。

助八　(すました顔で)　まあ、かれこれ云ふことはねえ。論より證據だ。豐島町へ行つて勘太郎の家を覗いてみろ。今ごろは鼻唄で祝ひ酒でも飲んでゐらあ。

權三　こりやお驚いたな。どうしたのだらう。

おかん　やつぱり人違ひだつたのかねえ。

雲哲　なるほどさう云へば、お奉行所からの差紙で、大屋さんと彥三郎さんは今朝早くから數寄屋橋へ出て行つたさうだ。

助十　ふむう。（權三と顏をみあはせる）

與助　大屋さんの話では、左官の勘太郎といふ奴は不斷から身持のよくない男で、本業の鏝よりも賽ころを持つ方を商賣にしてゐる。さうして、去年の暮頃から博奕に勝つたと云つて、急に身なりを拵へたり、酒を飮んだり、女を買つたりして遊びあるいてゐる。いや、まだそればかりでなく、馬喰町の女隱居の殺された晩にも、あいつは夜が更けてから歸つて來て、木戶を叩いて觸つて入れて貰つたといふことだ。

おかん　そのほかにも色々怪しいことがあるから、どうしても勘太郎の仕業に相違ない。今度の一件も十に九つはこつちの物だと、大屋さんも大變よろこんでゐなすつたのだが、どういふわけでそれが急に引つくり返つてしまつたのかねえ。

願哲　流石の大屋さんも今朝はよつぽど苦勞ありさうな顏をして出て行つたといふから、どうもむづかしいのかも知れないな。

與助　八さんのいふ通り、勘太郎がゆうべ歸されて來たのが論より證據だ。

おかん　困つたことになつたねえ。（權三に）おまへさん。どうするえ。

權三　どうすると云つて……。おれも面喰つてしまつた。おい、助十。どうも困つたな。

助十　まつたく困つたな。だからおれが止せといふのに、手前がつまらねえ娑婆ッ氣を出して、云はずとも好いことをべら／＼しやべつたもんだから、到頭こんなことになつてしまつたのだ。

權三　それだからおれも唯、勘太郎らしいと曖昧に云つて置かうと思つたのを、大屋さんが何でも勘太郎に相違ございませんと、はつきり云つてしまへと指圖するもんだから、おれもつい其氣になつたのだ。手前だつて御白洲で、確に左樣でございますと云つたぢやあねえか。

助十　そりやあお奉行樣が確に左樣かと念を押すから、おれの方でもつい、うつかりと、ハイ左樣でございますと云つてしまつたのよ。おれが好んで云つたわけぢやあねえ。

權三　好んで云つても云はねえでも、御白洲で一旦云つてしまつた以上は、もう取返しは付かねえ。どうしたら好からうな。

助十　さあ、どうしたら好からう。おい、八。なんとか工夫はあるめえかな。

助八　それ見ねえ。めい／＼のからだに火が付いてゐるの

だ。兄弟喧嘩なんぞしてゐるやうな場合ぢやねえぢやあねえか。

おかん　ほんたうに夫婦喧嘩どころの騒ぎぢやあないよ。

權三　所拂ひぐらゐで濟むだらうか。（かんがへる）もしお呼び出しになつて、今度こそは入牢申付くるなぞと來た日にやあ助からねえぜ。

與助　あの彥三郎といふ人は年も若し、親孝行の一心から出たことだから、上のお慈悲もあるだらうが、おまへ達はどうだかなあ。

助十　このあひだは牢へぶち込まれようが何うしようが構はねえといふ料簡だつたが、さて斯うなつてみると、どうも牢なんぞへは行きたくねえ。やつぱりあの時に止せばよかつたのだ。やい、權三。おれは一生手前を恨むぞ。

權三　そんなことを云つてくれるなよ。かうなりやあお互えに一蓮託生ぢやあねえか。なにしろ何うも弱つたな。

おかん（權三の袖をひく）おまへさん。いつそ今のうちに姿を隱しちやあどうだえ。

權三　おれが逃げたら、あとの者に難儀がかゝるだらう。今度はおめえが町内預けにでもなるかも知れねえぜ。

おかん（涙ぐむ）そりやあ亭主の爲だもの、仕方がないやね。

助八　ぢやあ、兄い。おめえも逃げることにするか。逃げるなら、大屋さん達の歸らねえうちの方がいゝぜ。

雲哲　だが、二人を逃がしてしまつたら、家の者ばかりでなく、大屋さんや月番の行事は勿論、まかり間違へば相長屋一同が迷惑することになるだらう。

願哲　さうだ、さうだ。皆ながどんな迷惑を被ることになるかも知れないから、駈落なんぞは止して貰ひたいな。

與助　それもうまく逃げ負せればいゝが、途中で捉つたが最後、罪はいよ／＼重くなるばかりだ。

助十　それもさうだな。ぢやあ、まあ、大屋さんの歸るまで、おとなしく待つとしようか。

助八　大屋さんが歸つて來たら、もう間にあふめえぜ。

與助　いや、駈落はよくないよ。

おかん　それぢやあ何うすればいゝのさ。

與助　それはわたしにも判らないが、なにしろ困つたことが出來たものだ。

助十　おれたちはあの彥三郎の尻押しをして、大屋の家へあばれ込んだと云ふことになつてゐるんだからな。

權三　おまけにその勘太郎が人違ひと來た日にやあ、どう考へても無事ぢやあ濟むめえ。

助十　こりやあやつぱり駈落だ。

與助　いけない、いけない。

（與助と雲哲、願哲は助十を支へてゐる。下のかたの

路地口より左官屋勘太郎、三十二三歳、身綺麗にいでたち、角樽と鰯をさげて出づ。）

雲哲　あ、勘太郎が來た。

與助　なに、勘太郎が來た。

願哲　ほんたうに來た、來た。

（人々は顔をみあはせ、權三と助十は思はずあとへ退る。勘太郎は何氣なく一同に挨拶する。）

勘太郎　みなさん、急にお涼しくなりました。

與助　（ふんだか氣の毒さうに）朝晩はめつきりと涼風が立つて來ました。

勘太郎　御近所に居りながら、つい〳〵御無沙汰ばかり致して居ります。

與助　はい、はい。おたがひ樣で……。

（人々は勘太郎のこゝろを測りかねて、不安らしく眺めてゐる。）

勘太郎　駕籠屋の權三さんと助十さんの家はこゝでございますね。

おかん　（もぢ〳〵しながら）はい、はい。

助八　（度胸を据ゑて進み出づ）そつちが權三、こつちが助十の家ですが、なんぞ御用ですかえ。

勘太郎　とき〴〵錢湯でお目にかゝつてゐながら、ついお見それ申しました。お前さんは助さんの弟さんでしたね。

わたしは豐島町の勘太郎ですよ。（云ひながら權三と助十に眼をつける）おゝ、權さんも助さんもそこにゐるのか。

（權三と助十はだまつて俯向いてゐる。）

勘太郎　早速ですが、わたしも飛んだ災難で、小一月も傳馬町の暗いところへ窒られてゐましたが、流石は大岡越前守樣のお捌きで、白い黒いはすぐに判りまして、きのふの夕方、無事に下げられて來ました。

おかん　（やはりもぢ〳〵しながら）それはまあお目出たうございました。

勘太郎　今度のことに就きましては、權さんと助さんには色々御心配をかけたやうに聞いて居りますので、これはほんのお禮のおしるし、甚だ失禮ではございますが、どうぞお納めをねがひます。

おかん　はい。（とは云ひながら手を出しかねてゐる）

勘太郎　（助八に）では、八さん。どうぞこれを……。

助八　（同じく變な顔をして）え、どうしてこんな物を與んなさるのだね。

勘太郎　今も申す通り、わたしも明るい體になつて世間へ出て來ましたから、近所隣へも心ばかりの配り物をいたしました。そのついでと申しては何ですが、これを權さんと助さんへもお禮心に差上げたいと存じまして……

助八　ひどく切口上で、をかしいぢやあねえか。なんで禮をくれるのだ。（勘太郎の顏をながめてゐる）

與助　おゝ、角樽に錫……。いや、なか〳〵行き屆いたものだな。

（與助は猿を背負ひ、近寄つて覗く時、その背中にゐる猿は不意に手をのばして錫を引つたくる。）

與助　（おどろいて）えゝ、飛んでもないことをするな。（錫を取返して、猿のあたまを打つ）さあ、さあ、お詫をしろ。お詫をしろ。

（與助は背中より猿をおろし、その頭をおさへてお辭儀をさせようとすれば、猿はその手を拂ひ退け、齒をむき出して勘太郎に飛びかゝる。不意におどろきたる勘太郎はたちまち殘忍の相をあらはし、兩手に猿の喉を强くおさへて絞め殺し、その死骸を投げ出す。人々は呆氣に取られたやうに眺めてゐると、與助は猿の死骸をかゝへて泣き出す。）

與助　おゝ、猿めが死んだ、死んだ。

雲哲　死んだ、死んだ。

おかん　まあ、可哀さうだねえ。

勘太郎　いや、これはわしが惡かつた。猿は死にましたか。

與助　（泣く）死にました、死にました。

（勘太郎は紙入から金三枚を取出し、紙にのせて出す。）

勘太郎　なにしろ猿めが無暗に飛びついて來るので、わたしも夢中になつて飛んだことをしてしまひました。お前さんの商賣道具をなくなした償ひと、云つては少いかも知れないが、これでまあ堪忍してください。

（與助はだまつて泣いてゐる。）

雲哲　（與助のそばに寄る）商賣道具の猿を殺されては、おまへも定めて困るだらうが、三兩といふ金があれば又どうにかなる。

願哲　これも災難とあきらめて、我慢しなさい。我慢しなさい。

與助　幾年も馴染んだ此の猿を金にかへられるものか。（又泣く）

雲哲　さう云つても今更仕樣がない。（勘太郎の手より金を受取る）さあ、これで代りの猿を買へばいゝのだ。

（雲哲と願哲は與助に金をわたし、なだめながら助十の家の緣の方へ連れてゆく。與助は猿をかゝへて泣いてゐる。）

勘太郎　わたしはなぜこんな手暴いことをしたか。くれ〴〵も堪忍して下さい。あゝ、これで肴も臺無しになつてしまつた。まあ、酒だけでも納めて貰ひませう。

（勘太郎は落ちてゐる錫を足にて蹴飛ばす。このあひ

だに權三と助十に眼で知らせ合ひ、形をあらためて勘太郎のまへに出る。）

權三　もし、勘さん。どうも何とも申譯がありません　この長屋にゐた彥兵衞のせがれが大阪からわざ〳〵下つて來て、おやぢの無實を訴へると云つて泣いて騷ぐ。大屋さんも氣の毒がつて色々世話を燒いてやる。それに釣り込まれてわつし等もついうつかりと詰まらねえことを饒舌(しやべ)つたもんだから、今さら拔きさしもならねえやうな羽目になつてしまつて、たうとうお奉行所まで引張り出されるやうなことになつてね。

勘太郎（冷かに）いや、それは大抵知つてゐますよ。その節は色々御心配をかけました。

助十　まあ、さう云はねえで、一通りは聽いておくんなせえ。何もわつし等だつて確に見とゞけたと云ふわけぢやあ無し、ほんの夜目遠目(よめとほめ)でちらりと見たゞけのことだから、正直にその通り云ふ筈だつたのだが、御白洲へ出て曖昧な事を云つちやあならねえ、何でもはつきり物をいへと大屋さんが云ふもんだから、物の間違ひが自然と大きくなつて、お前さんにも飛んだ御迷惑をかけてしまひました。今となつちやあ、わつし等もまつたく後悔してゐるんですから、どうかまあ料簡しておくんなせえ。

おかん　ほかの事とは譯が違つて、まつたく料簡の爲にくいことでせうが、わたくし共が打揃つて幾重にもお詫をいたしますから、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

勘太郎（しづかに）　さうあい〳〵に御挨拶にやあ及びません。腹を立つてゐるくらゐなら、こんな物を持つてわざ〳〵お禮に來やあしませんよ。（やゝ皮肉らしく）つまりわたしの身狀(みじやう)が惡いからで……。左官屋の勘太郎は泥坊でもしさうな奴だ、人殺しでもしさうな奴だと、不斷からおまへさん達に睨まれてゐるので、自然こんなことにもなつたのですよ。

權三　いや、さう云はれると、いよ〳〵穴へでも這入りたくなるが、そこをまあ勘辨しておくんなせえ。

助十　これに懲りてこの後は、決して他人樣の噂なんぞはしませんから、今度のところだけは何分勘辨して……。

勘太郎　まあ、同じことを幾度も云はないでもいゝ。なにしろ私はお禮に來たのだから、素直にこれを納めてください。わたしの持つて來た[illegible]だからと云つて、まさか毒が這入つてゐるわけでもないから。

助八（[illegible]て）　おい、勘太郎さん。飛んだ人違ひをしてお前さんに迷惑をかけたのは重々こつちが惡い。それだから權三も、兄貴も、この通り平あやまりに謝まつてゐるぢやあねえか。それにおめえは男らしくもねえ。堪忍するなら堪忍する、堪忍しねえなら堪忍しねえと、

なぜ簡處さつぱりと云つてくれねえのだ。柄にもねえ切口上で、意地の悪い御殿女中のやうに、うはべは美しく云ひまはしながら、腹には刺を持つてゐるのが面白くねえ。第一、お禮に來たとはなんの事だ。こつちはお前にあやまりこそすれ、おめえに禮を云はれる覺えはねえのだ。

勘太郎　（あざ笑ふ）　それはおまへさんの僻みといふものだ。お禮と云つたのが氣に入らなければ、わたしが無事に娑婆へ出て來た身祝ひだと思つてください。

助八　いけねえ、いけねえ。おれの持つて來た酒だからと云つて、まさかに毒が這入つてゐるわけでもねえなぞと、厭なことを云ふぢやあねえか。酒の毒よりもおめえの口に毒がある。それを默つて聽いてゐられるものか。折角のおこゝろざしだが、兄きに代つておれが斷るから、こんなものは持つて歸つて貰ひてえ。

勘太郎　それでは當惑だ。もう少し穩かに口をきいて貰ひたいな。

（權三の家の縁の下から一匹の犬が出て來て、勘太郎をみて凄まじく吠えながら飛びかゝらうとする。勘太郎は再び兇惡の相をあらはして屹と睨む。犬はますます吠える。）

雲哲　又のら犬が出て來やあがつたか。

雲哲　貴樣も殺されるな。叱つ、叱つ。

（ふたりに逐はれて犬は上のかたへ逃げ去る。）

おかん　（云譯らしく）　あの野良犬にやあ困るねえ、だれを見てもすぐ吠えるんだから。

權三　犬だつて可愛くねえ奴にやあ吠えるのだらう。よく考へてみると、成程こりやあ八の云ふ通りで、折角のおこゝろざしは有難てえが、どうもおまへさんからこんな物を貰ひたくねえ。お禮にしてもお祝ひにしても、これは持つて歸つて貰はう。おい、助。さつきから無暗にあやまつて、損をしたやうだぜ。

助十　おれもさう思つてゐるのだ。（勘太郎に）　まつたくおめえの云ひ草は御殿女中で、妙にチクチク當るやうだ。堪忍しねえなら堪忍しねえ、恨みを云ひに來たなら恨みを云ひに來たとはつきり云つてくれ。面當てらしく酒や肴を持つて來て、眞綿に針で人をいぢめようとするのは、江戸つ子らしくねえ仕方だ。

勘太郎　なるほどお前さん達は江戸つ子だ。（又あざ笑ふ）上方者の尻押しをして、江戸つ子にぬれ衣をきせるなぞとは、本當の江戸つ子でなければ出來ない藝だよ。

助十　やかましい。手前のやうな江戸つ子があるから、本當の江戸つ子の面が汚れるのだ。こんなものは持つて歸れ。（角樽を投げ出す）

勘太郎　おまへさん達はあやまつてゐるのか、喧嘩を賣るのか。
權三　もう斯うなりやあ喧嘩だ、喧嘩だ。
おかん　まあ、お前、お待ちよ。
權三　えゝ、牢へ入れられようが、首が飛ばうが構はねえ。こんな野郎は半殺しにして遣らなけりやあ氣が濟まねえのだ。
おかん　また喧嘩を始めちやあいけない。お止しよ。止しておくれよ。
（おかんは頻りに權三を支へる。）
勘太郎　近いうちにお咎めがあると思つて、みんな自棄になつてゐるのか。そんな病犬の相手になつて、折角明るくなつた體をもう一度暗いところへ遣られては堪らない。はゝゝゝ。
（勘太郎は笑ひながら下のかたへ行きかゝると、助十は無言で飛びかゝつて、勘太郎の横面をなぐる。）
勘太郎　えゝ、なにをしあやがるのだ。氣ちがひめ。
（勘太郎は又もや人相を一變して、左右を睨む。）
勘太郎　おとなしくしてゐりやあ增長しやあがつて、好加減にしろ。豐島町の勘太郎を知らねえか。この大哥さんと喧嘩をするなら、からだの骨から鍛へて來い。
助八　こつちは生きてゐる人間だ。猿の喉を絞めるのとは譯が違ふぞ。
（助八は勘太郎にむしやぶり付けば、勘太郎は突き退ける。助十は又むしやぶり付く。權三も留められるのを振切つて飛びかゝる。三人は遂に勘太郎をねぢ倒して袋叩きにする。）
權三　おい、與助。こいつはおめえの猿のかたきだ。みんなと一緒になぐれ、なぐれ。
雲哲　なるほど猿のかたき討か。
願哲　これも長屋の附合だ。
（與助は竹の鞭を把り、雲哲等も一緒に勘太郎をなぐる。）
勘太郎　さあ、どいつも皆んな下手人だぞ。殺すなら殺せ。立派に殺してくれ。
權三　こいつを歸すと面倒だ。ふん縛つてしまへ。
助十　八。このあひだの繩を持つて來い。
（助八は奥へかけ込んで麻繩を持つて來る。）
おかん　縛つてもいゝのかえ。
助八　よくつても惡くつても構ふものか。毒食はゞ皿までだ。
權三　さあ、早く縛れ、縛れ。
（助八は勘太郎を縛る。）
雲哲　どうも仕置が暴くなつて來た。縛つてしまふのは些

とひどいな。

願哲　うか〳〵してゐて、こつちまでが係り合ひになつてはならない。長屋の附合も先づこのくらゐにして置かうか。

雲哲　これから先、何事が起つても、おれたちは知らないぞ、知らないぞ。

（雲哲、願哲は下のかたへ逃げ去る。）

與助　かたき討が濟んだら、わたしもこゝらにゐない方がよさゝうだ

（與助も猿をかゝへて、おなじく路地の外へ逃げてゆきかけしが、又引返して來る。）

與助　これ、お役人が來たやうだぞ。

權三　なに、お役人が來た。

助十　そいつはいけねえ。どうしよう。

助八　どうしよう。

（三人はうろたへながら四邊を見まはし、助十は駕籠に眼をつける。）

助十　これだ、これだ。

權三　ちげえねえ。早くしろ、早くしろ。

（三人は繩からげの勘太郎を引摺つて駕籠のなかへ押込み、外から垂簾をおろす。おかんは不安らしく表をのぞいてゐると、路地の口より石子伴作は捕方の者ふたりを連れ、雲哲と願哲を先に立てゝ出づ。）

伴作　左官の勘太郎は確にこの裏にまゐつてゐるな。

雲哲　長屋の者と喧嘩をして居ります。

伴作　喧嘩をいたしてゐるか。

（伴作はつか〳〵と進み來る。權三夫婦、助十兄弟は薄氣味惡さうにあとへ退る。）

伴作　鍛冶町の左官屋勘太郎はいづれへまゐつた。

四人　え。（顔をみあはせる）

伴作　こゝにまゐつてゐる筈ではないか。

權三　（曖昧に）いえ、そんな者は……。

伴作　（雲哲等をかへる）たしかに來てゐると申したな。

雲哲　はい。その勘太郎は……。

助十　（あわてゝ眼で制す）その勘太郎は……。もう歸りましてございます。

伴作　（うたがふやうに）歸つたか。

願哲　でも、たつた今までこゝにゐた筈だが……。

權三　なに、歸つたよ、歸つたよ。この通り、どこにもゐねえぢやあねえか。

（雲哲と願哲は不審さうにそこらを見まはしてゐると駕籠のなかにて勘太郎が叫ぶ。）

勘太郎　もし、お役人さま。勘太郎はこれに居ります。

（權三、助十等はぎよつとする。）

伴作　（捕方をみかへる）それ。

（捕方は駕籠の垂簾をあげて、勘太郎をひき出す。）

伴作　この者にはだれが繩をかけた。

（權三等はだまつてゐる。）

伴作　御用によつて勘太郎を召捕りにまゐつたところ、先廻りをして誰が繩をかけた。

權三　では、勘太郎はお召捕りになるのでございますか。

伴作　昨日一旦ゆるして歸されたは、深い思召しのあることで、かれの罪狀いよ〳〵明白と相成つて、再びお召捕りに相成るのだ。

助十　いや、さうでございましたか。（安心して）實はわたくしが縛りました。

權三　わたくしも縛りました。

助八　わたくしも手傳ひました。

伴作　おゝ、さうであつたか。委細はあらためて申し聞かせる。（捕方に）それ、引立てい。

勘太郎　おかまひないと申渡されたわたくしが、どうして二度のお繩を頂戴いたすのでございませうか。

伴作　要やかう申すな。尋常に立て、立て。

勘太郎　（與惜に）いえ、恐れながら申上げます。

捕方　えゝ、立て、立て。

（伴作は先に立ち、捕方は無理に勘太郎を引立てゝ下のかたに去る。一同は呆氣に取られたやうにあとを見送る。）

權三　なんだか狐に化かされたやうだな。

與助　やつぱり勘太郎はお召捕りになるのか。それといふのも、おれの大事の猿を殺した祟いかも知れないぞ。

おかん　いくら猿だつて殺し兼ねやあしないよ。

の、人間だつて無暗にひねり殺すやうな奴だもの、人間だつて殺し兼ねやあしないよ。

雲哲　さうだらうなあ。むやみにあいつに繩をかけて、どうなることかと心配してゐたが、これが遣ちの功名と云ふのかな。

願哲　かうなるとおまへ達はお叱りどころか、却つてお褒めにあづかるかも知れないぞ。

おかん　お褒めにあづからないまでも、お叱りがなければ結構さ。お役人が來たと聞いた時には、わたしは本當にぞつとしたよ。

（路地の口より家主六郎兵衛と彦三郎出づ。）

おかん　あら、大屋さんが歸つて來なすつた。

六郎　おゝ、みんなはこゝにゐたか。まあ、まあ、めでたい、目出たい。わたしもこれで重荷をおろした。

彦三郎　みなさんのお蔭で、わたくしの本望もやうやく達しまして、こんな嬉しいことはござりません。

權三　本望が達したかえ。いや、それで判つた。今こゝへ

お役人が來て、勘太郎を召捕つて行きましたよ。

彦三郎　では、勘太郎はもう召捕られましたか。

助十　（自慢らしく）　おれ達がふん縛つてお役人に引渡して遣つたよ。

六郎　いや、それは早手廻しであつたな。

助八　それにしても、どうでもお召捕りになる勘太郎をなぜ一旦ゆるして歸したんだね。

六郎　そこが大岡樣のえらい所だ、いくら權三と助十が證人に出てくれても、その晩に見た奴は左官の勘太郎に相違ございませんと云ふばかりで、ほかには確な證據がない。勘太郎は飽までもシラを切つて白狀しない。さすがのお奉行樣も吟味の仕樣がないので、先づおかまひないと云ふことで勘太郎めを一旦下げて置いて、實はちやんと隱し目附をつけてあつたのだ。ねえ、彦三郎さん。まつたく大岡樣はえらいではないか。

彦三郎　實に恐れ入りましてござります。今もお家主樣がおつしやる通り、一旦は勘太郎を無事に下げて、そつと隱し目附をつけて置かれますと、身におぼえのある勘太郎は、自分の家へ歸るとすぐに天井の板をはがして、そこに隱してあつた血だらけの金財布を取出して、臺所の竈の下で燒いてしまつたさうでござります。

六郎　どうで燒くなら早く燒いてしまへばいゝものを、そこがやつぱり運の盡きで、今まで天井裏に隱して置いて、それを寧と取出したところを、隱し目附にすつかり覗きれてしまつたので、もう動きが取れない。そこで、今日あらためてお召捕りといふことになつたのだから、彼奴いくら強情を張つても、今度こそは再び娑婆へは出られまいよ。そこで、權三と助十だがな。

二人　はい、はい。

六郎　かうなつた以上は、勿論町内あづけも免されるな。

二人　はい、はい。

六郎　身分の低い者どもに似合はず、俠氣を以て小間物屋彦三郎に助力いたし、まことの罪人を訴へ出でたる段、近ごろ奇特に存ずるといふので、いづれ改めてお呼び出しの上、お奉行樣から直々のお褒めがある筈だぞ。

二人　やあ、ありがてえ、ありがてえ。

助八　ぢやあ、御褒美も出るだらうか。

六郎　慾張つた奴だ。まだそこまでは判るものか。

與助　やれ、やれ、これでわたしも安心したが、かうなると彦兵衞さんはいよ〳〵氣の毒だつたな。

おかん　今更うたがひが晴れたところで、どうにも取返しが付かないからねえ。

六郎　いや、そこが又、大岡樣のえらい所だ。みんなびつくりするなよ。

（六郎兵衛は彦三郎に指圖すれば、彦三郎はこゝろ得て、路地の外へ出てゆく。）

權三　（かんがへる）いくら大岡樣がえらいと云つても、まさか死んだ者を生かして返しやあしめえ。

助十　死ぬもの貧乏とはよく云つたものだな。

六郎　ところが、生かして歸してくれたよ。

一同　え。

六郎　大岡樣は初めから見透して、どうも彦兵衛さんは本當の罪人らしくない。これは何かの間違ひであらうといふので、表向は牢中病死と披露して、實は生かして置いて下すつたのだ。

おかん　ぢやあ、彦兵衛さんは生きてゐるんですかえ。

六郎　むゝ、むゝ、生きてゐるよ。

權三　彦兵衛さんは生きてゐる……。どこまで行つても、狐に化かされてゐるやうだぜ。

助十　なに、化かされてゐることがあるものか。おれにはちやんと判つてゐらあ。なるほど大岡樣はえらいものだな。

助八　名奉行とあがめ奉つるのも嘘ぢやあねえ。

與助　彦兵衛さんが生き返つてくれりやあ、おれの猿なんぞは死んでもいゝ。

（下のかたより駕籠かき二人が附添ひ、彦三郎は父彦兵衛の手を取りて介抱しながら出づ。）

彦三郎　みなさん。御安心ください。父はこの通りでござります。

六郎　今はまつ晝間だ。幽靈ではないからよく見なさい。

彦兵衛　みなさん有難うございます。

一同　おゝ、彦兵衛さんだ、彦兵衛さんだ。

（一同はよろこんで彦兵衛のまはりに駈けあつまる。）

――幕――

戰の後

登場人物

黒田源左衛門
黒田源八郎
山崎番作
狂へる公卿行光
僧覺善
烏帽子商おそよ
おなじく長六
　　　勘八
茶道具屋市兵衛
下男七藏
盲目の老人
その孫娘
町人貝次郎
　　佐助
　　五郎藏
ほかに傭ふたる男、女、小兒なぞ。

上の卷

一

舞臺はうす明るく、正面は黒幕、左右もすべて黒幕にて掩はる。陣鉦太鼓の音すさまじくきこゆ。

（上のかたと下の方より武者大勢あらはれ出づ。鎧をつけたる武士あり、雜兵あり。長卷を持ちたるあり、槍を持ちたるあり、太刀を持ちたるあり。敵と味方とが入り亂れて闘ひながら出で來り、舞臺の上にてもごつちやになりて闘ふ。陣鉦太鼓の音は絶えずきこゆ。

この混戰ひとしきりあつて、敵も味方もおもひ〳〵に闘ひながら、再び上下にみだれ入る。

黒田源八郎、廿歳ぐらゐの若武者、大わらはの鎧姿にて太刀をぬき持ち、三四人の敵とたゝかひながら出で來り、しばらく奮闘して敵を左右に追ひちらし、自分も右の足に傷つきて倒れる。上のかたより源八郎の兄源左衛門、四十餘歳の武者、鎧兜にて槍をかい込みて出で、倒れたる弟を見つけて走り寄り、源八郎を扶けおこす。源八郎は起たんとして又倒れる。源左衛門は鎧の上帶をときて弟の傷をまき、自分の槍を杖にして弟を肩に引つかけ、上の方へ運びゆく。陣鉦太鼓の音

はげしく、舞臺は眞晴になる。）

二

舞臺再び明るくなれば、上のかたに少し寄せて、古びて頽れかゝりたる鐘撞堂あり。堂にのぼるべき石段ありて、石垣もところ〴〵燒けくづれたり。堂の下、舞臺のまん中に梅の立木ありて、花は白く咲きみだれたり。正面は京の町家の傷ましく燒頽れたるが續いてみえ、左右にも頽れたる家の礎などみゆ。舞臺の上にも燒けたる柱や礎や瓦や石などが一面に散亂して、殆ど足の踏みどころもなき亂雜のありさまなり。應仁の亂の終りたる年、十二月下旬の午後。空は陰りて雪を催せり。

（飢ゑたる男女、小兒など五六人、下の方より出で來りて向うをみる。）

男一　やあ、來た、來た。

女一　あれは京でも指折りの茶道具屋ぢや。

男二　この頃はよほど工面がよいと聞いてゐる。

男一　押取りまいて、貰へ、貰へ。

大勢　貰へ、貰へ。（口々に叫ぶ）

（向うより茶道具屋市兵衞、五十餘歲。下男七藏に茶の湯の道具を持たせて出づ。あとより飢ゑたる男女や小兒の群がぞろ〴〵と追つて出づ。なかには盲目の老人にて、孫の小娘に手を曳かれたるあり。）

七藏　はて、うるさい。退け、退け。

男甲　いゝや、退きませぬ。一日に二度の粥すらも滿足には啜られぬ身の上でござります。

女甲　どうぞ不便のものぢやと思召して、たとひ十文でも二十文でも……。

大勢　お惠みくだされ。

市兵衞　えゝ、執拗い奴等ぢや。あんなものに構うてはゐられぬ。七藏、來い、來い。

（市兵衞は先にたち、七藏もつゞいて舞臺に來たれば、先刻より待設けたる大勢が上の方にまはりてその行手を塞ぐ。）

男一　旦那樣。きのふも今日もひもじい腹を抱へてゐる者でござります。

女一　どうぞお慈悲にいかほどでもお惠みなされて下さりませ。

男二　お慈悲でござる。

大勢　おなさけでござります。

市兵衞　えゝ、前からも後からも煩さい奴。こゝの町にもかしこの辻にも、ぞろ〴〵と繋がつてあるく貧乏人どもに、一々施しをしてゐたら、おれの身代を逆さに振つて

もまだ足るまい。さあ、邪魔をせずに、通せ、通せ。

七藏　さあ、さあ、退いた、退いた。

（前後の大勢が口々に叫ぶ。）

大勢　旦那様、旦那様、お慈悲でござります。

市兵衛　（持餘す）はて、幾度云うてもおなじことぢや。おれは急ぎの用がある。もう堪忍して通してくれ。

（盲目の老人はさぐり寄りて、市兵衛の袂にすがる。）

老人　堪忍を願ふのはこちらのこと。どうぞ御堪忍あそばして、思召次第のお惠みを……。お覽の通りの不具者、ひとりの倅はながれ矢に命を取られ、あとに生き殘つた祖父と孫とが路頭に迷うてをりまする。

（市兵衛は顔をしかめて無言にて突きはなせば、老人は倒れる。娘は泣く。これを見て大勢はまた叫ぶ。）

男一　や、不具の年寄をあのやうなむごい目に逢はせた。

男甲　なんで無慈悲なことをさつしやる。

大勢　こりや料簡がなるまいぞ。

（大勢わや／＼と詰めよるを、七藏は支へる。）

七藏　まあ、待て、待て。こりや頼んでもない云ひがかりぢや。（市兵衛に）もし、旦那様。（早く幾らかやれと眼でしらせる。）

市兵衛　（迷ひながらうなづく）この頃はうか／＼と表もあるかれぬ。表へ出ればすぐにこれぢや。

（市兵衛は財布を取出して小錢をかぞへてゐる。上の方より狂へる公卿行光、三十幾位、やつれ果てたる姿にてふら／＼と迷ひ出で、矢庭に市兵衛の腕をつかむ）

市兵衛　（おどろく）えゝ、誰れぢや。おゝ、お前さまは……。

行光　行光を忘れはせまい。さあ、連れてゆきや。案内してたもれ。

市兵衛　して、どこへ……。

行光　わしも今までは精一ぱい堪へてゐたが、住む家は焼かれる、食ふ糧はない。花の都とは名ばかりで、こんな憂い辛い、苦しいおそろしい、地獄のやうな所にはもう一日も辛抱はならぬ。わしはこれから都を落ちて、中國へゆく。西國へゆく。唐天竺へもゆく。さあ、市兵衛、案内しやれ。

市兵衛　えゝ、途方もないことを……。なんでわたくしにそんな御案内が……。

行光　ならぬか。ならぬか。どうでも忌か。（市兵衛の胸ぐらを捉る）

（七藏も大勢もあきれて眺めてゐる。）

市兵衛　お前様。それは御無體でござりまする。その御案内はどうぞ餘人に仰せ付けられてくださりませ。これ、七藏。

どうかしてくれ、どうかしてくれ。

（七藏は進み寄りて、やう／＼に行光をひき分ける。）

七藏　もし、殿樣。わたくしの主人は唯今いそぎの用を抱へてをりますれば、今日のところは何うぞ御勘辨くださりませ。いづれ改めて御屋敷へまかり出まして、なんなりとも御用をうけたまはるでござりませう。

行光　いや、そりや嘘ぢや。わしをだますのぢや。市兵衛が行かずば、そちが代りに案内せい。（七藏の腕をつかむ）

市兵衛　（小聲に）氣ちがひぢや。氣ちがひぢや。そのつもりで相手になれ。

七藏　はい、はい。（行光に）そりやもう中國でも西國でも、唐天竺の果までもお供いたすでござりませうが、くどくも申す通り、なにぶんにも唯今は急ぎの用をかゝへて居りますれば……。

（市兵衛は突き放してしまへと眼で知らせる。七藏うなづく。）

七藏　今日のところは……。眞平御めんくださりませ。

（矢庭に行光をつき放し、市兵衛と共に上の方へ逃げて行かうとすれば、上の方にむらがりたる大勢がその行手に立塞がる。）

男一　そのお公卿樣は兎もかくも……。

女一　わたし等にはどうぞお惠みを……。

大勢　お願ひでござります、おねがひでござります。

市兵衛　（いよ／＼持餘す）えゝ、氣ちがひやら、乞食やら、とんだものに取卷かれてしまうた。よし、よし、おれが今惠んで遣るから、みんなそつちへ廻れ、そつちへ廻れ。

大勢　はい、はい。ありがたうござります。

（上の方の一群は下の方へ廻つてゆく。下の方の一群も口々に叫ぶ。）

大勢　わたくし共にもお願ひでござります。

市兵衛　いや、どうも煩さいことぢや。待て、待て。（財布から小錢を取り出す）あ、投げるぞ。勝手に拾へ。

（小錢を十四五枚ばら／＼と投げ出せば、大勢はあわてゝ拾ふ。その隙をみて、市兵衛と七藏は上の方へ逃げて行かうとする。行光はまた駈け寄つて市兵衛を捉へる。）

行光　これ、わしを置去りにして何處へゆくのぢや。

市兵衛　さあ、鳥渡そこまで……。

（市兵衛と七藏は行光を突き倒して、早々に上の方へ逃げ去る。大勢は錢を拾ひをはりて、不平らしく叫ぶ。）

男甲　えゝ、なんのことぢや。これでは一人が三文にもな

らぬわ。

男一　金持の癖に情をしらぬ奴ぢや。

女甲　こんなことでは料簡がなるまい。

女二　追掛けてもう少し強請らにやならぬ。

大勢　さうぢや、さうぢや。逃すな、逃すな。

（みな口々に罵りながら、上の方へわや／＼と追つてゆく。行光一人があとに殘り、そこらに倒れたる柱に腰をかけて、笑ひながら大勢のあとを見送る。）

行光　はゝゝゝゝ。面白い、面白い。市兵衛めが一生懸命に逃ぐるわ。逃ぐるわ。あれ、あれ、石につまづいて轉げ居つたわ。家來の奴めもつゞいて轉ぶわ。こりや堪らぬ。はゝゝゝゝ。（腹をかゝへて笑ふ）あまりの面白さに、わしもどうやら浮かれて來た。（扇にて拍子を取りながら謡ふ）それ生を享くるもの其身の威勢をあらそふこと人間以てこれに同じ、かならず龍虎に限るべからず。されば金銀雲を穿ち、猛虎深山に風をおこす。はゝゝゝゝ。いや、あまりに笑うたので、空腹うなつて來た。なんぞそこらに食ふものはあるまいか。（きよろ／＼見まはす）無い、無い。どれ、そこらへ行つて米なと餅なと掠め取つて來ようかい。

（行光はよろめきながら下の方に迷ひゆく。向ふより烏帽子折おそよ、十七八歳、男のすがたにて烏帽子折の荷をかつぎ、おなじく烏帽子折の男長六と勘八とに引立てられて出づ。）

おそよ　これ、これ、お前方はわたしをどうするのぢや。

長六　えゝなんでもよいから、歩め、歩め。

勘八　ぐづ／＼云ふと、痛い目みせるぞ。

（ふたりは無理におそよを引立てゝ來る。）

長六　これ。ようお聞きやれ。このごろは悪いことが流行り出して、女が男の繩張内を暴らしてあるく。

勘八　公卿衆や武家衆が頭にいたゞく烏帽子までも、女が折るとは何のことぢや。

おそよ　なんのことぢやとて是非がござらぬ。何年もつゞいた軍の騒ぎで、家は焼かれる、町はさびれる。その日のたつきにも差支へて、他國へ立退くものもあり。入夫に狩出されて軍の手傳ひする者もある。わたし等とても同じことで、なにがなして毎日立働かねば生きてゐられぬ世のなかぢや。男の職の女の職のと、むづかしい繩張をきめてゐられうか。人間に出來ることならば、なんでもするより外はあるまい。

長六　それ、それが悪いと云ふのぢや。男の職は男がするもの、女の職は女がするものと、むかしから自然にきまつてゐるのぢや。

勘八　女が男の領分へふみ込んで、男の商賣を横取りする

とは、あまりの無遠慮ではあるまいか。
おそよ　むかしは昔、今は今ぢや。かういふ世のなかになつた以上、烏帽子折でも、魚賣でも働き次第、かせぎ次第。誰に遠慮がいるものぞ。
長六　そんな理窟はさて措いて、同商賣が一人でも多くなれば、見す／＼こつちの損になる。
勘八　女に領分をあらされては、商賣の邪魔になるほどに、その烏帽子折の商賣を今日かぎりに止めてくれ。どうぢやな。
おそよ　お氣の毒ぢやが、その返事はむづかしい。
長六　むづかしいとは不承知か。
おそよ　止めうと止めまいとわたしの心ひとつ、お前方の指圖は受けまい。
長六　ではどうでも……。
二人　不承知か。（詰め寄る）
おそよ　（あざ笑ふ）そりや云はいでも知れたことぢや。
長六　よい、よい。もうかうなつたら腕づくぢや。
勘八　以後の懲しめに痛めてくるゝぞ
（ふたりはおそよの腕を捉へる。）
おそよ　お前方は男のやうにもない。ひとりならず、二人がかりで、かよわい女を手籠めにするのか。
長六　男の商賣の邪魔するからは、女とて容赦はならぬ。
勘八　男女の差別はない。同商賣は忌敵ぢや。
おそよ　えゝ、無體なことを……。
（おそよは振放して行かうとするを、長六と勘八はひき戻して打据ゑようとする。おそよは逃げまはりながら、そこらに有合ふ木の片や土塊などを投げつける。この爭ひのうちに、下の方より僧覺善、二十五六歲、廣袖にて笠をかぶり、杖を持ちて出で、三人のあひだへ割つて入る。）
覺善　これ、これ。待たつしやれ。女子を捉へてどうしたものぢや。
長六　このごろは兎かくに女が出しやばつて、男の仕事の邪魔をするばかりか。
勘八　高慢な面をして理窟をいふので、懲してやらうと思ひました。
覺善　（うなづく）それは判つた。わかりました。實はさつきからこゝへ來かゝつて、めい／＼の云分を聞きました。どちらにも一通りの理窟があるだけに、誰がよいやら惡いやら、わしにも早速の捌きは出來ぬが、とにもかくにも眼の前で、かうして爭うてゐるものを、唯おめおめと見物してはゐられぬ。今日のところはわしに免じて、このまゝ穩かに別れてくだされ。
おそよ　わたしは元より賣られた喧嘩、相手に云分さへご

ざらねば……。

長六　その云分は……。

覺善　（進る）いや、あるにもせよ、無いにもせよ。兎にも角にも今日のところは。

勘八　（長六と顔を見あはせる）こつちに云分は澤山あれど、御出家が折角のお扱ひぢや。

長六　けふはこのまゝで免して遣らうか。

おそよ　免して貰ふ科はないに……。

覺善　はて、そこがおたがひの堪忍ぢや。

長六　（荷をかつぐ）では、御出家樣。

覺善　おわかれ申す。

勘八　これ、女。けふは堪忍して遣るが、あすも強情に商賣に出るが最期、見あたり次第に摑みにじつて、筋骨をひしぐから覺悟せい。

長六　そのときに泣いても喚いてももう遲いぞ。えゝ、小面の憎い女めぢや。

（二人は荷をかつぎて上の方に去る。）

おそよ　何のおのれ等に云ひ籠められてゐようぞ。こつちにも云分は數々ある。

（おそよは二人のあとを追はんとするを、覺善は遮る。葛籠のうしろより黑田源左衞門、小袴、一本指、浪人のすがたにて出で、おなじくおそよを遮る。）

源左　はて。おそよ女も相變らず氣の强いことぢや。喧嘩の相手はもう行つてしまうた。一の谷の熊谷のやうに、呼びかへして勝負するにも及ぶまい。もう堪忍せい。はゝゝゝゝ。

（おそよはやう／＼に靜まりて、みだれたる衣紋など繕ふ。）

覺善　（笠を脱る）おゝ、源左衞門どのではござらぬか。

源左　おゝ、覺善どのか。これは久しい。して、都へはいつ戻られた。

覺善　たつた今、立戻りました。

（二人はそこらに散つてゐる柿や石に腰をかける。）

おそよ　御出家さまは前方から源左衞門樣を御存じでござりますか。

覺善　知つてゐる段か。わしはこの寺にゐたものぢや。源左衞門殿も聞いてくだされ。こなたの御主人の細川殿と山名殿との確執から、幾年も引きつゞく大いくさに、花のみやこも修羅の巷で、神も佛もあらばこそ、われ等が住んでゐた此寺も、いくさの火に燒かれて斯くの始末ぢや。

源左　こなたがこゝを立退かれたは、たしか四年前ぢやと覺えてゐるが、いくさはそれからが絕頂でござつたよ。今あらためて云ふまでもなけれど、わが主人の細川勝元、

又こつ相手方の山名宗全、これが都の東西に陣を張ると、近國諸國の大小名がおもひ／＼に黨を組んで、細川に附くもあり、山名に味方するもあり、軍のはじまりは應仁元年、その三年目に年號があらたまつて、今年は文明五年。かぞふれば足かけ七年の間、敵も味方も根かぎり精かぎり、よくもよくも戰うたものぢやと、われながら呆るゝばかりでござるよ。その長い怖ろしい軍のあひだに、あたら命を捨てたものは幾千と云はうか、幾萬と申さうか。

おそよ　それも戰場に出てゐる侍衆ばかりでなく、商人職人百姓のうちにも無理無體に人夫に狩り出されて、ゆくへの知れぬものもあり。みやこは勿論、近郷近在でも、馬の蹄にふみ殺された者、氣が狂うて身をなげた者、飢死したもの、燒死んだもの、かぞへても數へ盡されますまい。

源左　論より證據ぢや。あれを見られい。

（源左衛門は先にたちて鐘撞堂の石段をあがる。覺善もつゞいて登る。）

源左　（正面より下の方を指さす）こなたがこゝを立退かれたときには、京の町々もまだこれほどに荒れてはゐまい。上京、下京の神社佛閣、公卿町、武家屋敷、町家まで、わづかに殘るは三分の一で、大方は一面の燒野原。こゝらに住み馴れてゐる我々ですらも、西やら東やら方角が立たぬくらゐぢや。

覺善　おそろしいことでござる喃。（珠數を爪繰る）手前もこれへ來る途すがら、案のほかに荒れまさつたる都のさまを見聞きして、あまりの淺ましさに落涙いたした。

（二人は鐘撞堂の柱に縋りてあたりを見おろしてゐる。おそよは石段の下より呼ぶ。）

おそよ　源左衛門様。

源左　なんぢや。

おそよ　源八郎様はお宿でござりますか。

源左　（微笑む）おゝ、弟は家にゐる。お前がいつも來る時刻ぢやで、爐に柴をくべて待つてゐるようぞ。

おそよ　（恥しげに）では、これからおたづね申しまする。御出家様、御免くださりませ。

（覺善は默禮す。おそよは荷をかつぎて、上の方の奥に入る。）

源左　（石段を降りながら）して、師の御坊は如何なされた。まだ御健かでござるかな。

覺善　（おなじく石段を降りながら）御存じないは御道理。四年前に寺を燒かれ、師の御坊のおん供して都を立退き、北國を遍歴するうちに、老の病を防ぎがたく、師の御坊には越前の奥の山家にて御入寂。

源左　おゝ（石段をすべり降りる）師の御坊にはお果てなされたか。樹下石上を宿とするが、叡の習ひとは申したれど、みやこに遠き田舎にて御入寂とはお傷はしや。（合掌する）さりながら生死の定めは是非もござらぬ。師の御坊ばかりでなく、源左衛門が主人とたのむ細川殿も今年の五月、疔疽といふ病にてこの世を去られた。

（覚善は石段に腰をかけ、源左衛門はありあふ石に腰をおろす。）

覚善　それは他國にて聞き申した。一方の敵たる山名殿は、すぎし三月に世を去られ、つゞいて五月には細川殿が不思議の病にて失せたまふ。東西の兩大將、殆ど時をおなじうして仆られたからは、應仁以來の大戰もはじめて鎭まり、世は再び太平のむかしに復りしことゝ、よろこび勇んで立歸れば……。いや、なんの、なんの。（嘆息する）

源左　兩大將が一度に仆れて、軍は一先づ終りを告げたれど、こゝや彼處でその殘黨の小ぜり合はまだ絶えず。かてゝ加へて飢饉はつゞく、疫病は流行る、[illegible]ひは[illegible]れる。それに連れて、盗人や物もらひや乞食は殖える。浅ましいとも、おそろしいとも、酷たらしいとも、いやもう、この世の中はさんざんでござる。手前も黒田源左衛門、侍としては然る者と知られてゐたれど、この世からなる地獄のありさま、戦ひと云ふものゝ怖ろしさが身にしみて、彼の薬師寺が謀叛たらねど、捨つべきものは弓矢なりけりと、思ひ切つたる折も折、主人細川殿は世を去つて、今は仕ふる君もなければ、朋輩の止むるをふり切つて、その日かぎりに武士を捨て……。

覚善　むゝ。武士を捨て……。では、浪人の身となられたか。

源左　思ひ切つて弓矢をすて申したわ。（起ち上りて堂のうしろを指さす）申すまでもなく、この寺はわれわれの菩提所、黒田家代々の墓もあれにござれば、這箇つて先祖の墓守。もう一つには鐘撞役。

（覚善も起つて、今更のやうに鐘撞堂を見あげる。）

覚善　本堂經藏はいふに及ばず、庫裏までことごとく焼け落ちたれど、鐘撞堂ばかりは不思議に燃え残りしは、みだれたる世にも時をたがへず、時きに迷ふ人々の上に、法のひゞきを傳へよといふ、尊き御佛の思召か。

源左　手前も左様に存じたれば、この兩腕に一身の力をこめて、衆生濟度の法のひゞきを世に傳ふるが日々の勤めと心得、一度も怠つたことはござらぬ。

（覚善は感ずるゝごとくにどうと坐し、土に兩手をつく。）

覚善　かたじけなし、源左衛門殿、われ等修行の淺ければ、闘諍の巷をさけて他國に奔り、衆生濟度のつとめを怠り

しは、御仏の御ためも忘れやられて、未来のほども怖ろしい。幸ひにおん身のごとき御仁のあらはれて、一旦滅えたる鐘のひゞきを、再びこの世に伝へたまふに、ありがたし忝なしと思ふにつけても、手前いよ〱面目がござらぬ。恐れ入つてござる。あやまつてござる。

源左　いや、いや、手前は凡夫(ぼんぷ)ぢや。経文の読方も知らねば、法を説く術も存ぜぬ。たゞ怠らずにこの鐘を撞くだけのことぢやが、年こそ若けれ、こなたは天晴れの善智識と云ふこと、手前かねて存じてゐる。人を救ふは出家の責ぢや。殊にこなた御出家の身の中に、すさみ果てたる人の心を開らき方に導くが、世の有様ではあるまいか。恐れ入つてゐるには及ばぬ、あやまつてゐる時節でない。御仏たちが奮ひ起つて、世をすくふべき時はこの時、骨が粉微塵に砕くるまでも、衆生のために尽されい。

覺善　（感涙に泣きむせぶ）はあ、それは仰せまでもござらぬ、こゝへまゐる途々も、語るならぬ世のありさまを見て、手前もかたく決心いたした。

源左　たとひ鐘は鎮まつても、世のなかは鎮まらぬ。今が大事の時でござるぞ。

（上の方の奥より黒田源八郎、右の足を傷つけたる跛(びつこ)足の儘、やはり浪人の姿にて杖にすがりて出づ。）

源八郎　覺善どの。お久しうござつた。

覺善　おゝ、源八郎どのか。（云ひつゝ源八郎の足に眼をつける）どうやら足がご不自由な。

源八郎　（さびしく笑ふ）御覧の通りの不具者(かたはもの)でござる、（そこらの石に腰をかける）去年のたゝかひに足を傷け、行歩(ぎやうぶ)も不自由の身と相成り申した。

覺善　それはお気の毒な、御不自由お察し申す。

源左　起居(たちゐ)が自由にならぬせゐか、弟めは兎角にこのごろは苛々して、困つてなりませぬ。

源八郎　（あざ笑ふ）源八郎が苛々するは身の不自由のためばかりではござらぬ。この頃の世のありさま、あまりに面白うないからでござるわ。応仁騒動(さうどう)ようく聞かれい。細川山名の両大将があとや先に世を去つて、応仁以来の大乱も一旦治まりしには似たれども、これはまことの太平でござらうか。町は焼かれ、商ひは廃れ、米や麦の値は貴くして、萬民は飢に苦しみ、寒さに凍ゆる。いくさを修羅道とたとふるならば、これは餓鬼道、畜生道ぢや。

覺善　修羅道、畜生道にいふもおろか、魔道に堕ちたる者すらも、御仏の救にまかせて救はれませうぞ。

源八郎　（いよ〱冷笑(あざわら)ふ）はゝ、救はるゝならば救つておみやれ。今とむかしとは、世もちがへば人の心も違ひまするぞ。遠い未来よりも現世(げんぜ)が大事ぢや。念仏題目の六字七字、朝から晩まで咽の張裂けるほどに喚(わめ)いたとて、

一本の薪、一粒の米もおのづと湧き出してはまゐるまいぞ。

源左　(冷めたやうに)　源八郎。又してもそれを云ふか。そちのやうな暴びた心を持つものが多ければこそ、戰ひは鎭まつても世は鎭まらぬ。人の心もだん／＼に險しくなるばかりぢや。わしは武士の果、佛の教をなんにも知らねば、そなたに說教するのではないが、武士にも町人にも人の道といふものがある。その一筋の道を踏みたがへぬやうに、誰も彼もがおとなしく心がけてゐたら、それで自然に世は治まる。

源八郎　(かしらを振る)　兄上の御講釋はいつもそれぢやが、そんな生温い理窟はわれ／＼には呑込まれぬ。それがしの見るところでは、所詮この儘ではまことの太平が來ようとは思はれぬ。生きながら餓鬼道に墮ちたるものは、人間にして鬼の心となる。生きながら畜生道に墮ちたるものは、人間にして獸の牙をとぐ。この世はいよいよ亂るゝばかりぢや。

覺善　おそろしいことを申さるゝ。お身はこの世を呪うてござるのか。

源八郎　御坊にはわかるまい。はゝゝゝゝ。

(上の方より市兵衞は下男七藏を連れて出づ。)

市兵衞　おゝ、源左衞門どの。これにござつたか。

源左　市兵衞殿も、はや年末と相成つて、なにかとお忙しいことでござらうな。

市兵衞　いや、もう、眼のまはるほどの忙しさ、お察しくだされ。就てはこれからこなたのお宿を鳥渡おたづね申さうと存じてをりました。

源左　(苦笑ひする)　御催促かな。

市兵衞　勿論その事ぢや。今もこなたの口から、もはや年末と相成つたと云はれたが、その年末といふことを御存じなら、なう、源左衞門どの。去年の暮から丁度一年の貸金が、元利積つて十五兩と二貫文、この暮には間違ひなく御返濟をたのみますぞ。

源左　去年の冬の戰ひに、弟源八郎が足を傷つけ、その金創の治療のために、たしかに借用したる金十兩、それに利分がたゝまつて十五兩と二貫文とやら。もとより返濟を怠る心ではござらぬが、なにを申すも浪人の身の上なれば……。

市兵衞　いや、その浪人ゆゑに此方ではなほ／＼御催促をせねばならぬ。きつと間違ひはござるまいな。

源八郎　(むつとして)　市兵衞どの、又してもおなじ催促か。兄は浪人、それがしは不具者。いかに焦つても狂うても、十五兩と二貫文、差當つては工面も才覺もなり申さぬ。源八郎兄弟はこの春頃のたゝかひに討死して、世

に亡いものとお諦めくだされい。

市兵衞　さりとは無法なことを云はるゝぞ。まことに討死したものならば兎も角も、兄弟が現在鼻をそろへて、わしの眼の前にござるではないか。むゝ。では、こなた。そのやうな不法を云ひ募つて、十五兩と二貫文をふみ倒す下心ぢやな。

源八郎　（怒鳴る）茶道具屋市兵衞が不義の財、十兩や二十兩ふみ倒しても仔細はないのぢや。（持つたる杖を地に投げ付ける）

源左　はて、騒ぐな、さわぐな。市兵衞どの。大晦日にはまだ五六日のあひだがある。もう二三日待つてくだされ。

市兵衞　さあ。（考へてゐる）

七藏　（市兵衞の袂をひく）あゝしておとなしく頼んで居りますれば、もう二三日御猶豫を……。どうでござりますな。

市兵衞　むゝ。では、源左衞門どの。間違ひはござるまいな。

源左　承知いたした。

七藏　さあ、まゐりませう。日がくれると、途中が不用心でござりませうぞ。

市兵衞　ほんに此頃は、京のまん中でも油斷はならぬ。どんな斬取り強盗が出ようも知れまい。では、おわかれ申しますぞ。

（源左衞門は挨拶する。源八郎は素知らぬ顔をしてゐる。市兵衞と七藏は早々に向うへゆく。雪ちら〳〵と降り來る。上の方の奥よりおそよ出づ。）

おそよ　もし、雪がちら〳〵と降つて來ました。

（みな〳〵空を仰ぐ。）

覺善　おゝ、降つて來た。

源左　けふは朝から底びえがすると思うてゐたら、たうとう今夜の雪になつたか。都には住む家のないものも澤山ある。新しく出來た家とても、大方は木小屋同様の假普請ぢや。

おそよ　この上に雪が積つたら、大勢の難儀が思ひやられまする。

源八郎　飢死にばかりか凍死も、澤山出來ることであらうよ。おゝ、降るわ、降るわ。空までが無慈悲ぢやなう。さう云ふ私もさつきから冷えたせゐか、足の古疵が痛んで來た。

おそよ　おゝ。それは悪うござんすな。

（おそよは落ちたる杖を拾ひて源八郎にわたせば、源八郎は杖りすがりて起ち上る。）

おそよ　わたしが手を曳いてあげますほどに、ちつと待つてゐてくださりませ。

（おそよは梅の木の下にゆきて、花の咲きみだれたる一枝を折つて來る。）

源八郎　梅を手折つて來てなんとする。

おそよ　御佛前の花筒に生けてあるお花が、もう大方は散つてしまひました。

源左　それで生け換へてくるゝと云ふのか。ようも氣がついてくれた。かたじけない。散らさぬやうに持つて行つてくりやれ。

おそよ　あい、あい。

源八郎　では、覺善御坊、それがしはお先へまゐりまするぞ。

覺善　[illegible]を大切になされい。

源八郎　御免下され。

（源八郎はおそよに扶けられて奥に入る。雪ますます降る。）

源左　おゝ、降らいでものことに、雪はいよいよ烈しくなつて來た。日はくれかゝる、雪は降る。御苦しくとも今夜は手前の家へ來て、一夜の寒さを凌がれい。

覺善　それは千萬かたじけない。では、御厄介に相成りませうか。

源左　なんの設けもござらねど、焚火のそばでこの頃の都の話でもいたさうか。

覺善　このごろの都の話……。なにかの心得のために、それを委しくうけたまはりたい。

源左　さあ、おいでなされ。

（源左衛門に先に立ちて行かうとする時、奥よりおそよ再び出づ。）

おそよ　源左衛門殿、もう鐘を撞く刻限でござりまするぞ。

源左　もう暮六つか。話にまぎれて忘れてゐた。どれ、どれ。

（源左衛門は鐘撞堂の石段をあがりて、鐘を撞く。おそよは鐘撞堂を見あげる。覺善は合掌する。鐘の聲。雪ふる。）

——幕——

下の巻

黒田源左衛門の家。家のなかの大部分は土間にて、正面に荒むしろを垂れたる出入口あり。家は假小屋のこころにて、出入口の左右には壁なく、すべて板羽目と知るべし。上のかたには棚を吊りて佛像を安置し、燈明をそなへ、竹の花筒に梅の枝をさしたり。この板羽目につゞいて、上のかたには前づらに張り出したる屋體ありて、その正面と上のかたには矢はり荒莚をたれ、下の方だけは破れ障子を閉めたり。正面の出

入口の下のかたには蓑と笠とをかけ、前の方に折曲げて竹窓あり。窓のそとは往來にて、燒け頽れたる京の町に雪一面にふり積れるが見ゆ。家のなかの土間には爐を設けて、燒木杭を焚く。爐のそばには古き土瓶などあり。

（前の幕より三日目の午後。黑田源八郞は切株に腰をかけて、爐の火に手をかざしてゐる。表には雪少しくふる。向ふよりおそよは竹笠をかぶり、烏帽子折の荷をかつがずに出で、竹窓より內をうかゞひて、正面の出入口より入り來る。）

おそよ　ひどい雪でござりましたな。

源八郞　おそよか。をとゝひの夕暮から二日と三晚、よくも降りつゞけたことであつたよ。今日もまだすつかりとは歇みさうもないなう。

おそよ　（着物の雪を拂ひて爐のまへに來る）まさかにこんなに大雪にならうとは思ひませなんだ。今もこゝへ來る途中で、路傍に凍え死んでゐる男が二人、女がひとり。廣い都の果から果までさがして步いたら、幾人倒れてゐることやら。

源八郞　さうであらう。思へば慘めな酷たらしいことぢや。これも時世と諦めてばかりはゐられまい。

おそよ　して、おまへ樣の痛み所は、この寒さでどうでござります。心にかゝつてはゐながらも、なにをいふにもこの大雪で、表へは一足もふみ出されず、小歇みになるのを待兼ねて、御見舞ながら出て來ました。

源八郞　見舞うてくれるは嬉しいが、この雪の中をうかうか出あるいて風邪でも引いたら猶大事ぢや。わしの古疵には寒さが餘ほど祟るとみえて、きのふから今日にかけて痛みが一入强いやうぢや。（足をなでる）

おそよ　（悼ましげに）さぞ御難儀でござりませうな。して、阿兄樣は……。奧にお寢つてゞござりますか。

源八郞　いや、いや、わしの古疵に惱むのを見かねて、三條のあたりまで金創の藥を求めに行かれた。

おそよ　もう一足早かつたら、わたしがそのお使にまゐらうものを、殘念なことでござりました。そのほかに何か御用はござりませぬかえ。

源八郞　差當つては別に賴むやうなこともない。まあ、兄の戾るまで話して行きやれ。

おそよ　では、爐の火でももう少し焚付けませうか。

（おそよは土間の隅にたばねてある燒木杭をかゝへ出して爐の火にくべる。表の雪しばらく歇む。向ふより黑田源左衛門は蓑笠にて出で、すぐに正面の筵をかゝげて入る。）

源左　おそよ女、來てゐたか。

おそよ　お歸りなされませ。（源左衛門の蓑をぬがせなどする）

源八郎　兄上、御苦勞でござりました。

源左　（ふところより藥を出す）三條の藥屋には金創の藥が賣切れたと云ふので、五條の方まではつて來た。

源八郎　それはいよ〳〵恐れ入りました。（藥をうけ取る）さぞお寒い、ことでござりましたらう。

おそよ　お藥はわたしが塗つて進ぜませう。

（おそよは源八郎の右の足にむすび付けたる白布を解きて、藥を塗る。）

源左　どうぢや。まだ痛むか。

源八郎　骨にしみるやうにずき〳〵痛みまする。

源左　困るなう。（眉をよせる）一旦は本復したやうに見えても、疵はまだほんたうに癒えぬのかも知れぬ。よく氣をつけねばなるまいぞ。

源八郎　はあ。

おそよ　このやうに寒くては誰のからだにも障りませう。ちつとも早く晴れてほしいものでござりますな。

源左　雪に豐年の貢などといふは太平の世のことで、この亂に雪は禁物ぢや。併しよい鹽梅に歇んだらしい。

（源左衛門は起つて、窓より表をみる。下の方より前栽へ盲人は小娘に手をひかれて出づ。盲人は雪にすべりて轉ぶを小娘は介抱す。源左衛門はあわてゝ表へ走り出で、娘に代りて盲人を抱へ起し、身體の雪を拂つて遣りなどして介抱する。）

盲人　はい、はい。どなたかは存じませぬが、ありがたうござりまする。

源左　別に怪我はなかつたか。

盲人　どこも怪我はござりませぬ。

源左　それは仕合せであつた。（腰にさげたる革巾着より、錢五六枚を出す）これは少しぢやが、餅でも買うて親父と二人で食へ。（錢をわたせば、娘は押頂く〳〵）

小娘　これ、親父さま。こんなに下されました。（盲人の手にわたす）

盲人　（おどろきて喜ぶ）これはありがたうござりまする。おかげさまで二人が助かりまする。これお禮を申せ。

小娘　ありがたうございます。

（二人は雪に手をつく。）

源左　（あはれむやうに）氣をつけて行きやれ。

盲人　はい、はい。

源左　あゝ、これ、待ちやれ。一旦は小降りになつたが、この空のけしきではまた何時降り出して來ようも知れぬ。（窓の外より呼ぶ）これ、おそよ。

おそよ　あい、あい。（起つて來る）

源左　わしの蓑を取つてくれ。

おそよ　又どこぞへお出でなされますか。

源左　いや、さうでない。兎もかくも取つてくりやれ。

おそよ　あい、あい。

（おそよは掛けたる蓑をはづして、表へ持つて出づ。源左衞門はその蓑をうけ取りて、盲人に着せてやる。）

源左　さあ、これを着てゐれば何時降つて來てもかまはぬ。また幾らかの寒さ凌ぎにもなる。（小娘に）もし雪が降つて來たらば、祖父の蓑の下にかくれてゆけ。

盲人　かさね／＼の御深切、お禮の申上樣もござりませぬ。では、頂戴してまゐりまする。

おそよ　滑らぬやうにおいでなされ。

盲人　はい、はい。どなたも有難うござりまする。

（盲人は小娘に手をひかれて、向ふへあゆみ去る。）

おそよ　可哀さうでござりますな。あの人の息子は去年の軍のときに、流れ矢にあたつて命を取られ、それから後は寄邊無しも同樣。

源左　あはれな者の多い世ぢや。

（ふたりは嘆息しながら盲人等のゆくへを見送つて立つ。向ふより山崎香作、廿一二歲の武士。直垂、籠手臑當にて蓑をつけ、竹笠を持ちて出づ。）

香作　源左衞門どの。

源左　おゝ、香作か。

香作　當年の寒さは格別のやうでござるが、御障りはござらぬか。

源左　幸ひに無事ぢや。喜んでくれ。（おそよに）源八郎に香作が來たと申せ。

おそよ　かしこまりました。（引返して内に入る）

源左　さあ、さあ、來やれ。

（源左衞門は先に立ち、香作も蓑をぬぎすてゝ内に入る。）

源八郎　おゝ、香作。寒いなう。

香作　よく降つた。寒い、寒い。（爐のまへに來る）源八郎。この寒さで痛み所はどうぢやな。

源八郎　むかしの朋輩も大勢あるなかで、いつも深切に見舞うてくるゝはお身ばかりぢや。今も云うてゐたところぢやが、このやうに寒いと矢ばり痛い。心ばかりは逸つても、もう人並の働きは出來ぬわ。

（この間に、おそよは奥より盆にのせたる茶碗を持ち來りて、香作に湯をついで出す。）

香作　（湯を飲みながら）そのやうに弱るな。まだ／＼世のなかが治まらうとは思へぬ。近いうちに必ず二度の軍があらうぞ。

源八郎　むゝ、わしもさう思うてゐる。これで世が鎮まら

う筈がないわ。
番作　（うなづく）さうぢや、さうぢや。その時にはお身も鎗を杖にして鎌倉に馳せ參じて、戰場に死花を咲かせい。わしもその用心にこのごろ新しい刀を買うた。刀の銘は來信國、分不相應の高値の品とは思うたが、武士に取つては大事の寶ぢや。その價は年末までと云ひのばして、兎もかくも我手に引取つた。これ、見ておくりやれ。
（番作は誇るやうに腰にしたる太刀をぬいて見せる。）
源八郎　鐔といひ、匂ひと云ひ、なにさま天晴れの業ものらしい。よう見せてくれ。
（源八郎は番作の太刀をわが手に把りて惚々とながめてゐる。）
番作　どうぢや。それならば兜の眞向もたまるまいな。
源八郎　（打笑む）むゝ、眞向から見事に梨割ぢや。（太刀を振つてみる）
（源左衛門は無言にてこの問答を聴きゐたるが、衝と寄りて源八郎の手よりその太刀を奪ひ取る。）
源左　番作。お主は悪い。このやうなものを弟に見せてくるゝな。
番作　悪うござるか。
源左　悪い、悪い。左なきだに毎日苛々して、とかくに魂のおちつかぬ源八郎、こんなものを見せては毒になる。早う収めてくれ。
（太刀を戻されて、番作は澁々ながら鞘に収める。）
番作　源八郎、けふも兄貴に叱られた。首尾が悪いからもう歸るぞ。
源左　腕白者が寄りあつまると碌な相談はせぬものぢや。早う歸れ、歸れ。
源八郎　（笑ふ）また追ひ出されるのか。
番作　（笑ふ）わしは刀のほかに槍も買うた。近いうちに又持つて來て見せるわ。
源左　そんなものを擔いで來たら、内へは入れぬぞ。
番作　そんなことしたら、これが承知せぬぞ。（太刀の柄を叩く）はゝゝゝゝ。
（番作は蓑をきて、下の方に立去る。）
源左　あれも年が若いだけに、とかくに暴々しい奴ぢや。
おそよ　見るから勇さうなお侍でござりまするな。
源左　（苦々しげに）勇いも勇いが、氣も暴い。困つたものぢや。
（下の方より覺善は先に立ち、町人甚次郎、佐助の二人に雪だらけになりたる公卿行光を舁かせて出づ。）
覺善　源左衛門殿。雪に凍えたお人がござる。火にあたゝめて御介抱くだされ。
（源左衛門とおそよは起ち上る、覺善等は行光を内に

かさ入れて、爐のまへに横へる。）

おそよ　これはこの間からそこらを狂うてあるくお公卿様ぢや。

源左　いかにも行光の卿ぢや。雪に凍えて倒れてござつたのか。

覺善　路ばたに正體もなく倒れてござつた。あのまゝに捨てゝ置いたら凍え死は知れてゐるので、通りあはせた二人の衆の手をかりて、兎もかくもこゝまで連れてまゐつた。

源左　（行光をかゝへ起す）身の內にはまだ溫もりがござれば、蘇生いたすに相違あるまい。おそよ、火を强う焚いてくりやれ。

おそよ　あい、あい。

（おそよは土間の隅より燒木杭を持ち來りて、再び爐にくべる。火は燃えあがる。）

源八郞　この公卿衆も正月のたゝかひに屋敷を燒かれ、一家一門ちり〴〵と相成つて、白川のあたりに逼塞してゐられたが、そこにも安らかに住みかねて、物狂はしき今のありさま。おもへば悼はしい身の果ぢや。兄上、無事に生くるでござらうか。

源左　生くる、屹と生くる。おそよ、湯を汲んでくれ。

おそよ　あい、あい。

（おそよは茶碗に湯をついで渡せば、源左衞門は行光の口にそゝぎ入れて呼び活ける。）

源左　これ、心をたしかに持たれい。行光の卿、行光どの。

覺善　行光どの。

（行光は微に眼をひらく。）

おそよ　（のぞく）おゝ、お氣がついたやうでござります。

源左　如何でござる。行光の卿、お心は確でござるか。

行光　（左右を見まはす）おゝ、こゝは何處ぢや。なんで私をこんなところへ連れて來たのぢや。

覺善　お身は雪のなかに倒れてござつたのぢや。

行光　なんの。嘘ぢや。嘘ぢや。わしは淸い美しい眞白な、玉のやうな雪のうへに快く寢てゐるところを、誰やらがこんな狹い穢苦しい、うす暗い、獄屋のやうなところへ連れて來たのぢや。こんなところには一刻もゐられぬ。わしは歸る。わしは歸る。

（行光はよろめきながら起ち上るを、みな〳〵は支へる。）

源左　外へ出てどうなさる。先づお鎭まりなされませ。

行光　忌ぢや、忌ぢや。（身を藻搔く）

源左　（抱きすくめる）忌ぢやと仰せられても、迂濶には出されませぬ。しばらくあれにてお休みなされませ。

行光　えゝ、なんでわしを虜にするのぢや。放せ、放しや。

源左　いえ、なりませぬ。

（源左衛門は無理に行光をかゝへ、覺善とおそよも手傳ひて、忌がる行光を上の方の障子屋體の内へつれ込む。町人等は立つて眺めてゐる。）

源左　（障子の内にて）狂うては惡い。

覺善　（やはり障子の内にて）お鎭まりなされ。

おそよ　（障子の内にて）ぢつとしてお休みなされませ。

（やがて源左衛門を先に、覺善は障子屋體より出づ。）

源左　（上の方を見かへりて）冷えぬやうに私と母の紙衾をきせてあげい。

おそよ　（障子の内にて）あい、あい。

覺善　（町人に）どなたも御苦勞でござつた。先づ焚火にでも温まつて行かれい。

源左　さあ、遠慮せずにこれへ寄られい。

町人二人　はい、はい。どうもお寒いことでござります。

（與次郎と佐助も爐のまへに來る。）

與次郎　よい塩梅に雪もやんだやうでござりますな。

佐助　年のくれの霜へ日になりまして、二日も三日も降りつゞかれては、わたくし共も大難儀でござります。

源八郎　難儀と云うても、お身たちは兎もかくも一軒の店を持つて、餓ゑず凍えずに生きて行かるゝは大きな仕合せといふものぢや。この大雪で餓死もあらう、凍死もあらう。お身達はそのふところに持つてゐる金を捨いて、見あたり次第に施してあるいては何うぢやな。

與次郎　とんでもないことを……。わたくしどもも施して貰ひたい方でござります。長い軍もどうやら斯うやら鎭まつて、やれ安心と思つた甲斐もなく、饑饉はつゞく、疫病は流行る、諸式はます〳〵あがるばかりで、迚もこれでは立行かれませぬ。

佐助　いくさの騷ぎさへ鎭まつたら、乾と昔の世の中になることゝ、誰もかれも樂しみに待つて居りましたが、それもみんな空頼みで、世のなかはます〳〵惡くなるばかり。

與次郎　弱り目に祟り目とやらで、貧乏人にこの大雪、この冬の寒さは取分けて、骨身にしみるやうでござります。

佐助　こゝらで何うしても徳政の御沙汰を願はねばならぬと、京の町々の者が寄りあつまつて、この間中から評議してをりまするが、それもどうなるやら判りませぬ。

源八郎　して、その徳政とは何ういふことぢやな。

與次郎　わたくし共も詳しいことは知りませぬが、なんでも一切の貸借を帳消しにするのだとか聞きました。

源八郎　（乘出す）一切の貸借を帳消しにする。それが所謂徳政と申すのか。

覺善　手前も德政の名はかねて聞いてゐたが、どう云ふことやら能くは知らぬ。(源左衛門に)今この衆が云はるゝ通り、一切の貸借を帳消しにする。それが德政の御趣意でござるかな。

源左　さうでござる。覺善どのも源八郎もまだ此世に生まれぬ前のことで、委しいことは知られまい。今から三十年ほどの前であつた。わしが丁度元服した年の冬に……。おゝ、やはりこんなに大雪が降つて、寒い寒い年のくれに、その德政といふものが觸れ出されたことがある。

皆々　おゝ。(すり寄つて聴く)

源左　つまりは諸人の困窮を憫れまれて將軍家よりふれ出さるゝ御仁政で、その德政の御沙汰があつたが最後。公卿といはず、武家と云はず、町人といはず、百姓といはず、一切の貸も借もすべて帳消しに相成るのぢや。勿論、その時が初てではない、わしの生れぬ前にも幾たびか、その德政が行はれたと聞いてゐる。

與次郎　して、その德政の出るときには、前以て御觸渡しでもあるのでござりますか。

源左　いや、前以て知れてゐたら、貸方でもすぐに催促してあるく。そんなことではまことの德政にならぬと云ふので、いつでも不意に觸れ出される。その合圖には寺々の鐘を撞く。

覺善　むゝ。寺々の鐘をつく。

源左　その鐘の鳴るを合圖に、まへにも云ふ通り、一切の貸借はすべて帳消しとなるのが定めぢや。

（源八郎はぢつと聴いてゐる。）

覺善　(考へる)なにさま御仁政には相違あるまいが。それでは借方のみの仕合せで、貸方に取つては大きな損耗、すこしく片手落の御沙汰でござるな。

源八郎　(打消すやうに)いや、片手落とは申されまい。困窮のものどもを救ふといふ御趣意ならば、借方の仕合せを目安に置かるゝが當然ではござるまいか。

覺善　さうかも知れぬが……。(やはり考へてゐる)どうも正しい御政道ではないやうに思はるゝ。

源八郎　いや、それがまことに世を救ふ、正しい御政治といふものぢや。なう、兄上。

源左　(頭をふる)なんの、それが正しい御政治であらうぞ。御仁政とは申すものゝ、まことはよんどころなしの一時凌ぎで、そんな事ではほんたうに世は治まらぬ。むかしも今も世の中には、あはれな者、貧しいものが澤山ある。それを救ふは勿論よいことに相違ないが、救ふにも惡むにも又それぞれの法がある。いつの代にも借りた者を返すが人間の道ぢやに、その道を勝手にふみ破つて、借りたものは借德、貸したものは貸損、そんな無理無法

の逆さま事では、いかな、いかな。くどくも云ふ通り、人間には人間の守るべき道がある。その道を土臺にして築きあげた御政治でなければ、まことの御仁政とも德政とも申されまい。

覺善　手前も左樣にかんがへて居りまする。この世を治むるには……。

源八郎　(躁暴く)　え〻、措かれい、措かれい。兄上がいつもの御講釋、蟲を堪へて聽いてゐれば、入れ代つて御坊までがおなじやうに……。どんた有難い御說敎でも、今のわれらには馬の耳に念佛ぢや。

覺善　それを敎化するのがまた我等の務ぢや。先づ聞かれい。

源八郎　いや、聞かぬ、きかぬ。この上にいつまでもくどくどと云うてゐたら、兄上がさつきあの香作を追ひ出したやうに、それがしも御坊を追ひ出してくるゝぞ。え〻面倒な、出てゆかれい。え〻、出てゆかぬか。

(源八郎は燃えたる杭をとりて起ちあがる。與次郎佐助はおどろいて止める。源左衞門も起つて源八郎を叱る。この鬪着のうちに、向ふより茶道具屋市兵衞は茶壺の箱を抱へてあわたゞしく走り出で、すぐに內に駈け込む。)

市兵衞　これは御免くだされ。人に追はれて逃げ込んでまゐりました。

與次郎　おゝ、市兵衞どの。

佐助　息を切つてどうしたのでござる。

市兵衞　大晦日も眼のまへに支へてゐるので、雪のやんだを幸ひに、二三軒掛取りに出て來ると、途中でいつもの貧乏人どもに取卷かれ、うるさく絡み付くのを突き退けて、やう〳〵こゝまで逃げて來ました。

源八郎　(嘲るやうに)　いつまでもそんなことをしてゐたら、しまひには貧乏人どもに嬲り殺しにされうも知れぬぞ。

市兵衞　(負けぬ氣を粧ひて)　それが怖ろしうて、この世智辛い世のなかゞ渡られうか。いや、御兄弟。丁度こゝへ來合せたついでに、この間も念をおして置いた十五兩と二貫文、今日はとゞこほりなく受取りませうか。

源左　さあ、その金は……。

市兵衞　あれほど請合うて置きながら、今更四の五の云はれては、わしもまことに迷惑しますぞ。

(下の方より町人五郎藏走り出で、窓より內をのぞきて呼ぶ。)

五郎藏　これ、これ、與次郎どの、佐助どの。早う來い、來い。

與次郎　(起つ)　おゝ、五郎藏。なんぢや。

五郎藏　町の人たちが集まつて、これから德政を願ひに出ることにきまつた。
佐助　おゝ、德政をねがひに出るのか。
五郎藏　とても一通りでは行くまいから、みんなが一度に室町の御屋形へ押しかけて、強訴ぢや、強訴ぢや。ひとりでも味方は多いがよい。早う來てくれ　よいか。
（云ひすてゝ五郎藏は行きかゝるを、源八郎は窓の際まで出てよび戻す。）
源八郎　これ、これ、町人。強訴の群に武士もまじつてゐるか。
五郎藏　はい〳〵、お武家も大勢みえまする。
源八郎　さうか。早うゆけ。
五郎藏　御めん下さりませ。
（五郎藏は向ふへ走り去る。内の人は顏を見あはせる）
源八郎　さあ、いよ〳〵大事の時節になつたぞ。
與次郎　ほんにうか〳〵してはゐられませぬ。
佐助　わし等もその德政を待焦れてゐたのぢや。
（與次郎と佐助はあわてゝ出て行かうとするのを、源左衛門・覺善は遮る。）
源左　いや、いや、こなた衆は滅多に動いてはならぬ。強訴などとは以ての外ぢや。
與次郎　でも、このまゝにぢつとしては……。
源左　いや、ぢつとしてゐたが好い。先づおとなしく、おとなしく……。えゝ、靜まらぬか。
（無理に押戻されて、二人はよんどころなく戻る。）
覺善　こゝばかりを扼ひ止めても、他の大勢が立騒いでは、いよ〳〵大事にならうも知れまい。手前はこれより駈付けて、力のかぎり取鎭むるでござらう。
（覺善は急ぎて下の方に走り去る。）
市兵衛　はゝ、強訴などとは飛んでもないこと。その張本人は片端から引縛られて、河原の晒し首になるのは眼のあたりぢや。ついては源左衛門どの。こなたはふだんから物の道理のよく判つたお人ぢや。德政などといふ筋違ひのことを當てにせずに、借りたものは素直に返してくだされ。
源左　（思案して）承知いたした。源左衛門、唯今たしかに返済いたす。
市兵衛　むゝ。御返済くださるか。
源左　見らるゝ通りの浪人、金銀でお返し申すことは相成らぬが、十五兩と二貫文の形代に、なにとぞこれを御受取り下されい。
（源左衛門は腰にさしたる小刀をぬき取りて、市兵衛のまへに出す。）
市兵衛　では、この刀を金の代りに……。

源左　家重代の二字國俊、廿兩に足らぬ金の形代に、よも御不足はござるまい。

市兵衛　（少しぬいて見る）わし等は商賣ちがひで、槍や刀の目利きは出來ぬが、浪人こそすれ、こなたも武士ぢや。贋物をおしつけて私に損をさせるやうなこともござるまい。では、たしかにうけ取りました。

（源八郎は起ちあがりて市兵衛の腕をつかむ。）

源八郎　いや、それをむざとは渡すまい。兄上が承知なされても、この源八郎が不承知ぢや。多寡が十兩か廿兩の金の型に、家重代の寶を奪はれてならうか。その刀はこつちへ戻せ。

市兵衛　では、十五兩と二貫文、耳をそろへて戻してくださるか。

源八郎　えゝ、金などはどうでもよい。兎もかくも刀を戻せ。

市兵衛　いや、滅多には戻されませぬ。

（ふたりは爭ふを、源左衛門は制す。）

源左　源八郎。又しても喧嘩沙汰、鎮まらぬか。唯今も申した通り、借りたものは返すが天下の法、人間の道ぢや。金の形に道具をわたす、それに何の不思議があらうぞ。市兵衛どの。弟がなんと申さうとも仔細はござらぬ。重代の寶とは申しながら、世の太平をねがふ源左衛門に、槍刀は不用の品。たしかにこなたにお渡し申した。

市兵衛　はい、はい。わたしも確に御受取り申しました。さあ、兄御があゝ云はるゝのぢや。お放しなされ。

（振拂はれて、源八郎は忌々しげに手を放して元の座にかへる。）

與次郎　市兵衛どの。こなたは日ごろから武家屋敷へも出入りして、商賣の茶道具のほかに、刀の目利きも巧者ぢやと聞いてゐる。

佐助　源左衛門どのが家重代といふ二字國俊、十五兩と二貫文の形にとれば、定めてよい掘出し物でござらうな。

市兵衛　えへん、えへん。（眼で制す）なんの、わし等に刀の善惡などが判るものか。わしに間違ひなく眼利きの出來るは、商賣の茶道具ばかりぢや。これ、見さつしやれ。（持つたる茶道具を取出してみせる）この茶壺は唐渡りで、これから某御大名の屋敷へ納めにゆくのぢや。

（與次郎と佐助は首を伸ばして見る。）

源左　この頃は茶の湯がしきりに流行り出したとか承はつたれば、左樣な道具も高價でござらうな。

市兵衛　値引なしに金二百兩、これですぐに相談がきまりました。

源八郎　二百兩……。その土燒の壺一つが……。さりとは言語道斷の沙汰ぢや。（罵る）

市兵衛　不風流の眼から見たら、土燒の壺一つが二百兩とは、さだめて膽も潰されうが……。（茶壺を透してみる）云ふに云はれぬ味のあること、迚もこなた衆には判るまいよ。はゝゝゝゝゝゝゝゝ。

（この時、上の方の障子の內にて、行光出づ。おそよの聲。）

おそよ　あゝ、もし、起きては惡い。もう少し休んでおいでなされませ。

（障子を荒々しく引きあけて行光出づ。あとよりおそよも止めながら出づ。）

行光　これ、市兵衛。この間はようも私をだまして逃げ居つたな。

市兵衛　え。

行光　まあ、それはよい。わしは決して叱りはせぬ。今聞いてゐれば、そちは立派な茶壺を持つてゐるさうな。わしも茶道具は大好ぢや。見せてくりやれ。

市兵衛　いえ、何、それほどの物ではござりませぬ。

（市兵衛は茶壺を隱さうとするを、行光は衝と寄りてうばひ取る。）

市兵衛　あゝもし、そんなことをなされては……。（寄らうとする。）

行光　はて、騷ぐことはない。その代りには何ぞ褒美を遣はす。（あたりを見まはす。おゝ、よいものがある。（上の方の樹の前にゆき、竹筒より梅の枝を持ち來る）わが國の梅の花とは見つれども、大宮人は何と云ふらんと、阿部の宗任が詠んだはこれぢや。さあ、これを遣はす。取つて置きやれ。

市兵衛　はい、はい。（澁々うけ取る）

行光　（茶壺をながめる）ほゝう、なるほど唐渡りと云ふだけあつて、見惚るゝやうに美しいものぢや。なう、市兵衛。諸人がこのやうなものを玩ぶやうになつたのは、まことに天下太平のしるしぢや。めでたい、めでたい。

市兵衛　（よんどころなく）はい、おめでたいことでござりまする。

行光　そのめでたい物を打毀したら何うあらうな。

市兵衛　え。

（行光は持つたる茶壺を土間にうち付くれば、壺は微塵に碎ける。皆々もおどろく。市兵衛は色を失ふ。）

市兵衛　や、大切の茶壺を粉微塵に……。

行光　はゝゝゝゝ。

市兵衛　もしお前樣。（梅の枝をふり上げる）

行光　（他愛なく笑ひこける）こりやたまらぬ、堪へてくれ。はゝゝゝゝ。

おそよ　（市兵衛を支へる）もし、お前。そのやうな手暴いことをなされますな。寢せても祐れてもこなたはお公

卿樣ぢや。

市兵衞　なんの其公卿が……世に二つとない大切の寶を、むざ〳〵このやうに打碎くとは、呆れ果てた氣ちがひめ。この年の暮に二百兩の大損をさせられて、こつちが氣ちがひになりさうぢや。

（市兵衞は扇の捩にて行光を打たうとするを、おそよは又支へる。）

おそよ　はて、それもみんなお前が悪い。

市兵衞　なにが悪い。

おそよ　寒さに凍え、饑にせまつて、生きるの死ぬのと云ふ人が、そこにもこゝにもあるなかで、優長らしい茶道具の自慢話、それから降つて湧いた災難は、おまへの自業自得ではあるまいか。さあ、かう云はれたのがお腹が立つなら、このお公卿樣の名代に、わたしを打つとも踏むともしなされ。

市兵衞　えゝ、つべこべとしやべる女ぢや。邪魔せずと退け、退け。

源八郎　やあ、市兵衞。その女に指でもさしたら、源八郎が容赦せぬぞ。（刀に手をかける）

（源八郎の勢ひ烈しさに、市兵衞はすこしく躊躇ふ。）

源左　いづれの肩を持つでもなけれど、もう斯うなつたら是非がない。なにごとも市兵衞殿の不祥ぢや。おそよの云ふことにも道理はある。今の時節にそのやうな物を玩んでゐるやうでは、世の中はやはり治まらぬ。源左衞門が刀を捨てたと同じやうに、こなたもその道具を捨てたと諦められい。

與次郎　なにをいふにも相手は氣のちがうたお人ぢや。

佐助　殺されても、殺され損と、むかしから相場がきまつてゐる。

與次郎　茶道具の損くらゐならば安いものぢや。

市兵衞　人のことぢやと思うて誰もかれも高見の見物。二百兩の大損がさう安々と諦められうか。よい、よい。氣ちがひでも阿房でも、これから所司代の屋敷へ、召連れ訴へをして、せめてもの腹癒せをせねばならぬ。

（市兵衞は長い袂をなげ捨てゝ、行光を引立てようとする。）

行光　これ、わしをどこへ連れてゆくのぢや。おゝ、わかつた。中國か西國へ案内してたもるのか。

市兵衞　えゝ、なんでもよいから一緒に來やれ。

おそよ　あ、もし。

（おそよは遮ぎる、市兵衞は突き倒す。源八郎は刀に手をかけて立ちかゝるを、源左衞門おさへる。與次郎と佐助も市兵衞をさゝへる。行光は落ちたる扇の袂を拾ひて笑つてゐる。この問答の最中に向ふより覺善、法

衣のところ〲を引き裂かれ、手に切れたる珠數を持ちて走り出づ。）

覺善　源左衛門どの。（内に入る）殘念でござる。

（みな〲思はず集まりて覺善を見る。）

源左　おゝ、覺善どの。見れば法衣も引裂かれて、いかゞめされた。

覺善　そこにもこゝにも多人數がよりあつまり、僞訴と犇めき騷ぐところへ、手前駈付けて取鎭めんと存じたれど、相手は逸り立つたる大勢、手前ひとりが聲をからして、説けど諭せど肯かばこそ。これ見られい、法衣も珠數もこの通りぢや。

與次郎　さう聞いては、愈々うか〲してはゐられぬ。

佐助　わし等も一緒に行かずばなるまい。

（與次郎と佐助はかけ出さうとするを、覺善は捨臺詞にて遮る。下の方より以前の町人五郎藏再び走り出づ。）

五郎藏　（窓の外より叫ぶ）これ、これ、みんな聞かつしやれ。こつちで僞訴するまでもなく、たつた今、德政の御觸れが出た。

（皆々おどろく。市兵衛はそこに置きたる刀を持ちて、あわてゝ窓の口へゆく。）

市兵衛　これ、ほんたうに德政の御觸れが出たか。

五郎藏　ほんたうぢや。ほんたうぢや。源左衛門殿。早う鐘を撞いて知らしてくだされ。

（云ひすてゝ五郎藏は引返してゆく。）

與次郎　こりやありがたい。節季師走に德政とは、生き返つたやうな心持がする。

佐助　早う歸つて、嚊やおふくろにもよろこばせて遣らねばならぬ。どなたも御めん下され。

（ふたりは早々に挨拶して、下のかたに去る。市兵衛は呆れてぼんやりしてゐる。雪又ふり出づ。）

おそよ　（勇み立つ）さあ、ありがたい德政の御觸れが出たからは、ちつとも早う知らせの鐘を……

源左　さあ。撞かねばなるまいか。（起ちながら考へてゐる。）

源八郎　撞くは知れたこと。なんの猶豫がござらうぞ。むむ。兄上が撞かずば、それがしが代つて撞く。（起ちあがる）

源左　おまへが撞くか。

源八郎　撞きまする。おそよ、手をひいてくれ。

おそよ　あい、あい。

（おそよは源八郎の手をひきて行きかゝれば、市兵衛は氣がついて、あわてゝ取縋る。）

市兵衛　あゝ、もし、待つてくだされ。わしはまだ二三軒

鐘取りにゆかねばならぬ所がある。その鐘を撞くのは、
もう少し待つてくだされ。この通りぢや。(片手で拜む)
(源八郎は無言にて 市兵衛の手より刀をうばひ取る)
市兵衛　あ、これ、どうさつしやる。
源八郎　(あざ笑ふ)　德政の御沙汰を知らぬか。貸も借も
一切帳消しぢや。
市兵衛　でも、鐘の鳴らぬうちは……。
源八郎　えゝ、邪魔するな。
(市兵衛が縋はるを、源八郎とおそよは突きのけて表
に出づ。雪ふる。)
おそよ　さあ、早うおいでなされませ。
(おそよは源八郎の手をひきて、向ふへ走り去る。)
市兵衛　(うろ〱する)　こりや飛んでもないことになつ
てしまうたぞ。
源左　(しづかに)　市兵衛どの。弟めはなんと申さうとも、
一旦こなたに渡した刀、かならず取戻して進せるほどに、
御心配は無用ぢや。
市兵衛　きつと取戻してくださるか。
源左　たしかに請合うた。安心なされ。
覺善　源左衛門どのがお請合はれたからは、よもや間違ひは
ござるまい。
市兵衛　これは先づそれでよいとしても、まだほかにも氣
がかりのことが色々ある。なにしろこゝには斯うしては
ゐられぬ。
(市兵衛おちつかぬ體にて表へ行かうとすれば、今ま
で倒れてゐたる行光は片手に梅の枝を持ちてよろ〱
と起きあがり、片手に市兵衛の袖をつかむ。)
行光　これ、約束ぢや。わしを連れてゆかぬか。
市兵衛　えゝ、それどころかい。
(突き放して表へかけ出せば、行光も追つて出で、再
び市兵衛をとらへる。市兵衛はあせつて行光を突き倒
し、向ふへ走り去る。鐘の聲きこゆ。)
行光　おゝ、鐘が鳴る。鐘が鳴る。いつも聞くよりも冴え
た音色がする。わしにも一つ撞かしてくれ。こゝによい
撞木がある。
(行光は梅の枝をかざして、よろめきながら向ふに去
る。鐘の聲つゞけてきこゆ。源左衛門と覺善は默して
鐘を聽く。)
源左　(しばらくして)　鐘が鳴つた。
覺善　鐘が鳴つた。(持つたる珠數を落す)
源左　あの鐘も一度では濟むまい。まだ幾たびか鳴らうも
知れぬ。
(表の雪はます〱烈しく、鐘の聲つゞけてきこゆ。)

――幕――

箕輪の心中（三幕七場）

登場人物

藤枝外記
外記の妹　お縫
吉田五郎三郎
用人　堀部三左衛門
仲間　角助
菩提寺の僧
百姓　十吉
十吉の母　お時
村のむすめ　お米
大菱屋　綾衣
新造　綾鶴
若い者　喜介
ほかに花見の男女。茶屋娘。眼かづら賣。小坊主。若侍。水屋。燈籠屋。新内語。廓の者。盆唄の娘子供など。

第一幕

一

向島の木母寺。平舞臺の下手へよせて、藁ぶき屋根の茶店あり。軒にあづま屋といふ行燈をかけ、門口に木振よき柳の立木あり。よきところに床几二脚ほどならべてあり。所々に櫻の立木、花盛りの體なり。正面には木母寺の境内を見る。

（熊藏、半次、職人のこしらへにて、眼かづらをかけて、酒樽を持ち、ほかに娘三人、おなじく花見のこしらへにて、いづれも茶店の床几に腰をかけてゐる。外にも花見の男女大ぜい、思ひ〳〵のこしらへにて立ちかゝりゐる。天明五年三月十五日、梅若の供養にて双盤念佛の音きこゆ。）

熊藏　おい、おい。姐さん。茶でも湯でも早くたのむぜ。醉醒めのせゐか、喉が渇いてならねえ。

半次　ほんたうにこゝらは田舎だせ。花時にやあ些と氣の利いたのを置けばいゝのに……。おい、おい、姐さん。大急ぎだよ。

茶屋女　はい、はい。

（茶店の中より茶屋女二人は赤い襷をかけ、土瓶、茶碗、さくら餅などを盆にのせて持ち出づ。）

女甲　どうもこみ合つて居りますもんですから、つい／＼遲くなりました。
女乙　まあ、ゆつくりとお休みなすつて下さいまし。
熊藏　あんまりゆつくりしてゐると、日が暮れてしまはあ。なあ、半次。
半次　ひと休みしたら、早く稲若へ、おまゐりをして來よう。
（みな／＼捨臺詞にて茶を飲む。奥にて双盤の音きこゆ。花見の男女は奥を見る。）
男　それ、お念佛がはじまるぜ。
女　早く行きませうよ。
（男女大ぜいはわや／＼いひながら境内に入る。）
娘一　もうお念佛が始まると云ふから、わたし達も早く行かうぢやありませんか。
熊藏　違えねえ。どれ、出かけべえか。おい、姐さん。お茶代はこゝへ置くよ。
女甲　毎度ありがたうございます。
（熊藏と半次は立たんとしてよろ／＼する。）
娘一　あれ、あぶない。
娘三　お前さん達は醉つてゐるから氣をつけないと、池へおつこちるよ。
半次　おつこちる時にやあお前を抱いて一緒に心中だ。あはゝゝゝゝ。
熊藏　こんなものは邪魔でいけねえ。おい、誰か持つてくんねえか。（樽を出す）
娘三　だつて、こりやあもう空ぢやあないか。
熊藏　空でもなんでも、これをさげてゐなくつちやお花見らしくねえや。ついでにこんなものも其方へ渡さう。
（熊藏は眼かづらを取る。娘三はうけ取りて眼かづらをかけ、空樽をさげる。）
半次　おれもこんなものは鬱陶しくていけねえ。（眼かづらを取る）兜も鐚も何つちもいらねえ。みんなそつちへお渡し申すぜ。
（半次も眼かづらと樽を出す。娘一は眼かづらをかけ、娘二は樽を持つ。）
娘一　ねえさん。おやかましうございました。
女甲　どういたしまして、一向おかまひ申しません
熊藏　さあ、行くべえ、行くべえ。
（熊藏を先にみな騒ぎながら境内に入る。）
女甲　けふは稲若の御供養で朝からお客が絶えないので、息をつく間もありやあしない。
女乙　ほんたうに今日はおつかりしてしまつた。
女甲　お花見もこの五六日のところが書き入れだから、忙がしいのも仕方があるまいよ。
（二人は茶碗など片附けてゐる。下手の奥より藤枝の

妹お縫　十八歳、旗本の娘のこしらへにて、仲間角助をつれて出づ。）

角助　お嬢様、これで暫くお休みなされては如何でございます。

（お縫はうなづきて床几にかゝる。）

女甲　入らつしやいまし。（茶を汲んで出す）

お縫　角助。けふは大層な賑ひであるなう。

角助　御覧の通り、向島も今が花盛りでございますから、江戸中の者がみんな出かけてまゐります。

お縫　ほんに今は花の盛り、いつもながら見事な眺めではないか。

（女中は角助にも茶を出す。）

角助　姐さん、後生だ。おれには櫻湯をくんねえ。

女甲　はい、はい。

（女は店に入る。お縫はあたりを眺めてゐる。境内よりお時、四十七八歳、農家の女房の拵らへにてうろうろしながら出で來り、お縫と顏を見あはせる。）

お時　おゝ、お嬢様ではござりませぬか。

お縫　おゝ、乳母か。

角助　お乳母さん、珍らしいところで出つくはしたね。

お縫　まあ、そこへかけたがよからう。

お時　はい、ありがたうござります。

（お時は床几にかゝりて一禮する。）

お時　此頃はまことに御無沙汰をいたして居ります。して、今日はお花見でござりますか。

お縫　花見といふではないけれど、小梅の御菩提所へまゐつた序に、梅若の御供養を拜みに來ました。

お時　實はわたくしも梅若さまへ御參詣に來たのでござりますが、境内の混雜で伜のすがたを見うしなひ、そこらを探して居るうちに、丁度よいところでお目にかゝりました。

お縫　なに、混雜のなかで伜を見失うたと……。それは心配なことであらう。

お時　いえ、あれも子供では無し、どうやら斯うやら一人前の若い者、別に心配するほどのこともござりませぬ。

角助　おまへの方では心配しなくつても、息子さんの方で、却つておまへを案じてゐるかも知れねえ。私が行つて一通りさがして來ようか。

お時　いえ、いえ、決してそれには及びませぬ。やがてあとからまゐりませう。

お縫　でも、ゆき違ひになつてはならぬ。角助、境内を一度探して來や。

角助　かしこまりました。

お時　それは御苦勞でござりますな。

角助　では、しばらくお待ちくださりませ。

（角助はお縫に会釈して境内に走り入る。茶店の女は茶碗を持ちて出づ。）

女甲　おや、御家来さんは……。

お時　御家来さんは今ちよいとあれへまゐりました。そのお湯はわたくしお頂きませう。

（お時は茶碗をうけ取る。女は店に入る。）

お縫　かけ違つて暫らく逢はなんだが、乳母はいつも達者でめでたいなう。

お時　おかげ様でこの通り丈夫でござります。して、殿様はお勤め向きの御首尾もよく、御繁昌でいらせられますか。

お縫　お前はまだ知るまいが……。兄さまも此頃は、別にお勤めと云うては……。

お時　え、お勤めはござりませぬか。

お縫　（悲しげに）実は去年の暮に、小普請入りを仰せつけられました。乳母、察してくりやれ。

お時　（おどろく）それは、まあ……。なるほどこのお正月、お屋敷へ御年始に出ました時、いつもの春のやうでは無く、なんだか陰気でひつそりしてゐると存じましたが、さう云ふわけでござりましたか。

お縫　春早々から悪い耳を聞かせたくないと、なんにも云はずに隠してゐましたが、さういふ仕儀でお勤めにも出られず、たゞ引籠つてばかり居られます。

お時　おふくろ様にお乳が無いので、わたくしがお屋敷へ御奉公、殿様が七つにおなり遊ばすまでお乳をあげて居りましたが、小さいときから御發明のお生れつきで、武藝學問なに暗からず、立派に御成人あそばして、ゆくゆくは定めて御出世と、わたくしも陰ながら喜んでをりましたに、お役御免の小普請入りとは、一體どうしたわけでござります。

お縫　さあ、その譯は……。ひとに話せば笑ひ草、乳母ならば共に泣いてもくれよう。兄様は武士にあるまじき廓通ひ、身持放埒の廉によつてお上の首尾をそこねた次第。

お時　え、殿さまが廓通ひに……。それは今まで些とも存じませんでした。して、そのお通ひなさる女といふのは……。

お縫　大菱屋の綾衣とかいふ女子……。一昨年からの深い馴染とやら。

お時　それにまあ済んでもない。それにしても、おまへ様をはじめ御親類の方々が、なぜ御意見をなされませぬ。

お縫　幾たび御意見申しても、針ほどの效目もあらばこそ、ます〳〵不しだらが募るばかりで、今は親類も呆れてゐるくらゐ……。

(お縫はいよ〳〵打凋れば、お時も共に愁ひ顔。)
お時　それはさぞ御心配でござりませう。あれほど立派な殿様に、どうしてそんな魔がさしたのやら……。情ないことでござりますな。
(二人は顔を見あはせて嘆息す。この時境内の方さわがしく、以前の熊藏と牛次はお時のせがれ十吉を引立て出づ。十吉は十八九歳、農家の若者。あとよりお米、十六七歳、村の娘にて、うろ〳〵しながら出づ。つゞいて以前の娘三人も出づ。)
熊藏　やい、この野郎。なんで俺達に突き當りやあがつたのだ。
牛次　うぬ巾着切りだらう。料簡がならねえぞ。
(ふたりは十吉を小突く。)
十吉　(おど〳〵する)今この境内で連にはぐれ、うろうろ探してゐるうちに、向うにばかり氣をとられて、つい粗相をしましたが、どうぞ勘辨してくださいまし。
熊藏　忌だ、忌だ。つい粗相で濟むと思ふか。
牛次　賣る喧嘩ならいつでも買つてやるから、相手になれ。
(お時はこれを見て、割つて入る。)
お時　あゝ、もし、これはわたくしの忰、どんな粗相を致したかは知りませぬが、わたくしが代つてお詫をいたします。どうぞ勘辨して遣つてくださりませ。
お米　わたしも共々におわび申します。
熊藏　えゝ、ばゝあや阿魔つちよが口を利いたつて勘辨できるものか。引込んでゐろ。
牛次　さあ、野郎。どこまでもうぬが相手だ。
(二人は立ちかゝるを、連れの娘等は止める。お米と十吉は途方にくれてゐる。)
お縫　(起ち上る)あゝ、これ、待ちや。
熊藏　え。(お縫の顔を見て)や、藤枝様のお孃様でございましたか。
牛次　この通り酔つて居りますので、とんだ失禮をいたしました。
お縫　それはわたしが知り合の者、粗相は免してやつてはくれまいか。
(熊藏と牛次は顔をみあはせる。)
熊藏　へえ、お孃様のお扱ひなら、わたくし共にも決して否やはございません。
お縫　では、料簡してくれるのかえ。
牛次　よろしうございますとも……。なあ。熊。
熊藏　別に意趣も遺恨もあるわけぢやあなし、好んで喧嘩をするでもねえ。では、お孃様。
牛次　これで御免くださいまし。
(熊藏、牛次は早々に去る。連の娘三人もつゞいて去

る。）

お縫　十吉、どこも怪我はなかつたかえ。

十吉　丁度よいところへお嬢様がおいで下すつたので、何事もなく済みました。ありがたうございます。

お縫　あの二人は屋敷へ出入りの職人、ふだんはおとなしい正直者だが、花見の酒に酔うたのであらう。

お時　それでも生酔ひ本性違はずとやらで、お嬢様のお顔を見ましたら急におとなしくなつて帰りました。

（角助、境内より出づ。）

角助　十吉さん、そこにゐたか。實は今、雨具をひとまはり探して来たのだ。

十吉　いろ／＼御心配をかけて相済みませんでした。

角助　なに、お礼にやあ及ばねえ。時にお嬢様、なんだかお天氣がをかしくなつて参りましたから、そろ／＼お帰りになつては如何でございます。

お縫　雷町までは路も遠い、降らぬうちに戻りませう。乳母も十吉もひきつれて、境内の方へたづねて来や。

お時　はい、濡れぬうちに早くお屋敷へうかゞひます。唯今のお話でうけたまはりましては、わたくしも心配で心配でなりませぬ。

お縫　あ、これ、くはしいことは又その節……。

（お縫は眼で知らせるに、お時はうなづく。お米は空を仰ぎ見る。）

お米　おゝ、もうぽつ／＼降つて来ました。

十吉　大したこともあるまいが、これが有名の涙雨だ。

お縫　涙の雨はいづこにも……。（空をみる）

（この時、雨ます／＼降り出づるに、みな／＼忙がはしく茶店の軒下に入る。）

二

木母寺附近、料理茶屋の入口。舞臺の上手少しくあとへ下げて、風雅なる屋根附の門にむさし屋と記せる行燈をかけたり。左右は青竹の垣を折りまはし、門内に櫻の立木あり。垣の外、すこしく下手へ寄りて櫻の大樹あり。

（以前の娘三人は手拭をかぶり、裳を端折りて、料理茶屋の軒下に立つ。小坊主安念は法衣、木綿の下駄。眼八實六助はかづらを掛けたる棒を持ち、いづれも櫻の木の下に雨宿りしてゐる。花見の人々濡れながら走り出で、上下へ入る、みな／＼空を見る。）

娘一　熊さんや牛ちやんはどこまで行つたんだらうねえ。

娘二　直そこまで傘を借りに行くと云つたが、まさか置去りした譯でもあるまい。

娘三　あの人達のことだから何とも云へないよ。

六助　梅若の涙雨が、たうとう本降りになつて來やあがつた。おい・お小僧さん。お前はどこのお寺だえ。

安念　お寺は駒込吉祥寺でござる。

六助　えゝ、惡く洒落れるぜ。木母寺か長命寺か。

安念　木母寺でござる。

六助　それぢやあ今日の念佛踊りに鉦をかん〳〵叩いた方だね。ただしこの斯う降られちやあ此方の商賣は潰たしだ。どうだい。お小僧さん、お前にやあ日和の御祈禱はできねえかね。

安念　御祈禱は次第で、隨分祈つて進せるが……。

六助　慾張つたことを云ひなさんな。今時の坊主は油斷がならねえ。

娘一　雨はだん〳〵强くなるばかりで、なか〳〵止みさうもないねえ。

娘二　いつそもう濕れて歸らうか。

娘三　それでももう少し待つて見ようよ。

（上手より以前の熊藏は番傘をさして出づ。）

熊藏　やう〳〵のことで傘を一本工面して來たが、半次の奴はまだ見えねえかね。

娘一　さつきから待つてゐるんだけれども、どこへ行つたか判らないんだよ。

熊藏　仕樣がねえなあ。だが、いつまでこゝに待つてもゐられめえ。あの野郎は置去りにして出掛けようぜ。お前たち三人はこれをさして行きねえ。

六助　はゝ、三人の相傘はめづらしい。

熊藏　それでも丸つきり無えよりは優しだらう。

娘二　さうして、お前さんは……。

熊藏　おれはずぶ濡れ、どうせ自棄だ。

六助　女の子にやあ深切だね。

熊藏　これでなけりやあ情婦は出來ねえ。さあ、出かけた、出かけた。

（むすめ三人は捨臺詞にて一つの傘に入り、熊藏は手拭をかぶりて先に立ち、みな〳〵急ぎ去る。）

六助　こりやあいつまでも止みさうもねえ。（棒にかけたる暖簾かづらを外して懷へおし込む）仕方がねえ、濡れろ、濡れろ。お日和、お日和。

（六助も雨のなかを走り去る。）

安念　だん〳〵に人が行つてしまふので、なんだか寂しうなつた。どれ、わしも濡れて行かうか。

（安念あたりを見まはしてゐる。奧の料理茶屋にて唄ふこゝろにて、端唄模樣の獨吟になる。）

唄　〽あづま路に、あはれを殘す梅若の、雨をなみだと誰が云ひし、戀のあはれは虎が雨。

安念　こゝの茶屋でも何か面白さうに唄うてゐるな。浮世の凡夫が花に浮かれて、はゝ、馬鹿なことぢや。色即是空……南無阿彌陀佛。なむ阿彌陀佛。

（安念も去る。時の鐘、薄く雨の音きこゆ。）

唄〽ふりし昔の大磯も、江戸の廓（くるわ）のよし原も、ながれは同じ隅田川、ちり浮く花を友として、つがひ離れぬ都鳥。

（門の内より藤枝外記、廿五歳の武士。大菱屋綾衣、廿一二歳の遊女。むさしやと記せる貸傘を相傘にして出づ。あとより新造綾鶴出づ。）

綾鶴　いゝ鹽梅に雨も小降りになつたやうでござんすな。

外記　花時の天氣癖だ。やがて晴れるであらう。

綾衣　今鳴つたのは七つでござんせうな。

外記　廓の門限（もんげん）は七つ半。今から歸つたら遲くもあるまい。迎ひの駕籠はまだ見えぬか。

綾衣　たわいない病氣を云ひたてに、お醫者へ行くとこしらへて、廓を出たのは今日の午ごろ。こゝで主と落ち合うて、花をみながら半日をほんに面白く暮したので、今さら廓へ歸るのは……。

外記　忌（いや）だといふのか。慾をいへば限りがない。わしもあとから行くほどに……。

綾衣　きつと來てくださんすか。

綾鶴　主（ぬし）にかぎつて嘘はござんすまい。話の殘りは今夜ゆつくり……。

綾衣　必ずあとから來てくださんせ。

外記　むゝ。

唄〽波のまに〳〵吹き分けられて、翼（つばさ）も寒き春のゆふ風。

（駕籠舁（かごや）四人は駕籠二挺をかつぎて出づ。）

駕甲　へえ、お待遠さまでございました。

駕乙　もう一挺はすぐにあとからまゐります。

外記　おゝ、よい、よい。三人連れ立つては人目もある。わしは一足おくれて行けば、お前達ふたりは先へ歸れ。

綾衣　では、待つてゐますぞえ。

綾鶴　だますと堪忍しませぬぞ。

（外記笑ひながら首肯く。綾衣と綾鶴は駕籠に乘りてゆく。雨の音しめやかに、櫻の花びら〳〵と散りかゝる。外記は傘をさして見送る。綾衣は駕籠の垂簾（たれ）をあげて、見返る。）

綾衣　六つ半までには乾度でござんすぞ。

(外記は矢はり笑ひながらうなづく。駕籠は遠く走り去る。)

外記　春雨に濡れてゆく女の駕籠に、花のふゞきの散りかかるは、畫にあるやうな風情だなう。

(外記はうつとりしていつまでも見送る。下のかたより以前の十吉、跣足にて番傘二本をかゝへ、お米と相傘にて走り出づ。)

十吉　殿樣ではござりませぬか。

外記　おゝ、十吉。どこへ行く。

十吉　おふくろと一緒に梅若へ參詣に來ましたら、丁度お孃樣にお目にかゝりました。

外記　なに、妹に逢つた……。

十吉　はい。そのうちにこの俄雨で、堤下の親類まで傘を借りに行つてまゐりました。お孃樣は梅若の茶店で、雨宿りをしておいでなされます。

外記　こゝで私に逢つたことを、妹に云ふなよ。

十吉　はい。

外記　誰にも云ふなよ。

(云ひすてゝ、外記は門内に入る。十吉は合點のゆかぬ體にて、しばらくあとを見送る。お米もおづおづ門内をうかゞふ。茶屋の奥にて唄の聲きこゆ。)

――幕――

第二幕

一

麹町番町、藤枝外記(五百石の旗本)の屋敷。二重屋體にて、床の間に鎧櫃を飾り、つゞいて遊び間、襖。庭には捨石、石燈籠、立木。下のかたに枝折戸あり。

(七月十三日の午後。若侍二人、一人は如雨露を持ちて、枝折戸のそばに立ち、一人は花鋏を持ち、四目垣にからみたる朝顔に水をやつてゐる。)

侍甲　盆になつても、日中は隨分暑いな。

侍乙　併しこの朝顔ばかりは、日中に水をやらねばなるまい。

侍甲　蔓もおひおひに伸びて來たから、花もやがて來だらうよ。

(仲間角助は文を持ちて出づ。)

侍甲　おゝ、角助。貴樣は晝前から些とも影を見せなかつたが、今まで何處をうろついてゐたのだ。

侍乙　貴樣はこのごろ兎かく横着でよろしくないぞ。

角助　いえ、決して横着といふわけぢやあねえ。殿樣のお使で遠くまで行つて來たので……。(汗をふく)　いや、どうも暑いことだ。

(奥より用人堀部三左衛門、五十餘歳、出づ。)

三左　これ、角助。殿樣のお使でどちらへ參つた。
角助　へえ。(もじ／＼してゐる)
三左　この三左衛門に沙汰無しでまゐるとは……。(角助の顔をきつとみる) さあお使の出さきを確と申せ。隱すと其分には差置かぬぞ。
角助　へえ、實は其……。
三左　一體、貴樣の手に持つてゐるのは何だ。
角助　え、これは……。
(角助はあわてゝ文をふところに隱さうとする。三左衛門は若侍を見かへりて眼で知らすれば、甲乙二人は心得て立ちかゝり、無理に角助の文を奪ひて、三左衛門に渡す。)
三左　上書は女文字で樣まゐる。むゝ。(うなづく) これ、角助、私がこれまでたび／＼申聞かせて置いたを忘れたか。たとひ殿樣の仰せでも、吉原などへお使にまゐることを相成らぬと、堅く申渡してあるに、さりとは不屆至極の奴。貴樣のごとき者が當お屋敷に居つては、殿樣のお身持も直るまい。今日かぎり其の暇をつかはすから、左樣心得ろ。
角助　え、お暇になるのでございますか。
三左　勿論のことだ。早く出て行け。
角助　こりやあ飛んでもねえことになつたな。(弱つてゐる)
(奥より外記の妹お縫出づ。)
お縫　三左衛門、待ちや。角助には少し聞きたいことがある。(若侍等を見かへる) お前達は部屋へ。
甲乙　はあ。(會釋して去る)
三左　(苦り切つて) 嬢樣。かやうな者にお詞をおかけ遊ばすな。
お縫　でも、聞いて置きたいことがある。(角助にむかひ) お前はこれ、江う來や。けふかぎり其の暇になつても、たんとも思ひませぬか。
角助　なんとも思はぬどころぢやございません。實に大弱りでございます　以後は屹と謹みますから、今度のところだけは御勘辨を……。なにぶんお願ひ申します。
お縫　詫びるならば、勘辨してもあげようが、その代りにわたしが今たづねることを包み隱さずに云ひますか。
角助　へい、へい。もう斯うなれば一から十まで、なんでも根こそげ申上げます。
お縫　お兄樣が三年越し馴染んでおいでなさる吉原の遊女大菱屋の綾衣とかいふのは何のやうな女子かえ。
角助　わたくしも度々お供をして存じて居りますが、その綾衣といふ花魁は實に豪勢なものでございます。年のころは廿一二、容貌はよし、姿は好し、氣前はよし、なに

しろ入山形に二つ星の仲の町張りで……。あなた方は御存知ございますまいが、一體仲の町張りと申しますと…。

三左　えゝ、詰らぬことをべら／＼饒舌るな。おたづねのことだけを手みじかに申上げればよいのだ。

お縫　して、お兄様はその綾衣のところへばかりお通ひなさるのか。

角助　へい、殿様はその花魁一點張り、また女の方でも殿さま一點張り、ほかの客は振向いても見ないといふ逆上方で、廓内では大評判でございます　併しあのくらゐの女に首つたけ惚れられるといふのは男冥利で、殿様もよくよく好い月日の下にお生れなすつたのでございませう。實にお羨ましいことで……。

三左　たはけめ、云はして置けばさま／＼の囈語を申す。孃様、もうおやめなされませ。

お縫　まあ、待ちや。それにど聲を立てられては、綾衣とやらも稼業もなるまいに、今も相變らず勤めてゐるのかえ。

角助　さあ、さういふわけでございますから、ほかの客は寄り附かず、自然女の方にも借金は殖える、殿さまの方にも御無理が出來るといふやうな理窟で、詰り詰つた擧句の果、實を申せば……（摺寄つて聲をひくめ）花魁は先月の晦日に店をかけ出して、箕輪の御乳母さんのところへ……。

お縫　なに、綾衣は吉原をぬけ出して、箕輪の乳母のところに隱れてゐるとか。

三左　それはいよ／＼以ての外。年來御恩をきて居りながら、かやうな時に御意見のひと言も申上げることか、却て廓落の女を隱まふなどとは、言語道斷、憎い奴。手前これより箕輪へまかり越して、家來めをきびしく詮議し、一刻も早くその女を追ひ拂はねば、殿様お爲に相成りませぬ。角助、案内いたせ。

（三左衛門は押取刀にて起たんとするを、お縫は止める。）

お縫　はて。急くには及ばぬ。さう事が判つたからは、市ヶ谷の叔父様とも御相談して、また分別の仕様もあらう。

三左　なるほど。市ヶ谷の叔父様にも豫て御心配をねがつて居りますれば、一應御相談をいたした方がよろしいかも知れませぬ。では、角助、もうよいから、行け、行け。

角助　へい、へい。もう御用はございませんか。

お縫　部屋へさがつて休息したがよい。

角助　へい、へい、へい。

（角助はほつとして立去る。あとに兩人は顔を見合せる。）

三左　孃様。いよ／＼事面倒に相成りましたな。

お縫　ほんに困つたもの。お兄様がそれほどに御執心なら、また取計ひの仕様もあらうけれど、なにをいふにも相手が勤めの女ではなう。

三左　左様でござりますとも……。町人でも筋目正しい家では、吉原の女子などは門端も踏ませませぬ。まして天下の御旗本が、くらべにもならぬ御身分違ひ、とても、とても。（頭をふる）

お縫　さあ、あまり身分が違ふので、たとひわたし達は承知しても親類大勢が承知しまい。

三左　よし又、御親類が承知なされても、世間一統が承知しませぬ。第一にお家の汚れ、御先祖様へ相済みませぬ。

（お縫も思案にくれてゐる。奥より藤枝外記出づ。）

お縫　おゝ、お兄様……。

外記　角助はまだ戻らぬか。

お縫　え。（三左衛門の顔をみる）

三左　角助は唯今戻りました。

外記　おゝ、戻つたか。定めて返事を持參したであらう。これへ出せ。これへ出せ。

三左　いえ、これは差上げられませぬ。

外記　なに、渡されぬ……。

三左　かやうなものを御覧に入れては、お前さまのお為に相成りませぬ。

（三左衛門は先刻の文を取つてずた／＼に引裂き捨つ。外記は赫となりしが、また思ひ返して冷笑ふ。）

外記　さて／＼そちは忠義者だ。文の通ひ路に関を据ゑても、こゝろと心との通ひ路は塞がれまい。貴様達の小才覚で、燃える火を消さうとするのは、あれ、あの庭の焼石に如雨露の水をそゝぐやうなものだ。止せ、よせ。時に三左衛門、すこし金子入用だが、知行所から取り立つる工夫はないか。

三左　いかに御自分の御知行所でも、定めのほかに無體の御用金など怪しからぬ儀でござります。

外記　では、藏の中から不用の鎧かぶと太刀など持出して、賣拂つてはどうだな。

三左　鎧兜太刀などは武士の表道具、まして御先祖傳來の大切なる品々、おまへ様の御自由には相成りませぬ。

（三左衛門頑として應ぜず。外記はいよ／＼勃然として、床にかざりし鎧櫃より一領の卯花縅の鎧を取り出して來る。）

外記　これ、三左衛門。わしが今この鎧を持ち出して、勝手に賣拂つたらなんとする。

三左　いえ、唯今も申す通り、おまへ様のお持物でも、お前様御勝手には相成りませぬ。御先祖様が慶長元和度々の戦場に、敵の血を濺いだるその鎧、申さばお身にもか

へがたき鐵、藤枝五百石のお家はその鐵と太刀の功名故でござりまするぞ。

お縫　今あらためて申さずとも、鎧刀は武士のたましひといふことを御存じないか。いかにお心が狂へばとて、重代の寶をむざ／＼手放さうとは、あまりにお情なう存じます。

外記　慶長元和の血なまぐさい世の中と、太平百餘年の今日とは、世もちがへば人の心もちがふぞ。鎧刀を武士の魂などと、自慢した時代はもう過ぎた。わしも以前は武藝に凝り固まつて、やれ劍術の柔術のと、油汗をながして苦んだものだが、今更おもへば馬鹿であつた。歷々の武士が竹刀の持樣も知らず、弓の引樣もしらず、武藝よりも遊藝に身をいれて、小唄や三味線の稽古に餘念もない。それでも立派にお役をつとめて、家業出精する世のなかに、なんの用もない鎧刀。五月人形の飾り具足や菖蒲刀も同樣だ。家重代の寶でも、好い値に引取るものがあれば、なん時でも賣放すぞ。

（鎧を投げ出せば、二人はあきれて顏をみあはせる。）

三左　いかにも此頃の御旗本御家人が、武藝をすてゝ遊藝に耽り、次第に惰弱に流れまするは、なげかはしい儀でござりますが、他は他、われは我、さやうな徒にはおかまひなく、お前樣は飽までも御先祖以來の御家風によつて……。

外記　えゝ、くどい。野暮を申すな。先祖の講釋も聞き飽きたぞ。

（顏をそむけて取合はぬに、兩人はたゞ嘆息のほか無し。奥より先刻の若侍一人出づ。）

侍甲　申上げます。

外記　なんだ。

侍甲　市ヶ谷の殿樣お越しにござります。

お縫　おゝ、叔父樣がお見えなされたか。

三左　すぐにこれへお通し申せ。

（二人は好いところへ叔父が來てくれたと喜ぶ。外記は顏をしかめる。）

外記　いや、叔父に逢ふも面倒……。外記今日は所勞でござるとお斷り申せ。

三左　いや、いや、餘人とは違うて市ヶ谷の殿樣、お逢ひなさらねば濟みますまい。

外記　えゝ、かまはぬ。逢へぬと云へ。

お縫　いえ、いえ、さうはなりますまい。

（たがひに爭ふうちに外記の叔父吉田五郎三郎、四十前後、おなじく旗本。袴、羽織にて奥より出づ。かくと見るより、お縫はあわてゝ鎧を片附ける。）

三左　これは、これは、お出迎へも致しませず……。

五郎　いや、いや、始終出入りをする屋敷だ。案内も待たずに通つて來た。
お縫　[illegible]樣、ようおいでなされました。
五郎　きびしい殘暑だ。一同變ることもないか。
お縫　はい。
三左　これ、早うお茶の支度いたせ。
侍中　はあ。(引返して去る)
外記　その後はまことに御無沙汰をいたして居ります。
五郎　御用が忙がしければ自然無沙汰になる、それはお互ひのことだ。わしもこの間は御用繁多であつたが、幸ひ今日は非番。と申して、屋敷にたゞ手持無沙汰として居つても退屈だから、久振りで一勝負しようかと、この暑いのに出かけてまゐつた。どうだ、外記、このごろは少し强くなつたかな。三左衞門、盤を持て。
三左　はあ。
(三左衞門は起つて、次ぎ間より碁盤を持出づ。外記は氣のすゝまぬ顏)
外記　わたくしはこの頃しばらく碁にむかひませぬので、とても殿樣のお相手は出來ませぬ。どうか今日は御免を……。
五郎　なんの、見れば顏色もよくないやうだが、氣分でもすぐれぬか。

外記　別に病氣と申すでもござりませんが……。
五郎　病氣でなくば一局まゐれ。却つて暑さを忘るゝものだ。
(盤にむかひて石を取る。外記もよんどころなしに石を取る。)
五郎　お縫も三左衞門も圍碁は不得手であつたな。[illegible]ものを見物してゐるのも大儀、又こちらも傍に人が居つては氣が散つてならぬ。用があれば呼ぶほどに、遠慮なく次へ立て。
お縫　では、お詞にしたがひまして。
三左　皆樣お次へさがります。
(お縫と三左衞門は會釋して奥に入る。)
五郎　さあ、ほかに人も居らぬ。ゆる／＼と勝負せうか。
(二人は盤にむかひて石を打つ。)
五郎　これ、なにをうか／＼致して居る。身にしみて打たねば面白くないぞ。
外記　はあ。
五郎　これは大分暑くなつてまゐつた。
(羽織をぬいで又打つ。外記もはじめは氣の乘らぬ體なりしが、しだいに釣込まれて打つ。)
外記　(やがて俄にたじろぐ)や、殿樣、これでは違ひます。
五郎　なにが違ふ……。

外記　お前様のこの石はもう死んで居ります。
五郎　馬鹿を申せ。なんでこれが死ぬものか。
外記　でも、これは……。
五郎　えゝ、卑怯なことを申すな。
外記　負腹を立つおまへ様こそ、近頃卑怯でござりまするぞ。
（あざ笑ふ）
五郎　やあ、卑怯とはなにが卑怯……。今の一言聞き捨てならぬぞ。これ、この石はから切つたのだ。
（五郎三郎は不意に傍におきたる刀を取つて、ぬき打に斬りつくる。外記は身をかはし碁石をうち付ける。五郎三郎透さず斬り込むを、外記は二三度搔いくゞり、碁盤をとつて受止むる。お縫と三左衛門は奥より走り出づ。）
お縫　これはまあ何うなされたのでござります。
三左　先づ〳〵お鎮まり下さりませ。
（二人は割つて入る。）
外記　いや、騒ぐには及ばぬ。叔父さまが負腹を立てられたのだ。叔父甥が内輪同士の勝負に、一目二目のあらそひから、理不盡の刄傷沙汰は、日ごろの叔父様にも似合はぬこと。兎かくに賭事勝負ごとは人を氣狂ひにするものだなう。
五郎　これ、外記。賭事勝負ごとは人を氣ちがひにすると知りながら、遊女ぐるひは人を氣狂ひにするとは氣がつかぬか。よし原がよひに現をぬかして、三年越しの身持放埒、この叔父が陰になりひなたになり、隱しても庇つてももう及ばぬ。すでに番頭は小普請入り仰せつけられ、すこしは眼も醒むるかと思ひの外、ます〳〵亂行募る途、頭支配の耳にも入つて、ひと間住居を申付けらるゝか、あるひは甲府勝手をいひ渡されうも知れぬと、家中でも専ら噂する。かくては家の恥、親類縁者の恥、所詮このまゝには捨ておかれぬ奴。圍碁の爭ひにことよせて、ただ一刀に斬つて捨て、表向きは頓死と披露して、姉に然るべき婿をとれば、世間に恥もあらはれず、藤枝の家に疵もつくまい。
お縫　では、叔父様は最初から巧んだことでござりましたか。
五郎　おゝ、はじめから仕組んだ今の口論。分別ざかりの武士が理不盡の刄物三昧、おとなげないと思ふなよ。覺悟はして來ても、人のこゝろは弱いもの、現在の甥を切らうとする腕は鈍つて、撃ち損じたが殘念だわえ。さあ、外記。この上は詰腹……。尋常に切腹いたせ。叔父が介錯してやるぞ。
外記　お詞ではござりますが、外記は命が惜うござります。御手討も切腹もまつぴら御免……。

五郎　なに、命が惜いと……。かへすがへすも卑怯な奴。……。その儀ならば……。

（また抜きかゝるを、お縫と三左衛門は遮る。）

お縫　叔父様が日ごろの御氣質では、御無理もないことでございますが、たとひ座敷牢でも甲府詰でも、お命にさへ障りがなければ、また御出世の時節がないとも限りますまい。

三左　姫様のおつしやる通り、お家のおためとは申しながら、甥の腹をむざむざ御手討の詰腹のとは、憚りながら餘りにむごい御沙汰。この儀ばかりは三左衛門、いくへにも御勘辨をねがひ上げまする。（更に外記にむかひて）もし、殿様、叔父さまが今のおことばを、たんとお聞きなされました。先刻も御自分で仰せられました通り、御幼少の時から武藝がお好きで、弓馬劍術柔術まで皆それぞれに免許のお腕前、現に今も叔父様が不意討の切先を見ごと受止めたほどではございませぬか。その武藝をお役に立てゝ、神妙に御奉公あそばせば、御出世は眼のあたりでござりませうぞ。

お縫　それには心を入れ替へて、よし原の女子のことなどふつゝり思ひ切つてくださりませ。

（外記答へず。）

五郎　お縫も三左衛門も彼う申すな。下世話にいふ馬の耳に念佛、なにを云つても無駄なことだぞ。

お縫　でもござりませうが、今日のところは何分御勘辨をねがひます。

三左　穩便の御沙汰をおねがひ申します。

五郎　其方達がそれほどに申すならば、けふはこのまゝ立歸らうが、この後も改心せぬに於ては藤枝の家には代へられぬ。きつと仕置をせねばならぬぞ。外記、すこしでも武士の性根があらば、よく分別してみろ。

（五郎三郎は起ちあがる。お縫はうしろより羽織を被せる。）

五郎　（羽織の紐をむすびながら）慶長元和の合戰には、武名をあげたる藤枝の家も、太平二百年の後にはかゝる腰ぬけを産み出して、三河武士の血も次第に濁れてゆくは、人の罪か、世の罪か。（お縫等と顔をみあはせる）實に殘念な儀だなう。

（嘆息しつゝ奥に入る。お縫と三左衛門は送りてゆく。外記はあとを見送りて獨言。）

外記　命が惜いと申したら、むかし氣質の叔父様は、ひとかたならぬ御立腹であつたが、家の爲や親類縁者のために、命を捨てろといふのは無理な註文。自分の命は自分のもの、人のためになんで死なうぞ。外記の命も自分の爲なら、なん時でも見事に捨てゝ見せるわ。

（時の鐘きこゆ。）

二

藤枝屋敷の門前。正面は屋根つきの門。左右は板羽目にて、武家の長屋窓あり。

（燈籠屋は盆燈籠の荷をおろして、駒寄の石に腰をかけ、水屋は障子屋根の屋臺を卸して立つ。）

燈籠屋　どうですね、水屋さん。かう暑くつちやあお前さんなぞは大當りだらうね。

水屋　いや、なか／＼さうは行きませんよ。それに此邊は掘井戸が多いから、水屋は一向御用なしさ。

燈籠屋　わたしの商賣なんぞも、けふを過ぎちやあ、もうおしまひなんだ。なにしろ際物は壽命が短いからねえ。

水屋　おたがひに楽は出來ませんよ。日の暮れないうちに、もう些と廻つて來ませう。

燈籠屋　まあお稼ぎなさい。

（兩人は挨拶して荷をかつぐ。）

水屋　さあ、さあ、水あがらんか。汲立あがらんか。冷つこい。

燈籠屋　燈籠や……燈籠……。

（たがひに呼びながら左右に別れゆく。門内より吉田五郎三郎は草履取一人をつれて出づ。お縫と三左衛門は送りて出づ。）

五郎　唯今も申聞かせた通りの次第であれば、外記の身に就てはそち達もよく氣をつけねばならぬぞ。魂のぬけた奴、どのやうな曲事を仕出さうも知れぬ。もし思案に能はぬことあらば、早速に私まで知らせてまゐれ。よいか。

三左　委細心得てござります。

お縫　この上ともに何分よろしく願ひます。

五郎　むゝ。おのれの心ひとつで、一家一門家來にまで苦勞をかける。困つた奴だ。

（五郎三郎は草履取をつれて去る。お縫等はあとを見送る。ゆふ鴉の聲。門内より外記は帷子、羽織にて出づ。斯くと見るより お縫と三左衛門は左右に立塞がる。）

お縫　お兄樣。どこへお出でなされます。

外記　どこへ行かうと餘計な詮議だ。

三左　叔父樣の御意見がまだおわかりにはなりませぬか。先づ當分は御謹愼……。（外記の袂をとらへる）

外記　（屹となる）謹愼とは誰の指圖だ。おれはおれの料簡次第で、どこへでも勝手に行くぞ。

三左　え。

外記　馬鹿め。

（云ひ捨てゝつか／＼行かんとす。お縫はその袂に縋

りとゞむるを、外記はまた振切つて足早に去る。お縫と三左衛門は顔を見あはせて嘆息す。以前の燈籠賣が引返して再びゆき過ぐ。ゆふ鴉の聲悲し。）

——幕——

第三幕

一

箕輪在の農家。藁ぶき屋根、竹縁の二重屋體にて、上のかたに佛壇、その下に押入れあり。つゞいて破れたる障子、破れたる襖。上のかたの竹窓の外は蓮池にて、庭より奥へかけて一面に紅白の蓮の花さけり。下のかたにはもとの門口、そとには柳の大樹立てり。田畑をへだてゝ吉原の廓遠くみゆ。

（おなじく七月十三日の午後、佛壇には精靈棚をしつらへ、軒には大いなる切子燈籠をかけたり。一人の僧は佛壇の前に坐して經を讀む。この家の母お時は下のかたに坐して蚊いぶしを煽ぎゐる。いづこよりとも知らず、曾我太鼓の音きれ〳〵にきこゆ。僧は經をよみ終りて、こなたへ向き直る。）

僧　御回向相濟みました。

お時　ありがたうござりました。當年はきつい殘暑でござりますな。

僧　今日は朝から湯島神田下谷淺草の檀家を七八軒、それから廓を五六軒まはつて來ましたが、なか〳〵暑いことでござつた。

お時　殊にこの邊は蓮田でも藪蚊が多いので、なほ〳〵困り切ります。

（お時は蚊いぶしを煽ぐ。奥よりお時のせがれ十吉に盆に土瓶と茶碗をのせて出づ。）

十吉　和尚様、お茶を一つおあがりなさいまし。

僧　いやもうお構ひくださるな。十吉どのもいつの間にか立派な若い衆になられましたなう。

お時　昨年親父がなくなりましてからは、これ一人が杖柱でござります。

僧　いや、いや、もう御安心ぢや。十吉どの、そのうちに私がよい女房をお世話しませうぞ。

お時　はい、その嫁は……。

（云ひかけるを、十吉はきまり惡き體にて、云ふなと制す。）

僧　では、もうきまつてござるのか。はゝゝゝゝ。それならば猶々御安心ぢや。いや、これは飛んだ長話、どれお暇いたさうか。

お時　まことにお恥かしうござりますが……。（盆に乘せ

たる布施のつゝみを出す。)

僧　折角のおこゝろざし頂戴しまする。

(僧は布施をとりて懐中し、下駄をはきながら、上のかたを見かへる。)

僧　おゝ、蓮が見事に開きましたな。いつもながら此邊は閑靜で好うござるなう。

お時　お寺の御近所にくらべますと、こゝらはまるで田舍でござります。

僧　いや、田舍が結構ぢや。では、御免くだされ。

二人　ありがたうござりました。

(僧は挨拶して去る。娘子はあとを見送る。)

お時　いつも氣輕な和尚様だなう。

十吉　あの蓮の花を大層褒めてゐなされたから、後にお寺まゐりに行くときに、折つて行つてあげようか。

お時　おゝ、それがよい、それがよい。

(娘子は話しながらあたりを片附ける。近所の娘子供大勢が手をひかれて出づ。)

唄　へぼん／＼盆はけふ明日ばかり、あしたは嫁のしをれ草。

(子供等は盆唄をうたひながら行き過ぎる。お時は表をみる。)

お時　盆踊はこのごろ廢つたが、唄は相變らず賑かいなう。

十吉　朝からのべつに唄つてゐるやうだね。

(子供等の唄の聲遠くきこゆ。)

唄　へ君と寝やろか、五千石取ろか。なんの五千石、君と寝よ。

十吉　又あんな唄をうたつてゐる。もう好加減によせば可いに……。わしはあれを聴く度になんだかひや／＼してならぬ。はじめは廓で唄ひ出したのださうだが、今ではこゝら一面に流行つて來た。

お時　こゝらでは幾ら流行つても構はぬが、お江戸のまんなかへだん／＼に擴まつたら、殿様の御身分にもかゝはること。あんな流行唄は早くやめて貰ひたいものだ。(嘆息して) おゝ、やがて日がくれる。どれ、行水の湯でも沸して置かうか。これ、十吉。その蚊いぶしを斷やさぬやうに氣をつけておくれよ。

十吉　あい、あい。

(お時は奥に入る。蛙の聲きこゆ。十吉は蚊いぶしを煽ぐ。村の娘お米、浴衣にて出で、内を窺ひてつかつか入り來る。)

お糸　十さん。
十吉　おゝ、お米さんか。
お糸　おふくろさんは……。
十吉　おふくろは奥にゐるが、なんぞ用かえ。
お米　いえ、おふくろさんよりもお前に聞きたいことがあつて……。
十吉　あらたまつて私に聞きたい事とは……。
お米　ほかでもないが、この頃お前の家に來てゐる美しい女の人、あれはお前のお嫁さんかえ。
十吉　飛んでもないことを……。（奥を見かへる）　あれはそんな人ではない。第一にわしとは年が違ふものを。
お米　年が違ふとて、年上の女房を持つ人も、世間には澤山ある。ましてあのやうな美しい人だもの……。
十吉　それはお前の邪推といふもの。あのお人はよんどころない譯があつて、さるお方からあづかつてゐるのだ。
お米　いえ、いえ、それは噓であらう。わたしをだまして何時の間にか、あんな美しい嫁御を貰つたに相違ない。（泣く）
十吉　（迷惑する）　お前とわしとは、表向きの祝言こそせぬけれど、兩方の親たちも承知の上で、末は夫婦ときまつてゐる仲だ。なんでほかの嫁などを貰ふものか。積つてみても知れたことではないか。

お米　そんならあれは何ういふ人で、どこの誰からあづかつたか、はつきり云つて聞かして下さい。（詰寄る）
十吉　さあ、其人は……。（奥を憚る）
お米　それは云はれまい、云はれぬ筈。（涙をぬぐふ）　おまへは一昨年から三年越し、よくも〳〵わたしをだましてゐた。恨は屹と……。覺えてゐるがいゝ。
（お米は持つたる手拭を十吉に打ちつけ、蓮池へ走りゆきて飛び入らんとす。十吉は椽より飛び下りて抱きとめる。）
十吉　あゝ、これ、途方もないことを……。まあ、待つた、待つた。
お米　いゝえ、放して、殺して……。
（二人は爭ふ折柄、奥の障子をあけて、大菱屋の綾衣、素人風にこしらへて出で、斯くと見るよりこれも駆け出でてお米を支へ、十吉と共にもとの椽先へひき戻す。お米は泣き伏す。）
綾衣　十さん、この兒は……。
十吉　（きまり悪げに）　これはお米といふ近所の娘で……。
綾衣　（鷹揚に）　もし、お米さんといふお兒、泣くことも怒ることもなんにもない。わたしはこの十さんのお嫁になるやうな人ではなく、かう見えてもほかに立派な男がある。お前のうたがひを晴すために、なにも彼も云つて

聞かせるが、このごろ流行るあの小唄……君と寢やろか五千石とろか、なんの五千石君と寢よ……と、妾はもとより此のあたりまで、人に歌はれるのは妾のことでござんすぞ。

お米　えゝ。

綾衣　相手のお人は五百石、それを五千石と云ひふらすは、尾鰭をそへた世間の噂。兎にも角にもそれほどの深い男を有つた妾が、今更よそのお嫁になられた義理か。もし、わかつたかえ。

（お米の顏を見る。お米はやうやく首肯く。）

十吉　もう斯うなれば隱さずにいふが、お前もかねて知つてゐる通り、家のおふくろがむかし御奉公をした番町の御屋敷の殿樣のおたのみで、この間からおあづかり申してゐる此のお人、わしの嫁などとは思ひも寄らぬことだ。

お米　（やう／＼涙をぬぐふ）そんならさうと最初から明してくれゝば、わたしも心配はしまいものを、隱さるゝほど疑ふは女の習……。（綾衣にむかひ）もし、おまへ樣、堪忍してくださりませ。

綾衣　なんの詫びることがあらう。うたがひ晴れたらわたしも嬉しい。お前さんは十さんと約束がある樣子、おたがひに仲よく暮しなさんせ。

お米　はい。

（恥かしげに俯向く。綾衣はふたりの顏をちつと見くらべる。）

綾衣　おまへさん達は羨ましい。たとひ藁葺屋根の下で、人に知られず一生を送つても、好いた同士が添ひとぐれば、世に生きてゐる甲斐がある。賣りものに花の綺羅をかざり、松の位の君達と、世に全盛をうたはれても、その身の果はなんとならう。人には運不運があるものでござんすな。

（二人はその意を解し兼ねて顏を見あはせてゐる。奥よりお時出づ。）

お時　これ、十吉。闇くならぬうちに、お寺へお迎ひに行つてはどうだの。

綾衣　ほんにけふはお盆の十三日……。（考へて）お寺はどこでござんすえ。

十吉　上野の傍ですから、さのみ遠くもございません。

お米　わたしも一緒に行きませうか。

お時　では、わたしの代りに拜んで來てくだされ。

（十吉は池のほとりへ行きて、花を折り取る。）

十吉　阿母さん、このくらゐでよからうか。

お時　おゝ、それでよからう。もつと御入用だとおつしやつたら、又持つて行つてあげるが可い。

綾衣　憚りながらわたしにも其花を序に折つてくださんせ

ぬか。

十吉　あい、あい。

（十吉は白蓮の花四五本を折りて綾衣にわたせば、綾衣は會釋して手に取る。）

綾衣　花のなかでも白蓮は、氣高い美しい花でござんすな。

（つくづく眺めてゐる）

十吉　では、阿母さん。

お米　行つてまゐります。

お時　歸りには日が暮れるであらう。氣をつけて來るがいいぞ。

（十吉は蓮の花を持ち、お米と連立ちて出でゆく。綾衣はあとを見送る。）

綾衣　あのふたりは仲が好さそうでござんすな。

お時　どつちもまだ子供で一向に埒がござりませぬ。（云ひつゝあたりを見かへる）時に綾様、お前さまに些とお話し申したいことがござりますが……。

綾衣　それは又あらたまつて何でござんすえ。

（綾衣は竹緣の端に置きたる手桶に蓮の花をはさみて、座にかへる。）

お時　お前様とはまだ昨今のおなじみで、委しいお話もしませなんだが、わたくしはその昔番町のお屋敷に御奉公して、殿様の奥様にはお乳をあげた者、その御縁で今日まで相變らずお出入をするうちに、三年前から殿様とおまへ様とは深い仲、請り請つて廓をぬけ出し、差當りはわたくしの家に隱まつてくれとのお頼みで、この月はじめからお世話いたして居りますが、それがために殿様のお身に難儀のかゝることを、お前さまは御存じか。

綾衣　それは疾うから知つてゐます。廓通ひが度かさなつて、自然お上の首尾をそこね、小普請入りを仰せ付けられたこと、いつぞや主からも聞きました。

お時　さあ、その小普請入りは去年の暮、それでも行跡が直らぬとあつて、親類縁者の方々が御相談の上で近々に座敷牢とかいふ噂。この先へ今度のことが知れたら、どのやうな大事が出來しようかと。それが案じられて此頃は、夜の目も碌に合はぬくらゐ……。なにをいふにも五百石のお家にかゝはること……。おまへ様、察してくだされ。（涙を含みて搔き口說く）

綾衣　では、わたしがいつまでも附き纏うては、主の難儀となるによつて、切れてくれろとでも云はんすのか。

お時　申しにくい事ではござるが、もし聞きわけて、廓へ戻つてくださればなう。

綾衣　ほゝゝゝ。なるほどお前のこゝろでは、五百石のお家が大事であらうが、主とわたしの戀を唄うた此ごろの流行唄を、お前はなんと聞きなさんした。なんの五千

石君とえゝ……」五百石や千石はおはぐろ溝へ流す白粉の水もおなじこと、百萬石でも買はれぬは、廓の女のまことでござんす。

（お時はあきれて其顔を見る。）

綾衣　（いよ／＼冴りがに）それほど卑い女の誠を五百石で買つたとおもへば、廉いものではござんせぬか。おたがひに惚れたが因果、あすがほどのやうなことがあつても、わたしを恨んでくださんすな。

お時　では、殿様のお命にかゝはるやうなことがあつても……。

綾衣　殿様が死ねばわたしも死ぬまでのこと。殿様が斯うなつたはわたしの爲、わたしが斯うなつたも殿様の爲、云はゞ両方が五分五分で、粹にかけたら善い悪いはござんすまい。わたし一人が悪いやうに思はんすは、あんまり身勝手でござんせうぞ。

（云ひまくられてお時は取付く島もなく、唯うつむきて嘿然としてゐる。淺草寺の鐘の聲きこゆ。）

綾衣　今鳴つたのは淺草の暮六つ……。おふくろさん、行水のお湯は沸きましたか。

お時　おゝ、すつかり忘れてゐましたが、お湯は疾うに沸いてをります。殊にお前様は忍びのお身の上、あまり端近に長居しては……。

綾衣　では、髪を洗ふ行水に、からだを淨めて來ませうか。

（綾衣は起つて奥に入る。）

お時　よし原の花魁といふものは、さて／＼強いもの。今のおそろしい劍幕では、いくら妾が氣を揉んでも、殿さまと手を切つて、国へ歸るなどとは思ひもよらぬ。あゝ、困つたものだなう。（思案に暮れつゝ表をみる）おゝ、いつの間にか日が暮れた。どれ、お迎ひ火でも焚きませうか。

（お時は奥より焙烙に苧がらを入れたるを持ち來りて門に出で、燧をうちて迎ひ火を焚き、またその火を燈籠に移す。苧殼やうやく燃えあがれば、お時は火にむかひて拝む。蟲の聲きこゆ。藤枝外記、忍びやかに出で來り、迎ひ火の烟のなかに立つ。お時は透しみる。）

お時　おゝ、殿様……。お召物が白いので、わたくしは幽靈かと思ひました。

外記　いや、幽靈かも知れぬぞ。たとひ魂は生きてゐても、からだは已に死んでゐる外記だ。むかひ火の烟に送つて來た。（さびしく打笑みつゝ内に入る）

お時　ほかに誰も居りませぬ。御遠慮なく、さあお通り遊ばしませ。

（外記はうなづきて縁にあがる。お時は手桶の水にて

迎ひ火を消して、おなじく内に入る。）

お時　どうもひどい蚊でござります。（團扇にて煽ぐ）

外記　いや、構ふな、構ふな。（白扇をひらきて遣ひながら）さて、乳母。このたびは彼女のことに就て、いろいろ厄介に相成るなう。

お時　その御挨拶では痛み入ります。何分にもこの通りの手狹といひ、親ひとり子ひとりの無人でござりますので、一向にお世話も行きとゞきませぬ。

外記　時に十吉は留守かな。

お時　はい。夕方からお寺まゐりに出ましてござります。

外記　先度まゐつた節にも生憎留守、兎角にかけ違つてしばらく逢はぬが、別に變つたこともないか。

お時　おかげさまで達者で居ります。

外記　それは重疊。十吉とわしとは乳兄弟、達者と聞けば嬉しいぞ。

お時　ありがたうござります。

（奥より綾衣、行水をつかひて夕化粧美しく、衣服も着かへて出で、嬉しげに外記のそばに坐る。）

綾衣　よく來ておくんなんしたね。ほゝゝゝ。隱さうとしても廓の訛りがつい出てならぬ。堪忍してくださんせ。

外記　いや、その廓訛りが面白いのだ。併しこゝに忍んでゐることは誰も心附くまいな。

綾衣　燈臺下暗しとやらで、こゝとは流石に氣が注かないやうでござんす。

お時　おゝ、暗くなつたのに、まだ行燈も點さずに……。唯今持つてまゐります。

（お時はその場を外す心にて奥に入る。）

綾衣　もし、さつきの文を見て下さんしたか。

外記　いや、まだ見ぬ先に破られた。

綾衣　破いたとは……誰が……。

外記　家來の三左衛門めが、横合から取上げてずた〳〵に引裂いてしまつた。憎い奴めが……。

綾衣　さして大事の文ではなけれど、引裂いてしまふとはあんまりな……。では、御家來衆までが、文の通路の邪魔をするのでござんすか。

外記　おゝ、家來は勿論、をぢも妹も親類一門、寄つて集つてふたりが仲を裂かうとする。四方八方みな敵だ。

綾衣　なるほどさうでござんせうな。主はいよ〳〵座敷牢へ入れられるとか聞きましたが、そんなことがござんすのかえ。

外記　むゝ、無いともかぎらぬ。三年越しおまへに馴染んで、廓通ひの數かさなれば、勤向きの首尾もよろしからず、親類共も心配して、やれ詰腹の、座敷牢のと、なにか頻りに騒いでゐる。事によると、支配頭よりの沙汰と

して甲府詰を申渡されうも知れぬ。して、そのやうなことを誰から聞いた。

綾衣　こゝのおふくろさんから聞きました。

外記　それに就て乳母はなんと云つてゐた。

綾衣　心配で夜の目も碌にあはぬくらゐを……。

外記　それほどまでに心配してくるゝか。外記が七つになるまで手塩にかけ、生みの子のやうに可愛がつてくれた乳母だ。わしのよくない評判を聞いては、案じるも無理ではない。しかし今更案じたとてなんとならう。兎かく世のなかは面白く暮すが得ではないか。いや、面白いと云へば、いつもは手に取るやうにきこえる廓の騒唄が、今夜は一向きこえぬやうだな。

綾衣　主にも似合はないことを……。けふは盆の十三日で、店は休みでござんすから、三味線も鼓も聞えますまい。

外記　なるほど今日は十三日……。先月かぎり廓へ足踏みも致さぬが、ゆうべは仲の町の草市であつたな。市は相變らず繁昌したことであらう。

綾衣　ほんにさうでござんす。主に初めて逢うたのも、一昨年の草市の晩でござんした。

外記　おゝ、同役の者に誘はれて、生れて初めての吉原見物、草市で押しかへされる混雑のなかを、唯うろ／＼とあるいてゐると、向うから來たおまへの袖に刀の柄を引きかけて、すらりと抜けて落ちようとするのを、あわてて押へるそのはずみに、思はずおまへの袖までも一緒につかんで引き止めた。そのとき顔を見あはせたが、馴染の始め、戀のはじめ、縁といふものは不思議ではないか。

綾衣　あの晩はいつもよりも賑かで、大門をくゞつたお武家も大勢、仲の町へ見物に出た花魁も大勢、その大勢のなかで主とわたしとが、丁度たがひに行き逢うたのは、よく／＼深い縁でござんせう。

外記　そのときの刀はこれだが……、（わが刀を見る）鍛へは國俊、家重代……。先祖はこれで武名をあげたと、老人共からたび／＼聞かされたものだ。

綾衣　ふたりに取つては結ぶの神のその刀を、わたしにもよく見せてくださんせ。（刀をうけ取りて鞘のまゝに打眺め）よい刀で切られたら、ひと思ひに死なれるでござんせうな。

外記　おゝ、鍛へのよい業物なら、苦みも痛みもない。

綾衣　切つても突いても、苦みなしに……。

外記　たゞ一思ひに死なれるのだ。

（云ひつゝ刀をこなたへ取らんとすれど、綾衣は鞘をつかんで放さず。二人は顔を見あはせて少時は詞もなし。この時、流しの新内語りが三味線を持ちて出で、この家の門に立つ。）

新内（かれて二人が取りかはす、起請誓紙もみんな仇、どうで死なんす覺悟なら、三途の川もこれ此のやうに、ふたり手をとり諸共と、なぜに云うてはくださんせぬ。……

（門にてこの文句を語るうちに、外記は刀を取りてわが傍に置き、二人は默つて頭を藉いてゐる。そのあひだに二人は云ひあはさねど事で死なんと覺悟し、綾衣は手桶にさしたる蓮の一枚を持來り、緣に打ちつけて花を碎き、この通りに……と外記の顏をみる。外記もうなづく。奥よりお時は角行燈をさげて出づ。）

お時　手が寒かつてゐますよ。

（新内語りは唄をやめて、流しを彈きつゝ去る。）

お時　今夜は廓が全休みなので、こんなところまで新内の流しが來た。（ひとり言を云ひながら、行燈を二人のそばに置く）

外記　これ、お時。まことに氣の毒だが、なにか酒肴を見繕つて來てはくれまいか。

お時　はい、はい。かしこまりました。

外記　（紙入れより金を出す）では、これでよいやうに頼むぞ。

（綾衣は取次ぎてお時にわたす。）

綾衣　とんだ御苦勞でござんすな。

お時　この邊には碌な物もございませんから、田町まで一走り行つてまゐります。

外記　急ぐにはおよばぬ。氣をつけて行け。

お時　では、留守をおたのみ申します。

（お時は奥に入る。蟲の聲しきりに聞ゆ。外記と綾衣はしばし詞もなかりしが、綾衣は起つて奥をうかゞふ。）

綾衣　おふくろさんは裏口から出て行きました。

外記　おゝ、左様か。世のなかは面白く暮すが得だと、先刻は申したが、その面白い夢も半年の間で、おそかれ早かれ僅か數年か[illegible]か、おまへとも辛い別れをせねばなるまい。

綾衣　では、いつそ死んでくださんすか。（小聲に力をこめて云ふ）

外記　おまへも死ぬか。

綾衣　たとひどのやうに戀ひこがれても、生きて添はれる身ではなし、先月廓をぬけ出してからは、いつ何時でも死ぬ覺悟で、毎日行水に身を淨め、夕化粧の身だしなみを缺かしたことはござんせぬ。

外記　やれ、家督の身分のと、さまざまの手枷足枷で、人を責めようとする窮屈な世の中、蜘の巣にかゝつた蝶々

蜻蛉もおなじことで、命たのお花の露も吸はれず、羽翅をしばられて悶死、あゝたんの因果で武士の子に生まれたか。冥土へゆけば家柄もなし身分もなし、武士も町人も自他平等、うるさい此世にゐるよりも優しであらうよ。

綾衣 では、けふかぎり五百石のお家を捨てゝも、主は惜うはござんせぬか。

外記 命までも捨てゝかゝつたからは、五百石の家がなんであらう。先祖が慶長元和の戦ひに、見ごと敵勢を打ち破つて、鬨の聲をあげた誇りの笑顔も、外記が世間の人を闘つて、あらゆる邪魔をうち拂ひ、恋と意地とを立て通した最期の笑顔も、鏡に映せばおなじ顔で、勝利の満足に變りはあるまい。

綾衣 それを聞いて安心しました。主は立派なお旗本、わたしは遊女の身なれども、人の命に二つはない。今このふたりが死ぬ際に、お家のことなどを必ず念にかけてくださんすな。

外記 はて、くどい。外記をそれほどの卑怯者と思ふか。先祖傳來の家を捨てゝ、冥土でふたりが新しい家を作らう。(笑ふ)

（大菱屋の若い者喜介出て來り、門口より内をうかゞひて、更に外の方にむかつて差招けば、おなじく仲間と思しきは駕籠夫に駕籠を舁せて出で、たがひに囁き合ひて、喜介は先づ門をあけて入る。綾衣は透し視ておどろく。）

綾衣 や、おまへは喜介……。

喜介 へい。喜介がお迎ひにまゐりました。

（外記は綾衣と顔を見あはせる）

外記 おゝ、貴様は喜介か。なにしにまゐつた。

喜介 これは殿様……。どうも失禮をいたしました。もし、花魁え。こゝで兎や斯うは申しません。まあ、すなほに歸つて下さい。

（綾衣答へず。）

喜介 先月の晦日にかけ出したぎりで音沙汰なし、相手は大抵見當がついてゐるものゝ、表沙汰にしたら又迷惑する人もあらう。（外記を尻目にみる）と、内證で手わけをして探してゐましたが、眼と鼻の間のこんなところに隱れてゐようとは、今の今まで些とも知りませんでした。さあ悪いことは言ひませんから、一緒に歸つてください。御内證の方へは私達からまた好いやうに取なしてあげますから……。さあ、花魁……。

外記 いや、綾衣を連れて歸ることは罷りならぬ

喜助 え、御不承知でございますか。

外記 いかにも外記が不承知だと、立歸つて主人にさう申せ。

喜介　(せゝら笑ふ) へゝ、子供の使ぢやございません。おやあ、貴樣。どうしても花魁を渡しちやあ下さいませんか。

外記　えゝ、わからぬ奴だ。歸れ、歸れ。

喜介　へえ、左樣でございますか。

(云ひつゝ隙をみて外記の刀を奪ひ取り、それと見かへれば、外にかくれたる伊平忠藏はかけ込みて、矢庭に綾衣の手をとらへ、無理に引立てゆかんとす。外記は立寄つてなげ退ける。そのあひだに忠藏は綾衣を引立つてゝ庭に降りる。外記は追はんとするを喜介は支へる。伊平も這ひ起きて外記に組みつく。駕籠夫は忠藏をたすけて、綾衣を無理に駕籠の中へ押入れんとす。外記は焦つて刀を奪ひ返し、ひき拔いて振りあぐれば、忠藏は恐れて綾衣をうち捨て、駕夫は空駕籠をかつぎ、共に表へ逃げ去る。外記は刀をふりあげて追ひ立つれば、喜介も伊平も拔けつくゞりつ逃げまはりて、これも遂に門外へ逃げ去る。外記はあとを見送りて、門に錠をかける。)

外記　思ひもよらぬ邪魔が這入つた。

綾衣　喜介の顏をみた時には、わたしもはつと思ひました。

外記　切つて捨つるは易けれど、それも無益の殺生と命ばかりは助けて歸した。

綾衣　一旦は追ひかへしても、わたしの居所が知れたからは又出直してくるは知れたこと……。

外記　時をうつさば乳母も歸らう。

綾衣　十さんやお米さんも戻つて來よう。(向うを見る) あのふたりは生きて添はれる身の上……。

外記　死ぬのは忌か。

綾衣　なんの。ほゝゝゝ。

外記　はゝゝゝ。

(顏をみあはせて笑ふ。題目太鼓の音遠くきこゆ。)

外記　又もや妨げのないうちに……。綾衣、來やれ。

綾衣　あい。

(二人は縁にあがり、綾衣は座敷の隅より古びたる半屛風をもち來りて、逆さに立てまはし、縁側の手桶より蓮の花三四本を取り來る。)

綾衣　さつき主に見せたのは、花ぢや・いすといふ覺書の謎、たがひに解けて斯うなるからは、ふたりお手を取つてあの世へゆき、蓮の臺に半座をわけて、千年も萬年も住む心……。これ見てくださんせ。

(蓮の花をむしりて、二人の前にその花瓣を雪のごとくに敷く。)

外記　成程これは蓮の臺、この世からなる極樂淨土か。いや、風流で面白い。

綾衣　して、書置の御用意は……。
外記　書置などと云ふものは、この世に未練のある徒が、亡き後を思うて愚癡をかき殘すか。或はこの世に罪あるものが、許狀代りに書きのこすか、二つにひとつ。外記はこの世に未練もなく、また懺悔すべき罪もない。笑ふものは笑へ、誹るものは誹れ、なんとでも云はしておけ。申譯めいた書置などは要らぬことだ。
綾衣　ほんに主のいふ通り、褒めようが笑はうが、それは世間の人の心まかせで、どつちでも關はぬこと。ふたりの心は二人よりほかに知る人はござんすまい。
外記　この世界は二人の世界だ。
綾衣　未來までもふたりの世界。
外記　綾衣……。
綾衣　殿樣……。
（二人は顏を見あはせて打笑む。）
外記　支度いたせ。
綾衣　あい。
（外記は身づくろひして刀をぬく。綾衣は起つて佛壇に線香をそなへ、屛風を二人の前に立てまはす。淺草寺の鐘の聲。切子燈籠は夜風にゆらめく。）

二

同じくこの家の裏手。中央は臺所口にて繩簾が垂れ、左右は板羽目、柳の立木などあり。風の音にまじりて題目太鼓の音遠くきこゆ。
（十吉とお米は足早に出づ。）
十吉　急いでも夜道は捗取らぬものだ。併しまだ五つにはなるまい。
お米　おふくろさんが嘸ぞ待つてゐるんでござんせう。
十吉　お前の家でも案じて居よう。あいにくに曇つて暗い晩だ。
お米　來るみち〳〵も方々の家で、おむかひ火を焚いて、盆燈籠をつけて、なんだか寂しうござんすな。
十吉　私と一緒だ。怖いことはない。
（打連れて上の方の門口へ行きしが、また出で來る。）
十吉　はて、不思議な。表の戶には鍵をかけてある。
お米　わたし達の歸りが遲いので、おふくろさんは待兼ねて、どこへか買物に行つたのではあるまいか。
十吉　大方そんなことかも知れぬ。兎もかくも裏口から這入るとしよう。眞暗だから足もとに氣をつけて……。
お米　あい、あい。
（二人は臺所口へ廻らんとする時、柳は夜風になびきて、お米の顏を打つ。これと同時に稻妻ひらめく。）
お米　あれッ……。なにやら光る物が……。（十吉に取り

つく）

十吉　今のは螢であらう。秋になると毎晩光ることがある。

お米　わたしは又、人魂かと思ひました。

十吉　なに、人魂……。かういふ晩にそんな気味の悪いことを云ふものではない。

（お時は徳利をさげ、風呂敷につゝみたる皿を持ちて出で、ふたりを透しみる。）

お時　十吉さんぢやないか。

十吉　おゝ、お時さん。

お米　どこへ行きなされた。

お時　お屋敷のおたのみで田町まで買物に行つて来た。

十吉　なに、お屋敷が……。

お時　それ、番町の……。

十吉　むゝ、番町の殿様かえ。

（お時は目にて會釋して、木戸口に入る。十吉とお米もつゞいて門をくゞり入る。團扇太鼓の音絶えずきこゆ。）

三

もとの家に戻る。道具屏風はもとの如くに立て廻してあり。

お時　（奥より出づ）どうも遅くなりました。

（云ひつゝあたりを見廻し、やがて屏風の中を覗きて、あつと驚き倒る。奥より十吉お米も走り出づ。）

十吉　阿母さん、どうしたのだ。だしぬけに大きな聲を出して……。

お米　ほんたうにびつくりしました。

お時　吃驚せずにゐられるものか。まあ、あれを見たがよい。

（言ひながら屏風のうちを指させば、十吉等は不審さうに覗き込む。）

十吉　や、殿様が腹を切つて……。

お米　花魁が咽を突いて……。

十吉　こりやあ飛んだことになつた。

（三人は顔を見あはせて、しばし詞も出です。吉田五郎三郎は中間角助に提灯を持たせて出づ。）

角助　旦那、あれでございます。

五郎　おゝ、左様か。案内いたせ。

（角助は先に立ちて門に来る。）

角助　もし、御免なさい、御免なさい。（門をたゝく）

十吉　（縁端に出る）はい、はい。どなたでございます。

角助　わたしだ。今時お使ひに来た角助だ。

十吉　おゝ。角助さん。好いところへ……。

（あわてゝ門をあくれば、五郎三郎は進み入る。）

五郎　これ、外記は居るか。

お時　おゝ、市ヶ谷の殿様ではござりませぬか。お情ないことになりましてございます。（屏風を指さして泣く）

五郎　なに、外記が如何いたした。

（五郎三郎は縁をあがりて屏風のうちを覗き、はつとしたるが、更に屏風のうちに入りて、二人の死骸をあらため、再び出で來る。）

五郎　けふの晝間の一條といひ、かれが屋敷を出でし折に、合點のゆかぬ節もありしと、三左衞門の知らせに付き、とりあへず跡を慕うてまゐつたが、よもやかゝる始末とは……。武士たるものが色に迷ひ、あまつさへ見苦しき死恥を晒して、家を汚し、名を汚し、親類縁者の面にも泥をぬる。かへす／＼も憎い奴め。

角助　では、もしや殿様は……。

五郎　言語道斷の大呆氣……。遊女と相對死をいたしたわ。

角助　えゝ。

五郎　いや、かやうな者には構ふにおよばぬ。角助、まゐれ。

（五郎三郎は席を蹴つて起たんとするを、お時は止める。）

お時　もし、殿様。御立腹は御もつともでござりますが、五百石のお家を捨てゝ、かうおなり遊ばすのはよく／＼のことでござりませう。

十吉　わたくし共が差出たやうではござりますが、甥御様御不憫とおぼしめして……。せめてお線香の一本も、供へてあげてくださりませ。

角助　なるほど皆さんのいふ通り、お家を捨て、お命をすてゝ、覺悟をおきめなさるには、云ふにいはれぬ深い仔細もござりませう。どうか幾重にも御勘辨をねがひます。

（左右より人々に縋られて、五郎三郎もすこし猶豫ふ。唄の聲、遠くきこゆ。）

唄〽君と寢やろか、五千石とろか。

お時　あれ、あの唄をお聞きなされましたか。

五郎　むゝ。

唄〽なんの五千石君と寢よ。

（五郎三郎は耳をかたむけて聽く。唄の聲遠く消えて、蟲の聲。）

――幕――

名立崩れ

登場人物

漁師　五郎兵衛
女房　お仲
娘　お今
老たる旅僧
若き旅人
嫁入する娘　お雪
お雪の母
前の世の人
漁師
濱の男女
小兒など

越後の直江津より糸魚川に通ずる濱街道のふるき漁師町にて、名立といふ所。舞臺は北の海に面せる暗き家のうちにて、正面に繩暖簾を垂れたる出入口あり。下の方はやぶれたる壁にて、舞臺のまへの方へ折り曲げて竹窓あり。窓につゞいて貝殻の附きたる低き垣あり。

出入口の上の方はおなじ壁にて、これにつゞいて前づらに張り出したる家臺あり。家臺の横手には破れたる障子をしめ、正面は竹窓にて、窓の下にも貝殻のつきたる垣あり。家内の大部分は土間にて、壁のあたりには簑笠などをかけ、櫂その他の船具漁具なども立てかけてあり。流れ木を束ねたるが積みてあり。土間の中央には石にて爐を設けたり。家の外は暗き海をのぞみて、下の方には磯馴松の大樹あり。

今より百六十餘年前、寶暦年間の冬のはじめ、陰りて暗き日の午後にて海の空すこしく紅くみゆ。

（主人の五郎兵衛、五十餘歳。女房お仲、四十餘歳。近所の漁師甲乙の二人、いづれも切株に腰うち掛けて、爐の焚火をかこみゐる。旅の僧一人、おなじく爐の傍らにあり。娘お今、十七八歳、ひとり其群をはなれて、下の方の竹窓より海の空をながめてゐる。海の音静にきこゆ。

人々は消えかゝる爐の火をながめて暫時の沈默。五郎兵衛はしづかに起ち上りて流れ木の一束を持ち來り、繩を解きて爐にくべる。人々は矢はり無言。火はやがて、燃えあがりて人々の暗き顏を照らす。）

漁師甲　おゝ、明るくなつた。

漁師乙　暖くなつた。

（人々の考はみな沈めり。）

お仲　なぜ此頃は晝もこんなに暗いのだらうねえ。

漁師甲　冬になれば北の國はいつでもこんなに暗くなるのだ。

漁師乙　さうして海はだん／＼に暴れてくるのだ。

僧　いや、海は暴れてゐない。氣味の悪いほどに靜まつてゐる。

五郎兵衛　毎年十月の末から、こゝらではそろ／＼と霙や霰や雪がふり出して、沖はだん／＼に暴れて來るのだが、今年にかぎつて風も吹かぬ、雪も降らぬ。毎日毎日空は薄墨のやうにどんよりと陰つて、たゞ底冷がするばかりだ。

お今　お父さん。海の空がだん／＼に紅くなつて來ました。

五郎兵衛　海の不思議は今日にはじまつたことではない。半月ほども前から毎日紅く見えるのだ。岸の方からみると、海が紅く見える。海の方から見ると、岸が紅くみえる。つまり海も陸もこゝら一面に紅いのだらうよ。

お今　それでも今日はきのふよりも一昨日よりも、もつともつと紅くみえて來ました。

僧　だん／＼に紅くなりますかなう。

（僧は瞑目してかんがへる。）

漁師甲　なぜ紅く見えるのだらう。

漁師乙　不思議なこともあるものだなう。

（お今は猶も海を見つめてゐる。）

五郎兵衛　一昨日おれが沖へ出て、半日ばかりも網をおろしたが、雜魚一尾罹らないので、えゝ忌々しい。もうあきらめて歸らうかと、ふいと岸の方を振返つて見ると、こゝらの天も地も一面にうす紅く見えた。もしや火事でも起つたのではあるまいかと、早々に岸へ漕いで戻ると、なんのばか／＼しい……。（嘲るやうに笑ふ）そのあかいものは霧のやうに、虹のやうに、幽靈のやうに、次第にぼんやりと薄くなつて、陸へくるまでにはすつかり消えてしまつた。と思ふと、今度は今來た海の方が紅く見えるので、どつちだかおれにも一向判らなくなつて來た。

お仲　よそから見ると紅いほどなら、いつもよりも少しは明るさうなものだが、晝間でも却つてこんなに薄暗いといふのは、さつぱり理窟がわからないねえ。

お今　（考へて）わたし達には判らないけれど、これには何か仔細があるに相違ない。ねえ、阿母さん。

お仲　どうも仔細がありさうなことだ。

漁師甲　おれ達もこゝに長く住んでゐるが、こんな不思議は初めて見た。

漁師乙　おれもつひぞ聞いたことがない。

僧　わしも見たことはないが、聞いたことはある。

（お今も爐のそばに來る。）

お今　御出家様。お前はその話を御存じでございますか。

僧　おゝ知つてゐる。北國の長い濱邊にゆき惱んだ旅僧が、たとひ半晌(はんとき)でもこの軒下に休ませて貰うて、あたゝかい茶を振舞はれ、あたゝかい焚火の馳走になつたからは、私もそれだけの禮をせねばならぬ。こなた衆の心得のために、わしの知つてゐるだけのことを話して聞かさうかの。

お今　どうぞ聞かして下さいまし。

漁師甲　して、それは何處のことでござるな。

僧　どこと云つて……。やはりこゝで起つたことだ。

漁師乙　では、昔もこゝにこんなことがあつたのか。

僧　あつた、唯だ一度あつた。（重い聲音）しかもそれは昔……何千年も過ぎ去つた大昔のことだ。月も日も黒布(くろぬの)に蔽はれたやうに暗くなつて、海の空は……今のやうなものではない、もつと〳〵血のやうに紅くなつた。が、その仔細は誰にもわからぬ。いづれも唯不思議だと云ひ合つてゐると、ある日のこと、天地が俄に崩るゝやうな凄じい響きがして、こゝら五里四方の土地が一面にめり込んでしまつた。地震どころの騒ぎではない。あつといふ間もあらばこそ、家は勿論、人も鷄も犬も猫も、深い深い奈落の底へ一時に沈んでしまつたのだ。

（人々は顏を見あはせる。）

お今　して、一人も助かつた者はございませんでしたか。

僧　わづかに一人助かつた者があつた。その人の口から此のおそろしい話が後の世に傳へられたのだ。

漁師甲　運のいゝ人だなう。

僧　運がいゝのではない、その人が賢いからだ。なんでも近いうちに今の世が亡びるといふことを未然に覺つて、遠いところへ逃げてしまつたので、この禍を逃れたのだ。

お仲　その沈んだ跡はどうなりました。

僧　まだ判らぬか。即ちこゝだと云ふのに……。（草鞋にて土間の土を踏んでみせる）こゝの土が沈んで落ちると、うしろの山から新しい土が崩れて來て、舊い世界のあとを埋めてしまつて、別に新しい世界が出來た

漁師甲　不思議だなう。

僧　不思議でない。それが自然の道理だ。で、そこへほかの人間が集まつて來て、その上に新しい家を建てた、新しい町を開いた。それが何千年もつゞいて繁昌して、今日まで斯うして傳はつて來て、こなた衆が住んでゐるのだ。

お今　では、わたし達の住んでゐる土の下には、むかしの町が埋まつてゐるのでございますか。昔の家も……むかしの人も……。

僧　その深さは判らぬが、兎にかく我々が踏んでゐるこの土の下には、昔の家も……むかしの人も……つまり昔の世界がすべて埋められてゐると思へばよい。今も云ふ通り、その上に新しい土がかぶさつて、新しい世界が出來て、こなた衆が現在かうして住んでゐるのだ。

お今　もし、御出家樣……。（すり寄る）

僧　なんでござるな。

お今　さうしますと、海の空がこの頃毎日紅くみえるのも……もしやその大昔の時のやうに、今の世界がまた沈んでしまふ前兆ではございますまいか。

僧　さあ、さういふ怖ろしいことの再び無いやうに、わしは心から神佛に祈つてゐまする。

（人々は顔をみあはせて默す。五郎兵衞は衝と起ちて僧の腕をつかむ。）

五郎兵衞　出て行つて貰はう。

僧　（徐かに見かへる）出てゆけと云はるゝのか。

五郎兵衞　（怒鳴る）おゝ、一刻も早く出て行つて貰はう。とんでもないことを云ふ乞食坊主だ。なんだか寒さうな風をして人の門に立つてゐるから、氣の毒だと思つて呼び込んで、茶を飲ませてやる、火にあたらせて遣る。その禮になにを云ひ出すかと思へば、夢のやうな大昔のことを口から出任せに饒舌り散して、この世界が亡びるの、この土地がめり込むのと……そんな嘘八百の御說教は聞きたくないのだ。（冷笑ふ）こつちがうまく／＼その手に乘つて、ありがたい御出家樣、どうしたらこの災難を逃れませうと泣き附いたら、やれ祈禱をするの、護摩を焚くのと、好加減な名目をつけて、正直なおれ達のふところから路用の錢でもまき上げて行くつもりだらう。呆れ返つた騙り坊主だ。いくら田舍の人間でも、今時そんな手は食はないから、そこらの海の鹽辛い水で面でも洗つて、もう一度出直してくるが可い。

お今　（制して）お父さん。まあ、そんな失禮なことを………。

五郎兵衞　なにが失禮だ。乞食坊主なら分相應に、殊勝らしく手をあはせて賴むが可い。さうすれば俺だつて佛心を出して、二文や三文は施して遣るまいものでもないが、見て來たやうな嘘を吐いて、あたまから俺達を嚇してかからうとは、あんまり人を見縊つた奴だ。

お今　でも、海の空の紅いのは……。

五郎兵衞　いや、その不思議につけ込んで、這奴が途方もないことを云ひ觸らすのだ。何千年も前のことなぞが、嘘だかほんたうだか判るものか。

漁師甲　なるほど、さう云へば嘘らしいところもある。

漁師乙　俺もうつかり釣込まれて、さつきから默つて聽い

てゐたが、考へてみると何うも可怪いぞ。さては五郎兵衛殿の云ふ通り、見て来たやうな嘘をついて、祈禱料でも占得る料簡ではないか。

お仲　人間の住んでゐる土地が、不意にみんなぼかぼかと落ちてしまふなぞとは、どうもほんたうらしくない話だ。

僧　（詞荒かに）若しほんたうであつたら何うさつしやる。

五郎兵衛　えゝ、やかましい。うぬ等のやうな騙り坊主は、簀巻にして代官所へ突き出すのが土地の法だが、法衣に免じて今日は赦してやる。足下の明るいうちに早く出て行けっ。

お今　もし、お父さん。

五郎兵衛　お前もやかましい、黙つてゐろ。さあ、坊主。かう化の皮があらはれたら、義理にもこゝには居られまい。出て行け、出ていけ。

（五郎兵衛は僧を提へて、手あらく縄暖簾の外へ突き出す。お仲は僧が置き忘れたる笠と杖とを取りて暖簾口より外へなげ出す。僧は笠と杖とを拾ひ取りて悄然と去る。）

漁師甲　あの坊主め、自分に後暗いことがあると見えて、碌々口答へもせずに悄々と出て行つた。

五郎兵衛　嘘をつくにも事を欠いて、こゝら五里四方の土地が一面に沈み込んでしまふなぞと、縁起でもないことを云ふ坊主めだ。あんな奴が二度とこゝへ足踏みをしたら、代官所へ突き出すまでもない、簀巻にして海へたゝつ込んで遣らうよ。

漁師乙　いくらづうづうしい坊主でも、あのくらゐに化の皮を剥がれたら、もう二度とはこゝへ寄つて来まい。

お今　さうは云ふものゝ、あれが尊いお上人様で、わたし達の難を救はう為にわざわざ御立寄りなされたのではあるまいか。

お仲　おまへは餘計な心配をおしでない。なんでもお父さんや阿母さんに任して置けばいゝのだよ。

お今　でも、御覧なさい。（外を指さして）あれ、あれ、海の空がさつきよりも[illegible]くなりました。

五郎兵衛　それとこれとは別のことだ。あの坊主めが何を知つてゐるものか。

（近所の娘お雪、十七八歳、髪を美しく結びあげ、新しき嫁入衣裳を着て、母と連れ立ちて入り来る。人々はその方に眼を向ける。）

母　今日は……。毎日お寒いことでござります。

五郎兵衛　おゝ、お雪坊と阿母さんか。やあ大層に美しくなつたな。（打笑む）

お仲　ほんたうに見違へるやうに[illegible]になつた。

お今　いよいよ今夜お嫁入ときまりましたか。

（人々は母子の周圍にあつまり視る。）

母　（嬉しさうに）けふが吉日だと云ふので、いよ〳〵遣ることに決めました。となりから隣へ行くやうなものですが、これも土地の習慣で、御近所へ一應お暇乞ひに連れて出ました。

五郎兵衛　それはなにしろ目出たいことだ。

漁師甲　それにあたりまへの嫁入とは違つて、お雪坊と婿殿とは去年頃から噂の立つた仲だ。

漁師乙　思ひ合つた同士の祝言だ。さぞ睦まじいことであらう。どうだ、お雪坊、嬉しくないか。

甲。乙。はゝゝゝ。

お雪　もうそんなに云つて下さるな。さつきから方々で嬲られて來ました。（恥かしげに俯向く）

お仲　（羨ましげに）なにしろ、まあまあお目出たいことだ。おゝ、おゝ、お嫁入の衣裳も大層立派に出來ましたね。

（お今と共に近寄りてみる。）

母　（やゝ誇るがごとく）はい。なにしろ一生に一度の晴でござるから、新潟までわざ〳〵誂へに遣りました。

お今　このくらゐ立派にお支度が出來れば、どこへお嫁に行つても耻かしいことはありますまい。

母　いえ、思ふばかりで一向にとゞきませぬ。では、皆さん。

お雪　あちらへ參りましても。相變らず宜しくおねがひ申します。

五郎兵衛　それは此方でも願ふことだ。まあ、めでたく祝つて行きなさるが可い。

母　ありがたうござります。

（母もお雪も溢るゝばかりの嬉しさを胸につゝみて、人々に會釋して去る。）

お仲　あの子も阿母さんもさぞ嬉しからう。このあひだからそんな話は聞いてゐたが、急に今夜ときまつたと見える。

五郎兵衛　婚禮などと云ふものは、人のことでも心持のいいものだ。あんな可怪な坊主が來て、縁起でもないことを云つて行つた跡へ、めでたい話を聞いたので、すこしは胸が納まつた。

漁師甲　この次はお今坊の番だが、もう内々は定めた相手があるだらうな。

漁師乙　そりやあ今時の若い者だもの、そこに如才があるものか。

お今　わたしのやうな氣の小さい者には、とてもそんなことは出來ませんよ。

漁師甲　どうだか的にはならない喃。おれももう一度嫁で

も貰ふ年にたつて見たいものだ。さうすれば先づ第一番にお今坊のところへ相談に來るかなあ。はゝゝゝ。

五郎兵衛　おまへならば立派な花婿樣だ。はゝゝゝ。おい、お仲。もう少し火を焚けよ。

お仲　おゝ、焚火がまた消えかゝつて來た。

（お仲は又もや流れ木の一束を解きて、爐にくべる。お今は窓にすがりて再び海の空をながめてゐる。ゆふぐれの鐘きこゆ。人々はしばらく默して火を圍む。）

漁師甲　もう日が暮れるか。冬の日は短いなう。

漁師乙　日が暮れて陸が暗くなると、海の方がいよ〳〵紅くなつて見えるのだ。

（五郎兵衛は默して流れ木を爐に焚べてゐる。漁師等は思ひ出したやうに、顏を見あはせる。）

漁師甲　時にあの坊主め、今頃はどこへ行つたらう。

漁師乙　あいつの云つたことはまつたく嘘だらうか。

漁師甲　さあ。よもやほんたうぢやあるまいとは思ふが……。

漁師乙　若しほんたうだつたら何うだらう。（やゝ不安らしく云ふ）

五郎兵衛　嘘だ、嘘だ、嘘にきまつてゐる。なるほど遠い遠い大昔の時分にはそんなこともあつたか知らねが、それから何千年といふ長い月日の經つあひだに、數限りのない人間が踏み固めて來たこの土地が、今更だしぬけに陷ちるの、窪むのと、そんな道理があるものか。はゝゝは。窪む土地ならもう疾うの昔にめり込んでしまつてゐる筈だ。

漁師甲　さう云へばそれも道理だ。（かんがへる）

お今　お父さん。海の方が、あれ、あんなになつて來ました。

五郎兵衛　えゝ、うるさい奴だ。默つてゐろ。

漁師乙　坊主の云つたことは嘘としても、海の紅くみえるのは何ういふ理窟だか判らぬなう。

お仲　それだから何だか迷ひも出るのだが、わたし達が幾らかんがへても追付くことではあるまい。

五郎兵衛　越中や能登の海の上には、時々に蜃氣樓が見えることさへあると云ふから、海にはいろいろの不思議があるのだらう。まして今年は雪が降らないから、陽氣の加減で斯んなことになるのかも知れない。そのうちに雪でも降つて來たら、不思議も自然に消えるだらうよ。

漁師甲　まあ、さう思つて安心してゐるよりほかはあるまい。ぢやあ、そろ〳〵歸るとしようか。

漁師乙　もう日が暮れるのに、いつまでおしやべりをしてゐるでもあるまい。

（漁師甲乙は爐のほとりを去る）

五郎兵衛　では、もう歸るのか。
漁師甲　とんだ長話をしてしまつた。
（漁師乙はお今の肩越しに窓よりのぞき見る。）
漁師乙　おゝ紅くなつた、紅くなつた。
漁師甲　そんな話はもう止さうよ。ぢやあ、五郎兵衛どの。
五郎兵衛　むゝ。
漁師乙　いつまでも邪魔をしました。
お仲　また明日、遊びに來なさいよ。
甲乙　あい、あい。
（漁師甲乙は暖簾口より歸り去る。海の音きこゆ。）
お仲　ふたりが歸つたら急にさびしくなつた。
五郎兵衛　日が暮れたらだん／＼に寒くなつた。おい、お今。いつまで表を見てゐるのだ。うつかりしてゐると風邪を引くぞ。
お今　あい。（矢はり海をながめてゐる）
五郎兵衛　あの乞食坊主めが馬鹿なことを云つたので、ふだんから氣の弱い娘が猶々心配してゐるやうだ。むやみに世界がひつくりかへつて、新しい世界なぞが出來てたまるものか。さつきも云ふ通り、この土地はおれ達の先祖代々から踏みかためて來たのだ。滅多にぐら付く筈はないから、まあ、まあ、安心してゐろ。
お今　（不安らしく）大丈夫でせうかねえ。でも、わたし達の踏んでゐる土の下に、むかしの世界があるのだと云ふぢやありませんか。
五郎兵衛　嘘だといふのに……判らない奴だ。（叱り付けて、又優しく）どこの馬の骨だか得體の知れない、あんな乞食坊主のいふことよりも、嬰兒の時からおまへを可愛がつて大事に育てたこのお父さんの云ふことの方が、確にほんたうだと思つてゐろ。いくら年を老つても、おれはまだ耄碌はしないつもりだ。
お仲　お父さんがあゝ云つてゐるのだから、大丈夫だと思つて、おまへも安心しておいでよ。（五郎兵衛に）時におまへさん、もうそろ／＼とお夜食にしてはどうだね。
五郎兵衛　さうだ。なんだか薄ら寒くなつて來たから、夜食をかつ込む前に熱燗で一杯飮まうか。
お仲　そんなら支度はちやんとしてあるから、奥でゆつくりお飮みなさいよ。
五郎兵衛　ぢやあ、さうしようよ。なんだか頭の重たい日だ。
（五郎兵衛は起つて上の方の屋體に入る。）
お仲　（お今を見かへる）お前もあとからお出でよ。
お今　あい。
（お仲も屋體の奥に入る。海の音きこゆ。お今は矢はり海をながめてゐる。若き旅人は笠をかたむけて矢庭

に走り入る。）

旅人　寒い。寒い。顔も手足も凍りさうだ。

（云ひつゝ爐の火に近寄りしが、窓のそばに立ちたるお今を見て、あわてゝ會釋する。）

旅人　いや、どうも御免ください。あんまり寒いので無我夢中で駈けて來たら、暖簾のあひだから火が見えたので、やれ嬉しやと我を忘れて、御挨拶もなしに飛び込んで來ました。

お今　それは御難儀でございませう。御遠慮無しにおあたまりなさいまし。

（お今は流れ木を爐に炙べる。）

旅人　ありがたうございます。おかげさまで助かりました。

（旅人は笠をぬぎて爐の火に寄る。お今も爐のそばに來る。）

お今　雪こそ降りませんが、きのふ今日は嚴しいお寒さでございます。御覽の通り北に荒海を控へてをりますので、長年住み馴れたものですらも冬はなかなか凌がれません。

旅人　道捗らぬ越の長濱と、むかしの歌にもある通りで、越路の長い旅は隨分難儀でございますな。

お今　（旅人をしげしげ視て）お前様はこの冬空に向つて、どこから何國へ旅をなさるのでございます。

旅人　（打笑みて）わたしは何處といふあても無しに、旅から旅をさまよつて歩くものでございますが、今度は北の方から上つて來ました。

お今　こゝよりももつと北の方から……。

旅人　遠い奥州の方から出て來ました。はじめて道中へふみ出した頃には、この笠の檐へさし込む秋の日が、まだまだ暑いくらゐでしたが、途中からおひおひに寒くなつて來て、越後の領分へ這入る頃には、日影がもう懷しいやうになりました。新潟から寺泊、出雲崎……、柏崎から鯨波と、毎日毎日おなじやうな濱邊をたどつてゐるうちに、空も海も一面にうす暗くなつて來て、北國の冬の寒さがしみじみと身に堪へて來ました。

お今　さうして、これからどつちの方へお出でなさるのでございます。

旅人　糸魚川から親不知の難所を越えて、富山から金澤の方へ……。なんでも燕のやうに、冬は南へ南へと飛んでゆくのでございます。はゝゝゝゝ。

お今　若いお方が身一つで、旅から旅を渡つておいでなされたら、さぞ面白いことでございませうねえ。（羨ましげに摺寄る）

旅人　南のあたゝかい方へ行つたらば何うか知りませんが、今まで通つて來た國々はさびしい町や薄暗い家にか

りで、たまに出逢ふ男も女も、みんな陰氣さうな顔をしてゐて、面白さうな話は一向聞かしてくれませんでした。ことに此頃の冬になると、濱街道も次第に往來が絕えて來て、けふも朝からこゝまで來るあひだに、唯つた一人の出家に出逢つたぎりでした。

お今　（眼をかゞやかして）その御出家には何處でお逢ひなされました。

旅人　すぐそこの濱邊で唯つた今。

お今　たつた今……。

旅人　その出家は海を眺めて、しきりに溜息を吐いてゐました。

お今　御出家は海をながめて……。

旅人　それからこつちの方に向つて、なにか口のうちで念佛のやうなものを唱へてゐました。

お今　あの、御出家はこつちを向いて御念佛を唱へて……。（考へる）おゝ　では、やつぱり嘘ではなかつたか。

旅人　その出家を御存じですかな。

お今　もし……。

（お今は旅人の手を取りて、下の方の窓口に連れてゆく）

お今　あれ、あれを御覽なさいましたか。

旅人　おゝ、海の空が一面にあかく見える。

お今　半月も前から每日紅く見えるのでございます。しかもだん／＼に色が强くなつて……けふも朝から比べると、よつぽど紅くなりました。

（旅人は默してかんがへる。燐火は次第に消ゆ。）

お今　お前はあれをなんと御覽なさいます。

旅人　さあ。不思議なことですなあ。實はわたしもこゝへ來る途中から、どうしたことかと思つてゐました。

お今　あの御出家は、この舊い世界が亡びてしまつて、新しい世界が出來る前兆だと云はれました。

旅人　世界がほろびるとは……。

お今　なんでも遠い大昔にも、そんな怖ろしいことがあつたと云はれました。現にわたしたちが斯うして住まつてゐる五里四方の土の下には、むかしの世の人や家が埋まつてゐるさうでございます。

旅人　あの出家が確にさう云ひましたか。

お今　あい。

旅人　して、こゝらの人達はそれをなんと聞きましたな。

お今　わたしの父も母も、近所の人達もほんたうにはしませんでした。

（旅人は再びかんがへて、獨言のやうに呟く。）

旅人　いや、ほんたうかも知れない。

お今　ほんたうでございませうか。

旅人　わたしもまだ迷つてゐるのですが……。いや、こゝでいつまでも考へてゐるよりも、引返してあの出家に訊いて來ませうか。

お今　これから引返して……。

旅人　今そこで逢つたのだから、まだ遠くは行くまい。あとから追付いてもう一度委しく訊いてみませう。

お今　でも、もう日が暮れました。

旅人　日が暮れても一筋道だから、めつたに見はぐる氣遣ひはあるまい。

お今　御出家に逢つたらば、すぐに又戻つて來てくださいまし。

旅人　おゝ、すぐに戻つて來ます。わたしは若い者だ。足は疾い。

（斯く云ひすてゝ、旅人は再び表へ走り去る。焚火は消え盡して、家のなかは暗くなる　お今は暖簾口より旅人のゆくへを見送る。外より前の世の人、煙のごとくに入り來る。お今はおのづから押戻さるゝやうになりて、爐の方にくる、前の世の人は、默して立つ。その形はあるが如く、無きがごとし。お今は恐るゝごとくに透し視る。）

お今　もし、お前さんはどなたでございます。

人　この土の下に住んでゐる者だ。

お今　え。（いよ／＼恐る）

人　なん千年の昔からこの土の下に埋められてゐるものだ。おれ達の作つた町も、おれ達の住んだ家も、またおれ達のからだも、みんなこの下に殘つてゐるといふことを、お前たちは今日の今まで知らずにゐたのか。あの出家の云つたのは嘘でない。おれ達の住んでゐる舊い土地は、ある時不意に地の底へ落ちてしまつて、あとから來た新しい土の下に埋められたのだ。つまり俺たちの舊い世の中は沈んでしまつて、その上に新しい世の中が別に出來たのだ。しかしその新しい世といふのもそれから隨分長くつゞいたので、今ではもう古い世になつてしまつて、更に新しい世の出來る時節が來た。おまへ達も何千年前のおれ達とおなじやうに、再びこの土の下に埋められて、あたまの上に新しい家や新しい人間をいただく時が來たのだ。海を見ろ。海の空を見ろ。おれ達のほろびる前にも、海はあの通り、血のやうに紅くみえたぞ。

（前の世の人は指をあげて、窓の外を指さす。お今は恐れてひざまづく。）

人　神樣は、禍のあることを前以て知らして下されたのだが、人間は馬鹿だからそれに氣が注かなかつた。なんでも自分たちの住んでゐる世の中は萬代不易、自分達の踏んでゐる土地は決して搖がぬ大磐石だと固く信じてゐる

と、不意に世の中はひつくりかへつて、こゝら五里四方の人間は、みんな土の下に葬られてしまつた。しかし俺達のほろびる時にも、大勢のなかには利口な奴があつて、唯つた一人禍を逃れた。今もむかしも利口な人間は、舊い世を逃れて新しい世に移り住むことが出來るのだ。お前はこの家中で……いや、この濱中で、たつた一人の利口な女だ。早くこの禍を逃れて、新しい世界に生きる工夫をしろ。わかつたか。

お今　はい。

人　古い土の上に殘つてゐる足跡に未練をのこすな。

お今　はい。

（前の世の人は消ゆるがごとくに出でゆく。お今は夢より醒めたるごとく、あわてゝ起つて窓より窺ふ。海の空いよ〳〵紅し。）

お今　お父さん、お父さん。（あわたゞしく呼ぶ）

五郎兵衛　（障子の内にて）なんだ、何だ。さう〴〵しい。

お今　海がだん〳〵に紅くなつて來ました。

（お仲は障子をあけて出づ。）

お仲　また初めたのかえ。珍らしくもない。毎日毎日そんなことばかり云つてゐて……。つまらないことにあんまり氣を揉むと、しまひには氣狂ひになるよ。（云ひつゝあたりを見る）おや焚火がすつかり消えてしまつた。この寒いのに、火が無くつて何うするつもりだらうねえ。

（お仲は呟きながら又もや爐に流れ木をくべる。火は又燃えあがる。お今は駈け寄つて母に縋る。）

お今　阿母さん……。

お仲　（やゝ驚いて）なんだよ。

お今　もうこんな所にうか〳〵してはゐられません。お父さんを勸めて、早くこゝを立退きませう。

お仲　お前はまだあの坊主の云つたことを眞に受けてゐるのだね。

お今　いえ、いえ、そればかりではありません。今もこゝへ前の世の人が姿をあらはして、利口なものが助かるのだと敎へてくれました。

お仲　（呆れたやうに）お前は夢でも見てゐるのだよ。それでなければ氣が可怪くなつたのかも知れない。前の世の人なんぞが出て來てたまるものかね。つまらないことを云はないで、氣をたしかにお持ちよ。お前のそばにはお父さんも阿母さんも附いてゐるのだから、決して心配することはないよ。

お今　いくらお父さんや阿母さんの力でも、この世の中がひつくりかへるやうな大きな禍を防ぐことは出來ますまい。

お仲　（冷笑ひて）そんなことのあらう道理がない。まあ、

いゝから落付いておいでといふのに……

(以前の旅人は再び走り入る。)

お今　おゝ、お歸りなされましたか。

旅人　一生懸命に追ひかけたが、出家の姿はもう見えませんでした。

お今　では、御出家にも……。

旅人　逢はずにすご〳〵戻つて來ましたが、その途中でだん〳〵考へると、あの出家の云つたことは何うも嘘ではないやうです。

お今　決して嘘ではございません。海の空が紅くみえるのは、こゝら五里四方の土地が、地の底へ沈んでしまふといふ、神樣の御告でございます。

お仲　まだそんなことを云つてゐるのか。困つたものだ。

旅人　禍はいつ起るかも判りますまい。些とも早く立退の支度に取りかゝつてはどうですな。

お仲　おまへさんまでお餘計なお世話だ。一體、お前さんはどこの人で、なにしにこゝの家へ這入つて來なすつたのだ。

旅人　わたしは旅の者です。禍が襲つてくると知つたら、自分ひとりが逃れば濟むことですが、ひとの難儀を見捨てゝは行かれません。お前方もわたしと一緒に……。(表へ指す)

お仲　えゝ、うるさい人だねえ。(奥に向つて)もし、お前さん。さつきの坊主のやうな、可怪な人がまた來ましたよ。

(五郎兵衛は奥の障子をあける。)

五郎兵衛　また誰か來たのか。

(云ひつゝ出で來りて、旅人のまへに突つ立ち、睨むやうに其顔を視る。)

五郎兵衛　お前さんは誰だ。

旅人　わたしはお前さん方を救ひに來たのだ。

五郎兵衛　なるほど這奴も坊主の二代目だ。

旅人　(儼然として)　海を御覧なさい。

五郎兵衛　海は毎日見てゐるから珍しくはない。

旅人　めづらしくないほど毎日見てゐながら、禍の一刻ごとに迫つて來るのが判りませんか。

五郎兵衛　そんな話はもう止して貰はう。誰がなんと云はうとも、こゝはおれが先祖代々住んでゐる所だ。おれが生れて、俺が育つたところだ。おれに取つては一番懐かしい、住心地のいゝ所だ。どうしてこゝが動かれるものか。

お今　お父さん、お前いつまでもそんな強情なことを……。

五郎兵衛　えゝ、同じことを幾度もいふな。おれに向つてそんな御説教をするのは、岩に向つて物をいふのも同じ

ことだ。（旅人にむかひて）お前さんも早く歸つて貰はう。

旅人　あゝ、おまへさんは氣の毒な人だ。

（旅人は歎息す。家の外には以前の漁師甲乙をはじめ、濱の男女小兒等大勢走り出で、いづれも海をみて騷ぐ。）

漁師甲　やあ、紅くなつた。紅くなつた。

漁師乙　さつきより十層倍も紅くなつた。

女一　こりやあ一體どうしたのだらう。

女二　どうも唯事ではないらしいなう。

（みな口々にわや〳〵云ふ。海の空はいよ〳〵紅し。お仲も少しく不安の體にて、夫の袂をひく。）

お仲　（小聲で）もし、おまへさん。大丈夫だらうかね。

五郎兵衛　大丈夫だ。安心してゐろ。

（云ひつゝ五郎兵衛も窓より窺ふ。）

旅人　愈ようか〳〵してはゐられない時節になつた。（五郎兵衛の傍にすゝみ寄る）お前さん、早く支度をしてはどうです。

お今　阿母さんも早く逃げてくださいよ。

お仲　わたしはお父さんの料簡次第さ。

（海はいよ〳〵紅く、その光りは家の中にもさし込む。）

旅人　おゝ、又紅くなつた。まるで血のやうに紅くなつて來た。

（外の者も、紅くなつた、紅くなつたと叫ぶ。）

旅人　（決心して）もう仕方がない。利口なものは一刻も早く立退いて、新しい世の中に生きるのだ。（お今の手を取りて）せめておまへさんだけでも……。さあ、早く……。

（海はいよ〳〵紅くなりて、外なる人々は狂へるがごとくに叫ぶ。お今は他をかへりみる暇もなく、旅人に手をひかれて家の外へ逃れ出づ。）

お仲　おまへさん、ほんたうに大丈夫だらうか。（かさねて問ふ）

五郎兵衛　先祖から何千年踏み固めたこの土が……。（足にて土間を強く踏む）滅多に崩れてたまるものか。氣の弱い奴等が騷ぐので、さう〴〵しくてならない。おい、酒を持つて來い。もう一杯引つかけてぐつすり寢ようよ。

（五郎兵衛は再び爐の傍に腰をおろす。お仲はやゝ不安の體にて立つ。旅人とお今のすがたは已に見えず。海の空はさながら血を染めたるごとくに紅くなる。外なる人々も今は聲を出す者なく、驚怖の眼をみはりて徒らに海を眺むるのみ。）

――幕――

註。寛政七年より三十七年前（寶暦年間の末なるべし。）越後國名立といふところの海岸俄然陷落して、一村の人馬鷄犬こと〴〵く地中に埋めらる。世にこれを『名立崩れ』と唱ふる由、東遊記にみえたり。（作者）

江戸名所圖會（喜劇）

登場人物

長谷川雪旦
雪旦の弟子雪童
うなぎ屋の亭主
うなぎ屋の女房
うなぎ屋の女中
料理番
出前持
手先三人

江戸時代。文政の頃。春の雪ふる日の夕刻。
神田お茶の水、守山といふ鰻屋の二階。平ぶたいにて、正面の上のかたには釣床あり。花瓶には梅の花が活けてあり。それにつゞく障子をあけ放し、手摺りの附きたる縁側あり。向うはお茶の水の流れを挾みて、高き兩岸の雪げしきが斜めに見ゆ。下のかたは茶壁にて、出入りの襖を一枚あけてあり。襖の外は廊下にて、階子のあがり口あり。この座敷の上のかたには隣座敷ありて、正面の障子を一枚あけ、こなたとの境の襖をしめ切りてあり。
となり座敷には人なく、こなたの座敷には膳を二つ据ゑて、下のかたの膳のまへには雪旦の弟子雪童が手あぶりの火鉢をひきよせて酒をのんでゐる。長谷川法橋雪旦は四十二三歳の法體の繪師、縁に近きところに座をしめ、うしろ向きになりてお茶の水の風景を摸寫してゐる。

雪童　先生、先生。
（雪旦は答へず、一心に摸寫してゐる。雪童は又呼ぶ。）
雪童　先生、先生。
雪旦　（ふり向かず）さう〴〵しい。なんだ。
雪童　どうでござります。一休みして一杯お飲みなされませぬか。
雪旦　まあ、いゝ。おまへひとりで勝手に飲んでゐろ。
雪童　わたくしは勿論遠慮なしに飲んでをりますが、あなたも縁に近いところへ出て、長いあひだ坐つておいでなされては、定めて冷えることでござりませう。まあ、こつちへ來て、寒さ凌ぎに一杯お飲みなされませ。
（雪旦は答へず。雪童は酒をのみながら又呼ぶ。）
雪童　先生、先生。

雪旦　うるさい奴だな。（やはり一心にかいてゐる）

雪童　寒いことは申しません。この雪のふるのに障子をあけ放して、さつきから吹き曝されておいでなされて、風でも引いてはなりません。こつちへ來て少し御休息なされませ。かういふ時には酒でも飲まずば……。（云ひかけて德利を把つてみる）　や、いつの間にかもう空になつてしまつた。これはいけない。

（雪童は手をたゝく。下にはなんの返事も無し。雪童はじれて起ちあがり、襖の入口にて手をたゝく。しばらくして、女中一が階子をあがり來る。）

雪童　（待兼ねたやうに）おい、おい。なにをしてゐるのだ。

女中一　（冷かに）御用でございますか。

雪童　用があるから呼んだのだ。（德利を振つてみせる）これだ、これだ。

女中一　（やはり冷かに）はい、はい。（引返してゆきかかる）

雪童　これ、待て、待て。酒ばかりではない、かば燒の方はどうしたのだ。

女中一　はい、はい。

雪童　なんぼ鰻屋でもあんまり待たせ過ぎるではないか。こゝの家では客の顏をみて、それから神田川へ釣りにでも出るのか。

（女中はだまつてゐる。）

雪童　冗談ぢやあない。早くしてくれ、早くしてくれ。

女中一　（やはり冷かに）はい、はい。（逃げるやうに階子を降りてゆく）

雪童　どうも不人相な女だな。（又呼ぶ）先生。お寒くはござりませんか。先生。

雪旦　うるさいな。あゝ、もう手許が暗くなつて來た。（見かへる）雪童。

雪童　はい、はい。

雪旦　あかりをつけるやうに云ひつけてくれ。

雪童　かしこまりました。（手をたゝく）

雪旦　（筆をやめて障のまへに來る）春と云つても底冷えがするな。

雪童　なにしろ雪が降るくらゐですから、春といつても名ばかりでござります。取りわけて日が暮れかゝると、餘計に冷えてまゐります。（火鉢を師匠のまへに押遣る）さつきから端近く出ておいでなされて、さぞお寒からうとお察し申してをりました。

雪旦　筆を持つてゐるうちは、別になんとも思はなかつたが、手をやすめると急に冷えてくる。（火鉢に手をかざして）この火鉢には火がないやうだな。

雪童　（のぞいてみる）　なるほど、いつの間にかみんな灰になつてしまひました。（酒をのむ眞似をする）　寒さ凌ぎにこれを遣つてをりましたので、火鉢の方には氣がつきませんでした。いや、どうも恐れ入りました。（あわてゝ起つて、襖の口より手をたゝく）　はてな、これは怪しからぬ。いくら手をたゝいても返事をしない。（襖の外に出る）　これ、火を持つて來い。それから、あかりを持つて來てくれ。（手をたゝく）　まだ返事がない。これ、誰かゐないか。（無暗に手をたゝく）

雪旦　まあ、いゝ加減にしろ。丁度夕方で店も忙がしいのであらう。

雪童　でも、お寒いでござりませう。これ、これ、返事をしないか。（無暗に手をたゝく）

雪旦　まあ、いゝと云ふのに……。さう〴〵しいな。

雪童　はい、はい。（引返してくる）

雪旦　內は暗くても、表は雪あかりで薄明るい。（坐つたまゝで外をみる）　あれ、見ろ。どうも好いけしきだな。をとゝひ來た時には天氣がよくつて、向うの堤の松のあひだから本郷臺が薄く霞んでゐた。それが今日また來てみると、この雪であたりの景色はすつかり變つてゐる。江戸の町なかで、このお茶の水ぐらゐの風景は又とあるまい。川が低く、岸が高く、一方は本郷臺、一方は駿河臺。なるほど小赤壁とうたはれて、昔から文人墨客に賞美されるのも無理はないな。

雪童　左樣でござります。

雪旦　四季をり〳〵のながめは云ふに及ばず、月に花に雨に雪に、みなそれ〴〵の變つた姿をみせてゐる。（ぢつと考へる）　どうも困つた。いつの景色をどう書いていいのか、おれにも判らなくなつて來た。

雪童　御もつともでござります。

雪旦　まあ、仕方がない。これから氣長に時々こゝへ來て、春夏秋冬のうちで一番いゝと思つたところを圖に取るより外はあるまい。

雪童　では、この後もたび〴〵こゝへおいでになりますか。

雪旦　むゝ。何度でもくる。江戸の名所を日本中に傳へるのだ。おれもせい〴〵念を入れて書いてみたいと思つてゐる。都名所圖會に負けるのは殘念だからな。

雪童　その都度にお供をしてまゐれば、わたくしも好きな鰻がたべられまして、ありがたいことでござります。

雪旦　（笑ふ）　おまへはよつぽど鰻が好きだな。

雪童　はい。もう大好きでござります。貴樣は人間がぬらくらしてゐるから、鰻を食つては共食ひだなどと、たびたび友達どもからひやかされます。はゝゝゝゝ。

雪旦　むかし初鰹の好きな男があつて、おれも次の世には

鰹に生れたいといふと、ある人がそれを聽いて、自分が人間に生れて鰹を食へばこそ旨くもある。自分が鰹に生れかはつて人間に食はれたら嬉しくもあるまいと、大笑ひをしたといふ話がある。おまへもどうだ。この神田川へとび込んで、鰻にでも生れ變つては……。

雪童　いえ、唯今の鰹のお話の通りで、それは眞平でござります。

雪旦　では、鰻かきになつては……。

雪童　いえ、やつぱり鰻かきよりは繪かきの方がよろしうござります。

雪旦　はゝゝゝゝ。

（下のかたより階子をあがりて、この家の亭主出で、襖の外にて内をうかゞひ、ぬき足をしながら緣側を竊と通りぬけて、上のかたの隣座敷に忍び込み、襖越しにてこなたの樣子をうかゞひゐる。雪童は火鉢の灰を火箸でかきまはす。）

雪童　火鉢には螢のやうな火が殘つてゐるばかり。いかに炭薪が高直でも、客商賣でかういふことはない筈。先生、お寒くはござりませんか。

雪旦　寒いも寒いが、早くあかりが欲しいな。

雪童　まつたく暗くなりました。店の奴らは何をしてゐるのか。默つてゐても氣がつきさうなものだに……。どうも怪しからぬことでござります。（手をたゝく）これ、これ、あかりを早く持つて來いよ。なぜ返事をしないのだ。（雪旦に）どうもいけません。暗いと猶さら寒いやうでござりますな。

雪旦　それもさうだな。酒もないのか。

雪童　この通り。（徳利を振つてみせる）實に怪しからぬことでござります。いや、酒ばかりではござりません。さつき誂へた鰻もまだ持つてまゐりません。（忌々しさうに）酒は無し、肴は無し、寒いのに火は無し、暗くなるのにあかりは無し、一體こゝの家では二階に客のゐることを忘れてしまつたのではござりますまいか。

雪旦　まさかにそんなこともあるまい。お茶の水で守山といへば、名の賣れた鰻屋だ。現に一昨日來たときには丁寧に取扱つてくれたのだから、今日にかぎつて疎略にする筈もない。なにか出前の註文でも立て込んだのであらう。あまりに騷ぎ立てるのも見つともない。まあ、靜にしろ。うなぎ屋で待たされるのは當りまへだ。

雪童　でも、火鉢や燭臺はすぐに持つて來さうなもので…………。第一、いくら手を鳴らしても返事をしないといふのは怪しからぬことでござります。（手をたゝく）はて、やつぱり返事がない。先生、あなたも一緒にお呼びください。暗くつて、寒くつて、腹が減つては、人間ふたり

の命にかゝはります。
雪旦　仰山なことをいふな。
雪童　まあ、一緒にお呼びください。
（雪童は手をたゝく、雪旦も一緒に手をたゝく。となり座敷の亭主はひそかに笑つてゐる。）
雪童　（耳をかたむける）先生。返事がきこえましたか。
雪旦　いや、どうもきこえないやうだな。（笑つてゐる）
雪童　笑ひごとではございません。まつたく怪しからぬことでございます。以後の懲らしめに、わたくしが下へ行つて怒鳴りつけてまゐります。（起ちかゝる）
雪旦　よせ、よせ。騒ぐなよ。
雪童　でも、もう勘辨がなりません。
雪旦　まあ、いゝ。うつちやつて置けといふのに……。
雪童　はい。（澁々ながら坐る）いよ／＼寒くなつてまゐりました。（無暗に火鉢をかきまはしてゐる）
雪旦　すこし寒いな。
雪童　いよ／＼暗くなりました。
雪旦　むゝ。暗いな。
雪童　これではまるで人質にとられてゐるやうでございます。
（ふたりは向ひ合つて、しばらく默つてゐる。となり座敷の亭主は窃とぬけ出して縁側を通り、下のかたへゆきて階子の下をのぞいてゐる。この家の女房、これも拔き足して階子をあがり來る。）
女房　（小聲で）もし、おまへさん。（座敷を指して、二人はゐるかと訊く）
（亭主はうなづいて頤にてまねけば、女房は忍び寄つてさゝやく。亭主は又うなづく。）
亭主　（小聲で）すぐに通してくれ。
（女房は心得て窃と降りてゆく。亭主は人待顔にたゝずんでゐると、手先二人、いづれも町人風にて、女中二に案内されて階子をあがり來る。女中は燭臺を持つ。）
女中二　どうぞこちらへお通りください。
（女中は縁側づたひに二人を隣座敷へ案内してゆく。）
手先甲　寒い、寒い。早く火を持つて來てくれ。
手先乙　それからお銚子のあついところを早く頼むよ。
女中二　はい、はい。すぐに持つてまゐります。
（女中は縁側を通つてゆくを、雪童によび止める。）
雪童　おい、おい。姐さん。こゝへも早く火を持つて來てくれ。さつきから顫へてゐるのだ。
女中二　はい、はい。
雪童　それから燭臺と酒と蒲燒と……。大急ぎでたのむよ。
女中二　はい、はい。（早々に立去る）

手先甲 （こなたの座敷をうかゞひながら） どうも寒い。かうたゐると、雪見もあんまり風流でもないな。（わざと聞えるやうに大きな聲でいふ）

手先乙 （おなじく大きな聲で） 雪見なんぞの流行つたのは十年も昔のことさ。おまへが無理に誘ふから、よんどころなく出て來たが、雪見らしい風流人なぞは一人も見えなかつたぜ。

手先甲 これでも向島邊へ行つたら、ちつとは出てゐるかも知れないよ。

手先乙 どうだかなあ。米が百に五合の世のなかに、雪見でもあるめえからな。

手先甲 いやに世帶じみたことを云ふなよ。これ、みろ。よゐの雪もまた風情があるぜ。

雪丑 むゝ。雪はまだ降つてゐるのか。

（雪丑は起つて縁に近いところに出で、表のけしきを眺めてゐる。女中二は火鉢を持ちて階子をあがり來り、緣側づたひにて隣座敷へゆく。）

女中二 どうもお待たせ申しました。すぐに御酒も持つてまゐります。

手先甲 やれ、やれ、これで助かつた。

手先乙 ありがたい、ありがたい。

（二人は火鉢に手をかざす。女中は出てゆく。）

雪童 （叱るやうに） おい、おい。こゝへも早く火を持つて來てくれないか。なにをしてゐるのだ。

女中二 はい、はい。（階子を降りてゆく）

雪童 （舌打する） どうも怪しからぬ奴等だな。（身ぶるひする） あゝ、寒い。先生、まことに恐れ入りますが、もう障子をしめて頂くわけには參りますまいか。

雪丑 むゝ。（障子をしめて元の座に戻る） まだ火は來ないか。

雪童 まゐりません。

雪丑 （笑ふ） 不思議に待たせるな。

雪童 わたくしはもう我慢が出來ません。（となり座敷を指す） あとから來た隣の客には、すぐに燭臺や火鉢を運びながら、先客のわれ〳〵の方へはこの德利を一本あてがつたきりで、さつきから一向にかまひ付けないといふのは、あんまり人を馬鹿にしてをります。先生、もう歸りませう。僕などはもう何うでもよろしうございます。

雪丑 まあ、我慢しろよ。唯うなぎを食ふだけのことなら、こゝの家には限らないが、おれ達はこゝで仕事をしなければならないからな。おれ達は遊びに來てゐるのではない、仕事に來てゐるのだ。

（となり座敷の二人は耳をかたむける）

雪童 それですから今まで我慢をしてをりましたが、あん

まり人を馬鹿にしてをりますから……。

雪旦　まあ、聴け。おれが仕事をするには、こゝの家が丁度いゝ場所だ。縁側へ出れば兩方の岸が見通しで、森がみえる、岡が見える、水がみえる、舟がみえる。どこにはどういふ座敷がある、こつちには町家がある、火の見梯子がある、藪がある。それがみんな手にとるやうに見えるので、仕事をするにはまことに都合がいゝからな。

（となりの二人はいよ／＼伸びあがりて聴く。）

雪旦　それだから一昨日も來た、けふも來た。おれ達に取つてはたび／＼こゝへ來たいと思つてゐる。これからも大切の仕事場だ。あかりが來たら、もう一度間取りをして置きたい。それが反故になつても構はないから、何度も何度もかいて置きたいのだ。雪のふる晩などはこつちの附目だからな。もう少し暗くなるまで待つてゐろ。

（となりの二人は顔をみあはせる。）

雪童　それはよく判つてをりますが、あんまりこゝの家で粗略にあつかひますので、腹が立つて、腹が立つて、なりません。

雪旦　それも我慢しなければならない。くどくもいふ通り、これがおれ達の仕事だからな。（となり座敷をみかへる）今も聴いてゐれば、となりの人たちは寒いのを恐れずに雪見に出あるいて來たといふ。風流なことではないか。それを思へばおれ達が斯うして坐つてゐるのは楽なものだ。あしたも雪がふりつゞいたら、今度は川岸をかへて向島から隅田の方へでも出かけて、ひと仕事するかな。

雪童　（すこし氣のないやうに）はい。どういふものか、この頃はあつちの方にのら犬が殖えて困ります。

雪旦　あの邊にはのら犬が殖えた。雪に犬ころは附物だから、追つかけまはつてゐるかも知れないな。

雪童　犬ころぐらゐなら宜しうございますが、大きい犬には困ります。このあひだも待乳山の座敷のそばで、ひどい目に逢ひました。

雪旦　むゝ。あの時はおどろいたよ。堤下の寺の門を這入らうとすると、だしぬけに狼のやうな大きい犬が飛び出して來て、すさまじい勢ひで吠え付かれたので、仕事どころか、這々の體で逃げ出した。おまへは跣足で逃げたではないか。（笑ふ）

雪童　命からがら逃げ出すと、霜どけ路で滑つて轉びました。

雪旦　いつかも千住で犬に嚇かされたことがある。おれたちの仕事に犬は禁物だな。

雪童　まつたく禁物でございます。

（となりの二人はこれを聴きて又うなづき合ふ。女中

一は酒とかば焼を膳にのせて出で、すぐに隣座敷へ運んでゆく。)

女中一　まことに遲なはりました。

手先甲　おゝ、うなぎも來たか。豪勢早かつたな。

手先乙　さあ、さあ、酒が來たので生き返つた。

(女中に酌をさせて、二人は飲みはじめる。雪童は額をあげて、となりを窺ふ。)

雪童　(小聲にて)　先生　先客のわれ〳〵をあと廻しにして、となりへは酒もうなぎも持ち出しました。

雪旦　さうらしいな。

雪童　もう堪忍袋の緒が切れました。(憤然として)　先生。もう出かけませう。

雪旦　まだ早い。もう少し待てよ。せめてあかりでも持つて來てくれるといゝのだが……。

雪童　では、わたくしが燭臺を取つてまゐります。

(雪童は起つて、早々に階子を降りてゆく。雪旦も起つて再び正面の障子をあけ、表のけしきを眺めてゐると、となりの二人は女中にさゝやきて、俄に喧嘩をはじめる。女中は心得て燭臺を片よせる。)

手先甲　(わざと怒鳴る)　やい、やい。なにが不足で文句を云ふんだ。かうして酒をのませて、うなぎを食はせてやれば、申分はねえぢやあねえか。

手先乙　べらぼうめ。時代おくれの風流氣を出しやあがつて、人をさん〴〵寒い目に逢はせて、うなぎぐらゐで料簡出來るものか。

手先甲　料簡出來ざあ勝手にしろ。

手先乙　なにを云やあがる。この雪だるまめ。

(二人は起ちあがつて摑みあひをはじめる。)

女中一　(止める振りをする)　まあ、およしなさいましよ。あぶない、あぶない。(緣側へ出て呼ぶ)　喧嘩ですよ、喧嘩ですよ。早く來てください。

(二人はわざと襖へよろけかゝりて、襖を押倒してこなたの座敷へ轉げ込む。となりの灯が消えて、こなたの座敷も明るくなる。)

雪旦　(おどろいて見かへる)　これ、これ、どうなされた。喧嘩でござるか。

(女中のよぶ聲を合圖に、店の亭主をはじめ、料理番や出前持の男など四五人、ばた〳〵と階子をあがりくる。中には鉢巻して棒など持ちたるもあり。)

雪旦　はて、喧嘩をしてはならぬ。お鎭まりなさい、お鎭まりなさい。

(雪旦は二人を引き分けようとすると、二人は不意に飛びかゝりて雪旦を引き据ゑる。)

雪旦　これ、わたしをどうするのだ。

手先甲　神妙にしろ。
手先乙　御用だ。
手先甲　御用だ。
（ふたりは雪旦を引き伏せて早繩をかける。雪旦は呆氣にとられてゐる。亭主等はこの座敷に入り來りて、雪旦を遠卷きにすれば、女房と女中等も階子の口より窺つてゐる。女中一は燭臺を持ち來る。）
亭主　（すゝみ出て手先に一禮する）どうも御苦勞さまでございました。
手先甲　不意を捕つたせゐか、思ひの外にほこりも立てずにしまつた。もう安心しろ。
雪旦　では、おまへ方は捕手の衆か。
手先乙　むゝ。御用で來たのだ。
（ふたりはふところより十手を出す。）
雪旦　これはなにかのお目たがひでございませう。手前は上役人からお繩を頂戴するやうな者ではございません。
亭主　えゝ、白ばつくれるな。殊勝らしく頭を丸めてゐても、貴樣達が大泥坊だといふことは、ちやんと知れてゐるんだぞ。
雪旦　（おどろく）なに、どろばう……。
亭主　おゝ、どろばうよ。貴樣はあの若い野郎と二人連れで、一昨日もこゝへ來たことを忘れやしまい。どうも樣子が變な奴等だと家の者も噂をしてゐると、その晩にどうだ、こゝの家へどろばうが這入つて、帳場の金から女中どもの着物までも持出して行きやあがつた。いや、まだそればかりぢやあない。ゆうべも隣の質屋へ押込んで、石川五右衛門のやうに、大葛籠を背負ひ出して行つた奴がある。
雪旦　途方もないことを……。なんでわたし達がそんなことをするものか。
亭主　えゝ、まだあるぞ。五六日まへの晩にも、本郷寄りの堤際で、通りがかりのぢいさんの眼先へだんびらを突きつけて、定九郎をきめた惡者がある。それもみんな貴樣たちの仕業に相違ないのだ。
（雪旦は呆れて聽いてゐる。）
亭主　いくら貴樣がしらを切らうとしても、こつちにはちやんと證據があるのだ。これ、貴樣は一昨日こゝへ來たときに、碌々に物も食はずに、何かしきりに圖取りのやうなことをしてゐたらう。それ、みろ。貴樣たちは客の振りをして揚り込んで、こゝの家や近所の樣子を、すつかり圖取りにして置いて、夜になつて稼ぎにくるのだ。左もなくつて鰻屋の二階にいつまでも悠々と居すわつて、根よく圖取りなんぞをしてゐる奴があるものか。
手先甲　こゝの家は仕事をするのに都合がいゝと、貴樣は

さつき云つてゐたぢやあねえか。

手先乙　雪のふる晩がこつちの附目だと云つたのを忘れたか。

手先甲　なんで貴様たちの仕事に犬が禁物だ。さあ、正直にいへ。

手先乙　白狀しろ。

雪旦　(笑ひ出す)　はゝゝゝゝ。これはとんだ災難。はゝゝゝゝ。これはおどろいた。はゝゝゝゝ。

亭主　なにがをかしい。いけづう／＼しい坊主だ。こつちがなんにも知るまいと思つて、平氣で又這つて來たのが運の盡きだ。すぐにお上へ訴へて出て、どいつも這奴もみんな珠數つなぎにして遣つたのだ。

雪旦　(まだ笑つてゐる)　では、連の男も縛られたか。やれ可哀さうに、はゝゝゝゝ。

手先甲　二人では少し手強るかと思つてゐたら、丁度ひとりが下へ降りたので、すぐにそこで御用にしてしまつた筈だ。(亭主に)　これ、同類をこゝへ連れて來て見せてやれ。

亭主　はい、はい。

(亭主は男どもを見かへれば、男ふたりは階子を降りてゆく。)

雪旦　まつたく見てやりたい。雪童の奴め、どんな顏をしてゐるか。はゝゝゝゝ。

亭主　まだ笑つてゐやあがるか。呆れた奴だ。(手先に)　這奴はよつぽど図太い奴でございます。乾と鬼坊主とか海坊主とか、肩書つきの惡黨でございませうね。

手先甲　さうかも知れねえな。(雪旦に)　貴様はけふも何か見取り圖をかいてゐたといふが、それはどこにある。

手先乙　(雪旦のふところを覗く)　むゝ。這奴のふところに何か捫込んでゐるらしい。

(手先は雪旦のふところに手を入れる。)

雪旦　いや、いけない。それは大事の品で……。(身を藻掻く)

手先乙　えゝ、じたばたするな。

(手先は無理に下圖の紙をひき出してみる。人々も立寄つて覗く。)

手先甲　なるほど、向河岸の見取り圖らしいた。

亭主　(のぞく)　さうでございます、さうでございます。這奴、今夜かあしたの晩は向河岸へ稼ぎに出かけるつもりであつたに相違ございません。

手先乙　これは證據だ。こつちへ取揚げて置くぞ。

雪旦　それはいけない。どうぞお返し下さい。

手先甲　やかましい。だまつてゐろ。

(手先一人と店の男ふたりは縄にかゝりたる雪童を引

立てゝくる。）

雪童（興奮して）實に怪しからぬ。貴樣達はおれをどうするのだ。どうするのだ。

手先丙　なんでもいゝから、來い、來い。

雪童（雪旦をみて）や、先生も……。一體これはどうしたのでござります。

雪旦　おれ達はどろぼうだと云ふことだ。

雪童　なに、どろばう……。（いよ〱怒る）いや、これはいよ〱怪しからぬ。先生やおれを泥坊とは……。貴樣たちの眼玉は逆さに附いてゐるのか。どうも呆れて物が云へない。これ、おれ達がなにを盜んだ、どんな惡事を働いた。さあ、そのわけを云へ。

手先乙　さう〲しい奴だな。これをみろ。（下圖を突きつける）

雪童　それがどうして泥坊だ。

亭主　こいつも叉、平氣でしらを切つてゐやあがる。揃ひも揃つて圖太い奴等だ。

男一　懲らしめのために、なぐれ、なぐれ、なぐれ。

男一同　なぐれ、なぐれ。

（男どもは雪童をなぐらうとする。）

雪旦　待つてくれ、待つてくれ。縛られた上になぐられては可哀さうだ。今そのわけを云つて聞かせる。なにを隱さう、わたしは長谷川雪旦といふ繪書きだ。今度江戸名所圖會といふ本が出來るについて、その繪をわたしが頼まれて書くことになつた。これまでに江戸の名所をかいた書物がないでもないが、今度出來るのは今までに類のない立派なもので、神田の雉子町の名主の齋藤市左衞門といふ人がおぢいさんの代から三代もかゝつて調べたものだ。その本文はもうあらかた出來あがつたが、繪の方はまだみんな出來ない。そこで、わたしは毎日のやうに江戸中をまはつて……。いや、江戸中ばかりでない、朱引外までも遠く踏み出して、名所といふ名所の圖取りをしてゐる。作者の齋藤さんと一緒にゆくこともある、自分ひとりで出かけることもある。かうして弟子を連れ立つてくることもある。

雪童　貴樣たちはたんにも知らないで、こんな無禮を働くが、そこにござるは長谷川法橋雪旦といふ繪かきの先生で、おれはお弟子の雪童といふものだ。それにどろばうの惡名をきせて濟むと思ふか。この明盲め。

雪旦　まあ、靜かにしろ。そこで此頃はこのお茶の水のけしきを書いてゐる。こゝは江戸でも指折りの名所だ。一度や二度では思ふやうな圖取りは出來ないので、一昨日も來た、けふも來た、これからまだ幾度も來るつもりでゐると、二度目でこんな目に逢つてしまつた。丁度にど

ろばうの這入つたのは氣の毒だが、それはわたしに何にもかゝり合のないことだと思つて貰ひたい。どうだ、まだ判らないかな。

（手先等は今更のやうに下圖をながめる。）

手先甲　おやあ、おまへさんは長谷川といふ繪かきの先生で、雉子町の名主さんを知つてゐなさるのかえ。

雪旦　知つてゐるどころか。今もいふ通り、その名主の齋藤市左衛門さんにたのまれて、江戸名所圖會をかいてゐるのだ。嘘でもいつはりでもない。まだ疑ふならば、これから雉子町へ使をやつて、聞き合せてみればすぐに判ることだ。

手先乙　その市左衛門さんならわたしも知つてゐる。まだ年は若い人だが、なんでも江戸中の名所をしきりに調べてゐなさるさうだ。

雪旦　さうだ、さうだ。これ、雪童。物の間違ひといふものは不思議なもので、おれが一昨日こゝの二階でお茶の水の見取り圖をかいてゐると、その晩こゝの家へどろばうが這入つたさうだ。そこで、おれたちは泥坊の仲間で、畫圖のうちにそこらの圖を取つておいて、夜になると盗みに這入る。

雪童　（聞きも終らずに罵る）　えゝ、馬鹿な。やい、亭主。では、貴樣がとんでもないことを訴へて、おれたちに繩をかけさせたのだな。さう判つたら、雉子町へ使をやるまでもない。こゝの町内にも自身番があるだらう。さあ、おれ達を繩付きのまゝで連れていけ。白い黒いはそこで決める。無實の訴へをして、おれ達に繩をかけた以上、貴樣達にもその覺悟があるだらうな。

亭主　え。（當惑する）

雪童　さあ、早く連れて行つてくれ。

亭主　え。

（亭主はいよ〳〵當惑する。手先三人は顔をみあはせて雪旦の繩を解き、手先乙は會釋して下圖を雪旦に戻す。）

雪旦　やれ、助かつたか。（笑ふ）　雪童。おまへも早くゆるして貰へ。

雪童　いえ、ゆるして貰ひますまい。わたくしはこのまゝで自身番へまゐります。

雪旦　さうむづかしく云ふなよ。かういふ仕事をしてゐると、色々の目に逢ふものだ。それでもこのあひだ犬に追つかけられたよりは優しかも知れないぞ。はゝゝゝゝ。

雪童　いえ、笑つてはゐられません。これ、亭主。

亭主　はい、はい。（立寄つて繩を解かうとする）

雪童　（振拂ふ）　えゝ、誰が繩を解けと云つた。おれはいつまでも縛られてゐたいのだ。（怒鳴る）　もつと太い

繩で縛つてくれ。鐵の鎖につないでくれ。
雪旦　どうも強情な奴だな。
（雪旦は立寄つて、雪童の繩をとけば、雪童は飛びかかつて亭主の胸ぐらをつかみ、捻ぢ倒してなぐらうとするのを、人々は支へる。）
亭主　御免下さい、御免ください。
雪旦　これ、もう堪忍してやれといふのに……。
亭主　あやまります、あやまります。
雪旦　その通りあやまつてゐるのだ。もう止せ、よせ。
亭主　御免ください、御めん下さい。
（雪旦に支へられて、雪童はやうやく鎭まる。手先等は手持無沙汰の體にて、再び顔をみあはせる。）
手先甲　いや、ばか／＼しいことがあるものだ。（雪旦等に）先生もお弟子さんもまことにお氣の毒でございました。
手先乙　（亭主に）貴様達はなんといふことだ。取留めもねえことを訴へて出て、お上の御手數をかけやあがつた。以後はつゝしめ。
（手先三人は出てゆかうとするを、亭主は襖の外まで追つて出る。）
亭主　まことに申譯もございません。先づ下座敷で御休息をねがひます。（階子の口にゐる女房等に）えゝ、おまへ達は何をぼんやり眺めてゐるのだ。早く下へ行つてお二人さんに御酒でもあげろ。早くしろ、早くしろ。
（手先に馳走をしろと眼で知らせる）
女房　はい、はい。
手先甲　なに、おれ達は急ぐのだ。
女房　でもございませうが、どうぞこちらへ……。
（女房や女中は手先等を案内して、階子を降りてゆく。）
亭主　（男どもに）はて、おまへ達もおなじやうに、いつまでぐづ／＼してゐるのだ。早く行つて御馳走の支度をしろ。それから……（一人の男に耳打ちして、こゝの座敷へも酒を持つて來いといふ）さあ、早くしろ。上も下も大急ぎだ、大急ぎだ。
（男どもは早々に降りてゆく。女中一はあとに殘りゐて、燭臺をまん中へ持ち出す。）
亭主　なんともはや恐れ入つた次第でございます。どうぞ御勘辨をねがひます。（手をつく）
雪旦　まあいゝから、早く火を持つて來てくれ。
亭主　え、火鉢にお火がございませんか。いや、これは恐れ入りました。（女中に）おまへ達は何をうつかりしてゐるのだ。この寒いのにお火がなくつて何うする。さあ、澤山にお火を持つて來い。なにから何まで不行屆き

で、どうも恐れ入りましてございます。

（亭主は疊に頭をすり付ける。女中は早々に降りてゆく。）

雪童 （怒氣いまだ收まらず）先生。もう歸りませう。

亭主 （あわてゝ遮る）まあ、まあ、お待ちください。御誂のおしるしに唯今御酒の支度を致させますから。いゝえ、御手間は取らせません。どうぞ少々お待ちください。

雪童 貴樣のうちの酒なんぞうつかり飲めるものか。今度は毒でも入れてくるだらう。さあ、先生。まゐりませう。

亭主 いえ、それではまことに困ります。どうぞ御勘辨下さいまして……。

（女房は階子の口より顏を出す。）

女房 あの、おまへさん。ちよいと……。

亭主 なんだ、なんだ。（出る）

女房 手先の人たちも歸ると云つて……。

亭主 いけないな。あの人達をたゞ歸してはあとが面倒だ。どうも困るな。

女房 だから、おまへさん、ちよいと下へ來て……。（云ひ捨て降りてゆく）

亭主 今いくよ。（雪且等に）お聞きの通りですから、どうぞしばらくお待ちください。唯今すぐにまゐります。（下にむかひて呼ぶ）おい、おい。お火を早く持つて來ないか。なにをしてゐるのだ。

（云ひながら亭主はあたふたと降りてゆく。）

雪且 やれ、やれ、些と靜になつた。

雪童 先生。歸りませう。

雪且 まあ、待てよ。

雪童 （すこし焦れる）こんなところで何を食つても旨くはありませんよ。いえ、こゝの家ばかりではありません。わたくしはもう一生うなぎを食はないことに決めました。

（雪且は笑つてゐる。女中一は十能に火を澤山入れて持ち來る。）

女中一 一向に氣がつきませんで相濟みませんでした。

（火鉢に火を入れる）

（つゞいて女中二は酒や香の物を膳にのせて運んでくる。）

女中二 どうも御待遠さまでございました。蒲燒もすぐにまゐります。

（女中ふたりは引返してゆく。）

雪且 さあ、火も來た。酒も來た。（雪童に）おまへはまあおとなしく飲んでゐろ。

（雪且は燭臺を持つて起ち、それを好きところに据ゑて正面の障子をあけると、寒い風が雪を吹き込みて、

（雪童は思はず身を竦める。）

雪童　先生。雪が吹き込んでまゐります。

雪旦　いつの間にか餘ほど積つたな。

（雪旦は紙をのべて、再び表のけしきを寫しはじめる。雪童は火鉢を引きよせて、寒さうに抱へ込む。亭主は再び階子をあがり來る。）

亭主　どうも失禮をいたしました。おゝ、おゝ、雪が降り込んでくる。（云ひかけて氣がつく）先生はお仕事でございますか。

（雪童は靜にしろと制する。）

亭主　でも、お寒くはございますまいか。大變に雪が強くなつてまゐりました。

雪童　ほんたうにひどくなつて來た。これはいけない。先生、先生。

雪旦　まあ、靜にしてくれ。（一心に筆を働かせてゐる）

（雪はいよ〳〵はげしく吹き込みて、雪旦の上にはらはらと舞ひ落ちる。亭主は雪童と顏をみあはせて感心したやうに眺めてゐる。）

――幕――

兩國の秋（三幕六場）

登場人物

蛇つかひ　お絹
おなじく　お若
　　　　　お虎
小女　お君
列び茶屋のお里
仁科林之助
樂屋番　豐吉
地彈き　お辰
囃子方　お留
菓子賣　勘藏
ほかに觀世物小屋の男、女など。

第一幕

江戸の末期、舊暦八月中旬の午後。向ふ兩國の觀世物小屋の樂屋。小屋は甚だ粗末なる葭張りにて、左右には荒むしろを垂れてあり。正面は舞臺のうらを見たる心にて、一段高きところに削りばなしの板割をならべて打ち付け、上の方は舞臺の出入口にて金巾の幕をうしろ向きに垂れ、低き階子あり。下の方にもおなじ出入口あり。舞臺のうちには綱を張りてぬぎ捨ての衣裳や浴衣などをかけ、外に粗末なる衣裳葛籠二つ三つあり。そのそばに蛇を入れたる朱塗りと黒ぬりとの桶あり。中央には一座の太夫お絹の鏡臺と化粧道具を置き、ほかにも粗末なる化粧道具などが取り散らしてあり。そこらには煙草盆、土瓶、茶碗、團扇などが亂雜に置かれてあり。上の方には大いなる角火鉢をおき、それに藥罐をかけてあり。

（樂屋番豐吉、五十餘歳、澁團扇を前におきて火鉢のそばで居眠りをしてゐる。蛇つかひの女お若とお虎は細帶の浴衣姿にてしだらなく坐り、お若は小さい鏡臺のまへで顏を直してゐる。お虎は舞臺用の金の扇をつかつてゐる。お君は十七八歳の娘にて、大きい團扇と湯呑を持つて立ち、下の方の幕の隙間より舞臺をのぞいてゐる。舞臺の方にて三味線入りの囃子の音きこゆ。）

お若　あついね。
お虎　あついね。

お若　これぢや遣りきれない。
お虎　これぢや遣りきれない。
お若　忌(いや)だね、この人は……。なにを云つても鸚鵡返(あうむがへ)しで、話をしてゐる張合がないぢやないか。
お虎　まじめに一々返事をしてゐるのも大儀だから、なんでもお前さんのおつしやる通りさ。
お若　なぜかう暑いんだらう。この通り汗びつしよりだ。
お虎　生きてゐるから汗も出るのさ。
お若　お巫山戯(ふざけ)でないよ。ちつとは眞面目に口をきくもんだよ。
お虎　はい、はい。（あらたまつて手をつく）まことに當年はきびしい殘暑でございます。どなたもお障りはござりませんか。
お若（これも眞面目で）これはようこそおたづね下さりました。おかげ樣であるじもわたくしも息災で暮してをります。
お虎　おい、おい。お前さんにあるじがあるのかえ。
お若　たんともございませんが、ちよいと三四人はござります。
お虎　馬鹿だね。はゝゝゝゝゝゝ。
お若　はゝゝゝゝ。
豐吉（眼をあく）どうも近所がさう／＼しいな。ちつと靜かにしてくれ。舞臺の邪魔になるぜ。
お若　舞臺よりもお前さんのおやすみの御邪魔になるんだらう。稼業に出て來てゐて、晝間から居睡りなんぞ遊ばすのが悪いのさ。
豐吉（眼をこすりながら煙草をのむ）それが不思議なもんでね、お前達が舞臺へ出てゐると、なにか仕損じでもしやあしないかと、蔭で始終はら／＼してゐるもんだから、めつたに睡くなんぞはならないが、お絹さんが出てゐる時には、こつちも安心してゐるせゐか、ついうとうとと好い心持になつて來るのよ。
お虎　豐さんの憎まれ口も久しいものさ。（下(しも)の方(かた)を指さす）君ちやんを御覽な。あゝして一生懸命に舞臺をのぞいてゐるぢやあないか。
豐吉　あの子は別物だ。まだ年もいかねえに、あんなに姐さんを大事にするのも珍らしい。あゝ、いゝ心がけの娘だ。伜があれば嫁にしたい位だ。おまへ達もせい／＼あの子を見習ふがいゝぜ。
お若　せい／＼あの子を見習つたら、お奉行所から青緡(あをざし)二貫文の御褒美でも頂戴するかも知れないよ。
お虎　その二貫文を頂戴したら、鯡の蒲燒でも奢つて貰はうかね。
豐吉　鯡の蒲燒に鰯の天ぷら、それを御賞翫遊ばすやうぢ

やあ、どのお姫様も育ちがいゝな。

お若　知れたことさ。山の神の申し子だあね。

（舞臺の鳴物やむ。下の方の幕をくゞつて蛇つかひお絹、廿三四歳、藤むらさきの紋付のかたびらに水色の上下をつけ、蛇を入れたる黒塗の桶をかゝへて出づ。お君は待兼ねたやうに其箱をうけ取りて、すぐに湯呑を渡せば、お絹も立ちながらに一口のむ。お若とお虎も立ち寄る。）

お若　ねえさん、暑かつたでせう。

お虎　今日はとりわけてひどい樣ですね。

豐吉　御苦勞樣でございます。

（お若とお虎は手傳つて、お絹の衣裳をぬがせ、浴衣にきかへさせる。お君はかひ〴〵しく立ち働き、大團扇にてお絹を煽ぐ。お絹は鏡臺の前にぐつたりと坐る。上の方の幕をくゞりて、地彈の年増のお辰は三味線を持ち、囃子の若い女お留は撥を持ちて出づ。）

お辰　あつい、あつい。

お留　ほんたうに茹つてしまふわ。

（二人もぐつたりと坐りて、團扇をつかつてゐる。）

お若　今度はこつちの太夫さんの番か。（浴衣をぬいで衣裳をきる）

お絹　（手拭で顔をふきながら）どうして今年の殘暑はこんなに長いんだらうね。

お若　暑いせゐか、木戸もひまな樣ですね。

お絹　あたりまへさ。この暑さぢやあ大抵の者は溶けてしまはあね。どうせこんな時に口をあいてぼんやり見てゐるのは、田舍者か勤番者か陸尺ぐらゐなものさ。（お若に）若ちやん、なるたけ長く賴むよ。

お若　（衣裳を着ながら）はい、はい。でも、あたし達はほんの前藝ですもの、とても長くは繫げませんよ。

お絹　前藝で澤山だよ。ほんたうの藝當をお目にかけるのは、もう少し涼風が立つて來てからのことさ。早く行つておいでよ。若いお客樣はみんなおまへさんを待つてゐるんだから。

お若　（蛇の箱をかゝへる）ぢやあ、まあ、その積りで迷はして來るか。

お虎　日が暮れると、蝙蝠が迷つて來るさうだ。

お若　馬鹿。（扇で打つ眞似をして、下の方より舞臺へ出てゆく）

お辰　さあ。（お留と共に立つ）

お絹　おまへさん達は息つかずだから大變だねえ。

お辰　お察しください。

（お辰とお留は上の方より舞臺へ出てゆく。）

お若　（お絹に）手拭を絞つて來ませうか。

お絹　それよりかお湯をもう一杯、お藥をのむのだから。
お君　はい、はい。(湯呑を持つて火鉢の方へゆく)
豐吉　(藥罐の湯をついで遣りながら)　ねえさん、けふ樂屋入りの時には、ひどく顏の色が惡かつたやうだつたが、ようがすかえ。殘暑が強いから氣をつけて下さい。おまへさんに倒れられちやあ、それこそ大變だからね。
お絹　倒れるかも知れない。この二三日の暑さにあたつたせゐか、あたしは全くからだが變なんだから。
(お君は湯を持つてゆく。お絹は鏡臺のひきだしから丸藥を出してのむ。)
お虎　(笑ひながら)　そりや陽氣のせゐばかりぢやありますまい。向う柳原はこの四五日見えないやうですね。
お絹　四五日どころか、八月に這入つてから碌に寄りつきやあしないのさ。畜生、おぼえてゐるがいゝ。
(お絹は眼にみえない相手を罵るやうに、舞臺持の金扇で傍にある箱をたゝくと、箱の小さい穴から青い蛇が首を出す。)
お絹　(蛇を見て)　馬鹿。おまへの出る幕ぢやあないんだよ。
(扇で頭をひとつ叩かれて、蛇はおとなしく穴にかくれる。)
お虎　八つあたりね。可哀さうに……。姐さん、隨分邪慳だこと。
お絹　あたしは邪慳さ。おまけにこの頃は癇が起つてじりじりしてゐるから、誰彼れの容赦はないんだよ。えゝ、じれつたい。
(お絹は持つたる扇をひき裂かうとする。お君はあわてゝ其手を押へると、お絹は無言で扇をお君に渡し、額をおさへて俯向いてゐる。お虎は豐吉と顏を見あはせ、豐吉は打つちやつて置けと眼で知らせるに、お虎はうなづいて少しあとへ退る。舞臺の方には囃子の音きこゆ。上の方より菓子賣勘藏、三十五六歲、駄菓子の箱をかゝへて出づ。)
勘藏　今日は……。どなたかお菓子はいかゞです。
豐吉　菓子屋さん。よく稼ぐね。
お虎　又いつものお市が捻鐵だらう、珍らしくもない。と云つても、やつぱり手を出す奴さ。(お絹に)　おまへさん、いかゞ。
お絹　あたしは澤山。(重さうに頭をふる)　だけども、みんなが食べるならばおたべよ。代は一緒に拂つてあげるから。
勘藏　ありがたうございます。(菓子の箱をひろげる)　さあ、さあ、うまいもの、店びらきでござい、
お絹　豐さんもこつちへお出でよ。君ちやん、おまへもた

んとおたべ。

お君　はい。

豊吉　どうも御馳走さまでございますね。

お虎　御馳走さま。

（豊吉とお虎は菓子の箱を取りおいて、勝手につまんで食ひはじめる。お君は土瓶に湯をさして持ち來り、一緒に菓子を食ふ。お絹はだまつてながめてゐる。）

お虎　（茶をのみながら）お前さん、列び茶屋へも商賣に行くんだね。

勘藏　えゝ、まゐります。

お虎　不二屋へも行くんだらう。

勘藏　えゝ、毎日一遍づつは廻ります。

（お虎はお絹に眼くばせしながら又きく。）

お虎　おまへさん、あの不二屋のさあちやんといふ子を知つてゐるだらう。

勘藏　知つてゐますよ。おとなしい姐さんですね。

お虎　あの子にこの頃いゝ人が出來たつてね。

勘藏　さあ、そんなことまでは知りませんよ。（笑つてゐる。）

お虎　向柳原のお屋敷さんだと云ふぢやあないか。おまへさん毎日行くんだから知つてゐるだらう。

勘藏　でもそんなことは……。（お絹の方をちよつと見かへる）ならび茶屋だつて一軒ぢやあなし、そこへ色々のお客が入りかはり立ちかはり來るんですから、誰がどこの人だか、ちつとも判りませんよ。

豊吉　（これもお絹の方を見かへる）そりや判らねえのが本當だ。晝間から夜まで入れ代り立ちかはり來る客を、店の者だつて一々おぼえてゐられるものかな。

お虎　でも、眼につくお客だからさ。若いお侍で、色の白い綺麗な人だよ。知らないかえ。

勘藏　（とぼけたやうに）知りませんね。

（さつきからじりじりしてゐたお絹は、蛇の箱をかゝへて勘藏の傍へ詰めよる。）

お絹　（眼の色を變へて）勘さん。

勘藏　（少しうろたへて）は、はい。

お絹　おまへさんも此頃この藥屋へ這入つてくる人ぢやあない。向柳原といへば大抵わかつてゐる筈だ。あたしのところの林さんのことさ。あの人がこの頃むやみに不二屋へいく。きのふも一昨日も、一昨々日も這入り込んでゐたといふのは本當かえ。さうして、あのお里といふ女と可怪いといふのは本當かえ。

勘藏　どうですか。わたしはどうも……。

お虎　強情を張らないで、知つてゐるだけの事は正直に云つておしまひよ。

勘藏　だつておまへさん。私がその本人ぢやあるまいし、人の事がどうして判るもんですか。そんた無理なことを……。

(半分云はないうちに、お絹は無言で勘藏の腕をぐつとつかむ。)

勘藏　あゝ、ねえさん。どうするんです。ひどい事をしちやあいけませんよ。

(振放さうとする勘藏の腕を、お絹は片手でしつかり掴んで、かた手で箱を叩くと、穴から青い蛇が首を出す。お絹はその鎌首をつかんでずる〳〵と引き出して、勘藏の鼻の先へ突きつける。)

お絹　さあ、云はないか。

勘藏　えゝ。(真蒼になつてふるへる)

お絹　さあ、隠さずにいふかえ。なんでもいゝから、お前さんの知つてゐるだけのことを正直にみんな云つておしまひよ。

(額へこすり付くやうに蛇を突きつけられ、勘藏は口もきけないで身をすくめてゐる。)

お絹　おまへさんは知らない筈はないぢやないか。列び茶屋へ行くばかりぢやない、おまへさんが明神下の裏に住んでゐて、お里の家のすぐ近所だといふことも、あたしはちやんと知つてゐるんだよ。

勘藏　(ふるへながら)ね、ねえさん。堪忍して下さい。堪忍してください。

お絹　堪忍するから白状おしよ。林さんとお里とどんなことをしてゐるんだよ。

勘藏　でも。まつたく知らないんですよ。

お絹　まだ隠すか。白状しないか。蛇をまきつけるよ。

勘藏　(悲鳴をあげる)いけませんよ、いけませんよ。御免なさい、御免なさい。

豊吉　(見かねて止める)もし、姐さん。なんぼなんでも蛇責めはあんまり殺生だ。それほど拷問されても云はねえ以上は、まつたく知らねえに相違ねえ。もう堪忍しておやんなせえよ。

勘藏　ほんたうになんにも知らないんですから、どうぞ助けてください。拝みます。

お君　(お絹の袖をひく)あんまり可哀さうだから、もう堪忍してやつて下さいよ。

お絹　なに、可哀さうなものか。こんな強情な奴は一通りのことで正直に白状するものか。さあ、云はないかよ。

豊吉　まあ、いゝ。もう好加減におしなせえ。(勘藏に)菓子屋さんも今日は早く店をしまつて引揚げるがいゝぜ。

勘藏　はい、はい。(早々に菓子の箱を片付ける)どなた

も御免なさい。（逃げるやうに行きかける）
お絹　おい、おい。お待ちよ。こりやあ御菓子の代だよ。
（鏡臺のひきだしから一朱を出して投げてやる）
勘藏　（銀を取つて）一朱頂いてもおつりがございません。
お絹　おつりはいゝよ。その代りおまへさんに言づけを頼みたいんだがね。不二屋のお里に逢つたらば、これから林さんを一切よせつけない樣にしてくれと、さう云つておくれ。いゝかえ、よく忘れないやうにお里に云つておくれ。もしこの後も相變らず不二屋に林さんの姿を見かけるやうなことがあると……。（蛇を見せる）あたしはこれを持つてお里のところへお禮にいくからね。
お虎　ねえさんばかりぢやない。あたし達も加勢にいくよ。
勘藏　はい、はい。
お絹　冗談ぢやあない。これで本當にお里の頸をしめてやるから。
勘藏　はい、はい。きつとさう申します。
（豐吉は渋團扇にて早くゆけと逐ひ立てる。勘藏はうなづき、早々に上の方へ逃げ去る）
お絹　憎らしい奴だねえ。（蛇を箱に入れる）
豐吉　（お虎に）おい。出の支度をしねえか。
お虎　今の騷ぎで忘れてゐた。大急ぎ、大いそぎ、三枚だ。
（お虎はあわてゝ起つて、紋付の帷子と上下を着る。）

お君　（おづ／＼云ふ）ねえさんもそろ／＼支度をしては……。
お絹　あいよ。もう一度いつもの藝當を御覽に入れるか。あゝ、忌だ、忌だ。いつそ二三日休まうかしら。
お虎　ほんたうに休むんですか。
お絹　まあ、なにしろ今日は勤めるよ。中途で追ひ出すわけにも行くまいぢやないか。けふは掛合をうまく遣つておくれよ。
お虎　はい、はい。
（お絹は忌々ながら起ち上れば、お君は手つだひて、今度は花魁の裲襠のやうな派手な衣裳をきせる。）
お絹　豐さん、見ておくれよ。けふこの頃の温氣にこのお姿だ。
豐吉　お察し申します。
お虎　その代りに若く見えますよ。
お絹　ありがたう。今のお菓子のお禮かえ。（笑ふ）おまへさんも現金だね。
お虎　はゝ、まつたく掛値のない生れ付きさ。
（お絹もお虎も衣裳を着てゐると、下の方の幕をくゞつてお若出づ。）
お若　あつい、あつい。（あわてゝ衣裳をぬぐ）
お虎　幾たび同じことを云つてゐるんだよ。

お若　さう云ふおまへさんも舞臺へ行つて一と汗かいて來るのがいゝのさ。まつたく汗が眼にしみるから。

お虎　土用の蜆をたべて置かないからさ。

（上の方の幕をくゞつてお辰とお留出で、これも忙しさうに團扇をつかつてゐる。）

お絹　若ちやん、けふは大變に早かつたぢやあないか。いつもはあたしがこゝで一息つくのに、けふはもう降りて來たのかえ。

お若　なに、いつもの通りですよ。（お辰に）ねえ、をばさん。

お辰（うなづく）えゝ、えゝ。前が薄いからと云つて、些ともずるけやしませんよ。

お絹（鏡にむかひて髪をかきながら）どうだか知れるものか。横着を看板にかけてゐる人間が幾人も揃つてゐるんだもの。（お辰に）お辰さん。さつきの三味線は馬鹿に鈍かつたよ。今度はもう少し早間にね。いゝかい。あんなことで藝が出來るものかね。

お辰　はい、はい。

お絹　みんなだらけ切つてゐるんだからね。じれつたくつてなりやしない。留ちやん。お前もぼんやりしてゐないで、腕一ぱいにしつかりと囃しておくれよ。

お留　はい、はい。

お虎（蛇の箱をかゝへる）ねえさん。一足お先へ出ますよ。

お絹　あいよ。あとから行くよ。

お虎　かけ合ですからね。

お絹　判つてゐるよ。うるさいね。

（お虎は下の方より舞臺へ出てゆく。お辰とお留も起つてゆく。お君は湯をくんで來れば、お絹は一口のみて起つ。お君は蛇の箱をかゝへて下の方の幕の口まで送つてゆき、お絹は箱をうけ取りて舞臺へ出てゆく。この間にお若は衣裳をぬぎて浴衣にきかへる。うしろでは舞臺の鳴物きこゆ。お君は引返して、そこらの土瓶や茶碗などを片付ける。）

お若　君ちやんはよく働くねえ。まつたく感心するよ。

豐吉　だから、おいらが褒めてゐるのさ。君ちやんは相變らず感心で結構だが、姐さんはひどくお冠が曲つてゐるらしいね。

お若　大曲り。（うなづく）毎日みんなが呶鳴られ通しさ。

豐吉　だが、無理ぢやあねえ。その病根は向柳原にありさ。近頃の向柳原の仕向方といふのが、ちつと宜しくねえやうだからね。

（お君はそこを片付けて再び下の方にゆき、床几のやうな物に腰をかけて舞臺をのぞいてゐる。）

お若　まつたく姐さんの云ふ通りさ。けれども、姐さんも隨分無理を云つてあの人を困らせるんだからね。いくら相手がおとなしくつても、あれぢやあ我慢がつゞくまいよ。

豐吉　それもさうだが……。（考へる）どう考へても向柳原の仕打ちがそでねえやうだ。ちつとぐれえお絹さんが無理を云つたところで、それを柳にうけてゐるだけの義理もあらうといふものだ。御直參といつても、安御家人の次男坊で、お絹さんと馴染んでから家は勘當同樣、それからお絹さんの家へ引きとられて、小一年も世話になつてゐたんぢやあねえか。それから誰かの世話で、向柳原の杉浦といふ旗本屋敷の中小姓に住み込んで、どうにか斯うにか自分の身じんまくが出來ると、この頃はめつたに藥屋へも寄り付かねえ。お絹さんの家へもだん／＼に足が遠くなる。それぢやあ女の方だつて癇積をおこす筈だ。おいら達のやうな人間でも、人樣の世話になつた事はおぼえてゐる。まして、痩せても枯れても二本さしてゐる男が、堀川のお倹を惡く氣取つて、世話しられても恩にきねえは、あんまり義理が惡からうと思ふが……。ねえ、どんなもんだらう。

お若　（仰山に）そりやあこつちでばかりいふ事で、男の方の身になつたら又どんな理窟があるかも知れないからね。

豐吉　おめえは兎かく男の贔屓ばかりしてゐるが、こりやあ些と可怪いぜ。（笑ふ）

お若　（すました顏で）さうかも知れない。向柳原はいゝ男だからね。

豐吉　お絹さんより年下だらう。

お若　二つ違ひだから、廿一さ。

豐吉　色男ざかりだな。

お若　世間に惚れても澤山あらあね。姐さんばかりが女でもあるまい。それにね豐さん。（すこし摺りよる）向柳原はね、ねえさんの……。（自分の目を指さす）これを忌がつてゐるんだよ。

豐吉　なに、眼の玉がどうした。

お若　わからないね。ねえさんの眼を御覽よ。あんなに好い女だけれど、ぢつと物を見る時になんだか忌な眼つきをするだらう。まるで蛇のやうな眼つきをするだらう。

豐吉　さう云へば、お絹さんの眼つきは些とよくねえな。年中生きた蛇をあつかつてゐるから、自然とそれにかぶれたのかも知れねえ。おいら達は毎日見馴れてゐるから、それほどにも思はねえが、まつたく氣味の惡い忌な眼つきをすることがあるな。

お若　さうだらう。その蛇のやうな眼つきを男の方ぢや忌

がつてゐるらしいんだよ。初めは夢中だつたらうが、小一年も一緒にゐて、朝に晩に顏を見あはせてゐるうちに、それがだんだんに眼について來て、今ぢやあ忌がるといふよりも怖がつてゐるらしいんだよ。

豐吉　なるほど。（又考へる）それでお絹さんの止めるのを振切つて、向柳原の屋敷へ行つたのか。早く云へば、奉公口の出來たのを幸ひに、體よく逃げ出したんだね。

お若　まあ、さうらしいね。男の身になつて御覽。いくら可愛い女でも、あの眼で睨まれると、まつたく怖いよ。

豐吉　だが、やつぱりいけねえな。（首をふる）いけねえ、いけねえ。そりやあいけねえ。世間には片輪の女房を持つてゐる男もある。大あばたの亭主と仲よくしてゐる女もある。そこが人情といふものだ。ちつとぐれえ氣味の悪い眼つきをしたからと云つて、今更寢返りを打つといふのは、やつぱり男に人情がねえからだな。

お若　そりやあ今時の男だもの。

豐吉　（嘲けるやうに）悟つたものだな。

お若　悟らないで、こんな稼業が出來るものかね。姐さんはまだ悟りが開けないんだよ。

豐吉　さうかなあ。（苦笑ひする）今の世界ぢやあ、おめえの云ふのが本當かも知れねえよ。

（豐吉は面白くない顏をして煙草をのんでゐる。お若は小さい鏡臺にむかつて鬢などをかき始めると、舞臺をのぞいてゐたお君が忽ち叫ぶ。）

お君　あつ。（二人を見かへりて）大變、大變よ。

（お君はあわたゞしく幕をくゞつて、舞臺の方へかけ出してゆく。お若も起つてのぞく。）

お若　あら、大變……姐さんが倒れた。

豐吉　どうしたんだ。

（豐吉は上の方より、お若は下の方より、舞臺の方へかけ出してゆく。やがて木戸の男三人はお絹をかゝへ、お若とお君お虎も附き添ひて下の方より出づ。豐吉も出づ。）

豐吉　なにしろ靜かに寢かして置かなけりやあいけねえ。

（皆々手傳ひて正體のないやうなお絹をそこに横へる。上の方よりお辰とお留も出づ。）

お若　一體どうしたんだらうねえ。

お君　（泣聲になつて呼ぶ）姐さん、ねえさん。しつかりして下さいよ。

豐吉　早く水でも湯でも飲ませろ。

（お留はあり合ふ茶碗に湯を汲んでくる。皆々わやわや云ひながらお絹を取りまく。）

――幕――

第二幕

一

本所一ツ目あたりの裏家。造作は古けれど、家内は小綺麗に片附けられてあり。二重屋體は三つに仕切られて、上のかたは臺所、まん中は上の方に三尺の神棚、その下に押入、それにつゞいたる壁の際には衣裳葛籠などを置き、一挺の三味線をかけてあり。その次は出入りの襖にて、奥にまだ一間ぐらゐあると知るべし。狭き庭には植木らしきものもなく、濡れ縁の上には蔓のみ伸びて花のなき朝顔の鉢が一つ置いてあり。庭の下の方はあらき四目垣にて仕切られ、家の下のかたは寄附にて、正面は障子、その外は沓ぬぎ、つゞいて格子戸あり。寄附の横手には簾をおろしたる半窓あり。家の外には長家の板羽目などみゆ。

（おなじ日の夜。まん中には行燈をともし、お絹が長火鉢のまへで藥土瓶を煎じてゐる。すこし離れて地彈のお辰が坐つてゐる。下のかたの縁端にはお君が澁團扇を持ち、土燒きの小さい火入れで蚊いぶしを煽いでゐる。題目太鼓の音さびしくきこゆ。）

お辰　（起ちかゝる）おやあ、ねえさん。まあ、お大事になさい。君ちやん、氣をつけて下さいよ。

お君　はい。

お辰　こゝらも隨分蚊が出るのね。

お君　隨分出ますよ。をばさんの方は……。

お辰　（顔をしかめる）あたしの方は猶大變。どうして、どうして、こんなどころぢやない。狸でもいぶすやうにどん／＼燃やさなければ、とても凌げないのさ。おやあ御めんなさい。

お絹　をばさん。御親切にありがたう。

お辰　どうしまして。くれ／″＼もお大事に……。（云ひつゝ寄附へ出る）

お君　（送つてゆく）左樣なら。

お辰　左樣なら。

（お君は引返して蚊いぶしを煽ぐ。お辰は格子を出て下の方へゆきかゝると、下の方より藥屋番の豐吉は芒を持ちて出づ。）

お辰　あゝ、豐さん。

豐吉　お絹さんはどうだね。

お辰　案じたほどでもないやうですよ。火鉢の前に起きてゐるくらゐだから。

豐吉　起きて居られるやうぢやあ大丈夫だ。まあ、まあ、よかつた。

（二人は顔で會釋して、お辰は下の方へ去る。豐吉は

格子をあけると、お君はまた起つて出る。）

豐吉　姐さんはどうだね。今そこでお辰さんに逢つたら、案じたほどでもねえと云ふぢやあねえか。（云ひながら内に這入る）

お絹　（顔をあげる）おや、豐さん。おまへさんも來てくれたの。忙しいところを濟まないね。

豐吉　ところでどうですえ。おい。（お君に）これは、お見舞ぢやあねえ、おみやげだ。（笑ひながら芒を渡す）

お絹　あゝ、すつかり忘れてゐたが、あしたは十五夜だね。

豐吉　いゝ鹽梅にお月樣も拜めさうですよ。

お絹　（お君に）あしたの朝まで臺所の手桶へでも挿してお置きよ。

お君　はい、はい。（臺所へ芒を持つてゆく）

お絹　豐さん。蚊がひどいよ。

豐吉　あい、あい。（そこにある團扇をつかひながら）すぐに癒つてようござんしたね。さつきはほんたうにびつくりしてしまつた。

お絹　みんなに心配をかけてお氣の毒でしたね。尤もこの二三日は頭が重くつて、なんだか氣分が惡いとは思つてゐたけれど、舞臺に出てゐるうちに、だしぬけに眼がくらんだやうになつて、自分でも夢のやうにふら／＼と倒れてしまつて、それからあとは暫くなんにも知らなかつたのさ。

豐吉　でも、まあ、かうして起きてゐられるやうなら安心だ。あしたも出られるんでせうね。

お絹　大抵なら我慢して出るつもりだけれど……。

豐吉　さうして下さりやあみんなが助かりますよ。

（お君は臺所より出で來りて、茶や煙草盆を豐吉に出す。）

豐吉　（お君に）見舞ひに來たのはお辰さんばかりかえ。

お君　（うなづく）えゝ。

豐吉　お若やお虎はどうしやあがつたらう。

お絹　誰かと夜遊びにでも行つてゐるんだらうよ。

豐吉　ふだんから姐さんの世話になつてゐる癖に、人情のねえ奴等だな。

お絹　みんなさうさ。なんと云つてもお若やお虎はまだ年も若いし、世話をしたと云つたところで、もと／＼他人だから、今夜來ないで、あしたのあさ來ても義理がすむと云ふものさ。世間にはもつと義理を知らない人があるからねえ。

豐吉　（考へて）ねえ、お絹さん。わたしはこれから向柳原へ行つて、おまへさんの惡いことをちよいと知らせて來ませうか。

お絹　（首をふる）　わざ／＼行つて貰ふほどの事もあるまいぢやないか。君ちやんもさつきそんな事を云つてゐたけれど、あたしはおよしと云つて止めたくらゐさ。向ふにそれだけの實意があつて來てくれるなら格別、こつちからお迎ひのお使者をやるにも及ぶまいよ。唯でさへ些とも寄り附かない人が、病氣だなんて聞いたら猶更二の足だらうよ。

豐吉　まさかさうでもあるめえが……。まつたく此頃は些と足が遠すぎるやうですねえ。

お絹　ねえ、豐さん。あの人はまつたく不二屋のお里のところへ行くんぢやないだらうか。

豐吉　そいつは私にも判らねえ。菓子屋の勘公と同じことで、蛇責めに逢つても白狀の仕樣がねえ。だが、それはまあそれとして、向柳原の大將もあんまり無沙汰をするといふのはよくねえ事だ。今度逢つたらわたしからも能く云ひませうよ。

お絹　（考へる）　さうは云つても、あの人もやつぱりからだでも惡いんぢやないかしら。

豐吉　そんな事がないとも云へねえ、今年の殘暑は法外ですからね。　（これも少し考へる）　どつちにしても明日の朝、向柳原の屋敷へ行つて大將をうまく呼び出して逢へればよし、さもなけりやあ、門番のぢいやにでも竊と聲をかけて、よそながら樣子を探つて來ませうよ。蔭でばかり氣をもんでゐるよりも、こつちから出かけて聞いてくるのが一番早手廻しですからね。

お絹　（躊躇しながら）　ぢやあ、おまへさんに頼まうかねえ。

豐吉　わけはねえ。あしたの朝すぐに行つて來ませう。

お絹　すまないね。（火鉢のひき出しから錢を出して紙につゝむ）　あの、こりやあほんの少しだけれど、おまへさんのお使ひ賃に……。

豐吉　いけねえ、いけねえ。そんな事はいけねえ。わたしも貰ふ事は嫌えぢやあねえから、貰ふ時にやあお辭儀なしに貰ふが、今夜はいけねえ。自分の方から買つて出て、そのお使ひ賃を貰つちやあ、何のことはねえ、忠義ぶつて小使ひ取りに來たやうなもんだ。そんな慾な事はしたくねえ。お駕籠へでも乘つて行きやしめえし、眼と鼻のあひだの向柳原まで行つてくるのに、駕籠賃もお使ひ賃もあるもんぢやあねえ。折角だがこれはまあそつちへお預け申して置きますよ。

お絹　だつて、おまへさん。

豐吉　いけねえ、いけねえ。そりやあ御免だ。いや、飛んだおしやべりをしてしまつたが、今夜はまだ一軒顏を出して來なけりやあならねえ所があるので……。（煙草入

をしまひかゝる)

お絹　おまへさん、怒つたのかえ。

豐吉　なに、さうぢやあねえ。まつたく行くところがあるので……。(笑ひながら)それ、いつもの無盡さ。

お絹　あゝ、無盡か。いくら取れるんだつけね。

豐吉　ちつぽけなので五兩取りさ。それでも茶碗を伏せるよりは手堅いからね。はゝ、わたしも年を取りましたよ。

お絹　その方が間違ひがなくつていゝのさ。無盡は取り拔けかえ。

豐吉　取り拔けさ。

お絹　取らせてあげたいね。

豐吉　取つたら奢りますよ。(起つ)ぢやあ、まあ、氣をおつけなさい。このごろは晝間はあんなに暑くつても、夜になるとぐつと冷えますからねえ。

お絹　ありがたう。ぢやあ、あしたの朝行つてくれるの。

豐吉　屹と行きますよ。おい、君ちやん。たのむぜ。

お君　はい。

(豐吉は出てゆく。お君は送つてゆく。お絹はぢつと考へてゐる。)

お君　(引返してくる)ねえさん。お藥はもう煎じ詰まつたでせう。

お絹　あゝ、もういゝだらうね。

(お君は藥土瓶から湯呑についで渡せば、お絹はうけ取りて顏をしかめながら飮む。)

お君　にがいの。

お絹　にがいね。人間もこんなものを飮むやうになつちやあ往生さ。(耳をかたむける)どこかでお題目の太鼓がきこえるね。

お君　表の質屋さんでせう。

お絹　遠くで聞いてゐると、なんだか寂しいもんだね。(藥をのむ)君ちやん。お前の阿母さんはもう何年になるの。

お君　六年になります。

お絹　來年が七回忌だね。おまへも小さい時から繼阿母さんで苦勞をしたんだね。

(お君は默つてうつむいてゐる。)

お絹　君ちやんのお父さんは大工さんで立派な腕を持つてゐるんだけれど、お酒と博奕で身が持てず、おまけに阿母さんが違つてゐるんだから、おまへもほんたうに可哀さうだよ。

(お君は悲しさうに默つてゐる。)

お絹　あたしも子供の時から苦勞をしたものさ。どうせ人間は苦勞をするために生れて來たやうなもんだから、苦

勞をするのは仕方もないが、その苦勞の仕榮があればいゝけれど……。いつそ先刻ぶつ倒れたまゝになつてしまつた方がよかつたかも知れない。
お君　あら、ねえさん。
お絹　（ため息をつく）さうは云つても、まだこのまゝぢやあ死切れないねえ。まあ我慢して養生しませうよ。
お君　ほんたうに早く癒つてください。お願ひですから。
お絹　（さびしく笑ふ）案じることはない。もう癒つてゐるんだよ。
お君　（團扇で蚊を逐ひながら）肩でも叩きませうか。
お絹　いゝよ。もう少し蚊いぶしの方をやつておくれよ。
お君　はい、はい。
（お君は縁端へ出て蚊いぶしをする。月の光がうすく流れこむ。）
お君　あゝ、いつの間にかお月樣が出ました。
お絹　（空を見る）宵から出てゐるんだらうけれど、となりと隣りの庇合ひが重なり合つてゐるので、やう〳〵今頃になつて薄明るい影がさし込んで來たらしい。あしたの晩もお天氣にしたいね。芒は豐さんに貰つたから、お團子を買ふのをお忘れでないよ。
お君　はい、はい。
（下の方より仁科林之助、二十二歲、旗本屋敷の中小姓、江戸育ちのおとなしやかなる侍、羽織、袴、忍ぶやうに出で來りて格子をあける。）
お君　（起つて出る）あら、林さん。
林之助　姐さんはもう寢たかえ。（内に入る）
お君　豐さんにそこらで逢ひましたか。
林之助　いや、誰にも逢はない。（火鉢の方へくる）先づ窮屈袋を取るかな。（袴をぬぐ）
（お君はすぐに袴をたゝみにかゝれば、林之助はふところより風呂敷を出して、包んで置いてくれといふ。お絹はうつむいて默つてゐる。）
林之助　相變らず藪つ蚊の世界だな。（坐りながらお絹の顏をのぞく）どうした、顏の色がよくないぢやないか。
お絹　（顏をあげる）けふは舞臺で倒れたのさ。
林之助　そりやいけない、どうしたのだ。
お絹　なに、すぐに癒つたんだけれど……。やつぱり暑氣あたりだらうとお醫者が云つてゐましたよ。
林之助　道理で藥の匂ひがすると思つた。なにしろ大事にするがいゝぜ。からだが惡いやうならば無理をしないで、二三日休まして貰つたらいゝだらう。
お絹　それほどでも無からうと思つてゐるの。いつそ一と思ひに死んでしまつた方がいゝかも知れないと、今も君ちやんと話してゐたところさ。

い。
林之助　冗談ぢやあない。亭主に沙汰なしで、無暗に死なれて堪るものか。
お絹　あたしにも亭主があるかしら。
林之助　買物かも知れないが、ひとりはゐるな。（笑ひながら煙草をのんでゐる）
お君（お絹の顔を見る）あの、林さんに何か……。
林之助　なに、お客様ぢやない。もうすぐに歸るよ。
お絹　なにかと云つたところで、どうせ下戸だもの。いつもの甘いものでも買つておいでよ。（錢を出してやる）
林之助　どうせ御馳走になるなら、なるたけ上等のお菓子がいゝな。
お絹　川向ふへ來て贅澤をお云ひでないよ。一緒にもゝんじいの鍋を突ツついたこともあるぢやあないか。
林之助（笑ふ）さう云はれると一言なしだ。
（このうちにお君は衿をたゝみて風呂敷につゝむ。）
お君　ぢやあ、すぐに行つて來ます。（奥に入りて小風呂敷を持つて表へ出てゆく）
（お絹はだまつて長煙管の煙草をすひながら、男の顔をぢつと見てゐる。林之助はその眼を避けるやうに少しく顔をそむけながら、これも煙草をのんでゐる。題目太鼓の音きこゆ。）

林之助（やがて思ひ出したやうに）ほんたうにからだは好いのかえ。くどいやうだが無理をしちやあいけないぜ。
お絹　あたしよりお前さん何うかしてゐたんぢやないの。
林之助（笑ひながら）幸ひに殘暑のお障りもなく、ますます御機嫌好くだ。
お絹　さう。（又もやぢつと見る）おまへさん、今夜まつすぐにこゝの家へ來たの。
林之助　屋敷の使で割下水まで來たから、その歸りにちよいと寄つて見たのさ。來て見るとおまへは病人。やつぱり蟲が知らしたんだな。
お絹　蟲が知らさなけりやあ來ないのかえ。
林之助　忌にからむなよ。まつたく此頃は屋敷の御用が馬鹿にいそがしく、どこへも滅多に出られないので大閉口さ。今夜ももう五つ過ぎだ。あんまり道草を食つてもゐられない。御用人がなか／＼やかましいからな。
お絹　それだから屋敷者は嫌ひさ。あたしがあんなに止めたのに、そんな窮屈なところへお前さんはなぜ行つたの。御用人に叱られたつて構はない、殿様にも奥様にもたんと叱られるがいゝのさ。叱られて窮命されて、屋敷を逐ひ出されるやうにと、あたしは毎日祈つてゐるんだから。
林之助　おそろしいな。（笑ふ）阿波の十郎兵衛ぢやあねえが、一合取つても侍の林之助だ。叔父や親父の勘當

を受けたからと云つて、いつまでもおまへの厄介者で、唯ぶら〱してゐるのもあんまり口惜しい。

お絹　かたきの世話にでもなりやあしまいし、あたしの世話になるのがなんで口惜いんだよ。

林之助　まあ、聴けよ。おれもいゝ色男ぶつて女の家へころげ込んで、湯銭まで貰つてゐるのも幅がきかねえ。どうにかまあ、自分の身じんまくだけは自分で何とかしなけりやあならねえと氣がついて、窮屈な屋敷奉公も我慢してゐるのだ。おれの料簡も今にわかる。まあ、おたがひにもう少しの辛抱だ。

お絹　へん、久しいものさ。もう少し辛抱してゐれば一體どうなるんだらう。（火鉢の前をはなれて摺りよる）ねえ、林さん。おまへさんはお互ひに斯うしてゐて詰まらないと思はないかえ。

林之助　詰まる詰まらないの論ぢやあない。そりやあ斯うして離れてゐれば、昔戀しいこともある。おれだつて寂しい、おまへだつてあゝつまらないと思ふこともあるだらう。併しそこが辛抱だ。おれだつていつまで今の中小姓で、草履代りや使ひあるきばかりしちやあゐない。そのうちにはだん〱に出世して、給人か用人にもなれまいものでもない。その曉にはおまへを引き取るとも、又おまへが窮屈で忌だといふなら、窃とどこかへ圍つて置くとも、そこは又どうにでも仕様があらうといふものぢやあないか。

お絹　（あざ笑ふ）おまへさんの云ふことは大道うらなひのやうに、隨分うそで固めてゐるねえ。向柳原の杉浦様は七百五十石、お旗本のうちでもお歴々の方ぢやあないか。御用人や給人はみんな御譜代で、渡り奉公の中小姓なんかが並大抵の事でその後釜に坐れるものかね。なんぼあたし達だつてそのくらゐの事は百も承知してゐるのに、氣やすめにも程がある。第一お歴々の御旗本の御用人様が、兩國の蛇つかひを御新造にするなんて、そんな事が出來ると思つてゐるのかえ。

林之助　表向きは勿論出來ない譯さ。だが、世間は案じたものぢやあない。一旦綺麗に足を洗つて、それから相當の假親をこしらへれば、又どうにか故事付けられるといふものだ。又それが小面倒だとあれば、今もいふ通り、どこかへ圍つて置く。つまり二人が末長く逢つてゐられりやあそれで外に理窟はない筈だ。細工は流々、萬事はおれに任せて置いて、あんまりくよ〱しないがいゝよ。

お絹　どこかで仕込まれて來るとみえて、おまへさんもだん〱に口が上手になつて來たねえ。なにしろ小一年も一緒に暮してゐながら、あたしを置去りにして屋敷奉公に出て行つた人だもの。あたしの方でも其のつもりでゐる

なけりやあならないからね。
林之助　どうも風が悪いな。（又笑ふ）まあ仕方がねえ。なんとでも云はして置かうよ。どうで大詰が出りやあ知れることだ。
お絹　（ため息をつくやうに）どんな大詰が出るのかねえ。謀る謀ると思ひの外か。

（月の光りいよ／＼流れ入る。）

林之助　（話を轉じるやうに）あゝ、いゝ月だ。すつかり秋らしくなつたな。
お絹　（おてつけるやうに）だん／＼に秋風が吹いてくるのさ。
林之助　君ちやんは遲いな。
お絹　あの子は利口だから、氣をきかしてわざと遠廻りをして歸つてくるのかも知れない。（思ひ出したやうに肩をすくめる）夜が更けたせゐか、なんだか冷々して來たやうだ。
林之助　陽氣が悪いから氣をつけないぢやあいけねえ。
お絹　浴衣ぢやあ冷えて來た。おまへさんの羽織を着せておくれよ。
林之助　こんな蟬の羽がどうなるものか。奥に何かあるだらう。

（林之助は立つて奥に入り、派手な丹前を持つて來て、お絹に羽織らせる。）

林之助　さあ、これでも羽織つてゐるがいゝ。からだの悪いのに夜ふかしをしないで、早く寢たらどうだ。おれはもう歸るから。
お絹　もう歸るの。
林之助　折角のお菓子を待つてもゐられまい。（煙草入れをしまひて風呂敷を持つ）ほんたうにからだを大事にしてくれないぢやあ困るぜ。（たち上る）
お絹　林さん。ならび茶屋へばかり行かないでね、ちつとはこゝの家へも來てくださいよ。
林之助　（行きかけて立ちどまる）列び茶屋へ行く……。誰が……。
お絹　お前さんがさ。みんな知つてゐるよ。
林之助　（笑ふ）へん、つまらねえことをいふな。

（林之助は相手にもならないで寄附の方へ出て行く。そのうしろ姿をぢつと見つめてゐたお絹は、急にむらむらとなつて丹前をはね退け、よろけるやうに駈け出して、今や沓脱ぎへ出ようとする男の腕にしがみつく。）

お絹　（ヒステリックに叫ぶ）林さん。おまへさんは隨分薄情だね。
林之助　えゝ、びつくりした。氣ちがひじみてゐるぜ。

お絹　（眼を逆吊らせて林之助をひき戻してくる）　おまへさん。あたしといふものを何うしてくれる積りなの。まあ、お坐りよ。（無理に引据ゑる）　おまへさんを屋敷へ遣つた以上、籠の鳥を放してやつたも同然で、どうせ元へ戻つて來ない事はあたしも大抵あきらめてゐたけれども、つい鼻の先の廣小路へ來て、ならび茶屋の娘と巫山戯ちらしてゐる。そんな事をされて、おとなしく見物してゐるあたしだと思つてゐるのかえ。

林之助　ならび茶屋の娘……。そりやあ思ひも付かない濡衣だ。なるほど友達のつき合ひで、兩國へも涼みに行つて、ならび茶屋の不二屋へもちよい〳〵遊びに行つたこともあるが、焦げ臭い麥湯や鹽つ辛い櫻湯をのんで歸る、通り一遍のお客樣で、なにもおまへから乙にからんだ事を云はれるやうな覺えはない。かう見えてもおれは大川の水で、あつさりと淸いものだ。

お絹　憎くお洒落れでないよ。（男をこづき廻す）　お前さんが不二屋のお里とをかしな狂つてゐることは兩國界隈でもみんな知つてゐるんだよ。さあ、これからあたしと不二屋へ行つて、あたしの眼のまへでお里と手を切つておくれ。

林之助　（煙にまかれたやうに）　馬鹿だな。誰かにしやくられたのか。樂屋には口から先に生れた奴が大勢ゐるから、何かつまらねへことでも云つたんだらう。お若かお虎か、それとも鱧吉か。おべつか半分に見て來たやうな嘘八百をならべたてゝ、飛んだ淸姫を一人こしらへてしまつた。おたがひにそんなことを云つて、泣いたり笑つたりしたのは昔のことだ。

お絹　まつたく昔の事さ。今のお前さんはもう他人の積りでゐるんだらう。それだから口惜しい。憎らしい。さあ、あたしと一緒においでよ。（無理に引つ立てる）

林之助　（持餘して）　困らせるぜ。何のかゝり合もないところへ、馬鹿な面をして行かれるものか。冗談も好加減にしてくれ。

お絹　なにが冗談なものか。あたしは一生懸命の眞劍だよ。さあ、一緒にお里のところへ行つて、はつきりと緣を切つておくれ。

（お絹に睨まれて林之助は顔をそむける。）

お絹　おまへさん、どうしても行かないのかえ。

林之助　（逃げ支度にかゝる）　でも、行くわけがないと云ふのに……。なにしろ今夜はもう屋敷の門限だ。まつすぐに歸らなけりやあいけない。いづれ又近いうちに來るよ。

お絹　嘘をおつきよ。

（この爭ひのうちにお君は風呂敷につゝみたる菓子を

持ちて歸り來り、格子の外にうかゞひゐる。）

林之助　いや、屹と來る。きつと來るよ。まあ、今夜は堪忍してくれ。

お絹　いけない。いけない。

（林之助はすりぬけて行かうとするを、お絹は氣ちがひのやうになつて引き戻すうちに、男の羽織の乳が切れて、お絹は羽織を持つたまゝにて倒れる。林之助はそのまゝ沓ぬぎへ飛び降り、草履を突つかけて早々に下の方へ逃げてゆく。）

お絹　畜生、逃すものか。

（お絹はつゞいて追はうとするところへ、お君は駈けこんで支へる。）

お君　あれ、どこへ行くんですよ。

お絹　知らないよ、知らないよ。（突き退けて行かうとする。）

お君　（泣聲になつて）ねえさん。まあ、待つてくださいよ。林さんはもう遠くへ行つてしまひましたよ。

お絹　（窓から表をみて罵る）今夜は逃げたつて、屹とつかまへてやる。いよ／＼となれば、屋敷の玄關へ押かけて行つてやるから、おぼえてゐるがいゝ。

お君　まあ、こつちへおいでなさいよ。

（お君はお絹をいたはりながら火鉢の方へ連れてゆく。お絹は男の羽織をつかんだまゝで、火鉢によりかかつて大きい息をついてゐる。）

お君　それは林さんの羽織でせう。

（お絹は無言でその羽織を疊にたゝき付ける。）

お君　（はら／＼しながら）どうもお使ひが遲くなつてすみませんでした。

（お絹はやはり無言で、苦しさうに息をついてゐる。お君はその羽織をたゝむ。）

お君　ねえさん。どこか切ないんですか。もう一度お藥を煎じませうか。

お絹　（うるさゝうに）いゝよ。いゝよ。もう誰も來やあしまい。表の戸締りをしておいでよ。

お君　でも、林さんがこの羽織を……。取りに來やあしませんかしら。

お絹　取りに來るものかよ。構はないから閉めておしまひよ。（少し焦れる）閉めておいでよ。

お君　はい。

（お君は入口に立つて行き、雨戸をくり出して格子を閉める。）

お絹　（うつむきながら聲をかける）おまへも早くお寢よ。あしたの朝ねむいからね。

お君　（引かへして來る）ねえさんこそ早くおやすみなさ

いよ。
お絹　あたしはもう好いんだよ。
お君　でも、なんだか心配ですもの。姐さん、後生ですから
からだを大事にして下さいよ。
お絹（叱るやうに）いゝよ、判つてゐるよ。あたしに構はずにお寢といふのに……。
お君　あたし今夜は起きてゐます。
お絹　看病なんぞしてくれないでもいゝよ。うるさいから早くお寢よ。
お君　でも……。（まだ澁つてゐる）
お絹（じれる）強情な子だね。云ふ事をきかないと承知しないよ。
（お絹は煙管をふり上げる。お君は身動きもしないで、だまつて眼をふいてゐる。それを見てゐるうちに、お絹は急に堪らなくなつたやうに煙管を投げ出し、轉げよつてお君を横抱きにしつかりとかゝへる。）
お絹　君ちやん、君ちやん。堪忍しておくれよ。あたし此頃はまつたく癇が起つて、罪もないおまへさんを邪慳にする事があるけれども、もうなんにも叱りやあしないよ。ね、ね、いゝだらう。これから二人が屹と仲よくしようね。
（お絹はお君を抱へたまゝで泣く。お君も啜り泣をする。題目太鼓の音きこゆ。）

二

柳原堤。正面は低き堤に沿うて大いなる柳をうゑ連れ、その葉がくれに神田川を隔てたる向河岸の人家を見る。おなじ夜、月のひかり冴えて犬の聲遠くきこゆ。
（上のかたより林之助は着流しにて袴の包みを持ちて出づ。）
林之助（立ちどまる）羽織を置いて來ては困る。取返して來ようか。（引返さうとして又躊躇する）いや、又あしたにしよう。（思ひ切つて下のかたへ行かうとする）
（犬の聲だん／＼近くなりて、下の方よりお里、あわたゞしく走り出づ。お里は十八九歳、兩國のならび茶屋の女、かゝる稼業に似合はぬおとなしき風にて、犬を恐るゝやうに逃げ來り、つまづき轉ぶ。）
林之助　あ、あぶない。どうした、どうした。
お里　大きい犬が二匹も三匹も吠えて來ましたので……。
（あとを見返る）
林之助　あゝ、犬か。この頃はのら犬が多くて困る。（犬の聲近づく）畜生。叱つ、叱つ。
（林之助はそこらの小石を拾つて投げつける。犬の聲だん／＼に止む。）

林之助　はゝ、もう大丈夫。犬はみんな逃げてしまつた。轉んだときに怪我でもしやしなかつたかね。

お里　ありがたうございます。別に怪我はいたしませんでした。

林之助　鼻緒を切つたね。

お里　はい。

林之助　それはいけない。わたしが假りに繕(つくろ)つてあげよう。（女の顔を見る）おゝ、おまへはお里か。

お里　あら、仁科様でございましたか。唯今お歸りでございますか。

林之助　屋敷の用で割下水まで行つた歸りさ。おまへも店をしまつて歸るのだね。

お里　はい。

林之助　なにしろ、はだしでも歸られまい。一時凌ぎに何とかしてあげよう。左の前つぼを切つたのだね。

お里　いゝえ、あなたに願ひましては恐れ入ります。わたくしがどうにか致します。

林之助　なに、遠慮することはない。

お里　でも、それでは……。

林之助　まあいゝ。男のいふ事をきくものだ。

お里　まことに相濟みません。どうも恐れ入ります。

林之助　さあ、さあ、出しなさい。

（お里は遠慮しながら下駄の片足を出せば、林之助は袴のつゝみをお里に渡して柳の下にしやがみ、懷中より紙を出して紙撚(こより)をこしらへる。犬の聲遠くきこゆ。）

林之助　まだ吠えてゐるな。

お里　（左右を見まはす）この頃は柳原の土手に惡い犬が出ますので、夜が更けると怖くつてなりません。

林之助　夜はこゝらも寂しいからね。

お里　（氣味惡さうにすりよる）それに此頃は、とき〴〵に辻斬りがあるとか云ふことでございます。

林之助　そんな噂を聞いたやうだ。（鼻緒をすげながら笑ふ）だが、辻斬りも月夜の晩には出ないだらう。出たところで、おまへなどは大丈夫さ。

お里　さうでございませうか。

林之助　なんぼ辻斬りをするやうな人間でも、おまへ達のやうな好い姐さんを無闇にずば〴〵斬る氣づかひはないよ。向ふにも色氣があらあね。（笑ふ）尤もおまへなんぞは大勢のお客を迷はしてゐるから、色の遺恨で待伏せをされるかも知れないが、それはまた辻斬りとは別物だよ。

お里　あら、御冗談を……まつたく一人で夜ふけに歸るのは寂しうございます。

林之助　（思はず手を休める）家はどこだね。

お里 外神田の明神下でございます。

林之助 迎ひに來て貰へばいゝのに。

お里 家は母ひとりですから、迎ひに來てくれる者はございません。

林之助 （笑ふ） 無いことがあるものか。そのくらゐの頼もしい人が、一人や二人はある筈だらうぜ。

お里 （眞面目に） そんな人がありますくらゐなら、水茶屋の奉公なんぞ致してはゐませんけれど……。七年前に死にました總領の兄が達者でゐてくれますと、又どうにかなるのでございますが、なにしろ唯今では親ひとり子一人でございますから、こんな事でもしてゐるより外はございません。

林之助 （慰めるやうに） 餘計な御世話だが、早くしつかりしたお婿でも貰つたら好さうなものだ。さうしたら阿母さんも安心するだらうに……。

お里 別に株家督があるでもなし、なんで私どものやうな貧乏人のところへ婿や養子に來てくれる者があるものですか。（さびしく笑ふ） いつそ自分一人ならば、堅氣の御奉公にでも出ますけれど、母を見送らない内はさうもまゐりません。わたくしもこんな稼業は忌ですし、母も早く止めさしたいと云つてゐますけれど、女ばかりでは何うにもなりません。（少しく聲をうるませる） いゝ旦那の世話をしてやらうかなぞと云つてくれる人もありますけれど、これも母が不承知、わたくしもそんな氣にもなれませんので、まあこんなことをして細々ながら暮してゐるのでございます。（眼をふいて） おや、どうも詰らない愚痴をお聞かせ申して相濟みません。御めん下さい。

（按摩の笛が遠くきこえる。林之助は鼻緒をすげながらその話に釣り込まれて、ひどく感傷的の心持になり、ときどきに手を休めてお里の横顔をながめてゐる。）

林之助 わたしも不二屋へ遊びに行く時には、からかひ半分に好い旦那を取持つてやらうかなどと云つた事もあつたが、今の話をきいてみると、うつかりした冗談も云へなくなつた。水茶屋奉公をしてゐても、堅氣で押通さうと云ふのは好い心掛けだ。いつまでもその氣で辛抱するうちには、自然に運もむいてくる。第一世間でも打つちやつては置かない。屹と眞面目に世話をしてくれる人も出てくる。まあそれまでは、今の料簡を忘れずに辛抱するがよからうぜ。

お里 御親切にありがたうございます。

林之助 さあ、下駄が出來た。穿きにくからうが、はだしよりは優しだらう。（下駄を出す）

お里 どうも恐れ入りました。お手がおよごれなさいまし

たらう。失禮ですけれども、どうぞこれで……。
（お里は袂から手拭を出しながら、林之助の顏をぢつと見る。）
林之助　なに、それには及ばない。
（林之助は自分の紙で手をふいて起つ。お里はその手拭で自分の足を拂ひ、一禮して下駄をはく。）
林之助　（紙入から二朱銀を出す）ほんの少しだけれど、これは下駄の代だよ。
お里　（びつくりしたやうに）とんでもない。そちらからそんなものを頂きましては……。
林之助　その鼻緒がいつまで持つものぢやあない。あしたになつたら新らしく買ひ換へるのだ。まあ、遠慮せずに取つて置いてくれ。
お里　（躊躇しながら銀をうけ取る）いろ〳〵ありがたうございました。これでは何と御禮を申して宜しいか判りません。ありがたうござります。（銀を押頂いて帶のあひだに挾む）
林之助　さあ、行かうか。わたしも向柳原へ歸るのだから、途中までは同じ道だ。（空をみる）あゝ、月がいよ〳〵冴えて來た。
お里　晝間とちがつて急にお涼しくなりました。
林之助　もう夜露が降りたらしい。（氣がついて）あゝ、その包みを……。
お里　いえ、そこまで持たせて頂きます。
（下の方にて犬の聲きこゆ。）
お里　あれ、また犬が……。（林之助により添ふ）
林之助　なに、大丈夫だ。わたしがついてゐるよ。
（二人は下の方へゆきかゝる。下の方より豐吉出で、すれ違ひながら月明りで林之助の顏をみる。）
豐吉　もし、もし、林さんぢやございませんかえ。
林之助　（みかへる）あゝ、豐さんか。今まで何處にゐたね。
豐吉　無盡に行つた歸りですよ。
林之助　あたつたかね。
豐吉　（笑ふ）花にも當るもんですか。（云ひながらお里に眼をつける）おゝ、お連れさんは不二屋の姐さんだね。
お里　（なんだか極り惡さうに會釋する）今晩は……。
豐吉　はゝ、お睦じいことだね。おい。（空を指す）お月さまが見ていらつしやるぜ。
（云ひ捨てゝ豐吉は上の方へゆきかゝるを、林之助は心づいて追つてゆく。）
林之助　（小聲に）今夜こゝで逢つたことは……。お絹には沙汰なしだよ。

豐吉　（わざとらしく）云つちやあ惡いんですかえ。

林之助　あいつが叉うるさいからよ。（顏をしかめる）察してくれ。

豐吉　（お里を頤でさす）每晚送つて歸るんですかえ。どうも御親切ですね。

林之助　馬鹿をいへ。今夜初めてこゝで逢つたのだ。お絹につまらない讒訴をしちやあ困るぜ。實は今夜も弱らせられたのだ。

豐吉　ぢやあ、本所へ行きなすつたのかえ。

林之助　その歸りさ。噓ぢやあない。

豐吉　（冷かに）さうですかえ。まあ、ようがす。あのねえさんが待つてゐるから早くおいでなさい。

林之助　ぢやあ賴むよ。（引返して下のかたへ來る）さあ、夜が更ける。早く行かう。

お里　はい。

（お里は林之助に寄り添はうとして、豐吉の方をみかへりて又すこし躊躇する。豐吉も舌打ちしながら二人を見かへる。犬の聲遠くきこゆ。）

――幕――

第　三　幕

一

本所のお絹の家。前の幕とおなじ道具。

（九月末のゆふぐれ。秋の雨さびしく降る。上のかたに半屛風をたてまはして、その中に寢床をしつらへ、お絹が寢てゐる心にて、姿は見えず。長火鉢は下の方に置きかへられて、そのまへにお君とお辰とお留の三人がさびしさうに坐つてゐる。）

お辰　この頃はめつきりと日が詰まつたね。それに雨が降るせゐか、急にうす暗くなつたやうだ。

お君　まだ六つも鳴らないのに、暗くなりましたね。

お辰　病人があるのに薄つ暗いと猶さら陰氣でいけない。君ちやん。もうあかりをつけちやあ何うだらうね。

お君　さうしませう。（起つて奧に入る）

お辰　ほかの連中はどうしたんだらう。もう繰出して來さうなもんだがね。

お留　お若さんもお虎さんもすぐあとから來るといつてゐましたよ。

お辰　來るのがあたりまへだあね。なにをぐづ〳〵してゐるんだらう。

お君　（行燈をとぼして出づ）雨がやみませんねえ。

お辰　秋の末になると、いつもこれで忌になるのさ。一旦降り口があくと、每日泣いてゐるやうにじめ〳〵と降り

通すからね。

お留　これからの雨は、なんだか陰氣でさひしいわね。

お辰　まつたく寂しいよ。（傘をかきあはせる）

（三人はしばらく無言。下の方より豊吉は番傘をさして先に立ち、つゞいてお若とお虎はあまり身綺麗でもないのに、顔ばかり眞つ白に塗りて相傘で出づ。）

豊吉　鬱陶しく降るなあ。

（格子をあける音に、お君とお留は起つて出づ。）

お君　降るのにたび／＼御苦勞さまですね。

豊吉　そんなことは構はねえが、病人はどうだね。

（豊吉は内に入る。お若もお虎もつゞいて入る。）

お若
お虎　今晩は。

お辰　おそかつたのね。

豊吉　遲い筈さ。顏ばかり白く塗つてゐるのを蛇つかひの姐さんとは、むかしから云ふことだが、病人の見舞に來るといふのに、この通りの白壁づくりに塗り立てゝゐるんだから法がつかねえ。鞭で引ぱたかねえばかりにして、やう／＼追ひ立てゝ來たのさ。（お君に）　そこでどうだね。（屏風の方を煙管で指さす）

お君　さつきから好く寢てゐるやうですよ。

豊吉　（うなづく）　なるたけ落付くやうに寢かして置く方がいゝ。お醫者は來たかえ。

お君　おひる過ぎに來ました。

豊吉　さうして、なんと云つたえ。

（お君はすゝり泣をする。）

豊吉　（小聲で）　もういけねえのかえ。

お辰　（同じく小聲で）　さつきのお醫者の口ぶりぢやあ、どうもこの秋は越せさうもないやうですよ。

豊吉　やつぱりさうかなあ。（ため息をつく）　おいら達とは違つてまだ若えんだから、なんとか持直しさうなものだが……。どうも壽命といふ奴には勝てねえかな。

お若　今でも胸が痛むのかしら。

お辰　咳をすると……。（自分の肋を指さす）　こゝがひどく痛むんですとさ。

お虎　困るわねえ。どんな樣子だか、ちよいと覗いて來ようかしら。（起ち上る）

豊吉　よしねえ、よしねえ。折角よく寢入つてゐるものを起しちやあいけねえ。日が暮れたら急に薄ら寒くなつて來た。もう一つ火鉢を貰はうぢやあねえか。

お若　まつたく袷ぢやあ寒くなつて來たね。

お虎　もう移りかへが眼の前だもの、ほんたうに寒い。

（肩をすくめる）　君ちやん、早く火鉢を出しておくれよ。

（お君は奥に入りて手あぶりの火鉢を持ち出せば、お

（留も手傳ひて炭取りの炭を入れ、長火鉢の火を移す。お若とお虎は摺り寄つてその火鉢をとり卷く。）

お虎　豐さんはゆうべも寢なかつたの。

豐吉　お辰さんと君ちやんに四つ半頃まで起きてゐて貰つて、それからおいらが入れかはりさ。

お若　おまへさんも毎晩ぢやあ堪るまいから、今夜はあたし達が代りますよ。

お虎　まつたく夜伽も樂ぢやあないからね。

豐吉　おいらも若え時から方々を渡りあるいて、色々なことに打つかつてゐるから、看病も夜伽もそれほど苦にも思はねえが、ゆうべは全く寂しかつたよ。今もいふ通り、四つ半頃からお辰さんと君ちやんを寢かして、おいら一人でこの火鉢のまへに坐つてゐると、世間は森と鎭まり返つて、大川の水の音もこゝまで聞えるかと思ふくらゐさ。御船藏の屋根の上あたりを時々に雁が鳴いて通る。それを聞きながら、ぽつねんと烟草をのんでゐると、なんとも云ふに云はれねえやうな寂しい心持になつて來た。こゝの姐さんにはおいらも長らく世話になつたが、もうこの秋がお別れかと思ふと、まつたく人間は果敢ねえものだと、今更のやうにしみ〴〵思ひあたつたよ。

お辰　まつたく生身は忌ですねえ。尤もねえさんはこの春頃からどうもからだの調子が惡かつたやうでしたね。

お若　（うなづく）さうよ。とき〴〵に熱が出るの、胸が痛いのと云つてゐたが、それがだん〳〵に嵩じて來たんだね。（屛風の方を見て）ほんたうに何うしてもいけないのかしら。

お虎　ねえさんがいよ〳〵いけないとなつたら、小屋の方はどうなるのだらう。ねえ、豐さん。

豐吉　どうなるか判らねえが、一枚看板の太夫がぬけてしまつちやあ、このまゝで遣つて行くと云ふわけにも行くめえよ。なんとか陣立を換へなければなるめえな。

お若　みんながばら〳〵になるやうな事はあるまいかねえ。

お辰　あたしもそれを案じてゐるのさ。

お留　そんな事になると忌だわねえ。

お若　ひとり立の出來ない前藝だからと云つて、轆轤っ首や鷄娘と一座は御免だよ。

お虎　いくらのんきなあたしでも、かうなると色々のことを考へて、馬鹿にさびしくなつて來るのさ。

お若　あたしも隨分悟つてゐる方だが、斯うなると鬱いでしまふねえ。

豐吉　なにしろ困つたことになつた。

（豐吉はため息をつく。他の人々もしばらく無言。雨の音やゝ强くきこゆ。）

お留　雨が強くなつて來たね。

豐吉　いつそ強く降つたら止むかも知れねえ。時に向柳原はどうしたらう。けふもまた音沙汰なしかえ。

お君　お午まへにちよいと來て、お屋敷の御用があるからと云つてすぐに歸りました。

豐吉　（あざ笑ふ）下手な捕手のやうに、二口目には御用御用が聞いてあきれらあ。どう考へてもあいつは薄情な野郎だ。お絹さんの邪推ばかりぢやあねえ。あいつは全く不二屋の女と、とち狂つてゐるに相違ねえ。

お君　やつぱりほんたうですかえ。

豐吉　ほんたうだ。ほんたうだ。病人に聞かしてはよくねえと思つて、けふまで默つてゐたけれど、おいらはたしかに證據を見とゞけてゐるんだ。姐さんがいよ／＼眼をねぶつて、あいつが生しやあ／＼と弔ひにでも來やがつたら、おいらは喧嘩を吹つかけて、あいつの面へ傷でもつけてやるつもりだ。侍だつて勘辨が出來るものか。

お君　でも、林さんは姐さんの窶れた顏を見て涙をこぼしてゐましたよ。歸る時にも、あたしを門へよび出して、おれは主人持で思ふやうに看病にも來てゐられないから、姐さんの世話はおまへに頼むよと、幾度も念を押して行きました。

お辰　それがほんたうの人情だわねえ。あの人だつて豐さんが云ふほどの不人情な人とも思はれないが……。

豐吉　どうだかなあ。（首をひねる）おいらはどうもお絹さんがいぢらしくつてならねえ。これで死んぢやあ、まつたく死切れめえよ。あゝ、忌だ、忌だ。

（屏風の內にてお絹の聲きこゆ。）

お絹　あゝ、林さん、林さん。

（人々は一度に見かへる。）

お絹　あたしを置去りにして、どこへ行くんだよ。（だんだんに聲が絕ゝなる）えゝ、お待ちつてば……。畜生、畜生……。お里と一緒に遣るものか。お待ちよ。

お君　（屏風の前へ進つてゆく）ねえさん、ねえさん。（屏風をのぞく）なにか夢でも見たんですか。ねえさん。

お辰　（お留にさゝやく）お藥をかけてお置きよ。

（お留は藥土瓶を火鉢にかける。）

お君　（再び呼ぶ）姐さん、ねえさん。

お絹　（しばらくして）君ちやんかえ。

お君　眼が醒めましたか。

お絹　誰か來てゐるかえ。

お君　みんな來てゐますよ。

（お君は屏風を取る。豐吉、お辰、お若、お虎、お留はぞろ／＼と進み出づ。）

豐吉　どうです。けふは……。

お絹　（少し起きかへる）　あゝ、みんな來てくれたね。
豐さん、ゆうべは御苦勞さま。

豐吉　どうしまして……。氣分はようがすかえ。みんなも
心配してゐますよ。

お絹　ありがたう。（お君に）　お藥が沸いたら飮まして
おくれよ。

お君　はい、はい。

お留　もうすぐに沸きますよ。

お絹　（耳をかたむける）　雨がまだ降つてゐるんだね。も
う日が暮れたのかえ。

お君　さつき六つを打ちました。

お絹　豐さん。毎晩起きてゐちやあ堪らないから、今夜は
家へ歸つてゆつくり寢ておくれよ。

豐吉　なに、今來たばかりだからようがすよ。

お絹　でも、あんまり毎日御苦勞だから。今夜はもう歸つ
て、あした又來ておくれよ。

お若　今夜は豐さんの代りに、あたし達が泊りますよ。

お絹　いゝよ。そんなにみんなが居てくれないでも……。
豐さんもお辰さんも家が近いんだから、用があればすぐ
に君ちやんを呼びにやるから、今夜はもう引揚げて休ん
でおくれよ。それでないと、あたしの氣が濟まないから
さ。

（人々は顏を見あはせる。）

お絹　なぜみんなはあたしの云ふことを肯いてくれないん
だらうねえ。病人にあんまり逆らふもんぢやないよ。

お虎　でも、君ちやん一人ぢやあねえ。

お絹　大丈夫だよ。あたしはまだ死にやあしないよ。

豐吉　（考へて）　ねえさんがあゝ云ふもんだから、まあ、
一旦は引揚げようぢやねえか。

お辰　（小聲で）　歸つてもいゝかしら。

豐吉　（眼で諭す）　まあ、いゝ。（人々を促すやうに）
さあ、さあ、みんなも引揚げて又出直すことにしようぜ。
ねえさん、御めんなさい。

一同　御大事になさいまし。

（お君に送られて豐吉は先に立ち、お辰、お若、お虎
お留は外に出で、傘をさして雨の中に立つ。）

お若　豐さん。なんだか不安心だね。

豐吉　だからよ。一旦は素直に歸つて、病人の寢入つた頃
に又出直してくるんだ。おまへ達はお辰さんの家へ行つ
て、四つ頃まで待つてゐておくれ。（窓から內の樣子を
うかゞひながら聲をかける）　おい、君ちやん。

お君　（窓をあける）　なに……。

豐吉　（小聲で）　病人の樣子がをかしくなつたら、すぐに
おいらの所へ駈けて來るんだぜ。

お君　はい。
豐吉　今が大事のところだ。氣をつけねえぢやあいけねえよ。
（豐吉につゞいて人々は下の方に去る。お君は窓をしめて、お絹の枕元に來る。）
お君　お藥をあげませうか。
お絹　あゝ、飲まうかね。
（お君は茶碗に藥をついで持ち來れば、お絹はお君に扶けられて床の上におき直る。）
お絹　みんなは歸つたかえ。
お君　えゝ、豐さんもみんな歸りました。
お絹　（藥をのむ）なんだか燈火が暗いぢやあないか。
（お君は行燈の心をかき立てる。お絹はその火をぢつと眺めてゐる。）
お君　氣分はどうですえ。
お絹　さつきから一寢入りしたせゐか、いつにない氣分がはつきりして來たよ。
お君　（嬉しさうに）好い鹽梅ですね。精出してお藥をのんで、早く癒つて下さいよ。
お絹　（さびしく笑ふ）誰でも死ぬまへには、一度は氣が確かになると云ふぢやあないか。
お君　あら、そんな事を……。
お絹　いゝえ、全くさうだよ。君ちやん、おまへには色々世話になつたけれど、今度はあたしももういけないよ。あたしも覺悟してゐるよ。いゝえ、お醫者がなんと云つても、あたしは自分で知つてゐる。あたしの病氣は今始まつた事ぢやあない。去年の冬、林さんがこゝの家を出て行つた頃から、あたしのからだはだん／＼に弱つて來てゐるんだよ。
（お君は默つて眼をふいてゐる。）
お絹　いつも同じ愚痴をいふやうだけれど向柳原の林さん、あの人はあんまり薄情だと思ふよ。
お君　（打消すやうに）いゝえ、あの林さんはおひる前に來ましたよ。ねえさんはよく寢てゐるから、無理に起さないでもいゝと云つて歸りました。
お絹　さう。（うなづく）そりやよんどころなしの義理づくさ。あたしはどう考へてもあの人は人情がないと思ふ。どんなに理窟をつけて見ても、一體こゝの家を逃げ出したといふのが頼もしくない。さうして、この夏頃からあたしに隱れてならび茶屋の不二屋へ遊びに行く。それが又憎らしくてならない。確かな證據を握つてはゐないけれど、どうも林さんとお里とは一通りの馴染ぢやあないらしい。
（云ひかけてお絹は咳き入る。お君は慌てゝうしろか

ら擦する。）

お絹　（藥をのむ）　證據がないので今まで堪忍してゐたけれど、いよ／＼斯うと見きはめが付いたら、あたしは不二屋へ蛇を持つて行つて、いつかあの菓子屋の勘公を責めたやうに、お里の奴をひどい目に逢はしてやりたい。あいつの頸つ玉へ蛇をまきつけて、子供がのら犬を繩で引廻すやうに、兩國中を引き摺つてあるいて遣りたい。ねえ。君ちやん。そのくらゐのことをしに遣らなければ、あたしの胸が納まるまいぢやないか。

（お君は身を固くして聽いてゐる。）

お絹　けれども、それももう出來なくなつてしまつた。（ため息をつく）　あたしが死んだのを幸にして、あの二人がいゝ氣になつて巫山戲散らしてゐるのが眼に見えるやうで……。この頃では寢ても醒めてもそればかり考へつめてゐる。あたしもほんたうに因果だねえ。（淚が流れる）

お君　（共に淚ぐんで）　もうそんなことは考へない方がようござんすよ。

お絹　あゝ、もう考へまい。考へたところで仕樣がない。どうせあたしは死んでしまふんだもの。（淚をふいて）君ちやん、おわかれに蛇が一目見たいから、あの箱をここへ持つて來ておくれよ。

（お君は奥へゆきて蛇の箱をかゝへ出して來る。雨の音。お絹は行燈の火を見つめてゐる。）

お絹　それからね、神棚の御神酒を持つて來ておくれよ。

（お君は更に神棚より神酒德利と小さい土器を持ち來りてお絹のまへに置く。）

お絹　あかりが又うす暗くなつたぢやないか。もつと明るくしておくれな。眼のせゐか今夜はなんだか暗くつていけない。

（お君は行燈のしんをかき立てる。お絹は蛇の箱をひき寄せて、箱の蓋を輕くとん／＼と叩けば、一方の穴から靑い蛇が首を出す。お絹は神酒を土器に少しついでやると、蛇は旨さうに嘗める。）

お絹　（蛇をぢつと見る）　お前、あたしを忘れちやいけないよ。もういゝからお歸り。

（お絹は蛇のかしらを輕く撫でると、蛇はおとなしく隱れる。）

お君　（打笑む）　可愛らしいもんだね。

（お絹は再び箱をたゝけば、他の穴から黑い蛇が首を出す。お絹はこれにも神酒をのませる。）

お絹　（蛇に）　お前ともうお別れだよ。

（蛇は頭を撫でられておとなしく隱れる。お絹は更に箱をたゝけば、他の穴から縞蛇が首を出す。お絹はこれ

にも神酒をあたへる。）
お絹　三匹のうちでもお前が一番利口者で、あたしと一番仲好しだつたね。（蛇の頭を撫でる）おまへは少し用があるんだよ。ちよいとお出で。（蛇の首をつかんでずるずると引き出せば、蛇は戯れるやうにお絹の手首にからみ付く）君ちやん、お前も知つてゐるだらう。蛇はかうして使ふんだよ。
（お絹はその蛇をほどいて、尾をつかんで宙に輪を描きながら、自分の頸にくる〳〵とまきつける。お君は息をのんで見つめてゐる。）
お絹　これで強く絞められると、大抵のものは息が止まつてしまふからね。馴れないうちは手の先きだけで使つてゐるが無事さ。あたしも初めの頃に喉が赤くなるほど絞め付けられたことがあつたよ。（蛇に）さあ、もういいからお歸り、お歸り。（蛇を箱のなかへ追ひやる）これでお暇乞ひもすんだ。ここで、あたしがゐなくなると、君ちやん、おまへはどうするね。やつぱりこの商賣になるかえ。
お君　あたしは巳年でないから駄目ですわ。
お絹　さうも限らない。お若だつて巳年ぢやないけれど……。（考へる）だが、まあよした方がよからうよ。こんな因果な商賣をするもんぢやない。あたしだつてこんな商賣でなけりやあ、男に逃げられるやうな事も無かつたかも知れない。（また考へる）けれども、あたしがゐなくなると、おまへも差當りは家へ歸らなければなるまい。可哀さうだねえ。
（お君は眼をふきながら俯向く。）
お絹　お父さんは飲んだくれで、阿母さんは繼阿母さんなんだから、困つたもんだねえ。あたしがもう少し達者でゐれば、なんとかおまへの面倒を見てあげられるんだけれど、おたがひに運が惡いんだから仕方がないよ。
お君（はげしく泣く）ねえさん、後生ですから死なずに下さいよ。おまへさんが死ねば……あたしも死んでしまひます。
お絹　あたしだつて好んで死にたかあないけれど……。あたしほんたうに死切れないのだけれど……。こればかりは力づくにも金づくにもなるものぢやあない。あたしの着物もかんざしもみんな形見にあげるからね。いゝやうに始末をして持つておいでよ。なに、おとむらひぐらゐは小屋の方でどうにかして呉れるだらうから、あとのことは心配しないでもいゝ。だがね、この三匹の蛇だけは滅多に誰にも渡しちやあいけないよ。これだけ馴らしてあれば、賣つても好い値になるし、又なにかの役に立つかも知れないから、誰がなんと云つても渡しちやあいけ

ないよ。お若かお虎にだまされて取られちやあいけないよ。いゝかえ。

お君　はい。

お絹（うつとりしたやうに）あゝ、云ふだけの事を云つてしまつたら、なんだか氣が弛るんだやうに、がつかりして來た。又少し寢ようかね。

お君　あんまり長く起きてゐて、冷えるといけません。

（お君はお絹を介抱して枕につかせ、枕元へ屏風を立てまはす。）

お絹（屏風のうちで）君ちやん。その蛇を大事にしまつてお置きよ、誰にも取られちやあいけないよ。

お君　はい、はい。

（お君は神酒と土器を元の神棚に納め、再び屏風の外に坐りてぢつと俯向いてゐる。雨の音、時の鐘きこゆ。お君はそつと起ち上りて屏風のうちを覗き、涙をふきながら屹と思案して蛇の箱をかゝへ、忍び足で奥に入る。時の鐘つゞけてきこゆ。行燈の火おのづから消えて、舞臺眞暗になる。）

二

神田明神下のお里の家。上の方に障子をしめたる一間あり。下の方に格子戸あり。正面の上のかたには三尺の佛壇ありて、白木の新らしき位牌をかざり、燈明や線香などを供へてあり。つゞいて鼠壁、つゞいて障子、障子の外は臺所と知るべし。すべて餘り綺麗ならざる裏店の道具。

（長火鉢のまへに膳をすゑ、林之助と菓子賣の勘藏は差向ひで酒をのんでゐる。雨の音きこゆ。）

林之助　まあ、いゝぢやないか。もう一つ。（猪口をさす）

勘藏　いえ、もう澤山。さつきからわたし一人で飲んでゐるので、すつかり醉つてしまひました。

林之助　まださうでもあるまい。商賣は甘い物屋でも、おまへはなか／＼左が利くと云ふぢやないか。

勘藏（猪口をうけ取る）なに、評判ほどでもありませんが、下戸をお得意の稼業でゐながら、毎晩一杯のまないと何うしても寢つかれないと云ふのは不思議なものですね。

林之助（酌をしてやる）世の中はみんなそんなものさ。はゝゝゝゝ。

勘藏　さうかも知れませんね。はゝゝゝゝ。時に、さあちやんは遲うござんすね。

林之助　雨が降るので店の方は早仕舞で、さつき歸つて來て近所の湯へ行つたのだが、女の湯といふものは長い奴さ。

勘藏　（笑ふ）別して今夜は念入りに踠いてゐるんでせうよ。ねえ、旦那。

林之助　さうかも知れない。（笑ひながら重ねてつぐ）

勘藏　いけませんよ。もう本當にいけないんですよ。この上飲まうもんなら、御神輿がどつかり坐つて動けなくなつてしまひます。

林之助　一つ長屋内だもの、這つて行つても知れたものだ。いよ／＼御神輿が据つたらこゝへ寢て行くがいゝ。

勘藏　（また笑ふ）わたしがこゝに寢込んだら、それこそとんだ邪魔物で、さあちやんが納まりますまい。首へ縄をつけて表へ引き摺り出されますぜ。（云ひかけて不圖思ひ出した樣に）時に旦那。あなたが此頃こゝの家へ這入り込むことを、兩國のお絹さんは知つてゐるんですかえ。

林之助　こゝの家へ這入り込むと云つても、まだきのふ今日のことだ。誰も知つてゐる筈はないと思ふが……。

勘藏　と云つて、どうせ知れずにはゐますまいが、あなたはよつぽど氣をつけないといけませんぜ。

林之助　（急に顏の色を陰らせる）なぜだ、なぜだ。

勘藏　なぜと云つて、これがお絹さんに知れたら大變ですぜ。まつたくとんでもない事が出來しますよ。（少し眞面目になる）いゝえ、嚇かすのぢやあない、本當のことですよ。わたしは先月兩國の樂屋でお絹さんに取つ捉まつて、この首つ玉へ蛇をまきつけると責められて、ふるへ上つてしまひました。

林之助　どうしてそんな目に逢つたのだ。

勘藏　それがみんなあなたとさあちやんの爲なんですよ。恨を云ふわけぢやあないが、私こそ實にいゝ面の皮で、あなたが列び茶屋へ行くことを乾と知つてゐるに違ひないといふので、お絹さんは眼の色をかへて私を拷問するんです。なにしろ商賣道具の蛇を鼻の先へつきつけて、さあ云はないか。さあ白狀しろ。左もなければこの蛇をおまへの首へまきつけるよと云ふんだから、助かりませんや。私はどういふものか、生れつき長蟲が大嫌ひで、見てもぞつとする位なんですが、まあ商賣だから我慢してあすこの樂屋へも這入つてゐると、今もいふやうなわけで、蛇責の拷問、まつたく其時には蒼くなつて口も利けませんでした。それからおぢ氣がついて、あすこの樂屋へはもう二度と足踏みをしないことにしてゐますがね。それでもあの小屋のまへを通る時には、今でも好い心持がしませんよ。

林之助　（いよ／＼顏をしかめる）ふむう。そんなことがあつたのか。ほんたうかえ。

勘藏　嘘にもほんたうにも、わたしはその晩うなされて、

びつしより汗をかきましたよ。思ひ出してもぞつとします。まつたく壽命を縮めましたぜ。

林之助　そりやあ氣の毒だつたな。して、それは先月のいつ頃だね。

勘藏　日は忘れましたが、なんでも中頃のことでした。

林之助　先月のなか頃……。（考へる）さうすると、わたしがまだこゝの家へは這入り込まない時分のことだな。

勘藏　さうでございますかねえ。それはまあどつちにしても、これから先はよつぽど用心しないといけませんぜ。お絹さんは蛇を持つて列び茶屋へ押掛けていくと云つてゐましたからね。

林之助（おどろく）蛇を持つて押掛けていく……。ほんたうにそんなことを云つたか。

勘藏　云ひましたよ。蛇を持つてお里のところへ禮に行くつて……。いや、あの權幕ぢやあ本當に押かけて行くかも知れませんよ。向ふは商賣だから、蛇をいぢくるのは貢を摑むほどにも思つてゐないでせうけれど、素人はおどろきます。私でさへ顫へあがつたんですから、可哀さうにさあちやんなんぞは眼をまはしてしまひますからね。

林之助　むゝ、困つたものだ。

勘藏　それもお絹さんばかりぢやあない。お若やお虎といふ奴等までが一緒になつて、加勢に行くなんて騷いでゐるんです。あいつ等のことですから何をするか知れませんよ。

林之助（いよ〳〵眉をよせる）だが、このことはお里に默つてゐてくれ。あれは氣の弱い女だからな。

勘藏　さうです、さうです。客商賣をしてゐても、ふだんから內氣でおとなしいさあちやんですもの、そんな話を聞いただけでも眼をまはすかも知れませんからね。うつかりしたことが云へるもんですか。あなたが內々で氣をつけてゐるだけの事ですよ。

林之助　むゝ。（考へてゐる）

勘藏．だが、お絹さんはこの頃惡いさうですね。

林之助　今日はちよいと見舞に行つてやつたが、どうも惡いな。

勘藏　そんなに惡いんですかえ。そりやあ些とも知りませんでした。

林之助　あいつも可哀さうだな。

（林之助はやはり考へてゐる。勘藏は煙草をのんでゐる。下の方より湯歸りのお里は傘をさして出で、格子をあける。二人は氣がついて見返る。）

勘藏　お歸んなさい。あんまり遲いから蓙を持つて迎ひに行かうかと云つてゐるところさ。（額をこする眞似をす

ろ）一生懸命にやつてゐたね。

お里　よるのお湯はこみ合ふから、これでも急いであがつて來たんですよ。

（お里は手拭や糠袋を臺所へしまひに行く。勘藏は煙管をはたいて煙草入れを腰にさす。）

林之助　まあ、いゝぢやあないか。

勘藏　隨分しやべりました。もう四つでせう。

お里　（出づ）おまへさんもう少し遊んでおいでなさいよ。（德利を振つてみる）あら、些とも飮まないのね。

勘藏　なに、このくらゐが丁度いゝ加減ですよ。どうも御馳走になりました。ぢやあ、お休みなさい。（起つ）

お里　（送りながら）些ともお構ひ申しませんでしたね。留守に面白いお話でもありましたかえ。

勘藏　えゝ、些とばかり怪談をやつてね。

お里　怪談を……。

勘藏　怪談のあとがしんみりした人情話。（お里の肩をたたく）今夜のやうな晩はおあつらへむきですよ。（笑ひながら外へ出る）あゝ、降つてゐる。べらぼうに暗い晩だ。

（勘藏は番傘をさして下のかたに去る。）

お里　（ひとり言のやうに）氣をきかして歸つてしまつた。（火鉢の前に來る）今夜は些とも飮まなかつたんですね。

林之助　二人でたつた三本さ。それもまだ殘つてゐる。

お里　よつぽどお話の方に浮かれてゐたと見えますね。

林之助　（まぎらすやうに）なに、つまらない話さ。それでも話上手だから聞いてゐると面白いよ。

お里　ほんたうに怪談があつたんですか。

林之助　なに、いゝ加減の作り話さ。（無理に笑ふ）まあ、一杯ついで貰はうか。

お里　お燗が冷えたかも知れません。

（お里は酌をする。行燈の火消ゆ。）

お里　おや、あかりが消えました。

（お里は火鉢の火を附木に移して、消えたる行燈に火を入れる。雨の音きこゆ。）

林之助　どうしてあかりが急に消えたのだらう。燈心がおしまひになつたか。

お里　いゝえ、燈心はまだたつぷりあります。（少し氣味わるさうに）風もないのにどうして消えたんでせうねえ。

林之助　ほんたうにお化でも出るかな。

お里　あれ。

林之助　はゝ、冗談だ、冗談だ。（再び猪口を出す）

お里　（酌をする）阿母さんがゐなくなつてから、本當に寂しくつてならないのでございます。

林之助　さう思ふから、雨の降るのに斯うしてたづねて來たのだ。併し寂しいのも無理はない。長年一緒にゐたおふくろが急にお位牌になつてしまつたのだからな。（佛壇をみかへる）考へると早いものだ。もう三十五日もいつの間にか過ぎた。

お里　まつたく夢のやうでございます。先月の十五夜のまへの晩に、柳原であなたにお目にかゝりまして、家まで送つて來ていたゞきますと、母が急病で打つ倒れて、御近所の人達が騒いでゐるところでございました。

林之助　あの時はわたしも驚いたよ。辻斬が出るの、犬が吠えるのと云つて、おまへが頻りに怖がるので、たうとうこゝの家まで送り狼をきめ込むと、丁度におふくろが急病だと云ふ大騒ぎの最中で、そのまゝ歸るにも歸られなくなつて、みんなと一緒に介抱してゐたが、それから半時とたゝないうちに、おふくろはたうとう冥土へ行つてしまつた。それが縁になつて、其後もかうして出這入りをしてゐるのは、死んだおふくろが二人を取持つてくれたやうなものだ。

お里　親ひとり子一人の母に置いて行かれましては、これから先は誰を頼りにいたしていゝやら、それを思ふと心細くてなりません。（眼をふく）

林之助　この男ぢやあ杖にも柱にもなりさうもないかね

お里　お縋り申しましてもよろしうございますか。

林之助　いゝの悪いのと云つたところで、もう取返しはつくまいぢやあないか。この間の約束を忘れたのか。

お里　それはよく覺えてゐますけれど……。なんだかまだ不安心で……。あなた屹とでございますかえ。

林之助　色男でもない癖に、金と力はないわたしだが、親切氣だけは人一倍にあるつもりだ。嘘をつかない證據に一杯さゝうぜ。これがほんたうに固めの杯だ。

（林之助はお里に猪口をさして、酌をしてやる。お里は嬉しさうに飲みかけて、急にうしろを見かへる。）

お里　おや。

林之助　なんだ。

お里　臺所でなんだか音がするやうで……猫でも這入つたのかしら。（起つて臺所の障子をあける）叱つ、叱つ。おや、なんにもゐない。（少し考へながら火鉢のまへに引返して來る）

林之助　やつぱり猫か。

お里　いゝえ、なんにもゐないんです。確かにがたりと云つたやうでしたけれど……。

林之助　風だらう。風が臺所の戸を煽つたのだらう。雨が少し強くなつて來たやうだからな。

お里　（耳をかたむける）ほんたうに雨が強くなつて……。

なんだか寂しい、忌な晩ですね。

林之助　よく寂しがるぜ。こんな晩には景氣つけに酒でも飲むことだ。どうだえ、もう一つ注がうぢやないか。

お里　いゝえ、わたしはほんたうに飲めないんですから。（林之助に猪口を戻して酌をする）

林之助　（飲む）わたしもたんとは飲めないのだが、おまへのお酌で今夜は思ひ切つて飲まうか。構はない。構はない。打つ倒れるつもりで、もつと飲むか。（猪口を出す）

お里　（酌をしながら）あの、幾度も念を押すやうですけれど……。（すこし躊躇する）本所のお絹さんの方は……。まつたく面倒はないんでせうかねえ。

林之助　（又もや顏を陰らせる）まあ、いゝ。もうそんなことは云はないでくれ。

お里　（少し顏を陰らせる）でも、氣になつてならないんですもの。

林之助　いゝよ、いゝよ。（わざと平氣らしく首肯く）おまへがそれを知つてゐる以上は、隱し立てをするはよくないと思ふから、この間もこゝで何も彼も正直に打明けたぢやあないか。なるほど、あのお絹とは係り合があつた。あの女の家へころげこんでゐたこともあつた。その義理づくで今まで出這入りをしてゐたが、所詮いつまで繋がつてゐる縁ぢやあない。いつか一度は別れるより外はないのだ。

お里　それぢやあ、あの人が可哀さうぢやあありませんか。

林之助　それを云はれると、わたしも辛い。（ため息をつく）まつたくお絹は可哀さうだ。今までの因縁をかんがへると、わたしも氣の毒でならないが、今となつては自分で自分の心をどうすることも出來ないのだ。以前はそれほどにも思はなかつたが、この頃ではあの女の蛇のやうな眼つきでぢつと見られると、わたしはなんだか身が竦んでならない。ましてお前といふものが出來たからには……。（投げ出すやうに）もう仕方がないよ。

お里　お絹さんがさぞわたしを恨むでせうね。（同じく溜息をつく）それを知りながら、もう何うすることも出來ないのが悲しうございます。ねえ、あなた。ほんたうに何うしたらいゝでせう。

林之助　もうよさう、よさう。そんな話は……。

（この時、お里は再び見かへる）

お里　おや。

林之助　なんだ。どうした。

お里　今度は御佛壇の方で……。なんだか音がしたやうですよ。

林之助　御佛壇の方で……。

お里　(起つて佛壇をのぞく)　あら、御位牌が倒れて……。

林之助　(おなじく起つて見る)　むゝ、新らしい位牌が倒れた。鼠でも出たかな。

お里　(氣味わるさうに)　鼠でせうか。

林之助　なにしろ、古い長屋だからな。猫や鼠はどこからでも自由自在だ。まあ、早く位牌を起しておくがいゝ。

(お里は位牌を直して更に線香を供へ、二人は火鉢のまへに戻る。)

お里　鼠のいたづらにしても、御位牌が倒れるなんて滅多にないことで……。なんだか變な暗い晩ですねえ。

林之助　つまらない事は氣にしないがいゝよ。もう一杯ついで貰はう。

お里　そんなに飲んでもいゝんですか。

林之助　かういふ晩には飲むに限るよ。

(お里に酌をさせて、林之助はつゞけて飲む。)

林之助　(耳をかたむける)　おや。

お里　(ぎよつとして)　え、又なにか聞えましたか。

(林之助は無言で臺所の方を見つめてゐる。)

お里　(おど〳〵しながら)　あなた。臺所の方ですか。

林之助　(小聲で)　まあ、さう〳〵しい。そんなにびくびくするなよ。

お里　あゝ、ほんたうに何かがた〳〵云つてゐますよ。(男の方にすり寄る)　どうしませう。

林之助　今度こそは猫かも知れない。

(林之助は起つて臺所の障子をあける。お里も不安らしく起つて窺ふ)

林之助　(すかし見て)　おい、そこにゐるのは誰だ。おい、誰だよ。

(林之助は臺所に出ると、やがてあつといふ聲をあげて、逃げるやうに引返して來る。その頸と腕には青と縞の蛇がまきついてゐる。)

林之助　あ、どうかしてくれ、どうかしてくれ。

お里　(蛇に心づかず)　もし、あなた。どうしたんですよ。

(お里は駈け寄つて男を介抱しようとすると、縞蛇は男の腕をはなれて女の頸にまきつく。)

お里　あれ。(叫んで倒れる)　あなた、早く助けてくださいよ。

林之助　おれの頸にも……。蛇が……蛇が……。

お里　蛇が……。蛇が……。

(二人はたがひに抱き合ひて、苦み藻搔きながら倒れる。臺所よりお君は蛇の籠をかゝへ、雨にぬれたる姿にて忍び出で、林之助とお里をぢつと見てゐる。下のかたより勘藏は傘をさゝず、寢卷姿にて足早に出づ。)

勘藏　なんだ、なんだ。さう〳〵しい。まさか喧嘩を始め

たわけでもあるめえ。

（云ひながら勘藏は格子をあける。お君はすりぬけて下の方へ逃げて行く。）

勘藏　もし、どうしましたえ。（お君の姿を見かへる）おや、誰か出て行つたやうだな。

（勘藏は呟きながら立寄つて、林之助とお里をのぞき、思はず聲をあげる。）

勘藏　あ、蛇だ。

（勘藏はあわてゝ逃げようとして行燈につき當れば、行燈消えて舞臺は眞暗になる。）

三

舞臺又明るくなると、元のお絹の家。屏風を立てまはしたる中にお絹は寢てゐる。夜は明けて、雨の音はまだきこゆ。

（火鉢のまへには豐吉とお若とお虎の三人が坐つてゐる。お虎は居睡りをしてゐる。）

お若　（お虎をゆすぶる）おい、おまへさんはいつまで舟を漕いでゐるんだね。かぜを引くよ。

お虎　（眼をこすりながら）あいよ。

お若　あいよぢやないよ。もう夜が明けたぢやないか。

お虎　うるさいねえ。（顏をあげて外を見る）あゝ、いつの間にか夜が明けたね。

豐吉　夜が明けたどころか、いつもの豆腐屋はもう來てしまつた。

お虎　だつて、ゆうべは八つ過ぎまで起きてゐたんだもの。時に君ちやんはどうして……。

お若　まだ歸らないんだよ。

豐吉　どうもそれが判らねえ。ゆうべ四つを合圖に出直して來ると、あの子の姿が見えねえ。どこかへ夜詣りにでも行つたのかと思つてゐたが、たうとう夜なかまで歸らねえ。今朝になつても姿を見せねえ。この雨のふるのにどこをうろついてゐるのかな。

お若　あの子のことだから、病人を置去りにして逃げて行つたわけでもあるまいぢやないか。

豐吉　いや、あの子にかぎつてそんな事はねえ。どうも變だな。

お虎　をかしいねえ。あとであの子の家へ聞きに行つて見ようかしら。

お絹　（屏風の中で）君ちやんがゐないのかえ。

豐吉　え、病人はもう起きてゐたのか。

（お若とお虎は起つて屏風をとる。）

お若　君ちやんが昨夜からゐなくなつてしまつたんですよ。

お絹　ゆうべからゐない。（すもし起きかへる）　水を一杯おくれよ。
お虎　はい、はい。
（お虎は臺所へゆく。お絹はお若に介抱されて床の上に起き直る）
豐吉　（すゝみ出づ）　おまへさんは君ちやんの行つた先を知つてゐなさるのかえ。
お絹　知らないよ。（考へて）　奥にあたしの箱があるか何うだか、見て來ておくれでないか。
豐吉　商賣物の箱かえ。
（お絹はうなづく。豐吉は起つて奥に入る。お虎は湯呑に水を入れてくれば、お絹は飲む。）
お絹　あゝ、うまいね。末期の水だ。
お虎　あら、忌だ。およしなさいよ。
豐吉　（奥より出づ）　ねえさん。箱は見えませんよ。
お絹　蛇の箱が見えない。
お若　どうしたんだらうねえ。
お虎　君ちやんが持ち出したのかしら。
お絹　まあ、お騒ぎでないよ。
（お絹は水をのみながら又考へてゐる。下の方よりお辰とお留は傘をさしてあわたゞしく出で、内に入る。）
お辰　豐さん、大變。
豐吉　なんだ、なんだ。
お留　君ちやんが身を投げたの。
豐吉　君ちやんが身を投げた……。そ、そりやあ何處だ。
お辰　どこから身を投げたか知らないが、たつた今その死骸が百本杭へ流れ着いたといふので、橋番は大騒ぎさ。それにね、どういふわけだか君ちやんは、自分のふところに黒い蛇を一匹しつかりと抱へてゐたさうですよ。
お絹　（屹と見かへる）　お辰さん、お辰さん。君ちやんの死骸のふところには蛇が一匹這入つてゐたんだね。
お辰　さういふ噂ですよ。
お絹　（念を押すやうに）　一匹だね。
お辰　一匹だと聞きました。
お若　あとの二匹はどうしたらう。
お絹　（しづかに）　判つてゐるよ。
お虎　判つてゐますか。
お絹　あゝ、わかつてゐるよ。判つてゐるよ。（笑ひながらうなづく）　おまへさん達にも今に判るよ。水をおくれ、水を……。（云ひかけて俄にうつとりとなる）
お虎　もし、しつかりおしなさいよ。
（お虎は湯呑を持ちて再び臺所へかけて行く。）
お絹　（うつゝのやうに）　君ちやん、君ちやん。あたしもすぐにあとから行くよ。君ちやん……。待つておいでよ。

（そのまゝ床の上にうつ伏す）

お虎　（水をくんで來る）　さあ、水ですよ。姐さん。

お若　ねえさん。

（お絹は答へず。）

お辰　（のぞく）　もういけないんですかねえ。

豐吉　（顏をしかめる）　それにしても早く醫者を呼んで來にやあなるめえ。

お留　あい、あい。すぐに行つて來ます。

（お留はあわてゝ出て行く。人々は顏を見あはせる。）

お虎　どうしてもいけないやうだね。

お若　君ちやんは身を投げる。ねえさんは死ぬ。なにがなんだか判らなくなつたねえ。

豐吉　むゝ、わからねえ。（ため息をつく）　わかつた所で、もうどうにもならねえんぢやあねえ。（緣に出て空を見る）　まだ降つてるやあがるなあ。

（豐吉は膝をくんでお絹の枕元に坐る。お辰、お若、お虎も枕元を取りまいて俯向く。）

――幕――

佐々木高綱

登場人物

佐々木四郎高綱
その娘　薄衣
佐々木小太郎定重
馬飼　子之介
その姉　おみの
高野の僧　智山
鹿島　與一
甲賀　六郎
侍女　小萬
佐々木の家來など

江州佐々木の庄、佐々木高綱の屋敷。建久元年十二月の午後、晴れたる日。中央より下のかたにかけて、大いなる廐あり。但し舞臺に面せる方はその裏手と知るべし。中央よりすこしく上のかたには梅の大樹ありて、花は白く咲きみだれたり。奥の方には木立のひまに屋敷の建物みゆ。

（佐々木四郎高綱、三十七八歳、梅の樹の下に立ちて馬の洗足するを見てゐる。家來鹿島與一、四十餘歳。甲賀六郎、二十五六歳。おなじく馬の左右に立ちて見る。馬かひ子之介、二十歳前後の律義なる若者。名馬生月を廐のうしろに牽き出して洗足さしてゐる。）

高綱　けふはよい日和になつたなう。比良のいたゞきに雪はみえても時候は俄に春めいて來たやうぢや。をちこちで小鳥が樂しさうに囀づるわ。

與一　鎌倉どのが初めての御上洛に、かやうな日和つゞきと申すはまことにおめでたい儀でござりまするな。

六郎　お先觸れの同勢はもはや尾州の熱田まで到着したとか申すことでござりまする。

（高綱は聞かざるもの丶如く、馬のそばに進みてその平首を輕く叩きなどする。）

高綱　子之介、よく働くな。

子之介　はあ。（無言にて洗足さしてゐる）

高綱　そちが陰ひなたなく働らいて、あさゆふ心をつけて養うてくるゝほどに……。（家來を見かへる）これ、見い。一時はすこしく衰へた馬も、このごろは再びすこやかに生ひ立つて、毛澤もひとしほ美しうなつたわ。

子之介　（惚々と馬をみる）よい御馬でござりまするなう。

與一　よい筈ぢや。これは鎌倉どのが御祕藏の名馬で、世にもきこえたる生月ぢや。そちも定めて存じて居らう。かの宇治川の合戰に、梶原の磨墨に乘り勝つて、殿が先陣の功名させられたも、一つにはこの生月の働きぢやぞ。

六郎　あの折のありさまは思ひ出しても勇ましい。名に負ふ宇治の大河には、雪解の水が滔々とみなぎり落ちて來る。川の向ひには木曾の人數およそ五百餘騎、楯をならべて待ち受けてゐたわ。

與一　まして河の底には亂杭を打つて、大綱小綱を張りわたし、馬の足をさらへんと巧んである。なみ〳〵の者ではよも渡すまじと見てあるところへ、殿は生月、梶原は磨墨、黒馬二匹が轡をならべて、平等院の丑寅、たちばなの小島が崎よりざんぶ〳〵と乘り入つた。

高綱　（遮る）えゝ、珍らしうもない。おけ、おけ。（馬にむかひて）なう、生月。彼の宇治川を初めとして、つづいて一の谷、八島、壇の浦、高綱と生死を共にして、そちも隨分働いたなう。が、それも今はむかしの夢で、そちも高綱も再び功名をあぐる時節はあるまい。あたら名馬も飼殺しぢや。（嘆息しつゝ子之介にむかひ）けふは二日、そちが亡父の命日ぢやぞ。もうよいほどにして身を清め、佛前に回向いたせ。

子之介　はあ。

高綱　もうそれでよい。廐へ牽いて繫いでおけ。

子之介　はあ。（馬をひかんとすれど動かず）えゝ、なにが氣に入らいで拗るのぢや。さあ、行け、ゆけ。叱つ、叱つ。

（馬はなほ動かず。與一と六郎も立寄る。）

與一　えゝ、どうしたものぢや。叱つ、叱つ。

六郎　さあ、行け、ゆけ。

（三人は無理に牽かんとすれば、馬は狂ひて蹴散らさんとす。六郎倒る。與一等はうろたへ騷ぐ。馬は狂ひて走りゆかんとするを、高綱は進りてその轡を取る。）

高綱　えゝ、なにを狂ふぞ。そちにも氣に入らぬことがあるとみゆるな。高綱も狂ひたいは山々ぢやが、狂うたとて藻搔いたとて所詮は無駄な世のなかぢや。まあ、鎭まれ、鎭まれ。（馬にむかつて諭すやうに云ふ）

與一　（馬にむかつて罵るやうに）この横着ものめが……殿樣が直々にお手をかけられたら、この通り、おとなしくなつてしまふたわ。

（高綱は馬の口をとりて、子之介に渡す。子之介うけ取りて庭のうしろへ牽いてゆく。六郎は馬盥など片附ける。高綱の娘薄衣、十六七歲。侍女小萬を連れて、下のかたより出づ。）

薄衣　父上樣、これにお出でなされましたか。

高綱　日和がよければ厩に出て、馬に洗足さするを見てゐたのぢや。

薄衣　石山寺參詣のかへり途に、ついそこで旅の御出家樣にお逢ひ申しましたれば、お連れ申してまゐりました。

小萬　お見受け申したところが、ありがたさうな御出家樣。路をいそぐと一旦はお斷りなされましたを、無理にねがうて御案内申しました。

高綱　今日はこゝろざす佛の命日。よくぞそこへ心が注いた。して、その御坊は……。

薄衣　（小萬を見かへりて）早うこれへお通し申しや。

小萬　はい、はい。（引返して去る）

高綱　（六郎を見かへる）女子ばかりの出迎ひは無禮であらう。そちもまゐつて御案内申せ。

六郎　はあ。（去る）

高綱　薄衣と與一は奥へまゐつて、齋をまゐらする用意などいたせ。

薄衣　かしこまりました。

（薄衣と與一は奥へ去る。六郎と小萬は高野の僧智山を案内して出づ。智山は四十餘歲、旅すがたにて笠と杖とを持つ。）

高綱　（會釋して）聖にはゆく手を急がせらるゝとか承はつたに、ようぞお立寄りくだされた。毎月二日はほとけの命日でござれば、誰にかぎらず、門前をすぐる出家をよび止めて、回向を頼みまゐらするが家例でござる。

智山　唯今御息女よりも右樣の儀をうけたまはつたが、さりとは御奇特のことに存じまする。してお身が佐々木殿でござるよな。

高綱　申しおくれたれど、それがしは佐々木四郎高綱、なにとぞ御見知り置きくだされい。

智山　拙僧は高野の山にすむ智山と申す者、諸國修行のために陸奥へ下り、歸り途には鎌倉より伊豆をめぐりて、これより歸山の道中でござる。

高綱　では、東海道を上られたか。

智山　あたかも鎌倉の將軍が上洛の道筋とて、宿々は以てのほかの混雜、われ等のやうな痩法師はこゝでもかしこでも追ひ散され、いやさん／＼の目に逢ひましたよ。はゝゝゝ。

高綱　（打笑む）それは定めて御迷惑のことゝお察し申した。（六郎を見かへりて）床几を持て。

六郎　はあ。

（六郎と小萬は奥に入る。）

高綱　して、鎌倉の同勢にはどこらあたりでお逢ひなされた。

智山　熱田の手前で一つになりましたが、かの同勢は二三

日そこに逗留とか承はつたれば、その間にわれ等は通りぬけて、一足先に發足いたした。が、その行列の華やかさ、實に眼をおどろかすばかりでござつた。（高綱は耳をかたむけて聽く）　先づその人數は四五千騎もござつたか。

（六郎と小萬は床几を持ち來る。高綱は門にて智山にすゝめよと命じ、おのれも亦床几に腰をおろす。六郎と小萬は一禮して去る。）

智山　（床几に腰をおろして語りつゞく）　將軍はいづこにおはすか存ぜぬが、先供には北條、梶原、三浦、畠山、あとおさへには土肥、安達……など數々の大小名が平家の殘黨に備ふる用心もござらう、諸國に威勢を示すためでもござらう、いづれも甲冑爽かに扮裝つて、家々の紋打つたる旗をたてさせ、小春日和の海道筋を長々と練りゆくありさまは、勇ましいとも美々しいとも譬へて申すべきやうはござらぬ。まことに前代未聞との取沙汰、われ等もこの年になるまでに、かやうな目ざましい上洛は初めて見申したわ。われ等は出家の身で、うき世のことを兎かう申すではなけれども、賴朝といふ御人は果報めでたくおはすよなう。

高綱　（ひとり言のやうに）　それも皆この高綱故ぢや。恩知らずめが……。（罵る）

智山　恩知らずとは……。（聞き咎める）

高綱　（苦笑ひして）　いや、これはお聞かせ申しても詮ないことぢや。先づそれよりも、高綱の懺悔を一通りお聞きくだされぬか。今日御回向をたのみまゐらする佛と申すは、わが身寄りでも無し、敵でもなし、味方でも無し、罪なくして相果てたる紀之介といふ馬士でござる。

（高綱は眉を皺めて、空をあふぎつゝ起つて徘徊す。智山は珠數を爪繰りながら聽く。庭のかげより予之介忍び出でておなじく聽く。）

高綱　（しばらくして）　かぞふれば十年以前、治承四年の秋のはじめ、蛭ヶ小島に於て賴朝が旗をあぐるといふ噂、ひそかに都へもきこえたれば、われ眞先に見參に入り申さんと、忍んで伊豆へ下りしが、浪人のかなしさには馬も有たず。徒歩にておぼつかなくも辿り〳〵て、八月二日のあかつきに野洲の河原にさしかゝると、まだ明けやらぬ朝霧のあひだより、雜鞍置いたる馬を追うて來る者がござつた。これ幸ひとよび止めて馬を借受け、むかうの岸までは渡りしが……。これより遠き旅をゆくに、馬の足を假らでは不便なり、ぬすみて逃げんと馬をはやめて、二三町ばかり驅けぬくれば、馬士はおどろき追ひ來りて馬盗人よと罵りさわぐ。かくては是非も無し、馬をかへさば大事の間に合ふまじと……。こゝろを鬼にし

て……。

智山　（思はず叫ぶ）　あら、無慚……。由なき殺生をせられたよな。

高綱　馬を返さんとあざむいて、油斷を見すまし……。（突く眞似をする。しばしの沈默）　斯くしてやう〳〵馬を得たれば、無事に伊豆まで乘りつけて、おなじ月の十七日には八牧の屋形を攻めほろぼし、源氏再興の基をひらく。その後のことは申すまでもござらぬ。が、たゞ不憫なるは彼の馬士にて、その名を紀之介と申す由、かれの口より聞きたるを手がかりに、平家沒落の後この國中を隈なく詮議したるも容易に相分らず、このごろに至りて栗田の里に子之介といふ若者あり。（庭のかたを見る。子之介あわてゝ隱れる）　これぞ彼の紀之介の忘れがたみと知れたれば、呼び取りて厚く扶持せんと存ぜしに、彼はほかに望み無し、おのがなりはひは馬士なれば、馬飼ならば奉公せんと申すによつて、その云ふがまゝに廐に小者として召仕ひ、けふまで屋敷に置きまするが、これだけにて高綱の罪が消えませうか。せめては亡人の菩提を弔ふために、月の二日を命日とさだめ、供養をおこたらず營んで居りまする。

智山　（うなづきて）　して、その子之介と申すはいつ頃より當家に身を寄することゝ相成りましたな。

高綱　三月ほど以前でござらうか。

智山　恨みを捨てゝかたきに奉公し、勤めぶりに如才はござらぬか。

高綱　かげひなたなく正直に立働いて居りまする。

智山　それもまた奇特のことでござる。み佛は恩怨無二と說かせられた。

高綱　恩怨無二……。（かんがへる）　佛の教を學べばそのやうに悟られまするか。

智山　ほとけの教を學ばずとも、悟らるゝものには悟らるる道理ぢや。現に彼の子之介とやらも、お身をかたきと恨んでは居らぬと申すではござらぬか。

高綱　子之介が高綱を恨まぬは、心からその罪を謝するといふ人のまことに感じたのではござるまいか。至誠は神を動かすとかうけたまはる。もし我に心のまことがなくば、かれも飽まで我を恨みませうぞ。天下の人に皆まことがあらば、高綱にも不足はござるまいに……。

智山　佐々木殿ほどの勇士にも、なにかこの世に御不足がござるかな。

高綱　勇士なればこそ悶ゆる胸をおさへて、かやうに生きても居られまする。弱いものなら疾うの昔に、狂ひ死でもして居りませうわ。（衝と起つ）　御坊、なぜこの世の中にはまことなき奴儕がはびこつて、正しきものが虐

げられるのでござらうな。

智山　（騒がず）正法千年、像法千年の世はすぎて、今は末法の世でござる。それを救はんがために、われ等も努めて居るとは知られぬか。

（高綱はかんがへてゐる。奥より與一出づ。）

與一　御用意整うて居りまする。

高綱　（うなづきて）さらば、御坊。

與一　どうぞお通りくださりませ。

智山　（起ちあがりて）御案内おたのみ申す。

（與一は智山を案内して奥に入る。）

高綱　（厩を見かへりて）子之介は居らぬか。子之介、子之介。

（厩のかげより子之介は着物を着かへて出づ。）

高綱　御坊を佛間へ招じたれば、やがて讀經も始まるであらう。そちも參つて回向いたせ。

子之介　はあ。

（高綱は奥に入る。子之介もつゞいて入らんとする時、下のかたより佐々木小太郎定重、廿餘歳、出づ。）

定重　こりや馬飼のもの、叔父上はお宿にござるか。

子之介　はい。唯今高野の御出家様がお越しなされて、御佛間へ御案内なされました。

定重　おゝ、左樣であつたか。御佛事の場所へみだりに推參も如何。兎もかくも定重まゐりしと申上げてくりやれ。

子之介　かしこまりました。（奥に入る）

定重　（ひとり言）合點のゆかぬはこの頃の叔父上のありさまぢや。鎌倉殿上洛の人數も早や美濃路まで進まれたと聞くに、御出迎ひの用意もなく、そしらぬ顔して日を送らるゝは、抑もいかなる次第であらうか。（奥にて鉦の音きこゆ）おゝ、讀經ももはや始まつたと見ゆるな。

（奥より薄衣出づ。）

薄衣　小太郎どの、お越しなされましたか。

定重　おゝ、薄衣どの。叔父上は佛間にござるさうな。

薄衣　はい。先づ奥へお通りなされませ。

定重　いや、けふは少しく心もせけば、こゝにて暫時相待ち申さう。

薄衣　では、それへお掛けくださりませ。

（定重は上のかたの床几にかゝる。薄衣は梅の樹に倚りて立つ。）

定重　叔父上の御機嫌はこのごろ何うでござるな。

薄衣　別にかうといふこともござりませぬが、兎かくにお氣が暴々しくなつて……。瑣細なことにもおむづかりなされて……。そばにゐる者もはら／＼するやうな。

定重　御病氣ともみえませぬか。

薄衣　御病氣のやうでもござりませぬが……。（眉をひそ

む）

定重　はてなう。（かんがへてゐる）

高綱　（奥より出づ）小太郎、まゐつたか。

（定重は起つて床几をゆづる。高綱は床几に腰をかける。定重は薄衣にすゝめられて、下のかたの床几にかかる。）

定重　早速でござりまするが、將軍御上洛の同勢はもはや美濃路まで到着とうけたまはる。やがては當國へ進ませらるゝ御日取りでござれば、叔父上にも御出迎ひの御用意いかゞでござりまするな。（高綱答へず。定重はその氣色をうかゞひて）父は昨夜すでに出發いたしてござる。（高綱はなほ答へず）その砌、父が申しまするには、其方は叔父上のおん供して、今夕刻よりつゞいて出發いたせと……。

高綱　（不興げに）兄上が左樣申し殘されたか。

定重　はあ。

高綱　其方は父の指圖にまかせて、ゆきたくば勝手にゆけ。叔父は出ぬぞや。（定重おどろく）　高綱は行かぬぞ。

薄衣　このあひだからお勸め申して居りまするに、なぜ御出迎ひはなされませぬ。將軍の御上洛には途中までお出迎ひ申すが武家の習。なう、小太郎どの。

定重　鎌倉の將軍賴朝公がはじめての御上洛、武藏相模は申すにおよばず、海道の大小名はすべておん供に加はるなかに、叔父上ばかりが御不承知とは……。

高綱　おゝ、不承知ぢやよ。鎌倉の將軍がなんぢや。賴朝がなんぢや。あの大がたりの大嘘つきめが……。

薄衣　あ、もし、うか／＼とそのやうなこと……。

定重　萬一餘人の耳に入りましたら……。

高綱　おそろしいと申すのか。（あざ笑ふ）　嘘つきなればこそ嘘つきと云うたがなぜ悪い。こりやよう聞け。石橋山のたゝかひ敗れて、賴朝めは散々の體たらく。嚙合ひに負けた痩犬のやうに、尻尾をまいて這々の體で逃げまはる。晴さは晴し、雨はふる。木の根や岩角につまづいて轉びつまろびつ、泥まぶれになつて逃ひあるくそのざまは……。わはゝゝゝゝ。さりとてわれに取つては譜代の主君ぢや。命を捨てゝもその難儀を救はねばならぬと、高綱がかけ付けて扶け起し、それがしおん名をたまはりて防ぎ戰ふあひだ、君には疾く／＼落ちさせたまへと云へば、賴朝めは拜まぬばかりに嬉しよろこんで、おゝ、わが身がはりに立つてくるゝか、佐々木は日本一の大忠臣ぢや。われもし生きて天下を取らんには、その恩賞として日本の半分をわかち取らすぞと、諸人の聞く前でたしかに誓うた。

定重　右樣の儀はかねて父よりもうけたまはつて居ります

る。そのかはりに叔父上がおん身代りに相立たずば、頼朝公の御運も危かつたかとも存じられまする。

高綱　高綱が源頼朝と名乗つて……おもへば馬鹿にした大童となつて必死にたゝかふ間に、頼朝めは杉山まで逃げ込んだ。高綱も幸ひに命をまつたうした。つゞいては宇治川先陣の功名、それだけでも一ヶ國三ヶ國の値はあらう。さて頼朝めは思ひのまゝに世をとつて、天下の大將軍と仰がれながら、命の親の高綱にはなにほどの恩賞をくれたと思ふぞ　日本の半分は云ふもおろか、四半分の又その四半分にも足らぬ捨扶持をくれたばかりで、おのれはあつぱれ主人顏ぢや。征夷大將軍、源氏の棟梁とか勿體らしく名乘るものが、恩をわすれ、約束を破つてすむと思ふか。

定重　一應御もつともではござりまするが……。（返事に困つてゐる）

高綱　勿論、高綱もだまつては居らぬ。石橋山の御約束はもはや御忘れなされたかと、たび／＼催促に及ぶといへども、四の五の云うて埒があかぬ。それにまた土肥の、安達の、三浦のといふ腰拔どもが、かしこ振つた面をして、そのやうなことを申すは第一に不忠ぢやの、やれ君命に背くなの、長いものには卷かれろのと、理を非にまげて意見をし居る。（定重をみて）其方の父なども同じくその腰ぬけ仲間ぢや。えゝ、ばか／＼しい。主人は約束にそむく大嘘つき、まはりの奴儕はへつらひ武士や臆病者、右を見ても左をみても、癪に障ることばかりが疊まつて來るわ。

（高綱は立つて梅の枝をねぢ折り、落花微塵に引きちぎつて地に投げ付ける。）

定重　われ／＼若輩者が押して申上げましたら、定めてお叱りもござりませうが、今もむかしも道理ばかりでは濟まぬ世の中でござりまする。たとひ叔父上に十分の道理がござりませうとも、いまさら鎌倉の將軍を相手取つて、理非を爭ふなどとは及ばぬこと。どのやうな御不足がござりませうとも、堪忍あそばすがお家の爲、このたびは何とぞそれがしをお供に連れられて、まげて國境まで御出迎ひを……。

高綱　最前も申した通り、ゆきたくば其方ひとりで行け。

定重　くどうも申すやうなれど、お家を大事と思召されて……。

高綱　えゝ、面倒な。家がなんぢや。高綱がけふ限りで家を捨てたらなんとする。

薄衣　え、もし、父上樣……。（思はず縋らんとす）

高綱　（ぢつと娘の顏をみたるが、又つき退ける）こんな馬鹿々々しい世のなかに、生きてゐる奴の氣が知れぬわ。

定重　では、どうあつても御出迎ひには……。

高綱　まだわからぬか。くどい奴ぢやなう。

（高綱は奥に入る。あとにふたりは顔を見あはせる。）

薄衣　今更ならねど父上のはげしい御氣性、一旦かうと云ひ出されたら、容易に思ひ返しはなされまい。困つたことでござりまするなう。

定重　このたびの將軍御上洛には海道筋の大小名、いづれも人數をひき連れて、路次の警固をつかまつれとあるに、叔父上のみ御不參とこれあつては後日の御咎は遁れまい。まして將軍のお側には、日ごろより佐々木一家とは仲違ひの梶原父子もひかへて居れば、この機に乘じていかなる讒言を申立てんも測られず、油斷せば家の大事……（思案して）兎もかくも一旦は立歸り、出發の用意をとゝのへて、再びお迎ひにまゐるでござらう。

薄衣　もし父上が飽までも御不承知と仰せられたら……。

定重　是非に及ばず、それがし一人にてまゐるまでぢや。萬一叔父上が御不興を蒙るとも、それがし父子が申しなだめて、無事を計るが一族のよしみ……。（詞優しく）かならず御心配あるな。

薄衣　なにとぞ宜しくたのみまする。

定重　さらば重ねて……薄衣どの。

薄衣　御出發の折には今一度お立寄り下さりませ。

定重　無駄とは思へどお誘ひにまゐらう。

（ふたりは會釋して、定重は下のかたに入る。薄衣はあとを見送りて思案顏にたゝずみしが、これも思ひ直して奥に入る。下のかたより子之介の姉おみの、廿二三歳の農家の娘、旅姿にて出づ。）

おみの　（あたりを窺ひて）子之介は庭にゐると御門で教へられたが、はて何處へ行つたことであらう。

（奥より子之介出づ。）

おみの　おゝ、弟……。

子之介　姉樣か。（なつかしげに寄る）ようたづねて來てくだされた。

おみの　このごろは時候もおひ／＼に寒うなつて來たが、別に變ることもないかや。

子之介　はい。幸ひに達者で暮してをりまする。

おみの　それでわたしも安心しました。

子之介　けふは月こそ違へ、父樣の御命日で、今まで奥で御回向をして來ました。

おみの　奥で……。（かんがへて）そなたひとりで御回向をしてゐやつたのか。

子之介　殿さまと御一緒に……。

おみの　殿樣も御一緒に……。人間ひとりを惨たらしう殺して置いて、回向さへすれば、罪が消ゆるかなう。（冷

笑ふ)

子之介　(愁はしげに)　姉様。お前はやつぱり殿様を恨んでゐるのぢやな。

おみの　(左右を見まはす)　これ、そこらに人はゐぬか。(子之介うなづく)　恨むが無理か、積つてもみやれ。父様は正直律義のお生れで、日ごろから露ほども曲つたことはせられなんだに、よい人にも惡い報いが來て、十年以前野洲の河原で何者にか斬り殺され、牽いてゐた馬はぬすまれた。その時わたしはまだ十三、そなたは十一で姉弟碌々に物心もつかず、唯おろ／＼と途方にくれて、姉弟手を取つて泣いてゐた。(なみだを拭ふ。子之介もうつむいて聽く)　かたきは誰か知らねども、見つけ次第に唯は置くまいと、歎きのなかにも胸に刻んで今まで月日を送るうちに、神佛のひきあはせか、かたきは知れた……。(再び左右をうかゞひて)　かたきは佐々木高綱とおのれの口から名乘つて來た。

子之介　十年以前野洲の河原で馬士を殺したは　わが仕業と、あからさまに名乘つて出て、ゆかりのものを探し求め、むかしの罪を償ふために、あつく扶持して取らせると、御領主様からお觸れが出たときには、夢かとばかりに驚きました。

おみの　おどろきと悲みと喜びとが一つになつて、一旦は思案にも惑うたが、かたきが我から名乘つて出たこそ幸ひ、その屋敷へ入り込んで、隙もあらば恨みの刃をかたきの胸に刺し透さうと、約束したを忘れはせまい。こゝへ奉公住みして足かけ三月のあひだに、討つべき隙はなかつたか。そのたよりが聞きたさに、けふはわざわざ尋ねて來ました。

子之介　隙もあらばかたきを討たうと、刃を呑んで住み込みましたが、あくまでも前非を悔いた佐々木どの、この子之介のまへに兩手を突いて、ゆるしてくれとお詫びなされた。そのまごころが面にあらはれて……。

おみの　討つべきこゝろも鈍つたか。えゝ、云ひ甲斐のない卑怯者、臆病者……。最前もいふ通り、罪もない人間ひとりを殺して置いて、わびて濟まうか。回向して濟まうか。それで堪忍がなるほどなら、けふまで泣いて暮らしはせぬ。廿歳を越しても歯を染めぬ姉の覺悟をなんと見た。姉弟が心をひとつにして、馬盜人のかたきの奴めを……。

子之介　もし。(聲高しと制する)

おみの　そなたは疾うからこゝに住み込んで、屋敷の案内も知つてゐやらう。今夜にも姉を手びきして……。これ、默つてゐるは不承知か、但しは今更おくれが出たか。

子之介　むかしの罪を後悔して、毎月二日を命日に、佛事

供養をかゝさず營んでくださる殿樣を、いまさら執念く恨むのは……。もし、姉樣。父樣の死んだは是非もない災難ぢやと……。

おみの　なに。(屹となる)

子之介　どうぞお諦めくださりませ。

(おみのは呆れた體にて弟の顏をぢつと眺めてゐたりしが、やがてわつと地に泣き伏す。)

子之介　もし、姉樣。(立寄つて取縋る)

おみの　(狂ふがごとくに突き退ける)　えゝ、寄るな、寄るな。現在の親のかたきを眼の前に置きながら、おめおめと見てゐるやうな不孝ものに、姉と呼ばるゝおぼえはない。

子之介　たとひ佐々木殿を討つたとて、死んだ父さまが返りませうか。よしない罪を作らうよりも……。

おみの　えゝ、卑怯者……不孝者……。もうこの上はそなたは頼まぬ。なんの相手が武士ぢやとて怖ろしいことがあらうか。かたきは妾ひとりで見事に討つてみせう。

(おみのはかゝへたる絲楯をときて、山刀をとりだす。子之介おどろきておさへんとす。)

おみの　(振拂ひて)　えゝ、邪魔するな。放しや、放しや。

(おみのは突退けて奧へ駈けゆかんとするを、子之介はあわてゝ遮る。)

子之介　いかにお急きなされても、女ひとりで奧へ踏み込まうなどとは狂氣の沙汰……。もし仕損じたらなんとなさる。まあ、お待ちなされませ。

おみの　とめるな、放しや。

子之介　でも、このまゝに遣ることは……。

(おみのは又ふり切つて行かんとするを、子之介は必死となりて縋りとめ、無理に厩のかげへ連込む。下のかたより佐々木小太郎定重、花やかなる鎧をつけて弓を持ち、家來數人を引連れて出づ。)

定重　(家來を見かへりて)　先刻の樣子では、叔父上にもまだ御仕度はなされまい。それがし參つておすゝめ申す間、其方どもはこれに控へてをれ。

家來　はあ。

(定重は奧へゆかんとする時、奧より佐々木高綱は頭髻を切りたる有髮の僧形、直垂の袴をくゝりて脛巾をはきたる旅姿にて笠を持ち出づ。あとより薄衣、與一、六郎、小萬等は打潤れて從ひ出づ。)

定重　(おどろく)　や、叔父上には……。

高綱　弓矢は折つた。太刀も捨てた。熊谷蓮生坊の二の舞ぢや。(笑ふ)

定重　これは又思ひもよらぬこと、佐々木四郎高綱と日本中にきこえたる弓取が、にはかに浮世を捨てられた

は……。

高綱　穢しい浮世ならばなんで捨てよう。いつはり者が上にたつ世の中、へつらひ武士がはびこる世の中、けがれた世の中、面白からぬ世の中、このやうな世の中は高綱の住むべきところでない。

定重　では、この世の中を見限つて……。

高綱　(罵るやうに)　おゝ、この世の中に愛想がつきたわ。

薄衣　幾たびおとゞめ申しても、お聞き入れがないばかりか、高野の聖のおん供して、これからすぐにお立ちとは、情ないことでござりまする。

定重　これからすぐに高野へ山入りとな。

與一　折ふし折とて高野の聖が、こゝへお立寄りなされたので、にはかに出家の思召、まことに夢のやうに思はれまする。

六郎　さなきだに世の中が面白からぬと仰せられてゐたところへ、恰も將軍の御上洛、その御出迎ひを強ひらるゝ蒼蠅さに、いつそ武士を捨つるとのお詞でござりまする。

高綱　委細は今聞く通りぢや。かならず騒ぐな、おどろくな。兄上に逢うたらばそのおもむきを確と申傳へてくりやれ。

(定重茫然。奥より智山出づ。)

智山　方々のおどろきも歎きももつともぢや。われ等も一應は頭をかたむけたが、勇猛直前は勇士の本意、たとへば風を剪つて飛ぶ矢のごとくで、おのれが向はんとするところへ向ふよりほかはござるまい。(風の音して梅の花散る)おゝ、花が散る。佐々木どのにはこれをなんと見らるゝ。

高綱　(うち笑む)　西行のやうな涙もろい男なら、無常を感じて泣くでござらう。

智山　おん身の悟は……。

高綱　高綱に悟はござらぬ。

定重　悟らずして世を捨てらるゝは……。

高綱　こんな世の中にうろ／＼してゐるのが、忌々しいからぢや。

智山　それも一種の悟であらうよ。はゝゝゝ。

高綱　はゝゝゝゝ。(厩にむかひて)生月をこれへひけ。

(子之介は生月を牽いて出づ。)

子之介　殿樣。委細はあれで伺ひました。

高綱　聞いたとあらば重ねて云ふまい。これより聖のおん供して、高野へまゐる。頭をそり毀てば高綱も法師ぢや。其方が父紀之介の後生安樂を禱るであらうぞ。

子之介　ありがたうござりまする。(馬の口を取る)さあ、お召しなされませ。

高綱　いや、今からは聖の御弟子ぢや。(智山にむかひ)

師の御坊には鞍に召しませ。われ等が車匿童子となり申さう。

智山　鎌倉の將軍にも頭をさげぬ佐々木殿が痩法師の馬の口を取らるゝか。さりとは面白い。しからば御免。（馬に乘る）

（高綱は馬の口をとりて行かんとす。薄衣、小冬、與一、六郎、左右より走せ寄り、無言にて袂にすがる。）

高綱　薄衣は小太郎といひなづけの仲ぢや。やがては祝言して睦じう暮せ、與一そのほかも堅固であれ。やあ、小太郎。

定重　はあ。（進み寄る）

高綱　高綱一家のあとをたのむぞ。

定重　委細承知つかまつりました。

高綱　よし。（取られし袂をふりきつて）　さらば……。

（行かんとする時、厩のかげよりおみのは山刀をぬき持ちて走り出づ。）

おみの　父様のかたき……。（切つてかゝる）

高綱（身をかはしてその手をとらへ）　誰ぢや。（顏をみて）おゝ、子之介の姉か。（微笑みながら突きはなす。おみの倒れる）こゝにも悟られぬ人があるなう。

智山　冬の日のくれぬうちに大津の宿まで。

高綱　はあ。

（高綱は馬の口を取りてゆく。皆々あとを見送る。おみのは又起ちあがりて行かんとするを、子之介は抱きとめる。三井寺の鐘の音きこゆ。）

――幕――

村井長庵（四幕六場）

登場人物

村井長庵
その姪　お梅
その弟子　良仙
判人　早乘三次
伊勢屋　千太郎
古着屋　久八
その妻　お咲
石子　伴作
室積平四郎
堺屋　清兵衛
堺屋の番頭　金兵衛
伊勢屋の番頭　惣七
遠州屋の番頭　傳五右衛門
居酒屋の亭主　半助
その女房　お六
近所のむすめ　お朝

ほかに岡つ引。職人。番太郎。自身番の定番。居酒屋の若い者。丁稚。雇ひ女。長屋の女房。町役人。仲間。町人。娘。子供など。

第一幕

麹町平河町、町醫村井長庵の宅。普通の二重屋體にて、上のかたに一間の床の間。これにつゞきて藥種棚、百味簞笥などあり。下のかたには石摺りの襖。更に下のかたには式臺のつきたる玄關ありて、玄關の柱には村井長庵といふ標札をかけ、一方の柱には「當分の內施藥」といふ大いなる木札をかけてあり。平舞臺は庭のこゝろにて、櫻の立木あり。庭と玄關との境には四つ目垣あり。ずつと下のかたには隣家の土藏の白壁、そのあひだに通路あるべし。

（江戸時代、享保末年のころ。三月下旬の午後。村井長庵、三十七八歲の坊主頭にて羽織も着ず、忙しさうに藥を調合してゐる。弟子の良仙もおなじく坊主頭、手拭を片だすきにして藥研で藥をきざんでゐる。平河天神の神樂の音きこゆ。幕あきても、二人はしばらく無言にて忙しさうに働きつゞけてゐる。）

良仙　先生。

長庵　なんだ。
良仙　大分陽氣も暖かくなりましたな。
長庵　もう三月も末になる。暖かくなるのが當りまへだ。
（矢はり藥を調合してゐる）
良仙　かうして働いて居りますと、暖いのを通り越して、よほど暑くなつてまゐりました。
（襷の手拭をはづして額の汗をふく）
長庵　もう此頃の陽氣になれば、疱瘡も麻疹も大抵やむ筈だに、今年はどうしていつまでも流行るかなう。わたしが醫者になつてから十五六年この方、つひぞ例のないことだ。疱瘡はどうにか止んだが、麻疹はまだなか／＼止みさうもない。今が峠といふ所らしいぞ。
良仙　今度の麻疹では、江戸中で毎日何百人死ぬかわからないといふ噂、まつたくおそろしいことでございます。
長庵　まつたく怖ろしい。一日に百人づつ死ぬとしても、去年の冬からではもう一萬人あまりも死んでゐる筈だ。（云ひかけて心づく）あゝ、うつかり饒舌つてゐてはならない。奥には今夜をも知れない病人が五人も六人も寢てゐるのだ。
良仙　ほんにさうでございます。
（良仙はあわてゝ再び襷をかけ、忙しさうに藥を刻みはじめる。奥より長庵の姪お梅、十七八歳、これも襷がけのかひ／＼しき姿にて出づ。）
お梅　叔父樣。ちよつと奥へ來てくださりませ。
長庵　病人がどうぞしたか。
お梅　はい。あの由ちやんといふ子がどうも熱が高いやうでございます。
良仙　むゝ。あの子はどうもむづかしうございますな。
長庵　なにしろすぐに行つて見よう。
（長庵はお梅と共にあわたゞしく奥に入る。良仙はそのうしろ影を見送りて溜息をつきしが、また思ひ返して藥を刻んでゐる。下の方より赤き頭巾をかぶりたる男、半田の稻荷の幟を持ちて出づ。あとより町の子供四五人ぞろ／＼と附いて出づ。）
勇　葛西金町半田の稻荷、疱瘡も輕いな、麻疹も輕いな。
子供　（つゞいて呼ぶ）疱瘡も輕いな、麻疹も輕いな。
（男はくり返して呼びながら向ふに去る。子供等も附いてゆく。下のかたより生藥屋の番頭金兵衞は小風呂敷を持ちて出づ。）
金兵衞　（玄關にて）御めんください。
良仙　どうれ。（玄關に出る）おゝ、堺屋の金兵衞さんか。御苦勞、御苦勞。藥ならば小僧に持たせて遣してもいゝのに、番頭さんがわざ／＼出て來るとは、なか／＼精を出しなさるね。

金兵衛　そんなに煽てゝくださるな。小僧では間にあはない用があるので、これでわたしが忙しいなかをわざ〳〵出て來ました。長庵どのはお內でございますかね。

良仙　(それと覺りて)　さあ、先生は內にゐられるが、なにしろ內の病人と外廻りとで、毎日朝から晩まで忙しいので、とてもお前さんに逢つてゐるやうな暇はあるまい。これともお前さんの家に急病人でも出來たのかね。

金兵衛　いや、そんな譯ではありませんが、今日はどうしても長庵どのにお目にかゝつて、直々にお話をしなければならないことがあるので來ました。どうぞ先生に取次いで下さい。

良仙　取次いだところで斷られるのは知れてゐる。とりわけてお前さんなんぞは請合つて玄關拂ひだ。

金兵衛　飛んでもないことを云ふ。そつちが忙がしければ、こつちも忙がしい體だ。

良仙　そんなら五分々々だ。さつさと早く歸るが可い。こつちも忙がしい體だ。

(良仙は玄關と奥との境の襖をぴつしやり閉めきつて上のかたへゆく。金兵衛は焦れ込みて玄關にあがる。)

金兵衛　これ、良仙さん、良仙さん。人を置去りにして引込むと云ふことがあるものか。先生に逢はせてください。良仙さん。良仙さん。

(金兵衛は腹立ちまぎれに怒鳴る。良仙は素知らぬ顔して藥をきざんでゐる。奥より長庵出づ。)

長庵　良仙。表で聲がするやうだ。誰か藥取りに來たのではないか。

良仙　藥取りなら仔細はございませんが、あれは掛取りでございます。

長庵　(顔を陰らせる)　なに、掛取り……。どこから來た。

良仙　界屋の番頭でございます

長庵　さうか。

(長庵は下の方へゆきて襖をあける。金兵衛は長庵の聲を聞きて、遠慮なく內に入りて襖をあけようとする。その途端に襖をあけられて、金兵衛は內によろけ込み、あやふく長庵に突き當らうとする。)

長庵　これは失禮。はゝゝゝゝ。

金兵衛　(きまり惡さうに)　はゝゝゝゝ。

長庵　先づこちらへお這入りなされ。

金兵衛　御めん下さいまし。

長庵　良仙。金兵衛どのにお茶をあげぬか。

良仙　いえ、金兵衛さんは大變に忙がしい體だと申しますから、ゆつくりと茶などを飲んでゐる暇はありますまい。用が濟めばさつさと歸りませう。

長庵　さりとは不愛想な奴だ。實はわたしも一杯飲みたい。

早く茶をいれて來てくれ。
良仙　先生が召上るなら、すぐに淹れてまゐります。
（良仙は金兵衛を尻目に見ながら奥に入る。）
金兵衛　さて先生。早速でございますが、これまでにもたび／＼御催促申上げました藥劑の代金、溜りたまつて三十五兩と二十匁、もはや月末にも相成りますので、この晦日までには必ずお間違ひのないやうに、今からおねがひ申して置きます。
長庵　こなたのお店にはいろ／＼と御迷惑をかけて、長庵まことに心ぐるしい。舊冬からの藥劑の代金が積り積つて三十五兩あまり。せめてはこゝで半金か、それもならずば三分一でも、お拂ひ申したいのは山々でござるが……。
金兵衛　え。（一膝すり寄せる）
長庵　所詮出來ぬときまつてゐるものを、一寸逃れの安請合は、却つて不義理をかさねる道理で、出來ぬものは出來ぬと正直にお斷り申すよりほかはない。長庵がくれぐれもお詫び申して居つたと、御主人にもよろしくお取りなしくだされ。（丁寧に斷る）
金兵衛　いや、その御挨拶はもう聞き飽きました。それで素直に歸るほどなら、手前がわざ／＼出てはまゐりません。もし、長庵さま。
長庵　はて聲高に云はるゝな。奥にも二階にも大勢の病人が寢てをります。なるほど、こなたの掛合も無理ではないが、知つての通り、去年の冬から疱瘡と麻疹の流行。とりわけて此のたびの麻疹は症が惡く、この江戸中でも毎日何百人の死人があるといふ。未熟ながら長庵も、醫者の玄關をかまへてゐる以上、どうもよそには見過されず、醫は仁術の敎へにしたがひて、貧窮のものには無料にて藥をあたへ、また自宅にて看病のならぬものは、手狹ながらも當家に引取つて、とゞく限りの療治もいたしてゐる次第。なにぶんにも施しの療治であれば、毎日の費用も嵩むばかりで……。
金兵衛　それはこなたの心がらと云ふもの。惡い麻疹のはやるのを幸ひに、自分の名前を世間に賣り廣めようとして、思ひついた施し療治……。と、蔭では噂をする者もある位で……。
（奥の襖をあけて、良仙は茶道具を持ち出で來りしが、その茶道具を投げ出すやうに置きて、金兵衛のまへに坐る。）
良仙　もし、番頭さん。やい、金兵衛。今聞いてゐれば、内の先生はわるい病の流行るのを幸ひに、自分の名前を賣りひろめようとして、商賣づくで施し療治をはじめたと、貴樣はたしかに然う云つた。

金兵衞　わたしが云つたと云ふわけではない。たゞ世間でそんな噂をしてゐる者が無いでもないといふお話をいたしたばかりだ。

良仙　世間は兎もあれ、現在こゝの家へ來て、先生の前で當付けらしく云ふことがあるものか。さあ、もう一度云つてみろ。（金兵衞の腕をつかむ）

長庵　これ、これ、手暴なことをしてはならぬ。おとなしくしろ。

良仙　でも、あんまり腹が立つて……。これ、よく聞け。家の先生はな、悪い病が流行る時節に、ひとりでも多くの人間を助けたいと、夜の目も寢ずに働いてゐる。その施しの療治のために、多くもない家財や着類までも手放して……。

長庵　いや、それはもう私からもよく話した。これ、金兵衞どの。今も聞く通りの次第で、さらでも生計向き不自由の長庵がこのごろいよ／＼逼迫して、差當つては三兩五兩の工面さへもむづかしい。そこを察して今しばらくの間、どうぞ我慢してくだされ。長庵一人のためではなく、諸人の爲だと思つてこゝのところを……。實を申せば藥種の支拂ひもこなたの店ばかりではない、ほかの店にも相當にたまつてゐる。そのほかにも病人の飯米やら、養ひに食はせる品々やら、それやこれやの諸支拂ひを合はせたら、何十兩といふ大きな金高。と云つて、大勢の病人を見す／＼見殺しにもいたされず。わたしもほとほと思案に盡きて……。（ちつとなつて又氣をかへ）いや、いつまで云つても同じこと。くどいやうなれど、金兵衞どの。こなたのお店はあれほどの大身代、二十兩や三十兩の掛が出來ても、左のみ御差支へもござるまい。

良仙　まつたく先生の仰しやる通り、堺屋はあれほどの大身代。こつちは諸人助けの爲にすること、廿兩や三十兩は踏み倒しても仔細はないのだ。

長庵　いや、決して踏み倒さうなどとは申さぬが、今しばらくの御猶豫を……。

金兵衞　その猶豫をしたところで、失禮ながら不斷からあまり流行らない長庵樣がいつになつたら返せるやら。それとも天神樣の富の札でも買つて、きつと當るといふ心當りがございますかね。

良仙　えゝ、まだぐづ／＼云つてゐるのか。歸れ、歸れ。

（良仙は床の間に置きたる長庵の木刀を持ち來りて、金兵衞を追ひ立てる。）

良仙　さあ、早く歸れ。

金兵衞　これは呆れた亂暴な人だ。取るべきものを取りに來て、むやみに打たれて堪るものか。

良仙　貴樣のやうな奴等に容赦がしてゐられるか。さあ、

歸れ。出てゆけ。

（良仙は木刀をふり上げながら金兵衛を玄關の方へ追ひ出す。金兵衛は風呂敷づつみを置き忘れしまゝ、捨臺詞にて玄關に出る。）

金兵衛　この樣子では施し療治などといふ看板も當にはならない。そんなことを云つて高い藥をたくさん取寄せて、どこへか竊と引賣をするのかも知れない。

良仙　なんだと……。（木刀をふり上げる）

金兵衛　今にみろ、藪醫者の大山師め。

（金兵衛は憎さげに罵りながら下のかたへ立去る。長庵は内より聲をかける）

長庵　これ、これ、良仙

良仙　はい・はい。（奥に來る）ほんたうに忌々しい奴でございます。

長庵　病人を救ふためとは云へ、高價の藥代を支拂はぬのはこつちの不義理に相違ない。なんと云はれても仕方がないのだ。

（長庵は嘆息する。良仙は木刀を元の床の間におく。奥の襖をあけて、お梅再び出づ。）

お梅　をぢ樣。二階の病人もむづかしくなりました。

長庵　なに、二階の病人が……。

（長庵はあわてゝお梅と共に奥に入る。良仙は金兵衛が置き忘れたる風呂敷に眼をつけ、手に把つてみて重いといふ思入。それをそのまゝ床の間に置きて、再び藥をきざみはじめる。下のかたより伊勢屋の倅千太郎、十九歳、忍び足にて出で來りて内をうかゞふ。下の方より長屋の女房出で來り、千太郎を見かへりて會釋する。千太郎はきまり惡さうに會釋して、下の方の小蔭にかくれる。）

女房　（玄關口に來る）ごめん下さい。

良仙　どうれ。（玄關に出る）

女房　今日は……。（會釋して）お藥をいたゞきにまゐりました。

良仙　おゝ、藥は出來て居ります。（内に入り、藥づつみを持ち來る）けふは少し加減がしてあります。して、息子殿の容體はどうでござるな。

女房　おかげさまで熱もよほど下つたやうでございます。

良仙　それは結構。しかし今年の麻疹は症が惡いから、なかなか油斷してはなりませんぞ。

女房　はい、はい。これで悴が本復いたしますれば、ほんたうに先生樣は命の親でございます。どうぞよろしく仰しやつて下さいまし。

良仙　はい、はい。どうぞお大事に……。

女房　ありがたうございます。

（女房は藥をおしいたゞきて、丁寧に會釋して立去る。良仙は内に引返して來る時、奥にて長庵のよぶ聲）

長庵　良仙、良仙。ちよつと來てくれ。

良仙　はい、はい。

（良仙はあわたゞしく奥に入る。千太郎再び出で來りて内をうかゞふ。奥よりお梅出で來り、そこにある藥づつみを手に持ちて行かうとする。）

千太郎　（よび止める）もし、もし。

お梅　はい　（玄關の方をのぞいて）　おゝ、千太郎さん。

（千太郎は無言にてまねく。お梅は前後を見かへりながら玄關に來る。）

千太郎　相變らず忙がしいのですね。

お梅　御承知の通り、二階にも下にも五六人の病人が寢てゐるので、なか／＼手がまはり兼ねます。

千太郎　それはわたしも察してゐます。まゝになるならこの家へ來て、一緒に手傳つてあげたいほどだが、まさかに然うもならないので、たゞ時々に覗きに來て、よそながら内の樣子を窺ふばかり。なんとかしてこの悪い病が一日も早く止むやうに、今も平河の天神樣へ祈つて來ました。

お梅　ほんにけふは天神樣の御縁日、ちよつと御參詣に行きたくても、なにぶんにも病人が多いので、朝から一足も表へは出られませぬ。

千太郎　病人も勿論大切だが、めい／＼のからだも大切。朝から晩まで病人のそばに附切りで、悪い病でも移らぬやうに、よく氣をつけなければなりませぬぞ。

お梅　その病人のそばにゐるのも今日かぎりで……。

千太郎　え。

お梅　わたしは奉公に行かねばなりませぬ。

千太郎　（いよ／＼驚く）え、奉公に……。して、どこへ……。これ、默つてゐては判らぬ。この忙がしい最中にどこへ奉公に出ることになりました。

（お梅はうつむいてゐる）

千太郎　お前がゐてさへも手廻りかねるといふ最中に、急に奉公に出てゆくとは……。（首をかしげる）

お梅　（悲しげに）今にわかる時節もありませう。もうその上に詮議してくださりますな。

（お梅は顏をそむけて眼をぬぐふ。千太郎は合點がゆかぬ體にてかんがへてゐる。向ふより早乘三次、判人のこしらへ、駕籠屋ふたりに空駕籠をかゝせて出づ。三次はお梅と千太郎をみて鳥渡ためらひしが、やがて咳拂ひをして進みよる。二人もそれに氣がつきて、あわてゝ左右に離れる。）

お梅　おゝ、三次さんでござりましたか。

三次　へい。（千太郎の方を見返りながら）　あの、お迎ひにまゐりましたが、長庵さまはお内でございますか。
お梅　はい。叔父は内にをります。どうぞお通りくださりませ。
三次　では、御めん下さいまし。（駕籠屋に）おい、若い衆。ちよいと待つてゐてくれ。
二人　あい、あい。（駕籠を下さうとする）
三次　いや、そこへ駕籠を下されちやあ近所の手前もある。もう少しそつちの蔭の方へ行つてゐてくれ。
二人　ようございます。
（駕籠屋は下のかたの蔭に入る。千太郎は思案して、その駕籠のあとにつきて同じく下の方に入る。三次は足のほこりを拂ひて内に入る。）
お梅　たび／＼御苦勞でござりました。すぐに叔父を呼んでまゐりますれば、しばらくお待ちくださりませ。
三次　相變らずお忙がしいやうでございますね。
（お梅はあり合ふ烟草盆を三次にすゝめ、會釋して奧の内に入る。三次は烟草をのんでゐる。下の方より近所のむすめお朝出づ。）
お朝　ごめんくださいまし。
三次　あい。なんだえ。
お朝　ごめんくださいまし。
三次　おい、藥取りかえ。（玄關に出る）　お前は診て貰ひに來なすつたのか。それとも藥を貰ひに來なすつたのか。
お朝　先生はお内でございますか。
三次　先生はゐますよ。なんの用だえ。
お朝　わたくしは裏のお長屋の長太郎の家からまゐりましたが、先生はお内でございますか。
三次　だから、内にゐるといふのに……。先生はゐるよ。
お朝　先生はお内でございますか。
三次　をかしいな。はゝあ、お前は圓通寺だね。（自分の耳を指さす）
お朝　はい。春先でこのごろ少々逆上せまして……。
三次　若えのに可哀さうだな。（お朝の耳に口をよせて大きく云ふ）先生は内にゐるよ。どこか惡いのかえ。
お朝　はい、はい。御都合が惡ければ又うかゞひます。なに、御近所でございますから。はい、左樣なら。
（お朝の下のかたに立去る。）
三次　いけねえ、いけねえ。おい、圓通寺の新造さん。先生は内にゐるんだよ。はゝ、もう行つてしまつたか。近所の娘だといふから、又出直して來るだらう。（内に入る）それにしても先生は何をしてゐるんだな。早く出て來るが可いぢやあねえか。（再び烟草をのむ）常談ぢやあねえ、厭に待たせるな。（すこし焦れ込みてわざとら

しく灰吹をぽん〳〵叩く）へん、とんだ甚助だ。

（奥より長庵は黒ちりめんの羽織を着て出づ。）

長庵　いや、これはどうも御待遠でござつた。なにぶん手の放されぬ病人があるので失禮をいたしました。

三次　どう致しまして、定めて御忙しいことでございませう。（少し小聲になつて）ところで、早速でございますが、あのお梅さんをお連れ申してまゐつても宜しうございませうか。明るいうちでは御迷惑だらうと存じまして、日の暮れかゝるのを待つてお迎ひに出ましたが……。

長庵　よろしうござる。去年の冬からの施し療治に、手許はいよ〳〵行き詰まるばかり、よんどころなくこなたにおたのみ申して、たつたひとりの姪をよし原の廓に沈め、急場の難儀を救はねばならぬ始末。いや、まことにお恥かしい次第でござります。

三次　お恥かしいと仰しやるものゝ、よその身賣りとは譯が違ひます。これが世間並の醫者ならば、かういふ時が稼ぎ時と、五分禮でも三分禮でも手あたり次第にかき込むところを、貧乏人には施しと立派な看板をかけて小半年のあひだに、何百人といふ人間を助けた爲に、手許が詰まつたと仰しやるのは、まつたく御無理のないことでございますよ。

長庵　手前は三州藤川在に生れ、若年のころより京にのぼつて醫道をまなび、今より十五六前に江戸表へまゐつて、かやうに玄關をかまへて居れど、業の未熟か世渡り下手か、今まで碌々に病家もなく、姪と弟子との三人暮しでどうやら斯うやら微に日を送るうちに、去年の冬からの流行り病、とりわけて痲疹は命さだめといふほどの世におそろしき病なれば、貧窮のものは思ふやうに手當もならず、世間の醫者に見放されて、みす〳〵命をうしなふものが定めて多いことであらうと、思ひ立つたる施し療治。唯今も申す通り、姪と弟子との三人暮しですらも思ふにまかせぬ身の上で、分にも應ぜぬことを企て、それがために、所々方々に借財かさみ、遂には姪のからだを金に換へることに相成りました。なにぶんにも世間見ずの不束者、よろしくおねがひ申しまするとご主人にもお傳へくだされ。

三次　委細承知いたしました。して、御當人はもうお支度が出來ましたか。

長庵　たつた今まで看病の手傳ひを致して、あまりに取亂して居りますので、髮などを掻きあげてゐるやうでござります。

三次　なるほど賣物に花とか申しますが、わたくしが目利きをして御世話をいたしたお梅さん、どんな散し髮でお出でなすつても、立派に目見得は濟みますから、その御

心配には及びません。

長庵　目見得が相濟みましたれば、身の代金(しろきん)をお渡し下さるでござらうな。

三次　それは間違ひはございません。五十兩のうちで御當人の身附が三兩、それからわたくしの判料が五兩、双方差引いて四十二兩。それは御承知でございませうな。

長庵　承知して居ります。こちらも何分心急きでござれば、なるべくお早くお渡しをねがひます。

三次　それもわたくしが呑込んでをります。丁字屋の方へも譯を話しまして、明朝すぐにおとゞけ申しませう。

長庵　なにぶんお願ひ申します。

（下の方より駕籠屋ひとり出づ。）

駕籠屋　もし、三次さん。まだですかえ。

三次　今すぐだ、もう少し待つてくれ。

（駕籠屋は去る。時の鐘きこゆ。）

三次　もう六つでございますね。（催促するやうに云ふ）

長庵　お待たせ申してお氣の毒でござる。

三次　麹町から吉原まで二里はたつぷりございませう。

長庵　さうでござらうなあ。

（烟草入れを仕舞ひかける）

三次　さうでございますよ。

（三次は待ち兼ねてゐる。奥よりお梅は髮を綺麗に撫でつけ、着物を着かへ、小さき風呂敷づつみを持ちて出づ。）

お梅　どうもお待たせ申しました。

三次　大層お綺麗になりましたね。おせき立て申すやうですが、もう日も暮れますから。（玄關に出る）

お梅　（長庵に）をぢ樣。では、行つてまゐります、（手をつく）

長庵　（ぢつとなる）では、氣の毒だが行つてくれ。

お梅　どうぞおからだを御大切に……。

長庵　おまへこそ身體を大事にしてくれ。忙しいなかで調合して置いた合藥(あひぐすり)、あれで當分の用は足りるであらう。無くなつたらば使をよこせ。すぐに調合してやる。良仙、良仙。

良仙　はい、はい。（奥より出づ）

長庵　お梅に持たせてやる藥を出してくれ。

良仙　はい、はい。（棚より藥づつみを取りてお梅の前に置く）

お梅　では、いたゞいてまゐります。

（良仙は手傳ひて、その藥づつみを風呂敷につゝむ。）

お梅　良仙さん、あとを何分おたのみ申します。

良仙　こちらの事はかならず御心配なさるな。

お梅　わたしがゐなくなつたら、おまへひとりで嘸ぞ忙し

いことであらうと、今から察して居ります。

良仙　わたしは若い者、働くのはどんなにでも働きませうが、おまへがこゝの家にゐなくなつたら、あしたからどんなに寂しいことであらう。（これもぢつとなる）

三次　（外にて）もし、まだですかえ。

お梅　はい、はい。唯今まゐります。

（三次は下の方にむかひて招けば、駕籠舁ふたりは駕籠をかつぎ出づ。お梅は無言にて再び長庵に挨拶する。長庵も無言にてうなづき、二人は顏を見あはせて又もやぢつとなる。）

三次　もし、お早く願ひますよ。

良仙　（お梅の風呂敷づつみを持ちて玄關に出る）まあ、そんなに急がずともよからうに……。

三次　だつて、お前さん。吉原までは……。（大きく云ふ）

良仙　（あわてゝ）叱つ、叱つ。

長庵　遲くなつても惡からう。早く行け。

お梅　はい。

（お梅は思ひ切つて起ちかゝり、風呂敷づつみが無いので見まはしてゐると、良仙はこゝに持つてゐると見せる。お梅は會釋してうけ取る。）

良仙　（包みを渡しながら）からだを大事にしてください。

お梅　かへすがへすもあとを頼みましたぞ。

（良仙は無言にてうなづく。）

三次　（良仙に）もし、履物がないぢやありませんか。

良仙　おゝ、さうであつた。

（良仙はあわてゝ奥に入る。長庵は矢はりぢつとうつむいてゐる。）

三次　仕様がねえな。山の手の人間は氣が長えから厭だ。

お梅　（氣の毒さうに）どうもお待遠でござりますな。

（お梅は引返して奥へ行かうとする時、奥より良仙は草履を持ちて出づ。）

お梅　どうも憚りでござりました。

（良仙は草履を直し、お梅は草履をはきて表に出る。駕籠屋は提灯の火をつけようとする。）

三次　（焦つたさうに）お前達も早く燈火をつけて置くがいゝぢやあねえか。六つが鳴りやあ夜の分だ。氣がきかねえな。

（駕籠屋は蠟燭をつけ終りて、お梅は駕籠に乘る。この時、下のかたより千太郎うかゞひ出で、つかつかと駕籠のそばへ來る。）

千太郎　お梅さん。駕籠屋さん達の話を聞けば、おまへは吉原へ……。

お梅　もう隱しても隱されぬ。わたしはこれから吉原へ……。

千太郎　して、その身請りの金高は……。
お梅　五十兩でござります。
千太郎　そんならその五十兩の金さへあれば、吉原へ行かずとも濟みますかえ。
三次　おつと不可ねえ。今になつてそんなことを云つたつて始まらねえ。出先きの邪魔をしねえで退いておくんなせえ。
千太郎　では、五十兩の金を償ひましても……。
三次　いけねえ、いけねえ。なるほど親許身請けといふこともあるが、そりやあ三日でも店へ出した上のことで、五十兩は現錆いて、百兩の金をこゝへ積んでも、一旦賣り込んだ年季公人をこのまゝ追つ放してしまつちやあ、丁字屋の店へ對してこの引人の面が立たねえ。身うけの掛合がしたけりやあ、吉原の方へ行つて何とでも相談を付けなせえ。こゝでかれこれ因縁を付けられちやあ私が迷惑だ。（駕籠屋に）おい、かまはねえから早く遣つてくれ。
（駕籠屋は垂簾をおろして駕籠をかき上げる。千太郎はその棒端にまはりて遮る。）
千太郎　もし、それではどうでもなりませんか。
三次　わからねえ人だな。いけねえと云ふのに……。（千太郎を手あらく突き退ける）

お梅　（垂簾をあげて）もし、千太郎さん。おまへの御深切は身にしみて嬉しうござりますが、もうかうなつては是非もないこと、止めずに遣つてくださりませ。
千太郎　でも、どうもこのまゝには……。
（又寄らうとするを、三次は焦れて突き倒す。）
三次　うるせえ野郎だ。執拗く邪魔をするとぶちのめすぞ。
（三次は腰にさしたる矢立をふり上げる。良仙はあわてゝ玄關より駈けて出る。）
良仙　もし、三次さん。無法なことをさつしやるな。
三次　なにが無法だ。この野郎が判らねえことを云つて、出さきの邪魔をするからのことよ。
良仙　それにしても穩かに云へば事は濟む。そんなものを振りあげて疵でも付けたら唯では濟むまい。第一こゝで立騷がれてはこゝの家でも迷惑しますぞ。おまへこそよつぽど判らない人だ。
三次　（むつとして）何が判らねえんだ。それぢやあお前もこいつの肩を持つてわつしに因縁を付ける氣かえ。むゝ、判つた。みんなが一緒にぐるになつて、この身賣にこだはりを付けようと云ふのか。むゝ、面白え。遣れるものなら遣つてみろ。おれも花川戶の早業三次だ。素人の手前たちに眼つぶしを食ふやうな、そんなどぢな大哥さんぢやあねえんだ。惡くごた付きやあがると、片つぱ

しから襟つ首をひつ掴んで、名主の玄關へしよ引いて行くからさう思へ。さあ、野郎。手前から來い。（千太郎の襟髮をつかむ）

良仙　（三次をさゝへる）それ、それが無法と云ふものだ。こつちはみんな眞人間、名主の玄關などへ行くおぼえはないぞ。

三次　おぼえがなければ引込んでゐろ。

（振拂はうとする機に、矢立で良仙の額を打つ。）

良仙　（額をおさへる）や、なんでわたしを打つたのだ。

三次　手が障つたのだから仕方がねえ。出る杭打たれるとは、そのことだ。

良仙　こいつ、もう料簡が……。

（良仙は三次の腕をとらへると、三次は千太郎をつき放して、良仙とむしり合ふ。千太郎はそれを引き分けようとする。お梅は駕籠の中ではら／＼してゐる。駕籠屋ふたりも三次に加勢し、息杖をふり廻して良仙と千太郎を打たうとする。五人は捨臺詞にて入りみだれて爭ふ隙に、長庵は奥より出づ。）

長庵　はて、さう／＼しい。どうしたことでござるな、はて、まあ、靜かになされと云ふに……。（表へ出て、五人を取鎮める）門前で立騷がれては近所の手前、はなはだ迷惑いたす。良仙も鎮まれ。千太郎どのもお控へなされ。三次どのはお梅を連れて早くおいでなされ。

三次　誰が好んでぐづ／＼してゐるものか。ぢやあ、長庵さん。御免なせえまし。（千太郎と良仙を見かへりて）ざまを見やがれ、ぼくねん人め。

（三次は先に立ち、駕籠屋はあとにつゞいてゆく。）

良仙　さりとは忌々しい奴だ。

長庵　構ふな。かまふな。世間に知れては互ひの恥だ。千太郎どの、お梅がよし原へまゐつたことを必ず世間へ御吹聽くださるな。さる御屋敷へ御奉公につかはしたと近所には申しておく筈なれば、なにとぞお含み置きを願ひますぞ。

千太郎　はい、はい。決して他言はいたしません。

長庵　良仙。お梅がゐなくなつたれば、今夜から二人前働いて貰はねばならぬ。奥の病人を油斷なく見まはつてくれ。

良仙　かしこまりました。（急いで奥に入る）

長庵　千太郎どの。こなたに少し御相談いたしたいことがある。鳥渡這入つてくださらぬか。

千太郎　はい、はい。

（長庵は先に立つて、千太郎はつゞいて内に入る。）

長庵　さて御相談と申すはほかでもござらぬが、唯今これにて聞いて居つたら、こなたは判人の三次にむかつて、

お梅の身の代五十金を償ふやうに申されたが、親がかりのこなたに其金の工面がなりますかな。

千太郎　さあ、おつしやる通りの親がかりで、五十両は扨措き、十両の工面も思ふやうにはまゐりません、一生懸命になりましたら何とか工面もならうかと存じます。

長庵（思案して）ほんたうに其工面がなるならば、どうかその五十金を手前にお貸しくださらぬか。

千太郎　え。

長庵　長庵はまたこの上に幾らでも金が欲しうござる。お梅の身うけよりも、差當つて救はねばならぬ大勢の人命をかゝへて居ります。仁術を施すにも先立つものは金。くどうは申さぬ。お察しくだされ。

千太郎　さあ。（これも思案する）

長庵　お梅の身の代ならば貸してもよいが、長庵を救ふ爲、いや、諸人を救ふためには、その金を貸されぬと云はれるのか。

千太郎（迷惑して）さういふわけでもございませんが……。

長庵　貸されませぬか。

千太郎　さあ。

（千太郎はいよ／＼困つてゐる。奥より良仙は行燈を持ちて出づ。）

良仙　先生。あの由松といふ子供は、いよ／＼むづかしうございます。

長庵（眉をよせる）どうしても助からないかなう。

良仙　それからあの二階のおみよといふ娘も……。

長庵　あれもむづかしいか。

良仙　どうも見込みは無さゝうでございます。

長庵（嘆息する）あゝ、どれもこれも困つたものだ。もう一度行つて見るとしよう。

（長庵は早々に起つて奥に入る。良仙は行燈をとぼす。）

千太郎　そんなにむづかしい病人が澤山あるのでございますか。

良仙　七人引き取つてある子供のなかで、ひとりは昨日死にました。ほかにむづかしいのが二人あるので、先生も心配して居られます。

千太郎　それはお察し申します。それもみんな施しの御療治でございますか。

良仙　みんな貧乏人の子供ばかりで、藥代は勿論、食扶持さへ一錢も受取らないことにして居ります。

千太郎　左樣でございますか。（感心すると同時に、なんとなく居辛くなりて）お忙がしいところを何時までも御邪魔いたしてゐるのも如何、わたくしはもうこれでお暇

申しませう。
良仙　御用はもうお済みになりましたか。
千太郎　さあ。いえ、いづれ又あらためて伺ひます。
（千太郎は挨拶して、逃げるやうに表に出で、足早に下のかたに立去る。）
良仙　（見送る）なんだかひどくそは〳〵してゐるやうだ。（縁に出て溜息をつく）あゝ、もう暗くなつた。おれも今夜はさびしいなあ。
（行燈をまん中に据ゑる。奥より長庵は羽織をぬぎて出づ。）
長庵　良仙。残念だ。由松はたうとう息を引取つてしまつた。
良仙　所詮むづかしいとは存じましたが、残念でございますな。して、二階のおみよの方はどうでございませうか。
長庵　あれもむづかしい。早く行つて両方の親たちに知らせて来い。
良仙　はい、はい。
（良仙はあわたゞしく奥に入る。長庵は行燈をよきところに直して、良仙が刻みかけたる薬をきざみ始める。下のかたより以前の番頭金兵衛足早に出づ。）
金兵衛　（忙がはしく）ごめん下さい。

長庵　どうれ。（玄関に出る）おゝ、金兵衛どの。また見えられたか。
金兵衛　先刻こちらへまゐりました時に、風呂敷づつみを忘れて帰りましたのを、途中でふつと気がつきまして、急いで取りに戻りました。
長庵　風呂敷包み……。そんなものは見当りませぬが……。
金兵衛　（急いて）いえ、たしかにこちらへ忘れて行つたに相違ございません。たしかにそこらへ……。（奥をのぞく）
長庵　うたがふならば探して御覧なされ。
（金兵衛は無言にて長庵のあとに附き、そは〳〵して内に入りて、頻りにそこらを見まはす。）
長庵　ありましたか。
金兵衛　いえ、見えません。確かにこゝの家に相違ないのだが……。（そこらをきよろ〳〵見まはしてゐる中に、やがて床の間の風呂敷づつみに眼をつける）ありました、ありました。これでございます。
長庵　（初めて心づく）なるほどこゝに……。では、わたしの知らぬ間に、良仙が片附けて置いたとみえます。兎もかくも無事に見附かつて結構でござつた。
金兵衛　わたしもやう〳〵安心しました。これをなくしたが最後、再び主人の家へは帰られませんので、どんなに

心配いたしましたか。(手拭を出して汗をふく)

長庵　それほど大切の品でござるか。

金兵衛　四谷から赤坂の方へ駈けを取りあつめにまゐりまして、この包みには百兩あまりの金を入れてございます。

長庵　百兩あまり……。それほどの大金をなぜしつかりと肌につけて置かれぬ。こなたにも似合はぬ、不用心のことではないか。

金兵衛　一分や二分もまじつてゐて、たにぶんにも懐ろが嵩ばりますので……。

長庵　それもさうだが、手で持ちあるくと自然からした粗相も出來る。他の品とは違つて金子のことでもあれば、萬一不足して居つたなどと云はれては、手前もはなはだ迷惑いたす。こゝで一應あらためて行かれい。

金兵衛　はい、はい。(風呂敷づつみを解きかゝる)

長庵　さつきは奥御が立騒いだので、碌にお茶も差上げなかつた。(茶道具を引きよせる)

金兵衛　路を急いでまゐりましたので、喉が渇いてなりません。相濟みませんがお茶でもお湯でも一杯頂きたうございます。

長庵　承知いたした。唯今あつい湯を入れ換へてまゐります。

(長庵は茶碗を持ちて奥に入る。金兵衛は風呂敷包みのなかより大きい財布をとり出し、一兩の封金や二分一分の銀などざら／＼振ひ出して、丁寧にかぞへてゐる。火の廻りの拍子木の音きこゆ。)

金兵衛　や、二分金が一つ足りない。あの弟子坊主めが、ちよろまかしたかも知れないぞ。

(金兵衛は眼を皿にして再び數へはじめしが、やがてほつと息をつく。)

金兵衛　あつた、あつた。やれ、やれ、これで安心した。今夜は厭に生暖かくなつて來たな。

(金兵衛は手拭で額をふいてゐる。奥より長庵は茶道具をのせたる盆を持ちて出づ。)

長庵　生憎に湯が沸いてゐないので、お氣の毒でござる。

金兵衛　いえ、ぬるいので結構でございます。

(長庵は茶をついで出す。金兵衛は頂いて飲む。)

長庵　金子の數は揃つて居りましたか。

金兵衛　はい、はい。些とも不足はございません。

長庵　それはお互ひに仕合せといふもの。たとひ一錢不足いたして居つても、厭な思ひを致さなければならぬ。

金兵衛　まつたくでございます。まして此金をみんな失してしまひましたら、どうしようかと思つて居りました。

長庵　して、こなたは何時に宿を出られた。

金兵衛　午をたべまして、すぐに出ました。

長庵　それからまだ一度も店へは歸られぬのか。

金兵衛　これからそれへと駈けあるいて居りまして、一度も店へは歸りません。

長庵　日が暮れてから大金をかゝへ歩いてゐては物騒。もう好加減に戻られたら何うだな。

金兵衛　もう一軒廻りましたら……。(うと〳〵する)まつすぐに家へ……。今度こそは眞直に歸ります。

長庵　もう一軒、なか〳〵慾が深いな。

金兵衛　でも、先生……。それがわたくしどもの商賣でございます。……はて、これは不思議。なんだか無暗に睡くなつてまゐりました。

長庵　あまり駈けあるいたので草臥れたのでござらう。

金兵衛　さうかも知れません。(愈〻うと〳〵して疊に手をつく)それに……ゆうべは……遲くまで……帳合をして居りましたので……。あゝ、いゝ心持になつてまゐりました。先生……。

(長庵は默つてゐる。)

金兵衛　先生……。どうも失禮……。あゝ、いゝ心持に……。あゝ、睡い。

(金兵衛はうと〳〵して遂に倒れる。長庵はそれをぢつと見つめてゐたりしが、やがて徐かに聲をかける。)

長庵　金兵衛どの。うたゝ寢をして風をひいては惡い。金兵衛どの、金兵衛……。

(金兵衛は正體もなしに倒れてゐる。長庵はしづかに起つて表をうかゞひ、更に金兵衛のそばへ進みよりて彼の風呂敷包みを引きよせ、もとの床の間に置く。この時、奥の襖をあけて良仙出づ。)

良仙　唯今戻りました。(金兵衛に眼をつける)や、堺屋の番頭めが又まゐりましたか。

長庵　金兵衛はよく睡つてゐる。

良仙　睡つて居りますか。

(良仙は腑に落ちぬ樣子にて、金兵衛のそばへ行きてその顏をのぞく。長庵は引き起してみろと頤で知らすれば、良仙はまだ不審の體にて金兵衛をかゝへ起す。長庵は行燈を持ち出して、立つたるまゝにて金兵衛の顏をぢつと見る。火のまはりの拍子木の音きこゆ。)

——幕——

第二幕

一

麹町通りの自身番。普通の二重屋臺にて上のかたに大いなる杉戸の出入口あり。下の方は壁にて、その前に爐を切りて大きい茶釜がかけてあり。屋臺の前は低き

板の間になつてゐる。下の方は臺所のこゝろにて腰高の障子二枚を閉めてあり。上のかたには半鐘をかけたる火の見梯子あり。ずつと下のかたは町家の建物みゆ。

（前の幕の翌朝、二重屋臺の上のかたに八町堀同心空積平四郎は黒の羽織、着流し、下の方に町役人六右衛門は羽織袴にて坐り、板の間の上の方には堺屋の亭主清兵衛、五十餘歳の町人にて控へ、下のかたには伊勢屋の伜千太郎、おなじく番頭惣七が控へてゐる。板の間の前には筵をかけたる死骸を横へ、そのかたはらには岡つ引政八と香太郎杢助が控へてゐる。下のかたには自身番の定番善吉と下番銀藏が控へてゐる。すこし離れて上のかたには町人、娘、子供等五人、下の方にも四五人たゝずみて覗いてゐる。城の太鼓きこゆ。）

平四郎　店のさきに人立がするぞ。追つ拂つてしまへ。

（政八、杢助、善吉、銀藏はたちあがる。）

政八　さあ、往來ならば早く通れ。それとも貴樣達はこの死骸の見知人か。うつかりしてゐると飛んだ引合を食ふぞ。

杢助　さあ、さあ、早く行かつしやい。

善吉 銀藏　見るもんぢやあない。行つた、行つた。

（四人に追ひ散らされて、町人等は左右に逃げ去る。）

平四郎　堺屋の亭主清兵衛は其方か。

清兵衛　はつ。

平四郎　番頭金兵衛はきのふの何時に店を出た。

清兵衛　ひるを喫べますとすぐに店を出まして、それぎり戻つてまゐりませんので、どうしたかと心配いたして居りますと、いつの間にか斯樣な姿と相成りましてございます。（死骸を見かへる。）

平四郎　奉公中に別に越度もなかつたか。

清兵衛　十一の年からわたくしの店に奉公いたして居りまして、これまでなんの越度もなく、無事に勤め通して居りました。

平四郎　他人に遺恨をうけるやうな覺えもないな。

清兵衛　さやうな心あたりもございません。

政八　堺屋の番頭は因業だといふ評判で、湯屋でも二三度なぐられたと云ふぢやあありませんかえ。

清兵衛　その因業と云はれるのも、つまりは店を大事に思ふからのことで、生れ付いての正直者、人に命を取られますやうな、そんな覺えは決してございません。それはこの清兵衛が御役人樣のまへで立派にお請合ひ申します。

平四郎　金兵衛は懷ろに金でも持つてゐたか。

清兵衛　赤坂から四谷の方へ、自身に集金を取立てに出ましたれば、多分百兩あまりの金を所持してゐたかと存ぜ

られます。
平四郎　（政八に）　死人の懐ろに金はあつたか。
政八　いえ、財布は空つぽになつた居りました。
平四郎　さうか。（うなづく）　伊勢屋のせがれ千太郎。
千太郎　はつ。
平四郎　おやぢの五兵衛はなぜ附添ひで出て來ねえのだ。
惣七　はつ。御役人様に申上げます。主人五兵衛は折惡しく病氣で臥せつて居りますので、番頭のわたくしが名代として罷り出ましてござります。
平四郎　よし、それぢやあ主人に代つてなんでも返事をしろ。
惣七　はつ。
平四郎　醫者はまだ來ねえか。
六右衛　すぐ近所の村井長庵と申す町醫者をよびに遣りましてございますから、やがて參るでございませう。これ、李助。
李助　はい、はい。
六右衛　御役人様がお待兼ねだ。もう一度平河町へ行つて催促して來い。
李助　かしこまりました。
（李助は起つて下の方へゆく。平四郎は懐ろより袱紗につゝみたる十手を把り出す。）

平四郎　（十手を膝に突いて）　千太郎。もつと進め。
千太郎　はつ。
平四郎　其方はゆうべ何處へ行つた。
千太郎　はつ　（云ひそびれてゐる）
平四郎　（すこしく聲を暴くして）　はつきりと物を云へ。ゆうべはどこへ行つたよ。
千太郎　はつ。
平四郎　年始や悔みに來たのぢやあねえ。たゞむやみに頭ばかり下げてゐるな。正面を切つて返事をしろ。くどくも云ふやうだが、其方はゆうべどこへ行つて、夜ふけに平河天神の裏門前を通つた。それを確かに申立てろ。
千太郎　はつ。
惣七　（見かねて進み出づ）　恐れながら申上げます。若主人千太郎は親類に急病人がございまして、それを見舞ひにまゐりましたので、歸りがつい遲くなりましたのでございます。
平四郎　して、その親類といふのはどこの誰だ。
惣七　あの、神田でございます。
平四郎　神田の誰だ。
惣七　神田三河町の尾張屋源兵衛でございます。
平四郎　千太郎、それに相違ないか。
千太郎　相違ございません。（恐る／＼手をつく）

六右衛　千太郎さん、かう云ふ時になんでも正直に申上げるが第一でござりますぞ。

政八　おまへさんもう一人前の若い衆だ。いくら御役人の前だからと云つて、おこ付いてゐちやあ埒があかねえ。はき／＼と物を云はねえと叱られるぜ。

千太郎　はい。

平四郎　して、千太郎はどこでその死骸を見つけた。

千太郎　やはり天神様の裏門前でございます。家の近所までまゐりました時に、生憎に提灯の火を消してしまひまして、探るやうに暗やみを辿つてまゐりますと、思はずつまづきましたのは其死骸でございました。

清兵衛　して、その時にはもう息がございませんでしたか。

千太郎　初めにはそれとも気がつかずに、急病人か生酔かとかゝへ起せば冷たい死骸で、わたくしはぞつと致しました。あまりの怖さに一旦はそのまゝ逃げ出さうかとも存じましたが、自分がそれを見つけた以上、兎もかくもお届けをしなければならないと、すぐに其足でこの自身番へ駈付けましたのでございます。

平四郎　その申立てに嘘はないな。

千太郎　決して嘘いつはりは申上げません。あとでそれが藤屋の番頭さんと判りまして、わたくしはいよ／＼びつくり致しました。

政八　それでどうにか辻褄が合つて来ました。（平四郎の顔をみる）

惣七　わたくしどもの申立てが嘘かほんたうか、藤屋の方をお調べくだされば判りませうかと存じます。

平四郎　（叱る）　余計な指図をするな。

惣七　はつ。

（下のかたより村井長庵は羽織着流しにて一刀を指し、杢助に案内されて出づ。）

杢助　お医者様をお連れ申してまゐりました。

六右衛　長庵どの。御苦労でござりました。

長庵　早速に出ます筈のところ、生憎に急病人がございまして、つい／＼遅刻いたしました。（平四郎に。）御出役、御苦労に存じます。

平四郎　御苦労はおたがひだ。早速ながらそこにある死骸を一應あらためてくれまいか。

長庵　心得ました。

（若吉と銀蔵を見かへれば、二人はそこにある死骸の蓆を取りのける。長庵は進み寄りて小膝をつき、徐にその死骸を見ておどろく。）

長庵　おゝ、これは藤屋の番頭どのではござらぬか。

清兵衛　いかにも手前の店の番頭久兵衛、昨晩天神様の裏門前で、かういふ浅ましい姿になつて倒れて居りました。

長庵　それは思ひもよらぬことでござつた。なにか急病ででもござつたのか。

清兵衞　さあ、急病か人手にかゝつたのか、それはまだ確かには判りませんが、御役人樣の御覽なされたところでは、どうも急病ではあるまいとの事でございます。

長庵　急病ではない（首をかしげる）それは容易ならぬこと、手前が篤とあらためるでござらう。しばらくお待ちくだされ。

（長庵はうしろ向きになりて丁寧に死骸をあらためる。人々も息をつめてこれに眼をつけてゐる。長庵はやがて死骸をあらため終れば、善吉は手洗を持ち來りて、柄杓の水を長庵の手にかけてやる。長庵は手を洗ひて、懷紙にてしづかに拭く。銀藏は再び死骸に筵をきせる。）

平四郎　長庵の見立てはどうだな。

長庵　は。さすがは御役人、お目の高いには恐れ入りました。これは尋常の病死ではござりませぬ。たしかに變死でござります。

平四郎　さうであらうな。

六右衞　やはり變死でござりましたか。

（皆々は顏を見あはせる。）

政八　からだには何處にも疵所はねえやうだが、なにか變死といふ確かな證據がありますかえ。

長庵　（しづかに）勿論、死人のからだには打傷切傷突傷などの跡はござりませぬ。さりとて絞め殺したものとも見えませぬ。これは確かに毒藥を飲んだものかと思はれます。

清兵衞　え、毒藥……。

長庵　左樣でござる。普通の毒藥ならばおびたゞしく吐血するか、さなくば總身の色が變るか。目前に何かのしるしを現すが習で、たれの眼にもすぐにそれと覺られますが、世におそろしいは南蠻秘法の毒藥、それを適度に調合いたすときは、苦みもなく、痛みもなく、吐血も致さず、肌の色も變らず、唯そのまゝに眠るが如く往生いたす。

（皆々は再び顏を見あはせる。）

長庵　この金兵衞どのも正しくその毒藥を飲んだものと見えますが、おのが手で飲んだか、他人に飲まされたのか、それは勿論判りませぬ。そこどころは宜しく御詮議をねがひます。

平四郎　むゝ。それで委細相判つた。金兵衞は藥種屋の奉公人、そのやうな藥を知つてゐたかも知れぬ。これ、清兵衞。その方の店には其藥があるか。

清兵衞　おたづねでございますが、わたくし共の店には、

南蠻祕法の毒藥などといふ、左樣なおそろしいものを貯へては居りません。もし胡亂と思召しますれば、店は勿論、土藏の隅々まで何とぞお檢めをねがひます。

平四郎　勿論のことだ。第一にその金兵衞が他人に毒を飮まされたのか・わが手で毒を飮んだのか、その詮議が肝心だ。引合の者一同、きつと吟味をしなければならぬぞ。

千太郎　では、わたくし共もこのまゝには……。

平四郎　歸すことはならぬと思へ。

千太郎　はつ。

平四郎　長庵には構ひない。勝手に引取るが可いぞ。

長庵　然らばこれで御免を蒙ります。(起ちかけて)堺屋の御主人。番頭どのはいつ頃お店を出られましたな。

清兵衞　丁度九つ頃でござりました。

長庵　手前の宅へまゐられたのは、やがて暮六つ頃……。なんでも四谷赤坂邊へ懸けを取りあつめに行かれたとか申して居られたが……。

清兵衞　お宅へもあがりましたか。

長庵　たしかに參られた。懸けを取りあつめに行かれたと云ふからは、懐ろには相當の金を所持して居られたでござらうな。

清兵衞　百兩あまりを持つてゐたかと存じます。

長庵　して、その金は死人の身に着いて居りましたか。

清兵衞　財布は空になつてゐたと申すことでございます。

長庵　ふむう。(眉をよせる)して見れば、番頭どのは物取りに出逢つたか、あるひはその金を使ひ捨てゝ、申譯なさに自殺したか。いや、御役人衆の前でわれ〳〵が左樣なことを申すべきではござらぬ。どなたも御免くだされ。

(長庵は一同に會釋して、しづかに下の方へゆきかゝる時、大岡越前守の家來石子伴作、三十餘歳、市中見廻りの途中、仲間ひとり召連れて來かゝり、すれ違ひながら長庵に眼をつける。長庵も伴作の顔をじろりと横目に見て、そのまゝ悠々と立去る。伴作は自身番の前に來る。)

伴作　(平四郎に)早朝の出役、何事でござるな。

平四郎　(起つて店の前に降立つ)平河天神の裏門前に斯樣な變死人がござりました。

伴作　(死骸を見かへる)なに、變死人……。それは容易ならぬこと。して、その調べは屆きましたか。

平四郎　南蠻祕法の毒藥を飮んだものと判りましたが、自殺やら毒殺やらまだはつきりとは判りませぬ。

伴作　南蠻祕法の毒藥。(眉をよせる)それは不思議の變死人でござるな。

(伴作は眼にて指圖すれば、仲間は心得て死骸の蓙を取除けて見せる。伴作は立寄つて見とゞけようとする

時、下のかたより久八の妻お咲、三十前後、古着屋の女房のこしらへ、伊勢屋の小僧が附添ひて足早に出づ。）

小僧　おかみさん。自身番はそこですよ。

お咲　あい、ありがたう。（自身番の前に來る）おゝ、若旦那。惣七さんもそこにおいでゞしたか。

惣七　久八さんのおかみさんか。どうしてこんな所へ來なすつた。

お咲　四谷の方まで少し用がありましたので、そのついでに御無沙汰の御詫ながら、通町のお店へうかゞひますと、なにか面倒な引合で若旦那は自身番に呼び出されたといふお話に、わたくしもびつくり致しまして、鳥渡その御樣子を見にまゐりました。

惣七　いや、心配しなさることはない。ほんの一時の引合で、すぐに濟むのは知れてゐるのだ。

お咲　それなら宜しうございますが……。

（お咲はほつとしたやうに其邊らを見まはしてゐる。）

平四郎　貴樣はなんだ。

お咲　はい。（ひざまづく）わたくしは伊勢屋樣のお店に長年御奉公いたして居りました、久八と申す者の家内でございます。久八はお店を無事に勤めあげまして、唯今では淺草の山の宿に小さい古着屋渡世をいたして居ります。うけたまはりますれば、そちらの堺屋さんの番頭さんが天神樣の裏門前に死んでゐたのを、若旦那樣が見つけたとか申すことでございますが、千太郎樣にかぎりまして決してそんな事にかゝり合のあるやうなお方ではございません。お小さい時分から蟲も殺さないやうな、それは、それは、おとなしいお生れ付で……。

平四郎　えゝ、べら〳〵と饒舌る女だ。貴樣に用はない。引込んでゐろ。

お咲　ではございますが、ほかの事とは違ひまして、かりにも人殺しの引合とございましては、どうも心配でなりません。手前の若旦那に限りましては……。

平四郎　まだ饒舌るか。うるせえ奴だ。ぐづ〳〵云つてゐると引つぱたくぞ。

（平四郎は十手を把りて立寄らうとするに、千太郎は見かねて板の間より走り出で、二人のあひだに割つて入る。）

千太郎　もし、お役人樣。わたくしが代つて御詫を申上げます。ふだんから利かない氣の女。つい取亂して失禮をいたしまして、重々恐れ入りましてございます。

惣七　お咲さんも好加減に默るが可い。主思ひの主倒しとやらで、却つて若旦那のお爲にならないぞ。

お咲　はい。

(惣じに眼で訓されて、お咲は餘儀なく控へる。千太郎はしきりに平四郎に詫びてゐる。このうちに伴作は死骸をあらため終りて向き直る。)

伴作　何かさう〴〵しい。(平四郎に)　その女は何者でござるな。

お咲　はい、はい。そちらの御役人樣に恐れながら申上げます。わたくしは伊勢屋樣のお店に長年御奉公いたして居りました、久八と申す者の家内でございまして……。

千太郎　はて、もう判つてゐるといふのに……。

(千太郎はぱら〳〵しながらお咲を宥めてゐる。)

お咲　うけたまはりますれば、そちらの堺屋さんの番頭さんが……。

平四郎　えゝ、おなじことを幾度も云ふな。

伴作　いや、云ふだけのことを云はして置かれい。(お咲に)　さあ、わしがこれから何んでも聞いて遣る。心をおちつけて靜に申せ。

お咲　ありがたうございます。

(伴作は草履をぬぎて二疊に上る。一同はあらためて手をつく。)

二

村井長庵の家。道具は前の幕におなじ。

(下のかたより早乘三次出づ。)

三次　(表にて)　御免ください。御免下さい。

良仙　(奥にて大きくいふ)　どうれ。

三次　弟子坊主め。野暮に大きな聲をしやあがるな。

(奥より良仙はそは〳〵しながら出づ。)

良仙　おゝ、三次さんか。先生はおまへの來るのを今朝から待つてゐられた。

三次　大方そんなことだらうと思つて出て來ましたのさ。まあ、御免なせえ。(内に入る)　なんだかひどくそは〳〵してゐなさるが、どうかしたのかえ。

良仙　いえ、なに……。こつちのことよりも、三次さん。あれからお梅さんはどうしました。

三次　とゞこほりなく目見得も濟んで、小夜衣といふ源氏名をつけられて、近いうちに店へ出ることになりましたよ。

良仙　では、もう近いうちにお梅さんは勤めに出るのか。

三次　年は若し、容貌は好いから、初店から乾度賣れるだらうと主人もよろこんでゐましたよ。まあ、安心おしなせえ。

良仙　(腹立たしげに)　なにが安心が出來るものか。

三次　だつて、お前。どうせ勤めに出る以上、お茶挽ぎぢやあ詰まるめえぢやあねえか。

良仙　して、その丁字屋へ遊びに行くには、幾らぐらゐ金がいりますね。
三次　壹三といふ程でもねえが、酒肴から茶屋の祝儀、あはせて一兩二分ぢやあむづかしい。好い子にならうと思ふにやあ先づ二兩か三兩は持つて行かねえと氣が引けるな。
良仙　二兩か三兩……。（かんがへる）よし原の遊びも隨分金がかゝるものだね。
三次　あたりめえさ。廿四文の夜鷹を買ふんぢやねえ。江戸のよし原の遊びだ。一兩や二兩の金はぽんと手をたゝけば飛んでしまはあな。
良仙　さうだらうな（又かんがへてゐる）
三次　お前さん。なにかえ、その小夜衣さんの花魁を買ひに行きたいのかえ。
良仙　え、別にさういふわけでもないが……。
三次　（笑ふ）赤い顔をすることはねえ。お前、こゝの家にゐる時からあの子をどうかしてゐたんぢやあねえかえ。
良仙　（眞面目に）飛んでもない。どうしてそんなことを……。
三次　（また笑ふ）それぢやあお前の方だけが片思ひか。どうだい、この占ひ者は上手だらう。はゝゝゝゝ。だが。もう斯うなりやあ賣物買物で、誰に遠慮することはねえ。先生の姪だらうが何んだらうが、玉さへ拂へば立派なお客様だ。景氣好くどし／＼遣んねえ。おれが好い引手茶屋を敎へてやらうか。
（この時うしろの襖をがらりとあけて長庵出づ。二人はおどろく。）
良仙　おゝ、先生。いつの間に裏口から……。
長庵　（微笑む）自分の家だ。裏口から歸ることもある。三次さん、世間しらずの良仙に好いことを敎へて下すつたな。
三次　え。
長庵　好い引手茶屋があれば、わたしも敎へて貰ひたいね。
三次　いけねえ、いけねえ。こいつは一番あやまつた。
（三次は頭をおさへる。良仙は極り惡さうに横向いてゐる。）
長庵　早速だが、三次さん。お梅の目見得は濟みましたか。
三次　今も話してゐるところですが、主人の方でも大喜びで、是非かゝへたいと云ふことに決まりました。ところで、その身の代金の一件ですが……。あゝして派手に暮してゐても、内證の苦しいのがお[illegible]の習ひで、丁字屋もあれだけの暖簾をかけてゐながら、やつぱり右から左には五十六十といふ纏まつた金が出來ねえので、どうかこゝ

の所を半月ばかり待つて貰ひたいと頼まれてみれば厭とも云はれず、わたくしも仲に立つてまつたく困つてしまひました。

長庵　それで約りがどうなりましたな。

三次　わたくしに取つては丁字屋も長年の出入先ですから、まんざら木で鼻をくゝつたやうな色氣のねえ返事も出來ず、と云つて手ぶらぢやあ此方へも來られず、こんな弱つたことはありませんよ。まあ、お察し下さいまし。

良仙　おなじ事ばかり云つてゐないで、早くあとを聞かして貰ひたい。そこで、丁字屋では半金も渡すと云ふことになりましたか。

三次　さあ、その半金もむづかしいので……。

良仙　え。（長庵の顏を見る）

長庵　（しづかに）三次さん。嘘をついては不可ない。どうでこゝへ來た以上、なぜ正直に物を云はない。もとより判人を商賣にしてゐるほどの人、おまへが堅氣でないことも判つてゐる。まして早乘りとかいふ綽名がついてゐるほどなれば、どうで正直でないことも知れてゐるが、それにしても事による。お梅を賣つた身の代金は、丁字屋からはもう受取つて、お前が中途で着服したのであらうが……。

三次　いえ、そんなわけぢやあ決してないので……。

長庵　いくら山の手に住む世間知らずでも、見え透いた嘘ではだまされまい。丁字屋へ行つて聞き合はせればすぐにも判ることだ。さあ、わたしと一緒にこれから吉原へ行つて貰ひませう。

（長庵は起ち上りて三次の手を把らうとする。）

三次　まあ。待つておくんなせえ。さうむきになつて嚇かしちやあいけねえ。丁字屋へ一緒に行くくらゐなら、かうして朝つぱらから山の手まで出て來やあしません。まあ、待つておくんなせえ。わつしがこれからほんたうに云譯をしますから。

長庵　どんな云譯があるか知らないが、肉身の姪を勤めに遣つて、云はゞ血の出るやうな金、それを中途で着服して、おまへの心に咎めないか。人間の道が立つと思ふか。

三次　だから、あやまりに來たんだ。もうかうなれば何も彼も正直に云ひますよ。

良仙　むゝ、正直に白狀しなさい。

三次　まあ、どの人もさう怖い顏をしちやあいけねえ。なんぼわつしが早乘三次でも、初手からその金を早乘る料簡ぢやあなかつたが、ゆうべこゝのお梅さんを吉原へ送りつけて、丁字屋から五十兩の金をうけ取つて、まつすぐに自分の家へ歸ればよかつたんだが、途中でちよいと一杯遣つて、その勢ひで駒染の屋敷の大部屋へ面を出し

たのが因果のはじまりで、張るとは取られ、張るとは取られ、つい其金が五兩減り、十兩減り、たうとうすつてんになつてしまつて、どうにも斯うにも仕樣がねえ。と云つて、だんまりで打つちやつて置いて、こつちから丁字屋の方へ掛合にでも行かれちやあ、いよ／＼事が面倒になると思つたので、度胸を据ゑて今日はあやまりに來ましたが、どうも初めから正直にも云ひ出しにくいので、まあちよいと出鱈目を云つたやうなわけで……。いづれ其内には何とかしますから、もう些とのところをどうか料簡しておくんなせえまし。おい、良仙さん。お前までが睨み付けてゐねえで、なんとか一緒に口を添へて、先生に取りなしてお呉んなせえな。

良仙　（素氣なく）と云つて、ほかの事とは違ふから、わたしに取りなしの仕樣があるものか。一體おまへが……。

長庵　まあ、良仙は默つてゐろ。時に二階の病人はどうしたか。ちよつと見て遣つてくれ。

良仙　おみよといふ子は所詮むづかしさうでございますな。

長庵　むづかしいな。だが、まあ預つてゐるうちは見殺しになるまい。

良仙　さうでございます。

（良仙は奥に入る。）

長庵　（調子を變へて）三次。

三次　え。

長庵　貴樣は惡い奴だな。

三次　へえ。

長庵　太い奴だな。

三次　へえ。

長庵　憎い奴だな。

三次　いや、もう、なんと云はれても仕方がねえ。わつしはこの通りあやまつてゐるんですよ。

長庵　はゝ、貴樣は見かけによらない善人だな。

三次　え。

長庵　正直な奴だな。

三次　え。

長庵　可愛い奴だな。

三次　（むつとする）なんだとえ。さつきから默つてゐりやあ可いかと思つて、むやみに上げたり下げたりしなさんな。俺あお前に可愛がられようと思つて、わざ／＼ここまで來たんぢやあねえ。惡いと思つたから、あやまりに來たんだ。それで料簡が出來ざあ勝手にしろ。憎いの可愛いのと、打つたり撫つたり、ひとを好い玩具にしやあがるな。さあ、小夜衣をよし原へ賣つた金は、たしかに俺が早乘つたに相違ねえ。どこへでも突き出すなら突

き出してくれ。（尻をまくる）

長庵　はゝ、大分強くなつたな。

三次　あたりめえよ。ひとを馬鹿にしやあがるな。

（三次は怒鳴る。この聲を聞きつけて、奥より良伯出づ。）

良伯　おまへはなんで大きな聲をするのだ。

三次　うつちやつて置け。おれの勝手だ。

良伯　お粂さんの身の代金を横取りして、こつちが素直に料簡すればよし、さもなければ何かのことを云ひがかりにして強面に嚇さうといふ下心、今度こそはもう堪忍がならないぞ。

三次　ゆうべにも懲りねえで、また横つ面をなぐられてえのか。おとなしく引込んでゐろ。

良伯　その殴られた返報をけふは屹と爲にやあならない。先生、こんな奴をそのまゝにして置きますと、世間の爲になりません。

長庵　まあ、騒ぐな。おまへは兎かく氣が短くてならぬ。まあ、わたしに任せて置け、これ、三次。貴樣は今までにもこんなことを度々したことがあるだらうな。

三次　しちやあ悪いかえ。

長庵　悪いとは思はないか。

三次　よくつても悪くつてもお前の世話にやあならねえ。

長庵　いけづう〳〵しいことを云ふな。現におれに迷惑をかけてゐるではないか。

三次　だから、かうしてあやまりに來たんだ。

長庵　あやまりに來たのではない。だましに來たのだ。それだから憎い奴だと云つたのが間違つてゐるか。しかし逃げ隠れもしないで、素直にこゝへ顔を持つて來た、そこを可愛いと褒めて遣つたのだ。まあ、むかつ腹を立てないで、これから時々に遊びに來てくれ。この通りの貧乏醫者、とても派手なことは出來ないが、細く長く附合はうではないか。

三次　おやあ、お前さん。わつしと友達附合をしなさる氣かえ。

良伯　馬鹿をいへ。先生がなんで貴樣のやうな奴を友達にするものか。積つて見ても知れたことだ。

三次　だつて唯つた今、自分の口からさう云つたぢやあねえか。もし、先生。又わつしに嬲つたのかえ。

長庵　いや、ほんたうのことだ。近附のしるしにこれを遣る。歸りに一杯飲んでくれ。

（長庵は懐ろの紙入れより金五兩を出して紙に乘せ、三次の前に押遣る。三次はそれを見てぎよつとする。）

三次　え、先生。お前さんこれを呉れるのかえ。

長庵　すくないが取つて置いてくれ。

良仙　もし。（長庵の袂をひく）

長庵　（かまはずに）三次。少なければもう少し遣らうか。

三次　嚇かしちやあいけねえ。朝つぱら狐に化されてゐるやうで、なんだか薄つ氣味が惡いな。え、先生。ほんたうにこれを吳れるのかえ。

長庵　むやみに先生々々といふな。現金な奴だ。

三次　ぢやあ、小夜衣さんの身の代金をわつしが遣ひ込んだのを堪忍してくれた上に、この金をお吳んなさるのかえ。これがほんたうに盜人に追錢で、お氣の毒ですね。

長庵　それを知つてゐるなら有難く思へ。

三次　ありがてえのを通り越して、なんだか不安心のやうでもあるが、まあ可いや。折角の思召だ。頂戴しやせう。先生、どうも有難うございました。（金をうけ取つて眺めてゐる）

長庵　木の葉や石塊でない。性の知れた金だ。安心してうけ取れ。

三次　はい、はい。（金を財布に入れる）

良仙　貴樣は運のいゝ奴だ。本來ならば首に繩の付くところを、あべこべに金を貰つて歸るとはかんがへれば考へるほどばか／＼しい。用が濟んだら早く歸れ。

三次　（にこ／＼して）さうがみ／＼云ふことはねえ。この先生とお友達になれば、お前ともこれから附合はなけりやあならねえ。どうだい、良仙さん。これからそこらへ行つて仲直りに一杯遣らうぢやねえか。

良仙　誰が貴樣なんぞと一緒に行くものか。そんな附合はまつぴら御免だ。

三次　おめえの云ふことは、一々尖んがつて色氣がねえ。ぢやあ、まあ、一人でぶら／＼歸るとしようか。

長庵　もう歸るか。

三次　いづれ又出直してうかゞひます。

良仙　えゝ、來なくつても可い。歸れ、歸れ。

三次　（起ちながら）先生。このお弟子はどうもわつしと犬と猿でいけねえ。これからもつと碎けて、仲よくするやうに、お前さんから意見しておくんなせえ。

（長庵は笑ひながらうなづく。良仙は矢はり素知らぬ顏をしてゐる。三次は玄關を出で、なんだか腑に落ちないやうな顏をして、財布の金を出して再びあらためにつこりしながら下のかたに去る。良仙はそつと起つて玄關口をうかゞひゐたりしが、やがて引返して來る。）

良仙　先生。

長庵　なんだ。

良仙　たとひ常談にもしろ、あんな奴と友達になるなどと、なぜあんなことを仰しやいました。あんな奴はそれをい

い事にして、これから煩さく参りませう。

長庵　來ても可い。あんな奴でも又なにかの役に立つことがあるだらうよ。

（長庵は矢はり笑つてゐる。良仙は不安らしく起ち上がりて再び表をうかゞひ、更に奥をうかゞひて、長庵のそばへ摺寄る）

良仙　（小聲で）先生。自身番へ呼ばれましたのは、矢はりあの一件でございましたか。

長庵　さうだ。堺屋の番頭の一件だ。お前があんまり臆病で、あの死骸を近いところへ捨てゝ來るから不可ない。（冷笑ふ）眼と鼻の天神の裏門前へ置いて來るとは何のことだ。

良仙　（身を顫はせる）でも、わたくしは怖ろしくつて、とても遠いところまで運んで行く力はございませんでした

長庵　お前もよくあの男と喧嘩をしたではないか。

良仙　彼奴まつたく因業な奴で、わたくしも殴りつけて遣らうとか思つたことは一度や二度ではございませんでしたが、それでも真逆に毒薬を……。わたくしも實にびつくり致しました。

長庵　南蠻秘法の眠り薬、一度眠つたら二度と眼をさますことのない異國傳來の毒薬、それを湯と茶にまぜて飲ませたら、あいつ安々と睡つてしまつた。はて、そんなに顔の色を變へることはない。お前も醫者ではないか。死人がそんなに怖ろしいか。

良仙　でも、普通の死人とは譯が違ひます。丁度今わたくしの坐つてゐるあたりに金兵衛が横になつて……。（思はず膝立になつて、そこらを見まはす）あいつが斯うなるのも自業自得、いゝ氣味だとも思ひましたが、その死骸をだん／＼ながめてゐるうちに、なんだか此方のからだも冷たくなつてまゐりました。ましてその死骸をかつぎ出して、どこへか捨てゝ來いと云はれた時には、なんぼ先生の御指圖でも、わたくしも途方に暮れました。さりとて何んとか結末を付けなければならないので、わたくしも一生懸命になりまして、夜のふけるのを待つて金兵衛の死骸を背負出しましたが……。いや、もう、そのお話は致しますまい。（あたりを見かへる）表に誰か聴いてゐまいものでも無し、たとひ子供にしろ奥には病人も居ります。第一わたくしも二度とそんなお話を致したくはございませんから。

長庵　おれも聞きたくない、止しにしろ。そこで自身番へ行つてみると、案の通り金兵衛の死骸が寝かしてあつた。

良仙　（あわたゞしく）それからどうなさいました。

長庵　どうするものか。型の通りに死骸をあらためて、これは南蠻祕法の毒藥を飲んで、睡るやうに往生したのでござりますと、役人の前で立派に云つて來た。

良仙　(おどろく)　先生。

長庵　しかし流石におれが飲ませたのだ……とは云はなかつたから、まあ安心するが可い。

良仙　それは勿論でございますが……。

長庵　ときに良仙。

良仙　はい

長庵　なぜ三次と一緒に飲みに行かなかつたのだ。

良仙　御承知の通り、わたくしは下戸でございます。ましてこの場合にあんな奴と……。

長庵　そんなに料簡を小さく持つな。(また調子を變へる)おれもこの商賣をはじめてから十五六年、自分では相當の腕を持つてゐる積りだが、運が悪いのか時節が悪いのか、いつまで立つても世間から藪扱ひにされてゐるのを、ふだんから忌々しいと思つてゐるところへ、去年の冬からの流行り病は、こつちに取つては丁度幸ひだ。あの金兵衛めの云つたに嘘はない。施し療治の看板で、自分の名前を賣り出さうと、おれも色々に骨を折つてみたが、なか〳〵元手がつゞかないで、どうにも斯うにも遣切れず、たつた一人の姪にたうとう身賣をさせる始末。それで済むならまだ我慢もなるが、こゝで四十や五十の金が這入つたところで、所詮四方八方が綺麗に片附くわけでも無し、おれもほと〳〵精根が盡きたところへあの金兵衛めが金財布を忘れて行つたのが運の盡きで、おれもたうとう鬼になつた。どうだ。良仙。まんざら無理でもあるめえが……。

良仙　(低い聲で)　はい。

長庵　いくら善い看板をかけても、世間が些とも構つてくれない。天も助けてくれさうもない。もう面倒だ。(玄關を指さす)　寧そあの施療の札を引つ剝してしまへ。

良仙　でも、急にそんな事をしましたら、世間にをかしく思はれますまいか。

長庵　いや、いつまでもこんな事をしてゐると、あの貧乏な長庵にどうして金がつゞくのかと、却つて世間から疑はれる。錢がねえから施しの療治はもう止めますと、いつそ正直に云ふが可いのだ。

良仙　成程それもさうでございますな。

(良仙は玄關に出で、施療の大きい札を外して、長庵の前に持つて來る。長庵はその札を手に取つてぢつと眺めてゐたが、やがて良仙の前になげ出す。)

長庵　思ひ切りよく叩つ毀して焚き附にしてしまへ。

良仙　はい。

長庵　（笑ひながら）　どうだ。よし原へ行つてみては……。

良仙　え。

長庵　三次が教へてやると云つてゐたではないか。和睦して丁字屋へ案内して貰へ。はゝ、隱すことはない。おまへには氣の毒であつたよ。

良仙　氣の毒と仰しやいますのは……。

長庵　おまへは正直者、ゆく／＼はお梅と一緒にして遣りたいとも思つてゐたが、運が惡くてこんな事になつてしまつた。お前のこゝろは察してゐる。

長庵　でも、お梅さんは伊勢屋の息子と……。

良仙　それもみんな知つてゐる。伊勢屋の息子のことなどは心配するな。勤めの中だけは散々だまさせて置いて、年があければ此方のものだ。それはおれの胸にある。

良仙　（不安らしく）　はい。

長庵　一旦は廓へ身を沈めても、お梅はおまへの女房だと思へ。

良仙　はい。

（下のかたより番太郎杢助走り出づ。）

杢助　御めん下さい。

良仙　はい、はい。（おど／＼しながら玄關に出る）

杢助　自身番の使でございます。恐れ入りますが、先生にもう一度お出でをねがひます。

良仙　承知しました。

杢助　どうぞお早く願ひます。

（云ひすてゝ杢助は立去る。良仙はあわたゞしく内に引返して、長庵の前に來る。）

良仙　先生。お聞きになりましたか。

長庵　自身番から又呼びに來たやうだな。

良仙　氣づかひの事ではございますまいか。

長庵　なに、むづかしい事でもあるめえ。なにしろ、ちよいと行つて來よう。（起ち上る）

良仙　（袂を取る）　どうぞよく氣をお付けなされまして。

長庵　はゝ、大丈夫だ。（袂を拂ふ）　おちついて留守番しろ。

（長庵は奥に入る。良仙は行燈の火を持ちて、不安らしくそのあとに附いてゆく。下のかたより前幕の娘お朝出で來り、玄關口より聲をかける。）

お朝　御免なさい。（すこし間を置きて）　もし、御免なさい。お藥をいたゞきにまゐりました。（大きな聲で呼ぶ）　はて、誰もゐないのかしら。もし、お藥を取りにまゐりました……。仕樣がないねえ。又來ようか。

（お朝はそのまゝ引返して去る。舞臺は空虚。）

―― 幕 ――

第三幕

一

淺草馬道の居酒屋。舞臺は一面の土間のこゝろにて、上のかたに古びたる障子の出入口、それにつゞいて正面は棚、棚には德利、どんぶり鉢、小皿蓋などを澤山ならべてあり。下のかたは料理場にて、茹蛸などを吊し、臺には茹でたる蟹、組板の上には鯛のひれなど見ゆ。そのそばには酒樽も積んであり。土間のまん中には八間を吊し、下のかたには縄暖簾の入口。門口には酒肴と書きたる行燈をかけ、柳の立木あり。土間には足付きの細長き臺を三四脚ほど据ゑ、そのまはりに腰かけの樽や長床几を置く。

（前の幕の翌年の七月十日、やがて日の暮れかゝる頃。石子伴作は町人の姿にて上のかたの床几に腰をかけ、小皿盛にて酒を飲んでゐる。まん中の床几には職人源八、熊藏が腰をかけ、唐もろこしと青ほゝづきとを臺の上に置き、やはり小皿盛で飲んでゐる。すこし奥の方の床几には早桑三次が頰被りをして、德利や肴をならべしまゝ横になつて寢てゐる。下のかたに若い者岩吉が德利や皿を洗つてゐる。女房お六は酒の燗をつけてゐる。丁稚勘太は盆を持ちて職人の給仕をしてゐる。題目太鼓の音きこゆ。）

源八　（德利を出す）おい、こいつをもう少し熱くして呉んねえ。

勘太　あい、あい。（德利をうけ取つてゆく）

熊藏　おい、おい。いゝよ、いゝよ。その上に熱くされちやあ腸が火傷をしてしまはあ。燗直しにやあ及ばねえ、こつちへ返してくれ。（源八に）手前また何だつてそんなに熱燗をたのむんだ。

源八　だつて、かう暑くつちやあ遣切れねえから、いつそ自棄に內の方を思ひ切つて熱くしたら、ちつとは外が涼氣になるかと思つてよ。

お六　暑氣拂ひに燒酎をあふつては如何でございます。

熊藏　いや、いけねえ、いけねえ。この上こいつに燒酎なんぞ飲ませた日にやあ、腰が拔けて動くことは出來めえ。だが、まつたく暑いには暑いな。四萬六千日の頃はいつも斯うだらうか。

お六　とりわけて當年はきびしい殘暑でございます。勘太、ちつと煽いでおあげ申しなよ。

勘太　あい、あい。

（勘太は大きい渋團扇を持ち來りて、源八と熊藏のうしろから煽ぐ。亭主半助は片襷をして渋團扇を持ち、

（奥の障子をあけて出づ。）

半助　みなさん。もうお盆が來るといふのに、どうもお暑いことでございます。（云ひながら三次に眼をつける）おゝこのお客はまだ寢てゐるのか。これ、岩吉。好加減に起してあげろと云つて置いたではないか。

岩吉　（濡手をふきながら前に出る）いえ、もう、先刻から幾度起したか知れないのですが、呼んでも揺ぶつても白河夜舟で、どうにも仕樣がないのでございます。

源八　よつぽど醉つてゐると見えるね。

お六　なに、いくらも飲んだのぢやないんですが、御覧の通りお銚子が二本、それで正體もなく醉ひ倒れてしまつたのでございます。

岩吉　多寡が一本か二本のお銚子で、一時も店を塞がれちやあ迷惑ですよ。

半助　これ、大きな聲でそんなことを云つて、もし聞えたらどうするのだ。一合飲んでもお客樣だ。つまらない噂をしてはならないぞ。（料理場の方へゆく）

伴作　もし、こゝへもお銚子のお代りを頼みます。

岩吉　はい、はい。

伴作　ぬたか酢の物は出來ませんかね。

お六　ぬたは鮪、酢の物は蛸か胡瓜揉みでございます。

伴作　それぢやあぬたをたのみます。

岩吉　かしこまりました。奥臺のお一人さん、ぬたが一枚出ます。

半助　あい、あい。

（お六も下の方へゆき、徳利の燗をみて伴作の前へ持つて來る。）

お六　お待遠さまでございました。

伴作　いつも御繁昌で結構だね。

お六　おかげさまで皆さんが御贔屓にして下さいます。けふは四萬六千日で觀音樣へでも御參詣でございましたか。

伴作　（笑ふ）いや、さう云はれると面目ない、わたしは一向不信心で……。實はこれからあべこべの方角へ御參詣に行かうかと思つてゐますのさ。

お六　（おなじく笑ふ）ほゝ、左樣でございますか。それはお樂みでございます。

伴作　なに、今年は玉菊の追善とやらで、見ごとな燈籠がついたといふ評判だから、たゞそれを見物して來るだけのことさ。

源八　（見かへる）おやあ、お前さんも吉原へ燈籠見物にお出かけなさるのかえ。自慢ぢやあねえが、わつしはもう五六度も見に行きましたよ。

熊藏　中萬字の玉菊が死んでから、今年はもう三年になる

といふので、その三回忌の追善のために、仲の町へ燈籠をつけることになつたのださうだが、死んだ跡までそんなに惜まれるといふのは、よつぽど優れた女郎だつたと見えるな。

岩吉　（口を出す）　さうでございますとも……。第一容貌（きりやう）は好し、讀み書きは勿論、香茶の湯から琴三味線まで、なんでも心得て居りまして、中萬字でも大切の責つ子でございましたが、惜いことに大酒の癖がありまして、勤めの身でそんなに酒を過しては惡い、止めろ止めろとたび〳〵意見したのでございますが……。

源八　お前（め）え、玉菊と馴染のやうなことを云ふぜ。

岩吉　まんざら識らない顔でもございません、仲の町の道中でたび〳〵見たことがございます。

熊藏　大方そんなことだらうと思つた。はゝゝゝゝ。

伴助　おい、[illegible]があがつたよ。

岩吉　あい、あい。

（岩吉は角盆に鉢をのせて、伴作のまへに持つてゆく。）

岩吉　お待遠さまでございます。

伴作　わたしもこれから吉原へ見物に行くのだが、その玉菊花魁にはなんにも言づけはないかね。

岩吉　御常談ばかり。いくら名高い花魁でも、幽靈になつては眞平（まつぴら）でございます。

伴作　はゝゝゝゝ。

（伴作は酒を飲んである。下のかたより村井長庵は酒に醉ひたる體にて、良仙に介抱されながら出づ。長庵は手に泥草鞋の片足を持つ。）

長庵　いやだ、いやだ。料簡ならねえ。

良仙　まあ、堪忍してお遣んなさい。なにを云ふにも相手は子供でございます。

長庵　いくら子供だと云つて、こんな泥草鞋を横つ面へたゝき付けられて、料簡がなるかと思ふか。あの餓鬼（がき）めを皆んなこゝへ引摺つて來い。さあ、珠數（じゆず）つなぎにしてこゝへ引摺つて來い。四萬六千日の青鬼灯（ほほづき）のやうに、あたまから押潰してやるから。

（云ひながら長庵は繩暖簾をくゞらうとする。）

良仙　もし、もし。どうなさるのでございます。

長庵　どうするものか。こゝの家で酒を飲むのよ。

（長庵は泥草鞋をぶら下げながらひよろ〳〵と内に入る。）

岩吉　（大きい聲で）　おわらい、おわらい。

長庵　さう〴〵しい奴だ。どこか明いてる座敷はねえのか。やい、小僧。おれの面（つら）へこの泥草鞋をたゝき付けたのは貴樣だらう。

若吉　その草鞋をどうなすつたのでございます。

良仙　こゝへ来る途中で、子供たちが蝙蝠(かうもり)を捕ると云つて、草鞋を投つてゐたのが、間違つてこつちの顔に當つたのだ。

權太　蝙蝠、蝙蝠。山椒魚(さんしよううを)にしよか。そんなら粗相で仕方がねえや。

長庵　なに、粗相だから仕方がねえ。さうぬかすからには飴よ[illegible]の仕業ときまつたぞ。やい、あのこんばうめ。これへ出ろ。

（良仙が止めるも肯かずに、長庵は草鞋をふり廻す。そのはずみに草鞋は源八の顔にあたる）

源八　やい、なにをしやあがるんだ。

長庵　なにをするものか。大森蟹のやうなでこぼこ頭を遠慮なしに突き出してゐるから悪いのだ。蝙蝠のやうな面をしてゐやあがるから、泥草鞋を叩きつけたのが何うしたのだ。

源八　さういふ手前こそ長い面へ泥草鞋(どろわらぢ)を叩き付けられたんぢやあねえか。[illegible]見やあがれ、藪坊主め。

良仙　御覧の通り酔つて居りますから、どうぞ御勘辨くださいまし。

長庵　えゝ、こんな二足三文の野郎どもに口をすにあてゝあやまることがあるものか。さあ、野郎。今度は貴様が相手だぞ。よくも俺を藪坊主だとぬかしたな。

源八　なんだと……。（起ちあがる）

權藏　まあ、よせ。相手は生酔(なまゑひ)だ。堪忍してやれ。（源八をなだめる）

良仙　（おとなしく長庵を宥める）お前ももう好加減にしたがようございます。

長庵　どうして好加減に出来るものか。これからが芝居のはじまりだ。さあ、野郎。これへ出ろ。

（長庵はよろけながら草鞋をふりまはすと、今度は傍の[illegible]の前へゆく。作作は身を捻つてその草鞋を[illegible]とつかめば、長庵はよろけて作作に顔を[illegible]はせる）

作作　（[illegible]へて）はゝ、おあぶなうございます。（草鞋をつかみし手を[illegible]める）

長庵　な、なにをしやあがる。貴様もあいつ等の加勢をするのか。

（長庵は草鞋を又ふりあげて作作を打たうとするを、良仙支へる）

良仙　（作作に）なにぶん酔つて居りますから、どうぞ御料簡なすつて下さいまし。

長庵　誰があやまるのか。何のうしろ暗いことがあつて、貴様に見る人ごとにあやまるのだ。いくら貴様があやまつても堪忍する俺ぢやあねえぞ。さあ、どいつでも相手に

なれ。
半助　(見兼ねて進み出づ)　もし、お前さん。むやみにここへ這入つて來て、相手樣はずに喧嘩を賣られては、わたくしの方でも迷惑しますから、喧嘩をなさるなら何うぞ表で願ひます。
長庵　こゝの家の商賣はなんだ。
半助　居酒屋でございます。
長庵　この居酒屋へ客が這入つては悪いといふ法度でも出たのか、酒をのめば云分はあるめえ。酒を出せ。
良仙　そんなにお飲みなすつては體の毒でございます。御亭主、水を一杯持つて來て上げてくれ。
半助　はい、はい。
長庵　べらぼうめ。鯛や鱠ぢやあるめえし、水ばかりあ、ぐ〱飲んでゐられるか。酒でも燒酎でも持つて來い。
お六　まあ。兎も角もあちらへおかけなさいまし。(下のかたの床几を指さす)
長庵　そんな這入口は厭だ、厭だ。
お六　そんならあちらへ……。(奥を指さす)
長庵　そんな薄つ暗い棚の隅つこへ行かれるものか。おれはお精靈樣ぢやあねえ。(源八等に)　やい、這奴ら。もう勘辨してやるからそこを退け。
源八　この坊主、ふざけたことを云ふな。おれの方が先客樣だぞ。
熊藏　まあ、料簡してやれ。連の若えのが氣を揉んでゐらあ。時にもう俺達もそろ〱出かけようか。
長庵　さあ、退け、退け。
源八　えゝ、うるせえ。やい、熊。手前、こんな坊主が怖えのか。びく〱することはねえ、落着いてゐろ。こつちには粂の平内が附いてゐらあ。
熊藏　さういふ譯ぢやあねえが、もう日が暮れてしまつた。好加減に切上げて出かけるとしよう。おい。若い衆。ここはいくらだえ。
長庵　どうで幾らも持つてゐやあしめえ。財布ぐるみ置いて行け。
源八　餘計な世話を燒きやあがるな。
熊藏　若い衆。いくらだよ。
岩吉　はい、はい。五百と三十六文でございます。
熊藏　おい、來た。(錢を置く。)
岩吉　毎度ありがたうございます。
半助
お六　お靜においでなさいまし。
(職人ふたりは起ち上る。長庵はよろけながらそのあとに腰をかける。)
長庵　はゝ、たうとう逃げて行つてしまやあがつた。

源八　誰が逃げるものか。
熊藏　まあ、いゝと云ふことよ。
源八　ざまあ見やがれ、海坊主。
（源八は唐蜀黍な長庵にたゝき付け、熊藏に宥められながら下のかたに去る。）
長庵　なんだと……。
（長庵は起ち上らうとするを、良仙はおさへる。）
長庵　えゝ、邪魔をするな。
（長庵は持つたる草鞋をうしろから二人に投げ付けようとしたるが、良仙に支へられて遠くは飛ばず、奥のかたに寝てゐる三次の額の上にばたりと落ちる。）
三次　（眼をひらく）やい、やい。なにをしやあがるんだ。（額を撫でながら更に足もとを見る）や、どいつだか知らねえが、おれの寝てゐる面の上へ泥草鞋を叩き付けやあがつたな。さあ、相手は誰だ、どいつだ。（腕捲りを取る。）
良仙　おゝ、三次さんか。
三次　おゝ、良仙さんか。悪いたづらをしちやあ不可ねえぜ。（手拭で額をふく）おゝ、大將も一緒にゐるのか。
長庵　やあ、三次か。おめえがこゝにゐるとは些とも知らなかつた。はゝ、なにも粗相だ。そんなに目だまを光らせることもねえ。まあ、堪忍しろ。はゝゝゝゝ。
三次　暑氣拂ひに一杯飲んで、好い心持に寝てゐるところへ、だしぬけに泥草鞋を叩き付けられちやあ、いくら俺でもびつくりするあな。ほんたうに悪い洒落だ。
長庵　そんなに膨れつ面をするなよ。おめえの寝てゐるのを嚇かしたところで、百にもなる仕事ぢやあねえ。ほんの粗相だ、我慢しろ。多寡が一本か二本の酒でそんなに好い心持に寝込んでしまふとは、意氣地のねえ男だな。
三次　生れつきの下戸が無理に飲み覺えたのだから意氣地はねえ、一合か二合が關の山だ。
長庵　悪黨にも似合はねえ、野暮な奴だな。はゝゝゝゝ。
（良仙は氣づかひの體にて左右を見かへると、伴作も酔つた體にて寝伏してゐる。）
三次　だが、いゝ所でお前さんに逢つた。お前さんたちは一體どこへ行きなすつたのだ。
長庵　丁字屋へ行つたのよ。
三次　いつ頃だえ。
長庵　午少し過ぎよ。
三次　なにしに行きなすつた。
長庵　掛合に行つたのよ。
三次　掛合に行つた……。（首をかしげる）なんだか話が聞違つてゐるやうだな。おまへさんの方から掛合に行つたのかえ。

長庵　嘘ぢやあねえ、良仙に聞いてみろ。
三次　はてね。良仙さん。ほんたうかえ。
良仙　（小聲で）　實は今朝早くに丁字屋から使ひが來て、小夜衣のお梅さんがゆうべ駈落をしたといふむづかしい詮議だ。
三次　（うなづく）　むゝ、それから何うしたえ。
良仙　こつちでは元よりなんにも知らないので、そのわけを言つて歸したが、先生がたが／＼承知しない。人の娘をあづかつて置きながら、ゆくへ知れずになりましたと啀すましてゐる法はない。乾とその掛合をせにやあならぬと、自分ひとりで出ようとされたが、なんだか不安心にも思はれるので、わたしも一緒に附いて來たのさ。
三次　（笑ふ）　なるほど理窟も附け様で、駈落をした女の主人へ、親許の方から逆捻の掛合か。それで丁字屋はどうしたえ。
長庵　向うにも荒神様が附いてゐるので、なか／＼素直に恐れ入らねえ。それでも相手がわつちと見たのか、酒や肴を持ち出しておれ達にうんと馳走をしたよ。良仙は遠慮して碌々に飲みも食ひもしなかつたやうだが、おれは構はずに鱈腹飲んで來た。
三次　（又笑ふ）　それでおとなしく引揚げて來たのか。さすがの大將も酒にやあ殺されるね。
長庵　泥鰌ぢやああるめえし、酒に殺されてたまるものか、小夜衣のお梅が駈落をしたのはおれの指尺と、丁字屋でも初めは疑つてゐたらしいが、だん／＼話し合つてゐるうちに、おれにかゝり合のねえことも判つたとみえて、小夜衣の居所を突きあてゝ呉れたら乾と禮をするといふのだ。
三次　實はわつしも其事で、今朝早天に丁字屋の御內證へ呼び付けられたのさ。なにしろ私の判も這入つてゐるのだから、この一件にかゝり合は遁れねえ。早速心あたりを二三ヶ所突いて見たが、どこにも一向手堪へがねえ。暑さは暑し、草臥れても來たので、こゝへ飛び込んで一杯のむと、今もいふ通り好い心持になつて一寢入りさ。ところで、大將。小夜衣のゆくへに何か心當りはありやせんかね。
長庵　あるな。
三次　（乘り出す）　あるかえ。
長庵　あるとも……。確かにある。（云ひかけて見かへる）　やい、やい。なにをぼんやりしてゐるんだ。こゝの死骸を早く片附けて、新しいお客様に酒を持つて來ねえか。
お六　はい、はい。（長庵の前の德利や皿小鉢などを片附けにかゝる）
長庵　どうだい、よくも食ひ荒しやあがつたな。どの皿も

骨ばかり、まるで安達ヶ原だ。

岩吉　おあつらへは何んに致しませう。

長庵　なんでもいゝから食へるものを持つて來い。

岩吉　へえ。

長庵　食へるものを持つて來いよ。わからねえ奴だな。

三次　大將、つまらねえことを云つて饑つてゐちやあ不可ねえ。こゝの家だつて眞道に食へねえものを賣りやあしめえ。

長庵　どうだか知れるものか。良仙、貴樣は何を食ふだらう。

良仙　わたくしはもう澤山でございます。かうしてこゝへ這入つた以上、たゞ歸るといふわけにも行きますまいから、早く飲んでお歸りなさるが好うございます。

（良仙はなんだか伴作が氣にかゝる體にて、時々にそちらを見かへる。）

岩吉　お肴は何んにいたしませう。

長庵　えゝ、面倒だ。新鮮の酢の物に、青大將の刺身を持つて來い。その次が親の脛燒に、むじなの煮附だ。片つ端からどしどし持つて來い。判つたか。

岩吉　へえ。（持餘してゐる）

三次　いけねえ。いけねえ。おい、若い衆、大將は醉つてゐるんだから、なんでも好加減のものを見繕つて來てやるが可いぜ。

岩吉　はい、はい。（料理場の方へゆく）

三次　そこで大將、小夜衣のゆくへは判つてゐるのかえ。

長庵　わかつてゐるよ。唐天竺まで行きやあしめえ、いづれ日本のうちに極まつてゐらあ。

三次　仕樣がねえな。おい、良仙さん、おめえは知んなさらねえのか。

良仙　これは……。（又もや伴作の方を見かへる）心當りが無いでもないが……。

三次　伊勢屋のせがれが引攫り出したんぢやあねえかえ。わつしは確かにさう睨んでゐるんだが、證據も無し。伊勢屋へ掛合をつけて、逆捻を食つちやあ詰らねえから、先づ其儘にしてあるんだが、お前さんは近所のことだ、大抵の樣子は知つてゐるだらう、伊勢屋の悴はけふも平氣で店にゐるかえ。

良仙　（やゝ興奮したるやうに）こゝへ來るときに、伊勢屋の店をちよいと覗いてみたが、千太郎はどうも居ないらしかつた。

三次　さうだらう。どうしてもそれに相違ねえや。それで、その千太郎の隠れ家に何か心あたりはねえのかね。

良仙　以前伊勢屋に奉公してゐた久八といふ番頭が山の宿に小さい古着屋を出してゐるといふ話だから、もしやそ

こかとも思つてゐるが……。
三次　なに、山の宿……。そんなら眼と鼻のあひだだ。これからすぐに出かけてみよう。だが、相手は二人だ。おまけにその久八とかいふ奴が忠義振つて邪魔をされると面倒だ。わつしは表から掛合に行くから、お前は裏口の方へ廻つてゐて、ふたりを逃がさねえやうに見張つてゐてくれねえか。
良仙　さあ。
（良仙は行きたくもあり、すこしく躊躇してゐる。）
三次　いゝぢやあねえか。大將だつて幾らかになる仕事だ。儲けは正直に三つ割よ。さうすれば誰に云分はあるめえ。ねえ、大將。さうだらうぢやねえか。
長庵　まあ、さうだな。おい、早く酒を持つて來ねえか。
お六　はい、はい。唯今すぐでございます。
三次　酒も酒だが、わつしは氣が短けえ。（起ちあがる）ぢやあ、大將。お弟子さんを借りて行きやすぜ。おい、おかみさん。勘定は幾らだえ。
お六　ちよいと、そちらは……。
岩吉　はい、はい。二百廿四文でございます。
三次　めつぽふ廉いな。これぢやあ繁昌する筈だ（錢を置く。）
長庵　心にもねえ世辭をいふな。めつぽふ廉ければ、おれの分も拂つて行け。
三次　常談ぢやあねえ。さあ、良仙さん。早く繰出さうぜ。
良仙　では、先生。ちよつと行つてまゐります。
お六　ありがたうございます。
岩吉　お靜かにおいでなさいまし。
（三次と良仙は門に出る。）
良仙　なんだか降りさうだね。
三次　あんまり蒸したから、ざつと來るかも知れねえ。降らねえうちに早く行かうぜ。
（ふたりは下のかたに去る。岩吉と勘太は酒と肴を長庵の前に持つて出づ。）
岩吉　どうもお待たせ申しました。
長庵　よし、よし。時にもう燈火をつけても好い時刻だらう。急に薄つ暗くなつたやうだ。このごろは夜が少し長くなつたと思つて、蠟燭をかなじむな。吝な奴等だ。
半助　ほんにもう手許が暗くなつた。これ、早く燈火の支度をしろよ。
岩吉　あい、あい。
（岩吉と勘太は土間の八間と門口の行燈に灯を入れる。長庵はひとりで酒を飲んでゐる。薄く雨の音。今まで俯伏してゐたる伴作はしづかに顔をあげる。）
伴作　おゝ、いつの間にか降つて來たらしい。もし、こゝ

の勘定はいくらですえ。

お六　はい、はい。三百廿四文いたゞきます。

（伴作は錢を置く。）

お六　ありがたうございます。

伴作　ぬたが一番旨かつたよ。

半助　へえ。ぬたはこゝの家の自慢でございます。

（伴作は羽織をたゝんで懐ろに入れる。雨の音強くなる。）

伴作　おゝ、大分強く降つて來た、なんでも可いから番傘を一本貸して貰へまいかね。

お六　はい、はい。（そこらにかけたる番傘を持ち來る）いづれ今晩はお消りでせうから、また明朝お歸りにお寄りくださいまし。

伴作　なに、引進きには追ひ出される方さ。はゝゝゝゝ。

（伴作は下のかたへ行きかけて、長庵の足を踏む。）

長庵　あ痛、あ痛……。

伴作　これは失禮。まつぴら御免くださいまし。（丁寧に詫びる）

長庵　あやまるなら料簡して遣らうが、これからもあることだ。人中へ出たら些と氣をつけろ。やい、こいつ氣障な野郎だな、なんで人の面をじろ／＼見やあがるのだ。

（長庵は床几に腰をかけたるまゝ、手をのばして伴作の袂をつかむ。）

伴作　いえ、決してそんな譯ではございません。どうぞ御料簡なすつて下さいまし。

（伴作は再びわびる。長庵の方でもその顔をちつと見る。時の鐘きこゆ。）

半助　ありやあ辨天山の六つだな。

お六　六つにしては早く暗くなつたねえ。

長庵　（伴作に）お前さんは山の手だらうね。

伴作　よく御存じで……。

長庵　赤坂かえ。

伴作　え、いえ、四谷でございます。

長庵　四谷か。（すこし考へる）これからどこへ行きなさる。

伴作　燈籠見物に行かうと思ひましたが、から降り出されては少し二の足でございますよ。（笑ふ）

長庵　そんな不實を云はねえで、行つて遣りなせえ。雨が降つても待つてゐるだらうぜ。

伴作　なか／＼そんな粹な筋ぢやございません。

長庵　隠すことはねえ。まあ、たんと可愛がられて來なせえ。この雨があしたの朝まで降つてみねえ。相方がどうしたつてこの袂を放す氣遣ひはねえや。（つかみし袂を引つ張る）

伴作　さう行けば本筋でございますが……。はゝゝゝゝ。

長庵　まつたく本筋よ。はゝゝゝゝ。(袂を放して伴作の肩をたゝく)しつかりしなせえ。

伴作　では、まあ、その積りでまゐりませうか。お先へ御免くださいまし。

(伴作は笑ひながら會釋して門口に出る。雨の音きこゆ。)

伴作　おゝ、雨がだん／＼強くなつて來た。

(伴作は傘をさして、足早に下のかたに去る。)

長庵　(ひとり言のやうに)どう考へても氣障な野郎だ。おい、亭主。あの男はたび／＼こゝへ來るのかえ。

半助　いゝえ、今晩が初めてのやうでございます。

岩吉　これまで見かけたことはありませんね。

長庵　さうか。(舌打する)酒に醉ふと、これだから不可ねえ。どれ、おれもそろ／＼出かけようか。おい、錢はこゝへ置くよ。

お六　二朱ではお剩錢でございます。

長庵　つりは要らねえ。さつきから大きな聲を出して騷がした代だ。

半助　それはどうも恐れ入ります。

長庵　(起ちあがる)雨はまだ止まねえやうだな。

お六　(表をみる)止むどころか、だん／＼強くなつて來るやうでございます。

半助　傘をお持ちなすつては如何でございます。お駕籠を召すにしましても、そこへ出るまでが濡れませう。

長庵　今の客にも貸したやうだが、そんなに傘があるのかえ。

半助　へゝ、まだ一本や二本はございますよ。

お六　では、ちよいとお待ちくださいまし。

(お六は奥に入る。雨の音強くきこゆ。)

長庵　やけに降りやあがるな。いめえましい。

半助　少し止ましていらしつては如何でございます。こんな雨はひとしきりで止むものでございます。それに御酒もまだ一向召上らないやうですから。

長庵　いや、さうしてもゐられねえ。もしあの二人の奴が引返して來たら、おれはもう歸つたと云つてくれ。

半助　かしこまりました。なにか面倒な掛合のやうでございますね。

長庵　こんなところへ來て、大きな聲でべら／＼饒舌ろから、みんなお前達に筒拔けだ。あんな智慧のねえ奴等はねえ。だが、まあ、なんにも聞かねえ積りにして置いてくれ。いゝかえ。

半助　それは吞み込んで居ります。

(奥よりお六は番傘を持ちて出づ。)

お六　こんな悪い傘でございますが……。

長庵　なんでも可い。それぢやあ今夜は借りて行くよ。

半助　氣をつけておいでなさいまし。

（長庵はよろけながら門に出て着物の尻を端折る。稻妻ひらめく。）

長庵　おゝ、光つて來やあがつた。

（長庵は雪駄を帶にはさみ、番傘をさして向うに去る。半助は門口より見送る。）

半助　あのお客はをかしな人だな。わい／＼催促して酒や肴をあつらへて置きながら、碌々に飲みも食ひもしないで行つてしまつた。

お六　どうせ傘をかへしに來る氣遣ひはあるまいが、一朱貰つておけば損はないよ。

岩吉　上野でせうか、淺草でせうか。

半助　さあ。お寺樣が醫者に化けてゐるのか、それともほんたうの町醫者か。

お六　お城坊主にもあんな道樂者が隨分あるからね。

半助　なにしろ、こつちには好いお客樣だ。おい、勘太。宵から居睡りをしてゐないで、早くそこらを片附けろ。やい、勘太。

勘太　（大きな聲で）蝙蝠、蝙蝠、山椒食はしよ。

岩吉　なにを寢惚けてゐやあがるんだ。（頭をひとつ撲る）

勘太　（寢惚目で大きな聲）あい、あい。

岩吉　さあ、さあ、早くしろ。

（岩吉と勘太はそこらの臺の上を片附けてゐる。雨の音はげしく、稻妻ひらめく。）

お六　おや、又光つて來たね。鳴りやあしないかしら。

半助　あんまり蒸暑いからごろ／＼と來るかも知れねえな。

お六　（ふるへる）厭だねえ。おまへさん。早く蚊帳を吊つておくんなさいよ。

半助　こつちは忙がしいや、そんなことをしてゐられるものか。蚊帳を吊るとも戸棚へもぐり込むとも勝手にするが可いや。

お六　仕樣がないねえ。（稻妻ひらめく）あれ、また光つたよ。

岩吉　おかみさん、もう鳴りますぜ。おゝ、好いものがある。（土間に落ちたる唐黍を拾ふ）これは今の客人が投つて行つた雷よけの御呪ひですよ。

お六　あゝ、四萬六千日の唐黍かえ。ありがたい、ありがたい。（押頂く）それでもまだ安心が出來ないやうだ。勘太。そこはどうでも可いから、早く奥へ來て蚊帳をつる手傳ひをしておくれよ。これからお線香を焚いて……。桑原、桑原。

（お六はあわてゝ奥へ逃げ込む。）

勘太　桑原。桑原。（つゞいて奥へ駈け込む）

岩吉　おかみさんは隨分かみなりが嫌ひですね。

半助　ごろ／＼ときこえたが最後、生きた顔色はありやあしねえ。意氣地のねえ奴だ。

（二人はそこらを片附けてゐる。稲妻又ひらめきて、雷の音きこゆ。）

岩吉　そら、いよ／＼鳴り出して來た。

（雨の音はげしく、下のかたより早乘三次は小夜衣のお梅を無理に引立てゝ出づ。）

三次　いめえましく降りやあがるな。さあ、早く來ねえ。叔父さんが待つてゐるんだ。

（稲妻又ひらめく。）

小夜衣　あれ。（顔をかくす）

三次　それだから早く來ねえと云ふのに……。

（云ひながら三次は小夜衣を居酒屋のうちへ連れ込む。）

半助　いらつしやいまし。おゝ、おゝ、大層お濡れなさいましたね。

三次　いや、ぐしよ濡れよ。遣切れねえ。

半助　そつちの姐さんも大層濡れなすつたね。岩吉。早く手拭でも持つて來てあげろ。

岩吉　あい、あい。（そこらに掛けある手拭を持ち來る）

半助　おゝ、あたまから雫が滴れる。やれ、やれ、お氣の毒な。

（半助も片棲の手拭をはづし、岩吉とふたりで小夜衣のあたまを拂ひ、からだを拭いてやる。）

三次　（袂をしぼりながら）おい、おい。寄つて集つて女の子にばかり深切を見せることはねえ。こゝにも濡佛が一人ゐるんだ。手拭を貸してくれ。

岩吉　はい、はい。（手拭を三次にわたす）

三次　えゝ、こんな濡れたのぢやあ仕樣がねえ。乾いたのを早く出してくれ。女の子にばかりこすり付きやあがつて、いけ好かねえ野郎だ。

（岩吉は早々に奥へゆく。半助は小夜衣を介抱しながら、まん中の床几にかけさせる。）

半助　なにしろ、この降るなかを大變でございましたね。

三次　大變だとも……。まつたく商賣も樂ぢやあねえ。時にこゝにゐた坊主頭のお客はどうしたね。

半助　もう少し前にお出かけになりまして、あのふたりが引返して來たら、先へ歸つたと云つてくれとの事でございました。

三次　先へ歸つた……。氣が早えな。もう少し待つてゐて呉れゝば可いのに……。

小夜衣　三次さん。後生ですから歸してくださんせ。

三次　丁字屋へかえ。
小夜衣　いゝえ、あの山の宿へ……。
三次　馬鹿を云ひねえ　折角こゝまで連れて來て、元へ歸して詰まるものか、それにしても、良仙坊主はどうしたかなあ。
（奥より岩吉は手拭を持ち來れば、三次は引つたくりて顔や襟首を拭く。）
小夜衣　さうして、千太郎さんは……。
三次　野郎の方は良仙がうまく取つ捉まへたらうと思つてゐるが、あいつもどうだか何うしたか知れやあしねえ。
小夜衣　それがなによりの心がかり。あの千太郎さんは何うしてゐることか。
（小夜衣は下のかたへ行かうとするを、三次はひき戻す。）
三次　いけねえ、いけねえ。野郎なんぞは生きようと死なうと頓着はねえが、大事の玉を逃した日にやあ骨折損のくたびれ儲けだ。長庵がゐなけりやあ仕方がねえ。雨がちつと小降りになつたら、よし原へ駕籠で送つてやるからまあおとなしく待つてゐねえ。
小夜衣　いえ、いえ、よし原へは歸られませぬ。わたしはどうでも千太郎さんと……。
（又駈け出さうとするを、三次はおさへる。）
三次　まだ判らねえか。なんぼ俺でも、もう世話が焼き切れねえ。まあ、おとなしくしてゐろと云ふのに……。
（三次は焦れて小夜衣をむごく突きやれば、小夜衣は土間に倒れる。半助と岩吉は駈けよりて介抱する。）
三次　えゝ、こいつら。また出しやばつて女の贔屓をしやがあるな。うるせえ藪つ蚊だ。引込んでゐろ。
半助　でも、あんまり可哀さうで……。
三次　なにが可哀さうだ。おれの方がよつぽど可哀さうだ。
（三次は手ぬぐひで顔や手足を拭いてゐる。小夜衣は土間に泣き伏してゐる。雷の音、雨の音。向うより久八の妻お咲、手拭をかぶり、褄をからげて走り出で、あたりをうろ／＼見まはしながら暖簾のうちを覗く。）
お咲　おゝ、やつぱりこゝにゐた。（内に入る）
三次　おめえは古着屋のかみさんか。なにしにこんな所へ出かけて來たのだ。
お咲　小夜衣さんを引摺つてゆくお前のすがたを、暗いなかでも確かに見て、あとを追つかけてこゝまで來ました。して、花魁は……。
三次　小夜衣はそこらにゐるよ。
（小夜衣は顔をあげて、お咲と顔を見あはせる。）
お咲　おゝ、小夜衣さん。（かけ寄る）
小夜衣　して、千太郎さんは……。

お咲　坊主あたまの若い人が無理に引摺つて行かうとするのを、内の人が追つかけて行きましたから、無事にお連れ申して歸るでございませう。
小夜衣　さう聞く上は……。
（小夜衣はまた駈け出さうとするを、三次は遮る。）
三次　えゝ、又じたばたするのか。（又もや小夜衣を突き倒す。）
お咲　あれ、そんなむごいことを……。もし、三次さんとやら。わたしが一生のお願ひでございますから、どうぞこの小夜衣さんを連れてゆくのは堪忍して下さいまし。
三次　途方もねえ、なんだとえ。
お咲　おまへさんは御存じあるまいが、伊勢屋の千太郎樣は内の久八が御恩をうけた大事のお主筋。その千太郎樣からおあづかり申した小夜衣さんを、このまゝ吉原へ連れて歸られては、わたし達夫婦の義理が立ちませぬ。いづれ丁字屋の方へもなんとか話を付けませうから、今夜のところはどうぞ見逃してくださいまし。三次さん、この通り拜みます。（手をあはせる）
三次　おい、おい、おかみさん。おめえの御亭主の久八さんといふ人は、伊勢屋にどんな恩をうけてゐるか知らねえが、よし原の駈落者を判人のおれが取つ捉まへるに不思議はねえ。一旦かうして見つけた以上、どうしてそつちへ渡して遣れるものか。積つて見ても知れたことだ。（岩吉に）おい、若い衆。御苦勞だがそこらへ行つて、駕籠を一挺たのんで來てくれ。えゝ、なにをぐづぐづしてゐるんだ。惡くこいつ等の肩を持ちやあがると、片つ端から係り合だぞ。
（怒鳴りつけられて、岩吉は半助と顏を見あはせる。）
三次　やい、早く行かねえか。雨の止むのを待つてゐちやあ夜が明けらあ。
（半助は仕方なしに眼で知らすれば、岩吉は澁々うなづきて奥へ傘を取りにゆく。）
お咲　もし、今もいふ通りのわけで、丁字屋にも損をかけず、おまへさんにも御迷惑をかけますまいから、どうぞ小夜衣さんを連れて歸ることだけは堪忍して遣つて下さいまし。これほどに思ひ合つてゐる二人が仲を無理にここで引き裂いたら、若旦那は勿論、この小夜衣さんの花魁もよもや生きては居りますまい。（涙をぬぐふ）若いお人の命ふたつを生かすも殺すも、おまへさんの心一つでございます。
三次　うるせえ、うるせえ。
お咲　お前さへ大目にみて下されば、わたし達がどんな都合をしても……。
三次　もう判つてゐるよ。

お咲　そんなら承知して下さいますな。（思はず摺寄る）

三次　ふざけるなえ。（お咲を突き倒す）やい、やい、駕籠はどうした。まだぐづ／＼してゐるのか。

岩吉　はい、はい。

（岩吉は奥より傘を持ちて出づ。）

三次　早く行け。薄鈍い野郎だ。

（岩吉は傘をさして下のかたに去る。）

お咲　これほど頼んでも肯かなければ、こつちにも思案がある。小夜衣さんをおめ／＼渡して遣つては、亭主に合はせる顔がない。

三次　それを俺が知つたことか。

お咲　（ゆるみし帯を締め直して）もう此上は……。さあ、花魁。わたしと一緒に……。

（お咲は小夜衣の手をとりて行きかゝれば、三次はまた遮る。）

三次　ど、どこへ行くんだ。

お咲　どこへ行かうとわたしの勝手、邪魔をしずに通してください。

三次　これが邪魔をしずにゐられるか。腕づくで女を連れて行かうとは、べらぼうに氣の強え嚊だな。

（三次はお咲を突きやりて、小夜衣をひき戻さうとする。お咲は小夜衣を連れて行かうとする。その爭ひのうちに、お咲は三次に突き飛ばされて、料理場の前に倒れしが、やがてそこにある鮪庖丁を把りて斬つてかゝるに、三次もぎよつとして飛び退く。）

三次　や、這奴、途方もねえ氣ちげえだ。

（お咲は片手に庖丁をふり廻しながら、片手に小夜衣の手を把りて行かうとする。三次はその刃物をよけながら小夜衣をひき戻さうとする。）

三次　おい、亭主。こんな氣ちげえが暴れるのを唯見てゐるといふ法があるものか。加勢してくれ。加勢しろ。

（半助は呆氣に取られてうろ／＼しながらも、陰にお咲の加勢をしてやりたいやうな心持で眺めてゐる。そのうちに、臺や床几をがら／＼と倒して、三次は土間に倒れる。この物音に、お六と勘太も奥の障子をあけて窺ひしが、思ひのほかの大騒ぎにおどろきて再び奥にかくれる。岩吉は表より歸り來り、この體を見て割つて入り、三次とお咲とを仲裁するやうにみせながら陰に三次の邪魔をする。半助もお咲と小夜衣を庇ふ。ひとりも味方のない三次は、大勢に邪魔をされるのと、お咲がむやみに刃物を振りまはすので、どうすることも出來ず。しきりに焦れ込みながら小夜衣を追ひまはしてゐるうちに、お咲は床几につまづきて倒れ、脾腹を打ちて悶絶する。小夜衣も半助もおどろきて介抱す

る。)

三次　ざまあ見やがれ。それにしても駕籠は遅いな。(門口に出て向うを見る) や、いゝところへ駕籠が來た。おうい。早く來てくれ。おうい。(しきりに呼ぶ)

(向うより一挺の辻駕籠出づ。)

三次　おゝ、御苦勞、御苦勞。おれに加勢してあの若え女を駕籠へ打ち込んでくれ。さあ、大急ぎだ。

(三次は忙がしさうに指圖する。駕籠屋は垂簾をあげると、内には長庵が乘つてゐる。)

三次　や。大將か。

(長庵は駕籠のなかに眠つてゐる)

三次　おい、大將。どうして來たんだ。

長庵　(眼をあく) さう〲しいな。駕籠にゆられてゐる中に、ついうと〱と寢たとみえる。あゝ、雨はまだ降つてゐるな。

(長庵は駕籠を出て、内に入る。)

小夜衣　おゝ、おまへは叔父さん。堪忍してくださりませ。

長庵　はゝ、こゝに來て居たのか。(三次に) おめえ達ふたりを出して遣つたが、どんな芝居をすることか、すこし不安心にもなつて來たので、あとから駕籠で乘りつけると、古着屋の店はがら明き、うろ〱してゐる小僧に訊いてみると、小夜衣と千太郎はおめえ達ふたりに引摺られて行つたといふ。おれがまだこゝにゐるものと思つて、大方こゝへ連れて來たのかも知れねえと、引返してみれば案の通りだ。

小夜衣　もし、をぢさん。早くこのおかみさんを生かして下さりませ。

長庵　それは誰だ。

三次　古着屋のかゝあさ。女のくせに刃物三昧をしやあがつて、手前で轉んでどこか打つたらしい。

長庵　そんなことなら譯はねえ。おれの商賣だ。はゝ、すぐに生かしてやる。(お咲をかゝへ起す) おい、亭主。水をくれ。

半助　はい、はい。

(半助は手桶の水を茶碗にくんで來る。長庵はお咲の脾腹をさすり、腰の印籠より藥をとり出してふくませ、茶碗の水をのませる。)

長庵　これ、どうだ。

小夜衣　もし、おかみさん。氣を確かに持つてくださんせ。

お咲　(氣がつく) おゝ、花魁。

小夜衣　わたしはこゝにゐます。しつかりして下さんせ。

三次　(のぞき込む) もう大丈夫かえ。

長庵　大丈夫よ。

三次　(感心して) なるほど名醫だ。馬鹿にやあ出來ねえ。

長庵　人間のひとりや二人、生かすも殺すも譯はねえや。
三次　その名譽に一服盛られちやあ誰でもたまらねえ筈さ。
長庵　これ。
（眼で叱られて、三次は首を縮める。お咲はもう一杯くれといふ。小夜衣は茶碗をうけ取りて半助にわたせば、半助は再び水を汲んで來る。このあたりより雨の音だん／＼に止む。）
小夜衣　おかみさん。氣分はもう好うござんすかえ。
お咲　はい。もうはつきりしました。
長庵　（三次に）男の方はどうしたな。
三次　そりやあ判らねえ。なんでも奥側が引摺つて行つたらしいが……。
長庵　さうか。まさかに自身番へ引摺つて行きもしめえ。こゝへ連れて來さうなものだが、どうしたかな。
お咲　若旦那の方は内の人が追つかけて行きましたから、そこらで追ひ付いたでございませう。
長庵　追ひ付いたところで仕方があるめえ。うつかり手出しをすれば飛んだかゝり合だ。この小夜衣とは譯が違つて、千太郎はかどはかしの罪人だぞ。
お咲／小夜衣　え。
長庵　あたりめえよ。長年のある勤めの女を、引攫（ひつさら）つて逃げれば立派な勾引（かどはかし）だ。表向きにすれば千太郎の首に繩がつく。それもあんまり不便（ふびん）だから、丁字屋と伊勢屋の仲に立つて、おれがなんとか捌いてやらう。その納まりの付くまでは、小夜衣はおれの方へあづかつて置く。
三次　すぐに丁字屋へは渡さねえのか。
長庵　（あざ笑ふ）些とぐらゐの禮金を貰つたつて何うするものか。
三次　玉をそつちへ渡してしまつちやあ、なんだか鳶に油揚を攫はれた形だね。
お咲　（不安らしく）それではどうも……。
長庵　不安心かえ。それぢやあ矢つぱり表向きにして、千太郎を繩付にする積りか。
お咲　どうしてまあそんなことが……。
長庵　出來ざあ默つて引込んでゐろ。おい、亭主。もう一挺駕籠をたのんで呉れ。
三次　わざ／＼呼ぶにやあ及ばねえ。おれが今呼びに遣つたところだ。
長庵　氣がきいてゐるな。雨も氣を利かして小降りになつたやうだ。
小夜衣　そんならどうでも麹町へ……。
長庵　それもみんな男のためだ。

（長庵は小夜衣の手を把りて引立てようとする。お咲はまだ不安らしく小夜衣の袂をつかんでゐる。長庵は無言にてお咲をつき退ける。）

長庵　駕籠はまだ來ねえのか。三次、ちよいと行つて見て來てくれ。

三次　俺がか。（長庵の顏をみる）

長庵　厭か。

三次　厭でもねえが……。惡い役だ。まあ、仕方がねえ。行つて來よう。

（三次は澁々ながら暖簾をくゞつて出ようとする時、石子伴作は尻を端折り、番傘をお化けにさして足早に出づ。）

三次　（出合がしらに）えゝ、あぶねえ。氣をつけろ。

伴作　これは失禮をいたしました。（傘をすぼめながら内に入る）

三次　おめえは先刻こゝにゐた人ぢやあねえか。

長庵　さつきの人……。（見かへる）おゝ、お前さん。又來たのか。

伴作　雨が小降りになりましたから。

長庵　むゝ。

伴作　傘を返しにまゐりました。

長庵　雨は止みさうかえ。

伴作　もう雲切れがして來ました。

（云ひながら伴作は小夜衣の方を覗かうとする。お咲は身を楯にして小夜衣を隱す。）

長庵　そ、そりやあ好い鹽梅だ。

（長庵も醉つてゐる風をして、よろけながら小夜衣を庇ふ。三次も伴作に眼をつける。うすく雨の音、題目太鼓の音きこゆ。）

二

下谷の廣德寺前。すこしく上の方によせて屋根つきの大いなる門。門の前には石橋あり。左右は練塀にて、その裾には大いなる溝あり、溝の縁には駒よせの石あり。寺の内には樹木しげりて、大いなる枝は塀の外まで差し出でたり。

（前の場とおなじ夜、雨の音にまじりて木魚の音などきこゆ。時々に稻妻ひらめく。下のかたより廣德寺と書いたる提灯を持ちて傘をさしたる納所一人出で來り、無言にて門の内に入る。やがて上のかたより良仙と千太郎はいづれも尻からげの跣足にて、番傘を相合にさして出づ。千太郎は手拭をかぶつてゐる。）

良仙　一度小降りになつたが、又ふり出した。困つたものだ。

千太郎　いなびかりがするやうでございますね。

良仙　おまへさんは雷は嫌ひかね。

千太郎　大嫌ひでございます。小夜衣もかみなりは嫌ひだと云つてゐましたが、今頃はどうして居りますやら。（あとを見かへる）

良仙　三次が連れて行つたから、今ごろは駕籠にでも乘せて、よし原へ送りとゞけたに相違あるまい。まあ、心配しないが可い。

千太郎　いえ、いえ、それが心配でございます。（上のかたへ引返して行きかゝる）廓を駈落したものは、ほかの朋輩達への見せしめに、むごい折檻をするとかいふ話、もしや小夜衣もそんな目に逢つてゐるのではございますまいか。それがどうも氣がかりで……。

（千太郎は上のかたへ戻らうとするを、良仙ひき留める。）

良仙　今更そんなことを云つても仕方がない。まあ、わたしと一緒に麹町へ歸る事にしなさい。

千太郎　それでもどうも……。

良仙　はて、兎も角もおとなしく歸りなさいと云ふのに……。

（千太郎は再び上のかたへ引返さうとするを、良仙はひき戻さうとする。雨の音強く、稲妻ひらめく。）

千太郎　あれ、又光りました。

良仙　男の癖に弱いことだ。お前はそんなに稲妻が怖ろしいのか。（空をみる）おゝ、雨も又ひとしきり強くなつて來た。では、小降りになるまであの門の下で少し休んで行かうか。

（良仙は千太郎の手をひいて門の下へ連れてゆく。稲妻又ひらめく。）

良仙　うるさく光るな。おゝ、濡れた、ぬれた。

（良仙は傘をすぼめて、腕まくりしながらしやがむ。千太郎は頬かむりの手拭を取りて、濡れたる袖の雫などを拂ひゐる。）

良仙　千太郎さん。そんなに小夜衣さんのことが氣になるのかえ。

千太郎　（下にゐる）はい。どうも案じられてなりません。

良仙　おまへさんは大家の息子さんで、廓通ひの金につまるといふ譯でもあるまいに、なぜ駈落の相談なんぞをしなすつたのだ。

千太郎　御承知の通り、わたくしもまだ部屋住みの身の上で、いつぞや長庵さまから五十兩の金を貸してくれと仰しやられた時にも、たうとうお斷り申したほどでございます。

良仙　さうだ。先生から無心を云はれて、それぎり一度も

顔を見せなさらなかつたね。その癖、小夜衣さんの方へはたび／＼出かけて行きなさるやうだが……。

千太郎　それを仰しやられると何とも申譯がございません。唯今も申す通り、なにぶんにも部屋住みの身の上でございますので、五兩十兩の金も思ふにまかせず、そのうちから無理な工面をして、よし原通ひが度重りましたので、たちまちに親どもから窮命うけ、座敷牢へ入れるか、遠い親類へあづけるか、二つに一つとの相談を、小耳に聞いて途方にくれました。

良仙　それで女を連れ出して、駈落する氣になつたのだね。さうして、小夜衣さんは素直に承知しましたかえ。

千太郎　はい。おまへに逢はれない程ならば、かうして生きてゐる氣はない。

良仙　むゝ。

千太郎　どんな苦勞をしてなりとも……。

良仙　むゝ。

千太郎　屹とおまへと添ひ遂げませうと……。

良仙　(なにげなく)　もし手拭を貸してくださいな。

千太郎　はい、はい。

良仙　馬鹿に暗いな。

(千太郎は手拭を出す。良仙は探りながら受取る。)

千太郎　おまへさんも濡れましたか。

良仙　いや、もう、ぐしよ濡れだ。

千太郎　お氣の毒でございます。

(良仙は手足などを拭く振りをして、手拭をしごいてゐる。)

良仙　それほど深い仲ならば、内の先生から親達にも話をして貰つて、小夜衣さんと一日も早く一緒になれるやうに、なんとか工夫して貰つたらよからうに……。

千太郎　さうなればわたくしも本望でございます。

良仙　本望かえ。(摺りよる)

千太郎　はい。

(稻妻ひらめく。)

良仙　おゝ、又光つた。

千太郎　また光りました。

(稻妻つゞいて閃く。良仙はその光をたよりに摺り寄つて、突然にその手拭を千太郎の頸にまきて絞め付けようとする。千太郎は心づきて良仙の腕をつかむ。)

千太郎　あ、なにをなさる。

良仙　(急いて)　おれのかたきだ。生かして置かれるものか。

千太郎　なに、おまへの仇とは……。なんでわたしが……。

良仙　(いよ／＼興奮して)　えゝ、仇だ、かたきだ。おれの仇だ。默つてくたばれ。

、良仙は無理に絞めつける。千太郎はがつくり倒れる。稲妻ひらめく。良仙はほつと一息つきてあたりを見まはす時、以前の納所が再び門内より出で來るに、良仙はあわてゝ千太郎をかゝへ起し、溝の縁へ連れゆきて、自分もその上にうつ伏してゐる。納所はこゝろづかずして下のかたに立去る。良仙は千太郎の死骸をかゝへて、大溝の中へ突き落さうかと思案してゐるところへ、上のかたより古着屋久八は尻を端折りて、足早に出で來り、こゝを通り過ぎようとする時、稲妻ひらめく。）

久八 （透して見る） もし、そこにゐるのはどなたでございます。

良仙 （あわてゝ） はい。こゝに雨やどりをしてゐるのでございます。

久八 （考へる） もしやおまへさんは先刻わたしの家へ來た坊主頭の若いお人ぢやありませんかえ。

良仙 え。

久八 聲や様子がどうもさうらしいが……。

（久八は門の前に引返して來るに、良仙はなんの返事もせず、死骸をそのまゝにして、そつと摺りぬけて行かうと身構へする。）

久八 もし、もし、わたしは山の宿の久八でございます。おまへさんは若旦那を連れて行つたらしいが、それからどうしました。

（良仙はやはり無言にて傘を持ち、石橋を渡らうとして思はず久八に突きあたる。久八はその腕を捉へて曳き戻さうとすれば良仙は滑りて倒れる。久八は良仙を引据ゑながら重ねて聲をかける。）

久八 もし、お前さんは、先刻の人だらうが、違ひますかえ。

良仙 （作り聲をして） 違ふ、違ふ。人違ひだ。

久八 わたしの家から若旦那を連出した人ではないかね。

良仙 （やはり作り聲にて） 知らない、知らない。

久八 はてね。

（思はず手をゆるめる隙を見て、良仙は久八をつき退け、一目散に下のかたへ逃げてゆく。久八は不審に思ひて、再びそのあとを追はうとする時、良仙が捨てゝ行きたる傘につまづき、矢はり不審さうに拾ひ取る。稲妻ひらめく、雨の音、木魚の音。）

——幕——

第四幕

一

村井長庵の宅。道具は前に同じけれど、襖なども貼り

かへられて、以前より家内がすべて綺麗にみゆ。

(雇ひ女お鐵は縁側に雑巾掛けなしてゐる。前の幕より四五日後の朝。琴の音きこゆ。下のかたより與助、町人のすがたにて七八歳の男の兒の手をひきて出づ。)

與助　御めんください。

お鐵　はい、はい。(手をふきながら玄關に出る)

與助　お早うございます。

お鐵　お早うございます。お氣の毒でございますが、先生は今お留守でございますよ。

與助　代脈さんは……。

お鐵　代脈の良仙さんもちよいと出ましたが、もうやがて歸りませうから、內へあがつて少しお待ちなすつたら何うですえ。

與助　ありがたうございますが、けふは藪入りで店の者がみんな出てゐますから、又出直してうかゞひませう。

お鐵　お店は御遠方ですかえ。

與助　はい。市ケ谷でございます。子供がすこし寢冷えを致しましたやうでございますから、見ていたゞきに參りました。

お鐵　それはいけませんね。まあ、お大事になさいまし。

與助　では、又うかゞひます。

(與助は會釋して、子供をつれて去る。お鐵は表をみる。)

お鐵　先生が留守だといふのに、代脈さんが朝湯なんぞへ行つてゐちやあ仕様がない。ほんたうにだらしのない家だねえ。

(お鐵は內に入りて再び縁側を拭いてゐる。下のかたより良仙は稍や蒼ざめたる顏、湯歸りのこゝろにて濡手拭を持ちて出づ。)

良仙　(內に入る)今歸つて來ましたよ。

お鐵　お歸んなさい。そこらで子供を連れた人に逢ひませんでしたかえ。

良仙　いゝえ。誰か病人が來たのかね。

お鐵　(不平らしく)さつきから既うこれで五人目ですよ。先生が病家まはりで忙がしいのに、お前さんが朝湯なんぞへ行つてゐるもんだから、誰もゐないところへ病人やら藥取りやらが押掛けて來て、一々斷るのお氣の毒でしたよ。

良仙　でも、朝湯へでも行かなければ、どうも氣分がはつきりしないからね。このごろは毎晩おち〳〵と眠られないので困る。この間中むやみに忙がしかつたので、どうも神が疲れたとみえる。(ぼんやりと縁に出る)あゝ、隣では又琴を浚つてゐるのか。

お鐵　朝つぱら琴を彈いて……。なんと云つても山の手は

悠長ですね。わたしは今まで下町の方に奉公してゐたので、どうも氣が短くつていけませんよ。

良仙　いや、わたしも隨分氣のみじかい方だが、この頃はなんだかぼんやりしてしまつた。（頭をおさへてゐる）

お鐵　もし、そこらに立つてゐると邪魔になりますよ。（良仙の足下をふく）

良仙　（一足づつ逃げながら）　あゝ、好い天氣になつたな。

お鐵　このあひだの雨から急に秋らしくなりましたね。

良仙　（ぞつとして）　この間の雨から……。さうだ、このあひだの雨から急に涼しくなつたな。

（下のかたにて「お精靈さまのお迎ひお迎ひ」と呼ぶ聲きこゆ。）

お鐵　なにしろもうお盆の十六日ですからね。ちつとは時候も凌ぎよくなりませうよ。

（良仙は濡れ手拭を持ちたるまゝにて、疊の上にぐたりと坐る。お鐵は縁側を拭いてしまふ。）

お鐵　あさ湯に這入つておつかりしましたかえ、けふは番頭さんの貰ひ湯ですね。

（良仙は默つてゐる。）

お鐵　もし、その手拭を臺所へ持つて行つてあげませう。

良仙　手拭……。（又ぎよつとする）　むゝ、あつちへ持つて行つて掛けて置いてください。

（お鐵は良仙のぬれ手拭をうけ取り、雜巾と番手桶を持つて奥に入る。琴の音又きこゆ、良仙は又よろよろと起つて縁側に出で、琴の音を聽くともなしに、柱に倚りかゝつてゐる。向うより村井長庵は一刀をさし、病家より戻りし體にて、藥箱を持ちたる供の男を連れて出づ。少しあとより傳五右衛門、四十餘歲、刀屋の番頭の姿にて追つて出づ。）

傳五　もし、先生、先生、長庵樣。

長庵　（見かへる）　おゝ、遠州屋の番頭どの。わたしが出たあとで、なにか病人に變つたことでもござりましたか。

傳五　いえ、差當り何うといふこともございませんが、主人からの申付けで少々內密にうかゞひたい事がございまして……。

長庵　はゝあ、なにか知らぬが兎もかくも一緒にお越しなされ。

傳五　はい、はい。

（長庵は先に立ち、傳五右衛門はあとに附きて玄關先に來る。）

供の男　お歸り。

（良仙は玄關に出て迎へる。長庵と傳五右衛門は內に入る。供の男は裏口へ廻るこゝろにて、下のかたの奥に入る。）

長庵　（良仙に）留守に病家の迎ひはなかつたか。
良仙　さあ、わたくしも湯に行つて居りましたので……。
傳五　あさ湯でございましたか。
長庵　その留守に急病人の迎ひでもあつたら何うする。氣樂な奴だな。
良仙　（恐れ入つて）はい。
長庵　奥へ行つて、お鐵に茶の支度をしろと云へ。
良仙　かしこまりました。早々に奥へゆく）
長庵　さて、番頭どの。御用はなんでござりますな。
傳五　ほかでもございませんが、主人が娘の眼病は、もう二月ほども先生の御厄介になつて居りますが、どうも捗捗しい驗が見えませんので、主人がひどく心配して居ります。
長庵　ごもつともでござる。お菊どのはひとり娘、やがて婿取りといふ間際になつて、症の知れぬあの眼病では、こなたも定めて御心配であらう。手前もお察し申します。
傳五　御承知の通り、手前の店も唯今では女主人、たつた一人の跡取り娘があの體でございますので、餘計に心配いたして居りますやうなわけでございます。そこで今日お見舞ひ下すつたときに、先生はひどく眉を寄せて溜息をついておいでの御様子。それが主人の眼につきまして……。
長庵　むゝ。（更に眉をよせる）
傳五　先生のあの御様子がどうも唯事でない。お前がすぐにあとを追つて行つて、先生の思召を内々でうかゞつて來てくれと斯う申しますのでございます。
長庵　それは御苦勞でござつた。長庵の顏色が御主人の眼につきましたか。
傳五　はい。それを主人は大層氣にかけて居りますので……。（一膝すゝめる）先生。主人の娘の眼病は餘程むづかしいのでございませうか。
長庵　さあ。（迷惑さうに考へてゐる）
傳五　くどくも申すやうでございますが、病人は遠州屋のひとり娘、もしもの事がございましたら家の血筋も絶えるやうになりますので、わたくし共も心配して居ります。就きましては先生の御見立てを御腹藏なく仰しやつて頂きたいのでございますが……。
長庵　みなさんの御心配は長庵いくへにもお察し申す。ついては内密に申上げるが、お店の娘御の眼病は内障病でござる。
傳五　（おどろく）え。内障病でございますか。
（奥よりお鐵は茶を持つて出で、長庵と傳五衛門にすゝめる。）

お纖　お茶を一つおあがりなさいまし。

傳五　ありがたうございます。

（お纖は會釋して奥に入る。）

傳五　（待兼ねたやうに）そこで、先生。內障眼（そこひ）と申しますと、眼が潰れるのでございませうか。

長庵　（嘆息する）お氣の毒だが難病でござる。初めはよもやと存じて居つたが、けふといふ今日たしかに見きはめました。娘御の眼病は癖の悪い內障眼で、このまゝにして置いたら、早くて二月か三月、遲くも半年のうちには、兩眼ともに潰れませう。しかし左樣なことを病人の耳に入れてはならぬ。かならず迂濶に他言なさるなよ。

傳五　と申しましても、主人にだけはどうしても打明けなければなりません。就きましては、先生。あの病氣にかぎりましては、どうにも療治の法はないものでございませうか。

長庵　ないとも限りませぬが、なにぶんにも金がかゝるので、大抵の病人もあきらめ、醫者も手をひくと云ふわけでござる。

傳五　（よろこぶ）では、先生に願ひましたら、御療治がかなふのでございますか。

長庵　十に九つはお請合ひ申す。

傳五　お請合ひ下さいますか。

長庵　長庵におまかせ下されば、唯今も申す通り、十に九つは本復させてみせませう。但しなにぶんにも難病のことであれば、高價の藥を用ゐて氣長に療治をいたさねばならぬ。その藥代は一日に二三兩、一ヶ月におよそ百兩はかかりませうか。それを半年か一年もつゞけて用ゐたら、さすがの難病もおそらく平癒することと存じて居ります。とは云ふものゝ、いたづらに病家を騙して莫大の藥代を貪るやうに思はるゝも心苦しい。手前決して無理にはおすゝめ申さぬ。よく／＼御勘考の上になされたが宜しからう。

傳五　はい、はい。よく判りましてございます。では、早速に主人とも相談いたしまして、あらためて御挨拶に出るでございませう。どうも飛んだ御邪魔をいたしました。

（傳五右衞門はそは／＼して起ちあがる。）

長庵　もうお歸りでござるか。良仙、良仙。

良仙　はい、はい。

（良仙は奥より出づ。）

良仙　遠州屋の番頭さん。御病人はいかゞでございますな。

傳五　それで唯今も先生に……。

長庵　（眼で知らせる）おかみさんにも宜しく……。

傳五　では、又うかゞひます。どなたも御免くださいまし。

（傳五右衞門は早々に立歸る。）

良仙　あの人はひどくそは〳〵して居りましたな。

長庵　はゝ、嚇して遣つたら膽をつぶして歸つた。

良仙　おどして遣つたとは……。

長庵　遠州屋のひとり娘、家中で大切にしてゐるのを知つてゐるので、內障眼で眼が潰れると嚇してやつたら、番頭め蒼くなつて歸つて行きやあがつた。はゝゝゝゝ。

良仙　では、ほんたうの內障眼ではないのでございますか。

長庵　なんの、鳥渡した逆上眼だ。番茶で洗つて置いても大抵は自然に癒るだらう。それを仰山に嚇かして、藥代が毎月ざつと百兩宛、半年か一年もつゞいて取りあげたら、まあ當分の小遣ひには困らねえといふものだ。

良仙　それで遠州屋がたのみに來ませうか。

長庵　山の手では指折りの刀屋で、唸るほどの金を持つてゐる遠州屋だ。ひとりの娘を盲にやあ出來ねえから、きつと頼みに來るに相違ねえ。今からかんがへると、施し療治の山がやつぱり當つたな。

良仙　去年の三月頃まではまつたく苦しうございましたが、それからだん〳〵に運が直つて來て、一年ばかりのあひだに病家がめつきりと殖えてまゐりました。

長庵　おれが正直眞面目のあひだは、ちつとも商賣が流行らねえで、こんな道樂者になつてから、却つて病家が殖えるとは世の中は不思議なものよ。しかし風藥の葛根湯を盛つてゐるくらゐぢやあ、些とやそつと病家が殖えても、大して香ばしいこともねえが、そのなかには今のやうな好い鴨も舞ひ込んで來るから、玄關はまあ少しでも賑かいが可いかも知れねえ。ときに良仙、貴樣にすこし聞きてえことがある。

（奥に氣をつけろと頭で知らすれば、良仙は心得て奥をのぞく。長庵は緣側に出てあぐらを搔く。）

長庵　（白扇を使ひながら）良仙　貴樣はこの二三日なんだか顏の色が悪いな。醫者の不養生で、この暑さにでも中つたか。

良仙　え。

長庵　脈をみねえでも貴樣の病氣は大抵わかつてゐる。これ、貴樣は伊勢屋の忰をどうした。

良仙　え。

長庵　千太郎をどうしたよ。

良仙　え。

長庵　伊勢屋のせがれを廣德寺前で眠らしたのは誰だよ。

（良仙はだまつて俯向いてゐる。）

長庵　師匠がお手本をみせてゐるから、弟子に小言も云へねえが、貴樣も隨分思ひ切つて荒つぽい療治をするな。

（良仙は矢はり默つてゐる。）

長庵　お梅の小夜衣を家へ連れて來たのも、あいつを玉に

して伊勢屋へかけあひを付け、纏まつた金を絞り出さうと思つたのだが、肝心の千太郎を闇へ葬つてしまつちやあ何うにもならねえ。とんだ馬鹿を見たものよ、まつたく元も子もなくしてしまつた。しかし貴樣も肩揚げのある時からおれのところへ弟子入りをして、これまで隨分働いてくれたのだから、おれの方にも謝酬はある。お梅を連れてどこへか姿を隱してしまへ。

良仙　え、お梅さんと一緒に……。

長庵　さうだ。廣德寺前の死骸を古着屋の久八が見つけたが、世間體を憚つて竊と駕籠にのせて伊勢屋へ送り込んだらしい。あすこも金のある家だから、急所急所へよろしく手をまはして、表向きは急病といふことにして、すぐに燒場へ送つたやうだ。それで先づ一旦は濟んだやうなものゝ、忠義者の久八や利かねえ氣の女房がこのまゝ泣寢入りにしてしまふ筈がねえ。なにかの手がかりを見つけ出して、主人のかたきを探しあてようと、內證で苦勞してゐるに相違ねえから、おそかれ早かれ知れさうなことだ。面倒のねえうちに早く逃げろ。お梅といふ道連れがあれば、まんざら寂しいこともあるめえ。

良仙　ありがたうございます。さう云ふことなら今夜にも支度をして、一先づ故鄕の甲州へ立退きませう。

長庵　お梅にはおれがよく因果をふくめて遣る。かんがへて見りやあ彼奴も可哀さうな女だ。道中も勦つて遣つてくれ。

良仙　かしこまりました。

長庵　たとひ何んなことがあつても、堺屋の番頭の一件は口外するなよ。

良仙　先生の御迷惑になるやうなことは、骨が舍利になつても決して申しませんから、かならず御安心下さいまし。

長庵　ぢやあ、二階へ行つてお梅にもよく云ひ聞かせて來よう。あいつも半病人で困つたものだ。

（長庵は奧に入る。良仙は夢のやうにぢつと考へてゐると、下のかたより早乘三次出づ。良仙はやがて又急に起ちあがる。）

良仙　さうだ。おれもぼんやりしてはゐられないのだ。

（良仙はあわてゝ奧へ行かうとする時、三次は玄關にて聲をかける。）

三次　御めんなさい。

良仙　（ぎよつとして）どうれ。

（良仙は不安らしく玄關へ出て、三次と顏をみあはせる。）

良仙　（ほつとして）あゝ、三次さんか。

三次　急に涼風が立つて來ましたね。四五日前にくらべると、まるで暦が違つたやうだ。

（云ひながら三次は内に入る。）

良仙　まつたくけふは涼しくなつたね。

三次　もう朝晩は涼しいのがほんたうさ。なにしろお盆も過ぎて、けふは地獄の釜の蓋があくと云ふ日だからね。

良仙　地獄の釜……。

三次　だつて、お前。きのふと今日は藪入りぢやあねえか。お閻魔樣が書入れの日だ……。

良仙　お閻魔樣が……。

三次　さうさ。どうでおれ達は極樂の方にやあ縁が無さゝうだから、今も出がけに淺草のお閻魔樣を拜んで、宜しくおねがひ申して來たのさ。時に大將はゐるかえ。

良仙　なんぼ懇意づくでも、こゝの家へ來たら大將などとは云はないことだ。

三次　ぢやあ、やつぱり先生かえ。ところで、その先生はどうしましたね。

良仙　病家から歸つて、奥で休んでゐられるから、少しこゝに待つてゐるが可い。

三次　この頃はめつぽふ流行ると見えるね。それぢやあ今までのやうに飲みあるいてもゐられめえ。實はけふ出て來たのは外でもねえが、丁字屋の小夜衣はその後どうしたね。相變らずこゝの家に隱まつてあるのかえ。

良仙　さあ。（躊躇してゐる）

三次　隱しちやあいけねえ。伊勢屋の方へかけあつて何とか金にすると云つて、玉をこつちへ引揚げたぎりで、けふまで何にも沙汰がねえから、その樣子を見とゞけに來たのさ。丁字屋の方からむづかしく云つて來る。わつしも仲に立つて困つてゐるんだが、なんとか早く埒が明かねえものかね。

良仙　それは先生の料簡次第で、わたしにはなんとも返事は出來ないが……。

三次　どつちにしても小夜衣はこゝにゐるんだらうね。それとも又、ほかのところへ預けてあるのかえ。おい、良仙さん。焦らしちやあいけねえ。正直に云つて呉んねえよ。

（良仙は躊躇してゐる。下のかたより遠州屋の番頭傳五右衞門再び出づ。）

傳五　御めんください。

良仙　はい、はい。

（良仙は起つて玄關を覗きしが、あわてゝ引返して來て三次の腕をつかみ、早く奥へゆけと引立てる。）

三次　（おどろく）なんだ、何だ、無暗なことをしちやあ不可ねえ。腕が拔けるぢやあねえか。

良仙　なんでも可いから、早く、早く……。

三次　こゝにゐちやあ惡いのかえ。そんならさうとはつき

り云ふが可いや。

（三次はぶつ〳〵云ひながら奥に入る。）

良仙　（玄關に出る）おゝ番頭さん。どうぞこちらへ…。

傳五　又お邪魔に出ました。（内に入る）　先生はお宅でございませうか。

良仙　（思案して）　實はあの、ちよつと近所の病家へ見まはりに出られました。

傳五　左樣でございますか。（これも少し思案して）　では、おまへ樣に願つてまゐりませう。

良仙　はい。

傳五　先刻お話しの一件は、主人とも篤と相談いたしました處、なにぶん先生におまかせ申しますれば、思召通りの御療治をおねがひ申しますと、かやうに申して居りました。

良仙　では、先生におまかせなさると云はれますか。

傳五　左樣でございます。就きましてはなか〳〵高價のお藥が御入用と申すことでございますから、當座の御藥禮として金百兩持參いたしました。どうぞお受取りを願ひます。（二包みの金を出す）

良仙　御藥禮として金百兩、たしかにおあづかり申しました。では、受取を一筆かいて差上げませう。しばらくお待ちください。

（良仙は金包みを持ちて奥に入る。下のかたより以前の與助、今度は一人にて出で來りて、玄關口より内をうかゞひゐるところへ、矢はり下のかたより二幕目の岡つ引政八出で來りて、與助となにか囁き合ひ、ふたりは下のかたへ引返して去る。奥より良仙は受取を持ちて出づ。）

良仙　いづれ先生から改めて御挨拶がございませうが、これは當座の受取證、型の通りにしたゝめて置きました。

傳五　はい、はい。（受取をあらためて懷中する）　では、先生がお歸りになりましたら、どうぞ宜しく仰しやつてください。

良仙　承知いたしました。御主人にもよろしく願ひます。

傳五　取急ぎますれば、これでお暇申します。

（傳五右衛門は良仙に送られて玄關に出で、挨拶して立去る。良仙は懷中より彼の金包みを出してみる。）

良仙　これを路用に……。いや、やつぱり正直に先生に見せなければなるまい。

（この時、奥にて騒がしい物音。良仙はあわてゝ金づつみを懷ろに押込みながら引返して來る時、奥の襖を暴くあけて、三次は窶れたる姿の小夜衣を無理に引立てゝ出づ。良仙はおどろいてその行手に立ち塞がる。）

良仙　これ、三次さん。どうするのだ。

三次　どうするものか。大事の玉をいつまでも引揚げて置かれちやあ俺が迷惑だ。

良仙　では、よし原へ連れて行くのか。

三次　あたりめえよ。

（三次は良仙を突き退けて行かうとするところへ、奥より長庵出づ。）

長庵　これ、これ、三次。貴樣も野暮だな。しづかに話しても判るぢやあねえか。丁字屋で貰ふくらゐの禮金は、おれが立換へて遣るといふのに……まあ、おとなしく坐れよ。

小夜衣　もし、叔父さん。もうかうなつたら寧そのこと、わたしを吉原へ戻してくださりませ。

三次　それ見ねえ。當人も素直にさう云つてゐるぢやあねえか。

良仙　でも、先生のお考へもあらうから、まあもう少し待つがよからう。

（良仙は無理に三次を押据ゑる。）

長庵　お梅。おまへは丁字屋へ歸りたいか。

小夜衣　一旦は歸らないと云ひましたが、千太郎さんが世にない上は。

良仙　え。

小夜衣　いつそ一思ひに死んでしまふか、それとも思ひ切つて吉原へ歸るか、二つに一つ。それよりほかに仕樣はござんせぬ。

（小夜衣は泣き伏す。長庵は良仙と顔を見あはせる。）

長庵　そんな捨鉢をなぜ云ふのだ。先刻からあれほど云つて聞かせたのが判らねえか。おい、三次。たとひ當人がなんと云はうとも、もう一度よし原へ歸して遣るのはあんまり殺生だ。まあ、二三日おれにあづけて置いてくれ。貴樣は急に丁字屋へ義理立てをして、おれにばかりがみ〳〵云ふが、第一このお梅を丁字屋へ賣つた金は、貴樣がみんな早乘つてしまつて、滿足にこつちへは渡さねえぢやあねえか。

三次　その代りおれだつてお前の御用を勤めてゐらあな。お前のこしらへた僞物の熊の膽を、田舍者に化けて賣つてあるいたり、御典醫の名前を騙つて、藥屋から眞珠や人參をまきあげたり……。

長庵　まあ、大きな聲をするな。

三次　そんなことを一々かぞへ立てたら、去年から今年へかけてこの小夜衣の身の代ぐらゐは疾うに埋合せが付いてゐる筈だ。可哀さうに、おれも隨分働いてゐらあな。

長庵　だから、働かねえとは云やあしねえが、それとこれとは又別の相談だ。なにしろ、お梅はもう些と置いてくれ。おれも今日中には纏まつた金の這入りさうな心當り

があるから、あしたの午過ぎに出直して來てくれ。きつと無駄足はさせねえから。

三次　おかしの先生とは違ふから、なんだか的にやあならねえな。

良仙　それはわたしも乾と請合ふ。先生におねがひ申して、十兩や廿兩はかならず貰つてあげるから。

三次　大丈夫かえ。

長庵　貴樣がかれこれごた付くとも、つまりはお梅を丁字屋へ渡して、いくらか禮金を貰ひたい下心だらう。どつちから貰つても、金にさへなりやあ同じことぢやあねえか。

三次　そりやあまあそんなものだが、こゝの御屋敷はお拂ひが好くねえからな。

長庵　馬鹿をいへ。瘦せても枯れても村井長庵樣だ。貴樣に損をかけるやうな事は、そつちから賴まれても爲やあしねえ。

三次　べらぼうに風呂敷は大きいが、まあ話半分に聞いて置いて、けふはおとなしく歸らうかな。

小夜衣　いえ、いえ、やつぱりわたしはお前と一緒に……。

三次　え。やつぱり行きてえのか。

小夜衣　どうぞ吉原へ連れて行つてくださりませ。

長庵　まだそんなことを云つてゐるのか。これから吉原へ歸つて見ろ。ほかの朋輩の見せしめに、素つ裸にして荒繩で縛しあげ、三日三晩も土藏のなかへ叩つ込んで、割竹でぴし／＼引つ叩かれるぞ。

小夜衣　えゝ。

長庵　それが怖ければこゝにぢつとしてゐろ。叔父さんは決して惡いやうにはしねえ。

小夜衣　でも、わたしは甲州とやらへは……。

長庵　えへん、えへん。なにを判らねえことを云ふのだ。良仙。こいつを奥へ連れて行け。

小夜衣　いえ、いえ、わたしは仇の良仙さんとは……。

長庵　まあ、まあ、なんでも可いから奥へ行け。

（長庵は捨臺詞にて、忌がる小夜衣を引立てゝ無理に奥へ連れ込む。良仙もついてゆく。）

三次　（あざ笑ふ）　良仙坊主もあの女にやあ餘つぽど鈍くなつてゐやあがる。

（云ひながら三次はあたりを見まはして窺と玄關に出で、更に表を見まはしてゐると、下のかたより政八出づ。）

政八　三次、どうだ。長庵はもう歸つたな。

三次　へえ　長庵も弟子坊主も内にゐます。丁字屋の小夜衣もたしかに二階に隱してあります。

（下の方より石子伴作は町人すがたにて風呂敷包みを

かゝへて出づ。）

政八　お聞きになりましたか。

伴作　（伴作は無言にうなづき、二人にあちらへ行けと眼で知らせる。三次と政八は下のかたに去る。）

伴作　（玄關に來る）御めんください。

（奥よりお鐵出づ。）

お鐵　はい、はい。どなたでございます。

伴作　（やはり町人風に）先生に御診察を願ひに出ました者でございますが……。

お鐵　どちらからお出でになりました。

伴作　四谷からまゐりました。

お鐵　けふは遠方の御病人がよく見える日だ。こつちへ上つて少しお待ちくださいまし。

（お鐵は奥へ引返してゆく。伴作はあとより内に入りて、あたりを見まはしながら座に着き、扇を使つてゐる。やがて奥より長庵出づ。）

長庵　いや、お待たせ申しました。（伴作の顔をみる）おゝ、こなたは……。

伴作　先日は失禮いたしました。

長庵　馬道の居酒屋でお目にかゝつたお人でござつたな。

伴作　あの時はなんにも知らずにお別れ申しましたが、あとで承はりますれば、おまへ樣は麹町の平河町で村井長庵樣といふ名高いお醫者樣と申すこと。わたくしは四谷の入口に住んで居りますもので、左のみ遠いところでも無し、あの時お目にかゝつたのを御縁に、一度御診察をねがひたいと存じまして、今日わざ／＼伺ひましたのでございます。これは詰らぬものでございますが、ほんの手土産のしるしに御覽に入れます。

（伴作は風呂敷包みをあけて菓子折を出す。）

長庵　これは御丁寧なことで痛み入ります。あの節には手前はなはだ酩酊いたして居りまして、取亂したる體たらくを御覽に入れ、まことに面目次第もござりませぬ。

伴作　いえ、いえ、何事によらず名人上手と云はるゝお人は、ふだんの行ひに些とも構はぬのが昔からの習とかうけたまはつて居りますれば、なまじひに行儀を正しくして權式張つてゐらるゝ人よりも、却つて奥床しく存じられます。

長庵　いや、さう申されるといよ／＼痛み入ります。して、こなたのお住居は四谷の何の邊でござるな。

伴作　傳馬町でござります。

長庵　して、御病症は……。

伴作　多年脾胃を損じて居りまして、諸方の高名のお醫者の御療治をも受けましたが、どうも捗々しくまゐりませんので困つて居ります。

長庵　脾胃を損じて居らるゝか。このあひだの御樣子では
　餘ほど御酒をまゐると見えますな。
伴作　それがどうも宜しくないやうでございます。
長庵　まつたく宜しくない。大酒のお方は兎かくに脾胃を
　損じ、果は吐血など致さるゝお人もござる。先づなによ
　りも御酒を控へられねばなりますまい。
伴作　かしこまりました。して、脈を見て頂けませうか。
長庵　勿論、お脈を拜見いたしませう。（腰にさしたる扇
　をぬいて下に置く）もう少しお進みください。
伴作　はい。
　（伴作は一膝すゝめて左の手を出す。）
長庵　いや、右から先へ……。
伴作　はい。
　（伴作は右の手を出すと、長庵は不意に扇を把つてそ
　の手首を強く撲つ。）
伴作　あ痛。これは何うしたことでございます。とんでも
　ない御常談をなさいますな。（手首をさすりゐる）
長庵　（あざ笑ふ）とんだ御常談とはこちらで申すことで
　ござる。
伴作　え。
長庵　竹刀胝で固まつてゐる手の先を、一つぐらゐ撲たれ
　ても左のみお痛みはござるまい。このあひだ馬道で見受
　け申したときにも、どうも唯のお人でないと存じたが、
　今日かさねてお目にかゝつて、いよ／＼正體を見とゞけ
　ました。お手前は立派なお侍、おそらく町奉行の御家來
　でござらうな。とんだ御常談と申すはこゝのこと。町醫
　者なれど長庵も長袖の身の上、なにか御不審の筋がござ
　らば、なぜ御奉行所へお召出しの上で、御奉行直々のお
　調べはござらぬ。御家來のお手前が町人に姿を變へ、療
　治にことよせて當家へ入込み、若しこちらが何心なく脈
　を取らうと致したら、すぐに其手を引つ捉へて繩を打た
　うとする巧みでござらう。
伴作　むゝ。
長庵　（又笑ふ）そのやうな御常談をなさるゆゑ、手前の
　方でも鳥渡常談をいたしたばかり。失禮は平に御めんく
　だされ。
　（伴作は圖太い奴だといふ思入れにて、これもおなじ
　く打笑む。）
伴作　さすがは長庵、眼が高いな。いかにも拙者は町奉行
　大岡越前守殿の家來石子伴作、御用あつて其方を召捕に
　まゐつた。
長庵　そのお召捕がわかりませぬ。なにかお調べの筋がご
　ざりますれば、町役人家主附添ひの上で何時でも御奉行
　所へ出頭いたしませう。御用のお聲を聞かされてお繩を

頂戴いたしますのは、村井長庵近ごろ迷惑に存じます。

伴作　召捕るべき仔細あつて召捕にまゐつた以上、兎やかくと論は無益だ。尋常に立て、立て。

長庵　どうでもお繩をかけられますか。

伴作　但し其方手向ひいたすか。

長庵　上役人に對しまして、なんで御手向ひなど致しませう。尋常にお供するでござりませう。たゞ心得のために承はり置きたうござりますのは、このたび長庵を御吟味とある、その御用の趣は何事でござりますな。

伴作　委細は大番屋にて申聞かせるであらうが、先づ其方に御用とあるは、麹町の藥種渡世堺屋清兵衞方の奉公人金兵衞を毒害の件。

長心　（多寡をくゝりし體にて）それだけでござりますか。

伴作　早乘三次と申合せて、御典醫の名をいつはり、日本橋本町の藥種問屋より人參眞珠のたぐひを騙り取るばかりか、僞物の熊の膽を作つておなじく三次に賣りあるかせ、諸方より少からぬ金子をあざむき取る。またその上に、怪しき睡り藥を用ゐて病家の女子どもを惑はし、それを云ひがかりとして金子をゆすり取る。

（長庵はうつむいたる顔をあげて、よく調べが屆いてゐるといふ思入。）

伴作　あるひは左もなき病氣を事々しく申立てゝ、不當の藥禮を貪るなど、それらの罪狀を一々こゝで數へ立てゝは居られぬ。ことに七月十日の夜、下谷廣德寺前に於て伊勢屋千太郎を縊り殺したるも、其方どもに御不審かゝる。どうだ、長庵。御用の御趣意、あらましは相判つたか。

長庵　（ずう／＼しく）唯今仰せ聞かされたる御不審の條條、一つも身におぼえない儀ではござりますが、兎も角もお供いたすでござりませう。それだけのお調べとござりましては、所詮二日三日では相濟みますまい。就いては相當の身支度も致してまゐりたう存じますが、暫時の御猶豫が願はれませうか。

伴作　無理ならぬ願ひ、格別を以て聞きとゞけて遣はす。早々に支度いたせ。

長庵　ありがたうござります。御慈悲にあまえて色々のことを申すやうでござるが、世間の手前、なにとぞ乘物をおあつらへ下さるまいか。

伴作　それも承知いたした。

長庵　重々ありがたう存じます。では、しばらく御免を蒙ります。手前決して逃げ隱れは致しませぬが、御用のお繩のかゝりし身の上、もし御疑念がござりますれば、なにとぞ奥まで御同道くだされ。

伴作　勿論のことだ。早くゆけ。

（作作、長庵に附添ひて奥へ入る。庭口の上のかたより小夜衣が逃げて出るを、良仙は追つて出づ。）

良仙　さあこの間に些とも早く……。（小夜衣の手をとる）さつきも先生から云はれた通り、この間に早く甲州へ……。（懐中より彼の金包みを出す）路用はこの通り持つてゐる。さあ、早く、早く……。

小夜衣　（身を藻掻いて振拂ふ）え丶、なんでお前と一緒に行かうぞ。今まで些とも知らなんだが、千太郎さんを廣徳寺前で殺したのは確かにおまへに相違あるまい。

良仙　なるほど千太郎の死んだのはほんたうだが、彼奴を殺したなどとは私の些とも知らないことだ。

小夜衣　いや、いや、知らないとは云はさせぬ。たしかにお前が殺した、殺した。（あべこべに良仙にむしり付く）これ、おまへはよくも／＼酷たらしく、千太郎さんを殺して置いて、けふまで素知らぬ顔をしてゐた。さあ、千太郎さんを元の通りに生かして返すか。

良仙　え。

小夜衣　それともせめてもの罪ほろぼしに、自分の罪を名乘つて出るか。

良仙　いや、そんなことは知らぬと云ふに……。

小夜衣　いや、知らぬ筈がない。さあ、千太郎さんを生かして返せ。

（小夜衣は狂氣のやうに良仙を小突きまはす。）

良仙　（宥めるやうに）それはおまへの思ひ違ひだ。先生はなんと云はれたか知らないが、まつたく私の知らないことだ。それもあとで委しく話すから、兎もかくも今のうちに……。（小夜衣の手を把りて引立てようとする）

小夜衣　（頭を掉る）そんな云譯は聞かぬ、聞かぬ。仇のおまへとなんで一足でも一緒に行かうぞ。

良仙　まあ、さう云はずに……。

（良仙は捨臺詞にて無理に小夜衣を引立てようとする機に、ふところの金包みが落ちる。矢はり上のかたの庭傳ひにて、岡つ引政八と與助が十手を持ちて出づ。）

政八　御用だ。

與助　神妙にしろ。

（良仙はもうこれまでと覺悟して、ふところより匕首を把り出し、ふたりを相手に防ぎ鬪ふ。小夜衣は二人に加勢するこゝろにて、雨落にならべたる小石などを拾ひて良仙に打ち付ける。そのうちに落ちたる金包みに眼をつけて拾ひ取り、良仙の顏を目がけて打ちつける、良仙は眼を撲たれてよろけながら、緣にどつかりと腰を落すところを、政八と與助は左右より押さへ付ける。小夜衣はがつかりしたやうに庭に坐りて眺めてゐる。）

二

三宅坂下の堀端。正面は低き草土手にて、その向うは堀をへだてゝ草土手の上に石垣。又その上には松の大樹が生ひ繁れり。水の音きこゆ。

（向うより石子伴作が先に立ちて、長庵を乘せたる辻駕籠をかゝせ、岡つ引仙造があとに附きて出で、上のかたへ行きかゝる時、あとより小夜衣が追つて出づ。）

小夜衣　（呼ぶ）もし、御役人さま、御役人樣。

（又そのあとより早乘三次が追つて出づ。）

三次　これ、飛んでもねえ。どうするのだ。（小夜衣をおさへる）

小夜衣　（おさへられながら呼びつゞける）お願ひでござります、お願ひでございます。

（その聲を聞きつけて、伴作は駕籠を停めさせる。）

伴作　（仙造に）なんだ、あの女は……。

仙造　あれは長庵の姪でございます。

伴作　むゝ、丁字屋の女か。

（そのうちに小夜衣は一生懸命に三次を突き退けて、駕籠のそばへ駈けて來る。三次は追つて來て彼女を引据ゑる。仙造は隔てる。）

仙造　なんだ、なんだ。科人のそばへ無暗に寄ることはならねえぞ。三次、なんだつてこんな者を追つ放して遣したんだ。

三次　追つ放した譯ぢやありませんが、こいつが氣違えのやうになつて駈け出して來るので、どうにも始末が付かねえんですよ。飛んだ御邪魔をして申譯がございません。

伴作　して、その女はどうしやうと云ふのだ。

（小夜衣は息が切れてべつたり倒れてゐる。）

三次　長庵が送りになる以上は、もう迚もこの世では逢はれめえから、ひと目見たいと云ふのでございます。

仙造　逢つたところで仕樣があるめえ。女はどうも未練だな。

伴作　折角來たものだ。逢はせて遣れ。しかし往來だ。長いことはならぬぞ。

三次　（小夜衣に）これ、お禮を申上げろ。

小夜衣　ありがたうございます。

（小夜衣は土に手をつく。仙造は駕籠の垂簾をあげると、長庵は着物を着かへて本繩にかゝり、口より血を吐いてゐる。皆々おどろく。）

小夜衣　あれ、叔父樣は……。

三次　おゝ、こりやあ一體どうしたんだ。

（伴作と仙造は立寄つて見る。）

伴作　長庵。いつの間に毒を飲んだ。

長庵　（苦しげに）睡り藥をのめば安々死なれるとは存じながら、おまへ樣に油斷がないのでそれもかなはず、手近にあつた砒霜を飲んでこの苦み……。して、良仙は如何いたしました。
伴作　良仙も召捕つて、やがて送つてまゐる筈だ。あの女になにも申すことはないか。
長庵　お梅。
小夜衣　（ゐざり寄る）はい。
長庵　おまへにも色々苦勞をかけたな。やい、三次。
三次　なんだ。
長庵　（聲を强くして）貴樣はおれの同類だが、よく生しやあ〳〵とそこらにゐられるな。
三次　手前の同類と云つたところで、おれは多寡がゆすりか騙りだ。手前達のやうな睡り藥や人殺しの兇狀持ぢやあねえから、お上にもありがたい御慈悲があるのだ。
長庵　（罵る）この野郎、白ばつくれるな。貴樣が訴人したのだな。
三次　え。
長庵　ざまあ見ろ。一言もあるめえ。飼犬に手を咬まれるとも知らねえで、今まで可愛がつて遣つたのが俺の盲だから、今さら愚癡はいふめえが、一度は友達附合をした仲だ。おれの面をよくおぼえて置け。

（長庵は駕籠のなかより血だらけの顏を突き出して、三次を睨む。三次はぞつとしてあとへ退る。）
三次　なんだ、なんだ。訴人して何が惡いんだ。これがお上への御奉公だぞ。恨みがあるなら化けて出ろ。
長庵　化けて出るほど未練な俺でもねえが、この死顏が眼について、これから每晩魘されるな。
三次　（薄氣味惡さうに）な、なにを云やあがるんだ。この三次はむかしから金と化物にやあ緣のねえ男だ。
伴作　重罪人の長庵、早く大番屋へ送り附けて、かなはぬまでも手當いたさねばなるまい。それ。
（駕籠屋は心得て駕籠のそばへ立寄る。長庵は再び口より血を吐きて苦む。小夜衣は思はず手をあはせる。三次は薄氣味惡さうに顏をそむけてゐる。時の鐘。水の音。）

――幕――

鳥邊山心中（一場）

登場人物

菊地半九郎
坂田市之助
坂田源三郎
菊地の若黨　八介
お染の父　與兵衛
若松の遊女　お染
おなじく　お花
花菱の仲居　お雪
ほかに仲居大ぜい

一

徳川時代。寛永三年十二月中旬の夜。京都祇園の茶屋常足の二重家體にて、上の方に床の間、續いて出入りの襖。庭には飛び石、石燈籠などあり。騷ぎ唄のやうな下方入りの鳴物にて幕あく。

（すぐに竹本の淨瑠璃になる。）

淨〽色里に、きて新らしき戀衣、お染と云へどどこやらに、染まぬ廓の風俗は、流石おぼこの町育ち。うき身はおなじ蠶蟲の、父をたづねてうろ〳〵と、座敷をぬけて忍び出で。

（奥の襖をあけて遊女お染、十七歳、あたりを窺ひながら出づ。）

お染　今お雪さんが耳打ちして、河原町の父さんがたづねて來たとのこと。はて、どこにゐさんすやら。

淨〽父の與兵衛は庭傳ひ、顏見あはせて。

（下の方よりお染の父與兵衛、五十餘歳の商人、風呂敷づゝみを背負ひて出づ。）

お染　おゝ、父さん。

與兵衛　娘か。

お染　よう來て下さんした。して、あの春着は出來ましたかえ。

與兵衛　（緣に腰をかける）おゝ、出來た、出來た。話はあとのこと。まあ見やれ。

淨〽包とく〳〵とりいだす、濃紫と黑綸子、男女の晴

小袖。

（與兵衛は風呂敷包みをあけて、黒とむらさきの着物二かさねを出す。）

お染　おゝ、ほんに見事に出來ました。父さん、たんとお禮を云ひまする。

淨へ父もほく／＼打ちうなづき。

與兵衛　はゝ、自慢するではなけれども、この染色を見てくりやれ。可愛い娘が廓へ來て來年は初の正月、どうかして人にひけを取らすまいと、おれも蔭ながら案じてゐたら、江戸のよいお侍衆になじみが出來て、春の衣裳もそのお客人にこしらへて貰ふと云ふこと。

お染　ほんに廓へ身を沈めてから、日數も淺いわたしとて、來る正月の紋日とやら物日とやらをどうしたものかと初めから案じてゐたに、店出しの晩からおなじみになつた江戸のお侍が、わたしのやうな者でも可愛がつてくだされて、夜も晝も揚げ詰め、ほかの座敷へはまだ一度も出たことがござんせぬ。まあ、喜んでくださんせ。

與兵衛　さあ、それぢやによつて、おれもそなたの爲、また二つにはその御客人の爲、なるたけ無駄な入費をかけずに、よい品をあつらへさせたいと思うたので、廓へ出入りの呉服屋をそつちのけに、おれが懇意の店へぢか掛合、半分値とまでは行かずとも、二割も三割も格安に仕立てさせた上に、これ見やれ、どうも云はれぬ染めの好さ。これなら誰に見られても恥かしいことは微塵もない。まあ、ちよつと手を通して見や。

お染　はて、おまへもまあ氣の短い。まだお客人にも見せぬうちに、手を通しては濟まぬこと。いづれ春になつたらな。

與兵衛　おゝ、是非一度はその衣裳を着た姿を……。

お染　見に來てくだんせ。

與兵衛　拜みに來ようか。（手をあはせる）

お染　あれ、父さんがてんがうばつかり。ほゝゝゝゝゝ。

與兵衛　はゝゝゝゝゝ。

淨へたち上りしがまた見返り。

與兵衛　あゝ、これ、まだお目にはかゝらぬが、その江戸のお侍といふお方にの。おれが好うお禮を申してをりましたと、忘れぬやうに申上げてくれ。よいか。

お染　あい、あい。

與兵衛　この頃は惡い風邪が流行るさうな。よう氣をつけ

たゞよいぞよ。
お染　あい、あい。
與兵衛　(ゆきかけて又立戻る)　それからなう。そのお侍
といふのはお酒を召上るかの。
お染　あい。隨分たんと飲みなさんす。
與兵衛　そりやもう、あなたが召上るのはどんなに召上つ
てもよいが、そなたはそのお附合をして、かならず無
理な酒を飲むまいぞ。勸めする身に無理酒は大毒ぢやと
云ふからの。
お染　よう合點してをりますする。
與兵衛　では、今云うたおれの言づてを必ず忘れてくれま
いぞ。よいか、よいか。忘れるな。
お染　あい、あい。さういふお前こそ歸る道を忘れさんす
な。
與兵衛　はゝ、こいつめ。いつの間にか廓の水にしみて、
そのやうな憎て口をおぼえたな。はゝゝ……。
淨へ笑うてこそは歸りけれ。
(與兵衛は下の方に去る。)
お染　あゝして父さんが喜んでゐさんすのもみんなあの半
樣のお庇、その揚げ詰めの御座敷をぬけ出して、いつま
でもこんな處にゐては濟まぬ。どれ、早う行きませう。
淨へ行きかゝるうしろより、出合ひがしらに。
(奧より菊地半九郎、二十二歲の江戶の武士、酒に醉
ひて出づ。)
お染　おゝ、お前は……。
半九郎　わしを置去りにして、今までどこに隱れてゐた。
座敷をぬけて忍ひ男にでも逢うてゐたか。
お染　あい。この樣な男に逢うてゐました(衣裳をみせる)
半九郎　おゝ、春着が出來たか。廓の習ぢやとか云うて、わ
しもそなたに釣合ふやうな新らしい小袖を誂へさせられ
たが、これが私のやうな武骨者に似合ふかな。はゝゝ
ゝ。まあ、よい、よい。兎もかくも仕舞つて置いてくり
やれ。したが、折角こしらへたこの小袖も、そなたと對
に着る日はないかも知れぬ。
お染　え、そりや又なぜでござんすえ。
半九郎　將軍家が江戶へお歸りの日が迫つた。とばかりで
は判るまいが、將軍家には先月はじめに御上洛、われわ
れも御旗本の一人としてお供の數に加はり、京に旅寢の
つれ／＼に測らずそなたと馴染をかさね、來春までは逗
留と思うてゐたに、元旦の拜賀は彼に御模樣がへと相成

り、當年内に當地をひき拂うて、江戸表へ御下向と今朝支配頭から觸れ渡された。この上は所詮逗留は相成るまい。遲くも五日か七日のうちには……。

お染　お別れになるのでござんすか。

淨〽あきれて詞も涙ぐむ。

半九郎　逢ふ夜の數は幾くとも、馴染んでから足かけ二月、さほどに深い仲でもなけれど、戀や情は扨置いて、まだ座馴れぬそなたの不憫さに、及ばずながら今日までは夜も晝もこゝへ來て、そなたの力ともなつたれど、侍は御奉公が大切、お供に外れていつまでもこゝに逗留は思ひも寄らぬこと。察してくりやれ。

お染　あい。（泣く）

半九郎　市之助が無理に強るので、今宵は例よりも飲みすごした。あゝ、醉うた、醉うた。どれ、お染。水を一杯くんで來てくれぬか。

お染　あい、あい。（奥に入る）

半九郎　おもへば不憫な。あゝ、醉うた。こりや堪らぬ。

（肱枕して倒れる）

淨〽無殘やお染は一時に、百年經たる窶れ顏、わかれと聞けば悲しさの、なみだに聲も顫はれて。

お染（出る）お冷を汲んでまゐりました　もし、半様。おゝ、いつの間にかうと〳〵と……。

淨〽男の寢顏をうちながめ。

お染　忘れもせぬ先月のなかば、わたしが初めて店出しの夜に、こゝへ呼ばれた初會の一座は、どなたも江戸のお侍、粗匆があつてはならぬぞと、親方さんから氣を付けられ。

淨〽怖々出るには出たれども、馴れぬ座敷の術なさに、唯なんとなく悲しくなり。

お染　廊下でひとりで泣いてゐたら、誰やらうしろからそつと來て、はて何を泣く。泣くほど悲しいことがあれば、わしが力になつてやると、見掛けは強さうなお侍が、さう云うて下された。

淨〽その嬉しさが身にしみて、今更おもへば恥しい。色の諸譯も知らぬ身が、歸るといふを引き止めて。

お染　無理に願うた緣むすび。店出しの初めから仕合せな客を取りあてたと、朋輩衆にも羨まれ、父さんにも自慢して、喜んだのもほんの束の間、やつぱりわたしは不仕合せに。

淨〽生れたものかと忍び音に、かこち歎くぞいぢらしき。俄に奧に賑はしく、浮かれ立つたる市之助、お花の手を取りよろめき出で。

（奧より坂田市之助、半九郎とおなじ年輩の侍。遊女お花の手をとりて出づ。お染は着物を床の方におく。）

市之助　（これも酒に醉ひたる體）これ、半九郎は何處に、どこに。おゝ、お染はこゝに……。半九郎も居たわ、ゐたわ。

お花　ほんに二人とも手の惡い。座敷をぬけて隱れ遊び、このまゝでは堪忍なりませぬぞ。なあ、市樣。

市之助　さうぢや、さうぢや。その罰には何がよからうな。なには兎もあれ、起せ、起せ。

お染　あい、あい。（半九郎をだき起す）もし、お連衆が見えましたぞえ。

半九郎　（眼をひらく）おゝ、市之助か。座敷をかへて飲み直さうといふ洒落か。面白い、面白い。

（起き直る。お染は水を出す。半九郎はのむ。）

市之助　さあ、仲居どもをこれへ呼べ。

（お花は手をたゝく。あい〳〵と答へて、奧より仲居大勢出る。或は燭臺を持ち、あるひは酒肴を運ぶ。）

市之助　さあ、さあ、陽氣に騷げ、さわげ。京で遊ぶもも う四五日ぢや。江戶へのみやげに面白いことのあるたけを盡して歸らう。

お花　折角からしてお馴染になりましたに、お名殘惜しいことでござんすな。もうこれ限りお目にかゝれまいかと思へば、心細いやうでなりませぬ。お染どのもそれを知つてかえ。

お染　あい。たつた今初めて聞きました。

市之助　聞いて定めて泣いたであらうな。はて、隱すな。白粉が淚でよごれてゐるわ。はゝゝゝ。これ、半九郎。お身はさつきからなぜ默つてゐる。面白い面白いという口の下から屈託らしい顏付、なんぞ仔細のあることか。

淨〽問はれて屹と顏をあげ。

半九郎　さて、市之助。お身とおれとは竹馬の友ぢや。遠慮なく賴みたいことがある。

市之助　あらたまつて何ぢやな。

半九郎　かやうな場所で申すも異なものぢやが、思ひ立つたら一晌も待たれぬ。この半九郎に二百兩の金を貸してくれぬか。と云うたところで、お身も旅先でそれだけの貯へはあるまい。お身は京の刀屋にしるべがあるさうな。わしの刀は備前物ぢや。その刀屋に談合して、二百兩に替へてはくれまいか。

淨〽市之助は眉をひそめ。

市之助　思ひもよらぬ頼みぢやが……。その二百兩のいりみちは……。

半九郎　京の鶯を買ひたいのぢや。

市之助　京のうぐひす……。はて、お身にも似合はぬ風流なことぢやな。（云ひつゝお染を見かへりて扨はとうなづく）むゝ。して、その鶯を江戸へ連れてゆくのか。

半九郎　いや、籠から放して遣ればよいのぢや。大方古巣へ戻るであらう。

お花　二百兩のうぐひすとは……もしやそこらに啼いてる……。（お染を見かへる）

市之助　いや、そなたの口を出すところでない。（眼で制して）さて、半九郎。見得の場所と云ひ滿座のなかで、それを打出すお身の心のうちは、市之助もよう察してゐるが、そりや惡い料簡、お身はあまりに正直過ぎやうぞ。

半九郎　え。

市之助　わしも鶯は大好ぢやで、行く先々でうぐひすを聞いてあるく。殊に京はうぐひすの名所、金に明かし、暇にあかして、思ふさま鳴かせてみたが、所詮は一時の興にすぎぬ。江戸へ歸れば又江戸の鶯がある。

半九郎　ぢやによつて、わしもその鶯を江戸へ持歸らうとは思はぬが、鳴く音があまりに哀ぢやゆゑに籠から放して遣りたいのぢや。半九郎は人も知つたる意地張ぢやが、生れつきから涙脆い男、ありあまる金を持つた身でも無し、家重代の刀を賣つて……。これ、察してくれ。

市之助　それも鶯を買ひ取つて、わが物にでもすることか。籠から放してやるだけに、家重代の寶を手放そとは、まだ分別が至らぬ、至らぬ。何事もさう一向には思ひつめぬものぢや。

淨〽取合ふ氣色もなかりけり。お染は悲しさ勿體なさ。心で窃と手をあはせ、泣くよりほかに事ぞ無き。

市之助　さあ、これで鶯の話は濟んだ。息のあるうちに行く先々で、面白いこと仕盡したいのが、われ等一生の願望ぢや。（杯を取る）さあ、つげ、つげ。

仲居　はい、はい。（酌をする）
市之助　半九郎も飲め、飲め。
半九郎　むゝ。わしも飲まう。（大きい椀を取る）　さあ、
これへついでくれ。
市之助　ほう、小氣味がよい喃。

淨〽笑ひさゞめく折柄に、坂田源三郎血氣の侍、苦り
切つてぞ打ち通る。

お雪　（下の方にて）　まあ、まあ、お待ちくださりませ。
（お雪は仲居の風俗にて、市之助の弟源三郎を止めな
がら出る。源三郎は十九か二十歳ぐらゐの侍、羽織袴、
大小にて、お雪を突きのけて庭先に入り來る。）
源三郎　兄上、これにお出でなされたか。
市之助　おゝ、源三郎か。なにしにまゐつた。
（源三郎は緣に上りて座につく。半九郎はだまつて酒
を飲んでゐる。）
源三郎　（苦々しげに一座を見かへる）　拙者は兄に火急の
用事があつてまゐつたもの。じやらけた女どもは見るも
目障りぢや。みな立て、……。

淨〽睨みまはされ、むつとして。

お花　おまへは市樣の弟御さうな。いつも〳〵親のかたき
でも尋ねるやうな、むづかしさうな顏ばかり。ちと兄さ
まを見習うて、おまへも粹にならしやんせ。江戸への土
産によい女郎衆をお世話しよ。京の女郎と大佛餠とは、
唯見たばかりでは旨味の知れぬもの。噛みしめて味ふ氣
があるなら、おまへも若いお侍、こちから身揚りして懸
るほどの心中者がないとも限らぬ。兄嫁のわたしが意見
ぢや、一座になつて面白う遊ばんせ。
源三郎　えゝ、つべこべと囀る女め。おのれ等の分際で、
武士にむかつて假にも兄嫁呼はり、戲れとて容赦はせぬ
ぞ。（刀を引寄せる）
お花　おゝ、何ぼわたし等のやうな果敢ないものでも、鱧
の骨切をみるやうに、さう安々とは切られまい。さあ、
兄さまの眼のまへで、見事わたしを切つて見やんせ。

淨〽冷み笑へば堪忍せず。

源三郎　おのれその頰桁を……。
（刀をひき寄せるを、お染をはじめ、仲居等は寄りて
支へる。半九郎は寢ころびて見物してゐる。）
市之助　源三郎、鎭まれ、鎭まれ。こゝをいづこと思うて
ゐるのぢや。

淨〽源三郎は膝つき寄せ。

源三郎　それは拙者よりお尋ね申すこと。兄上こそこゝをいづこと思召す。曩に御上洛の將軍家は俄にお歸りと觸れ出され、お供してまゐりし江戸の諸侍も、遠からず京地を引拂ふについては、上の御用は申すに及ばず、めいめいの諸支拂ひ買ひがかりも綺麗にすませ、江戸への土産物も買ひとゝのへ、親類中の年寄どもへは神社の護符も頂いて行かねばならず、きのふは愛宕、けふは鞍馬と、天狗のやうに駈け廻る。その忙しい最中に、みじかい冬の日を悠長らしい色里の居續け遊び、私の用向は拙者一人が手足を擂切らしても事はすめど、上の御用は一人が一人役、それでお前さまのお役が勤まりまするか、組頭の首尾がよいと思召すか。京三界まで一緒に連れ立つて來て、弟に苦勞さするが兄の手柄か。すこしは分別なされませ。

淨〽疊たゝいて云ひまくれば、一座も白けてみえにけり。兄も少しく持餘し。

市之助　もうよい、もうよい。なにも彼も判つた、判つた。兄もやがて歸るほどに、そちは一足先へ歸れ。

淨〽みえ透いた一寸逃れと、弟はなか／＼合點せず。

源三郎　いや、どうでお歸りなさるゝならば、拙者も一緒にお供申す。さあ、すぐにお支度なされませ。

市之助　それは無理といふものぢや。歸るには相當の支度もある。まあ、なんでもよいから先へ行け。（起ち上る）

源三郎　あ、兄上……。

市之助　はて、馬鹿堅い奴。野暮を申すな。

（市之助は奥に入る。お花もお雪も仲居等もつゞいて奥に入る。）

源三郎　えゝ、情ない兄上……。もう一度御意見して、無理にも連れて戻らにやならぬ。さうぢや。

淨〽起たんとするを引止め。

（今まで横になりゐたる半九郎は顏をあげる。）

半九郎　源三郎。待て、待て。

源三郎　おゝ、半九郎か。

半九郎　かやうな場所で立騷いでは見苦しい。今夜はおとなしう歸つたがよからうぞ。兄は乾とこの半九郎が連れて戻る。安心して歸れ、歸れ。

源三郎　いや、安心してはゐられまい。一つ穴の貉が安請合

を、眞にうけて歸られうか。兄がかやうな白痴を盡すも、お手前のやうな不しだらの朋輩があればこそぢや。よい朋輩を持つて兄は仕合せ、拙者屹とお禮を申すぞ。

淨へむしやくしや紛れの八つ當り。

半九郎　はゝ、そのやうに怒るものでない。お手前はまだ年が若いで、ひとばかり悪い者のやうに云ふが、兄は兄、拙者は拙者ぢや。兄が遊ぶと拙者が遊ぶとは、おなじ遊びでも心の入れ方が違ふかも知れぬ。まあ、なんにも云はずに歸れ、歸れ。

源三郎　歸らうと歸るまいと拙者の勝手ぢや。

淨へ又起ちかゝるをお染は取付き。

お染　半様もあのやうに云うてござれば、まあ、まあ、お待ちなされませ。

源三郎　えゝ、面倒な。退いてをれ。

淨へかよわき女を突き放せば、力餘つてよろ〳〵〳〵、倒れかゝりし膳の上、酒も肴も飛び散つたり。半九郎も短氣の男。

半九郎　やい、源三郎。年下の者と思うて和かにあしらうてゐれば、云ひたい三昧の悪口、仕たい三昧の狼藉、もう堪忍がならぬぞよ。素直に手をさげて詫びて歸れば可し、さもなくばおのれの襟髪を引つ掴んで、狗ころのやうに門端へ投げ出すぞ。

源三郎　はゝ、そのやうな脅しを怖がる源三郎でない。夜晝と無しに兄をさそひ出して、あたら侍を腐らせた悪い友達　江戸の侍の面汚しめ。そつちから詫びをせねば堪忍ならぬわ。

淨へ負けず劣らず軋み合ふ。そばにお染は手に汗にぎり。

お染　どちらがどちらとも云はれぬ此場の仕儀、ましてお二人ともにおなじ御朋輩、もうお互ひに料簡して……。

半九郎　いや、その料簡はもうならぬぞ。おのれこの半九郎を江戸の侍の面汚しと云うたな。その仔細を申せ。

源三郎　仔細は今更云ふまでもないことぢや。御用を怠つて遊里に入りびたる奴、それが武士の手本になるか。聞きたくば幾度でも云うて聞かす。菊地半九郎は侍の面よごし、恥さらし、武士の風上にも置かれぬ奴ぢや。

半九郎　おゝ、よう云うた。おのれも武士に向つてそれほ

どのことを云ふからは、相當の覺悟があらうな。
源三郎　おゝ、念にはおよばぬ。武士にはいつでも覺悟がある。

淨〽解けぬ詞の行きがかり、半九郎はつゝと立ち。

半九郎　問答無益ぢや。源三郎、河原へ來い。
源三郎　面白い、眞劍の勝負するか。

淨〽いづれも堪へぬ血氣と短氣、押取り刀でたち出づれば、お染ははつと氣もそゞろ。

お染　なんぼ侍衆ぢやと云うて、瑣細なことから云ひ募り、眞劍の果し合とは、あまりと云へば餘りの御短慮。これ拜みます、頼みまする。どうぞもう一度分別して、仲直りしてくださんせ。

淨〽拜みまはるをまた蹴放し。

源三郎　女が留むるを幸ひに、云ひ出した勝負をやむるか。卑怯者め。
半九郎　なんの……。さう云ふおのれこそ逃るなよ。

淨〽ふたりは緣より飛んで降り、さゝゆる女を刎ね退けて、河原へ走りゆく水の、あはれやお染は起ちつ居つ、人を呼ぶ間もあらばこそ、あとを慕うて……。

二

四條の河原。夜のけしき。所々に枯柳の立木などあり。水の音きこゆ。

淨〽ゆきゝさへ、暫し絕えたる夜の道、四條河原も冬ざれて、水の音のみ物さびし。

與兵衛　（出づ）あゝ、暗い晩ぢや。河原を通る方が近道のやうに思うてみたが、かう云ふ晚にはやつぱり町つゞきを步いた方がましであつたかも知れぬ。祇園を出てから路寄りをしてゐたので、思ひのほかに夜が更けたやうな。どれ、どれ、いそいで歸りませう。

（千鳥の聲きこゆ。）

與兵衛　おゝ、千鳥が鳴く。いつも聞き慣れてゐるものゝ、赤兒のなくやうな哀れな聲ぢや喃。はゝ、今頃は娘もあの春着を江戸のお客人にみせて、さだめて自慢してゐることであらう。おなじ勤めをしてゐても、あゝいふ力に

なる頼もしい客人があれば、親方の首尾もよし、娘も氣丈夫、おれも安心と云ふものぢや。おゝ、千鳥が又鳴くわ。千鳥も寒からうが、おれも寒い。かぜ引かぬうちに行きませう。おゝ、よい鹽梅に雲の缺けたところから薄月が出たやうな。

淨〽呟き〳〵行きかけて。

（與兵衛は下の方に去らんとして、上の方を見かへる。）

與兵衛　や、誰やら斬合うてゐる樣子。おゝ、刄物が光るわ。おゝ、おゝ、だん〳〵こつちへ斬結んでくるらしい。喧嘩か物取か知らぬけれど、傍杖の怪我せぬうちに、行きませう、行きませう。さうぢや。

淨〽やがて歎きの種ぞとも、知らぬ白髪の堅老爺、足をはやめて立歸る。

（與兵衛はいそいで立去る。水の音はげしく、上の方より半九郎と源三郎は斬りむすびながら出づ。月はをり〳〵に隱れて、二人は探りながらに鬪ひ、半九郎は遂に源三郎を斬倒す。月はまた明るくなる。）

淨〽ほつと一息月かげを、たよりにお染は走り付き。

（上の方よりお染走り出づ。）

半九郎　おゝ、お染か。

お染　半樣、お怪我はなかつたか。して、相手のお侍は……。

半九郎　この通りぢや。

お染　え。

淨〽ひと目見るよりぞつとして、齒の根もあはず顫へゐる。男は騷ぐけしきもなく、刀を鞘に收めても、をさまり兼ねし胸の闇、暗きに迷ふばかりなり。

（半九郎は源三郎の死體を片寄せ、河の水をすくひて飮む。お染も手眞似にて自分にも飮ませてくれといふ。半九郎は水を入れる物がないと云ふ思入にて、自分の襦袢の袖をひき裂きて水に浸し、お染の口にふくませる。千鳥鳴く。）

半九郎　かよわい女子が血を見たら、さだめておそろしくも思ふであらう。どうぢや、もう落ちついたか。

お染　はい、はい。

淨〽とは云ふものゝ案じられ。

お染　わたしはこんな勤めの女子、お武家の法はなんにも知りませぬが、かうして人ひとり殺しても、お前になんの御咎もござんせぬかえ。

半九郎　さあ、生れつき短氣の上に、酒には醉つたり、詞のゆきがかり、堪忍のならぬ羽目となつてあたら朋輩ひとりを手にかけたが……。今更思へば無分別。上洛のあひだは身持を愼み都の人に笑はるゝなと、かねて支配頭より觸れ渡されてあるに、場所は色里、酒の上の口論、しかも朋輩をうち果しては罪を逃れんやうもない。

淨へさすがに酒の醉さめて、半九郎は茫然と今更悔むも甲斐ぞなき。

お染　そんならやつぱりお侍でも、人を殺した罪はのがれず。

半九郎　尋常に切腹するか。但しは兄の市之助に仔細をうちあけ、弟のかたきと名乘つて討たるゝか。二つに一つのほかはあるまい。

お染　えゝ。

淨へ呆れて詞もなかりしが。

お染　おゝ、さうぢや。これを知つてゐるはわたし一人、ほかには誰も見てゐぬのを幸ひ、早くこゝを逃げてくださんせ。

半九郎　なにを馬鹿な。半九郎はそれほど卑怯な男でない。さしたる意趣も遺恨もないに、朋輩ひとりを殺したからは、潔よく罪をひきうくるが武士の道ぢや。若松屋のお染の客は人殺しと、あすは世間にうたはれて、そなたも肩身が狹からうが、それも因果ぢや、堪忍せい。

お染　なんの、なんの、勿體ない。あしかけ二月明暮れに、不憫を加へてくだされた、御恩は山ほどあるものを　まだそればかりか立ち際に、重代の刀を手放しても、わたしを受出して親許へ歸して遣らうの思召は、あんまり冥加がおそろしく、心で拜んでをりました。もし、半様。どうでも死なねば濟まぬなら、一緒に死なしてくださんせ。

半九郎　いや、それもまた無分別。よしない義理をたて過して、この半九郎に命までも呉れようとは、親の歎きを思はぬか。

お染　その歎きを思はぬではなけれども、おまへと云ふものに取縋り。

淨へわたしは今日まで生きてゐた。

お染　さつきあの祇園の茶屋で、もうお別れと聞いた時から、心は疾うに。

淨へ死んだも同樣。

お染　日本中に二人とない、たのもしいお人に引分かれ。

淨へ年期のながい勤め奉公、どう辛抱がなるものぞ。

お染　店出しの宵からお前さまの揚詰で、汚れのない妾のからだは。どこまでも半樣ひとりを夫として、清い一生を送りたさ。

淨へ聞き分けてたべ、察してと、身をなげ伏してぞ泣きゐたる。

半九郎　わしもそなたを色里に沈めて置くがいぢらしく、身うけして親許へと、思ひしことも食ひ違うて、かうなるからは寧そのこと、そなたを殺すはそなたを救ふ、慈悲の殺生であらうも知れぬ。濁りに沈んで濁りに染まぬ、清い處女と戀をして……。

お染　死ぬる際まで離れずに……。

半九郎　そんならこゝで……

お染　あゝ、もし。(さゝやく)

半九郎　なるほど、屍を河原に曝さうよりも、いかなる人も遂にゆく鳥邊の山を死場所と……。

お染　折角こしらへた二人の春着を、あたら形見に殘さうよりも、死んでゆく身の晴小袖。

半九郎　ものゝふも討死と覺悟すれば、鎧物具みごとに拵裝ち、立派に死ぬるが世の習ひ。

お染　忍んで茶屋へ引返し。

半九郎　死裝束を取つて來ようか。お染、來やれ。

お染　あい。

淨へ風にみだるゝ枯柳、まねくがまゝに引かれゆく。

(二人はあたりをうかゞひながら上の方に忍び入る。下の方より半九郎の若黨八介足早に出づ。月はまた隱れる。)

八介　やれ、暗いことぢや。折角月が出たと思うたに、雲めがまた邪魔をし居つた。

(上の方より仲居お雪出で來りて、思はず八介に突き當る。)

お雪　おゝ、御免なされませ。

八介　さう云ふのは仲居のお雪殿ではないか。
お雪　ほんに八介殿でござんしたか。
八介　支配頭から火急のお招きで、旦那のお迎ひに來たのぢやが、いつもの通りおいでであらうな。
お雪　さあ、それが大變。おまへの旦那の半様は市様の弟御と果し合をなされうとて、この河原の方へ來られたとやら。
八介　え。して、して、それはいつのことぢや。
お雪　たつた今のことでござんす。
八介　たつた今なら何處ぞで太刀の音の聞えさうなものぢやが……。なんにしても其れはまことに一大事ぢや。（上の方へ行かうとする）
お雪　もし、もし、そつちではござんすまい。
八介　ではこつちか。（下の方へ行きかけて）いや、こつちはわしが今來た路ぢや。なんにしても斯う暗うては埒があかぬ。早う提灯を持つて來さつしやれ。
お雪　合點でござんす。
（お雪は行きかけてつまづき、透しながらに上の方に引返す。）
八介　さあ、さあ、大變なことが出來てしまうたぞ。なんで又、市之助様の弟御と果し合なぞなされたのか。え丶、かうしてゐても氣が揉める。無駄とは知りながらもう一度こつちの河原を探して見ようか。（下の方に入る）
（時の鐘、これより竹本の出語りになる。）
淨（ひとり來て、ふたり連れ立つ極樂の、清水寺の鐘の聲、九つ心くらき夜に、捨つるこの身はいざ鳥邊野へ。）をんな肌には白無垢や、上にむらさき藤の紋、中着緋紗綾に黒繻子の帶、年は十七初花の、雨にしをる丶立姿。
（お染は文句の通りのこしらへにて、上の方より忍んで出で、あたりを窺ふ。）
淨（男も肌は白小袖にて、黒き綸子に色あさ黄うら。
（半九郎も文句の通りのこしらへにて、あとより出る。茶屋の騷ぎの笛きこゆ。）
淨（鳥邊の山はそなたぞと、死にゆく身のうしろ髪。
半九郎　ひく三味線は祇園町。
お染　茶屋のやま衆が色酒に。
半九郎　みだれて遊ぶ騷ぎ合ひ。

お染　あの面白さ見る時は。

淨〽あの面白さ見るときは、過ぎし霜月(しもつき)十五日、初の御見(ごけん)を思ひ出す。

お染　あゝ、今更それを云ふも愚痴でござんす。さあ、些(ちつ)とも早う。

半九郎　お染。

お染　半さま。

（月かくれる。ふたりは手を取りて行かうとする時、上の方よりお雪は提灯をもちて先に立ち、あとより市之助とお花出づ。）

市之助　それへゆく二人連は……。

（お雪はつか〳〵と寄りて提灯をさしつけるを、半九郎はたゝき落す。下の方より八介も出で來りて半九郎に突きあたる。半九郎は八介をつき放し、お染の手を取りて向ふへ走り去る。皆々あとを透し見る。）

淨〽河原づたひに……。

（床(ゆか)の三重、時の鐘。）

——幕——

虚無僧（二幕二場）

登場人物

虚無僧容月
愛泉
友徳
草谷
高村半彌後に虚無僧関山
半彌の妹お辻
宍倉十之進
宍倉十三郎
神崎次郎平
塚田源藏
和泉屋の若い者與吉
ほかに茶屋の女。參詣の女房。娘、小兒。町人。
仲間。若侍。僧など。

第一幕

江戸近在、目黒村。うしろは一面の高き竹藪。上の方に「右、不動道」と彫りたる石の杭が立つてゐる。文化の初年、初秋の暗き夜。

（上の方より大圓寺と記せる提灯を持ちたる僧ひとり出で、下の方に歩み去る。藪のうしろにて尺八の聲きこゆ。向うより高村半彌、廿二三歳の若侍、走り來りてあとを見かへり、人を待つこゝろにて竹藪の奥にかくれる。下のかたより茶屋女おゆき、ぶら提灯を持ちて町人の客ふたりを送りて出づ。）

おゆき　もうこゝでお別れ申します。どうぞ氣をつけておいで下さい。

客甲　なんぼお義理一遍でも、こゝでハイ左樣ならはあんまり酷からう。

客乙　せめてもう少し先まで送つて貰ひたいな。

おゆき　でも、歸りが怖うございますから。

客甲　こゝらの狸や狐はもうお馴染の筈だ。なんでおまへを嚇かすものか。

客乙　さあ、來るがいゝ。來るがいゝ。

（無理におゆきの手を把つて行かうとするとき、うしろの竹藪ががさ〳〵と鳴る。）

客甲　（みかへる）おや、竹藪ががさ〳〵云ふぞ。

客乙　なに、風だらう。

（竹藪再びがさ〳〵と鳴る。）

おゆき　あれつ。（客の手をふり拂つて、下のかたへ逃げてゆく）

客乙　あいつめ、怖い振をして逃げて行きやあがつた。ずるい奴だ。

客甲　あいつらこそほんたうに狸や狐だ。はゝゝゝゝ。

（二人は笑ひながら上の方に去る。風の音して竹藪がさ〳〵と鳴る。尺八の聲きこゆ。半彌は藪から半身を出してうかゞひ、再び隱れる。向うより宍倉十之進、五十歳ぐらゐ。仲間に提灯を持たせて出づ。）

十之進　よい鹽梅に薄月が出たやうだな。

仲間　こゝらは提灯があつても足もとの惡いところでございますから、薄月の出たのは丁度幸ひでございます。

十之進　こゝらは竹藪ばかりで晝でも薄暗いところだ。

（月のひかり薄く出る。二人は話しながら上の方へ行きかゝる時、藪のなかより半彌うかゞひ出で、刀をぬいて先づ仲間の提灯をばつさり斬り落す。仲間はわつと驚いて下のかたへ逃げ去る。

十之進　何者だ。人違ひするな。

（云ふ間もなしに、半彌は十之進を一太刀斬る。十之進も拔きあはせしが、初度の深手に弱りて忽ち斬り倒さる。尺八の聲きこゆ。半彌はその呼吸をうかゞひて刀を鞘に納め、死骸を藪のなかへ引摺り込む。このあひだに、下のかたより虚無僧空月、三十二三歳、天蓋をかぶり、尺八を持ちて出で、無言にてこの體を眺めながら近寄る。半彌は死骸を片附け、落ちたる提灯を藪に投げ込みてほつと息、やがて振向くと空月が自分の前に突つ立つてゐるに驚き、再び刀をぬいて空月に斬つてかゝる。）

空月　えゝ、なにをする。

（半彌は答へず、無二無三に斬つてかゝるを、空月は尺八にて支へる。）

空月　貴樣は何者だ、名乘れ、名乘れ。

（半彌はやはり斬つてかゝる。）

空月　人殺しを見付けられたので、口どめにおれを殺さうとするのか。とんでもない奴だ。

（半彌は急いで斬つてかゝるを、空月は尺八にてあしらひながら又云ふ。）

空月　物取りか意趣斬か仔細をいへ。仔細に因つては、おれが助けてもやる。隱まつてもやる。仔細をいへ。えゝ云はぬか。

（半彌はまだ無言にて斬込んで來るを、空月は尺八にて防ぎ鬪ひ、遂に半彌の刀を打ち落せば、半彌はあわてゝ小刀をぬかんとするところを、空月は尺八にてそ

の額を打つ。半彌は額に傷つきて倒る。）

空月　まだ手向ひすると、おのれ、ほんたうにぶち殺すぞ。（尺八を振り上げる）　天下御免の虚無僧にむかつて狼藉を働くとは不埒な奴だ。

（半彌は小刀を抜きかけて躊躇し、息をつきながら默つてゐる。）

空月　なぜ默つてゐる。なぜ返事をしない。仔細によつては助けてもやる、隱まつても遣ると云つてゐるではないか。貴樣は取りのぼせて耳がきこえないのか。

半彌　まつたく取りのぼせて無禮狼藉、なんとも申譯がござらぬ。（土にひざまづく）　拙者は關東のある藩中の侍、今日この目黑の下屋敷に於いて、上役の者と口論をはじめ、相手は上役を嵩にきて、さん／＼に恥しめられ、武士の一分相立ちがたきに因つて、先へまはつて彼が歸りを待ちうけ、御覽の通りに討ち果してござる。そこへお手前がまゐり合はされたので、慌つるまゝに前後の思案もなく……。いや、まことに恐入つてござる。平に御容赦くだされ。（土に手をつく）

空月　（すこしく詞をあらためる）　それでお手前はどうなさるな。これから屋敷へ立歸つて尋常に訴へ出でらるゝか。

（半彌は默つてかんがへてゐる。）

空月　それともこの場で切腹めさるか。

（半彌はやはり考へてゐる。）

空月　（笑ひ出す）　はゝゝゝゝ。そこで、失禮ながらお手前のお取高は。

半彌　百五十石でござる。

空月　百五十石……。藩中としては立派なお身柄でござるな。して、御定府か。お國詰めか。

半彌　代々の定府でござる。

空月　では、當地に御親類もござらうな。

半彌　兩親は最早この世に居りませぬが、親類緣者は相當にござる。

空月　（うなづく）　本來ならば普化宗門の拙者に對して狼藉無禮を働かれたお手前を唯そのまゝには捨て置かれぬ。寺社奉行にも屆け出でて屹と吟味をいたすべきではござるが、一切をうち明けて詫るとあれば、今夜のことは內分にいたさう。

半彌　はあ（再び頭を下げる）

空月　うけたまはれば立派なお身柄、御親類も相當にあるといへば、それらの人々とも御相談の上で、身の進退をお定めなされ。拙者はこれでお別れ申す。

（云ひすてゝ空月はしづかに上の方へ行きかゝる。半彌は思案して急に呼びとめる。）

半彌　しばらく……。しばらくお待ちくだされ。
空月（立ちどまる）なんぞ御用でござるか。
半彌（躊躇しながら）まことに申兼ねたる儀ではござるが、一旦の意趣によつて、上役の者を暗撃にいたした拙者の身の上、ほと〱進退に窮して居ります。ついては如何でござらうか。拙者を御手前の御寺中に當分おかくまひ下さるわけには參るまいか。
空月（屹となる）それは以ての外、普化宗門は天下の勇士浪人のかくれ家でござる。一分の意趣遺恨によつて人を害し、命が惜さに逃げ隠るゝ、左様な卑怯者を隱まふところではござらぬぞ。
半彌　はあ。
空月　夜の更けぬうちに何處へか早くお立退きなされ。彼の仲間の注進によつて、加勢の者どもが駈け付けたら何となさる。（云ひかけて向うをみる）おゝ、こちらへ駈けて來る跫音がきこえる。
半彌（おなじく向うを見る）むゝ、月あかりに四五人の姿……。たしかに屋敷の者でござる。（空月に）なにとぞ御他言くださるな。
（半彌は左右を見まはして、うしろの竹藪にかくれる間もなく、向うより彼の仲間を先に立てゝ、神崎次郎平、塚田源藏、いづれも廿二三歳の侍、あとよりも若侍三人つゞいて走り出づ。）
神崎（仲間に）宍倉殿が狼藉者に出逢うたのはこの邊かな。
仲間　この竹藪のあたりでござります。
塚田（あたりを見まはす）併しあたりはひつそりしてゐる。狼藉者を斬拂つて、無事に引揚げられたかな。
（人々はそこらを見まはすうちに、そこに立つてゐる空月を見付ける。）
神崎　虚無僧殿におたづね申す。唯今このあたりで斬合のあつたのを御存じないか。
空月　一向存じませぬ。
塚田　まつたく御承知ないか。
空月　存じませぬ。
神崎　はてなう。（仲間に）これ、確にこゝらであつたか。
仲間　どうもこゝらのやうに思はれますが……。それとももう少し先の方であつたかも知れませぬ。
塚田　では、兎も角も先へ行つてみようではないか。
神崎　さうだ、さうだ。
（神崎は先に立ち、塚田その他もみな上の方へ急ぎゆく。空月はあとを見送る。藪をかきわけて半彌うかゞひ出で、これも神崎等のあとを見送りて、やがて空月

と顔をみあはせる）

空月　この分ではこゝらにうか／＼してゐるは危い。宗門の掟には背くことなれど、窮鳥ふところに入るときは獵師もこれを取らずといふ。（思案して）兎もかくも今夜だけはおかくまひ申さう。おいでなされ。

半彌　ではおかくまひ下さるか。

空月　今夜だけは急場の凌ぎに。

半彌　（ほつとして）かたじけなうござる。

（半彌は思はず進みよれば、空月は天蓋をはずして半彌にわたし、これをかぶつて行けどいふ。半彌は一禮して天蓋をかぶる。）

空月　拙者の寺はこの藪のうしろでござるが、月が明るいので人目に立つ。さうして行けば仔細はあるまい。さあお越しなされ。

半彌　はあ。

（空月は尺八を吹きながら上の方へゆく。半彌もつゞいてゆく。月のひかりいよ／＼明るし。）

――幕――

第二幕

一

目黒不動前の茶屋。上のかたは二重屋體、下のかたは土間にて大きな茶釜などが掛けてあり。土間の奥は庭づたひに奥の座敷へ通ふこゝろにて、飛び石や植込なども見ゆ。軒には御休み所と記したる行燈と花暖簾をかけ、店さきには花ござを敷きたる緣臺二脚ほど置く。

（晩秋の午後。上のかたの緣臺には下町の女房が男の兒を連れて腰をかけてゐる。下のかたの緣臺には町の娘三人が矢はり飴の袋や枝柿を持つて休んでゐる。男の兒は桐屋の飴の袋をさげてゐる。茶屋の女おゆきが茶を出してゐる。）

おゆき　よいお天氣で結構でございます。みな樣は御遠方でございますか。

女房　日本橋の方でございます。

おゆき　それではなか／＼おくたびれでございませう。まあ、御ゆつくりとお休みなさいまし。

（奥より茶屋の女おそのは線香と花とを持ちて出づ。）

おその　すぐに御參詣をなさいますか。

娘一　では、拜んで來ませうか。（三人は起ちあがる）

おその　おかみさんはお詣りをなさいませんか。

女房　（笑ふ）いえ、わたしは不動樣だけ拜めば結構、比翼塚へ幾度も御參詣するには及ひません。

男の兒　その比翼塚とか云ふところへわたしも行つて見た

いな。（起つ）

女房　はて、おまへなどの行くところではない。（娘等に）おまへさん達は早く拜んでおいでなさい。

娘三人　あい、あい。

おそめ　さあ、御案内をいたしませう。

（おそめは先に立ち、娘三人は餅や柿を縁臺に置いて下のかたへ行く。）

女房　比翼塚は相變らず御參詣がありますかえ。

おゆき　いつでもお線香の絶えたことはございません。

女房　芝居や淨瑠璃で名高い權八小紫、その比翼塚がいつも繁昌するのは當りまへかも知れませんね。

おゆき　なにしろ目黑の名物になつて居りますから、不動樣へ御參詣のお方も一度は屹とおまゐりをなさいます。

（上の方より宍倉十三郎、廿一二歳の若侍、笠をかぶりて出づ。）

おゆき　お休みなさいまし。

（十三郎は行きかけて思案し、引返して下のかたの緣臺に腰をかける。）

おゆき　いらつしやいまし。奥のお座敷も明いて居ります。

十三郎　（笠をかぶりしまゝにて）茶を一杯くれ。

おゆき　はい、はい。（茶を持つて來る）

十三郎　この近所に虚無僧寺があるな。

おゆき　はい。すぐそこの竹藪のうしろでございます。

十三郎　あの寺には幾人ほどゐるな。

おゆき　あのお寺は控へ番所だとか申しまして、むかしは大勢の虚無僧が詰めてゐたさうでございますが、唯今では三四人しか住んでゐないやうでございます。

十三郎　むゝ、三四人……。ほかに此頃になつて新しく來た者はないか。

おゆき　どうでございませうか。いえ、もう、三四人で澤山でございます。

十三郎　なぜ澤山だ。

おゆき　虚無僧といふものは立派な人達ばかりだと聞いて居りましたが、このごろの虚無僧はだん／＼に人柄が惡くなりまして、町人や百姓泣かせでございます。

十三郎　そんなに人を困らせるか。

女房　（口を出す）こゝらの虚無僧ばかりではございません。下町の邊へ托鉢にまゐります虚無僧でも、こちらの斷り方が惡いとすぐに店へ這入つて來て、色々のむづかしいことを申すばかりか、持つてゐる尺八で相手を打擲することも度々ございますので、まつたく困り切つてしまひます

十三郎　それほど諸人が迷惑するのを寺社方ではなぜ打ち捨てゝ置くのか。心得ぬことだな。

おゆき　あの比翼塚の權八もこゝの虚無僧寺に隱まはれてゐたさうでございます。

十三郎　普化宗門は天下の勇士浪人のかくれ家などと申して、罪人までも隱まふとは不屆き至極のことだ。

（下の方よりおそめは先に立ち、以前の娘三人は歸り來る。）

娘一　（女房に）どうもお待たせ申しました。

女房　では、もうすぐに行きませうか。

（女房は起ちあがりておゆきに茶代をわたす。）

おゆき　毎度ありがたうございます。

おそめ　お靜にいらつしやいまし。

女房　どうもお邪魔をしました。

（女房は男の兒の手をひき、娘三人も飴や柿を持ちて上のかたに立去る。これと引違へに上の方より虚無僧空月は町人與吉の肩をつかんで引摺つて出づ。與吉は手に尺八と尺八の袋を持つ。）

與吉　もし、それは御無體でございます。

空月　なにが無體だ。貴樣は誰に許されてその尺八を持つてゐる。正直に云へ。

與吉　これはあの…… 友達から借りたのでございます。

空月　その友達はどこの何といふ者だ。

（與吉は口籠る。）

空月　それ、見ろ。（與吉を突き倒す）貴樣はその尺八を吹いたな。

與吉　いえ、吹いたことはございません。

空月　嘘をつけ、尺八を唯持つてゐる奴があるか。きつと吹いたに相違あるまい。正直にいへ、白狀しろ。

（十三郎は默つて見物してゐる。おゆきとおそめはあとに退つて不安らしく眺めてゐる。）

與吉　なんと仰しやつても、決して吹いた覺えはございません。どうぞ御免くださいまし。

空月　貴樣も知つてゐるだらう。尺八は虚無僧のほかに吹いてはならぬものだ。餘人が尺八を吹くときには、總本寺か控へ番所へ屆け出て、その許しを受けねばならぬことになつてゐる。貴樣はその免許狀を持つてゐるか、持つてゐるならば出してみせろ。左もなければ控へ番所へ一應引立てゝ行つて、嚴重に詮議の上で寺社奉行へ屆け出るからさう思へ。

與吉　どうぞ幾重にも御勘辨をねがひます。この通り、お詫び申上げます。（土に手をつく）

空月　いや、詫びたぐらゐでは勘辨はならぬ。さあ、來い。

（空月は與吉の腕をつかんで引立てようとするところへ、上のかたより虚無僧草谷出づ。）

草谷　おゝ、空月。そいつが何うか致したか。

空月　こいつは不埒な奴、免許もなしに尺八を吹いてゐるのだ。

與吉　いえ、吹きは致しませぬ。

空月　吹かぬといつても、手に持つてゐるのが現在の證據だ。（草谷に）貴公、こいつを引摺つてゆけ。

草谷　さあ、來い、來い。（與吉を引立てる）

與吉　どうぞ御免を……。

草谷　えゝ、來いといふに……。

（草谷は無理に與吉を引立てゝ下の方に立去る。それを見送りて空月は形をあらため、茶屋の方にむかひて尺八を吹く。おゆきはあわてゝ錢を紙につゝみ、盆にのせて持つて出で、會釋して差出す。空月は無言にてその包みを受取り、悠々として上のかたへ行かうとする。十三郎は笠をぬぎて起ちあがる。）

十三郎　失禮ながら暫く……。

空月（みかへる）なんぞ御用か。

十三郎　少しくおたづね申したい儀がござるが、お手前の御寺內に近ごろ入門いたした者はござるまいか。

空月（しづかに）それを訊いてどうなさる。

十三郎　手前は人をたづねる者でござる。

空月　いかにも手前の寺中に幽山といふ者が入門いたした。

十三郎　して、その幽山とやらの俗名は。

空月　それはお答へ申されぬ。唯今の町人などとは違つて、武家のお手前は定めて普化宗門の掟を御存じでござらう。一旦この宗門に入る上は、何人の前でも天蓋を取らず、親兄弟にゆき逢うても挨拶せず、俗にあるときの名を云はず。かやうな掟のあるからは、幽山はたゞ幽山と申すのほかはござらぬ。その上の御詮議は無用になされ。

（云ひ捨てゝ空月は下のかたに立去る。十三郎はあとを見送りて思案し、やがて足早に空月のあとを追はうとする。）

おゆき（聲をかける）もし、お笠が……。

十三郎　むゝ。（引返して笠をうけ取り、又こゝろづいて茶代を置く）

おゆき　ありがたうございます。

（十三郎は笠をかゝへて行かうとする時、茶店の奥より神崎次郎平、塚田源藏の二人出づ。）

神崎　十三郎どの。

十三郎　おゝ。（立ちどまる）

塚田　よいところでお目にかゝつた。

神崎（おゆき等に）こちらには內談がある。しばらく奥へ行つてくれ。

女二人　はい、はい。

（おゆきとおそめは奥に入る。十三郎は引返して上の方の緣臺に腰をかけ、神崎と塚田は下のかたに腰をかける。）

神崎　高村のありかは知れましたか。

十三郎　このあひだから手をまはして詮議いたすところ、高村半彌は親類緣者のもとへ尋ね寄りし樣子もなく、さりとて遠國へ出奔いたしたとも思はれず。おそらく姿をかへて江戸市中か近在に隱れ忍んでゐること〻思ふにつけ、もしや虛無僧寺などに隱まはれてゐるやも測られずと、今日こ〻らへ尋ねてまゐつたのでござる。

神崎　上役の十之進どのを闇討にして逐電したる高村半彌は、重々の不埒者として殿樣の御立腹強く、其方共も十三郎の助力して、一日も早く彼めのありかを尋ね出せとの嚴命でござれば、めい／＼に手分けをして、毎日探索いたしゐれど、いまだその行くへが判りませぬ。

塚田　燈臺下暗しといふ譬もあれば、十之進どのが討れたたる目黒のあたりを今一應探索いたさうと存じて、かやうに連れ立つてまゐりしところ、丁度こ〻でお目にか〻つたは不思議でござつた。唯今うけたまはれば虛無僧寺を御詮議とあるが、それには何かお心當りのことでもござるか。

十三郎　別に心あたりもござらぬ。ふと思ひついたま〻に參つたのでござるが、恰もこ〻で虛無僧にゆき逢ひ、それとなく聞きあはせましたるに、このごろ彼の寺に幽山といふ者が新に入門いたしたさうでござる。普化宗門の掟と申してその俗名を明しませぬが、若しやそれが彼の高村半彌ではあるまいかと思はれます。

神崎　なるほど、それで思ひあたることがござる。十之進どの闇討の注進をきいて、われ／＼がすぐに駈けつけし時、竹藪のほとりで一人の虛無僧に出逢ひました。

塚田　何をたづねても存ぜぬ知らぬと申してゐたが、あるひは彼めが高村をかくまつたのかも知れませぬ。では、これからすぐに參らう。（起ち上がる）

十三郎　なるべくは召捕つてまゐれといふ仰せではござるが、拙者に取つては親のかたき、萬一手にあまらば斬つて捨つる。おの／＼も左樣御承知くだされ。

神崎　御もつともでござる。かれが尋常に繩にか〻れば格別、萬一手向ひ致すときは、踏み込んでお仕留めなされ。

十三郎　立騷いで取逃してはなりませぬ。拙者が先づ案內して樣子を探りますれば、御兩所は小蔭に忍んでお見張りをねがひます。

二人　承知いたした。

（十三郎を先に、神崎と塚田もつゞいて下のかたに立去る。奥よりおゆきとおそめ出で來りて、緣臺の上の

茶碗や煙草盆などを片附ける。）

二

虛無僧寺。

古びたる二重屋體にて竹緣あり。正面の上の方は壁にて、それに天蓋が掛けてあり。經机、經卷などもあり。つゞいて出入の襖二枚、下のかたは壁にて、折りまはして竹の半窓あり。庭の上のかたには井戶ありて、秋の柳が掩ひかゝれり。下のかたには粗き四目垣をゆひて、低き枝折門あり。門の外には熟したる柿の大樹あり。家の左右は高き竹藪に圍まる。

（虛無僧愛泉、三十五六歲の世馴れたらしい男。おなじく友德、二十五六歲の武張つた男。いづれも尺八をそばに置き、貧乏德利や小皿をならべて、茶碗酒をのんでゐる。下のかたの爐には蚊いぶしの烟がほの白く騰つてゐる。うすく水の音。奥には尺八の聲きこゆ。）

友德　朝晩はもう冷々して來たのに、どうも藪蚊がひどいことだな。

愛泉　目黑の名物、竹藪に取りまかれてゐるのだから、雪のふるまでは藪蚊の絕え間は無しだ。とは云つても全くひどい。もう少し蚊いぶしを焚いてくれ。

友德　人使ひのあらい奴だな。

愛泉　兄弟子にむかつて口答へをすると、容赦はせぬぞ、（尺八をふりあげる）

友德　そんな火吹竹が怖くつて天下の勇士が一日でもこゝに巢を食つてゐられると思ふか。

愛泉　相變らず大きなことを云ふ奴だ。はゝゝゝ。

（友德は蚊いぶしを焚き付ける。奥には尺八の聲つゞきてきこゆ。）

愛泉　（奥をみかへる）あいつ、朝から晩までひう〳〵吹いてゐる。うるさい奴だな。

友德　ほんたうにうるさい奴だ。併しおれ達も駈け込みの當座は一生懸命になつて吹いたものだ。尺八が下手では虛無僧にはなれないと思つたからな。

愛泉　（笑ふ）誰でも當座はそんなものだが、おれたちは唯の藝人ではない。尺八が上手だからと云つて、看主にも院代にもなれるものではないのだ。（尺八を把る）こんなものは商賣の看板に持つてゐればいゝのだ。しかし人をなぐるには都合がよく出來てゐるな。（友德を打つ眞似をする）

友德　えゝ、無禮を働くな。そんな手に藪蚊でも逐つてくれ。

愛泉　いくら虛無僧寺でも尺八で藪蚊を逐ふ奴があるものか。（尺八を置いて、手酌で飮まうとして舌打ちする）や

れ、やれ。

友徳　（もとの座に戻る）酒はもう無いか。

愛泉　この通りだ。（徳利を振つてみせる）

友徳　よし、よし。（奥にむかつて呼ぶ）これ、幽山、幽山。鳥渡來い。

（尺八の聲やむ。高村半彌、今は幽山と名乘り、虚無僧のすがたにて尺八を持ち、奥より出づ。その額には疵のあとあり。）

愛泉　大層勉強するな。

半彌　新規に入門いたした者でござれば、せい〴〵修業を致さなければなりませぬ。

友徳　いくら修業でも餘りに氣を詰めては身體の毒だ。われわれと一緒に飲むがいゝぞ。（茶碗を出す）

半彌　折角ながら手前はもはや禁酒いたしました。

友徳　なぜそんな不自由なことをしたのだ。

半彌　先夜のあやまちも所詮は酒の上から起つたことで、今更重々後悔して居ります。殊にこの宗門でも酒は三獻を過ぐべからずと戒められてある程でござれば、かたがた禁酒ときめました。

友徳　どうも窮屈なことだな。普化宗門は天下の勇士のかくれ家といふことは貴公も知つてゐる筈だ。天下の勇士が酒を飲まぬといふことがあるものか。三獻が五獻となり、十獻となつても、大目に見るのがこの宗門の習だ。遠慮なく飲まつしやい。（茶碗を突きつける）それとも貴公、われ〳〵に恥辱をあたへるのか。

半彌　いや、お手前たちは御勝手次第、拙者だけは堅く禁酒ときめましたれば、以後は左樣御承知ください。

友徳　むゝ。わかつた。さては貴公、われ〳〵と一緒に酒をのむと、いつでも酒を買はされると云ふので、俄かに禁酒と云ひ出したのか。いや、さうだ。さうだ。（屹となつて茶碗を下に置く）これ、幽山。庭へ出て貰はう。

半彌　え、庭へ出ろとは……。

友徳　天下の勇士が恥辱をあたへられて、その分では濟まされぬ。これから貴公と勝負して刺しちがへて死ぬばかりだ。

半彌　え。

友徳　さあ、庭へ出ろ。（起ち上る）

愛泉　これ、これ、友徳。貴公はどうも氣が暴くて困る。しかし幽山もよくない。出家の下戸ならば兎も角も、相當に飲める口を持つてゐながら、人のさした茶碗を無愛想に斷るといふのも穩かでない。斷るなら斷るやうにして、なんとか丸く濟むやうにしたら何うだな。

半彌　（うなづく）わかりました。では、拙者がお相手をいたさぬ代りに、少々ばかりの酒を買ひませう。

愛泉　いつも〳〵貴公のふところを痛めて氣の毒だが、實は德利がこの通りだ。（德利を振つて見せる）なにしろこの寺も評判がわるいので、どこの酒屋も現金でなければ持つて來てくれないので困る。これ、友德。それで天下の勇士も文句はあるまい。いつまでも膨れつ面をしてゐるな。和睦しろ。和睦しろ。はゝゝゝゝゝ。

友德　はゝゝゝゝ。

（半彌はふところの紙入れを出し、銀一朱を紙にのせて愛泉の前に置く。）

半彌　僅少ながらこれで宜しくおねがひ申す。

愛泉　いやつそれでは貰つて置く。（友德と顏を見あはせて）一朱あれば酒も肴も買はれる。貴公、日の暮れないうちに早く行つて來い。

友德　（錢をうけ取る）では、和睦してすぐに行つて來よう。

（友德は天蓋をかぶりて尺八を持ち、片手に德利をさげて下の方へ出てゆく。）

愛泉　どうもひどい蚊だ。（半彌に）すこし蚊いぶしをたのむぞ。

半彌　はい、はい。（起つて蚊いぶしを焚く）

愛泉　枝を炙べるばかりではいけない。煽いでくれ。

半彌　はい、はい。（腰の扇を把り出して煽ぐ）

愛泉　そんなものでは埒が明かない。これでどし〳〵煽がつしやい。（澁團扇を投げてやる）

半彌　はい、はい。（澁團扇を把りて煽ぐ）

愛泉　貴公もそれが修業の一つだ。尺八を吹いてゐるばかりが能ではない。水を汲み、米をとぎ、風呂を沸かし、拭き掃除をする。それがみんな貴公の務だ。

半彌　委細心得て居ります。

（下のかたより草谷は與吉を引立てゝ出づ。）

與吉　どうぞ御勘辨をねがひます。

草谷　幾たびも同じことをいふな。唯あやまつて料簡することではないのだ。さあ、來い、來い。

（無理に內へ引摺り込む。）

愛泉　草谷。こいつがどうしたのだ。

草谷　この通り、尺八を持つてゐる。

愛泉　なるほど、こいつ不埒な奴だ、きつと詮議をせねばならぬぞ。

與吉　かうなれば何も彼も正直に申し上げます。わたくしは京橋靈岸島の酒問屋いづみ屋の店のものでございます。

愛泉　（半彌に）それ、書きとめて置かつしやい。

半彌　はい。

（半彌は棚より硯箱と紙を持ち出して來る。）

草谷　先づ貴様の名をいへ。

與吉　與吉と申します。

（半彌は筆を把つて書きとめる。）

愛泉　そこで、どうしてその尺八を持つてゐるのだ。貴様が吹くのか。

與吉　いえ、若主人の幸次郎が吹くのでございます。先日あつらへました此の尺八がどうもいゝ音が出ないと申しますので、今日笛師を同道いたしまして、この目黑の方角へ笛竹を見にまゐりましたのでございます。

草谷　して、その笛を作る奴はどうした。

與吉　やはり何うも思はしい淡竹がないと申すことで、途中で別れて歸りました。

愛泉　よし。明日にもあらためて主人の店へ掛合に行く。それまでは貴様を留め置くからさう思へ。

與吉　え、わたくしを歸しては下さいませんか。

愛泉　あたりまへのことだ。（草谷に）その尺八を取りあげて、こいつを奥へ押込めて置け。（半彌に）貴公も手傳へ。

草谷　さあ、立て。

與吉　あゝ、もし、お待ち下さいまし。わたくしが此のまゝ留め置かれましては、主人方でも定めて心配いたすことゝ存じます。いづれ主人同道で、あらためてお詫にまかり出ませうから、今日のところは何うか御勘辨を……。なにぶんお願ひ申します。

（愛泉と草谷は顔をみあはせる。）

愛泉　それほど頼むならば歸してもやらうが、寺の掟だ。貴様の身の代金を置いて行け。

與吉　身の代金と申しますと……。

草谷　わからぬ奴だな。貴様を歸してやる代りに、相當の金を置いて行けと云ふのだ。

與吉　（呑み込んで）はい、はい。判りました。（紙入れより二分金を出して紙に包む）何分にも出先のことで持合せがございません。まことに輕少ではございますが、どうぞこれで御勘辨を……。

草谷　（受け取りてあらためる）むゝ、二分か。

愛泉　人間ひとりの身の代がたつた二分では廉いものだが、出先とあればよんどころない。では、今日のところは赦してやらうか。

與吉　ありがたうございます。

愛泉　但しこれで濟んだのではない。あしたは早々に主人同道で挨拶にまゐれ。さもないと當方から打揃つて掛合にゆくぞ。よく覺えてゐろ。

與吉　はい、はい。では、どなたも御免下さいまし。

（與吉は早々に挨拶して、逃げるやうに下の方へ立去る。）

愛泉　いくら酒が高くなつても、二分あれば當分は飲める。あいつは何處で見つけたのだ。

草谷　不動前の茶店の前で空月が見つけて嚇かしてゐるところへ、丁度おれが通りあはせたのですぐに受取つて連れて來たのだ。

愛泉　やつぱり空月は眼が疾いな。はゝゝゝゝゝ。

（半彌は始終あきれて眺めてゐる。）

草谷　（縁にあがる）酒も酒だが、夕飯の支度はいゝかな。

愛泉　（半彌に）これ、幽山。今も云つて聞かせた通りだ。このごろは日が短くなつたから、そろ〳〵夕飯の支度もしなければならない。水でも汲んで米を磨ぎなさい。

半彌　かしこまりました。米はいつも通りでよろしうござるか。

草谷　毎日のことだ。判つてゐるではないか。

（半彌は奥に入る。）

草谷　見たところ、まんざらの馬鹿でもなさゝうだが、どうもぼんやりしてゐる奴だな。

愛泉　あれでも屋敷にゐれば百五十石取りの若旦那だ。命が惜しいばつかりに、こゝへ駈け込んでおれ達に追ひ使はれてゐる。かんがへてみれば可哀さうにもなるよ。

草谷　あいつが無事に生きてゐられるのも俺達のおかげで、こゝの寺を追ひ出されたらすぐに縛り首だ。それを思へばどんなに追ひ使はれても文句の云へた義理ではあるまい。

愛泉　それだからさつきも友德にねだられて、酒を買つたよ。ほんたうにあいつは何をしてゐるか、遲いことだな。

（下のかたより半彌の妹お辻、十七八歳、風呂敷包みをかゝへて出て、そつと內をうかゞつてゐる。）

草谷　友德は酒をかひに行つたのか。

愛泉　幽山から一朱貰つて、酒と肴を買ひに行つたのだ。

草谷　あいつ一人で飲んで來はしまいな。

愛泉　ふだんから天下の勇士と力んでゐる奴だ。まさかにそんなこともあるまい。萬一そんな橫着をすれば、袋叩きにして放逐するまでのことだ

（風の音して、落葉ふる。庭の上の方より半彌は片だすきにて米かし桶を持ちて出で、井戸ばたへ來て水を汲み、米を磨ぎはじめる。お辻は外から見て、聲をかけようとして躊躇してゐる。）

愛泉　これ、幽山。氣をつけて磨いでくれ。きのふの飯には石が這入つてゐたぞ。

半彌　はい、はい。

（半彌はしきりに米をといでゐる。向うより空月出づ。それに氣がついて、お辻はあわてゝ、柿の木のかげに隱れる。空月は內に入る。）

愛泉　やあ、友徳かと思つたら空月か。

空月　（草谷に）さつきの奴はどうした。

草谷　主人の店の名を聞きたゞした上で、身の代金を取つて歸してやつた。

空月　それで幾ら取つた。

草谷　二分よ。

空月　たつた二分か。（舌打ちして）まあ、いゝわ。店の暖簾がわかつてゐれば、又あらためて掛合にゆく法もある。（半彌に）やい、幽山。役僧が歸つて來たのに挨拶をしないか。

半彌　（氣がついて出迎へる）おゝ、お歸りでござりましたか。

空月　早く水を汲んで來い。なにをぼんやりしてゐるのだ。

半彌　はい、はい。

（半彌は閼伽桶に水を汲んで來る。空月は緣に腰をかけて草鞋をぬぐ。）

空月　さあ、洗つてくれ。

（空月は足をつき出せば、半彌は洗つてやる。外にはお辻が再び出て内の様子をうかゞつてゐる。そのうちに半彌はふと氣がついて表をみかへる。）

空月　これ、傍見をしないでよく洗へよ。どうも貴様はうつかりしてゐていけない。そんなことでは虚無僧寺の飯を食つて、浪人仲間の附合は出來ないぞ。しつかりしろ。

（空月は半彌の肩を蹴る。半彌は倒れる。）

空月　貴様はその額の疵を忘れたのか。性懲りのない奴だ。

（空月は尺八をふりあげる、お辻は思はず内へ駈け込む。）

お辻　あゝ、もし、どうぞ御勘辨をねがひます。

空月　誰だ、誰だ。おまへは……。

草谷　おゝ、それは幽山の妹だ。

お辻　（草谷に會釋する）昨日は失禮をいたしました。

草谷　（空月を指して）これが役僧の空月殿だ。御挨拶をさつしやい。

お辻　初めましてお目にかゝります、わたくしは高村半彌の妹、辻と申すものでござります。兄が一方ならぬ御恩を受けて居りますさうで、幾重にもお禮を申上げます。

空月　拙者はこの控へ番所をあづかる役僧の空月でござる。

愛泉　拙者は番僧の愛泉、お見識り置きください。

空月　して、今日は何しにおいでなされた。

お辻　兄に逢ひにまゐりました。

空月　一旦この宗門に入るからは親兄弟に逢つても挨拶せぬといふ、普化宗門の掟を御存じないか。折角ながらお歸りなさい。

お辻　はい。(躊躇してゐる)
半彌　空月殿が云はれる通りだ。おれの無事を見とゞけたら歸つてくれ。
お辻　きのふこの草谷殿がお越しなされまして……。
空月　はて、ことばをかはしてはならぬと云ふに……。(草谷に)何か用があるならば、貴公が表へ出て聞くがよい。
草谷　(こゝろ得て)　さあ、兎も角も表へおいでなされ。
お辻　でも、兄にすこし聞きたいことがございまして……。
空月　(叱る)　えゝ、ならぬといふに……。それ、早く連れてゆけ。
草谷　さあ、さあ、おいでなされ。
(草谷は無理にお辻を表へ押出して、家のうしろへ連れてゆく。)
空月　幽山。貴様は早く飯の支度をしろ。
(半彌は米かし桶を持ちて上のかたに去る。空月は天蓋をかけて、あぐらをかく。)
空月　そこで今の二分はどうした。酒でも買つたか。(云ひながら徳利を振つてみる)　なんだ空か。ばか／＼しい。
愛泉　酒は友德が買ひに行つてゐるのだ。
空月　(表をみる)　ところで、あの女は幾ら持つて來たかな。
愛泉　たび／＼の無心だから幾らも持つて來まいと思ふが……兄きの不首尾から屋敷にもゐられなくなつて、麻布の親類にあづけられてゐると云ふことだが、よく思ひ切つて出て來たな。
空月　それはやつぱり兄妹の人情だらう。そこが又こつちの附目で、このあひだから草谷を使に遣つて、最初に入門金として十兩取る。それから何の彼のと名をつけて、幽山には內證で二兩三兩と七八度も引出して來てゐる。そんなことが兩方に知れると、これから續けて金を引き出すのに面倒だから、なんでもあの兄妹ふたりを逢はせないに限る。おれの留守にあの女がたづねて來ても、宗門の掟を楯に取つて屹と斷つて歸してしまへ。
愛泉　まつたくあの女の顏を見たときには、おれも些と擽いと思つたよ。
空月　いや、尋ねてくるといへば、あの女よりももつと劍呑な奴がこゝらをうろ付いてゐるらしいぞ。
愛泉　劍呑な奴とは……。もしや幽山の屋敷の奴等では無いかな。
空月　なんといふ奴か知らないが、不動前でおれに聲をかけた若い侍は、どうもあいつを尋ねてゐるらしい。一旦こゝへ隱まつたものを迂濶に人手にわたしては、虚無僧寺の名折れになる。慾得は別にして、あいつを庇つて遣らなければならない。その積りで皆んなも油斷するなよ。

愛泉　むゝ、それは油斷がならない。常人は勿論だが、ほかの奴等にもよく云ひ聞かして置くことだ。

（下のかたより友徳は尺八を腰にさし、德利と竹の皮包みを持ちて足早に出づ。）

友徳　こゝへ歸つて來る途中で、三人づれの若い侍がそこらをうろついてゐるのを見かけたが、どうも幽山の屋敷の奴等がこゝに居ることをかぎ付けたらしいぞ。

空月　それを今も云つてゐるのだ。どんな奴等が押掛けて來ても、決して幽山を渡してはならないぞ。

友徳　それは勿論のことだ。一旦この寺に這入つたものを迂濶に他人にわたしては、天下の勇士の名折れになる。すぐに手わけをして口々の固めが大切だぞ。

愛泉　まあ、騷ぐな。なにしろ誰かゞ押掛けて來た時に、酒や肴などが列べてあつては具合が惡い。兎もかくも奥へ運び込んでしまへ。

空月　むゝ。奥で飲みながら敵を待つとしようか。

愛泉　酒で勇氣をつけて置けば、何十人押掛けて來ても怖るゝことはない。かういふ時には酒だ酒だ。

友徳　おれは酒よりも腕が鳴つてならない。今にも敵勢が押寄せてくるかと思ふと、なんだか武者震ひがするやうだ。

空月　（笑ふ）まあ、いゝからおれにまかしておけ。

（愛泉と友徳は酒や肴を奥へ運んでゆく。空月は縁に出て表を見る。）

空月　草谷めは藪蚊に食はれながら何をしてゐたのだ。草谷。話が濟んだら早く這入れ。

（云ひすてゝ空月は壁にかけたる天蓋を取りて奥に入る。庭の上の方より牛彌出で、そこらに人のゐないのを見て門口に來り、表をのぞく。落葉して、秋の日は暮れかゝる。家のうしろよりお辻と草谷出づ。草谷は風呂敷包みを持つ。）

草谷　この品々は確かに幽山に渡します。その積りでお歸りなされ。

お辻　どうでも兄には逢はれませぬか。

草谷　（躊躇して）折角ながら宗門の掟で致方がござらぬ。

お辻　あの、鳥渡の間でよろしいのでござりますが……。

草谷　（お辻の顔をながめながら）拙者ひとりならば何とかお取計らひも致すが……。まあ。あきらめてお歸りなされ。

お辻　では、殘念ながらこれで戻りませう。

草谷　こゝらは路がさびしい。やがて日も暮れかゝる。若い美しいお女中のひとり歩きは不用心でござる。拙者がそこらまでお送り申さうか。

お辻　いえ。決してそれには及びませぬ。

（お辻は會釋して下のかたへ行かうとして、あとを見かへる時、半彌と顔なみあはせる。）

お辻　（引返して來る）　兄さま。わたくしはもう戻ります。どうぞおからだを御大切に……。

（奥にて空月の呼ぶ聲きこゆ。）

空月　草谷、草谷。好加減にして內へ這入れ。

草谷　うるさく呼ぶな。（お辻に）　これ、長話しをしてはなりませんぞ。

（草谷は枝折戸のかき金をかけ、半彌とお辻を內と外とに隔てゝ置いて、幾たびかお辻を見返りながら奥に入る。）

半彌　（內から語る）　おまへは其後どうしてゐる。

お辻　（外から）　あれ以來、御屋敷にもゐられなくなりまして、麻布のをぢ様のところにお預けとなつて居ります。

半彌　とんだ心得違ひからお前にも苦勞をかけて氣の毒であつた。併しまあこゝに隱れてゐればどこからも手の這入る氣づかひはないから安心してくれ。

お辻　あなたの額の疵は……。

半彌　（額をなでる）　むゝ、これか。これもおれが悪かつたのだ。今見てゐれば、おまへは何か風呂敷包みのやうな物を持つて來たな。

お辻　秋もだん／＼末になりまして、あさ夕は定めてお冷えなさらうと存じまして、小袖を二三枚持つてまゐりました。

半彌　それはよく氣がついて呉れた。それからお前がさつきの話しでは、草谷殿が昨日たづねて行つたか。

お辻　はい。きのふも麻布へ見えまして、幽山も修業中は托鉢にも出られず、毎日の小遣ひにも不自由してゐれば、三兩ばかり屆けてくれとのことでござりましたが、何分にもたび／＼のことでござりますので……。

半彌　なに、たび／＼のこと。草谷がそんなにたび／＼尋ねて行つたか。

お辻　はじめに入門金とか申しまして、あなたの御手紙を持つて、十兩のお金を受取りに參られました。

半彌　それはおれも知つてゐる。

お辻　それから三月ほどの間に、大抵十日目に一度はたづねて參られまして、その都度に二兩三兩づつお渡し申して居りました。

半彌　（案外らしく）　むゝ、十日に一度づつは金を取りにゆく……。そんなことがあつたのか。

お辻　以前の身の上とは違ひまして、わたくしにもなかなか工面がなりませぬ。さりとて叔父さまに打ちあけましたら、ふだんから物堅い御氣性、すぐにもこゝへ踏み込んでお出でなされうも知れませぬので、何をいたすにも

わたくしの胸ひとつ、よんどころなく手まはりの道具や、櫛かんざしなどを窃と賣り拂ひまして……。

半彌　いや、それは些とも知らなかつた。こゝへ來てから毎日の拭き掃除、臺所ばたらき、水を汲むやら、米を磨ぐやら、みんな俺ひとりで勤めてゐる。それは自分の心柄と我慢も辛抱もしてゐたが、妹のお前にまでそれほどの苦勞をかけてゐることは、今まで夢にも知らなかつた。普化宗門は勇士浪人のかくれ家、義に因つて人をかくまふものと思つてゐたに……。（腹立たしげに奥をみかへる）いや、やつぱり俺が悪かつたのだ。おれが卑怯であつたからだ。さうと知つた以上は、なんとか考へ直さなければなるまい。

お辻　でも、迂濶にこゝをお立退きなされたら、あなたのお身が危いではございませぬか。

半彌　さあ（思案してゐる）

お辻　もし、兄さま。お金のことはわたくしが何とか工面をいたしますから、もう少し詮議の弛むまでは、何事も辛抱して隠れておいでなされませ。

半彌　おれは辛抱するにしても、唯つた一人の妹のお前にまでそんな苦勞をさせてはならない。どう考へてもおれが間違つてゐたのだ。

お辻　そんなことを仰しやつて、決して短氣なことをして下さりますな。くどくも申す通り、こゝを出たらあなたのお身が危いのでございます。

半彌　それを思つて我慢してゐるのだが……。どうも困つたな。

（半彌はやはり思案してゐる。お辻は向うをみて、俄にあわてる。）

お辻　（小聲に）もし、兄さま。

半彌　なんだ。

お辻　向うから宍倉の……。十三郎どのが……。

半彌　なに、宍倉の十三郎が來た……。（これも慌てる）おまへも見られてはいけない。兎もかくも隠れろ。早く隠れろ。

（半彌は枝折戸のかき金をはづして、お辻を内にひき入れる。）

お辻　這入つてもよろしうございますか。

半彌　よくつても悪くつても仕方がない。まあ、こつちへ來い。

（半彌は妹の手をひきて、上のかたに隠れ入る。奥より草谷出づ。）

草谷　むゝ。あの女はもう歸つたか。いつ見ても好い女だな。

（草谷はうつかりと外をながめてゐる。向うより宍倉

十三郎、あとより神崎次郎平と塚田源藏出づ。十三郎は門口にて二人にさゝやき、神崎と塚田は下の方に去る。）

十三郎　（門口にて）御免くだされ。（草谷が默つてゐるので再び呼ぶ）御免下され。

草谷　（氣がついて）はあ、どなたでござる。

十三郎　拙者は東國の藩中、宍倉十三郎と申す者でござるが、當寺内に同藩中の侍、高村半彌が忍んで居りませうな。

草谷　さあ。（返答に詰つてゐる）

十三郎　たしかに忍んで居る筈でござるが……。

（奥より友德出づ。）

友德　（草谷に）待て、待て。おれが應對する。（縁を降りて出る）お手前にはそれを詮議してなんとなさる。一旦この寺内に入込んだ以上は、親類縁者たりとも御對面は相成りませぬぞ。

十三郎　そこを折入つておねがひ申す。なにとぞ一目お逢はせ下され。高村半彌は姿を變へてこの寺内に隱れ忍んでゐることを確かに突きとめて詮議にまゐつた。勿論、普化宗門の掟として、一旦こゝに入込んだものを隱まはるゝは御もつともでござるが、高村半彌を召捕つてまゐれといふ主君の下知、また二つには彼は拙者の父のかたき、かた〳〵その分には差措かれませぬ。右の事情をお察しあつて、是非ともかれをお引渡しくだされ。

友德　（いよ〳〵いかめしく）さう聞く上は猶更のこと。たとひ主君の下知であらうが、天下の勇士のかくれ家へ一足たりとも踏み込むことは相成らぬ。早々にお引取りください。

十三郎　これほどにお願ひ申してもお聞きわけ下さらぬか。

友德　くどい、くどい。押して通らば我々が勇士の腕前をみせ申すぞ。

十三郎　むゝ。

（十三郎は焦れて友德を押退け、つか〳〵と奥へ踏み込まうとする。）

友德　えゝ、怪しからぬ奴だ。

（友德は十三郎をひき戻さうとする。草谷も尺八にて十三郎に打つてかゝる。十三郎は掻ひくゞりながら争ふ。下のかたより神崎と塚田うかゞひ出で、十三郎を助けんとて庭へかけ込む。奥より空月は天蓋をかぶり、尺八を持ちて出づ。

空月　えゝ、さわがしい。何事でござる。

（これにて皆々すこし鎮まる。）

空月　見れば先刻のお侍、表玄關より案内も乞はず、なん

で通用門から無作法に踏み込みめされた。返答によつては其儘には濟ましませぬぞ。

十三郎　唯今も申す通り、當寺內にかくまひある高村半彌は拙者の父のかたき、且は主君の下知によつて唯今詮議にまゐつたのでござる。たとひ普化宗門たりとも、不忠不義の侍を隱まはるゝ法はござるまい。尋常にかれをお渡し下されい。

神崎　われ／＼も主君の指圖によつて、十三郎どのゝ加勢にまゐつた。

塚田　强ひておかくまひなさるならば、家探しいたしても詮議せねば相成らぬ。

神崎　それとも素直に高村をお渡しなさるか。

空月　なに、家探しする。（屹となつて）して、それは誰の許しを受けられた。

十三郎　主君の許しを受けて、父のかたきを詮議にまゐつた。

空月　えゝ、いつまでも同じことを……。お手前の御主人はどこの國のなんといふ大名かは存ぜぬが、われらは大名などの支配を受くる身分でない。公儀の寺社方の支配でござるぞ。寺社奉行のほかには町方でも手ざしのならぬ虛無僧寺へ、めつたに踏み込んで後悔めさるな。

十三郎　むゝ。

空月　家探しは愚かなこと、こゝへ一足でも踏み込んだが最期、この控へ番所より總本寺へとゞけ出で、お手前等の主人を相手取つて寺社奉行へ訴へたら、何萬石の家に瑕が付きませうぞ。

（十三郎等三人も顏をみあはせる。）

空月　東照宮より觸れ渡されたる慶長十九年の掟書を御存じないかと、立歸つて主人に傳へられい。

十三郎　（思案して）この上は致方もござらぬ。殘念ながら今日はこのまゝ立歸つて、あらためて又お掛合にまゐるでござらう。

草谷　おゝ、いつでもお出でなされ。下世話にいふ一昨日來いとは此事でござる。

空月　（わざと制する）これ、歷々のお侍に對して無禮を申すな。（あざ笑ふ）

神崎　でも、見す／＼籠まつてあるものを……。

十三郎　いや、一圖に燥るところでござらぬ。兎も角もこのまゝ、この儘。

（十三郎は神崎と塚田をなだめる。）

友德　では、無禮をわびてお引取りなさるか。

十三郎　（殘念ながら丁寧に會釋する）いかにも失禮の段、いくへにも御容赦くだされ。

（神崎と塚田もよんどころなく會釋して、十三郎と共

に下のかたへ立去る。)

空月　(笠をぬぐ)　なんにも知らぬ田舎侍、今更のやうにおどろいて、尻尾をまいて歸つて行つた。馬鹿な奴等め。はゝゝゝゝゝ。

友衛　いや、小氣味のよいことであつた。これで勇士の面目が立つたと云ふものだ。

(庭の上のかたより半彌は大小をかゝへて足早に出で來るを、お辻が支へながら出づ。あとより愛泉も追つて出づ。)

お辻　まあ、お待ちなされませ。

愛泉　これ。うろたへて何うするのだ。待て、待て。

半彌　いや、止めるな。止めてくださるな。拙者も侍、いつまでも卑怯者ではゐられぬ。十三郎のあとを追つて、かれの父を討つたる仔細を明白に云ひ聞かせ、かたきと名乘つて尋常に勝負いたす。

お辻　相手は三人、あなた一人では迚も勝負はなりますまい。かならず燥まつて下さりますな。

半彌　えゝ、放せ、放せ。

(半彌は振切つて行かうとするを、お辻は又遮る。)

空月　幽山、どこへゆく。今聞いてゐれば、あの侍どもの跡を追つて行つて尋常に勝負をすると……。さりとは飛んでもない奴だ。相手はどんな腕前か知らぬが、兎も角も血氣ざかりの若い奴が三人も揃つてゐるところへ、貴樣のやうな意氣地なしが唯つた一人で飛び出して行つてどうするのだ。

半彌　(せいて)　もう斯うなつたら命は惜まぬ。えゝ、邪魔するな。

(半彌はお辻をつき退けて門口へ行かうとすれば、空月は椽より降りてその行く手に立塞がる。)

空月　えゝ。わからぬ奴だ。命が惜しくないならばなぜこの寺に隱まつてくれと頼んだのだ。今となつては貴樣の命でも貴樣の自由にはならぬと思へ。虚無僧寺にかくまつた者を世間の奴等に討たせては、普化宗一統の恥辱になる。第一にこの控へ番所をあづかつてゐる俺の役目が立たぬ。あんな奴等が幾人押掛けて來ても、おれが屹と追返してやる。安心して引込んでゐろ。

半彌　いや、引込んではゐられぬ。今まではおれがみんな間違つてゐたのだ。

(突き退けて門をあけるを、空月はひき戻す。)

空月　えゝ、氣ちがひめ。それほど死にたくば斯うしてやる。

(空月は尺八にて半彌の眞向を打つ。半彌は倒れて息絶ゆ。お辻はおどろいて駈けよる。)

お辻　あれ、兄さまは……。もし、兄樣……兄樣……。

空月　（笑ふ）今度こそはほんたうにぶち殺してしまつた。この尺八で眞向を打たれたら、いくら騒いでももう生きることではないのだ。

（お辻は兄の死骸に縋りて泣き伏す。）

愛泉　それだから云はないことか。馬鹿な奴だな。餘計な騒ぎを仕出來して、折角の酒が醒めてしまつた。

（下の方より十三郎は引返して出で、門の外にてうかがふ。）

草谷　して、この死骸はどうするな。

空月　刄物で斬つたり突いたりしたらば格別、不行儀の弟子を尺八で折檻したらば脆くも死んでしまつたのだ。その通り屆けて出ればいゝ、死骸は裏の竹藪へ埋めておけ。

友德　死骸を片付けるのも勇士の仕事だ。

愛泉　さうだ、さうだ。貴樣も手傳へ。

（友德と草谷は半彌の死骸をかき上げようとする。十三郎は外より聲をかける。）

十三郎　かさねてお願ひ申す。その死骸はなにとぞ拙者におわたし下さるまいか。

空月　（みかへる）また來たか。（門をしめる）それ、早く投げ込んでしまへ。

十三郎　（かさねて呼ぶ）もし、お願ひでござる、お願ひでござる。

（内ではそれに頓着せず、愛泉は先に立ち、友德と草谷は半彌の死骸を上の方へ運び去る。お辻も泣く〳〵附いてゆく。十三郎は外より見送る。）

空月　はゝ、飛んだ殺生をした。せめて手向けに一曲吹いてやらうか。

（空月は奥に入る。下のかたより神崎と塚田も出づ。十三郎は殘念さうに二人と顏をみあはせる。奥にて尺八の聲きこゆ。）

——幕——

小梅と由兵衛（二幕三場）

登場人物

梅澁の由兵衛
由兵衛の女房　小梅
天王寺屋の手代　三次郎
天王寺屋の丁稚　長吉
賣卜者　良齋
齋坊主　西作
茶店の娘　おしゆん
同心　上原善之助
ほかに長家の女房。娘。曾根崎の遊女。仲居。梅風呂の若い者。捕手など

第一幕

大阪、聚樂町の裏長屋。二重屋體にて、古びて穢い家の作り。上のかたに古びたる押入。正面は暖簾をかけたる出入口あり。つゞいて破れたる鼠壁。前づらには毀れかゝつた竹縁あり。下のかたには一つ竈、引窓のある臺所。臺所の前には長屋の井戸あり。下のかたは隣家のこゝろにて、古びたる板羽目。上のかたにも隣家の臺所が見え、その臺所とまん中の家とのあひだに枯柳が一本立つてゐる。

（元祿二年の初冬のゆふぐれ、井戸端にて長屋の女房おかれが青菜を洗つてゐる。長屋のむすめおきくが米をといでゐる。下のかたの長屋のうちにて、念佛のたき鉦の音きこゆ。）

おきく　をばさん、寒くなりましたね。

おかれ　まつたく寒くなつた。もうぢきに井戸端が氷るやうになるだらう。

おきく　お正月の來るのは樂みだが、冬の寒さを通り越すのが苦になりますね。

おかれ　それでもお前さんなんぞは若いから、お正月の來るのが樂みだから好いのさ。わたし達のやうになると、お正月の來る前に冬の寒さよりも年の暮といふ怖しいものが控へてゐるからね。なんでも人間は若いうちのことだよ。

おきく　あら、をばさんだつてそんな年でもないでせう。

おかれ　年は幾つでも、子供のふたりも持つと、もうすつかりお婆さんになつてしまふのさ。それが忘なら、お前

さんなんぞもいつまでも獨り者でゐることだね。はゝゝゝゝゝ、さあ、もう好加減にして内へ這入りませう。寒い、寒い。(笊に青菜を入れて起ちあがる)

おきく　わたしも一緒に行きませう。(米かし桶をかゝへて起つ)まだお念佛の鉦がきこえますね。

おかれ　西住さんも朝から晩まで御奇特のことさ。併しあれも商賣だから仕方があるまいよ。

(おかれとおきくは連れ立ちて下のかたに去る。鉦の音つゞきてきこゆ。奥の暖簾口より由兵衛の女房小梅、三十二三歳、筒袖のやうな着物の上に繼ぎはぎの袖無しをかされ、細帶ひとつで出づ。)

小梅　(表をのぞく)口のうるさい長屋の人たちも行つてしまつたらしい。

(小梅は臺所より笊に入れたる米を持ち出して井戸ばたへゆき、水を汲んで米を磨ぎはじめる。下のかたより良齋、三十五六歳、大道うらなひの姿にてあみ笠をかぶり、商賣道具を入れたる風呂敷づつみをかゝへ、片手には五六本の葱を持ちて出づ。)

良齋　おゝ、おかみさん、お寒うござるな。(小梅はだまつて米をといでゐる)

良齋　(再び聲をかける)おかみさん、急にお寒くなりましたな。

小梅　(顏をあげる)おまへさんも察しが悪いね、こつちが默つてゐたら、默つて通り過ぎるものだよ。

良齋　しかし出這入りにはお互ひに挨拶して通るのが、一つ長屋の禮儀でござるからな。

小梅　その禮儀も時による。わたしはこんな裴をしてゐて、挨拶するのが極りが悪いから、それで默つて返事をしないのさ。そこを察して、素知らぬ顏をして通り過ぎるのが却つて禮儀といふものぢやあないか。

良齋　(笠越しに眺める)なる程面白いなりをしてゐる。

小梅　ほんたうに蔑んだお笑ひ草さ。このごろはこんな女の猿まはしが大阪にも出來たさうだ。

良齋　おまへが猿まはしに出たら、容貌が好いから定めて稼ぎがあるだらう。

小梅　まじめになつてひやかすのはお止しなさいよ。おまへさんこそ今日は大層早いぢやあないか。定めて亡者がたんと寄つて來たとみえるね。

良齋　なにさ。すこしかぜを引いたやうだから、日の暮れないうちに店をしまつて歸つて來たのだ。(葱をみせる)これで雜炊でも焚いて温まらうと思つてな。

小梅　葱を買つて來なすつたのか。鴨は無しかえ。

良齋　鴨どころか、いや、しやもの骨もむづかしい。いや、今の世の中では、米なり粥なり三度三度滿足に食つて行かる

れば結構だと思はなければならない。

小梅　それぢやあ、こんな装をしてゐても恥かしくはないかね。

良齋　恥かしいものか。どうして、どうして立派なものだ。

小梅　なにが立派だ。好加減にしないと、冷い水を頭からぶつかけるよ。

良齋　いや、御免、御免。では、お休みなさい。（行きかける）

小梅　まだ日も暮れもしないのに、今からお休みなさいはあんまり早過ぎるね。

良齋　でも。わたし等のやうな寂寞たる獨り者とは違ふからな。

小梅　ばか／＼しい。そんなことは昔の夢さ。ひとりで寂しければ、今日わたしが遊びに行つてあげようか。

良齋　さあ。（かんがへる）その御深切はありがたいが、おまへと差向ひでゐるところを由兵衛どのに見付かつたら大變だからな。

小梅　おまへさんを相手にして、やきもちを焼くほどの亭主でもないのさ。

良齋　これは御挨拶だ。まあ、まあ、お靜かにお休みなさい。

（良齋は上のかたにゆき、臺所の戸をあけて我家に入る。小梅は笑ひながら米をといでゐる。）

小梅　えゝ、冷たくつて遣切れない。もう好加減にして置かうか。

（小梅は水をながして笊をかゝへ、臺所に入る。下のかたよりおしゆん、十七八歳、美しい茶店の娘足早に出で來りて内をうかゞひゐると、小梅は臺所より内に入る。）

おしゆん　（遠慮勝に聲をかける）御免なさい。

小梅　誰だえ。（すかして見る）おや、おしゆんさん。また來なすつたか。

おしゆん　あの、三さんは見えませんか。

小梅　（自分のからだを見まはしながら）三次郎は來てるませんよ。

おしゆん　まだ見えませんか。

小梅　（自分の姿を恥ぢるやうに、なるべく薄暗い方へ身をよせながら）けふは一度も來ませんよ。

おしゆん　日の暮れるまでには姉さんの家へ行つて待つてゐるといふので、いつもよりも早く店を仕舞つて來たのですが、ほんたうに三さんは來てゐませんか。

小梅　嘘もほんたうもあるものか。まつたく來てゐないから來てゐないと云ふのに、おまへさんも疑ひ深い人だね。日暮れがたの忙がしいところへ來てまご／＼してゐない

で、早く歸つておくんなさいよ。

おしゆん　はい。（まだ躊躇してゐる）

小梅　弟も弟だが、お前さんもお前さんだ　今時の若い者はみんなづうづうしい。いくら姉妹の家だからと云つて、いつもいつもこゝを出逢ひの場所にされて耐るものか。わたしの家はぽん屋を商賣にしてゐるんぢやありませんからね。三次郎に用があるなら、どうぞほかの家へ行つて逢つてくださいよ。

おしゆん　では、三さんが見えましたら、わたしがこゝへたづねて來たと……。

小梅　（じれる）　うるさいね。早くお歸りよ。いつまでもぐづぐづ云つてゐると、向う脛へ薪ざつぽうを叩きつけるよ。

おしゆん　はい、はい。どうもお邪魔をいたしました。

（おしゆんはしなしなとして下のかたに立去る。）

小梅　（舌打ちする）　ほんたうに癪に障る奴だね。

（梅澁の由兵衞、三十六七歳、女の着物を不恰好にきて、奥よりのそりと出づ。）

由兵衞　さうがみがみと嚙み付くことはねえ。可哀さうに相手は子供だ。

小梅　子供のくせに色事は一人前だから小憎らしい。もう些とぐづぐづしてゐたら、ほんたうになぐり付けて遣らうと思つたところさ。

（夫婦は古びた箱火鉢のやうなものを前にして、差向ひになる。）

由兵衞　あの女はどこの茶店にゐるんだつけな。

小梅　野中の觀音前の茶店に出てゐるのさ。おまへさんは知らないのかえ。

由兵衞　道理でおれも知らねえ筈だ。自慢ぢやあねえが觀音樣や阿彌陀樣へは、生まれてから一度もおまゐりをしたことがねえからな。

小梅　親の仕付け方が悪いんだね。

由兵衞　そりやあおたがひ樣だらう。（笑ふ）　併しあの女は本氣で三次郎に惚れてゐるらしいから、三の野郎も仕合せだ。

小梅　なにが仕合せなものか。女に惚れられて仕合せだなんて云ふのは、太閤樣や權現樣が生きてゐた時代のことさ。女に惚れられたら何かで損をするにきまつてゐて、自分ばかりか親兄弟にも迷惑をかける。現にあの三次郎も以前は姉さん孝行で、たんとも貰はない給金のうちから、わたしに幾らかづつの小遣ひをくれてゐたが、あの女と馴染になつてからは鐚一文も呉れないから、腹が立つてなりやあしない。

由兵衞　そりやあ無理もねえことよ。三次郎だつて若い身

姿だ。姉さんよりも色女の方が餘計に可愛からうぢやあねえか。

小梅　おまへさんは若い者の贔屓ばかりするね。

由兵衛　おれは思ひ遣りがあるからな。

小梅　思ひやりがあるなら、女房を裸にして平氣で澄ましてもゐられない筈だが……。お前さんまあわたしの姿を御覧よ。なんぼ何でもあんまり極りが悪いから、井戸端へ出るにもお長屋の人達のゐないときを窺つて出るやうにしてゐるくらゐぢやないか。今もあの女が遣つて來て、わたしがこんな見つともない装をしてゐる所を見られたかと思ふと、なほ／＼績に障つたから、怒鳴りつけて追ひ返して遣つたのさ。

由兵衛　飛んだ八つ當りだ。

小梅　それもこれもみんなお前のせゐだよ。

由兵衛　誰のせゐだか知らねえが、自分のことばかり云ふな。おれだつてこの通り、繪にもかけないやうな姿をしてゐるのだ。

小梅　それは誰の着物だよ。

由兵衛　女房のお召物を拝領したのよ。どうも男には恰好がよくねえやうだ。

小梅　あたりまへさ。夫婦揃つて眞八間の姿はありやあしない。（肩をすくめる）着る物の話をしてゐたら、なんだか急に薄ら寒くなつて來た。おまへさん、一杯飲まないかえ。

由兵衛　（やゝ意外らしく）むゝ、酒があるのか。

小梅　お肴はないよ。

由兵衛　もう、贅澤は云つてゐられねえ。冷でもいゝから早く飲ましてくれ。

小梅　これぢやあすぐに支度をするから、おまへさんは燈火を出しておくんな。

由兵衛　よし、よし。（たち上る）

小梅　まだ點けるにやあ早いよ。このごろは油が高いからね。

由兵衛　けちなことを云ふな。それだから女は嫌ひだ。

小梅　世帯持のいゝ女は嫌はれるものさ。

（小梅は臺所へゆきて酒の支度をする。由兵衛は奥へ入りて破れた行燈をさげて出づ。叩き鉦の音きこゆ。）

由兵衛　まつたく日が落ちると寒くなるな。

小梅　おたがひにこの姿ぢやあ、今年の冬は一倍堪へるのさ。

由兵衛　また始めやあがつた。執念い奴だ。となりの坊主もよくかん／＼叩きやあがるな。あんな音をきくと猶さら寒くなる。

（ふたりは差向ひで飲みはじめる。）

小梅 （酌をしながら） この頃のやうぢやあ全く愚痴も云ひたくなるよ。おたがひに意氣地が無くなつたね。

由兵衛 意氣地がねえといふわけでもねえが、どうも世渡りがむづかしくなつて來たのだ。おれも澁染め屋のせがれに生れて、四間間口の屋臺骨を踏まへてゐたが、十七八の頃から立派な道樂者になりすまして、おやぢが死ぬとすぐに店は沒落、いや見事なものよ。（笑ふ） それからだん／＼に修業が積んで、胡椒頭巾の商賣をはじめるやうになつた。

小梅 わたしがお前と一緒になつたのは其時分だが、胡椒を隱して持つてゐて、往來の人に眼つぶしを食はせ、相手がうろたへる隙をみて懷ろの物や持物を攫つてゆく、おまへの腕前はほんたうに鮮やかなもので、わたしもつくづく感心したよ。

由兵衛 それも長くは續かねえ。胡椒頭巾の辻强盜は梅澁屋の由兵衛らしいと、世間の噂がだん／＼高くなるので、今度はおまへの入れ智慧で、板がへの商賣を又はじめた。

小梅 あれはわたしの新工夫さ。兩替屋へ板銀を持つて行つて小粒と兩替へをして貰つた上で、今の金を鳥渡見せて下さいと一旦こつちの手に取戻して、素早く贋物とすりかへて渡すといふ、あの手妻も當分はうまく行つたね。

由兵衛 それも當分のことで、やつぱり長くは續かねえ。世間は廣いやうで狹いもので、このごろ流行る板換へも由兵衛らしいと眼星をつけられて、なんだか危なくなつて來たから、足もとの明るいうちに止めてしまつた。

小梅 それから先は商賣無しで、子どもに捉まへられた龜の子とおなじやうに、首を引つこめて小さくなつてゐるばかりだ。さりとて棒を肩にあてゝ青菜小菜も賣つてあるかれず、博奕をするにも元手は無し、かうなると、まつたく惡黨は潰しが利かないね。

由兵衛 どうで惡黨なんていふものは、あんまり地金がよくねえからな。潰しの利かねえのも無理はねえよ。

小梅 無理はねえと諦めてゐて、これから先をどうして命をつないで行くつもりだよ。ちつとしつかりしてお呉れな。

由兵衛 どうもうるせえな。明けても暮れても同じことばかり云ふなよ。かうみえても俺なんぞは何とかしてこの運勢を盛返すやうに、はかりごとを帷幕のうちにめぐらしてゐるのだ。

小梅 辻講釋のやうなことをお云ひでないよ。もう、もう、お前にやあ愛想が盡きたよ。

由兵衛 なに、愛想が盡きた。こいつ、このごろの冬菜ぢやあるめえし、大束なことをいふな。痩せても枯れても梅澁の由兵衛、胡椒頭巾の由兵衛、板換への由兵衛だ。

うぬが女房に馬鹿にされて堪るものか。
小梅　馬鹿だから馬鹿にされるのさ。それが口惜しければ利口な人間の眞似をして見せるがいゝ。
由兵衛　この上利口になりやうがあるものか。
小梅　（笑ひ出す）その上に利口になつたら、菰をきて橋の上に坐つて、どうぞ一文だらうよ。
由兵衛　こん畜生、亭主を乞食扱ひにしやあがる。もう料簡はならねえぞ。（徳利を把る）
小梅　なにをするんだね。無けなしの酒がこぼれてしまふぢやないか。
由兵衛　酒なんぞこぼれたつて構ふものか。貴様の頭をぶち割つて、紅い酒を浴びるほど飲ませて遣らあ。
（由兵衛は徳利を把つて起たうとすれば、小梅は素早くその胸ぐらをつかんで小突きまはす。）
小梅　さあ、ぶてるなら打つて御覽。おまへのやうな出來そこなひの亭主に、おとなしく打たれたり踏まれたりしてゐるおかみさんだと思ふかよ。
由兵衛　えゝ、こいつ、惡巫山戯をすると打ち殺すぞ。
小梅　それほどの度胸があるなら思ひ切りよく殺しておくれよ。さあ、殺しておくれよ。
（小梅はむやみに由兵衛を小突きまはす。）
由兵衛　よし、殺してやるから覺悟しろ。

（由兵衛は小梅を突き倒して起ちあがる。）
小梅　お前ほんたうに殺す氣かえ。あきれた人だね。いゝかえ。わたしは大きい聲をして怒鳴るよ。わたしの亭主の由兵衛は胡椒頭巾の……。
由兵衛　これ、馬鹿をいへ。
小梅　わたしの亭主は板がへの由兵衛で……。
由兵衛　えゝ、とんでもねえことを云ふな。
（由兵衛は小梅をおさへようとして追ひまはす。小梅は逃げながら緣を降りる。）
小梅　さあ、もつと、大きい聲をして怒鳴るから、さう思つておいでよ。
由兵衛　どうも呆れた氣ちがひだな。これ、靜かにしろと云ふのに……。
小梅　いゝえ、靜かにしない。わたしの亭主は……。
由兵衛　まだ云ふのか。
（由兵衛は小梅を追ひまはしてゐる。上のかたの臺所の戸をあけて、良齋は寢卷姿にて出づ。）
良齋　又はじめたのか。困つたものだな。
（良齋はかけ寄つて夫婦を取鎮めようとする。由兵衛は良齋を突き倒す。）
良齋　これ、これ、わたしをどうするのだ。
小梅　おゝ、お隣の良齋さんか。（由兵衛に）お前、良齋

さんをどうするんだよ。
由兵衛　（氣がついて）やあ、となりの先生か。こりやあ粗相だ、堪忍しておくんなさい。
良齋　（おきあがる）いくら粗相だと云つて、仲裁に出て來た人間をむやみに突き倒すといふことがあるものか。萬一腰の骨でも痛めてみなさい。あしたから商賣にも出られない。（着物の泥を拂ふ）
由兵衛　いや、こいつが女のくせにあんまり増長しやあがるので、わたしも一杯機嫌でこの始末、まことに面目次第もねえのさ。
良齋　夫婦喧嘩も三月に一度か、半年に一度ぐらゐは、まんざら惡くもないものだが、おまへさん達のやうに三日にあげずでは、自分たちも面白くあるまいし、近所も迷惑だ、もう止さつしやい。止さつしやい。
小梅　良齋さん、おまへさんは占ひは上手かえ。
良齋　それを今更きくことか。辻占ひこそしてゐるが、その中ること神のごとくで、自分ながらも不思議に思つてゐるくらゐだ。
小梅　ぢやあ、一つ占つてくださいな。
良齋　なにを占ふのだ。
小梅　この亭主と一緒にゐる方がいゝか惡いか、後生だから占つてくださいよ。
良齋　いや。それは占ふまでもない。おまへと由兵衛殿とは、水と金との相性で、一生離れることの出來ないやうになつてゐる。
小梅　ぢやあ、やつぱり惡縁かねえ。
由兵衛　そりやあこつちで云ふことだ。そこで良齋さん。ついでにわたしのも見てくれまいかね。
良齋　おまへのは何だな。
由兵衛　わたしの身の上の判斷で、これから運が開けるかどうだか、確かなところを占つてください。
良齋　さうなると些とむづかしい。まあ、待ちなさい。
（良齋は引返して我家に入る。そのあひだに由兵衛は縁にあがつて坐し、小梅は鬢など掻きあげながら縁に腰をかける。やがて良齋は商賣道具をつゝみたる風呂敷をかゝへて出づ。）
良齋　さあ、さあ、こゝで店を擴げなければならない。（風呂敷より算木や筮竹などを把り出し、天眼鏡を持つ）さあ、御亭主、手を出さつしやい。
由兵衛　手を出せ……。（すこし躊躇する）縁起でもねえが、まあ仕方がない。はい、はい。
（由兵衛は片手を眞直に出す。）
小梅　おまへさんは馬鹿だね。手のひらを出すんだよ。
由兵衛　こんなことは始めてだから、勝手がわからねえ。

（手のひらを向けて）　さあ、ねがひます。

良齋　よろしい。（勿體らしく天眼鏡で照してみる）

小梅　（のぞいて）　もし、どうです。一生うだつが上りさうもありませんかえ。

由兵衛　やかましい。默つてゐろ。

良齋　（ため息をつく）　いや、これは驚いた。

由兵衛　そんなに驚くことがあるかえ。

良齋　まあ、せいてはならない。

（良齋は筮竹を繰り、算木をならべて少しくかんがへてゐる。）

良齋　なるほど、これはまつたく大變だ。

小梅　大變とはどういふわけですよ。

良齋　今夜のうちに大きい福が來る。

由兵衛　大きい福が來ると云つて、大福餅でも貰ふのかえ。

良齋　いや。いや、おまへの手に大金が這入る。

由兵衛　ほんたうかえ。からかふのは御免だぜ。

良齋　決して嘘や冗談ではない。今夜のうちに屹と大金が手に這入る。

小梅　幾らぐらゐ這入るでせうね。

良齋　その金高はわからないが、なにしろ大金に相違ない。まことにおめでたいことだ。

小梅　それがほんたうだつたら、良齋さん、おまへさんにも屹とお禮をしますよ。

良齋　（首をかしげる）　併しどうも不思議だ。念のためにおかみさんのも見て進ぜよう。

小梅　はい、はい。（手を出す）

良齋　（天眼鏡で見る）　ほう、これも御亭主とおなじことだ。夫婦揃つてこれである以上は、いよ〳〵間違ひはない。その金が手に這入つたら屹とお禮をして下さるであらうな。

小梅　それは呑み込んでゐますよ。

良齋　いや、それは有難いな。かうなると、夫婦喧嘩のとなりにも住むことだ。はゝゝゝゝ。では、よいお話を待つてゐますぞ。

（良齋は商賣道具をまとめて我家に入る。あとに夫婦は顏をみあはせる。）

小梅　おまへさん。おたがひに運が向いて來たらしいね。

由兵衛　あいつの云ふことは本當だらうか。

小梅　當るも八卦、あたらぬも八卦とかいふが、あいつもまんざら跡方のないことも云ふまいぢやないか。

由兵衛　それもさうだな。ぢやあ、前祝ひに一杯飲むかな。（徳利をみて）　あゝ、いけねえ。今の騒ぎでみんな零してしまつた。

小梅　それだから云はないことか。夫婦喧嘩は世帯の損だ

よ。
由兵衞　臺所にはもうねえのか。
小梅　まだ少しはあるかも知れない。
（小梅は臺所より酒を持ち來りて、ふたりは又飲みはじめる。）
小梅　大金が這入ると云つて、一體どのくらゐ這入るんだらうね。
由兵衞　たんとも要らねえが、百兩ばかり欲しいな。
小梅　百兩あれば澤山さ。七八十兩でもいゝ。さうしたらもう好加減に足を洗つて、なにか小粋な商賣でも始めるんだね。
（下のかたより天王寺屋の丁稚長吉出づ。）
長吉　御免なさい。
由兵衞　え。誰か來たぜ。
小梅　わたしはこんな裝をしてゐて、もう出て行くのは忌だよ。おまへ出て御覽よ。
由兵衞　（着物をかき合せながら緣端に出る）おい、誰だ、誰だ。
長吉　店の三次郎さんは來て居りませんか。
由兵衞　よく三次郎をさがしに來るな。（透しみて）むゝ天王寺屋の丁稚どんか。
長吉　店のお使で三次郎さんと一緒に出て、兩換町から歸る途中、おれは聚樂町の姉さんのところに鳥渡寄つてくるから、お前は高津のお社のあたりに遊んで待つてゐろと云つて別れました。
小梅　（ふり向く）それぎりで三次郎は歸らないのかえ。
長吉　日が暮れかゝつても歸つて來ないので、一人で戻らうとしましたが、それでは惡からうと思ひまして、こちらへ探しにまゐりました。
由兵衞　三の野郎め、途中であの女に逢つたのだな。
小梅　仕樣のない奴だねえ。（長吉に）それでもまあよく探しに來ておくれだ。お前ひとりが先へ歸らうものなら、三次郎めがしくじつてしまふ。まあ、そこにかけて休んでおいでよ。三次郎の方でもお前をさがして、こゝへうろ〳〵遣つて來るかも知れないから。
長吉　では、少しの間、こゝに待たせて置いて貰ひませうか。（緣に腰をかける）
由兵衞　利口さうな丁稚どんだ。何か遣るものはねえか。
小梅　あいにくだねえ。（臺所へ起つてゆく）
由兵衞　けふは三次郎と兩換町の何處へお使に行つたのだ。
長吉　兩換町の錢屋へ行つて、板銀を小判にかへて來たのでござります。
由兵衞　板銀を小判に兩換へして來たのか。して、幾らは

ど換へて來たのだ。
長吉　小判で百兩でござります。
由兵衛　百兩……。その百兩をふところにして、三次郎めは遊びあるいてゐるのか。
長吉　いえ、その小判はわたくしが預つて居ります。
（このうちに、小梅は盆に茶碗をのせて臺所より出で、立つたるまゝにて聽いてゐる。叩き鉦の音きこゆ。）
由兵衛　年の行かねえ者に大金をあづけて、自分は身輕になつて遊びあるく。どつちにしても三の野郎は間違つてゐるな。小判百兩といへば大金だ。人に取られねえやうにしつかりと持つてゐろよ。
長吉　はい、財布に入れてしつかりと首にかけて居ります。
（由兵衛はその金がほしくなる。小梅は盆を持つて出づ。）
小梅　あいにく何にもない。ぬるいかも知れないが番茶でもお飮みよ。
長吉　もうお構ひなされますな。（會釋して茶をのむ）
小梅　三次郎はおまへを可愛がつてくれるかえ。
長吉　大勢の番頭さんや手代衆のうちでも、三次郎さんが取り分けて可愛がつて下さります。
小梅　勇は馬鹿正直の代りに人間はおとなしいからね。丁稚どんなぞには當りがいゝだらうよ。それがまああいつの取得さ。
（このあひだに由兵衛は頻りに考へてゐる。）
小梅　併しその正直もあてにやあならない。三次郎もこのごろは浮ついてゐて困るよ。
長吉　野中の觀音樣へ行くことでござりませう。
小梅　ほゝ、おまへも知つてゐるのかえ。野中の觀音前の茶店の女でおしゆんと云ふのに熱くなつて……。お前、そんなことを御主人や番頭さんに云つておくれでないよ。
長吉　誰にも決して云ふなと、三次郎さんからも頼まれてゐますから、めつたにしやべる氣づかひはございません。
小梅　なにぶん頼みますよ。（云ひかけて由兵衛をみかへる）もし、お前さん。急に默つてなにを考へてゐるのさ。
由兵衛　え、何。さつきの占ひのことを考へてゐるのよ。
小梅　おまへもそれを考へてゐるのかえ。（となりを頤で指す）あの占ひはまつたく上手らしいね。
由兵衛　どうも上手のやうだな。
小梅　占ひは中つてゐるんだよ。（眼で知らせる）
由兵衛　（うなづく）中つてゐるな。
（夫婦は眼をみあはせる。暮六つの鐘きこゆ。家内はだん〳〵に薄暗くなる。）

長吉　（こゝろづいて起つ）　あんまり遲くなると不用心でございますから、わたくしはもう戻ります。三次郎さんが見えましたら、宜しく仰しやつてください。

小梅　まあ、お待ちよ。あの……實はね。三次郎は家に來てゐるんだよ。

長吉　來てゐるのでございますか。

小梅　實はさつきから來てゐるのだけれど、少し醉つて寢てゐるので、起すのも可哀さうだと思つて、好加減なことを云つてお前を待たせて置いたのさ。お前は百兩のお金を持つてゐるのだらう。

長吉　はい。

小梅　年のゆかない者に大金を持たせて、どうして一人で歸されるものかね。まあ、お待ちよ。三次郎を呼んで來て、おまへと一緒に歸らせるから。（由兵衛に）ちよいと奥へ行つて、弟を起して來てくださいよ。

由兵衛　なに、弟を起して來い……。

小梅　弟は奥に寢てゐるんだからさ。（眼で知らせる）早く起して來ておくれと云ふのに……。

由兵衛　むゝ。

（由兵衛はなんだかよく判らないながらに首肯きて奥に入る。）

小梅　（長吉に）　すぐに連れて來るから待つておいでよ。

（小梅はつゞいて奥に入る。長吉は再び縁に腰をかけてゐる。下の方の長屋より齋坊主西仕、提灯をとぼして出づ。）

西仕　もし、御免なさい。はて、お留守かな。

長吉　いえ、みんな奥へ行つて居ります。

西仕　おゝ、左樣かな。もし、御免なさい。

（奥より小梅出づ。）

小梅　あゝ、西仕さんか。

西仕　今夜は小橋の方へお齋に呼ばれて居りますので、これから行つてまゐります。留守をなにぶんお願ひ申します。

小梅　あい、あい。ゆつくり行つておいでなさい。

西仕　お勤めとあれば是非ないものゝ、小橋の方はさびしい道で、夜はなか／＼難儀でございます。それに此頃はあの邊に惡い狐が出ましてな。

小梅　（焦れつたさうに）　それだから氣をつけて早くお出でなさいよ。

西仕　はい。はい。では、何分おねがひ申します。

（西仕はとぼ／＼と下のかたに立去る。）

長吉　三次郎さんはどうなされました。

小梅　それが困るんだよ。眼はさましたけれど、なんだか頭が病めて起きられないと云つてゐるのさ。それで何か

おまへに話したいことがあると云つてゐるから、ちよいと奥へ行つておくれでないか。
長吉　はい、はい。ずつと通つても宜しうございますか。
小梅　この通りの家だから遠慮なしにおあがりよ。
長吉　では、御免ください。
（長吉は會釋して緣にあがり、奥に入る。小梅は行燈を吹き消して、表に氣をくばり、更に奥をうかゞつてゐたりしが、やがて聲をかける。）
小梅　もし、お前さん。
由兵衛　（内にて答へる）なんだ。
小梅　大層靜かだねえ。
（奥より由兵衛は金財布を持ちて出づ。）
由兵衛　（笑ひながら）この通りだ。（財布をみせる）
小梅　絞めたのかえ。
由兵衛　むゝ、しやもよ。
小梅　脆いねえ。
由兵衛　多寡がひよつ子だ。羽ばたきもさせやあしねえ。
小梅　あかりを點けるから、ちよいと檢めて御覧よ。
（小梅は行燈を持出して灯をともせば、由兵衛は財布から小判を出して見る。）
小梅　（のぞく）百兩あると云つたぢやないか。
由兵衛　むゝ、確かにありさうだ。

（由兵衛は小判をかぞへてゐる。下のかたより天王寺屋の手代三次郎、廿一二歳、足早に出づ。）
三次郎　今晩は。
（夫婦はおどろき、由兵衛はあわてゝ小判を押隠して奥に入る。）
小梅　（すかしみて）あゝ、三次郎か。今時分何しに來たのだえ。
三次郎　姉さん。店の長吉はまゐりませんでしたか。
小梅　長吉……。來ないよ。
三次郎　來ませんか。
小梅　おまへは長吉を探しに來たのかえ。
（云ひながら心づいて、小梅は緣ばなに出で、長吉の草履をそつと隠さうとする。）
三次郎　もし、その草履は……。
小梅　これかえ。これはお長屋の子供がさつき遊びに來て、歸りは阿母さんにおんぶして行つたので、そのまゝ脱いであるのさ。
（小梅は草履を臺所へ投げ込む。）
三次郎　あゝ、姉さん、姉さん。
小梅　なんだよ。さうぐしいね。
三次郎　（行燈の下を指さす）そこに小判が一枚……落ちて居ります。

小梅　え。（あわてゝ小判を拾つて帯にはさむ）

（三次郎は不審さうに姉の顔をながめてゐる。）

小梅　なぜ人の顔をじろ〳〵見てゐるんだよ。いくら貧乏してゐても、小判の一枚ぐらゐ持つてゐることもあるのさ。（紛らすやうに）野中の觀音前に出てゐる女がさつきお前をたづねてこゝへ來たよ。

三次郎　さうでございましたか。

小梅　さうでございましたかも無いもんだ。おまへは今までその女と巫山戯てゐたんだらう。もう日が暮れたのに、いつまでうろ〳〵してゐるんだね。早くお店へお歸りよ。

三次郎　長吉はまつたくこゝへ來ては居りませんか。隱さずに敎へてください。

小梅　誰が隱すものかね。年の行かない丁稚を置き去りにして、あんまりのらくらはいてゐるから、乾と先へ歸つてしまつたに相違ないよ。主人の使に出て來ながら、道草を食つてゐるといふのが第一お前が惡い。さあ、さあ、御主人や番頭さんに叱られないやうに、早くお歸り、お歸り。

三次郎　はい。

小梅　何をきよろ〳〵してゐるんだよ。をかしな人だねえ。お歸りよ。

三次郎　（よんどころなく）では、お暇申します。

小梅　あたりまへさ。おまへには主人持ぢやないか。

（三次郎はなんだか腑に落ちぬやうな顔をして、下のかたに行きかけしが、又引返して井戸のかげに隱れる。奥より由兵衛出づ。）

由兵衛　三の野郎はもう行つたか。もしや氣取られやあしねえかと思つて、流石のおれも少しひや〳〵してゐた。

小梅　なんだか變な顔をしてゐたやうだが、あの通りの馬鹿正直だから、よもや氣が附きやあしまいよ。それにしても又どんな奴が來まいものでもないから、奥のものは早く何とか始末してしまはなければいけないね。

由兵衛　おれもさう思つてゐるのだ。緣の下なんぞに埋めて置くと、あとが面倒だ。なんでも人の氣が付かねえやうな、遠いところへ擔ぎ出してしまふに限るが、どこか好い場所はねえかな。

小梅　さあ。（かんがへる）となりの寮坊主は小梅へ行くと云つてゐたが、あの邊はさびしくていゝぢやないか。

由兵衛　むゝ。さうだ。小梅へ行つて、野中の井戸へ沈めて來よう。おい、ぼろ葛籠を出してくれ。

小梅　お前さん、ひとりで背負へるかえ。

由兵衛　大丈夫だ、大丈夫だ。錢箱が背負ひ切れねえやうで侍になれるか。

小梅　はゝ、馬鹿にしてゐないね。

（小梅は表を窺ひながら行燈をさげて由兵衛と共に奥に入る。井戸のかげより三次郎は忍び出で、ぬき足をして、奥をうかゞふ。上のかたの長屋の臺所よりも良齋が半身を出して窺ふ。やがて奥より由兵衛は頭巾をかぶり、尻を端折り、長吉の死骸を入れたる葛籠を背負ひて出づ。小梅は蠟燭をともして先に立ちて出で、再び表をうかゞひて良齋と顔をみあはせ。流石にぎよつとする。）

良齋（しづかに）御亭主は重さうなものを背負つて、どこへ行きなさるな。

小梅　お恥かしいが、質屋へ運ぶのさ。

良齋　はゝあ、それは御苦勞でござるな。

（由兵衛は縁を降りようとして、三次郎のすがたを透し見て怒鳴る。）

由兵衛　えゝ、誰だ、誰だ。

（三次郎はあわてゝ井戸のかげに隱れる。良齋はだまつて眺めてゐる。由兵衛と小梅は顔をみあはせ、小梅は早くゆけと眼で知らせる。夜まはりの太鼓の音きこゆ）

――幕――

第二幕

――曾根崎新地の梅風呂。すこしく上のかたによせて梅風呂と染め拔きたる長暖簾(なかのれん)をかけ、入口の柱にもおなじく梅風呂と記したる行燈をかけたり。家の左右は千本格子にて、下のかたに櫻の立木あり。

（前幕の翌年、三月下旬の午後。櫻の木の下には、大道うらないの良齋が笠をかぶりて店を出してゐる。風呂屋の女幾野と仲居おそめが店の前に立ち、幾野が占ひをたのんでゐる。どこやらで笛の聲きこゆ。）

良齋（筮竹を取り、算木をならべる）おまへの待人でござるな。

幾野　さうでござります。

良齋　はゝあ。（幾野の顔をみる）この卦によるときは待人は來らずとある。

おそめ　え。待人は來らず……。それはほんたうでござりますか。

良齋　この通り、易の表にあらはれてゐる。

幾野　では、やつぱりあの人のこゝろは變つたに相違ない。（おそめの手をつかむ）おそめさん、こりやあどうしたら好からう。（泣く）どうしたらよからう。

おそめ　どうしたらと云つて、わたしにも仕樣がないものを……。

幾野　仕様がないと云つて、近いうちには乾と逢はせてやると、おまへが確かに請合つたではないか。あれはみんな嘘か氣やすめか。（おそめを小突く）

おそめ　それはお前、無理といふもの。何事も相手の男の心次第で、わたしの思ふやうにもなるまいではないか。

幾野　思ふやうにもならないものを、なぜ安々と請合つた。おまへは嘘つき、今までわたしをだましてゐたのか。（また泣く）

おそめ　まあ、往來で見つともない。

幾野　もう恥も外聞も云つてはゐられぬ。あの人に逢はれぬと決まつたら、わたしはいつそ蜆川へ……。（かけ出さうとする）

おそめ　まあ、とんでもない。（幾野を捉へる）

幾野　え丶、放して、放して……。

（幾野はふり放して驅け出さうとするを、おそめは支へ、ふたりは爭ひながら上のかたへ走り去る。）

良齋　（見送る）　これは大變なことになつた。併しあの仲居がそばに附いてゐるから、まさか本當に蜆川へ飛び込みもしまい。いや、今の騷ぎであの女達は見料を置かずに行つてしまつた。占ひも正直のことばかり云つてゐては商賣にならぬ。はゝゝゝゝゝ。

（梅風呂の暖簾口より店の男二人出づ。一人は箒を持ち、ひとりは手桶と柄杓を持ち、店の前を掃きかけて良齋の方をみかへる。）

男甲　大道占ひめ、また出てゐるな。

男乙　いま／＼しい奴だ。

（ふたりは良齋の店のまへに來る。）

良齋　（笠の内にて）　結構なお天氣でござるな。

男甲　これ、いつも云ふことだが、場所もあらうに、なぜこんなところへ來て店を出してゐるのだ。

良齋　こゝは色町で、身の上判斷、待ち人、失せものを尋ねる人が多いので、わたし等の商賣には都合のよい所だ。

男乙　そつちには都合がいゝか知らないが、かういふ家業の店さきにそんな店を出してゐられては邪魔になる。もつと離れたところへ行つて貰ひたいな。

良齋　いつも云ふ通り、わたしはこゝの御主人夫婦に斷つて、この場所を借りてゐるのだ。

男甲　その御主人も飛んだ奴に貸したと困つてゐるのだ。

良齋　（しづかに）　では、御主人がわたしを追ひ拂へと云はれたのか。

男乙　さうも云はれないが、なんとかしてあいつを追ひ拂つてしまひたいと口癖のやうに云つてゐるのだ。

男甲　もう容赦は出來ないから、けふこそいよ／＼こゝを立退いて貰はう。

良齋　いや、それでは約束が違ふ。こゝの店が繁昌してゐる限りは、わたしもこゝに店を出させて貰ふ約束になつてゐる。おまへ達の知らぬことだ。なまじひの忠義立はしないがよい。

男甲　こいつ惡く落ちついてゐる奴だ。けふこそ腕づくでも立退かせるから然う思へ。

男乙　ぐづ／＼してゐると、その店をぶちこはして蜆川へ叩つ込むぞ。

良齋　それは迷惑。まあ、まあ、止めてください。

男甲　（乙と眼をみあはせる）いつまで云つても埒はあかねえ。二度と出て來ないやうにその店をぶちこはしてしまへ。

良齋　これ、無法なことをさつしやるな。

二人　えゝ、やかましい。

（ふたりは良齋の店をひつくりかへすを、良齋は支へる。この悶着のあひだに由兵衛の女房小梅、前とは違ひて派手やかな姿、日傘を持ちて出づ。）

小梅　これ、これ、どうしたんだよ。

良齋　御覧なさい。お店の衆が押掛けて來て亂暴狼藉、かくの通りの始末でござる。

小梅　なにか喧嘩でもしたのですかえ。

良齋　喧嘩ではない。わたしがこゝに店を出してゐるのを、この衆が兎角に邪魔にして、毎日のやうに立去れ立去れとやかましく云ふ。それが嵩じて、けふは腕づくの騷ぎ、おまへからよく叱つてください。まことに穩かでないことだ。

小梅　それはどうも相濟みませんでした。（男どもに）おまへ達は良齋さんにあやまつて、倒した店を直しておあげよ。

（眼で知らされて、男どもは首肯く。）

男二人　はい、はい、まつぴら御免下さい。

（ふたりは倒したる店を繕ひて、元のやうに道具をならべる。）

小梅　あやまつたらもう奥へおいでよ。

男二人　はい、はい。（奥に入る）

小梅　おまへさん。なぜ人の顏を見てゐるんですよ。

良齋　けふはどこへ行かれた。

小梅　野中の觀音樣へお參りをして來ました。

良齋　野中の觀音へ……。むかしと違つて、大層御信心になられたな。

小梅　え。（忌な顏をする）

良齋　いや、御信心は結構でござる。

小梅　それはそれとして、ねえ、良齋さん。おまへさん後生だからこゝへ店を出すのを止してくれませんか。

良齋　（冷やかに）　やはりわたしにこゝを立退けと云はれるのか。

小梅　立退けといふと、何だか角が立ちますけれど、商賣をするのはこゝの家の前に限つたこともありますまい。わたしが改めて頼みますから、どこかほかの所へ行つてくださいよ。

良齋　そんなにお邪魔になりますかな。（かんがへる）　併しおかみさん。去年の十月廿七日の晩、わたしがおまへ方夫婦の身の上をうらなつて、今日のうちに度えらい大きな福が來ると云つた。

（小梅はぎつくりしたやうに無言でうなづく。）

良齋　すると、その占ひが覿面にあたつて、裏屋住居のおまへ方がたちまちに身上を仕出して、今ではかういふ風呂屋の主人になられた。

小梅　（堪らないやうに）　判りましたよ。それがどうしたと云ふんですよ。

良齋　そのときにお前方は約束の通り、わたしに禮をすると云はれたが、わたしは一文もいらないと云つて斷つた筈だ。

小梅　こつちで上げようといふお禮のお金を、おまへさんは何うしても受取らないで、その代りにおまへの店の前に、占ひの店を出させてくれと云ふことでした。

良齋　それ、それをちやんと覺えてゐられる程ならば、今更となつて兎やかう云はれる譯はあるまい。おまへばかりでなく、御亭主の由兵衛どのも承知の上で、店びらきの日からわたしはこゝに店を出してゐる。それを追ひ拂はうといふのはお前がたの方が無理ではないかな。

小梅　（困つて）　でも、おまへさんが毎日こゝへ出て來て、わたし達の出這入りを睨んでゐられると、なんだか心持がよくないんですよ。

良齋　わたしが睨んでゐる……。そんなことがあるものか。わたしはこの通り、笠を深くかぶつてゐるではないか。

小梅　それでもなんだか煩さいんですよ。

良齋　なにがうるさい。

小梅　おまへさんだつて無理に強情を張つてゐることも無いぢやありませんか。こんな大道へ店を出して、砂つぽこりを浴びてゐるよりも、どこかへ小綺麗な床店でも持つた方がいゝでせう。さうでもすれば、わたしも三兩や五兩は都合してあげますよ。

良齋　折角だが金はいらない。おまへ方から金と名の付くものは一文も貰ひたくない。唯こゝで商賣をさせて貰へばよいのだ。

小梅　（舌打ちして）　おまへさんは隨分意地が悪いねえ。

良齋　意地が悪いわけではない。それが當りまへのことだ。

小梅　（じれて）えゝ、もう勝手にするがいゝ。大困らせの意地悪め、天のじやくめ。今にみろ。

（小梅は憎さげに罵りて、そのまゝ足早に暖簾口に入る。良齋は平氣で店に座をかまへてゐる。上のかたより三次郎が屈託顔にて出で、梅風呂の暖簾をくゞらうとして不圖うらなひの店に目をつける。）

三次郎　おゝ、いつもの易者が出てゐる。（思ひついて良齋の店さきに來る）大分お暖かになりました。

良齋　はい。めつきりと暖かくなりました。おゝ、三次郎さん、別にお變りもないか。見れば顏の色がよくないやうだが、やはり天王寺屋の店にお勤めかな。

三次郎　いえ。店には勤めてゐられぬやうな譯がございまして、去年の冬から平野町の請人の宿にあづけられて居ります。實はそれに付きまして、先生の御判斷をねがひたいのでございますが……。

良齋　それはわたしの商賣、お安いことでござる。して、どういふことを見て貰ひたいと云はれるな。

三次郎　（躊躇して）實はあの……。

良齋　むゝ。

三次郎　わたくしに大きい心配事がございまして……。

良齋　それはお氣の毒なことでござる。して、その御心配事とは

三次郎　（ため息をつく）それが何うも……。めつたには云はれないのでございます。と申して、なんとか云はなければなりますまいが……。（いら／＼して）先生。わたくしは自分ひとりの胸にをさめてゐる大事のことがござりまして、それを正直に何も彼も云つてしまへば、自分の身の明りも立ち、自分の胸も輕くなるのでございますが……。迂濶に云つては人の迷惑、云はなければ自分の氣が濟まず……。わたくしはまあ、どうしたら宜しいのでございませう。

良齋　さう取亂してはならぬ。まあ、おちついたが好うござるぞ。では、先づお前にどのやうな御心配があるか、わたしの方から占つてみませう。

三次郎　（ぎよつとして）それが先生にお判りになりませうか。

良齋　そこが占ひでござる。（天眼鏡を把る）さあ、お手を拝見。

三次郎　（あわてゝ）まあ、待つてください。かうなると、おまへさんに見て貰つていゝか惡いか。（かんがへて）もし、先生。わたくしの心配事はなんでもいゝとして、一體わたくしはこれから何うしたらよからうか。唯それだけを占つては下さりますまいか。

良齋　承知しました。では、それだけを占ひませう。

（三次郎は怖々ながら手を出せば、良齋は天眼鏡にてながめ、更に筮竹を取り、算木をならべてみる。そのあひだも三次郎はおちつかぬ體にて、不安らしく左右をうかゞひゐたるが、やがて下のかたを見かへる。）

三次郎　先生。あれ、あちらから來るのはお長屋の坊樣ではござりませぬか。

良齋　（おなじく見る）おゝ、成程、あれは相長屋の西住さんだ。さうだ、さうだ。こつちを見てにこ／＼笑つてゐる。あの坊さん、どうしてこゝらへ遣つて來たかな。

三次郎　（そは／＼して）姉夫婦の一つ長屋の坊樣が、ここへ來る……。では、わたくしは又まゐりませう。

良齋　いや、遠慮はない。おまへもあの坊さんを識つてゐる筈だ。

三次郎　その識つてゐる顏をみるのが、此頃はなんだか怖ろしいのでござります。いづれ又まゐります。御免ください。

（云ひすてゝ三次郎は逃げるやうに暖簾の内に入る。）

良齋　どうも可怪な男だな。併し無理もない。

（下のかたより齋坊主西住出づ。）

西住　おゝ、良齋さん。毎日よく精の出ることでござりますね。

良齋　（笠をぬいで店を出る）西住さん。どこへ行きなさる。おまへもこゝらの色町に檀家があるのかな。

西住　わたし等のやうな齋坊主をこゝらで賴む家はめつたにござらぬが、けふはこゝの風呂屋へ呼ばれました。（梅風呂を指さす）むかしの相長屋のなじみで、わたしもこの曾根崎に一軒の檀家が出來ましたよ。

良齋　けふは廿七日、おかみさんは觀音まゐりにゆく。家へはおまへを呼ぶ。何か佛の命日でもあるとみえるな。

西住　大かたそんなことでござりませうよ。併し良齋さん。人間の運はわからぬものでござりますな。御承知の通り、わたし達の隣長屋に住んでゐて、寒空にむかつても滿足な長い着物一枚持たずに顫へてゐた由兵衛どの夫婦が俄に身上をこしらへあげて、たとひ小さい店にもしろ、この曾根崎の風呂屋を買つて、かうして派手な商賣をするやうになつたので、わたしも一旦はびつくりしましたよ。

良齋　（笑ふ）おまへばかりでなく、世間でもびつくりする筈だが……。

西住　世間では……。（聲を低めて）なんでも賽の目がうまく中つたのだらうと噂をしてゐますよ。まつたくあの夫婦は賽をころがすのが名人だと云ひますからね。

良齋　さうかも知れない。それでお前はこれから行くのだね。

西住　なにしろ昔とは違ふのだから、けふのお齋にはしつ

かり御馳走がありませう。それがお染みでござりますよ。はゝゝゝゝ。おまへさんも古いおなじみだから、一緒に呼ばれては何うですね。

良齋　呼ばれもしないところへ押掛けにも行かれまい。又、呼ばれたにしても、わたしは御免だ。

西仕　なぜね。

良齋　なぜと云つて、まあ止さう。どうも止した方がよささうだ、おまへも早くお經をあげて、早く御馳走になつて、早々に出て來た方がよからうぜ。

西仕　では、まあわたし一人で行つて來るとしませう。はい、御免なさい。

（西仕は會釋して暖簾をくゞり入る。）

良齋　けふのやうな日はもう好加減にして歸らうかな。いや、春の日の暮れるにはまだ間がある。あの軒行燈に灯の這入るまでこゝに控へてゐて、どんなことが始まるか、見とゞけて行くとしようか。

（良齋はしづかに笠をかぶりて、再び店の床几に腰をかける。下方(したかた)入りの騷ぎ唄遠くきこゆ。）

二

梅風呂の奥座敷。本繰附の二重屋體にて、風雅なる造作と知るべし。上のかたに床の間、つゞいて出入りの襖、下の方は壁。上のかたは廻り緣にて、障子を半分しめてあり。庭には櫻の立木、石燈籠、飛び石などありて、上のかたには少しくあとに下げて土藏の白壁みゆ。庭の下のかたには低き四つ目垣を結ひて、小さき枝折戸あり。垣の裾には山吹など咲けり。枝折戸の外も庭のこゝろにて植込みや建仁寺垣などみゆ。

（座敷には小梅がおしゆんの襟上をつかんで引き据ゑ、長煙管をふりあげて折檻するを、三次郎が支へてゐる。）

三次郎　まあ、姉さん。そんな手暴いことを……。まあ、待つてください。

おしゆん　どうぞ堪忍して下さい。

小梅　どうして堪忍が出來るものか。年も行かない癖にして、こんな强情な奴はありやあしない。ちつと身にしみるやうに痛い目を見せてやるのだ。

三次郎　もし、それはあんまりでござります。

小梅　何があんまりだ。女の肩ばかり持つと承知しないぞ。

（小梅は三次郎を突きのけて、おしゆんを酷たらしく打つ。おしゆんは聲をあげて泣く。）

三次郎　なんぼ何でもそんな邪險なことを……。（無理に小梅をおさへる）一體どうすればよいのでござります。

小梅　長い短いは云はない。わたしの云ふことを素直にき

いて勤めに出るか。
おしゆん　ほかのことなら兎も角も、それぱかりはどうぞ堪忍して……。
小梅　また堪忍か。どこまで世話を燒かせる奴だか。これ、三次郎、こいつなか／＼强情で手に負へない奴だから、お前からよく云ひ聞かしておくれよ。
三次郎（聲をふるはして）姉さん。それではまるで話が違ふではございませんか。その女はわたしに添はして還るといふ約束で、觀音前の茶店から連れて來たものを、今さら勤め奉公に出すなどとは、たとひおしゆんが承知しても、この三次郎が不承知でございます。姉さんはこのあひだ何と仰しやつた。それほど思ひ合つてゐるものならば、いつそこつちへ連れて來て、家の手傳ひでもさせたらばと……。
小梅　それ御覽な。家の手傳ひをさせるといふ約束で連れて來たんぢやあないか。いくら姉弟の仲だと云つて、諸式の高いこの御時節に、弟の色女をひき摺り込んで、無駄飯をくはして置いて堪るものかね。お氣の毒だが、わたしは藪醫者を親類に持つちやあゐないんだよ。
三次郎　それですから手傳ひは元より承知して居りますが、唯の手傳ひと勤め奉公とは違ひます。可愛い女に勤め奉公をさせようと思つて、わたしがわざ／＼こゝへ連れて來るか來ないか、積つてみても知れたことではございませんか。
小梅　なにが可愛い女だ。この砂糖漬野郎め、甘つたるいことを云ふな。一旦こゝの家へ連れて來た以上は、おまへの女でももうお前の自由にはさせないよ。
三次郎　姉さんの自由にもさせられません。姉弟と思つて油斷したのが一生のあやまりであつた。毒蛇の棲家のやうなところに、その女をもう一刻も置くことは出來ません。わたしが連れて歸ります。さあ、おしゆん。早く來い、早く來い。
（三次郎はおしゆんの手を把つて行かうとすれば、小梅は三次郎をつかんで曳き戻す。）
小梅　姉弟だと思ふなら、なぜ姉さんの云ふことを肯かないのだ。毒蛇のすみ家が怖ければ、女を置いてお前だけで歸るがいゝ。
三次郎　いゝえ、わたし一人では歸りません。自分の女は自分で連れて歸ります。
（三次郎はおしゆんを連れて行かうとするを、小梅は遮る。この鬧諍の最中に、奧より由兵衛、風呂屋の亭主のこしらへにて、煙管と煙草盆を持ちて出づ。）
由兵衛　これ、これ、どうしたものだ。（双方のあひだに割つて入る）なんぼ移り換へ前だと云つて綻びでも切

らしちやあ詰らねえ。まあ、靜かにするがいゝぜ。ふだんからおとなしい三次郎が姉弟喧嘩とはめづらしい。一體こりやあどういふ間違ひだ。小梅もまた色氣のねえ。座敷中へほこりを立てるな。

（由兵衛は笑ひながら座に着く。おしゆんは泣いてゐる。）

小梅　わたしだつて時候はづれの煤はきをしたくはないが、あんまり這奴等がわからない鐡物揃ひだからさ。

三次郎　わたしに取つては唯つた一人の姉さん、大抵の無理は默つて通すつもりでござりますが、なにを云ふにもこの事ばかりは……。

由兵衛（空とぼけて）むゝ、小梅がそんな無理を云つたのかえ。

三次郎（一生懸命に）はい、無理でござります。無理でござります。觀音前の茶店に出てゐるおしゆんを引き取つて下されて、まことにありがたいと思つて居りますと、それを無理無體に勤め奉公に出さうと云ふのでござります。

由兵衛（やはり空とぼけて）むゝ、そんなことか。女房がそんなことを云つたのか。それはおれも初耳だ。

（由兵衛はかんがへながら煙草をのんでゐる。小梅も由兵衛の煙草を長煙管につめて喫む。）

三次郎（由兵衛に）さういふわけでござりますから、姉さんが無理か、わたくしが無理か、どうぞお捌きをねがひます。

由兵衛　あらためて捌きを付けるまでもねえ。どつちが無理かは判つてゐる。だが、三次郎さん。おまへの姉さんだつて氣ちがひぢやあ無し、まして鬼でも蛇でもねえ。それがそんな無理を云ひ出すには、よく／＼よんどころない仔細のあることだらう。一途に無理だの邪慳だのと云はねえで、そこはよく察して貰はなければならねえ。

三次郎　それは察しても居りますけれど、ほかの事とは違ひますので……。

由兵衛　さあ、そこだ。去年の十月、思ひも付かねえ金が手に這入つたので、それを元手に賽ころを振つてみると、運のいゝときは不思議なもので、とん／＼拍子に云ふ目が出て、すこしは纏まつた金も出來た。さうなるといつまで裏長屋に燻ぶつてゐるのも氣が利かねえと、女房とも相談の上で、この風呂屋が賣物に出たのを幸ひに、先づ半金だけを渡してこつちの物にして、この正月から梅風呂の暖簾をかけることになつたが、新店の上に元手も十分にまはらねえから、大勢の抱へを飼つて置くことも出來ず、派手商賣だけに眼にみえねえ錢もいる。

小梅　それをわたしもよく云つて聞かせてゐるのに、どい

つも這奴も鈍みたやうな奴ばかりで、一向にお通じがないんだよ。それだから、當分のうちは、そのおしゆんを店の助けに出して貰つて、こつちの都合さへ付けばすぐにも店をひかせる。多寡が三月か四月のところだと割ツつ口說いつ賴んでも、女は强情で泣くばかり、男は喧嘩腰で姉に食つてかゝる。そんな判らずやが揃つてゐちやあ、なんぼわたしだつて大きい臀の一つぐらゐは出したくもならうぢやないか。

由兵衛　まあ、いゝ。おまへが口をきくと喧嘩になる。ねえ、三次郎さん。まあさういふ若しい譯があるのだから、無理でも姉さんの云ふことを素直に肯いて……。

三次郎　え。では、おまへさんも同じやうなことを……。

由兵衛　女房に代つておれが賴む。梅風呂の由兵衛が手をさげて賴むのだ。なんと肯いては貰へめえかね。

（三次郎はだまつてゐる。）

由兵衛　忌かえ。おい、おしゆん坊。おまへはどうだね。

（おしゆんも默つて泣いてゐる。）

小梅　どいつもこの通りのじやく馬だ。呆れるねえ。

由兵衛　三次郎さん。默つてゐちやあ果てしがねえ。おれにこんなに口を利かせて、唯だまつてゐちやあ濟むめえぢやあねえか。

三次郎（思ひ切つて）たとひなんと仰つしやりましても、こればかりはお斷り申します。

由兵衛　むゝ、さうか。立派な返事だ。男らしい挨拶だ。（小梅と顏をみあはせる）それぢやあもうお前には賴むめえ。おい、小梅。その女を引摺つて行つて、あの土藏のなかへ打ち込んでしまへ。

（三次郎もおしゆんも驚く。）

由兵衛　おれが手を下げて賴むと云つても、肯かねえといふなら仕方がねえ。これからは男と男の達引だ。おれも梅澁の由兵衛に立ちかへつて、相手になるからさう思つてくれ。（小梅に）その女を早く連れて行け。

小梅（おしゆんに）さあ、きりくすの生れ代りぢやあるまいし。いつまで泣いてゐるんだね。泣きたければ商賣に出てから勝手にお泣きよ。それも賣物の一つになるだらう。

（小梅は立寄つておしゆんを引立てようとすれば、おしゆんは泣きながら身を藻搔く。）

おしゆ　あれ、助けて……。三さん、三さん。

（三次郎は寄らうとするを、由兵衛は隔てる。）

由兵衛　やい、やい、どうしてもおれの相手になる氣か。女房の弟だと思つて、甘くしてゐりやあ附上りやあがるな。

小梅　ほんたうに世話のやけた奴等だねえ。さあ、お出で

よ。
おしゆん　あれ、どうぞ堪忍して……、どうぞ助けて……。
小梅　おまへのやうな強情な奴は、土藏の奧へ叩つ込んで、裸にして荒繩で引つくゝつて置くからさう思へ。
おしゆん　あれ、助けてください。後生です。拜みます。
小梅　やかましいよ。
（おしゆんは頻りに泣き叫ぶを、小梅は無理無體に引摺つて、上のかたの緣づたひに連れてゆく。三次郎は追はうとするを、由兵衛はおさへ付けてゐる。）
三次郎（身を藻掻く）えゝ、おしゆんは遣られぬ。これ、おしゆん、おしゆん。
由兵衛　えゝ、さう〴〵しい。騷ぐな、さわぐな。
（由兵衛は三次郎を突き放して起ちあがれば、三次郎は又跳ね起きておしゆんのあとを追はうとする。）
由兵衛（三次郎をひき戻して）えゝ、執念ぶけえ奴だ。さつさと出て行け。（三次郎を緣より庭先へ蹴落す）いつまでも騷いでゐやあがると、うぬ、ぶち殺すぞ。（煙管をふり上げる）
三次郎（無念の涙をふいて）揃ひも揃つた鬼め、惡魔め。姉弟の義理も人情もこれまでだ。
（三次郎は今に見ろと云ふこゝろにて、足早に庭口より下のかたに立去る。）

由兵衛（あざ笑ふ）ざまあ見やがれ。おなじ血を分けた姉弟でありながら、小梅の弟にどうしてあんな生ぬるい野郎が出來たかな。
（由兵衛は引返して奧へ行かうとする時、奧より仲居出づ。）
仲居　あの坊樣がさつきからお待兼ねでございますが……
由兵衛　むゝ、齋坊主が待つてゐるのか。ごた〳〵してゐるので忘れてゐた。すぐに行かう。（云ひかけて考へる）いや、こつちへ連れて來てくれ。
仲居　はい、はい。（引返して去る）
由兵衛（ひとり言）あの坊主の顏をみるのもあんまり嬉しくねえが、まあ仕方がねえ。
（由兵衛はそこらを片附けて坐る。やがて襖の外にて西仕の聲きこゆ。）
西仕　はい、はい。判りました。（襖をあけて出る）
由兵衛　西仕さん。長く待たせて濟みませんでした。
西仕（あたりを見まはして）いや、どこもかしこも中々お綺麗でございますな。
由兵衛　なにしろ古い家を買つて些とばかり手入れをしただけで、まあ深業町の長屋よりも少しは優しぐらゐのところされ。
西仕　どうして、どうして、結構な御普請でございます。

（會釋して坐る）そこで、早速でござるが、今晩の佛様はどういふお方でござりますな。

由兵衛　今夜の佛は……。あの、何さ。わたしの女房の弟さ。

西仕　では、あの三次郎さんといふお人の……。御兄弟でござりますか。

由兵衛　さう、さう。あの三次郎の弟さ。

西仕　お幾つでおなくなりなされました。

由兵衛　え。十五か十六でしたよ。それは女房に聞かなければよく判らねえ。（笑ふ）今までは知つての通りの裏店住居で、佛いぢりどころの沙汰ぢやあなかつたが、曲りなりにも斯うして一軒の家を持つてみれば、信心も徳のあまりで、まあ自分の家の佛には線香の一本も供へてやるといふ氣になつたのさ。さういふ譯だから、これからも時々に呼ばれて來ておくんなさい。

西仕　はい、はい。それは御奇特のことでござります。おなじ佛でも長命したお方は格別、年若でお果てなされたお方は、兎かくに魂がこの世に殘つて、得脱成佛がむづかしいものでござる。よく／＼御回向をなされたが宜しうござります。

由兵衛　そんなものですかね。

（由兵衛は煙草をのみながら聽いてゐる。上のかたの緣づたひに小梅出で來り、障子の外に聽いてゐる。）

西仕　現にこんなことがござりました。御承知でもござらうが、去年の十月廿七日の晩わたくしが小橋の方の檀家へお齋に呼ばれまして、その歸り路に……。もう彼是れ四つ過ぎでもござりましたらうか、あの野中の井戸のところへ差しかゝりますと、暗い晩で、あたりに人通りは無し、遠くでは狐の鳴き聲がきこえる。わたくしもなんだか薄氣味惡くなりましてな、口のうちでは念佛を唱へながら急いでまゐりますと、井戸のなかから青い火が燃えてゐるやうに見えました。

（小梅は顏を出して、由兵衛と眼をみあはせる。）

由兵衛　むゝ。それからどうしたえ。

西仕　あれは鬼火か狐火かと、わたくしはいよ／＼氣味が惡くなりまして、急いでそこを駈けぬけようと致しますと、まあお聽きなさい。その青い火がふは／＼と宙を飛んで、丁度わたくしの行く先を迷つてゆくやうでござります。もう堪らなくなつたのでわたくしは眼をふさいで一心にお念佛を百遍くりかへして、それから怖々ながら眼をあいて見ますと、その青い火はもう何處へか飛んで行つてしまひました。

由兵衛　それはやつぱり人魂とでもいふのかね。

西仕　あとで聞きますと、順慶町の絲間屋天王寺屋の長吉

といふ丁稚どのが何者にか絞め殺されて、野中の井戸に投げ込まれてゐたと云ふことでございました。してみると、其晩にわたくしの眼にみえましたのは正しく長吉の人魂……。それと知つて、又今更にぞつと致しました。どうで非命に死んだ人のたましひは浮ばれぬのはもつともでございますが、前にも申す通り、取りわけて若い人が非業の最期、その魂がいつまでも迷つてゐるのは無理もないことだと存じました。

由兵衛　天王寺屋の丁稚のことはわたしも聴いてゐるが、その下手人はまだ知れないやうだね。

西住　まだ知れないさうでございます。その後も毎晩のやうに野中の井戸から青い人魂が迷つて出ると云ひますから、その下手人の知れるまでは、長吉といふ若い人の魂も浮ばれないことでございませう。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

由兵衛　人のことでもそんな話を聴くと、なんだか心持のよくねえものだ。ぢやあ、西住さん。あつちの御佛前へ行つて早くお經に取りかゝつてください。

西住　もうお經をはじめても宜しうございますか。

由兵衛　女房もわたしもあとから參りますから、どうぞお早く願ひます。

西住　はい、はい。（起ちあがる）今お話し申した天王寺屋の丁稚も廿七日、今夜のほとけ樣と同じ命日でござりますよ。

由兵衛　不思議な廻り合せさね。

西住　では、御めんなさい。

（西住は奥に入る。障子のかげより小梅出づ。）

小梅　あの坊主、碌なことは云はないね。

由兵衛　むゝ、忌な話をしやあがる。あいつを呼ばなければよかつたな。

小梅　あいつばかりぢやあない、あの占ひ者の奴もなんとかして追ひ拂ふ工夫はあるまいかね。いくら初めの約束だからと云つて、家の前に店を出して毎日眼張つてゐることもないぢやあないか。出這入りのたんびに彼奴の顔をみると、なんだか氣が咎めてならないんだよ。

由兵衛　あいつはどうもあの晩の一件を氣取つてゐるらしいぜ。

小梅　それだから忌でならないのさ。あいつは屹とあの一件を知つてゐて、わざと面當てらしく家の前に來てゐるに相違ない。坊主は今夜だけだからいゝが、占ひ者の方は毎日頑張つてゐるんだもの、まつたく遣り切れないね。

由兵衛　おれもなんだか彼奴が氣になつてならねえ。困つた奴だな。

小梅　いつそ強請にでも來るならいゝが、たゞ默つてここ

の家を覗んでゐられちやあ、今の話の人魂よりも薄氣味が悪いよ。

由兵衛　まつたく生きた幽靈のやうな奴だ。（少しかんがへる）もう仕方がねえ。おれがもう一度かけ合つて、あいつが素直に立退けばよし、强情にぐづ〳〵云つてゐるやうなら、日が暮れて歸るところを附けて行つて、人通りのねえところで……。

小梅　長吉の二代目かえ。

由兵衛　あいつもしやもだ。

小梅　さうした方が寢ざめがいゝね。

（奥にて叩き鉦の音きこゆ。）

由兵衛　坊主め、お經をはじめたな。

小梅　おやあ、わたし達も早く行かうよ。あの坊主はお酒をのむから、お齋のときには無暗に醉はして、人魂の話なんぞも封じてしまはうぢやないか。

由兵衛　それがいゝ、それがいゝ。おれ達も飮むとしよう。

（夫婦は起ちあがる。叩き鉦の音。）

三

もとの梅風呂の店さき。

（賣卜者の良齋はやはり笠をかぶりて店を出してゐる。笛太鼓の音遠くきこゆ。梅風呂より仲居が出で來りて、軒の行燈に蠟燭の火を入れて去る。）

良齋　（みかへる）いよ〳〵軒の行燈に灯が這入つたぞ。もう何か始まりさうなものだが……。それともおれの占ひは外れたかな。

（下のかたより三次郎は覆面して忍び出で、梅風呂の暖簾のあひだより内をうかゞふ。やがて町奉行所の同心上原善之助は捕手二人をしたがへて出づ。）

善之助　これ、三次郎。

三次郎　はい、はい。（覆面を取りてひざまづく）

善之助　天王寺屋の丁稚長吉を絞め殺して、金百兩をうばひ取つたのは、その方の姉婿由兵衛夫婦に相違ないか。

三次郎　相違ございません。そのときから大抵は察して居りましたが、何分にも親身の姉の身の上にかゝはりますことでございますので、つい其儘に致して居りましたは、重々恐れ入つてございます。

善之助　姉弟の緣によつて、今まで口を塞いで居つたは不屆至極のことではあるが、訴人の功にかへて免じてつかはす。その方は内の勝手を知つてゐるであらう。案内しろ。

三次郎　はい、はい。

（善之助は呼子の笛を吹く。左右より捕手六人出づ。）

善之助　裏表を圍んで取逃すな。

（捕手は心得て、二人づつ左右に別れて去る。）

善之助　（三次郎に）それ、ゆけ。

（三次郎は先に立ちて、善之助は捕手ふたりを連れて内に入る。他の捕手二人は入口の左右にひそみゐる。）

良齋　（たち上る）やつぱりおれの占ひは中つた。今に芝居がはじまるぞ。

（暖簾のうちより西住あわたゞしく走り出づ。）

西住　（あとを見返る）やれ、やれ、大變なことになつた。

良齋　（笠をぬいで進み出づ）これ、西住さん。どうした、どうした。

西住　（ぎよつとして振向く）おゝ、良齋さんか。どうも怖ろしいことになりました。わたしがお經をあげてゐる最中に……。

良齋　いや、わかつた、わかつた。（笑ふ）それではまだお齋の御馳走に有付かなかつたな。

西住　御馳走どころか。命からゞゝ逃げ出して來ました。

（暖簾の内より小梅は褄をからげ、あみ笠をかぶりて忍び出づ。左右に潜みゐたる捕手二人はすかし見て組み付く。小梅は振拂つて逃げんとするを、捕手はおさへて繩をかける。奥より由兵衛も繩にかゝり、善之助と捕手六人が附添ひて出づ。）

小梅　由兵衛さん。おたがひさまだね。

由兵衛　むゝ、一蓮託生だ。（良齋をみて）まだそこにゐやあがるか。やい、大道うらなひめ。貴様が訴人したのだな。

良齋　（しづかに）訴人する程ならば疾うに訴人する。邪魔にされながら毎日こゝへ見物に來てはゐないのだ。

小梅　ぢやあ、三次郎……。あいつだ、あいつだ。屹とあいつに相違ない。ほんたうに憎らしい奴だねえ。畜生め、おぼえてゐろ。

善之助　さあ、立て、立て。

小梅　（行きながら西住をみかへる）西住さん。ひとつ長屋のおなじみ甲斐に、どうぞ御回向をねがひますよ。

西住　はい、はい。（口のうちで）南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。（珠數を繰る）

由兵衛　どうでおれ達は地獄へ墮ちるのだ。がんゞゝ坊主のお念佛ぐらゐで救はれるのぢやあねえや。

小梅　違ひないね。はゝゝゝゝゝ。

（夫婦は笑ひながら下のかたへ引立てられてゆく。暖簾の内より三次郎はおしゆんの手をひいて出で、縁のあとを見送る。西住は念佛を唱へてゐる。良齋はやはり冷かに眺めてゐる。）

―― 幕 ――

仁和寺の僧（喜劇三場）

登場人物

仁和寺の長老
第一の僧
第二の僧
第三の僧
第四の僧
第五の僧
第六の僧
第一の兒
第二の兒
絹屋五郎兵衞
さすらひの女
猪熊惡右衞門
地獄の赤鬼
地獄の青鬼

一

時代は兼好法師が「つれ〴〵草」をかきし頃。春の末。京都仁和寺の一室。平舞臺にて、正面には床のやうなものありて、これに阿彌陀佛の立像を安置し、その前には櫻の大枝と山吹とを供へてあり。その傍には大いなる木魚あり。左右は佛畫を描きたる板戸。下のかたには地獄の圖を描きたる大なる衝立。その傍には可なり大いなる三足の鼎あり。

（第二の僧はうしろ向きになつて、佛前の木魚をしづかに打ち鳴らしてゐる。第三の僧は經卷をのせる經机に寄りかゝりて坐睡をしてゐる。やがて第二の僧は第三の僧を見かへり、ぬき足して經机の前にゆき、木魚の撥にてその頭をこつりと撲つ。）

第三の僧　えゝ、びつくりした。惡いたづらをする奴ぢや。

第二の僧　いつもの怠け者がめづらしく經を讀んでゐると思へば、いつの間にか坐睡ぢや。長老樣にいひつけて遣るぞ。

第三の僧　まあ、堪忍してくれ。貴樣が詰らなさうに叩いてゐる木魚の音を聽いてゐると、どうも睡氣がさしてならぬ。（眼をこすりながら伸びをする）

第二の僧　なんの詰らないことがあらう。これが我々の毎日の勤めではないかな。

第三の僧　などと勿體らしい顏をするな。その勤めももう

倦きた。あいつはまだ戻らぬかなう。
第二の僧　あいつとは誰ぢや。
第三の僧　誰でもよい、今に知れることぢや。あゝ、春の日は長い。（經机の上に又うつ伏す）
第二の僧　（苦々しげに）ほんに困つた奴ぢやなう。
（第二の僧は再び佛前にむかひて、しづかに木魚をたたく。下のかたの戸をあけて、第一の僧は酒壺を袈裟につゝみて抱へ出づ。）
第一の僧　木魚の音が眠さうにきこえるなう。
（云ひながら第三の僧の肩をたゝく。僧は眼をあく。）
第三の僧　おゝ、戻つたか。して、首尾はどうであつた。
（第一の僧は笑ひながら袈裟を取れば、酒壺あらはる。）
第三の僧　（打笑ひ）いや、えらい、えらい、えらい。
（第三の僧は經卷を押遣りて、經机をまへに直し、その上に酒壺をのせる。第一の僧もあぐらをかく。）
第一の僧　すぐに始めるか。
第三の僧　この匂ひをかいでは堪らぬ。一刻も早いがよい。兒を呼んで酌をして貰はうか。
第一の僧　それではすぐに呼んで來やれ。
第三の僧　（うなづいて立ち上る）わしの來るまでは飲むなよ。よいか。

（第三の僧は急いで下のかたに立去る。第一の僧は第二の僧をみかへる。）
第一の僧　これ、木魚は好加減にせぬか。こゝによいものがある。早う來やれ。
第二の僧　よいもの……。（見かへる）とは何ぢや。餅でも買うて來たか。
第一の僧　はゝゝゝゝ。貴樣には眼も鼻もないのか。これぢや、これぢや。（壺を抱へて見せる）
第二の僧　（おどろいて立つ）や、酒ぢやな。
第一の僧　そのやうにびつくりするな。わしが色々に工面して今そつと買つて來たのぢや。
第二の僧　どんな工面をして買うて來た。
第一の僧　實は經文を質物に入れて、酒買ふ錢を工面したのぢや。
第二の僧　やあ。（又おどろく）おのれ飛んでもない奴ぢや。經文を質に入れて酒を買ふとは……。
第一の僧　これ、長老には沙汰なしぢやぞ。
（下のかたより第三の僧は茶碗のやうなものを持ち、兒二人を伴ひ出づ。）
第一の兒　いそがしさうに私等を呼ひに來て、一體なんの用でござりますな。
第一の僧　これぢや。（酒壺を指さす）この酌をたのまう

と云ふのぢや。
第二の兒　それは酒ではござりませぬか。
第三の僧　さあ、さあ、酌をたのむ、頼む。
第一の兒　お師匠樣に叱られはしませぬか。
第一の僧　叱られたら私があやまつて遣る。さあ、ついでくれ。(茶碗を把る)
(第二の僧は羨ましげに覗いてゐたりしが、又もや佛前にゆきて前よりも高く木魚をたゝき始める。第一の僧と第三の僧とは兒達に酌をさせて飲む。)
第一の僧　はて、さう〲しい。木魚などをやめてこつちへ來やれと云ふに……。(第一の兒に)　これ、彼奴をここへ引張つて來やれ。
(第一の兒は起つて、第二の僧のそばへゆく。)
第一の兒　もし、あちらで呼ばれまするぞ。
第二の僧　(木魚をやめる)　さあ、ゆきたいは山々ぢやが……。
第三の僧　瘦我慢せずと、早う來い、來い。
第一の兒　早うおいでなされ。
(兒に袖をひかれて、第二の僧はうか〲と起ちながら、經机のまへに來る。)
第一の僧　さあ、飲め、飲め。いつもの御布施とは違うて、大切の經文を質に置いた錢で、やう〲手に入れて來た酒ぢや。その味はまた格別ぢやぞ。はゝゝゝゝ。
(第一の僧は茶碗をつき付ける。第二の僧はそれを受けて、兒に酌をして貰ひしが、又躊躇する。)
第二の僧　これを飲んでもよいかなう。
第三の僧　なぜ惡い。長老に叱らるゝが怖ろしいか。
第二の僧　長老も長老ぢやが……。あれ、あの地獄がおそろしい。(衝立の畫を指さす)　出家の身として飲酒戒を破るばかりか、あまつさへ經文を質に入れて買うた酒をのむ。思へば未來がおぼつかない。
(第一の僧と第三の僧も衝立の方へ眼を遣りて、なんとなく薄氣味惡くなりたるが、思ひきつて笑ひ出す。)
第一の僧　はゝゝゝゝ。折角うまい酒をのんでゐる最中に、そのやうなことを云うて嚇すものではない。
第三の僧　かう云ふときに、地獄や極樂の御說敎は禁物ぢや。
第二の僧　それもさうぢやが……。(茶碗を把りあげて又かんがへる)　併しあすこには阿彌陀佛も見てござるからなう。
第一の僧　はて、面倒な奴ぢや。では、わしが斯うして置く。
(第一の僧はそこにある袈裟を持ちゆきて、正面の佛像の眼かくしをする。)

第一の僧　どうぢや。かうして置けばよからう。阿彌陀様はなんにも御存じないわ。はゝゝゝゝは。それからまだある。（第三の僧に）これ、手傳うてくれ。

（第三の僧は起ちあがる。）

第一の僧　（衝立を指さす）あんなものが眼のまへに出てゐると、實はわしも餘り心持がよくない。地獄の繪などはうしろ向きにしてしまへ。

第三の僧　成程それがよからう。

（ふたりは衝立をうしろ向にする。）

第一の僧　さあ、さあ、もうこれでよい。阿彌陀様は御存じ無し、地獄はうしろ向き、これで心置きなく飲めるといふものぢや。

第三の僧　はゝゝゝゝゝ。さあ、飲め、飲め。

（第二の僧も思ひ切つて飲みはじめると、二人も兒に酌をさせて飲む。）

第一の僧　ほう、旨い、うまい。久振りで飲んだせゐか、二杯か三杯で五臟六腑がきり／＼舞をするわ。

第二の僧　うまいなう。

第三の僧　それだから早く飲めといふのぢや。うまいか。

第二の僧　うまい、うまい。

三人　はゝゝゝゝゝ。

第一の僧　どうぢや、兒達。とてものことに舞うてくれぬか。

第一の兒　でも、長老様に知れましたら、どんな御叱りを受けうも知れませぬ。

第三の僧　はて、おとなしく舞うてゐたら知れる筈はない。

第二の僧　もう構ふことはない。踊れ、踊れ。

第二の兒　では、跫音をぬすんで舞ひませう。

（兒二人はうなづき合ひて起ちあがり、扇をひらきて無言のまゝ足音を忍ばせて靜と舞ふ。三人の僧は酒をのみながら見物してゐる。そのうちに第二の兒は思はず足拍子を踏む。）

第二の僧　叱つ。

第一の僧　はて、かまはぬ。床の踏みぬけるほど足拍子を踏んで、いつものやうに面白く踊つてくれ。なんにも怖いことはないと云ふに……。いや、どうも間だるこい。よし、よし、わしが一緒に舞うて見するぞ。

第二の僧　貴様も舞ふか。これは見物ぢや。はゝゝゝゝゝ。

第三の僧　はゝゝゝゝゝ。

第一の僧　（起ちあがる）なにか面白い工夫はあるまいかなう。

（第一の僧はあたりを見まはして、そこにある鼎に眼をつけ、まん中に持ち出して來て頭にかぶる。）

第二の僧　や、これは面白い。筑摩祭の鍋かぶりは豫て聞いてゐるが、鼎かぶりは珍しい。
第三の僧　まことに前代未聞の舞ぢや。
一同　はゝゝゝゝゝ。
（僧も兒も一度に笑ふ。第一の僧は鼎をかぶりしまゝ探り足にて前に出る。）
第三の僧　（兒達に）眼がみえぬであらう。お身達が手を引いてやれ。
第一の僧　（鼎のうちにて）さらば舞はうよ。
第二の僧　さあ、始まりぢや、はじまりぢや。（手拍子をとつて唄ふ）それ、春の花見は何處何處よかろ。
第三の僧　（唄ふ）こゝは御室ぢや、嵯峨にも近い。
第一の兒　（唄ふ）夏のすゞみは何處何處よかろ。
第二の兒　（唄ふ）四條河原か加茂堤。
（兒は第一の僧の手を把りて、引きまはしながら舞ふ。）
第二の僧　（唄ふ）秋の紅葉はどこどこ好かろ。
第三の僧　（唄ふ）高尾、槇の尾、嵐山。
（第一の僧は頭の鼎がだんだんに重くなりて、足許しどろになるを、兒達は扶けながら舞ふ。）
第一の僧　冬の雪見はどこどこ好かろ。
第二の兒　圓山、清水……。あゝ、これ、どうなされた。
（第一の僧はよろめきてべつたりと坐る。兒たちは引き起さうとすれど起きず。）
第一の兒　これ、起きられい。
第二の兒　どうなされた。
（第一の僧は坐りしまゝ起きぬに、他の僧も立ちよる。）
第二の僧　これ、どうぞしたか。
第三の僧　鼎を深くかぶつたので、息が詰つたのではないか。
第二の僧　そんなことかも知れぬ。おうい、おうい。いや、これを冠つてゐてはいくら呼んでも聞えまい。兎もかくも鼎をぬげ。
（二人の僧は立寄りて鼎を引きぬかんとすれど、容易に拔けず。第一の僧はいたづらに、兩手をひろげて藻掻くのみ。兒は手傳ひて引きぬかんと色々工夫すれど、鼎は拔けず。第一の僧は鼎をかぶりしまゝ曳き摺りまはされて、遂に倒れ伏す。一同も持餘して顏を見あはせる。）
第二の僧　こりや飛んだことになつてしまうたぞ。やつぱり覿面に地獄の責苦ぢや。
第三の僧　ほんになう。（溜息をつく）
第二の僧　やれ、怖ろしや、おそろしや。（俄に佛前にゆ

きて再び木魚を叩きはじめる）

第三の僧　えゝ　木魚どころではない。なんとかこの始末をせねばなるまいぞ。

第一の兒　このまゝにして置いたら、息が詰まつて死にませう。

第三の僧　もう斯うなつたら、とても我々ばかりの智慧や力では行かぬ。同宿の者を呼んで來て、なんとか相談しようではないか。

第二の兒　それがよいかも知れませぬ。

第三の僧　では、人に見られぬやうに、しばらくそこへ隱して置かう。

（第三の僧と兒は第一の僧をかゝへ起して、衝立のかげに運び込み、そこらにある酒壺や茶碗などを掻きあつめて、あたふたと下のかたへ走り去る。第二の僧はそれを見て、一人ではこゝにゐられず、これも怖々に下のかたへ竊と逃げ去る。この道具暗轉。）

二

地獄の入口。すこしく上のかたによせて大いなる鐵の扉あり。左右はすべて黑き幕にて掩はる。四邊のひかり蒼白し。

（下のかたより第一の僧、ぼく／＼と迷ひ出づ。）

第一の僧　暗い、暗い。こゝは何といふところであらう。（考へる）おゝ、さつき越えたのが大方死出の山。いやもう嶮しい山坂であつた。それから、今渡つたのがおそらく三途の川、渡守の鬼めがおそろしい眼をしてぎろりと睨んだときには、おれも思はず悚然とした。おゝ、さうぢや、さうぢや。死出の山、三途の川と、かう順々に越えて來たからは、こゝはもう地獄ぢや。地獄……おそろしい地獄……閻魔の廳の入口ぢや。大方かうと覺悟はして來たものゝ、なにやら暗い、物すごい、陰氣なところぢや。（氣味惡さうにあたりを見廻す）こゝが地獄の入口で、この大きい鐵の扉のうちには無間地獄、八寒地獄、焦熱地獄……。いや、思うても怖ろしい。（思はず後じさりをする）いや、いや、前世の罪業でこゝまで來た以上は、逃げようとして逃げらるゝことではあるまい。もう是非がない。思ひ切つて地獄の門を叩いてみようか。

（僧は恐る／＼扉の前にゆきて、又ぞつとして立停る。）

第一の僧　こりやどうもならぬ。これほど嚴重に閉め切つてある鐵の扉の隙間から、劍のやうな尖つた風が吹き出して來て、總身がぞつとするやうな。あゝ、なんとしたらよからうぞ。齒の根がふるへて聲も立たぬ。と云うて、

いつまでこゝに立明してもゐられまい。えゝ、思ひ切つて、呼んでみようか。

（僧は顫へながら扉の前にすゝみ寄り、恐る〳〵扉をたゝく。）

第一の僧　はて、たゝいても返事がない。はてな。（再び叩く）これはどうしたものであらう、いくら叩いてもなんの返事もないのは……。（すこし焦れて力任せにたゝく）はて、まだ聞えぬのかしら。

（上のかたの暗きところにて微かによぶ聲きこゆ。）

五郎兵衛　もし、もし……。

第一の僧　（びつくりして）誰ぢや。誰ぢや。（すかし視る）

五郎兵衛　もし、もし……。

第一の僧　はて、氣味の悪い、誰ぢやと云ふに……。そこらで微な聲で呼んでござるは、どなたでござるか。

（五十あまりの男、暗き中より這ひ出づ。）

五郎兵衛　わしは京の町の絹屋五郎兵衛でござります。

第一の僧　絹屋五郎兵衛……。（再び透しみる）おゝ。では、四五日前に疫病で死なれたといふ絹屋の主人どのか。

五郎兵衛　いかにもその五郎兵衛でござる。ふだんは風邪ひとつ引いたことのないのを自慢にしてゐましたが、十日ほど前にふと疫病に取りつかれて、五體は焼け爛れるかと思はれるやうな熱さ苦しさ。

第一の僧　ほう。では、火の病とでもいふのかな。

五郎兵衛　むかしから語草に殘つてゐる清盛入道の火の病、それと丁度おなじやうな苦しみに、七日七夜もがき通して、八日の朝に狂ひ死。

第一の僧　さりとは怖ろしい。（身をふるはせる）この世からなる焦熱地獄ぢや。それほどの苦しみを見るからには、定めて世にあるあひだに色々の罪業を積まれたのであらうな。

五郎兵衛　（だん〳〵に聲が確になる）お察しの通り、世にあるあひだには色々の罪を作りました。わしも絹屋の五郎兵衛といへば、京の町でも指折りの身代なれど、人の慾には限りないもので、まだ其上にも身代を肥したさに、高利の金を貸出して貧乏人の身の膏をしぼるは愚かなこと、謀書、謀判、さま〴〵の悪法をめぐらして、人の財を奪ひとる工夫に餘念もなく、この年までに積んだ罪業、一々おぼえてもゐませぬが、わしのために身代をかたむけた者が百軒あまり、身を投げたり首を吊つたりした者が五六十人もござりませうか。

第一の僧　（おどろく）ふむう。それほどの罪をつくつては地獄へ墮さるゝが當然ぢや。して、こゝへはいつ頃まゐられた。

五郎兵衞　さあ、こゝへ來てからは夜も晝もよく判りませぬが、なんでももう二日ほどにもなりませうか。どうで地獄へ遣らるゝものと、初めから覺悟してまゐりましたが、容易にこゝの扉をあけてくれませぬ。
第一の僧　(扉を指す) 叩いて見られたか。
五郎兵衞　叩きました、腕の痺れるほどに叩きました。聲の嗄れるほどに呼んでもみました。それでもなんの返事もないので、精も根もつき果てゝ、こゝに倒れてゐたのでござります。
第一の僧　なるほど。(うなづく) それではわしが呼んでも返事のない筈ぢや。と云うて、こゝにかうしてもゐられまい。今の話を聞いてみると、こなたは何うでも地獄へ行かねばならぬ身ぢや。
五郎兵衞　勿論でござります。
第一の僧　わしとても破戒の罪で、どうでも地獄へ行かねばならぬ。まあよい相手が出來たといふものぢや。今度は二人がかりで、もう一度この扉をたゝいて見ようではないか。
五郎兵衞　ほんによいところへ來て下された。さあ、さあ、もう一度呼んでみませう。
(二人はよろめきながら扉の前にすゝみ寄り、力まかせに扉を叩きながら呼ぶ。)

第一の僧　こゝあけてくだされ。罪のふかい亡者が二人まゐつた。
五郎兵衞　新入りの亡者が二人づれでまゐりました。
第一の僧　地獄の衆、あけて下され。
五郎兵衞　おあけくだされ。
(ふたりは聲を限りに呼べど叩けど、內にはなんの音沙汰もなきに、二人はがつかりして顏を見あはせる。)
第一の僧　こりや何うしたものであらうな。これほど呼んでもきこえぬとは、鬼共が晝寢をしてゐるのではあるまいか。
五郎兵衞　そんなことかも知れませぬ。
(この時、下のかたにて女の笑ふ聲きこゆ。)
女　ほゝ、はゝゝゝゝ。
(二人はおどろきて透し視る。)
第一の僧　誰ぢや。まだそこらに地獄の道連がござるのか。
(二十二三の女、暗きなかより這ひ出づ。)
女　おまへ方がいくら呼んでも叩いても無駄なことぢや。わたしも三日ほど前から呼んでゐるが、內からは何にも返事をしてくれぬので、わたしはもう諦めてこゝに寢てゐるのでござります。
五郎兵衞　それでは私よりも一足先へ來てゐたのか。して、こなたはどこのお人ぢや。

女　わたしは京の生れでございます。
第一の僧　こなたもやつぱり京のお人か。して、どのやうな罪を作つてこゝへ來られた。
女　男をだまし、男を殺した罪でございます。
第一の僧　はて、見かけによらぬ。そのやうな優しい顏をして、男をだまし、男を殺すとは……。
女　それも一人や二人ではございませぬ。眉目(みめ)かたちの麗(うるは)しう生れたが身の仇で、十三の秋から男を知り初め、それからそれへとさすらひ歩いて、果は男をだますのが商賣、これまでわたしに欺されて、身代を潰したもの、乞食になつたもの、淵川に身を投げたもの、木の枝に首を吊つたもの……。
五郎兵衛　なるほど私によく似てゐるぞ。
女　かうして妾ゆゑに身をほろぼした男は、七八十人もございませうか。そのなかには餘り附纏ふのが煩さくて、わたしが手づから喉を絞めたのもあり。
二人　やあ。
女　毒を飮ませたのもございます。
第一の僧　こりやたまらぬ。（飛び退く）これがまことの夜叉(やしや)羅刹(らせつ)ぢや。地獄の呵責が思ひ遣らるゝわ。
女　妾もさう覺悟して來ましたが、門はこの通りしつかりと閉め切りで、なか／＼入れてはくれませぬ。
第一の僧　不思議ぢやなう。
五郎兵衛　不思議でござるなう。してみると、鬼の晝寢(ひるね)ばかりでもあるまい。
第一の僧　もしや間違つて極樂へ來たのではないかな。（扉を見かへる）しかしこの頑丈さうな扉と云ひ、あたりの薄暗い樣子といひ、どうもこゝは極樂では無ささうぢやが……。たとひ極樂にもしろ、地獄にもしろ、内から誰か出て來てくれねば、訊いて見るよすがも無し、一旦往生したものが再びこゝで立往生とは、よく／＼罪が深いとみゆる。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。いやもう斯うなつては彌陀の救ひも頼まれまい。
（僧は力なげに大地に坐る。五郎兵衛もぐつたりと坐る。陣鐘の音俄にきこゆ。三人はおどろきて思はず起ちあがると、下のかたより三十餘歳の鎧武者一人、大童にて鎧に矢を折りかけ、長卷を杖にしてよろめきながら走り出づ。かれは三人に眼もくれず、扉の前に立寄りて大音に呼ぶ。）
惡右衛門　これは武藏國の住人、猪熊惡右衛門源の武盛。千騎萬騎の強敵を物の數とも存せぬ勇士なれど命數つきては力及ばず、きのふの武藏野合戰に、主も知れぬ流れ矢に急所を射られて、遂に冥土へ送られ申した。閻魔大王はおはさぬか、この門左右に開かせたまへ。

(門内は鎭まりて音もなきに、惡右衞門は焦れ込み、長卷の石突きにて扉を突きたゝく。)

惡右衞門　えゝ、これはどうしたものぢや。猪熊惡右衞門源の武盛といへば、閻魔の廳までも響き渡つてゐる筈ぢやに、これほど呼んでも返答せぬとは、無禮緩怠、不屆至極。この頃の陽氣のせゐで、地獄の奴原もみんな取りのぼせ、依聾になり居つたか。開門、開門。

五郎兵衞　(囁く)　こりや怖ろしい偉さうなお人が見えましたぞ。

第一の僧　ほんにさうぢや。あのお人が叩いたら、さすがに門をあけるであらう。なんでもあの人のあとに附いて、みんなぞろ〳〵と這入るがようござるぞ。

女　(嘲るやうに)　あの人が叩いても明けるかしら。

惡右衞門　(焦れてまた叩く)　えゝ、あけぬか、早くあけぬか。猪熊惡右衞門の名を知らぬか。えゝ、面倒な。

(長卷を投げすてゝ扉に兩手をかけ、曳々聲を出して押せども搖れども門は動かず。惡右衞門疲れ果てゝべつたりと坐る。)

第一の僧　(立寄る)　これ、これ、その門はどうでもあきませぬかな。

惡右衞門　(喘ぎながら)　さすがは地獄の門ほどあつて、それがしの力でもなか〳〵覺束ない。

第一の僧　でも、たつた今聞いてゐれば、おん身は千騎萬騎の強敵を物の數とも存ぜぬ勇士ぢやと自分の口から名乘られたではござらぬか。むかしから云ふ朝夷の門破り……。

惡右衞門　はて、それは世にある時のことぢや。かやうに亡者と相成つては、この長卷も苧殼の杖同樣でなんの役にも相立たぬ。さりとは殘念至極の儀ぢや。

女　(笑ふ)　大方そんなことであらうと思うた。口程でもないのが此頃のお武家の習ぢや。はゝゝゝゝ。

惡右衞門　(見かへる)　いや、這奴、怪しからぬ女めぢや。口程でもないとは誰がことぢや。今一度申してみよ。(長卷をひき寄せる)　この長卷が堪忍せぬぞ。

女　(又笑ふ)　はゝゝゝゝ。苧殼の杖も同樣といふ、その長卷がなんで怖ろしからう。閻魔大王とは前の世からの親近でゞもあるやうに、立派な名乘りをあげながら、内ではなんの返事もない。はゝゝゝゝゝゝ。(笑ひこける)　口程でもないと云うたが嘘か。

惡右衞門　這奴、いよ〳〵怪しからぬ。たとひ冥土であらうとも、おのれのやうな下司女に嘲弄されては、猪熊惡右衞門源の武盛の武士が立たぬ。おのれ、眼に物見せてくれるぞ。

(惡右衞門は長卷を杖にして、よろめきながら起ち上

れば、女もよろめきながら掻いくゞりて逃げまはる。僧と五郎兵衛もよろめきながら支へるうちに、惡右衛門つまづきて倒れる。女も倒れて喘いでゐる。）

五郎兵衛　まあ、まあ、お待ちなされ。（惡右衛門を宥める）娑婆と違うてこゝは地獄ぢや。

第一の僧　こなたも氣の惡いことを云はつしやるな。（女をなだめる）前の世で罪を作り足らいで、地獄の門前まで來てこのいさかひは何事ぢや。まあ、鎭まられい。そちらのお武家もお控へなされ。

（惡右衛門も女も疲れ果てゝ、大息をついてゐる。鐵の扉のうちに異様の樂の音きこゆ、皆々耳をかたむける。やがて樂の音やみて、扉をあける錠の音が大きく響めいてきこゆ。）

女　おゝ、門があくさうな。

五郎兵衛　あゝ、門があく。

第一の僧　おゝ、門があく、門があく。

（僧は思はず起ち上りて、扉の前にすゝみゆく時、扉は颯とひらきて、內より火のごとき光が流れ出づ。僧は眼を射らるゝやうに逡巡ぎて、大地にうつむき伏す。扉のうちより赤鬼と青鬼とが鐵棒を持ちて出づ。）

赤鬼　えゝ、さう〴〵しい奴等だ。こゝへ來てなにを騷ぐ。

青鬼　こゝを一體どこだと思つてゐるのだ。

五郎兵衛　はい、はい。（恐る〴〵這ひ出づ）　こゝは地獄の入口ではござりませぬか。

赤鬼　さうだ。こゝは地獄の入口だが、貴様達はこゝへ何しに來た。

女　（這ひ出づ）　世にある時にさま〴〵の罪を作りましたので、こゝへ送られてまゐりました。

青鬼　いや、判つた、わかつた。貴様は男をだましたり、殺したりしたのだらう。

女　はい、よく御存じでござります。

赤鬼　おゝ、知つてゐる。みんな閻魔大王のお帳面についてゐるのだ。

五郎兵衛　なるほど惡いことは出來ぬもの。では、わたくしの罪も閻魔樣のお帳面に載つて居りませうな。わたくしは京の町の絹屋五郎兵衛と申すものでござります。

青鬼　絹屋五郎兵衛……。むゝ、慾張りの因業老爺か。たしかにお帳面に載つてゐるぞ。

五郎兵衛　恐れ入つてござります。

赤鬼　そつちにゐる鎧武者は何者だ。

惡右衛門　（誇りがに）　それがしは日本一の剛の者、むさしの國の住人猪熊惡右衛門源の武盛と申すもの。

赤鬼　あゝ、貴樣か。さつき蚊の鳴くやうな聲をして、なにか名乘をあげてゐたのは……。さりとは馬鹿な奴め。

青鬼　娑婆と冥土を、一つに思ふな。武藏國の住人でも、橋の下の乞食でも、こゝへ來たら誰彼の差別はないのだ。

赤鬼　あまり强がつたことを云ふと、この鐵棒を食はせるぞ。

（鬼どもは鐵棒をふり上ると、惡右衞門は俄に恐れをなして、あわたゞしく兩手をあはせる。）

惡右衞門　いや、いや、決して强がりなどは申しませぬ。娑婆にゐるときの口癖で、日本一の、武藏國の住人のと、餘計なことを申したはそれがしが重々の粗忽、まつぴら御めん下されい。

女　それだから云はぬことか。はゝゝゝ。

青鬼　やかましい、控へてゐろ。（惡右衞門に）そこで貴樣はそんな仰山な扮裝をして、娑婆でなにをしてゐたのだ。

惡右衞門　いくさを商賣にいたして居りました。

赤鬼　なに、軍が商賣だ。いや、飛んでもない奴だ。貴樣のやうな奴があればこそ、きのふは何百人、けふは何千人、亡者の數ばかり無暗に殖えて、地獄がどんなに忙がしいか知れぬ。

惡右衞門　これも武士の家に生れし因果、どうぞ御料簡くだされ。（再び手を合はせる）

青鬼　こゝにゐる奴等のなかでは、貴樣の罪が一番重いぞ。

五郎兵衞　なるほどそんな理窟かも知れぬなう。

青鬼　どうだ、赤鬼。この鎧武者だけは地獄へ引取らうか。

赤鬼　むゝ、（かんがへる）勿論地獄へ墮す奴だが、なにをいふにも此頃のありさまでは、どうにも斯うにも仕樣がない。（舌打する）

青鬼　まつたくだなあ。（舌打する）殘念ながら這奴も極樂へまはしてしまふか。

赤鬼　さうだなあ。（考へてゐる）

惡右衞門　え。では、それがしを極樂へ……。

赤鬼　まあ、待て。すこし考へてゐるところだ。

女　罪が一番重いといふ、このお武家すらも極樂へまはされるやうでは、わたし等は屹と極樂へ行かれるであらう。

五郎兵衞　勿論のことぢや。（鬼にむかひて）もし、わたくし共も極樂へ遣つて下さるでござりませうな。

青鬼　やかましい。また差出るか。

（青鬼は鐵棒をふり上げる、女も五郎兵衞も恐れて退る。）

赤鬼　どう考へても仕樣がない。殘念ながらこの鎧武者は極樂へまはして遣るよりほかはあるまい。

（今まで俯伏してゐたる僧は、この時顏をあげて考へてゐる。）

惡右衞門　（よろこぶ）では、極樂へ遣つてくださるか。

あの、ほんたうに極樂淨土へそれがしのやうな罪の深い者でも……。

赤鬼　本來ならば貴樣のやうな罪のふかい奴は、地獄のどん底へ突き落してしまふ筈だが、なにを云ふにも此頃は、地獄もぎつしり詰まつてゐて、めつたな奴を入れる空地がないのだ。

第一の僧（進み出づ）　地獄はそんなに繁昌して居りますか

青鬼　繁昌も繁昌、針の山でも血の池でも亡者が一杯に詰め込まれて、些とも身動きが出來ないくらゐだ。

第一の僧　そんなに罪の深い亡者が澤山ござりますかなう。地獄はいつもそんなに繁昌してゐるのでござりますか。

赤鬼　なに、むかしは決してさうではなかつた。地獄にも隨分空地があつたから、些とでも惡いことをした奴等は、どし／＼地獄へ連れて來たものだが、この頃のやうに惡い奴が一日增しに殖えて來ては、いくら地獄が廣くつても、とても入れて置く場所がないから、よく／＼の惡い奴に極めて、大抵の奴はみんな追ひ拂つて極樂の方へ廻してしまふのだ。

青鬼　貴樣達は運が好い。むかしならば何奴もみんな地獄へ送られる奴等だが、地獄が滿員の時節に生れあはせたので、相當に重い罪を背負つてゐながら、大手をふつて極樂へ行かれるのだ。

赤鬼　ありがたい御時節だと、喜べ、よろこべ。

惡右衞門　まつたくありがたい御時節でござる。

女　してみると、わたし等よりももつと罪の重い人間が娑婆には澤山あるとみえる。

五郎兵衞　さうと知つたら、もつと思ひ切つて惡いことをして來ればよかつたなう。

赤鬼　さあ。さう事が判つたら早くゆけ、行け。

五郎兵衞　では、極樂へまゐりましても、門違ひだなどと叱られるやうなことはござりませぬか。

青鬼　むゝ、極樂の方でも心得てゐるから、安心して早くゆけ。

五郎兵衞　それでわたくしも安心いたしました。

赤鬼　ぐづ／＼云はずに早くゆけ。

女　はい、はい。ありがたうござります。

青鬼　早く行け。

惡右衞門　はい、はい。かたじけなうござる。

赤鬼　早くゆけ。

（五郎兵衞と女と惡右衞門とは大喜びで下のかたに立去る。僧一はあとに殘る。）

赤鬼　やれ、やれ。うるさい奴等だ。先づこれでみんな追

拂つてしまつた。いや、まだそこに一人殘つてゐる。

青鬼　これ、貴樣もなぜ早く行かないのだ。

第一の僧　餘人と違うてわたくしは、出家の身の上でござりますれば、罪はいよ〳〵重い筈。どうでも地獄へ墮ちねばなりませぬ。

赤鬼　まだわからないか。くどくも云ふ通り、地獄はこのごろ滿員で、坊主でも神主でも入れて置くところが無いのだ。

青鬼　それに引きかへて、極樂の方はまだ廣々してゐる、遠慮せずにゆけ、行け。

第一の僧（泣く）でも、このまゝ安々と極樂へまゐりましては、この身の罪障が滅しませぬ。どうぞ御慈悲にわたくしだけは、地獄へお遣りなされて下さりませ。もし、この通りでござります。（手をあはせる）

赤鬼　這奴、ひとを困らせる奴だ。貴樣よりもずつと罪の重い奴等でさへ、みんな極樂へ遣られるなかで、どうして貴樣が地獄へ行かれるものか。積つてみても知れたことだ。

青鬼　大抵の悪いことをした分では、地獄へは行かれない時節になつたのだから仕方がない。これも時世とあきらめて、極樂へゆけ、極樂へ行け。

第一の僧　それでは何うもわたくしの心が濟みませぬ。（また泣く）わたくしは經文を質に入れて、酒を買つて飲みました。まだその上に醉つて踊つて騒ぎました。御佛の御罰は覿面、あたまに冠つた鼎が拔けなくなりまして、たうとう息が詰まつてしまひました。それほど破戒のわたくしが、いかに時世でも御時節でもどうして極樂へ行かれませう。お察しなされてくださりませ。

（僧は聲をあげて泣く。）

赤鬼　えゝ、いくら哀れつぽく持掛けても、鬼の眼に涙などといふのは昔のことだ。

青鬼　それほど、極樂へ行きたくなければ、いつそのこと娑婆へ歸れ。

第一の僧　え。

赤鬼　さうだ、さうだ。貴樣のやうな面倒な奴は、娑婆へゆけ、娑婆へ歸れ。

第一の僧　では、どうしても地獄へは……。（進み寄る）

青鬼　えゝ、知れたことだ。（鐵棒にて突き退ける）

赤鬼　行け、ゆけ。

（鬼どもは鐵棒をふり上げて僧を打つ。この道具暗轉。）

三

もとの仁和寺の一室。

（下のかたの戸をあけて、第一の兒が先に立ち、第二の僧と第三の僧とが忍び出づ。）

第二の僧　まつたく困つた。どうしたものであらうな。

第三の僧　誰に相談してもよい分別が出さうもない。

第一の兒　いつそ長老樣に申上げては……。

第二の僧　いや、長老の耳に入れるほどなら斯うして心配はいたさぬが、こんなことが長老に聞えたら、我々はみんな放逐ぢや。

第三の僧　ほんに難儀なことになつてしまうた。

（三人は顏を見あはせてゐると、下の方より第二の兒を先にたて、第四、第五、第六の僧出づ。）

第四の僧　（大聲で）どうぢや。鼎はまだ拔けさうもないか。

第二の僧　叱つ。叱つ。

第三の僧　人にきこえたら大事ぢや。

第五の僧　して、どこに隱してある。

第二の僧　そこにぢや。（衝立の蔭を指さす）

第六の僧　兎もかくもこゝへ連れ出して、もう一度介抱したらどうぢやな。

（僧五人と兒二人は衝立のかげより第一の僧をかゝへ出す。第一の僧はやはり鼎をかぶりしまゝにて正體もなく倒れてゐる。）

第二の兒　もう一度呼んでみては……。

第四の僧　いや、いくら呼んでも鼎のなかでは聞えまい。なんとか工夫がありさうなものぢやな。

第五の僧　かうなつたら御經の功力よりほかはあるまい。どうぢや。みんなが聲を揃へて御經を讀誦しては……。

第六の僧　成程それがよいかも知れぬ。

第三の僧　では、物は試しぢや。遣つてみようか。

第二の僧　それが好い、それがよい。みんな行儀よく坐らつしやれ。

（僧と兒は第一の僧を取りまきて、珠數を押採みながら、一度に聲をそろへて高らかに經を讀む。上のかたより長老ひとり出で來りて、立ちながら窺ひゐる。）

第二の僧　（額の汗をぬぐふ）やれ、やれ、息が疲れて來た。われ／＼がこれほど一心を凝して禱つたからは、もう安々と拔けさうなものぢやが……。

第三の僧　（おなじく汗を拭ふ）ほんにさうぢや。さあ、みんなで拔いてみよう。

一同　よい、よい。

（第四第五の僧は第一の僧を抱きおこし、第二と第三と第六の僧は鼎の足に手をかけ、兒ふたりは第二と第三の僧の腰に手をかける。）

第二の僧　さあ、よいか。南無阿彌陀如來。南、無、阿、

彌、陀あ。

（拍子をあはせて一度にひけば、鼎はたちまちすぽりと拔け、僧と兒は機を打つて前後にどつと倒れる。）

一同　あ、痛。あ、痛。

第二の僧　いや、えらい目に逢うたぞ。それにしても鼎がぬけて何よりめでたい。

（第一の僧はけろりとして坐つてゐる。みな／＼立寄つてその顔を覗く。）

第三の僧　これ、これ、氣色はどうぢや。

第四の僧　心持は惡くないか。

第五の僧　なんだかぼんやりして、狐が落ちた人のやうぢや。

第六の僧　これ、しつかりさつしやれ。

一同（聲を揃へて）どうぢやな。

第一の僧（あたりを見まはす）こゝは何處ぢや。おゝ、みんなもそこにゐたか。

第一の兒　おまへはもう生きまいかと案じてゐました。

第二の兒　さぞ苦しかつたでござらうなう。

第一の僧　おゝ、そんなら私は再びこの世へ戻つて來たのか。はて、不思議ぢや。

一同　なにが不思議ぢや。（すり寄る）

（長老も少し進み寄りて聞く。）

第一の僧　わしは地獄まで行つて來た。

第二の僧　なに、地獄へ……。こなたはほんたうに地獄へ堕ちたか。

（一同は顔を見あはせて悚然とする。）

第三の僧（怖々に）して見ると、ほんたうに地獄といふものがあるのか。

第一の僧　ある、ある、確かにある。しかし私はその入口で戻された。

一同　おゝ。

第一の僧　鼎をかぶつて舞ふうちに、だん／＼に息が詰まつて來て、なんだか夢のやうな心持になつてしまうた。

第四の僧　おゝ、さうであらう。

第一の僧　それからは無我夢中に眞暗な路をしきりに歩いた。そのあひだには嶮しい山もあれば、大きい川もあつたが、それを越えて、いよ／＼暗い路を急いでゆくと、やがて大きい鐵の扉の前に出た。これが地獄の入口かと思ふと、わしも俄におそろしうなつたよ。

一同（ふるへ聲で）さうであらう。

第二の僧　そ、それからどうしたな。

第一の僧　どうと云つて仕様もない。わしももう度胸をすゑて、その鐵の扉をたゝいてみたが、内ではなんの返事もない。途方に暮れてたゝずんでゐると、わしばかりで

なく、そこには二人の路連がゐた。

一同　おゝ。

第一の僧　ひとりは疫病で死んだ絹屋の五郎兵衞ぢや。

第三の僧　おゝ、人鬼といふ綽名を取つた、あの因業の慾張り老爺か。

第一の僧　もう一人はさすらひの女ぢや。これも大勢の男をだましたり殺したりして、限りもない罪を作つた女ぢや。そこへ又ひとり、猪熊惡右衞門とかいふ鎧武者がつづいて來た。これも軍を商賣にして、何百人、何千人を殺したといふ、罪の深い男であつた。かうしてみると、どれもこれも皆んなわしよりは幾層倍、罪の重い亡者ばかりぢや。地獄へ墮ちるのも無理はあるまい。

一同　(顫へ聲で)　さうぢや、さうぢや。

第一の僧　そのうちに鐵の扉が颯と開いて、赤鬼と青鬼とが鐵棒を持つて出て來たのぢや。

一同　(いよ〳〵顫へる)　鬼が出たか。

第一の僧　さあ、それからが話ぢや。

一同　(顫へ聲で)　ど、どういふ話ぢや。

第一の僧　その鬼どもの云ふことには、貴樣達をこゝへ入れることは出來ぬ。早く極樂へゆけと云ふのぢや。

一同　はてな。(長老もかんがへてゐる)

第一の僧　そのわけは、この世で罪を作る奴が此頃だんだんに殖えて來たので、地獄はもうぎつしりと詰まつてゐる。地獄の方でも持餘して、大抵のものは追ひ返して、みんな極樂の方へ遣つてしまふといふのぢや。これを聞いて皆んなも喜んで、五郎兵衞も女も鎧武者も轉げるやうに極樂へ行つてしまうた。

一同　(ほつとする)　それは仕合はせであつたな。

第一の僧　しかし餘の俗人とは違うて、わしは出家ぢや。出家が破戒の罪を犯して一旦地獄へ墮ちた以上、どうもおめ〳〵と極樂へはゆかれぬ。せめて罪ほろぼしに私だけは地獄へ遣つてくだされと、涙をながして頼んでみたが、鬼はどうしても承知してくれず、なんでも極樂へゆけ、それが忌ならば寧ろ娑婆へ戻れと云つて、鐵棒で二つ三つぶちのめされた。……と、そこまではあり〳〵と覺えてゐるが、それから先はまた夢のやうで……。あたまが急に輕くなつたと思ふたら、いつの間にかこゝに斯うして坐つてゐたのぢや。

一同　ふむう。(顏を見あはせる)

第二の僧　では、地獄がもう一杯に詰まつてゐるので、大抵の惡いことをした者でも、みんな極樂へ遣つてしまふと云ふのか。

第一の僧　惡いことをすれば地獄へ墮されるといふのは昔のことで、この頃ではめつたに地獄へも行かれぬさうぢ

や。論より證據、絹屋の五郎兵衛のやうな奴ですらも、安々と極樂へ遣られてしまうた。

一同　成程なあ。（一同は急に元氣が出て、みな笑ひ顏になる）

第三の僧　あんな奴等がみんな安々と極樂へゆかれるなら、わし等は些とも怖いことはないぞ。

第四の僧　ほんにさうぢや。こつちが行きたいと願つても、向うで受取らぬとは何よりありがたい。

長老（おもはず進み出で）これ、それはほんたうのことであらうな。

第一の僧　おゝ、長老樣。それはまつたく詐り無しのことでござります。

長老　なるほどなあ。むかしは正直の人間が多かつたので、すこしの罪を犯したものでも、みんな地獄へ墮されたが、この頃のやうに罪を犯すものが多くなつては、もう地獄へも這入り切れぬかも知れぬ。（また考へてゐる）

第五の僧　さあ、まつたく地獄へ墮ちぬと決まつたら、未來を恐れることも何にもない。

第六の僧　わし等もこれで安心といふものぢや。

第二の僧　どうぢや。その安心の祝ひに、もう一度こゝで騷がうではないか。

長老　手をひろげて支へる）まあ、まあ、待ちやれ。わしはまだ半信半疑ぢや。

第一の僧　はて、もう心配することはござらぬ。酒ばかりではどうも旨くない。いつそ肴を買ひに遣らうではないか。

第三の僧　それがよい、それがよい。

一同　はゝゝゝ。

長老　これさ、これさ。

第四の僧　はて、むづかしう仰しやるな。こなたもこゝで一緒にお飲みなされ。

長老　さりとは迷惑……。しかし地獄はまつたく一杯に詰まつてゐるかな。

第一の僧　現在わしが見とゞけて來ましたから、こんな確かなことはござらぬ。さあ、長老からもお許しが出た。早く酒と肴を買つて來い。

長老　はて、まだ許しはせぬといふに……。

第二の僧　いや、もうお許しが出たも同然ぢや。早く行け、ゆけ。

一同　よい、よい。酒と肴ぢや。

（第六の僧はあわたゞしく下のかたへ立去る。）

一同　こりや面白くなつて來たぞ。はゝゝゝゝ。

長老　（すこしく心動く）これ、もう一度訊くがの。まつたく地獄は一杯に詰まつてゐるかな。

第一の僧　くどう仰しやるな。わしが請合ひます。さあ、兒達。さつきの續きを踊れ、踊れ。（佛前より櫻の枝を持ち來る）

長老　これ、あまり立騷いではならぬ。

第一の僧　はて、構ふことはござらぬ。それ、その木魚をたゝいて囃せ。

第二の　よい。よい。

（第二の僧は力まかせに木魚をたゝき始める。第三の僧は銅鑼を持ち出して打ち鳴らす。他の僧と兒とは佛前の櫻と山吹とを持ち來り、口々に唄ひながら入りみだれて踊り出す。長老は叱りもせずにうつかりと見物してゐる）

――幕――

俳諧師

登場人物

俳諧師　鬼　貫
　　　　路　通
鬼貫の娘　お　妙
左官の女房　お　留

元祿の末年、師走の雪ふる夕暮。浪花の町はづれ、俳諧師鬼貫のわび住居。軒かたむき緣朽ちたる破ら家にて、上の方には雪にたわみたる竹藪あり。下の方の入口には低き竹垣、小さき枝折戸あり。となりは墓場の心にて、矢はり低き竹垣をへだてゝ其内に雪の積りたる石塔又は卒塔婆などみゆ。雪しづかに降る。寺の木魚の音きこゆ。

（下の方より近所の女房お留、竹の子笠をかぶりて出づ。）

お留　あゝ、よく降ることだ。寒い、寒い。（枝折戸をあけて聲をかける）もし、御めんなさい。お留守ですか。

お妙　はい、はい。

（奥より鬼貫の娘お妙、十七八歳の美しき娘、やつれたる姿にて、煤けたる行燈を點して出づ。）

お妙　おや、おかみさん。まあ、どうぞおあがり下さい。

お留　なに、こゝでいゝんですよ。（笠をぬぎて緣に腰をかける）寒いぢやありませんか。

お妙　ほんたうにお寒いことでございます。（表を見る）今夜も積ることでございませう。

お留　二日も降りつゞいた上に、まだ積られてはまつたく遣切れませんね。年の暮に斯う毎日降られては、どこでも隨分困ることでせうよ。

お妙　なにしろ、おあがりなさいませんか。そこはお寒うございますから。

（云ひながら下の方の爐を見かへれば、爐には火の氣がないので、お妙は困つた顏をしてゐる。）

お留　（それと察して）いえ、もうお構ひなさるな。内の人もこの寒いので、持病の疝氣が起つたとか云つて、きのふも一昨日も仕事を休んでゐたのですけれど、もう數へ日になつて來て、お出入先から毎日の催促があるので、今日はたうとう朝から仕事に出て行つたんですよ。

お妙　この降るのに、まあ。

お留　尤も家のなかの繕ひ仕事ですから、雪が降つても出

來るには出來るんですがね、それでも左官といふ商賣は辛いものだと滾し拔いてゐるんですよ。そりやまあ寒いときに濕いだりをするんですから、どうで樂な仕事ぢやありませんけれど……。

お妙　（身にしみるやうに）　そりや全くでございますわねえ

お留　さう云つても、我慢して稼いで貰はなければ、今日が過されませんからねえ。こちらのお父さんは今日はお休みですか

お妙　いゝえ、今もおつしやる通り、やつぱり我慢して出て貰はなければなりませんので、今朝から稼ぎに出かけましたが、この雪では嘸ぞ難儀であらうと案じてをります

お留　このお天氣ではほんたうにお困りでせうねえ。その代りにこちらの御商賣なぞは、かういふ日の方が却つて可いかもしれませんよ。

お妙　（愁はしげに）　どうでございませうか。

お留　なにしろ、もう歸つてお出でなさるだらうから、早く火でも起して置いてあげたら何うです。外は隨分寒うござんすよ。

お妙　さうでございませうねえ。（再び墓の方を見かへる）

お留　（それを察したやうに又うなづく）　いゝえ、どこでも焚物には困るんですよ。この頃のやうに炭や薪が高くなつては、その日暮し同樣の者はまつたく凌げません。それで、實はね。（聲を低めながら墓場を指さす）　わたしもあすこへ焚物を見つけに來たんですよ。

お妙　あすこへ……。（伸上りてのぞく）

お留　あのお墓の古い塔婆を少し貰はうと思つてね。

お妙　お寺で呉れますかしら。

お留　（笑ふ）　呉れるもんですか。どうで呉れないに決まつてゐるから、默つて貰つていくんですよ。

お妙　まあ。

お留　だつて、お前さん。さうでもしなければ、この大雪の日に凍え死んでしまふぢやありませんか。佛樣だつて大目に見てくれますわ。

お妙　でも、まさかそんなことは……。

お留　まあ、默つておいでなさい。こゝの家へも持つて來てあげますから。

（お留は枝折戸の外に出て、あたりを見まはしながら生垣を押破つて墓場に忍び入るを、お妙は縁に立ちて不安らしく眺めてゐる。やがてお留は、新しいのと古いのとを取りまぜて澤山の塔婆を引つかゝへて出で、縁先へ引返して來る。）

お留　ねえ、お前さん。これだけあれば一時の凌ぎはつく

と云ふものですわね。雪で濕つてゐるかもしれないが、兎も角もこれだけ置いて行きませうよ。

（お留は塔婆の雪を拂ひながら、その幾本かを緣に置く。お妙はやはり不安らしく眺めてゐる。）

お留　こちらなんぞはすぐ隣なんだから、焚物に困つたらいつでも斯うなさいよ。

お妙　でも、おかみさん。

お留　まあ可いから、お父さんの歸るまでに、早く煖かい火でもこしらへて置いておあげなさいよ。どれ、わたしも早く歸りませう。まあ、御覽なさい。些との間に又積りましたよ。（笠を持ちて起ち上る）

お妙　氣をつけておいでなさい。

お留　はい、御免なさい。おゝ、降る、降る。

（お留は笠をかぶりて塔婆をかゝへ、挨拶してゆきかかる時、上の方の竹藪の竹が二三本、凄まじい響して折れる。）

お留　（驚いて見かへる）おや、竹が折れましたよ。

お妙　さつきから撓んで居りましたが、たうとう折れたとみえます。

お留　この雪ではたまりますまいよ。わたしの家なんぞも小さいから、うつかりすると壓潰されるかも知れない。はゝゝゝゝ。

（お留は笠を傾けて去る。ゆふぐれの鐘きこゆ。）

お妙　あのおかみさんはお墓からこんなものを持つて來て……。（塔婆を見る）些と行つて歸して來ようかしら。（起ちかけて又躊躇する）あゝ、雪が降る。お父さまはさぞお寒いことであらう。

（お妙はぢつと思案の末、塔婆にむかひて合掌し、やがて思ひ切つて爐の側へかゝへて行き、それを爐に折りくべて燧石の火を打つ。塔婆は燻りて白き煙がうづまき騰る。表の雪は降りやまず。下の方より俳諧師鬼貫、四十餘歲、導引のこしらへ、頭巾をかぶりて破れたる傘をさし、足駄をはきてとぼ〳〵と歸り來る。お妙は透しみて緣に駈け出る）

お妙　おゝ。お父さま。お歸りでございましたか。

鬼貫　どうもよく降ることだな。

お妙　さぞお寒かつたでございませう。

（お妙は手つだひて、鬼貫は傘をすぼめ、頭巾をぬぎ、からだの雪を拂ひて内にあがる）

お妙　朝から少しも止まないので、お寒くもあらうし、お困りでもあらうと、案じ暮してをりました。

鬼貫　（爐のそばに來る）おゝ、爐の火が煖かさうに燃えてゐるな。きのふけふの大雪、外に出てゐるものも難儀だが、内にゐるものも難儀、殊に今朝から焚物は無し、

内でもさぞ寒がつてゐるだらうと、おれも内を案じてゐた。
お妙　この寒いのに焚付はなし、お父さまがお歸りになつたらどうしようかと思つて居りますと、あの左官のおかみさんが……。（少しく云ひ淀みて）これを持つて來てくれたのでございます。
鬼貫　内に火のあるのは不思議だと思つてゐたが……。ああ、これは搭婆ではないか。
お妙　はい。（もじ〳〵してゐる）
鬼貫　（急に顔を陰らせる）これを左官のおかみさんがくれたのか。
お妙　はい。
鬼貫　おまへが自分で取つて來たのではあるまいな。
お妙　（あわてゝ）まつたくあのおかみさんが取つて來てくれたのでございます。わたくしもどうしようかと思つたのでございますけれど……。（涙ぐむ）お父様がさぞお寒からうと存じまして……。
鬼貫　さうか。（歎息する）
お妙　どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。（手をつく）
鬼貫　今更叱つても仕方があるまい。まあ、湯でも沸す支度でもしてくれ。（やゝ嚴そかに）こんなことを再びするなよ。
お妙　はい。恐れ入りました。
（お妙は眼をふいて、湯を沸かす支度をする、鬼貫はしばらく爐の火を眺めてゐる。）
鬼貫　お妙。
お妙　はい。
鬼貫　米はなかつたな。
お妙　（澁りながら）はい。
鬼貫　（さびしく笑ふ）いや、聞くまでもない。米櫃に一粒の米もないことは今朝から判つてゐたのだ。おれもそれを知つてゐるから、今日もこの大雪のなかを一生懸命に歩いたよ。（袂より笛を出す）この笛を吹いて、大阪の町中を……。ふだんはおれの嫌ひな色町の方角まで、根よく流してあるいたが、馴染の薄いものはやつぱり駄目だ。どこでも呼んでくれてがない。
お妙　（歎息する）さうでございませうねえ。
鬼貫　それでも一軒の小さい米屋でよんでくれたので、隱居らしい老人の腰を揉んで、二十文の錢を貰つて來た。
お妙　（ほつとして）それはよろしうございました。
鬼貫　それからもう一軒、質屋に呼び込まれて二十文、あはせて四十文がけふ一日の稼ぎだ。（財布より錢を出してみせる）
お妙　それでもまあ結構でございました。

鬼貫　（又もや寂しく笑ふ）　結構かもしれない。今の身の上では四十文の錢でも尊い。これがなければ親子二人が饑死だからな。

お妙　まつたく尊いのでございます。（錢を財布に入れて押しいたゞく）

鬼貫　いや、饑死の方がましかも知れない。おれも以前は大和郡山の藩中で、輕いながらも武家奉公をした身の上だ。若い時から俳諧がすきで、窮屈な武家奉公がどうも面白くないと思つてゐるうちに、おまへが十三の時に女房が死んだ。それから思ひ切つて武士を捨て、稚いお前の手をひいて、すみ馴れた郡山の土地を離れる時は、おれも流石にさびしいやうな心持がしないでもなかつた。「笠とりて跡ちからなや春の雨」……それからこの大阪へ出て來たが、好きな俳諧を弄んでゐるばかりでは迚も世渡りの道が立たないので、思ひ付いた導引揉療治、これならば兎もかくも親子の口餬ぎはならうと、初めは自分の家に看板をかけて見たが、ひとりも療治をたのみに來るものがないので、仕方が無しに按摩の笛を吹いて、毎日町中を流してあるくのも、かぞへて見るともう足かけ五年になる。家財も着類もみな賣り盡して、殘つてゐるものは親子二人のからだばかりだ。

お妙　（慰めるやうに）　その不足勝のあひだにも、俳諧の道に心をかたむけて、月雪花を樂むのが風流の極意ではございませんか。

鬼貫　（うなづく）　それはおれも知つてゐる。

お妙　清貧を樂むとか、ふだんから仰しやるのは、こゝのことではございませんか。

鬼貫　清貧を樂む……。（みづから嘲るやうに）　おれも今まではさう思つてゐた。さう思へばこそ家代々の祿をすてゝ、自分の好きな俳諧師にもなつたのだ。しかし今のおれ達の身の上は、清貧などといふことを通り越して、あんまり慘め過ぎるではないか。月雪花を樂む風流の極意もこの世に生きてゐればこそで、おれ達はもう生命があぶない。おれ達はその日その日の糧にも困つてゐる。あしたの命もおぼつかないほどに饑に迫つてゐる。むかしの鬼貫ならば、この雪の日には是非とも一句あるべきところだが、今日の鬼貫は歌も俳諧もあらばこそ、どうしたら今夜の米代を稼げるか、あしたの薪代を稼げるか、どうしたら親子ふたりの露命をつなげるかと、唯そればかりに屈託しながら、大雪に埋もれた師走の町を一日さまよひ歩いてゐたのだ。大和も寒いところであつたが、浪花の冬も身にしみるな。

（お妙はうつむきて悲しげに聽きゐたるが、やがて湯の沸きたるに心づきて、茶碗につぎて父にすゝめる。）

（鬼貫は徐(しづ)かに湯をのみて又考へる。）

鬼貫　おゝ、さうだ。たしか去年の暮であつた。やつぱりこんな寒い日であつたが、おれはこの行燈(あんどん)の灯をぢつと眺めてゐるうちに、つい一句浮んだ。「ともしびの花に春待つ庵かな」——その頃はおれの心にもまだ餘裕があつて、春を待つといふ樂みがあつたと見える。その樂みも今は消えた。

お妙　え。

（お妙はいよ〳〵悲しげに父の顏を見つめる。鬼貫はうつむきて溜息をつく。雪風の音して、竹藪(たけやぶ)の竹二三本又もや折れる。その音に鬼貫は顏をあげて庭を見かへる。）

鬼貫　竹が折れたな。

お妙　さつきからたび〳〵折れるやうでございます。

鬼貫　これほどの大雪に壓されては、強い竹も流石にたまるまい。堪へるだけは堪へても、積る重荷に壓潰されて、倒れるもある、折れるもある。（おつと思案して氣を換へる）これお妙。今夜の米を買つて來なければなるまいな。

お妙　ほんにさうでございます。これからすぐに行つてまゐりませう。

鬼貫　油はどうだな。（行燈を見かへる）いや、四十文の錢で色々の買物も出來まい。油が盡きたら雪あかりでも書は濟む。兎も角もその錢で米と青菜でも買つて來い。

お妙　はい、はい。

（お妙は財布を帶にはさみて起ち上り、奧より風呂敷を持ちて出づ。）

鬼貫　あゝ、いつまでも降ることか。日が暮れて路が悪い。氣をつけて行けよ。

お妙　はい。氣をつけてまゐります。

（お妙は父の破れ傘を持ち、着物の裾をからげて、素足にて雪のなかを行きかゝる。）

鬼貫　これ、素足では冷たからう。穿きにくからうが、おれの足駄を穿いてゆけ

お妙（少し躊躇して）何、すぐそこでございますから…。

鬼貫　すぐそこでも素足では堪るまい。構はずに穿いてゆけ。

お妙　では、拜借してまゐります。

（お妙は父の足駄をはき、傘をかたむけて下の方に立去る。雪風の音。鬼貫は立つて縁先より娘のうしろ影を見送りゐたるが、やがて行燈をよきところに直して、小さき古机を持出し、靜かに筆を執りて懷(ふところ)紙に何か書きはじめる。雪の音、木魚の音。下の方より俳諧師路通(ろつう)、三十餘歳、乞食の姿にて破れたる衣をまとひ、

（古手拭をかぶりて出づ。）

路通　（門よりのぞく）この雪の日に難澁いたすものでございます。どうぞお慈悲に一文遣つてください。

鬼貫　（書きながら見かへる）氣の毒だが難澁はお互ひの身の上で、一錢の施しも出來ない。どこか外の家へ行つてくれ。

（云ひすてゝ鬼貫は矢はり書きつゞけてゐる。路通は伸びあがりて內を覗き、なにか考へながら下の方に立ち去る。鬼貫はやがて書き終りて筆を措き、叮嚀に紙をたゝみて机の上に置く。それより押入をあけて袋に入れたる脇差を取出し、鞘をはらひて行燈の灯に照し視るとき、下の方よりお妙は風呂敷包みをかゝへて歸り來り、門口より內をのぞきて俄にたちどまり、不安らしくうかゞひゐる。鬼貫は破れたる半屛風を逆に立てまはして、その蔭に這入る。その途端にお妙は傘も包みも投げ出して內へ駈けあがり、屛風を押倒して父の手に取りすがる。）

お妙　（聲をふるはせる）お父さま。どうなさるのでございます。

鬼貫　お妙。もう歸つたのか。

お妙　こんな刄物を持つて、お前はどうなさるのでございます。

鬼貫　譯はそこに書いてある。それを讀めば判ることだ。

お妙　いゝえ、そんなものを讀んではゐられません。もし、お父さま。おまへは何で自害なさるのでございます。

鬼貫　叱つ、靜にしろ。

お妙　いゝえ、靜には出來ません。まあ、兎も角もその刄物をお渡しください。

（たがひに爭ふ間に、下の方より路通は再び出で來り、門口よりうかゞひゐる。お妙は一生懸命に父の手より刄物を奪ひとりて泣く。）

鬼貫　これ、靜にしろと云ふのに……。なるほど吃驚するのも道理だが、たとひ自害しないでも俺達はもう生きてはゐられない……。よく考へてみろ。さつきも云ふ通り、あしかけ五年の浪々に、わづかばかりの貯へは勿論、家財も着類もみんな賣り盡して、導引按摩治にまで身を落したが、それでも世渡りは出來ないで、先月から三度の飯も滿足に食つたことがない。これで幾日もつゞいたら、親子ふたりが抱きあつて飢死するより外はあるまい。考へてみても怖ろしいことだ。

お妙　飢死するのが怖ろしさに、いつそ自害すると覺悟したら、なぜわたくしにも打ち明けて下さいません。お前に捨てゝ行かれたら、あとに殘つたわたくしは何うなると思ふのでございます。やつぱり飢死するより外は無い

ではございませんか。（泣く）

鬼貫　いや、おまへと俺とは違ふ。お前はまだ若い身の上だ。いつそ自分一人ならば、どこへ奉公しても生きてゐられる。決して飢死するやうな心配はない。あの書置を人に見せれば、心ある人は憫れんでもくれるだらう。おれも好んで死にたくはない。それで今日まで我慢に我慢をして來たが、ほかの事とは譯が違つて、人間がどうしても食へないとなれば、死ぬよりほかに仕様がない。生きたいと云つても生きてはゐられないのだ。判つたか。

お妙　いゝえ、どうしても死ぬほどならば、まだ生きてゆく道もあらうかと存じます。唯今のお話をうかゞひますと、わたくしをお救ひ下さるために、お父さまが命をお捨てなさるやうに思はれまして、あんまり悲しうございます。わたくしはそんな不孝者になりたくはございません。かう云ふ時には、わたくしが死んでお父さまをお救ひ申さねばなりません。

鬼貫　馬鹿なことを……。お前を殺してどうなるものか。

お妙　ほんたうに死ぬのではございません。唯今お父さまは何處へ奉公してもと仰しやいました。その奉公にまゐるのでございます。

鬼貫　奉公にゆく……。

お妙　はい。（決心したやうに涙を拭く）　奉公にまゐります。と云つて、お父さまに御不自由はさせません。わたくしに代つて朝夕のお世話を致すやうな、下女でも下男でもお雇ひ入れなすつて下さいまし。

鬼貫　その日の暮しに困る人間が下女や下男を置く。そんなことがどうして出來ると思ふのだ。（娘の肩に優しく手をかける）　おまへは少し取逆上せてゐる。まあ、まあ。おちついてよく考へるが可い。

お妙　（父の膝に手をかける）　もし、お父様。わたくしは奉公にまゐりまして、お父樣に御不自由のないやうなお金を工面いたします。

鬼貫　むゝ。

（鬼貫は腑に落ちぬやうに考へながら、娘の顏をぢつと視る。お妙の眼からは涙が流れる。）

鬼貫　（俄に思ひ付いて）　あ、おまへは勤め奉公にでもゆく氣か。

お妙　はい。（父の膝に泣き伏す）

鬼貫　（あわたゞしく）　いけない、それは不可ない。お前にそんなことをさせられるものか。おれは今まで唯の一度もそんなことを考へたことが無かつた。おれはそんな無慈悲ではないのだ。（娘の手を掴んで叱るやうに）　おまへはどうしてそんな馬鹿な、間違つた考へを起したのだ。おまへが自分ひとりで考へ出したのか、それとも誰

かに智慧をつけられたのか。むゝ、あの左官のおかみさんに教へられたのか。大事の娘に勤め奉公をすゝめるなどとは、彼奴、思ひのほかの不埒な奴だ。

お妙 （父に縋る） いゝえ、左官のおかみさんの知つたことではございません。誰に教へられたのでも無く、わたくしが不意と考へ付いたのでございます。

鬼貫 何日そんなことを考へたのだ。

お妙 けふの雪をながめながら、お父さまが外で嘸ぞ寒いおもひをしていらつしやるだらうと思ひまして……（泣く）わたくしのやうなものでも勤め奉公に出ましたら、いくらか纒まつたお金も手に這入らうかと、不意と思ひつきましたその矢先へ、お父様が……（落ちたる脇差に眼をつける）こんな覺悟をなさいましたので……

鬼貫 いや、判つた。なるほどお前の容貌ならば、廓へ身をしづめて相當の金にもなるだらう。おれも樂が出來るかも知れない。併しそんなことがどうしてさせられるものか。

お妙 お許しはございませんか。

鬼貫 （又もや激しく叱り付ける） えゝ、念を押すまでもない。たとひ餓死をすればとて、わが子に遊女の勤めをさせるなどとは、以ての外のことだ。これ、よく考へてみろ。おれはお前が可愛ければこそ、自分を殺してお前を生かさうとしてゐるのだ。そのお前を苦界に沈めて、俺がその金で樂々と生きてゐられるか。親の心、子知らずとはお前のことだ。あんまり腹が立つて涙も出ない。おれが奉公しろと云つたのは、たとひ水仕奉公にもしろ、眞直な正しい奉公をしろと云つたのだ。おれは死んでもどうなつても構はない、せめてお前だけは人間らしく生かして遣りたいと、苦勞してゐる俺の心がわからないか。

お妙 それはよく判つて居りますけれども、わたくしはどうしてもお父様を見殺しにすることは出來ません。

鬼貫 どうしても身賣をするといふのか。（詰めよる）

お妙 （恐れるやうに） では、わたくしは思ひ切つて身賣を止めませう。

鬼貫 むゝ、止めるか。それが當りまへだ。

お妙 その代りお父さまも……。死ぬのを止めて下さいまし。

（鬼貫は默つてゐる。）

お妙 もし、この通りでございます。（手をあはせる）

（鬼貫は矢はり考へてゐる。）

お妙 これほどに申しても聽いてくださらなければ、お父樣よりも先に、わたくしが寧そ死んでしまひます。

（お妙はそこにある脇差を取りて、縁先へ走り出る。鬼貫はおどろいて押へる。）

鬼貫　これ、飛んでもないことをするな。

お妙　いゝえ、死なせて下さいまし。

鬼貫　はて、判らない奴だ

（二人はたがひに爭ふところへ、路通は枝折戸より入り來りて聲をかける）

路通　あ、待つてくれ、待つてくれ

（鬼貫とお妙はおどろいて見かへる）

鬼貫　（咎めるやうに）お前は誰だ。なにしに來た。

路通　（笑ふ）さつき來た物貰ひだよ。

鬼貫　物貰ひ……

（路通は頰冠りを取る）

鬼貫　（透して視る）や、路通か。

路通　久振りだな。

鬼貫　まつたく久振りだ。

路通　その久振りのお客樣が來たのだ。まあ、おちついて話さうではないか。

（路通は緣に腰をかける　鬼貫は早くその刄物を納めろと娘に眼で知らせる。不意の客來にうろ〳〵してゐたお妙も一先づ刄物を鞘に納める）

鬼貫　（なつかしげに）なにしろ、久しく逢はなかつた。そこは寒い。まあ、こつちへあがつてくれ。

お妙　むさ苦しうございますが、どうぞお通り下さいまし。

鬼貫　（爐を指さす）こゝには火がある。寒さ凌ぎに早くあたるが可い。

（お妙は立寄つて路通の菰をぬがせ、その雪を拂つて遣る）

路通　いや、構つてくださるな。（鬼貫に）なまじひ暖かい火などにあたると、却つてあとが寒い。宿無しはこゝで澤山だ。併しこゝらも隨分積つたな。（庭を見まはし、そこに落ちたる傘と包みとに眼をつける）や、こゝに色色抛り出してある。

（傘と包みとを拾ひて緣に置く、お妙は會釋して受取る）

鬼貫　（お妙に）米を買つて來たのか。

お妙　はい。

鬼貫　丁度よい。靑菜の粥でも焚いて、お客さまに御馳走しろよ。

お妙　はい、はい。

路通　それは何よりありがたい。久振りで御馳走にならうかな。

お妙　唯今すぐに支度を致します。（包みを持ちて奥に入る）

（鬼貫は茶碗に湯を汲んで來て、路通のまへに置く。）

鬼貫　郡山で別れて以來だから、もう足かけ六年になる。

そのあとはどうした
路通　この通りだ。はゝゝゝゝ。
鬼貫　再び昔の姿になつたか。
路通　おれはこの姿で東海道の松原に寢てゐるところを、芭蕉の翁に見つけられて弟子の一人に取立てられたが、人間並の生活はおれの性にあはないと見えて、師匠にさん〴〵叱られた上に、二三年前から再び元の宿無しだ。乞食を三日すれば忘られないと云ふが、まつたくこの方が氣樂でいゝやうだよ
鬼貫　さうかなあ。（考へる）それでも生きてゐられるかなあ。
路通　この通り生きてゐるのが論より證據だ。しかし俺はおれで、おまへに俺の眞似は出來ない。かうして平氣で生きてゐられるのは、この路通ばかりだらうな。
鬼貫（感心したやうに）さうかも知れない
路通　おまへは斯うして湯をくれたが、おれは滅多にこんなものを飲んだことはない。喉が渇けばすぐにこれだ
（路通は庭の雫を手に掬つて飲む）
鬼貫　腹の減ることはないか。
路通　あるな。一日に一度ぐらゐしか食はない時がある。方々の家の門に立つても一文の錢だつて容易に惠んでくれるものではない。現にこゝの家でも斷られたからな。
（笑ふ）
鬼貫　それはお前と知らなかつたからだ。堪忍してくれ
路通　斷られるのは馴れてゐるから、さのみ驚きもしなかつたが、どうも聞覺えのある聲だと思つたから、また引返して來てみると、いや大變な騒ぎで、いくら無頓着のおれもこれには流石に驚いたよ。鬼貫といふほどの風流人が何うも無分別なことだな。
鬼貫　無分別と云はれても仕方がない。おれはもう切端詰つたのだ。
路通　それが無分別だといふのだ。切端詰つたと云つても、なんとか生きてゆく道があるだらう。娘の方がおまへより共と利口のやうだ。
鬼貫（少しく激して）おれは自分の娘を賣つても生きてゐようとは思はないのだ。
路通（笑ふ）まあ、おちついて聽くがいゝ。誰がおまへの娘を賣れと云つた。おれはこの通りの獨り者だが、たとひ子供があつたにしても、その子供を賣飛ばして金にするといふ無慈悲な料簡にはなれさうもない。おまへの心は俺にもよく判つてゐるよ。
鬼貫　おまへも察してくれるか。
路通　むゝ、察してゐる。そこで、おまへも命を捨てず、娘も身を賣らず、無事安穩に生きてゐられる智慧を授け

てやらうと思ふのだが、どうだ、おれの云ふことをきくか。

鬼貫　おれも死なず、娘も身を賣らず。（疑ふやうに）おまへにそんな智慧があるかな。

路通　あるから教へて遣らうといふのだ。一體おまへたち親子が死ぬるとか生きるとか騷いでゐるのも、つまり食へないからのことだらう。

鬼貫　（うなづく）まつたくその通りだ。よく／＼のことだと思つてくれ。

路通　さあ、そこだ。おれは獨り者の上に、人間もほんたうに風流に出來てゐる。第一に乞食馴れてもゐるから、一日に一度ぐらゐしか飯を食はないこともある。いや、その一度も滿足に食へないやうなこともある。それでも些つとも驚かないやうに仕込まれてゐるが、おまへ達は素人だ。唯の人間だ。腹の蟲が意氣地なく出來てゐるから、一度も飯を食はせないとすぐにぐう／＼泣き出すといふ始末だ。おれならこの境涯で平氣でもゐられるが、お前たちには迚もその辛抱は出來まい。おまへ達に取つては腹の減るぐらゐ怖ろしいことはあるまい。そこで、おれが飯を食へることを教へてやる。親子ふたりが滿足に三度の飯さへ食へたら申分はない筈だ。

鬼貫　それは勿論だ。おれだつて別に榮耀や榮華がしたいと望むわけではない。たゞ無事に生きてゐられゝばいゝのだ。

路通　それには斯うするのだ。よく見ろ。

（路通は庭の雪の上に指にて書く。鬼貫は行燈を持ち出して、縁の上から覗く。）

鬼貫　（氣色を變へる）なんだと思つたら飛んでもないことを……。貴樣はそれだから師匠にも破門されるのだ。痩せても枯れても俺も鬼貫だ。そんな馬鹿なことが出來ると思ふか。

路通　（平氣で）それが惡いか。

鬼貫　善いか惡いか考へても判るではないか。實にどうも呆れた奴だ。そんな料簡だから貴樣は乞食の味が忘れられないのだ。もう貴樣とは口を利かないから、早く出て行け。

路通　（再び縁に腰をかける）なにをそんなに怒るのだ。

鬼貫　えゝ、なんでもいゝから早く出て行け。さあ、出てゆけ。

（鬼貫は路通の腕をつかんで、縁より引卸さうとする。）

路通　まあ、待つてくれ、待つてくれ。

（鬼貫は縁より下りて路通を引出さうとする。路通は雪のなかに倒れる。）

鬼貫　早くゆけ。宿無しの乞食野郎め。

（菰を取つて路通に投げつける。路通は頭から菰をすつぽりと被せられて倒れながらに高く笑ふ。）

路通　はゝゝゝゝ。さう無暗に腹を立つなよ。さういふ馬鹿固い料簡だから、大事の命を安つぽく捨てる氣にもなるのだ。

鬼貫　なんだ。（縁にある傘を把つて振りあげる）

路通　（菰から顔を出す）まあ、待てといふのに……。おれの云ふことがおまへにはよく呑込めないのだ。

鬼貫　えゝ、ちやんと判つてゐる。おれに芭蕉翁の僞筆を書けといふのだ、僞物を作れといふのだ。

路通　さうだ。さうだ。（雪の上に起き上る）おれの師匠の芭蕉翁の短册は、廉くも二分や三分には賣れる。相手によつては二兩も三兩も出すかも知れない。ところが、その直筆の短册といふものが世間に少い。

鬼貫　それは俺も知つてゐる。

路通　おまへは能筆だ。武家の出だけに、字をかくことは確かに巧い。そのおまへが芭蕉翁の僞筆をかけば、誰でも屹と一杯食はされる。それ、どうだ。短册を一枚かけば、少くも二分や一兩にはなる。おまへの導引揉療治とは些と譯が違ふだらうぜ。

鬼貫　たとひ幾らにならうとも、人の僞筆をかいて金儲けをする。そんな曲つたことが出來ると思ふか。

路通　それではおまへはやつぱり飢死をする積りか。それとも可愛い娘を賣るつもりか。

（鬼貫は默つてゐる。）

路通　それともむざ／＼娘を殺して、おまへも一緒に死ぬ積りか。

（鬼貫は矢はり默つてゐる。）

路通　どう考へても俺の指圖に附いた方が利口らしいな。あゝ、あんまり饒舌つたので喉が渇いて來た。（庭の雪を掬つて再び飲む）

鬼貫　幾度云つても同じことだ。おまへのやうな人間を相手にしてはゐられない。頼むから歸つてくれ。（縁にあがる）

路通　頼まなくてももう歸るよ。宿無しでも寢るところは何處にかある。久振りで俳諧の話でもしようと思つたら、とんだ喧嘩になつてしまつた。はゝゝゝゝ。

鬼貫　（少し考へる）むかしのお前なら、昔の俺なら、かう云ふ雪のふる晩に、しんみりとした心持で、ゆつくり俳諧の話でも出來るのだがな。

路通　今だつて出來るのだが……。まあ、いゝや。これでお別れとしよう。（菰を被て手拭をかぶる）たしか其角の句にあつたな。「なき骸を笠にかくすや枯尾花」おれの

姿もそれに似てゐるやうだな。

鬼貫　おれはあんまり好きではないが、江戸の其角はまつたく器用だな。

路通　些と小細工をするが、彼奴なか〳〵うまいことを云ふよ。

鬼貫（釣り込まれて起つ）おまへは此頃一句もないのか。

路通　このあひだの晩、長柄の堤の下に寝てゐると、夜中に霜が眞白よ。（坐る）おれも眼が醒めてびつくりした。そこでつい一句出來たのよ。

鬼貫　なんといふ句だ。（椽を降りる）

路通「隱れ家や寝覺めさらりと笹の霜」

鬼貫「隱れ家や寝覺めさらりと笹の霜」むゝ、面白い、面白いな。（これも思はず雪の中に坐る）いや、おれもこの間の朝、長柄の堤を通つて一句浮んだよ。

路通　やつぱり長柄の堤で出來たのか。して、その句は……

……

鬼貫「川越えて赤き足ゆく枯柳」

路通　なるほど、（うなづく）赤き足ゆくが見つけ所だな。面白いな。

鬼貫　面白いか。

路通　面白い。かうして見ると、鬼貫はまだ殺したくないな。（笑ふ）

鬼貫　死にたくないな。

路通　いくら喧嘩をしても、おまへと俺とはやつぱり友達だ。あゝ、久振りで面白かつた。（起ちあがる）どれ、歸らうか。

鬼貫　もう歸るか。（これも起ち上る）

路通　好鹽梅に雪も止んで、薄月が出たやうだ。

（路通は下の方へあゆみ去る。雪を照す月の光青し。鬼貫はあとを見送りて椽に腰をかける）

鬼貫　おれは一圖に怒つたが、彼奴はやつぱり好いことを教へてくれたのかしら。

（鬼貫はぢつと考へてゐる。ばさ〳〵と雪の落ちる音して、竹藪に撓みし竹は雪をはね返して立つ）

鬼貫（見かへる）おれも生きることを考へなければならないなあ。

（奥よりお妙出づ。）

お妙（そこらを見て）おや、お客様は……。

鬼貫　お客はもう歸つた。

お妙　お粥がやうやく出來ましたのに、もうお歸りになりましたか。

鬼貫　さうだ、さうだ。むやみに腹を立てたので、粥のことをすつかり忘れてゐた。遠くは行くまい。追掛けて呼び戻して來てくれ。

お妙　はい、はい。

（お妙はすぐ庭に降りて行きかゝる。）

鬼貫　（よび止める）これ、これ、路通に逢つたらばな。粥のことばかりでなく、まだ外にもお話がありますからと云つてな。

お妙　お話のこと……。

鬼貫　あの……。（少し小聲で）短冊のことだと云へばすぐに判る。

お妙　（不安らしく）お父さま。

鬼貫　いゝから早く行つて來い。

お妙　はい。はい。

（お妙は出てゆく。鬼貫は彼の書置をひき裂きて爐に投げ込む。月の光あかるく、雪の竹の刎れかへる音。）

――幕――

新宿夜話（三場）

登場人物

齋藤甚五左衛門
その弟　大　八
信濃屋の抱妓　お蝶
信濃屋の若い者千助
おなじく　丑　藏
旅籠屋の亭主
旅籠屋の娘
在郷の客　與次郎
　馬士、六十六部、地廻りの若者、遊女屋の若い者、茶屋の若い者、鳥追ひ、中間など。

一

江戸時代。明和の初年。
甲州街道。内藤新宿の宿はづれ。休み茶屋と安泊りを兼ねたる小さき二階家、すべて田舍びたる作りにて、軒には草鞋などを出し、柱に「火なわあり」の札を貼り、店さきには駄菓子なども列べてあり。正面は鼠壁にて破れ障子の出入り口あり。軒には『御休所、御はたご』と記せる行燈をかけ、店の前には長床几二脚ほどを置き、影の痩せたる柳一本立つ。

（秋の日の暮れかゝる頃、老いたる旅僧は笠をかぶり、うしろ向きになりて床几に腰をかけてゐる。亭主は店に坐りて爐の下を煽いでゐる。一方の床几には地廻りの若い者二人が腰をかけて煙草をのんでゐる。驛路の鈴、馬士唄きこゆ。下の方より六十六部が笈を背負ひて出づ。）

六部　今歸りました。
亭主　（見かへる）おゝ、歸りなすつたか。けふはお天氣で結構でしたな。
六部　けふは天氣がよいので、先づ牛込を振出しに、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川をまはつて來たので、やれ、やれ、くたびれました。（草鞋をぬぐ）
亭主　なるほどそれでは草臥れる筈だ。早く湯にでも行つて休みなさるがいゝ。
六部　はい、はい。さうしませう。
　（六部は破れ障子をあけて奥に入る。）
若者甲　今聞いてゐりやあ、あの六部は牛込から、小石川、

本郷、下谷、淺草、本所、深川をまはつて來たさうだ。それぢやあ江戸の半分をあるいてしまつたやうなものだぜ。
亭主　それもやつぱり信心の力でございますね。
若者乙　なにが信心なものか。ほんたうの信心なら辻堂の縁にでも轉がつて寢るのが當りめえだ。
若者甲　旅籠に泊つて、湯に這入つて、寢酒の一杯も飲まうといふのぢやあ、信心もあんまり當てにやあならねえ。
若者乙　どうで山崎町の損料物よ。
亭主　（笑ふ）はゝ、さうかも知れませんね。
（奥より六部が手拭を持つて出るに、亭主はあわてゝ口をつぐむ。）
六部　この草鞋を借りて行きますよ。
亭主　はい、はい。行つておいでなさい。
六部　日が暮れたら薄ら寒くなつて來た。どれ、ゆつくり温まつて來ませう。
（六部は上のかたへ去る。下のかたにて太鼓入りの騒ぎ唄きこゆ。亭主は軒行燈に灯を入れる。）
亭主　おゝ、日が暮れたせゐか、大分世間が賑かになつて來ました。
若者甲　さあ、これからがおれ達の世界だ。
亭主　お樂みでございますね。
若者乙　樂みだか苦みだか知らねえが、から病み付きになつちやあ仕方がねえ。
若者甲　なにしろ一廻りして來ようぜ。
亭主　早く顏をみせておいでなさい。
若者乙　なに、こつちが見に行くのさ。
甲乙　はゝゝゝ。
（二人は笑ひながら挨拶して下のかたへ去る。騒ぎ唄いよ／＼賑かにきこゆ。）
亭主　（二人のあとを見送る）はゝ、若い人はみんな面白さうだな。
老僧　（はじめて向き直る）御亭主。
亭主　はい、はい。
老僧　江戸もよほど變つたやうだな。
亭主　江戸はお久振りでございますか。
老僧　江戸を立退いてから三四十年にもなる。
亭主　三四十年……。それでは江戸の變り方が又一としほお目に立つ筈でございます。
老僧　あの唄や太鼓はどこだな。
亭主　（笑ひながら）この新宿でございます。
老僧　新宿……。（すこし考へる）内藤新宿の茶屋旅籠屋は取潰しになつた筈だが……。

亭主　左樣でございます。今から四十年ほど前に永代お取潰しといふことになりましたが、當春から再び御免になつたのでございます。

老僧　一旦お取潰しに相成つたものを四十年の後に再び御免……。どういふわけかな。

亭主　新宿お取潰しの後は、高井戸を馬繼ぎの宿に換へられたのでございますが、日本橋から高井戸までは三里半、なにぶんにも道中が長うございまして、馬や人足も難儀いたしますので、昨年から新宿再興の儀をねがひ出でまして、當春やう／＼お許しになつたのでございます。こゝは日本橋から二里といふことになつて居りますから、やがて今までの半道で、道中の者はみな助かります。

老僧　それならば唯一通りの問屋場や旅籠屋だけを許されたら好さゝうなもの。飯盛の賣女までを許されて、あのやうに唄ひさわぐとは其意を得ぬことだな。

亭主　(又笑ふ)　御出家樣から御覽になりましたら、定めて不思議にも思召しませうが、やはり斯ういふところにはあのやうな者がございませんと、宿が繁昌いたしません。五街道のうちでも甲州街道は一番さびしいところで、新宿が取潰しの後はまるで草原同樣になつて居りましたが、それが御免になりますと急に夜が明けたやうになりまして、御覽の通りの繁昌で土地の者もみな喜んで居ります。

老僧　茶屋旅籠屋に賣女を置いて、往來の旅人に色を賣らせねば、この土地が繁昌せぬといふのか。

亭主　かう申しては如何でございますが……。(頭をかく)　兎かく世間は色と酒で、どうも致方がないやうでございます。こゝに色町が新しく出來ましたので、往來の旅人ばかりではございません。山の手一圓のお武家も町人もみな珍しがつて通つてまゐります。はゝゝゝゝゝ。

老僧　(聞き咎めるやうに)　武家も通つてまゐるか。

亭主　隨分通つておいのでやうでございます。今から四十年前と申しますと、わたくし共がまだ子供の時分のことで、くはしい事はよく存じませんが、この新宿が一旦お取潰しになりましたのは、やはり其のお武家の一件からださうでございます。

老僧　さうかな。

亭主　四谷の大番町に齋藤甚五左衞門といふ四百石取りのお旗本がございまして、その弟がこの新宿で喧嘩をしたとか云ふのが本で、甚五左衞門といふ人は大層立腹して、すぐにその弟に腹を切らせて、その首を大目付のお役人のところへ持つて行つて、自分の屋敷は潰されてもいゝから、相手の新宿を取潰してくれろと願つて出たさうでございます。

老僧　（ひとり言のやうに）それで新宿は潰された。
亭主　甚五左衞門といふ人の屋敷も潰されました。
老僧　それが三十年四十年の後には此の通りに再興して、昔にまさる繁昌になつた。して、その甚五左衞門の屋敷はどうなつたな。
亭主　それはお取潰しになつたまゝで、屋敷のあとは今でも空地の草原になつて居ります。
老僧　屋敷あとは草原になつてゐるか。
亭主　お武家の屋敷に草は生えても、色町に草は生えません。（笑ふ）不思議なものでございますよ。
（老僧は默つてかんがへてゐる。騷ぎ唄又きこゆ。）
亭主　（こゝろ付いたやうに）いや、飛んだおしやべりを致しました。さつきはお泊りになるやうなお話でございましたが、どうなさいますな。
老僧　どうしようか。（考へる）小石川の縁者をたづねようと思つてゐるのだが、こゝから小石川の果まではよほどの道程がある。久振りでたづねてゆくのに、夜ふけて門をたゝくのも氣の毒、殊にわしも疲れてゐる。やはり今夜は厄介にならうか。
亭主　ありがたうございます。（奥にむかひて）おい、おい、おきよ。
娘　はい、はい。

（奥より娘出づ。）
亭主　このお客樣を裏の井戸端へ御案內して、おすゝぎを取つてあげろ。
娘　（僧に）どうぞこちらへお廻り下さいまし。
（娘は老僧を案內して、下のかたより家のうしろへ連れてゆく。騷ぎ唄絶えずきこゆ。上の方より六部はぬれ手拭をさげて出づ。）
亭主　大層お早うございましたね。
六部　大變にこんでゐるので、早々にあがつて來ました。
亭主　あかりのつく時分はいつも込み合つて困りますよ。それに此頃はこゝらに町家が殖えたので、なほ／＼混雜いたします。
六部　まつたく新しい家が澤山出來ましたね。
亭主　いや、もう、一日增しに新しい家が出來まして、こんな古い家はわたくしの店ぐらゐでございますよ。
六部　おまへさんの店もこれからは繁昌しませうね。
亭主　どうかさうしたいものでございます。
六部　わたしも夜食をしまつたら、こゝらの店の繁昌を見物して來ませう。
亭主　では、お歸りにはなりませんか。
六部　（笑ふ）とんだ事を……そんな事をしたら、佛樣の御罰があたります。

亭主　はゝゝゝゝゝ。

（六部、奥に入る。太鼓の音いよ〳〵高くきこゆ。）

亭主　いよ〳〵世間が賑かになつて來た。これでは若い人たちの浮かれ出すのも無理はないな。

（亭主は笑ひながら店に入る。舞臺暗轉。）

二

新宿、信濃屋の店さき、少しく上のかたによせて入口、信濃屋と染めたる暖簾を下げてあり。左右は千本格子にて、下の方には用水桶を積んであり。正月のはじめにて店さきには松飾りを立て、店のうちには灯をとぼしてあり。

（舞臺明るくなると、太鼓入りの騷ぎ唄賑かにきこゆ。ぞめきの男數人出で、左右にすれ違ひて去る。登場の人物は第一場より百十年前、享保時代の風俗と知るべし。下のかたより三藤大八出づ。大八は四百石の旗本の次男、廿歳前後、放蕩無頼の若者にて酒に酔つてゐる。上のかたより又もやぞめきの男三人出で、すれ違ふときに一人が大八に突きあたる。）

大八　やい、待て、待て。なんでおれに突き當つた。

男　へい、へい。粗相ですから何うぞ御勘辨をねがひます。

大八　たゞ御勘辨で濟むと思ふか。詫びるなら詫びるやうに、土下座をして手をついてあやまれ。それが忌なら相手になれ。片つ端から叩つ斬るぞ。

男　（よんどころなく）へい、へい。（土に手をついてあやまる）眞平御免下さいまし。

大八　貴樣ばかりでは勘辨出來ねえ。連れの奴等もかゝり合だぞ。みんな一緒にあやまれ、あやまれ。えゝ、犬つくばひになつて詫びろと云ふのに……。

男二人　（顏をみあはせて）へい、へい。

（連れの男二人もおなじく、土に手をついて頭を下げる。）

大八　これからは氣をつけろ。

男三人　へい、へい。（早々に下のかたへ逃げてゆく）

大八　（笑ふ）あんな奴等ぢやあ喧嘩をする張合もねえ。もう些と面白い相手は來ねえかな。

（大八はあたりを見まはしてゐる。上のかたより臺屋の若い者が臺の物をかついで出づ。大八はつか〳〵と進み寄つて突きあたる。臺の物は地面に散亂する。）

臺屋　えゝ、なにをしやあがる。明盲め。

大八　なんだ。（臺屋の胸ぐらを把る）もう一度云つてみろ。貴樣の方から突き當つて置きながら、武士に對してあき盲とはなんのことだ。

臺屋　（すかし視る）　やあ、大番町の若殿樣でございましたか。

大八　この新宿から四谷へかけて、おれ樣の面を知らねえものは流しの按摩ぐらゐのもので、大宗寺の閻魔でも精塚のばゝあでも、向うから挨拶をする齋藤の大八樣を知らねえか。貴樣こそよつぽどの明盲だ。さあ、なんでおれに突き當つた。

臺屋　（惡い奴に逢つたといふ風で）　へゝ、それがついお見それ申しまして、飛んだ失禮を申し上げました。まつぴら御免下さいまし。

大八　唯では料簡がならねえ。あやまるならあやまるやうに、おれの股の下をくゞつて行け。

臺屋　途方もねえことを云やあがる。

大八　なんだ。（刀に手をかける）

臺屋　へい、へい。仰せに從ひます。

（大八は立ちはだかり、臺屋は股の下を這ひくゞる。）

大八　ざまあ見やがれ。

臺屋　へい、へい。恐れ入りました。

（臺屋は落ちたる臺の物を拾ひあつめて、早々に下のかたへ逃げてゆく。）

大八　はゝゝゝ。だん／＼面白くなつて來たぞ。

（大八は上の方へゆきかけると、格子のうちより信濃屋の抱妓お蝶が聲をかける。）

お蝶　ちよいと、大の字。

大八　（見かへる）　なんだ。

お蝶　こゝまでおいでよ。

大八　なに、こゝまでおいで……。おらあ甘酒は飲みたかあねえ。

お蝶　惡く洒落ないで早くおいでよ。

大八　よし、よし。（格子の前に來る）　そこで、なんの用だ。貴樣がお年玉でも呉れようといふのか。

お蝶　品の惡いことをお云ひでないよ。御人體が廢るぢやないか。

大八　御人體は去年の暮から廢つてゐらあ。大晦日に夜逃げをしねえのが見つけものよ。

お蝶　かんがへてみると、よくお互ひに年が越せたものさ。

大八　正月早々から溜息をつくこともねえ。まあ、せいせい稼いでくれ。松が取れたらお客樣で來るよ。（ゆきかかる）

お蝶　ちよいと、ちよいと、お前さん。

大八　うるせえな。

お蝶　後生だから喧嘩はよしてお呉れよ。

大八　この元日から料簡を入れかへて、喧嘩なんぞは一切お廢止だ。

お蝶　嘘をおつきよ。今もそこで喧嘩をしてゐたぢやあないか。
大八　あれは喧嘩といふものぢやあねえ。向うから突き當つて來たから、無禮咎めをしただけのことだ。
お蝶　それでも相手に土下座をさせたり、股をくゞらせたり、飛んだ助六だよ。
大八　こゝらはおれの縄張内だ。助六をきめるに不思議があるものか。唯しやべつてゐるばかりが能ぢやあねえ。この助六に一服吸ひつけてくれ。
お蝶　お正月で忙がしいんだよ。お前さんなんぞに構つてゐられるものか。いつまでうろ／＼してゐると、碌なことは仕出來さないから、風吹き鴉も好い加減にして早くお歸りよ。
大八　辻番のおやぢぢやあるめえし、今からぼんやりと屋敷へ歸つて、行火の猫をかゝへてゐられるか。これから宿中を一とまはりして、そこらで春らしく一杯飮んで……。
お蝶　勘定がなくつて……馬を曳いて……。屋敷へ歸つて……兄さんに叱られて……。
大八　べらぼうめ。そんな不景氣なんぢやねえや。おゝ、寒い。手前のやうな風の神と話をしてゐると、こつちが風邪を引かあ。

（大八はゆきかゝる。）
お蝶　ぢやあ、おとなしくお歸りよ。
大八　餘計な世話を燒くな。おれの足でおれが勝手にあるくのだ。
お蝶　ちよいと、お前さん。
大八　又呼ぶのか。
お蝶　巡禮に御報謝だよ。
（お蝶は格子のあひだから二朱銀をつゝみたる紙をひねつて投げ出す。大八は拾つて明けてみる。）
大八　やつぱりお年玉か。これはお忝け、濟まねえな。
（大八はその銀を懷中して上のかたへ立去る。お蝶は格子のあひだから見送る。暖簾のうちより店の若い者千助出で、舌打ちをしながら大八のあとを見送る。鳥追ひの女が三味線をかゝへて行き過ぎる。）
千助　（お蝶に）もし、お蝶さん。店はみんな上つてゐるのに、お前さんはそこに何をしてゐなさるのだ。
お蝶　なじみの人が來たから話してゐたのさ。
千助　なじみにも困るが、あゝいふ惡いのは寄せねえがいいね。わたしもさつきから出ようと思つてゐたが、相手が惡いから控へてゐたのだ。旗本の次三男には兎かく良くねえのが多いものだが、あの齋藤の次男と來ては惡い方でも粒選りで、酒は飮む、博奕は打つ、喧嘩はする。

まつたく箸にも棒にもかゝらねえ代物だ。あんな奴にかかり合つてゐると、おまへさんの爲にもならず、こゝの店の商賣の邪魔にもなる。好い加減に見切りをつけて、お穿き物にしてしまふ方がよからうぜ。

お蝶　（むつとして）御深切にありがたう。いづれ春永にゆつくり考へませうよ。（云ひすてゝ奥に入る）

千助　へん、ふくれつ面をして行きやあがつた。

（暖簾の内より同じく若い者丑藏出づ。）

丑藏　（笑ふ）おめえが折角の諫言も暖簾に腕押しといふ形だね。

千助　お蝶は年も若し、容貌もよし、宿場には惜しいほどの上玉だが、蓼食ふ蟲も好き〴〵で、とんだ悪足が出來たものだ。

丑藏　相手が屋敷者だけに始末が悪いね。

千助　町人なら疾うにお穿きものだが、二本指しだから我慢をしてゐるのだ。

（この時、上のかたにて喧嘩だ喧嘩だと呶鳴る。）

丑藏　なに、喧嘩だ。

千助　どうも仕方がねえ。これも松の内のお景物だが、あんまり大事にしたくねえものだ。

（上のかたより大八は髪もみだれ、衣紋もみだれ、鳥追ひの三味線をふりまはして、地まはりの男ふたりと鬪ひながら出づ。あとより地まはりの男一人は大八の大小を持つて出づ。）

男一　さあ、大小を取上げてしまへば大丈夫だ。

男二　思ひ切つて、なぐれ、なぐれ。

大八　なんの、貴樣達に負けてたまるものか。

（三人は店先へ來て叩き合ふ。鳥追ひの女も出で來りてうろ〳〵してゐる。）

千助　（丑藏と眼をみあはせる）これ、これ、どうしたのだ。こゝの店の前で喧嘩をされては迷惑だ。

丑藏　まあ、まあ、おとなしくするがいゝぜ。

（千助と丑藏は仲裁する振をして、地まはりと一緒に大八をたぐる。）

大八　えゝ、酔つてゐなければ貴樣たちの五人や三人、片つ端から踏み殺してやるのだ。さあ、おれの大小をわたせ、刀を返せ。

男三　これを渡してたまるものか。

千助　まあ、待ちなせえと云ふのに……。

大八　なにを云やあがるのだ。

（大八はあばれる。大小を持つたる男はあとに退りて見物し、千助、丑藏と男ふたりは無理無體に大八の三味線を取りあげて撲ち倒せば、鳥追ひは落ちたる三味線を拾ひて早々に逃げてゆく。暖簾の内よりお蝶は跣

見にて走り出づ。）

お蝶　あら、どうしたのよ。まあ、待つて下さいよ。

男一　屋敷者だと思つて、よけて通せば際限がねえ。

男二　なんぼ何でも、もう料簡は出來ねえのだ。

お蝶　また喧嘩をしたのかえ。あれほど云ふのに肯かないからこんな事にもなるのさ。みんなも後生だから堪忍して下さいよ。

大八　こいつ等にあやまることがあるものか。おれは大番町の齋藤大八だ。武士に無禮狼藉を働いて後悔するな。さあ、大小をわたせ。

お蝶　お前ももうおよしなさいよ。多勢に無勢で、お前ひとりが幾ら威張つたつて敵やあしないよ。怪我でもするといけないからさ。

大八　なに讓はねえことがあるものか。こんな端下人足が束になつて來ても知れたものだ。

（大八は取られし腕をふり拂つて又起きあがる。お蝶は捨台詞にて止める。大八はお蝶を突き倒して、大小を取返しに行かうとするを、男二人は遮る。千助は大小を持つたる男に向つて、早く逃げてしまへといふ。男は大小をかゝへたまゝで上のかたへ逃げ去る。大八は追はうとするを、男二人は又遮る。お蝶はうろ／＼してゐる。このあひだに、左右より近所の店の若い者五六人と地廻り七八人出づ。）

一同　（口々に）なんだ。なんだ。

千助　喧嘩だ、喧嘩だ。

丑藏　相手は大番町の大八だ。

一同　むゝ、あの痩犬か。なぐれ、なぐれ。

（一同は地廻りに加勢して大八に打つてかゝる。お蝶は支へようとするを、千助と丑藏は無理におさへて暖簾の内へ引摺り込む。そのうちに大八は大勢を相手にあばれ疲れて倒れる。）

男一　こんな暴れ者は痛め付けてやるのが世間の爲だ。

男二　これに懲りて武士風を吹かすな。

（大勢はわや／＼云ひながら大八を踏みつけ、打ち据ゑる。暖簾の内よりお蝶は又かけ出すを、千助丑藏はひき戻す。この騷ぎの最中に、上のかたより齋藤甚五左衛門、廿五六歲、四百石の旗本、年禮の戻りの體にて裃を着し、仲間ふたりを供に連れて出づ。仲間の一人は提灯を持つ。）

仲間一　往來の邪魔だ。退け、退け。

（これにて大勢も少しく鎮まる。）

甚五左　屠蘇機嫌とは申しながら路のまん中で立騷ぐな。こゝは天下の往來だぞ。

（云ひすてゝ下の方へ行き過ぎようとする。その裾を

聞きつけて、倒れたる大八は聲をかける。）
大八　見上ではございませんか。
甚五左　なに……。（見かへる）
大八　大八でございます。
（中間の一人は提灯を差付ける。）
仲間一　おゝ、大八様だ。
仲間二　やれ、やれ、これはどうしたのでございます。
甚五左　大八、（進みよる）その見苦しい醜たらくは何と
したのだ。
（これを聞いて、一同は顔をみあはせて囁き合ひ、一
度にばら／＼と逃げてゆく。甚五左衛門はそのうしろ
影を見送る。）
甚五左　町人共がばら／＼と四方に逃げ散る。（怒りの聲
をふるはせて）これ、大八、貴様は彼等に打擲されたの
か。
大八　（土に手をつく）面目次第もございません。
甚五左　（聲するどく）大小はどうした。
——（大八はだまつてゐる。）
甚五左　これ、腰の物は如何いたした。
大八　残念ながら奪ひ取られました。
甚五左　なに、大小をうばひ取られた。町人どもに大小を
……。（屹となつて）その仔細をいへ。

大八　恐れ入りましてございます。
甚五左　恐れ入つたとばかりでは判らぬ。武士が大小を奪
はれて、かやうな醜たらくに相成るには、よく／＼の仔
細が無くてはならぬ筈だ。隠さずに云へ。しかと申せ。
大八　はあ。（うつむいてゐる）
（この時、千助と丑藏、暖簾のうちより顔を出して窺
ふ。甚五左衛門は左右を見かへりて二人に眼をつけ
る。）
甚五左　これ、これ。
千助　はい、はい。（丑藏と共に暖簾を出る）
甚五左　この店さきで起つたことであれば、おまへ達も存
じて居らう。この大八はどうしたのだ。
千助　（迷惑ながら）はい。あの……。
甚五左　早く申せ。
千助　實は共、喧嘩をなされたのでございます。
甚五左　喧嘩をいたしたのか。相手は何者だ。
千助　（丑藏と顔をみあはせる）それはわかりません。
甚五左　大八。おまへも知らぬか。
大八　大抵は知れて居ります。こゝらの宿屋の男共や、こ
こらを遊びあるく町人共でございます。何分にも酔つて
居ります上に、相手は大勢、不意に大小をうばひ取られ
まして、かやうな恥辱をうけたのでございます。

甚五左 （千助をみかへる） しかと左様か。
千助 （しりごみする） いえ、わたくし共は仲裁に出ましたばかりで……。
丑藏 決して手出しなどを致した覺えはございません。それは大八樣がよく御存じの筈でございます。
甚五左 おまへ達は兎も角も、この大八を打擲いたしたのは、宿屋の者共とこゝらを遊びあるく町人共……。それに相違ないな。
千助 （いよ〳〵迷惑して） そんなことかも知れません。
甚五左 まさかの時にはおまへ達が證人だぞ。
千助 丑藏 え。
甚五左 （仲間に） それ、二人を取逃すな。
（千助と丑藏はおどろいて逃げんとするを、仲間二人はかけ寄つて取押へる。）
甚五左 大八。起て。
大八 はあ。（起たうとして又倒れる）
甚五左 えゝ、弱い奴め。起て、起て。
（甚五左衛門は手を取つて引立てると、大八は起ちかかりて又倒れる。）
甚五左 （思案して） その體では所詮屋敷まで歩いては戻られまい。駕籠にのせて歸るほどならば、死骸にして連れてゆく。大八、こゝで腹を切れ。
大八 はあ。
甚五左 場所もあらうに、かやうな惡所場に於て、武士たるものが大小をうばはれ、足腰も立たぬやうに打擲され、よもや生きてはゐられまい。せめてもの情に、屋敷へ連れ歸つて、疊の上で切腹させて遣らうと存じたが、その體では迚もかなはぬ。兄が介錯してやるからこゝで死ね。
大八 はあ。
甚五左 これ、よく聞け おれもひとりの弟を殺す以上、唯そのまゝには濟まされぬ。其方の首を持參して、大目付松平圖書頭殿へとゞけ出で、齋藤甚五左衛門の知行は上へ差上げ申し候ふ間、その代りに內藤新宿は永代御取潰しを願ふと申立てるぞ。
大八 兄上。それでは餘りに恐れ入ります。わたくし故にお家をほろぼしましては……。
（千助、丑藏、仲間等もおどろく。）
甚五左 いや、かまはぬ。その方の不埒は重々だが、所詮喧嘩は兩成敗、これほどの恥辱をあたへられて、命までもほろぼすからは、相手の新宿も取潰さねば置かぬぞ。甚五左衛門は先祖代々の家を捨て、四百石の知行をなげ出して、乾と訴訟の趣意をつらぬいてみせる。それをみやげに潔く死ね。（あたりを睨んで） この新宿が取潰さ

れて、やがて一面の草原となるのを冥途から見物しろ。

大八　はあ。この上はなんにも申しませぬ。こゝで尋常に切腹つかまつります。最期の際に水が一口飲みたうございますが……。

甚五左　よし、よし、聞きとゞけた。（店の方にむかひて）これ、誰か水を持つてまゐれ。

千助　では、わたくしが……。

仲間一　えゝ、貴様は逃げるな。

甚五左　（かされて呼ぶ）これ、早くせぬか。水を持つてまゐれ。

（暖簾の内よりお蝶は茶碗を盆にのせて持つて出づ。）

甚五左　おゝ、水を汲んで來たか。（茶碗を取らうとする）

お蝶　いえ、あの、これはわたくしから……。

（お蝶は大八のそばへ行きて茶碗をわたせば、大八は頭へ手に受取りて飲む。お蝶は無言で眼をふいてゐる。大八飲み終れば、甚五左衛門は小刀を鞘ぐるめに抜いて大八に渡してやる。）

甚五左　武士たる者が人の刀を借りて切腹する。かへすがへすも不覺者め。（叱る）

大八　一言の申譯もございません。恐れながら御介錯を……。

甚五左　承知いたした。

（甚五左衛門は肩衣をはね退けて刀をぬく。大八も肌をくつろげて小刀を腹に突き立てる。お蝶は泣きながら手をあはせる。千助と丑藏はふるへてゐる。）

大八　兄上……。

甚五左　むゝ。（介錯して）駕籠をよべ。

——（舞臺暗轉）——

三

もとの安泊りの店さき。第一場とおなじ夜、太鼓入りの騒ぎ唄きこゆ。

（娘は店に坐つてゐる。店さきに在鄕の客與次郎立つ。馬士は馬をひきながら與次郎と爭つてゐる。）

與次郎　これ、馬鹿も休み休み云へ。高井戸からこゝまで一里半のところを五百文も取られてたまるものか。

馬士　これが當り前の旅の人たら、二百文が百文でも乘せて來るが、おまへさんは一體どこへ行くだね。

與次郎　どこへ行かうとおらが勝手だ。足下を見てねだり言をいふな。途方もねえ野郎だ。

馬士　なにが途方もねえことがあるものか。おまへは今夜これからどこへ行くだよ。

與次郎　うるせえ奴だな。宿までの戻り馬だから、幾らでもいゝから乘つてくれろと、われの方から頼んだでねえ

か。

馬士　そりやあ商賣だから頼みもしたが、馬士に酒手はお定まりだ。ましておまへはどこへ行くだよ。（與次郎の袂をつかんで引く）

與次郎　（振拂つて）えゝ、執拗い野郎だぞ。どこへ行かうとおらが勝手だといふに……。

馬士　（笑ふ）それ、見ろ。行く先は云はれめえ。おらが方でもそれを察してゐるから、あたり前よりも餘分の酒手を貰ひてえといふのだ。馬士をいぢめて、自分ばかり面白いことをしようと云ふのは、第一に冥利がよくねえぞ。はゝ、さうでねえか。はゝゝゝゝ。

與次郎　業腹云つても同じことだ。それ、こゝに百五十文ある。これで惡ければ勝手にしろ。

（與次郎は店さきの床几の上に錢をおいて下の方へゆきかゝるを、馬士は手綱を放して追つてゆく。）

馬士　これ、いけねえと云ふのに……。女郎買ひに行く客を百や二百で乘せて堪るものか。大抵世間の相場といふものがあるものだ。

與次郎　世間のことはおらあ知らねえ。おらあ自分のきめただけを拂へばいゝのだ。

馬士　そつちで決めても、おらが不承知だよ。

與次郎　それをおらが知つたことか。このもゝんがあめ。

（行きかゝる）

馬士　なにがもゝんがあだ。（ひき戻す）文句をいふなら拂ふだけの物を拂つてから云へ。このむじな野郎め。

與次郎　こいつもう料簡しねえぞ。

馬士　おらが方でも料簡しねえだ。

（二人はなぐり合ひをはじめる。娘はおどろいて起ちあがる。）

娘　あれ、お父さん。大變よ。喧嘩ですよ。

（奥より亭主出づ。）

亭主　なに、喧嘩だ。どうもいけないな。（表へ出る）これ、これ、喧嘩は止めだ、止めだ。（二人のあひだに割つて入る）

馬士　だつて、お前。このむじな野郎が……。

亭主　まあ、いゝ。まあ、いゝ。そつちのお客もまあ料簡しなさるがいゝ。

與次郎　おらが方から好んで喧嘩の種を播いたわけでねえ。この馬士めが足もとを見てゆするからのことだ。

馬士　なに、ゆすりだ。

亭主　はて、いゝと云ふのに……。どこの里でも喧嘩は禁物だが、この新宿では取分けて大禁物だ。四十年前にこの宿場がお取潰しになつたのも、元の起りは喧嘩からだ。

馬士　むゝ。さうだ、さうだ。

亭主　折角御免になつて再興したところへ、又ぞろ喧嘩をおつぱじめて何うするのだ。なにかの間違ひの出來た時には、おまへ等もおれ達も共難儀ではないか。

馬士　むゝ。さうだ、さうだ。

亭主　この宿が又つぶされたら、おまへさん達も遊び場所に困るだらう。

與次郎　むゝ。さうだ、さうだ。

亭主　さうしてみれば、おたがひに喧嘩口論をつゝしみ、土地の繁昌を計るのが當りまへだ。さあ、その理窟が判つたら、悪いことは云はないから、どつちも笑つて別れることにしなさい。どうだ、どうだ。

馬士　（笑ふ）いや、わかつた、判つた。

與次郎　（笑ふ）わかりました。おやあ、馬士どん。云ひ分はないね。仲直りのしるしにもう廿文置くよ。

馬士　はい、はい。有難うございました。

亭主　それでは、めでたく〆めて、しやん〳〵〳〵。

三人　（笑ひながら手を打つ）はゝゝゝゝゝ。

與次郎　（亭主に）どうも御厄介をかけました。

亭主　どうぞ明朝お寄りください。

（與次郎は挨拶して下のかたへ立去る。馬士は床几の上の錢を取る。）

馬士　まあ、これで家へ歸つて寢酒でも飲むか。

亭主　それがいゝ。醉つ拂つてかみさんと喧嘩をする分には、どんな摑み合をしても構はないからな。

馬士　なに、おらが嚊は亭主孝行だから、めつたに喧嘩なんぞすることぢやあねえだ。はゝゝゝゝ。

（馬士は馬を牽いて上のかたへ立去る。）

娘　お父さん。早く仲直りになつて好かつたねえ。

亭主　まつたく喧嘩には懲々だ。

（下のかたより六部出づ。）

六部　一とまはりして來ました。

亭主　はゝ、隨分賑かでしたらうね。

六部　どこの二階でも三味線や太鼓で賑かいにはおどろきました。

亭主　年を取つた人たちの話を聞くと、四十年前の宿よりもずつと繁昌ださうでございますよ。なにしろ毎晩あの通りのドンチヤン騒ぎですからね。はゝ、まあお掛けなさい。（娘に）これ、お茶をあげろよ。

娘　あい、あい。

（六部は店さきに腰をかける。娘は茶を持つて來る。）

六部　もう何時でせうね。

亭主　さあ、まだ四つにはなりますまいが、夜風が大分ひや〳〵して來ました。もう秋も末でございますからね。

六部　併しこゝらは霜枯れ知らずと いふ景氣で結構です

よ。

（奥より老僧出づ。）

亭主　御出家樣、これから何處へかお出かけでございますか。

老僧　泊めて貰はうと思つたが、どうも今夜は寢られさうもない。やはりこれから小石川まで行くとしよう。

亭主　これから小石川まで……。（やゝ意外らしく）夜なかになつてしまひませう。

老僧　いや、夜道には馴れてゐる。（紙につゝみし錢を出す）輕少だが、宿賃と茶代に取つて置いてくれ。

亭主　はい、はい。ありがたうございます。では、どうしてもお出かけでございますか。

老僧　あの笛太鼓を聞きながら、こゝでおち〳〵とは眠られまい。どうも修行が足らぬとみえる。

亭主　（笑ひながら）はい。

老僧　思ひ切つて出かけるから、草鞋を出して貰ひたい。

娘　はい、はい。

（娘は手傳ひて、僧に草鞋をはかせる。騷ぎ唄は、又一としきり賑かにきこゆ。）

六部　おゝ、囃すわ。囃すわ。御出家樣の逃げて行かれるも無理はない。わたしも今夜は浮かされて、寢られないかも知れないぞ。（笑ふ）

（老僧は無言にて、杖と笠とを持ちて下のかたへ行きかゝる。）

娘　どうも有難うございました。

亭主　氣をつけておいでなさい。

（下のかたより第一場の地廻り二人、酒に醉ひて唄ひながら出づ。老僧はそれと摺れちがひながら行きかけて下のかたを見かへり、やがて笠をかぶりて歩み去る。騷ぎ唄賑かにきこゆ。）

――幕――

浪華の春雨

登場人物

赤格子九郎右衞門
大工の親方　庄　藏
その弟子　六三郎
丁　稚　三　吉
福島屋の遊女　お　園
　ほかに捕手、會所の使、駕夫など。

大阪大寶寺町、大工庄藏の家。二重屋體の上のかたには三尺の佛壇、その下は押入。つゞいて奥に出入りの障子二枚。その下のかたは壁なり。軒には建前に用ゐたる七五三の柱五六本をかけたり。庭のかみのかたには木納屋ありて、奥には材木を積み、入口にも材木を立てかけ、こゝにて切組などするとおぼしく、あたりには鉋屑など散亂せり。納屋の傍には一本のさくら白く咲けり。下のかたには格子戸あり。家の外には東横堀の川筋遠くみゆ。寛延三年（今より百四十餘年前）三月十八日の午後。

（この一幕はすべて竹本の淨瑠璃を用ゆること。）

淨〽くれなゐを栽ゑし園生にあらねども、お園が色は隱れなき、勤め盛り戀ざかり、春も盛りの彌生の日、そよ吹く風も南から、芝居を出でし戻駕籠。

（福島屋の抱妓お園、廿二歳の遊女、しばゐ歸りのすがたにて駕籠に乘りて出づ。）

駕夫甲　もし、御免くださりませ。

三吉（木納屋より出づ）あい、あい。

駕夫甲　大工の親方庄藏どのはこちらでござるか。

三吉　おゝ、さうぢや。して、何處からござつたのぢや。

（駕夫は駕籠をおろす。お園は駕籠より出づ。）

お園（小聲で）そんなら六三郎といふお人がゐるはず。新屋敷から來たと云うて、ちよつと呼び出して下さんせ。

三吉（不思議さうにお園をみる）おゝ、六三どのならそこにゐる。呼んであげう。六三どの、六三殿。

お園　これ、靜になう。

（三吉うなづきて納屋の方へゆく。）

お園　では、駕籠の衆。わたしはこゝの家に些と用がござ

んす。お前方はもうこゝから……。

駕夫乙　戻つてもようござるか。

お園　わたしがこゝへ寄つたことは、かならず誰にも沙汰なしに頼みますぞえ。（紙につゝみたる銀を遣る）

駕夫　ありがたうござります。（二人は空駕籠をかつぎて去る）

淨〽納屋の内より六三郎、なにごころなく立出でて、たがひに見あはす顔と顔。

（納屋の内より大工六三郎、十九歳、手斧を持ちて出づ）

六三郎　おゝ、お園か。

お園　六三さん、這入つても大事ござんせぬかえ。

六三郎　あ、待ちや。（三吉に）これ、三吉。おまへは仕事をしまうたら風呂に行くと云うてゐた。仕事はもう止めにして、早う風呂へ行つて來や。

三吉　いや、職人が晝間から風呂に行たら、親方に叱らるるは知れたことぢや。

六三郎　晝と云うても、もう七つ下りぢや。風呂へ行ても大事ない。もし叱られたら私があやまつて遣るほどに早う行きや、行きや。はて、素直に行くものぢやと云ふに……。

淨〽追ひ出さんと氣をあせる、お園も思案のふところから、紙とり出して細銀を、つゝむ間さへ悶しく。

お園　これ、丁稚どの。兄弟子の云ふことは何でもおとなしう肯くものぢや。お前になんぞ土産を遣りたいが、今は芝居のもどり道、ほかに持合はせた物もなければ、これで好きなものを買うてくだされ。な、わかつたら早う、早う。はて、おまへも粹にならしやんせ。

淨〽粹も不粹も今時は、慾が伴ふ世なりけり。

（お園は三吉の肩をたゝきて、かた手でをがむ眞似をする。三吉は紙づつみを明けて莞爾しつゝ懐に收める。）

六三郎　こいつ、ずるい奴め。さあ、この上は澁つてゐることもあるまい。早う行きや、行きや。ええ、まだかこ

淨〽腹立ちまぎれに振りあぐる、手斧の下を掻いくゞり。

(六三郎はありあふ手斧を振りあげるを、お園は止める。)

三吉　はて、叱らしやんすな。わしもこれから……(腰の手拭を取つてみせる)濡れにゆくのぢや。

淨〽年には優せた小丁稚が、口合まじりに逃げてゆく。

(三吉は表の方へ去る。二人はあとを見送る。)

お園　ほんに子供とて油斷がならぬ。ふたりの樣子を覺つたさうな。丁稚なればこそよけれ、もし親方さんにでも覺られたら何とせう。えゝ、まゝよ。どうでこゝまで來たからは、もし六三さん、わたしは内へ上るぞえ。(緣に腰をかける)

六三郎　はて、待ちや、待ちや。もしやこゝへ親方が……。

お園　ことし十九といふ若い男が、なぜそのやうに氣の弱い。

(お園はじれて駈け來り、六三郎の手をとりて、無理に内へ引上げる。)

お園　親方ばかりが怖ろしうて、わたしがおそろしいとは思はぬか。親方に叱られても、多寡が勘當で事は濟む。わたしに心から恨まれたら、どうなることぢやと思はんす。

淨〽ふたつも三つも年上の女子に深く思はれたが、おまへの因果とあきらめて、いかなことでもあいあいと、素直に肯いてゐやしやんせ。

お園　もしもわやくを云ふならば、灸据ゑるは未なこと。

淨〽わたしの此手がある限り、打つてたゝいて、抓つて突いて、屹と仕置をせにやならぬ。

お園　そのとき泣いても堪忍せぬぞえ。

淨〽癡話も口說も年下の、弟を叱るごとくなり。

六三郎　そのやうに叱つて給るな。幼いときに親に捨てられ、十歲の年からけふが日まで、こゝの親方の御世話をうけた、御恩を仇に思はれうか。來年でなうては年季もまだ明けぬ丁稚あがりの身の上で、遊女狂ひなどすることが、もし親方のお耳に入らば、なんと云譯が出來ようぞ。かういふ中もひよつと誰かに見付けられはせまいかと、わしは胸がどき〳〵する。(左右を見る)して、そなたは何うして來やつた。

お園　どうして來たとは知れたこと。このごろは半月ほども打絕えてたよりも聞かねば、どうしたことかと氣も濟まず、けふは客衆に連れられて、南の芝居見物に行つたれど、舞臺を觀るのも上の空、氣合がわるいと嘘云うて、中途から芝居をぬけ出し、歸り途に篤とたづねて來ました。わたしとても此のやうなことが旦那殿にきこえたら、屹と叱らるゝは知れてある。あぶない棧橋を渡るはお互ひのこと。苦しいなかの樂みとはほんに此事でござんせうか。

淨へ話なかばにあたふたと、駈け戻る三吉は門口から。

(下のかたより三吉走り出づ。)

三吉　これ、これ、六三どの。うか／＼してはゐられぬぞ。親方さんが今こゝへ戻つて來るぞや。

六三郎　なに、親方が戻つて來ると……。

三吉　今そこの辻でゆき逢うた。三吉どこへ行くと問はしやりますので、風呂へまゐりますと有體に答へたら、案の通り叱られた。

お園　では、ほんたうに親方さんが……。

六三郎　今こゝへ戻つて來るといふ。こりや何うしたらよからうぞ。

三吉　(表を見る)あれ、あれ。さう云ふうちに既うそこへ……。

淨へやれ情なや何とせん、表へは出られず、奥へは猶ゆかれず、ふたりはうろ／＼起ちつ居つ、うろたへ廻つて木納屋の奥に、お園をやう／＼押隱す。

(二人はうろ／＼して庭に降り立ち、六三郎はあわててお園を納屋の奥に押隱す。このあひだに親方庄藏、四十餘歲、下のかたより出で來り、格子をあけて內に入る。)

淨へ親方は分別者、取亂したるこの體を、見て見ぬふりで打通る。六三郎は手持なく。

六三郎　お內にござると思うてゐましたに、いつの間にどこへお出でなされたやら……。神詣か佛參か、または芝居の御見物か。先づ／＼お歸りなされませ。

淨へ挨拶さへも四度路なる。親方は苦笑ひ。

庄藏　さつき町の會所から呼びに來たので、ついそこまで

行たところ、思ひのほかに話が長うなつて、小半時も暇を潰した。おれが腕でそのひまに鐵槌持つたら、銀一匁は叩き出さうものを、あつたら損をして退けたの。はゝゝはゝゝ。

六三郎　して、會所の用といふは、どのやうなことでござりました。

庄藏　いや。別に氣遣ひなことでない。海賊のおたづね者が西國筋を逃げのびて、このごろ大阪へ入込んだといふ噂がある。おれは親代々の大工商賣、屋敷や町方に出入りも多ければ、もし聞き込んだこともあつたら、早速にとゞけて出よとの御沙汰。誰にもあれ、見附次第に訴人したものには、銀二十枚の御褒美を下さるゝと云ふことぢや。

六三郎　御褒美に眼が眩るゝではなけれども、火つけ盜賊を訴人するは、人のため、世の爲といふもの。惡い奴はひとりも殘らず召捕つてしまはねば、世間の人が枕を高くは寢られますまい。その海賊とやらはなんといふ奴でござりまする。

庄藏　さあ、それは何れあとで話さう。名主やお役人衆の前で窮屈の切口上、いやもう肩が張つて、足がしびれて來た。はゝゝゝゝ。先づ奥へ行て一休みせうかい。

六三郎　ほんに氣の詰るところへ出ると、誰しも氣草臥れがするもの。では、奥でゆる／＼と……。

庄藏　茶でも一杯飮むとせうか。時に六三、もうやがて日も暮るゝであらう。花見時の日和癖ぢや。どうやら空も陰つて來て、今夜は雨になりさうな。そこらに散つてゐる木の屑なども綺麗に掃除して、納屋に押込んである材木も……。（六三の顔を見る）ひとの見ぬうちに出すものは早く出し……。入れるものは早く入れて、始末を附けねばならぬぞよ。

淨へそれと云はねど打つ釘は、さすが大工の手並なり。
　こなたはいよ／＼痛み入り。

六三郎　あい、あい。唯今すぐに片附けまする。

三吉　では、わしが手傳ひませう。

庄藏　いや、納屋の始末は六三ひとり……。そなたは奥へ來ておれの肩でも揉みやれ。

三吉　あい、あい。

淨へ打連れてこそ入りにけれ。親方のなさけ身に堪へ。
　うしろ姿を伏拜み。

（庄藏と三吉は奥に入る。）

六三郎　えゝ、勿體ない親方様。六三郎が不しだらを御存じながら何にも云はず、大目に見てくださるお情は、決して忘れは致しませぬ。いや、そんなこと云うてゐろうちに、又もやどんな邪魔が出ようも知れぬ。

淨〽とつかは駈けゆく納屋の前、出逢ひがしらに。

お園　六三さん。こちの親方は粹ぢや、粹ぢや。さすがはお前の御主人ほどある。飛驒の内匠よりもこつちの巧みを見て見ぬふりの鷹揚さ、わたしも感心してゐたぞえ。

六三郎　まあ、そのやうは仇口はあとにして、かう見附かつたからは長居はならぬ。早う戻つてくれ。頼む、たのむ。

お園　ぢやと云うて、この儘でひとり歩きも出來まい。お前そこまで送つて來て下さんせぬか。

六三郎　最前も云うた通り、丁稚あがりの六三郎ぢや。女郎と手をひいて、うか／＼往來が出來ようか。そのやうな無理云はずと、早う戻つてくれ。

お園　戻れといふなら戻りもせうが……。して、お前、いつ逢ひに來て下さんす。

六三郎　今夜と云うては出にくいが……。おゝ、あすの晩には屹と逢はう。

お園　きつと來て下さんすか。

淨〽なごり惜しさに後髪、ひくれて外もほの暗き、門にたゝずむ九郎右衞門。

（赤格子九郎右衞門、三十八九歳、旅姿にて出づ。）

九郎右　（内をうかゞふ）御免くだされ。

淨〽二人ははつと又びつくり、狩場の雉子起ちかねて、あわてゝ元の草がくれ。

（二人はうろたへて、お園は再び納屋にかくれ入る。）

六三郎　（門に來る）どなたでござりまする。

九郎右　さういふこなたは六三郎殿ではござらぬか。

六三郎　はい。

淨〽すつと入つて其手を取り。

（九郎右衞門は内に入りて、六三郎の手をとる。六三郎おどろく。）

九郎右　親は無くとも子は育つと、世のことわざに嘘はない。よう健かに生ひ立つたなう。

浄〽仔細知らねば薄氣味わるく。

六三郎　して、お前はどなたで……。わたくしになんの御用。

九郎右　親子がわかれて十一年、途中で行き逢うにもそれとは知れまい。まして折柄のゆふ闇に、面體しかと判らずとも、九歳の年まで聞きなれた親の聲音は、耳の底にも殘つてゐる筈。今さら名乘るも面目なけれど、名乘らでは濟まぬ父の九郎右衛門、わが子の安否をたづねに來た。

六三郎　え、そんならおまへが父様か。

浄〽おなつかしやと取縋る、血筋のまことは千行の涙。

（この中、ひとりの捕手は門に來りて内を窺ひ、うなづきて去る。）

六三郎　なには兎もあれ、先づ〳〵これへ……。

浄〽つきぬ親子の縁先に、九郎右衛門は腰をすゑ、あたりを憚る聲をひそめ。

九郎右　膽太く生れたが身の仇、十露盤はじく眞面目の商賣もどかしく、堂島の米商ひにぬれ手で粟の日算はづれ、女房を捨て子をすてゝ、家出したは十一年の昔。四國西國の果までさまよひ歩きしが、生れ故郷はなつかしゝ、わが子には逢ひたし、この頃ひそかに大阪に上つて、色色に手をまはし尋ねる處、せがれは大工の親方庄兵衛どのに拾はれて無事に奉公してゐるとの噂。聞いて心は勇み立てども、おもてむきに名乘つて來るも面目なく、晝よりこのあたりを徘徊して、そなたの出入りを窺ふうちに、日も暮れたり、そこらに人も無し、今この時と聲をかけて、初めて親子がめぐり合ふ。これも盡きせぬ縁であつた。よくも達者でゐてくれた。

浄〽六三郎は嬉しさと、また悲しさも取りまぜて。

六三郎　お前もよう生きてゐてくだされた。お前が家出した明る年。

浄〽母様は氣病で死なしやれた。わたしは稚兒途方にくれて、

六三郎　父様戀しと明暮れに、泣いてばつかり居りましたを、こゝの親方に拾はれて、十年の年季ももう一年。

浄　へこれ見てくだされ前髪も、去年の春に剃りました。

六三郎　お禮奉公すましたら、裏家住みでも世帯を持つ筈。その時までに父様の居所がどうぞ知りたいと、祈らぬ日とてはござりませぬ。かうしてめぐりあふからは。

浄　へどこへも行つて下さるなと、甘えるやうに掻き口說く。

九郎右　親甲斐もない親を慕うて、それほどまでに思うてくるゝか。さりとはいよ〳〵面目ない。したが、まあ聞いてくれ。おれも今は唐人商賣……とばかりでは判るまいが、長崎の果までも船を乗り出して、唐人船と商賣するのぢや。こちらからも代物を積んでゆけば、あちらからも代物を積んでくる。一船毎に虎の皮やら珊瑚珠やら山のやうに受取つて來て、儲けは十倍二十倍、いや面白いこと。これが九年十年續かうならば、おれも日本で屈指の大福長者にならうも知れぬ。はて、びつくりするな。これほどの膽玉がなくて、今の世の中が渡れようか。はゝゝゝ。

浄　へ六三郎は夢心地、たゞ安閑と聴きゐたる。父はいよ〳〵機嫌よく。

九郎右　ぢやに因つて、そなたを迎ひに來た。鑿と槌を持つて魂かぎり働いても、多寡の知れた今の商賣、今日かぎりさらりと止めて、おれと一緒に博多へ下れば、立派な大家の若旦那、なんと夢のやうな出世であらうが……。先づ親方に逢うてこれまでの禮を述べ、ひまを貰ふ掛合もせにやなるまい。

浄　へ案内せよと云ふうちに、始終をうかゞふ親方は行燈片手に立出でて。

（九郎右衛門は草鞋をぬぐ。奥より庄蔵に行燈をさげて出づ。）

庄蔵　どこのお人か知らねども、正直者の六三郎によい智慧を附けてくだされた。先づお禮から云ひまする。

六三郎　おゝ、親方様。そんなら今の逐一を……。

庄蔵　聞いたればこそ出て來たのぢや。得體の知れぬ旅の人を、誰に斷つて内へ入れた。早う逐ひ出してしまはぬか。

浄　へ苦り切つたる顔色に、こなたも少しくむつとして。

九郎右　これは親方、はじめてお目にかゝりまする。われ等はこの六三めが實の親、久振りで逢ひに來た者、譯もたゞさずに逐ひ返せとは……。
庄藏　その六三めに逢ひに來たのが氣に入らぬ。おのれは我子が憎うてこゝへ來たのか。
九郎右　え。
庄藏　おのれに見せるものがある。
　淨へふところより一枚の繪姿とり出し。
庄藏　やい、日本で指折の大福長者とかいふお人。この繪姿を鏡として、おのれが生面（いきづら）を寫してみよ。赤格子九郎右衛門といふ海賊の張本、長崎奉行の目をのがれて、この大阪にまぎれ込む。見つけ次第に訴人したら、銀廿枚の御褒美をくださるゝと、繪姿までも添へてきびしい御詮議を、知らぬは迂濶か大膽か。兒飼（こがひ）から仕立上げて足かけ十年。わが子のやうにも思ふ大事の弟子にそのやうな親が持たされうか。海賊の子と呼ばされうか。親の恥は子の恥、弟子の恥は親方の恥、我子に連坐（まきぞへ）の罪が着せたいか。親方の面に泥が塗りたいか。恥を知らば早く歸れ。
　淨へ疊たゝいて罵れば、九郎右衛門びくともせず。

九郎右　いかにも親方推量の通り・われ等は赤格子九郎右衛門、海賊といふ名は負ふたれど、天道も佛神も照覽あれ、人の物びたひらなか目をかけた覺えござらぬ。國法を破つて唐人船とあきなひした、それが重き罪科（ざいくゎ）ときまつて、詮議の由は薄々聞いたれど、博多の住居（すまひ）は假のやど、われ等がまことの住家とするは、日本の土よりも百千倍廣き海の上、東より追へば西にかくれ、北より向へばみなみに走る。長崎奉行などの手ではいかな、いかな。彼等がいかに立ち騷いでも、所詮及ばぬことゝ多寡をくゝつて、今まで安穩に日を送りしが、わが子の愛に心ひかされ、うか〳〵と故郷へ立戻りしは、九郎右衛門が運のつくる時節、水の上ならばいかなる網をも破つて逃ぐる法もあれ、陸の上では鯨や鮫も蟲けらに劣る。八方の出口出口を取りまかれ、繪姿までも添へて詮議に逢うては、のがるゝ隙もござるまい。唯今聞けば、九郎右衛門を訴人したるものには・銀廿枚の御褒美を下さるゝとや。とても助からぬ網の魚ならば、他人の獲物とならうよりも、親方の手料理に逢ふがせめてもの恩報じ、六三の命を進上申す。いざ縛うつて引立てめされ。
　淨へ腕をまはして眼を瞑（と）づる。

庄藏　え丶聞き分けのない男よなう。渡世の金がほしければ、そつちで望むまでもなく、こつちで挟くに請人する。慾に眼が眩れわが弟子の、親に縄かくる庄藏と思ふか。見損じられたが口惜い。赤格子九郎右衛門は六三郎の親といふこと、上にも已に御存じなればこそ、けふも町會所へよび出されて御詮議受け、この繪姿までも渡された。そこへうかうかたづねて來るは、穴を這ひ出る狐も同様、わが子といふ餌に引かされて、罠にかゝるとは氣が付かぬか。早く歸れと云ふはこゝのこと。生國の大阪で召捕られては、六三郎の恥になる。わが子に後指さゝすが親の慈悲か。わが子を日かげ者にするが親のなさけか。この道理を合點したら、天竺南蠻暹羅松前、遠いところへ勝手にゆけ。

浄　へ首ぎしみしてぞ叱りける。九郎右衛門はつと手を支へ。

九郎右　あ、恐れ入つたる親方の御意見。この大阪で召捕られては、親方の恥、わが子の恥、そこに心が付かざりし不調法、どのやうに叱られても一言ござらぬ。なるほどこゝは劍の中、片時も早うお暇申す。六三も堅固で、親方大事に奉公せい。もう此世では逢はぬぞよ。

浄　へ暇乞さへそこそこに、ゆくへも知れぬ旅衣、うすき契りの親と子を、むすぶ由なき片絲の、つながるお園も伸びあがれど、顔は見られぬ夕闇に、まぎれ行くこそ危けれ。

（九郎右衛門は親方に挨拶して草鞋をはき、出でゆかんとするを、六三郎は取りすがる。お園も納屋より忍びいでて窺ふ。九郎右衛門は六三郎をつきのけて、足早に向うへ去る。下のかたより捕手三人うかゞひ出で、顔を見あはせて首肯き合ひ、すぐにそのあとを追つて行く。）

浄　へ門に見送る六三郎、すはや大事ととゞろく胸。

六三郎　おゝ、今のはたしかに捕手の衆、父樣のあとを追うて行つたは……。

庄藏　なに、捕手があとを追うて行つたと……。えゝ、心づくしの甲斐もなく、この大阪でやみやみと縄にかゝるか。

浄　へ親方も心ならず、手に汗握つて立つところへ、會所の使走せ來り。

使　もし、庄藏どの。會所から急用ぢや。早う、早う。

浄〽云ひすてゝこそ歸りけれ。

庄藏　むゝ、又もや會所から呼びに來たは、九郎右衛門が詮議にきはまつた。なにを問はれても知らぬと云ふまでのこと。皆が舍利になるまでも、この庄藏が引受けた。なう、六三。親に若しものことあつても、かならず力を落すまいぞ。科人の子と指さゝれて、大阪の土地にも住み辛くば、おれが添手紙して江戸の親方衆にたのんで遣る。大阪ばかりに日は照るまい。世間を狹く思ふなよ。ほて、なにをめろ〳〵。弱い奴め。

浄〽力をつくれど力なき、可哀の弟子の泣顔を、見返り見かへり出でてゆく。

(庄藏は下のかたに去る。時の鐘さびしくきこゆ。)

浄〽降るならひの春の日も、暮れて散りゆく花の雨、音もきこえず降るなかに、むざんやな六三郎、親の安否と身の行末、おもひなやみてしよんぼりと、濡るゝがまゝにたゝずめり。お園も泣く〳〵走り出で。

お園　様子は殘らず聞きました。たとひ名乘合はずとも、わたしに取つては大事の舅御様、どうか御無事に逢したいと蔭ながら祈つてゐたものを、かうなつては心許ない。とは云ふものゝ、今更あせつても狂うても及ばぬこと。お前はふだんから氣の弱い人、かならずくよ〳〵思はんすな。

六三郎　なんぼ心を强う持つても、十一年ぶりでめぐり逢うた、父様が今にも召捕られ。

浄〽海賊の張本とうたはれて、大阪中を引きまはされ。

六三郎　はりつけか獄門のお仕置を、子がのめ〳〵と見てゐられうか。人の口には戸が立てられず、あれ見よ大工の六三めは、引廻しの子ぢや、ぬすびとの胤ぢやと、ゆく先々で指さゝれ、大事の親方にも恥かゝせ。

浄〽出入先の仕事場や、仲間同士の寄合にも。

六三郎　どの面さげて出られうぞ。俺やもう生きてゐる氣はない。

淨へ推量せよと泣きければ、お園も道理と思へども、わざと淚を押隱し。

お園　それ、それが氣の弱いといふものぢや。親方さんの云はんした通り、大阪ばかりに日は照るまい。もしもこの土地に居づらくば、ほとぼりの消えるまで二年三年、遠い他國へ足ぬきして、時節を待つてゐなさんせ。人の噂も七十五日、案じたものではござんせぬ。これ、泣いてばかりゐずと男らしう。

淨へ分別して見やしやんせと、割ッつ口說いつ宥むれば、男もやう／＼合點して。

六三郎　なるほど、世間をせまく思ふなと、親方さんも云はしやれた。父樣がいよ／＼お召捕と聞いたらば、添手紙を貰うて江戶へ出て、二年三年辛抱せうか。生れてから今日が日まで、大阪のそとへは一足も出たことのない六三郎、他國の奉公は辛いであらうが……。

お園　はて、そこが辛抱、お前ももう子供では無し、石にくひ付いても我慢せねば、男一匹とは云はれまい。丁度おまへが戾る頃には、わたしの年季も濟んでゐる筈。どんな貧い裏家でも、ふたりが一緒に睦まじう。

六三郎　おゝ、その時節まで待つてゐてたもるか。

お園　三年はおろか、五年が十年でも、きつと待つてゐるほどに、江戶の若い女子になじみが出來て、わたしを忘れてくださんすな。

淨へかたみに袖を絞りつゝ、末の松山末かけて、ちぎる緣こそ淺からぬ。

お園　これでわたしも少しは落着いた。もうさつきから日が暮れたに、いつまでもこゝに長居はならぬ。

六三郎　ほんにさうぢや。戾りが遲うなつては、家の首尾も惡からう。おゝ、生憎に雨がふつて來た。傘を貸してやるほどに、まあ待つてゐや。

淨へ行く後かげ見送つて。

（六三郎は奧に入る。）

お園　江戶へゆけと勸めては見たものゝ、人にもよれ六三さんは、日ごろから孱弱いからだ、殊に氣の弱い生れつき、西もひがしも知らぬ他國へ出て、右も左も他人の中。

淨へ鳥でさへ旅鴉はいぢめられ、傷らしうてならぬも

の。

お園　あの人も定めて明けくれに、他國者よと侮どられ、たんと苦勞をするであらう。それを知りつゝ出してやるは、赤兒を川へ突き落すやうなもの。と云うて、ほかには法も無し。

淨〽あゝ何とせん何となる、鳴るは太鼓のおと高く、出口出口を塞がれて、逃場に迷ふ九郎右衞門、あとを慕うて捕手の人數、御用御用と取りまくを、ぬけつ潜りつ必死の働き、突退け跳ねのけ、蹴倒して、姿は見えずなりにけり。

（太鼓の音。向ふより九郎右衞門逃げ來るを、捕手は追ひ來りて、家のそとにて鬪ひ、九郎右衞門は再び下の方へ逃げゆくを、捕手はつゞいて追うてゆく。お園は内より窺ふ。太鼓の音しばらく止む。六三郎は番傘を持ちて奥より出づ。）

六三郎　これ、これ、今の物音は……。

お園　夜目に確とは見えねども、父樣が追はれて來たやうな。

六三郎　今の太鼓は出口出口を固めの合圖、今頃までこゝらに迷うてゐては、所詮のがるゝ目あてはあるまい。なさけなや父樣の御運も盡きたか。

お園　はて、もうそれは云はしやんすな。では、わたしは行きますぞえ。親方さんとも相談して、いよ／＼江戸へ行くときまつたら、屹と暇乞ひに顏みせて下さんせ。よいかえ。

淨〽身のよしあしは白張の、傘を持つ手も顫はれて、ひらく轆轤の彈き金、かたき誓もうす紙の、破れて骨となる太鼓、辻々にて打ち立つる。

（六三郎は傘をひらき、お園と合傘にて門まで送り出す。お園は傘を受取りて、二足三足ゆきかゝる時、又もや四方にて太鼓の音きこゆ。）

六三郎　おゝ、又もやきこゆる太鼓の音が……。あれ、あれ、西にも東にも……。

淨〽みなみも北も塞がれて、父樣は網の魚、えゝ是非もなや悲しやと、狂氣のごとくどうと坐す。

お園　胸にひゞくあの音は……。

六三郎　修羅の攻太鼓を聞くやうな。

お園 (傘をすぼめてあわたゞしく駈け戻る) 六三さん。
あれ、あの音は冥土の迎ひ……。

六三郎 え。

お園 わたしも一旦は勧めたもの〻、おまへを江戸へは遣りたうない。いとしい男を他國へ遣つて、たんと苦勞をさせるよりも、やつぱり二人が離れずに……。

六三郎 とは云へ、大阪にはおめ〳〵と……。

お園 居られぬところに居るには及ばぬ。ふたりが安々と住む國は、もし。

淨 〽いだき寄せて囁けば。

六三郎 そんなら二人が今宵をかぎり……。

お園 未練はないか。

六三郎 なんの、生きてゐたからう。そなたと連れ立つてゆくならば。

淨 〽地獄の底も厭はじと、身づくろひして起ちあがれば、こゝろも空も暗き夜に、修羅の太鼓のたう〳〵と、冥土の迎ひぞ迫り來る。

(四方にて太鼓の音はげしくきこゆ。)

お園 あれ、あれ、又もや太鼓の音。邪魔のない中、ちつとも早う。

(六三郎は納屋に走り入りて、小さき鑿を持ち來る。)

六三郎 大工の弟子には相應な。(鑿をみせる)

お園 そんならこれで……。

六三郎 お園、來やれ……。

お園 あい……。

六三郎 (お園の手を取る) あの太鼓は父様の命をちゞむる音、ふたりもあの音を聞きながら……。して、これからの死場所は……。

お園 どこへ行かうぞ、六三さん。

淨 〽淨土は西と聞くからに、ゆく手は西よ西横堀、うき名を流す、血をながす、戀の末こそ哀れなれ。

(お園は向うを指させば、六三郎はうなづき、ふたりは手を取つて雨のなかを走りゆく。太鼓の音絶えずきこゆ。)

淨 〽死にゆく子をよそに見る、親のこゝろや如何ならん。九郎右衛門は茫然と、納屋のうしろに立ちゐるたり。

（この道具は半廻しになりて、納屋のうしろを見せる。
九郎右衛門たゝずむ。）

九郎右　逃ぐるものは路を擇ばぬ譬、四方をとりまかれて度を失ひ、親方の家とも心付かず、裏口よりそつと忍び込み、捕手を遣り過さんと隱るゝうちに、思ひもよらず我子の六三が、お園とやらと死に行く。

淨〽やれ逸まるなと出でんとせしが。

九郎右　いや、いや、思へば世間はむごいもの。盜人の子と憎まれて、可哀や六三の額には、不運といふ極印を打たれたも同じこと。一生日かげで暮さうよりも。

淨〽人間の花ざかりに、美しう散るが却つて仕合せ。

九郎右　止めずに殺した親を恨むな。われも所詮はのがれぬ命。千日前にさらされて、やがて血染めの赤格子九郎右衛門、冥土で親子の對面せん ひと足先にゆき着いて、父のゆくのを待つて居れ。

淨〽云ふもあたりを憚りて、涙を隱す身を隱す、よすがも無しや廣き世を、われから狹き門の口。

（舞臺はもとに戻る。九郎右衛門は納屋のうしろより庭さきを過ぎて、門口に忍び來る。奥より三吉出で來り透し見て、九郎右衛門の胸倉をつかむ。九郎右衛門は突倒して門口へゆく。向ふより庄藏は町會所と記せる提灯を持ち、傘をさして出づ。）

九郎右　おゝ、親方か。

庄藏　九郎右衛門か。

淨〽提灯ふつと吹き消せば、闇はあやなし――。

（庄藏は提灯を吹き消す。九郎右衛門は向うへ走り去る。雨の音、太鼓の音。）

――幕――

寺の門前（喜劇）

登場人物

寺の住職　善隆
寺のむすめ　町子
花屋の娘　おとく
犬殺し　長太
その弟　長吉
納所　隆格
檀家總代大崎、吉田
ちんばの乞食
寺まゐりの母と娘など

時は現代。秋の日の午後。

場所は淺草のあたり、ある寺の門前。すこしく上の方によせて屋根附の門あり。門につゞいて下の方には潜り戸があけられて、そこには小さき花屋の店が横向きにみゆ。花屋の店には樒や草花などが積まれ、高箒や手桶などがあり。往來にむかひし方は半窓にて、それより下のかたは扇骨木(かなめ)の生垣、そのなかは墓地と知るべし。上の方もおなじく生垣にて、門内には紅らみたる柿の大樹、そのほかにも植込い立木ありて、本堂に通ふ石だたみあり。

（犬殺し長吉、十七八歳、犬の死骸を入れる箱車を下のかたに置きて、地にしやがんでゐる。花屋の娘おとく、これも十七八歳、手桶と柄杓を持ちて門前に水をまいてゐる。上のかたには啞にて跛足の乞食の男、竹杖をそばに置きて坐つてゐる。門内より母と娘らしき參詣人出づ。）

おとく　（會釋する）もう御參詣はおすみになりましたか。

母　毎度御厄介になります。

おとく　毎度ありがたうございます。

（母と娘は下の方へゆきかけ、娘は乞食の方を見かへりて母の袂をひけば、母はうなづきて立戻り、乞食に幾らかの金をやれば、乞食は無言にて頭を下げる。母と娘はそのまゝ下のかたへ立去る。おとくは水をまき終りて門内に入る。長吉はうつむいて居睡りをしてゐる。やがておとくは手桶をさげて再び出で來り、水を撒かうとして左右を見かへる。）

おとく　困るわねえ。（長吉のそばに來る）ちよいと少し

退いておくれよ。水をまくのに困るから。さあ、ちよいと退いて……。あら、寢てゐるの。仕樣がないねえ。

（おとくは手桶を下におきて、長吉をよび起す。）

おとく　ちよいと、起きておくれよ。長ちやん。そんなところに寢てゐると、兄さんに叱られるよ。え、長ちやん。巡査に叱られるよ。

長吉　（はつと眼をあく）巡査……。

おとく　（笑ひ出す）ほゝ、寢ぼけてゐるんだよ。

長吉　（眼をこすりながら）だつて、巡査にやあ懲り〳〵してゐる。何度警察へ連れて行かれたか知れやしねえ。

おとく　首環のついてゐる犬を殺したからだらう。おまへが悪いんだから仕方がないぢやないか。

長吉　おいらぢやあねえ。兄貴が殺したんだ。それでもおいらまでが一緒に連れて行つて涼まされるんだもの、遣切れねえや。

おとく　だつて、おまへも手傳つたんだらう。

長吉　手傳はなければ兄きになぐられるからなあ。どつちにしても助からねえや。それにしても、兄貴はどこへ行つたんだらう。

おとく　さつきから歸らないやうだよ。

長吉　また居酒屋へ行つたかな。それともあすこのチヤン蕎麥でも食ひに行つたかな。どれ、おいらもシウマイでも食つて來ようかな。（起ちあがる）

おとく　あら、いけないよ、そんな車をそこへ置いていつちやあ。

長吉　おいら一人ぢやあ挽けねえもの。

おとく　だから、兄さんの歸るまで待つておいでよ。一體その車には何匹這入つてゐるの。

長吉　けふはまだ一匹も殺されねえ。兄きも自棄で飲みに行つたんだらう。

おとく　犬を一匹殺すと幾らになるの。

長吉　警察から貰ふのは一匹二十錢さ。

おとく　皮や肉も賣るんだらう。

長吉　むゝ。それでなけりやあ商賣にならねえ。皮も肉も骨もみんな賣るのさ。

おとく　（顏をしかめる）忌な商賣だわねえ。

長吉　（嘲けるやうに）それでも坊主の妾よりましだ。

おとく　（ぎよつとして）え、なんだつて……。

長吉　なんでもいゝ。近所でみんな知つてゐらあ。

おとく　（腹立たしげに詰めよる）なにを知つてるんだよ。

長吉　はゝ、大黒樣が般若になつた。怖い、怖い。食ひ殺されねえうちに、逃げよう、逃げよう。

（長吉は下のかたへ駈出してゆく。）

おとく　仕様のない子だねえ。

（おとくは腹立たしげに長吉のうしろ姿を見送り、やがて手桶の水をそこらへ撒きはじめる。下の方より寺のむすめ町子、十九か廿歳ぐらゐ。學校より戻りし體にて風呂敷包みをかゝへ、袴・靴、洋傘を持ちて出づ。）

おとく　お歸りなさいまし。

町子　（車を見かへる）あら、又こんなところへ車を置いて……。これは犬殺しの車だらう。（額をしかめる）なぜ見付けたら叱らないのよ。

おとく　兄さんはどこかへ行つてしまつて、弟ばかりがそこにゐたんです。

町子　弟でもなんでもいゝから、こんなところへ車を置いちやいけないと云つて、きびしく叱つてやればいゝのに……。

おとく　さう云つたんですけれど、いつの間にか何處へか行つてしまつたんです。

町子　（舌打するやうに）ほんたうに仕様がないわねえ。（云ひながら更に跛足の乞食に眼をつける）あら、そこにも乞食が……。なぜ家の前にはこんなものばかり寄り集まつて來るんだらう。

おとく　（すこし同情するやうに）あれは唖で跛足なんですから。

町子　唖でも跛足でも、家の門のまへに坐つてゐられちや困るわ。（命令的に）こんなところにゐちやあいけないと云つて、早く追ひ拂つておしまひなさいよ。お父さんに屹と叱られるわ。

（おとくはよんどころなく乞食のそばへ進みゆきて、手眞似にてあちらへゆけといふ。乞食は無言にて幾たびか頭を下げるので、おとくは又すこし躊躇する。）

町子　（じれて催促する）いゝから早く追ひ拂つておしまひなさいよ。

（おとくは再び乞食にむかひて、あちらへ行けと追ひ立てる。乞食は漸々ながら起ちあがり、町子の方を尻目に睨て、杖にすがりながら上のかたに立去る。）

町子　今度からあんなものが來たら、すぐに追ひ立てゝおしまひなさいよ。（再び犬殺しの車を見かへる）ほんたうにこゝの門前をなんと思つてゐるんだらう。（叱るやうに）おまへも氣をつけて呉れなくつちやいけないよ。

おとく　（素直に）はい。

（町子は門内に入りかゝる。）

おとく　あの。お孃さん。

（町子は無言で立停まる。）

おとく　（聲をすこし低めて）あの、さきほど遠山さんがお出でになりまして……。

町子　（あわてゝ立戻る）え、遠山さんが……。早くさう云へばいゝのに……。何時頃に來たの。
おとく　一時間ほど前でございました。お孃さんはまだお歸りにならないと申したら、これを渡してくれと云つて、書いていらつしやいました。（手帳を裂いたらしい紙きれに萬年筆で書いたらしいのを帶のあひだから探り出す）
町子　おまへ讀んだの
おとく　いゝえ、横文字で書いてあるんですもの、讀めるもんですか。
町子　（うなづきながらその紙片をうけ取つて讀む）わたしこれから鳥渡出て來ようかしら。（また躊躇する）お父さんは家にいらつしやるの。
おとく　はい。大崎さんと吉田さんがおいでになつてゐます。
町子　さう。（また考へながら再びその紙片をよみ返す）ねえ、おとく。遠山さんはこのごろ公園の待合へ行くといふのを知つてゐて……。
おまく　（曖昧に）そんなこと存じませんわ。
町子　（疑ふやうに）ほんたうに知らないの。ねえ、後生だから隱さないでさ。え、知らないの。遠山さんは淺草公園の光子とかいふ藝妓にお馴染があるといふぢやないか。（すり寄る）え、ほんたうに知らないの。
おとく　存じませんわ。
町子　それから公園の歌劇の女優を連れて、どこへか行つたこともあるつて……。そんなことも知らないの。
おとく　知りませんわ。
町子　（じれる）隱さないでさ。まつたく知らないの。
おとく　（迷惑さうに）まつたく知りませんわ。
町子　でも、遠山さんはわたしのゐない時にたび／＼たづねて來て、おまへと大變に仲よく話してゐるぢやないか。
おとく　あら、お孃さん。
町子　お前、遠山さんに口止めされてゐるんぢやないの。（睨む）それでなければおまへも遠山さんとどこへか一緒に行つたことがあるんぢやないの。
おとく　あら。
町子　遠山さんは浮氣者だから何とも云へないわ。男がよくつて、おまけに財産家の息子だから、誰でも引つかゝるんだわ。
おとく　でも、わたしがそんなことを……。
町子　どうだか知れないわ。
おとく　（困つた顏をして）お孃さん。
町子　いゝえ、屹とさうに相違ないわ。わたし、お父さんにいつけて遣るからいゝ。

おとく（すこし顔を赤くして）嘘です。嘘ですよ、お孃さん。わたしが何で遠山さんと……。そんなことがあるもんですか。

町子　知りませんよ。（意地わるさうに）よござんすか、お父さんにさう云ひますよ。

おとく　だつて、なんにも覺えのないことですもの。（少しく眸をうるませる）お孃さん、そりやあ無理ですわ。

町子　どうせ無理ですよ。わたしはこんな我儘者の憎まれものなんですから。（罵るやうに）けれども、ほんたうに遠山さんも遠山さんだわ。なぜわたしにこんなに氣を揉ませるんだらうねえ。

おとく　その手紙になんと書いてあるんです。

町子　なんにも書いてありやしないわ、ゆうべも人に待惚けを食はして、その云譯だわ。さうして、學校から歸つたら、すぐにいつものところへ來てくれつて……。もう止さう、よしませう。あんまり憎らしいから、今日はこつちで待惚けを食はして遣る方がいゝわ。ねえ、おとく。その方がいゝわねえ。

おとく（曖昧に）さうですね。

町子　ねえ、その方がいゝだらう。ほんたうにあんな憎らしい人つたらありやしない。

（門内より町子の父善隆、五十に近き僧、ふだん着のまゝにて出づ。）

善隆　はてな。こゝへ大崎さんや吉田さんは見えなかつたかな。

町子　いゝえ。（紙片(かみきれ)をふところに押込む）

善隆　來なかつたか。

おとく　どなたもお見えになりません。

善隆　では、墓地の方へでも行つたのかな。（すぐに引返して去る）

町子（見送る）お父さんは何をそは／＼してゐるんだらう。大崎さんと吉田さんが來て、また墓地のことで悶着してゐるんぢやないかしら。

おとく　そんなことかも知れません。墓地を縮めることは、檀家の人達のうちにも大分面倒をいふ人があるさうですから。

町子（不滿らしく）だつて、仕方がないわ。無駄な墓地を廣く持つてゐるよりも、出來るだけ狭くしてしまつて、その空地を相當の値段で賣る方がいゝわ。こゝらだつて一坪百圓以上の相場だといふから、百坪賣つても一萬圓からになるものを、たゞ明けて置くのはほんたうに無駄なことだわ。勿論、それには方々のお墓をなんとか始末しなければならないけれど、どこか隅の方へ一緒に改葬してしまへばいゝぢやないか。檀家の人達もそれをぐづ

ゝぐつゝ云ふなら、ふだんからそのやうに相當の附屆けをして、寺の經濟が立派に行き立つやうにして置いてくれるがいゝわ。この物價の高いのに、ふだんは碌々構つてくれないで、こつちが墓地を整理するといへば、なんとか彼とか理窟をつけて邪魔をしようとする。それぢや寺の人間はどうして生きて行かれるんだらう。檀家の人たちも隨分わからずやの手前勝手だわねえ。

おとく　檀家の人達さへ承知すれば、すぐにお賣りになるんでせうか。

町子　承知しなくつても、構はずに賣る方がいゝわ。お父さんはあんな風でゐながら、やつぱり檀家に氣兼ねをしてゐるから、ほんたうに焦れつたくてならないのよ。實際の話がこゝで墓地を整理して、いくらか纏まつたお金をこしらへて置いて貰はなければ、わたし達も安心出來ないわ。

おとく　（やはり曖昧に）さうでございますねえ。

町子　さうだとも、死んだものよりも生きてゐる者の方が大切ぢやないか。おまへはさう思はないの。

おとく　そりやさうですけれど……。

町子　さう思つたら、おまへからもお父さんにすゝめておくれよ。おまへの云ふことなら、お父さん屹と肯くわ。

おとく　あら。（又もや顏を赤くする）

（門内より大崎は六十前後、吉田は四十前後、いづれも商人らしき風俗にて出づ。あとより善隆も出づ。）

善隆　（追ひ縋るやうに）まあ、お待ちください。もう一度御相談をいたしたいと思ひますから。

大崎　（冷かに）併しあれだけの墓地を賣るといふことになると、ほかの檀家の者がなか〳〵素直に承知する筈がありませんからね。

善隆　それは御もつともです。それですから、今も色々と御相談をいたしたやうな譯ですが、どうしてもいけますまいか。

大崎　吉田さん、どうです。

吉田　さうですね。

（二人は顏を見あはせて返事に迷つてゐる。善隆は町子とおとくに眼で知らすれば、町子とおとくは遠慮して一先づ花屋の店に入る。）

善隆　（催促するやうに）いかゞでせうな。ほかの檀家の者が彼れ是れ云つたところで、つまりあなた方が御承知くだされば何とでも解決は付くと思ひます。御承知の通り、あの墓地をぎり〳〵一杯に整理すれば、二百五十坪以上、あるひは三百坪ぐらゐの地所は取れるだらうと思ひますから、坪七八十圓見當としても先づ二萬圓以上にはなるわけです。いや、近所港灣の工場などを建てさせ

るのではありません、やはり普通の宅地にする筈で……。

吉田　普通の宅地にするんですね。

善隆　さうです、さうです。なにしろ家屋拂底で住宅難の聲がしきりに聞えますので、華族や富豪連も競つてその庭園などを解放する時代でございますから、いかに寺とは申しながら東京市内に廣い墓地を所有してゐるといふことは、どうも宜しくないやうにも存じます。この際、不用の墓地を整理して宅地にいたすと云ふことも、一種の社會奉仕でございますから。

大崎　社會奉仕……。（やはり冷やかに）このごろは頻りにそんなことが流行しますね。併しこゝの墓地の一部を解放すると、そこへ何か料理屋のやうなものが出來るのだといふ噂ですが、まつたくそんなものが出來るのでせうか。

善隆　この地所を買ひたいと望んでゐるものは、こゝへ料理屋とかカフエーとか云ふやうなものを建てさせて、土地の繁榮を計らうといふ計畫ださうです。（云ひかけて少し躊躇する）實は、わたくしも寺の近所へそんなものを建てられるのは少々迷惑だとは存じましたが、それが土地の發展にもなることだと云はれてみますと、どうも斷るわけにも行かないので……。

吉田　（笑ひながら）それが例の社會奉仕ですね。

善隆　まあ、まあ、さういふわけで、たうとう承知するやうになつたのですが、何分にも檀家の方々の御諒解を得て置きませんと、後日に又いろ／＼の問題が起りますからな。ことに檀家總代の中でも最も有力のあなた方に、よく其事情を諒解して置いて頂きたいと存じてゐるのです。なに、あなた方さへ確かに御承諾くだされば、ほかの檀家の人達にはわたくしの方からそれ／＼に御相談をいたしましても宜しいのです。なにしろ買主の方でもひどく急いで居りまして、毎日のやうにまだか／＼と催促にまゐりますので、わたくしも板挾みになつて、まことに何うも困つてをります。

大崎　（再び吉田を見かへる）ねえ、吉田さん。どうでせう。この寺が郡部へでも移轉して、全部改葬といふのなら格別ですが、寺はこのまゝで、その墓地の一部だけを分割して賣るといふことになると、社會奉仕だけでは濟みさうもありませんね。あれだけの墓地には隨分澤山の墓があります。たとひ其中には無緣の佛があるとしても、あれだけのものを皆んなどこかの隅へ投り込んでしまつて、そのあとへ料理屋やカフエーを建てる。そのうちには新開地の許可を得て、藝者屋でも出來るかも知れない。（苦笑する）それではどうも檀家の人達も素直には承知しまいと思ふんです。第一、わたしにしてからが、すぐ

には賛成出來兼ねますからね。

吉田　さうですよ。それもお寺の方で何か今すぐ纏つた金でもいると云ふやうな問題でもあれば格別ですけれど……。差當つて別にそれ程の事もないやうですから……。

善隆　いや、御覽でもありませうが、本堂の屋根がもう大破に及んでをります。屋根ばかりではありません。床も緣側も襖も障子も……。それを殘らず修繕いたすには、よほどの費用がかゝるだらうと存じます。と云つて、當節柄のことですから、檀家の方々に御迷惑をかけるのも心苦しうございます。

二人　むゝ。（考へてゐる）

善隆　くどくも申す通り、今度の件につきましては、決してあなた方に御迷惑はかけません。唯あなた方が承認して下すつたといふことになれば、他の檀家へお話いたすにも非常に好都合ですから、どうか其邊の事情をお察し下すつて、まげて御承認を願はれますまいか。いかゞでせうな。

吉田　一體今度のことは、買主が直接の交渉ですか。それとも仲介者のやうな者があるんですか。

善隆　初めから買主が直接に申込んで來たのですから、周旋料のやうなものは一文もいらないのです。

吉田　賣つた金は全部こつちの手に這入るわけなんですね。

善隆　左樣、左樣、その通りです。

吉田　二萬圓以上……。（かんがへる）それで墓地の整理や本堂の修繕が出來れば好いわけですが……。併しどうも……。（また考へる）ねえ、大崎さん。わたし達ばかりでは何とも御挨拶は出來ませんね。

大崎　（冷かに）どうしても檀家の重立つた人達と、もう一度相談した上でなければ、はつきりした御返事は出來ませんよ。わたしは年寄りだから時代おくれと云はれるかも知れないが、有緣にしろ、無緣にしろ、ほとけは佛で大切にしなければなるまいと思ふ。死んだ者はどうでもいゝと云ふので、鋤や鍬でむやみに人間の骸骨を掘つくり返して、芥溜のやうなところへどし／＼投り込むのは、どうも人情でないやうに思はれてならない。いや、まあ、いつまで云つてゐても際限のないことですから、今日はこれで先づ歸るとして、いづれ又あらためて御挨拶に來ることにしようぢやありませんか。

吉田　さうですね。（善隆に）では、わたし達の方でも考へますから、あなたの方でももう一度よくお考へください。

善隆　（よんどころなく）はい。なにぶんお考へをねがひます。

大崎　では、ごめん下さい。
吉田　どうもお邪魔をいたしました。
（ふたりは挨拶して上の方へ行きかゝる。）
善隆　あ、吉田さん。
（吉田は戻つて來る。大崎は構はずに去る。）
吉田　なんです。
善隆　（小聲で）あの、あなたは今晩お宅においでゞせうか。
吉田　（少しかんがへて）はあ、宅に居ります。
善隆　（大崎のうしろ影を窺ひながら）ひよつとすると、七時か八時頃にお邪魔に出るかも知れません。
吉田　（おなじく小聲で）はあ、お待ち申してゐます。（云ひすてゝ去る）
（花屋の店より町子出づ。）
町子　お父さん。あの人達、隨分頑固ね。
善隆　（意味ありげの薄笑ひ）なに、さうでもない。大崎さんは兎もかくも、吉田さんの方は何も彼もちやんと判つてゐながら、まあ一應はあんなことを云つてみるのさ。あの人の家へ今夜たづねて行つて、膝ぐみでよく話せば、きつと呑み込んでくれるに相違ない。（袂から巻莨を出す）おい、おい。
おとく　はい。（店から出て來る）

善隆　これに火をつけて來てくれないか。
（おとくは巻莨をうけ取りて店に入る。）
町子　吉田さんは屹と承知するでせうか。
善隆　むゝ、承知する。わたしが屹と承知させてみせる。なに、周旋人に五分の禮金を拂ふと思へばいゝのだ。
町子　だつて、あの人に周旋して貰ふんぢやないでせう。
善隆　勿論周旋して貰ふんぢやないが、まあそれと同じやうに、五分ぐらゐの禮金をつかませることにすれば、吉田はすぐに承知するよ。いや、五分には及ばない、三分ぐらゐでも折合ふかも知れない。（笑ふ）はゝ、あの男の腹はちやんと讀めてゐるのだ。
町子　隨分ずるい人だわねえ。
（おとくは巻莨に火をつけて持つて出づ。善隆は無言にて受取る。町子は眼で笑ひながら二人をながめてゐる。）
善隆　（空を仰ぐ）いゝ天氣だな。空はすつかり秋らしくなつた。
おとく　ほんたうに靜かな日でございますね。
町子　（堪らないやうに）はゝゝゝゝゝ。
（町子はハンカチーフで口を押さへながら足早に門内に入る。おとくは極まりが悪るさうに見送つてゐる。）
善隆　（苦笑する）あいつも仕様のない奴だ。（おとくの

そばに寄る）　おまへにもからかふか。
おとく（小聲で）　えゝ。
善隆　まあ、かまはずに置け。お轉婆で、我儘で、始末におへない奴だ。年はおまへよりも上だが、まだ學校へ行つてゐるだけに、から子供だからな。あれでも色氣が出たら、些とはおとなしくなるだらう。
おとく（思はず笑ひ出さうとして、あわてゝ袂で口を押へる）　さうでございませうね。
善隆（見咎める）　なにが可笑しい、何を笑ふのだ。（おなじく笑ひながら）　町子はお轉婆だが、おまへのやうな浮氣者ぢやないぞ。
おとく　あら。
善隆　さうでないといふ證據があるかな。（おとくの肩をたゝく）
おとく　でも、あんまりですわ。
善隆　はゝゝゝゝ。（笑ひかけて氣がつく）　時に阿母さんはどうした。
おとく　本所の親類へまゐりました。
善隆　道理で、さつきから見えないと思つた。さて、おとく。
おとく　はい。
善隆　だん／＼冬が近くなつたからな。おまへには襟卷を買つてやる。しかし町子とお揃ひだと又面倒だからな。町子のより少し廉いのを買つてやるから、それでまあ我慢して置けよ。いゝか。
おとく（おとなしく）　ありがたうございます。
善隆　町子と違つて、おまへは素直だからな。はゝゝゝゝ。
（門内にて鴉の鳴く聲がする。）
おとく（見かへる）　あら。鴉がまた來ました。
善隆　柿が赤くなると油斷ができない。叱つ、叱つ。
おとく　叱つ、叱つ。
（鴉はつゞけて鳴く。）
善隆　いま／＼しい鴉めだ。そこらに竹竿があるだらう。
（善隆は尻を引つからげて、店先に立てかけたる竹竿を把り、柿の木の鴉を逐ひながら門内に入る。やがて鴉の聲やむ。善隆は竿を持ちて再び出づ。）
善隆　毎年のことだが、秋になるとうるさいな。
おとく　鴉が毎日狙ひに來るので困ります。
善隆　柿一つでも鴉なぞに取られて堪るものか。いや、鴉ばかりぢやない。子供にも盜まれないやうにしろ。こゝらの子供は育ちが悪いからな。（竹竿をおとくに渡す）
（おとくは竹竿を片附ける。善隆は裾をおろす。）
善隆　おとく。

おとく　はい。（門前に出る）

善隆　さつきからさう思つてゐたのだが、あの車はなんだ。あれは犬殺しの箱車ぢやないか。あんなものをなぜ門の前に置かせるのだ。

おとく　車を置いたまゝで、兄弟ともどこへか行つてしまつたんでございます。

善隆　（舌打する）どうも世話の焼けた奴等だな。こゝの門前は車の置場ではない。まして犬殺しの車なぞは以てのほかだ。慈悲を旨とする寺の門前に、犬殺しの車を置いていくなぞとは、どうも困つた奴等だ。こんなところへ置いて行かれては迷惑する。おい、おまへも手を假してくれ。

おとく　はい、はい。

善隆　その車を隣の塀の前へ押して行くのだ。

おとく　はい、はい。

（善隆は又もや尻をからげ、おとくに手傳はせて、犬殺しの箱車を下のかたへ押して行かうとする。門内にて犬の吠ゆる聲、けたゝましくきこゆ。二人はおどろいて見かへれば、犬の聲つゞけて聞ゆ。）

おとく　犬が大變に吠えてゐますね。

善隆　なんだらう。まあ、待て。

（善隆は引返して門内に入らんとする時、納所の隆格、廿一二歳、はげしい權幕で犬殺し長吉の腕を引つ掴んで出づ。）

隆格　貴樣は實に怪しからん奴だ。

善隆　そいつが何うしたのだ。

隆格　こいつが墓地の生垣を押破つて這入つて來たのです。

善隆　（長吉を睨む）なにか盗みにでも這入つたのか。

長吉　（睨み返すやうに相手の顔を仰ぎみる）おいらあ泥坊ぢやあねえや。

おとく　ぢやあ、長ちやん。どうしたの。

長吉　おいらがシウマイを喰つて歸つてくると、丁度そこの横町の角でのら犬に逢つたから、ぶち殺してやらうと思つて追つかけると、垣根の下をくゞつてこゝの墓場へ逃げ込んだから、おいらもあとから追つかけて行つたんだ。泥坊ぢやあねえ。

隆格　たとひ泥坊でなくつても、境の生垣を押破つて、寺内の墓地へ無斷で入込むといふことがあるか。いたづら小僧め。

長吉　犬が逃げ込んだから追つかけて來たんだ。いたづらぢやあねえ。

善隆　いたづらでなくても矢はり惡い。そこにある車はお前のだらう。早く挽いて歸れ。

長吉　（隆裕に）ぢやあ、坊さん。あの犬をこつちへ追ひ出しておくれよ。

隆裕　馬鹿をいへ。

長吉　（憤然として）なにが馬鹿だ。こつちは商賣ぢやあねえか。

善隆　商賣でもいけない。歸れ、歸れ。

おとく　長ちやん。もうお歸りよ。

長吉　だつて、今日はまだ一匹も殺さねえんだもの。（隆裕に）おい、後生だから追ひ出しておくれよ。

隆裕　後生を知つてゐるなら、そんなことをするな。

長吉　（じれて舌打する）判らねえ人達だなあ。

（下の方より長吉の兄長太、廿四五歲、やはり棒を持ちて出づ。）

長吉　（見かへる）おい、兄い。いゝところへ來てくれた。

長太　なんだ、なんだ。

長吉　首環のねえ犬を見付けたから、追つかけて行つてぶち殺さうと思つたら、こゝの人達が邪魔をして仕樣がねえんだ。

長太　その犬はどこにゐる。

長吉　（門內を指さす）この寺のなかに隱れてゐるんだ。

（犬の吠ゆる聲きこゆ。）

長吉　ほら、鳴き聲がきこえるだらう。

長太　たしかに首環はねえのか。

長吉　（うなづく）むゝ。

長太　（すゝみ出づ）もし、旦那方。まことに相濟みませんが、ちよいと御門のなかへ這入らせて頂くわけには參りますまいか。

善隆　折角だが、それは斷る。今もその子に云つたのだが、一旦こゝへ逃げ込んだ犬をおまへ方の手に渡すわけには行かないのだ。

長太　（不滿らしく）いけませんか。

善隆　いけない。普通の在家とは違つて、こゝは寺だ。その門內へ逃げ込んだ以上、どうもおまへ方に殺させることは出來ない。

（犬の聲又きこゆ。）

長吉　（のび上りて門內をのぞく）あ、まだ吠えてゐやあがる。

長太　お願ひですから何うかしてくれませんか。御門のなかへ這入つて惡ければ、表へ追ひ出してくれませんか。

善隆　あの犬はなんと鳴いてゐるのか。おまへ達に判るか。

長太　（あざ笑ふ）冗談云つちやあいけねえ。いくら犬殺しだつて、犬の鳴く聲がわかるものか。おまへさんに判りますかい。

善隆　判る。ちやんと判つてゐる。あの犬は救ひを求めて

ゐるのだ。たとひ首環のない犬にしろ、のら犬にしろ、生(しやう)あるものを無慈悲に殺すのを、われ〳〵が默つて見てゐられるものではない。あの犬はわれ〳〵の法衣の袖の下に隱れてゐる。それを救つてやるのは出家の務だ。

長太　(反抗的に) そつちが務なら、こつちも務だ。わつし等だつて、洒落や慰みに生物を殺してあるくんぢやあねえ。警視廳から立派に野犬撲殺業の鑑札を貰つて、今日の商賣にしてゐるんだ。道樂半分に鐵砲をかついで、雉や鳥をぽん〳〵擊つてあるくのとは譯が違はあ。第一のら犬をぶち殺して惡いものなら、警視廳で鑑札をくれて置く筈がねえぢやありませんか。寺でも唯の家でも、理窟に變りはねえ。のら犬を隱まつて置くのは、お尋ねものを隱まつて置くやうなものだ。意地の惡いことを云はねえで、早く犬を出しておくんなさい。

善隆　いや、意地の惡いといふわけではない。なるほど警視廳の鑑札を持つてゐる立派な職業でもあらうが、それはおまへの方でいふ理窟で、慈悲を旨とする我々として見れば、自分の寺内へ逃げ込んだ犬をどうも見殺しにすることは出來ない。わたしの方でも賴むのだ。早く歸つて貰ひたい。

長太　歸れませんね。

隆裕　歸れない……。まだおまへには判らないのか。我々は出家であるから、慈悲を旨としなければならない。そこで……。

長太　えゝ、そんな御說教はどうでもいゝ。何度云つても同じことで、わつし等は洒落や慰みに犬殺しをしてゐるんぢやねえ。一匹殺せば廿錢になる。それで親子兄妹が今日の命をつないでゐるんだ。わつしの家にはレウマチスで體が半分利かねえお袋がゐる。まだ小學校へ通つてゐる妹もゐる。(長吉を指さす) 這奴とわつしと、三度の米を食ふ人間が四人も鼻をそろへてゐるんだ。慈悲も殺生もあるもんか。犬を殺さなければ生きてゐられねえんだから仕方がねえ。犬が大事か、人間が大事か。よく考へて見てくれるがいゝ。お前さん達がほんたうに慈悲といふことを知つてゐるなら、あの犬をこゝへ追ひ出して來て、わつし等に殺させてくれるのが當りめえだ。犬を見殺しにするのが可哀さうか、人間を見殺しにするのが可哀さうか、おまへさん達にもそのくらゐの理窟は判りさうなもんぢやあねえか。嘘だと思ふならこの箱をあけて見せてやる。けふは朝から間が惡くつて、まだ一匹もぶち殺さねえんだ。明日(あした)の米も買へねえ。こつちでも賴むから、つまらねえ文句を云はねえで、早くあの犬を追ひ出しておくんなさい。ぐづ〳〵してゐると日が暮れらあ。

長吉　ほんたうだ。下らねえ御說敎みたやうなことを云つてゐねえで、早くあの犬を出しておくれよう。

（長吉は再び門內へ押込まうとするを、隆格は遮る。奧より町子は以前の着物を着かへ、華やかに粧ひて出づ。）

町子　あら、どうしたの。

長吉　（町子に）おい、姐さん。あの犬をこつちへ追ひ出しておくれよ。

町子　（甚しい侮辱を感じたやうに）わたし知らないわ。お父さん、なんだつてこんな者を御門の中へ入れようとするの。

善隆　いや、そいつが無理に押込まうとするのだ。（長吉に）さあ、早く行け、行け。

隆格　行けといふのに……。

（隆格は長吉の腕を捻ぢあげるやうにして表へ突き出す）

長太　やい、やい。おれの弟をどうするんだ。生臭坊主の木魚野郞あ、いくら高慢な面をしやあがつても、手前が十二階下へ毎晩ひやかしに行くことはちやんと知つてゐるんだぞ。

長吉　さうだ、さうだ　池のそばのおでん屋でコップ酒を飮んでゐやあがつたのは、あの蛸坊主だ。ざまあ見やがれ。

隆格　（赤面して）こいつ飛んでもないことをいふ奴だ。貴樣のやうな奴は家宅侵入で巡査に引渡すからさう思へ。

長吉　誰が引渡されるものか。（持つてゐる棒をとり直して身構へする）

おとく　長ちやん。およしよ。

長太　構ふもんか。あの犬をなぐり付けるつもりで、その梟入の向う脛をかつ拂つてしまへ。

隆格　なんだ。（腕まくりして行かうとする）

善隆　まあ、よせ、よせ。あんなものを相手にしても仕方がない。

町子　でも、あんな奴は懲しめのために、巡査に引渡してやる方がいゝわ。

長吉　なにを云やあがるんだ。ハイカラの、色氣ちがひのどた福め。

おとく　（心配して）長ちやん、もうおよしといふのに……。

長太　止すも止さねえもねえ。犬さへ渡してくれりやあ文句はねえんだ。おい、早く犬を出してくれ。

善隆　えゝ、うるさい、うるさい。貴樣達がいくら何と云つても、一旦この寺へ隱れた犬を渡すことは出來ないのだ。

町子　こんな人間には動物愛護といふことが判らないんだから仕方がないわねえ。

隆格　どうで犬殺しなんぞしてゐる奴等ですもの、そんなことが判るものですか。

長太　なんとでも勝手に云へ。手前達(てめえたち)にほんたうの人間が判つてたまるものか。やい、長吉。こんな亡者どもを相手にしてゐると日が暮れらあ。もう好加減にして行かうぢやねえか。

長吉　ばか〳〵しいや。行かう、行かう。

（長太と長吉は箱車のそばへ行く。）

隆格　早く行け、行け。二度とこゝの門前へそんな車を挽いて來るなよ。

長吉　大きにお世話だ。やい、づく〳〵にふ。今度十二階下で出つくはした時にやあ、だしぬけにこれで撲り付けるから、頭を鉢巻をして待つてゐろ。わあい、赤い顔をしてゐやあがらあ。坊主、入道、蛸坊主。

（長吉はそこらにある小石を拾ひて隆格に投げつけ、笑つて囃しながら下のかたへ逃げてゆく。）

隆格　這奴、怪しからん。

（隆格は當座の立腹に幾分のてれ隠しもまじつて、敦圉(いきまき)あらく下の方へ追つて行く。）

長太　やい、この坊主、弟に指でも差すと料簡しねえぞ。

（長太も車をすてゝ隆格のあとを追つてゆく。）

町子　ほんたうに呆れた奴だわねえ。

善隆　まつたく仕様のない奴等だ。（氣が付いて尻からげの裾をおろす）いや、それでもまあ善いことをしたよ。わたし達のおかげで一匹の犬の命が助かつたのだからな。

町子　助けられた犬も幸福だし、助けたわたし達も幸福ですわ。

おとく　（心から感じたやうに）まつたく善いことをなさいましたわねえ。

善隆　あいつ等がなんと云はうとも、慈悲善根をすると好い心持だ。（俄に氣のついたやうに）時に町子、おまへはそんななりをして、これからどこへ出かけるのだ。

町子　上野の金澤さんのところへ行つて來るんです。

善隆　むゝ。學校のお友達のところへ行くのか。

町子　ピアノのお淩ひがある筈ですから、今夜は遲くなるかも知れませんわ。

善隆　遲くなるやうなら隆格を迎ひに遣らうか。

町子　（あわてゝ）いゝえ、それには及びませんわ。お父さんも今夜お出かけになるんぢやありませんか。

善隆　むゝ。吉田さんのところへ行かなければならない。いや、その前に少し調べて置くことがあつたのを、今の

犬騒ぎですつかり忘れてしまつた。

（善隆は足早に門内に入る。）

町子　仕様がないわねえ。あの車をやつぱりそこへ置いて行つて……。

おとく　隆格さんはどこへ行つたんでせう。

町子　（心付いたやうに）あのね。お父さんが隆格を迎ひによこすと云つても、わたしがそれには及ばないと云つたと云つて、屹と遣さないやうにしてお呉れよ。いゝかい、頼みますよ。

おとく　はい。

町子　今も聴いてゐた通り、今夜はお友達の金澤さんのところへ遊びに行くつもりになつてゐるんだからね。

おとく　（微笑む）やつぱりいつもの所へいらつしやるんですか。

町子　（おなじく微笑む）あんまり憎らしいから待惚けを食はしてやらうと思つたんだけれど、それも可哀さうだからねえ。いゝかい。お父さんには黙つてゐておくれよ。

（下の方より隆格は汗をふきながら出づ）

町子　あの二人はどうして……。

隆格　巡査に引渡してやらうと思つたのですが、しきりにあやまるから堪忍してやりましたよ。

（隆格の少しあとより長吉出で、この對話を聽いてゐる。）

町子　（不満らしく）あやまつたばかりで堪忍して遣つたの。

隆格　でも、あんな奴等を相手にしても仕様がありません。犬さへ助けてやれば、それでいゝのですから。

（云ひかけてうしろを見かへり、長吉と顔を見あはせて隆格は屹と彼を睨みしが、そのまゝ足早に門内に入る）

長吉　（笑ひながら進み出づ）嘘だぞ、嘘だぞ。誰があんな梟入にあやまるもんか。あの坊主。あべこべに兄きに嚇かされて、這々の體で逃げて來やがつたんだ。

（下の方より長太出づ。）

長太　はゝ、意氣地のねえ坊主だ。眞劍におれと命の取り遣りをするかと云つたら、あいつ青くなつて、ふるへ上がつて逃げて行きやあがつた。はゝゝゝゝ。さあ、長吉。行かう。

長吉　こんな間のわるい日はねえな。

長太　まつたくだ。これも厄日で仕方がねえや。

長吉　歸りに又、日なしのお婆さんのところへ寄つて行くのかい。

長太　さうでもしなけりやあ凌げねえ。

（ふたりは箱車のそばへゆく。門内にて又もや犬の聲

高くきこゆ。）

長吉　まだ吠えてゐやあがる。

長太　いま／＼しい畜生だ。人をじらすやうに無暗に吠えやあがる。

（二人は門内を見かへりながら車を挽き出さうとする。犬の聲つゞけてきこゆ。）

町子　大變吠えるわねえ。

おとく　（不安らしく）どうしたんでせうねえ。

（門内より隆格は高帚を持ちて走り出づ。）

隆格　氣をおつけなさい。あの犬が今お住持を咬んだのです。

町子　あら、お父さんが犬に咬まれたの。

おとく　まあ。

（おとくはあわてゝ門内に走り入る。町子もつゞいて行かうとして、又立ちどまる。）

町子　でも、怖いわねえ。狂犬ぢやないかしら。

隆格　さうかも知れません。だしぬけにお住持の足に咬み付いて、それから本堂の縁の下へ逃げ込んだらしいのです。（長太等を見て）まだそこにゐたか。丁度いゝ。早く來てあの犬を撲殺してくれないか。

町子　そんな犬、早く殺してしまつた方がいゝわ。

（門内より善隆はおとくに扶けられて出づ。善隆は左の足を犬に咬れて、びつこを曳いてゐる。）

善隆　いや、ひどい目に逢つた。早く犬殺しを呼んで來い。おゝ、まだそこにゐたか。おい、おい、構はずに内へ這入つてあの犬を撲殺してくれ。

長太　（笑ひながら）殺すのは可哀さうだ。さあ、行かう。

長吉　行かう、行かう。

善隆　（あわてゝ）おい、おい、おい、待つてくれ。あの犬をどうかしてくれないか。

隆格　まあ、待つてくれ。

町子　待つて頂戴よ。

おとく。長ちやん。

（四人は口々に呼ぶ。長太と長吉は見かへりもせずに車をひき出してゆく。）

――幕――

解說

小傳

額田六福

（一）

綺堂氏は本名敬二、明治五年十月十五日に芝の高輪の泉岳寺畔の寓居に生れた。筆名は初めは狂言綺語の頭字を取つて、狂綺堂と稱したのであるが、狂綺の文字がやゝもすれば他の文字と間違へられ、中には麗々と『狂氣堂樣』なぞと手紙に書いて來る者なぞがあるので、江戸ッ子氣質の氏は『面倒臭い』と許りで、頭の狂の字を取つて仕舞つたのである。

父君純(じゆん)氏（前名敬之助）は元奥羽二本松の藩士武田氏の三男であつたが、緣あつて岡本家へ養子に貰はれた。當時岡本家は譜代廿石取りの德川家の御家人であつたが、御維新の騷動の時、江戸を脫走して、亡びゆく德川家のために最後の忠勤をぬきん出たのであるが、白河口の戰に太股を射貫かれたので、詮方盡きて敵中を潜行して橫濱へ逃れて來て、そこの居留地にゐた、豫て懇意の英人ブラウン氏の許に匿まはれてゐたが、やがて同氏の紹介でその頃高輪にあつた英國公使館へ書記として勤める事になつた。と云ふよりは寧ろそこで治外法權の楯の中に潜んでゐたのであるが、明治二年の恩赦で賊名をゆるされたので、初めて泉岳寺畔の、元の與力の高井氏の本邸を借りて公然と住居を構へる事が出來た。越えて三年、綺堂氏が生れたのである。邸の主の高井と云ふのは、例の鎌倉顯晦錄や、三國妖婦傳なぞの著者の高井蘭山氏の孫で、その邸宅は取りも直さずそれ等の著作を執筆した跡であつた。偶然とは云へ、そこに我が綺堂氏が生れた事も因緣と云へば云はれる。

現在もさうであるが、幼時の氏は大體に蒲柳の質で、家人の留守中に庭から出て來た鼬に食はれかけたと云ふ樣な奇談があつたが大した病氣もせずに健やかに育つた。

七歲の春までは何事もなかつた。が、その年（明治十二年）の三月に、氏の一生を支配する運命の鍵が一代の名優九代目團十郎によつて與へられた。

江戸の通人であつた純氏は、當然歌舞伎のパトロンで、團十郎とは彼が御維前權十郎時代からの古い知己であつた。この三月には新富座の中幕に江戸で五回目と云ふ勸進帳が出たので、純氏は勿論それを見物に行つたが、その幕間に、同行の綺堂氏を伴つて、團十郎の室へ遊びに行つた。

その時團十郎は辨慶の顏の隈を落しながら愛想よく笑ひ

かけて、
『ねえ坊ちやん、貴郎は大きくなつたら何になります。』
と、聞いた。誰でもがよく人の子供に聞く愛嬌であつた。
七ッの綺堂氏は少しはにかんで默つてゐると、純氏が引取つて、
『さあ、何と云つてもまだこのなりぢやあね。』
と、團十郎は眞顏で、
『坊ちやん、貴郎は歌舞伎の作者になりませんか。』
と、云つた。それがお座なりの愛嬌でない事は傍の人にもよく判つたが、作者とは何をするものやら判然と判つてゐない少年は、どう返事をしていゝのか判らないので、たゞ兩手をキチンと膝の上において對手の顏を見詰めてゐると、團十郎も氣づいて、今度は純氏の方へ話しかけた。
『何にしてもこれからの芝居は作者のいゝのが出なくちや駄目です。ですから私は皆さんにさう云つて勸めてゐるんです。』
と云つて一寸言葉を切つて『なあに仲々いゝのは出やしますまいが、片端から擲り込んでおけば、その中にどれかゞ物になるでせうよ。』と、云つて少年の顏をみて笑つた。が、ふと氣がつくと少年の顏は極度の憤懣に蒼白になつてゐた。七ッの少年には團十郎の言葉の意味の半分はよく判らなかつたが、片端から擲り込むと云つた言葉が、ひどくその細い神經を刺激したのであつた。
『人をごみ屑の樣に思つてゐる……。』
勿論七ッの少年にはそれ丈けの言葉は綴れなかつたので、默つて下唇を嚙みしめてゐると、男衆達は急に不機嫌なつた氏を見て驚いた。
『さあ、坊ちやん――。』
と、傍にあつた小奉書樣の紙へカステラの厚く切つたのを山の樣に盛り上げてくれたが、無闇に腹の立つてゐる少年は默つてふり切つて廊下へ飛び出して仕舞つた。
『でもとう／＼押しつけられて貰つて戾るには戾つたが、それから廿頃までは理窟なしに團十郎に反感をもつたものだ。』
綺堂氏は後年になつて笑つて話した。團十郎は氏の天分を見拔いて作者になれと云つた譯ではなかつた。自分で云ふ樣にたゞ片端から擲り込んでおけばいゝと思つてゐた丈けである。しかしそれが父君純氏の胸に深い影を彫んだ。そして、やがて愛兒を作家たらしめる決心に導かせた。春秋の筆で云はしむれば『岡本綺堂を生んだ者は九世團十郎であつた』のである。彼が殘した偉大な功績は二重であつた。

（二）

『敬二にも困つたものだ。』
それから四五年の月日が流れた。少年は蒲柳ながら健かに育つて行つたが、その身の丈けが整うて來て、次第に一人前の男に近づいて行くのを見る毎に、父君純氏の胸には喜悅よりはかうした惱の方が餘分に廣がつて來た。
『敬二をどんな職業につかせよう。』
と、その事である。
前に云つた樣に純氏は德川の直參で脫走隊の一人である。よし罪は赦されたにせよ、要するに反賊の子である。その當時、綺堂氏が十三四の明治十六七年頃には、所謂藩閥政府の最盛期で、薩長土肥の士の天下であつた。平家にあらずんば人にあらずの類で、他國の出身者は官途についても出世の見込はなかつた。況や反賊の子である。その方面での出世の望は絕無であつた。と云つて流石に商人にも職人にも出來憎かつた。
『何にしよう？』
日夜懊惱した結果思ひ浮べられた事は、『畫家になるか、醫者になるか』の二途であつた。それなれば實力次第で藩閥の圈外に立つて一家をなす事が出來さうに思はれた。が綺堂氏は
『畫家は嫌です。』
一も二もなく反對した。氏は畫が好きでないと云ふよりは寧ろ畫が判らなかつた。早くから讀書を好んで、間がな隙がな讀み耽つてゐたが、繪本の類丈けは見向きもしなかつた。たま〳〵家の人が讀んでゐる繪本を借覽しても、たゞ文字の上ばかりに目を走らせてゐた。
『では醫者にしよう。』
純氏はさう決心して、友人である宮內省の侍醫の竹內正信氏に謀つた。竹內氏は水野越前守の儒者の司馬藤太郎氏等と同門で、長崎で修業した名醫であつたが、純氏にその相談をかけられると言下に、
『止せ。』
と止めて仕舞つた。
『理由は。』
純氏は重ねて聞いたが、それには明確な回答を與へなかつた。たゞ、
『自分の長男も醫者にしないつもりだ。』
と、それ丈け云つた。
『あゝ……。』
取りついた礎は一つ一つ海の中へ沈んで仕舞つた。純氏はたゞ慘として愛子の行末を思うてゐると、いつかの團十郎の言葉が火の樣に判然と胸に蘇つて來た。
『さうだ、作者にしよう。』
父は團十郎を友人に持つ程芝居が好きだつた。母なる人

も姉なる人も一家こぞつて藝事が好きであつた。さうした中に育てられた綺堂氏も早くから書を讀む事が好きであつたので、この父の新しい希望に異存はなかつた。

『作者にならう。』

難關はそれで突破された。殆ど凡ての文學志望者が味はねばならぬ、親、親類の異見、反對は氏の場合に限り經驗されないで濟んだのである。脫走以來、絕えず純氏の胸を覆うてゐた闇雲は初めて一掃されて、輝しい日が限なく一家を照らし初めた。

しかし、所謂その頃の座付作者として劇場內に入ることは好まなかつた。活歷に心醉して、密かに默阿彌翁なぞを輕侮してゐた團十郎もさうなる事を慫めなかつた。たゞ、芝居の內部の人と全く沒交涉でも困るので、素人劇評家の水魚連の幹事の西村氏の紹介で竹柴其水氏に紹介されて、その八丁堀の家へ行つた。と其水氏も亦、

『私も芝居裏へ入るのはどうかと思ひます。今まではさうでしたが、これから先は必ずしもさうしなくつていゝ樣になるだらうと思ひます。』

と云つた。果然彼は卅年後の今日を見通してゐた。彼も亦先覺者の一人と云へよう。

『劇場の內部へは入らぬ。』

純氏及び綺堂氏の方針はかうして極つたのであつた。

（三）

『敬二、とう〳〵やられるかも知れぬぞ。お前も覺悟をしておいてくれ。』

平生の快活さに引かへて、ある日の純氏は沈鬱な表情でかう云つた。

前の話があつてから二年ばかりで少年綺堂氏は東京府立第一中學に入學した。學校はその頃築地にあつた。それから四年程は何事もなく勉強と觀劇との平和な時がつゞいたが、氏が十七の年になつて一家の上に思ひもよらぬ災難がふりかゝつて來た。二人の友人の保證債務のために一家が破產に瀕したのであつた。

父君純氏の友人で北海道で海獸捕獲の會社を經營してゐる人があつた。今一人は秋田縣で漁業會社を起してゐた。純氏は江戶人で元來さうした投機的な事業は好まなかつたのであるが、引くに引かれない義理で、その資金調達の證券に連判した處、生憎とその二つ共が見事に失敗して仕舞つたのである。當然の結果として債鬼は元の債務者をすてて純氏の身邊に迫つて來たのである。悉く辨償すれば一家は破產する外はない。それから先はどうなつて行くか判らぬがさしあたつて學校も中絕するより外はないので、純氏は思ひ切つてかうした警告を發したのであつた。

『さうですか。』
少年綺堂氏は父の心中を推し量つて多くも問ひもせず、聞きもしなかつたが、內心は可なり淋しかつた。當時は學生の少い時で、府立の一中を卒業すれば、すぐ無條件で高等學校へ進む事が出來たのであるが、さうなれば泣いて思ひを斷つより外はない。
『なあに、大學を出ないでも力量次第でどうにもなるだらう。』
やがて氏はさうあきらめた。その心の奧には激しい負けじ魂が火の樣に燃えてゐた。
暗雲に閉された二年は過ぎた。少年綺堂氏は十九の春に中學を卒へる事になつた。その年の正月（明治廿三年）に氏は父の友人でその頃やはり同じ麴町元園町に住んでゐた東京日々新聞の社長關直彥氏の宅へ事情を云つて就職の依賴に行つた。直彥氏は判りのいゝ人であつたから、
『芝居なんかやるつもりなら學校へ行くよりは反つてこの方が便宜かも知れない。たんとは出せないが、まあやつて來て見給へ。』
と、快く引受けてくれた。月給は七圓。その年の春から青年綺堂氏は每日新聞社の門を潜る事になつた。
六月が來た。社長の關氏は氏を呼んで、
『よく働いてくれた。これは少いけれど。』
と云つて三圓增給の辭令を渡した。その年の暮には更に一躍して十五圓に增額された。單に十五圓と云ふと餘りに安すぎる樣であるが、（小學校の先生あたりは三圓五十錢位であつた）物價極めて安い當時では、優に今の百五十圓にも二百圓にも當るであらう。年齒わづかに十九の白面の一青年にして斯樣な異常な待遇を得たのは、氏がどれ丈け勤勉であり、どれ丈け有能であつたかを窺ひ知るに足るものである。
『敬二、いゝ鹽梅にあの話は片づいたよ。』
氏が廿になつたある日、父君純氏は久しぶりに晴やかな顏をして語つた。一度は一家を破產の悲運に追落さうとした二つの債務がやつと無事に片づいたのである。連印してゐるとは云ひ條、一文も自分のために使つたのでない事を知つてゐる債權者は、事情に同情して千圓に足りない金の辨償を求めた丈けで皆濟（かいさい）してくれたのである。
『高等學校へ行くか。』
青年綺堂氏は今度は幸運の岐路に立たされた。同窓とは一年後れた丈けである。兵隊に行つてゐたと思へばあきらめられるのであるが、關氏の知遇は氏をして學窓を見すてて新聞社に止まらせて仕舞つた。大正二年、やまと新聞を最後として、廿四年間の長い記者生活がこの時から初められたのである。

（四）

世に發表した處女作は史劇『紫宸殿』一幕で、これは例の源三位頼政の鵺退治を題材した作で、明治廿九年五月に書下して同年の九月の歌舞伎新報に發表された。年は二拾五歳であつた。それから六年たつて、明治卅五年の春の歌舞伎座で、岡鬼太郎氏と合作した『金鯱噂高浪』と云ふ作が初めて上演された。これが氏の脚本として第一に脚光を浴びた作である。名古屋の城の金の鯱の鱗を盗み取らうとした柿木金助の話を四幕にして、序幕と三幕目を岡氏、第二幕と第四幕とを綺堂氏が受持つた。歌舞伎座の事務の井上竹二郎氏の斡旋で、初めは、當時有名な墨客、條野採菊翁と三人一所に合作する事になつてゐたが、途中で採菊翁が病氣したので結局二人で書く事になつた。役者は若手の賣出しの家橘（今の羽左衛門）の金助で、外に八百藏（中車）芝翫（歌右衛門）松助、高麗藏（幸四郎）女寅（門之助）市藏（先々代）等であつた。

勿論正月の藪入連を目安にと云ふ依頼であつたので、内容結構等は在來の芝居を多く離れてはゐなかつた。たゞ、この脚本は氏の初陣であると共に、劇場人の所謂素人の作品が舞臺に上つたと云ふ事について（その以前に松居松葉氏の作があつたが）特に記憶さる可き作である。

當時、頑冥なる劇場付作者共は、依然として自己の城壘を株守して、局外者の脚本の上演を頭として拒絶してゐた。その事が發表されるや、彼等は、この二人の闖入者に對して極度の反感を抱いた。勿論表面どうする事も出來ないので裏面から色々皮肉つたり、突然に常磐津の唄を長唄に變更を依頼したり様々な侮辱を敢てした。お前達にそんな器用な事は出來まいと云はぬばかりである。

『いつそ撤回する。』

岡氏は憤慨の極度にさう云つた。綺堂氏の胸も同様であつたが、氏は折角の機會を見棄てるに忍びなかつた。彼等の態度は別として、撤回すれば劇場で困るのは判りきつてゐるし、第一、こゝで喧嘩をすれば『それだから素人は困る』と云ふ口實を彼等に與へて、後日局外者の脚本上演の妨害になる。いはゞ敵に糧を運ぶに等しい結果になる。

『韓信は三度股をくゞつた。目にあまる敵を倒ふすには、敵の力を利用せねばならぬ。』

氏の眼には泪が光つた。氏は自ら云ふ様に癇癖家である。僅か七歳にして天下の團十郎をして読事に困憊せしめた程である。あゝ、この泪、その決心！　後に來る者は遥かに退いて十拜す可き涙であらう。

『ぢや書き直さう。』

岡氏にもその心持は判つた。二人はその場で、疊の上に

賄ひになつて、三十分が程の中に立派に書きかへた。更に、番附の上に書くカタリをも頼まれたが、それも澱みなく書いて渡した。敵は正に刀折れ矢盡きて仕舞つた。凱歌は若き二人の上に上つた。

しかし、氏は淋しかつた。ホツとして劇場を辭して、岡氏と銀座で別れると、電車のない頃なので、徒歩で麴町の自宅へ戻つた。もう暮れ果てた淋しい濠端を歩いてゆくと今まで押へてゐた憤が一度に胸先にこみ上げて來た。『こんな不愉快な思ひを忍んでも劇作をしなければならないのだらうか。』

氏の兩眼にはいつか新しい泪が一杯湊んでゐた。師走の風は寒く吹いて暗い水の上には雁の鳴く聲が淋しく聞えてゐた。氏は一生この夜の事が忘れられまいと思つた。家へ歸ると書きかけてゐた『弟切草』の草稿を引き出して本箱の底深く投込んで仕舞つた、當分もう芝居は書くまいと思つた。

芝居は一月の九日から豫定の通りに開場した。暫くして五十圓の謝禮が兩氏の許にとゞけられた。そしていつの間にか弟切草の原稿が机の上に戻つてゐたのである。

（五）

かうして、氏と劇場との表面の關係はついた。しかし、實際的に作家として活躍し初めたのは、明治四十一年七月で市川左團次のために白虎隊三幕を書いたのにはじまる。左團次はその頃第一次の洋行戻りで、大衆にある期待をかけられながら、それに添ひ得ないで、悶々としてゐた時であつたが、この白虎隊の鐘撞爺の作兵衞は異常な好評であつた。後年夜叉王によつて完成された彼の老役の萌芽が現はれてゐた。

この成功によつて、我が綺堂氏は左團次との長い、そして尊い提携は初まつたのである。作そのものも、今までの作品とは全く違つた清新なもので、今に至るまで度々上演を繰返されてゐる。この意味において記錄さる可き作である。

越えて四十二年の三月に、前年九月社の休日を得て伊豆の修善寺温泉へ遊んで、そこの修禪寺の寶物になつてゐる、賴家の面と稱する古い面から非大な感興を引き起された氏は傑作『修禪寺物語』一幕を書いた。文藝俱樂部に掲載されて四十四年の五月に明治座で、左團次の夜叉王、羽左衞門の賴家、壽美藏の桂、松蔦のかへでの役割で上演されて未曾有の感激を劇壇に卷き起した。見物も、批評家も、興行師も、凡ての階級を通じて、あらゆる人々がこの偉大なる作の前に額づいた。左團次の藝を稱した。そして、新興日本の劇壇のために、人々の心の中に用意されてあつた二つ

の王冠はこの二人の前に徹々しくも捧げられたのである。

それからの氏は、順風に乘じて舟をやる如くに、その無限の氣力と、絶大な精進努力とによつて、年々平均七八種宛多きは十一二種の脚本を、しかも多忙な新聞記者の生活の間に書きつゞたのである、合作の精の本念助をのぞいて、正に壹百四十篇の多數（昭和三年十二月末日現在調）である。實においても、量においても、大近松、默阿彌翁の外に匹敵する作家は絶無である。更に、それ以外に數十種の長篇小説があり、半七捕物帳外數百種の短篇があるのである。我等下根者はたゞ天を仰いで驚嘆するより外に言葉はないのである。

大正八年には、本年々帝國劇場の依囑を受けて、同劇場の伊坂梅雪氏と同伴、亜米利加をふり出しに、大戰役の歐洲の劇界を視察のために漫遊された。十年の十月十五日には、恰も五十年の誕辰に相當するので、新劇開拓の功勞者として、劇作家協會の主催の下に、有樂座にて大講演會及び、帝國ホテルに於て祝賀會が催された。當日は劇壇關係者全部を網羅して、劇壇史空前の盛儀であつた。

たゞ大正十二年の大震災計りは、不幸にしてまぬがれられなかつた。元園町の舊居は、一日の深夜に、五千餘册の藏書と共に焼け失せた。けれど、すぐに復興の計劃が成就して、今は元の處に新居が築かれて、夫人と、書生一人、女中二人の閑寂な生活が營まれてゐる。直門の弟子には、大村嘉代子夫人外燕會員九名であるが・外に創作を捧げて教を乞ふ者は門前に市をなすと稱しても過言はなからう。

氏は今年（昭和三年）年五十七歲。蒲柳ではあるが尚心身ともに壯健である。今故あつて一ヶ年の休養を宣して居るが、その禁の明けた日こそ、千載に光輝ある可き傑作の生れる日である事を云つておいて差つかへないと思ふ。

解　說

先づ順序として、著作總目錄を表出する。

備考

（一）表出の順序は著作年代により、發表及び上演の順序に依らず。

（二）上演年月日、劇場、俳優は凡て初演の場合にのみに止む。

（三）俳優名は凡て昭和三年現在の藝名に依る。

（四）欄外に〇印を附せるは本書中に收錄せる作。

題名	著作年月日	上演年月日	上演劇場	俳優
明治二十九年				
紫宸殿（史劇一幕）	同年五月作	九月歌舞伎新報	處女作	
明治四十一年				
白虎隊（史劇三幕）	明治四十一年七月作 大正五年六月改作	同年九月上演 同年八月上演	明治座 歌舞伎座	左團次
楠[illegible]（史劇三幕）	同年十月作 大正八年訂正	大正十年一月上演	明治座	左團次
明治四十二年				
明智光秀（史劇一幕）	二月作	大正八年九月上演	明治座	左團次、中車
振袖火事（世話劇三幕）	二月作 〔大正三年四月改作〕	大正三年五月上演	本郷座	左團次
◎修禪寺物語（史劇一幕）	三月作	四十四年五月上演	明治座 〔明治座〕〔[illegible]〕	左團次羽左衛門
小笠原[illegible]（史劇一幕）	五月作	大正元年五月上演	東京座	實之助
承久戰繪卷（史劇三幕）	十二月作	四十三年一月上演	明治座	左團次、幸四郎
亞米利加使（史劇三幕）	大正元年訂正	大正八年十一月上演	帝國劇場 [illegible]歌舞伎研究會	幸四郎
明治四十三年				
義貞最期（史劇一幕）	八月作	九月上演	明治座	[illegible]右衛門
黑船話（史劇一幕）	九月作	十一月上演	明治座	左團次、幸四郎
貞任宗任（史劇三幕）	十一月作	四十四年一月上演	明治座	左團次、幸四郎
明治四十四年				
村上義光（史劇三幕）	二月作	三月上演	明治座	左團次、源之助
◎箕輪心中（世話劇三幕）	三月作	九月上演	明治座	左團次
大津繪草紙（史劇三幕）	四月作	六月上演	市村座	菊五郎、勘彌

佐渡文覺（史劇 一幕）	五月作	六月上演	有樂座	東京俳優學校第一回卒業式
由羅曾我（史劇 一幕）	八月作	十月上演	帝劇	女優劇
お七（世話劇 一幕）	八月作	十月上演	本郷座	河合、井上
平家蟹（史劇 一幕）	九月作	大正元年四月上演	浪花座	梅幸、齋入
兒ヶ淵（時代劇 二幕）	十月作	十二月上演	帝劇	女優劇
品川臺場（史劇 三幕）	十一月作	大正元年一月上演	明治座	左團次
大正元年				
弟切草（史劇 一幕）	一月作	五月上演	明治座	左團次
べらぼうの始（喜劇 一幕）	三月作	大正十年三月上演	有樂座	幸四郎、宗之助
心中萬年草（世話劇 一幕）	五月作	六月上演	帝劇	女優劇
新朝顔日記（世話劇 一幕）	六月作	大正七年十二月上演	帝劇	左團次
長恨歌（史劇 二幕）	七月作	大正十年五月上演	市村座	菊五郎、勘彌
千葉笑ひ（舞踊劇 一幕）	九月作	大正二年正月太陽		
武田信玄（史劇 一幕）	十一月作	大正二年一月上演	本郷座	左團次
大正二年				
淺茅ヶ宿（世話劇 二幕）	一月作	五月	帝劇	女優劇
◎蟹滿寺縁起（童話劇 一幕）	二月作	九年九月上演	有樂座	帝劇、女優劇
◎室町御所（史劇 三幕）	二月作	三月上演	本郷座	左團次
切支丹屋敷（史劇 一幕）	三月作	五月上演	新富座	左團次
◎名立崩（時代劇 一幕）	四月作	三年十一月上演	帝劇	無名會
長柄人柱（史劇 一幕）	五月作（昭和三年三月改作）	昭和三年四月上演	歌舞伎座	歌右衛門
◎雨夜の曲（世話劇 三幕）	八月作	八年七月上演	新富座	左團次

鎌倉の一夜（現代劇二幕）	八月作（六年六月訂正）	六年七月上演	帝劇	女優劇
愛國者（モウパッサン小說脚色一幕）	九月作	六年十二月上演	帝劇	左團次、宗之助
◎佐々木高綱（史劇一幕）	十一月作	三年十一月上演（松莚戯曲十種）	新富座	左團次
我が家（現代劇一幕）	十一月作	十年十二月上演	帝劇	勘彌、猿之助
出雲崎の遊女（史劇一幕）	十一月作	十二年七月上演	浪花座	河合

大正三年

蒙古襲來（史劇一幕）	一月作	九月上演	本郷座	左團次
なこその關（史劇三幕）	一月作	四年一月上演	本郷座	左團次、中車
◎浪華の春雨（世話劇一幕）	二月作	四年一月上演	本郷座松莚戯曲	左團次
角田川物語（史劇三幕）	二月作	四月上演	有樂座	家庭劇
酒の始（喜劇一幕）	三月作	九年七月上演	帝劇	女優劇
籠の梅（史劇一幕）	五月作	九年五月上演	帝劇	女優劇
奥州の義經（史劇三幕）	五月作	六月上演	有樂座	家庭劇
板倉內膳正（史劇一幕）	九月作	七年一月上演	明治座	左團次
烏追船（時代劇三幕）	十二月作	四年二月上演	有樂座	家庭劇

大正四年

增補信長記（史劇二幕）	一月作	七年三月上演	大阪中座	左團次、莚若
◎尾上伊太八（世話劇三幕）	三月作	七年九月上演	明治座	左團次
能因法師（喜劇一幕）	四月作	九年十一月上演	帝劇	新歌舞伎研究會
入鹿の父（史劇一幕）	五月作	六月上演	明治座	左團次
◎鳥邊山心中（世話劇一幕）	八月作	九月上演	本郷座松莚戯曲	左團次
景清（史劇一幕）	十月作	十一月上演	新富座	左團次

作品	作	上演	劇場	主演
大正五年				
番町皿屋敷（時代劇一幕）	一月作	二月上演	本郷座松莚團	左團次
阿蘭陀新（世話劇一幕）	四月作	十年四月上演	明治座	雀右衛門多見藏
隅田川心中（世話劇一幕）	五月作	六月上演	歌舞伎座	左團次
三浦大助（史劇三幕）	九月作	十一月上演	帝劇	大倉氏祝賀會
細川忠興の妻（史劇一幕）	十月作	十一月上演	帝劇	歌右衛門
三巴雪夜話（世話劇二幕）	十月作	十二月	帝劇	左團次、源之助
大正六年				
京の友禪（世話劇一幕）	二月作	三月上演	明治座	左團次
遊女物語（時代劇三幕）	三月作	五月上演	帝劇	女優劇
[illegible]釣瓶（世話劇三幕）	六月作	八月上演	歌舞伎座	左團次
[illegible]寛阿闍梨（史劇一幕）	九月作	十月上演	新富座	左團次
清正の娘（史劇一幕）	十月作	十一月上演	歌舞伎座	歌右衛門
長曾根虎徹（時代劇二幕）	十一月作	九年十二月上演	帝劇	左團次、幸四郎
大正七年（多病）				
新鏡山（時代劇三幕）	三月作	五月上演	帝劇	女優劇
勾當內侍（史劇一幕）	九月作	十月歌舞伎座（十一年四月十七日台覧）	歌舞伎座（帝劇）	歌右衛門
唐人塚（世話劇一幕）	十二月作	八年一月上演	明治座	左團次
大正八年（外遊）				
心中二枚繪草紙（世話劇二幕）	十月作	九年四月上演	帝劇	宗十郎、宗之助
戰の後（史劇二幕）	十一月作	九年一月上演	帝劇	梅幸、幸四郎
大正九年（帝劇專屬中）				

作品	作	上演	劇場	俳優
くちなは物語（時代劇 三幕）	四月作	六月上演	帝劇	梅幸
◎小栗栖長兵衛（喜劇 一幕）	八月作	十一月上演	明治座	猿之助
雲女五枚羽子板（時代劇 三幕）	十一月作	十年一月上演	帝劇	梅幸
大正十年				
天の網島（世話劇 二幕）	一月作	二月上演	帝劇	女優劇
曾我物語（史劇 一幕）	一月作	三月上演	明治座	左團次
仁和寺の僧（喜劇 一幕）	四月作	十一月上演	有樂座	猿之助
◎村井長庵（世話劇 四幕）	六月作	八月上演	歌舞伎座	左團次
邯鄲（舞踊劇 一幕）	七月作	九月上演	帝劇	女優と三升
大坂城（史劇 二幕）	八月作	十月上演	歌舞伎座	歌右衛門
節分（喜劇 一幕）	十月作	十一年一月主婦の友		
◎俳諧師（世話劇 一幕）	十月作	十一年三月上演	新富座	吉右衛門、菊蒲
前太平記（史劇 三幕）	十一月作	十一年一月上演	新富座	歌右衛門
金色堂（史劇 三幕）	十二月作	十一年一月上演	明治座	左團次
大正十一年				
御影堂心中（世話劇 二幕）	一月作	二月上演	新富座	梅幸、羽左衛門
西南戰爭聞書（史劇 六幕）	二月作	三月上演	明治座	左團次
近松門左衛門（世話劇 一幕）	三月作	十月上演	大坂南演舞場	黎明座
藏山の月（史劇 四幕）	三月作	四月上演	明治座	左團次
小田原陣（史劇 三幕）	四月作	五月上演	新富座	左團次、幸四郎
◎寺の門（前現代喜劇 一幕）	五月作	十三年六月上演	演伎座	荒次郎、鶴藏
階級（世話劇 一幕）	五月作	十一月上演	本郷座	河合、喜多村

作品	作	上演・發表	劇場	俳優
自來也（喜劇一幕）	五月作	十三年四月上演	浪花座	梅島、松本
薩摩櫛（世話劇三幕）	六月作	八月上演	新富座	左團次
眞田三代記（史劇二幕）	八月作	十月上演	新富座	歌右衛門
長町女腹切（世話劇三幕）	九月作	十月上演	帝劇	梅幸
大正十二年（震災）				
常盤御前（史劇二幕）	一月作	二月上演	新富座	歌右衛門
熊谷出陣（史劇三幕）	三月作	五月上演	新富座	左團次、幸四郎
南國の秋（世話劇三幕）	四月作	六月上演	帝劇	梅幸
江戸名所圖會（喜劇一幕）	六月作	九月女性		
鬼坊主淸吉（世話劇三幕）	七月作	八月新演藝		
臼井の留守宅（近代喜劇一幕）	十月作	十二月週刊朝日		
朝飯前（史劇一幕）	十一月作	十三年一月上演	麻布明治座	左團次
大正十三年				
雁金文七（世話劇三幕）	二月作	昭和三年二月上演	明治座	左團次
蟲の腕（喜劇一幕）	二月作	四月婦人公論		
筑摩の湯（喜劇一幕）	三月作	昭和元年四月上演	松竹座	猿之助
維新小話（史劇一幕）	三月作	四月演藝畫報		
蛇を賣る女（喜劇一幕）	五月作	七月劇壇		
無禮講（史劇一幕）	九月作	十四年五月上演	帝劇	壽美藏、女優
扇谷熊谷後日話（喜劇一幕）	十月作	十四年一月週刊朝日		
家康入國（史劇三幕）	十一月作	十四年一月上演	歌舞伎座（落成興行）	歌右衛門、左團次、羽左衛門
小坂部姫（史劇三幕）	十一月作	十四年一月上演	帝劇	梅幸

大正十四年

作品	作	上演	劇場	俳優
○虚無僧(時代劇 二幕)	七月作	九月上演	歌舞伎座	左團次
○小梅と由兵衛(世話劇 二幕)	九月作	十月上演	帝劇	梅幸
時雨ふる夜(世話劇 一幕)	十月作	昭和二年十月上演	本郷座	猿之助吉右衛門
○新宿夜話(時代劇 一幕)	十一月作	昭和二年五月上演	本郷座試演十種	左團次
勘平の死(世話劇 三幕)	十二月作	昭和元年二月上演	新橋演舞場	菊五郎

昭和元年

作品	作	上演	劇場	俳優
唐糸草紙(史劇 三幕)	二月作	四月演藝畫報		
お化師匠(世話劇 三幕)	三月作	五月上演	市村座	梅幸、菊五郎
湯屋の二階(世話劇 三幕)	四月作	七月上演	演藝場	菊五郎
◎權三と助十(喜劇 二幕)	五月作	七月上演	歌舞伎座	羽左衛門左團次
風鈴蕎麥屋(世話劇 二幕)	八月作	十月上演	本郷座	吉右衛門、福助
長崎の兄弟(世話劇 三幕)	八月作	十一月苦樂		
江戸ッ子の死(世話劇 二幕)	十月作	十二月上演	松竹座	花柳、小堀
黄門記(史劇 三幕)	十一月作	昭和二年一月上演	歌舞伎座	歌右衛門左團次
三河萬歳(世話劇 四幕)	十二月作	昭和二年一月	市村座	菊五郎

昭和二年

作品	作	上演	劇場	俳優
○牡丹燈記(世話劇 三幕)	二月作	六月上演	本郷座	壽美蔵、福助
○正雪の二代目(時代劇 二幕)	三月作	五月上演	本郷座	左團次
水野十郎左衛門(時代劇 三幕)	四月作	六月上演	歌舞伎座	左團次
相馬の金さん(時代劇 三幕)	六月作	十一月上演	歌舞伎座	左團次
後日の長兵衛(喜劇 一幕)	七月作	九月苦樂		

作品	作	上演・發表	劇場	主演
五右衛門の釜(時代劇　三幕)	八月作	十月上演	帝劇	梅幸、左團次
僧俊寛(史劇　二幕)	十月作	三年二月上演	歌舞伎座	左團次
おさだの仇討(世話劇　二幕)	十一月作	三年一月上演	帝劇	梅幸
水滸傳(時代劇　三幕)	十二月作	三年一月上演	本郷座	猿之助
昭和三年				
吉野の忠信(史劇　二幕)	二月作	三月女性		
篠原合戰(史劇　一幕)	四月作	六月演藝畫報		
海へ山へ(現代喜劇一幕)	五月作	八月舞臺評論		
近松半二の死(世話劇　一幕)	八月作	十月文藝春秋		
工藤祐經(史劇　一幕)	九月作	十一月祇園		

以上、百四拾篇を更に分類して見ると、

史劇　六拾壹篇
世話劇　四拾篇
時代劇　拾六篇
　註　正史以外の事件人物を扱つたもの。例へば番町皿屋敷、相馬の金さんの類。
喜劇　拾七篇
　内　時代喜劇　拾參篇
　　　現代喜劇　四篇
現代劇　貳篇
舞踊劇　貳篇
童話劇　一篇
飜譯脚色　一篇

主演俳優は勿論市川左團次を主として、梅幸歌右衛門が略同數である。女優劇も可なり多い。初期は幸四郎も多い。最近は喜劇で猿之助に、半七捕物帳で菊五郎が活躍してゐる。勿論、歌右衛門の場合、羽左衛門、中車、仁左衛門その他が對手役として、梅幸の場合は、宗十郎、宗之助、勘彌、松助等がそれ〴〵重要な役をつとめてゐる事は云ふまでもない。

右の内、本卷採錄の作は室町御所、外二十八篇である。そして、それは前掲百四十篇の中から、特に作者自ら選んだ會心の作のみである。故に本書一卷を精讀すれば綺堂氏の藝術の全斑を知る事が出來ると共に、明治大正から昭

和へかけて劇壇の推移の跡も明瞭に知られるであらう。以下各篇に就いて書かう。

〇室町御所

この作は修禪寺物語と共に氏の代表作の一つで修禪寺物語以後の初期の作風を完成した名篇である。全體に好評であつたが殊に大詰淀川堤は露西亞近代の作家の風にも比す可く、詩味豐かな場面で、あらゆる階級の見物から讃辭を惜まれなかつたものである。一幕物であれば勿論松莚戲曲十種の中に選ばる可き作で綺堂氏自らも殊に愛着があると見えて全集（春陽堂版）の第一卷の卷頭にも採錄してある。

〇相馬の金さん

震災後の作品は、主に世話物を中心として自ら一轉機を示してゐるが、その近作の中で傑出好評であつた作である中央公論に發表されて、歌舞伎座で左團次に主演された。さらりとして、殆ど無技巧の樣であつて、しかも無限の味のある作だ。

〇修禪寺物語

この作についてはもう多く語る必要はない。たゞ參考のために初演當時、雜誌歌舞伎に登載された芹影女史（岡田八千代女史）の評を拔書きして置く。

文藝倶樂部に出たさうであるが、芝居の方が面白いと云ふ事である。（中略）左團次の夜叉王、婿と姉とが爭ふのを「かしましい鎭らぬか。」と聲をかけるので、春彥とかへでが葭簀を卷き上げると、作りかけの面を前にして上手向きに右の手に鑿を持つて凝つと座を占めてゐる形である。顎に白髯のある顏の作はいゝ。姉妹をしりぞけておいて、春彥に姉の我まゝを取りなす處も父親の情が見えてゐた（中略）「命が惜しいか名が惜しいか」としつかりと云ふ處、「將軍家の威勢におそれ夜叉王が一代の恥」とかけ上つて面を槌で打ち破らうとする處等、頑固な正直な名人氣質をのこりなく見せてゐた。（中略）面をかぶつて身替りに出たと聞き俄かに活氣立つて血のついた面をとり上げ凝と燈火のそばで見詰める處、氣にそまぬ面には賴家の打たれると云ふ事が死相となつて現はれてゐたと云ふ事を初めて心づき、心からうれしさがこみ上げた樣に伊豆の夜叉王も天下の名手ぢや。」と笑ふ處もよく、桂の落入らうとするのを呼び生けて（中略）左手に紙を延べて持ち、右に筆をもち、ジッと桂の顏を見つめた目つき、藝術の外には心の散らぬ人に見えた。云々。

この最後の幕切には問題があつた。如何に藝術家にしても、最愛の娘が死ぬのを、平然と寫生出來るものでないと云ふ人情派と、眞の藝術家ならば、その場合にすべての感情を超越する事は無理でないと云ふ說と、兩樣あつて、可なり喧しく論議された。どつちかと云ふと一般にはあまり

冷酷だと云ふ方の說が多かつたが、八千代女史は流石に本當の作者の心持を見てゐた。今日では勿論、作者の見解の通りでそんな議論する者もない。

○おさだの仇討

これは讀物で有名な自作の半七聞書帳の中の「張子の虎」を梅幸のために脚色したもので、あとでは花柳なぞも上演した相馬の金さん等最近の作の中で傑作である。罪人の妻のおさだの心持に云ひ知れない哀れさが漂つてゐた。

○雨夜の曲

若い琴作りと、あつらへた琴の出來ぬ中に儚く死んでゆく島原の遊女と、戀に狂ふ公卿の若殿と、一徹な職人氣質の父とをなひまぜた縮の様に美しいロースンス劇である。

○小栗栖の長兵衛

猿之助の專賣特許。出色の喜劇である。東京に於ても已に四五度上演をくりかへしてゐる。現代の輕薄な世相に對して加へた作者の鋭い皮肉は笑の中に見物の心を抉らずにはおかないであらう。

○牡丹燈記

有名な圓朝の牡丹燈籠の原話である、支那の剪燈新話にある牡丹燈記を脚色したのである。殆ど舞臺的粉色を加へず、淡々として水の流るゝ様に書かれてゐるが、その中に得も云はれぬ詩趣が盛られた懐し味の多い作である。本郷座で福助、壽美藏、友右衛門等で上演されて好評であつた。昭和二年の作である。

○鬼坊主清吉

不運な名作である。この作を上演すべく稽古中にあの未曾有の大震災があつた。稽古用の本は勿論、劇場までも燒け失せて仕舞つたのである。以來しば／＼上演が企てられたけれど、迷信の多い芝居の中では、その思ひ出のためにいつも中止されて今日まで未上演のまゝでゐる。綺堂氏は潔癖家で上演しない脚本は眞價の定まらぬものとして、上梓する事をなる可く避けてゐる。現に、その全集中にも十三卷までには出てゐないのであるが、特にこの集の中には入れられてある。それ丈けに自信もあれば愛着も深いわけである。淸吉が鬼の面を對手に勝負する處は正に鬼氣人にせまるの趣がある。

○無禮講

史劇作風に一轉機を見せた作である。前には折々露に見えたテーマが判然とかくされて渾然とした作である。小品ではあるが、若竹を見る様なすが／＼しい感のする作である。

○正雪の二代目

いかもの横行の世の中である。左傾のいかもの、右傾のいかもの等々、それ等に加へた氏が鋭い皮肉を見よ。左團

次と猿之助とで本郷座で上演、小山内氏なぞ激稱した名作

○番町皿屋敷

松莚戯曲十種の中。何十度か上演されて、解說には及ぶまい。たゞ本年(昭和三年)左團次一行がロシヤへ行つた際に修禪寺物語と共に上演されて好評であつた事を特記しておけばよい。

○尾上伊太八

初演當時所謂人道主義者連中の間に異常な感情を起させイブセンのノラが問題にされた樣に、その筋から今後の上演を禁止されかゝつた作である。尤もその後にその禁はゆるんで、歌舞伎座で乃木將軍と一所に上演されたけれど、とにかく惡美の窮極まで到達した名篇で、勿論一般からは大好評で迎へられた作である。

○蟹滿寺緣起

上品な可愛ゆらしい童話劇。この作者の唯一の童話劇である。前の伊太八を讀んですぐにこの作に接した讀者は、恐らくこれが同一の作者の手になつた作とは容易に首肯しないであらうと思ふ程、無邪氣なあかるい作である。朗々と春の河の樣によどみなく書かれた名文をよんでゐると、眼前には、奈良朝時代の夢の樣な美しい世界が判然と幻にうかんで來る。しかし、たゞの童話劇ではない。底には作者の哲學が判然と盛られてある。初演以外に寶塚の少女歌劇でも上演したし、澤田正二郎の新國劇でも上演した。何となく目出度い心持のする作である。

○權三と助十

震災後に於ける氏の喜劇の中で尤もすぐれた作品であるこの作一つに依つてあの廣い歌舞伎座を、しかも夏の最中に連日大入滿員にしたのである。その後三年を出でずして、京阪を初めて、已に數ヶ所で再演されてゐる。從つてその價値の尺度にしてよからう。

○戰の後

大正八年、歐米漫遊直後に書かれた史劇で、題材は日本の應仁の亂の前後の事にしてあるが、その實は目のあたりに見聞して來た歐洲戰亂の後の社會相そのまゝの活寫であつた。職業婦人として烏帽子折の出現、貴族(公卿)の沒落戰爭成金として茶道具商の暴富失業者として乞食の橫行、廢兵及び不平軍人として浪人兄弟、最後に階級鬪爭を暗示する德政一揆を描き出した結構は、いづれも流石この作者ならではと讃嘆を久うした名篇である。すべては漫然と古戰場廻りをして戻る中にたゞ一人如何に氏の觀察眼が鋭く働かされたかを窺知するに足りる。同時に消化力の妙が十分によく味はれる作である。

○箕輪心中

初期に於ける名作の一つ。心中物と云へば近松以後、い

づれも、世に虐げられ世を儚んで、泣く泣く死んで行くのが紋切型であるが、この作はそれと反對に、寧ろ世を嘲つて喜んで笑ひ乍ら死んでゆくのである。新味のある作として、今にも重ぜられてある。

○名立崩れ

神秘劇。しかも、それを物々しい文字や、人を使はないで、平凡な漁士百姓達を主人公として、尋常な言葉で綴つてあつて、讀者をして異常なミスチックな世界に引き入れて仕舞はずにはおかない。異色ある作である。

○江戸名所圖會

輕快な喜劇である。權三と助十の先驅をなすもので、江戸ッ子らしい作者の面影が全篇によく浸み出してゐる。

○兩國の秋

梅幸主演。同名の自作小說を脚色したものである。震災の二ヶ月前に上演された作で、漸く無技巧的にならうとする近代の作の先驅の一つである。

○佐々木高綱

松莚戯曲十種。初期における代表作の一つである。

○村井長庵

尾上伊太八と同じ傾向の內容をもつて、更にそれを一層圖太く强調されてある。左團次の當り狂言である。

○鳥邊山心中

松蔦戯曲十種の中。山本有三氏等が激稱しておかない名篇。さすが强記の綺堂氏さへ、何度上演されたか記憶しきれない程である。その一事で他を云ふ必要はなからう。

○虛無僧

伊太八から長庵へ移つた作者はこの虛無僧でこの方面の性格描寫に完成したと云へよう。荒い太い線で、名手の一筆書きの南畫を見る樣な趣があつて見れば見る程味のしみ出して來る懷しい作である。

○小梅と由兵衞

淨るりの梅乃由兵衞の原話を脚色したもので、第一幕目で、聚樂町の長屋が好評であつた。それに、勘彌の占者が傑作で、他松助の坊主と云ひ、作者が役者を驅使する事の如何にすぐれてあるかを、今更ながらに判然とうなづかせられた作。

○仁和寺の僧

小栗栖の長兵衞と共に猿之助の當り狂言の一つ。大概の惡人では地獄へゆかれぬ世の中——何と云ふ鋭い現代への皮肉であらう。この作を讀んで、內心忸怩たらざる者、幾人かあらう。

○俳諧師

發表と共に久しく期待された吉右衞門と勘彌とで上演して、吉右衞門のために、別個の道がある事を知らせた作。筆

致は内容と共に彼等の俳句の樣に枯淡な味に滿ちてある。

○新宿夜話

松莚戲曲十種。前述の俳諧師の傾向を受けた作で、殆ど極度まで枯淡、無技巧な作である。それはあまりに枯淡すぎて、もう見物も俳優自身も、作者の心持について行く事が困難ではないかと案じられた程の作であつたが、本鄕座での上演はそれとは反對で、開場前に已に松莚戲曲中に加へられる由が傳へられた程であつた。

○浪華の春雨

松莚戲曲十種。鳥邊山心中と同時代の美しい新ローマン戲曲。これも殆ど新しく云ふ事はない。

○寺の門前

氏の現代喜劇中での代表的の作である。輕いユーモアの中に、氏一流皮肉がメスの樣に織り込まれてある。荒次郎鶴藏等、若手で震災後の演伎座で氣焰を上げた。

作品年表

室町御所

大正二年二月作。

大正二年三月。本鄕座初演。

初演當時の主なる役割 ── 足利義輝（中村又五郎）大館岩千代（市川壽美藏）岩槻主水助、笛を吹く男（市川市十郎）小侍從、蛇つかひの女（坂東秀調）松永彈正（尾上多見藏）多門（市川松蔦）一色淡路、與兵衞（市川左升）伊賀七郎（市川荒次郎）池田丹後（市川左團次）など。

相馬の金さん

昭和二年六月作。

昭和二年十一月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割──相馬金次郎（市川左團次）石澤寅之助（中村吉右衞門）相馬半三郎（市川壽美藏）常磐津文字若（市川松蔦）文字若の母（澤村源之助）伊勢屋の亭主、中間（市川左升）番頭長兵衞（中村吉之丞）など。

修禪寺物語

明治四十二年三月作。

明治四十四年五月。明治座初演。

初演當時の主なる役割──夜叉王（市川左團次）娘かつら（市川壽美藏）かへで（市川莚若）春彥（市川市十郎）源賴家（市村羽左衞門）下田五郎（中村又五郎）金窪兵衞尉（市川荒次郎）修禪寺の僧（市川左升）など。

おさだの仇討

昭和二年十一月作。

昭和三年。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割――貝塚藤五郎(松本幸四郎)和泉屋伊之助(澤村宗十郎)番頭文吉(尾上幸蔵)御旅の寅蔵(守田勘彌)寅蔵の女房おさだ(尾上梅幸)花賣與右衛門(尾上松助)和泉屋の抱へ女お駒(澤村訥升)若い者庄八(助高屋高助)手先長次郎(澤村田之助)お駒の弟徳松(坂東しうか)など。

雨夜の曲

大正二年八月作。

大正八年七月。新富座初演。

初演當時の主なる役割――金井長門守景家(市川中車)金井小太郎景正(市川左團次)お園(市川松蔦)鞆繪太夫(坂東秀調)逢坂太夫(中村芝鶴)景安(市川壽美蔵)時國(市村龜蔵)堺の大盞(片岡市蔵)西念(市川左升)など。

小栗栖の長兵衛(喜劇)

大正九年八月作。

大正九年十一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割――長兵衛(市川猿之助)長九郎(市川米左衛門)おいね(坂東かつみ)七之助(市川左喜之助)與茂作(市川左升)法善(市川荒次郎)小鈴(市川松蔦)彌太八(坂東壽三郎)堀尾茂助(市川壽美蔵)など。

牡丹燈記

昭和二年二月作。

昭和二年六月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割――喬生(市川壽美蔵)劉生(市川八百蔵)麗卿(中村福助)金蓮(市村家橘)隣の翁(大谷友右衛門)酒家の亭主(澤村源十郎)湖心寺の僧(市川小太夫)など。

鬼坊主淸吉

大正十二年七月作。

無禮講

大正十三年九月作。

大正十四年五月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割――土岐蔵人(市川壽美蔵)伊吹又兵衛(市川左升)妻早咲(河村菊江)侍女ちか(小林延子)など。

正雪の二代目

昭和二年三月作。

昭和二年五月。本郷座上演。

初演當時の主なる役割——大泉伴左衞門（市川左團次）千島華之助（市村龜藏）深堀平九郎（市川荒次郎）山杉甚作（市川猿之助）下總屋義平（市川壽美藏）備前屋長七（市川八百藏）津村彌平次（河原崎長十郎）本庄新吾（市川米左衞門）大塚段八（市川段猿）三上郡藏（阪東羽太藏）大泉の妹お千代（市川松蔦）下總屋の母おかめ（澤村源十郎）同心野澤喜十郎（市川左升）番太郎權兵衞（市川左喜之助）など。

番町皿屋敷

大正五年一月作。

大正五年二月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割——青山播磨（市川左團次）柴田十太夫（市川左升）權次（市川荒次郎）權六（市川米左衞門）お菊（市川松蔦）お仙（市川米藏）眞弓（市川市十郎）放駒四郎兵衞（市川壽美藏）など。

尾上伊太八

大正四年三月作。

大正七年九月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——原田伊太八（市川左團次）原田五七郎（市川壽美藏）遊女尾上、後におさよ（市川松蔦）幇間喜作（市川左喜之助）橋場の丑藏（中村鶴藏）吃の勘次（市川左升）坊主の九助（市川荒次郎）茶店のおくめ（市村龜藏）おさく（市川莚升）叔母おとく（市川市十郎）風車賣萬助（中村歌六）など。

蟹滿寺緣起

大正二年二月作。

大正九年九月。有樂座初演。

初演當時の主なる役割——翁（尾上松助）嫗（田中詩代）娘（村田美禰子）青年（坂東三吉）蟹（松本錦吾）蛇（守田勘彌）蛙（坂東玉三郎）など。

權三と助十

大正十五年五月作。

大正十五年七月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——駕籠屋權三（市村羽左衞門）女房おかん（市川松蔦）駕籠屋助十（市川左團次）助十の弟助八（市川猿之助）小間物屋彥兵衞（市川紅若）彥兵衞忰彥三郎（市川壽美藏）家主六郎兵衞（中村吉右衞門）左官屋勘太郎（中村鶴藏）猿まはし與助（市川左升）願人坊主雲哲（市川荒次郎）願哲（中村吉之丞）石子伴作（市川八百藏）など。

戰の後

大正八年十一月作。

大正九年一月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——黑田源左衞門（松本幸四郎）黑田源八郎（澤村宗十郎）山崎番作（澤村長十郎）行光（尾上梅幸）覺善（守田勘彌）おそよ（澤村宗之助）市兵衞（尾上松助）など。

箕輪の心中

明治四十四年三月作。

明治四十四年九月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——藤枝外記（市川左團次）吉田五郎三郎（市川小團次）堀部三左衞門（市川左升）百姓十吉（市川壽美藏）仲間角助（市川荒次郎）大菱屋の綾衣（澤村源之助）お縫（坂東秀調）お時（市川莚女）お米（市川莚若、後の松蔦）など。

名立崩れ

大正二年四月作。

大正三年十一月。帝國劇場。無名會初演。

初演當時の主なる役割——五郎兵衞（東儀鐵笛）旅人（木下翠香）前の世の人（三好今太郎）お仲（雅子）お今（千代子）など。

江戸名所圖會

大正十三年六月作。

兩國の秋

大正十二年四月作。

大正十二年六月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——仁科林之助（澤村宗十郎）豐吉（尾上松助）勘藏（守田勘彌）お絹（尾上梅幸）お君（尾上榮三郎）お若（助高屋高助）お虎（坂東村右衞門）お里（澤村宗之助）など。

佐々木高綱

大正二年十一月作。

大正三年十月。新富座初演。

初演當時の主なる役割——佐々木高綱（市川左團次）娘薄衣（市川松蔦）佐々木定重（市川新之助）馬飼子之介（市川壽美藏）姉おみの（坂東秀調）僧智山（市川左升）など。

村井長庵

大正十年六月作。

大正十年八月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——村井長庵（市川左團次）弟子良仙（市川壽美藏）早乘三次（市川猿之助）伊勢

屋千太郎（市川龜藏）石子伴作（中村鶴藏）居酒屋の牛助（市川左升）女房お六（市川市十郎）古着屋久八（市川三升）久八の妻お咲（坂東秀調）長庵の姪お梅（市川松蔦）など。

・鳥邊山心中

大正四年八月作。

初演當時の主なる役割——菊地半九郎（市川左團次）坂田市之助（中村又五郎）坂田源三郎（市川壽美藏）八介（市川米左衞門）與兵衞（市川左升）おそめ（市川松蔦）お花（市川米藏）おゆき（市川莚蔦）など。

虛無僧

大正十四年七月作。

大正十四年九月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——虛無僧空月（市川左團次）愛泉（市川左升）友德（市川荒次郎）草谷（中村鶴藏）宍倉十之進（市川段猿）宍倉十三郎（市川壽美藏）高村半彌（市川猿之助）半彌の妹お辻（中村福助）など。

小梅と由兵衞

大正十四年九月作。

大正十四年十月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——梅堀の由兵衞（松本幸四郎）小梅（尾上梅幸）三次郎（澤村宗十郞）良齋（守田勘彌）西任（尾上松助）おしゆん（澤村源平）長吉（尾上泰次郞）など。

仁和寺の僧（喜劇）

大正十年四月作。

大正十年十一月。有樂座初演。

初演當時の主なる役割——長老（市川左升）第一の僧（市村龜藏）第三の僧（市川猿之助）第二の僧（市川左喜之助）第五の僧（市川荒次郎）第四の僧（市川段猿）第六の僧（片岡市壽郎）猪熊惡右衞門（坂東壽三郎）さすらひの女（市川松蔦）絹屋五郎兵衞（市川壽美藏）赤鬼（市川米左衞門）青鬼（河原崎長十郎）など。

俳諧師

大正十年十月作。

大正十一年三月。新富座初演。

初演當時の役割——鬼貫（中村吉右衞門）路通（守田勘彌）お妙（中村時藏）お留（市川紅若）。

新宿夜話

大正十四年十一月作。
昭和二年五月。本郷座初演。
初演當時の主なる役割――齋藤甚五左衛門（市川左團次）齋藤大八（市川猿之助）信濃屋のお蝶（市川松蔦）若者千助（市川荒次郎）同じく丑藏（市川段猿）旅籠屋の亭主（市川左升）旅籠屋の娘（市村家橘）在郷の客與次郎（市川八百藏）馬士（市川權十郎）六十六部（澤村源十郎）など。

浪華の春雨

大正三年一月作。
大正四年一月。本郷座初演。
初演當時の主なる役割――おその（市川松蔦）六三郎（中村又五郎）庄藏（市川八百藏、後の中車）赤格子九郎右衛門（市川左團次）など。

寺の門前（喜劇）

大正十一年五月作。
大正十三年六月。演伎座初演。
初演當時の主なる役割――善隆（市川荒次郎）隆格（市川團次郎）長太（中村鶴藏）長吉（河原崎長十郎）おとく（片岡當之助）町子（片岡龜松）など。

編輯校訂
責任
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集・第三十五巻
現代篇第三輯・第十回配本

昭和三年十二月二十二日印刷
昭和三年十二月二十五日發行　（非賣品）

著作者　岡本敬二
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二　四四一五
振替東京　一六一七

東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷